# 魔法少女リリカルなのはStrikerS　はじまりの魔法

阪本　葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　はじまりの魔法

【Ｎコード】
Ｎ７６２６Ｈ

【作者名】
阪本　葵

【あらすじ】
俺は全てを失った。しかし、望まぬ全てを手に入れてしまった。
それは魔法？力？未来？いや、言葉通りのもの、”ありとあらゆるもの”さ。自分の命と引き換えに。

# 第1話（前書き）

はじめまして。初投稿、初小説です。
これは魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳの二次制作物です。
原作とかけ離れた話になったり、キャラが崩壊するかもしれません。
そのため、「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ」ファンの方は気分を害する可能性があるため、このような内容に嫌悪感を覚える方はご遠慮下さい。

# 第1話

その空は現在の状況を表しているかのように重く、暗かった。

黒く垂れ下がる曇り空から白い雪が落ちてくる。
その雪は地面に落ち、地面を白くしていく。

かなり降ったのだろう、地面はかなり白の割合が多くなっている。

その白い地面の上に少女が倒れていた。

雪と同じ、白い服を着た少女が。
栗色の髪は両サイドでまとめ、かわいらしい雰囲気が伝わるのだが、
今の姿はそれすら吹き飛ばし痛々しい。
なぜならその少女から、赤いものが流れ出ていたから。

血だ。

その血が地面を覆った白い雪をも侵食し、少女の周りの白い雪はじわりと赤に染め上げられる。

そこへ赤く可愛らしい服、ゴスロリチックな服を着た少女が、倒れ

ている白い服の少女に駆け寄った。
オレンジ色の髪を後ろに二つ、三つ編みで編み上げている髪が、走るたびに三つ編みが上下に揺れる。
三つ編みの少女は、必死の形相で白い服の少女を抱き上げた。
三つ編みの少女の手、服に白い服の少女の血が付着するが気にせずに、大きく声を張り上げる。

「なのは！なのは！おい、しっかりしろ！」

なのはと呼ばれた白い服の少女からは血が流れ続けている。
なのはは小さい声で振り絞るように、囁くように発した。

「ヴィータちゃん・・・だいじょうぶ・・・だから・・・」

三つ編みの少女ーヴィーターの瞳から涙があふれ、一緒に任務に来ていた他の部隊員に怒鳴る。

「医療班なにやってんだよ！早くしてくれよ！こいつ死んじまうよ！！」

そう叫ぶ間にも、少女たちの周りの赤い世界の侵食は広がり続ける。

ヴィータは自分を叱責する。

何をやっているのか、と。
自分は仲間を守れず、助けられず、ただ抱き上げることしかできないのか！？
自分の力は、ヴォルケンリッターの騎士の力は少女ひとり守れないのか、と。

そう思うと、悔しさのあまり、とめどなく涙があふれてきた。
そして、連絡を取っていた部隊員がヴィータに駆け寄りる。

「医療班はあと5分でこちらに到着の予定です！それまでに応急処置を！」

ヴィータは隊員の指示に、ハッとした。

「あ、ああ。ああ！そうだ、な！」

ヴィータは相当混乱していたが、隊員の言葉で、頭が冷えたのだろう、いま自分の成すべきことを考え、確認した。
そして、状況確認のため部隊員に一番聴かなくてはならない情報を聞き出そうとした。

「おい、なのはを庇ったあの隊員はどうしたんだ？」

止血作業をしていた隊員がピクッと一瞬手を止めた。
だがすぐに作業を再開し、悔しそうな、泣きそうな顔をして言う。

「近藤曹長は・・・」

隊員は言葉をつまらせ、それ以上口にしなかった。

ヴィータは、隊員の顔色と、その言葉を詰まらせた先を予想してギクリとした。

そして、戦闘の記憶を思い返す――

なのはがアンノウン――未確認体――に攻撃され、なのはは墜落していった。
ヴィータは急いでなのはを助けに飛んだ。
しかし距離がありすぎた。
そんなヴィータを嘲笑うかのように、アンノウンはなのはに止めを刺しに行くために、なのはに近づく。
アンノウンとなのはの距離はわずか。それでもヴィータは全力でなのはを助けに全力で飛ぶ。

――――とどけ

とどけ

とどけ！

とどけ！！

ヴィータは心の中で叫ぶ。

しかし、無常にもその思いは届かず、アンノウンの体から出ている刃が怪しく光り、なのはにとどめをさそうと刃を突き出した。

やめろおおおおぉぉぉぉーーー！！

ヴィータが届かない手を必死に伸ばし、声にならない声、叫びなのか悲鳴なのかわからない絶叫の言葉を口からだす。

そして

目の前で親友が殺されるかと思った瞬間、その刃は『ズブリ』という音と共にヴィータの目の前で肉を切りつけた。

しかし、ヴィータはそこで信じられないものを見た。

それは――――

墜落しているなのはを抱きかかえ

庇うように、守るように

背中からアンノウンの刃に突き刺された

一人の男性部隊員の姿だった。

そしてわずかの時間の後、ヴィータはなのはと隊員にようやくたどり着いた。

「おい！おまえ、大丈夫なのか！？」

ヴィータはなのはをかばった隊員に聞く。

もちろん大丈夫ではない。

自分の腕ほどもある大きな刃が体を貫いているのだ。

しかし、その隊員はすぐになのはをヴィータに引渡し、こう言った。

「大丈夫です。だから、はやくここから離れてください」

なんとも場違いな、とても落ち着いた口調だった。
しかし、口を開いた際に隊員の口から血がゴポリと流れ出る。
それを見たヴィータは焦る。

「なっ！おまえ、大丈夫じゃないじゃねーか！！血が・・・」

ヴィータは混乱して状況把握ができないでいる。
現状、こんなに悠長に話している場合ではないのだ。
なぜなら、アンノウンはまだ健在なのだから。
仕方ないといった風に小さく息を鼻から吐くと、隊員は自分のストレージデバイスをヴィータ達に向ける。

「すみません」

そう短く言い放つと、いきなりヴィータに向けて砲撃した。

「うわあああっ！！」

ドンッという衝撃と共に、ヴィータとなのははその砲撃により吹き飛ばされ、それぞれ別の場所に落ちた――

――そうだ、あの隊員――近藤曹長――があたしとなのはを吹き飛ばして・・・

・・・そうだ！

あいつ！刺されてた！口から血が出てた！！

どうなったんだ！？

ヴィータの顔から血の気が引いた。

「おい・・・まさか・・・」

そう言い、なのはに応急処置をしている隊員を見る。

「アンノウンは撃墜しました。しかし、近藤曹長はそのときに発生した爆発を直接受け・・・」

隊員はそこで言葉を切ると、ちらりと横へ顔を向けた。

ヴィータもつられてそちらの方へ顔を向ける。

そこには2人の隊員が倒れている隊員に対し処置をしている姿があった。

ヴィータはゆっくりと、ふらりと立ち上がり、その倒れて処置をうけている隊員のところへ向かった。

足が重い。

行きたくない。

距離にして約１０メートル。

遠い。

周りの視界が狭くなってくる。

行くな。

そう頭の中から声がする。
行けば、良くない光景を見てしまう。
だから行くな、と。

しかし、行かなければならない。
見なければならない。
あいつはなのはを助けてくれた。
親友を助けてくれた恩人だ。
最後にあたしとなのはを吹き飛ばしたのはどうかと思うが、あれはあの場で戦線を離脱させるには最善の策だったのだろう。
だからこそ、見なければならない。
それがあたしの責務だと、義務だと、自分にそう言い聞かせ、歩みを進めていく。

パシャ

パシャ

足元から水溜りを歩いたような音がする。
なんだ?と思い、ヴィータは足元を見た。
見た色は赤。白く敷き詰められた雪に似つかわしくない色。鉄の匂いのする色。
ヴィータはその赤い色の続く道を目で追っていく。

血。

血、血。

血、血、血。

――大量の血。

なのはのものではない。
その血は倒れている近藤曹長に続いていた。

そして――
ヴィータはたどり着いた。
2人の隊員は怒声をあげそれぞれが忙しく動いている。

「近藤！近藤！まだだ！まだ逝くな！！」

「曹長！あと少しです！頑張ってください！！」

そんな声が聞こえる中、ヴィータは見た。

右腕が二の腕から下が無くなり、

右目潰れ、

腹から刃を突き刺したままの、近藤曹長を。

ヴィータはただ、見ているしかなかった。

# 第2話

高町なのはが撃墜されて3ヶ月がたった。

なのはは現在も入院中である。
そんななのはのリハビリはとても厳しいもので、周りの友人や両親はいつもハラハラしていたそうだ。
この娘は、一度言った事は必ず実行する。

「また、空を飛びたい」

なのははそう言い、黙々とリハビリをはじめた。
もはやリハビリという言葉など生ぬるい、己にストイックな、まさに拷問、それほど厳しいものだった。
それでもなのはは自分に科した訓練として一度として弱音を吐かず、なんとこの3ヶ月で日常生活をこなせるレベルまで回復する。
なんとも驚異的な回復力である。

しかし、これに驚いたのは医師達だ。
最悪、日常生活もままならないと医師達は診断していたものだから、3ヶ月と言うスピードに思わず聞いてしまった。

「彼女は本当に人間か？」

その後、その医師達はボコボコにのされて手術台に縛られて発見された。

いくら思っても、言っていいことと、悪いことがあるといういい例だろう。

その日、ヴィータは悩んでいた。
なのはに”あのこと”を言うべきかどうかを。

あの日の事の顛末を。

あの墜落された日、なのはは、隊員から応急処置を受けている途中で気を失っていたらしい。
つまり、ヴィータと隊員の会話も聞いておらず、それどころか自分が近藤曹長によってアンノウンから助けられたことも覚えていないのだ。
優しいなのはのことだ、近藤曹長のことを知ったら自分を責めるに違いない。
だからといって、なのはに事実を知らせないということは出来ない。
真実を知る義務が、責務がなのはにはある。
なのはには辛いことだが、そうしなければ近藤曹長が報われない。
なにしろ事の当事者なのだから。

そんなことを考えながら、あー、うー、と唸りながら歩いていたらいつの間にか病院についてしまった。

今日の見舞いはヴィータ一人だ。

いつもなら友人数人で押しかけるのだが、皆仕事や学校などで都合がつかなかったのだ。

ちょうどいい。
今日話そう。
よし決めた。
そう決めた！

ヴィータはウッシ！と拳を握り気合をいれ、病院へ入った。

あの事件の顛末を、ヴィータは誰にも話していない。

実は、あの事件のあと、関係隊員達にかん口令が敷かれたのである。
アンノウンという不確定情報のこともあり、あの事件は機密事項となった。

ヴィータの主でもある”八神はやて”に事件の顛末を聞かれると、つい口が滑ってしまいそうになるが、はやてもあの事件が機密事項になったのを知っており、あまり詳しくは聞いてこなかった。
ただ、怪我をした隊員の名前をやたら聞きたがっていた。
自分でどうにか助けることが出来ないかという思惑があったのだろうが、はっきり言うと余計なお世話である。
もちろん、あの日の事件の参加隊員の名前も秘匿事項なので教えることはできない。
それでつい、適当な名前を口にした。

「あー、ガンダムって名前だったかな？」

その瞬間ヴィータの後頭部にハリセンが飛んできて、スパーン！ときれいな音がした。

「それはロボットの名前や！私はお台場にまで見に行ったんやで！いやーかっこよかったわー」

とかなんとか言い、だんだん話が近藤曹長の名前から、ガンダムの話にシフトしていった。

はやては一人で、ロボットのウンチクをあーだこーだ言っている。

ビギニングのプラモは手に入らなかったとか、目指せガンダムビルダー！とか、次の静岡にも行くとか勝手に話が逸れていく。

はやてが勝手に、自分でそらしていく。

・・・そうか、はやてはそのガンダムとかいうロボットが好きなのか。

というかはやて？そのハリセンはどこから出したの？

ハリセンで叩かれた後頭部をさすりながらヴィータが考えていると、はやてははっと気付く。

「おーっと！あぶない、あぶない。危うく話を逸らされるとこやったで」

ふーっと息を吐きながら、ニヤリと笑い、汗をぬぐう仕草をする。

汗は出ていないけど。

やるやないかヴィータ、とか聞こえたが流す。

というかはやて？

仕事がびっしり詰まって寝る間もない！とかいつも言ってるのに、

いつお台場に行ったんだ？
そんな詮無いことをヴィータが考えていると、はやてがなにやらクネクネ変なポーズをとりだした。

「んふっふー。女は秘密が多ければ多いほど美しくなるんやで！」

本人はセクシーポーズのつもりらしい。
どうやら、考えていることが顔に出ていたようだ。
今度から気をつけよう。
うん、シグナムみたいな能面を目指そう。

シグナムに聞かれたら切り刻まれるようなことを考えていると、はやてはあきらめ悪くしつこく聞いてきた。

「そんなことより、名前や！名前！な～ヴィータ～ちょっとくらいええやんか～。な？ホンマ少し！先っちょだけ！な！」

・・・なんか、変なこと言い出した。

はやてはなにやら変な方向にテンションが上がったようで、はやて大好きっ娘のヴィータでさえだんだん付き合うのもしんどくなってきた。
ヴィータは軽く流し、もう早く切り上げたくなってまた別の適当な名前を口にする。

「じゃあベンツでいいや」

投げやりだ！

「じゃあってなんやねん！じゃあって！しかもベンツて！いくら私

達の周りに車の名前に似た人が多いからって、ベンツはないで！」

ドイツの人たちにケンカ売ってんのかな、はやては？

ごめんなさい、ドイツの人。

「ふふふ・・・ヴィータ・・・あんたがここまでできる娘やったとは思わんかったで。ヴィータ、恐ろしい娘！」

なんかはやてが勝手に満足して親指を立てて満面の笑みで、勝手に「もうこの話はしない」とか言い出した。

はやてに褒められたけど、あまり嬉しくないヴィータだった。

・・・まあ、結果オーライか？

――――そんなほほえましい家族の団欒を思い出していると、とうとうなのはの病室についた。

いくら日常生活ができるようになったとはいえ、やはり病人。

あと一週間は入院しなければならないらしい。

ちなみに、なのはは一般病棟にいる。

最初こそ個室だったのだが、なのはを一人にすると勝手に無茶苦茶なリハビリをしようとするので、誰かが目を光らせないといけないということになり、一般病棟に移されたのだ。

ヴィータは病室に入り、ベッドに座って本を読んでいるなのはに声

をかける。

「よ。なのは」

すると、なのはは本から目を離し、ヴィータの方へ顔を向け笑顔になる。

「ヴィータちゃん。今日も来てくれたんだね！」

「・・・っ」

ヴィータは一瞬揺らぐ。
この笑顔が、悲しみに染まる話を、今からしなければならないことに。
しかし、それでもなのはには知ってもらいたい。
なのはの命を助けた人間のことを。
そして、彼がどうなったのかを。
なのはには強くなってほしい。

心も、体も。

だから――――

「なあ、なのは・・・話があるんだ・・・大事な、話が・・・」

ヴィータは真剣な表情で切り出した。
そして、その覚悟が伝わったのか、なのはも笑みを消し、手に持っていた本を閉じる。

「なに？ヴィータちゃん？」

なのはは姿勢をただし、真剣な表情をした。

そして、ヴィータはすべてをなのはに話した。

## 第3話（前書き）

まだ本編に突入できません。
ああ、はやくドタバタコメディの話を書きたいです。
暗い話が続きますが、もう少しお付き合いください。

感想やご意見等々お待ちしております。

# 第3話

俺はどうなった・・・

高町教導隊員がアンノウンに襲撃された・・・

撃墜されて・・・

俺が高町教導隊員から一番近かったから墜落している高町教導隊員を助けて・・・

ああ、アンノウンに腹刺されたんだったか？

そこからは記憶が曖昧だな・・・

アンノウンが爆発して・・・

爆発を直で受けて・・・

死んだな、と思ったんだったな。

ん？

俺は生きてるのか？

というか、ここはどこだ?夢?

・・・ま、いいか。

寝よう。

そう思った瞬間

彼は情報の波という地獄に投げだされた。

近藤大輔　陸曹　１８歳

彼の心は壊れている。
これは彼の生い立ちに関わることなのだが、近藤は第９７管理外世界「地球」極東地区日本の出身である。

彼の両親は彼が６歳の時に次元犯罪者に殺されている。
そんな彼自身も次元犯罪者に斬られ、死にかけた。
そのときの出来事が彼の心を壊し、破綻者としてしまったのだろう。

その後、奇跡的に管理局に保護され一命を取り戻し、魔法資質を見出され管理局に入局する。

彼には恐怖という感情が欠落している。

いや、恐怖自体は感じるが――

『遅刻して上司に怒られる！』という恐怖と

『交通事故で車に轢かれ、死んでしまう！』と言う恐怖

彼にとって二つの恐怖はイコールなのだ。

そもそも死に対しての恐怖があまりにも希薄なのである。

そんな破綻者である彼は、現在危篤状態にある。

右腕切断
右眼球欠損
内臓破損
全身の火傷、打撲
墜落時の骨折数箇所

生きているのが不思議なくらいである。

それには理由があった。

数々の偶然と、彼の普段からの研究成果「デバイスのブラックボックス解析」による奇跡。

その奇跡が、彼を生かし、そして彼に全てをあたえるのだ。

奇跡は彼に三つつの力を与える。

――ひとつは

『魔法ではない力』を。

それは神通力とも呼ばれ、超能力とも呼ばれるもの。

――ふたつめは

デバイスのブラックボックス封印解除による『アルハザードの知識習得』。

――そしてみっつめの力。

世界を、宇宙を、この世のありとあらゆるものを、過去、現在、未来を知るということ、理解するということを。

その力を知る人はそれをこう呼ぶ。

――――森羅万象――――

または

――――アカシックレコード――――と。

危篤状態の中、彼の脳に膨大な情報が流れていく。

――――いたい！

痛い！

イタイ！

いたい！

痛い！！

神経が焼けただれるようだ！

目の前が焼けたフィルムのように茶色く、そして黒く、穴を開けていく。

体を皮膚を、肉を焼いていく。

激痛が絶え間なく続く。

脳がかき混ぜられる。

眼球を握りつぶされるような痛み

爪をすべて剥がされ、指を砕かれるような痛み

内臓をミキサーでかき混ぜられるような痛み。

体中の穴という穴から血が流れ出る。

体中が痛い！

いやだ！もういやだ！痛いのはいやだ！！

なんでこんな痛みを受けなきゃならない！
彼は狂ったように叫ぶ。
しかしその叫びは声にならない。
声が出ない。
いくら口をあけても、喉をならしても、口からはただただ、息を吐く音しかしない。

気がおかしくなる。
いや、おかしくなったほうが楽だ。
ああ、楽になりたい。
おかしくなりたい。

おかしくなろう。そうだ、それがいい！

そうしよう！！

その瞬間全ての痛みが消えた。

全てが白になる。

そして、すべてを理解する。

ああ――――――

そうか――――――

俺は全てを手に入れたのか――――――

そして意識は闇へと堕ちる。

## 第４話（前書き）

多聞に独自解釈が含まれております。
まだ本編へ突入しませんが、もうしばらくお付き合い下さい。

感想、ご意見お待ちしております。

# 第4話

近藤が目を覚まして3週間経った。

彼はあの事件後、約2週間意識不明の重体だった。
そしてようやく目を覚まし、意識がハッキリしてきて、自分の置かれている状況を理解、納得するのに1週間を要した。

――まず、右腕がない。

感覚はあるのに、そこにあるべき自分の腕がない。

脳が理解を拒否する。

俺の腕はどこだ?

なぜない?

人間は本来あるべき部位がないとどうなるかおわかりだろうか?
脳が腕の欠如を認識しないのだ。
だから、視覚的にないのに、脳内では認識してしまう。

頭がおかしくなる。

狂ったように叫んだ時もあった。

しかし、これは医師の説明により納得した。

義手を用意するから安心しろ、と。

ないものは無い。

しかし代わりのものを用意するから納得しろ。

近藤の脳はそれで納得した。

――次に、右目が無い。

これは、以外にもあっさりと状況把握し納得した。

彼の右目には、何故か彼の所持していたストレージデバイスのコアがめり込んでおり、また何故かそのコアが彼の肉体と融合し、剥離不能の状態だという。

つまり、コアを無理に取り外せば、自分も死ぬということだ。

ああ、と近藤は納得する。

近藤は重体の最中、情報の激流にのまれた。
その情報は、ストレージデバイスから流れ出たものだったものである。

自分が生きているのは、このコアが『自身』のブラックボックスを解放し、『自分』を生き永らえさせてくれているのだと。

ストレージデバイスには人口知能・ＡＩが無い。

しかし、近藤にはストレージデバイスがこう言っているように思えてならない。

「生きろ。」

――と。

ここで、デバイスの『ブラックボックス』について説明しよう。
そもそも、デバイスには『コア（核）』というものがある。
人間で言う、心臓や脳の部分に当たる。
実はこのコア、旧暦以前からなんら変わらない製法で作られている。
これには諸説あるのだが、未だに製法が変わらないのはただ単に、すでに合理的に確立された製法をこれ以上改善する必要がないというのが大筋の見解である。

だが、これは言い換えれば、コアの中身は失われた旧暦以前の情報――『空白の歴史』が入っている可能性がある。

それが、『ブラックボックス』だ。

ところがこのブラックボックス、非常に高等なプロテクトが掛かっており、このプロテクトを解いて解析を成功したと言う話は聞いたことが無い。

それに、別に取り外してもなんらデバイスには支障もなく、デバイス技師たちには『なんだかよくわからないモノ』や、『ゴミ』などといわれる始末。

最近の研究結果では、『旧暦以前のデバイス技師によるお遊び、もしくは消し忘れたゴミ』みたいなことが発表され、それが世間一般の常識となってしまったのである。

だが、コアの精製方法は旧暦以前と変わらないというのは前述したとおりなのだが、これには一つ問題がある。

コアを精製すると、必ず『ブラックボックス』という『ゴミ』がついてくるのだ。

目下、これがデバイス技師達の悩みの種である。

次に、ストレージデバイスとインテリジェンスデバイスの違いだ。

これの最たる違いは、量産か、オーダーメイドかの違いにある。

インテリジェンスデバイスとは、その名の通り、人口知能が搭載されている。

これが結構コアの内容量を食う代物で、インテリジェンスデバイスを作る技師は大抵その『意味不明』のブラックボックスを取り外し、その空き領域に人工知能を埋め込む。

ストレージデバイスの場合、量産のためコアについては一切手をつけず、ブラックボックスを入れたまま、一般局員に配布される。

これは、ブラックボックスの取り除き作業には手間と時間がかかり、量産のストレージデバイスに対してそんなに時間をかけられないというのが本当のところだが。

そして近藤はストレージデバイスを使用している。
曹長と言う肩書きではあるが、実は彼、あまり魔法量は多くない。
前回の魔力検定試験でも、こすいやり方でやっとＡＡランクにアップしたところなのだ。
本来の実力なら、調子のいい日ならばＡ、悪い日ならＢランク程度なのだ。
それでも、彼は日頃から魔法に対して研究を重ね、魔力の体内循環機能の見直しや、デバイスの調整、魔法の省エネなどを繰り返し、自身にできるある結論に到達した。

「削れるところはとことん削り、
使うところでガッツリ使い、
魔力一滴残さずカスまで使い尽くす。」

その結論を、魔力の有効活用を、己の身で実践した。

そしてその研究の中にブラックボックスの解析も盛り込まれていた。
もちろん、一介の局員程度が長年研究者たちが解析できなかった問題を解析出来るはずも無い。
だが彼は諦めることなく無限書庫へ行き、ありとあらゆる旧暦以前関連の書物を読み漁り、ブラックボックス解析の有力情報をかき集めていった。
そして、あるひとつのキーワードが導き出された。

『アルハザード』である。

アルハザードとは、既に遺失した古代世界であり、卓越した技術と魔法文化を持ち、そこに辿り着けばあらゆる望みが叶う理想郷として伝承される場所である。
現存を信じる者たちは少数ながらも存在し、彼らによる片道渡航の試みは後を絶たない。
そういう場所なのだ。

当然といえば当然の話で、アルハザードは一部の研究者からは『全ての魔法文化の始まりの場所』とまで言われている。
つまりブラックボックスを解析すれば、アルハザードの情報を得られる可能性がでてきたのだ。

近藤は、何百というプロテクトをひとつひとつ、それこそひとつのプロテクト解除に1ヶ月なんてこともザラで、それでも諦めずに解除していった。
そんな解除作業途中に今回の事件が発生し、どんな奇跡か、裏技か、残り約８００（あくまで表面上）のプロテクトを全てすっとばして開放、さらに融合してしまった。

まさしく結果オーライ、棚からぼた餅状態だ。

――――さて、現在の近藤はこれまた高町なのは同様、医師達が目を疑うような状況にいる。

目覚めて3週間、骨折していた部分が完治までいかないにせよ、すべてくっついた。
火傷も痕が残らず、綺麗に傷跡ひとつ無い。
ただし、古傷、昔の次元犯罪者に斬られた傷は残っている。
内臓も回復し、点滴、流動食から一般食へと変わった。
近々右腕に義手を付け、本格的なリハビリを開始する予定である。
最初の包帯だらけから驚異的な回復である。
医師達は近藤に聞いた。聞いてしまった。

「あなたは人間か？」と。

「――――どうでしょうか？半分は違うかもしれませんね」

と、本気なのか、冗談なのかわからない返答をした。

実はこの返答、真実を言っている。

近藤の体はデバイスコアと融合してしまった。
そのため、人体の新陳代謝の速度が、より遥かに速い魔力自己修復機能、デバイスが破損した時にコアが魔力を使用して自動修復する機能を近藤の体に使用しているのだ。
つまり、彼の体は人間の体であり、コアによる魔力補助を受けているという、いわば半ば精霊に近い存在となってしまってるのだ。
まあ、精霊なんてものが存在すれば、というところだが。

――そして、近藤が目覚めてから1ヶ月。

近藤の入院する病院に、二人の管理局の人間がやったきた。

近藤の上司、ヤン・パオ三佐とリンディ・ハラオウン提督である。

## 第5話（前書き）

今回でプロローグは終わりになります。

# 第5話

近藤はアカシックレコードをまだ一度も使用していない。
理由としては、自分の身体状況確認と回復に専念する必要があり、
能力確認まで手がまわらなかったのだ。

だから、これから彼に下される現実と社会の残酷な仕打ちの事など、
まだ知るよしもないのだ。

ヤン・パオ三佐と、リンディ・ハラオウン提督は、近藤の病室に着
きベッドで横になっている近藤を確認するなり、
前置きもなく彼にこう言った。

戒告処分
陸士１１３部隊から第４６無人世界へ異動
軍曹への降格

「・・・え？」

いきなり処分だけを言われて少し混乱するが、すぐに考える。

処分？

何故？

何故、処分を受けなければならない？

俺は何かミスをしたか？

訳がわからない。
リンディ提督は無言のまま、混乱しつつも状況把握をしている近藤を見つめている。
近藤は、まず聞かなければと、

「どういう事ですか？何故自分が処分を受けなければならないのですか？」

と、ヤン三佐に問いかける。
冷静に言ったつもりだが、声が少し震えていた。
ヤン三佐は眉間にシワを寄せ、不機嫌だということを隠しもせず、

「貴様の作戦ミスによる高町なのは教導隊員負傷に対する処分だよ」

と、吐き捨てるよう言う。

作戦ミス？

なんだそれ？

高町隊員の負傷が俺のせい？

なんだよそれ！？

「ちょっと待って下さい！作戦ミスってなんですか！？
自分はその高町隊員との合同任務のときはいち隊員であり、作戦など立てておりません！
それに高町隊員の負傷というのは、あの戦闘時での負傷ならば、アンノウンとの交戦によるもので、
自分も高町隊員を救出した際に負傷しています！」

と、近藤は事実をヤン三佐を述べる。
しかし、それをヤン三佐はフンと鼻をならし、腕を組み、
「貴様の怪我は自業自得ではないか」
と切り捨てる。そして続けざまに、
「よくもまあそうスラスラと嘘がつけるものだな。近藤軍曹」
見下すようにヤン三佐は近藤を見て、顔をしかめる。
「あの若さでＡＡＡという天才魔導士をキズモノにし、彼女の経歴に泥を塗っておきながら、なお自分の保身に走るか！」
と、突然怒鳴りちらす。
近藤はわけがわからないという顔をしている。
リンディ提督はヤン三佐の言葉に目をつむり、眉間にシワをよせる。
「貴様がいくら自分に都合のいいデタラメを述べようと、こちらには証拠がある！」
ヤン三佐は近藤を指差し叫んだ。
「証拠？」
近藤が聞き返すと、リンディ提督の眉間のシワがより深く刻まれ、なにか痛みに耐えるかのような表情をしている。
しかし今の近藤にそんなことを気にする余裕もなく、証拠という言葉に怪訝な表情をする。

すると、近藤の前にモニタが現れ、なにかの映像を流している。
近藤はその映像をみて絶句する。
映像には、自分が無茶な特攻をアンノウンにかけ、無惨にアンノウンにやられ、
それに高町隊員がとばっちりを受けて一緒に墜落していくという映像だった。

「これはあの作戦時の他の隊員達のデバイスに残っていた映像記録だ。全員にこれと同じ映像が記録されている」
ヤン三佐は無表情で告げ、
「この映像が動かぬ証拠で、今回の件の全てだ」
と、吐き捨てるように言う。
そして、そこまで言われて近藤はわかってしまった。
ヤン三佐は事実を知っている。
そして知りつつも、近藤を叱責する。

ヤン三佐は俺を切り捨てるつもりだ、と。
高町隊員の経歴に汚点を残さないために、全て俺のせいにして治めてしまおうという魂胆だ。
先程の映像もコンピュータグラフィックスで作られたフェイクで、
恐らく、隊員全員のデバイスの映像記録も消去、もしくは改ざんさ

れているだろう。
そしてあの作戦時の隊員全員に箝口令を敷けば、真実は闇の中だ。
トカゲの尻尾切りである。

近藤はショックのあまり俯き、身体を震わせている。
もともと色白な顔が今は真っ青になっている。
黒く長い前髪が垂れて目元を隠し、表情が伺えないが容易に想像できる状況だ。
手や背中から汗が吹き出て、
握っているシーツに力を入れ、より多くのシワがよる。

「・・・そんなに・・・高町隊員の経歴が大切ですか・・・」

声が震えている。
あれだけ信頼を寄せていた上司に、こうもアッサリ切り捨てられるとは思ってもみなかったため、ショックが隠せない。
嘘だといってほしかった。
しかし、

「当たり前だ。貴様のような、ごまかしでやっとＡＡになるような凡人よりも、
彼女のような何もせずにＡＡＡの天才のほうが大事に決まっているだろう」

無情にも現実は残酷で。

「彼女はこれからの管理局を支えていく大事な存在だ、貴様と違ってな。
そんな彼女に小石によるつまづきなどあってはならんのだよ」

言葉の刃が近藤の心を刺し貫いていく。
近藤は顔を上げることができない。
それを見たヤン三佐は、もう話すことはないとばかりに病室を出て行こうとする。
しかし、何か思い出したのか、ピタリと立ち止まり、

「貴様の荷物は退院まで隊舎に置いておいてやる。さっさと退院して引き取りに来い」

そう吐き捨て、病室を出て行った。

病室には近藤とリンディ提督の二人しかいない。
しかし、お互い口を開こうとせず、ただ無言の重い空気だけが流れる。
もともと華奢な体が、今にも折れてしまいそうな、そんな危なげな雰囲気が漂う。
近藤は俯いたまま動かない。
リンディ提督もそんな近藤を見つめるだけで、しゃべろうともしない。

どれ程時間が経っただろうか。
近藤が力無くポツリとしゃべりだす。

「・・・リンディ提督・・・」

「・・・なにかしら？大輔君」

近藤を大輔と呼ぶリンディ提督。

近藤が６歳の時の事件の後、ある男性局員が近藤の保護者として名乗りをあげた。
その男性局員はアースラのクルーであったため、近藤もリンディ提督とは顔見知りであり、
リンディ提督にも近藤と歳の近いクロノという子供がいたため、小さい時は母親変わりとして接していた。
そんな近藤が管理局の勝手な都合で未来を潰されたのだ。
リンディ提督は俯き力無く話す近藤の姿に心を痛める。

「自分のしたことは間違っていたんでしょうか・・・」

「いいえ。あなたは間違っていないわ」

近藤の問い掛けに優しい口調で答える。

「自分がもっと強かったらよかったんでしょうか・・・」

「いいえ。力があったとしても、あの時のアンノウンに勝てたという保証はないわ」

近藤がシーツを握る手に力を込める。

「俺は・・・切り捨てられるために・・・管理局に入ったんですか・・・！」

悲痛な叫びにも、

「・・・いいえ！違う！」

そう答えるしかできなくて。

「じゃあ！なんで！なんで！！俺がこんな仕打ちを受けなきゃならない！！」

近藤は叫び、涙を流しながらリンディ提督を睨む。
リンディ提督は苦しそうに顔を歪め、

「ごめんなさい」

深く頭を下げて謝った。
何を言っても言い訳になる。
言えば余計に近藤を傷つける。
なんとか助けたかった。
でも助けられなかった。
自分の力が足りなかった。
だからリンディ提督は何も言わない。
ただ、謝罪するだけ。

「ごめんなさい」

近藤は、リンディ提督のその姿を見ると、力無くうなだれ、ボソリとつぶやく。

「・・・アルハザードの知識を手に入れても、これじゃあ意味がない・・・」

「・・・え？」

リンディ提督はおもわず顔をあげる。

近藤はこの一言が、自分の運命を時代の大きなうねりの中へと導くということを、この時まだ知るよしもなかった。

近藤とリンディ提督のやりとりから2ヶ月後、
病室でヴィータがなのはにあの事件の顛末を話した。
話を聞き終えたなのはは、悲しみに顔を歪めていた。

「私のせいで・・・近藤さんがそんな大怪我を・・・」

なのはは今にも泣きそうな顔をしている。

自分の体調がもっと良ければ、

自分が無茶をしなければ、

自分にもっと力があれば、

なのははそんな後悔の念ばかりが浮かぶ。

ヴィータはそんななのはを悲しそうな顔で見つめる。
なのはのそんな顔は見たくない。
なのはには笑っていてほしい。
でも、なのはには強くなってもらいたい。
今回の出来事を乗り越えてもっと強くなってもらいたい。
ヴィータはそんなことを考えていると、
「あら、どうしたのかしら？そんな暗い顔して？」
病室の入口から聞き覚えのある声がした。
なのはとヴィータは声のした方に振り向くと、
そこにはリンディ提督が立っていた。

「どうしてですか！」
なのはは声を荒げ、リンディを睨む。
「そうだ！あいつはなんも悪くねー！」
ヴィータも大声をだし、リンディ提督に詰め寄る。

しかし、リンディ提督は少しキツイ口調で、

「それが組織なのよ。納得しなさい。それに、これは決定事項。もう覆らないわ」

と言い、二人を相手にしない。

なのはもヴィータもそんな言葉で納得できる訳がない。

なのはをかばい、大怪我をした挙げ句、なのはのミスをなすりつけられて、降格、左遷だという。

それなのに、なのは自身はお咎めなし。

さらに今回の事件が一週間後には情報公開されるらしい。

管理局にいいように捩曲げられた捏造情報を。

白いものでも黒と言えば、それは黒になる。それが組織であり、今の管理局である。

「それが大人の世界なのよ」

淡々と感情のない言葉が、なのはの心に突き刺さり、なのはは泣き崩れた。

「そんなのってないよー！」

叫びながら泣き続けるなのは。

なんて理不尽な世界だろう。

なんて身勝手な組織だろう。

なぜ自分には力がないのだろう。

なんて無力なのだ、高町なのは。

ただ泣くしかないなのは。

ヴィータは身体を震わせ、握っていた拳に力を入れ、

「ちくしょー！！」

自分のふがいなさに叱責する。

親友を救えず、親友の恩人も救えず。

なんなんだ、あたしは。

くやしい、くやしい。

くやしい！

でも思いは届かず、

ただ叫ぶしかなかった。

リンディ提督はそんなふたりをただ見ているしかなかった。

そして物語は8年後へと移り、彼等は未曾有の事件に巻き込まれる。

それは、運命か、神の悪戯か。

想いが交錯し絡まりあう。

すべては原初の魔法が導く物語なり。

## 1万アクセス記念雑談（前書き）

ありがたいことで、1万アクセスを突破しました。
これも皆さんのおかげです。
というわけで、少し生き抜きがてらにやってみました。
気軽に見て行って下さい。

# 1万アクセス記念雑談

近藤　「祝！1万アクセスー！突破！！」

はやて　「イェーイ！」

近　「こんなに早く1万を超えるとは思ってませんでした！」

は　「そや！早くて1ヶ月とか思ってたで！」

フェイト「・・・テンション高いね」

なのは　「ドン引きだよね」

近　「あれ？なにこの温度差？」

ヴィータ「呆れてんだよ。浮かれやがって」

近　「え？」

シグナム「”魔法少女リリカルなのは”というブランドネームのおかげで、読んでくれている人が多いだけだ。
　おまえがすごいんじゃない」

近　「あれ？」

シ　「大体なんだ？あの重いプロローグは。読む気が失せるぞ」

フ　「引くよね」

な　「ドン引きだよね」

は　「だから、ちょっと空気軽くしようと、私とヴィータが頑張ったやんか！」

ヴ　「はやての一人相撲だったよ」

シ　「ヴィータを巻き込まないでください」

近　「あっるぇー？」

シ　「そもそも主はやては、なんでそんなに擁護するのですか？」

は　「えーと、バランス？」

フ　「とれてないよ」

ヴ　「4：2だぞ、はやて」

シ　「完全負け試合ですよ、主はやて」

な　「ドン引きだよね」

シ　「おまえはそれしか言えんのか？」

――　議論中　――

近　「まあ、とりあえず、めでたいという事で落ち着きました」

は　「確かに、それだけの人が見てくれてるのは事実やからね」

フ　「だからって、次回から本編突入なのに、こんなのでお茶を濁していいの？」

な　「あ、もしかしてリクエストとかがあったの？」

ヴ　「なるほど」

シ　「それなら頷けるな」

近　「・・・」

は　「どないしたん？横向いて」

フ　「・・・まさか・・・」

近　「リクエストとかそんなの一通もきてません！」

な　「えー！？」

ヴ　「なんで、こんなもんしようと思ったんだ？」

近　「憧れだったんです！こういう雑談系やりたかったんです！先生！」

シ　「誰が先生だ。それにドサクサ紛れに抱きつこうとするな」

ケンカキック炸裂

近　「ぐふぅっ！」

は　「無様やな」

な　「ヴィータちゃん、バカに近づくとバカがうつるよ」

ヴ　「みんな、こいつから半径5メートル以上離れろ！」

フ　「エリオとキャロには口も聞かないでくださいね。空気感染しますから」

近　「なに？この扱い。酷くない？」

――　近藤立ち直り待ち　――

近　「えー、まあ冗談はここまでとしまして、補足説明などをしようかと思います」

は　「こういうので説明入れなあかんいうのも、どうかと思うよ」

フ　「まあ、いいんじゃないかな？」

な　「それで？何を補足説明するの？」

近　「近藤大輔の設定とそれに漏れた没設定です」

ヴ　「はやてー、アイス食いに家に帰ろうぜ？」

シ　「私も仕事があったな、テスタロッサ、帰るか」

近　「ちょいちょいちょいー！まてい！」

フ　「・・・古」

近　「え、これ古い？時代の流れは速いな・・・」

は　「おじさんのスリーサイズとか知りたくもないで」

近　「俺も知りたくないです、そんなもん」

な　「じゃあ、近藤さんの何を説明するの？」

近　「プロローグでの１８歳の時の容姿です」

ヴ　「ああ、そういえば、そんなに容姿についての描写は無かったな」

近　「まあ、次回からの２６歳のニュー近藤と比べる程度に考えてください」

フ　「ニュー近藤？」

は「ネーミングセンスダサッ」

近「あ、それ重要な設定です」

シ「なんだそれは。重要か？」

近「まあ、いろいろ物語りに絡めようと思っています」

な「ちょっと待って！？それ、私達にも被害来ない？」

フ「え、なにそれ！？そんなのヤだよ！？」

ヴ「そんな設定抹消しちまえ！」

近「それで、容姿なんですけども」

は「うわっ！スルー！？ずっこいでそれ！」

近「とりあえず、ハンサムではありません。いい人的な顔です」

フ「へー」

な「なんか、めずらしいんじゃない？こういうＦＦでは、大抵オリジナル主人公ってカッコイイとか、可愛いとかじゃない？」

は「なのはちゃん、なにげに毒吐くな・・・」

フ「なんか、ニコッと笑うと私達がポッとなるとか、全員とフラグ立てるとかね」

は「フェイトちゃん、猛毒やでそれ」

ヴ「あ、あとメチャ強いとかだな」

近「まあ、俺は魔力ランクＡですし。こすい（試験ギリギリ合格できる姑息な）やり方でやっとＡＡですしね」

シ「しかし、なにか目覚めたとか書いてあったろう？あれでお前もチートキャラになったんじゃないのか？」

は「シグナム、グッサグサいくな・・・」

近「まあ、そのあたりはおいおい物語りで語ります」

シ「うむ、今は容姿のことだったな」

近「はい。色白で、ひょろいですね。身長は１７５ｃｍくらいです」

は「え、ガリガリクソンなん？」

な「それは、どっちに突っ込めばいいのかな？」

ヴ「すまねえ。そっとしといてやってくれ」

シ「うむ。スマン」

は「コラそこ！かわいそうな子見るような目で私を見ない！」

近　「あと、髪は黒髪でヴァイス陸曹よりちょっと長いくらいの髪の長さです」

は　「あ、クロノ君の髪より少し長いくらい？」

な　「ウチのお父さんとか、お兄ちゃんとかより少し長いくらいか」

フ　「スバルより少し長いくらいだね」

近　「・・・俺、ヴァイス陸曹って言いましたよね？」

は　「だから、クロノ君やろ？」

な　「お父さんと、お兄ちゃんだよね？」

フ　「スバルでしょ？」

近　「・・・・・・・・・（その発言はこのアニメに喧嘩を売ってるって理解してるのかな？）」

シ　「こっちを見ないでくれ」

ヴ　「・・・・・・ホント、スマン」

近　「次に没設定ですが・・・」

は　「はいはいはーい！先生質問です！」

近　「なんですか?八神はやて二等陸佐」

は　「冷たい・・・言葉に温もりがない・・・乗ってくれてもええやん・・・」

フ　「それで、質問って?」

は　「いや、まあ、実は次回の話のことやねんけど」

な　「え!?それここで言っていいこと?」

は　「いやな、気になってたんよ。で、ええ機会やから聞いとこうかなと」

近　「ふむ、なんでしょうか?」

は　「近藤さん、まあ、近藤さんの名前も出んと〝男〟てなっとるけど、誰かと念話で話しとったやんか?あれ誰?」

近　「秘密です」

は　「妹に逢いたい言うとったやん?誰?」

近　「秘密です」

ヴ　「・・・はやて」

シ　「・・・もういいじゃないですか」

は　「なんや!みんなは知りとうないんか!?気になるやんか!

それからヴィータ！シグナム！そんなかわいそうな子見るような目で見んな言うたやろ！」

フ　「物語の重要な所を担う重要な人物なんだよ、きっと」

な　「あんまり先に知ると面白くないしね」

は　「ぶー。みんな優等生やなー。じゃあ名前だけでも教えて！それくらいやったら物語に支障ないやろ？」」

近　「・・・秘密です」

フ　「名前くらいいいんじゃないかな？いつまでも［女の声］とかじゃあ可哀想だよ」

近　「・・・秘密です」

な　「なんで目を逸らすの？」

キュピーン

は　「ふっふっふ。近藤さん、近藤さん、正直になった方がええちゃう？」

近　「・・・なにがですか？」

は　「名前、考えてないやろ？」

ヴ　「はやて・・・」

シ　「さすがにそれは・・・」

は　「ほら、吐いてみ？ぶちまけてみ？楽になるで？ほら、ぽろっと、ゲロッとな？」

近　「・・・スイマセン！考えてませんでしたー！！」

フ　「えー！？」

な　「それは酷いよ！？」

シ　「うむ、さすがにそれは擁護できん」

ヴ　「酷いヤツだな！おまえ！」

近　「書いてるうちにいい名前思いつくと思って、後回しにしてるんです。
　それに、名前がわからないほうが、神秘性が強くなるじゃないですか」

シ　「人はそれを、逃げるというのだ。バカモノ」

――――　シグナム説教中　――――

近　「気を取り直して、没設定を発表します」

は「所詮、没やろ？たいした設定ちゃうやろ」

フ「まあまあ、聞くだけ聞いてみようよ」

な「それで？どんな没なの？」

近「プロローグの時点で、近藤には婚約者がいました」

ヴ「へー、すげーじゃん」

シ「しかし、没にしたんだな。何故だ？」

近「相手がですね、オーリス・ゲイズさんだったんです」

は「え！？あのレジアス中将の娘さんの！？」

フ「その設定はすごいんじゃない？」

な「オーリスさん綺麗だしね」

ヴ「でも、なんで没にしたんだ？」

シ「うむ、いい話ではないか？」

近「たぶん、レジアス中将は、曹長ごときの役職の人間に、自分の大事な娘をあげないと思ったんですよ」

は「あー・・・」

フ「でも、親の反対を押し切って駆け落ち！とかロマンチックじ

ゃない？」

な　「あ、いいね、それ！」

近　「オーリス女史もリアリストで、そんなことしないと思って没にしました。
　それと、年齢的なものも考慮しました」

ヴ　「あー・・・なるほど」

シ　「残念だが、その通りだと思う。よく人物の内面を把握しているな」

近　「さて、これで、今回の１万アクセス突破記念雑談を終わらせたいとおもいます」

は　「これを読んでくださってる皆さん、これからも応援よろしくお願いします！」

フ　「次回からはリリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳの本編に突入します」

な　「私達の活躍にご期待ください！」

ヴ　「それじゃあな」

シ　「本編で会おう」

一同「またね～！」

シャマル　「私の出番は！？同じヴォルケンリッターなのに、なにこの扱い！？」

ザフィーラ「俺はもう諦めている・・・」

オーリス　「・・・・・私の婚期がまた遠のいた・・・・グス・・・」

# 第6話（前書き）

今回よりなのは本編へ突入します。

# 第6話

「うーん・・・」

時空管理局　機動六課の長たる八神はやて二等陸佐は、目の前のモニタを見ながら、まだ少女の面影残る端正な顔を歪め唸っていた。

「どうしたですか?はやてちゃん」

はやての横でお茶を飲んでいる、人形のように小さいはやてのパートナー、
リインフォース・ツヴァイは、難しそうな顔をしてモニタとにらめっこしているはやてに尋ねる。

「いや、さっきメールで辞令の通達がきたんやけどな」

「ふむふむ」

リインの大きく頷く仕草にはやてはフッと微笑み、

「まあ見てみ」

とリインの前にモニタを展開する。

「んー・・・」

リインが顎に指かけて真剣な表情でモニタの字を読んでいく。
途中まで読んだところで、

「えーと、機動六課に一人隊員さんがくるですか？」

「そやね」

と、短く答える。

「で、誰が来るですか？」

すると、はやては苦笑し、

「それがわからへんのよ」

と、困った顔をして言う。

「辞令には、その転入者の名前が書いてないねん」

「なんですかそれ？」

リインは呆れた顔をする。

「書類の不備ですか？うっかりさんですか？お茶目さんですか？」

かわいらしく毒を吐くリインを、はやては笑って答える。

「いや、それはどれもない思うよ。だって差出人がな・・・」

と、モニタの下のほうを指差す。

そこには差出人の名前が書いており、

「あー・・・レジアス中将ですか・・・」

と言いながら、すこしウンザリとした顔をするリイン。

「この人に限って、書類不備なんかせん思うよ」

と真面目な顔ではやては言う。

レジアス中将は他人に厳しく、自分にも厳しいを地でいく人だ。こんな書類不備なんてミス考えられない。

「まして、うっかりとかお茶目とかは・・・なあ？」

と、はやてとリインはレジアス中将の顔を思い浮かべる。

あのゴツゴツしたヒゲモジャのコワモテに、うっかりや、お茶目という言葉が似合うだろうか？

「・・・・」

「・・・・」

「・・・くっ！」

「・・・ぷっ！」

と、はやてとリインは肩を震わせ、声を噛み殺して笑う。

「あかん、レジアス中将があの顔でペロッと舌出して「いやー、うっかりうっかり、テヘッ」なんて言うてんの想像したら・・・ぷーっ！」

ついに耐え切れなくなり、机をバンバン叩いて大声で笑うはやて。

えらい言われようのレジアス中将である。

「はやてちゃん笑いすぎですよー！プププッ！」

そうはやてを諫めるリインも、口を手で押さえて笑っている。

しばらくして、満足したはやては、

「まあ、出向者の名前が書いてへんのはともかく、なんかあからさまやな・・・」

と溜息をつく。

「監視・・・ですよね？」

リインは少し困った顔をしてはやてに聞く。

「せやな。レジアス中将は機動六課の在り方を快く思ってないからね。
常に監視して私等のアラさがして、潰そういうんやろ」

「困ったですね・・・」

はやてとリインは腕を胸の前で組んで、同時にハァと溜息をついた。
そこでリインは、そういえば、と顔をあげ、

「で、その隊員さんはいつ来るですか？」

とはやてに聞いた。

「・・・」

はやては答えない。

難しい顔をして、口がへの字になっている。

「・・・はやてちゃん？」

ハァと、もうひとつ溜息を吐き、

「・・・明日や」

「・・・え？」

「も少し言うたら、今日こっちに挨拶に来るらしい」

「・・・ええー！？」

リインは驚きのあまり飛び上がる。

まあ、普段からふよふよ浮いているが。

「なんですかそれ！？急すぎるです！

辞令出すの遅すぎです！

サプライズすぎます！

やっぱりレジアス中将さんはうっかりさんです！

お茶目さんです！

ドジっ子さんです！！」

両手を振り上げてプンプンと怒るリインを見て、はやては

「リイン・・・言いすぎやそれ・・・」

と、自分のことを棚にあげて、苦笑するのだった。

真新しい隊舎の前で男が一人、荷物を地面に置いて腰に手を置き、隊舎を眺める。

黒い髪を短く刈り上げ、肌は日に焼けて黒い。体つきもガッシリして、
服の下は鍛え上げられた肉体があることが容易に想像できる。

時空管理局の制服を着ているので、局員であることは一目瞭然なのだが、ただ一部分、目をひくパーツがある。

彼の顔の右目部分は黒い眼帯がされていた。

顔立ちは、ハンサムというわけでもなく、かといって不細工でもなく、
お人よしの優しそうな目元をしているのだが、眼帯が全てを台なしにしている。

「機動六課か・・・」

と、誰に聞くでもなく、つぶやくと、

≪（ここが新しい職場ですか?ご主人様）≫

透き通るような美しい女性の声が、念話で男に問い掛ける。

「（ああ）」

男は短く答える。

《（じゃあ、ここに私の妹がいるのね！）》

女の声質に似合わない、子供っぽい喋り方で聞く。

「（そうだな）」

男はやはり短く答える。

《（会いたい！すぐに会いたいの！会いに行くの！）》

女の声は男をまくし立てる。

「（ダメだ）」

男は短くバッサリ切り捨てる。

《（えー！？やだやだ！会いに行く！会いに行くの！会ってお話するの！！）》

抗議の声があがる。

「（今はまだダメだ）」

そう言うとピタリと抗議が止む。

≪（いずれ会わなければならなくなるということですか？ご主人様。）≫

女性の声が急に真剣な声音に変わる。

「（そうだ。まあ、まだまだ先だけどな）」

そう言い、声の主を納得させようとする。

しかし、

≪（やだ！）≫

「（え？）」

≪（やだやだやだ！！私は今会いたいの！もしくは、さっき来る途中で通り過ぎた店の、シュークリームが食べたいの！）≫

「・・・」

自分の欲望に素直な声の主に呆れつつ、

「（わかったよ。八神二等陸佐への挨拶を終わらせたら買いに行こう）」

≪（えー、それじゃあしょうがないのね！シュークリーム２０個で手打ちにしてあげるの！）≫

明るい声の主がヨダレを垂らして、にやけてる顔が容易に想像でき

るので、

「（・・・腹壊しても知らないぞ）」

と、溜息混じりに言うと、

《（デザートは別腹なの！）》

などと宣う。

なんだ？胃が二つあるのか？一度内臓をじっくり研究させてほしいものだと考えつつ、

「（ほら、もう行くぞ。大人しくしてろよ）」

《（了解なの！）》

明るく返事され、フッと軽く笑い、男は隊舎の中に入っていった。

シャリオ・フィニーノ一等陸士は浮かれていた。

それはもう、スキップをして、鼻唄を歌うほどに。

スキップをしているシャーリーを見た他の局員は、憐憫の眼差しをシャーリーに向けていたが、

当のシャーリーはそんなこと気にすることなく、ご機嫌にスキップを続けていた。

（フンフン～♪いいパーツが手に入ったわ！これでみんなのデバイスも、より効率的になるわ！）

デバイスマイスターのシャーリーは、デバイスの稀少パーツを手に入れご機嫌だ。
しかし、この気分が、天国から地獄へ急落するとは、この時予想もしていなかった。

「あの、すいません」

シャーリーは後ろから声かけられ、クルリと勢いよく体ごと振り向いた。
ニコニコと笑顔で、

「はいっ！なんですか？」

と答え、声かけてきた人を見た。
瞬間シャーリーの笑顔が凍りついた。
目の前の人物があまりにも衝撃的だったためだ。
日焼けした黒い顔、ガッシリした大きい体、なにより、片目の眼帯。
シャーリーは混乱した。

（え？え！？なに？なにこの人！？暴力団のひと！？武闘派な人！？やだっ怖い！）

制服を見れば多少誤解も解けるだろうが、シャーリーはパニックになって、制服を見る余裕も無くしている。
人見知りをしないといわれるシャーリーがこれほど混乱するということは、相当インパクトが強かったのだろう。

シャーリーが一人で混乱していると、

「あの、お尋ねしたいんですが」

と男は聞いてきた。
シャーリーは混乱したままで、
背筋をピンと伸ばし、

「ひゃ、ひゃいっ！」

と、変な声を出して答えた。
男はそれを無視し、

「八神二等陸佐はどちらにおいででしょうか？」

と質問した。
シャーリーはその名前を聞いてビクッとした。

（え、なに？八神隊長に用事？まさか、殺し屋！？ヒットマン！？鉄砲玉！？八神隊長の命〈タマ〉を殺りにきたの！？）

シャーリーは極道映画等が好きなのだろうか？
というか、こんなに礼儀正しい殺し屋もいないと思うが。
しかし、シャーリーは落ち着いて受け答えをする。

「八神隊長に、どのようなご用件でしょうか？」

若干声が震えているのはご愛嬌か。

（八神隊長は私が守る！この命にかえても！）

シャーリーは心の中で一代決心をして男に戦いを挑んだ。

しかし、返ってきた言葉は、

「いえ、明日より機動六課へ異動となりましたので、ご挨拶にと思いまして」

「・・・・・・は？」

シャーリーは固まった。

# 第7話（前書き）

皆さんコメントありがとうございます。自分の文才の無さに四苦八苦していますが、よろしくお願いします。

# 第7話

「えっと・・・異動って言いました？」

シャーリーは頬をヒクつかせて聞き返す。

「はい。そうです」

男は当然と言わんばかりに答える。

「明日からウチに来るんですか？」

シャーリーは変な汗をかいている。

「はい。そう言いましたが」

短く答える。

男は、何を言ってるんだ？という顔をしている。

「ちょっ、ちょっと待って下さい！今、隊長に確認をとりますから！」

シャーリーは慌てて八神はやてに確認をとる。

シャーリーの前にウィンドウ画面が展開し、八神はやての顔が映る。

「ん？なんや、シャーリー。なんか報告か？」

と八神はやては、にこやかに微笑み聞く。

「あの・・・実はですね・・・今ですね・・・
明日から異動してくるって言ってる人が・・・ですね・・・八神隊長に挨拶をしたいと言ってましてですね・・・」

シャーリーはしどろもどろに報告する。
背中が大量の汗でぐっしょりしている。

（お願い！嘘だと言って！私こんな怖そうな人と仕事できない！）

シャーリーは目をつむり、心の中で祈る。
しかし、神様は残酷で、

「ん？もう来たんか？了解や。隊長室に通してあげて」

シャーリーは、ガラガラとなにかが崩れていく音を聞いた。

いま、隊長室にははやて、リイン、シャーリーと男の４人がいる。

全員無言だ。

空気が重い。

はやては顔を引き攣らせている。

リインは涙目になって、はやての背中に隠れている。

シャーリーは顔が青く、やつれ、メガネがずれている。

男は直立不動ではやてを見ている。
はやては一瞬、どこの海賊さんですか?と聞きそうになった。
はっきり言って怖い。
どこが?

当然、顔だ。

よく見れば、優しそうな目をした親しみのある顔なのだが、右目の眼帯がそれを認識させない。
全員そんなにじっくり観察する余裕はない。
この空気をなんとかせねばと、はやてが口を開く。

「えー・・・と、どちらさん?」

とりあえず、名前がわからなければ、どうにもならないと、右手の平を上にして手を男に向け、喋っていいよと促す。

「はっ!自分は近藤大輔三等陸尉であります!八神はやて二等陸佐殿!」

ビシッと音が聞こえそうな敬礼をして、大音量で返ってきた。
はやてはビクッと体を硬直させ、リインとシャーリーは「ヒィッ」と悲鳴をあげてはやての背中に隠れる。
はやては後ろから服が引っ張られ、痛い、痛いと呟く。

「あ、あー、声が大きいんは結構やけど、もうちょいボリューム下げよか?それと楽にしてええよ」

後ろの二人もビビっとるしな、と心の中で付け足し、はやては両の手の平を水平にし、上下に動かし、音量を下げさせるジェスチャーをする。

「はっ。申し訳ありません」

音量を下げて謝罪し、休めの姿勢をとる近藤。
その姿を見て、皆だんだん落ち着いてくる。

（なんや、よう見たら優しそうな顔しとるやんか。眼帯で台なしやけど）

（よく聞いたら、優しそうな声してるです。眼帯のインパクトのせいで気がつかなかったです）

（よく見たら、すごく礼儀正しい人だなー。眼帯のせいで最初の印象最悪だけど）

それぞれの感想が、すべて眼帯のせいになっていた。
そして思い出したかのように、はやては近藤に質問する。

「あ、それでやね、えー、近藤さんのことやねんけども」

「はい？自分が何か？」

「ああ、そんな畏まらんでええよ。近藤さんの方が私より年上やろうし」

たしかに、近藤は２６歳ではやては１９歳。
かなり離れている。

しかし、

「いえ、年齢は関係ありません。部下が上官を敬うのは当然のことです」

と、取り付くしまもない。
はやては苦笑し、

「まあ、ええわ。それでやね、レジアス中将からの辞令なんやけど、近藤さんの事一つも書いてないんよ。レジアス中将に限って、書類不備なんてそんなミスするとは思えんし、なんか知ってはるかな、思てね」

近藤は、はやての言葉に少し考えた風の格好をし、

「あの方も人間ですから、うっかりミスかも知れません」

と答えた。
その瞬間、先程はやてとリインが話していた、
舌をペロッと出し、「いやー、うっかりうっかり、テヘッ」
と言っているレジアス中将を思い出し、はやてとリインは腹をおさえてうずくまり、笑いを堪えるのだった。
シャーリーと近藤はそんな二人をみて、首を傾げるしかなかった。

「うん、今のところはこんなところかな?」

と、近藤に異動の手続きをさせ終わり、書類の確認をする。

「じゃあ、正式な異動は明日からやから、今日は宿舎に戻って荷物の片付けとかしといたらええわ」

「了解しました。八神二等陸佐殿」

と言い、近藤は敬礼する。
それを見たはやては溜息をつき、

「堅苦しいなー」

と言いつつ指を眉間に持っていく。
はやての横でリインとシャーリーも頷く。

「あのな、別にタメ口にしろとは言わんから、もっと柔らかくならん？」

「善処します。八神二等陸佐殿」

真面目に返す近藤に対して、はやてはこめかみをピクリと動かし、

「近藤さん、ここは機動六課や。私のことは二等陸佐やのうて、隊長言うてくれる？」

「了解しました。八神隊長」

はやて、リイン、シャーリーの三人は口をへの字にして、近藤を見る。

「うーん・・・なんやろう、なんかバカにされとる気がする」

「リインもそう思うです」

「私も・・・」

そういうはやて達に、近藤は慌てて訂正する。

「いえ、決してそんなことは！」

両手を前で振りながら弁解する姿に、はやてはクスっと笑い、

なんや、かわいいとこあるやんかと思いつつ、

「冗談やよ」

「は・・・そうですか」

ホッと胸を撫で下ろす近藤に三人はそれぞれ笑い、

「じゃあ、他の隊長や隊員への挨拶は明日するということで、今日は解散しよか」

と、はやてが告げる。

「了解しました。それでは、失礼します」

近藤は敬礼をして隊長室を出ていく。

近藤が出ていき、シャーリーも仕事にもどり、隊長室には、はやてとリインしかいない。

「・・・なあ、リイン？」

「なんですか？はやてちゃん」

「・・・ホンマにあの人が監視者なんやろうか？」

首を傾けて呟くはやて。

「考え過ぎだったですかね？」

リインも首を傾ける。

近藤は容姿が目立ち過ぎて、監視とかに全然向いていないと思う。
監視は目立たず、影から覗き人の良いところ、悪いところを報告するのが仕事だ。
はやてはどうも、近藤が影でコソコソしている姿が想像できない。
それに、とはやてはつぶやき、

（なんか近藤さんと話してたら安心するねんな・・・）

と、窓の外を見て思うのだった。

近藤は宿舎に向かうため一人で歩いている。

「（どうだ？第一印象は？）」

と念話で聞く。

《（うーん、なんか頼りない感じかな？）》

と、女の声が返ってくる。

近藤は苦笑し、

「（仕方ないさ。八神隊長はまだ１９歳、経験も浅い。それに、あの融合機も生まれてそう日にちが経っていないみたいだしな）」

《（お子ちゃまなの！）》

元気よく返す女の声に、

「（それはおまえも同じだろ）」

と、にべもなく返す。

それが気に触ったのか、子供扱いされたことに腹が立ったのか、

《（むー！むーむー！ひどい侮辱なの！はつげんのてっかいをよーきゅーするの！）》

プンプンに怒ってる。

両腕をブンブン振り回し、頬を膨らましている姿が容易に想像できたので、

そういうところが子供なんだと、つぶやき、

「（さ、そんなことより、宿舎に行って、荷物整理が終わったら夕食を食べにいくぞ。なにが食べたい？）」

その言葉に先程の怒りも何処へやら、

《（ケーキ！）》

元気ハツラツな声が返ってくる。

「（・・・夕食って言ったよな？）」

近藤は呆れるように聞き返す。

《（パンがなければ、ケーキを食べればいいじゃない！昔の偉い人の有り難い言葉なの！スバラシイ言葉なの！）》

「（・・・肉にするか）」

軽くスルー。

《（肉！お肉！賛成！霜降り！カルビ！マトン！食べ放題なの！）》

・・・マトン？

「（その後で、シュークリームを買いに行くか）」

《（やった！シュークリーム！３０個ね！）》

・・・１０個増えてる。

「（そうと決まれば、さっさと部屋を片付けるぞ）」

《（りょーかいなの！）》

近藤は、元気な声と共に宿舎に向かった。

その夜、

《いたいー、おなかいたいー、胃薬ー》

と女の泣き声が宿舎から聞こえたとか。

# 第8話

翌日の朝、機動六課の隊長と副隊長は、八神隊長の部隊長室に招集されていた。

「どうしたの？はやてちゃん。今日は朝のミーティング無かったよね？」

と、はやてに問いかけるサイドポニーの女性。
柔らかい雰囲気の彼女は
管理局のエースオブエース
機動六課スターズ分隊隊長高町なのは一等空尉である。

「実はな、今日からウチに転入者が来るんや」

はやては、そうなのはに説明する。

「え？今頃転入者？そんな予定あったかな？」

そう言う女性はロングの金髪が美しい、落ち着いた感じの雰囲気の、機動六課ライトニング分隊隊長フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官である。

「いや、急遽地上本部からの異動や」

はやてはそう言い苦笑する。

その言葉に反応したピンク色の髪をポニーテールにした、意思の強そうな女性、

機動六課ライトニング分隊副隊長シグナム二等空尉は、

「レジアス中将ですか？」

と短く言う。
はやては頷き、

「そうや」

短く肯定する。
すると、オレンジ色の髪を二つ、三つ編みにした子供のような容姿の、

機動六課スターズ分隊副隊長ヴィータ三等空尉が、

手を頭の後ろに組み、

「あのオッサンよっぽどウチが嫌いなんだな」

呆れたように言う。
自分のところの忠実なイヌを機動六課に張り付かせ、アラ探しをして機動六課を解散させるつもりなのだろう。
なのはとフェイトは苦笑し、シグナムとヴィータは憮然としている。
はやてはそれぞれの反応に笑いつつも、

「それでや、とりあえず、その人を紹介しとかなあかん思て、みんなを集めたワケや」

そう言うはやての言葉に、四人は頷く。

「じゃあ、これから呼ぶけど、一つだけ言うとくで。気をしっかり持ち」

四人は、人差し指を立てて注意事項を言うはやての言葉に、首を傾げる。

「見た目にビックリするけど、泣いたらダメです！」

とリインが付け足す。

はあ、とそれぞれ気のない返事をしたところで、はやてはモニタを介して近藤を呼び出す。

「あ、近藤さん？うん、もうええよ。こっち来て。隊長達に紹介するから」

なのはとヴィータははやての言った名前にピクッと動いた。

（・・・近藤？）

二人が考えに耽っていると、隊長室のドアが開いた。

四人は近藤を見て固まる。

皆右目の眼帯にくぎ付けだ。

そして、

「本日より！機動六課へ配属となりました！近藤大輔三等陸尉であります！よろしくお願いします！」

ビシッと音が聞こえそうな敬礼をし、大音量の挨拶。

はやてはそれぞれの反応に満足そうな顔をする。

フェイトは「ヒッ」と短く悲鳴をあげ、シグナムの背中に隠れる。

シグナムは、

「ほう、なかなかいい面構えだ。ハキハキした喋りも気持ちいいな」

と、好印象だ。

シグナム、あんた将来男で苦労すんで。

と、思うはやてだった。

なのはとヴィータは顔を真っ青にして震えている。

しかし、それは怖いという感情の震えではないような気がする。

なんだ？と考えていると、

「フェイトさん。情けないですね～♪」

と、リインがニヤニヤしながらフェイトの周りを飛び、からかっている。

シグナムが溜息を吐きつつ、背中に張り付いているフェイトに、

「何をしているんだ」

と、呆れ口調で言う。
そんなフェイトは、

「・・・怖い・・・」

カタカタ震え、涙目で答える。
リインはニヤニヤ顔をさらに強め、

「も～、フェイトさんは弱虫さんですね～♪」

と、からかい続ける。
はやては呆れながらも、

「リイン、あんたも昨日泣いとったやないか」

と言うと、
リインは慌てて自分の口に人差し指を付けて、

「わーっ！はやてちゃん、しー！しー！」

隊長室が賑やかになっていくと、近藤がポツリと、

「あの・・・自分の顔は、そんなに怖いですか・・・？」

と聞き、ショックを受けたように落ち込んでいる近藤の姿が。
どうも、昨日挨拶に来たときは緊張していたようで、周りの反応が

わかっていなかったようである。
はやては慌ててフォローに入る。

「いや、ちゃうねん！顔が怖いんやないねん！ただ・・・その、眼帯が・・・」

はやてのその言葉に、なのはとヴィータはビクッと体を震わせ、青い顔を苦痛に歪める。

「申し訳ありません。これは事故での怪我でして。これをはずすと、その・・・よけいグロいものが・・・」

「わかった！もうええ！それ以上言うたらアカン！言うたら想像してまう・・・」

申し訳なさそうに謝罪する近藤の言葉を遮るように、はやてがストップをかける。
これ以上近藤を喋らせるとイロイロヤバそうな気がした。
はやてはなんとか空気を変えようと、無理矢理話しを変えた。

「そ、それでやね、近藤さんの部隊への配置なんやけど」

そう言ってはやてはチラッとフェイトを見て、

「ライトニング隊の副隊長をしてもらおうかと、思いまして」

言った途端フェイトの顔が絶望の色に染められる。

「・・・！！・・・！！」

声にならず口をパクパク金魚のように開け、首を左右に物凄いスピードで振るフェイト。
しかしはやては正論で押し切ろうとする。

「いや、でも、シグナムは、なんやかんやで結構留守が多いから、穴を埋めるには丁度ええ思うんやけど。
フェイトちゃんの負担も減るやろうし」

「そうだな。私も現状をなんとかしなければと思っていたところだ。幸い、近藤は中々骨のある奴みたいだし、私の代行も任せて良いと思うが？」

シグナムが外堀から固める形ではやてに援護射撃を送る。
というか、シグナムの中では、近藤の評価はうなぎ登りである。
それでもフェイトは抵抗する。

「で、でも、きっとエリオもキャロも怖がるよ！きっと泣くよ！？」

なんとか回避しようと必死である。

「んー、時間をかければ大丈夫やと思うけどなー？」

そんなやりとりを蚊帳の外で見ていた当事者の近藤は、ますます落ち込む。

「（俺・・・泣いていいよな？）」

《（自覚なかったの？）》

そんな言葉のナイフが更に近藤に深い傷を付けていく。

フェイトははやてとシグナムの攻撃に進退極まり、結局近藤がライトニング隊副隊長になるのを了承した。
はやてが手をパンパンと叩き、

「よし！じゃあ、紹介もしたし、分隊の配置も決定したし、これで、今朝の緊急ミーティングを終わろか！」

と、この場を終わらせる。

「じゃあ、みんな、今日もお仕事ガンバってや！
あ、近藤さんは今日は隊舎の中を誰かに案内説明させるから、ロビーで待っててくれるか？」

「了解しました」

そう　言うと、フェイトが肩を落とし、シグナムがそれをなだめながら部屋を出て行く。
しかし、ヴィータとなのはは動こうとしない。

はやてが、まだ何かあるのかと思い、

「どないしたんや？なのはちゃん、ヴィータ。あの子らの朝練あるんやろ？」

そう聞くと、

「なあ、はやて。・・・その・・・近藤・・・三尉の隊舎案内だけどさ、
・・・あたしが案内していいかな？」

少し挙動不審なヴィータが遠慮がちにそう言うので、
はやては怪訝そうな顔で、

「いや、それはべつにええけど・・・どないしたん？」

おもわずそう聞いてしまった。

「い、いや、なんでもないんだ！じゃあ、あたしがこいつ案内するよ！ほら、行くぞ！なのはも来い！」

なにやら慌てた風にヴィータは近藤となのはの手を取り部屋を出て行った。

「・・・なんや？あれ？」

「・・・ヴィータちゃんああいうのがタイプなんですかね？」

びっくりした顔で、おもわずリインの方へ顔を向けるはやて。

「・・・言うたら悪いけど・・・趣味悪いんちゃう？」

「それ、ほんと失礼ですよはやてちゃん。でも言いたいことはわかるです」

あの眼帯がなければなあ・・・

とハモるはやてとリインだった。

# 第9話（前書き）

書いているうちに、ドンドン最初のシナリオから外れていきます。自分の考えの穴の多さと、甘さにビックリしました。もっとシナリオを練ろう。頑張りますのでよろしくお願いします。

# 第9話

今、近藤はヴィータに連れられて隊舎の外を歩いている。
とりあえず、ついて来いと言われたので素直について来ているが、
ヴィータとなのはは隊長室を出てから一言も口を開いていない。

「あの、隊舎の案内では？」

近藤がもっともな質問を投げかける。
隊舎案内と言われてついていったら外にでるのだから、当然の疑問である。
すると近藤の前を歩いていたヴィータは、近藤の方を振り向かずに、

「今から空間シミュレータに行って、フォワード連中におまえを紹介する。案内はそのあとだ」

どうやら、先に部隊の部下への挨拶を済ませようということらしい。
納得した近藤は、

「了解しました。ヴィータ三尉」

と返事を返す。
道を曲がり、ちょうど建物と建物の間に差し掛かったところで、
ヴィータは突然歩みを止めた。
近藤は不思議に思い、

「ヴィータ三尉？」

と尋ねると、

急にヴィータが近藤の方へ振り向き、

「すまなかった！近藤三等陸尉！」

そう言い、頭を下げてきた。

近藤は突然のことでビックリしている。

なのはは、近藤の後ろで今にも泣きそうな顔をしている。

「ど、どうしたんですか、いきなり？」

近藤はただ戸惑うばかりである。

「８年前、お前はなのはを助けてくれたのに、あたし達はお前を救ってやれなかった！
全てあたしのせいだ！気の済むまで、煮るなり焼くなり好きにしてくれ！」

ヴィータがそう言うと、なのはがヴィータに駆け寄り、

「違うよ！ヴィータちゃんのせいじゃない！私が悪かったの！」

と、言葉を区切り、なのはは近藤に向き直り、

「近藤・・・さん・・・」

なのはは震え、言葉も喉から思うように出てこない。

目の前に命の恩人がいる。

自分のせいで人生がメチャクチャになった人がいる。

謝りたい。

隊長室ですぐに謝りたかった。

でも声が出なかった。

震えが止まらなかった。

ごめんなさい。

私のために怪我をさせてごめんなさい。

私のせいで罪を被せられてごめんなさい。

私のために、私のせいで、

「わ・・・たし・・・」

口を開こうとすると、涙が出てくる。

止まらない。

言いたいことがいっぱいあるのに、言葉は出ずに、涙が流れるばかり。

「なのは・・・」

ヴィータはなのはの姿を見るしかない。

なのはは自分で罪を償おうとしている。

自分で、自分から。

ヴィータは知っている。

この8年間、なのはは苦しみ続けていたことに。
フェイトやはやても気づいてはいたが。
あの事件の真相は闇の中、なのはが声高に真相を訴えたところで、皆信じない。
逆に、なのはが近藤をかばっているという認識が周囲に印象付けられ、
なのはの言葉など誰も耳を貸さず、なのはの心からの叫びは誰にも届かなかった。
フェイトやはやても理解しようとした。
しかし、あの事件の資料は真実が全て抹消されており、捏造資料しか残っていない。
二人は、なのはの言うことを全て信じた。
というより、フェイトとはやては、管理局の裏の部分をなのはよりも知っているため、そういう取引があっても不思議ではないと思っていた。
確かに心苦しいことではあるが、現実はどうにもならないということを知っている二人は、なのはを支えるだけしかできなかったのだ。

「わた・・・し・・・は・・・」

なのははもう顔を上げていることもできず、俯く。
地面になのはの涙が斑点を作っていく。

「・・・」

近藤は目を細め、なのはとヴィータを見つめていたが、フーッと一つ息を吐き、

「高町一尉、ヴィータ三尉」

近藤の感情のこもっていない言葉に、なのはとヴィータはビクッと体を震わせる。

「とりあえず、落ち着いて話をしましょう」

そう言いながら、ポケットからハンカチを取り出し、なのはに渡す。

「何か飲み物でも買ってきましょう。えーと、自販機は・・・」

そう言いながら周りをキョロキョロしていると、

「あ、あたしが買ってくる！お前等、ここに居ろよ！」

そう言うや、ヴィータは走っていった。

「じゃあ、こちらでヴィータ三尉を待ちましょうか」

そう言って、なのはに近くのベンチに座るように促す。

なのはは素直にベンチに座り、近藤から渡されたハンカチを握りしめ、俯いている。

時々、なのはから嗚咽や鼻を啜る音が聞こえる。

近藤はなのはの横に座り、なのはの方を向かずにただ前を見て、静かに語りだす。

「高町一尉、今更ですが、自分は8年前の事件の事について、なんら後悔はしていません」

その言葉に、なのはは顔を上げる。

「確かにあのとき、辞令を言い渡されたときは、納得できませんでした」

「あ・・・」

なのはが何か口にしようとするが、しかし、と言葉を遮られた。

「高町一尉は、戦技教導隊で、あの出来事を糧に後輩魔導士の育成を行い、二度とあのような事が起きないように指導しておられるのでしょう？」

そう言い、なのはに向けた顔は、確かに、怒りや悲しみなど感じない、穏やかな表情をしていた。

「はい・・・」

そうなのはは短く答えると、近藤はニコリと笑いかけ、

「過ちを犯すことが罪ではありません。そのあと、ただ後悔し、何もしないことが罪なんですよ」

その言葉が、なのはの心を優しく癒していく。

「高町一尉、あなたはキチンと失敗を糧にして前に進んでいる。それだけで、自分は満足です」

なのはの曇っていた心が晴れていく。

近藤はなのはに左手を出し、この８年を締めくくる。

「自分は高町一尉を許します」

なのはが一番聞きたかった言葉。
なのはは出された近藤の左手を両手でとり、
「う・・・ううっ・・・うあぁぁっ・・・っ！」
いままでの苦悩を全て吐き出すように、
「ごめん・・・なさい・・・ごめんなさい・・・ごめんなさいっ・・・！」
何度もごめんなさいと言いながら泣き続けた。

ヴィータは焦っていた。
全力で走っていた。
なにせ、飲み物を買いに行くと言って１５分は経っているからだ。
（ちくしょー！なんで近くに自販機がねーんだよ！結局隊舎の中まで戻っちまったじゃねーか！）
自分が買いに行くと言った手前、どうしても買わなければならないと、
あちこち探していたら結構な時間が経っていて、急いで戻るハメになったのである。
ヤバい。
何がヤバいのか。
もし、近藤がキレてなのはを殴っていたりしたら、ただ事では済ま

ない。

フェイトあたりに殺される。

本来ならそんなことありえないし、考えもしない。

しかし、しかしだ。

あの外見がその最悪なシナリオを想像させる。

ヴィータはあの隊長室での近藤の紹介の際、近藤の登場にビックリしたが、あの外見にもビックリしていたのだ。

（ありゃその気になれば、素手で熊を殺せるかもしれねぇ）

もちろんそんなこと出来るわけがない。

そんなことを考えていたら、ヴィータはなのはと近藤が座っているベンチに着いた。

「わりい！遅くなっちまった！」

そう言いながらヴィータはなのはと近藤が座っているベンチに近づく。

「あ、ヴィータちゃん。おかえり」

なのはが普通に出迎えてくれる。

「え？」

ヴィータはなのはの顔を見てビックリした。

目元と鼻は先程まで泣いていたせいで赤いが、顔の表情が何か、憑き物でも落ちたかのようにスッキリした顔をしている。

「お、おい、なのは。へ、変なことされなかったか？」

何かとても失礼な物言いをするヴィータになのはは苦笑する。

「ヴィータ三尉、自分を何だとおもってるんですか？」

近藤はジト目でヴィータを見る。

「まだ何もしていません」

「まだってなんだ、まだって。いや、まぁ、その、なんだ、スマン」

素直に謝るヴィータになのはは少し驚きつつ、クスッと笑う。

「ヴィータ三尉、自分は高町一尉の謝罪を受け、和解しました。あなたも、もうあの事件の事は気にしないでください」

そう言う近藤を、ヴィータは目を大きく開き見て、すぐに隣のなのはに顔を向ける。

するとなのはコクンと小さく頷いた。

「そ、そうか、そうか！よかった、よかった！ホントに・・・よかった・・・！」

ヴィータは少し涙ぐんで、一人ウンウン頷いて事の解決に喜んでいる。

「高町一尉の生パンチー一枚で手打ちにしました」

「えっ！？」

「ふぇっ！？」

至極真面目な顔で近藤はとんでもないことを言った。

「ホントか！？なのは！？」

ヴィータは焦った風になのはに聞き返すが、当のなのはは、おもいっきり首を左右に振っている。

「嘘です」

その言葉にヴィータは呆れ顔、なのはは苦笑している。

「おまえな・・・」

「セクハラですよ、それ」

二人が近藤をそう諌めるが、

「はっはっは。自分はこれ以上落ちることもありませんから、平気です」

「うっ！」

グッサーと胸に刺さる近藤の自虐ネタに二人は胸を押さえる。

「さあ、仲直りもしましたし、改めて、よろしくお願いします。高町隊長、ヴィータ副隊長」

差し出された近藤の左手を見て、なのはとヴィータは笑いながらその手を取る。

「よろしくお願いします、近藤副隊長！」

「頼むぜ、近藤副隊長！」

空は晴れ渡り、それぞれの心を表しているようだった。

その頃、空間シミュレータ訓練場では新人フォワード四人がなのは達を待っていた。

「ねーティア、なのはさん遅いねー」

「そうね。てコラ、スバル！座ってないで準備運動でもしときなさいよ！」

「何か急な用事かな？キャロはどう思う？」

「うーん、そういうことがあれば、すぐに連絡入れてくれると思うんだけど、でも私もエリオ君と同じ意見かな？」

なのは達は訓練を忘れていた。

# 第１０話

なのは達は朝練の事を思いだし、急いで訓練場に向かった。
ゴメンゴメン、と言いながらなのはは四人に近寄る。

「みんな、遅くなってごめんね」

なのはは四人に謝るが、四人は聞いていない。
みんな、近藤にくぎ付けだ。

「ああ、紹介するね。こちら、今日付で機動六課に配属された近藤大輔三等陸尉さん」

案の定、フォワード四人は近藤を見るなりそれぞれ驚いていた。
ティアナは顔を青ざめさせ、硬直。

キャロは号泣し、エリオにしがみつき離れない。

スバルとエリオは、

「カッコイイ！」

と言い、目をキラキラしている。エリオなどは、尊敬の眼差しさえ向ける始末。

「えーと、近藤さんはライトニング分隊の副隊長になります」

なのはの言葉に、エリオは歓喜し、キャロは気絶した。

ティアナはホッと安心し、スバルは「いいなー」と指をくわえていた。

「では、近藤副隊長、一言お願いします」

なのはがそう促すと、四人は姿勢を正し聞く姿勢をとる。

「本日付で機動六課ライトニング分隊副隊長に任命されました、近藤大輔三等陸尉です。
いたらない点などもあると思いますが、皆さんよろしくお願いします」

キャロにいきなり号泣された事にショックを受け、挨拶もトーンを下げて言った。

「ティアナ・ランスター二等陸士であります！」

「スバル・ナカジマ二等陸士であります！！」

「エリオ・モンディアル三等陸士であります！！」

「グス・・・キャロ・ル・ルシエ・・・三等・・・陸士・・・です・・・うう・・・」

「・・・こんな顔でスイマセン・・・」

微妙な空気が流れる。

なのはとヴィータもさすがに可哀相に思い、パンパンと手を叩き、

話を切り上げる。

「は、はーい、じ、じゃあ、挨拶も済んだことだし、皆、朝練開始しようか！
近藤さんはこちらで見学していてください」

「よ、よし！おまえら今日もビシバシいくぞ！」

「はい！」

ヴィータの激に四人は元気よく返事をする。
そして、朝練とは思えないハードな訓練が始まった。

近藤は訓練風景を眺めつつメモをとる。
ヴィータは近藤に近付き、

「何してんだ？」

と聞いた。

「四人それぞれの魔力の流れを把握しているんですよ」

訓練風景を観察しながら答える。

「魔力の流れ？」

「ええ、空戦の局員は大体空を飛べるので魔力バランスは問題無いんですが、
陸士隊員はどうも偏りがありまして、それをいまのうちに矯正でき

るようにチェックしているんです」

「？」

ヴィータは近藤の言葉があまり理解出来ていないようで、首を傾げる。

「ああ、つまりですね、空を飛ぶとき、魔力をどこに集めますかということです」

「あ、そういうことか」

空を飛ぶときに、どこに魔力を集めるか？

足？背中？

答えは全身だ。

体全体に魔力を巡らせていないと、空でのバランス、移動などが難しいのである。

いくら足に魔力を集めて空を飛んだとしても、上半身が不安定になり、

バランスを崩すと空中で上下逆に飛ぶとかマヌケな飛行ができあがる。

背中の場合は、どうしても手足が吊られているような感じでブラブラしてしまい、

踏ん張りが効かないうえに、攻撃や防御体制をとるときに力が入らない。

そのため、飛行時は体全体に魔力を巡らせ、空中でのバランス、迅速な移動を行うのである。

この全身魔力帯状にはもうひとつ利点がある。

高速移動の際に術者への空気抵抗を軽減させるのだ。

戦闘行為中に高速移動を行い、空気抵抗がありすぎて目が開けられないとかでは本末転倒である。

空の局員はそれを自然と身につける。自分の命に関わることであるから当然である。

その点、陸は全身魔力帯状はあまり浸透していない。

空を飛ぶ者が少ないので、必要が無いというのが一番大きい理由ではあるが、

どうも陸の局員は一点を究極まで引き上げるとか、長所を徹底的に伸ばすやり方が取られていることが多い。

確かに長所を伸ばすことは悪い事ではない。

しかし、この四人はまだ卵だ。

いまのうちに矯正しておけば、

魔力のバランスが良くなることにより、戦いのバリエーションも増える。

長所を伸ばすのははそれからでも遅くはない。

と、ここでヴィータが疑問に感じた事を聞いた。

「ちょっと待て。魔力の流れを把握してるっつったか？」

「はい」

「おまえ、魔力の流れが見えるのか？」

「はい。ここからでは少し遠いので、大まかにしかわかりませんが」

ヴィータは驚いた。

魔力の流れが見える人間なんて聞いたことない。

それがもし本当なら、相手の攻撃を読むことが容易になり、弱点などもまる見えではないか。

「・・・近藤。それは、おまえのレアスキルなのか？」

こんな反則技、レアスキルしかないとヴィータは結論付けるが、

「いいえ？誰でもできますよ？ただ、少しややこしいので理解するのに時間がかかりますけど」

なんてことを平然と言うものだから、

「ちょっとまて、そんなスキルあたしは聞いたことないぞ」

「じゃあ教えますよ。ヴィータ副隊長ならコツさえ掴めば、すぐ使えますよ。

あ、ここの隊員全員に教えた方がいいかな？」

ヴィータは驚きのあまり、口をポカーンと開けたまま近藤を見つめる。

「・・・おまえ、本当に近藤大輔か？８年前のおまえはただの隊員というイメージしか無かったぞ？」

ヴィータはおもわず疑いの目を向ける。

当然だ。一般的な陸士隊員が久しぶりに会ってみれば、自分の知らないスキルを使えるという。

疑うのも無理はない。

見た目も１８０度変わってるし。

「まあ、時間はたっぷりありましたからね。暇だったんですよ」

「ぐっ！」

カウンター気味に近藤の自虐ネタが飛んできて、ヴィータは大ダメージを受けた。

「それに、自分はそういう魔力循環機能なんかの細々した事を考察、研究するのが好きですから」

「・・・そうか。」

とりあえず、ヴィータはこれ以上聞くと、洒落にならないダメージを受けると判断し、話を打ち切った。

「はーい、整列！じゃあ、今日の朝練はこれで終了！」

いつのまにやら朝練が終わっていた。

ヴィータは近藤とかなり話し込んでいたようで、ヴィータ自身もビックリしていた。

「あ、もう終わったのか？じゃあ近藤、いくぞ」

少し焦ったように近藤に言った。

「了解しました。ヴィータ副隊長」

二人はなのは達の所へ向かった。

「どうでした？近藤さん。四人の動きは？」

なのはは近藤に四人の出来を聞いた。

四人共ボロボロの姿で近藤を見つめる。

近藤は先程書いていたメモを見ながら、

「そうですね、これは全員に言えることなんですが、デバイスに意識が行き過ぎているので、魔力バランスが不安定ですね」

一度言葉を区切り、ひとりひとりの評価へ移る。

「ティアナ・ランスター二等陸士は、まだデバイスに慣れていないのか少し動きがぎこちなかったですが、全体を注意し、冷静に的確な指示を出していたので素晴らしい指揮だったと思いますよ」

ティアナは賛辞を受け、少し照れながら、

「ありがとうございます！」

と敬礼をした。

「スバル・ナカジマ二等陸士は動きが大雑把で、無駄な動きが多いですね。
力に振り回されているという感じがしました。もう少しコンパクトにした方がいいでしょう。
とはいえ、あのパワーと瞬発力は目を見張るものがあります。
これからも研鑽をつめば素晴らしいアタッカーになるでしょうね」

スバルも褒められて満面の笑みで、

「ありがとうございます！！」

勢いよく敬礼をした。

「エリオ・モンディアル三等陸士とキャロ・ル・ルシエ三等陸士は経験値が足りないのか、
判断に迷って行動が遅れる所が何度か見受けられました。
そのあたりは日々の訓練で解消されるでしょう。
しかし、エリオ・モンディアル三等陸士の攻撃力はとてもBランクとは思えないほどの突貫力ですね。
思い切りもいい。
キャロ・ル・ルシエ三等陸士のサポートも中々でした。召喚獣との連携もよかったです。
それと、二人は相性がいいのでしょうね、お互いを助け合うという気持ちが伝わってきました。
その気持ちを忘れずに、これからもお互いを助け合っていけば、素

晴らしいコンビになるでしょう」

エリオとキャロは褒められたことに頬を染め、恥ずかしそうに、

「あ、ありがとうございます！」

と敬礼をした。

キャロも、近藤を見慣れたのか、褒められたからか、いつの間にか怖がることも無くなっていた。

なのはとヴィータは近藤の批評に目を丸くした。

あの短時間で、長所と短所をキチンと見分けていたのだ。

「おまえ、スゴイな・・・」

ヴィータの素直な感想に、なのはは頷くしかなかった。

確かに近藤に話を振ったが、まさか、ここまで深くコメントをくれるとは思っていなかったからだ。

「相手や周囲を観察する、状況を把握する、情報を整理する、それをもとに対策をたてる。

基本ですよ。別に褒められることではありません。経験を積めば誰でもできます」

当然とばかりに返されたので、

「はぁ、そうですか・・・」

皆そう言うしかなかった。

なんか変な空気が流れ、朝練は終了した。

# 第11話

今、近藤とティアナ達四人のフォワード陣は一緒に昼食を摂っている。

「へぇ、君達は一度出動したのか」

パンをちぎりながら近藤はそれぞれに聞く。

「はい。リニアレール襲撃事件の任務を担当しました」

ティアナは丁寧に近藤の質問に答える。

スバルとエリオが大量のパスタを胃袋におさめていくのを見て近藤は、あいつといい勝負だなと心の中でつぶやく。

≪（失礼なこと考えてる！バツとして羊羹買ってきて！てゆーか私のこと放置しすぎ！私そっち方面に興味ないもん！もっとかまってよね！）≫

・・・なんか幻聴が聞こえるが無視無視。
しかしあいつどこからそんな下らん情報入手するんだ？今夜じっくり尋問するか？
それに、ミッドチルダに羊羹なんかないぞ。

「ガジェットドローンが出て来て大変でした。」

事件を思い出したのかキャロは苦笑いして言う。

「アレはＡＭＦがあるからなぁ・・・」

近藤はしみじみ言った。

「近藤副隊長はガジェットと戦ったことあるんですか？」

口の中のパスタを飲み込み、スバルは食い気味に聞いてくる。

「あ、ああ。俺は無人世界とか、観測世界とかの仕事が多かったからな。まぁ、二、三度遭遇したよ」

近藤は若干引きながら言う。

「最初の頃はガジェットが目撃されるのは何故かそういうところが多くてな。
製作者の気まぐれか、はたまた運用試験をしていたのか」

近藤はパンを口に入れながら、まったくバカの考える事はわからん、とつぶやいた。
そのつぶやきは四人には聞こえなかった。

「どうやって倒したんですか？」

エリオが目をキラキラさせて聞いてくる。
エリオは俺がとんでもない武勇伝を持っていると思っているようだ。
だが残念、そんなものカケラもない。

「俺は魔力が少なくてな。自力では無理だから、罠を作って倒したよ」

「罠？」

「そ。殺傷能力のある罠」

「ど、どんな罠ですか？」

今度はティアナが食い気味にきた。

「まぁ、食事中に説明できる罠じゃあないな」

スープにパンを浸しながらサラっと言う言葉に、何を想像したのか一同食事の手が止まった。

「食事中に何物騒な話してんだ、おまえら」

声のした方を向くと、トレイを持った隊長と副隊長達がいた。
ヴィータは呆れた様な顔をしている。

近藤は椅子から立ち上がり、はやてに敬礼をした。
すると、一緒にテーブルを囲んでいた四人も急いで立ち上がり敬礼をする。

その姿にはやてとリインはため息を、なのはとフェイトとヴィータは驚きの顔を、シグナムは「ウム」と頷き微笑む。
はやてはため息をつきながら、楽にしてええよ、と言い皆を座らせる。

「八神隊長達も今から昼食ですか？」

スバルがそう聞くと、

「まぁ、な。仕事がワンサカあるからな。ちょっと遅いお昼。あ、後で近藤さんにも手伝ってもらうよ」

八神隊長はとてもアリガタイお言葉をくれた。

「それでやねんけど、後で部隊長室に来てくれへん？」

「了解しました」

敬礼を行い返事をする近藤に、

「近藤さん。私昨日言うたよな？堅苦しいのヤメテて」

はやてはニッコリ笑いつつ、しかし、はやてから重苦しい重圧が近藤に向けられる。

「・・・はい」

近藤はたじろぐ。声も少し小さい。

「その辺も少し話し合おか、じっくりと、な？んふふふふ・・・」

黒い・・・

はやては笑いつつ、違うテーブルに向かった。

「部隊長ともなるとイロイロあるのだ。察してやってくれ」

近藤の肩にポンと手を置くシグナム。
その目は悲しみを纏っていた。

近藤に部隊長室入ると、そこにははやて、フェイトとシグナムがいた。

「まぁ掛けて」

ソファへの移動を促され、ソファに腰掛ける。
前にはやてとフェイト、横にはシグナムが座る。

フェイトはまだ近藤が怖いのか、若干硬い。

「近藤さん」

はやての声音は真剣さを帯びていた。

「私は腹の探り合いとか嫌いやから、率直に聞く」

はやての真剣な態度に、近藤は改めて姿勢を正す。

「はい。なんでしょうか？」

フェイトとシグナムもはやての言動を見守る。
はやては目をつむり、フーッと息を吐き、そしてゆっくりと目を開け、

「近藤さん、あんたレジアス中将が送り込んだスパイか？」

直球ど真ん中の質問をした。

「はい、そうです」

近藤はそれをフルスイングで打ち返した。

部屋の時間が止まった。

三人共、鳩が豆鉄砲を喰らったような表情をしている。

「ん？何か？」

はやてはソファのひじ掛けに、ヘナヘナと力無くもたれ掛かる。

「・・・こ、近藤さん・・・聞いたコッチが言うのもなんやけど・・・あんた、メチャクチャや・・・」

「そうですか？こんなあからさまな人事異動ですから、隠してもしょうがないと思いまして」

「そらそうやけど・・・」

実際、はやて達は今朝のミーティングでスパイだと皆結論付けていたが、

まさか、こんなに簡単に暴露するとは思ってもみなかった。

「で、でも、そんなこと言ったらスパイ行動に支障をきたすんじゃ・

・・」

フェイトがもっともな返答をすると、

「テスタロッサ、お前どっちの味方だ」

シグナムがツッコミを入れた。

そんなやり取りを無視して、

「自分は機動六課に対し、不利益になるような行動はしません」

近藤は真っ直ぐ言った。

「・・・その言葉をどう信じろと？」

三人は胡乱気に近藤を見る。

すると、近藤は爆弾を投下した。

「実は、レジアス中将の指示とは別に、もうひとつ任務を受けているんです」

そう言いながら近藤は立ち上がり、

「本局へ連絡をとりたいのですが、よろしいですか？」

はやて、フェイト、シグナムの三人は現在の状況に戸惑っている。

なぜなら、近藤が突然本局と連絡を取ると言い出したのだ。
しばらくして、

「繋がりました」

と言ってはやて達三人に見せた画面に映る人物は、意外な人物だった。

「はぁい、フェイトさん！はやてさん！シグナムさん！」

はやて達は画面から目が離せない。

「リ、リンディ統括官！？」

そう、はやて達が小さいときからの、最も信頼できる人物。
フェイトの義母でもある、リンディ総務統括官である。
どうしてここでリンディ統括官が出てくるのだ？
彼女は機動六課設立に際して援助をしてくれたはず。
レジアス中将のスパイ行為を容認するとは考えにくい。

「リ、リンディ母さんが・・・なんで・・・」

フェイトも動揺を隠せないようだ。

「彼女がもうひとつの任務の責任者です」

近藤は平然と爆弾を投下し続ける。

「あら大輔君、もう皆に話すの？」

大輔君？

「リンディさんが直に説明してくれた方が、皆さん納得してくれると思いまして」

リンディさん？

・・・えらく親しそうではないか？

自分達には仰々しい態度を取るくせに。

なんだ？近藤は年増趣味か？

はやては内心おもしろくないと思いつつ、決して表情には出さずに、冷静に説明を求める。

「リンディ統括官。こちらの近藤三等陸尉とは、どういうご関係で？」

多少言葉にトゲがあるのは若さ故だろう。

「大輔君は小さい頃から何かと面倒を見ていたのよ」

ニコニコしながら説明するリンディ統括官。

成る程、それほど長い付き合いならばこの親しさは納得できる。

「それでは、説明をお願いします。もうひとつの任務とやらの概要を」

そう言うシグナムはここに来ても冷静である。

最初こそ意外な人物の登場に驚いていたが、すぐに冷静さを取り戻して情報の収集に努める。
こういう所を見習わなければ、と思うはやてだった。
ちなみに、フェイトは未だにアワアワ言って取り乱している。

本当にこの娘は執務官なのだろうか？

「そうねぇ、一言で言うと大輔君には二重スパイをしてもらってるの」

「二重スパイ？」

「そ。私からの任務を基に、レジアス中将の所に潜入し、彼らの任務に従うフリをして機動六課に異動してもらう、といったところかしらね？」

「何故そんな複雑なやり方を？」

シグナムは、わざわざそんなやり方をとらずに、リンディ統括官の推薦で機動六課へ異動すればよかったのでは？
と考えていた。

はやては白魚のような指を顎にかけ、シグナムの意見とリンディの言った情報を吟味し、推理し始めた。

「恐らくやけど、レジアス中将はホンマにスパイを送ろうとしとったんやと思う。
そこへ、リンディ統括官の息のかかった人物（近藤さん）が、自分が行くと進言でもしたんか、
行かされるように情報操作でもしたんやろ。

リンディ統括官が最初から近藤さんを機動六課に寄越そうとしとったんかどうかはわからんけど、
近藤さんがレジアス中将からのスパイとして機動六課に来ることにより、
ホンマのスパイを来させん上に、リンディ統括官の指示で動ける人間がなんの問題も無く転入できる。
まさに一石二鳥。そんなところやないですか？リンディ統括官？」

はやての推理に、画面越しにニコニコしながら拍手するリンディと、はやての横で目を丸くして拍手する近藤がいた。

「スゴイわね、はやてさん。あれだけの情報でそこまで考察出来るなんて！」

「さすが八神隊長です。概ね推理通りです。素晴らしい！」

リンディからの賛辞に照れるはやてだが、

「いや、なんてことないですよ、こんなもの。・・・
でもなんでやろ・・・近藤さんに褒められるとなんや・・・バカにされとるような気が・・・」

頭をかきながらジト目で近藤を見るはやてに、

「いえ、決してバカになどしていません！」

必死に弁解する近藤。

「大輔君、もしかしていつもそんな固い態度とってるの？」

と言うリンディの言葉に、はやてはすぐに食いついた。

「そうなんですよ！最初なんかこの怖そうな顔と固い口調に驚きすぎて、
リインやフェイトちゃんなんか泣いとったんですよ！それはもう号泣！」

事実に多少の嘘を織り交ぜつつ、近藤の行動を報告する。

「わー！？何言い出すのはやて！？」

フェイトが顔を真っ赤にして取り乱す姿にリンディはクスクス笑い、

「わかりました。大輔君、これからはもう少し態度を柔らかくしなさい。
そんな態度では相手に壁を作っているのと同じよ。何事もお互い歩み寄らなければ、ね」

ウインクするリンディに、はぁ、と気のない返事を返した近藤に対してはやてはにんまりと笑みを向けた。

「とにかく、私の指示した任務はそういうことです。
それから皆さん、近藤大輔三等陸尉は信頼に足る人間です。
必ず皆さんの力になるでしょう。私が保証します」

強い意志の宿る目でリンディは三人にそう言うと、

「だから、ビシバシコキ使ってあげてね！」

ウインクをして、近藤を労働地獄へ叩き込む発言をしたのだった。

## 5万アクセス記念雑談（前書き）

もう、ほんとにありがたいです。
こんなに多くの人に見てもらえるなんて、ただただ感謝です。

# 5万アクセス記念雑談

近藤　「皆さんこんばんは。夜の永久欠番、近藤大輔です。」

なのは　「・・・なに？この入り方？」

シグナム　「この語り・・・どこかで・・・」

近　「皆様のおかげで5万アクセスを突破いたしました。作者もお薬の力を借りずに、おち「紫電一閃！！」げふぅっ！？」

フェイト　「わー！？いきなり何してるのシグナム！？」

ヴィータ　「はやてー！シグナムがご乱心ですよー！？」

はやて　「いや、シグナムの判断は正しい」

な　「な、なんでかな？」

シ　「こいつ、下ネタを口にしようとしたんだ！」

ヴ　「なっ！？下！？」

フ　「最っ低！！」

近　「・・・なぜ・・・わかった・・・？」

は　「私が”グループ魂”を知らんとでも？」

な　「・・・なに?それ?」

シ　「宮藤官九郎と阿部サダヲをメンバーに含むロックバンドだ」

フ　「へー。で、そのグループ魂と近藤さんの発言にどういう繋がりが?」

シ　「さっきの近藤の台詞はグループ魂のアルバムの中の語りの一部だ。
　グループ魂の歌はほとんどがギャグやお笑い、コントが盛り込まれているのだ」

な　「はあ・・・」

は　「で、その半分以上が下ネタや」

ヴ　「・・・はやて、シグナム、ちょっといいか?」

シ　「なんだ?」

ヴ　「近藤の暴挙を未然に防いだのはいいけど、その・・・えっと、なんてグループだっけ?」

は　「グループ魂や」

ヴ　「ああ、それそれ。そのー、一応あたし等ヒロインなんだし、グループ魂を知ってるってまずいんじゃないか?」

シ　「何故だ?」

フ　「歌の内容が半分は下ネタなんだよね？」

は　「うん。しかもけっこうダイレクトなやつやで」

な　「ヒロインが下ネタ歌ってるグループの曲に詳しいというのは、世論や、ファンにとってイメージダウンだよ？」

シ　「しかし、紅白にも出たグループだぞ？」

は　「竹内力とか本田博太郎とか柴咲コウとかとコラボレーションしてるんやで？」

な　「それはすごいと思うけど、紅白とかコラボ関係ないよ。私達のみんなのイメージの問題だよ」

は　「？」

シ　「？」

な　「あーもー、いろいろめんどくさい・・・」

フ　「とにかく、私達をそちらの世界に引き込まないで下さい」

ヴ　「ほんと、ごめんなさい」

――――　はやて、シグナム説得中　――――

近　「えー、前振りはこれくらいにしてですね、改めて5万アクセスあめでとう！！」

は　「おめでとー！イェーイ！！」

な　「おめでとう。」

フ　「お、おめでとう。」

近　「しかし、これもまたビックリ！前回の1万アクセスで5日かかったから、それの5倍で約1ヶ月かかると思ってました！」

は　「これはどうなんや？速いんかな？遅いんかな？」

な　「どうなのかな？他の作者さんのことはわからないなあ？」

フ　「まぁ、これもあくまで目安として考えてたほうがいいんじゃないかな？」

は　「二人ともー！もっとテンションあげなあかんで！」

ヴ　「はやて、無理強いは良くないよ？」

は　「違う！違うでヴィータ！みんな忘れてんちゃう？」

シ　「何がですか？」

は　「私等、19歳やで！キャピキャピして若さアピールせんと！」

な　「・・・人が気にしてることを・・・」

フ　「え、どうしたのなのは？」

シ　「テスタロッサは落ち着いたそのイメージがいい感じに働いて、人気があるからわからんか」

フ　「？」

ヴ　「なのははな、そのイメージがそれほどプラスに働いてないんだ。大人っていうより、おばさんって感じで」

な　「・・・」

フ　「え！？全然そんなことないよ！
なのはは綺麗でお肌もスベスベで私よりできる女性だよ！
こんなにやさしいなのはになんてこと言うの！
ちょっと、そんなこと誰が言ってるの！？バルディッシュ！
行くよ！！」

な　「フェイトちゃん・・・ありがとう」

フ　「なのは・・・」

な　「フェイトちゃん・・・」

は　「はいはいはーい！二人の百合百合タイムは終了です！」

近　「もっと見ていたいですが、今は話を進めましょう」

ヴ「で?今回はなんか来たのか?」

近「皆さんのありがたいお言葉をいただきました。ありがとうございます」

は「ありがとうございます」

な「どんな意見が来たの?」

近「話のペースが遅い。」

シ「それは貴様の腕のせいだ。真摯に受け止めろよ」

フ「とはいえ、急ぎ足でいくと話しに重みがなくなるしね。難しいけどがんばって」

近「はい。肝に銘じます」

フ「他には?」

近「近藤の顔がどれだけ怖いのか、と言う意見が多かったです」

は「それは・・・なあ?」

な「私、別に怖いと思わなかったよ?」

ヴ「ま、なのはは顔を怖がるよりも自責の念で泣いてたからな」

フ「私、怖くて泣いちゃった・・・近藤さん、ごめんなさい」

シ　「まったく、いい面構えではないか。どこを怖がると言うのだ？」

は　「そら眼帯やろ」

な　「私、昔お父さんの仕事の知り合いで眼帯してた人見たことあるけど、近藤さんの眼帯大きいよね？」

は　「なのはちゃんのお父さんの昔の仕事がめっちゃ気になるけど、確かにでかいな」

ヴ　「顔の三分の一は隠れてるな」

シ　「何故、そんなに眼帯が大きいのだ？小さければ印象も変わるだろうに」

フ　「そうだね、これから出てくるチンクも眼帯してるけど、怖くないもんね」

近　「これはですね、右目には眼球の変わりにデバイスコアが埋め込まれておりまして、
　そのコアと顔の細胞の癒着具合があまり宜しくなくて、目の周りの血管等が浮き出た状態なんですよ」

は　「なるほど。それも隠すためにあえて大きい眼帯しとるんか」

な　「ごめんなさい、近藤さん」

近　「本編で謝っていただいているので、もう結構ですよ。それよ

りも俺の顔の怖さのことです」

ヴ　「眼帯で顔の三分の一が隠れてて表情読めないよな」

フ　「髪を短く刈り上げて、肌の色も日焼けして黒いから、なんか厳ついイメージが押し出されるよね」

シ　「ガタイもいいしな。だから余計恐怖のイメージを駆り立てるのだろう」

近　「そうですか・・・」

は　「なんや？いままで言われたこと無いんか？」

ヴ　（おい、なのは来るぞ）

な　（うん、覚悟完了だよ！）

近　「まあ、人と会うなんて、この８年間ほとんどありませんでしたからね」

近藤が自虐ネタを発動！

は　「うっ！」

フ　「はうっ！」

シ　「くっ！」

はやて、フェイト、シグナムの心に大ダメージ！

ヴ　（やっぱりな・・・）

な　（構えててもクるね・・・）

なのは、ヴィータの心に小ダメージ！

近　「リンディさんやレジアス中将は怖がるそぶり見せませんでしたよ？」

リンディ　「結構びっくりしたわよ？」

は　「わぁ！びっくりした！」

フ　「リンディ母さん！？どうしてここに？」

リ　「ほら、私ってこの物語では結構重要なポジションにいるのに出番少ないじゃない？だから来ちゃった」

な　「なんか、さらっと重要なこと言ったよね？リンディさんキーマンなの？」

近　「まぁ、聞き流してください」

リ　「昔は色白で華奢で頼りない感じだったのに、久しぶりにあったら１８０度違うじゃない？そりゃびっくりするわよ」

は　「じゃあ、レジアス中将は？」

ヴ　「似たような顔だろ、あの岩石顔は」

シ「ヴィータ、思っていても口に出して良いことと悪いことがある。
それに無闇に口にすると事故を誘発すると言うことを覚えたほうがいいぞ」

ヴ「？よく意味がわからん」

は「ヴィータ、あとでじっくり教えたる」

――――はやて、ヴィータ教育中――――

は「そや、近藤さん、近藤さん」

近「はい、なんでしょうか？はやて隊長？」

は「あの［女の声］の人、名前決まったん？」

近「一応、候補はあります」

フ「え、なになに？」

近「車のメーカーから考えました」

シ「なるほど、我々の名前は車に由来する者が多いしな」

な「へー、どこかな？ホンダ？トヨタ？」

ヴ「いや、外車かもな。フォルクスワーゲンとかオペルとかな」

シ「オペルだと、我々ヴォルケンリッターの名前が多いな」

近「メルセデスベンツとかレクサスから選ぼうかな、と」

は「車の名前全部数字やないか！」

シ「お前、私達の名前をバカにしてるのか？」

近「冗談です！うそです！ついです！スイマセン！」

フ「で？ホントは何処なの？」

近「キャデラックかニッサン、ダイハツで考えてます」

リ「そう、楽しみね。早く考えてあげてね」

？《そうそう！早く私の名前を本編に公開するがいいの！》

近「それでは、人気のコーナー『近藤の没設定暴露』に行きましょう！」

な「え、人気コーナー？」

フ「そうなの？」

は「私そんなん聞いてないで」

ヴ「ただ喋りたいだけなんじゃないのか？」

シ「まあ、いいではないか。で、今回の没設定はなんだ？」

近「近藤の年齢設定は３３歳でした」

は「またえらい、年いったな」

な「でも、また理由があるんでしょ？」

近「まあ、単純に時系列を逆算したら、少し辻褄が合わないかなと思いまして」

リ「クロノとの年齢も離れるから、過去に無理が出てくるものね」

フ「はあ、そうですか」

ヴ「ん？なんだ？今回はそれで終わりか？」

シ「なんだ、つまらん」

近「もうひとつその年齢に関係する設定がありまして」

は「ほほう？なんや？」

近「カリム・グラシアと同級生でした」

シ　「騎士カリムを３３歳にする気か？」

ヴ　「まさしくオバサンだな」

な　「わっ！わっ！それはダメだよ！？禁句、禁句！！」

フ　「ちょっとそれカリムに滅茶苦茶失礼だよ！！」

は　「確かに、カリムって年齢不詳やけど、流石に３３歳は・・・」

近　「カリムのことを色々調べたんですが、年齢が何処にも書いてないんですよね。なので、やめました」

ヴ　「別に今の年齢で同級生にすればいいんじゃないのか？」

近　「カリムって２６歳じゃないでしょ。年齢不詳だけど」

シ　「おまえ・・・その発言は騎士カリムが限りなく３０歳に近いと言っているものだぞ」

近　「そうですが、何か？」

は　「最低やなあんた・・・」

近　「別にあんな胡散臭い予言で威張ってる女、どうでもいいです」

リ　「なにかカリムとあったの？」

近　「ベツニナニモアリマセンヨ」

近　「それでは、今回はこれまでとさせていただきます」

は　「こんなことができるのも、ひとえに皆さんのおかげです」

な　「これからも精進して、みなさんにもっと面白いと言ってもらえるようにがんばります」

フ　「どうぞ、応援お願いします」

ヴ　「それじゃあ次はまた本編で」

シ　「うむ、私達の雄姿を期待してくれ」

リ　「それではみなさん、」

一同　「またね～！」

シャマル　「ちょっと！いいかげん本編にも出しなさいよ！」

ザフィーラ　「俺も台詞が欲しい・・・」

カリム　「フフフ・・・近藤さん・・・私に対してあのような言動・・・いい度胸してますね・・・
　　いつかお会いしたときが楽しみですね・・・・フフフフフ・・・」

# 第１２話

近藤ははやてに言動の矯正を受け、多少話し方が柔らかくなった。
シグナムは「前のでよかったのに。」と一人ブツブツ言っていたが、
はやては無視した。

はやては近藤の矯正中に、

「ああ、年上の男の人、しかもコワモテをこんなに心置きなく怒れるって・・・癖になりそうや・・・」

などと言い、
恍惚とした表情で近藤を叱る姿に皆黙ってしまった。

近藤ははやてと別れ、フェイトとシグナムと共に隊員オフィスへ向かい、
ライトニング隊でのデスクワークについてあれこれ説明を受けている。

そうこうしているうちに、時刻は１６時に差し掛かろうとしていた。

「それでは近藤、私と副隊長の仕事を振り分けるか」

「わかりました。シグナム副隊長」

・・・あまり変わってない？

「隊長、そちらの仕事もこちらに回すように。いいな？」

「あ、はい」

隊長のフェイトが副隊長のシグナムに指示されている。

「テス・・・フ、フェイト隊長、どうかしましたか？」

ぎこちない近藤の喋りにフェイトは苦笑する。
まだ言いにくいようだが、そこは慣れてもらうしかない。

「い、いえ、何でもありません」

フェイトは慌てて否定し、身を縮こまらせる。

「俺がフェイト隊長の負担を減らしますから、安心して下さい」

なんとも頼もしい台詞を吐く近藤にフェイトは畏まる。

「いい返事だ。では今日はこれだけやってもらおう」

そう言うと、近藤の前の画面はズラーっとファイル名で埋め尽くされた。

「・・・えー・・・」

近藤は少し発言に後悔した。

「（テスタロッサ、あまり先程の話を引きずるなよ）」

「（う、うん。でも・・・）」

「（言いたいことはわかるが、近藤はそんな態度を望んでいないぞ）」

「（・・・うん、そうだね）」

念話でフェイトとシグナムはリンディの言っていた話を思い出していた。

話は少し遡る。

「大輔君、少し彼女達と話がしたいのだけれど、席を外してくれるかしら？」

「わかりました」

近藤はリンディに言われるがままに部屋をでていった。

現在隊長室にははやて、フェイト、シグナムの三人と、モニタに映るリンディのみである。

「さて、先程のスパイのことにも関係する話をしましょう」

「関係する話？」

リンディの言葉に三人は身構える。

「まず、レジアス中将の事なのだけど、彼はこの機動六課のように一つのところに強大な力、特にあなたたちレアスキルが集まることをとても嫌う人なのだけど、いま現在彼は、地上防衛兵器アンヘリアルの生産計画を推進しているわ」

「アンヘリアル？」

「万年人手不足の魔導士のような、個人に左右される平均的ではない魔力より、個人資質に左右されない大量の兵器こそが、地上を守る最も有効な手段である。そのコンセプトに基づいた兵器がアンヘリアルよ。」

確かに、より安定した能力があれば、日々の安全をムラ無く、一定基準で成果を残せるのだからそちらの方が良いだろう。

「確かにレジアス中将は地上の守護者と言われてるわ。でも、結局は兵器。一個人が有する武力の範疇を大きく越えてしまうのよ」

「アンヘリアルとはそれ程のものなのですか？」

シグナムはリンディにアンヘリアルの戦力を聞いてみた。

リンディは人差し指を顎に当て、んー、と考える仕草をとり、

「まぁ、一言で言えば、地上戦艦という言葉が一番合うかしら？」

地上戦艦という言葉に皆絶句する。

「近藤はアンヘリアルについての調査でレジアス中将のもとに？」

「ええ、アンヘリアル生産について裏の調査をね」

「裏、ですか？」

「レジアス中将は黒い噂が多いから、アンヘリアルも時空管理局とは別の組織に悪用される可能性があるから、その辺りを調査してもらってたの」

「では、今回の機動六課への異動はアンヘリアルと関係が？」

近藤がアンヘリアルについての調査を行っていたところで機動六課への異動。

なにか繋がりがあるのかと思うのは当然である。

しかし、機動六課はレジアス中将との繋がりはないし、アンヘリアルなど全く感知していない。

もしかしたら、自分達の知らない所で何かが地下で蠢いているのではないか。

そんな考えがよぎる。

「いいえ、全然関係ないわよ」

あっさりとリンディは否定する。

「はぁ？」

はやて達は訳がわからない。

「これは大輔君が任務を引き受ける前に出してきた条件でね。
もし、自分に機動六課への異動があった場合、レジアス中将の調査は違う人物に替えるように、てね」

はやて達はますますわからなくなる。

「近藤さんは、レジアス中将が機動六課へ人材派遣をすることを知っていたんですか？」

そうとしか思えない。しかも、自分が行くことが決定しているかのようなそぶりさえ感じる。
フェイトがそう考えていると、

「まぁ、遅かれ早かれレジアス中将は人材派遣か査察は行ってたやろうけど、
どうも近藤さんは自分が行くことがわかっとるような動きしてますね？」

フェイトが考えていたことを、はやてが口に出してリンディに聞いた。

すると、リンディは少し表情を曇らせる。

「みんな、８年前の出来事を覚えてるかしら？」

「８年前？」

はやてとシグナムは、何かあったかなと考えていたが、フェイトは8年前という言葉に体を強張らせた。

「なのはがケガをした・・・」

フェイトの言葉に、はやてとシグナムはあっと声をあげた。

「そう、あの事件よ。そしてあの時、なのはさんともうひとり、ケガをした隊員がいたのよ」

「まさか・・・」

「そう、大輔君よ」

はやて達三人は驚いた。

まさかここで8年前の事件が出てくるとは、三人共思ってもいなかったからだ。

「では、あいつが暴走行為を行い、なのはにケガをさせたのですか？」

情報公開された内容を要約すればシグナムの言った言葉で終わる事件である。

そしてシグナムは怒っていた。

大事な仲間を自分勝手な行動でケガをさせたということに。

そして、なにも出来なかったと、なのはを助けられなかったと悩み苦しんだヴィータのために、シグナムは怒る。

「いいえ、違います」

「何が違うというのです？」

リンディの否定にシグナムは怒りをこめて言い返す。

「もしかして・・・隠蔽・・・ですか？」

はやてはなのはの８年前の姿を思い出し、リンディに確認をとるように聞いた。

フェイトとはやては忘れない。

あのときの、なのはの叫びを、

真実は違うと涙して訴えていた姿を、

なのはの絶望をただ見ているしかなかった８年前を。

「なのはさんから聞いたのね？」

はやてとフェイトは頷いた。

「・・・フェイトさんと、はやてさんの予想通りです」

リンディは目をつむり、吐き出すように真実をつげた。

「発表された事件の内容は捏造されたものです。なのはさんの言葉が真実です」

リンディは三人に真実を語った。

どうやらシグナムは知らなかったようで、改めて全てを語った。

三人はそれぞれ怒り、悔しさ、悲しみに顔を歪めている。

「腐っている！」

シグナムは肩を震わせ怒りをこめて吐き捨てる。

「隊員はただのコマやない！人間や！やのに・・・なんで・・・なんでや！！」

はやては悔しさに拳を握り叫ぶ。

「近藤さんはなのはの為に・・・あんなケガを・・・」

近藤の眼帯はなのはを助けたあと、アンノウンとの戦闘で負った傷らしい。

しかも、右腕も無くし、今は義手を着けているという。

よくよく考えれば、近藤は敬礼の時以外はあまり右腕を使っていなかった気がする。

なのはよりも酷い傷を負い、しかも冤罪、近藤の怒りはどれ程のものか想像できない。

フェイトは近藤の顔を見て怖がった事を悔やむ。

なのはの為に負った負傷だ。

感謝こそすれ、恐怖するなどあってはならないことだ。

「この事実は極一部の人間しか知らないのだけど、どこからかレジアス中将が情報を入手したの」

確かに、中将という立場に立てば、いろいろな情報が入ってくるだろう。

「それで、レジアス中将は大輔君がなのはさんに恨みを持っていると思い、スパイをさせるように指示したのよ」

後は嫌がらせも含まれるかしらね？とリンディは呟いた。

確かに、恨みを持っていれば躍起になってアラを捜すだろうが、近藤はそれをしないと言った。

「大輔君はね、あの時のことはもう何とも思っていないのよ」

三人は驚いた。

冤罪され、体の一部を負傷させたのに近藤は恨んでいないという。

「なんでですか？なんで近藤さんはそんな簡単に許すことができたんですか？」

はやては当然の疑問をリンディにぶつけた。

するとリンディは苦笑しながら、

「確かに、最初の頃は納得はしていなかったわね。

でもね、なのはさんが戦技教導隊で、隊員に自分と同じ過ちを犯さないように、しっかりと訓練していると知ると、

それでこそエースオブエースだ！とか言って笑ってたわね」

「・・・」

三人はポカーンと口を開けている。

「大輔君昔からそういうところがあったから、何て言うのかな、大物?天然?」

昔の近藤を思い出しているのか、リンディはクスクスと笑いながら話していた。

「だからね、皆も深く考えないでいいのよ?これまで通りに接してくれれば」

「・・・はぁ」

なんとも曖昧な返事をする三人だった。

「まぁ、そういう事で仲良くしてあげてね!
あ、そうそう、一応大輔君まだ私の部下扱いだから、ちょくちょく借りる事もあるから。そこのところヨロシクね!」

リンディはウインクしながら言うが、

「はぁ・・・」

三人はそう返事するのが精一杯だった。

「フェイト隊長」

「はいっ！」

近藤の急な呼び掛けにビックリして思わず大声をあげるフェイト。

どうやら考え込んでいたようだ。

しかし、近藤はそんなことを気にする風も無く、

「いただいた書類ですが、全て終わりました」

「あ、はい。ご苦労様です」

フェイトはそう言っただけだったが、

「なに？」

シグナムが少し大きい声で反応した。

「ちょっと待て。あの量をこの短時間でか？」

シグナムは信じられないという顔をしている。

「はい、見ますか？」

そう言い、近藤は書類データをシグナムのデスクに転送する。

フェイトはシグナムの机に行き内容を見る。

「・・・信じられん・・・」

「え、こんなに量あったんですか!?え、だってまだ一時間も経ってないですよ!?」

画面には処理された書類が次々と表示されていく。

「しかも、ザッと見たところ特にミスのようなものも無いようだ」

「スゴイですね、近藤さん・・・」

二人は画面に表示され続ける書類に目を通しながら、近藤を褒める。

「本日のデスクワークはこれで終わりですか?」

「あ、は、はい・・・」

フェイトはコクコクと首を頷かせる。

「それじゃあ、フォワード陣のデスクワークを見てきていいですか?」

「あ、どうぞ・・・」

そういうと近藤はフォワード四人の所へ向かった。

「あいつ・・・一体何者だ?」

「・・・さぁ・・・?」

二人は近藤の背中を見ながらそう呟いた。

ヴィータは四人のフォワード陣の報告書の進行具合を見ながら自分の仕事をしていた。

「ヴィータ副隊長？」

声をかけられたので、画面から目を離し、声のした方へ向いた。

「なんだ、近藤か。どうした？」

いきなり目の前に眼帯男がいたのに少し驚いたのは内緒だ。

「いえ、俺は自分の仕事が終わったんで、四人は俺が見ておきますよ」

「そうか！そりゃ助かる！ティアナはデスクワーク優秀なんだが、あとの三人がな・・・」

ヴィータはそう言うと頭をクシャクシャと掻いた。

「わかりました。見ておきます」

そう言うと近藤は四人のいるデスクへと向かった。

慣れないデスクワークのせいか、スバル、エリオ、キャロは画面を

見て首を捻っている。
作業の遅いスバルは、首を捻りつつも少しずつ進めている。
まあ、間違いだらけだが。

「？」

エリオ、キャロなどはもうお手上げ状態だ。
二人して頭の上に？マークが見えている。

「？？」

ティアナは既に自分の報告書を書き終え、見るに見かねてスバルを手伝っている。

「ちょっと待っててね、アンタ達のも見に行ってあげるから」

そう言いながらティアナはスバルを怒りながら報告書を書き上げていく。

「エリオ、キャロ」

デスクワークにウンウン唸りながら、悪戦苦闘していたエリオとキャロは声をかけられ驚いた。

「近藤副隊長！？どうしてここに？」

エリオの声にティアナとスバルは顔を上げ、近藤がいることに驚いていた。

「ん？なに、ティアナを除くフォワード陣が報告書にてこずってい

ると聞いてね。お手伝いにきました」

「いえ、そんな、悪いですよ！」

「自分達の仕事は、自分達でやりますから！」

二人は両手を前で交差させ、近藤の手伝いを拒否する。

「エリオ、キャロ。何事も最初からできる人はいないぞ。
わからないからって誰も怒りはしないよ。むしろ、わからないまま
放っておく事のほうが怒られるのさ。
だから、困ったことや、わからないことがあれば俺や他の隊長達に
聞いてほしい。
俺達はそのために居るんだからな」

そう言いながら近藤は、エリオとキャロの頭を撫でた。

「はい・・・わかりました・・・」

二人は気持ち良さそうに目を細め、少し顔を赤くしている。

「よし、じゃあ一緒に報告書を完成させよう！」

「は、はい！」

元気のいい返事に近藤はニカリ笑い、スバルとティアナは顔を見合
わせてクスッと笑っていた。

そして四人は無事報告書を提出し、近藤が転入した日は無事終了した。

## 第１３話（前書き）

今回から、サウンドステージ０１へと話が移ります。
皆さんまったりと見てください。

# 第１３話

近藤が転入して数日経ち、徐々に打ち解けあった頃の話である。

近藤やなのは達隊長、副隊長は部隊長室で今回の任務の概要を聞いていた。

「派遣任務、ですか？」

「しかも異世界？」

「そや、聖王教会からの依頼でな、私等が行くことになったんよ」

「・・・聖王教会ですか」

近藤はため息をついた。

「ん？なんや、近藤さん。聖王教会になんかあるんか？」

「いえ、別に」

といいつつも、またため息をついた。

「大丈夫ですか？近藤さん？」

リインは心配そうに近藤の回りを飛び回る。

そんな近藤とリインを見て、なのはは苦笑し、

「あんまりため息ついてると、幸せがにげますよ？」

「なのは、なに？それ？」

「あれ、聞いたことない？フェイトちゃん」

「今はそんなことどうでもいい。任務の概要の説明中だぞ」

なのはとフェイトがじゃれだしたので、シグナムが諫める。

そしてヴィータが話を進める。

「ウチはレリック専門なんじゃないの？はやて？」

「そのロストロギアはレリックの可能性もあるらしいから、一概に管轄外とは言えんね」

そう、今回の任務は管理外世界へ出張し、正体不明のロストロギアを保護するという内容だ。

「どこも人手不足で人員を割けんらしいねん。で、そのお鉢が回ってきたっちゅうわけや」

「それで？派遣任務先はどこなのかな？」

フェイトの質問に、はやてはニンマリと口を歪め、

「んふふ～。聞いて驚け諸君！今回の派遣任務先！それは！ダララララララララ・・・」

はやては口でドラムロールをしだした。
リインもはやてと一緒になってドラムロールを言っているが、舌が廻らないのか全然言えていない。

「・・・」

皆の視線が生暖かい。

「ジャーン！第９７管理外世界「地球」日本地区海鳴市でーす！」

「ですぅ！」

両手を挙げて、どうだ！といわんばかりの笑顔である。
なのはとフェイトはビックリした。

「え！？本当に地球の海鳴市なの！？」

「うん、そやで！」

「まさか任務で地球に行くことになるなんて・・・」

「という訳で、現地の民間協力者に連絡をとり、転送ポートの準備をします！」

「了解！」

急になのはとフェイトのテンションがあがりだした。

シグナムとヴィータも顔には出していないが地球に行くと聞いてウ

キウキしていた。

ただ一人、近藤だけが陰鬱とした表情をしていた。

「・・・地球か・・・」

近藤は宿舎に戻り、出張の準備をしていた。

すると、どこからともなく明るい女の声が近藤に語りかける。

《あれ?お出かけですか?ご主人様?》

「ああ、地球に派遣任務だと」

地球という単語を聞いた途端、女の声は声色を変えた。

《・・・大丈夫ですか?ご主人様?》

「ああ」

《あまり御無理をなさらないように》

「ああ、ありがとう」

近藤は出張の準備の手を止めずに女の声に感謝の言葉を口にした。

「あ、そうだ。今回はおまえも連れていくぞ」

《え!?ホント!?やった!お外!久しぶりのお外!

おでかけ！おでかけ！地球へお・で・か・け！今度こそ羊羹ゲットなの！》

・・・先程のやりとりはなんだったのか。

シリアスが台なしだ。

「言っとくが、任務だからな。寄り道なんてしないぞ。だから羊羹も買わん」

その言葉に女の声は抗議の声を上げた。

《ぶ～ぶ～ぶ～！ちょっとくらいの寄り道オッケーなの！ホントご主人様はチキン野郎なの！》

たかが羊羹で、何故ここまで言われなければならないのだろうか？

近藤は頭を抱えつつ、

「わかった。買ってやるから、大人しくしてろよ？あくまでお前は今回、もしものときの保険なんだからな」

《は～い！りょーかいなの！くふふ！羊羹ゲットなの！！》

近藤はため息をついた。

機動六課の前線メンバー達とロングアーチ隊とシャマルは転送ポートへ行くために、ヘリに乗って移動している。

移動中、ティアナ達四人は地球について調べていた。

「第９７管理外世界文化レベルＢ・・・」

キャロはモニタを見ながら呟く。

「魔法文化無し、次元移動手段無し・・・って、魔法文化無いの！？」

ティアナは魔法文化が無いことに驚いている。

「無いよ。うちのお父さんも魔力ゼロだし」

スバルは当然のように答える。
スバルの御先祖は地球人だったらしい。

「スバルさん、お母さん似なんですよね？」

「うん！」

「いや・・・なんでそんな世界から、なのはさんや八神部隊長みたいなオーバーＳランク魔導士が・・・」

「突然変異というか、たまたま・・・な感じかな？」

ティアナは突然の声に振り向くと、そこにははやてがいた。

「へ、あ、すみません！」

「ええよ、別に」

はやてに続き、なのはも話の輪に入ってきて、

「私も、はやて隊長も魔法と出会ったのも偶然だしね」

「な?」

「へ〜」

皆が和気あいあいと話しているのを、近藤は少し離れた椅子でつまらなそうに窓の外を眺めている。

「（まるでピクニックにでも行くようだな）」

≪（皆楽しみなんですよ。隊長達の生まれた世界が）≫

近藤が念話でそんな話をしていると、

「あ、そういえば!」

スバルがなにか思い出したように近藤の方へ振り向いた。

「近藤副隊長?」

「なに?」

「前から聞こうと思ってたんですよ。副隊長のお名前って、ミッドでは珍しいですよね?なんか私の名前に似てる感じで」

一斉に近藤に視線が集まり、おもわず、うっとうめき声をあげてしまう。

「あぁ、言われてみれば」

スバルの疑問にティアナは頷く。

近藤なんて名前のイントネーションはミッドではまず聞かないが、別世界の名前では有り得るのだろうと勝手に自己完結していた。

しかし、ナカジマと近藤、高町、八神・・・言われてみれば似ている気がする。

「あれ?言ってなかったっけ?俺も地球出身だよ?」

近藤はサラっと言った。

「え!?」

「ほんまか!?」

これに驚いたのは、はやてとなのはだ。

「はい。というか、履歴書に書いてるハズですけど・・・」

「あれ・・・書いてたかな?」

はやては近藤の履歴書を見た記憶を、首を捻りながら思い出している。

「もしかして、海鳴市出身?」

いつの間にかフェイトが話の輪に入ってきていた。
すると、近藤は少し困った顔をし、

「いえ、実はわからないんですよ」

「わからない？どういうこと？」

皆の興味津々という視線が近藤に向けられている。
近藤は居心地の悪い思いをしたが、素直に答えることにした。

「俺が地球に居たのは６歳までなんで、記憶が曖昧なんですよ」

「へー、そうなんだー」

スバルとエリオやキャロは納得したようにウンウン頷いていたが、
ティアナが疑問を近藤にぶつけた。

「あれ？ちょっと待ってください。地球って次元移動手段無いんですよね？
６歳のときどうやって地球からミッドに来たんですか？」

なのはとはやては言われてみれば・・・と言い、考え込んでしまった。

「もしかして・・・次元漂流者？」

フェイトが一番妥当な答えを近藤に言うが、近藤は苦笑して否定する。

「いえ、違います」

そう言い、皆の顔を見る。
ため息をひとつ吐き、ゆっくり話し出す。

「俺が6歳の時に両親が次元犯罪者に殺されてね。
俺も死にかけたんだけど、運よく時空管理局の人に保護されてね。
まぁ、それが次元航行艦アースラだったんで、
それからはリンディさんに良くしてもらって、今に至ると言うわけ」

一気に空気が重くなった。
皆がしまったという顔をしている。

「あ、あの、すいません・・・」

ティアナが近藤に謝罪する。

≪（ホント、空気読めないですね、ご主人様）≫

「（え!?俺のせい?）」

≪（皆さん楽しんでいた空気を、ここまでどん底に落とすなんて・・
・KYですよ、KY。
ある意味才能ですか?）≫

「・・・」

ヤバいくらいに皆が肩を落としている。
なんとかせねば、と近藤は行動する。

「う、うっそぴょーん！」

近藤はキャラではない無理したギャグをお披露目した。

「・・・」

空気はかわらない。

ドン滑りである。

はっきり言って、痛々しい。

《（・・・もうやめましょう、私まで辛くなってきました。
ご主人様は頑張りましたよ）》

「（ありがとう・・・その優しさが余計傷付くよ・・・）」

とりあえず近藤は当たり障りのない嘘をつくことにした。

「まぁ、気にしないでください。
６歳の時の記憶なんてあまり覚えてないですし、両親の記憶もあまりありません。
だから、俺自信なんとも思ってないんで」

そう、嘘なのだ。近藤は全て覚えている。
両親の死に様を、犯人の顔を、犯人の持っていたデバイスを・・・

そして近藤はわかっている。
犯人が生きていることを、犯人を捕まえることができないことを・・・

はやては無理矢理元気なフリをして皆に喝を入れる。

「ほらほら！気落ちしてたらあかん！まだ任務は始まったばかりやで！気合いいれていこ！な！！」

「そうだよ！そんなんじゃあ、任務に差し支えるよ！切り替えよう！」

「うん、そうだね」

隊長達三人がそれぞれを励まして若干場の空気は軽くなった。
近藤はなのは達隊長と念話で話をした。

「（すいません、なんか場の空気を壊してしまって・・・）」

「（いいや、悪いんは私らや。無理に近藤さんの過去を聞こうとしたんやから）」

「（うん、そうだよ。近藤さんは悪くないよ。ごめんなさい）」

「（ごめんなさい、近藤さん）」

三人の隊長全員に謝られた近藤は余計焦る。

「（いえ、こちらこそ、空気を読めなくてすいません）」

近藤はヘコヘコと頭を下げている。
その姿が妙におかしくて、

「・・・フフッ」

三人は笑い出すのだった。
そしておもむろに、はやてが話をきりだす。

「近藤さん。ひとつ言わせてくれるか？」

「は、はい、なんですか？」

はやては真面目な顔で近藤を見つめる。

「いくら場の空気を和ませたいからってな、うっそぴょーんはないで」

「・・・はぁ、すいません。精進します・・・」

はやてが真面目な顔して言ったことにギャップがありすぎたことと、近藤が素直に謝ったことがおかしくて、

「・・・ハハッ」

「・・・ぷっ」

「・・・ふふっ」

「・・・クスッ」

全員が笑い出した。

そんな中、近藤は顔を赤くして身を縮こまらせるのだった。

その後、リインが人間の子供サイズになれることに驚いたりしているうちに、
ヘリは転送ポートに着き、機動六課フォワード陣は第９７管理外世界へと向かうのだった。

# 第１４話

現在、地球に出張任務中の機動六課の面々はそれぞれの分隊に分かれ、ロストロギアの探査活動を行っている。

なのは達スターズ分隊は
なのは、ティアナ、スバル、リインの四人で中距離探査を、

フェイト達ライトニング分隊は
フェイト、近藤、エリオ、キャロの四人でサーチャーやセンサーの設置を、

はやてのロングアーチ分隊は空からの広域探査のため、
はやて、シャマルの他にシグナム、ヴィータが加わり四人で行っている

今、近藤達ライトニング分隊はサーチャーとセンサー設置のために海鳴市内を車で移動している。
広範囲に探査を行うための移動手段だが、車は地元の民間協力者から借りている三列シートのミニバンタイプの車だ。
最初、フェイトが運転すると言っていたが、そこは近藤が断固拒否し、近藤が運転をしている。
フェイトは車の運転が好きらしいが、いくらなんでも上司に運転させるわけにもいくまい。

「さてと、あと何箇所ですか？」

近藤は車のナビで現在地を確認しながらルートを把握している。

「えっと、あと3箇所ですね」

フェイトが助手席で設置箇所を確認しながらこたえる。

「それにしても近藤さん、運転上手ですね？」

「はは、運転歴が長いだけですよ」

そんなやり他愛のない取りをしていると、二列目席に座っているエリオとキャロがなにやらモジモジと動いている。

「どうした？エリオ、キャロ、トイレか？」

近藤がルームミラー越しに二人を見る。

「い、いえ！そうじゃないんです！」

エリオが思い切り否定する。

「どうしたの？車に酔ったの？」

フェイトは心配そうに後部席に向く。

「ちがいます、酔ってません！」

キャロが慌てて否定する。

近藤は二人を見て少し考え、

「フェイト隊長、少し休憩しましょうか？」

「あ、そうですね、じゃあ次のサーチャーは設置場所が公園なんで、そこで少し休憩をとりましょう」

フェイトも了承したので、近藤達は次のサーチャー設置場所で休憩をとることにした。

サーチャーとセンサーの設置を完了するとフェイトが相変わらずの優しい笑みで、

「私、飲み物買ってきますね」

と言うので近藤は慌てて止める。

「いや、フェイト隊長、そういう事は俺がしますよ」

「いいから、いいから。運転で疲れてるでしょう？これくらい私がしますよ」

そう言い自販機の所へ走って行った。

エリオとキャロはそんな近藤達のやりとりをボーッと立ったまま眺めている。

近藤は、なんかこんなやりとり前にもあったなーと考えながら、二人へ話しかけた。

「さ、二人とも、ベンチに座って休憩したらどうだ？」

「は、はい・・・」

エリオとキャロはおずおずとベンチに座る。

近藤は仲良く並んで座る二人の姿を見て少し笑い、二人の座っているベンチの前でしゃがみ、
エリオ達と同じ目線に合わせるような態勢をとる。

「さぁ、二人とも、どうしたんだ？悩み事なら聞くぞ？」

突然の近藤の悩み相談にエリオとキャロは慌てる。

「あ、いえ！悩み事なんて、そんな・・・」

「話せない内容なら、無理して聞かないけど、悩みは抱え込むと体にも悪いぞ？」

近藤はこういうとき絶対に、仕事に支障が出るとか、周りに迷惑がかかるとかは言わない。
そういう、仕事や任務、周りの人間や利益、などの単語は余計に心に負担をかけるからだ。
わざとそういう単語を挙げて、たきつけるというのも一つの手だが、
エリオとキャロはまだ１０歳、多感な年頃である。
ナイーブな心には細心の注意とこまめなケアが必要なのだ。
真剣に心配してくれている近藤に、二人はますます恐縮する。

「えっと・・・あの・・・エ、エリオ君？」

「キャロ？・・・うん、わかった」

なにやら二人が顔を見合わせて頷く。

「あ、あの、近藤副隊長」

「ん？」

エリオが切り出し、キャロが続ける。
「気を悪くしたらごめんなさい。
あのですね、さっきの車の中でのフェイトさんと近藤副隊長のやりとりを見ていて思ったんです」

一呼吸置いて、

「フェイトさんと近藤副隊長・・・仲のいい夫婦みたいだなって・・・」

近藤はおもわず目を見開く。

そして笑いが込み上げてくる。

「ククク・・・そうか、夫婦みたいだったか？フェイト隊長みたいな美人さんの旦那とは光栄だ」

エリオとキャロは顔を赤くしてコクンと頷く。

「ハハハッ、じゃあ俺は二人のお父さんだ」

「あ・・・」

「いえ・・・その・・・」

二人はますます顔を赤くしてなにやらゴニョゴニョとつぶやいている。

いままで周りには母親や姉代わりの人はたくさんいたが、父親のよ

うな存在の人がいなかったのだろう。
そこにたまたま同じ部隊で仕事をし、母親でもあるフェイトと親しげに話す大人の男が現れたのだ。
自分達を家族に置き換えて連想し、母親のフェイトの隣にいる大人の男＝父親としたのだろう。
二人とも、過去の家庭環境はかなり特殊だから、そういう家庭というものに憧れがあるのは仕方が無いだろう。
近藤もあまり人に言えた家庭環境ではなかったから、二人の気持ちはよくわかる。

だから、近藤は決心する。

「いいよ。俺が二人の父親になるよ」

そう言うと、エリオとキャロは弾かれたように近藤の顔を見た。
近藤は微笑みながら、二人の頭に手を置き、優しく頭を撫でる。

「二人が俺でいいなら父親になるよ。父さんとか、パパとか言ってもいいぞ？ほれ、言ってみ？」

近藤はカモンカモンとジェスチャーをしながら、ニカッと歯を見せて笑ってみせた。

つられてエリオとキャロも顔を赤くしながらも笑った。
二人の心の中は嬉しさ、恥ずかしさ、いろいろな感情が入り混じっている。
そして、モゴモゴと口を動かし始め、躊躇いながらも徐々に口にする。

言ってみたかった、あの言葉を

「は・・・う、うん、お、お父・・・さん」

「ありがとう・・・お、お父さん・・・・」

「いよっし！」

近藤は二人の言葉に満足して、二人の頭に置いていた手に力をこめて、グシャグシャと強く撫でた。
二人の髪はグシャグシャになったが、満面の笑みだった。

その後、フェイトが飲み物を買ってきて、
しばらくして休憩が終わり皆で車に戻るとき、近藤の両手はそれぞれエリオとキャロの手と繋がっていた。

《（２６歳で１０歳の子供二人の父親ですか。スゴイですね）》

「（それをいうなら、フェイト隊長は１９歳で１０歳の子供二人の母親だぞ？）」

《（ヤンママ？）》

「（またくだらん知識を・・・）」

サーチャーとセンサーの設置を完了した頃に各隊長達が念話で報告を行い、
ライトニングは車でなのは達スターズを拾ってから、現地の民間協

力者から借り受けているコテージへ戻ることになった。
まず、スターズ達を拾うために「翠屋」という店に移動する。
その際に車の運転はフェイトが行った。

「私、翠屋までの道順知ってますから、運転します！」

フェイトは胸の前で拳を作り、真剣な顔で必死に近藤に訴える。

「え、いや、カーナビで検索したら大丈夫ですよ？」

あまりの気迫に、近藤は体を仰け反らせる。

「いいえ！私が運転します！」

ずいっと体を前に押し出してきた。

「は、はい・・・わかりました」

余程運転したかったらしい。
近藤は素直に運転をフェイトに変わり、エリオやキャロと他愛のないの話しをしていた。
運転中フェイトは鼻歌を歌っていた。
そんなフェイトを見て近藤とエリオ、キャロはお互いの顔を見てクスッと笑った。

しばらくして、目的地の喫茶翠屋に着いた。
なんでもこの喫茶店はなのはの実家らしい。
フェイトは車を降りて喫茶店の店員に挨拶をしていた。
近藤は、近くにティアナとスバルが居たので、あれは誰かと聞いてみると、どうやらなのはの父親と母親、そして姉らしい。

「ご両親若すぎるだろ・・・」

近藤はおもわず呟き、ティアナとスバルはウンウンと頷いた。
リンディも大概若作りしているが、なのはのご両親も相当なものだ。
なのはの周りはなにかアンチエイジング効果があるのだろうか？

そして近藤が一番驚いたことは、なのはの家族に挨拶をすると、
なんと誰ひとり近藤の顔に驚いたり怖がったりせず、しかも

「いやぁ、こんなスゴイ人がなのはの側に居るなら安心だ！」

なんて言う始末。
なにがスゴイのかわからないが、ご両親が安心するならまぁいいか、
と近藤は納得することにした。

「すいません近藤さん、すいません」

なのははしきりに近藤に頭を下げていた。

なのはの両親と他愛の無い話をしていると、近藤はあることを思い出した。

「あ、あの、すいません。こちらで羊羹は扱っておられるでしょうか？」

近藤の台詞にフォワード陣はあきれた。

「あの、近藤副隊長・・・ここ喫茶店ですよ？ケーキとかクッキー扱ってるんですよ？いくらなんでも羊羹は・・・」

ティアナがあきれながらも近藤を諫めていると、

「ん？あるよ？」

「あるんかい！」

なのはの父親の発言に、おもわずみんながツッコミをいれた。

《（やた！羊羹ゲットなの！）》

喫茶翠屋の羊羹は大変美味だったそうだ。

近藤達ライトニングは、なのは達スターズと合流して、派遣任務の拠点でもある民間協力者から借りているコテージへと移動した。

ちなみに、翠屋からもフェイトがハンドルを離そうとせず、そのままフェイトの運転でコテージへ向かった。

コテージに着くと、現地の民間協力者であり、なのはやフェイト、はやての友人でもある、

アリサ・バニングスと月村すずかの二人が出迎えてくれた。

二人ともとても美人さんである。

「（なんで機動六課に関わる女性はみんな美女や美少女なんだ？）」

近藤は思ってはいけないことに疑問をもってしまった。

だってかわいくなきゃ興味持つ人いないよ？

≪（類は友を呼ぶ、じゃないんですか？ていうか、いまの法則でいくと、私も美人さんなんだよね！？）≫

期待するように言われて近藤も少々困り顔だが、思ったことを口にする。

「（ん？なんだ、気が付いてなかったのか？おまえはかなりの美人だぞ）」

とりあえず持ち上げておく。
こいつはおだてておくのが一番だ。

≪（や～ん、もう！ご主人様ったら！そんなお世辞言っても羊羹はあげないよ？）≫

「（いや、別にいい。俺が甘いのダメなの知ってて言ってるだろ）」

などと、念話で漫才をしていたら、アリサとすずかが近藤をみて固まった。
この二人は予想通り近藤の顔を見て怖がっていた。

「ふ、ふん！べ、別にアンタなんか怖くないんだからね！」

とアリサは強がっていたが、そういうことは目を見て言って欲しいものだ。
ちょっと震えているのがかわいらしい。

そうこうしていると、一台の車が敷地内へ入ってきた。
すると中からエイミィ、アルフ、そして美由紀が出てきた。

「はぁーい！」

落ち着いたお姉さんというかんじのエイミィ。

「みんなー、お仕事してるかー？」

元気な女の子といった感じのフェイトの使い魔のアルフ。

耳としっぽがとてもラブリーである。

「お姉ちゃんズ参上！」

眼鏡をかけたなのはの姉の美由紀。

三人の登場にフォワード陣は驚く。

「エイミィさん？」

「アルフ！」

「それに・・・美由紀さん！？」

「さっき別れたばっかりなのに？」

美由紀は頭をかきながら、

「いやー、エイミィがなのは達と合流するって言うから、あたしもちょうどシフトの合間だったし」

「そうだったんですか・・・」

「エリオ、キャロ、元気だった？」

エイミィがエリオとキャロに近づき、話しかける。

「はい！」

二人は元気よく返事をする。

「二人とも、ちょっと背伸びたか？」

アルフは手をエリオとキャロの頭の上に持って行く。

アルフの身長もエリオ達とあまり変わらないので自分の身長と比べるように、手を動かしている。

「ははっ、どうだろう？」

「えへ、少し伸びたかも？」

エリオとキャロは恥ずかしそうに自分の頭をさわる。

「ウンウン！」

アルフは嬉しそうに頷き、しっぽをブンブン振っている。

「久しぶりだな、エイミィ」

エイミィは声をかけた人物を見て驚いた。

「あなた・・・まさか、大輔・・・君？」

目の前の姿に驚きつつも、エイミィは久しぶりの再会に喜ぶ。

「何年ぶりかな?」

「そうだな、義父さんが死んでからだから、１０年ぶりくらいかな?」

「そうかぁ、１０年かぁ。誰か全然わからなかったよ」

「言うな。気にしてるんだ」

エリオとキャロは、近藤とエイミィが知り合いだということに驚いた。

「え!近藤副隊長、エイミィさんと知り合い何ですか!?」

「ん?ああ」

「スゴイです!」

キャロの目がキラキラしてきた。

何故だろう?恥ずかしくなってきた。

「なにがスゴイのかはわからんけど、俺の養父がエイミィの仕事の先生だったんだ。

だから、自然と顔を会わせることも多くてな」

「へ～、そうだったんですか・・・」

二人は俺の説明に頷りに首を縦に振る。
アルフは、そんなエリオとキャロが話している男が気になり、近藤の正面に移動した。

「アンタも機動六課の隊員なの・・・て、うわ！なんだその眼帯！？」

アルフはおもいっきり驚いた。

ああ、また俺の心に消えない傷が増えるのか・・・と、近藤は考えていたが、アルフは全く違う反応をした。

「かっけー！アンタ、その眼帯超イカスよ！！うっわー、すっげー！ちょーかっけー！！」

・・・なんかすごい褒められた。

「だよね！？近藤副隊長の眼帯かっこいいよね！？」

・・・エリオも賛同しだした。
エリオとアルフがすごくキラキラした目で近藤を褒めたたえる。

やめて、逆にいたたまれなくなるから。

ホント勘弁してください。

それを横で見ていたキャロとエイミィは苦笑していた。

コテージの外にテーブルや、バーベキューセットを出し、その中の鉄板の前で、はやては料理をしていた。

「八神部隊長!?」

「部隊長自ら鉄板焼きを!?」

「そんなの、私たちがやります!」

フォワード陣はおもいっきり焦った。
食事の用意を部隊長自ら行っているのだ。
本来、そのような雑事は部下の仕事である。

「ん?あぁ、でもな、待ち時間あったし、お料理は元々趣味なんよ?」

確かに、すごく慣れた手つきで料理をしている。
はやての板についた料理姿を見て、

(こういう姿を見ると、良いお嫁さんになるだろうなー)

などと考えてしまう近藤だった。

「はやて隊長の料理はギガウマだぞ!ありがたくいただけ」

はやては子供時代に一人で暮らしていたから料理は得意なのだろう。
皆ヴィータのギガという死語にも反応せずに、はやての料理捌きに見惚れる。

「はい！」

家庭的な一面を見ることができて、みんなのはやてに対する評価はうなぎ上りだ。

「シャマル。お前は手を出していないだろうな？」

シグナムははやての隣にいるシャマルに確認をとった。

「あー！シグナムひどーい！」

シャマルはシグナムに必死の抗議をする。

「ちょっと手伝ってくれたよな？材料切りとか」

はやてはさりげなくフォローを入れるが、実はこの言葉はある意味、シャマルには下ごしらえ以外させませんと言っているようなものなのだ。

しかし、シャマルは主であるはやてのそんな裏のあるフォローに気づくことも無く、

「はい！」

なんとも元気な返事を返す。

「まぁ・・・切るだけなら・・・」

「大丈夫だな」

ヴィータとシグナムも材料切りのみということと、主はやての事前

の防衛策に安心する。

「シャマル先生・・・もしかして・・・」

スバルは信じられないという顔でシャマルを見る。
普段の行動から、シャマルは家事全般は完璧にこなせる頼れるお姉さんだと思っていたからだ。

「違うもん！シャマル先生、お料理下手なんかじゃないもん！」

シャマルはそんなスバルの視線に耐えかねて、必死に抗議、否定を繰り返す。
そんな抗議をはやて達、シャマルの料理の腕を知っている面々は呆れたような顔をしていた。

「・・・あー・・・」

ティアナもスバルと同じイメージを持っていたのか、落胆の声をあげる。
そんな雰囲気のなかを近藤が声をあげる。

「フォワード陣集合！！」

いきなりの召集命令にビックリしつつ、フォワード四人は近藤のところに集まる。
近藤はまじめな顔でとんでもないことを言い出した。

「諸君、シャマル先生の料理が下手という汚名を俺達で返上してあげようじゃあないか！」

突然の提案にフォワード陣ではなく、隊長達がビックリする。

「お、おい、近藤、いきなり何を言い出すんだ？バカな真似はよせ！」

シグナムがうろたえている。

シャマルの料理を食べた後の惨劇が脳裏に浮かんだのだろう。

近藤の暴挙を食い止めようと必死である。

「死ぬぞ！？死んじまうぞ！？」

ヴィータでさえも近藤を止めに入る。

過去の悪夢が蘇ったのか、顔が青い。

しかし、近藤はそんな忠告に聞く耳を持たない。

「何を言っているんですか！同僚の汚名を払拭してあげるのが仲間！家族でしょう！」

「う！？そ、それは・・・」

力説する方向がおかしい。

だいたい、ここで仲間とか、家族とかの単語が出てくるのがおかしい。

どう見てもこの状況を楽しんでいるとしか思えない。

シグナムたちも近藤の勢いに騙されて感づいていない。

「シャマル先生」

「は、はい！」

急に呼ばれたシャマルは現在の状況が整理しきれていない。
なにやらオロオロするばかりである。

「みんなをシャマル先生の料理でギャフンといわせましょう！」

「え！？あ、はい！？」

近藤のガッツポーズにつられてシャマルもワケがわからないままガッツポーズをとる。

「というワケで、シャマル先生は一人前の料理を用意してください」

「え？一人前ですか？わ、わかりました！」

シャマルは意気揚々と鉄板へと向かい、料理を作り始めた。

「さて、フォワード諸君」

重苦しい空気が場を支配し、近藤はゆっくりと喋りだす。

「ジャンケンだ」

「・・・え？」

「ジャンケンで負けた一人がシャマル先生の料理を食べよう。
もちろん、おいしそうに、完食することが絶対条件だ」

近藤はフォワード四人に死刑宣告をする。
みんな顔が真っ青だ。

「心配するな。負けなければいいんだ」

近藤はにっこり笑うが、目は笑っていない。
近藤の雰囲気になのはやフェイトは口出しできない。
ヴィータとシグナムは「・・・仲間のため・・・くっ！スマン、がんばってくれ！！」とか言って悩んでいる。
はやては、おもしろそうだからと止めない。

そして、近藤、ティアナ、スバル、エリオ、キャロの五人による、命がけのジャンケンが管理外世界で繰広げられた。

「じゃーんけん、ポン！」

シャマルの料理がテーブルに置かれている。

その前には、近藤がいた。

近藤はダラダラと汗を流している。

「ま、言いだしっぺが負ける、ベタやな」

はやてはニヤニヤ笑い、近藤を見ている。

「近藤、これも仲間のためだ。犠牲になってくれ」

シグナムは拝むようにいう。

「骨は拾ってやる。だから、心置きなく逝け」

シャマルの料理は体が溶けるのか？

ヴィータは物騒なことを言った。

「近藤さん・・・」

「自業自得です」

なのはとフェイトは呆れた顔をしている。

未遂とはいえ、自分の部下を危険に晒したのだ。

二人とも少し怒っている。

「副隊長・・・」

フォワード四人は心配そうに近藤を見る。

特にエリオとキャロは今にも泣きそうだ。

「大丈夫だ！これしきのことでは俺は死なん！」

シャマルの料理がイコール死になっているがもう誰も突っ込まない。

近藤の笑いも引きつっている。

「さぁ！召し上がれ！」

満面の笑みで、自分の自信作を勧めるシャマル。
近藤にはその笑顔が悪魔のように見えた。

シャマルが作った料理は焼きそばだ。
見た目は普通。匂いも普通。後は味のみ・・・
汗が頬をつたう。
近藤は息を飲み込む。
ゴクリと喉がなる。

「・・・っ！っしゃー！！」

気合をいれて焼きそばを口に運ぶ近藤。
その姿は勇者のようだったと、後にシグナムは語る。

直後、近藤は気絶した。

「シャマル先生、悪くないもん！！」

そんな叫び声が湖畔のコテージに響いた。

# 第１５話

「ごちそうさまー！」

機動六課メンバーと友人、親族は親睦を深めつつ食事を済ませた。
ちなみに近藤は、シャマルの料理を食べ気絶した後すぐに目覚め、皆と一緒に食事をとっていた。
料理はスバルとエリオが竜巻のようにその胃袋へと収めていき、それを見たキャロとティアナが危機感を持ち、食べるペースをあげ、気が付けば料理はほとんどフォワード４人の胃袋へと吸収されたのだった。
もちろん、はやて達隊長陣はそれらのことを想定済みだったようで、後で軽食を別に作っていた。
はやては皆が落ち着いたのを見計らって、次の行動を提案する。

「さて、サーチャーの様子を監視しつつ、お風呂済ませとこか？」

「はい！」

皆待ってましたとばかりに返事をする。
汗をかいて若干気持ち悪かったのか、女性陣の返事が特にいい。

「まあ、監視といっても、デバイスを身に付けてれば、そのまま反応確認できるし」

「最近はホントに便利だね～。」

なのははしみじみと言う。
言い方がなんだか所帯じみているというか、オバサンくさい。

「技術の進歩です！」

自身がデバイスであるリインはエヘンと胸を張って言う。

「ああ・・・ただ、ココお風呂無いし、湖で水浴びって季節でもないし・・・」

拠点の提供主であるコテージオーナーのアリサは申し訳なさそうに言う。

「そうすると・・・やっぱり・・・」

そこですずかがある提案を出す。

「あそこですかね？」

「あそこでしょう！」

エイミィと美由紀が顔を見合わせてニヤリと笑う。

なのはは皆が何を言わんとしているかを理解し、皆に命令を出す。

「それでは、六課一同、着替えを用意して出発準備！」

フェイトもわかったのか、なのはの言葉に続いて説明する。

「これより、市内のスーパー銭湯へ向かいます」

スバルは頭に？マークを浮かべ、

「スーパー？」

ティアナもフェイトから出た単語に戸惑い、スバルに続く。

「銭湯？」

海鳴市内にある
「海鳴スパラクーアツー」の店員が来店してきた客に元気よく挨拶をする。

「はーい、いらっしゃいませー！海鳴スパラクーアツーへようこそ・・・団体様ですか？」

大人数で入店してきたはやて達に一瞬驚きつつ、店員は来店客に接客をする。
はやては人数を店員に告げようと、指で頭数を数える。

「えーと・・・大人１３人と・・・」

フェイトが自分の隣にいるエリオ達を見て、はやてに続けて店員に人数を言う。

「子供４人です」

ティアナは確認のために子供のメンツの顔を見ていく。

「エリオと、キャロと・・・」

「私と、アルフです！」

リインがティアナに続けて手を挙げて自分達をアピールする。

「うん！」

アルフは嬉しそうに返事をする。
しっぽをブンブン振って、獣耳がピクピク動いているが一目に晒していいのだろうか？

スバルはヴィータの方を向き、

「えっと、ヴィータ副隊長は？」

と、確認を取ると、ヴィータは不機嫌そうにスバルを睨みつけ、

「あたしは大人だ！」

言ったあとぷいとソッポを向き、はやてがヴィータの頭を撫でた。
店員は若い団体のパワーに若干圧倒されつつも自分の仕事を遂行するためにはやて達団体客を案内する。

「あ・・・はい！では、こちらへどうぞー！」

はやてはレジへ向かい財布を取り出す。

「お会計しとくから、さき行っててな」

「はーい！」

一同は声を揃えて返事をする。
まるで引率者と生徒のようである。

エリオと近藤は店の中へ進んで、
「男」
「女」と分かれて吊されている暖簾を確認し、

「・・・ホッ。よかった、ちゃんと男女別だ」

と、エリオは心底安心した。

「こういう公共の場所は当然だと思うけど・・・あぁ、そういえばエリオは寮内の風呂も女性用に入ってるんだっけ？」

近藤は常識として混浴という考えを持っていなかったが、エリオの現状の生活環境を思い出して納得した。

「は、はい。僕はまだ子供だからって、キャロと二人で女子寮で生活してますから・・・」

エリオは困ったような顔をして、寮内の生活を思い出したのか顔を赤くする。

「うらやましいな。俺もソッチに行きたいよ」

「い、いや、結構気を使うんですよ！？着替えとか、お風呂とか、あと・・・その・・・目のやりばとか・・・」

近藤の冷やかしにエリオは必死に抗議し、女子寮内の実態を暴露していく。
彼女等は寮内では割とラフな格好をしているそうだ。
それこそ下着姿でうろつく人もいるらしい。
主にスバルとかティアナとか。
エリオが男として認識されていないからこそできる格好だろうが、
１０歳の少年には些か刺激が強いらしい。
そんな男としての苦労を話しているとキャロが笑顔でエリオに話しかけてきた。

「広いお風呂だって。楽しみだね、エリオ君！」

エリオはキャロの嬉しそうな顔を見て少し笑い、自分も楽しもうと思った。

「あ・・・うん、そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」

キャロはエリオの言葉に顔を曇らせる。

「え・・・エリオ君は？」

エリオはキャロの悲しそうな表情に躊躇いつつも、防衛ラインを展開する。

「ぼ、僕は・・・ほら一応、男の子だし」

キャロはエリオの言葉に少し考え込み、入浴する際の注意書きに目を向け、書いてあることに笑顔を見せ、それを指差す。

「んー・・・でも、ほら、あれ！」

エリオはその指差す方の注意書きに目をやる。

「注意書き?えっと・・・女湯への男児入浴は１１歳以下のお子様のみでお願いします」

キャロはその注意書きを読んだエリオに笑いかけ、
エリオの防衛ラインを崩していく。

「フフッ、エリオ君１０歳!」

キャロに指差され、エリオは慌て逃げ場を探す。

「え!?あ・・・」

何か、何か言って断らないと!そんな事を必死に考えているとキャロに援護射撃をしてくる人が現れた。
母親代わりのフェイトである。

「うん、せっかくだし、一緒に入ろうよ」

キャロはフェイトの援護射撃に喜ぶ。

「フェイトさん!」

エリオはまさかフェイトがキャロに援護射撃をするとは思ってもみなかった。
いくら子供とはいえ、エリオは１０歳の男の子。
フェイト達１９歳の思考では、もうそんな歳の男と一緒に風呂入るという選択肢が無いと思っていたからだ。

「い・・・あ・・・い、いや、あ、あのですね・・・それはやっぱり、スバルさんとか、隊長達とかアリサさん達もいますし！」

エリオは必死にＮＯと言う。あまりキツく言えないので、断っているように聞こえないが。

「別に私は構わないけど？」

えらくアッサリと言うティアナは、エリオに見られても何とも思わないようだ。

「てゆーか、前から、頭洗ってあげようかとか言ってるじゃない」

スバルもエリオを男として見ていないようだ。

いや、スバルの場合、バリアジャケットの露出具合を考えると、男の目を気にしないようにも思える。

「う・・・」

エリオは段々逃げ場が無くなっていく焦りから、口数が少なくなってきた。

「私等もいいわよ。ね？」

「うん」

「いいんじゃない？仲良く入れば？」

アリサ、すずか、なのはと、次々とエリオ女湯入浴許可がおりてく

る。
そしてフェイトは、
「男が言ってほしい言葉」を甘えた風な声を出し、とどめをさした。

「そうだよ。エリオと一緒にお風呂は久しぶりだし・・・入りたいなぁ・・・」

エリオは固まった。

「あ・・・あの・・・お気持ちは、非常に・・・なんですが、スミマセン！遠慮させていただきます！」

いままで面白いそうだからと黙っていた近藤だったが、流石にエリオがかわいそうになり、助け舟を出してやることにした。

「まあまあ、フェイト隊長、エリオもこう言っていることですし、せっかくですから、俺もエリオと男同士の語らいをしたいですからココは男女別に入りましょう」

近藤の助け舟にエリオはものすごく喜んだ。
それはもう死地への援軍のように。

「え～・・・」

フェイトとキャロは不満そうな声をあげる。
だが、男心をわかっていない二人にはこれを機に、もう少しエリオを男として扱ってもらえることを願う。
エリオは嬉しそうな顔で近藤と手を繋ぎ、
じゃあ行くか？との近藤の声に、ハイッと元気よく返事をした。

「多分俺達の方が先に上がると思うんで、この辺で待ってますんで。それじゃあ、失礼します」

近藤はそう言うとエリオも、失礼しますと言い、男湯へ入っていった。

「・・・行っちゃった。」

フェイトはまだ不満そうである。
そんなフェイトを見て、他のメンバーは苦笑している。

「人数分、ロッカー確保できたわよー。入りましょ」

シャマルが一同にそう言うと、

「ハーイ」

声を揃えて返事をし、ゾロゾロと女湯へと入っていった。
しかし、ただ一人、

「・・・えーっと・・・」

キャロは先程の注意書きを見ながら、何かを企んでいた。

近藤とエリオは脱衣所で並んで服を脱いでいる。
エリオは近藤の筋骨隆々の体を見て、ほーと驚きの声をあげる。
無駄な脂肪の無い盛り上がった近藤の筋肉を見て、自分の体と見比

べてみる。

「スゴイですね近藤副隊長。やっぱり僕って貧弱かな？」

自分の腕で力こぶをつくって見せて、近藤の太い腕と比べる。

そんなエリオを見て近藤は笑い、

「エリオはまだ成長途中だろ。これからジックリと出来上がっていくさ。

今からこんな筋肉付けてみろ、骨が筋肉に圧迫されて身長が伸びないぞ？」

なんとも嘘くさいことをエリオに真顔で言うものだから、エリオは焦りだし、嘘だよ、たぶん、とエリオに言いながら浴場へ入っていった。

周りの視線が近藤に集まる。鍛え上げられた体や、顔に目がいく人もいたが、一番目を引いたのは左肩から右胸にかけての一筋の線、切り傷だった。

エリオもそのあまりにも大きく深い傷に思わず目が行ってしまう。

近藤はエリオの視線に気が付き、

「ああ、コレか？今朝言った6歳のときの犯人にやられた傷だよ」

近藤は6歳のとき、魔法文化の無いこの世界で次元犯罪者に両親を殺され、自身も殺されかけたと言っていた。

胸の傷はその時の傷だったのだ。

エリオは聞いてはいけないことを聞いてしまったと思い、急いで謝った。

近藤は気にした風もなく軽く流し、とりあえず風呂に入ろうとエリ

オに言い、一番近い風呂を指差し浸かった。

しばらく湯舟に浸かったところで体を洗うことにした二人は、並んで洗い場へ座る。

「エリオ、背中洗ってよ。それと、今は副隊長って言わなくていいぞ」

そう言って近藤はエリオに背中を向ける。

エリオは嬉しそうな顔をして、

「は・・・う、うん、・・・お、お父さん」

エリオは恥ずかしそうに言いながらも、タオルにボディソープをのせて近藤の背中を洗いだす。

エリオは初めて見る大人の男の人の広い背中を一生懸命洗う。

「すごく、背中が大きい・・・ホントにお父さんみたい・・・」

その呟きはゴシゴシという背中を洗う音で近藤には聞こえなかった。

しばらく洗っていると、

「よし、交代！」

そう言って近藤はエリオに振り向きつつ、エリオの体をグルンと回転させた。

「え！？あ、そ、そんな、悪いですよ！」

エリオは背中越しに恐縮するが、近藤はそんなことに聞く耳を持た

ない。

「なんだ？息子が父親の背中を洗ってくれたんだ。だからお返しに父親である俺が息子のエリオの背中を洗ってやる。洗いっこだよ」

そう言いながら、近藤はエリオの小さい背中を洗いはじめる。少し力が強いのか、痛い痛いと言っていたが、男ならこれくらいの強さで洗うんだ、我慢しろ。などと言われてしまい、エリオは痛みに耐えながらも、どこか嬉しそうだった。

そんなとき、

「エリオくーん！」

なにやら、男湯には似つかわしくない可愛らしい声が聞こえた。声のした方を向くと、そこにはバスタオルで体を隠したキャロが立っていた。

「キ、キャロ！？どうしてココに！？ココ男湯だよ！？」

エリオは焦っている。

近藤もビックリした。

男湯に女の子がひとりいるのだ。しかも自分の知り合い。

焦らない方がおかしい。

「えへへ、１１歳未満なら、女の人も男湯に入っていいんだって！だから、来ちゃった」

確かに、キャロはエリオと同じ１０歳だが、この子には羞恥心というものがないのだろうか？

いや、いままでが女の人ばかりの環境でいたから、男の恐さを知らないのだろう。

「あれ？エリオ君、背中洗ってもらってたの？」

キャロは近藤がエリオの背中を洗っていたのを見て、いいなーと言い出した。

「私も洗いっこしたいなー」

キャロは指をくわえて近藤達を見る。
近藤はそんなキャロを見てクスリと笑い、

「じゃあ、三人で洗いっこするか！」

そう言うと、キャロ、近藤、エリオの順に並び、背中の流し合いをしたのだった。

その後、エリオとキャロは子供風呂へ行き、二人で風呂に入っているところをフェイトとアルフが乱入、そのままエリオは女湯へと連行された。

「（お父さん助けてー！）」

そんな念話が聞こえたが、

「（今のうちに、子供にしかできないことをやっとけ。あ、後で見たもの全部報告するように）」

近藤はエリオに勉強してこいと、送り出すのだった。

その後、エリオは湯あたりしたのかと思うほど顔を真っ赤にし、近藤に女湯での出来事を全て報告した。
近藤はご褒美ひフルーツ牛乳をエリオに買ってあげた。

「ほな、帰ろうか」

風呂から全員上がりはやての一声でコテージへ帰ろうとしたとき、

キィーン・・・

皆が持っているデバイスが反応した。

ロストロギア反応である。

# 第16話

スターズ、ライトニングの面々はそれぞれのバリアジャケットに身を包み、戦闘態勢をとる。
シャマルはロストロギア反応のあった河川敷付近に結界を張った。
フォワード四人はロストロギアのいる河川敷へ向かっている。

そんな中で、フェイトが近藤を見て言った。

「あれ？近藤さん、バリアジャケットは？」

そう、近藤は見た目が全く変わっておらず、私服姿のままだったのだ。

「おい、近藤、早くバリアジャケットを展開しろ」

ヴィータも近藤に注意する。
しかし、近藤の口から意外な答えが返ってきた。

「え？もう展開してますよ？」

近藤の言葉に皆驚く。

「え？見た目変わってないように見えますけど・・・」

なのはは近藤を隅から隅まで確認しながら聞くが、
またもや近藤の口から信じられない言葉が飛んできた。

「見た目なんて変わりませんよ。俺のバリアジャケットは透明の魔

力障壁だけですから。
そもそも、バリアジャケットを展開するにしても、見た目が変わる意味あります？」

近藤は言ってはいけない事を言った。
隊長達は何も言えない。
近藤から目を逸らす。

「見た目変わったら、相手にまるわかりじゃないですか。
取り扱う仕事の内容によっては隠密性を要求するのもあるんですから。
デバイスだけ展開しておけばわかるでしょ？」

近藤は至極当然の事を口にした。
時空管理局の制服だけでも一般市民には威圧的に見え、目立ってしまうのに、
そこからさらにバリアジャケットなんかを展開した日には、
「これから戦いに行ってきます。」と言っているようなものだ。

隊長達は反論しようにも、近藤の言うことの方が正しいような気がしてきた。

「だ、だが、コレは鎧なのだ。戦うという気持ちを纏った鎧なんだ！」

なにやらシグナムが必死に弁解している。
確かに、気持ちを切り替えるためのスイッチと思えば納得できなくもない。
現に、近藤の扱う魔法の中にもバリアジャケットを纏わなければならないモノもあるからだ。

「わかりました。そういう事にしておきます」

近藤がなんとか納得してくれたので皆ホッとした。
しかし、近藤がバリアジャケットを展開しない、いや、厳密には透明な魔力障壁を展開しているのだが、
それはいいとして、デバイスが見当たらない。

「近藤さん、デバイスは？」

なのはは近藤が何も持っていないことを確認して聞いた。
すると、近藤は右腕を上げ、

「この右腕は義手なんですが、デバイスでもあるんです。ですから心配いりません」

なんとも便利なことだ。
腕とデバイスが一体化していれば、手が塞がることもないので、行動の制限がかなり緩和される。
なのはとヴィータは義手になるきっかけの当事者だけに、複雑な顔をしていたが、当の近藤はなんとも思っていない。
シグナムも便利だなと感心している。
そう思ったところで、重要な事を思い出した。

「そういえば近藤、お前、戦えるのか？」

シグナムの一言で隊長達が一斉に近藤を見る。
言われてみれば、いままで近藤が戦う姿を見たことがない。
なのはとヴィータも８年前の記憶しかない。
その８年前も近藤は大した働きをしていなかったのか、記憶が曖昧

ではっきり覚えていない。
訓練も、魔力の上手な運用方法や、マルチタスクの活用方などをフォワード四人に説明したり、
机上学習的なことの方が多かった。
あと、書類整理が恐ろしく速いので、皆の書類、主にフェイトとシグナムの仕事をやってもらったりとか、
事務的なことがほとんどだった。

「確か、近藤さん魔導士ランクＡＡやったよな？」

はやては近藤に履歴書に載っていた魔力ランクの確認をとるが、

「いいえ、Ａです」

近藤の言葉に皆固まる。

「・・・なんでランクダウンしてるの？」

フェイトの質問に近藤は素直に魔力検定試験での出来事を答えた。

「・・・ようするに、あまりにもＡＡランクぎりぎりだったことと、セコいやり方で取得したことにより、ランク取り消しを受けたと？」

シャマルが近藤の言ったことをまとめて言うと、近藤は頷いた。
皆呆れかえってしまって何も喋らない。
魔力検定試験において、取り消しなど聞いたこともないからだ。
一体どんなセコいやり方だったのか教えてほしいものである。

「ま、あたし等も今は魔力限定制限を受けてＡＡくらいだし、調度いいんじゃねーの？」

ヴィータは別に構わないと言うので、皆も了承した。

「よっしゃ。ほんなら、近藤さんも入れて、それぞれ四方に散開、ロストロギアのダミーを駆逐してや！」

「了解！」

はやての号令になのは達はそれぞれ散らばった。

シャマルの展開した結界内には、ロストロギアのダミーがあふれている。

このロストロギアは見た目がスライムのようにプルプルしており、自律移動が可能。

さらに、自己防衛機能があり、危険を察知するとダミーを作り、本体を特定させないという厄介な代物。

しかも、クライアントからの要望で大変貴重な物なので無傷で回収せよとのこと。

自分達の失態対して、無茶な要求をするとはなんとも勝手なものだ。

隊長達はそれぞれ散らばったダミーを駆逐するために四方へ飛び、フォワードの四人は河川敷でロストロギアの本体特定に奮闘している。

近藤はそれぞれの位置、状況を確認する。

隊長達は速やかな対応で次々とダミーの数を減らしていく。

フォワードの四人も苦戦しながらも、なんとかなりそうだ。

近藤は自分の措かれた状況を確認する。
近藤の目の前にはダミーが１０体。
今、誰も近藤を見ていない。

「仕事だ。行くぞ」

近藤はそう言うと、元気な返事が返ってきた。

《了解です！殲滅！抹殺！瞬殺なの！！》

「・・・その物騒な台詞は勘弁してくれ」

そういうと近藤の左手に、一冊の本が現れた。

なんの装飾も施されていない、古ぼけた、題名も書かれていない、分厚い本。
その本は勝手にパラパラとページをめくっていく。
途端、その本からとてつもない黄金色の魔力が溢れ出る。

あまりにも膨大で、圧倒的で、暴力的で、神秘的な黄金の光を纏う本。

普通の人間がこの本を持てば魔力に当てられ、発狂するか、気を失いかねない程の危険な本。
近藤はそれを平然と左手に持つ。
近藤は右手を目の前のダミーに向ける。
そして短く技の名前を言う。

「D3」

すると、近藤の右手から無数の光弾が発生し、ダミー達へ襲い掛かる。

光弾の数は30、ダミーに対して光弾3つずつが不規則な動きで飛んでいく。

そして、パチュンと音をたててダミーに着弾した途端、光弾は爆発した。

光弾を発生させて、着弾、爆発までものの3秒。

近藤の前にいた10体のダミーは全ていなくなった。

その後周囲を索敵するが、何も見つからず、近藤の仕事は終わった。

「ふむ、完了っと」

近藤はフーッと一つ息を吐き、周囲の状況を確認する。

ちょうど他の隊長達も駆逐完了したようだ。

「よし、戻るか」

そう言い、近藤は本を閉じる。

《はーい》

女の声は返事をすると近藤の左手から本が消えた。

近藤が河川敷へ向かうと、もう戦闘は終わっており、キャロがロス

トロギア本体の封印を行っていた。

「ほう、もう一人で封印できるのか」

近藤は感心したように言い、キャロの封印作業を見ている。
他の隊長達も今回のフォワード四人の動きは満足いく内容だったようで、皆ニコニコしていた。

「・・・封印、完了しました」

キャロは無事ロストロギアを一人で封印出来たようだ。
それをシャマルが受け取り、キャロの所にフェイトが駆け寄る。

「キャロ、よく頑張ったね」

キャロはフェイトに褒められて頬を赤くしている。
とても嬉しそうだ。
近藤もキャロへ近付き、キャロの頭を優しく撫でてやる。

「よくやったな。えらいぞ、キャロ」

近藤がそう言うと、キャロは一層顔を赤くし、両手で顔を隠すようにし、

「あ、ありがとう、お父さん」

キャロの一言に周りの空気が凍る。

「お、お父さん!?」

なのははビックリして大きい声をあげた。

「どういうことやろか？近藤さん」

はやては無表情で近藤に詰め寄る。

「キ、キャロに何したんですか！？」

フェイトは顔を真っ赤にして迫る。

近藤は皆が何に驚いたり、怒っているのかサッパリわからない。
だから慌てることなく淡々とこれまでの経緯を言う。

「いや、何って・・・ただ、俺がお父さんみたいだからって言われたから、じゃあ呼んでいいよって言ったんですよ」

「そうなの？キャロ！？」

フェイトはキャロの肩を掴み、に真偽の程を確認する。
キャロはフェイトの行動にビックリしたのか、コクンと首を縦に振るのみだった。
フェイトはホーッと息を吐いた。

「よかった、そんな事で。てっきり近藤さんがキャロに何かイケナイことをしたのかと・・・」

「皆さんが普段俺をどう見ているのかよくわかりましたよ」

近藤は落ち込んだ。大分機動六課にも馴染んできたとおもっていたのに、まさか変態と思われているとは。

なのはやフェイトは、ああ、いやぁとか言いながら、なにやら気まずい空気になんとか打開策がないか模索していた。

「大丈夫です！僕は近藤副隊長をそんな目で見ていません！だって僕達のお父さんなんですから！」

エリオは必死に近藤を擁護する。
どさくさにお父さんとか口走っていたが。
エリオ・・・ええ子や・・・
近藤はホロリと涙を流し、エリオの頭を撫でてやる。

「ありがとう、エリオ。俺の味方はエリオとキャロだけだ」

エリオは頭を撫でられてすごく嬉しそうだ。
そこではやてが意地悪そうな笑みでフェイトにいらない事を吹き込む。

「そうか、近藤さんがお父さんか。
じゃあフェイトちゃんはエリオとキャロのお母さんやから、二人は夫婦や！」

「え！？あ、は、え！？私と、近藤さんが夫婦！？」

面白いくらいあたふたするフェイトをなのはやはやては笑って見ている。
いいおもちゃでも見つけたような目だ。
フェイトは私にも選ぶ権利がとか、別に嫌いではないとか喚いている。

エリオとキャロはここまで取り乱すフェイトを見たことが無いのか、

ポカーンと口を開けて見ている。

そんな和やかな雰囲気の中、近藤はふとスバルとティアナの方を見ると、

何やらティアナは今回の戦闘内容が気に入らなかったようでスバルがティアナを励ましている。

ティアナは皆に対して何か劣等感みたいなのを抱いているようで、

近藤はティアナに危ういものを感じた。

こうして、機動六課の出張任務は、ロストロギアはレリックではなかったが無事に終わり、

六課の面々はミッドチルダの機動六課隊舎へと帰還するのだった。

# １０万アクセス記念雑談（前書き）

本当に皆さんありがとうございます。

# １０万アクセス記念雑談

近藤　「１０万アクセスとっくに超えてますよ記念ー！！」

はやて　「いぃやっほーい！！」

なのは　「５万から１０万はすごい早かったね！」

フェイト　「流石に、私もビックリしたよ！」

近　「これ書いてる時点で１２万いきそうですよ」

は　「リリカルなのはブランドのすごさがわかるな」

な　「で、今回も記念に雑談なの？」

近　「はい。でも次回から、こういう記念の時は番外編でも書こうかなと思います。あくまで予定ですが」

フ　「番外編？本編では書けないの？」

近　「書けないこともないですけど、一発ネタっぽいんで、じゃあ番外編にしよう！ということになりました」

は　「なんや？誰かと相談したんか？」

近　「脳内会議です」

フ　「・・・気持ち悪い・・・」

な「フェイトちゃん、思ってても口に出しちゃあだめだよ」

近「雑談にエリオとキャロこないかな・・・味方が欲しい・・・」

近「気になるアイツのお名前大発表ー！！」

は「いぃえーーい！！」

？「ついにきたのね！真のヒロインの出番が！」

な「真のヒロイン・・・」

フ「私達、脇役・・・？」

？「今更なに言ってんの？お・ば・さ・ん！」

な「・・・ちょっと、ゆっくり・・・お話し、しようか？」

フ「手伝うよ、なのは」

？「ふん！あなた達おばさんの体力で、この若々しいピチピチの私に挑もうなんて、脳も老化したのかしら？」

な「・・・近藤さん・・・」

フ　「・・・保護責任者はあなたですよね？」

近　「とりあえず落ち着こう。その手に持ってるデバイスもひとまず地面に置こう。話しはそれからだ」

？　「ご主人様ー！そんな化石共は放っておいて、早く私の名前を発表するの！」

な　「か・・・化石・・・」

フ　「なんかもう怒りを通り越して、清々しいね」

？　「3歳の私に比べたら、みんなオバサン！化石なの！！」

は　「さ、3歳！？」

な　「3歳だったの！？」

フ　「それにしては、言動がハッキリしていると言うか、毒舌というか・・・」

近　「すいません！すいません！
こいつ、俺が仕事してる間、ずーっとテレビとか、ネットとかばっかりやってて、
変な知識いっぱい取り込んでるんです！
しかも、いつもお菓子ばっか食べて、俺にあれ買って来いとか命令するんです！
注意してるんです！ホントです！でも聞いてくれないんです！お願いです！助けてください！！」

は　「・・・ニートやん・・・」

？　「ニートってなんかカッコイイ響きだよね！」

な　「そんなだから、世の若者は働かないのかな？『ニートってなんかいい感じの名前じゃね？』みたいな？」

フ　「もういっそのこと、そういう人がかっこ悪いと思うような名前を定着させたらいいんだよ」

？　「例えば？」

は　「家畜？」

な　「分別ゴミ不能産廃物？」

フ　「スラスラ出てくるね・・・」

近　「大丈夫か！？大丈夫なのか！？この会話！？」

は　「そういう風に、気にするからニートが増えるんやんか。気にしたらアカン。
働きたいのに、働けない理由がある人はニート言わんねん。
働こうとせん人がニートいうねん。そのへん区別せんとな。
こういう事は、ズバズバ言わんとアカン！
大体、これは作者にも言えることやで？」

近　「コラ！リアルの話しを持ち出すな！しかも嘘つくな！ちゃんと働いてるわい！！」

？「すごい！すごいのね！！おばさんなんて言ってごめんなさい！！これからはお姉さまと言わせてください！！」

な「この子いい子だね、フェイトちゃん」

フ「うん、ホント、いい子だね」

は「二人とも、扱いやすいな・・・」

近「さぁ！いい感じにまとまったので、名前を発表します！」

は「ドラムロール！スタート！！ダララララララララララ・・・」

な「はやてちゃん・・・」

フ「あれ、おかしいな・・・目から水が・・・」

は「ジャーン！！どうぞ！！」

近「エレノア　です！」

は「・・・ん？」

な「・・・え？」

フ「・・・あれ？」

エレノア　「キャー！セクシー！！」

は　「・・・近藤さん、ちょっと」

近　「はい、なんですか？」

な　「ディバインバスター！！」

近　「ぎゃー！！？」

フ　「なのは、次私がするから、殺さないでね」

エ　「きゃー！？ご主人様ー！？」

ヴイータ　「おい、あたし等の分も残しとけよ」

シグナム　「うむ。こいつは一度徹底的に叩きのめさないとわからないらしい」

近　「な、何がですか・・・？ていうか、あんたらいつの間に・・・？」

ヴ　「おまえ、前回の雑談で言ってたこと覚えてるか？」

近　「は、はい・・・」

シ　「キャデラック、ニッサン、ダイハツ」

近　「・・・・・・・・・・・・・・あ。」

は　「忘れとるやないかい！」

な　「とりあえず、言うことあるよね？」

近　「・・・ごめんなさい」

フ　「なんか、謝ってる感じしないよ？」

近　「土下座します。ホントすいませんでした！」

ヴ　「・・・ま、これくらいで」

シ　「うむ、よしとしよう」

は　「ハアハア・・・年上の男の人を足蹴にする・・・なんか目覚めそうや・・・ハアハア・・・」

な　「はやてちゃーん、とりあえず、ヒールを近藤さんの頭からどけようか？」

フ　「ほ、ほら、はやて、いくらパンプスとはいえ、靴底は痛いよ？」

は　「・・・こういう人は、痛いのが好きなんや。私等みたいな美女に罵られるのが堪らなく興奮するんや。な？豚野郎？」

近　「・・・ホント、助けてください」

な　「じゃあ、なんでエレノアなの？」

フ　「キャデラックにもセビルとか、ニッサンはセレナとか、ダイハツはソニカとかアルトィスとか
　　いろいろかわいい名前あったじゃない？」

近　「ピピーンときたんです」

ヴ　「はぁ・・・」

シ　「で？その名前はどこのメーカーの車だ？」

近　「シェルビーのＧＴ５００です」

エ　「うわ！渋い！！マッスルカーなの！」

は　「ちょいまち。そのＧＴ５００てそれが名前やろ？エレノアてどこから出てくるん？」

フ　「あ、そういうことか！」

な　「え？フェイトちゃん知ってるの？」

フ　「６０セカンズって言う映画知ってる？」

ヴ　「おお！ニコラス・ケイジのやつな！」

シ　「あれは、いい映画だった」

フ「その映画で、ニコラス・ケイジは車に女性の名前をつけてたでしょ？」

ヴ「ああ！そういえば！」

シ「ＧＴ５００にはエレノアと名付けていたな」

は「深いな～」

エ「そこまで考えてくれてるなんて、ご主人様、ありがとうございます！」

近「元々、アメリカのマッスルカーが好きなんですよ。できれば、マスタングとか、コルベットとかカマロとか、乗りたいと思ってますから」

エ「でも、本当に一番乗りたいのは？」

近「ダッヂのバイパーです」

フ「うわー、すごいわかるけど、日本には一番向いてない車でしょ、それ？」

な「フェイトちゃん、車の話になると目の色変わるね」

は「いつもの落ち着いた雰囲気が嘘みたいやな」

ヴ「でも、そういうギャップがファンにはウケるんだろうな」

シ「テスタロッサ、萌えだな」

近　「じゃあ、次はなんの話をしようか？」

な　「考えてないの！？」

フ　「考えないでこんなの書いてるの？」

ヴ　「そんな暇あるなら本編書け！本編！！」

近　「いやぁ、こういうのは閑話休題的に挟んでやったほうがいいと思うんですよ」

は　「箸休め的なもん？」

近　「はい、肩の力抜いて見るのも必要かと思いまして」

シ　「それはな、本編が重厚で読み応えのある作品にいうことだ。おまえ、自分の作品にそこまで完成度があると思うか？」

近　「・・・」

シ　「ほら、言ってみろ、豚野郎」

な　「シ、シグナムさん・・・？」

フ　「はやてのが感染してる・・・」

近　「痛いです、シグナム副隊長。踏まないでください」

シ　「貴様、誰が人の言葉を喋っていいと言った。豚は豚らしくブーブー言ってろ」

ヴ　「・・・うわぁ・・・引く・・・これはあたしも引く・・・」

な　「でもなんだろう、シグナムさん・・・すごく似合ってるっていうか・・・」

フ　「なんか・・・あれが素みたい・・・」

エ　「シグナムお姉さまに踏まれるご主人様・・・かわいいー！」

は　「え！？かわいい！？そうなん！？なんやろう・・・価値観の違いやろか・・・？」

ヴ　「安心していいよはやて。あたしもこの状況の近藤を見て、かわいいなんて思えないから」

な　「近藤さん・・・いたたまれないよ・・・」

近　「なんでもいいから、助けてくれー！！」

シ　「人語を発するな！家畜が！！」

フ　「やめてください、ほんと。これからシグナムとの付き合い方考え直そう」

近　「ここで、エレノアについて話したいと思います」

エ　「え？なになにー？」

は　「ここでバラしてもええんか？」

近　「本編でも少し出ましたし、しばらくしたら近藤の単独任務の話があるので、その時にはばれますから」

な　「ふーん、じゃあ、エレノアの何を話すの？」

近　「見た目です」

フ　「ああ、リリカルなのはでは女性キャラの容姿は重要だもんね」

シ　「で？どんな感じなんだ？」

近　「本です」

ヴ　「は？」

近　「だから、小汚い本です」

は　「いや・・・確かに、本編でも、本みたいなこと言うとったけど・・・」

シ　「その本は、人型に変わるのか？」

近　「はい」

は　「それさきに言わんかい！」

ヴ　「なんつーか、闇の書みたいだな」

近　「はい、それ！とても重要ですよ！」

な　「闇の書さんの関係者なの？」

近　「そうです。でも、これ以上は秘密です」

フ　「まあ、深くは聞かないけど・・・ああ、そうか、だから、以前妹に会えるとか言ってたんだ」

は　「で、その妹いうんが、リインなんか」

近　「はい」

は　「なあ、ヴィータ、シグナム、夜天の魔導書のリインフォースには姉妹おったんか？」

シ　「いえ、私達の記憶が正しければ、夜天の書は一冊のみです」

ヴ　「それに、ああいう魔導書も夜天の書だけだったはずだよ」

近　「はい！ストップ！これ以上は本編の深遠に入るのでその話を広げるのはやめましょう」

な　「うん、了解。じゃあ、エレノアの人間の時の姿はどんなの？」

エ　「こんなのです！」

は　「・・・いや、コレ字だけやし、そんなん言われても見えへんし・・・」

エ　「なんで、リアルなことを持ち出すかな～？はやてお姉さまならノッてくれると思ったのに・・・
　そんなだからエセ関西人とか言われるんだよ。は～あ、ホント、ガッカリ」

は　「なんでそれくらいで、そこまで言われなアカンねん！
　それにちゃんとツッコんだやん！別にツッコミは間違ってないやろ！？」

近　「ツッコミのテンション低かったですよね。それが気に入らなかったんじゃないでしょうか？」

は　「いや、いつもハイテンションて疲れるし・・・」

な　「年かな・・・」

は　「とっ・・・！」

フ　「やっぱり部隊長は疲れるんだよ。この前、イスに座る時にどっこらしょって言ってたもん」

ヴ　「はやて・・・」

シ　「そこまで・・・」

は　「・・・なに、これ?私イジリのコーナーなん?四面楚歌やん・・・こんなんされても興奮せえへんで」

近　「無理やり俺を巻き込むような話の振りはやめてください。」

エ　「そーそー!そんなことより私の容姿なの!言っちゃって!ご主人様!!」

近　「ぶっちゃけ、リインフォースそっくりです」

は　「それもまた、キーワードなんちゃうん?ええの、言うてもうて?」

近　「仕方が無いでしょう。容姿の説明はこれが一番わかりやすいんですから」

な　「へー、じゃあ、大人な雰囲気なんだ?」

フ　「それにしては、喋り方が・・・」

近　「なんと言っても3歳ですからね」

ヴ　「そこがよくわからないんだけど、どういうことだ?」

近　「目覚めたのが3年前なんです」

シ　「なるほど、基本体型は成人女性だが、精神年齢が3歳児ということか」

エ　「そーなんです！」

は　「一番タチ悪いパターンやな」

な　「体は大人、頭脳は子供って、あの名探偵の逆じゃない？」

近　「いや、そうとは言えないんですよ」

フ　「？どういうことかな？」

近　「エレノアは知識に関してはとんでもない量を保有しています。それこそ無限書庫並みに」

は　「すごいな、それ。でも、なるほど。知識はあるけど、精神が追いついてないんやな」

ヴ　「リインフォースツヴァイより子供か」

シ　「困ったものだな」

エ　「むー、皆さん私を侮っていますね？私も本気を出せばすごいんですよ！」

フ　「じゃあ、本気でやってみて」

エ　「わかりました。んんっ、あーあー、おほん！」

シ　「こいつホントにデバイスか？」

エ「皆さん、これでどうでしょう？」（キリッ）

は「おお！かっこええ！」

な「なんか、セクシー！」

フ「声に艶があるというか、大人のフェロモンというか・・・」

ヴ「すげー、リイン（ツヴァイ）よりなんか頼れるって感じだ」

シ「流石、言うだけのことはあるな」

は「近藤さん、ちょっとオタクな話してええ？」

近「？なんですか？俺に答えれることなら答えますよ」

は「エレノアの声は誰をイメージしてんの？」

エ「おお、いい質問ですよ、お姉さま！」

な「闇の書のリインフォースさんは小林沙苗さんだよね？」

フ「声も一緒かな？」

近「いいえ、違います。エレノアの声のイメージは・・・」

ヴ「イメージは？」

近「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

シ「早く言え！私はこういう焦らしが一番嫌いなんだ！」

は「ミリオネア大嫌いやったもんな」

ヴ「もう早く言ってやってくれ」

近「・・・三石琴乃さんです！」

は「・・・めちゃめちゃセクシーやん・・・」

な「艶ありすぎだよ、その声・・・」

フ「勝てない・・・大人の女性勝負では圧倒的に勝てない・・・」

ヴ「？・・・おお！ハンコックの声の人か！エロい声してんだな！」

シ「エヴァンゲリオンの葛城ミサトが一番有名じゃないか？」

近「皆さん結構知ってますね」

エ「それだけ有名な人なんですよ。ご主人様」

近「というわけで、今回はここまでとさせていただきます」

は「近藤さんのアクションシーンはこれから増えるのか！？」

な「近藤さんは誰にフラグを立てるのか！？」

フ　「エリオとキャロとの親子愛はどうなるのか！？」

ヴ　「いろいろ楽しみだな！」

シ　「まだ何も考えてないだろうからな、じっくり期待しよう」

エ　「私の活躍も期待してねー！！」

近　「それでは皆さん」

一同　「またねー！！」

エリオ　「ねえ、キャロ、次回の雑談のことなんだけど」

キャロ　「うん、もしかしたら、私とエリオ君とお父さんの三人でやるかもしれないんだよね？」

エリオ　「うん！そうなったら、一緒にがんばろうね！」

キャロ　「うん！そしてお父さんに褒めてもらおうね！！」

エリオ　「う・・・うん！」

キャロ　「ふふふ・・・エリオ君、かわいい」

## 第17話（前書き）

今回はオリジナルの話になり、
近藤の単独任務になります。
まったりと見ていってください。

# 第１７話

近藤大輔（コンドウダイスケ）

新歴　４９年　７月２３日　生まれ

時空管理局地上部管理外世界管理課所属

階級　三尉

魔導士ランクＡＡ↑（Ａに訂正　八神）

経歴

新歴６２年　時空管理局入局

新歴６４年　陸士１１３部隊配属

新歴６７年　陸士１１３部隊から管理外世界管理課へ異動

同年　第４６管理外世界へ異動

新歴６８年　第４７管理外世界へ異動

新歴６９年　第７３観測指定世界へ異動

新歴７１年　第１４観測指定世界へ異動

新歴７３年　第９３観測指定世界へ異動

新歴７４年　時空管理局地上本部へ異動

新歴７５年　古代遺物管理部機動六課へ異動

資格

大型４輪免許
大型２輪免許
特殊車両免許
魔導医師免許
デバイス技士免許
簿記２級
危険物取扱甲１種
フグ調理師免許

趣味

機械いじり
読書

特技

特になし

今後の希望異動先・将来出向希望先

忙しくないところ

これが八神はやてが入手した近藤の履歴書である。
いろいろツッコミどころはあるが、まあそれは置いておくとして、

「・・・やっぱり地球出身なんて書いてへんやん」

前回の出張任務のときの近藤の爆弾発言、地球出身という言葉に、
もう一度履歴書を確認したのだ。
すると地球出身どころか、ミッドに来た経緯すら書いていない。
なぜなら、近藤の言っていた、両親が殺された事件の記録が時空管
理局に残されていないのだ。
確かに詳細を聞くと、微妙な事件ではある。

この事件を担当していたリンディに聞いてみると、
魔力反応があったので、現場へ向かうと、すでに近藤の両親は死亡、
近藤自身も重傷だったそうだ。
実際の魔法による殺害の現場を見たわけでもなく、魔力の残留反応
はあったが、
それが決定打にもならず、事件は地球の現地住民による殺人事件と
して、処理されたらしい。
その際に、近藤の命を救うために近藤をミッドへ連れ帰り治療した
のだそうだ。
しかし、近藤は確かに次元犯罪者にやられたと言っていた。
目撃証言があるのだ。
それなのに魔法犯罪にはならなかった。
やはり、子供の証言は証拠にはならないようだ。

それから、エリオとキャロに聞いた話によると、
近藤にはミッドに養父がいて、その養父は元アースラのクルーでエ
イミィの仕事の先生だったとか。
そしてその養父も１０年前にお亡くなりになっているらしい。

現在部隊長室でははやて、、リイン、フェイト、シグナムの四人で近藤の履歴書を見ている。
後のメンバーは訓練へ行き、近藤はシャーリーとデバイス関係でデバイスルームへ行っている。

「でも、改めて見ると、イロイロな所に異動してるですね？」

はやての横でリインがケーキにぱくついて言う。

「そうだね。しかも全部管理外世界か観測世界を、大体1～2年で異動してる」

フェイトも近藤の履歴書を眺めている。
フェイトははやての「二人は夫婦」発言から妙に近藤を意識してしまい、
近藤の顔を見るとすぐに顔が赤くなるという事態に陥っている。

エリオとキャロはあれからますます近藤に懐き、本当に親子と思うような関係になっている。
そんな近藤にフェイトは少し嫉妬してしまう。
最近、いや、機動六課に入ってから二人はフェイトにどこかよそよそしい。
一線を引いている感じがあるのだ。
そんな関係の中、近藤はそんなこと関係ないとばかりに二人とドンドン距離を縮めていった。

自分は何がいけないのだろう。

何処で間違えたのだろう。

そんな感情がフェイトに近藤を嫉妬させるのだった。
と、思考の海に入り込んでいたフェイトは、はやての言葉で現実に引き戻される。

「実は、この異動先なんやけど、ほとんど人間のおらん世界ばっかりやねん」

「そうなんです。特にこの三つの観測世界なんか、古代遺跡しかない、無人世界ですよ」

はやての言葉に続きリインが話すと、観測世界の画像が数点表示される。
そのいずれの世界も砂漠にある遺跡や、森林に覆われた建造物などである。
近藤はそれぞれの世界を一人で担当していたらしい。
これらの遺跡には歴史的価値があまりなく、遺跡荒らしなども滅多に現れないことから、
一人でも十分と判断されたのだろうが、これは明らかな左遷である。
つまり、近藤に仕事をさせないという目論みがあるのだろうが、あまりにも異動が多すぎる。

はやて達はいくら考えてもいい答えがでてこなかったので、話を先に進めることにした。

「しかし、一番驚いたのは、医師免許を持っていたということだな」

シグナムは履歴書の資格部分に注目した。
医師免許、しかも魔導関係とくれば、リンカーコアなどの医学治療を施せるということだ。
魔導医師免許は取得が恐ろしく難しく、

この免許を持っているのは極少数で、取得すると各部署から引く手数多である。

「まぁ、近藤さん自身の環境考えたら、誰も欲しがらんわな。なんせ、上の人間に嫌われとるんやから」

はやては後日、近藤について調べたのだが、近藤は上司、佐官クラスの年配者から嫌われている。
理由はあの8年前の事件の内容のためである。
ほとんどの人が捏造情報を鵜呑みにし、次代を担う高町なのはを傷物にしたという怒りからだが、
事実を知っている極少数の人は近藤に関わると厄介だと、煙たがっていると、リンディがはやて達に言っていた。

「後はこの、デバイス技士だな。確かにあいつは手先が器用だし、頭の回転も速いしな」

実はつい先程、シャーリーに近藤がデバイス技士の資格を持っているということをはやてがうっかり喋ってしまい、
シャーリーは近藤を見つけるなり、拉致していったのだ。

「でも近藤さん・・・フグ調理師とか、危険物とか、なんかスゴイです」

リインはフグ調理師免許なんかどうやってとるのかわからないが、調理師免許ではなく、フグ限定というところがなんとも近藤らしいと思っていた。

「あと、今後の希望勤務先に『忙しくないところ』て・・・
なんやろ、管理外世界とかの赴任てそんなに忙しいんやろか?」

いや、もしかしたら、全然忙しくないからそういう世界への赴任を希望しているのかもしれない、
とはやては考えるが、どちらにしてもだらけた思考である。

「まあ、近藤さんの事はこれくらいにして、
もうすぐしたらなのはちゃん達も訓練終わるやろうし、今度の警備任務について、話そか」

そう言い、話はホテルアグスタの警備任務の話へと以降した。

「ほー、はー、成る程ー」

デバイスルームではシャーリーが感心しきりである。
何に感心しているかといえば、近藤の独自理論についてだ。
近藤はデバイスに対しての考えがかなり特殊なのだ。
どう特殊かと言うと、デバイス単体での考えではなく、
扱者との身体的相性、魔力変換効率、癖などである。
確かに、デバイスと扱者の相性は大事だが、近藤はここで扱者の魔力循環機能に着目する。
つまり、デバイスを調整するのではなく、扱者の方の魔力効率をどうにかしようというのである。

これは意外と簡単にできる。
毎日の規則正しい食事、適度な運動、十分な睡眠、つまり健康でいること。

これを守れば、魔力循環効率がスムーズになる。
逆に体調が悪いときなどは、体の不調部分に魔力の淀みができ、うまく循環しない。
そういう扱者のデータを積み重ね、それを参考に、デバイスに扱者の癖や扱者に負担のかからない魔力変換機能のプログラムを組むのである。

「いくらデバイスが優秀でも、扱者の手に余るものなら、宝の持ち腐れだからな。
どれだけ扱者に合わせても、その扱者の体調によってデバイスの性能は左右される。
だったら扱者の体調管理を徹底すればデバイスも十分な実力を発揮する。
デバイスの調整はほぼ毎日、扱者の体調によって変えなければいけないんだよ」

「はー、デバイスの定期メンテナンスだけではダメということですね！
でも、私もそんなに毎日メンテナンスする時間が・・・」

近藤の言うことは確かに正しいのかもしれないが、
六課全員のデバイスを毎日メンテナンスする時間などシャーリーにはない。

「本人にやらせればいい」

近藤の言葉にシャーリーは、え、でも、と反論するが、

「俺が陸上の部隊にいた頃は、なんでもみんな自分でやってたぞ。
ま、デバイスマイスターなんて人がいなかったからでもあるけど。

それで俺がデバイス技士免許を取ったんだけどな。
とにかく、自分の命を預ける相棒なんだから、自分でメンテナンスするのは当たり前だと思うけど？」

「それは、そうですけど・・・そうすると、私の存在意義が・・・」

シャーリーは自分の仕事が取られるとでも思ったのか、少しションボリとする。

「シャーリーはいつも通り定期メンテナンスをすればいい。
毎日の点検と定期メンテナンスは、意味合いが全く違うんだから」

毎日の点検は軽く診るサワリ程度だ。
しかし、定期メンテナンスは隅から隅まで点検する。
全く点検の主旨が違うのだ。

「ま、別にこうしろとか言ってるけじゃないから、あくまで参考程度に取っておいてよ。
ここでのデバイスメンテナンスの責任者はシャーリーなんだから、自分のやりやすいようにやればいい」

さりげなく近藤はシャーリーにフォローを入れる。

「でも、近藤副隊長はすごいです！私、そんな事考えもしませんでした！」

シャーリーは近藤を称賛するが、近藤はどうという事はないと言う。

「年の功さ。シャーリーは俺より天才で優秀なんだから、
経験を積めば俺以上の考えにたどり着くよ」

近藤がそう言い終わると、ちょうど近藤に本局からの呼び出しがあった。
近藤はシャーリーに挨拶をし、デバイスルームを後にした。

近藤への本局からの呼び出しをする人間は限られる。
近藤は本局へ連絡をとった。

「は～い、大輔君！」

相手はリンディだった。
近藤は笑顔で挨拶した。

「こんにちは、リンディさん。
どうしたんですか？いきなり呼び出しなんて」

近藤の質問にリンディは真面目な顔になり用件を伝える。

「近藤三等陸尉に特別任務を言い渡します」

近藤は笑みを隠し、リンディの指令内容を聞く。

「ジェイル・スカリエッティの研究施設と思われる場所を発見しました。
近藤三等陸尉、その場所を単独にて調査及び破壊してください。」

リンディがそう言うと、近藤の前にモニタが展開し、施設の場所が載っている地図が映し出された。

「ジェイル・スカリエッティの調査はフェイト隊長の役割では？」

近藤はフェイトがスカリエッティを追っている事を知っているため、今回の任務はフェイトに任せるべきだと思ったのだ。
しかし、リンディはフェイトにはこれから警備任務があるから無理だと言った。
そういえば、ホテルアグスタの警備任務が入っていたな、と考えていた。

「大輔君はあくまで私の部下扱いだから、こういうときに自由に使えるのよ」

なんとも都合の良い話だが、スカリエッティの研究施設は早い内に潰しておくに越したことはない。
それに、近藤はスカリエッティとは縁がある。
ろくでもない、一方的な縁だが。
この任務も、そのろくでもない縁によるものだろうか？
近藤はそんな縁に溜息をつきつつ、任務を了承した。

## 第１８話（前書き）

今回の話で近藤の力の半分をお見せします。
かなりチートですが、勘弁してください。
ちなみに、近藤の使う力は必ず欠陥があります。
それでは、まったり見ていってください。

# 第１８話

「久し振りの単独任務か・・・」

《そして、久し振りの観測世界ですね》

いま、近藤はリンディに指示されたスカリエッティの研究施設と思わしき施設が発見された場所から、１０キロ程離れた位置にいた。

第２３観測指定世界
自然の森林生い茂る動物等しかいない、無人世界でもある。
太陽は一つ、夜もある。
気候は年中夏で、湿度も高く、熱帯雨林気候である。
水も豊富で動物達にはまさに楽園であろう世界である。

現在、近藤は動物の死体を検分している。
動物というと弊害があるかもしれない。
野生の竜の死体である。
体長は約５メートルの凶暴と言われる種である。
それが３体。
近藤はそれらの傷口などを見る。
無数の高熱による火傷と、切り傷。
明らかに人為的なものである。

「ガジェットドローンの起動実験か・・・それとも新しい玩具をまた造ったのか・・・」

近藤は竜の傷口を触りながら呟く。

その呟きに女の声は反応する。

《新しい玩具と言うと、やはり・・・？》

「またアルハザードの知識を使ったと見ていいだろう」

女の声を発する本は、アルハザードの知識という言葉に今にも泣きそうな声を出した。

《私たちの力は・・・こんなことに使われるためにあるんじゃないのに・・・》

「エレノア」

《わかっています、ご主人様》

そう、自分達はそんなことをさせないために、今ここにいるのだ。エレノアと呼ばれた本は気合いをいれる。

《よっしゃー！バカの勘違い野郎スカリエッティを懲らしめる為に躊躇なく、徹底的に！完膚なきまでに！ボッコボコにしてやりましょう！！》

「・・・だから、物言いが物騒だって・・・」

「じゃあ、作戦だ。俺が施設に乗り込んでデータを取ってきて中から破壊する。お前は外で撹乱してくれ」

《りょーかい！じゃあ、人型になるね！》

そういうとエレノアと呼ばれた本は黄金の光を発して、女性の姿に変わった。

身長は１７０センチ程のスラリとした体型だが、出るところは出て、引っ込むところは引っ込んでいる女性らしい体つき。

シミひとつない白い肌。

銀髪のロングヘアーは日の光に美しく煌めき、朱い瞳には強い意志を感じさせる。

服装は紫色と青色を基調としたライダースジャケットのようなものに、ピッチリと体に張り付いたインナーが豊満な胸を強調させる。

下のスパッツは尻から太股にかけてのラインを際立たせ、

腰のスカートは膝下まで長く、ベルトと金具で止められ、

金属が施された黒いブーツというバリアジャケットを着用している。

その姿は美しく、まるで紫水晶のようであった。

エレノアは手を開いたり閉じたりして、体の動作確認をとり、

「うん、問題なし！」

「よし、それじゃあ、作戦開始だ」

近藤の開始の言葉と同時にエレノアは弾丸のようなスピードで空を飛んでいった。

エレノアは上空から、スカリエッティの研究施設を眺めている。

見た目はただの森だ。
周囲の森と溶け込んでどこまでが施設かわからない。
だが、わかりやすい秘密の施設などありはしない。
当然カモフラージュされているのだ。

「バカのスカリエッティもこれくらいの頭は回るのね」

エレノアはフンと鼻をならし、一人皮肉を言った。
しばらく上空を旋回していると、森の数ヶ所から無数のガジェットドローンがあらわれた。
こうなれば、ここに研究施設があると教えているようなものだ。

「でも、やっぱりバカはバカね！」

ガジェットドローン達はエレノア目掛けて飛んで来る。

その数５０体。

エレノアはガジェットドローンを冷めた目で見下ろしながら、右手で髪をかきあげ左手を腰に当て、
ペロッと舌を出して唇を舐める。その顔は妖艶で美しく、おもわず見惚れてしまう仕草だ。
そして、口の端を吊り上げ、楽しそうにこう言った。

「さぁ、お仕置きの時間よ！」

そういうやいなや、エレノアの体中から、黄金の魔力が溢れ出し大気が震えた。

その頃、近藤は研究施設内に侵入していた。
入口はガジェットドローンが出て来た場所を確認し、そこから侵入したのだ。

（ふむ、人の気配は無いが・・・ＡＭＦが張られているな。しかも濃度が高い）

近藤は自分の魔力循環を確認すると、この施設内では魔力行使は無理だと判断した。

（なんというか・・・用心のためだろうが、ここまでするとスカリエッティが関係していると言っているようなものだな）

近藤はため息をついて、スカリエッティの詰めの甘さなのか目立ちたがりなのかわからない行動にあきれつつも、最善の策を考える。

（ここで能力を使うか）

近藤は魔法ではない、近藤だけの能力を発動させる。
瞬間、近藤の全身は真っ黒に塗り潰され、目の部分に白い点が二つのみ妖しく光る。
近藤のこの姿を初めて見たものは、人の形をした黒いモノにしか見えないだろう。
髪の先から、つま先まで黒に塗り潰されているのだ。

その姿のまま、近藤は施設を探索する。
しばらくすると、途中ガジェットドローンＩ型が3体近藤の前に現れた。

（ふん、3体か）

近藤はガジェットなど関係ないとばかりに前を通り過ぎようとするが、そんな近藤にガジェットは攻撃を開始する。
ガジェットは触手のように無数のケーブルを出し、先端を変形させ、その先から、レーザービームを発射させる。
近藤の体に無数のレーザーが当たり、体から黒い破片が飛び散り貫通していく。
近藤の体は穴だらけになった。
だが、穴からは血が出てこない。
そして近藤は歩みを止めない。
関係ないとばかりに歩く。
すると、穴の開いた部分が黒く塗り潰され、穴が埋まっていく。
そして何事もなかったように黒いモノは歩き続ける。

近藤の能力のひとつであるこの状態『黒化(くろか)命名：近藤』は、全身を黒く染め上げることで、
敵からの攻撃を一切ダメージに変換することなく、流すというものである。
どんなに強力でも、どんなに広範囲でも、この状態には意味がない。

ただしこれには弱点がある。
攻撃に移れないのだ。
全身が攻撃を無効、すなわち、こちらからの攻撃の際に物を触ると敵の攻撃と認識され、触れる物を素通りしてしまう。
そして、この状態では魔力を練ることもできない。
敵の攻撃は一切効かないが、攻撃もできないという、いいのか悪いのかわからない能力である。
だから近藤はガジェットを無視して施設の奥へ進む。

進む度にガジェットの数が増えていき、今では４０体を超えている。

（うざい・・・）

ガジェットが絶え間無く攻撃を仕掛けてくるが近藤には一切関係ない。
代わりに体中が蜂の巣のように穴だらけのままというだけである。
そんなやりとりがしばらく続くと、天井から大きな震動が起こった。
すると、近藤を攻撃していたガジェット達は近藤から離れ、散らばっていった。
ガジェット達は近藤より外のエレノアの方を危険と判断したようだ。

（エレノアの奴、ハデにやってるな）

近藤は天井を見ながらそう思った。

エレノアは上空でガジェットを派手に打ち落としている。
両手を金色の膜で覆い、腰の位置に構え、音速で飛んで行きガジェットへ近づき、その拳をガジェットに叩き込む。
するとガジェットは内部から爆発する。
エレノアはそんな攻撃をずっと続けている。
移動する度に音速移動を行うため、パァンという壁を突き破る音がする。
そして次の瞬間にはガジェットが爆発し、ドォンという音が響く。

パァン！

ドォーン！

パァン！

ドォーン！

空ではこの二つの音が絶え間無く響いていたのだが、

「・・・飽きた！」

突然エレノアは攻撃をやめ、駄々をこねだす。

「ご主人様の考えたこの『魔力拳命名：近藤（まりょくこぶし）』は、こーりつがわるい！」

エレノアは口を3の字にしてブーブー言い、両手をブンブン振って不満を言う。

「やっぱりココは一発ドカーンと派手にいかなきゃ！」

そう言うとエレノアは両手を広げて天を仰ぐようなポーズをとり、

「さーて、わらわら出てくるゴミ共を一掃！お掃除開始！！」

エレノアの足元に魔方陣が展開する。

何重もの円が展開された文字など描かれていない円の魔方陣。

ミッド式ではない、ベルカ式でもない。

では何か？

「偉大なるアルハザードの力！括目せよ！！」

天にかざした両手から、ひとつの金色の魔力球が発生した。
その大きさ約１０メートル。
チャージ時間など無く、術式も無く、一瞬で高濃度の魔法を展開するエレノアは両手を振り下ろし、
自分に近づいてくるガジェットに向けて巨大魔力球をぶつける。

「くらえ！ご主人様命名！『天下無敵玉』！！」

瞬間、魔力球は爆ぜ、周囲は黄金に包まれた。
光が消えた時、周囲のガジェットは全て、跡形も無くなった。

「うし！殲滅！みっしょんこんぷりーと！！」

エレノアは両手でピースサインを作り、喜んだ。

エレノアが外でガジェットを一掃しているときに、近藤は研究施設のデータを吸い出していた。
『黒化』を解除しないと物に触れないので、現在は普通の姿である。

「・・・ここはただのガジェットドローンの生産工場か・・・」

コンソールをすさまじいスピードで叩き、目もすごいスピードで字を追いながら、データの概要を確認する。
ちょうど研究施設内のデータをコピーし終わり、データ保存を確認した近藤は、

「ここは”無くす”か・・・」

そう呟き、再び『黒化』し、研究施設を出て行った。

近藤は、施設の外に出ると、空でいまだにはしゃいでいるエレノアを念話で呼び出す。
エレノアは満面の笑みで近藤に近寄り、

「ねえねえ、ご主人様！私がんばったよ！えらい？ねえ、えらい？」

近藤に頭を突き出し、目をキラキラさせて言う。
どうやら褒めてもらいたいようだ。
近藤はニコリと笑い、エレノアの頭を撫でる。

「ああ、よくやったな。えらいぞエレノア」

近藤の言葉にエレノアはますます顔を笑顔にし、頬もほんのり赤い。

「えへへ～」

エレノアは近藤に抱きつき近藤の胸に顔をうずめ、「むふ～」と息を漏らし、ご満悦だ。
すると、近藤はエレノアの頭を撫でるのをやめ、静かに言った。

「ここを”無くす”ぞ」

瞬間、エレノアは固まった。
そして、ゆっくりと近藤の顔を見る。

近藤の顔は真剣だった。

「・・・アレを使うんですか?」

エレノアは顔を恐怖に染める。

「ああ」

近藤は短く答えた。

すると、エレノアは大声で反発した。

「だめです!アレだけはダメです!あんなもの使わなくても、もう仕事は終わったんでしょ!?」

エレノアは近藤に掴み掛かり、近藤に向けて悲痛な叫びをあげる。

しかし、近藤は言う。

「この施設は放置していてはいけない。全てを無くす。ゴミひとつ、チリひとつ残さない」

「・・・・・っ!」

スカリエッティの研究施設は根絶やしにしなければならない。

わかっている。

わかっているのだ。

エレノアもわかっている。

今、この施設を”無”にすることが最善、最良であることを。

そしてその手段が近藤にはひとつしかないことを。

「この施設を無くすのに何日かかる?」

エレノアに近藤は時間を聞いた。

「・・・この規模だと、およそ２１６０時間です・・・」

エレノアは苦しそうに、近藤の質問に答える。
目には涙がにじんで体も震えている。

「・・・およそ3ヶ月か・・・」

近藤は、自分の袖をつかんで下を向いて震えているエレノアに笑いかける。

「エレノア。そんな顔をしないでくれ。俺はおまえの笑った顔が好きなんだよ」

だから、と言ってエレノアの頭を再び撫で、

「笑ってくれ、エレノア」

エレノアは顔をあげる。目尻には涙がたまっている。
何か言いたそうに苦しそうな顔をしていたが、ニカッと歯をみせて笑い、

「し、しょーがないのね！ご主人様はわたしにメロメロなんだから！・・・で、でも、このお仕事のあとに、ケーキバイキング連れてってよね！！」

近藤はハハッ笑い、わかったわかったと言ってエレノアの頭をポンポンと軽く叩いた。

「よし、じゃあサクッとやるか！」

「りょーかいなの！！」

エレノアは敬礼をする。

アイドルの一日所長のような、実に可愛らしい敬礼だ。

「と、その前にひとつ質問です」

エレノアが近藤に敬礼したまま言う。

「ん？なんだ？」

「アカシックレコードは使っていませんよね？」

エレノアはニコニコ笑っている。

「・・・・・うん」

「私の目を見ていってください。使ってませんよね？」

エレノアはニコニコしながら近藤に聞くが雰囲気がおかしい。

エレノアの背後に鬼が見える。無論幻だが。

反対に近藤は顔色が悪くなってきた。

「・・・・・すいません。５秒使いました」

「あほー！！」

エレノアのドロップキックが近藤の腹にめり込んだ。

「ぐふぁっ！？」

エレノアは見事に着地し、腹をおさえてうずくまっている近藤を指差し、怒る。

「あれほどアカシックレコードは使っちゃダメって言ってるのに！なんで使うの！？」

怒り方が子供に怒るお母さんのようである。

「い・・・いや・・・一応確認として、ちょっと・・・」

近藤はまだ腹をおさえている。
相当いい角度でキマッたようだ。
エレノアは腰に手を当て、仁王立ちで近藤を見下ろす。
顔を真っ赤にし、それはもうご立腹だ。
うむ、怒った顔も実にかわいい。と、腹を押さえながら思う近藤だった。

「ちょっとじゃありません！私は何度でも言いますよ！あの力は人の手に余るものです！
いくらご主人様がアカシックレコードと意識が繋げることができると言っても、
アレが提供する情報は人間の許容量を遥かに超えます！
下手すると死にます！
ご主人様、いままで何回アカシックレコードと繋がりましたか！？」

近藤は片手で腹をおさえながら、空いた手で指折り数える。

「・・・・・今回のをいれると・・・5回？」

「私が以前聞いたときの回数より多いじゃないですかー！！」

今度はうずくまっている近藤の後頭部にカカト落としをかます。

「ぶふぉ！？」

近藤は顔を地面にぶつけた。

「私を目覚めさせる前に2回！地上本部異動前に1回！そして今回！全部で4回！！あれー！？1回多いですねー！？どーしてですかねー！？」

エレノアの口調が喧嘩腰のチンピラみたいになってきた。相当怒っているようだ。

「・・・前回の派遣任務前に・・・聖王教会の過去を・・・少し・・・」

「・・・あんなエセ宗教団体のために命を危険に晒すなんて・・・ホントあほですよ。あほご主人」

エレノアは心底呆れたような表情をしている。

後頭部と腹を押さえながら立ち上がり、

「すいません」

と、素直に謝った。

エレノアはため息をつき、

「はぁ・・・もう、これからは絶対アカシックレコード使っちゃダメですよ！」

人差し指を立てて、メッと子供をしかるように近藤に言い聞かせる。

「はい」

実に素直に返事をする近藤。本当に２６歳なのだろうか？

宇宙や人類の過去から未来までの歴史全てが、データバンク的に記されているという一種の記録をさす概念、

つまり「ありとあらゆるもの」、それが『アカシックレコード』またの名を『森羅万象』である。

本来の、素質を持った人間、後に預言者や救世主と呼ばれる類ならば正しく意のままに過去や未来の情報を引き出すことができるのだが、

近藤の場合、偶然の事故によるイレギュラーでの繋がりで、当然素質など無い。

したがって、アカシックレコードを許容するほど脳や神経が強くないのだ。

そもそもアカシックレコードの情報量は人間の脳の許容を遥かに超える。

宇宙創世からの過去とこれから先の永遠とも言える未来が内包しているのだ。

たかが一人の人間に許容できるわけがない。

だから、アカシックレコードと繋がるときは知りたい情報のみ引き出すのだ。

素質のある人間はこれを本能的に行うため、脳や神経への負担が少

ない。
ところが近藤はこれができない。
引き出す情報に付随して余計な情報も取り入れてしまうため、負担がかなり激しい。

たとえば、アカシックレコードに明日の天気を教えてもらうとしよう。
素質を持った人間ならば、無意識に明日の天気の知りたい区域、時間などを特定し、そこの情報だけを取り出すことができる。
その点、近藤は明日の天気を全宇宙の２４時間の天候の動き、それによる被害などがいっぺんに流れ込んでくる。
じゃあ、情報を特定して取り出せばいいじゃないか。と思うだろうが、近藤はこれをしない。

脳や神経への過度な負担＝死、という図は近藤には意味が無い。

そもそも死への恐怖など皆無なのだから。
だからこそ、恐れずにアカシックレコードを使うし、
エレノアという膨大で凶暴で圧倒的な魔力を持つ本を手にしても神経をやられること無く平気でいられるのだ。

エレノアはコホンとひとつ咳払いをし、近藤を見つめる。

「じゃあ、今度こそ！いきましょう、ご主人様！！」

エレノアの言葉に近藤は頷く。

「おう！」

「ユニゾン・イン！」

近藤とエレノアは黄金の光に包まれた。

スカリエッティの研究施設があった場所は、
半径５００メートル程の球状に穴が開いていた。
穴の断面はスプーンでアイスをくりぬいたように綺麗な面である。
第２３観測指定世界にて、スカリエッティの研究施設は文字通り、
跡形も無くなった。

とある施設にて、一人の男がモニタを眺めていた。
モニタには、紫色の服を着た銀髪の女と、真っ黒な人間のようなモノが映っていた。

「ふむ・・・これが、『ミス・クリスタル』と『ブラックマン』かい？」

男は別のモニタに映っている紫色の髪の女性に声をかけた。

「はい、ドクター。この二人が先日、ガジェットの研究施設へ進入、破壊を行いました」

ドクターと呼ばれた男はミス・クリスタルと呼んだ女性を真剣な表

情で見ている。

「・・・このミス・クリスタルの使った魔法は解析できたかい？ウーノ？」

モニタには銀髪の女性が使った金色の巨大魔力球が映っている。

「いいえ。展開された魔方陣などから現存、絶滅した方式を検索しましたが、該当しませんでした」

ウーノと呼ばれた女性はそう言い、そして、と続ける。

「このブラックマンに関しては、魔力反応もありませんでした」

ウーノの言葉にドクターは驚きの顔をし、ニヤリと笑う。

「くくく・・・面白い、こんなに研究意欲が駆り立てられるのは久しぶりだ！」

ドクターは肩を震わせ笑う。

「謎の魔法！攻撃を通過する体！！すばらしい！ぜひ研究したいよ！！ハーハッハッハッハッハッ！！」

ドクターの笑い声がその施設に木霊し続けた。

# 教えて近藤先生1時間目（前書き）

番外編です。
かなりやっつけです。
まったり見て行ってください。

# 教えて近藤先生1時間目

機動六課隊舎内講習室にて今回のお話は進みます。

スバル　「近藤副隊長、今日は訓練無いんですか？」

近藤　「俺は実技でお前達には敵わないからな。
今回、なのは隊長が俺のしたいようにしろと言ってくれたから、座学にしました」

ティアナ　「確かに、近藤副隊長の知識はすごいですからね。勉強させてもらいます。」

エリオ　「それはいいんですけど、隊長達全員が後ろで見てるんですけど・・・」

スバルたちが机に座っている後ろの壁にはなのは達隊長陣が立って見ている。

近　「気にするな。授業参観だと思えばいい」

キャロ　「・・・私達、授業参観したことないです・・・」

近　「まあまあ、後ろの人たちは気にせずに講義を始めるぞ」

ス　「はい！」

近　「ではティアナ委員長、号令を」

テ　「え！？私、委員長なんですか！？」

ス　「わー、ピッタリ！」

エ　「僕達のリーダーですから、妥当ですよね？」

キ　「じゃあ、私、飼育係したいな」

近　「ほれ、委員長、号令」

テ　「あ、はい・・・き、起立！礼！着席！」

ス　「わー、ホント学校みたい！」

エ　「なんだか、僕ドキドキします！」

キ　「わ、私も・・・」

近　「えー、それでは、講義に移ります。
今回のテーマはこちらです」

そう言い近藤は一枚のディスクを見せる。

ス　「？何のディスクですか？」

近　「いまから、ある映像を見てもらいます。
質問は後で受け付けるんで、とりあえず画面に注目」

そして各人の前のモニタに映像が流れた。
もちろん、後ろで父兄扱いされた隊長陣も見る。

テ　「はい」

エ　「・・・」

エリオは顔を真っ赤にしている。

キ　「・・・」

キャロも真っ赤だが、若干涙目だ。

ス　「あの・・・近藤副隊長？」

近　「この空間では先生と呼びなさい」

ス　「あ、はい・・・じゃあ、近藤先生・・・？」

近　「なんだい？スバル君？」

ス　「映像って・・・隊長達とか私達の変身シーンが流れてるんですけど・・・」

近　「そうだね」

現在流れている映像は
なのは、フェイト、ヴィータ、シグナム、ティアナ、スバル、キャ

ロのバリアジャケット展開時の変身シーンである。
隊長達は顔を真っ赤にして映像を見ている。
フェイトなどは口をアウアウと動かしている。

テ　「・・・これに何の意味が？」

近　「じゃあ次はこれを見てもらおうかな？」

エ　「・・・・・・あ、僕だ」

キ　「エリオ君の変身シーンだね」

近　「さて、君達に質問だ。最初の映像と、今見たエリオの映像、違いがわかるかな？」

ス　「え～、なんだろう・・・槍・・・？」

テ　「ん～・・・こども？いや、それじゃあキャロが違うか・・・」

キ　「エリオ君だけ男の子だね」

近　「キャロ！正解！」

近藤はキャロの頭を撫でた。

キ　「えへへ・・・」

キャロは大喜びだ。

テ　「え！？そんなこと！？く・・・深読みしすぎた・・・」

ス　「でも、その男のエリオと私達とどう違いがあるんですか?」

近　「うむ、では両方の映像を見比べてみよう。女性人の変身シーンは誰にしようかな?」

近藤は隊長陣に目をやる。
皆目を背ける。

近　「ん~、エリオ、誰の変身シーンが見たい?」

エ　「え!?ぼ、僕に聞くんですか!?そ、そそそそんな・・・こと・・・言えませんよ・・・」

近　「まあ、誰だもいいんだよ。どうせ皆真っ裸になるんだし。
じゃあ、変身シーンが一番カッコイイと巷で評判のスバルにしよう」

隊長陣はホッと息を吐いた。

ス　「え?私の変身かっこいいんですか!?」

近　「ああ、一番燃えるそうだ。萌えじゃないぞ、燃えだ」

ス　「いや~、それじゃあ仕方が無いですよね!
そっか~かっこいいって評判か~照れるな~」

テ　「・・・単純・・・」

近　「まあとりあえず、見比べてみよう」

―――――　スバルとエリオの変身シーン見比べ中　―――――

近　「どうだ？違いがわかったか？」

エ　「あ、あの・・・いいですか？」

近　「お、エリオ、どんどん発言してくれよ！別に間違ってもいいからな！」

エ　「あ・・・はい・・・じゃあ・・・あの、僕だけ最初から服着てますよね？」

近　「エリオ！！正解！！」

近藤はエリオの頭を撫でた。
エリオは大喜びだ！

テ　「あの・・・それがどういう・・・？」

近　「うむ、では説明しよう。
　最初に言っておくが、この映像は俺が隠し撮りしたものじゃあないぞ」

ス　「ええ！？じゃあ、誰が・・・」

近　「これは時空管理局で絶賛発売中の『美人局員の赤裸々変身』というディスクだ」

エ　「う、売ってるんですか！？それ！？」

近　「うむ。中身はウチの隊長陣のほか、君ら3人や、他の局員の美人どころの変身シーンが網羅されている。
　総時間にして2時間収録されている」

皆絶句している。
隊長陣に関しては顔を真っ青にしている。

近　「まあ、何がいいたいかと言えばだ、デバイスには性別判定機能や、変身過程省略機能があるということだ」

テ　「え！？そんなのあるんですか！？」

近　「ある。現に、エリオは性別調整で『男』にしているから、裸にはならない」

エ　「そ・・・そうだったんだ・・・」

近　「だからといって、性別を偽ることは不可能だ。
　何故だかわからんが、デバイスは自動で性別を判断するようでな。
　これぱっかりはどうにもならん」

キ　「そ・・・そんな・・・」

近　「そこで、省略機能だ。皆、次はこの映像を見てくれ」

ス　「?ヴィータ副隊長にシグナム副隊長・・・」

テ　「シャマル先生も・・・」

エ　「あれ?変身シーンがないですよ!?」

キ　「なんか、下からバリアジャケットが展開して裸にならないね」

いまスバルたちは魔法少女リリカルなのはA's時のヴォルケンズの変身シーンを見ている。
シグナムとヴィータはビックリしている。

近　「この映像からもわかるように、任意で変身シーンは省略できるんです」

全員　「な、なんだってー!!?」

近　「?隊長達はご存知なかったんですか?
てっきり知っててやってたとばかり・・・」

フェイト　「わ、私達も知りませんでした!!」

なのは　「知っててやってたら痴女じゃないですか!?」

ヴィータ　「全然知らんかった・・・まさか変身シーンが撮られているなんて・・・」

シグナム　「しかも、管理局で販売されているとは・・・」

近　「結構売れてますよ?若い男性達の夜のお「わーわーわー!言わなくていいよ!!」・・・そうですか?」

テ　「あ、あの!それで、副隊長達はどうやって変身シーンを省略してたんですか!?」

ヴ　「うっ!?」

シ　「そ・・・それは・・・」

皆の真剣な眼差しに引くヴィータとシグナム。

ヴ　「す・・・すまねぇ!私らもわからないんだ!!」

シ　「というか、考えたこともなかったのだ。
そうか・・・以前の私達は変身過程を省略していたのか・・・ん?では何故今は省略できていないんだ?」

近　「それは俺が説明します」

な　「近藤さん・・・」

フ　「なんか、すごい頼もしいよ、近藤さん」

近　「管理局で調整すると、強制的に省略機能をオフにされるんですよ」

な　「な!?なんでそんなことを・・・?」

近　「実は、このディスクの売り上げは管理局の財政に回されます」

フ　「!?ま・・・まさか・・・」

近　「はい、お察しのとおり、管理局のお金のためにワザと省略機能を外しているんです」

ヴ　「・・・・・ッ!!?」

シ　「な・・・なんという・・・!!」

近　「まあ、そんな訳で今更ですが、皆さん嫁入り前の体ですからデバイスの調整を行いたいと思いまして」

フ　「よろしくお願いします!!」

な　「ホントにお願いします!!」

近　「・・・まかせてください。」

キ　「エリオ君・・・私、裸をいろんな人に見られてたんだ・・・」

エ　「だ、大丈夫だよ!キャロはかわいいんだし、もし何かあっても僕が守るよ!!」

キ　「エリオ君・・・ありがとう・・・」

シ　「そういえば、このことはシャーリーは知っているのか?」

近　「シャーリーはおそらく知らないと思います。
しっててやってたらぶっ飛ばしてますよ」

シ　「う、うむ・・・物言いは物騒だが、そのとおりだな」

近　「では、これから本格的に変身過程省略機能の設定を行いますので、皆さんデバイスを出してください」

一同　「はい！！」

こうして、機動六課の女性陣は変身に気をつけることなく心置きなく出動したとか。

なお、後日、このディスク販売はリンディの鶴の一声により販売停止になり、

プレミアがついたという。

な　「今回はホントに近藤さんがいてくれてよかったね！」

フ　「うん、そうだね。

今回ほど近藤さんに感謝したことはないよ」

ヴ　「ほんと、あいつはこういう裏技的なものが得意だよな」

シ　「うむ、あれで腕っ節があれば言うこと無しなんだがな」

な　「あれ？シグナムさん、もしかして・・・」

シ　「な！？わ、私はなにも近藤のことなど！！」

フ　「フフ、ムキになるところがまた・・・」

シ　「くっ、テスタロッサ！！」

ヴ　「へー、シグナムはあーゆーのがいいのか・・・」

プチン

シ　「き・・・貴様らー！！」

機動六課は今日も平和のようです。

## 第１９話（前書き）

今回、かなりメンバーが子供みたいになってしまいました。
自分のボキャの無さを痛感しました。
そんな話ですが、まったり見ていってください。

# 第19話

近藤が別任務から帰ったとき、機動六課の面々もちょうどホテル・アグスタの警備任務を終わらせて帰ってきたところだった。
実は、近藤は本当はもっと早く帰れたのだが、
エレノアのケーキバイキングに付き合わされた為帰ってくるのが遅れてしまったのだ。
それも5日連続ケーキバイキングである。

「アカシックレコードを使った罰なの！」

などとエレノアに言われてしまい、近藤は渋々従った。
近藤は甘いものがあまり好きではなく、ケーキなど以っての外だ。
しかも、ケーキバイキングなんて場所は女性しかいない所だ。
そんな中に眼帯をしたコワモテの近藤がいるのだ。
注目されないワケがない。
かたや、連れのエレノアは銀髪の絶世の美女。
まさに、美女と野獣。
周りの視線がグサグサ刺さり、ヒソヒソ話をされる。
これが5日続いたのだ。
エレノアは終始ご満悦で、パクパクケーキを口の中に放り込んでいたが、近藤は肩身の狭い思いをした。

「ウマウマなの～！」

「・・・そうか・・・よかったな・・・」

近藤の嫌いなものにケーキが追加された日だった。

隊舎で近藤はなのはやフェイトを見つけると、任務はどうだったかを聞いてみた。
すると、二人は何か難しそうな顔をするだけで何も喋らない。
ヴィータに至っては怒っている。

「あの、なにかあったんですか？」

近藤はヴィータに話しを聞いてみた。
どうやら、ホテル・アグスタに予想通りガジェットドローンが現れたのだが、
そのときの戦闘でスバルとティアナが連携ミスを犯したらしい。
一歩間違えばスバルが大怪我をするような行動だったと、
ヴィータはそのときのことを思い出したのか、イライラしながら言った。
本人達曰く、れっきとした作戦だと言っているそうだが、
近藤はその現場にいなかったため、その証言に対して正否の判断がしにくい。
作戦と言っていたのだから、発案者はティアナだろう、あくまで作戦ならば、だが。
しかし、以前近藤はティアナに対して何か危うい感じがしたが、まさか、味方に怪我をさせそうになるとは。

「二人は反省してるんですか？」

ヴィータは「多分な」と言っているが、二人にめちゃくちゃ怒ったらしいので、現在はヘコんでいるだろう。

「確かにあいつらは何か考えがあってあんなことをしたんだろう。
でもあたしは認めない。
仲間を犠牲にしてまでする場面じゃなかった」

ヴィータは普段口が悪く、つっけんどんな態度を取っているが、
その実、かなり仲間想いの世話やきで、細かいところに目が行き届く卓越した洞察力を持つ。
だからこそ、新人の指導も口調はきついながらも、最後まで面倒を見ているのだ。
愛の鞭としては些か厳しいかもしれないが、新人はいつまでも新人ではない。
いつか、自分達も後輩を指導したり、責任ある任務をこなさなければならないのだ。
だからこそ、甘えは許さない。
相手にも、自分にも。

なにより、ヴィータは8年前のなのはと近藤の出来事から、この手の事にかなり敏感になっている。
もう二度と自分の仲間にあのような事が起きてほしくない。
見たくもない。
そんなことを考えていると、近藤はヴィータに質問した。

「二人にはその行動の理由を聞いたんですか？」

「あぁ？理由？」

理由？それは作戦理由のことか？危険行為を犯した理由か？
そういえば、頭に血が昇って怒っただけで聞いてないな。

「いや、何も聞いてないな」

ヴィータは素直に近藤にそう言うと、

「そうですか。じゃあ、ティアナとスバルは俺に任せてくれませんか？」

近藤は事故の当事者だ。危険行為を侵した末路を身をもって知っている。

確かに、近藤が適任かもしれない。

「・・・そうだな。お前に任せた方がいいかもな。わかった。頼んだぞ、近藤」

「了解です。」

その日の夜、近藤は空間シミュレータの監視台でひとり缶コーヒーを飲んで人を待っていた。

大分暖かくなってきたが、やはり夜はまだ寒いなどと考えていた。

しばらくすると遠くから声がした。

「すいませーん！遅くなりましたー！」

「おー。悪いなスバル、夜遅くにいきなり呼び出したりして」

「いえ、構いません。それでご用って・・・」

近藤はまずスバルを呼び出した。
ティアナと一番付き合いの長いパートナーであるスバルから、客観的視点からの意見を聞こうというのだ。

「なに、ホテル・アグスタでヴィータ副隊長にコッテリしぼられたと聞いてな。ヘコんでないかの確認をね」

スバルはホテル・アグスタの件と聞いて少し落ち込んだ。
よっぽど怒られたんだろう。
近藤は肩を竦めてクスリと笑い、スバルに持っていたもうひとつの缶コーヒーを渡した。

「俺は怒るために呼び出したんじゃないんだ。ま、これでも飲んでゆっくり話そう」

「あ、はい」

スバルは怒られないと聞いてホッとしたようだ。
缶のプルタブを開け、コーヒーをチビチビ飲む。

「・・・にが」

スバルは舌を出して苦そうな顔をする。

「ああ、スマンスマン。ブラックはダメだったか？」

近藤は甘いものが苦手なので、コーヒーも砂糖無しのブラックしか飲まない。
自分の感覚でスバルの分もブラックを買ってしまったのだ。

やはりスバル達のような１０代にブラックはキツイようだ。

「あ、いえ、すいません。折角用意してくれたのに・・・」

スバルは恐縮する。

「いや、コチラが気を遣わなかったせいだから、いいよ。それよりも、とりあえず話しなんだが？」

「あ、はい、何でしょうか？」

近藤は手摺りにもたれ掛かり、スバルと向かい合う。
スバルも缶コーヒーを両手で持ち、近藤に正対する。

「まあ、ティアナのことなんだけど」

「ティア・・・ですか？」

てっきり自分の事を聞かれると思っていたスバルは少し驚いた顔をした。

「スバルはティアナと付き合いが一番長いだろう？」

「はい・・・」

「ティアナは今回危険行為をしたんだよな？」

スバルは近藤の危険行為という言葉に即座に反応し反論しようとするが、

「ああ、別にその事をとやかく言うつもりはないよ。
ま、作戦にしろ、事故にしろ、危なかったっていうのは本当だろ？」
スバルはうっとうめき声をあげ、素直に「はい・・・」と言った。
「まぁ、それでなんだが、ティアナは昔からそういう危なっかしい
行動や作戦をとっていたのか？」
「い、いえ、以前いた３８６部隊ではそんなことは・・・」
実際、ティアナは堅実で正確な指示をとばせる有能な指揮官後方支
援を得意とするスタイルだ。
危なっかしい指揮をとっていれば、機動六課にも呼ばれていないだ
ろう。
スバルの言葉に近藤はふむと頷き、顎に手をやり考えるそぶりをす
る。
「じゃあ、最近なにかティアナに変わったことは？」
「最近ですか？」
スバルは空を見上げて考え込む。
うーんと唸っていると何か思い出したのか、あぁ、そういえば、と
近藤を見た。
「ティア最近おかしいんですよ。
この前の地球に行った時も、自分は役に立たなかったとか、自分は
力が無いとか、お荷物だとかそんなことばかり言って」
周囲への劣等感か？

どうやら、ティアナは自分が非力な存在の凡人とでも思っているようだ。
近藤から見れば、素質は十分天才クラスだというのに。
しかし、仕方ないことかもしれない。
自分の周りにはエースやら、レアスキルを持っている人間ばかりなのだから。

近藤にはティアナの気持ちがよくわかる。
近藤もまた、凡人だからだ。
たまたま、想像を超える力を手に入れたが、やはり分不相応の力、近藤には過ぎた力だ。
あの力は近藤の体を蝕む。
命を削る。
身の丈に合わない力はいつか身を滅ぼす。
ティアナの求める力とはそういう力なのだ。
一度ティアナに言い含めなければならないらしい。

「ありがとう、夜遅くに悪かったな。今度はティアナ本人に聞いてみるよ」

とりあえず近藤はスバルとの話しを切り上げることにした。
明日も朝の訓練で早いことだし、夜更かしはお肌の大敵だし。

「あ、はい。ありがとうございました」

そして、その日の近藤の一日は終わった。

それから数日、近藤はティアナと話しをする機会がなかった。
近藤自身の別任務中に溜まった仕事の処理に追われ、訓練にも顔を出せなかった。

なにかドサクサに、フェイト隊長とシグナム副隊長の仕事も処理した気がするが気のせいか？

「気のせいですよ」

「ああ、気のせいだ」

あの、フェイト隊長？シグナム副隊長？
そう言いながらお二人の手元には何もありませんよね？
優雅にティータイムですか？

「私達は自分の分は終わりましたよ」

「うむ、そうだ。私達の分担の分は終わったぞ」

それは俺の割合がお二人より多いと言う意味では？

「気のせいですよ」

「気のせいだな」

・・・泣きたい・・・

そんななか、近藤はなのはに訓練状況を聞いてみた。
どうも、スバルとティアナは朝練の前に自分達だけで早朝練習をしているらしい。
そして、二人で勝手なフォーメーションを行い、早朝練習の疲労やそういう行動で四人の連携があまりうまくとれていないそうだ。
そんな二人になのはやヴィータは注意するのだが、その場では反省し訓練中は支持に従うが、早朝練習をやめないという。

「なのは隊長はティアナと話しをしましたか？」

近藤はなのはとティアナのコミュニケーション不足を指摘した。

「今のあの子達には何を言っても聞いてもらえないですよ。
早朝練習自体は悪い行為ではないですしね。
ただ、訓練に差し支えが出てきたんで、少し自重してもらいたいんですけど・・・」

なのはは静かに話すが、以前の自分と重ね合わせているのか若干不安そうだ。
普段より話すトーンが低い。
こういうおとなしい娘が怒ると想像を超える行動をとるので、そうなる前になんとかしておきたい。

「ティアナが今何に悩んでいるか知っていますか？」

近藤はティアナの気持ちを代弁するようになのはに話す。

「確かに、なのは隊長は彼女達のために練習メニューを考えたり、それぞれの特性、癖などを把握しているのは知っています。しかし、彼女等に訓練の意味を話しましたか？なのは隊長の訓練に対する思いを彼女等に伝えましたか？」

なのはは何も言わない。

「ティアナは訓練の意味、自分の機動六課での存在意義に疑問を持っています。人間にはお互いを尊重し、話し合いをすることが出来ます。意地を張らず、お互い歩み寄るのも必要ですよ」

近藤はそう言うとなのはに挨拶をして、その場を後にした。

なのははそんな近藤の背中をずっと見ていた。

翌日の早朝、近藤は欠伸を噛み殺しティアナが自主練しているという場所へ行く。

するとそこにはティアナが擦り傷やアザだらけで一人黙々と練習をしていた。

いつも二人で行っていると聞いていたが、どうやらスバルは寝坊したらしい。

「おーい！ティアナー！」

近藤は練習中のティアナに声をかけた。

「え!?近藤副隊長!?」

ティアナは練習を中断し、近藤の元へ駆け寄る。

「朝早くからご苦労さん。ほれ、差し入れだ」

そう言うと、近藤はティアナにペットボトルのスポーツドリンクを投げて渡した。
ティアナはいきなり投げ渡されたのでワタワタして受け取る。

「え、あ、わっと、あ、ありがとうございます・・・」

そして近藤は地面に胡座をかいて座り、自分用に缶コーヒーを買っておいたので、
それをポケットから取り出し、プルタブを開ける。

「ほれ、ティアナも飲め。水分補給はこまめに採らないとダメだぞ」

「あ・・・はぁ・・・」

ティアナは何か釈然としないながらも地面に座り、近藤の言う通りスポーツドリンクを飲みだした。
グレープフルーツの甘酸っぱい味が口の中に広がり、喉を通ると体中に染み渡るような感覚に、
ティアナは「生き返る」とはこういうことか、と感じた。
喉も潤し、ある程度休憩をとったので、ティアナは近藤に聞いた。

「近藤副隊長は・・・どうしてここに?」

もしかしたら、自分の勝手な行動を止めに来たのかと思った。
しかし、近藤はなんとも中途半端な答えを返してきた。

「ん？ああ、まぁ、ちょっと様子見にな」

「様子見・・・ですか？」

ティアナは疑わしげな表情をして近藤を見つめる。

「それと、少し話しがしたかった。最近なかなか会えなかったからな」

「はぁ・・・」

ティアナは近藤が一体何をしに来たのかよくわからなかった。

「ティアナは普段の訓練はつまらないか？」

「え？」

いきなりの質問にティアナは戸惑う。

「えっと・・・その・・・」

ティアナは言い淀む。
確かに物足りない。
いつも基礎の繰り返しで、自分の力量がわからない。
もっと実戦テクニックを教えてほしい。
エースオブエースのテクニックを。
そう思うが、近藤に対して本当の事を言うのは気が引ける。

「じゃあ質問を変えよう。ティアナは執務官志望だよな？」

「え、あ、はい」

「どうして執務官になりたいんだ？」

近藤のストレートな質問に黙ってしまうティアナ。

本当は近藤も理由を知っている。

執務官を目指す理由、力を求める理由それらが兄のためであると言うことを。

彼女の兄、ティーダ・ランスターは当時色々有名だったからだ。

「ああ、言いにくい事なら言わなくていいよ。ただな、言わせてほしいことがあるんだ」

「・・・なんですか？」

「執務官になる夢は仲間を危険に晒してでもなりたいものか？」

ティアナは息を飲んだ。

近藤の言葉がティアナの心をえぐる。

違う、私はもう誰も傷ついて欲しくないだけだ。

でもティアナは言葉が出てこなかった。

「そして、執務官になって何がしたいんだ？」

執務官の先・・・

ティアナは考えていなかった。

「兄の魔法は役立たずではない」と証明するために執務官になる。
それが目的だった。
だから、ティアナは近藤の質問に答えられない。

「ティアナのこの状況に焦る気持ちはよくわかるよ」

ティアナは近藤の言葉にカチンときて、声を荒げる。

「近藤副隊長に私の何がわかるっていうんですか・・・！」

「俺も凡人だからだ」

ティアナは目を見開く。

「え・・・でも、近藤副隊長は・・・私達の知らない知識なんかをいっぱい知っていて・・・」

「あんなもの、時間があれば誰でも知りうる情報ばかりだ。
年の功だ、年の功。」

近藤はティアナの疑問をアッサリ返す。

「しかも俺は潜在魔力量もティアナより下だ」

ティアナはビックリする。
副隊長の魔力量が自分より下？
そんなバカなこと・・・

「だから、ティアナが周囲の人間に劣等感を抱くのはよくわかる」

何故自分には彼女達のようにレアスキルがないのだろう。
何故自分には彼女達のような膨大な魔力がないのだろう。
何故自分はここにいるのだろう。
ティアナはそんなことばかりを考えていた。
だが、近藤は思いもよらないことを言った。

「だけどな、ティアナ。お前は凡人じゃないぞ」

「え？」

私が凡人じゃない？
私を心配して見に来てくれたヴァイス陸曹もそんな感じのことを言っていた気がする。
スバルやエリオのような才能もない、キャロのようなレアスキルもない私が？

「目に見える力が全てじゃないだろ？ティアナはココだ」

そう言うと近藤は頭を指差す。

「状況を瞬時に確認する洞察力、最善の策を練ることができる判断力、的確に指示できる指揮能力、そしてその頭脳だ」

ティアナは何も言わない。
驚きで何も言えない。
自分は目に見える力しか求めていなかった。
だが、近藤は違うと、自分には別の才能があると言った。

「それに、頭の使いようで、魔法でもスバルやなのは隊長達に勝てるぞ」

「ほ、本当ですか！？」

ティアナは魔法でなのはに勝てるというところに食いついた。
ティアナさん、なんとも好戦的だこと。

「ま、焦らないことだ。
今はまだ土台作りの時期で基礎をイヤというくらいしなければならない。それにな、焦って失敗するとこうなるぞ」

そう言い近藤は自分の眼帯を指差した。
ティアナは驚きで声が出ない。

「とりあえず、なのは隊長と一度じっくり話し合うといい。
そして、基礎の意味、訓練の意味となのは隊長の思いを教えてもらえ。
意地を張らずに、歩み寄れば自分の周囲の世界は変わるさ」

「歩み寄る・・・」

ティアナは近藤の言葉に考え込む。

「それとなティアナ、お前は一人じゃない。
戦場ではお前は一人で戦わないだろう？仲間を頼れ。
そうすれば違う考えも浮かぶさ」

「・・・仲間・・・」

「俺が言いたかったのはそれだけだ。
あ、自主練もほどほどにな。

常にベストコンディションを保つのも隊員の大事な仕事だぞ」

じゃあな、と言い近藤は立ち上がりティアナに手を振ってその場を後にした。

一人残ったティアナは近藤の言葉を頭の中で反芻していた。

しかし、その後もなのはとティアナはお互い歩み寄らず、なのは対スバル、ティアナコンビの模擬戦の日がきてしまった。

## 第２０話（前書き）

この話を書いているときが一番つらかったです。
みんなの不器用さが歯がゆいです。
そんな感じですが、
まったり見てやってください。

# 第２０話

結論から言うと、なのはとティアナは近藤の忠告を聞かずに模擬戦を行った。
近藤との話からの数日、二人はお互い自分の気持ちを伝えず、分かり合わず、結果最悪の形となった。
自分が正しい、自分の気持ちは相手にはわからない、それに、今更聞くにも・・・
という二人の子供っぽい心理まで近藤は考えていなかった。

だからこそ、
ティアナは自分の進む道に疑うことなく、
なのはも自分の訓練プログラムに疑うことなく、
その想いがすれ違い、お互い傷ついた。
そんな姿に、近藤は久しぶりに”　キレた　”。

話は模擬戦開始前に遡る。

「さーて、それじゃあ午前中のまとめ、２ｏｎ１の模擬戦やるよ！」
なのはが訓練の締めとして模擬戦にて見極めをしようというらしい。
「まずはスターズからやろうか？バリアジャケット準備して！」
「はい！」

ティアナとスバルは元気よく返事をする。

「エリオとキャロはあたしと見学だ」

「はい」

ヴィータはエリオとキャロを連れて戦闘区域を離れるため、近くの廃ビルの屋上へ向かった。

ティアナとスバルはバリアジャケットを展開し、戦闘準備をする。

「やるわよ！スバル！」

ティアナは目で作戦を伝え、

「うん！！」

スバルはそれを元気な返事で返す。

二人は早朝自主練の成果をなのはに見せるためお互い気合をいれる。

ちょうど模擬戦が始まろうとする時、フェイトと近藤は空間シミュレータへ向かい走っていた。

そして、擬似空間の廃ビルの屋上へたどり着き、扉を開けると、そこにはヴィータ、エリオ、キャロがいた。

「あぁ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

「フェイトさん！近藤副隊長！」

ビルの屋上に着いたフェイトと近藤に挨拶をするエリオとキャロに近藤は手を軽く上げて答える。

「私も手伝おうと思ってたのに」

「フェイト隊長がなんでもかんでも俺に書類回すからこんなことになるんですよ」

「う・・・すいません」

近藤にジト目で見られ、気まずくなり謝るフェイト。
フェイトは近藤がデスクワークが早いことをいいことに、連日大量の書類を近藤に任せた。
内容も確認せずに。
結果、フェイト自身が処理しなければならない案件まで近藤に回してしまい、
それを近藤に指摘され、慌てて取り掛かったのだが、それでも時間をロスしてしまい、訓練に参加できなかったのだ。

「・・・今はスターズの番」

ヴィータはため息交じりでフェイトを見、現在の進捗状況を伝える。

「・・・ホントはスターズの模擬戦も引き受けようと思ってたんだけどね」

フェイトは模擬戦を行おうとしているなのはを心配そうに見る。

「ああ。なのはもココ最近は訓練密度が高いからな。・・・少し休ませねーと」

ヴィータも最近のなのはのオーバーワークは気になっていたようだ。
険しい顔でなのはを見ている。

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニタに向かいっぱなしなんだよ。
訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形見たり」

「なのはさん・・・訓練中も、いつも僕達のこと見ていてくれてるんですよね・・・」

エリオは普段の訓練でのなのはの心配りを感慨深げに語る。

「ほんとに・・・ずっと・・・」

キャロもエリオに賛同するように嬉しそうになのはを見る。
ヴィータはそんな二人を微笑みながら見つめる。

だが、近藤は二人とは違う感想を抱いていた。

(そこまで彼女達のことを考えていながら、何故それを伝えようとしない?言わなくてもわかってくれると思っているのか?)

確かに、エリオとキャロ、おそらくスバルもなのはのそういう思いはわかっているだろう。
なのはが自分達のことを考えて行動してくれている。実際、エリオとキャロはわかっている。
だが、ティアナは別だ。
なのはの、言わなくてもわかってくれるという思いは大間違いだ。
ティアナは周囲に劣等感を抱き、疑心暗鬼になり、なのはの言葉に

も劣等感というフィルター越しでしか聞いていないだろう。
そんな人間が素直に思いを受け止めるだろうか。
最初からある程度できる人間側と努力でやっとそこにたどり着く人間。
この差、心の溝はかなり深い。

「おっ、クロスシフトだな」

ヴィータがティアナの戦闘陣形を見てつぶやいた。
ティアナは周囲に１０個程の魔法弾を展開している。
近藤はそんなティアナに辛口評価を下す。

（攻撃方法がまるわかりだ。魔法弾は死角から展開しないと。
それにティアナ自身も平地に堂々と居すぎだ。
あんなもの、敵に撃ってくれと言っているようなものだぞ）

「クロスファイア・・・シュート！」

ティアナは魔法弾をなのは向けて発射する。
だが、その魔法弾はスピードが遅い。

「・・・？なんかキレがねーな？」

ヴィータはティアナのクロスファイアにいつもの勢いが無いことに疑問を抱く。

「コントロールはいいみたいだけど？」

フェイトは正確なコントロールに目をやるが、それでもヴィータは釈然としないようだ。

「いや、それにしたって・・・」

「フェイントでしょ。次の一手への布石としての」

近藤の言葉にヴィータとフェイトが近藤を見る。

「でも、フェイントも本気でやらいと、なのは隊長くらいの人ならすぐにバレますよ」

クロスファイアは、飛んで回避するなのはの後ろを追尾し続ける。
すると、なのはの前にスバルのウィングロードが展開しその上にはスバルがなのは向けて近づいていた。
なのはは迫り来るスバルを確認する。

「!?フェイクじゃない、本物!?」

なのはは即座に魔法弾を展開し前方のスバルに向けて発射する。
スバルは飛んでくる魔法弾をシールドで防御し突進をやめない。
何個かのスフィアはスバルのシールドを突破し、スバルの体をかすっていく。
そして、全ての魔法弾を捌ききると、スバルはなのは目掛けてリボルバーナックルを振り下ろす。

「うおりゃあぁぁぁぁっ!!」

なのはは咄嗟にレイジングハートでシールドを展開しスバルのリボルバーナックルを防御する。
スバルは力押しでなのはのシールドを破ろうとしているのか、回避するそぶりを見せない。

リボルバーナックルのナックルスピナーが回転数をあげ唸る。
なのははスバルの無茶な突進に顔を顰める。
すると、なのははレイジングハートを振り、スバルを弾き飛ばす。

「きゃあぁぁぁぁっ！？」

吹き飛ばされたスバルはなんとかウィングロードの上に着地する。

「こらスバル！ダメだよ、そんな危ない軌道！」

なのははスバルを叱りながら、ティアナのクロスファイアをよけ続ける。

「すいません！でも、ちゃんと防ぎますから！！」

なのはは怪訝な顔をする。

防ぐ？何を？

そういえばティアナは？

最初のクロスファイアからどこに行った？
なのはは周囲を見渡す。
すると、別の廃ビルの屋上で光の反射を確認した。
そこには、ティアナが砲撃準備し、しっかりなのはをロックしていた。

「砲撃？ティアナが！？」

フェイトは驚いている。

当然だ、ティアナは普段の訓練では砲撃などしていないし、教えていない。

「意外性はいい。だが時間がかかりすぎる。見つかる前にチャージを完了していれば、あるいは・・・だがあれも恐らく・・・」

近藤はティアナの作戦に感心しつつも、欠点を指摘し次の一手を見守る。

なのはは普段の練習と違う動きに不快感をあらわす。

「（特訓成果、クロスシフトC！行くわよ！スバル！！）」

「おう！！」

ティアナの合図と同時にリボルバーナックルがカートリッジをロードし、マッハキャリバーがうねりを上げる。

そして、マッハキャリバーの突進力で一気になのはとの距離を詰めるスバルは、

リボルバーナックルを振り上げなのは目掛けて体ごと突撃する。

なのはは魔法弾を展開するが、スバルはそれ等を全て避け、拳の届く距離まで近づき、リボルバーナックルを振り下ろした。

だが、なのはもレイジングハートでシールドを展開しリボルバーナックルの攻撃を防ぐ。

両者の魔法がぶつかり合い、火花を散らせる。

ナックルスピナーの回転が上がるが、シールドが突破できない。

スバルは必死になのはに喰らいつき、なのはの隙を作る。

なのははスバルの攻撃を防御しつつ、ティアナの方を見る。

すると、砲撃準備をしていたティアナはその場から消えてしまった。

「あっちのティアさんは幻影！？」

「本物は！？」

キャロとエリオが慌てている。
隊長陣は冷静に見守っている。

（やっぱりな。じゃあ本命はクロスファイアか？）

近藤はティアナの策の終着を考えた。
普段使わない砲撃をあの局面で使うのは危険行為だ。
それに、どこから砲撃するのか？理想は死角の下からが望ましいが
そうするとスバルが危ない。
砲撃をフェイクとして、正確にクロスファイアで狙うのが一番確率
が高いだろう。
そう考え、ティアナの居る位置を確認すると、
ティアナはなのはの頭上に展開されたウィングロードを走っていた。

「・・・はぁ？」

近藤は呆気にとられた。
確かに、戦闘では意外性により戦局が変わることがある。
だが、ティアナのそれはダメなほうの意外性だ。
はっきり言って悪手だ。
せっかくのアドバンテージを自分で無くしてどうするのか。
そんな近藤の心配を他所にティアナは走り続ける。

（バリアを切り裂いて、フィールドを突き抜ける！）

ティアナの持つクロスミラージュの銃口部分から魔力の刃（ダガー）が現れた。
そして、その刃をなのはに向けて飛び込む。

「一撃必殺！でえぇぇぃっ！！」

自分を省みない危険行動と、慣れない魔法、自分のポジションを無視した戦略、どれをとってもダメだ。

そんなティアナにとうとうなのはがキレた。

「レイジングハート、モードリリース」

《ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．》

レイジングハートはマスターの言葉に従い、待機モードへ移行した。

レイジングハートが無くなったことで、なのはの右手は空いた。

「だあぁぁぁっ！！」

ティアナの掛け声と共になのは達のいた場所は爆発し爆煙に包まれた。

衝撃波が、離れて見ていた近藤たちにも襲い掛かる。

「な、なのは！？」

フェイトはなのはの安否を心配する。

おそらく、まともに喰らっていたらただでは済まないだろう。

そう、まともに喰らっていれば、だが。

しばらくして、煙が晴れ、現場の状態が見え始めた時、フェイトたちは驚いた。

「・・・おかしいな・・・二人とも・・・どうしちゃったのかな？」

なのはに対峙しているスバルやティアナも驚いた。
左手でスバルのリボルバーナックルを受け止め、
右手でティアナのクロスミラージュのダガー部分を掴んでいる。

「がんばってるのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ」

なのはは静かに語りだす。
しかし、二人とは目を合わせず淡々と怒りを表す。

「練習の時だけ言うこと聞いてる振りで、本番でこんな危険な無茶するんじゃあ、練習の意味・・・ないじゃない？」

クロスミラージュのダガー部分を素手で掴んでいるため、なのはの手からは血があふれ出ている。
ティアナなその血を見て恐怖する。
傷つけてしまった。訓練とはいえ、仲間を、傷つけてしまった。

「ちゃんとさ・・・練習どおりやろうよ。ねえ？」

スバルはなのはの怒りに震え、まともに喋れない。

「私の言ってること・・・私の訓練・・・そんなに間違ってる・・・？」

なのははティアナを見上げる。
しかし、ティアナはなのはと目を合わせることが出来ず、クロスミラージュのダガーを解除し、なのはと距離をとる。
そして、体制を立て直し、クロスミラージュをツーハンドで構え、

カートリッジをロードする。
すると、ティアナの前に魔方陣が展開し、砲撃準備を行う。

「私は！もう・・・誰も傷つけたくないから！！無くしたくないから！！」

ティアナは涙を流し自分の思いをぶつける。
そんな独白にスバルはただ見ているしかなく、立ち尽くしていた。

「だから・・・だから！強くなりたいんです！！」

ティアナの叫びが近藤達のところにも届く。
皆、ティアナがこんなに思いつめていたとは思ってもいなかった。
ティアナの強さへの渇望がここまでだったとは。
エリオとキャロはショックが隠せないようで、呆然としている。
ヴィータとフェイトはまっすぐ事の成り行きを見ている。
そして近藤は、

（・・・バカもんが・・・）

怒っていた。

なのははティアナの独白を聞くと、ゆっくりと左腕をあげ、人差し指をティアナに向ける。
そしてゆっくりと、こう言った。

「少し・・・頭、冷やそ・・・」

なのはの足元に魔方陣が展開し指先に魔力が集まりだす。

「クロスファイア」

なのはは静かに魔法を唱え、

「うわあああぁぁぁ!!ファントムブレ・・・」

ティアナが必殺の砲撃魔法を言い終わる前に、

「シュート。」

なのははクロスファイアをティアナ目掛けて発射した。

そして、クロスファイアはティアナに被弾し、爆発した。

「ティア・・・!?バインド!?」

スバルはティアナの所へ駆け寄ろうとしたが、いつの間にかバインドで拘束されていた。

スバルはなのはを見るが、なのははティアナから視線を離さない。

そして、なのはが無常の言葉を告げる。

「じっとして・・・よく見てなさい」

煙の晴れた中に、フラフラのティアナがいた。

今にも倒れそうだ。

そして、なのはは二発目のクロスファイアをティアナに向けた。

「!?なのはさん!?」

スバルの悲痛な叫びも空しくなのはの指先からクロスファイアが発射された。

そして、ティアナに被弾し爆発。

と思われた。

だが、爆発は起きず、瞬間クロスファイアは消え失せ、ティアナのいた場所には、

剣を構えた近藤が立っていた。

「な、なにやってんだ、あいつ!?」

近藤は思わずなのはに対してそう漏らしてしまった。

普段の言葉遣いからは想像できない荒っぽい喋り方で。

なのはがティアナを砲撃した。

もう少しやり方があるだろうにと、イライラしながら見ていたら、

なのはは二発目を撃とうとしている。

「ちょっと待て!いくらなんでもオーバーキルだろう!?」

近藤の叫びは届かず、なのはは二発目のクロスファイアを発射した。

「・・・!!ちくしょう!!」

近藤は悪態をつきながら、ティアナの所まで”　跳んだ　”。

皆、現在の状況が理解できていない。
ティアナが撃墜されるかと思っていたら、近藤が剣を持ってティアナの前に立ち、
なのはの放ったクロスファイアも消えてなくなっていた。

「ふー・・・間に合った・・・」

近藤は安心の息を吐き、持っている剣を確認する。
剣と言っても、見た目が剣ぽいだけで、刃はついておらず、ただの白い長方形の板にも見える。
その剣の鍔の部分を確認する。
カートリッジメーターが満タンになりそうだ。

（そんなに強力な魔法をぶつけようとしてたのか？）

近藤は眉間に皺を寄せる。

「近・・・藤・・・ふく・・・隊長・・・？」

近藤の後ろではフラフラのティアナが立っていた。
近藤はティアナに近寄り肩を抱き、

「説教は後だ。今はゆっくり寝てろ。」

そう言うと、ティアナはゆっくりと意識を手放した。
近藤はティアナを抱きかかえ、フェイト達のところへ”　跳んだ”。

いきなり現れた近藤に一同は驚く。
先ほどまでティアナの所にいた近藤が、ティアナを連れて自分達のところに”　いる　”。
いや、そもそも、近藤は、自分達の横で模擬戦を見て”　いた　”はずだ。

「こ、近藤・・・おまえ、何をした・・・？」

ヴィータが信じられないものでも見たかのように震える。
当然だろう。
現在近藤のいる位置から、ティアナのいる位置まで約１００メートル。
それを近藤は一瞬で移動し、戻ってきたのだ。
早く飛んだとか、そんなことではない。
気が付けばもう”　いた　”のだ。

「とりあえず、話は後で。ティアナを医務室までお願いします」

そう言うと、近藤はヴィータ達から約５０メートル離れたスバルのとなりに”　いた　”

「スバル、大丈夫か？」

近藤はスバルに話しかけるがスバルは返事をしない。
スバルはなのはを睨んでいて、近藤に気が付いていない。
なのははいきなりの近藤の登場に驚いている。

「おい、スバル？」

近藤は再三スバルに声をかけた。
すると、スバルの目の色が緑色から金色に変わろうとしていた。

（いかん！暴走する！？）

近藤は咄嗟にスバルの変調に気が付き、応急措置を施す。

『王が命じる　スバル・ナカジマ　ＩＳ強制解除　機人プロテクトＮｏ．４まで展開　その後神経機能冷却』

近藤は魔法の言葉をスバルに告げる。
すると、スバルは体を硬直させ、静かに口を開く。

「・・・イエス、マイ、ロード（仰せのままに）・・・」

すると、スバルはひざをつき、動かなくなる。
しばらくすると、スバルは顔を上げ、

「・・・あれ？ここ・・・あれ！？近藤副隊長！？」

冷静になったスバルは周囲を見渡し、隣に立っている近藤に驚く。

「話は後だ。とりあえずそこにいろ」

「・・・は、はい・・・」

いつもの温和な喋り方ではなく威圧的な口調にスバルは戸惑う。
そして、近藤はなのはに近づき、魔法の言葉を告げる。

『王が命じる　レイジングハート　バリアジャケット強制解除』

《ｙｅｓ，ｍｙ　ｌｏａｄ．（お仰せのままに）》

レイジングハートは2，3度点滅し、なのはのバリアジャケットを解除する。

なのはは、教導隊の制服姿になる。

「え!?あれ!?どういうこと!?レイジングハート!?」

《ｓｏｒｒｙ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ．》

なのはは混乱する。

マスターである自分以外の人間の命令に従うとは。

しかも、ロードと言わなかったか?

いや、そんなことより、近藤さんだ。

いつ現れた?たしか、フェイトちゃんと一緒に廃ビルの屋上で模擬戦を見ていたはずだ。

それが、ティアナの前に現れた。

そして、自分が放ったクロスファイアが消えた。

ティアナをつれて消え、今度はスバルのとなりに”　いた　”。

何がなにやらわからない。

そんなのはの混乱は、

「くるあぁぁぁぁぁっ!!なにやってんだてめえぇぇぇぇっ!!!」

近藤の激怒と拳骨により現実に引き戻される。

ドゴンッという鈍い音が脳天に響き、目の前に火花が散る。

そして、あまりの痛みになのははは頭をおさえ、うずくまる。
あまりにも痛すぎて涙が出てきた。

「おい！おい！！おまえ！？なにやってんの？なあ？」

近藤がうずくまっているなのはに話しかける。
話しかけるなんて生易しいものではない。
脅しだ。
もう、それはもう怒ってる。

「話し合いしろって言ったよな？なあ？言ったよなあ！！」

しゃがんでうずくまっているなのはの顔を下から覗き込む近藤の姿は、コンビニの前でたむろしている不良のようだ。
なのはは近藤の豹変に言葉を無くす。

「おいコラ！聞いてんだよ！！答えろよコラ！！」

「あ、は、はい！言いました！！」

なのはは涙目で答える。
頭が痛いのか、近藤が怖いのか、それとも両方か。

「おまえさあ、ティアナより年上なんだからさあ、おまえから歩み寄るのが普通じゃね？」

「え、あ、その・・・それは・・・」

口ごもるなのはに近藤は眉を吊り上げ、

「これからおまえら説教だ。ロビーで正座して待ってろ」

近藤の横で固まっていたスバルが近藤の言葉に反応する。

「あ、あの・・・おまえらって・・・」

近藤がスバルの方に振り向き言い捨てた。

「もちろんスバル、おまえもだ。なに部外者ぶってんだ」

そう言いその場を立ち去ろうとした近藤は何か思い出したのか、スバルのもとに戻り、

「すまんすまん、忘れてた」

「え？何ですか？」

キョトンとした顔のスバルの脳天に近藤の拳骨が落ちた。

「危険行為の罰だ！アホが！！」

ドスドス音を立てて帰る近藤の後ろ姿を、なのはとスバルは頭を抑え、涙目で見ていた。

それを遠くから見ていたエリオとキャロはガタガタ震えていた。

フェイトは、

（今度から近藤さんの仕事、少し減らそう。うん、そうしよう）

と心に誓い、

ヴィータは

（普段おとなしい奴が怒るととんでもねえな・・・）

と冷や汗をかいていた。

その後のエリオとキャロの模擬戦はフェイトが担当したが、
二人とも先ほどの近藤の豹変に相当ショックを受けたらしく、全然訓練に身が入らなかった。
フェイトも、ティアナを医務室に連れて行った後にエリオ達の模擬戦を見ていたヴィータも、二人を叱ることなく、

「近藤は怒らせないようにしような」

と忠告するのみだったという。

## 第２１話（前書き）

なんかダラダラしてしまいました。読みづらいかもしれませんが、よろしくお願いします。

# 第２１話

近藤の説教は２時間続いた。
なのはとスバルはその間、硬い床の上で正座させられている。
もちろん裸足で。

途中、スバルが足を痺れさせモゾモゾ動いているところを、近藤が目ざとく見つけ、スバルの痺れた足に悪戯し、スバルがのたうちまわる姿が機動六課のロビーで見られた。
なのははそんなスバルの姿に戦慄し、意地でも足の痺れを隠そうとした。
ロビーを通過する局員に変な目で見られ、なのはとスバルはとても恥ずかしい思いをした。

「あれ、何してんの？」

ロビーで正座している二人をはやてが目にし、リインに質問した。

「お説教って聞いてるです。」

はやての横をフヨフヨ浮いているリインがそう言うと、はやてが？マークを頭に浮かべた。
エースオブエースが新人と並んで正座をしている姿はかなりシュールだった。

そこへフェイトが通り掛かり、真顔ではやてに忠告した。

「今は、あそこへ近付かないほうがいいよ。
それと、これからは近藤さんのこと怒らせたらダメだよ」

フェイトはそう言うと、そのまま仕事へ向かった。

「・・・なんや？」

「さぁ？」

はやてとリインは首を傾げるばかりだった。

ここで、近藤の説教内容を聞いてみよう。

「まったく、仲間と意思疎通できていないなんて。
おまえら子供か！
意地張りやがって、このガキ！
助け合いはどうした？
仲間の助け合い精神は！？
おまえ等、肉体言語でなんとかなるとか思ってんの？
ぶつかりあって、そのあとぶっ倒れて友情が芽生えるとか思ってんの？
ねぇ、脳筋なの？ねぇ？」

・・・かなりねちっこかった。
こんな内容を、２時間正座で聞いてるなのはとスバルはたまったものではない。
二人ともゲンナリとしていた。

「（・・・なのはさん）」

「（・・・なに？スバル）」

「（近藤副隊長の説教って、すごく疲れますね）」

「（うん。でも、私達も悪いんだし、素直に聞いておこうよ）」

二人は念話で現状における自分達の立場を嘆いた。

「（おい、おまえ等念話でじゃれてんじゃねーぞ！）」

「ひいっ！？」

「す、すいません！」

いきなり念話に近藤が割り込んできてビックリしてしまい、スバルは変な声を出し、なのははおもわず頭を下げた。

とまぁ、こんな感じで2時間経ち、二人はやっと開放された。
その頃には近藤も普段の口調に戻り、穏やかになっていた。

「なのは隊長、ティアナが起きたら、必ず話し合いをしてくださいね？」

「はい、わかっています。
私の想いをわかってもらえるまで、ティアナの想いがわかるまで、話し合います」

なのはは今回、自分が後手に回り、ティアナとの距離がかなり開いてしまっていたことに後悔した。
わかってくれていると思っていた。
だから、口には出さなかった。
でも、それが間違いだった。
自分達は話し合わないといけなかったのだ。
ティアナの気持ち、過去を理解していれば、こんなことにはならなかった。
全て、自分のせいだ。

「あの、近藤副隊長？」

「ん？なんだ？」

スバルが近藤に話し掛けた。
いまだに足が痺れて、うまく立てない。
実はなのはもかなり足がヤバいが必死に隠している。

「ティアナが起きたら、怒るんですか？」

「当たり前だ。今回の事はティアナが一番悪い。
模擬戦の内容も最悪だ。しっかり体に教え込んでやる」

近藤の死刑宣告に、なのはとスバルは心の中でティアナに合掌した。

なのはは近藤の説教中に、冷静に先程の模擬戦を振り返っていた。

そこで、近藤の不可思議な行動を訪ねてみた。

「あの、近藤さん？
模擬戦での事についてイロイロ聞きたいんですけど、いいですか？」

近藤はなのはの質問に冷静に答える。

「どうぞ。俺に答えれることなら」

「近藤さんのあの異常な速度の移動と、クロスファイアが消えたこと、それにレイジングハートへの命令について」

なのはは真っ直ぐ近藤を見た。
近藤はひとつ息を吐き簡潔に答えた。

「移動は空間短縮移動で、クロスファイアは剣で吸収しました。レイジングハートへの命令は秘密です」

近藤の口から聞き慣れない言葉が出てくる。

「あ、あの、空間短縮移動って・・・？」

「簡単に言うと、瞬間移動です」

とんでもない事をさらりと言い放つ近藤。
なのはもスバルも唖然としている。

「そ、そんな反則技使えるんですか！？」

スバルは思わず反則技と言ってしまう。

確かに、反則技だ。
超速移動のように、”　動く　”のではなく、瞬間にその場に”いる　”のだ。
瞬間に自分の射程内にいるのだから完全に防御不能になる。

「それは、近藤さんのレアスキルなんですか？」

なのはは恐ろしいものでも見るような目で近藤を見る。
当然だ。なのはの間合いである中長距離が近藤にかかると一瞬でゼロになるのだ。
これほど恐ろしい相手はいない。

「レアスキル・・・まぁ、スキルと言えばそうですが、そんなに勝手のいいものではないですよ？」

近藤はあえて口にしなかったが、この空間移動は魔法ではない。
魔法という概念から逸脱した力、俗に言う
「超能力」を使うことがてきる。
「黒化」と、この
「空間移動」の二つがコレに当たる。
空間短縮とはよく言ったもので、近藤は説明が面倒臭いので瞬間移動といったが、この力は単純に瞬間移動とは異なる。

瞬間移動の場合、Ａ地点からＢ地点へ跳ぶことを言う。
しかし、空間短縮はＡ地点とＢ地点の距離を縮めて移動することを言う。
ようするにワープだ。

１００メートル走を走るとして、スタート地点とゴール地点を繋げ、間の１００メートルという距離を無しにして移動するのだ。

近藤はここでは話さないが、空間移動も欠点がある。
移動するだけなら問題ないのだが、
たとえば、戦闘中に相手に近付こうとした場合、相手が動いていないときに限り移動できる。
この空間移動は座標の計算をする必要があり、移動中の相手は常に座標が変わる。
しかも座標の計算は、かなり複雑でそうポンポン何度も出来るわけではない。
よって、移動中の相手に近づく場合、その付近に移動することはできるが、完全に近くに寄れることはない。
したがって、常に動いていればこの空間移動はそれ程脅威にはならない。
所詮、脅かし程度だ。
まあ、足を止めて攻撃をする”砲台”のなのはやはなてにとっては天敵ではあるが。

「じ、じゃあ、クロスファイアを消した剣ていうのは？」

スバルは恐る恐る聞く。
先程の瞬間移動のようにとんでもない反則技だ飛んでくると思ったからだ。
すると、近藤はポケットから小さな錠剤のようなカプセルを取り出し、スバルに見せる。

「これだよ。いま剣にするから見てな」

そう言うと、カプセルは白く光りだし、近藤の手には白い刃のない剣が現れた。
よく見ると剣、というには少し形がおかしい。

なにか、長方形の薄い白い板のようにも見える。鍔があるので剣らしく見えるだけだ。

「これはな、ＡＭＦの応用で作った物で、魔力を吸収するんだよ」

またなんともとんでもない言葉が飛んできた。
魔力を吸収されたら、こちらの攻撃は一切通じないではないか。
しかも、近藤はこの剣を作ったと言っていた。

「こ、近藤さんが作ったんですか？それ？」

なのはは顔を引き攣らせながらその剣を指差す。

「はい。といっても、これ一本しかありませんけど」

あたりまえだ。
こんなものそう何本もあったら、こちらの商売あがったりだ。
というか、それ、ロストロギアに指定されかねない危険な代物ではないか？
しかも剣ということは、これ単体でも相手を攻撃できるということではないのか？

「あ、これはあくまでも魔力吸収に特化した物なんで人間は斬れません」

それは剣の形にした意味があるのだろうか？
そんな疑問を二人は浮かべる。

「試作なんで。ちなみに、ある程度吸収してコレの魔力タンクがいっぱいになったら、カートリッジとして排出されます。

この鍔部分のカートリッジメーターで確認出来ます」

なんとも便利なことで。
その剣さえ持っていたら、カートリッジの残り弾数などを気にせず、バンバン使いまくりではないか。

「俺はカートリッジシステム使わないんで、別に意味ないですけどね」

「じゃあ、レイジングハートへの命令のことは・・・」

なのはが近藤に食い下がろうとすると、
近藤は人差し指を口に当て、

「裏技なんで、秘密です」

と言い、それ以上は喋らなかった。
なのはとスバルは開いた口が塞がらない。
近藤という人間がわからなくなってきた。

ありえない力

ありえない武器

なのはは近藤を恐ろしく感じた。

「近藤さん・・・あなた、一体、何者なんですか・・・？」

なのはは改めて近藤を見る。
その目は真剣で、睨んでいるようにも見える。

「何者と言われても・・・この力は、８年前の事故の時に手にいれたもので、
この剣や裏技も８年間暇だったから作っただけですし・・・」

「うっ！？・・・すいません」

さらっと８年前が原因と言われ、なのははへこんだ。
スバルは近藤の言うことがわかっておらず、首を傾げている。

「それは本当か？」

シグナムはフェイトから今日の模擬戦での出来事を聞いた。
ティアナとなのはの事にも驚いたが、近藤の行動に驚いた。
激怒したこともそうだが、近藤の力についてだ。

「あいつ、能力を隠していたのか？」

エレノアの力以外は隠そうとしていたわけではないが、結果隠していたことになる。
シグナムは何事かを考え、

「一度手合わせするか・・・」

ボソリと呟いた言葉に、フェイト苦笑した。

夜になり、近藤はスバル、エリオ、キャロの三人と隊舎のブリーフィングルームにいる。
あの模擬戦の後、エリオとキャロが近藤を怖がってしまい、なかなか近藤と話しをしようとしなかった。
だが近藤はこう言った。

「自分の命、仲間の命それを蔑ろにする行動をとれば、エリオとキャロに怖がられようが俺は怒る。
任務よりも仲間と自分の命を優先しろ。」

自分の命をなんとも思っていない近藤が言う言葉ではないが、
エリオとキャロは近藤の言葉に感動し、再び信頼を得ることができた。

近藤達が談笑していると、ティアナが現れた。
どうやら、医務室で目を覚ましてすぐにココに来たらしく、体調は万全とは言えないようで顔色も悪く、足どりも覚束ない。

ティアナは近藤達と目をあわせづらいのか、チラチラこちらを見ながら居心地が悪そうにモジモジしていた。
そんなティアナに声を掛けたのは、やはりスバルだった。

「ティア!そんな所にいないでコッチにおいでよ!」

「あ・・・」

そう言ってスバルはティアナに近付き、手を取って近藤達が座っているテーブルに連れていく。

ティアナはテーブルに座っても皆と目をあわせようとしない。

「ティア・・・」

「ティアさん・・・」

ティアナの落ち込みように、皆心配する。
どう声を掛けたものか、どう励ませばいいのか、皆悩んでいた。

「ティアナ。」

近藤がティアナに声を掛けた。
ティアナは体をビクッとさせる。
エリオとキャロは近藤に期待の眼差しを送っているが、
スバルは近藤がティアナを叱ると思い、ハラハラしている。

「・・・ティアナ、こっちを見ろ」

ずっと視線をあわせようとしないティアナに近藤は命令する。
ティアナは弱々しい眼差しで近藤を見る。
近藤はそんなティアナを見て溜息をついた。

「俺は忠告したよな?焦ると俺みたいになるってな」

そういうと近藤は自分の眼帯を指差した。
ティアナが弱々しく頷く。

「こうも言ったな?仲間を犠牲にしても勝利したいか、てな」

近藤は腕を組んでティアナを見つめる。
ティアナは俯いてしまい、どんな表情をしているかわからない。

近藤はまた一つ溜息をついた。

「明日、なのは隊長とじっくり話し合え。
そこで、おまえの思ってることを全部言え。
それから、なのは隊長の思いを聞け。わかったな？」

「・・・はい」

ティアナは近藤の言葉におとなしく頷いた。
近藤は苦笑し、ティアナの頭をクシャクシャと撫でた。

「まったく、みんな不器用で世話が焼ける」

「・・・ホントにお父さんみたいですね？」

ティアナは近藤にクシャクシャにされた髪を直しながら、苦笑いして皮肉を言った。

「勘弁してくれ。ティアナが生まれたとき、俺は１０歳だぞ」

「じゃあ、お兄さんですか？」

スバルがニヤニヤしながら茶々をいれる。

「・・・まぁ、それくらいなら」

近藤は顎に手を当て、真剣に考えていた。
そんな近藤にティアナはおかしくなり、

「こらスバル、近藤副隊長が本気にするから、からかうのはそれく

らいにしときなさい」

「え～いいじゃん、お兄ちゃん！眼帯カッコイイし！」

「そうです！お父さんは眼帯がカッコイイんです！」

エリオが眼帯に食いついてきた。

キャロは困った顔をしてエリオを見ている。

ティアナも呆れた顔をしてスバルをみている。

スバルとエリオが話しを眼帯談議にすり替え、花を咲かせてしまった。

「・・・なぁティアナ、俺の魅力は眼帯だけか？」

「・・・すいません。ノーコメントで」

ティアナは近藤から目を逸らす。

「・・・キャロ？」

「ご、ごめんなさい、お父さん。私はよくわかりません」

キャロも目を逸らした。

「・・・そうですか・・・」

なんとも哀愁漂う近藤にティアナはクスリと笑い、先程までの重苦しい気持ちが若干和らいだ。

そんな感じで、ティアナも大分和やかムードに溶け込んだとき、

突如、隊舎内に警報と赤いアラート画面が現れた。

## 第２２話（前書き）

森羅さんいつもコメントありがとうございます。
やはり、感想がくるとテンションがあがります。
というわけで、始まります。
駄文ですが、よろしくお願いします。

# 第２２話

今現在、フォワード陣と隊長達はヘリポートに集まり、出発の準備をしている。
なんでも、ガジェットドローンＩＩ型の強化型が現れたらしい。

どうせ、バカスカリエッティ、略してバカリエッティのことだから、運用試験か新型へのデータ取りと、こちらの戦力調査を兼ねた出現だろうが、
こちらの事情などお構い無しな行動に、近藤はイライラしていた。

「（エレノア）」

「（はいはーい、なんですか？ご主人様？）」

「（スカリエッティがガジェットＩＩ型を投入してきた。蹴散らしてこい）」

「（りょーかーい！優雅に、美しくね！）」

「（ああ、完膚なきまでに、徹底的に、圧倒的力で捩じ伏せろ）」

「（・・・ご主人様、怒ってる？）」

「（・・・少しな）」

「（わかりました！すぐ倒してきます！サー！！）」

エレノアは念話なのに敬礼をし、速やかに行動に移した。

エレノアも近藤の怒りは怖いらしい。

今回の任務は空戦になるため、なのは、フェイト、ヴィータの三人で出動ということになり、シグナムと近藤、フォワード四人は待機となった。

「それじゃあ、シグナムさん、近藤さん、お願いします」

「うむ、留守は任せておけ」

「怪我のないよう、お気をつけて」

なのははシグナム、近藤と挨拶をし、次にティアナに目を向けた。

ティアナはまだ調子が戻っていないのか、なのはと顔を合わせづらいのか、俯いている。

「・・・ティアナは出動待機から外れとこうか？」

なのはの言うことは正しい。

体調も魔力も万全ではないし、とても任務につける状態ではない。

なのははそのようにティアナに告げる。

ヴィータもなのはに賛成し、ティアナに待機から外れて休養するようにいう。

だが、ティアナはこう言った。

「言うこと聞かない奴は・・・使えないってことですか」

ティアナの子供のような発想と、物言いになのははは顔をしかめる。

「自分で言っててわからない？当たり前のことだよ、それ」

もう、売り言葉に買い言葉である。
近藤は頭を抱えた。
ホントにこいつらガキだ。

「現場での命令や指示は聞いてます！
教導だってちゃんとサボらずやってます。
それ以外の場所での努力まで、教えられた通りじゃないとダメなんですか！？」

ヴィータはティアナを諫めようと前にでるが、なのはに止められ、
近藤の方を見るように視線を促される。
そこには不機嫌に顔を歪め、怒り顔とオーラを出している近藤がいた。
ヴィータは
「うっ」とうめき声をだし、後ずさりした。

「私は・・・なのはさん達みたいにエリートじゃないし、
スバルやエリオみたいな才能も、
キャロみたいなレアスキルもない！
少しくらい無茶したって、
死ぬ気でやらなきゃ強くなんてなれないじゃないですか！？」

ティアナが自分の行動を正当化した屁理屈、しかし弱い人間が抱える悩みを叫ぶと、シグナムがティアナの肩を掴み、殴ろうとしていた。

だが、その拳はティアナに届くことはなく、近藤に止められていた。

「なんのつもりだ？近藤」

シグナムは近藤を睨むが、近藤はシグナムを無視し、ティアナの頭に拳骨を食らわせた。
ドゴンッという音がして、ティアナは頭を押さえてその場にうずくまり、
「～～～～～～～！？」
声にならない叫びをあげる。
なのはとスバルは小さく
「うわぁ」と漏らし、他の面々は固まっている。
シグナムに至っては、
「お、おい、いくらなんでもソレはやり過ぎじゃないか・・・？」
殴ろうとしていた事も忘れ、ティアナの姿を見て焦っている。
「ヴァイス陸曹、準備は？」
近藤は周りを無視し、ヘリパイロットのヴァイス陸曹に出撃準備の状態を聞く。
「はい！乗り込んでいただければすぐにでも行けます！」
ヴァイス陸曹は近藤にビビって新米のような受け答えをした。
「子供の喧嘩を続けるなら全員拳骨だ。
それが嫌ならさっさと出発しろ」
ヤバイ、近藤がキレてる。

フェイトとヴィータは速やかにヘリに乗り込み、なのはに早くヘリに乗り込むよう言う。

「ティアナ！思い詰めちゃってるみたいだけど、戻ってきたらゆっくり話そ！？」

「おい、相手にすんな！近藤の拳骨がとんでくるぞ！」

ヴィータは余程拳骨が怖いのか、なのはをヘリの中に連れ込む。

ヘリが飛んで行き、ヘリポートには近藤、シグナムとフォワード四人だけになった。

スバルやエリオ達は、ティアナに駆け寄り気遣う。

近藤はまだ頭を押さえてうずくまっているティアナを見下ろし、

「立て」

短く言い放つ。

すると、スバルが近藤の前に出て、意見する。

「あの！

命令違反は絶対ダメだし、さっきのティアの物言いとか、

それを止められなかった私は確かにダメだったと思います。

だけど！自分なりに強くなろうとするのとか！

キツイ状況でもなんとかしようと頑張るのって、そんなにいけないことなんでしょうか！？

自分なりの努力とか、そういうことも、やっちゃいけないんでしょうか！？」

スバルは近藤を真っ直ぐみて、ティアナの思いを代弁する。

近藤が何か言おうと口を開いたとき、
ヘリポートの階段からシャーリーが現れた。

シャーリーは皆をロビーに集めると、そこにシャマルも来て、一つのテーブルに座ったが、近藤はソファの後で、腕を組んで立っている。

そして、シャーリーは昔話をはじめた。
高町なのはのはじまりの物語を。
魔法も知らないただの9歳の少女が、短い期間で過酷な事件に立ち向かい、
自分を省みない無茶な魔力行使で疲労が体を蝕み、ボロボロになる姿を。
フォワード四人はモニタに映る少女が、危険を無視して戦う姿に目が離せない。

そして、

「蓄積された疲労と、一人の隊員の無茶な行動で、なのはさんは怪我をしたの」

モニタには8年前の事件映像が映し出される。
管理局が捏造した、虚偽の映像。
一人の色白のひょろっとした隊員がアンノウンに特攻し、攻撃を受け、なのはが巻き添えを食らっていた映像。

「普段のなのはちゃんなら、どうということもなく隊員を助けることができたし、敵を倒すことも出来ていたでしょう。

でも、イロイロな要因が重なって、不幸な事故に繋がってしまったの。」

シャーリーとシャマルは8年前の真実を知らないようで、淡々と管理局が公開した情報を言う。

「そうですよね、近藤さん？」

シャーリーは近藤に話を振る。
フォワード四人は一斉に近藤を見る。

「そうですね、その通りですよ」

近藤は表情を変えず、続けて言う。

「俺が無茶な特攻をかけて撃墜され、それに体調の優れないなのは隊長を巻き込んだんです」

結果コレですよ、と近藤は眼帯を指差した。
皆何も言わない。フォワード四人などは信じられなかった。
近藤がそんな無茶をするとは思えないからだ。
だがティアナは近藤の言葉を思い出していた。

「焦って無茶するとこうなるぞ」

皆が近藤を疑いの目で見る。
そんな視線を気にしていない近藤は冷めた目でモニタを見ていた。

「（おい、近藤）」

シグナムが念話で近藤に話し掛ける。

「（なんですか？シグナム副隊長）」

怒りも悲しみも感じない感情のこもらない返事に、シグナムは言い淀む。

「（真実を話さなくていいのか？）」

近藤が目を見開き、シグナムを見た。

だか、すぐに冷めた表情に戻る。

「（・・・何がですか？）」

「（ごまかすな。私や隊長達は全員真実を知っている。リンディ統括官が教えてくださった）」

近藤は心の中で舌打ちした。

「（・・・コレが真実ですよ。証言、証拠全てがこの映像通りです）」

「近藤！」

シグナムは思わず叫び立ち上がり、近藤を睨みつける。

突然の事に皆がビックリする。

「いいか、私達は仲間だ！

そんな仲間が誤解を受けたままでいいと、私が言うと思うか！？」

「・・・・・・」

近藤は困った顔をして、何も言わない。
シャーリーやシャマル、フォワード四人は何がどうなっているのかわからなかった。

機動六課管制室では、部隊長のはやて率いる通信士のアルトやルキノ、副官のグリフィスがモニタやレーダーで現場を確認している。
通信士ルキノがなのは達の乗せたヘリの位置を確認する。

「７０４現場空域に到着。ライトニング1、スターズ2、エンゲージ！」

フェイトとヴィータが戦闘空域に入り、ガジェットＩＩ型との交戦を確認したとき、
通信士アルトの前のレーダーに、有り得ないスピードで現場空域に近付く反応を確認し、アルトはその速度に驚愕した。

「なに・・・これ・・・？」

「なんだ?どうかしたか、アルト?」

グリフィスがアルトにレーダー反応の異変について聞くと、

「あ・・・ありえない速度でガジェットに近付く謎の反応を確認！
そ、その速度・・・」

アルトが報告を言い淀む。
はやてが訝しんでアルトに聞く。

「速度いくつなんや？」

「・・・速度、マッハ５です！！」

「こちらスターズ１、中距離火砲支援いきまーす！」

なのはが気合いを入れて叫び、砲撃魔法を使おうとすると、

「ちょ、ちょっと待って下さい！！」

アルトから急な通信で砲撃を止められた。

「異常な速度でそちらに向かっている正体不明の反応が接近中！その空域を離れて下さい！」

いきなりの離脱命令にもなのは達は冷静に対処し、すぐにその空域を離脱した。

「おい、異常な速度ってどれくらいなんだよ？」

離脱中、ヴィータがアルトに確認を取ろうとすると、代わりにルキノが答えた。

「現在、未確認反応はマッハ５でガジェットのいる地点へ飛行中！

あと１０秒で接触します！」

「ちょ、ちょっと待って！？
マッハ５！？
ステルス戦闘機じゃない！！」

なのはがその速度に驚く。

「もしかして、スカリエッティの新しい兵器？」

フェイトが一番の可能性を考える。
ヴィータはその空域をじっと見つめていた。

「あと５秒で接触！４、３、２、１・・・」

ルキノがカウントダウンを行い、ゼロと言うのと同時に、
黄金の一筋の光が見えたかと思ったら、ガジェットのいる空域に着いた途端に光が消え、何か小さな人間程の大きさのものがいた。
なのは達は空域を離脱しているので、肉眼では確認しづらい。
モニタの望遠機能を使い、未確認反応の飛行物体を確認する。

するとそこには、銀髪のロングヘアーが月の光を反射して美しく煌めき、紫と青を基調とした服を着た人間がいた。
後ろを向いているので顔が確認できないが、
体のラインなどを見ると、恐らく女性だろう。
そして、その女性の両手が黄金に輝きだし、パァンという音と共に姿を消し、次の瞬間、近くにいたガジェットが爆発した。

「消えた・・・！？ガジェットが爆発した！？」

「なんだアイツ!?味方か?」

「とにかく、現場に行こう!!」

三人は情報が少なく混乱したが、状況確認のためにガジェットのいる空域へ飛んでいった。

「ぶー、つまんない、張り合いがない、お菓子食べたい!」

ぶつぶつ文句を言いながら、未確認反応物体、エレノアは素早くガジェットを破壊していく。
音速移動と魔力拳のコンボで次々とガジェットが破壊され、
あっという間に、スカリエッティが投入した残りのガジェットⅡ型は全てエレノアが破壊した。
エレノアは肩をグルグル回して、両手をあげ背伸びをすると、ハーッと息を吐き、

「はい、しゅーりょーしゅーりょー!
もう、この姿はすぐにお腹が空くからダメよね!
帰ったらご主人様に肉まん買ってもらお!」

などと軽口を叩いていたら、後ろから声をかけられた。

「そこのアナタ動かないで。私達は時空管理局のものです。
大人しくこちらの指示に従って下さい」

なのは達はデバイスをエレノアに向け、警戒する。
何か未知の魔法を使った可能性が高く、

また、味方かどうかもわからないエレノアに対し、
職務質問をするフェイトの声は若干緊張し、エレノアの動きを見落
とさないように神経を研ぎ澄まし、観察する。
しかし、三人は違和感を感じた。

――― この人、どこかで会ってる？ ―――

エレノアは背伸びをやめ、ゆっくりとなのは達の方へ振り向いた。
そして、三人はエレノアの顔をみて驚愕する。

「・・・リインフォース・・・さん？」

忘れるはずもない、はやてやヴィータ達と出会った
「闇の書事件」
その時の闇の書、夜天の書の管理人格でもあるリインフォースが目
の前にいる。
なのはとフェイトは驚きを隠せない。
しかし、ヴィータは違った。

「てめぇ、誰だ！」

ヴィータはデバイスのアイゼンをエレノアに突き出し、叫ぶ。
リインフォースは１０年前にいなくなった。
自分達の目の前で消えた。
もういないのだ。

「答えろ！！」

エレノアは妖艶な笑みを浮かべ、自分の口に人差し指を当て、こう
言った。

「秘密です。」

おもわず見惚れてしまう仕種に、なのはとフェイトは惚けてしまう。
そのスキにエレノアは音速でその空域を離れた。

「また逢いましょう。それと、我が主をよろしく」

という言葉を残して。

なのは達の行動を一部始終管制室のモニタで見ていたはやては椅子から立ち上がり、そのまま固まってしまい、

「リインフォース・・・」

一言呟き、そのまま黙ってしまった。
隣でフヨフヨ浮いているリインフォースツヴァイは心配そうにはやてを見ているしかなかった。

「はやてちゃん・・・」

なのは達は現場待機をすることもなく、機動六課へ帰ってきた。
ヘリから降りると、そこにはシャーリーとシグナムがいた。
そして、なのは達がいない間の出来事を話した。

「ええ!?私の昔の事、話したの!?」

なのはは呆れたような声をだした。
そんななのはに、シャーリーは両の手の平を合わせ、謝る。

「ダメだよ、人の過去勝手に話しちゃ」

「そうだぜ、おしゃべりはダメだぜ」

なのはに諌められ、ヴァイスにもダメ出しをもらうシャーリーはただただ頭をさげた。

「ごめんなさい！！でも、見ていられなくって・・・」

そこにヴィータが割り込んできた。

「ちょっと待て。過去っつうことは、8年前のことも話したのか？」

「ああ、話した」

シグナムはサラっと言い放つが、それを聞いたなのはとヴィータは顔を青くした。

「そこに、近藤さんもいた！？」

「・・・はい」

シャーリーは落ち込んだ風に答えた。
なのはは顔色が青を通り越して、白くなっていた。

「安心しろ。真実を教えた」

シグナムはなのはの肩をポンと叩いて、そう言った。
なのははビックリした顔でシグナムを見る。

「リンディ統括官からお話は聞いている。
皆にもそのように言っている」

その言葉を聞き、なのはとヴィータはホッとしたようで、顔色も戻っていた。
しかし、シャーリーは相変わらず落ち込んでいる。

「私、知らなくて・・・近藤さんにヒドイことしちゃって・・・きっと怒ってます・・・」

そこへ、フェイトがフォローをいれる。

「大丈夫だよ。近藤さんは、８年前の事件については、
もう何とも思ってないってリンディ母さんも言ってたし。
あの人はそんなに心の狭い人じゃないよ」

「ま、拳骨一発で終わりじゃねーか？」

と、ヴィータがシャーリーをからかう。
すると、シャーリーはブルブル震え、

「あ、あの拳骨は勘弁してください～！」

泣きをいれた。

近藤は一人、隊舎の外を散歩していた。
シグナムがあのあと真実を喋ってしまい、シャーリーとシャマルがしきりに頭を下げてきたのには、流石にまいった。
フェイトが言っていたように、近藤はあの時のことは何とも思っておらず、真偽がどうとか、どうでもいいのだ。
そして、雰囲気的に居づらくなった近藤はロビーを出て、ふらふらしていたのだった。

「（ご主人様～！お仕事終わったよ～！）」

不意に、エレノアから念話で話し掛けられ、戦果を聞く。

「（ご苦労様。どうだった？）」

「（手応えなさすぎ！それに、ガジェットになんの手も加えられてなかった）」

「（そうか・・・やっぱりアルハザードの技術をそのまま使ってるだけか）」

スカリエッティは今回までガジェットという大量生産重視の技術しか使っていない。
これから先、性能重視の兵器も作るだろう。
まぁ、スカリエッティのことだから、そんなに大した応用もせず、中途半端な出来損ないが出て来る可能性の方が高いが。

「（あぁ！あとねー、なのはちゃん達とお話した！）」

近藤はありえない台詞をエレノアから聞いた気がした。

「（・・・もういっぺん言ってみろ）」

近藤は静かに、ドスの聞いた声でエレノアに聞き返す。

「（・・・誰とも会いませんでした！速やかに退却しました！サー！）」

「（・・・一週間おやつ抜き）」

「（キャーッ！？ごめんなさいー！！それだけはご勘弁をー！？）」

エレノアの悲痛な叫びは念話のために、誰にも届くことはなかった。

エレノアが泣き疲れて寝てしまい、しばらくベンチに座り缶コーヒーをチビチビ飲んでいると、

ティアナが走って近藤のところに向かって来る。

近藤の座るベンチにたどり着くと、息をきらせて近藤の前に立ち、深々と頭を下げた。

「近藤副隊長、今回はすいませんでした！

それと、ありがとうございました！！」

近藤はそんなティアナの姿にビックリし、しばらくしてクスリと笑った。

「なのは隊長と話し合って、理解し合えたのか？」

近藤は静かに、しかし、優しさを込めた口調でティアナに聞いた。

ティアナは顔をあげた。
その表情は実に晴れやかで、強い意志を感じさせる顔つきだった。

「はい！おかげさまで」

「そうか、よかったな」

近藤はそう言うとベンチから立ち上がり、ティアナの頭を撫でた。

ティアナは頭を撫でられ、顔を赤くしている。くすぐったそうに目を細め、よく見ると、耳まで赤い。
だが、嫌がるそぶりも見せず、手を胸の前で組んでモジモジしながらも、大人しく撫でられる姿は、小動物のようだ。

「・・・やっぱり、兄さんよりお父さんよ・・・」

ティアナはボソッと呟いたが、近藤には聞こえなかった。

ちなみに、この様子を影から皆が見ていたため、ティアナは後でからかわれ、顔を怒りと羞恥に赤くするのだった。

こうして、機動六課にとっては些細なトラブルと、重大な真実、謎の人物の出現、そして仲間の絆が深まった一日が終了した。

## 教えて近藤先生2時間目（前書き）

ＺＥＲＯさんコメントありがとうございます。
森羅さんもありがとうございます。
今回はまた番外です。
はっきり言ってお遊びです。
内容が薄いですが、軽い気持ちで見ていってください。

# 教えて近藤先生2時間目

近藤　「再びやってまいりました、スーパー近藤タイム。
　　講師は私、近藤三等陸尉、この空間では近藤先生と言われております」

ティアナ　「また変な入り方しましたね、近藤先生？」

近　「お、委員長のティアナ君ではありませんか！今日も頼みますよ！」

スバル　「センセー、私等もいるよー！」

エリオ　「ココでは、お父さんて言っちゃダメなんだね？」

キャロ　「なんか寂しいね、エリオ君」

テ　「あんた等は本編で言いまくってんでしょうが。
　　今日ぐらい自嘲しなさい」

エ・キ　「はーい」

近　「そして、例によって、部屋の壁側にはなのは隊長達、保護者ズが見守っています」

ス　「センセー、なのはさん達って仕事はどうしたんですかー？」

テ　「なんでも、この講義を聴くために今日の仕事を終わらせてから来たらしいわよ？」

エ　「へー、すごいですけど、なんでそこまでして聞きにくるんですか？」

近　「前回、裏技と驚愕の事実を発表しただろ？あれがえらい高評でな。
　今回も何かためになる話をすると思っているらしい」

キ　「今日も、そういう裏技みたいなのを教えてくれるんですか？」

近　「いえ、今回はモラルについてです」

テ　「モラル、ですか？」

近　「そう。エリオとスバル以外の人たちに問いかける時間です」

ス　「・・・？じゃあ、私はモラルがあるっていうこと？」

近　「スバルの場合、別の疑問が残るが、まあ今回の議題に関してはセーフだ」

ス　「はぁ・・・？」

テ　「では近藤先生、よろしくお願いします」

近　「うむ。でははじめます。
　今回のテーマはこれです！」

――――　バリアジャケットのスカートの意味　――――

テ　「・・・あ～・・・」

キ　「スカートの意味、ですか？」

ス　「なるほど、こりゃ私関係ないや」

近　「エリオ君、バリアジャケットを着るときとは、どういうときですか？」

エ　「え？えっと、出動する時です」

近　「はい、その通り。バリアジャケットを装着する時はお仕事をするときですね」

近藤は説明しながらエリオの頭を撫でた。

エリオの心拍数が跳ね上がった！

近　「では次、ティアナ君、出動するということは自分がどのような状況になると考えられますか？」

テ　「・・・激しい動きや、怪我などをする恐れがあります」

近　「はい、正解。バリアジャケットを装着する人間は事件現場などで行動することが多く、
　　場合によれば、戦闘になる恐れがあるのです」

近藤はティアナの頭を撫でた。

ティアナはだらしない顔をして涎を垂らしだした！

近　「ではキャロ君、あそこにいるフェイトさんが、任務で大股広げて戦闘しています。
　さあ！そこには何が見えますか？」

キ　「・・・・・・・・・・・・下着ですか？」

近　「はい正解ー！そうです！パンツ丸見えです！１９歳のパンツモロ見えです！」

キャロは頭を撫でられたが、答えが答えだけに、あまり嬉しくなさそうだ。
壁の保護者ズはスカートを掴んで顔を真っ赤にしている。
シグナムやヴィータまで顔が赤い。

近　「特に、なのは隊長とフェイト隊長、ティアナに言いたい。
　ミニは仕事で穿くもんじゃない！！」

テ　「・・・これはシャーリーさんが・・・」

ス　「はいはーい、じゃあ、他のスカートの人はどうなんですかー？」

近　「ヴィータ副隊長と、キャロはロングスカートなんで、比較的被害もなさそうだが、
　やはり大きな動きをするような服装じゃあないよな。
　シグナム副隊長は・・・微妙なんですけど、スリットから見えるあの生足がエロいですよね」

エ　「先生、最後のなんか趣旨変わってますよ？」

なのは　「近藤さん！ちょっといいですか！？」

近　「なんですか？保護者ズのなのはさん」

な　「バリアジャケットでスカートに問題があるって言いましたけど、異議ありです！」

近　「はあ、一体どのような？」

フェイト　「バリアジャケットのスカートの中のパンツは下着じゃなくてバリアジャケットの一部なんです！」

な　「だから、見られても平気です！
　パンツじゃないから平気だもん！です！！」

近　「じゃあスカート穿かずにそのパンツじゃないパンツ一丁で仕事してください」

な　「ふぇっ！？」

近　「パンツじゃないんでしょ？見られても平気なんでしょ？じゃあ、スカートいらないじゃないですか？」

フ　「ううぅっ！？」

近　「さあ、手始めにココでパンツじゃないパンツになって下さいよ」

な　「くうぅぅっ・・・！！？」

？　「スパッツにすればいいんだよ、なのはちゃん！」

な　「！！あ、あなたは・・・！？」

フ　「エレノアさん！！」

エレノア　「はぁ～い！ご主人様が女の子をいじめているのに我慢できなくなって出てきましたー！！」

テ　「え！？いいんですか、出できちゃっても！？」

エレ　「いいのいいの。どうせ、コレ番外で時間軸無茶苦茶だから」

ス　「うわ～、ぶっちゃけすぎですよ～」

エレ　「まあそれは置いといて、パンツが嫌なら、私みたいにスパッツにすればいいんだよ」

シ　「なるほど！それならば、スカートでも気にならないな！」

ヴ　「あたしやキャロなんかは、見た目全然変わらないから、アリだな！」

キ　「はい！！」

近　「ふー。わかってない。全然わかってないぞ、君達！！」

エリ　「？何がですか？」

近　「スパッツの素晴らしさだ!!」

テ　「え、そっち!?」

近　「エレノアのバリアジャケットを見たまえ!特にスパッツ部分!!」

みんなの視線がエレノアの下半身に集中した!!

エレ　「なんか恥ずかしいの～」

エレノアは頬に手を当て照れている!

近　「エレノアのこの尻から太ももに流れるムッチリとしたラインをクッキリ出し、お尻の形も綺麗に見せる!
更に、股間部分のこの皺!!芸術だ!!そして、この股の部分の逆三角形(デルタゾーン)に空いた空間!!
スパッツが肌色なら、素っ裸と一緒じゃないか!!」

みんな、近藤の力説に呆れている。
というかドン引きである。

エレ　「や～ん、褒められて照れるの～」

エレノアもどこかおかしい。

近　「こんな素晴らしい肌着があっただろうか?いや、無い!!(反語)
どうだいスパッツの素晴らしさ、わかってくれたかい?」

テ　「はい、よくわかりました。先生は変態なんですね？」

近　「ん？違うぞ？男なら当然の反応だ」

キ　「そうなの？エリオ君？」

エリ　「・・・ノーコメント」

ス　「それ、言ってるようなもんじゃん・・・」

近　「大体、ココには美女か美少女しかいないんだから、パンツ見られるくらい有名税だと思ってれば？」

テ　「え！？美人？」

な　「美女・・・」

キ　「美少女・・・」

シ　「近藤、今度なにか食いに行こう。もちろん私の奢りでな」

フ　「あ、じゃあ私も何か奢ります」

ヴ　「じゃあ、あたしはご相伴にあずかって、近藤についていこう」

近　「さあ、話は戻って、スカートの話ですが・・・」

シ　「う・・・む・・・、しかしこのバリアジャケットは主はやてが作ってくれたもの！
　　誇りこそあれど、恥じることは何も無い！」

ヴ　「そーだそーだ！」

近　「そうですね、はやて隊長は結構機能とファッションのバランスがうまいですよね。」

はやて　「昔のことやから、褒められると照れるな～」

シ　「あ、主はやて！？」

ヴ　「仕事が終わらなくてこれなかったんじゃあ・・・」

は　「いま終わってな、飛んできたんや。本編でも出番少のうなってきたしな」

近　「ようこそ、はやて校長」

な　「校長！？」

は　「あ、ここ、そういうノリなんや？わかった！私はこの空間では校長先生や！！」

フ　「じゃあ、私達は？」

シ　「保護者ズとまとめて言われてたな」

テ　「私は委員長です！」

キ　「飼育係です！」

ス　「給食当番です！！」

エリ　「体育委員です！」

エレ　「保健の先生です！！」

ヴ　「それは勘弁してっやってくれ！保健の先生はシャマルに、シャマルに譲ってやってくれ！！」

近　「う～ん、ここにいない人なんでどっちでもいいんですけど・・・じゃあ、エレノアはこのクラスの副担任で」

エレ　「は～い！ご主人様と一緒にいられるなら何でもいいで～す！！」

な　「保護者その1？」

フ　「その2？」

シ　「その3・・・ん？なんだその紙は？・・・体育教師？私がか？」

ヴ　「あたしはなんだ？・・・生活指導？」

テ　「・・・あ～・・・」

ス　「ピッタリですね。」

ヴ　「そうなのか？ふーん、生活指導ね・・・」

は　「まんざらでもなさそうやな？」

ヴ　「ようするに、人目を憚らずにビシバシ、シゴけるんだろ？いいじゃん！」

シ　「うむ、体育教師も似たようなものだしな。おまえら、覚悟しろよ！」

テ・ス　「ひー！？」

近　「あの、話進めていいですか？」

な　「あ、ごめんなさい、どうぞ」

近　「つまり、大きな動きや、空戦をするのにスカートである必要性はあるのか？ということです」

フ　「で、でも、私達も女の子なんです！管理局の制服だけじゃなくて、もっとかわいい服着たいんです！」

な　「そうそう！ファッションですよ、ファッション！！」

近　「仕事にファッション求めるんですか？」

な　「はううっ！？」

は　「まあ、なのはちゃん達の言いたいこともわかるけど、もっと決定的な理由があるで」

フ　「え!?なになに!?」

は　「・・・これ、元々アニメやから、服が可愛いないと見る人少ないで?」

な　「!!?グッサー!!」

なのはは心に大ダメージを負った!!!

は　「あと、多少のお色気やな。チラリズムゆうの?見えそうで見えないとかな。
あ、皆、変身で全裸になっとるからそこはいいんかな?」

シ　「ぐっ!?主はやて!?」

シグナムは痛恨の一撃を喰らった!!
シグナムは胸を押さえてひざまずく。

ヴ　「痛い!心が痛いよ!!はやて!?」

ヴィータは助けを求めた!
誰もこない!!

テ　「近藤先生・・・はやて校長って・・・」

近　「・・・ストレスが溜まってるんだろう。我慢してくれ」

ス　「あれ？フェイトさんは？」

フ　「・・・・・・」

フェイトは立ったまま気絶している！

エリ　「うわー！？フェイトさーん！！」

キ　「きゃー！！シャマル先生ー！シャマル先生ー！！」

結局、この日の講義は皆に多大なダメージを残し、他言無用となった。

ただ一人、はやてだけがツヤツヤでご機嫌だったとか。

## ２０万～３０万アクセス記念雑談（前書き）

あざーす！！
ホントにあざーす！！

あと、これはあくまで雑談なので、本編とは関係ないかもよ？

# ２０万～３０万アクセス記念雑談

近藤　「アクセス２０万～３０万あたりおめでとうー！！」

エリオ　「わー！！」

キャロ　「おめでとー！！」

フェイト　「なんというか、もう感謝しかないよね。」

シグナム　「うむ。飽き性の作者がここまで続けられるのも皆さんのおかげだな。」

エ　「あれ？今回は僕とキャロだけじゃあ・・・」

フ　「そのはずだったんだけど、今回はライトニング分隊で行うという事になったの。」

シ　「まあ、エリオとキャロ主体で行うのは変わらないから思う存分やれ。」

キ　「はい！」

エ　「それでは、今回はですね、近藤副隊長、いえ、お父さんへの質問をしていきます。」

フ　「へ～、結構本編で言われてると思うけど、一体どんな質問？」

キ　「はい、では始めましょう！」

―――　近藤質問コーナー　―――

エ　「それではまずはこれ、『お父さんは彼女はいますか？』」

近　「いないよ。」

キ　「いままでずっと？」

近　「そりゃあ、１～２回は付き合うとかあったけど、１８歳からいままで人との出会い事態なかったからな～」

フ　「・・・大変だったんですね・・・」

近　「それに、今はエレノアの相手と仕事でそんな彼女作る時間ないよ。」

エ　「機動六課にはいっぱい女性がいるじゃないですか。職場で探せるんじゃ？」

近　「エリオ・・・この顔で近寄る異性がいると思うか？
　相手も選ぶ権利があるんだぞ。」

キ　「そうなんですか？好きな人なら見た目とか関係ないと思うんですけど・・・」

近　「それに、おれは基本だらしないダメ人間だし、ヘタレだし、力ないぞ？」

エ　「あ、じゃあそれ次の質問にしましょう。『お父さんの力はこの小説始める前から決めてたんですか？』」

フ　「？どういうこと？」

キ　「エレノアさんとか、超能力とか、アカシックレコードとか、最初から決めてたっぽいですけど、
　実際物語のなかでは全部欠陥だらけじゃないですか。特にアカシックレコード。
　なんか、もっとバンバン使って大活躍！みたいなのを期待してたんですけど・・・」

シ　「実際アカシックレコードなど期待だけさせといて使いません、使ってはいけませんではな・・・」

近　「ああ、この力の欠点というのは最初から決めてました。
　アカシックレコードとかで期待させたのは申し訳ないと思ってます。
　これは単に作者の構成と文才に問題があるだけです。
　超能力も攻撃無効化と、空間短縮移動の二つだけで、もうありません。」

エ　「ではこの質問、『アカシックレコードで何を調べたんですか？』」

シ　「自分の命を危険に晒してまで何を調べたんだ？」

近　「物語中でも話してますが、俺は基本、死への恐怖というものがありません。
　だから、アカシックレコードを使うと危ないというのもさほど気にしていなんですよ。」

フ　「自分が死ぬとしても？」

近　「それが、まずアカシックレコードで調べた最初のことです。
　『近藤はいつ、どのように死ぬのか』
　です。」

シ　「自分の死期を調べるために命を危険に晒すのでは本末転倒ではないのか？」

近　「だからこそ、俺は『壊れている』んですよ。」

エ　「なんか難しいです。」

近　「まあ、アカシックレコードについてはこの辺で。後はネタバレにもなるんで。」

エ・キ　「はーい。」

キ　「では次の質問。『お父さんの能力はあとどれだけあるんですか？』です。」

フ　「エレノアさんと超能力とアカシックレコードと・・・」

シ　「デスクワークの驚異的スピードだな。」

エ　「まだあるんですか？」

近　「あります。でもこれはネタバレになるんだよな・・・」

キ　「物語に影響が出るんですか？」

近　「いや、そこまでは。実際、『なのは』では最悪出てこないかもしれません。」

シ　「？どういうことだ？『なのは』では、というのは？」

近　「話が書けるかわかりませんが、ｓｔｒｉｋｅｒｓ以降の話を考えています。
　まあ、『なのは』もいつ終わるかわからないんで、本当に着手するかどうかわからないですけど。」

フ　「じゃあ、いいんじゃないかな？能力の説明程度で。」

近　「わかりました。武器が今の所２つあります。」

エ　「今の所？じゃあ、これから増えるかもということですか？」

近　「うん、いま手元にあるのは『方天画戟』と『蜻蛉切』です。
　あ、でもこれは本物ではありません。
　俺が無人世界や観測指定世界の遺跡で発掘し、改善、改修して、勝手に名前を付けたんです。」

シ　「方天画戟とはまた・・・三国志の飛将・呂布奉先の武器では

ないか・・・」

フ　「蜻蛉切も戦国武将の本多忠勝の槍だね。」

キ　「槍が好きなの？」

近　「いや、たまたま発掘して使える武器が槍で、たまたま名前通りの能力があったんで。」

フ　「え？じゃあ、蜻蛉切ってほんとに止まった蜻蛉が切れるんですか？」

近　「ああ、切れたな。触るのが怖かった。」

シ　「また危ない武器を・・・」

エ　「じゃあ、方天画戟はどんな特徴が？」

近　「戟と呼ばれ、片側に月牙という月の形をした刃がついていたので。」

キ　「へー。」

シ　「聞く限りでは本編に出さないほうが良いかもしれんな。」

近　「俺もそう思います。だから、たぶん没になるでしょう。
まぁ、こんな武器もありますよと言う宣伝程度で。」

エ　「えーでは次の質問『苦手なことや物はありますか？』」

キ　「これはですね、実際感想できました。お父さんは何でも出来る人か？みたいなので。」

近　「作中でも言ってるけど、戦闘ではホントにみんなの足元にも及ばないよ？」

エ　「え・・・でもエレノアさんを使えば・・・」

近　「アレは厳密に言えば俺の力じゃない。
　俺自身の力じゃあ超能力使ってもＦＷ４人にも負けるよ。」

シ　「そんなことはないと思うが？あの魔力吸収の剣もあるではないか？」

近　「あれはね、ベルカ式なんかの物理攻撃を含む攻撃には全然ダメなんですよ。
　攻撃に耐える強度がないんです。」

フ　「またなんでそんな欠陥だらけのものを・・・」

近　「試験的に作ったんで、そこまで考えてなかったんですよ。
　現在、改良型を作成中です。本編でもでますからお楽しみに。」

シ　「で？他の欠点は？」

近　「男やもめなんでとりあえず料理は出来ません。インスタントか外食で済ましますし。
　あと、部屋が汚いです。基本だらしないんで。」

フ　「うーん・・・なんかリアルな話でちょっと引くかな・・・」

近　「それと甘いものが苦手で、酒も飲みません。あ、タバコも吸わないな。」

キ　「趣味とかあるんですか？」

近　「趣味・・・んー、機械いじりとか、ゲームとか・・・」

シ　「思いっきりインドア派だな。」

近　「今でこそこんなナリですけど、基本ヒョロくて、色白の８年前と変わらないんで。」

エ　「じゃあ、最後の質問です。『お父さんは誰とラブラブになるんですか？』」

フ　「・・・」

シ　「・・・」

キ　「あれ、フェイトさん、シグナムさんどうしました？」

フ　「え・・・いや・・・近藤さんとラブラブか・・・」

シ　「う・・・む・・・想像付かん・・・」

エ　「どういうのなら想像できるんですか？」

フ　「ん～、遊園地行ったり、食事したり・・・」

エ　「それ、僕達やフェイトさんみたいですね？」

シ　「なるほど、親子か。それなら想像できるな。だが私が近藤に子供のように甘えるか・・・
　想像したら気持ち悪くなってきた。」

近　「あの、話が逸れてますけど？俺が誰とラブラブになるかと言う話では？」

キ　「わかりました！近藤さんのルートが！」

エ　「え！？誰？」

キ　「機動六課陣と家族愛ＥＮＤです！」

近　「・・・俺には恋愛は無理と？」

シ　「あたりさわりない程度でお茶を濁す。お前の性格そのものではないか。」

近　「俺だってラブラブイチャイチャのキャッキャウフフがしてーよ！」

フ　「近藤さん、この物語のテーマを発表しましょう。」

近　「え？」

フ　「それは・・・『家族愛』です！」

シ　「恋愛など皆無！！」

エ　「さすがお父さん！！」

キ　「へたれー！！」

近　「う・・・くぅ・・・確かにこの話の基本コンセプトは『下手にフラグを立てない』ではあるが・・・」

フ　「だから近藤さんは見た目カッコよくないんですよね。」

近　「ぐう！？」

シ　「へたれ。」

近　「ぬふぅ！？」

エ　「小心者！」

近　「アッー！？」

キ　「でもいいじゃないですか。お父さん、家族でも。私はうれしいですよ？」

近　「キャロ・・・（ホロリ）」

キ　「私とエリオ君は子供で、フェイトさんは奥さん！」

フ　「え！？お、奥さん！？美人妻！？」

シ　「そこまで言ってない。」

エ　「じゃあ、シグナムさんは？」

近　「年齢で言うならおばあ・・・あ、ごめんなさい、レヴァンテインを収めてください。」

シ　「まったく・・・で？私はなんなのだ？」

キ　「エッチなお姉さん？」

シ　「ちょっと待て！エッチてなんだエッチって！？」

エ　「自覚ないんですか？そんなにいやらしい体してるのに。」

シ　「エリオ！？」

キ　「おっぱい魔人ですからね。」

シ　「キャロまで！？・・・て何故睨む！？」

近　「なるほど、いつもシグナムお姉さんにエッチな誘惑をされ、それに触発される美人妻のフェイト・・・アリだな！！」

フ　「フェイトさん、ぼく弟が欲しいです！！」

キ　「私は妹がいい！！」

フ　「え、え！？そ、そんな・・・こと・・・私だって・・・経験ないし・・・よくわからないよ・・・」

エ　「お父さん！！」

キ　「がんばって！！」

近　「おう！！声援ありがとう！！じゃあ行きましょうか、フェイト、シグナム姉さん。」

フ　「え！？そ、そんな！？私、心の準備が・・・」

シ　「ちょっ、私もか！？待て！！私は・・・」

エ・キ　「いってらっしゃーい！！」

エ　「というわけで今回はここまで！」

キ　「皆さん、引き続きよろしくお願いします！！」

エ・キ　「またねー！！」

はやて　「最初のほうはまともやったのに・・・」

なのは　「結局最後はグダグダだったね。」

ヴィータ　「つーか、フェイトとシグナム放っておいていいのか？」

は　「大丈夫や、ヘタレの近藤さんが最後まで出来るはずがない。」

な　「うん、たぶん今頃二人にボコボコにされてるよ。」

ヴ　「近藤・・・不憫な奴（ホロリ）」

## 第２３話（前書き）

今回の話は補足のようなものです。まったり見てください。

# 第２３話

ここはとあるラボ。

薄暗い部屋の中央で、一人の長髪の男がモニタを眺めている。
その目は真剣そのものだ。
モニタに映し出される映像には、強化ガジェットドローンＩＩ型が銀髪の女性に次々と目にも留まらぬ速さで叩き壊される姿が映っていた。
あまりにも速いので、超スローで再生している。

「ふむ・・・ウーノ？」

男は顎にかけた手を下ろし、呼びかけると別のモニタが展開し、女性が映る。

「お呼びですか、ドクター？」

「うむ、今回のガジェット出撃のデータなのだが、音声は無いのかね？」

ドクターと呼ばれた男はウーノに問い掛ける。
今回のガジェット達の残骸は回収し、そのなかの映像記録を確認していたのだ。

「できれば、この戦闘終了後の彼女達の会話が知りたいのだよ」

「わかりました。抽出してみます」

ウーノはコンソールを軽快なリズムで叩くと、映像から音声が流れてきた。

「・・・・さい・・・」

「・・・リインフォース・・・さん？」

「・・・秘密です。」

「・・・我が主によろしく・・・」

途切れ途切れに音声が聞こえる。
ドクターはモニタを睨みつけ考え込む。

「ふむ・・・リインフォース・・・どこかで聞いたな・・・」

「管理局所属の魔導士、八神はやてが持つユニゾンデバイスがそのような名だったかと」

ドクターの前にパパッとモニタが二つ展開し、それぞれに八神はやてとリインフォースツヴァイの写真が映し出される。

「いや・・・もっと以前の話だよ」

ドクターはモニタを見てつぶやく。
ウーノは検索を開始し、新たなモニタを展開する。

「・・・ありました。
１０年程前に『闇の書事件』というものがあります。
古代ベルカによるロストロギア事件ですね。

その際の闇の書の管理人格の名がリインフォースです」

そうして新たなモニタには闇の書の管理人格たるリインフォースが映し出された。

ドクターはそれぞれに映るモニタの人物を見比べる。

「ふむ、そっくりだな。では闇の書は実は破壊されていなかったのかね？」

「いえ、それは確実に行ったようです。

闇の書の暴走を止めるためには破壊しかなかったようですので」

ウーノがリインフォース生存の可能性を潰していく。

ではこのガジェットを潰した人物は誰なのか。

単なるソックリさんではあるまい。

「別の本があるということか？

そして、その本は彼女等機動六課の誰かが持っている、と・・・」

ドクターはブツブツと呟くと、急に笑い出した。

「く、くくくく・・・すばらしい。

ミス・クリスタルは彼女達と共にいるのか・・・おもしろいコマが揃ってるじゃあないか！

ああ、早く私の元に来てほしいものだ！」

ドクターはどこか陶酔したような顔でモニタを眺めていた。

「それは、ほんまなんか？
ほんまに『主によろしく』言うとったんか？」

管制室では、はやてがなのはとフェイト、ヴィータに今回の出撃の際の銀髪の女性について聞いていた。

「うん、確かに言ってた。
言ってたし、姿も似ていたけど・・・」

なのははそう言うと考え込む。
確かに顔は似ていたが、雰囲気はまったく違っていたような気がする。
今回見た銀髪の女性は妖艶というか、色気というか、そんな雰囲気があった。
逆にリインフォースはどちらかというと清楚な感じだった。
それに服装、あれはバリアジャケットだろうが、リインフォースは黒を基調としたものだった。
しかし、今日出会った彼女は紫と青を基調としていた。
ここに意味があるのだろうか？

「確かに外見は似ていた。でもアイツは違う。もっと根本的なところでな」

ヴィータはムスッとした感じで、腕を組んで語る。
だが、目は真剣だ。

「大体、古代ベルカで夜天の書はリインフォースの一冊だけだった。

もし似てるにしても、今日のアイツはベルカ式じゃあない。
そもそも、アイツがデバイスかどうかもわからない。
あたし等が見たのは、あの銀髪の女自身なんだからな」

そう、そもそも論点が闇の書に関係するというところからして発想の幅を狭めている。
彼女は自分をリインフォースの関係者とは一言も言っていないし、何よりあの魔法と飛行速度が問題だ。

マッハ5？どんなデタラメな速度だ。
普通の人間なら耐えられずに音速の壁で潰れて死んでしまうだろう。
フェイトでもそんな速さでは飛べないし、現在残存する魔法の中に、あれ程の速度を出せる術式は聞いたことがない。
ミッドチルダの技術にしても、人間一人の小ささの機械を開発し、マッハ5で飛ばせる程の進歩はしていない。
戦艦クラス、それこそ、次元航行艦ほどの大きさならば可能だが。

そして次に彼女の攻撃方法だ。
あまりにも速いので、超スローで映像を再生して改めて検証した。
するとどうだ。
彼女はただ、魔力を拳に集めてガジェットを殴っているだけなのだ。
驚くべきはその魔力の運用方法ではなく、その強固な魔力壁でもない。
攻撃の正確性である。
あれ程のスピードで移動して、絶え間無く動いているにも関わらず、彼女の拳はどのガジェットも同じ場所を撃ち抜いている。
ガジェットの動力部分、すなわち、コアに当たる場所だ。

常人離れした反応速度はそれだけで脅威だ。
有り得ないスピード

有り得ない反応速度
そしてそれに耐えうる肉体と神経
彼女が敵ならば、まず誰も勝てない。
それ程の力をあの短時間で見せ付けたのだ。

「でも、あの人の言葉を信じるなら、主に当たる人が私達の近くにいるという事だよね？」

フェイトは前向きに推測する。
自分達に向かってあのように宣言するということは、主とやらが私達の知り合い、もしくは機動六課にいる可能性すらある。
自分達の周りにあんな知り合いがいる人がいるだろうか？
そんな事を考えていると、はやてがポツリと呟いた。

「近藤さんや・・・」

皆の視線がはやてに集中する。

「近藤さんは、前々から何か隠しとる思うとった」

「・・・じゃあ、聞いてみる？」

なのははやてに聞く。
なのはも、近藤なら有り得るかもしれないと思っていた。
近藤自らも、なにかと反則紛いの技を持っている。
いま身近で一番可能性があるのは、近藤だ。

だが、はやては意外な返答をする。

「いや、今はやめとく」

「なんでだ？」

ヴィータは不思議そうにはやてを見た。

はやては皆と目線をずらし、なにか思い返すように話し出した。

「あの人はこれまで、ほんまにつらい思いをしてきとる。

でも、それをあの人の口から聞いたことがない。

８年前の事件の真相も、リンディ統括官からの又聞きや」

「うん」

フェイトがはやての言葉に頷いた。

「今日の模擬戦の事も聞いとる。

近藤さんは不思議な力を持っとるいうこともわかった。

でもそれは、私等から聞いて答えてくれたもんやろ？」

なのははその通りだと頷く。

「あの人は、自分からは何も話さへん。

別に隠しとるわけやないんやろうけどな」

なのは達は思い返していた。

確かに、近藤は自らの事を自分から話したことは一度もない。

こちらから質問して、答えてくれたものばかりだ。

「多分、今回のコレも聞いたら答えてくれるやろう。
だからこそ、聞くことはできん」

隣でリインが不思議そうな顔をしている。
はやてはそれを見てフッと笑い、

「模擬戦での出来事が起こるまでは、私は近藤さんがそんなにスゴイ人やとは思ってなかった。
逆に言えば、模擬戦での出来事はイレギュラーやったっちゅうことや。
今回の出動も、あの女の人のおかげでこちらの戦力を見せずに済んだ。
恐らくやけど、あの人は力を使うのを嫌っとるんちゃうやろうか？
だから、自分の力を使わんのやと思うし、それをわざわざ自分から喋ろうとせんのやろう。
それは、『あまりにも強大な力は危険と責任を伴う』いうことを知っとるからや。
今日の模擬戦にしても出動にしても、しゃあなしで使っとるように見える」

いままで皆と目線をずらしていたはやてが顔を上げ、なのは達を見据える。

「私は、そんな近藤さんやからこそ、いつか自分から言うてくれると信じとる。
あの人は信頼に足る人や。もう、私等の大事な仲間、家族や。
だから、聞かん」

そう言うとはやてはニコリと笑った。

「・・・だそうですよ？ご主人様？」

エレノアが横でニヤニヤして近藤を見る。

近藤は顔が赤い。

はやてがあまりにも良いように解釈してくれるので、恥ずかしくなったのだ。

現在、近藤は宿舎に戻り、エレノアを使って機動六課管制室を魔法で盗聴していた。

エレノアを見られたことをどう言い訳するか、考えるために。

だが、聞いていてビックリした。

彼女達はかなり聡い。

いままでの行動でエレノアが近藤に関係する人物であると結論付けたのだ。

流石はエリート達といえるだろう。

近藤は確かに力を使うのを好まない。

だが、模擬戦の事はともかく、

出動の事に関しては、近藤がスカリエッティにイライラして、腹いせにエレノアに行かせただけで、

機動六課の戦力温存など、あの頭に血が上っていたときは考えていなかった。

それに、話を自分からしないのは単に面倒臭いだけで、はやての言うような高唱な考えがあるわけではない。

そして、自分を仲間、家族と言ったはやてに対し、

「・・・いずれ、お話しますよ。全部」

と呟いた。

すると、エレノアが笑顔て近藤に近付いてきた。、
この顔は良からぬ事を考えている顔だ。

「ねぇねぇ？私、良いことしたんじゃない？
ご主人様達の絆を深める、良いことしたんじゃない？」

・・・何が言いたいのだろうか。

「ご主人様のために頑張る私！
これはもう少し評価されてもいいと思うの！」

なにかくだらない事を言いそうな気がするが、とりあえず聞いてみよう。

「おやつ一週間抜きを無しにして、特別ボーナスとして、
あの地球の「翠屋」のイチゴのショートケーキを所望するのです！」

エレノアはえっへんと胸を張る。
ご立派なお胸が揺れておりますよ。
若干鼻息も荒い。

ああ、どんだけ自分に都合のいい条件提示してくるのでしょう、この子は？
もうね、可愛そうでね、涙がでてきましたよ。

「あら？ご主人様？
そっか！泣くほど私が素晴らしい事をしたのね！
これは更にシュークリームも追加かしらん！」

プチッ

「呆れて泣いてんだ！アホがー！！」

「あれー！？」

防音完備の近藤の部屋だが、それはもう恐ろしい怒号が中から聞こえたという。

# 第２４話

あのちょっとした事件から数日経ち、今日も今日とてフォワード四人は訓練に励んでいた。
相変わらず近藤は細かい指導をチョロチョロしているだけだが、皆の動きが格段に良くなったのが顕著に見られた。

特にティアナがいい。
やはり心境の変化が大きいのだろうが、最近の訓練ではかなり余裕が見られ、動きも格段に良くなっている。
近藤にアドバイスを受けるとき、何故か顔が赤くなるのでスバルに冷やかされ、
二人が追いかけっこをするのもお馴染みの風景になった。

そして、朝の訓練が終了し一同が集まり、訓練の反省などを言うときのこと。

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様！」

ＦＷ４人はドロドロのボロボロだ。
返事も絶え絶えだ。

「でね？実はなにげに今日の模擬戦が第２段階クリアの見極めテストだったんだけど・・・」

なのはがサラっとテストであったと言い、四人は「え！？」と声を揃えた。
なのははそれぞれフェイト、ヴィータ、近藤を見て、今回の合否を聞いた。

「合格！」

「はやっ！」

フェイトの即答にティアナとスバルがおもわずつっこんだ。

「ま、こんだけミッチリやって問題あるなら大変だってことだ」

「はは・・・」

ヴィータの厳しい言葉に、エリオとキャロは顔を引き攣らせ、乾いた笑いをもらした。

「みんな、よくこんな厳しい訓練毎日やるよな。
俺なら泣いて逃げるわ。
確かに動きは格段に良くなってる。
更に上のステップへ進んでも問題ないだろう。
これからは更に厳しくなるからな。
がんばれよ！」

「はい！！」

近藤の言葉に四人は元気よく返事した。特にエリオ、キャロ、ティアナは褒められてすごくうれしそうだ。

「なんだ？気持ち悪いな。そんなに厳しい訓練が好きなのか？」

近藤は若干引いた。
近藤には彼女達がうれしそうに返事をする理由がわかっていなかっ

た。

「私も、みんな良い線いってると思うし、じゃ、これにて第二段階終了！」

なのはからの合格通知に４人はよろこぶ。

「デバイスリミッターも一段解除するから後でシャーリーの所に行ってきてね」

「明日っからはセカンドモードを基本にして訓練するからな」

フェイトとヴィータが訓練の事前準備を申し渡したときに、キャロはふと不思議な言葉を聞き取った。

「え？明日？」

「ああ、訓練再開は明日からだ」

皆キョトンとした顔をしている。

今はまだ早朝、その間何をするのだろうか？デスクワークか？みたいな顔をしているＦＷ４人。

「その若さでワーカーホリックか・・・可愛そうに・・・」

近藤は憐憫の目で見つめる。

大体、時空管理局は万年人手不足、魔導士不足と言いながら、仕事量は増える一方。

みんな労働基準法を遵守しているのだろうか？

少なくとも、機動六課は守っていない、というか守れない。
試験運用部隊のために、イロイロあるのだろうが、それでも尋常ではない。
隊長陣の仕事量は殺人的に多い。
実際、時空管理局での死亡原因は捜査中殉職より過労死の方が多い。
管理局内にも労組などがあり、この問題はずいぶん前から取り上げられていたが、未だ解決策が見出せていない。
犯罪発生件数が年々増える中で、悠長なことは言っていられないのだ。
機動六課もこのままでは、いずれ過労で体調を崩す局員が出るだろう。
近藤のデスクワークの驚異的なスピードで、ライトニング分隊については比較的緩和されているが、
他のスターズ、ロングアーチあたり、特にロングアーチのはやて部隊長の仕事量は凄まじいものがあり、
たまに近藤も手伝っていたりする。
おかげで、残業手当てが労働基準の超勤目いっぱいまであり、機動六課に来てから給料の額が凄いことになっていた。
近藤は、リンディか”あの人達”に進言しておくかな?と考えていた。

「今日は私達も隊舎で待機する予定だし」

「みんな、入隊日からずーっと訓練漬けだったしね」

ＦＷ４人はまだなのはとフェイトの言葉の意味がわかっていないようだ。

「ま、そんなわけで」

「今日はみんな、一日お休みです！」

「町にでも出かけて、遊んでくると良いよ」

「遊ぶ」というキーワードにやっと皆意味がわかり、顔が笑みに変わる。

「はーい！！」

「・・・以上、芸能ニュースでした」

朝の訓練も終わり、隊長達とシャマル、ザフィーラは一緒に隊舎の食堂で朝食を採っていた。

食堂ではテレビからニュースが流れている。

もちろん近藤も一緒に朝食を採っているのだが、

（・・・メシの味がしない・・・）

女性陣ばかりの中、しかも美女ばかりに囲まれての朝食・・・

小心者の近藤にとって決して居心地のいいものではない。

（大体、俺は朝食はいつも野菜ジュースだけなんだ。こんなに食えるか！）

普段、近藤は朝食の時間は皆と居らず、一人寮で野菜ジュースを飲んで済ませている。

それなのに今日に限ってみんな休日、もしくは待機で時間があるから一緒に食事を採ろうと誘われたのだ。
断る勇気のない近藤はＹＥＳと言うしか選択肢がなく、現在に至る。
目の前にはたいした量の食事は置かれていないのだが、基本少食の近藤には大量に見えてしまう。
だから現在近藤は、味のしない食事をチビチビ食べていた。

「続いて、政治経済です。昨日、ミッドチルダ管理局地上中央本部において、来年度の予算会議が行われました。
三度目となる再申請の税政問題に基づいて、各世界の注目が集まっています」

食堂のモニタにはニュースが流れており、現在は政治経済の時間のようで、管理局の予算について放送されていた。

「当日は、首都防衛隊の代表レジアス・ゲイズ中将による管理局の防衛思想に関しての表明も行われました」

レジアス・ゲイズという名前が出た途端、皆がモニタに注目した。

「魔法と技術の進歩と進化素晴らしいものではあるが、しかし！それがゆえに我々を襲う危機や災害も１０年前とは比べ物にならないほどに危険度を増している！
兵器運用の強化は進化する世界を守るためのものである！」

レジアス中将の言うことは間違ってはいない。
魔法と技術の進歩と進化、人々の暮らしが豊かになるということは、その魔法や技術が犯罪にも使われるということである。
偉大な発明は必ずしも良いことばかりをもたらすわけではない。

ダイナマイトがあるから、採掘作業が捗るし、戦争で使われる。
核があるから暮らしの電気として、そして、核兵器として使われる。

「首都防衛の手は未だ足りん。地上戦略においても我々の要請が通りさえすれば、
地上の犯罪発生率も２０パーセント、検挙率においては３５パーセント以上の増加を、初年度から見込むことが出来る！」

レジアス中将の演説に興味が無くなったのか、皆朝食を再開する。

「・・・このオッサンはまだこんなこと言ってんのな」

ヴィータは呆れながらレジアスを批判する。

「レジアス中将は、古くから武闘派だからな」

シグナムはミッドチルダ首都航空隊第１４部隊副隊長という立場であるため、首都防衛隊のレジアスとは面識があり、
レジアスの性格もある程度わかっているのだろう。
コーヒーを飲みながら淡々とレジアスを評する。

「・・・あ、ミゼット提督。」

なのはがモニタに映る人物を見て人物の名前を呟いた。

「え？ミゼットばーちゃん？」

ヴィータはミゼットと言う名前に反応しモニタに注目する。
レジアス中将が演説する右後ろに三人の人物が座っている。

本局幕議長　ミゼット・クローベル
武装隊栄誉元帥　ラルゴ・キール
法務顧問相談役　レオーネ・フィルス

である。

「あ、キール元帥とフィルス相談役もご一緒なんだ」

フェイトもモニタに注目し、他の二人の名前を挙げる。

「伝説の三提督そろい踏みやね」

「お忙しいのに、ご苦労なことで」

はやての伝説の三提督と言う言葉に、近藤は三人の立場を考えてため息まじりに労をねぎらった。

「でも、こうして見ると・・・普通の老人会だ」

ヴィータは嬉しそうにモニタの三人を見ていう。
確かに、あの見た目では、普通の服を着て外を歩いていればただの老人にしか見えない。
特にミゼット幕僚長などは、縁側で猫をひざに乗せて日向ぼっこをしている姿が容易に想像できる。

「もう、ダメだよヴィータ。偉大な方達なんだよ」

フェイトがシャマルからパンの入っているバケットを受け取りながら、ヴィータを諫める。

「うん、管理局の黎明期から今の形まで整えた功労者さん達だもんね」

フェイトからバケットを受け取り、パンを取るなのはが三提督の功績を称えた。

「ま、あたしは好きだぞ。このばーちゃん達」

ヴィータの一言で周囲の動きが止まった。

「あの、ヴィータ副隊長、質問いいですか？」

近藤が恐る恐る聞く。

「ん？なんだ？」

「ミゼット提督をばーちゃんって言ってますけど、年齢でいったらヴィータ副隊長の方が年上ですよね？それも遥かに」

ヴィータが固まった。
シグナムが固まった。
シャマルが持っているフォークをねじ切った。
ザフィーラは黙々と食べている。

「近藤さーん！！それ禁句ー！！」

はやてが人差し指を立てて「しーっ」と小声で近藤に忠告するも、ヴォルケンズからは黒いオーラが出ていた。
なのはとフェイトは緊急避難した。

「・・・近藤、いい度胸だな」

シグナムがユラリと立ち上がる。

「・・・女性に年齢の話題をふるなんて・・・」

シャマルが新しいフォークを手に持つ。

「・・・教導してやんよ」

ヴィータはいつの間にか手にグラーフアイゼンが握られている。

「はあ、まあ皆さんそんな年齢を感じさせないほど若々しくてお美しいですから、年齢とか気にしてないでしょ？」

近藤は命の危険を察知できなかったが、とりあえずフォローをいれた。

すると三人はまた固まった。

「・・・・・え？」

「今、なんと？」

シャマルはフォークを振り上げたまま固まっていた。

「え？年齢とか気にしてないでしょ？」

「その前だ、その前！」

ヴィータはグラーフアイゼンをゲートボールのようにアッパースイ

ングの形で動きを止めた。

「えー・・・若々しくお美しいから、ですか？」

「う、うむ！そ、そうか！それならばよし！！」

シグナムは顔を赤くして、コホンとひとつ咳払いをし、席に着いた。

「？なんです？」

近藤はよくわからいという顔をして三人を見た。

三人ともなにやらニヤニヤして席に着いた。

「・・・近藤さん・・・天然ジゴロやな・・・」

はやては近藤の自覚のない行動に冷や汗をかく。

「よくわかりませんが？大体、この機動六課は綺麗な人ばかりじゃないですか？

顔で採用決めてるんじゃないかってくらいに。

隊長達なんか雑誌で特集されるくらいじゃないですか。もうアイドルでしょ？」

アイドルという言葉になのはとフェイトが顔を赤くする。

「そ、そんな・・・」

「ア、アイドルなんて・・・」

顔を赤くしてモジモジしているがまんざらでもなさそうである。

「噂で聞いたんですけど、なのは隊長とフェイト隊長ってグラビア写真集出すって本当ですか？」

その言葉にみんなの視線が二人に集中する。

二人もビックリしている。

「え！？それホンマか！？」

はやてが前のめりでなのはに近づく。

なのはとフェイトは顔を左右に残像が残るくらいブンブン振る。

「そ、そんなの聞いてないよ！？」

なのはは思いっきり否定する。

隣でフェイトが首を縦にブンブン振る。

「その噂、誰から聞いたん？」

「え？ヴァイス陸曹ですけど？」

はやてはため息をついた。

「近藤さん、それデタラメや。ヴァイス君が面白半分で言うとるだけやろ」

なのはとフェイトがホッとする。

「そうですか。

あ、でもリンディさんが、今度機動六課にテレビの取材が来るって

言ってましたよね。これは決定でしょ？」

「なにー！？」

はやてはバンとテーブルを叩き立ち上がり、大声をあげた。

「うそやん！なんで！？」

慌てふためくはやて。なのは達もテレビ取材という言葉に狼狽する。

「美人部隊長に美人局員、これほどテレビ栄えする素材は管理局にココしかない！とか言ってましたけど・・・
もしかして知らなかったんですか？もし都合が悪いなら俺がリンディさんに断りの連絡入れますけど？」

近藤の美人と言う言葉に皆が行動を停止する。

「美人部隊長・・・」

「テレビ栄え・・・」

「ココしかない・・・」

なにやらブツブツいいだした隊長達。

「し、しゃーないなー！美人部隊長が私等しかおらんのやったら引き受けるしかないよなー！」

「そ、そうだよね！美人局員として管理局のイメージアップにもなるしね！」

「まったく、リンディ母さんも大変な仕事を回してくれるよね！」

「うむ！だが来た以上、美人局員の名にかけて引き受けるしかあるまい！！」

「そーだな！全力でかかるか！！」

「管理局の人員不足解消に貢献できるなら、いくらでもメディアにでますよ！！」

なにやら、皆のテンションが上がりまくり、やる気満々である。

「あ、じゃあ、リンディさんには引き受けると連絡しておきます」

近藤はみんなのハイテンションに若干引きつつ了承の手続きを取るというと、

「よろしく！！」

はやてはサムズアップで近藤に答えた。

いや、その場の女性陣全員すごいいい笑顔でサムズアップしていた。

こうして、機動六課の休日の朝食はハイテンションで終わった。

後日、機動六課にテレビの取材が来るがその話はいずれ。

# 第２５話

朝食を食べ終わり各自の仕事を行うことになり、近藤はシグナムと仕事の分担作業を行っていた。

（・・・ん？１０８部隊と聖王教会との合同捜査本部の立ち上げ？）

今日送られてきたデータを確認していると、そんな題目のデータを見つけた。

聖王教会という字を見た途端に、近藤はため息をついた。

「どうした、近藤？」

シグナムが近藤の態度に気遣いするが、近藤はなんでもないと返す。

「ふむ、そうか？・・・ん？１０８部隊と聖王教会との合同捜査本部立ち上げ？
ナカジマ三佐のところか」

シグナムは近藤の見ていたデータを自分のモニタに映し、内容を見ながらそういった。

「シグナム副隊長は知っているんですか？」

「ああ、スバルのお父上が部隊長をされている部隊だ。姉のギンガも同じ部隊だな」

「へぇ、そうですか」

機動六課はイロイロな分野のエリートの寄せ集め集団だけに、意外に広い人脈があるようで、近藤は感心した。

「うむ、ならばこの件は私が受け持とう。近藤は他の処理を頼む」

シグナムが有り難い事を言ってくれた。

近藤は聖王教会が嫌いだ。

それは、これから先き起こる未曾有の事件の発端に、聖王教会がからんでいるからだ。

これは近藤がアカシックレコードで得た未来の情報と、過去の事件を照らし合わせてわかったことである。

だから今はまだ誰も知らない。

この先どれ程の地獄が待ち受けているかを。

その責任の一端が聖王教会にあるのだ。好意など持てるはずがない。

現時点でこれほどの情報を知っているのは、近藤と首謀者であるスカリエッティだけだろう。

シグナムは１０８部隊と聖王教会との合同捜査本部立ち上げのために外回りに行くことになった。

そこへヴィータがやってきて、戦技教官の仕事のために自分も外へ行くと行った。

近藤は二人を見送り、自分に割り当てられた仕事を行うために格納

庫へ向かった。
すると格納庫の前でティアナとヴァイス陸曹がいた。
なにやらバイクの点検をしながら話をしているようだ。

「ヴァイス」

近藤はヴァイに声をかけた。

「あ、近藤さん。ちゃーっす！」

挨拶のノリがヤンキーみたいだが、この際置いておこう。
ティアナは近藤がいることに驚いたのか、少し顔が赤い。

「こ、近藤副隊長、ヴァイス陸曹になにかご用ですか？」

「ん？ああ、ヘリの運用について少しな。ティアナはバイクで出かけるのか？」

「はい、スバルと一緒に。ヴァイス陸曹からバイクをお借りして町へ行こうかと」

近藤はティアナがバイクに跨がる姿を想像した。

「・・・カッコイイな」

「え！？あ、いえ、その・・・あ、ありがとう、ございます・・・」

ティアナは照れながら頭をポリポリかく。

「あ、そういえば、近藤さんもバイク持ってましたよね？かなりゴ

ツいやつ」

ヴァイスの何気ない言葉にティアナは食いついた。

「近藤副隊長もバイクを持ってるんですか！？」

ティアナの目がキラキラを通り越してギラギラになっている。

近藤は引きつつ、

「あ、ああ。自作だけどな」

「ハンドメイドのバイク！！」

ティアナさん、近くでそんなに大声出さないでください。

もう引きまくりですよ。

「み、見せてください！！」

「は、はい」

おもわず敬語になる小心者の近藤だった。

近藤は隊舎格納庫を間借りして自分のバイクを置いていた。

その格納庫の隅の方からバイクを押してきた近藤に、ティアナは声を失った。

「こ、これは・・・」

「俺はなのは隊長達と同じ世界の出身だってのは知ってるよな？

で、その世界のバイクを摸して俺が組み上げたっつーわけだ。

もちろん、車検も通ってるから、公道を走ってもオッケー」

本来自作の乗り物など認可が降りるはずもないが、そこは管理局の名前と権力を使い、無理矢理通したのだ。
ティアナは近藤の持ってきたバイクに釘付けになり、近藤の話を聞いていない。
地球の乗り物のデザインはミッドチルダとは異なる。
そのため近藤のバイクはミッドチルダに住むティアナにとっては変わった形で興味深々なのだろう。

「これはＢＭＷってメーカーが出してるやつを元にしたんだ。
あっちの世界のマシンだとミッドチルダじゃガソリンのオクタン価もちがうし、
排ガスやらの規制をパスするのも難しかったんでな。
で、形だけ似せて、中身はこっちのバイクと同じで電気にした」

ティアナは近藤のバイクを触るのに夢中で、相変わらずまるっきり話を聞いていない。
近藤のバイクはＢＭＷの１３００ｃｃを元に組み上げているためかなり大きい。
ヴァイスの持つ赤いバイクの一回りくらい大きいだろう。
ティアナが小さく見える。

「あ、あの！このバイクをお借り出来ないでしょうか！？」

ティアナは興奮しているのか顔が赤く、鼻息も荒い。
相変わらず目はギラついているが。
どうやらティアナはバイクフェチのようだ。

「別にいいけど、大型２輪免許持ってるのか？」

ミッドチルダにもイロイロと免許は存在し、乗り物に関しては地球とさほど変わらない。
大型の乗り物を運転するにはその免許が必要になるわけだ。
大型２輪免許はミッドチルダでは１８歳からの取得になるはずで、ティアナは１６歳、普通に考えれば不可能なのだが、

「はい！管理局に入局してから特例処置で習得しました！！」

管理局に特例措置があり、入局すると年齢制限のある免許は許可が降りれば取得可能となる。
もちろん、キチンと試験はあるが。

「ふーん、じゃあ別にいいよ」

「やったー！！」

「え！？近藤さん、いいんすか？あれ、作るのに結構時間と金を使ったって・・・」

あっさりオッケーをだした近藤にヴァイスは驚いた。
ティアナは嬉しさのあまり、小躍りしている。

「ん？まぁ、最近乗る時間もなかっし、たまには動かしてやらんとな。
とは言え、俺はデスクワークとかで机にかじりついた状態だし誰かが動かしてくれればいいよ」

そうして、近藤はティアナに運転操作をレクチャーしたのだが、その際ティアナの手やら腰やらを触りセクハラ紛いのことをした。

近藤自身セクハラをするつもりなど微塵もなく、仕方なく触っているのだが、傍目から見れば立派なセクハラ現場だった。
ヴァイスの「・・・やばいっすよ、犯罪っすよ」という小声が心に突き刺さる。
だからだろうか、ティアナは終始顔を赤くし、レクチャーも上の空という感じだった。

（わぁ・・・手・・・大きい・・・体もガッシリしてる・・・わ、わ、くっついてる！私近藤副隊長・・・ううん、お父さんと触れ合ってる！）

そんなことを考えていたティアナは近藤からは見えなかったが笑顔だった。
そしてレクチャーも終了し、スバルを待たせていることもあり、ティアナはすぐにバイクに跨がり発進させた。

「バイクは別にいいから自分がケガすんなよー！」

「はーい！」

元気のいい返事をしながらティアナは近藤のバイクに乗りスバルの待つ隊舎入口へ向かった。

格納庫へのようじも終わり、近藤は隊舎内へ戻ろうとしていた。
そのときちょうど、ティアナとスバルが近藤のバイクに跨がり町へ

向かうところだった。
なのはが送り迎えをしており、近藤が声をかけようとする前に発進していった。
二人の後ろ姿を見送っていると、今度はエリオとキャロが二人で出かけようとしているところだった。

「お、二人もお出かけか？気をつけてな」

「はい！」

近藤が声をかけるとエリオとキャロは元気よく返事をした。

「二人とも、夜の町は怖いところだから、はやく帰ってくるんだよ」

フェイトがエリオとキャロに言い聞かせるように言う。
夜の町より危険な現場に出ている二人に言う言葉かと疑問に思う近藤だったが、
あえて口には出さず、二人を見送る。
その際に二人の服装に目をやる。

「二人の服は自分で買ったのか？」

「いえ、フェイトさんに買ってもらいました」

近藤の素朴な疑問に素直に答える二人。
エリオの服は活動的な服装でエリオにはピッタリだろう。
少々色合いが派手かと思ったが、これくらいの年齢の子供には丁度いいのだろう。
キャロの服装は清楚なイメージを前面に押し出している感があるが、キャロにはお似合いだ。

そこで近藤はふと思った。

「キャロのようなかわいい服は、実はフェイト隊長が着たい服なんじゃないのか？」

「・・・っ！？」

途端、フェイトから殺意のオーラが溢れ出た。

どうやら口に出していたらしい。

恥ずかしさからか、顔が真っ赤である。

なのはは横で「ああ、そうか！」と新発見をしたような顔をしている。

大体、フェイトは普段の私服から、黒や灰色などのモノトーンの配色が多く、

それも相まって落ち着いた感じのお姉さんみたいなイメージができるのだ。

フェイトもキャロのようなピンクや薄く淡い色やフリルの付いた服を着れば、金髪を際立たせて素晴らしいお嬢様が出来上がるのだが、

今の真っ赤になってパニックになっているフェイトには何を言っても無駄だろう。

真っ赤になったフェイトだが、エリオとキャロを冷静に送るくらいの理性は残っていたようで、

二人を送り、姿が見えなくなったくらいでフェイトが近藤に詰め寄る。

「こ、近藤さん！二人の前だからって、か、かかかからかわないでください！」

フェイトは顔を真っ赤にして、それこそ耳の裏まで真っ赤にして抗議する。

両手をブンブン振っている姿は年相応に見える。・・・いや、それより幼く見える。
またその姿がかわいらしいのだが。

「事実ですよ。キャロのような服もきっと似合いますよ？なのは隊長もそう思いますよね？」

「うん」

近藤はなのはに同意を求めたら即答された。
なのはは普段から、それこそ何年も前から思っていたことらしい。
『フェイトは黒系統の服が多い』と。
フェイトはなのはまでそんなこと言うとは思っていなかったようで、アウアウと口をパクパクしていた。

「フェイトちゃん、今度お買い物行こ？」

なのはが天使のようなスマイルでフェイトに追い撃ちをかけた。
なのはにゾッコンラブであるフェイトは頷くしかなく、顔を真っ赤にしたままで涙目で近藤を睨んでいた。
全然怖くないが。
近藤は、二人のファッションセンスにも多少不安があったが、大概の服は元々の素材たる顔や体型でカバーするので、余程の変な服を選ばないかぎりまともに見えるだろう。

しかし、フェイトはどうしてこんなに黒にこだわるのだろうか？
小さい頃からの刷り込みだろうか？
車も色も黒だったはずだ。
バリアジャケットも黒が多い。
近藤は考えるが、

「・・・まぁ、似合うからいいのかな？」

考えるのが面倒くさくなって無理やり切り上げた。

そしてフェイト、なのはと別れ近藤はデスクワークに戻った。

# 第２６話

それは、キャロからの全体通信からはじまった。

「こちらライトニング４！緊急事態につき現場報告をします！
サードアベニューＦ２３路地裏にてレリックと思しきケースを発見！
ケースを持っていたらしい小さな女の子が一人。」

「女の子は意識不明です」

「指示をお願いします！」

キャロの報告にエリオが続き、機動六課隊舎に待機している隊長に指示を仰ぐ。
隊舎の巨大モニタにはエリオとキャロが保護した少女が映し出されている。
ボロボロの布で体を隠した金髪の女の子だ。
なのはは同時に映されている別のモニタのスバルとティアナに向き、

「スバル、ティアナ、ごめんお休みは一旦中断」

「はい！」

「大丈夫です！」

簡潔に状況の重要さを報告する。二人もレリックということで、仕事モードの顔つきになっている。

「救急の手配はこっちでする。二人はそのままケースとその子を保護、応急手当をしてあげて」

「はい！」

フェイトはエリオとキャロに現場保護を指示し周囲の監視を促す。

なのはとフェイトが素早く指示を飛ばしている隣で、近藤は苦虫を噛み潰したような表情をしていた。

（しまった、今日だったのか！）

近藤がアカシックレコードで得た未来の記憶のひとつ、

――― 王との出会いの時期 ―――

しかし、情報量が膨大で、細かい日付や時間が把握できなかったのだ。

後手に回ってしまったことを悔やみつつ、近藤はすぐに行動に移る。

「（エレノア、すまないが今日からお前にも『表』で活躍してもらう。いつでも人型になれるようスタンバイして俺のそばにいてくれ！）」

「（了解です！もうコソコソしなくていいんだね？）」

エレノアが期待に満ちた声をあげる。

「（ああ、これからはお前も機動六課で頑張ってもらう）」

「（やたー！！皆とあそべるー！！）」

「（お前話聞いてたか！？）」

「全員待機態勢！席を外してる子達は配置に戻ってな！」

はやては部隊長室から指示を飛ばす。

脱いでいた上着を着て歩き出す。

「安全確実に保護するよ、レリックもその女の子も！」

「了解！」

はやての真剣な表情、そして全てを守るという意思が彼女の部下とパートナーにも伝染する。

皆、歴戦の戦士のような表情だった。

近藤達隊長陣はヘリに乗り込み、シャマル、リイン等と一緒にエリオ達のところへ向かっていた。

近藤は以前見たアカシックレコードの記憶を思い出す。

（確か保護した後ガジェットが現れて・・・全身タイツの痴女が・・・2、3人・・・いや4人か？現れて・・・それから・・・）

近藤は腕を組んで必死に思いだすがそれ以上出てこず、

（・・・だめだ。思い出せない・・・いや、情報がココまでしか見れなかったか？）

あまりにも膨大な情報、宇宙の意思、全ての記憶、それらは人間一人で背負えるものではない。

だから、いくら近藤が死への恐怖が無いとはいえ、体、神経がそれを拒絶する。

いままで近藤が無事に生きているのは、その動物の本能のような生命維持によるところが大きい。

心と、体は別なのだから。

そんなせいもあってか、情報が曖昧であり、脳への負担軽減からか、記憶の欠如もところどころある。

そんな風に難しい顔をしていると、なのは達が心配そうに見つめてきた。

「近藤さん、大丈夫ですか？」

「なにか、心配事ですか？」

近藤の洞察力や情報収集力のスキルはかなりレベルが高い。

なのはやフェイトは、近藤がなにか不安要素があると思ったのだろう。

「え、あ、いや・・・その少女が持っていたのがレリックだとして、もしスカリエッティが絡むとしたら、どこでこちらに手を出してくるかを考えていまして」

近藤はおもわず嘘をいうが、あながち全部が嘘ではない。
あの目立ちたがりのスカリエッティがどのあたりで自分の駒を投入するのか？
そして、記憶にいた全身タイツの痴女はどう関係するのかを考えていたのだから。

「バカで目立ちたがりのスカリエッティのことですから、自分の戦力を隠すとかあまり考えずにガンガンくると思うんです」

近藤のバカ発言にヘリの中は時間が止まった。

「いや、近藤さん・・・いくらなんでもバカは・・・」

フェイトは、仮にも自分のような人造魔導士を造れる人間をバカと言われたことにビックリした。

「あいつはバカですよ。あの程度の知識、アルハザードの知識があれば誰でもできます。
まぁ、一般的に考えてあいつは天才に当たるんでしょうけど、俺から言わせてもらえば、模造ばかりのパクリ野郎ですよ」

近藤の辛辣な発言に皆が固まった。

「・・・近藤さん、スカリエッティのこと何か知ってるんですか？」

フェイトは近藤に尋ねる。

先ほどの発言
「アルハザードの知識」
「模造」が引っかかった。
まるで、自分もスカリエッティと同じ知識を持っていると言っているかのようだ。

「・・・今日、この出動が終わればお話をしますよ」

近藤は真剣な表情で皆を見る。
なのは達も真剣な表情で見つめ返す。
すると、近藤はフッと顔の表情を緩め、とんでもない爆弾を投下した。

「ああ、とりあえずこいつを紹介しておきましょうか。エレノア出てこい！」

「はいはーい！」

近藤がエレノアと言った途端に近藤の横に突然女性が現れた。
その女性をみて全員が驚いた。

「あ、あなたは！？」

「この前の！！」

「え！？リインフォース！？」

シャマルは前回の出動の出来事をはやてから聞いてはいたが、いきなり現れたエレノアにビックリして思わず夜天の書の管理人格の少女の名前を言ってしまった。

なぜなら、エレノアの姿は夜天の書のリインフォースと瓜二つだったからだ。
煌く長い銀髪、切れ長の赤い瞳、白い雪のような肌、均整のとれた体。
１０年前、自分達を守るため、主を守るために消えた自分達の大切な仲間、その瓜二つの人物がいきなり現れたのだ。
驚かないはずがない。

「はぁ～い！なのはちゃん！フェイトちゃん！お久しぶり～！！」

「・・・え？」

えらく軽いテンションに皆の目が点になる。

「あれ？どしたの皆？」

近藤は横で眉間を揉んでいた。
いつまでもこんな微妙な空気を続けるわけにもいかず、近藤はエレノアを紹介する。

「えー、なのは隊長とフェイト隊長は前回の出動で顔見知りですよね？こいつは俺のパートナーのデバイス
「エレノア」。
アルハザードの技術で造られたストレージデバイス『源書（オリジナルグリモア）』の管理人格にあたります」

「エレノアでーっす！どうぞよろしく！！」

なにやら一昔前の魔法少女のようなポーズを作ってウィンクしながら挨拶をしているが無視無視。

近藤がエレノアの行動を無視しているのでなのは達も無視して話を聞く。

「まぁとりあえず、ややこしい話はおいといて、俺は無人世界とか、管理指定世界とかの遺跡で、こいつ『源書』を発見して使えるようにしたというわけです」

「わー！ご主人様てんさーい！」

近藤の説明に褒めちぎるエレノア。
近藤はため息をついた。

「あ、あの・・・ツッコミどころが満載なんですけど・・・」

なのはが頬をひくつかせている。
アルハザードとか、源書とかもう何でもありな近藤に何を言ったらいいのかわからなくなった。

「ああ、ちなみに、この『源書』のデータを元にアルハザードの情報提供から夜天の書ができたんですよ」

「ええ！？」

これにはシャマルとリイン（ツヴァイ）が驚いた。
まさか、自分達の元になる本があるとは思ってもいなかったからだ。

「だからー、私はリインちゃんのお姉さんよ！」

「ええ！？そ、そうですか！？」

ノリの軽いエレノアにリインはただただ戸惑うばかりで、まともな受け答えが出来ない。

「まぁ、質問はまだまだあるでしょうが、とりあえず現場付近に到着したようですから、降下しましょうか」

「あ、はぁ・・・」

なのは達はあまりの急展開についていけず、生返事をするのが精一杯だった。

「・・・うん、バイタルは安定してるはね。危険な反応もないし、心配ないわ」

シャマルが倒れている少女を診断し、以上無しと言うと一同安堵の表情をした。
したのだが・・・

「あの・・・近藤副隊長?」

ティアナが代表して発言する。
何故か近藤を睨むティアナ。

「・・・何かな?ティアナ。」

近藤は目を合わせない。

「その腕に絡まっている銀髪の女性は誰ですか?」

ティアナの眼差しが冷たい。侮蔑を含んだ目を近藤に向ける。

「はいはいはーい！私はー、ご主人様のしもべでーす！」

「おまえ誤解を招く言い方やめろよ！！」

エレノアの爆弾発言で場の空気が重くなる。近藤はエレノアを諫めようとするが聞いてくれない。

「ご、ご主人様？」

「し、しもべ・・・お・・・お父さんにそんな趣味が・・・」

「不潔です！！」

スバルは目を白黒させている。

エリオとキャロが怒り心頭の猛抗議をする。

ああやめてすいませんごめんなさいこいつの教育方針間違えましたほんと勘弁してくださいそんな汚物を見るような目で見ないでください。

「なによー。皆だってデバイスにマスターとか言わせてるんでしょ？それってご主人様と一緒の意味じゃない！」

「私のは相棒だもん！！」

スバルが猛然と反論するが、他の面々は微妙な顔をしている。

言い方は違えど、マスター、主・・・どれもご主人様にあたる言語である。

フェイトのバルディッシュは
「サー」という上官敬語だから関係ないが、それでも反論しない。

「大体、私はご主人様のデバイスだしー、別にくっついてても問題ないよねー？」

「大有りよ！！子供の教育上にモロひっかかるわよ！！」

普段冷静なティアナまでもが
「エレノア時空」に引きずられている。

そして、それを見ていたなのはとフェイトはエレノアの態度に戸惑っている。
なにせ前回会ったときと雰囲気が全然違うのだ。
あの時は妖艶で艶のある感じだったが、今はまるっきり子供だ。
本当にあの時の人物と同じなのだろうか？そんなことを思ってしまう二人だったが、
とりあえず、このままだと話が進まないのでフェイトが無理やり話を進めた。

「えっと、とりあえずごめんね皆。お休みの最中だったのに・・・」

「あ、いえ・・・」

「大丈夫です！」

エリオとキャロは元気良く返事をする。
近藤の腕ににぶら下がっているエレノアを睨みつけながらだが。

「ケースと女の子はこのままヘリで搬送するから、皆はこっちで現

場調査ね！」

「はい！」

ＦＷ４人が返事をするが、その視線は近藤にじゃれているエレノアに釘付けだ。

「あ、じゃあ・・・近藤さん、この子を抱きかかえてくれますか？」

ひとり冷静に少女を診察していたシャマルが近藤に指示をだす。
この中で手の空いている力がある男は近藤ひとり、当然の判断だがもう少し空気読んでくださいシャマル先生。

「あ、はい。おいエレノア、いい加減離れろ！鬱陶しい！」

近藤はいつまでも腕にぶら下がっているエレノアを注意する。
エレノアの大きな胸が腕にくいこんで肘あたりは極楽天国だが、もういい加減皆の怒りや侮蔑や憐憫の視線に耐えられない。

「やーん、ご主人様恥ずかしがってるー？」

小悪魔のような笑みでからかうエレノアに悪魔のしっぽが見えた。
・・・見間違いだよな？
近藤はため息をつき、

「・・・帰ったらおやつ抜きな」

「ひー！？ごめんなさーい！」

近藤の脅しにエレノアはすぐに従い、近藤の腕からあわてて離れる。

そんな姿を見た周囲の仲間達は一様にこう思った。

（・・・親子？）

そして近藤は少女を抱きかかえる。
少女の首の後ろから肩あたりを腕で固定し、膝の裏に腕を通す。
俗に言うお姫様抱っこだ。

なぜだろう、キャロとティアナのうらやましそうな視線がビシビシくる。

「僕はおんぶとか肩車の方が・・・」

エリオ君願望だだ漏れですよ。
近藤は少女の顔を見る。
まだ少女というより幼児ほどの年齢かもしれない。
そんな子供が

「聖王か・・・」

誰にも聞こえないように呟く。
アカシックレコードでの未来の知識、そしてこれまでの出来事を統計した結論。
この少女が古代ベルカの王。
数ある王の中で一番有名な『聖王』その母体のクローン。
『運命』という名の計画で産み落とされ、これから先過酷な『運命』に振り回される小さな王様。

「（ご主人様、まさかこの子が王様なんですか？）」

エレノアが念話で話しかける。
近藤はエレノアの方を見ずに、抱いた少女に振動を与えないようにゆっくり歩きながら答えた。

「（ああ。聖王の母体、そのクローンだ）」

「（・・・スカリエッティ・・・）」

エレノアは怒りに顔を歪め、唇を噛み締めるる。
拳は握りしめすぎて指が白くなっている。
まったく、表情の起伏が激しい子だ。
そんなに顔に出したら念話の意味が無いではないか。
近藤はそんなエレノアに苦笑し、

「（とりあえず、今回スカリエッティはこの王様を取り戻すために新しい力を導入するはずだ。
頼んだぞ、エレノア）」

「（りょーかいです！）」

ビシッと敬礼をするエレノア。
だから、念話の意味無いって。

そして近藤達隊長陣はヘリに乗り込み、小さな王様を運び出すのだった。

## 第27話（前書き）

更新が遅くなりました。
今回は少し少なめです。

# 第27話

機動六課官制室ではやて達は黙々と周辺調査を行っていた。
すると、地下水路に反応を感知、画像を映すとそこにはガジェットがいた。

「・・・！ガジェット来ました！」

瞬間、管制室に緊張が走る。

「地下水路に数機ずつのグループで総数１６・・・２０！」

「海上方面１２機単位が５グループ！」

管制官のシャーリー達の報告にはやては顎に手を当て考える。

「・・・多いな」

「どうします？」

「・・・そうやなあ・・・」

なのはやフェイトを向かわせればいいのだが、そうするとヘリのレリックが手薄になる。
スカリエッティが増援しないとも限らない。
こちらも余裕を持って対応しなければならない。

グリフィスの質問にはやてはどうするか考えあぐねていると、通信が入る。

すると、モニタにはヴィータが映し出された。

「スターズ2からロングアーチ。こちらスターズ2！海上で演習中だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた！いま、現場に向かってる。それからもう一人」

「108部隊、ギンガ・ナカジマです！」

はやてとグリフィスはその名前を聞くと驚く。

「別件捜査の途中だったんですが、そちらの事例とも関係ありそうなんです。参加してもよろしいでしょうか？」

ギンガのような優秀な捜査官が参加してくれるなど願ってもないことだ。

今は一人でも手がいる状況で、この申し出は渡りに船だ。

「うん！お願いや！」

はやては新たにフェイトを呼び出し、モニタに映す。

フェイトの肩にはリインが乗っている。

「ほんなら、ヴィータはリインと合流。強力して海上の南西方向を制圧！」

「南西方向了解です！」

はやての命令にリインは元気良く返事をする。

「なのは隊長とフェイト隊長は、北西部から！」

「了解！」

なのはとフェイトが同時に返事をする。

「ヘリのほうはヴァイス君とシャマル、近藤副隊長に任せてええか？」

「お任せあれ！」

「しっかり守ります！」

ヴァイスとシャマルも頼りになる返事をする。

はやてが各々に命令を下していき、緊張が高まるが、ここでこの空気をぶち壊す奴がいた。

「まっかせなさーい！この私が最強の鉄壁をみせてあげるの！！」

「な、なんや！？」

急にテンションの高い声が聞こえたのではやては驚くと、シャマル達の映っているモニタの後ろで近藤がエレノアを怒っていた。

「こら！場の空気を考えて発言しろ！」

「えー、私こんな真面目な空気きらーい！」

エレノアが口を3の字にしてブーブー言っているのを近藤が叱っている。

それをヘリに乗っているなのは達は微妙な顔をして聞き流していた。

おそらくずっとあんな感じが続いているのだろう。

「あ、あの・・・どちらさん？・・・って、あんたは！？」

はやてはモニタに映るエレノアに驚く。

無理もない、いきなり現れたのが前回の出動時の「リインフォースのそっくりさん」なのだから。

「はろー！はじめまして！わたくし、ご主人様の牝奴隷をしています、エレノア・K・アルファードでーっす！どーぞよろぴく！！」

「め、牝・・・奴隷！？」

１９歳のはやてにはいささか刺激の強い言葉だったようで、目を白黒させている。

となりのグリフィスも口を開けたままモニタを見つめている。

瞬間、自称牝奴隷のエレノアは近藤の拳骨をくらい、ヘリの中をのたうちまわった。

「うひ～！！いたいいたいなの～！！」

「・・・うわぁ・・・」

エレノアがゴロゴロ転げまわっている姿になのはとフェイトが痛そうな顔をしている。

「すいません！すいません！！こいつの言ってことは嘘ですから！！決して牝奴隷とか肉壺とか便所とかじゃないですから！！」

必死に頭を下げる近藤だが、周りの人間はドン引きだった。

「近藤さん・・・最低ですね・・・」

「便所とか・・・肉・・・とか・・・」

なのはとフェイトが汚物を見るような目で近藤を見下ろす。
シャマルはヴァイスとコクピットにいるため近藤のトンデモ発言が聞こえなかったようで、頭に?マークを浮かべ首を傾げている。
ヴァイスには聞こえていたようで、

「近藤さん・・・漢っす!」

と、感動していた。

「はやてちゃん?エレノア姉さまと、お肉の壺とおトイレにどういう関係があるですか?」

純粋なリインは純粋にはやてに質問をする。
はやてはリインに対し、真剣な表情で大人の世界の危険さを説いた。

「リイン、この世の中には知らんでもええことっちゅうもんがいっぱいあるんや。
今の近藤さんの言うたことはその中でも一番知らんでもええことや。
だからリイン?これからはそんなこと口に出したらあかんよ?」

「はいです!はやてちゃん!」

なんの疑いも持たずに素直に頷くリインに、はやて達は荒んだ心が癒されていくのを感じた。

「ところでリイン？エレノアお姉さまってなに？」

はやてはリインの言葉に聞きなれないフレーズが混ざっていたことに疑問を持ち、リインに聞いた。

「ああ、それは俺が説明します」

「・・・近藤さん、今度不適切な発言したら訴えますよ？」

はやてはニコニコ顔で近藤に釘をさす。
口は笑っているが、目が全然笑っていない。

「はい。すいませんでした。調子に乗っておりました。えー実はですね・・・」

近藤は、なのは達に話した内容をはやてにも伝えた。
はやては終始目を丸くしたままだった。

「・・・というわけです」

「・・・信じられん・・・けど、近藤さんがそう言うならそれが事実なんやろうな・・・」

「だから、私はリインちゃんのお姉さまなの！」

エレノアが元気良くジャンプする。
これこれ、ヘリの中で暴れるな。

「とりあえず、これ以上の詳しい話はこの任務が終わった後で。この場は俺とエレノアに任せてください」

「ん、わかった。じゃあ、ギンガは地下のスバルたちと合流、別件の方の話も聞かせてな」

「あ、はい」

ギンガもはやて達の話を聞いていたために、話の内容についていけずどうしたものかと悩んでいた。

町の中のとあるビルの屋上――――避雷針の上に一人の少女が佇んでいた。
その少女は紫色の長い髪をなびかせ、目を閉じていた。
すると少女の前にモニタが展開し、知的そうな顔の女性――　ウーノ　――が映し出された。

「ヘリに確保されたケースとマテリアルは妹達が回収します。お嬢様は地下のほうを」

少女はぬご無言で目を開ける。
それを了承ととったウーノは話を進めた。

「騎士ゼストとアギト様は？」

「・・・別行動」

「お一人ですか」

「一人じゃない」

そう言うと少女は身に着けているデバイス（アスクレピオス）であるグローブの手の甲のから黒い卵のようなものを出す。

少女はその黒い卵を愛おしそうに頬に摺り寄せる。

「私にはガリューがいる・・・」

「失礼しました。協力が必要でしたら、お申し付けください。最優先で実行いたします」

「うん」

そう言うとウーノはモニタを消し、少女は黒い卵に話しかける。

「行こうか、ガリュー。探し物を、見つけるために」

少女の足元に三角の魔方陣が展開し、そして少女はその場からいなくなった。

# 第２８話

なのはとフェイトが現場に到着し、ガジェットと戦闘を開始しているころ、近藤は金髪の少女「聖王」を触診していた。

「近藤さん医師免許まで持ってるなんてすごいですね」

横で助手をしているシャマルは感心していた。

「この８年間、何もやることなくて暇でね。たまたま試験を受けたら合格しただけですよ」

そう受け答えする近藤は少女に手をかざし、魔力反応で触診を行っている。

「・・・やはり、リンカーコアがある。けど損傷はないな、魔力循環も異常ない」

近藤の呟きがシャマルにも聞き取れ、シャマルは驚く。

「触診でそこまでわかるんですか？私なんて異常個所を見るくらいなのに」

本来、機材などが無ければ、リンカーコアの有無や状態などはわからない。

例えて言うなら、体の中の癌細胞をなんの機材もなしに場所を言い当てているようなものである。

「俺は少し特殊でね。魔力循環機能を人体の細部まで把握できるん

ですよ」

近藤の言うことはつまり、体の血液の流れを肉眼で見ることが出来ると言っていることと同じなのだ。
魔力循環は人体の機能と密接な関係を持っている。
体調が悪いと魔力循環も淀むし、その循環を直してやれば体の不調を直すこともできる。

「へ～便利ですね～」

シャマルはさほど驚くよな事も無くただ「へ～」、「ほ～」と感心するのみである。
シャマルも癒し手の二つ名を持つ騎士であるから、身体の異常などは触診で知ることができる。
というか、この技能は本来皆ができるのだ。ただ、圧倒的に苦手な人間が多いだけなのだが。
触診による魔力調査は繊細で性格な魔力操作が必要であり、１００人の魔導士がいれば１人できれば良いほうなのだ。
なのはやはやてのような大容量の魔力を持つ人間などは特にこの手の作業を苦手とする。
複雑な魔法の術式を組むようなジグソーパズル形式と、
繊細な魔力操作のような針の穴に糸を通す作業とでは目的も用途も異なるためである。
結果、魔導士の医療技術継承が困難になり、自然と医術レベルの停滞にもなった。
現在の魔術医療は旧暦以前から進歩していない。
よって古代ベルカ時代の技術を持つシャマルの能力でも十分通用するし、それ以上の技術が魔法から科学医療へと移行し、
それも相まって現場での魔術医療を行える魔導士が重宝されるようになった。

ただし、近藤はただ詳しく見ることが出来、場合によっては患者の魔力循環を促進させて健康を促すことはできるが、シャマルのように魔力で身体を回復させることはできない。それをさせるほど魔力容量を有していないのが理由だが、その点でシャマルのほうが医療魔術扱い者としては優秀で、現場でかなり重宝される要因でもある。

ちなみに、近藤とシャマルが「聖王」を診ている間、エレノアはヘリの床をゴロゴロ転がって一人遊んでいた。

「ね～シャマルちゃ～ん、お姉ちゃんは暇なのですよ～」

「え？わ、私も妹なんですか？」

エレノアの発言にシャマルは戸惑う。
今の自分のポジションとしては「頼れるお姉さん」決してオバサンではない「お姉さん」だが、さらにその上にお姉さんが現れた。
確かに、夜天の書のプログラムだったヴォルケンリッターはエレノアから見れば妹かもしれないが、
以前のリインフォースは対等な立場だっただけに、リインフォースにそっくりなエレノアには、なんとも返答しにくい。

「こら、仕事の邪魔するな。」

近藤はエレノアを諫めるが聞く耳をもたない。

「だって～、ご主人様は幼女の体をいやらしく弄ってご満悦だろうけど～、私は何もできないから暇なのです～」

「おまえ人聞きの悪いこと言うなよ！シャマル先生も！真に受けて

引かない！！」

「あ、す、すいません・・・」

シャマルはエレノアの言葉を真に受け近藤と距離をとっていた。

「大体、医療魔術の知識はお前のほうがあるだろう？手伝え」

近藤の言葉にエレノアは口を3の字ようにとがらせる。

「私はご主人様以外の人を診る気はありません。私の知識、魔術、そしてこの体は全てご主人様のためにあるんです。この血、この髪の毛一本までご主人様に捧げたんです。他の人間の為じゃありません」

ぷいっとソッポを向いたエレノアの言葉に、近藤はため息をついた。横でシャマルは顔を赤くしていた。

「・・・エレノア、お前の忠誠心は有難いがな・・・まぁ、いいや」

そう言うと近藤は「聖王」の触診を続けた。

そして横で赤くなっているシャマルは、

（・・・忠誠どころか服従や屈服じゃない。なんて告白なの・・・）

なんてことを考えていた。

ギンガの通信は各隊の人間にも報告された。当然、近藤達にも。

「私が呼ばれた事故現場には、ガジェットの残骸と壊れた生体ポッドだったんです。
ちょうど、5～6歳の子供が入るくらいの。
近くに何か・・・重いものを引きずって歩いたような跡があって、それを辿って歩いていこうとした最中に連絡を受けた次第です」

生体ポッドの中には「聖王」が入っていて、レリックボックスを引きずって行ったということだろう。
今の「聖王」の現状と照らし合わせると辻褄が合う。

「それにこの生体ポッド少し前の事件で良く似たものを見た覚えがあるんです」

ギンガが暗い顔をする。

「私も・・・な」

はやても同じく言葉を重くし、顔を暗くする。

「人造魔導士計画の・・・素体培養器」

その言葉を聞いた皆が驚く。
ただ事実を知っている近藤とエレノアだけは驚くことも無く「聖王」を診ていた。

「これは、あくまで推測ですが、あの子は人造魔導士の素材として

造り出された子供ではないかと」

地下水路を調査中のフォワード陣もギンガの通信を聞いていた。
人造魔導士という単語にキャロを除く3人が苦い顔をした。

「人造魔導士って・・・」

キャロがわからない単語を質問した。

「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供。
投薬とか、機械部品の埋め込みで後天的に強力な魔力や能力を持たせる。
それが人造魔導士」

普段のスバルからは考えられないような難しい単語をスラスラ口にする。
しかし皆そんなことを気にすることもなく、地下水路は重苦しい空気が流れる。
スバルの言葉にティアナが続く

「倫理的な問題はもちろん、今の技術じゃどうしたっていろんな部分に無理が生じる、コストも合わない。
だから、よっぽどどうかしてる連中じゃない限り、手を出したりしない技術のはずなんだけど」

ティアナの説明が終わりかけたとき、キャロのデバイス「ケリュケイオン」が光り、警告する。

≪Ａｍｏｖｅｍｅｎｔ ｒｅａｃｔｉｏｎ ｐｅｒｃｅｐｔｉｏｎ，ａｔ ｔｈｅ Ｇａｄｇｅｔ Ｄｒｏｎｅ.（動体反応確

認。ガジェットドローンです。）≫

「来ます！小型ガジェット、６機！」

キャロの声と共にフォワード陣は周囲を警戒した。

地下水路でフォワード陣が戦闘を開始したころ、近藤やはやてはモニタで会話を続けていた。

「倫理なんてものはその時代により変わるものだ。現在とおなじ定規で測るものじゃない」

そう淡々と述べながら、近藤は「聖王」の頭をやさしく撫でる。

「・・・つまり、昔はそういう人造魔導士なんかの行為は普通のことやったと？」

はやてが近藤に不機嫌そうに聞いた。

「今回の事件ですが、おそらくギンガ・ナカジマ捜査官の言うとおり、彼女の向かった事故現場の生体ポッドにはこの少女が入っていて、
引きずった跡というのも、少女の手に絡まっていたレリックボックスによるものでしょう。
そして、現在の人造魔導士計画にはスカリエッティが大きく関わっている。

この少女もいかなる理由かは知りませんが、スカリエッティの手によって造り出されたのでしょう。
先程触診をしたところ、この少女のリンカーコアを確認しました。
そして、スカリエッティの人造魔導士の技術はアルハザードの技術を使っている。
そう、アルハザードでは当然の行為、処置ですよ。」

「それは昔の話や。今はそんなん通用せえへん」

「あいつに今現在の倫理基準なんか通用しませんよ」

はやての反論も近藤にあっさり返される。

近藤の言葉に皆が黙る。
過去の偉大な魔導士たちの研鑽により現在の魔法がある。
過去の過ちがあるから、現在の倫理がある。
失敗があり、成功がある。
だから、皆何も言えない。

「ずいぶんお詳しいんですね？」

別のモニタから声をかける人物がいた。

「・・・グラシア理事官、いたんですか」

近藤は心の中で舌打ちをし、抑揚のない声で返答する。
声をかけた人物はカリム・グラシア、聖王教会の騎士で管理局では少将の階級を持つ人物である。

「あなたは確か・・・近藤三等陸尉ですね？先日、リンディ統括官

からも聞きました。優秀な人物であると」

カリムはニコニコと笑顔で近藤の評価を賛辞するが、

「それはどうも」

当の本人である近藤は、なんともそっけない態度である。

カリムはそんな近藤の態度を気にすることなく話を進める。

「・・・先程のあなたの発言ですが、あなたはまるでスカリエッティのことを知っているような、

いえ、アルハザードの技術を知っているような口ぶりでしたが、それはどういう意味でしょう？」

「お答えする義務はありません」

近藤は即答で拒否する。

つっけんどんな態度に周りの人間がオロオロしだす。

隣にいるシャマル然り、モニタの向こうのはやてまでもがあたふたしている。

「こ、近藤さん！そんな態度失礼やで！」

はやての注意も気にすることなく、近藤はそんなこと知らないとばかりに無視して少女「聖王」を診ていた。

普段の礼節をわきまえる近藤らしからぬ態度にはやては驚いた。

そして以前の地球への出張任務の時の態度を思い出した。

あの時も近藤は聖王教会という単語にいつもと違う態度をとっていた。

そう、これは

――――――嫌悪――――――

「・・・あなたは上官には敬意を評する誠実な人物と聞きましたが、どうやら情報に誤りがあったようですね」

カリムは真剣な表情で近藤を見つめる。

だが、その目には怒りなどの感情はない。ただ、見つめるのみである。

カリムの言葉は暗に「自分は少将である。命令に従え、質問に答えろ」と言っているのだ。

だが近藤は、

「教会騎士と理事官、二束のわらじを履く人物に従う義理はありません」

辛辣な言葉を放つ。

ただ単に、喋って余計な情報を与えるのが嫌なだけで、適当な言い訳をつける近藤。

もう見ている周りの人間はどうしたらいいものやらわからず、はわわとかあわわとか言っている。

「いい加減にしないか！近藤三等陸尉！」

近藤の態度に怒りをあらわした人物がいた。

クロノ・ハラオウン提督である。

「お久しぶりです。ハラオウン提督。お会いするのは１０年ぶりですか？」

近藤はそんなクロノの怒りをスルーして挨拶をする。
クロノはそんな近藤の態度にさらに怒りを強める。

「そんなことはどうでもいい！君は上官に対してそんな態度をとっていいと思っているのか！！」

クロノも普段は声を荒げるような人間ではない。
近藤の態度はそんなクロノも耐えられないようだ。

近藤は面倒臭そうに頭をボリボリとかき、ため息をついた。
そんな時

「いい加減にするのはそちらではないですか？」

近藤の後ろから女性の声がした。
振り向くと、エレノアがモニタを睨んでいた。

「ア、アルファード大将！？どうしてそんなところに！？」

カリムとクロノがモニタに映る人物を見て驚いた。
はやてとシャマルも別の意味で驚く。

いまなんと言った？

大将？

誰が？

「近藤さん？ごめん、聞き間違いかな？いま大将って聞こえたんや

けど・・・」

はやての言葉に近藤は眉間を指でもみながら、おもいっきりため息をついた。

「・・・こちらにいらっしゃる方はエレノア・K・アルファード時空管理局『大将』です」

はやては目を白黒させる。

近藤の横にいるシャマルも驚いて固まっている。

「え!?でも、さっきは・・・えぇ!?あれ!?」

はやては、もうなにがなにやら混乱して自分でも何を言っているのかわからなくなっている。

「（はやて隊長、くわしい事情は後ほどお話しますので、今は余計なことは言わないでください）」

急に近藤から念話で話され、はやてはビックリするが、

「（・・・わかった。なんや理由があるんやろ?なら黙っとく）」

はやてはすぐに事情を察して頷いた。

「お肌の角がワインディングロード（曲りくねった道）の騎士カリムと、いつも私の胸ばかり見ているクロノ提督?
現在の事件と近藤三尉の態度は関係ないでしょう?」

先程のおちゃらけた雰囲気とは打って変わって真面目な態度のエレ

ノア。
言葉に毒が入っているのはご愛嬌か。
カリムは頬をひくつかせている。
クロノは顔を赤くしたり青くしたりしている。

「・・・あ、あああ相変わらずのようですね?アルファード大将?」

流石はカリム、怒りながらもニコニコと微笑んでいる。

「ええ、あなたと違って私は若いですから。」

エレノアの笑顔で発する口撃にカリムはびくっと体を震わせる。
頬のひくつきが小刻みに繰り返される。

「あらあら、そんなに怒ると顔の小皺が目立ちますよ?」

おほほと笑うエレノアの悪辣な言葉にカリムは怒りのあまり席を立ち、抗議の声を上げようとするが、クロノに止められる。

「騎士カリム!抑えて!!アルファード大将もお言葉を選んでください!!」

「あら、局内ですれ違う度にいやらしい目で私の胸やお尻を舐めるように見てくるクロノ提督、何を選ぶのかしら?」

「ぐっ・・・そ、そういう言動です!アルファード大将!!」

「・・・否定せんのやね、クロノ君・・・」

はやてのクロノを見る目が冷たい。

凍えて死にそうなほどに。

「いや・・・それは・・・ゴホン！は、反論すると、またあることないこと言って収拾がつかなくなるからだ！い、いやそんなことより！何故あなたがそこにいるのですか！？」

クロノは苦しい言い訳をすると無理やり話の方向を変えた。

「私がここにいる理由？そんなの決まってるじゃないですか」

エレノアはニコッと笑った。

「暇だったから、なんとなくです」

「なんでやねん！」

エレノアの発した理由に、思わず相手が大将だということも忘れてツッコんでしまったはやて。

だが、カリムとクロノは反論しない。

「は～・・・またですか・・・」

「いいかげんにしてください・・・」

どうやら普段の行動が破天荒すぎて納得するには十分な理由だったようだ。

そんな二人に構うことなくエレノアはゆっくり目を閉じ、子供に言い聞かせるように静かに、静かに話し出す。

「とりあえず、あなた達の浅はかな思考を正しましょうか。

彼、近藤三尉はコレまでの事件、事象などを統計して述べただけです。
スカリエッティが人造魔導士計画に深く関わっているのは事実だし、その技術がアルハザードの知識からくるというのも、無限書庫などの書物や文献、伝承などでもわかることです。まあ、確たる証拠はありませんが。
ただ、それだけのことで近藤三尉を疑うなどとは・・・私はあなた達のその浅慮こそを疑いますよ」

「・・・・・・」

エレノアの横でおとなしく聞いていた近藤は感心していた。
よくもまあスラスラと嘘を吐けるものだ、と。

そんなとき、事態は急変した。

「航空反応、増大！」

機動六課管制室、通信士のアルトがレーダー反応を報告する。

「これ・・・うそでしょ！？」

レーダー反応はありえないほどの数が映し出されていた。

「なんだ・・・これは！？」

グリフィスも困惑する。

「波形チェック！誤認じゃないの！？」

「問題・・・出ません！どのチェックも実機としか」

「なのはさん達も目視で確認できるって・・・」

官制室内は混乱状態だ。

いきなりありえない数の反応、しかも全て本物。

そんな時、はやてが立ち上がった。

「グリフィス君」

グリフィスははやてが何を言わんとしているのかを理解し、

「・・・はい！」

ただ一つ、頷いた。

現在、北西部海上ではなのはとフェイトがガジェットと交戦している。

急に数が増えたガジェットを次々と落としていくが、中には魔法が当たると爆発せずに消滅するものが現れた。

「幻影と実機の構成編隊！？」

フェイトは現状を冷静に分析するが、急なことに少々戸惑っている。

「防衛ラインを割られない自身はあるけど、ちょっとキリがないね」
なのはも現状に対して煩わしさを口にする。
二人は合流し、防御魔法のオーバルプロテクションでガジェットからの全方位攻撃をしのいでいた。
「ここまで派手な引き付けをするってことは・・・」
「地下か、ヘリの方に主力が向かってる」
「なのは、私が残ってここを抑えるからヴィータと一緒に！」
「フェイトちゃん！？」
なのははフェイトの英断に驚きの声をあげる。
「コンビでも普通に空戦してたんじゃ時間がかかりすぎる」
依然、ガジェットからの攻撃が止むことはなく、なのはの防御魔法をお構い無しに攻撃してくる。
「限定解除すれば、広域殲滅でまとめて落とせる」
「・・・それは、そうだけど・・・」
「なんだか、嫌な予感がするんだ」
「でも、フェイトちゃん・・・」
なのはが言葉を続けようとした時、突如モニタが展開された。

「割り込み失礼！」

はやてだ。

「ロングアーチからライトニング１へ。その案も、限定解除も部隊長権限で却下します」

「はやて！」

「はやてちゃん！？なんで騎士甲冑！？」

現在はやては隊舎の外に出て騎士甲冑を纏っていた。

「嫌な予感は私も同じでな。クロノ君から、私の限定解除許可をもらうことにした。空の掃除は私がやるよ。ちゅうことで・・・」

「お待ちなさい」

なのは達の通信にまた割り込んでくる人物がいた。

モニタに映る人物は銀髪の女性

「あ！エレノアさん！」

「ア、アルファード大将！？」

「なに、その大将って？」

３人共それぞれの驚きをする。

エレノアは微笑み、

「エレノアで構いませんよ、はやて隊長。
それより、先程の限定解除申請ですが、私の大将権限で却下します」

「な、なんでですか！？」

「まだ、あなた達の力を見せる時ではないからです。
とりあえず、現在の北西部海上はなのは隊長とフェイト隊長が引き続き担当、
ヴィータ副隊長は目標撃破を終了しているようなので、
地下水路のフォワード陣と合流、ヘリは私が守ります。
はやて隊長はその後の処理をお願いします」

「後の処理・・・ですか？」

はやては怪訝な表情をする。
すると、エレノアはイタズラっぽく笑い、

「そ、この後に出てくる本命さんの逮捕をね！じゃ、そういうことで、よろしく！」

そういうと、エレノアはモニタを閉じた。
一方的に話し、一方的に切り上げるエレノアに3人は唖然とした。

「・・・なんか、嵐みたいな人だね」

「・・・せやな・・・」

なのはの感想にはやては素直に肯定した。
なにしろ、先程までカリムやクロノを無茶苦茶にコケおろしていた

人だ。
まさに嵐、いや、台風の目とでも言うべきにぎやかな人だ。

「あ、そういえば、はやて?さっきアルファード大将って言ってたけど、なにそれ?」

「・・・実はな、あの人、いやデバイスか、なんやけどエレノア・K・アルファードって名前なんやそうや」

「へー」

フェイトははやての言葉に素直に相槌をうつ。

「でや、そのアルファードさんは、管理局の『大将』の階級を持っとるんや。」

「へー・・・って、えええぇぇぇ!!」

「嘘だよね!?」

なのはとフェイトは驚いた。
まさかそんな嘘のようなことがあるわけがないと思っているからだ。
デバイスに与える階級に将官など聞いたことがない。
なのはの防御魔法がおもわず崩れそうになった。
だが、はやては首を横に振る。

「カリムやクロノ君には確認済みや」

「なんか、もう・・・なんでもありだね・・・」

なのはは呆れてしまい、それ以上の言葉が出てこなかった。

「あれ?近藤さんは三尉だよね?でも自分のデバイスは大将なんだ・・・」

「・・・」

フェイトは考えこんでしまった。
3人とも黙ってしまった。
そしてある答えにたどり着いた。

「今度、近藤さんを慰めてあげよう」

「・・・そやな。デバイスに負けてるマスターなんかはじめて聞いたわ。同情してまうわ」

3人の中で、近藤は可哀想な人と認識され、このことを後に聞いた近藤は深く傷ついたという。

# 第２９話

とある廃墟ビルの屋上に二人の人物がいた。
二人とも青いボディースーツを着込み、上からマントを羽織っている。
メガネをかけ、髪を両サイドに括っている女性が屋上ビルに座り込みもう一人の女性に話しかける。

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる～？」

もう一人のディエチと呼ばれた女性は、自分の身長より大きい長い物体を布で包み抱きかかえて、ある一点を見ていた。
長い髪を後ろにリボンで結び、風でマントと髪がなびく。

「ああ、遮蔽物も無いし空気も澄んでいる。・・・良く見える」

ディエチの左目は望遠レンズ機能があり、その目は遥か彼方のヘリを捉えていた。

「でもいいのかクアットロ、撃っちゃって？ケースは残せるだろうけど、マテリアルの方は破壊しちゃうことになる」

ディエチはメガネの女性、クアットロに確認を取ると、クアットロは笑った。

「うふふ、ドクターとウーノ姉さま曰く、あのマテリアルが当たりなら、本当に『聖王の器』なら、
砲撃くらいでは死んだりしなから大丈～夫だそうよ？」

「ふーん」

ディエチはクアットロの返答に何も感じる所がないのか、短く返すのみだった。
そしてディエチは長い物体の布を剥ぎ取り、自分のマントも脱いだ。
長い物体は巨大な筒、狙撃砲が現れた。

クアットロはそんなディエチを眺めていると視界の横にモニタが展開し、画面にはウーノが映し出されていた。

「クアットロ、ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ」

ウーノが別行動をしているルーテシアという人物の状況をクアットロに報告するが、あまり芳しくないようだ。
だがクアットロはそんな状況も気にすることなく軽く返した。

「ああ～そういえば、例のチビ騎士に捕まってましたね～」

「いまはセインが様子を伺っているけど・・・」

「フォローします？」

先程ののほほんとした雰囲気が無くなり、目つきが鋭くなる。

「お願い」

そう言うとウーノはモニタ通信を切った。
クアットロは目つきが鋭いまま、セインの居るであろう方向を見る。

「（セインちゃ～ん？）」

「（あいよ～クアねえ）」

セインは身を隠し、クアットロ達とは別の現場、ルーテシアとアギトが捕まっている所から少し離れた場所に居た。
そのセインがいるであろう場所には、人差し指を立てた右腕だけが地面から立っていた。
別の人間が見ると、事故現場などで切り落とされた誰かの腕のように見えるほどシュールだった。

「（こっちから指示をだすわ。お姉さまの言うとおりに動いてね？）」

「（ん～、りょうかい～）」

その返事と共にチャプンという音と共に人差し指を立てた腕が地面に沈んで消えた。

現在、ルーテシアと呼ばれた少女は管理局の人間にバインドで捕縛され大人しくしている。
アギトもバインドで捕縛されていた。
ルーテシアの周囲にはヴィータ、リイン、スバル達フォワード陣とギンガがいた。
ヴィータはルーテシアに対し、逮捕時のお決まりの口上を喋っているが、ルーテシアは何も聞いていない。
聞くつもりも無い。ただ、目を閉じ静かに佇むだけである。
そんなとき不意に念話通信がルーテシアに入った。

「（はぁ～い、ルーお嬢様？）」

ルーテシアは閉じていた目を開き少し驚いた顔をする。

「（・・・クアットロ？）」

「（なにやらピンチのようで～、お邪魔でなければクアットロがお手伝い致します）」

「（・・・お願い）」

ルーテシアの返事を聞くと、クアットロは黒い笑みを浮かべた。

「（はい～、ではお嬢様？クアットロの言うとおりの言葉を、その赤い騎士に）」

ルーテシアの前にいる赤い騎士とは・・・ヴィータだった。

機動六課管制室に突如アラートが鳴り響く。

「市街地にエネルギー反応！！・・・大きい！！」

「そんな・・・まさか！？」

管制室の通信士たちは驚愕する。

その巨大なエネルギー反応に。

「砲撃のチャージ確認！」

「物理破壊型！推定Ｓランク！！」

その報告にはやては驚き、ガジェットを掃討中のなのはとフェイトも驚いた。

ただ、近藤とエレノアだけは普通だった。

「Ｓランクだと。おそらくこのヘリが狙いだ」

近藤はエレノアに状況を説明する。

エレノアは終始ニコニコ顔だ。

「まっかせなさーい！この前地球に行ったときにご主人様に内緒で買ったアニメのＤＶＤを見て思いついた防御を見せてやるの！！！」

「うむ！詳しい話はあとでたっぷり聞くとして、まかせたぞ！！」

「りょーかい！！」

エレノアは元気良く敬礼した。

シャマルはその姿を見ておもわず

「かわいい・・・」

とつぶやいた。

廃ビルの屋上でディエチは狙撃砲を構え、チャージを開始していた。
彼女の足元には魔法陣とは別の模様、機械的な円形陣が展開されていた。
狙撃砲の銃口にはチャージのエネルギーが集まり続け、光り輝き、今もその輝きを強めている。

「インヒューレントスキル（Ｉｎｈｅｒｅｎｔ　Ｓｋｉｌｌ）『ヘビーバレル』発動」

そう呟くディエチの横でクアットロは腕を組み、ルーテシアと念話を続け指示を出していた。
顔は相変わらずニヤニヤと笑っている。

「逮捕はいいけど」

ルーテシアはクアットロの言葉に続く。

「・・・逮捕は・・・いいけど・・・」

いきなり口を開いたルーテシアに尋問していたヴィータとギンガは少し驚き、言葉の意味を探る。

「・・・大事なヘリは・・・放っておいていいの・・・」

ルーテシアの言葉の意味する所がわかり、騒然とする。

「あと１２秒・・・１１・・・１０・・・」

ディエチは淡々とカウントダウンをする。
その横でクアットロはまだ悪い笑みを浮かべたまま念話を続ける。

「ああお嬢様～？もう一言追加いいですか～？」

「・・・ん」

ルーテシアは小さく頷く。
ヴィータはそんな小さな動きに怪訝な表情をする。

別の場所でクアットロが喋る。

「あなたは、また・・・」

ルーテシアがその言葉を復唱する。

「・・・あなたは、また・・・守れないかもね・・・」

その言葉を聞いた途端ヴィータの目の色が変わる。
ルーテシアの言葉が意味すること、

「ヘリ」

「また、守れない」

ヴィータの顔は絶望の色に染められた。

「発射！」

ディエチの掛け声と共に、彼女のＩＳ（Ｉｎｈｅｒｅｎｔ　Ｓｋｉｌｌ）「ヘビーバレル」が発射された。

高出力のエネルギー砲撃が放たれ、その射線上の先には近藤や「聖王」が乗っているヘリがいた。

はやてが、なのはが、フェイトがその砲撃を、その先のヘリを眺めるしかできなかった。

高スピードで進む砲撃は皆が何もする事もできず、ヘリに到達、瞬間に爆発した。

管制室の巨大スクリーンは砲撃のショックで映像を映せなくる。

「砲撃・・・ヘリに直撃・・・」

あらゆるウィンドウを出すが全てにノイズが走り、映像を映し出せない。

「・・・そんなはずない！状況確認！」

シャーリーが激を飛ばし、呆ける他の通信士に喝をいれる。

「ジャミングがひどい・・・データが来ません！」

管制室からの報告に、ヴィータたち地上組は驚愕の表情をする。

皆、言葉も無い。

「・・・そんな・・・お父さん・・・！」

エリオが何とか声を出すが顔は真っ青だった。

「ヴァイス陸曹と・・・シャマル先生も・・・」

ティアナまでもが顔を青ざめさせている。

すると、ヴィータがルーテシアに掴みかかった。

「てんめえぇぇ！！」

「副隊長、落ち着いて！」

スバルがヴィータを抑えようとするがヴィータは興奮して聞く耳を持たない。

「うるせえ！！おい、仲間がいんのか！？どこにいる！言え！！」

皆、ヴィータを止められない、いや、止めない。
ただ、成り行きを見守るのみである。
なぜなら、誰もが今の状況に納得したくないからだ。
ヘリが撃墜された。
ということは、中に乗ってた人間はただでは済まない。
最悪・・・

そんなとき、ヴィータたちの背後から近づくものがあった。
地面から生えた、人差し指を伸ばした右手だった。
それが静かに距離を縮めていく。

ギンガは周囲を警戒していると、ふとエリオの足元に目が行った。
そこには右手がエリオに近づくところだった。
そしてその右手はチャプンという音と共に地面に沈んだ。
ギンガは勘でそれが危険と察知した。

「エリオ君！足元に何か！？」

「え？」

ギンガの視線に合わせてエリオもその何かがいたところを見る。
すると、その地面から水色の髪の女性が現れ、エリオに飛び掛った。

「うわっ！？」

飛び掛り水色の髪の青いボディースーツを着た女性はエリオの持っていたレリックボックスを奪い取っていた。

「いただき！」

そして、その女性は着地と同時にまた地面へと沈み消えていった。
ティアナはその地点を射撃するがただ地面に当たるのみで効果は無いようだ。

「くそ！」

ヴィータはレリックボックスを奪った水色の女性を追いかけるべくルーテシアから離れる。
ティアナもヴィータに続く。
ルーテシアは拘束され身動きが取れないとの判断によるものだろう、ルーテシアの周りには誰も居ない。
そんなルーテシアに念話通信を行う者が居た。

「（ルーお嬢様ー？ナンバーズ６番、セインです。わたしのＩＳ、ディープダイバーでお助けします！
フィールドとバリアをオフにしてじっとしててくださいね？）」

ルーテシアはその念話に従い、目を閉じてじっと佇む。
すると、ルーテシアの前の地面から先程の水色の髪の女性、セインが現れた。手には先程のレリックボックスを抱えている。
そして、セインはルーテシアを抱きかかえた。
ヴィータとティアナはその姿を目撃した時には、セインはルーテシアと共に地面に沈んでいった。
セインたちはそのまま高架道路を抜け、着地する。

「・・・アギトが」

「ああ、アギト様なら、さっきの一瞬で離脱しました」

アギトが拘束されていた場所には、拘束具が転がっていた。

リインはアギトを拘束していた拘束具を拾い上げ、悔しそうにする。

「流石、いい判断です！」

セインはそんなリインをあざけ笑うように再びルーテシアを抱えて地面へと沈んでいった。

沈んだ後にはチャプンという音が響いた。

現場には跪くヴィータと立ちすくむフォワード陣がいた。

「反応・・・ロストです・・・」

リインが悔しそうに報告する。

「くそ！」

ヴィータは地面を殴りつけ、悔しさを露わにする。

「ロングアーチ・・・ヘリは無事か・・・？あいつら・・・墜ちてねえよな！？」

ヴィータの悲痛な叫び声が現場に響いた。

「うっふふのふ～！どう？この完璧な計画！」

クアットロは自分の思惑通りに進みご満悦のようだ。

「黙って。いま命中確認中」

ディエチは望遠機能でヘリへの命中を確認するが、煙が多く未だ目視確認が出来ない。
やがて煙が晴れ、実体が露わになっていく。
そしてそこには・・・

「・・・まだ飛んでる？」

「・・・あら？」

ディエチの報告にクアットロが疑問に持つ。
今現在のヘリの兵力を確認する。
ヘリパイロットが一人、ベルカの騎士が一人いるが、それもこの砲撃を止めることが出来る能力を持っていない。
あとは「聖王の器」と、一人よくわからない男がいたはずだ。
その男も公表された魔力ランクでは、とてもヘビーバレルを止められるとは思えない。
ではなんだ？

そんなことを考えていると徐々に煙がはれ、その原因が露わになる。

「スターズ2とロングアーチへ。こちらライトニング5、エレノアがヘリの防御成功！」

近藤のコード、ライトニング5からの通信がはいった。
ヘリの前には、巨大な黄金に輝く手が砲撃を抑えていた。
その手は約4メートル程のエレノアの魔力で造られた手。

「これが最強の防御、『ゴッドハンド』！！」

エレノアが自信満々に技の名前を言う。

「これが超次元サッカーだ！！」

「いやいやいや、これサッカーじゃないし」

エレノアはテンションが上がりまくって興奮状態だ。
もうわけのわからないことを口走っている。
こういうときは放っておくにかぎるので、近藤はエレノアを無視し、

「・・・あそこか」

と短く口走ると、ヘリから消えた。

# 第３０話

はやては安堵の息を吐き、ヘリのほうを見てガッツポーズをとった。

「なんで手なんかわからんけど、ようやった！」

なのはとフェイトも安堵の息を吐いた。

「はー、よかったー」

「まあ、あのエレノアさんだし、ね」

「ははは・・・」

なのはの乾いた笑いが二人のエレノアに対するイメージを物語っている。

「でも、なんで手の形してたんだろう？」

「・・・さあ？」

管制室から歓声が上がる。

シャーリーは見たこともない魔法に興奮しきりである。

「すごい！あの砲撃を受け止めるなんて！」

「でも、なんで手なんだろう?」

ルキノの疑問に答えられる人間は管制室にはいなかった。

ヴィータは呆然とヘリの無事を見ると腰が抜けたように、ぺたんとその場に座り込んだ。

「・・・はは、・・・はー、よかった・・・」

「エレノアさん・・・すごいけど・・・なんで手?」

「・・・さあ?」

スバルの疑問に、ティアナも返答に困った。

エリオ達も、予想の斜め上を行く魔法を使うエレノアに何も言えなかった。

とにかく、ヘリは無事だった。

それが皆うれしかった。

そんなヘリの無事な姿を見ていたクアットロとディエチは唖然としていた。

「あっら〜」

「こっちもフルパワーじゃないとはいえ、マジで!?ていうか、なんだあの手!?」

「ああ、マジだ」

クアットロとディエチの後に言葉を続く声がし、二人に緊張が走った。
声のした後ろを振り向こうとした瞬間、二人にバインド（捕獲魔法）がなされた。

「え!?」

「うわ!!」

二人は急なことで対処できないでいる。
二人は体勢崩してしまい、四つんばいのような、お尻を突き出した格好になってしまった。
そんな二人の後ろから、先程の声がした。

「こそこそしやがって。見つけたぞ、痴女共!!」

二人の後ろには近藤が立っていた。
クアットロは驚いた。
この人間は知っている。
確か機動六課のなんのとりえもない局員だ。
しかし、こいつはさっきまでヘリにいたはずだ。
あそこまではかなりの距離がある。
いつここにきた?いやどうやってきた?

「くそ！」

ディエチはバインドを破ろうともがくが、

「無駄だ。そのバインドのプロテクトは３００まである。普通に解除するにしても丸１日はかかるぞ」

「なっ！？３００！？」

クアットロはその言葉に驚愕する。
本来、バインドの強度は術者の技量に左右される。
そしてバインドをより強固なものにするためにはバインドの「重ねがけ」が有効だ。
そのため、２重、３重とプロテクトをかけ、バインドの解除をしにくくするのだ。
だが、これも術式を編み出すのに時間がかかる。
１０のプロテクトを組み上げるのに３０秒程だ。
これは迅速な捕縛をすることにおいて、致命的な時間である。
そのため、大体バインドのプロテクトは３重から５重でされるのが通常である。
しかし、今目の前にいる眼帯の男は３００と言った。
それもバインドを一瞬で行った。
嘘ではないことは捕縛されている自分達が一番わかっている。
これの解除は無理だということが。

「あ、あら～？怖いお顔のあなたは誰かしら～？」

クアットロは余裕の笑みを崩さない。
あまりのイレギュラーに内心どきどきものだが。

「おまえら痴女に教える名前は無い」

近藤はばっさりと切り捨てた。
その近藤の痴女発言に噛み付いたのがディエチだ。

「貴様！だれが痴女だよ！」

近藤は吠えるディエチとクアットロを上から下へ、下から上へと舐めるように目を細めて眺める。
その視線に二人はゾクッと震えた。

「そんなピチピチの全身タイツで往来に出るような人間が痴女だろ？」

「タイツじゃない！ボディスーツだ！！」

「どっちにしろ体のラインもろ分かりじゃないか。ぱっつんぱっつんじゃないか！
その胸とか、尻のラインとか股辺りとか！ごっつぁんです！」

近藤が指差しながら指摘し、二人に向けて合掌した。
ディエチとクアットロは顔を赤くして手で隠そうとするが、捕縛されているので体を隠せない。
ただモジモジとお尻を振るのみである。

「いまさら隠しても、もう俺の網膜に焼き付けてるから意味ないぞ。それに映像を録画してるからな。後で編集して売りさばこう」

近藤はニタっといやらしい笑みで二人をからかう。

「っ！この、変態！」

クアットロが近藤を罵倒するが、

「痴女に言われたくないね。やーい痴女４番と痴女１０番！」

近藤は逆にクアットロ達をコケ下ろす。

「やーいやーい、痴女ー、痴女ー、へんたーい、メガネー」

もう子供の喧嘩のようなバカの仕方だが、こういうのが一番効果的なのだ。

「くっ！違うもん！痴女じゃないもん！これはドクターの趣味だもん！」

クアットロは必死に反論する。目尻に涙を浮かべている。

相当くやしいようだ。

あまりにも幼稚な挑発にクアットロの口調が子供のようになっている。

というか、すべてをスカリエッティのせいにする気である。

「そのドクターの趣味を素直に着てるんだろ？わかってて着てるんだろ？痴女じゃん。

実は見られるのが好きなんじゃないの？興奮するんじゃないの？ねえ、どうなの？ド変態痴女の４番さん？」

ああ言えばこう言う近藤に口では勝てない。特にこういう低レベルの言い争いは。

そして近藤はガラッと雰囲気を変え、急に真面目な口調になった。

いま二人の四つんばいの格好をマジマジと見ている。
というか、突き出されているお尻をガン見している。それはもう目が血走るほどに。

「ああ・・・俺は我慢できなくなりました」

「え？」

「・・・なにが？」

クアットロとディエチはおもわず聞き返してしまった。
近藤は口を三日月のように広げ、いやらしい目つきで二人を見た。

「君達のそのプリッとしたお尻に俺の情熱をぶちまけるか、そのプルンとした胸に俺の純粋な想いを塗りつけるか・・・どっちがいい？」

途端、クアットロとディエチの顔が青ざめた。

「いやー！犯されるー！変態に犯されるー！！」

「誰か！誰か助けてー！管理局の人ー！助けてー！！」

「いや、俺が管理局員だし」

「嘘つけ！そんな厳つい顔の局員いるか！」

「いーやー！！」

もうクアットロもディエチも必死だ。

貞操の危機だ。

「さーて、痴女４番か痴女１０番か・・・どーちーらーにーしーよーおーかーなー」

近藤は指をクアットロとディエチを交互に指し悩む。
この軽いノリがより一層二人に恐怖を与える。

クアットロは近藤の行動を観察してある結論に達した。
ああ、こいつは変態じゃない、狂っているんだ。
だからこんなに簡単に私達を踏みにじることが出来るんだ。
・・・あれ？身近にそんな人間いるな・・・
・・・あ、ドクターだ。
このフランクな外道っぷりはドクターそっくりだ。

そんなことを考えている隣でディエチはいまだ反抗する。

「くそ！やめろ！大体、私等は痴女４番とか痴女１０番とかじゃない！ちゃんと名前がある！」

ディエチは近藤を睨みながら言う。
体勢として縛られ、近藤にお尻を向けたまま四つんばいの姿なので全然怖くない。

「ふーん。じゃあ、名前はなんて言うの？」

「私はディエチだ」

「・・・あ、私はクアットロです～」

緊張感のかけらもない。
この状態で自己紹介するとは。
やはりなんとやらは飼い主に似るということか。
そして、近藤は二人の名前を聞いて、ニヤリと口を歪めた。

「そうか・・・リボンがディエチで、メガネがクアットロか」

すると、だんだん顔が暗くなって

「１０（Ｘ）だからディエチ（ｄｉｅｃｉ）で、４（ＩＶ）だからクアットロ（ｑｕａｔｔｒｏ）か・・・」

「・・・なんでそんな憐れんだ顔をするの？」

「ちょっ！？なんで泣くのよ！？」

近藤は涙を流していた。
ディエチとクアットロはそんな近藤に困惑する。

「・・・あまりにも安直な名前で・・・不憫で・・・おまえたち、これからの人生、めげずにがんばれよ！」

なんか励まされた。

「あ、はい・・・」

「どうも・・・」

なんだこの空気？
と、緊張が弛緩し始めたころ、近藤があの言葉を発した。

『王が命じる　ディエチ　クアットロ　シャットダウン』

すると二人は体をビクンと強張らせ、目を虚ろにさせ静かに口を開く。

「イエス・マイ・ロード（仰せのままに）」

そう言うと二人は体の力が抜け、その場に倒れてしまった。

「すー・・・すー・・・」

二人は気持ちよさそうに寝ている。

近藤はそれを確認すると、

「よし、このまま連行するか」

と、二人を抱えようとすると、急に背筋に悪寒が走る。

ゾクッ

やばい！

はやくこの場から離れろ！

近藤の本能が告げる。

その警告に従い、近藤は二人から逃げるように後ろに跳び、離れる。

すると、離れると同時に近藤の体のあった場所には入れ替わるように別の人間が立っていた。

その人物は近藤からは後姿しかわからなかったが、どの関係者かは

一目瞭然だった。

紫色のショートカットの髪、青いボディースーツ、両手足首から出ている８枚の羽のようなもの。

近藤は片方の頬が熱いので手の甲で拭うと、血があふれ出ていた。
どうやら、あの両手足から出ている羽は刃の武器のようだ。

その人物、痴女その３はディエチとクアットロを守るように近藤に立ちはだかる。
そして振り向くと、その顔は凛々しく、切れ長の目で近藤を睨む。
油断ないように警戒する。

「・・・誰だ、お前は」

ディエチやクアットロのようにはいかないと判断した近藤は、目の前の痴女その３に聞く。
首のプレートには「ＩＩＩ」と書いてあるので、おそらく・・・

「・・・３番、トーレ（ｔｒｅ）か？」

近藤の呟きにピクッと反応する痴女その３、もといトーレは名前を言い当てられ少々ビックリしている。
トーレはすぐに平静を取り戻し、現状を確認する。

「・・・貴様、なんだ、先程の言葉は」

ディエチとクアットロは先程の近藤の言葉、近藤曰く「裏技」を聞いた途端動かなくなり、今は気持ちよさそうに眠っている。
トーレはその寝顔をチラリと横目で見るとピクピクこめかみを動か

す。

（バカ共が、暢気に眠りおって）

だが、こんな状況を作り出したのは目の前の男だ。
わからない。
しかしトーレの直感が命じる。

本能が警告する。

危険だ

この目の前の男は危険だ。
このままこの男を野放しにしてはいけない。
必ず自分達の障害となる。

・・・だが

勝てない。
この男には自分一人では勝てない。

その判断材料の半分が見た目の怖さなのは否定できない。

悔しいが、ここは退散するしかない。
二人の愚妹を助けるためにも。
決して近藤の顔が怖いわけではない。
ほんとだぞ！ぜ、ぜんぜん怖くなんかないんだぞ！！

「・・・まあいい、今回は見逃してやる。ＩＳ発動『ライドインパルス』」

トーレは子悪党が吐き捨てる言葉を言い、ディエチとクアットロを両脇に抱えてＩＳを発動させる。
すると、トーレの両手足に羽が８枚発現しブーンと低い振動音をさせる。

「逃がすか！」

そう言い、近藤はトーレにバインドをかけようとするが、途端、トーレはディエチとクアットロを抱えその場から超速で消えた。

「ちっ！はやて隊長！」

「了解！・・・！位置確認！詠唱完了、発動まであと４秒！」

近藤の掛け声、念話に素早く答えるはやて。

はやては近藤との連携のために魔法詠唱をして待機していた。
限定解除をしていないので魔法の威力は落ちるが、制圧するには十分の力をはやては持っている。

トーレは近藤からそう離れていない位置に姿を現した。
周囲の空気がおかしい。
この張り詰めたような、肌が粟立つような、緊迫する雰囲気。
これは・・・
トーレは周囲を見渡し原因をさぐる。
そして空には

黒い魔法の塊が浮いていた。

「っ！？まさか、広域空間攻撃か！？」

トーレは急ぎＩＳを発動させた。

「遠き地にて、闇に沈め・・・デアボリック・エミッション！！」

はやての足下、投射面共に白いベルカ式魔法陣を展開し、遠隔発生により遠距離で黒い塊を発生させる。

その黒い魔法は収縮しだし、周囲を空間作用により反転させ、その反動で黒い塊は膨れ上がり、周囲を侵食していく。

はやての眼下の廃墟が黒い球状の魔法に飲み込まれていく。

「やったか？」

はやては管制室に確認を取るが、それに近藤が素早く答える。

「いや、逃げられました。アルト！追ってくれ！」

「は、はい！」

アルトが近藤に答え、素早くコンソールを叩き逃げたトーレを探索する。

はやてのデアボリック・エミッション発生場所からかなり離れた場所で、トーレは姿を現した。
反動で空間が膨れ上がり、砂煙が立ち上がる。
脇に抱えていたディエチとクアットロを地面に降ろし、二人を起こす。

「いつまで寝ている！早く起きろ！」

「・・・う～ん・・・」

「んん・・・？あ、トーレ姉さま・・・おはようございます～」

暢気な二人にトーレが雷を落とす。

「何を寝ぼけている、シャキッとしろ！ばかもの共が！油断しおって！」

「んん？あれ・・・そういえば・・・あ！あ、あの変態は！？」

ディエチは脳が覚醒したようで、先程の悪夢を思い出す。
鳥肌がたち、腕をこすりだす。

「あの男からは逃げてきた」

トーレの言葉に二人はホッとする。

「トーレ姉さま～助かりました～！」

「感謝！感謝！！」

二人とも涙を流しながらトーレに感謝する。
あの規格外、行動予測不能の男から逃げることが出来た。
まさに人生最良の日である。

「・・・ボーっとするな。まったく、監視目的だったが、来ていてよかった。
セインはもうお嬢とケースの確保を完遂したそうだ。合流して、もどるぞ」

その後、管制室のアルトはトーレを見つけることが出来ずロストしてしまい、犯人を取り逃がした。
ただ、地上組、特にティアナの機転により、レリック本体を直接厳重封印とシルエットを施し、
敵との接触が少ないポジションのキャロに持たせていた。
キャロの帽子に隠れた頭の上に。

結果、犯人は取り逃がしたが、レリック2個と人造魔導士と思われる少女一人を保護、任務は無事成功を収めたのだった。

とあるラボのとある一室にドクター、スカリエッティとトーレがいた。

トーレは今回の作戦失敗の報告をしていた。

「ふむ、そうか。まあいいだろう。ご苦労だったな、トーレ」

スカリエッティはなんとも軽い反応だった。
この失敗程度では、先の作戦には別段支障がないということだろう。
だが、トーレの報告はそれだけでは終わらなかった。

「それとドクター、今回我々の邪魔をしたこの男なのですが」

そう言うとトーレはモニタに先の戦闘での近藤を映し出した。

「・・・このヤクザがどうかしたのか？」

スカリエッティも近藤の顔をみて少し驚いている。

「いえ、ヤクザではなく、管理局の人間です。まあ、それはともかく、この男妙な言葉を言ったんです」

「妙な言葉？」

「はい、『王が命じる、ディエチ、クアットロ、シャットダウン』と。すると、二人がいきなり眠ってしまいまして・・・」

トーレほ報告にスカリエッティは目を見開く。

「本当かね！？それは！？」

スカリエッティは興奮して震えている。いや、この震えは別のものかもしれない。

「『ジェネシック・コード（起源の系譜）』だと・・・！？まさか・・・」

しばらくブツブツと言っていたが、おもむろに大声で笑い出した。

「くっ・・・は、はは、はははははははは！！そうか！これは面白くなってきたぞ！！
このつまらない世界がとてつもなく、すばらしく！そして美しいものにみえてきたよ！！くはははははは！！」

スカリエッティの狂ったような笑いをトーレはただ眺めていた。

（・・・また発作か？）

すこし失礼なことを考えていたようだ。
そんなことは関係ないいばかりにスカリエッティは笑い続ける。

「ははははっはははははっ！！待っていろ『魔王』！！私を楽しませてくれよ！！」

スカリエッティの笑いはラボの中に響き、木霊した。

## ５０万アクセス記念雑談（前書き）

いつの間にか、なにやらとんでもないことに。
本当にありがとうございます。
コメントなどお待ちしております。

# ５０万アクセス記念雑談

ただいま朝の４時
場所は機動六課宿舎男子寮

はやて　（小声）「おはようございます。八神はやてです。
　　今回、５０万アクセス突破記念として、近藤さんの寝込みに突撃したいと思います！」

ヴィータ　「なあはやて？何が悲しくてオッサンの寝顔を見なきゃいけないの？」

は　（小声）「こら！ヴィータ！声がでかい！」

ヴ　（小声）「え？あ、ご、ごめん」

は　（小声）「ヴィータの疑問も、もっともや。
　普通、こういう寝起きドッキリはアイドルにするもんや、私とか、私とか、私とか」

ヴ　（小声）「・・・・・・・・・・・・うん」

は　（小声）「その間が気になるけど、まあええ。
　で、今回なんでオッサンの寝込み覗くんかの理由や。
　実はなんと！」

ヴ　（小声）「実は？」

は　（小声）「エレノアさんが一緒の部屋で寝てはるんや！」

ヴ　（小声）「ああ、そういうことか」

は　（小声）「しかもや！エレノアさんと近藤さんは一緒のベッドで寝てるそうや！」

ヴ　（小声）「え！？そ、それって・・・つ、つつつまり・・・」

は　（小声）「ゴクリ・・・せや！もしかしたら二人が夜な夜な夜なあ～んなことや、こ～んなことを・・・」

ヴ　（小声）「は、はやて！？そ、そそそれは余計まずいんじゃ・・・

も、もももももし突撃して、そ、そそその、あ、あああああああ～んなここ、こここと中だったら・・・ひゃ～！！」

は　（小声）「とにかく！今近藤さんの部屋の前にいます！さあ、これから二人の寝姿を拝見しましょう！

おはよ～ございま～す！」

ヴ　「ごくり・・・ドキドキ」

はやては近藤の部屋のドアを開けた

すると中では・・・・

近藤が腕を組んで立っていた

エレノアがその後ろでニコニコしている

悪魔のしっぽがゆらゆら揺れている

なぜかなのはがいた
ニコニコしているが黒いオーラを出している
なぜかフェイトがいた
ニコニコしているが黒いオーラを出している
シグナムもいた
仁王様のような気迫で立っている
そして皆が見つめるその先では
作者が正座していた

は　「・・・えーっと・・・お、おはよ～ございま～す・・・」
なのは　「あ、はやてちゃん。おはよう」
フェイト　「はやて、おはよう。はやてもこいつに用？」
は　「えー・・・ん？あ、う、うん」
シグナム　「主はやては日頃の激務で疲れていると思い誘わなかったのですが、
　やはり、このボンクラには相当腹に据えかねているご様子で」

は　「え?あ、あー・・・うん、そうやねん」
（誰?この人）

ヴ　「（わかってないなはやて・・・）あたしははやてに付いて来ただけだけど、そこの正座してる奴誰?不審者?」

は　（ヴィータ、ナイス!）

エレノア　「違うの。このＦＦ（ファンフィクション）の作者なの」

は　「ええ!?この物語の生みの親やろ!なんで正座させられとるん?」

ヴ　「お前等、ホントに恐ろしいことするな。この後の自分達の待遇悪くなっても知らないぞ?」

な　「そんなことさせないよ?」チャキッ

フ　「うん・・・」ジャキッ

ヴ　「・・・お前等、そのデバイスを降ろせ。見てるこっちが怖い」

近藤　「いままで俺がこいつの代わりにいろいろ喋ってたけど、もう我慢できん!」

ヴ　「・・・なにが?」

シ　「ココ最近の更新速度だ」

は　「・・・・・・・・・・あ～・・・・」

な　「確かに、ＰＶは５０万ヒット突破したし、ユニークも５万を超えた」

フ　「それは素晴らしいことだし、皆さんには感謝しています」

エ　「でも、この作者はその沢山のアクセスに胡座をかいて更新速度を遅くしているの」

は　「うーん・・・でも、作者さんも仕事とかプライベートがあるんやしそこまで目くじら立てんでも・・・」

近　「確かにそれだけならばいいんですがね・・・」

ヴ　「まだ何かあるのか？」

近　「皆さん、この作者の性格を忘れていませんか？」

は　「・・・あ！」

ヴ　「まさか・・・」

シ　「そう、このボンクラは飽き性で面倒くさがりなんですよ」

フ　「そして、更新が遅れた理由も・・・」

な　「途中でこの話しが飽きたから？」

作者　「それは違います！」

シ　「ふん、口ではなんとでも言い訳できる」

フ　「じゃあ、なんで更新速度が遅くなったの？」

な　「ゆっくりお話・・・ききたいなあ・・・」

は　「怖い・・・3人が・・・とてつもなく怖い・・・」

ヴ　「なんだこの緊迫感は・・・ここは戦場か！？」

近　「大体予想はつく。大方、ネタが尽きたんだろう？」

作　「・・・はい」

エ　「えらく素直に認めたね」

作　「隠しても仕様がないですし、事実ですから。
　　でも、最初から大筋は考えているので終わり方も考えています」

な　「話が逸れていってるって前書きで書いたことなかった？」

作　「多少の誤差はありました。正直、ここまでキャラが一人歩きするとは思いませんでした」

フ　「うーん、まあ、『初投稿』の『初小説執筆』だから、コントロールできてないのかな？」

作　「それで、大筋は考えていたんですが細かい話は考えていなかったんです。
　そこで難航しまして、特にこのナンバーズ登場のあたりは何にも考えていませんでした」

シ　「何故だ?ここは重要な場面だろう?考えていないなどと・・・」

作　「この後のヴィヴィオの話ばかりを考えていて、頭にありませんでした」

は　「う・・・ん～・・・なるほど・・・」

エ　「ああ、なのはちゃんのママ発言のところね?」

作　「大体、このＦＦがここまで長くなるとは思ってもいませんでした」

近　「長くて３０話くらいだと思ってたものな?」

な　「でもまだ折り返し地点だよ?」

作　「それで、ぶっちゃけてしまうとですね、
　今回のナンバーズのくだりと、『地上本部襲撃』『ゆりかご戦』でのナンバーズ戦も何にも考えていません。
　だから、今回もこの話でナンバーズとどう絡ませるか悩みまして。
　あと、リアルに仕事も大変になりまして」

ヴ　「それで更新が遅れたのか・・・」

な　「でも、ナンバーズってこの話の重要なキャラでしょ？それを何も考えてないなんて・・・」

フ　「あの・・・私、なんかわかっちゃったんだけど・・・」

シ　「なにがだ？」

フ　「作者さん・・・『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』まともに見たことないでしょ？」

は　「はっはっは！フェイトちゃんいくらなんでもそれはないで！」

近　「・・・フェイト隊長・・・」

エ　「恐ろしい子・・・」

は　「え・・・二人のその反応・・・まさか」

ヴ　「ほんとなのか！？」

作　「はい」

は　「うわー！ぶっちゃけすぎー！！」

な　「今更だよ！？」

フ　「もう折り返し地点でその告白はキツイよ！！」

シ　「おまえの『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』知識

はネットでの偏った知識だけか」

作　「はい。でも、テレビの録画はしていて、見てなかっただけなんで、改めて見ながらコレ書いてました。
　この作品は、基本をなるべくしっかりしたいので、キャラのセリフなどは特に気をつけています。
　何度も巻き戻して、再生してを繰り返して・・・」

な　「『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』は見ていないってことは前の作品は見てたの？」

作　「はい。リアルタイムで見てました、面白かったです。幼女のなのはさんかわいかったです」

な　「あ、そ、そうですか・・・どうも・・・」

作　「フェイトさんも幼女エロコスチュームよかったです」

フ　「・・・あんまりうれしくないよその褒められ方・・・」

作　「はやてさんもヴォルケンズとのエロ親父的な絡みがよかったです。
　あれでリインフォースとのエロい絡みがあれば・・・」

は　「あー・・・うん、ごめん」

シ　「そう言われると、あの時の主の手つきはまさにエロ親父そのもの・・・
　いかん、思いだすと鳥肌が・・・」

ヴ　「おっぱい魔人は大変だな」

近　「しかし、そんな程度の知識でこの話を書こうとするとは・・・」

エ　「大方、この『小説家になろう』で載ってるＦＦに触発されたんでしょ？」

作　「はい。だっておもしろいじゃないですか！ＦＦ（ファンフィクション）！！」

な　「じゃあ、知ってる無印かＡ-ｓ書けばいいのに・・・」

作　「ん～・・・この話は、大筋『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』に沿って行くので、昔の話を改変するのも・・・」

フ　「んんー・・・それを言っちゃうとＦＦの意味がなくなっちゃうよ？」

作　「あと、この物語のテーマのひとつとして、『過去は不変であり、人生はその過去から成り立つ』というのがあります」

シ　「なにやら重いな・・・」

作　「ホントは終始重苦しい話にしようと思ってました。でも、近藤がいつのまにかあんなバカでエロに・・・」

近　「それは俺のせいじゃない！おまえの力量不足のせいだ！」

作　「エレノアも、ホントはもっと後のほうに出すはずだったんです。
　　ていうか、近藤の能力も最後のほうまで隠しとく予定だったんです」

エ　「そうすると、私とご主人様の存在感なくなるよ」

作　「はい、そう思い、急遽途中から能力開放と、出演をしてもらいました。
　　ホントに、自分の考えの甘さと、力量の無さを痛感する日々です」

は　「ふーん、むずかしいな？」

ヴ　「なんというか、がんばれよ」

作　「ああ、ありがとうございます。
　　それとですね、更新が遅れている理由に、携帯電話が故障しているというのも要因でして・・・」

な　「台替機があるでしょう？」

作　「その台替機がですね、機種が無いという理由で、３年前の古い携帯でして・・・」

フ　「うわ・・・使いづらい・・・」

作　「いままで携帯のメモ帳機能を使って話を打ち込み、パソコンで打ち込みなどを同時進行していたんです。
　　これなら、仕事中でもできるでしょ？でも、台替機にはその

メモ帳機能が無くて・・・
　しかも画面のドットが荒い！携帯触る気にもなりません」

シ　「まあ、貴様の仕事が何かは聞かんが、仕事中に物語を考えて書いていたのか・・・あまり関心せんな」

は　「そこまでして物語書いてくれるんはうれしいけど、危ないことするなー。仕事に集中せんとミスするで？」

作　「はい、というわけで、これからもしばらくはコレくらいの更新速度になるとおもいます。
　楽しみにしてくれている皆さんすいません」

ヴ　「うん、理由はわかった。おまえも大変だな。
　でも、無理はするなよ？無理して話のクオリティが落ちたら元も子もないからな」

作　「はい、それは前々から考慮しています。
　投稿する前に何度も読み返して、誤字脱字や表現の矛盾がないか確認しています。
　ただ、文才のほうは如何ともしがたく・・・なんとも情けない次第です」

は　「そのわりには結構誤字脱字あるよな」

近　「まあ作者も人間ですからね、いわゆるヒューマンエラーというやつですよ」

エ　「作者は近くに友達いないしねー」

な　「・・・悲しいね」

フ　「・・・寂しいね」

シ　「不憫だな・・・」

作　「痛い！その憐憫の目が千のナイフとなって胸を刺す！！」

作　「とりあえず、物語のテーマと近藤、エレノアの設定を書きます」

この物語のテーマ

「家族愛」

「過去は不変であり、人生は過去から成り立つもの」

「世界はそんなにやさしくない」

近藤がアカシックレコードで見た情報
1・「自分はいつどのように死ぬのか」
2・「聖王との出会いと時期」
3・「聖王教会の過去と伴うベルカの歴史」
4・「スカリエッティのラボの有害性」
5・「???」
近藤の力
「黒化」
「空間短縮移動」
「源書（オリジナル・グリモア）」所持
「起源の系譜（ジェネシック・コード）」＝「裏技」
「アルハザードの知識」
「アカシックレコード」

源書の官制人格エレノアの力

「全ての魔法の知識」

「全ての魔法の行使」

「ユニゾン」

シ　「なんだ?アカシックレコードの最後の???は」

作　「内緒ということで」

近　「まあ、大体予想はつくな」

ヴ　「アルハザードの知識の中に『源書』と『起源の系譜』が含まれるんじゃないのか?」

作　「とりあえず、分けただけです」

ヴ　「つーか・・・『黒化』とか『裏技』とか・・・相変わらずネーミングセンスねーのな」

フ　「スカリエッティが『起源の系譜(ジェネシック・コード)』って言わなかったら『裏技』で定着してたよね」

近　「技の名前なんてわかりやすければ、どうでもいいですよ。

だって、技名言いながら攻撃するなんてバカなことしませんし」

な「・・・そうだよね・・・バカだよね・・・うん、わかってたんだ・・・」

フ「前々から思ってたんだ。技名叫ぶ必要あるのかな？って・・・」

は「パフォーマンスとはいえ、私等の年齢であの行動は結構つらいんや・・・」

シ「いいではないですか。気合が入ります」

ヴ「そうだな。腹の下に力が入るって感じだ」

エ「そうそう、技名叫びながら攻撃するのって勇者モノや戦隊モノみたいでいいじゃない！」

近「エレノア、１９歳にその話題はつらいんだ。察してやれ」

エ「ふーん？」

は「しかし、こう羅列すると、ほんとに反則やな、近藤さん」

近「でも欠陥だらけですよ」

フ「使い方次第だよ。力は手段なんだから」

エ　「いちいちカッコイイなあ、フェイトちゃんは」

フ　「い、いやぁ・・・」（テレテレ）

な　「フェイトちゃん、着々と近藤さんフラグを立ててるね」

フ　「へ！？あ、いや、そ、そそそんなこと・・・」

な　「ふふっ、そういうところがかわいいよね」

フ　「あうぅ・・・」

作　「さあそれでは！とりあえず、５０万アクセス突破とユニークアクセス５万突破は本当にありがたいです」

近　「次にこんな事をするのは１００万か？」

エ　「そこまで続けてればいいけどねー」

は　「怖いことサラッと言うなこの子は・・・」

作　「飽き性で、面倒臭がりですが、この物語は必ず完結させて見せます！」

シ　「うむ！よく言った！！」

ヴ　「自分の首を絞めなきゃいいけどな」

な　「じゃあ、皆さんもこれからの私達の活躍を期待していてくださ
い！」

フ　「それじゃあ、また本編で！」

一同　「またねー！！」

## 第３１話（前書き）

大分説明的な文章になってしまいました。
つまらないと思いますが、
しゃーねーなー的な適当気分で読んでください。
コメントもお待ちしております。
明日の活力となりますので。

## 第３１話

ある世界に男がいました
男は一人ぼっちでした
その世界には男以外だれもいません
男は考えました

一人は淋しい

だれかいませんかー？

でも誰もいない

一人ぼっちはいやだ

誰かいませんかー？

でも誰も答えてくれない
どうしたら一人じゃなくなるだろう

男は思いつきました
そうだ、いないのなら

作ればいい

男は土と水を使って人間をつくりました

怒りっぽい人間
面倒臭がりの人間

真面目な人間
泣き虫な人間

男は他にもいろいろなものを作りました

男は魔法を作りました
人間はその魔法で色々なことをして、暮らしが豊かになりました

そしてより暮らしやすくするための道具を造りました
人間はその道具で家を作り、食べ物を作りました

男のしたことは数え上げればキリがありません

気がつけば男のまわりには人間がたくさんいました

男は喜んでいます

ああ、ぼくのまわりにこんなに沢山の人間がいる

なかには男を嫌う人間や、男を騙して悪いことをしようとする人間もいました
でも男は嬉しそうです

自分とは姿形も考えもなにもかも違う人間がこんなに沢山いる
こんなにうれしいことはない

これがぼくの望んでいた世界だ

その人間達は男の作った家を大きくして街をつくり

それが大きくなって国になり、
一番住みやすい文明を創り上げ栄えさせることに成功しました
そして男はそんな人間達からこう言われるようになりました
王様　と
男は人間達の父親であり、母親であり、王様でした
いつしか男の名前が国の名前に使われるようになりました
そしてその国は「はじまりの国」とも呼ばれるようになりました
そこはすべての魔法のはじまりの地であり、
一人ぼっちだった男の願いが詰まった夢の世界

絵本「はじまりの国」より

近藤はため息をついた。
まさかこんなに早く自分の手札を晒すことになるとは思っていなかったのだ。
できれば見せたくなかった。
使いたくなかった。
だが状況がそれをさせてくれない。

近藤はまたため息をついた。

機動六課部隊長室

ここに現在スターズ、ライトニング、ロングアーチの面々とヴァイス陸曹が集まっている。
なのはも先程保護した少女を聖王医療院に面会し終わり、帰ってきていた。
みんなの視線は近藤とエレノアに集中している。
なぜなら、エレノアの服装に現実味がないからだ。
本局の青い制服の上に白いマントを羽織って目をつむり静かに佇んでいるその姿は、
銀髪と白い肌も相まってある種幻想的な雰囲気を漂わせていた。
みんなそんなエレノアに見惚れていたのだ。
近藤はそんなエレノアの横で無表情で立っていた。

「・・・さて、まず、最初に言っておきます」

近藤の前振りにエレノアに見惚れていた皆が近藤に向く。

「今から言うことは最重要機密です。このことを知っているのは
リンディ・ハラオウン統括官と
ミゼット・クローベル幕議長、
ラルゴ・キール元帥、
レオーネ・フィルス相談役の
四人のみです。
ですから、他言無用はもちろん、親族、友人にも情報漏えいは許されません。

そのことを踏まえて聞いてください」

「ちょっ、ちょっと待って！」

近藤の前振りにいきなりはやてがストップをかける。
その表情はかなり焦っている。
他の面々も口を開けて呆然としている。

最重要機密という単語もさることながら、それを知る人物がリンディ統括官とあと三人の名前があげられた。
その”あと三人”の名前がとんでもない大物だったのだ。

「伝説の三提督がからむ機密なんか？」

はやては若干声が震えていた。
一気に部屋に緊張が走る。
最重要機密などという一言で済ませられることではない。
管理局のトップしか知りえない情報が近藤の口から語られるのだ。
相当の覚悟が必要となる。

「・・・フォワードの子達は席を外したほうがいいんじゃあ・・・？」

フェイトがフォワード４人を退出させようとする。
最重要機密、三提督の名前が出てきた時点で４人は縮み上がっていた。
ティアナは顔面蒼白となり、スバルとエリオ、キャロはガタガタ震えている。

「いえ、４人にもいてもらいます。エレノアの存在を知った時点で

もう引き返せないのです」

それが望む、望まないに関わらずね。

近藤はそう言うと自分の眼帯を外した。
皆、眼帯を外した近藤の顔を見て息をのんだ。
アルトやルキノなどはヒッと悲鳴をあげた。
眼帯の下に隠れていた近藤の右目部分には、赤い宝石のような球体が埋め込まれており、その周りに多数の血管が浮き出ている。
あまりにもおぞましい顔に悲鳴をあげるのも無理はない。
エレノアはそんな悲鳴をあげたアルトやルキノを睨んだ。
そのエレノアの殺気にあてられてまたヒッと悲鳴をあげたが、
そんなエレノアの肩に近藤はポンと手を置きなだめる。

「まず、デバイスのことから話しましょうか。シャーリー、デバイスコアの『ブラックボックス』は知ってるか？」

急に話を振られたシャーリーは若干戸惑いながらも答えた。

「あ、はい。コアの容量を食うだけのゴミ、『ジャンクボックス』ですよね？」

「あー、今はそんな風に言われてるのか。まあ、それはいいとして、皆さんにも簡単に説明しましょうか。
デバイスコアの生成方法というのは旧暦以前から変わっていません。
つまり、コアには過去の情報、それこそアルハザードの情報も入っている可能性があります。
そこで過去の科学者や魔導士はコアを研究しました。で、そのブラックボックスと呼ばれる部分に可能性を見出しました。
ですが、このブラックボックスには尋常ではないプロテクトがかか

っていました。
そしてこの１５０年あまりの研究でも解析できず、ある結論が出されました」

専門的な内容にシャーリー以外は半分もわかっていなかったが、それでも皆真剣に近藤の話を聞いていた。

「『過去の人間のお遊び』や『ゴミ』という結論に達し、これが一般論になりました。
なぜならこのブラックボックスは無くても支障がないし、無駄に容量を食うだけの邪魔なだけのものだったからです」

「たしかに、インテリジェンスデバイスを造るときはブラックボックスを取り外してＡＩを組み込みますからね」

シャーリーは近藤の話しに続きながらウンウン頷いているが、他の面々はちんぷんかんぷんだ。
スバルなどは頭から煙をだしている。

「近藤さん？そのデバイスコアと機密にどういう関係が？」

おもわずフェイトが近藤に質問する。

「まあ、焦らないでください。そこで８年前の事件に移ります。俺が怪我をした事件です」

それを聞いた途端皆の顔が暗くなった。

「ああ、概要は置いておいてですね、俺はその事件で右目を損傷して、どういう経緯かは俺もわからないんですが、いつの間にか右目

部分にこの俺が持っていたデバイスが埋め込まれていたんです」

そういうと近藤は自分の右目の代わりにある赤い球体を指差す。
なのはとヴィータは今にも泣きそうな顔をしているが、近藤は無視して話を進める。

「そこで、またどういう偶然か、俺の脳と神経がこのデバイスコアと直接リンクをしてしまいました。
そのときに、先程話したブラックボックスのプロテクトも全て解除してしまったんです」

ここまで言うとシグナムがハッとした顔をして近藤を見る。

「まさか・・・」

近藤はシグナムの呟きに頷く。

「はい、そのブラックボックスにはアルハザードの技術などの知識が納められていたんです」

ざわつく一同。特にシャーリーなどはメガネがずれて呆然としている。

「俺はこのことをリンディさんに話しました。するとそこからおかしな方向に進んだんです」

「・・・三提督が出てきた、と？」

グリフィスがメガネの奥からのぞく鋭い目で近藤を見る。

「うん、まさかそんな一大事になるとは思ってもいなくてな、俺もビビッたよ。
生まれて初めて生で伝説の三提督を見たもんで、あのときは緊張したなあ」

近藤が懐かしそうにしみじみ話す。
はやてやフェイトは近藤が緊張してガチガチになっている姿を想像して思わず吹き出してしまった。

「・・・ぷっ」

「どんな想像をしたのか大体予想が付きますが、とりあえず話を進めます」

「す、すいません」

近藤とエレノアのジト目に二人は恐縮し、近藤は話を進めた。

「まあ、そこで俺も初めて知ったんですが、アルハザードの知識というのはとても危ういものなんですね」

「？なんでだ？理想郷の知識なんだろう？」

ヴィータの言葉に皆がそれはそうだと頷くが、ここでエレノアが口を開いた。

「確かに、アルハザードは卓越した技術と魔法文化を持ち、そこに辿り着けばあらゆる望みが叶う理想郷として伝承されていますが、それ等が必ずいいことばかりではありません」

「・・・スカリエッティ・・・」

フェイトの呻きに近い声を出す。

「そうです。ご主人様がヘリの中で話しましたが、ジェイル・スカリエッティはアルハザードの知識を有しています」

ざわつきが大きくなる。

そんな機動六課の面々を無視して近藤とエレノアは淡々と話を進める。

「まあ、当然といえば当然なんですよ。今いるスカリエッティはクローンなんですから」

「なっ!?」

フェイトが驚く。

エリオも驚いていた。

「あいつは元はアルハザード時代の人間で、まあ、科学者だったんです、普通の。

それがどういう経緯かはわかりませんが、誰かがあいつの細胞の一部を手に入れてクローニングしたんですね」

まったく、迷惑なはなしだ。

と言いながら近藤は腕を組んで鼻から息を吐いた。

エレノアもやれやれというジェスチャーをしている。

「どうせクローニングするならもっとましな人間をしたらいいのに、よりにもよってあの・・・」

近藤とエレノアは同時にため息をついた。
他の面々は開いた口がふさがらない。
あまりの衝撃の事実に状況についてこれていないのだ。

「それでですね、話を戻しますと、つまりアルハザードの知識というのは、良薬にもなれば劇薬にもなるモノだということです。
ですから三提督はこのことを他言無用、最重要機密にしたんです」

「で、そのあとに左遷されたの」

エレノアが可愛らしく左遷という言葉を出したが、なのはとヴィータは苦しそうに胸を押さえていた。

「その後はは履歴書にも書いたとおりですが、あれは自分で色々な世界に異動希望を出したんです」

「え？」

はやてが食いついた。

「あれ、自分で異動希望出したん？なんで？」

「最初の第４６無人世界へ異動はホントに左遷命令で仕方なしでしたけど、その後の異動はちゃんと理由があって、ちゃんと受理されたんです。
理由は『古代遺跡から、アルハザードの遺産を発掘すること』です。
まあ表向きの理由は違いますけどね」

「そんな中で私がご主人様に発見されて改修されたの」

近藤の言うことはつまり、アルハザードの知識を利用して遺産があると思しき世界へいき、
そこで発掘して使えるものは使う、危ないものは封印するということをしていたそうだ。

「あ、危ないものって・・・？」

ティアナが聞かなくてもいいことを聞く。
性分なのだろう。

「んー・・・大量殺戮兵器とか、即死性ウィルスの生成方法とか、
人間と他の動物を融合させるキメラの方法とか、あと・・・」

近藤の言うことにティアナは顔を真っ青にして、もういいですと話を切った。

「あの異動は自分でやっとったんか・・・」

はやては納得いったようでウンウン頷いていた。

「ちょっと待ってください。今までの話ですと、その危ないもの、
おそらく『ロストロギア』相当のものの存在はスカリエッティも知っているのでは？何故スカリエッティはそれ等に手を出さなかったんですか？」

グリフィスが鋭い指摘をする。
もっともな話だ。
過去のアルハザードの知識を有する近藤とスカリエッティの行動がそれぞれ重ならないのだ。

近藤の言うことが本当なら、スカリエッティもその『ロストロギア』相当のものに手を出しているか、作り出しているはずだ。
そこで近藤とエレノアが苦笑する。

「スカリエッティの記憶は所詮科学者の知識しかなかったということだよ」

「それにあいつも人造魔導士によるクローンや機人なんかも作ってるから危険人物には違いないの」

どうもスカリエッティは過去のアルハザードの時代では一科学者でしかなく、『ロストロギア』相当の兵器の存在は知らなかったようだ。
だが、代わりに遺伝子工学関係に精通しているためクローニング技術などを展開しているのだ。
このときの近藤の口から発せられた「機人」という単語にスバルとティアナがピクッと反応した。
近藤はあえてそれを無視した。

「そして今回の事件で現れたあの青タイツの痴女達ですが、あれらは「機人」と呼ばれるものです」

人の身体と機械を融合させ、常人を超える能力を得た存在。
鋼の骨格と人工筋肉を持ち、遺伝子調整やリンカーコアに干渉するプログラムユニットの埋め込みにより高い戦闘力を持つ。
天賦の才や地道な訓練に頼る「魔導師」とは異なり、誕生に人為的な力を介在させることで安定した数の武力を揃えられる技術である。
もっとも完成の域に達したものはほとんど存在しないという難技術であった。
元は旧暦の頃より幾度も開発が試みられた人型兵器である。

身体機能の代わりを務める人工骨格や人造臓器は珍しい存在ではなかったが、それを「身体機能の強化」目的で用いる場合、様々な問題があった。

というのが一般の見解である。

しかし実体は違う。

この機人の基礎理論は過去のアルハザード時代に確立されており、実用化されていた。

目的はあくまで「生活の補助」による身体強化であり、今回のクアットロやディエチ達のような戦闘目的の手段ではない。

「結局、スカリエッティは過去の技術をそのまま使っているだけです。

今回、ディエチ、クアットロ、トーレの三人が現れました。

あとヴィータ副隊長達の所にもひとり、・・・えーと「ＶＩ」だからセイン（ｓｅｉ）か、機人があと最低でも６人いますから用心はしないと」

「近藤さん？」

近藤が機人達の説明していると、すばらしい笑顔ではやてが質問してきた。

それはもう、怖くて震えるくらいに素晴らしい笑顔で。

「な、なんでしょうか・・・？」

「なんで今回のあの青い人たちの名前知ってはるん？」

近藤は安心した。

なんだ、そんなことかと。
てっきり、クアットロとディエチにした「おいた」がばれて粛清されるかと思った。

「ああ、それですか？彼女達の首のプレートに数字があるでしょ？あの数字が彼女達の名前なんですよ。
いまのところ一番大きい数字の１０番がディエチですから、少なくとも１０人は機人がいるということです」

「・・・なるほど・・・」

はやては顎に指を乗せて考え込む。
１０人
この人数は脅威だ。
しかも、「いまのところ」だ。
これから増える可能性もある。

「あと、彼女達の能力は魔法ではありません。インヒューレントスキル（Ｉｎｈｅｒｅｎｔ　Ｓｋｉｌｌ）通称ＩＳと呼ばれる先天固有技能を有しています。だから、彼女達にはＡＭＦは通じません」

「な、なんだそれ？魔法の他にそんな能力があるのか？」

ヴィータがうろたえる。

「ありますよ。ただこの世界では魔法が一般的で使用人口も多いから、他の力が浸透していないだけです。
聞いたことあるでしょ？超能力とか、気や波動とか」

「いや、あるにはあるが、しかし・・・」

シグナムも懐疑的な反応をする。

「以前お見せした俺の空間短縮移動も魔法じゃありません。あれはいわゆる超能力に部類されます」

足元に魔方陣が展開された無かったでしょ？

と近藤は軽く言ったが、皆の反応がない。

衝撃により反応できないのだ。

「でも使う元のエネルギーは同じです。何か混同して別物の扱いをする人がいますが、体内のエネルギーの使い方が異なるだけです。魔法はリンカーコアを介して使用するもので、つまりリンカーコアが無い人間は魔法が使えません。

ですが、エネルギーと言うものは誰の体にもあります。それらを別の使い方で使用するのが俺の超能力であり、

彼女達のＩＳなんですよ。力の全てが魔法ではありません」

「中国拳法や武道なんかはいい例ね。あれらは達人クラスになると体の気を自由に使うことが出来る。

見たことあるでしょ？手の届かない所の板を壊したり、コンクリート砕いたりするの。

あれ等の力の元のエネルギーは私達の体に流れているものと同じで、出力方法が違うだけって事ね！」

「・・・」

もうなにがなにやらわからない。

スバルとエリオ、キャロは考えるのをやめてお茶を飲んでいた。

近藤もコーヒーを取り、口の中に流し込む。

喋りすぎて少し喉が渇いていたため、濡れていく喉が気持ちいい。

「さて、なにか質問はありますか？なければ今度はエレノアについて話しましょうか」

エレノアがひとつ前に出る。
エレノアを見つめる視線をゆっくりと見回し軽く微笑む。
そして頭を下げ敬礼をする。
その優雅な立ち振る舞いに皆惚ける。

「ここでは初めまして、と言ったほうがいいかしら？
私はアルハザードが生み出したデバイス『源書』の官制人格エレノア・K・アルファードです。
我が主の手により覚醒し、私の知識、体、この髪、血の一滴まですべてはご主人様のために存在するものです」

かるくエレノアが挨拶すると、はやてが敬礼をした。
それを見た皆が急いで敬礼をする。

「アルファード大将！お聞きしたいことがあります！」

エレノアははやての畏まった態度にクスリと笑う。

「はやて隊長、ふつうにしていたでいていいですよ。私の階級は本来ご主人様のものなのですから。で？質問とは？」

なにやら聞き捨てなら無いことを言った気がするがはやてはそれを隅に置き質問する。

「はい、それでは。『源書』が『夜天の書』の元になっていると聞きました。それは本当ですか？」

「ええ、本当です。蒐集による覚醒ではなく、記録という目的であるため用途は異なりますが、基本は同じです」

だから姿かたちも一緒でしょ？

とクルリとその場で回る。

「じゃあ、騎士プログラムも？」

話にヴィータが割り込んできた。

最初はヴィータも胡散臭そうにエレノアを見ていたが、言動や雰囲気を見てどうやら本物と言う結論に達したようだ。

「ああ、あれは出来ますが、ご主人様の負担になるので使いません。なにしろ、ご主人様の魔力量は少ないですから」

「・・・すいません」

自分のデバイスに謝るマスターとはこれほど滑稽なものなのかと、数人がクスクス笑い出した。

「では、あなたはどうやって現在の姿を維持しているのですか？我々は夜天の書プログラムと切り離されているため主の負担にはなっていないが、あなたは違うでしょう？」

シグナムも話しに入ってきた。

自分達の親戚に当たるような人物、しかもあのリインフォースのそっくりさんが目の前にいるのだ。

興味がないわけがない。
守護騎士システムは使い魔との関係に似ている。
本来、デバイスを所持しても契約をして持ち主が魔力を供給するということはない。
だが、夜天の書の場合、守護騎士システムの利用もあってか運用にはマスターの魔力を必要とする。

「私はあくまで『源書』というデバイスです。あれは”個”ですでに独立できる魔力を有しています。
だから、ご主人様の魔力は必要ありません。
ですが守護騎士システムは違います。
あれは源書を守るとしながらもご主人様への契約も必要となり、そうなるとご主人様と騎士達にパスが出来てしまいます。
ご主人様の魔力量で守護騎士を召喚したら、すぐに干からびて死んでしまいます」

「・・・はい、ほんとすいません」

近藤があまりに落ち込むので、フェイトがポンポンと肩を叩いて慰めていた。

「あの、それでさっきの大将の階級は元々近藤さんのモノだって言ってたけど・・・それって？」

「ああ、それですか。実は、エレノアを改修した後くらいに昇進の話があったんですよ。
アルハザードの知識を有効活用するために上に立たないか、ということで。で、『大将』が用意されたんです」

「それはなんとまあ・・・」

シグナムは呆れていた。
軍曹に落とされた人間にいきなり大将のポストを用意する。
荒唐無稽なやり方に誰もが呆れてしまうのは仕方が無い。

「はっきり言って、面倒くさかったので断ったんですが、三提督がそんなことで納得してくれるハズもなく、応急処置としてエレノアにその階級を譲りました。
まあ、さすがにデバイスが大将というのは体裁が悪いということで、エレノアがデバイスということは秘密になっています。
だから、クロノ提督もカリム理事官もエレノアがデバイスだと言うことは知りません。
というより、大将の存在すら公にはなっていません。一部の上層が知っている程度です」

佐官のはやてですら大将を知らなかったのだ。
将官クラスでないとわからないようにされていたのだろう。

「何故そこまで秘匿するんですか？」

ティアナが質問してきた。
その質問にエレノアがニカッと笑った。

「にゅふふ～、なんでだと思う？」

横で近藤が頭を押さえていた。
皆、なんとなくそれで理由がわかってしまった。

「・・・仕事、しないんですか？」

「はい！正解～！」

エレノアがどこからか扇子を取り出し、扇いでいた。

「・・・仕事をしない大将なんて発表できるわけないだろ？だから、階級はトップだけど、給料無し。栄誉職と同じだな。コイツはいつも俺の部屋でテレビかネットばっかりやって、たまに本局に行って真面目に働いている局員をからかうだけだ」

皆呆れている。

デバイスが上官という時点で予想外なのに、そんな上官が仕事をしないという。

近藤が頭を抱えるのも頷ける。

「レジアス中将がよく抗議しないな」

シグナムの呟きももっともである。

あの堅物のレジアス中将がよく大人しくこんな穀潰しを放置しているものだと皆思った。

「レジアス中将は私のことなんてただの小娘としか思ってないからハッキリいって無視ね。

ま、三提督っていうバックボーンがあるから言いたくても言えないというのが本当のところかな？」

なんとも締まらない話である。

なのは達は自由奔放なエレノアに振り回されている本局の局員達を想像しため息をついた。

「それでですね、これからはエレノアにも機動六課にいてもらおう

と思うんですが、どうでしょうか？」

近藤の言葉と共に一斉に皆が顔を青ざめる。
エレノアに振り回されて目茶苦茶になる機動六課が容易に想像できる。

エレノアが三日月のように口を広げて笑っている。
こいつ、やる気だ。

「もちろん、普段は表に出しません。源書に待機させておきます。ただ、いざという時に手駒は多い方がいいでしょ」

近藤の「エレノア暴走対策」を聞くと皆ホッと息を吐き、胸を撫で下ろした。
エレノアはチッと舌打ちしていたが近藤は無視した。

「うん、まあそれならええかな？」

はやての了承に皆が頷いた。
はやてはエレノアに右手を出した。

「ようこそ、機動六課へ！エレノアさん！」

はやては微笑み、エレノアもまた微笑み返し、差し出された右手を握った。
周りから拍手が起こる。

「こちらこそ、よろしくお願いします！はやて隊長！」

エレノアの笑顔はとても眩しく、美しくて、はやてはおもわず頬を

桃色に染めた。

この日エレノアは機動六課に歓迎された。

## 第３２話（前書き）

今回は近藤の一人称で進めてみました。
皆さん、まったり見ていって下さい。

# 第３２話

「はじめまして、おおさま。ヴィヴィオといいます」

「はえっ！？」

目の前で少女がスカートの端を持ち、ペコリと挨拶する。

俺は固まってしまった。

そして、おもわず奇声をあげてしまうほどに動揺してしまった。

はやて隊長となのは隊長、先程まであやしていたフェイト隊長も口をポカーンと開けて俺と少女、ヴィヴィオを見ている。

フォワード四人も目を丸くしていた。

ただ一人、エレノアだけは俺の後ろで肩を震わせながら笑いをこらえていた。

ヴィヴィオは挨拶を終えるとニコリと無垢な笑みを俺に向けた。

俺が何故こんな事になっているのかは少し時間を遡らなければならない。

そう、それは今朝のことだった。

なのは隊長がシグナム副隊長を連れて、先日の事件で保護した少女「聖王」の見舞いに行った。
状況によってはなのは隊長が少女を引き取るということになっていた。
勿論里親を見つけるまでという前提の話だ。

なのは隊長といい、フェイト隊長といい、責任感が強いのは結構だが、自分の将来のことを考えた方がいいと思う。
二人はまだ１９歳だ。
これからいろいろな出会いがある。
結婚もするだろう。
二人は美人だから相手には不自由しないと思う。
それなのにフェイト隊長はすでに二人の子供の保護責任者である。
書類上は保護という名目だが、実質親子だ。
独身で既に二児の母だ。
なのは隊長も恐らくこのまま行けば少女を引き取り、母親になるかもしれない。
何故かというと引き取り手がいないからなのだ。

一般の里親自体は見つけるのに問題はない。子供が欲しいという善良な人間は沢山いる。
問題は少女にある。

彼女は人造魔導士だ。この境遇が管理局の頭を悩ませる。
むやみに一般人に引き渡すわけにもいかず、かといって局員も難しい。
事情が事情だけに誰も手が出せない状況なのだ。

一番の解決策は少女を「処分」することだ。処分というのは簡単にいうと「殺す」ということである。

人造魔導士の存在はいまの世界にメリットがない。倫理的に問題のある技術で生みだされた存在、人造魔導士という事実だけで世間に後ろ指を刺される。
何故なら人造魔導士は禁忌だからだ。

基本的に人間は潔癖で傲慢だ。
ダメといわれたものには好奇心によって最初こそ寛容な態度をとるが、次第に自分達とは違う存在だということがわかると、煙たがり、遠ざけ、弾圧する。
管理局も馬鹿ではない。彼女達の個人情報はしっかり保護するが、いつどこで情報漏洩があるとも限らない。
そうなれば辛いのは本人だ。
いじめられ、虐げられ、奇異の目で見られる。
それならば処分こそ最善であると結論付ける。
だが、ここでまた倫理が邪魔をする。

生きている人間を簡単に殺していいのか？

それは倫理に反する。

人造魔導士は人間ではない。だから殺していい。

そんな存在に倫理は当て嵌まらない。

人造魔導士の未来を憂いての行動か、それとも自分達の保身のためか、それはわからない。

俺にも何が正しいのかわからない。
だが、この先に起こる未曾有の事件を考えると、この少女に罪は無いが犠牲になってもらった方がいいのではないか、とも思ってしまう。
そんなことを平然と思える俺はおかしいのだろうか、と自問自答し思いに耽っていたら、フェイト隊長に声をかけられた。

「近藤さん、私たちはこれから聖王教会に行きます。近藤さんも来ますか？」

とのお誘いが来た。
はやて隊長、フェイト隊長、なのは隊長の三人は聖王教会へ赴き、カリム・グラシア理事官とクロノ・ハラオウン提督のお二方と会談をするのだそうだ。
俺は聖王教会が嫌いだし、クロノ提督はどうも昔から俺の事を嫌っている節がある。
俺が六歳のときに次元航行艦アースラに保護された。そのときクロノ提督は四歳だった。
それからは俺を引き取った養父がアースラのクルーということもあってか、友達というか、兄弟というか、そんな関係だったのだが、クロノ提督が管理局に入局し、魔導士となってから彼は俺に辛く当たることが多くなった。いわゆるイジメである。
理由はわからないが、それを見兼ねたリンディさんが俺を管理局の地上部隊へ入局させ、俺とクロノ提督を引き離した。
最後に会ったのは義父の葬式だったが、まともな会話も交わしていない。
誰が好き好んでそんな場所へ行くものか。

「いえ、まだ仕事がありますので遠慮しておきます」

俺は丁重にお断りした。

実際報告書の山が俺の目の前にある。前回の事件、ガジェットとの戦闘、レリックの確保、人造魔導士の保護、あげればきりがない。

「わかりました。じゃあ、帰ってきたら内容を話します」

フェイト隊長がそう言い事務室から出ようとするところを、俺は引き止めた。

一応、クギは刺しておかないといけない。

「フェイト隊長、くれぐれも先日の内容は話さないようお願いします」

先日の内容とは、俺のアルハザードの知識のこと、エレノアのこと、スカリエッティの事である。

フェイト隊長は少し困ったような顔をしていた。

「でも、重要な情報だから、せめてスカリエッティの事だけでも・・・」

「ダメです」

俺はフェイト隊長の案を即効却下した。

「いいですか、スカリエッティの知識がアルハザードにあるとわかれば、誰がどのような行動に出るかわかりません。

いくら信頼のおける兄弟や支援者だとしてもです。

リンディさんも、あなたやお二方には一切お話していないでしょう

？」

話すのなら三提督の許可を獲てください。
俺がそう言うと、渋々フェイト隊長は了承した。

しばらくすると、なのは隊長とシグナム副隊長が聖王医療院から帰ってきた。
案の定、少女「聖王」を連れて帰ってきた。
このとき、俺は少女に会うことを禁止された。
少女は情緒不安定で余計な刺激を与えたくないとのこと。
俺の顔はそんな精神が不安定な少女には刺激が強すぎるらしい。
なんと、そんなことを全員に言われた。
スバルやキャロ、エリオまでもがしばらく少女に近付かないほうがいいと言ってきた。
そんなわけで俺はなんか釈然としないながらも、他のメンバーの報告書にも手をつけていた。
ちなみにエレノアは俺の隣で別の端末を使い、ゲームをしていた。

「ご主人様、そろそろなのはちゃん達聖王教会に行った頃じゃない？」

エレノアの言葉に、俺はチラッと壁掛けの時計を見た。
ああ、もうそんなに時間が経っていたのか。
それじゃあ、他のメンバーに残りの報告書作成をやらせないとな。
もう少女も誰かの部屋か、何処かに連れていっていることだろう。

「よし、ティアナ達に報告書を渡しにいくか」

「りょうかいなの～」

俺はエレノアを連れて部屋を出た。
小型端末を見ながら、報告書の不備などを確認しつつ、皆がいるであろうロビーへ向かった。

ロビーに着くと、まだ隊長達がいた。
皆視線が下を向いている。
フェイト隊長はしゃがんでなにやら手を動かしていた。
いつまでチンタラしてるんだと思いつつ、俺は声をかけた。

「フェイト隊長？まだ行かれてなかったんですか？」

そう声をかけると、一斉にこちらを向いた。
フォワード四人は俺の顔を見た途端あせりだした。

「うわ！近藤副隊長！？」

「せっかく泣き止んだのに！？」

スバルとティアナの言葉に、俺はすぐ察知した。
ああ、そうか。
まだいるんだな？

少女が。

フェイト隊長に隠れて見えなかった少女がひょこりと体を傾け、俺を見た。

俺と少女の視線が交差する。
大きくクリッとしたオッドアイが俺をじっと見つめる。
そうか、この子はオッドアイなのか。
前は眠っていたからわからなかった。
そして、何故か俺も負けじと見つめ返した。

無言で見つめ合う俺と少女。

１０秒か1分か、じっと見つめ合っていた。

泣くか？泣くのか！？
俺はそう思っていた。
皆も思っていただろう。
だが現実は予想の斜め上をいくものだった。

少女は、トテトテと可愛らしいあしどりで俺に近付いてきた。
そして俺の前まで来ると足を止めた。

なんだ？
一体何をするつもりだ？

すると少女はスカートの端をつまんでお辞儀をし、とんでもない事を言い出した。

「はじめまして、おおさま。ヴィヴィオといいます」

というわけだ。

とにかく落ち着こう。
落ち着け、俺。
クールだ、Ｃｏｏｌになるんだ。

ヒッヒッフー
ヒッヒッフー

よし、落ち着いた。

ここは大人の対応で切り返そう。

「丁寧な自己紹介ありがとう、小さなお姫様。私の名前は近藤大輔、以後お見知りおきを」

俺は紳士の対応をした。
どうだ！
これが大人の対応だ！
子供のお遊びに冷静に対処する、素晴らしい、自分で自分を褒めてやりたいくらいだ。

「こんどおだいすけ？おおさまのなまえ？」

首を傾げて俺を見るヴィヴィオ。
さっきからなんだ？その王様というのは？

俺はしゃがんでヴィヴィオと目線を合わせた。

「あー、ヴィヴィオ？さっきからその王様ってのはなんなんだ？」

ヴィヴィオは指をくわえて、んーと言いながら考えていた。

体を左右に揺らしながら考えている姿はヤジロベエのようだ。

「おおさまはおおさまだよ？」

うむ、答えになっていないぞヴィヴィオ。

「エリオやキャロでは飽きたらず、こんな幼女まで・・・」

そんな目で見ないで下さい、フェイト隊長。

「なんか、近藤さんのやることに驚くのがバカらしくなってきました」

どういう意味ですか、なのは隊長？

「なんや？近藤さんからは子供スキスキフェロモンが出とるんか？」

俺はどんな人間ですか、はやて隊長。

「あんなに皆がてこずっていたのに・・・フェイト隊長以上のつわものが現れた！」

「あれじゃない？猛獣の前では死を覚悟して従うみたいな」

そんなに俺は獰猛か、スバル、ティアナ。

「スゴイです！」

「さすがお父さんです！」

エリオ、キャロ、君達なんでもスゴイって言うね。

「おおさま？」

キョトンとしているヴィヴィオに呼ばれ、俺は我にかえった。

「あ、ああ、ゴメン、ヴィヴィオ」

そう言いながら俺はヴィヴィオの頭を撫でた。
一瞬ビックリしたような顔をしたが、次第に馴れたのか目を細めて気持ち良さそうにしていた。
前々から思っていたがエリオといい、キャロといい、ああ、ティアナもだな、俺が頭を撫でると皆気持ち良さそうにするな。
俺の手の平からはアルファ波か、マイナスイオンでも出ているのだろうか？

とりあえずこの停滞した空気を進めよう。
なのは隊長達を送り出さなければ。
俺はヴィヴィオの頭を撫でるのをやめ、なのは隊長達を見る。

「さあ、隊長達ははやく聖王教会へ向かって下さい」

俺がそう言うと、ああ、と思い出したように顔をあげた三人。
忘れる程ヴィヴィオに集中していたのか、

「じゃあ、ヴィヴィオ、いい子でお留守番していてね？」

なのは隊長が優しくヴィヴィオに話しかけ、うさぎのぬいぐるみを手渡した。
ヴィヴィオはそのぬいぐるみを受け取り、素直に頷いた。

「うん、わかった」

そう言いながら、ヴィヴィオは俺の服を強く握った。
やはり淋しいのだろう。

「すぐに帰ってくるさ。それまで遊んでような?」

「うん」

「よし、いい子だ」

俺はまたヴィヴィオの頭を撫でた。
そして、俺はある引っ掛かっていたことをエレノアに聞いた。

「ところでエレノア、なんでお前は後ろで笑ってたんだ?」

あの皆が驚いてるなか、エレノアだけが笑っていた。
まるで俺の事を王様と言うことがわかっていたように。
王様といったらヴィヴィオ自身のことだろうに。
すると、エレノアはクスリと笑い、

「ご主人様には王の器があるということじゃないですか?」

と、可笑しそうに言った。
よくわからん。

俺に務まる器なんか、おちょこくらい小さいだろうに。
そんなことを思っていたら、またエレノアに笑われた。
どうやら顔に出ていたようだ。
俺とエレノアのやり取りに皆首を傾げて頭に？マークを出していた。
ヴィヴィオはよくわかっていないようだったが、皆のマネをして首をカクンと横に倒していた。

とにかく、その後俺はなのは隊長達三人を送り出し、そのあとのヴィヴィオとの遊びを何にするか考えるのだった。

ちなみに、なのは隊長を送り出す前からヴィヴィオがずっと俺の手を握り、離してくれなかった。

## 第３３話（前書き）

更新が遅くなってすいませんでした。
楽しみにしてくれている皆さん、すいませんでした！
今回の話は「あれ？なにこれ？」
と、自分でも疑問に思う文章になってしまいました。
拒否反応を起こすかもしれませんが、どうぞゆっくりしていってね！

# 第３３話

なのは隊長を送ってからヴィヴィオはずっと手を繋いで離してくれない。
まあ、別にいいけど。

しかし、子供の手というのはどうしてこうプニプニして温かいのだろう。
肌がきめ細かいというか、しっとりしているというか。
それにひきかえ、俺の手はガサガサだ。
タコなんかでゴツゴツして分厚い皮膚に、カサカサに荒れた肌。
ヴィヴィオの手とはまさに正反対、月とスッポンである。
この手でヴィヴィオの手を傷つけないか心配だ。
ああ、そういえばエリオとキャロの手もプニプニしてたな。
うーむ、手を繋いでいるだけで癒される。

さて、それはさて置き、何をしてあそぼうか。
俺は考えながら歩いていた。
いや、そもそもどこで遊ぶか。
機動六課にそんな子供の玩具などあるはずはなく、場所といっても庭か現在使用されていない会議室や講習室などくらいだろう。
あ、エリオとキャロがいるじゃないか。
この二人なら何か玩具をもってるんじゃないか？

「エリオ、キャロ何か遊ぶもの持ってないか？」

俺がそう言うと、二人はお互いを見て困った顔をしていた。

「ごめんなさい。私達オモチャとか部屋に置いてないです」

なに？

待て待て。

君達何歳だ？

「１０歳です」

１０歳ならいっぱい玩具が転がってるだろう？

遊びたいだろう？

ゲームとかするだろう？

「いえ、僕達はここに仕事をしにきてるんですから、部屋にそんなもの置く必要ないですよ」

グサッときた。

俺の部屋にはゲーム機があるのに。

たまに遊んでるのに。

俺は１０歳以下なのか・・・

「いえ、人それぞれですから。

あ、じゃあ、お父さんの部屋で遊べばいいんじゃないですか？」

エリオの提案に俺は首を横に振る。

俺の部屋にあるゲーム機は「ＰＳ３」のミッド版のようなもので、基本対象年齢が高いゲームが多い。

いまミッドチルダは地球の日本ブームの風が吹いている。

管理局の美人どころで、しかも高ランクでエリートのなのは隊長やはやて隊長、そしてフェイト隊長の生まれ育った国や町に世間が興

味を抱いたのだろう。
地球の紹介をメディア等がバンバン取り上げ、現在は地球への観光ツアーなどもある。
管理外世界なのでおおっぴらには言えないが、一応管理局の護衛が条件ということで承認されている。

しかも、日本の居酒屋等を真似して出店したり、秋葉原あたりのメイド喫茶なんかもミッドの街中で見るようになった。
噂で、はやて隊長がメイド喫茶のオーナーというのを聞いたことがあるが、真偽の程はわからない。

そんななかで当然娯楽なんかも真似るわけで、ＰＳ３やＷｉｉなんかも真似して販売している。勿論本物ではないが、メーカーに訴えられないか心配だ。
ミッドの技術力があれば地球のものより高性能の物は作れる。
実際、ミッドにはちゃんとゲームがあり、とてもよく出来たものが沢山ある。
しかし、地球人の発想というのはとても柔軟で独創的で遊び心溢れる物が多い。
技術力云々よりもその柔軟な発想力がウケる理由のひとつだろう。

地球のゲームを扱うゲームセンターなんかも現れた。
ＵＦＯキャッチャーやプリクラ、メダルゲームなんかは大変好評で、行列ができていたりする。
どうも、娯楽や風俗（パチンコや競馬等のギャンブル）関係は地球のほうが多種多様で、ミッドでも概ね好評のようである。

俺が持っているゲームソフトも、バッタバッタとベルカ魔法で犯罪集団や紛争地帯を切り倒していく、その名も「ベルカ無双」と、対戦格闘アクションでシューティングアーツや他の格闘技が出てくる

「ストリートアーツ3」くらいしかない。
こんなゲームを子供にやらせるわけにはいかない。

そんなことを考えていると、エレノアが俺の肩をポンと叩いた。
その顔は笑顔だった。
なんかキラキラ光って、親指をグッと立てていた。

「ご主人様、安心していいの！こんなこともあろうかと、別のゲームを用意しているの！」

・・・こいつ、また勝手に何か買ってたな？
後でオシオキだな。

ちなみに、前回のエレノアが出した魔法をヒントにした、というかまんまパクった地球のアニメＤＶＤは「イナズマイレブン」という名前だった。
そのアニメを見たのだが、

「・・・いいじゃないか」

面白かったのでその件は不問となった。
友情、努力、勝利、どこぞの週刊マンガ誌のテーマっぽいが、近年これほど熱くさせてくれたものはないと思う。

仕方ない。エレノアの言葉を信じて俺の部屋に行くか。
一応、不安なのでエリオとキャロにもついて来てもらうことにした。
代わりに、ティアナに二人の報告書をやってもらうようお願いした。

さて、隊舎の俺の部屋に着いたのだが、入口のカードリーダにルームキーを通し、自動ドアを開けた途端、エリオとキャロが呆然としていた。
入口から動こうとしない。
そんな二人の心情を代弁してか、ヴィヴィオがボソリと呟いた。

「おへやきたないよ。おおさま」

・・・そうか？
床に服が散乱していて、テーブルの上には仕事の書類なんかが乱雑に置いている程度だ。
足の踏み場はあるぞ？

「・・・僕達の部屋がこんなだったらフェイトさんに怒られます」

「それより前に、私が怒ります！」

「だからいつも言ってるの。綺麗にしなさいって。でもご主人様聞かないの」

エリオとキャロに怒られ、一緒に住んでいるエレノアにまで怒られた。
なんか皆嫌そうな顔をしている。
仕方がないので、しぶしぶ片付けることになった。

そんなに入るのが嫌なくらい汚かったか？
これはこれで過ごしやすいんだぞ。

※ここからはしばらく音声だけでお楽しみください

「うわっ！この靴下カビ生えてますよ！いつから放置してるんですか！？」

「ぱんつマーン」

「わー！ヴィヴィオ！女の子が男の人の、お父さんのパンツなんて持っちゃダメ！ていうか、かぶっちゃダメー！！」

「なっ！？な、何ですか！こ、ここのヒモだけの黒い下着は！？」

「あ、それ私のだ。お、ブラもこんな所に」

「エレノアさんもすごくだらしないじゃないですか！」

「あれ？エリオ君そんなに私の下着握り締めて、もしかして欲しい？にゅふふ、エリオ君のえっち～！」

「いいっ！？い、いいいりませんよ！キ、キャロもそんな怖い顔で睨まないでよ！！」

「わ、私も、いつかフェイトさんみたいに大きくなるもん！！」

「あー、エレノアのブラはこのネットの中に入れてくれ。洗濯するときワイヤーが傷んだり、型崩れしたりするからな」

「女性下着を扱う知識が豊富ですね、お父さん？」

「だって洗濯はご主人様がするしねー」

「おおさま、ママみたいー」

「お父さんがだらしないのか、主夫なのかわからなくなりましたよ」

・・・という感じで部屋の片付けをした。

「ふむ、こんなもんでいいか？」

あらかた片付け終わり、掃除機もかけたし、これで文句もないだろう？

後ろを見ると、疲れたような顔をしたエリオとキャロがいた。

二人とも、独身男なんてこんなもんだぞ？

さて、それではエレノアが言っていた新しいゲームとやらを拝見するか。

ほれ、出しなさい。

「にゅふふ～！見て驚きなさい、愚民共！じゃーん！」

そう言ってエレノアは両手で箱を持ち上げていた。

ん？あの箱は・・・

「あ！本物のＷｉｉだ！」

エリオが先に喋った。

というか、食いつきいいなエリオ。

そう、エレノアが手に持っているのはミッド製のＷｉｉモドキではなく、メイドイン地球の本物のＷｉｉだったのだ。
なんでココに本物があるんだ？

「ネット通販て便利よね～」

こわっ！
こいつ恐ろしいことをサラッと言いやがった！
まさか他にも買い物してないだろうな！？
カードの請求書がきて、とんでもない金額書かれてたらどうしよう・・・

「まぁまぁ、とりあえずやりましょうよ！」

エリオがソワソワしている。
なんだ、やっぱり興味あるんじゃないか。

というわけで、テレビに接続し始めることになった。
ちゃっかりコントローラーが二つあるのは、いつか俺とやろうと思っていたのだろう。
エレノアめ、かわいいやつ。
ちょっとキュンときたじゃないか。

「で？ゲームはなにするんだ？」

俺がそう言うと、エレノアはソフトのパッケージを見せた。

「Ｗｉｉスポーツリゾート？」

なんでも、簡単なスポーツゲームが１０数種類入っているそうだ。

まぁ、これなら体を動かせて楽しいだろう。
俺はコントローラーの一つをヴィヴィオに渡してやる。

「ほら、ヴィヴィオ試しにやってごらん？」

コントローラーのストラップを手首に固定させ、画面の前に誘導してやる。
ヴィヴィオはコントローラーを不思議そうに眺め、ブンブン振り回している。
あ、手からすっぽ抜けた。
うむ、やはりストラップは必要だな。

「じゃあ、簡単な１００ピンボーリングからしよっか！」

エレノアよ・・・簡単か、それ？
聞いただけでなんか難しそうなんだが。
俺は説明書を読んだ。

・・・なるほど、ワンフレーム１０ピンのものが１００ピンになってるのか。
壮大だな。

「まず、ご主人様が対戦するの！」

エレノア、そんないい笑顔で俺にコントローラーを渡さないでくれ。
まぁ、相手はヴィヴィオだし、多少手を抜いて勝たせればいいか。

「よし！勝負だ、ヴィヴィオ！」

「うけてたちます！」

自信満々にコントローラーを構えるヴィヴィオに微笑みつつ、俺とヴィヴィオの戦いが始まった。

いま、Ｗｉｉは俺を除く四人できゃいきゃい言いながら遊んでいる。
俺はゲームに参加していない。
それは何故か？

超下手くそだったんだよ！悪かったな！

１００ピンボーリングではガーターを連発してヴィヴィオに惨敗、３ＯＮ３ではエリオに惨敗、卓球ではキャロに惨敗、チャンバラ対決ではエレノアに完敗。
終には、俺に「へたれゲーマー」の称号がついてしまった。
あげく、

「おおさま、よわいからつまんなーい」

とヴィヴィオにダメ出しされてしまい、俺はダメージのあまり、膝をついてしまった。

まぁ、しかし、ヴィヴィオが楽しそうに遊んでいる姿を見るのもいいかもしれない。彼女の素性を知り、これから待ち受ける過酷な運命を知る俺は、運命が変えられないことを知っている。
変えてはいけないのだ。

未来とは例えるなら樹の枝だ。
未来の分岐は樹の枝のように広がり、無数の可能性を拡げていく。
人の数だけ、想いの数だけ未来があるのだ。
しかし、俺の知る未来は違う。
未来とは「未だ来ぬ先」と書く。
つまり、わからないからこそ枝は生え、人は前に進むのだ。
そして、過去は「過ぎ去りし後」と書く。
過ぎ去った事象は変えられないということだ。
川の流れは上流から下流へ流れるが、逆はない。ありえない。
時間は未来への一方通行だ。
では俺の未来は？
アカシックレコードで知った未来はもう未来とは言えない。
知り得る「未来」は「過去」と同義である。
俺がその未来を改変するとどうなるか？
それは、未来の可能性を潰すことになる。
それは、樹の枝を折ることになる。
それは、川の流れをせき止めるにことになる。
最悪、その世界は崩壊し、消滅してしまう。
言い方が難しいが、俺が未来を知った時点で、俺の物語は未来までの一本道になってしまった。分岐は許されない。
迷路で、ゴールまでの道順がわかった状態なのだ。
だが、恐らく俺が未来を変えようとすると、「世界」からの強制力によりなんらかの修正が行われ、邪魔をするだろう。
俺がアカシックレコードを有するというだけで、「世界」にはイレギュラーである。
俺はこの「世界」乱すもの、「敵」なのだ。
いずれ、俺はこの「世界」から追いやられ、追放か消滅するだろう。
それが、俺の死ぬときだ。

そんな思考の海に沈んでいると、俺の隣にエリオが座った。

「どうした、もういいのか？」

俺はエリオを見た。

先程までノリノリでゲームをしていたエリオが何か暗い表情をしている。

「・・・あの子、ヴィヴィオのことなんですけど・・・」

そう言うエリオの目線の先には、エレノアとヴィヴィオがギャーギャー騒ぎながらゲームをしている。

エレノアはゲームに関しては手加減というものを一切しない。

子供相手にも容赦無しだ。

ヴィヴィオはそんなエレノアにぷくーっと頬を膨らませつつ、それでも負けじと頑張っている。

「おーほっほっほ！そんな腕前では、わたくしには勝てませんことよ！ヴィヴィオちゅわん！」

「むー！かつもん！もいっかい！もいっかい！」

「あ、あの、もう少し仲良くしましょうよ？」

勝ち誇るマダムのような口調でヴィヴィオをおちょくるエレノアと、挑発に乗り両手をブンブン振り回して意地になっているヴィヴィオ、そしてそれをオロオロしながらも治めようとするキャロ。

そんな姦しい光景を見ながら、エリオは重々しく口を開く。

「・・・人造魔導士素体だとしたら、知識や言語がはっきりしすぎてるんです。

人口受精児なら、ああはなりません。
たぶん、記憶があるんですよ、元になった人物の」

エリオは苦しそうに顔を歪めて、拳を握り締める。

「まだ、あの計画がどこかで続いているんだ・・・」

「・・・プロジェクトFか」

俺はエリオの顔を見ずに答えた。
エリオがこちらを見ているようだが、どんな顔をしているかはわからない。

「・・・知ってるんですか？」

エリオの声が若干震えている。
そういえば、俺はエリオの過去は聞いていないんだったな。
まぁ、個人情報として素性を把握している程度だが。

人造魔導士は世間への風当たりが強いので、エリオやフェイト隊長なんかの出生は秘密となっている。
事実を知る者も管理局内では一握りだけだ。
俺は、この「知識」とリンディさんからの「情報」で知ってはいるが、所詮その程度だ。
彼等がそのことで、どれほど苦しんだのか、悲しんだのか、そんな事まではわからない。

「プロジェクトF、まぁアルハザード時代では『オペレーションA・B』って名前だったんだがな。
スカリエッティが絡んでいるっていうから、多少の知識くらいは、

な」

エリオは所在なさ気に目をキョロキョロとさせ、顔を青くしている。なにか言葉にならないような呟きを漏らして、口が震えているのがわかった。

そんなエリオの頭をポンポンと軽く叩き、撫でてやる。

「いいか、エリオ。この世に同じ人間なんていないんだ、それがたとえクローンでもだ。

この世に生まれ堕ちたその時点で、それは同一じゃない、他人なんだ。

少し難しいことを言うと、人間の経験なんてものは、脳の記憶やプログラムだけで補えるものじゃないんだ。

些細なこと、それこそ、今朝のパンが食パンかクロワッサンかというだけでその人間の人格形成が成されることがある。

風呂で体を洗う順番がいつもは右腕からだけど、今日はたまたま左足から洗うとか、そんな違いだけで癖が変わる。

その程度で人間は変わる」

エリオの頭を撫でるのを止め、俺はエリオと正対した。

エリオの目はまだ戸惑いの色が浮かんでいてゆれている。

彼がどんな心境なのかは俺にはわからない。

おそらく、嫌われるとか、今までのように接してくれなくなる、とかを考えているのだろう。

実際問題、一般人の反応は前述のような反応だろう。

エリオの両肩に手を置き、力強く言った。

目の前の「小さな騎士」に言い聞かせるように、そして「自分」に言い聞かせるように。

「だからな、お前はお前なんだ。
たとえ、ＤＮＡが同じだろうが、元の人間がいようが、この世に、機動六課のライトニング分隊エリオ・モンデュアルはただ一人だ。
自信を持て、『お前』は『お前』でいい」

「・・・っ！・・・はいっ」

エリオは俯いて、肩を少し震わせている。
俺はエリオの肩を掴み引き寄せ、ガッシリと抱いてやり、頭を抱きかかえる。

「小さい事だぞ、そんな事は。気にすんな。もし、お前の周りにへんなことしてくる奴がいたら、俺がぶっ飛ばしてやるよ」

エリオは声を押し殺して泣いていた。
ただ、しゃくりながら何度も頷いていた。
俺は何も言わず、いや、それ以上のことが言えず、抱きかかえ、ただ頭をなでてやるしかできなかった。

エレノアとヴィヴィオがギャーギャー騒いでいるのをキャロがなだめる姿を、俺はどこか眩しいものを見るように目を細め、エリオは俺にしがみつき、泣き続けた。

# 第３４話（前書き）

シグナム　「言い訳があるなら聞こう」

ヴィータ　「そうだな、こんなに更新が遅くなったんだ。それなりの理由があるんだよな？」

作者　「・・・実は季節性のインフルエンザの・・・」

シ　「なに？インフルエンザだと？」

ヴ　「あ～そりゃ仕方が無いか。しんどいもんな」

作　「・・・いえ、季節性インフルエンザの予防接種をしたら熱がでまして・・・」

シ　「な！？予防接種で熱がでただと！？」

ヴ　「お前、体弱いな！！予防接種に体が負けたのか！？」

作　「そんなわけでスイマセンでした。遅くなりましたが、ゆっくり見ていってください」

シ　「情けない奴・・・」

ヴ　「ほんと、この不景気をそんな軟弱な体で乗り切っていけるか？あたしは心配だぞ」

# 第３４話

近藤達がヴィヴィオと遊んでいる同時刻
なのは、フェイト、はやて各隊長はベルカ自治領聖王教会本部にいた。

コンコン

「どうぞ」

ドアをノックする音に返事をする女性の声は聖王教会騎士カリム・グラシアである。
返事を聞くと、ドアが開きノックをした人物達が部屋に入る。

「失礼します。高町なのは一等空尉であります」

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です」

二人はいつもより凛々しい表情で敬礼をする。
はやてはそんな二人の横でニコニコしながら見ていた。

３人が部屋に入室するとカリムはゆっくり歩き近づき、微笑みながら労をねぎらう。

「いらっしゃい。はじめまして、聖王教会教会騎士団騎士カリム・グラシアと申します。どうぞ、こちらへ」

挨拶もそこそこにカリムは３人を席へ案内する。

白い丸テーブルにイスは5つ、そのうちのひとつの席にはすでに時空管理局本局次元航行部隊クロノ・ハラオウン提督が座って待っていた。

カリムはクロノの右隣に座り、はやてはそのカリムの隣に座った。
なのはとフェイトは未だ座らず、イスの横で起立していた。

「失礼します」

なのはは3人が座るのを確認すると一礼し、クロノの横の席、左隣へと座った。
フェイトはその隣で敬礼し、

「クロノ提督、少し、お久しぶりです」

挨拶されたクロノはフェイトの挨拶を生真面目に笑いもせず、目だけをフェイトに向け仕事での挨拶をした。

「ああ、フェイト執務官」

そんな真面目な兄妹二人のやりとりを横で見ていたカリムはクスリと笑う。

「うふふ、お二人とも、そう硬くならないで。私達は個人的にも友人だから、いつも通りで平気ですよ」

「と、騎士カリムが仰せだ。普段と同じで」

「平気や」

カリムの一言に、クロノは柔和な顔になり、口調も固さがなくなった。
はやては終始やわらかい。

「じゃあ、クロノ君久しぶり」

なのはも堅い表情を崩し、気さくに話しかける。

「お兄ちゃん、元気だった？」

フェイトも義理の兄であるクロノに普段の挨拶をした。
すると、クロノはうっと小さく呻き、恥ずかしそうに顔を少し赤くする。

「・・・それはよせ。お互い、もういい歳だぞ」

「兄弟関係に年齢は関係ないよ、クロノ？」

どうやらこういうやり取りはフェイトのほうが一枚上手のようである。
クロノは顔を赤くしながらうつむいてしまった。
そんな兄妹のやり取りを他の3人はクスクス笑いながら見ていた。
そして、弛緩しつつある空気をはやては咳払いを一つついて振り払い、本来の目的である内容に触れる。

「・・・さて、昨日の動きについてのまとめと、改めて、機動六課設立の裏表について、それから、今後についてや」

5人のいる部屋のカーテンが閉じ、外から視認できなくなった。
途端、部屋は暗くなり、圧迫されたような感覚に包まれる。
それに呼応して、空間もどこか外とは切り離されたような別空間を錯覚させる。
そんな空気の中、クロノが重々しく口を開いた。

「六課設立の表向きの理由は、ロストロギア『レリック』の対策と、独立性の高い少数部隊の実験例」

クロノはなのは達から視線を外し、誰もいない空間を見つめた。
そして、そこにモニタが展開し、クロノとカリム、続いてリンディの画像が映し出された。

「知っての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、それと僕とフェイトの母親で上官のリンディ・ハラオウンだ」

一度言葉を区切ると、3人の画像が消え、代わりに三提督の画像が映された。

「それに加えて非公式ではあるが、かの三提督も設立を認め、協力を約束してくれている」

なのはとフェイトは目を見開いた。二人ともコレには驚いたようだ。
自分達の協力者に、まさかあの「伝説の三提督」がいるとは。

「その理由は、私の能力と関係があります」

そう言い、カリムはイスから立ち上がり、皆の見つめているモニタの後ろに回った。
展開されていたモニタが消え、皆が見る位置へとゆっくり歩き出したカリムは、紐で括られた紙の束を持っていた。
ちょうどタロットカード程の大きさの紙の束である。
カリムはその紐をゆっくりと解くと、紙の束は光りだした。

「私の能力、プロフェーティン・シュリフテン（預言者の著書）」

そう言うと、紙の束はカリムの周りを囲むように一枚一枚浮き上がった。

「これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出した預言書の作成を行うことができます」

カリムの周りに浮いている紙は光り続け、カリムを中心にゆっくりと回っている。

「二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できませんから、ページの作成は年に一度しかできません」

そう言うと、カリムの前の二枚の紙がなのはとフェイトの前まで飛んでいき、彼女達の前で止まった。

「預言の中身も古代ベルカ語で、しかも解釈によって意味が変わることもある難解な文章。
世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度、つまりは、あまり便利な能力ではないんですが」

なのはとフェイトの前に浮いている紙にもなにやら文字が書いてあるが、二人にはさっぱりわからないようで、顔を見合わせて困った顔をし、首を横に振る。
紙はカリムの元へ戻り、輪の中をカリムを中心にくるくる回っている。

「聖王教会は勿論、次元航行部隊のトップもこの予言には目を通す。信用するかどうかは別にして、有識者による予想情報の一つとしてな」

「ちなみに、地上部隊はこの予言がお嫌いや。実質のトップが、この手のレアスキルとかお嫌いやからな」

クロノが本局と聖王教会の良好な関係を言うが、
はやてはため息を交えつつ、現状の地上と本局の確執を簡単に説明した。

「レジアス・ゲイズ中将、だね」

「そんな騎士カリムの予言能力に数年前から少しずつ、ある事件が書き出されている」

旧い結晶と無限の欲望が集い交わる地
死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る
使者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる

なのはとフェイトはその予言を聞いてハッとなった。

「それって・・・」

「まさか・・・」

「ロストロギアをきっかけに始まる、管理局地上本部の壊滅と、そして、管理局システムの崩壊」

カリムの言葉になのはとフェイトは言葉が出ない。
おもわず息をのんでしまう。
あまりにも非現実的で、あまりにも荒唐無稽で、とても信じられるものではない予言だからだ。
いや、信じたくない、というのが本音だろうか。

「情報源が不確定と言うこともありますが、管理局崩壊ということ自体が、現状ではありえない話ですから」

カリム自身、この予言の危険性と信憑性を鑑みて、現状の管理局システムの強固さや高い完成度が崩壊するとは考えにくいと言う。

「そもそも、地上本部がテロやクーデターにあったとして、それがきっかけで本局まで崩壊・・・いうんは考えづらいしな・・・」

はやても顎に指を添え、予言に対しての脅威を思案する。
現状、時空管理局に対抗、脅威となる組織は見あらない。
それほどに管理局は巨大であり、大きければ大きいほど、制御が難しい組織になってしまった。

「まあ、本局でも警戒強化はしてるんだがな・・・」

クロノが難しい顔をして腕を組む。
カリムも眉間に皺をよせる。

「問題は、地上本部なんです」

クロノは、ゲイズ中将は予言そのものを信用しておらず、特別な対策はとらないらしい、と言い、

「異なる組織同士が協力し合うのは難しい事です」

カリムも悔しそうに呟く。

「協力の申請も内政干渉や強制介入という言葉に言い換えられれば、即座に諍いの種になる」

「ただでさえ、ミッド地上本部の武力や発言力の強さは問題視されてるしな」

「だから、表立っての主力投入はできない、と？」

現在の地上本部、レジアス中将は力を持ちすぎた。そのため、簡単には手を取り合えない。
レジアス中将はすでに無視できない人物であり、管理局にとって重要な人物となり迂闊には手を出せない。

「・・・すまないな。政治的な話は現場には関係なしとしたいんだが・・・」

クロノは申し訳なさそうに言う。

「裏技気味でも、地上で自由に動ける部隊が必要やった。
レリック事件だけでコトが済めば良し、大きな事態に繋がっていく様やったら最前線で事態の推移を見守って・・・」

「地上本部が本腰を入れ始めるか、本局と教会の主力投入まで、前線で頑張ると？」

「それが、六課の意義や」

なのはの質問にはやては力強く答えた。

それが意義。

それが使命。

自分の、命尽きるまでの贖罪。

それこそが、はやての生きる意味。

するとここで、カリムが驚くべき事を言った。

「・・・実ははやてやクロノにも言っていないのだけれど、つい先日、また新たな予言が出たの」

「え!?ほんまか!?」

これにははやてとクロノも驚いていた。

「ええ、翻訳も本当につい先程終わったところなのよ」

王の翼羽ばたきし時地上より原初の力現れる

その力、全てを無にする破壊の力なり

彼のものは　魔王

短い文ではあるが、「王の翼」という文面からして、先程の予言の続きに当たるのだろう。

だが、ある単語が気になった。それは

「魔王?」

皆の視線が一斉になのはに向けられた。

「な、なんで私を見るのかな?」

なのはは頬をヒクつかせる。

「え?あ、いや・・・」

「まぁ、なぁ・・・」

クロノとはやてが渇いた笑いをしてごまかそうとする。

無理もない。「管理局の白い悪魔」という異名はあまりにも有名で、局員も犯罪者も震え上がる二つ名である。

目下、なのはの頭を悩ませるもののうちの一つではあるが、自業自得である。

容赦のない訓練、犯罪者をたたきのめし、抵抗出来ないのを見計らってから「お話」という名の事情聴取、その徹底ぶりについた二つ名が「管理局の白い悪魔」である。

「・・・みんなヒドイよ」

なのはは少しいじけてしまった。

皆やり過ぎたと思ったのか慌てて謝る。

「ご、ごめん、なのはちゃん。ちょっと遊びすぎたな!ジョークや、ジョーク!」

なははーと頭をかきながら謝るはやて。はっきりいって反省しているとは思えない態度だ。

「ごめん、なのは。えっと・・・なんていうか、身近に当て嵌まる

のが、なのはしかいなくて・・・」

フェイトも何気に酷いことをいう。

なのははそんなフェイトの答えにううっと呻き、一層落ち込んだ。

そんな中、カリムはオホンと咳ばらいを一つし、みんな注目するように促す。

「・・・実は、『王』というキーワードに疑問を持ちまして、私は古代ベルカ時代の書物や文献を調べました。そこでわかったことがあります」

四人はカリムの言葉に注目した。

「死せる王」と「魔王」二つの「王」という言葉が出てきた。

確かに、古代ベルカ時代には多くの「王」が存在したと聞く。

代表的な「聖王」から始まり、「覇王」や「冥王」「剣王」「獣王」など、数多くの「王」が存在した時代である。

歴史に埋もれ、表立っては語られない「王」も存在するなかで、もしかしたら「魔王」も存在したのかもしれない。

聖王教会にはベルカの歴史に関する資料や文献などが多数ある。禁書扱いのものも保管されている。

そんな期待を込めて皆カリムの次の言葉を待った。

「『死せる王』というのは抽象的な表現で判断しかねるので保留にしています。

ですが、歴代の『王』に『魔王』を冠する人物は存在しませんでした」

カリムのその言葉と共に、皆の視線がなのはにまた集まる。

「・・・だから、なんで私を見るの！？」

もうなのはは泣きそうだ。

さすがにマズイとおもったのか、クロノは無理矢理話題を変えた。

「あ、ああ、そういえば、近藤三尉はどうだ？皆に迷惑かけてるんじゃないのか？」

クロノのそんな話題転換に感謝しつつ、フェイトが答えた。

「え？ああ、近藤さん？よくやってくれてるよ？すごく物知りだし」

「デスクワークもめちゃ速いしな。こちらとしては大助かりや」

フェイトとはやての返答に、クロノは眉間に皺をよせた。

「あの愚図の近藤が？なにかの間違いじゃないのか？」

クロノの言葉にはどこか刺があった。

普段温厚なクロノからは想像できない言葉に、なのは達は少し驚いた。

「そういえば、クロノは近藤さんとは小さいときに面識があるんだよね？」

フェイトはクロノのそんな態度に気付きながらも、子供の時の近藤に興味があり聞いてみた。

「・・・不本意ながらな。

あいつは小さい頃から何をするにもトロトロして、要領が悪いとい

うか不器用というか、とにかく愚図な子供だったよ」

クロノは昔を思い出したのか、鼻で笑いながら言う。
そんな態度にはやては眉間にシワをよせ、不快感を露にする。

「クロノ君、少し言い過ぎやないか？
仮にも上司が同じリンディ統括官で同僚やで？
それに今の近藤さんは、ほんまにようやってくれてはる」

「ふん、皆あいつに騙されてるんだよ。あいつは小さいときから愚図でノロマだよ。
それは管理局に入隊してからも変わらない。
入隊したての時は「お荷物」で有名だったんだぞ？それに、なのはのあの事故もあいつが・・・」

「クロノ君！！」

クロノが事故のことに触れようとしたとき、なのはが大声を出してそれを遮った。
そして、なのはは悲しそうな瞳でクロノを見つめた。

「クロノ君・・・違うんだよ。あれは違うの、事実じゃないの」

「え？事実じゃない？じゃあまさか、あの時なのはが言っていた事が真実だと？
そんな馬鹿な！管理局が事実を捩曲げるなんてそんなこと・・・」

そう言い終わる前になのは、フェイト、はやての顔を見た。
３人の顔は真剣そのものだった。

「・・・本当なのか？」

「うん。リンディ母さんもそう言ってた。
あの事故は情報操作されたものだって。
捏造されて、隠蔽されたんだって」

クロノの疑問にフェイトはまっすぐ答えた。フェイトも悲しそうな顔をしている。クロノは信じられないようだ。
顔を青ざめさせ、拳を固く握る。自分の信じる正義が真実を捩曲げるなど、露にも思わなかった。

「クロノ君。クロノ君が近藤さんをあまり良く思ってないって言うのはわかったよ。
でも、あの人は私の命の恩人なの。
それに、今は機動六課の一員なんだよ？
私達の為にすごく頑張ってくれてるんだよ？
そんな恩人の、大切な仲間の悪口は言わないで、お願い」

なのはの悲しそうな瞳と、切実な訴えにクロノは頭に血が上っていたことを自覚し、反省した。

「なのは・・・わかった。すまない、少し感情的になってたようだ」

クロノは素直になのはに謝った。
冷静に考えれば、あの8年前の事件以降、母親のリンディは何かと近藤を気にかけ、イロイロ世話を焼いていた気がする。
左遷されていた近藤を自分の部下扱いにしたのも、なにか贖罪のつもりだったのだろう。
それもクロノが気に入らない、一つの要因ではあるのだが。

「そういえば、近藤三尉といえば昨日のあの発言なんですが、何か聞かれましたか？」

カリムがまた話題を変えようとしたが、そのことでなのはとフェイトはうっと息を飲んだ。

昨日の発言とは、スカリエッティとアルハザードの関連性についてである。

一番聞かれたくない質問だった。

近藤には口止めされているし、だからといってごまかそうにも考えが浮かばない。

どうしたものかと思案していたが、

「いや～、それがな、実はまだ聞いてへんのよ。

昨日の今日やし、あれだけの事件やったやろ？近藤さんも報告書の資料集めとかイロイロやってたし、私らもそんな聞く暇なかったしな！」

はやてがゴメンゴメンと言いながら、スラスラと嘘を口にした。

よくもまぁそんなにスラスラと言えるものだと、なのはとフェイトは感心した。

「まぁ、それは仕方がないわね。じゃあ、その件はまた今度ということで」

カリムも納得し、近藤の件はうやむやになった。

なのは達3人はホッと胸を撫で下ろした。

「ところで、アルファード大将のことなのだけれど」

また痛いところをついてくるカリム。

それだけ近藤とエレノアには秘密があるということなのだが、もう3人は気が気でない。
ポーカーフェースを保ってはいるが、内心ハラハラものである。

「・・・アルファード大将が、なにか？」

なるべく感情を出さないように平坦な口調で受け答えをするはやて。

「んー、あの方は機動六課でなにしてる？」

予想とは違う質問に少し戸惑うはやては、

「え？あー、さぁ？私は見てへんからわからんなー。フェイトちゃんは？」

フェイトに丸投げした。

「え！？あ、あのー・・・確かデスクワークしてる近藤さんの隣で、ゲームをしてた・・・かな？」

急に話しを振られたフェイトはごまかしをせず、見たままの事を口にした。
すると、クロノとカリムは揃ってため息をついた。

「まったく、あの人は・・・」

「・・・どれだけ好き勝手すれば気が済むのかしら？」

二人して頭を抱えている光景はかなり異質だ。

「ねぇ、クロノ？エレノアさん・・・アルファード大将って、いつもああなの？」

フェイトは頭を抱えるクロノに聞いてみた。
すると、思いっきりため息を吐いて、首を縦に振った。
よく見ると、クロノの黒髪にちらほら白髪が見えた。
相当ストレスになっているのだろう。

そこで、はやては素朴な疑問をクロノとカリムにぶつけてみた。

「昨日の夜、アルファード大将に聞いたよ。自分は仕事をせんから給料なんてないって。
でも、なんでそんな人が存在隠してまで大将なんかしてんの？」

はやての疑問ももっともである。
はやて達は、本来大将には近藤がなる予定だったことは知っている。
だからといって、代わりにデバイス（デバイス）に大将をさせ、仕事をしない人間をそのまま大将の階級を与え、放置していいのか？
管理局には有能な人材はいくらでもいる。
そんな人に大将をしてもらえば、事は円滑に進むのではないか？
だがクロノからの答えはまた意外なものだった。

「・・・三提督がな、彼女のままでいくと言って聞かないんだ。いずれアルファード大将の力が必要になるから、とか言ってな」

・・・なるほど、とはやて達は納得した。
三提督はエレノアの力も近藤の知識も知っているから、手放そうとはしないのだろう。
それに、いずれは無理矢理にでも近藤を大将にする算段もあるはずである。

しかし、はやては知らないふりをしてごまかした。

「ふーん、昨日見た限りではそんな凄そうに見えへんかったけどな？
あ！でも胸はすごかった！あれは揉みごたえあるで！」

ぐへへ～といやらしい笑みを浮かべるはやては、なにを想像したのか手をワキワキと動かしている。
なのはとフェイトははやてに揉まれた事を思い出したのか、自分の胸を腕で隠した。
それを見たクロノとカリムは慌てた。

「おい、頼むからアルファード大将の胸を揉むとかの暴挙には出ないでくれよ！？
仮にもあの人は大将なんだからな！」

「はやて、軽率な行動はやめてね？
あのセクハラを大将にしたら、流石に私でも弁解できないわ！」

はやてはあまりの信用の無さにふて腐れてしまった。

「なんやねん。いくら私が揉み魔でも、良識の範囲内でやるっちゅうねん」

ブツブツていいながら、口を3の字にしてそっぽを向いてしまった。
そして何か思い付いたのか、いやらしい笑みを浮かべた。

「あ～、そーいえばー、クロノ君もアルファード大将の胸とか尻とか”なめ回すように”見てるんやったよな～？」

途端、クロノの顔色が赤くなったり青くなったりした。

「い、いや、そ、それはだな！」

なのはとフェイトの視線が痛い。

クロノに突き刺さる。

フェイトが汚物を見るような視線でクロノに辛辣な言葉を言う。

「ふーん、お兄ちゃんアルファード大将の胸とかお尻をなめ回すように見てるんだー？・・・エイミィに言い付けてやる」

「そ、それだけは勘弁してくれ！！」

クロノは慌てふためいた。家での上下関係がわかりやすい。

エイミィは姐さん女房で、恐妻家であるようだ。

「・・・私だってあれくらい若ければ・・・お肌にハリが・・・」

カリムがなにやらブツブツ呟いているが、聞いてはいけない気がしたので皆スルーした。

雑談もそこそこに、話しはまとめに入って、機動六課の待遇についての事に触れた。

「勿論、皆さんに任務外のご迷惑はおかけしません」

カリムのそんな言葉にフェイトとなのはは相槌を打ち答える。

「ああ、それは大丈夫です」

「部隊員達の配慮は八神二佐からも確約はいただいていますし」

なのはがちらりとはやてを見ると、はやては頷いた。

そして、カリムは改めてなのは、はやて、フェイトの顔を見ると頭を下げた。

「改めて、聖王教会教会騎士団騎士カリム・グラシアがお願い致します。華々しくもなく、危険も伴う任務ですが、協力をしていただけますか？」

平和を願うため、安寧を願うため、その力を正しく使うために。

なのはとフェイトは力強く頷いた。

「非才の身ですが、全力にて」

「承ります」

隊長達３人が聖王教会から帰って来ると、副隊長が呼び出され、聖王教会での事を話した。

カリムの預言のこと

管理局崩壊の危険性

管理局の現状、本局と地上本部の確執

「王」という単語

シグナムとヴィータは神妙な顔つきで腕を組んだ。

「ふむ、魔王か・・・」

「あたしらも聞いたことねーな、そんな王様」

そう言いながら、チラッとなのはを見る二人。

「・・・なんでこっちを見るのかな？」

「・・・いや、なんでも・・・」

「ありません・・・」

笑顔のなのはからものすごいプレッシャーを感じ、迫力に気圧され、思わず敬語を使う二人だった。

やはり二人も知らないらしい。

はやては、古代ベルカ時代をリアルに体感している二人ならばもしかしたら、と思ったのだが徒労に終わりそうだ。

そう思ったとき、いままで黙っていた近藤が口を開いた。

「はやて隊長、シャマル先生とザフィーラさんをここへ呼んでも構いませんか？」

「ん？ああ、別にええよ」

はやてが近藤の提案を了承すると、二人を呼び出した。

「すいません。わざわざご足労いただきまして」

近藤はシャマルとザフィーラに頭を下げた。

「いえいえ、構いませんよ。それで、話しというのは？」

シャマルはニコニコしながら手を前で振った。
ザフィーラは獣の姿で静かに佇んでいる。
近藤はそれを確認すると静かに語り出す。

「ヴォルケンリッターである４人に質問です。

『王を冠する者よ　忘れることなかれ　魔王の名　語ることまかりならん』

この一文に覚えは？」

突然の質問ではあったが、それぞれが近藤の語った文を考える。

「いや、聞いたことがないな・・・」

「あたしもねーな」

「んー、私も知りません」

シグナム、ヴィータ、シャマルとそれぞれが返答するが、皆知らないようだ。
ただザフィーラは違った。

「・・・聞いたことがある」

ザフィーラが知っている事に皆驚いた。
そんな空気を無視してザフィーラと近藤は話を進める。

「・・・たしか『聖王記』の一文だったか？」

「そうです、ザフィーラさん。初代聖王から続く歴史を綴った文献、その一文です」

「・・・なるほど、な。そういうことか」

「はい」

ザフィーラと近藤二人だけで話を進めてしまい、他の者は置いてきぼりをくらってしまっている。

「あの～、二人だけで納得せんといてくれる？私らにもわかるよう説明してーな」

はやてが挙手して二人の会話に割り込む。

「ああ、すいません。つまりですね、『聖王記』という文献によれば、古代ベルカ時代では『魔王』をかたることを禁止していたようなんです」

「『魔』とは魔法という意味もありますが、「悪魔」「魔物」などの悪いイメージの方が強い。
『忌み名』でもあるので、可能性としては過去の聖王が禁止したと考えるのが正しいでしょう」

近藤が知っていることにも驚いたが、ザフィーラがこんなに博識だったことに皆がそれ以上に驚いた。

「ザフィーラ・・・いつも食っちゃ寝してる駄犬かと思ってたけど、おまえ、すげーな」

「ただの犬ではなかったか」

「・・・私は狼だ」

ヴィータとシグナムの失礼な感想に、さすがのザフィーラも少し気を悪くしたようだ。
近藤はそんなヴォルケンリッターのじゃれあいを止め、話を進めた。

「話を戻します。つまり、古くから『魔王』という名は忌み嫌われ、畏怖の象徴です。
それが予言に現れるということで、あくまで俺の推論ですが、二つ考えられます」

皆、近藤の説明を静かに聞く。

「まず一つ、魔王と呼ばれる人物が現在にいる」

この言葉になのははピクッと肩を震わせた。

皆そんななのはを見て見ぬふりをした。

「二つ目、過去に魔王が実在し、復活する」

「ちょっとまって下さい。先程、過去に聖王が魔王を名乗るのを禁止したといってませんでしたか？」

シャマルが即座に挙手して矛盾を指摘する。

「なるほどな、そんな可能性もあるか。
シャマルよ、我々が生きてきた時代とは、戦争の時代だった。
だが、もしその戦争の前、遥か昔に魔王が実在していたら、ということだ」

ザフィーラの言葉に、シグナムが神妙な面持ちで言葉を選びながら続く。

「ふむ・・・つまり、魔王とは、その聖王記にも記す事も憚れる程の者だった、そういうことか？」

「なるほどな。預言の序盤にある『死せる王』と『彼の翼が蘇る』っていう文との関連性にも繋がるな」

うんうんと頷くヴィータ。納得したようだ。

「私も！その二つ目の方だと思います！絶対そうです！！」

勢いよく挙手するなのはがなにかを振り払うように必死にまくし立てる。

一つ目の可能性はない！
あっても私じゃない！
私は魔王じゃないもん！！

そんななのはの心の叫びが、何故かその場にいる全員に聞こえた気がした。

「あくまでこの予言がそのまま当たれば、ということでの俺の推論ですが、全てを鵜呑みにはできません、あくまで推論で預言なんですから。
まぁ、警戒するに越したことはないですがね」

だが近藤は思っていた。

（「死せる王」と「彼の翼が蘇る」はヴィヴィオのことだろう。おそらく、「聖王のゆりかご」の発動だ。
だが「魔王」とはなんだ?そんな王聞いた事もないぞ?
アルハザードの記憶にもそんなもの残っていないし・・・なのは隊長という線も無きにしも非ずだが、おそらく違うだろう。
どこか違う次元の力を使う者が乱入してくるのか?）

カリムの預言がどのように実現するのか
それを管理局は阻止できるのか
王というキーワードはどう影響するのか

この場にいる者達には黒い雲が垂れ下がるように、未来の見通しは薄暗く不透明だった。

# 第３５話

なのは達が聖王教会へと赴いた次の日、隊員達はそれぞれの仕事をするために忙しくしていた。

ティアナははやてと共に本局へ、
エリオとキャロはフェイトと共に先日の事件現場の検証へ、
シグナムとヴィータはオフシフト、つまり休みである。
今、機動六課に残っている前線メンバーはなのはとスバル、そして近藤だけであった。

３人は各々デスクワークをこなしている。
スバルと近藤は隣同士で座りあれこれと助け合っている。

「こ、近藤副隊長～ここなんですけど・・・」

「あー、はいはい」

主に近藤がスバルを助けてばかりだが。

「ううー・・・すいません～」

「いいさ。さぁ、ちゃちゃっと終わらせよう」

ちなみに、スバルは自分の割り当てられた分のみで、近藤はフェイト、エリオ、キャロ、はやて、ティアナと、ここにいない前線メンバーの仕事を一手に引き受けている。

近藤のコンソールを叩くスピードが尋常ではない。

特に右腕、義手の方がありえないスピードだ。残像が見える程指が動いている。
目も、痙攣をおこしていると錯覚するくらいピクピクと動かしモニタを見ている。
モニタにはウィンドウが大量に現れたり消えたりを繰り返す。
スバルはそんな近藤の仕事姿を初めて見たのか、口をぽかーんと開けて見ている。

「スバル、手が止まってるぞ」

近藤がスバルの方を見ずに言う。
相変わらず凄まじいスピードで字を追い、コンソールを叩く。

「は、はい！すいません！」

慌ててスバルも自分の作業に戻る。

二人がそんなやりとりをしているとき、なのはも自分の作業をするためにモニタを見ているが、どこか上の空だった。
モニタにはヴィヴィオが写っていた。

「なのはさん？・・・あの、なのはさん？」

なのはは呼び声に気が付き、ハッとした。

「っと！？ごめん！な、なに？」

「いえ、あの、データのセット終わってますよって・・・」

画面にはＳｅｔｔｉｎｇ　Ｃｏｍｐｌｅｔｅの表示が出ていた。

「あーほんとだ。ダメだね、ボーっとしちゃって」

そう言いながらウィンドウを閉じ、業務を終了する。

「いえ」

スバルは、なのはもこんな風に気を抜く事があるのかと、少し親近感を覚えた。

そして丁度昼休憩のベルが鳴った。

「あ、丁度いいね。寮に戻ってヴィヴィオと食べるんだけど、スバルもどう？」

「はい！ご一緒します！」

「近藤さんもどうですか？」

なのはが近藤にも声をかけた。

「ああ、すいません。じつは買い物がてら外に食いにいこうかと、エレノアにも約束したんで」

近藤は申し訳なさそうにする。

そんな姿になのははクスリと笑い、

「わかりました。でも、ほんと近藤さんとエレノアさんて仲いいですね？マスターとデバイスの関係っていうんじゃなくて、もっと、なんか・・・家族みたいで」

「あ、私もそう思いました！副隊長とエレノアさんって、親子みたいです」

そういう二人に近藤は苦笑いした。

「はぁ・・・まぁ、エレノアは目覚めた日数だけでの年齢なら、３歳ですから、手のかかる子供ですよ」

３歳ということになのはとスバルは驚いたが、デバイスである以上身体的特徴は設定時から変わらないものであり、つまり、エレノアは生まれた時からあの姿だったという事である。

「じゃあ、気をつけて行ってきて下さいね」

「おみやげ待ってまーす！」

「はいはい。じゃあ、行って来ます」

そう言い、それぞれ昼食を採りに行った。

それぞれの作業が終わり、なのはとスバルは仮想シミュレータに来て自主練習をしていた。

そばにはヴィヴィオとお目付け役のザフィーラがいる。

「おっ、やってるな」

なのはとスバルは突然の声に顔を上げた。

「あれ？近藤さん？」

「あーおおさまー、こんにちは！」

「どうしたんですか？まだ書類整理が残ってるって・・・それにその格好」

声がした方には近藤がいた。

だが、服装がいつもとは違っていた。

いつもは地上本部の茶色い制服で練習に参加しているのだが、今の服装は上は黒いTシャツ、下はネイビーブルーのカーゴパンツをはいていた。

上半身は、普段制服で長袖しか着ていないので見えなかったが、Tシャツの下から盛り上がる筋肉、袖から出る丸太のように太く無駄な脂肪がない腕、顔と同じく浅黒く日焼けした肌など、改めて「近藤さんはなんかスゴイ！」と思う二人だった。

「ん？あぁ、アレか？とりあえず俺が手伝える分は終わった。後は本人でやる分だけだな」

なのはは近藤の筋肉に見とれていたが、その言葉を聞いて目を丸くした。

５人分の書類仕事を自分達とほぼ同じ時間で終わらせたのだ。

驚かないわけがない。

（デスクワークが早いのは知ってたけど、ここまで早いんだ・・・道理でフェイトちゃんやシグナムさんが書類仕事を近藤さんにまかせるわけだ）

そんな事を思いつつ、今度自分の仕事も手伝ってもらおうと考えるなのはだった。

「おおさま、キンニクすごーい！」

ヴィヴィオはそう言いながら近藤の腕につかまる。近藤は何をして欲しいのか察知して右腕に捕まったヴィヴィオをそのまま持ち上げた。ヴィヴィオは腕にぶら下がり、足をバタバタして楽しんでいる。

「きゃー！すごーい！」

「あ、いいなーそれー」

ヴィヴィオの楽しそうな姿に、スバルがうらやましそうな顔をした。

「まぁ、そんな訳で訓練を手伝おうかと思いまして」

「え！？副隊長が教えてくれるんですか！？」

うらやましそうな顔から一転、スバルは目をキラキラさせて言う。近藤はいままで訓練に参加しても少しアドバイスするだけで、誰かを直接指導したことはない。

つまり、近藤のはじめての指導である。

スバルは期待に満ちた目で近藤を見つめる。

「ああ、ちょうどいいからな。シューティングアーツの稽古でもつ

けてやろうかと思ってな」

「近藤さん、シューティングアーツできるんですか！？」

なのはは驚いたあとにすぐ納得した。
この鍛え上げた筋肉なら相当できるのではないか？と。

「いや、俺のは『ストライクアーツ』です。だけどそこそこ出来ると思いますよ？先生が優秀でしたから」

「シューティングアーツ」はローラーブーツ型デバイスを使用することが前提であり、前衛型のベルカ式魔法を使うことが基本となっている。つまり、格闘技と魔法を併用する技術である。
そして、「ストライクアーツ」はミッドチルダで最も競技人口の多い格闘技である。広義では「打撃による徒手格闘技術」の総称であり、魔法技術を必要としない単純な力と技術のみの原始的な競技、スポーツである。

「先生？」

なのはとスバルは首を傾げた。

「じゃあ呼びましょうか。先生！先生ー！！」

近藤が叫ぶと、近藤の後ろからジャリッジャリッという足音がした。
歩いて来る人物はエレノアだった。

だが、服装がおかしかった。
長い銀髪を頭の後ろで束ね、ポニーテールにしている。これはいい。
だが首から下がおかしい。

江戸時代の浪人のような服装をし、足元はわらじを履いている。
よく見ると何故か長楊枝もくわえていた。
そんな出で立ちでゆっくりと歩いてくるエレノアに、なのはとスバルは目を点にして放心していた。
ヴィヴィオは良くわかっていないようで、ザフィーラにしきりに「なにあれー」と聞いていた。勿論、ザフィーラも放心していたので答えられない。

「先生！わざわさありがとうございます！」

近藤が揉み手をしてヘコヘコと頭を下げる。

「うむ。して、私の相手はどちらかな？」

エレノアが威厳をだそうと眉間に皺を寄せ、声色を低く喋っている。
キャラ作りに余念がない。

「はい、私がスバルを相手しますんで、先生はなのは隊長を」

エレノアは右手で顎を撫でながらなのはを見る。

「・・・ふむ、よかろう。して、報酬の方は大丈夫なんだろうな？」

エレノアは顎を撫でていない左手の親指と人差し指で円をつくって近藤の前にちらつかせる。

「はい、おまかせください。ミッドチルダの超人気アイスクリーム店『Ｖｏｌｅｎｔｉｅｒｉ（よろこんで）』のアイス、バケットで４種類用意しております」

それを聞くとエレノアは満足そうに大きく頷いた。少しヨダレだ垂れてたのは見なかったことにしよう。

「よろしい！それではなのはとかいう小娘よ！どこからでもかかってらっしゃい！！」

そういうとエレノアは両手をあげ、がおーと脅すように威嚇のポーズをとった。
なのはとスバルは口をぽかーんと開けたまま、なんの反応もない。

「ねーなにあれー」

ヴィヴィオがしつこくザフィーラを掴んで聞くが、ザフィーラもポカーンと口を開けたままである。

「さぁさぁさぁ！我がアルハザード流剣術で刀の錆にしてくれるわ！！」

もちろん刀なんか持っていない。
まだ二人と一匹はピクリとも動かない。

しばらく場の空気が止まり、近藤がエレノアの後頭部を叩いた。

ばちこーん！

まるで脳みそが入っていないような良い音がした。

「～～～！いったーい！何するのご主人様！？」

エレノアが涙目で近藤を睨む。

だが近藤はそんなことおかまいなしにもう一度頭を叩いた。

ばちこーん！！

さっきよりいい響きだ。

「やかましい！絶対ウケるっつーからしぶしぶやったのに！ドン滑りじゃないか！！なんだこの空気！見ろ！あの二人を！痛い！今俺は猛烈にイタい！！」

「あれー！？イケると思ったんだけどなー？」

なのはとスバルとザフィーラはそんな二人のぐだくだの漫才を、ただぽかーんと見ていた。

ただ一人、

「おおさま、どんまい！」

辛口採点者がいた。

「さぁ、気を取り直して、始めようかスバル」

「はい！よろしくお願いします！」

「どっちもがんばれー！」

ヴィヴィオの声援と共にスバルは一礼すると、両拳を目の高さまで

あげ、前傾姿勢になり、ファイティングポーズをとった。
ちなみに現在、スバルはリボルバーナックルとマッハキャリバーを装備していない。
今回はあくまで打撃格闘技の組み手であって、戦闘訓練ではない。
よって、己の肉体のみが武器となる。

かわって近藤は体を斜めに構え、重心を少し後ろにかけ、右手は腰の後ろにわまし、左手指を揃えて上にし、スバルの方へ向けている。

「・・・変わった構えですね？」

「まぁな。ほれ、早くかかってこい」

「おう！はああぁぁ！！」

スバルは地を蹴り上げダッシュし、近藤に近づく。
スバルの驚異的な突進力で、あっというまにスバルの射程距離に入った。
そして大きく右手を振りかぶり突き出した。

「うおりゃあああぁぁぁっ！」

「動作が大雑把だ」

そう言うと、近藤は放たれた右拳を手の平で横にぽんと押し、受け流した。
スバルは勢いがついた自分の攻撃で体が流され、そのまま態勢を崩した。

「うわっとっと！？」

二、三歩たたらを踏んだが、すぐに態勢を立て直し、近藤に向く。

「どうした？もっと攻めてこい」

近藤は挑発するように指をクイクイと動かした。

「くっ！うおりゃあああぁぁっ！！」

スバルは無数の攻撃を繰り出した。休憩なしの連撃、スバルは5分程攻撃しっ放しである。

ジャブ、ストレート、フック、アッパー、ロー、ミドル、ハイキック。だが、全て近藤の左手一本に受け止められ、流される。

攻撃が当たらず、余計に体力を削っていく。スバルは息を切らし、大量の汗をかいている。

そして合間に隙を縫うように近藤がスバルの急所を攻撃する。

「攻撃が軽い」

そう言いスバルの右肩に掌ていを一発。

「くっ！？はい！！」

「直線すぎる」

ボディに一発。

拳が突き刺さる。胃液が逆流したのか、苦悶の表情になる。

「ぐふぅっ！！は、はい！」

「腰が入っていない」

レバーに一発。

スバルの体が横にくの字に曲がり、立ち位置がずれる。

「がはぁっ!?くうっ・・・はい!」

「攻撃の合間のスキが大きい。もっとコンパクトに、攻撃も細かく早く」

肩、水月、レバーと三連撃

スバルは近藤の攻撃を避けることができず、全て受けてしまう。

「ぐううっ!!」

スバルは堪らず膝をついてしまった。その際に腹と肝臓への攻撃に吐きそうなのか口をパクパク開けて涎を垂らす。

もちろん近藤は攻撃の手をぬいている。本気でやったら骨くらいは簡単に折ってしまうからだ。それでもスバルにはつらいようだ。

息も乱れ、大量の汗をかき、地面を汗で濡らす。

反対に近藤は息一つ乱れることなく座り込んだスバルを見下ろしていた。

「スバル、お前考えて攻撃してるか?」

「はぁっ、はぁっ・・・え・・・?はぁっ・・・か、考えて・・・?」

息も絶え絶えに聞き返すスバルを見た近藤は、ため息をついた。

「本能のまま攻撃繰り出してただろう？」

「はぁ・・・はぁ・・・わ、わかりません・・・」

「わからないってのが考えてない証拠だ。とりあえず休憩だ、ゆっくり休め」

「は、はい・・・はぁ・・・ふぅ・・・」

そんなやり取りを少しはなれたところでなのはとエレノアは並んで見ていた。
なのはは近藤がスバルを手玉に取る様を真剣な表情で見ていた。

「・・・すごい・・・いつもは何にも感じなかったのに、あんなに動きに隙が無い熟練度・・・達人の域だよ」

「んー、まぁご主人様の実力は割りと高いけど、スバルちゃんが未熟なんだと思うよ？ていうか、そんなことわかるなのはちゃんの方がすごいよ」

「えっと、ウチの実家が武道をやってたから、少しくらいは」

なのはの言葉に、へーなるほどーとエレノアは感心するように言った。
そんな横では、

「おおさま・・・いじめてる・・・」

ヴィヴィオが泣きそうになってた。子供には少々刺激が強すぎたようだ。なのはは慌ててフォローした。

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ。あれはスバルが強くなるための練習なの。だからイジメじゃないの」

ヴィヴィオはなのはの言葉に納得したのか、素直に頷いた。

近藤は、スバルが息を整えたのえを確認すると反省点、課題等を言った。

「スバルは誰にシューティングアーツを教えてもらった？」

「はい！姉です！」

「姉？ああ、ギンガさんか。そりゃダメだ」

「な！？なんでですか！！」

スバルはギンガに教わったシューティングアーツをバカにされ怒った。

それは、姉であるギンガを侮辱したことにもなる。

「ギンガさんとスバルではスタイルが違うからだ」

「ス、スタイル？」

「ギンガさんは前回の地下水道での戦闘記録を見てみると、堅実に細かく、コンパクトに考えてコンビネーションを繰り出していた。だがスバルの場合、一旦攻撃に入ると本能のままコンビネーション関係無しに攻撃している。二人のスタイルが間逆だから、同じことをしてもうまくいかない。それじゃあダメだ」

「え？え？」

どうやらギンガをバカにしているようではないというのはわかったが、ギンガと自分が違うという事を言われている事がわからなかった。

確かに姉のギンガはしっかり者で、自分はどちらかと言うとずぼらである。管理局に入ってからは大分マシにはなったと思っている。

「任務や作戦遂行の際は、その通りに動くだろう、ティアナの指示通り動くだろう。でもそれは作戦という箱で見た場合だ。問題は箱の中身だ。どのように作戦内容を遂行したのか、それがスバルの場合本能で行動している。

いいか、考えろ。考えて拳を繰り出せ、技を組み立てろ。相手を見ろ、必ず相手の隙、癖が存在する、そこを的確に、容赦なく一撃で射抜くつもりで、それを連撃で繰り出せ」

「は、はい・・・」

近藤がまくし立てるようにスバルに言う。はっきりいって暑苦しい。スバルも近藤がこんなに熱血漢だったとは思っていなかったようで、体を少し後ろにずらして近藤と距離をとる。

ようするに引いている。

「・・・あ！そうだ！副隊長の先生はエレノアさんなんですよね？」

「ん？ああ」

「じゃあ、エレノアさんは副隊長より強いんですよね！？」

スバルが目をキラキラさせて言う。
見間違いか、スバルの周囲にもなにかキラキラするものが見えた。

「確かに、エレノアはすごいぞ。だけど、エレノアとの稽古はやめておいた方がいい」

「え？なんでですか？」

スバルは不思議そうに首を傾げる。
スバルは見ていなかったが、その時エレノアは悪魔のようにニターっと笑っていた。

「はっきり言うぞ、自身無くす。最悪うつになる。自分の今までの積み重ねが全否定される」

「・・・どこの鬼軍曹指導ですか？」

スバルは軽口を叩いたが、近藤の真剣な表情と、なにか思い出したのか暗い瞳の輝きを見て「あ、これマジだ」と確信しそれ以上何も言わなくなった。

「さ、休憩終了だ、続きをやるぞ。今度はちゃんと考えて、ひとつひとつの攻撃に「気」を入れてやるんだ」

「はい！お願いします！！」

そしてまた二人の組み手が始まった。

「スバルおねーさんがんばれー！」

ヴィヴィオが近藤の応援をやめ、スバル一人に絞った。やはり組み手練習とはいえ、いいようには見えないらしい。

「ん～、熱血だね～」

「・・・私も結構厳しい指導するって言われるけど、近藤さん私よりきついね・・・」

二人の組み手をエレノアはニヤニヤしながら、なのははタラリと冷や汗をかきながら見ていた。

そして、突然エレノアがとんでもない事を言った。

「さぁ、じゃあなのはちゃん！私と模擬戦しよっか！」

## 第３６話（前書き）

本当は模擬戦をもっと詳しく書きたかったんですが、いかんせんボキャブラリーの低さゆえか、断念しました。
そんなダメダメな話ですが、ゆっくりしていってください。

コメントもお待ちしております！

# 第３６話

「模擬戦ですか？」

なのはは聞き返した。

そして瞬時にエレノアとのシミュレーションを開始した。

フェイトよりも早いスピード

よくわからないが、ランクＳの砲撃をしのぐ大きい手の形をした防御

前回の改良型ガジェットＩＩとの交戦による、接近戦

そして自分の現状を把握する。

リミットをかけられた身体

中長距離を得意とするスタイル

すべてがなのはに分が悪い。

エレノアのスピードは今の自分には捕らえられないだろう。

そんな考えをしているのをわかったのか、近藤がエレノアに注意した。

「エレノア、なのは隊長は魔力にリミッターがかけられているからな、お前もリミットをかけるぞ。」

ちなみに、近藤は未だスバルと組み手をしていた。
近藤は涼しい顔で攻撃を受け流しているが、攻撃を繰り出しているスバルは無酸素運動を繰り返しているために顔色が紫色になっていた。

「うん、そうだな～・・・たぶんなのはちゃんの実力なら第六門でいいと思うけど」

「ふむ、そうだな、じゃあリミットするぞ。『源書　第十三門から第七門　封門』」

「ｙｅｓ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」

エレノアはそう言うと静かに目を閉じ、俯いた。

「封門完了しました」

エレノアは両手を開いたり閉じたりを繰り返しながら近藤に報告する。

「よし。スバル！終了だ！！」

近藤がそう言った途端、スバルは座り込み、ぜーぜーと息を切らしていた。

「ぜー、ぜー・・・あ・・・あり・・・・・はー・・・・はー」

ありがとうございましたと言う気力もない。
そんなスバルに「お疲れさん」と言いながらスポーツドリンクを渡

し、近藤はエレノアとなのはの所に近づく。

「じゃあ模擬戦のルールを確認しましょうか。二人とも、一撃当てるか、バリアジャケットに傷がつくか、バインドによる捕縛による勝敗としましょう」

二人は無言で頷く。

「それと・・・ただ模擬戦するだけじゃあつまらないですね？賭けましょうか」

「賭け？」

なのはは少し眉間に皺を寄せた。

「なのは隊長が勝てば、俺が買ってきたアイスをスバルとヴィヴィオにもあげましょう。ザフィーラさん、要ります？」

「私はいい」

ザフィーラは短くしゃべった。

近藤の賭けの内容に一番早く食いついたのはスバルだった。

「え！？あ、あの『Ｖｏｌｅｎｔｉｅｒｉ』のアイスですよね！？い、いいいいいんですか！？」

さっきまで立てないほど疲労していたのに、いつの間にか近藤の真横にまで移動していた。

この『Ｖｏｌｅｎｔｉｅｒｉ（よろこんで）』という店、アイス専門の店にも関わらず、開店前から列ができる超人気店。

厳選された材料で独自の配合と調合による素材を生かした味、それなのに料金はそこらの店とほとんど変わらないというリーズナブルな料金設定がまた人気を呼ぶ。
特にチョコレートが人気である。
スバルも何度か並んだ事があったが、その時には全てのアイスが無くなって食べられないという不運に見舞われる始末。
アイス好きのスバルにとってまさに「夢」のような話である。

「そのアイスおいしいの？」

ヴィヴィオがスバルに尋ねる。
スバルはヴィヴィオが子供と言う事も忘れて興奮した様子でアイスについての力説をする。

「私は食べた事ないけど、すっっっっごくおいしいって！！本に書いてた！！チョコが一番人気だけど、隠れメニューに生キャラメルもあるって！！・・・はっ！副隊長！４種類って何があるんですか！？」

あまりの剣幕にヴィヴィオは引いていたが、スバルはそのテンションのまま近藤にアイスのラインナップを聞いた。

「えーと、なんだったかな・・・あ、バニラとチョコとバナナと生キャラメルだな」

近藤は端末をみて買ってきたアイスの種類を確認しながら言った。
すると、チョコと生キャラメルと聞いた途端スバルは近藤に抱きついてきた。

「ありがとうございます！！ありがとうございます！！副隊長！！

居てくれてありがとうございます!!もう一生ついていきます!!うわ〜ん!!」

スバルが泣いていた。号泣していた。

なのはもスバルがアイス好きなのは知っていたが、こんなに狂喜するほど好きだったとは。

おもわず苦笑してしまうなのはだった。

まあ、喜ぶのも頷ける。なのはは『Ｖｏｌｅｎｔｉｅｒｉ』のアイスを2度ほど食べた事があるが、確かに他のアイスとは一線を画す味だった。

だが、人気店なだけにそうそう口に入るものではなく、なのはも内心喜んでいた。

「近藤さん、よく『Ｖｏｌｅｎｔｉｅｒｉ』のアイス買えましたね？しかも4種類をバケットででしょ？・・・あれ、あそこの店バケット販売してたっけ？」

なのはは近藤に聞きながらも疑問を感じた。

そもそも並んでも食べれない日もあるほどの人気アイス店のアイスを、近藤はどうやって手に入れたのか。

たしかあの店はバケットによるボックス販売はしていないはずだし、ネット販売もしていないはず。

「ああ、あそこの店の店長と知り合いでして、少し無理行って前もって予約してたんです。いやー親切な店長さんですよ」

「へ〜・・・ん?あの店の店長さんって女の人ですよね?」

「ええ、そうですけど、なにか?」

近藤がそれがどうした？という顔をした。
そこにエレノアがなのはの横にススッと寄ってきて耳打ちした。

「実は、以前そこの店長さんがプライベートで困ってるのを助けた事があるの。で、なんの因果か、その店長さんご主人様みたいなコワモテ顔が好きな人だったの！」

エレノアの耳打ちになのはは目を見開く。

「うそ！？そんな趣味の人いるの？ていうかその流れでいくと・・・」

「うん、その店長さんご主人様のこと好きなの。でもご主人様それをわかってないの！今回のアイスも店長さんが気を惹こうとしてして、無理にアイスを作ったのに・・・うぅ」

エレノアは口元に手をあて目尻にホロリと涙をうかべる。

「・・・近藤さん・・・鈍感なんだ・・・あの店長さん美人な人なのに・・・うっ・・・かわいそう」

なのはも雑誌で取り上げられたときに写っていた写真の店長を思い出し、その境遇にホロリと涙を流した。
自分のことを棚にあげて。

ユーノ、頑張れ！！

そして、スバルは自分の世界に入っていた。

近藤は『Ｖｏｌｅｎｔｉｅｒｉ』の店長と知り合い　↓　いつでも

おいしいアイスが食べられる　↓　近藤の近くにいる　↓　私もいつでもおいしいアイスが食べられる　↓　いつも一緒にいるには？
↓　ポク・ポク・ポク・・・チーン！！

スバルは閃いた！

「副隊長！私と結婚してください！そして、毎日アイスを食べさせてください！！」

涎をたらしながら、欲望だだ漏れのプロポーズをし、皆を呆れさせた。ヴィヴィオまでもが呆れていた。

「まぁ、それがなのは隊長が勝てば、ということで。じゃあ、エレノアが勝った場合はどうしましょう？」

近藤が条件を出したので、なのはは考えた。

「んー、じゃあ、今度一緒にお食事するということでどうですか？」

なのはの条件に近藤は頷いた。

「わかりました。でも覚悟してくださいよ？エレノアの食欲はスバルとエリオを凌ぎますから」

なのははピシっとガラスがひび割れるような音を聞いた。

まずい、スバルやエリオの食事量は外食に向いていない。
食い放題とかならいいが、ヴィヴィオを連れて行くところに食い放題のような所は合わない。
基本食い放題は大人や１０代後半のような年代をターゲットにしたところで、幼児の口に合うかどうかは疑問である。
場所によっては子供向けの料理を用意しているところのあるが、それでもラインナップが少ない。
なのはは瞬時に貯金を思い出す。

・・・勝たなければ・・・

「わかりました。じゃあ、はじめましょうか」

なのははそう言うと瞬時にバリアジャケットを纏い、戦闘体勢をとった。

「なのはさーん！勝ってください！！私のアイスのために！！みんなの未来のために！！」

スバルの欲望だだ漏れの応援に苦笑するなのはは、エレノアに集中する。

「なのはママー、がんばれー！」

ヴィヴィオの応援になのはは力が湧いてくるのがわかる。
今の自分はいつもよりいい動きができる、そう思えてくる。

「マ、ママ？」

エレノアと近藤はヴィヴィオの発言に目を白黒させた。

「・・・なのは隊長、保護責任者になったんですか？」

「はい」

なのはの即答に近藤はため息をついた。

「まぁなのは隊長の意思を尊重します。エレノア、がんばれよ」

「りょーかい！！」

エレノアは敬礼すると、周囲が光りだす。

黄金の光がエレノアを包み込む。そして、光が消えた時、エレノアは紫と青色を基調としたバリアジャケットを纏っていた。

「よし、なのはちゃん！いっぱい動こうか！」

「（最近おなか周りが気になってるでしょ？）」

エレノアはなのはに念話で話すと、なのはは顔を赤くし、すぐ真面目な顔をする。

「よろしくお願いします！」

この気合の入った言葉にいろいろな意味が含まれていることを知っているのは、エレノアだけだった。

なのはは焦っていた。
自分の能力限定に合わせてエレノアも能力限定処置をした。
封門というのはよくわからないが、自分達のような第三者による介入処置なのだろう。
現在の自分のランクはＡＡ、近藤の言葉を信じるならエレノアもＡＡ相当ということになる。

だが、現状はどうだ。
空中戦で、お互いが空を飛びまわる。
なのははエレノアを捕らえる事ができない。
スピードはフェイト程度なので追うことはできる。それでも十分速いのだが。
だが、エレノアの行動があまりにも予想外で困惑する。

いまエレノアは両手に魔力を帯び、高速移動で攻撃するという単純行動をとっている。
それだけならば簡単なのだ。
だが、そこから先が違った。

「さーて、これはどうかな？」

エレノアは空中でダッシュしてなのはに突撃する。まっすぐ突っ込んでくる。
なのははすぐさまレイジングハートを構える。

《Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

なのははアクセルシューターを発射する、その数８。

弾道が不規則な動きをし、エレノアに向けて誘導追尾する。
エレノアはそれを見るとありえない行動をとる。
ありえない行動とは

それは、人間の稼動範囲を超えた行動、

急激なストップ・アンド・ゴーである。

通常、人間はスピードにノッているとき、方向転換する事ができない。
それは車、飛行機などの乗り物もおなじである。
それを行うと、多重のGがかかり、身体や機体に負担をかける。
特に人間はその急激な方向転換する時に身体への負担が顕著に出る。
筋肉断裂、眼球埋没、骨折、内臓破裂などである。
ようするに人間はそんな動きができるようにできていない。それが魔導士であっても変わらない。
飛行などで魔力の膜を張り、空気抵抗を和らげても急激な上下左右、前後の移動は生身の人間のそれと変わらない。

だがエレノアは違う。
彼女は人間ではない、デバイスだ。
人間の理解の範疇を超えた動き、急激な方向転換を繰り返す。
それはなのはがエレノアへ攻撃を当てられないこともあるが、何よりなのは自身がエレノアを見失うのだ。
人間の理解を超えた動きとは、同時に人間には理解できない動きとなる。
脳が反応しないのだ。猛スピードで近づいてくる人間が急に９０度に移動し、更にそのまま自分に近づき続ける。
ありえない。脳がありえないと、考える事を拒否する。目がその行動を追えずに見失う。

その間にエレノアは追尾してくるアクセルシューターを「ありえない動き」で「魔力拳」を使い、叩き落していく。
理解不能の動きで、アクセルシューターの軌道の外側から叩き落す姿が理解できない。
なぜ「追尾」しているはずのアクセルシューターの「外側」にいるのだ?
なのはの頬を汗がつたう。

「どこみてるのかな?」

なのはの右耳に語りかける声。
いつの間にかエレノアはなのはの真横にいた。
咄嗟に後ろに飛ぶなのはは恐怖した。

「油断大敵だよ~?」

エレノアはニヤニヤと笑いながらなのはを見る。

気持ち悪い。

こんな気持ち悪い戦いは初めてだ。
相手の行動が予想できない。
自分のペースに持ち込めない。
自分が今何と戦っているのかわからなくなる。
たいして動いていないのに息が切れる、苦しい、胸を圧迫する。

「これは予習だよ、なのはちゃん」

「・・・予習?」

なのはが怪訝な顔をする。

「そ。これから戦う相手はガジェットよりも高性能な「機人」なの。人間じゃない。だから、こんなふうにありえない動きをしてくる。」

なのははハッとし、近藤を見る。

地上では近藤がなのは達の戦闘を見ている。

ただ、見ている。

隣ではスバルが「うおー！すげー！！」とわめき、ヴィヴィオが目をキラキラさせながら「ママー、がんばれー！」と応援しているのに、近藤の表情はただ淡々と作業工程を見守るように、観察するように見ているだけである。

「すこしはやる気が出てきたかな？」

ニコニコ笑うエレノアをみてこの模擬戦の意味に気が付いた。

これは「戦い」だ、「訓練」ではないのだ。

「わかりました。本気でいきます！」

なのははレイジングハートをエレノアに向け宣言した。

これは自分達のこれからの戦いのための「戦い」なのだと。

「そーそー！がんばってカロリー消費してウェスト細くしようね！」

「わー！！しー！しー！」

なのはは慌ててエレノアの口を塞ごうと手を口元に持っていく。

「さあ！仕切りなおし。ガチで勝負！！」

エレノアは両拳を体の前でガチンとぶつけ、気合満々を体現する。
なのはもそれに頷く。

「はい！」

《Ａｃｃｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ》

レイジングハートの発言と同時にアクセルシューターが展開される。
その数３０。

「うわ・・・まじっすか」

エレノアは焦りだした。
いくら本気で来いとは言っても、あの数はヤバイ。自分が約半分の力しか出せない状況であの数はまずい。

「でもここで勝たないとアイスの取り分が少なくなる！やるっきゃない！」

エレノアは気合を入れなおし、なのはに向けて特攻する。

「アイスのために！私は負けない！」

「みんなを守るために！私は勝つ！」

だが、この温度差のある戦いは、あっけなく終わる。

「あー、アイスな、あれ嘘だから、勝っても負けてもみんなで食べるから」

近藤のこの一言を聞いたエレノアが一気にやる気をなくした。

「えー！？なにそれー！？あーもーどーでもいーや」

結果、アクセルシューターの魔力弾をまともに受け撃墜された。
なんともしまらない終わり方をした模擬戦だったが、スバルとヴィヴィオは狂喜しなのはを胴上げせんばかりの歓迎をした。

その日の夜、アイスを近藤、なのは、スバル、ヴィヴィオ、エレノアの5人で仲良く食べていた。
スバルは涙を流し、

「うーまーいーぞー！！」

と言いながら口から光を出し喜んでいた。

なのはもおいしく食べているが、

（ううー・・おいしいけど、コレでまた体重が・・・訓練内容濃くしようかな・・・でもおいしい～）

なにやらとんでもない事を考えながら食べていた。

エレノアは相変わらず満面の笑みで、

「うまうまなの～」

とご満悦の様子。

ヴィヴィオも、

「うまうま～」

エレノアの口癖を真似て、喜んで食べている。

甘いものが苦手な近藤もチョコアイスは食べていた。

アイスなのに甘さが控えめで、チョコの苦味がいいアクセントになっており、近藤もコレには喜んだ。

「うまいな、これ。また暇ができたら店長さんにお願いしようかな」

どこまでも報われない店長に明るい未来はあるのだろうか？

結局、この日『Ｖｏｌｅｎｔｉｅｒｉ』のアイスは４個のバケット全てが５人の胃袋に納まった。

次の日、ヴィータがこの事をなのはに聞き、

「何であたしを呼ばなかったんだ！！」

と近藤を責め立てた。

ヴィータもアイスには目が無いようで、『Ｖｏｌｅｎｔｉｅｒｉ』のアイスはいつかは食べたい憧れのアイスなのだという。

しまいには泣きながら、

「近藤のバカヤロー！！」

と叫びながら走っていった。

後日、近藤はヴィータを泣かせた罰として、残りの前線メンバーを連れて『Ｖｏｌｅｎｔｉｅｒｉ』へ行く羽目になるが、これはまた別の話。

# １００万アクセス記念企画（前書き）

この度はこの中身の薄い、支離滅裂な話をいままで見ていただき、本当にありがとうございます。
正直な話、こんな大台に到達するとは夢にも思っていませんでした。
これも、評価していただいたり、コメントしていただいたり、お気に入り登録していただいた人達は勿論、約９００００のユニークアクセスをしてくれた人達のおかげです。
これからも精進していきますので、何卒よろしくお願いします。

# １００万アクセス記念企画

ここは機動六課隊舎内のある会議室、そこには六課のメンバーがテレビスタッフとなり撮影をしていた。
その撮影とは・・・

はやて　「どうも！『ゲームセンターＧＡＳ』部隊長の八神です！」

はやては何故か作業服をきてイスに座っている。
目の前にはテレビと、なにやらゲームのハード、横にはイカなどの駄菓子が置いている。

は　「えー、今回、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳはじまりの魔法』がＰＶアクセス１００万を突破したという事で、特別企画として特別テレビ番組を作ることになりました！
いや～テレビ制作をしたことが無い素人にどんな番組が作れるのか！楽しみですね～」

と、能天気にカメラに向かって喋っていると、スタッフが二人はやての隣に現れる。

は　「な、なんや君ら！いま撮影中やで！ＡＤが映ったらあかんやんか！」

はやてはあせるがＡＤ二人は素知らぬ顔である。

ＡＤ近藤　「えー、八神部隊長、この番組の趣旨はお分かりでしょうか？」

は　「え?趣旨?そーいやー知らんなー。私のセクシーさを撮って終わりちゃうのん?」

ＡＤエレノア　「いえ、違います。今回の番組は、『八神部隊長にゲームソフトをクリアしてもらう』ということです」

は　「なんやて!?私ゲームとかあんませえへんで?やってもパズルゲームくらいやし」

近　「もう決定事項なので拒否権はありません」

は　「そ、そうなんか・・・なんや、出演者よりスタッフのが権力強いんやな・・・」

エ　「で、今回、挑戦していただくソフトなんですが・・・これです」

は　「ん?・・・『ベルカ無双』?」

ベルカ無双

地球のゲーム、○○無双のオマージュ作品

ベルカの騎士を操り、犯罪者や紛争地帯を切り抜けていく、爽快アクションゲーム

因みに、このソフトの制作協力には時空管理局と聖王教会が携わっ

ている。

は　「あ、これ聞いた事あるで！たしか、シグナムとヴィータがキャラとして参加してるんやでな？」

近　「はい。我々、機動六課の局員であり、八神部隊長の家族が参戦しているソフトをしない手はないということで」

は　「しない手はないですか・・・」

エ　「それでですね、今回、我々ロケハンしました」

は　「ゲームのロケハン？君らロケハンの意味間違ってるで」

エ　「で、ロケハン結果ですが、わたしがステージ7までしかいけなくて・・・ご主人様が」

近　「・・・ステージ3です」

は　「何しに来たんや、近藤さん・・・ていうか、これステージナンボまであるんや？」

エ　「ステージ9です」

は　「無理です！ギブアップします！」

近　「はや！」

は「だって、近藤さんはヘタレゲーマーやからともかく、エレノアさんは名人級やろ!?その人がクリアでけへんねんで!
私には無理です!さようなら!!」

その後、なのはプロデューサーやＡＰフェイトなどの説得によりゲームをすることになった。

は「じゃあ始めようか。ゲームセンターＧＡＳ!部隊ちょおーん!ぽちっとな」

掛け声と共にゲームの電源を入れるはやて。
画面にはオープニングムービーが流れている。

は「はー、綺麗やなー。技術の進歩ってすごいなー。グリグリ動いとんな～」

オープニングムービーが終わり、キャラクター選択画面へ。

は「ほー、過去ベルカの王さんがいはるんやな?それを操作できるんや・・・
コレが聖王・・・ベッピンさんやな～。覇王・・・イケメンやん。
あ!おった!シグナム!おっ、ヴィータもおる!
ん?シグナムホンマもんよりおっぱいおっきくないか?
ヴィータも本物よりロリっ娘になっとる!・・・いいやん、プログラマーさん、ええ仕事してはるやん!」

はやてはカメラに向かって親指をグッと立てた。

ここで天の声である「なのはプロデューサー」からお小言が。

Pなのは「八神部隊長、時間がもったいないので早く決めてください」

は「・・・はい。・・・こわいな～、さすが『悪魔』や・・・」

な「なにか言いましたか？」

は「いいえ！なにも言ってませんよ！・・・よし、じゃあシグナムでいこか！！」

はやてはキャラクターをシグナムに決定した。

は「おっぱい揺れるんやろうな～。ぶるんぶるん揺れるんやろな～・・・ぐへへ～」

スタッフとして参加している音響のシグナムは顔を真っ赤にしている。

音響シグナム「主はやて・・・やめてください・・・恥ずかしいです・・・」

みんなには音響シグナムが恥らう乙女に見えたのだった。

ゲーム開始。はやてはまず操作方法を覚えようと、あれこれとボタンをいじっている。

は「ふーん、これが斬る・・・連打・・・おっ、蹴りもあるんか。

したのゲージが無双ゲージで、貯まったら必殺技が使えんのか。

ふーん、ようできとんな～。

しかし・・・ぶるんぶるん揺れとんな～。世の中学生、前かがみ者やな～！」

はやては操作しながらげへへへといやらしい笑いをしている。

シ「主はやて・・・ほんと、勘弁してください・・・」

音響シグナムは半泣きだった。

なんだなんだと言いながらもゲームをすすめるはやて。

しかし、

は「・・・これメチャクチャ難しいやん・・・」

開始1時間経過し、はやては大量のゲームオーバーを繰り返していた。

ステージ1をクリアできる気配もない。

は「あ～！またやられたー！なんやねん！シグナム弱いな！！ちょっと違うキャラ使うか？」

そういうと今度はヴィータを選んだ。

シグナムは「弱い」と言われて落ち込んでいた。

は　「は～・・・ちょこちょこ動いてかわええな～、ほんまヴィータは癒し系やで」

ほにゃ～っとしまらない顔をしてゲームをするはやて。
それをカメラのヴィータは顔を赤くして撮影していた。

ヴィータ　「はやて・・・はずかしいから。これテレビで放送されるから。言葉選んで」

ヴィータを操作して３０分、状況は変わらなかった。
更にキャラクターを変え、色々なキャラを操作したがイマイチしっくりこないようで、はやてのフラストレーションは溜まるばかりである。

は　「あ～！むずい！！ヴィータもシグナムも他の王様も弱い！！もっと鍛えんかい！！」

うがーと吠えるはやて。
弱いと面と向かっていわれたシグナムとヴィータはへこみにへこんだ。

シャマル　「大丈夫、ゲームだから。落ち込まないで！」

タイムキーパーのシャマルが二人を励ました。

そこへ、またＡＤ近藤とＡＤエレノアが現れた。

近　「部隊長」

はやては無視してゲームを続ける。

近　「部隊長」

近藤は繰り返し呼び、はやては堪らず笑いながら近藤を見る。

は　「・・・なんやねん！部隊長部隊長て！名前で呼んでよ！！・・・で、なに？」

近　「このゲームなんですが、レベルがあるんです」

は　「レベル？イージーとかハードとか？」

近　「それもありますが、このキャラクターのレベルです。
フリーモードで経験値を貯めていくとＨＰや攻撃力、防御力、無双力があがります。
ですので、まずフリーモードでレベルをあげるのがいいかと」

ＡＤ近藤の提案にはやては目を細める。

は　「・・・いままでそれ黙ってやらしてたん？それは私の腕を信頼してのことか？」

エ　「いいえ、面白そうだから黙ってました。そう指示されました」

は　「・・・誰にや？」

エ　「なのはプロデューサーです」

は　「・・・うん、わかった。素直にフリーモードするわ」

はやてはなのはプロデューサーには逆らえないようである。

近　「あと、コレには裏技がありまして」

は　「裏技？なに？」

近　「キャラ選択画面でセレクトボタンを押しながら決定すると、女性キャラは水着になります」

それを聞いた途端シグナムとヴィータは顔を真っ赤にして慌てた。

シ　「な！？そ、それは本当か！？聞いてないぞ！？」

ヴ　「いやだー！！ゲームとはいえ水着姿を大衆に晒すのはいやだー！！」

そんな二人を他所に、はやては親指を立てて近藤に感謝した。

は　「近藤さん・・・グッジョブ！！ええ情報ありがとう！」

エ　「あともう一つ、いいですか？」

は　「え？まだあんのか」

エ　「隠しキャラがいます」

は　「え！？誰？まさか・・・私！？」

はやては気体に満ちた顔をＡＤエレノアに向けた。

エ　「いいえ、残念ながら。で、隠しキャラですが、フェイト隊長です」

は　「ちょっと待て。このゲームのタイトルなんや？」

近　「ベルカ無双です」

は　「ベルカ無双いう位やから、ベルカ式使う人しか出んわな？で？フェイトちゃん何使う？」

近　「ミッド式です」

は　「おっかしいやん！なにそれ！？ここにも人気投票の波が！？ええい、ヤケや！フェイトちゃん選んで水着にしたる！！」

途端、ＡＰフェイトが抗議する。

ＡＰフェイト　「はやて！？早まらないで！わ、私よりシグナムのほうがセクシーだよ！？」

シ　「なっ！？テスタロッサ！貴様、仲間を売るのか！？」

フ　「シグナムのほうが胸が大きいのは事実じゃない！」

シ　「だが人気は貴様のほうが上ではないか！！」

は　「ええい！やかましい！ティーヴィーショーで喧嘩すな！！安心しい、まんべんなく両方使ったるから」

はやてはいやらしい笑みを向けた。
とてもテレビに放送できる顔ではない。

な　「・・・ここの顔アップ、カットで」

ヴ　「うん、言われなくても、あれはダメだ。あんなのはやてじゃない」

そこからしばらくはやてはレベルあげに専念した。
最大レベルは５０、今現在、レベル上げに5時間かけようやくレベル３０までいった。

は　「・・・地味な作業やで・・・」

な　「似合ってるよ?コツコツするその姿」

は　「・・・プロデューサーの毒をいただき、私の心は折れそうです。も～しんどいわ～！」

流石にぶっ続けでゲームをして疲れたのか、集中力が散漫になっている。
そこへＡＤ近藤が、あるものを持ってきた。

近　「八神部隊長、これを」

は　「なに?・・・ひえピタ?これで頭冷やしてやれと?休ませてはくれへんねや・・・」

な　「それとも私が冷やしてあげようか？」

は　「いえ！こっち使います！！」

はやてはひえピタを貼り、ゲームを再開した。

は　「ん～、こんなもんでええやろか？」

現在、シグナムのレベルは３５に到達している。フェイトは時間がないという事で今回は使用していない。
これでシグナムが肩を落とし、フェイトは胸をなでおろした。

は　「さて、それじゃあ『無双モード』でバッサバッサと切りまくるか！水着で」

シグナムはガクリと跪いた。　↓　ｏｒｚ

そして画面には、黄色いビキニを着てレヴァンテインを握っているシグナムが映っていた。

は　「うひょー！シグナムー！このおませさんめ！！」

画面のシグナムははやての操作通りに動き、縦横無尽に動く。
そして、胸もプルンプルン揺れている。
ここではやてがポツリと呟いた。

は　「これ、アップにできたら水着の胸の部分、乳首立ってるの見えんちゃうか？」

はやては画面に顔を近づけ、目を細める。
シグナムはあまりにもいたたまれないので会議室を退出している。
音響は代わりにＡＰのフェイトが担当している。

な　「はやてちゃん、それアウト。言葉を選んでね？」

は　「はい・・・（ボソ）まったく、悪魔に妥協なしやな」

な　「はやてちゃん？」

は　「はい！ちゃちゃっとやります！！」

はやてはゲームの才能があったのか、サクサクと進み、あっという間にステージ7まで来ていた。

は　「・・・あっさり近藤さん抜いたな・・・あの人出てくる意味あったんか？」

はやては大量の敵をレヴァンテインで切り伏せていく。

は　「なんか、もう水着で戦場走り回ってるのって、スベッてる感じがするわ」

散々シグナムをいじっておきながら、とんでもない言い草である。
そしてなんだかんだで敵を１０００人切り倒した。そのとき、

『わたしが天下無双の騎士だ！！』

シグナムが画面の中で叫んでいた。

は　「シグナム・・・かっこええやん・・・水着やけど」

そして、ゲームオーバーとコンテニューを繰り返し、とうとうラストステージ９までこぎつけた。

そこで、ふと窓ガラス越しに外を見るはやて。

は　「・・・もう外真っ暗やん・・・何時間やってんの？」

ＡＤ近藤は掛け時計を見せる。

は　「・・・うそぉ！夜の１０時！？たしか始めたんが午前の１０時やろ？・・・ゲームは一日１時間て言葉知ってるか？」

挑戦開始から１２時間経過し、はやても疲労もピークだ。

近　「・・・すいません、こんな企画して。八神部隊長に活躍して欲しかったんです」

は　「近藤さん・・・ありがとう、たしかに本編では影薄いもんな。ここでがんばらなな！！」

はやては握りこぶしを作り、気合を入れる。

そして、ステージ９のボスと遭遇し、戦闘開始する。
相手は人間ではなく、巨大なロボットだった。

は　「こいつかー！めちゃ強そうやん。いままでのボスがバイトに見えんで」

水着のシグナムとボスとの戦いは一進一退の攻防戦となり、気の抜けない戦いになった。

は　「くっ、この！死ね！死ね！ゲイズ中将死ね！」

不適切発言を連発しはやてはビキニシグナムを操作する。
そして、

は　「よ！よし！ぃよーし！！やったー！しゅーりょー！！」

挑戦開始１３時間、ステージ９のボスを倒し、ベルカ無双クリア！
と、思いきや・・・

は　「ん？え？あれ！？えええええぇぇぇ！！？」

ロボットのボスが復活し、さらに凶暴な姿になる。体中に無数の剣のような棘があらわれ、羽が生えて空まで飛び出した。

は　「・・・なによこれ・・・まだやんの～！？」

集中力の切れたはやてに、このボスは相手にならなかった。

は　「あ～も～やられた～。あ～ゲームーオーバー・・・はっはっは～」

もう笑うしかないはやて。
スタッフもはやてを憐憫の目で見る。

は　「もうええか！！な！」

諦めムードの中、再びＡＤ近藤がはやての前に現れる。

近　「八神部隊長、ここで諦めると今までの苦労が水の泡になりますよ」

は　「いや・・・水の泡にはならんやろ。ちゃんと撮影しとるんやし」

はやては疲れた顔をして近藤を見る。
近藤は真剣な表情ではやてを見つめる。

は　「・・・～～～わかったわ！やる！やるわ！！」

はやては少し顔を赤くして面倒臭そうにしっしと手を振り近藤をアッチにやる。

は　「は～・・・あかん、男の人にあんなに間近で見つめられたら照れてまうわ・・・」

火照った顔に両手を当て、熱を冷ませる。

は　「ん！よし！やるか」

気合を入れなおしたとき、額にはったひえピタがはがれた。

は　「・・・脂か？・・・もしかして・・・歳とったからか？」

はやては入れなおした気合が削がれていくのを感じた。

は　「は～・・・もうええわ・・・やろ」

だが、この力の抜けた状況が功を奏したのか、復活したボスに優勢な状況を作る。

は　「お！これは・・・ふっ！ほっ！おし！いいよおぉぉぉしっ！！」

３０分かけて、はやては最終ボスを撃破！！総プレイ時間１４時間、ベルカ無双完全攻略！！

は　「やったー！！はー、もうええやろー！」

画面にはエンディングムービーが流れている。

シグナムが明けの明星を山頂から見つめ、スタッフロールに映る。

は　「は～、シグナム・・・かっこよかったな～・・・ビキニやったけど」

そこへなのはプロデューサーから一言が。

な　「八神部隊長」

は　「はい」

な　「このゲームの感想を、いただけますか？」

は　「ん～・・・やっぱり戦場は甲冑にかぎりますね！水着はダメです！！スベるから！！
　それと、もうこういう企画はいいです！！しんどい！！」

撮影が終了し、ＡＤ近藤が編集作業を行う事になり、映像データを持って会議室を出て行った。

な　「・・・ねぇ、フェイトちゃん？」

フ　「な、なに？なのは」

なのはが黒いオーラを出しているので、おもわず身構えるフェイト。

な　「ゲームの隠しキャラのこと、知ってたの？」

フ　「え？うん、だってモーションキャプチャーとか、技の提供や性能調査とかいってゲーム制作に参加してたし」

な　「ふーん・・・私とはやてちゃんにはお呼びがかからなかったのに？」

フ　「えぇ！？いや、それは・・・だって、その開発時期は二人とも別次元への捜査とかでいなかったじゃない？
　当時の制作スタッフに聞いたけど、あのとき確か二人にもオ

ファー出したって言ってたよ？」

は　「そうなんか・・・ほんなら仕方ないか？」

エ　「心配しないで！二人とも！！」

な　「エレノアさん？」

エ　「ベルカ無双２が制作決定したから！！」

は　「ほんまか！？じゃあ、今度こそ・・・・」

な　「私達もゲームデビュー・・・」

エ　「そして、エロい水着で世の男子を前かがみにするのね？」

シ　「それはもういい！！あんな恥ずかしい思いはたくさんだ！！」

ヴ　「ちょっと今から制作会社に文句行ってくるわ」

フ　「私も行きます。バルディッシュ！」

《ｙｅｓ，ｓｉｒ》

フェイト、シグナム、ヴィータはそれぞれデバイスを持って出て行った。

な　「・・・水着なんて、グラビアとかでたくさん晒しているのに、今更そんなに恥ずかしがっても・・・」

は「なのはちゃん、その発言は一歩間違うと痴女発言やで」

エ「とにかく、ＰＶ１００万アクセスありがとうございます！！」

な「もうびっくりだね！こんなに多くの人に見てもらえるなんて！」

は「ユニークアクセスも９万近くまで来てるしな！！」

作者「本当に、こんな駄文を読んでいただき、ただただ感謝です」

エ「うわ！いままでどこにいたの！？」

作「ずっと撮影に参加してましたよ？音響の補佐で」

は「あんた作者なんやからもっと前にでてこなあかんで？」

作「私は作品がより多くの人に見てもらえ、その人達が面白いと思ってくれて、
もっと面白い話をかければそれでいいのです。
主役は私ではなく、あなた達なんですから」

エ「作者・・・」

な「・・・なんか・・・見直しちゃった」

は「ええこと言うな、あんた。たまに中だるみな話有るけど、頑張ってや！！」

作「ありがとうございます。本当に、自分でも自覚しています。書いていて、なにこれ？こんなものが面白いか？というのが多々あります」

は「ジャンプやったら打ち切りやな」

な「自覚してるんなら、その話を直さないの？」

作「戒めとして、そのままにします」

エ「ただ単に面倒臭いだけじゃないの？」

作「そうともいいます。それから、しばらくしたら、オリジナルの話を続けようと思います」

は「シリアスか？」

作「そんなばかな。ギャグですよ」

な「ですよねー」

エ「そのほうが書いてるほうも楽しいもんね！」

作「はい」

な「じゃあ、今回かこのへんで」

は　「１００万アクセスは夢のまた夢だったのが、現実になるとは、ホントにびっくり！！」

エ　「これからも皆さんに楽しく見ていただける話を書けるよう、頑張ります！！」

作　「それでは、ありがとうございました！」

一同　「またねー！！」

## 第３７話（前書き）

今回からしばらく日常的なものをお送りしたいと思います。

キャラが崩壊気味ですが、それでもいいという方は見てやってください。

それと、コメントや評価お待ちしております！ドシドシ送ってください！

# 第37話

「姉上、私と手合わせ願いたい」

シグナムが突然こんなことをいった朝練から一日が始まった。
シグナムが姉上と言った人物とは、

「え～、面倒臭い。ご主人様が代わりに相手してあげてよ」

誰であろう、エレノアである。

何故シグナムがエレノアのことを姉上と呼ぶのか、それは近藤が自身の秘密を皆に打ち明けた日、ヴィヴィオを保護した日まで遡る。
あの日を境にリインとシャマルはエレノアのことを「お姉様」と呼ぶようになった。いや、エレノアが無理矢理呼ばせた。
そして、それはシャマルと同じヴォルケンリッターであるシグナム、ヴィータ、ザフィーラにも及んだ。
当然、最初は反発があった。

「何故我々が貴女を姉としなければならない？」

シグナムがエレノアにそう言い抵抗した。
だが、意外にもヴィータが素直に折れた。

「姉ちゃんでいいなら呼んでもいいぞ」

これにはシグナムとザフィーラも驚いた。
だが、ヴィータが素直に折れたのに自分達が渋っていては、まるで子供のようだと思った。
そこで、シグナムとザフィーラは妥協案として、

「姉上で良ければ呼ばせていただきます」

と言った。
ヴォルケンリッターの彼女達にとって、「夜天の書」のオリジナルであるという「源書」たるエレノアは、実質姉という位置であることには違いない。
最初こそ近藤やエレノアの言うことを訝しんだが、エレノアの存在自体が彼女達には何故か納得いくものだった。
それは、同書の共鳴とでもいうのか、それともかつての夜天の書の管制人格たる初代リインフォースにうりふたつのエレノアであるからか、エレノアのことを本能で「同士」と感じていた。
そんな同士と思っていた人物で、初代リインフォースにうりふたつのエレノアに「お姉様と呼びなさい」などと言われて、はいわかりましたと簡単に頷くわけにはいかない。リインとシャマルはすぐに頷いたが。
だが、ヴォルケンリッターの彼女達はエレノアのことを姉と呼ぶことは別に吝か（やぶさか）ではなかった。
元々、初代リインフォースはヴォルケンリッター達にとって姉という位置に近かった。
リーダーであるシグナム、皆の抑え役のシャマル、我が儘で短気なヴィータ、それ等を冷静に見守り対処するザフィーラ、そんな四人を更に大きく包み込む存在、リインフォース。
「闇の書」のプログラム上あまり表には出て来なかったが、もしリインフォースが常に現界できるのなら、彼女がリーダーになっていただろう。

それ程にシグナム、シャマル、ザフィーラはリインフォースを信頼し、慕っていた。
ヴィータは戦乱の時代等でかなり精神的に病んでおり、対するもの全てに牙を向けるような状態であったため、リインフォースだけでなく他の者とも折り合いが悪かった。
そんなそれぞれの思うところが一致したのかもしれない。
ヴィータは表には出さなかったが、内心エレノアを姉と呼ぶ事を喜んでいた。
シャマル等は嬉々としてエレノアの事を「お姉様」と呼んでいる。
その裏に、いままでの自分の立ち位置が最年長で、どちらかというとお母さん的なポジション（あくまで見た目）という素直に喜べないお年頃であったため、自分に姉が出来て自分の立ち位置が若くなった（あくまで形式上）事による喜びだということに、気付くものはあまりいなかった。
そして現在、朝練が終わろうかというときにシグナムがエレノアに対して模擬戦を申し出てきたのだ。

「エレノア、お前は俺に死ねと？」

実際は近藤でもシグナムとは良い勝負をするだろう。まあ、勝てはしないが。
シグナム達ベルカ式は基本接近戦が主体であり、近藤の使うミッド式は中長距離を主体とする。だが「ストライクアーツ」を駆使すれば接近戦同士噛み合うのだが、どうも近藤は自身を過小評価しすぎなところがある。

そこには魔法という壁があるせいかもしれない。
近藤の魔力量は少ない。多く見積もっても、機動六課の前線メンバー中凡人（と本人が言っている）のティアナのソレより少ない。
魔力量というのは努力等でどうにかなるというものではない。これは生まれ持ったもの、つまり天性のものである。魔導士ランクは努力である程度なんとかなるかもしれないが、近藤はそれでもランクAである。ランクAとは、一般魔導士と変わらない。ようするに凡人である。
対してシグナムは経緯は置いておいて、魔導士ランクはS-、経験値も高く完成されたスタイルを持ち、単純に魔力だけでならエリートに位置付けられる。
こんな単純に力だけを比べる行為はなのは達を呆れさせるのだが、そんな風に力だけが勝敗を左右するとは近藤も思っていない。
ようするにエレノアと同じく面倒臭いだけなのだ。

そこで、近藤はエサで釣ることにした。

「そうだ、エレノアがシグナム副隊長と勝負して勝てば『時しぐれ』のロールケーキをやろう」

「やる！そして勝つ！！」

即答したエレノアはやる気満々になった。
そして、この言葉に反応する女性陣、というかこの場にいる全員。

「と、『時しぐれ』のロールケーキって、予約で一ヶ月待ちという、あの！？」

「なんで近藤さんがそんな物を！？」

一番食いついて来たのはティアナとフェイトである。

「いや、この間たまたま福引きで『時しぐれ』のロールケーキ3種セット引換券が当たりまして、いつでも取りに行ってもいいということでしたので」

「近藤、今度お前に当たり付きのアイスを買ってきてもらうぞ！」

「いや、それよりデパートの福引券を全てお前に託そう。それで旅行券なんかを当ててくれ！」

ヴィータとシグナムがえらく俗っぽいことを命令しだした。

皆近藤に対して羨望の眼差しである。

近藤自身は、たかが菓子でこんなに皆の心が一つになるなんて、安い人達だなと思っていた。

だが、近藤の認識は少しズレていた。

この「時しぐれ」という店、シュークリームとロールケーキ専門の洋菓子店であるが、女性客に大人気の店である。

特にロールケーキのプレーンは予約だけで一ヶ月待ちで、予約販売開始と同時に売り切れという、言うなればモンスターロールケーキなのだ。

勿論、いまこの場にいる者達はこのロールケーキを食べたことはない。食べる機会すらない。

それ程手に入りにくい物なのだ。

そこへ、なのはが言いにくそうに近藤に話しかけた。

「あ、あの・・・近藤さん?その・・・できれば、その・・・『時しぐれ』のロールケーキを、私も食べたいな～なんて・・・」

なのはが近藤に対して上目遣いでお願いし、モジモジと手を胸の前で動かしている。
しかも、恥ずかしいのか少し頬がピンク色に染まっている。

「あ、あの！わ、私も食べたいな・・・わ、私たち同じライトニング分隊だし、より親睦を深めると言う意味で・・・その、ね？」

何が、ね？なのかは近藤にはわからなかったが、フェイトまでもがモジモジと自分の金色の髪をいじりながら、恥ずかしそうに上目遣いでお願いしてくる。

ティアナやスバル、エリオ、キャロも口には出さなかったが、「食べたい」と近藤に目で訴えていた。もうビシビシと当たって痛い程だ。

「あたし等は同じ副隊長なんだから、当然食べれるよな？」

「うむ、主はやてもお呼びしなければな。しかし・・・ゴクッ、ああ・・・時しぐれのロールケーキが食べれる日がくるとはな」

上から目線で、さも当然のように、食べる事が決定しているかのような口調の副隊長二人に、近藤は苦笑し、

「わかりました。じゃあ、エレノアが勝てば全員食べれるとして、シグナム副隊長が勝てば全員無しということで」

それを聞いた途端、皆の視線が厳しいものになった。
一番慌てたのはシグナムだ。

「な!?そ、それはないだろう!?勝っても負けても皆で食べればよいではないか!」

「それじゃあ面白くないでしょ?」

「面白いとか、そういうことではなくてだな!」

「シグナムさん」

「うっ!?な、なんだ、なのは」

なのはからプレッシャーがかかる。
シグナムはおもわず身構える。
なのはは笑顔で言った。

「わかってますよね?」

言葉の裏が透けて見える。
シグナムには痛い程理解できた。

「くっ、だ、だが真剣勝負なのだぞ!?」

「真剣勝負は次回でもいいじゃないですか」

フェイトも良い笑顔でシグナムを諭す。

いつ食べれるかわからないスイーツと、いつでも行える模擬戦、どちらが大切ですか?

全員の視線がシグナムに向く。
ティアナとフェイトはこのロールケーキに相当執心のようで、殺気も混じっている。
シグナムはスイーツと模擬戦を天秤にかけた。

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・

「・・・わかった。皆の望むようにしよう」

シグナムは折れた。
シグナムも所詮は女、甘いものには勝てなかった。
なのは達もシグナムの判断に心からの拍手を贈った。
しかし、ここでエレノアがまたも波紋を呼ぶ発言をし、シグナムを困らせる。

「じゃあ、もうひとつ賭けをしましょう」

「も、もうひとつ・・・ですか、姉上？」

シグナムは嫌な予感しかしなかった。
このエレノアという女は、快楽主義者である。
自分が楽しければそれでいい、面白ければそれでいいのだ。

「もし、私がシグナムちゃんに負けたら、はやてちゃんに私の胸を揉む権利を与えます。でも私が勝ったら・・・」

「のったー！！」

エレノアが話し終わる前にモニタで割り込みが入った。

「エレノアさん、その賭け乗った！！」

「あ、主はやて！？」

誰であろう、シグナム達ヴォルケンリッターの主、八神はやてである。

モニタ越しにわかるくらいはやては目をキラキラさせ、鼻息を荒くしていた。

「ようやく、本人了承の元にエレノアさんの胸を揉める・・・！」

なにやらウットリしているはやてに、シグナムは慌てて抗議する。

「あ、主はやて！ですが、私が勝たなければ『時しぐれ』のロールケーキが・・・」

「あ、そっか。ん～どうしたものか・・・ロールケーキも食べたいけど、エレノアさんの胸も揉みたい・・・ん～」

真剣に悩む八神はやて二等陸佐、この世界は大丈夫だろうか？

というか、この仮想シミュレータの場にいないのに、事の経緯を知っていることのほうがおかしいのだが、皆あえてそこにはツッコミをいれなかった。

「そ、それに私が負ければ、先程の話しの流れからするに、近藤がわ、わわ私のむむむ胸を・・・」

シグナムは自分の負うリスクを挙げる。
はやては顎に手を当て考える。そして、

「わかった。シグナムの判断に任せる。自分のやりたいようにやり」

はやてはシグナムに丸投げした。

そしてシグナムは悩んだ。ロールケーキは食べたい、この機会を逃せば次はいつになるかわからない。だが、負ければ近藤にいいように体を弄ばれる。
ちらりと近藤を見る。なんの感情もこもっていないボーっとした表情をしていた。だが、逆にそういう表情が恐ろしい。おもわず近藤に体をいいように弄ばれる想像をしてしまう。

・・・ゾワワッ！

悩みに悩んだシグナムは、ついに結論をだした。

「・・・私は八神はやてを主とする烈火の将！我が主の望み、叶えてみせましょう！！」

自分の保身を選んだ。
当然、大ブーイングである。

「シグナム！？考え直すならいまのうちだよ！？ロールケーキが、ロールケーキがー！」

フェイトが叫ぶ。

「シグナム副隊長！私たちの幸せを摘み取らないでください！！」

ティアナが泣き叫ぶ。

「いいじゃねーか、乳のひとつやふたつ揉まれたからって減るもんじゃなし！いまこの時のロールケーキは減るんだぞ！！」

ヴィータが野次る。

「ええい、やかましい！私は主はやての望みを叶えるのだ！」

シグナムが逆ギレする。

「うわぁ、逆ギレ！？シグナムさんカッコ悪いよ！」

なのはがシグナムの行動に呆れる。

スバルとエリオ、キャロに至っては目に涙を溜め、無言の圧力をシグナムにかける。

「・・・くぅ！そんな目で見るな！」

そんな部隊内崩壊寸前のやりとりを見て、流石のはやても罪悪感が芽生えたのか、シグナムを諭そうとする。

「なぁシグナム？私のことは別に気にせんでええで？なのはちゃん達の望み通りロールケーキ選びいな」

「な!?主はやて!?」

シグナムは退路を絶たれようとしている。
このままワザと負けて近藤にいいように変態的指導を受ける道筋が完成しつつある。

もう逃げたい。

シグナムはそんな現実逃避をしていた。
するとそこへ、近藤がシグナムを挑発する発言をした。

「ま、心配しなくてもシグナム副隊長は全力でかかってもエレノアには勝てませんよ」

瞬間で空気が張り詰めた。

「・・・どういう意味だ、近藤?」

低音の、地を這うような声がする。
どこから聞こえるのか?
それは俯いて表情が読み取れないシグナムから聞こえた。

「そのままの意味ですが?」

近藤はそんなシグナムの豹変を気にすることもなく、挑発し続ける。

「今回の手合わせを申し出たのは、なのは隊長から先日のことを聞いたからでしょう?
はっきり言いましょうか、エレノアに勝てる魔導士なんてこのミッドチルダには存在しません」

そういうと、近藤は左手を後ろに回し、シグナムに見えないようになのは達に向け、指をクイクイと動かした。
なのは達はその合図がどんな意味を成すか即座に理解した。

「そ、そうだよね！私でも敵わなかったかもしれないのに、シグナムさんに勝てるわけないよ！」

なのはが近藤に続くようにシグナムを詰る。

「さすがのシグナムも今回ばかりは無理じゃないかなー」

フェイトも続くが、シグナムから目を逸らし、セリフも棒読みである。

「もうちゃっちゃと負けてロールケーキ食べようぜ！」

ヴィータまでもがシグナムに野次をおくる。

ＦＷメンバーはさすがに野次を飛ばさなかった。後で何をされるかわかったものではないからだ。だから、みんなシグナムから目を逸らした。だがこれはシグナムにとっては逆効果であった。

（・・・こいつら・・・）

ぷちっ

何かが切れる音がした。

「よかろう・・・そこまで言うのなら、全力でお相手していただこうではないか・・・」

そこには髪を逆立て、般若のごとき形相のシグナムがいた。

「もうロールケーキとか主のためとかどうでもいい！！叩きのめす！！」

「ひぃぃっ！？」

シグナムの形相に近藤とエレノアを除く全員が恐れおののいた。

# 第３８話

シグナムとエレノアは共にバリアジャケットを展開し装着している。
仮想シミュレータの設定は廃墟。無数のビルの隙間に佇む二人。
他のメンバーは少し離れたビルの屋上で見物する。
エレノアはボーっと前を見ているが、シグナムは今にも噛み付く狂犬のように目を血走らせ、息を荒くしている。

「レヴァンテインの錆にしてくれる・・・」

物騒な事を口走るシグナム。
しかし、エレノアはいたって冷静で、むしろシグナムとの戦いを楽しみにしているようだ。

「かの『剣王』を模して生み出されたあなたと戦える日が来るとはね。期待していますよ」

「・・・『剣王』・・・だと？まさか・・・私がか？」

シグナムは目を見開いた。エレノアの発言に驚いていた。

「あら、知らなかったの？あなたは『剣王　スキョフニング』を模倣して『夜天の書』プログラムに組み込まれたのよ、ヴォルケンリッター烈火の将シグナム殿？」

エレノアはそう言うと右腕が光だし、肘から手にかけて光の筋が走る。光が収まるとエレオアの肘から水晶のような紫色の剣が現れた。約１メートル程の、剣というにはあまりにもガラスのように透明で、美しい刀身に思わず皆が見惚れる。

「キレイ・・・」

おもわずフェイトが呟いた。それ程に美しく、宝石のようで、とても剣には見えないのだった。

「私が・・・スキュフニング・・・？」

未だにシグナムはエレノアの言う事をぶつぶつと呟いていた。

『剣王　スキュフニング』

古代ベルカの時代、剣一本（レーヴァテイン）のみで戦乱の時代を駆け抜けた傑物。

彼は孤高の存在で、最初は一介の兵士だった。彼は仲間を作らず、配下を作らず、ただただ戦場を一本の剣で切り開いていった。

「名も無き丘の戦い」の負け戦で彼が殿（しんがり）を務め、1万の追っ手を彼一人で退けたというのはあまりにも有名な話である。

そして、彼は立ち止まる事をせず、数々の戦場を全力で駆け抜け、体中に傷をつくりながらも前進を止めなかった。

気が付けば、彼の切り開いた道は、多くの人々が幸せに暮らす大きな道となり、いつしか人々は彼のことを畏敬の念を込めて『剣王』と呼ぶようになった。

残された文献には、彼の剣技は聖王も敵わなかったと書かれている。

エレノアはシグナムに剣を向ける。

「我が唯一無二の力、とくと味わいませい」

エレノアの雰囲気が一変する。
赤い瞳が紅く、朱く、血のようにアカく光り輝く。
空気がピリピリと張り詰める。
周囲の観戦者たちはその空気にあてられ、冷や汗を流す。
なのはやフェイト、ヴィータでさえおもわず息をのみ、体が硬直した。
ただ、近藤はそんなものどこ吹く風といったふうな感じで飄々としていたが。
対面しているシグナムも空気の変貌にあてられ、逆に冷静になる。

（・・・なるほど、これほどの覇気とはな。これは全力でかかっても勝てないというのは法螺ではなかったということか）

シグナムは震える。
今、自分のいる場所は戦場。
口角が吊り上る。
すばらしい、これから私は「死闘」を繰り広げるのだ。
肌が粟立つ。
自分より強大な敵とは、何年ぶりだろう。

うれしい！
全力で戦える！
自分より強い奴がいる！
血沸き肉踊るとはこういうことか！

シグナムはレヴァンテインを構えた。

「烈火の将シグナム！推して参る！！」

シグナムの声と共に両者は地を蹴り、激突した。

シグナムとエレノアの間から火花が散る。
水晶剣とレヴァンテインが重なり、鍔迫り合いをする。
単純な力比べ、高音の金属が擦れる音が響く。

「・・・くぅっ！」

声を漏らしたのはシグナムである。
苦悶の表情を浮かべる。
対してエレノアは冷静に、ゆっくりとシグナムを押していく。
シグナムは押され、下半身に力をいれ踏ん張り耐えるが、エレノアの圧力はそれをお構いなしとばかりに押し続ける。
シグナムは踏ん張りながら押され続ける。地面には押された跡として、シグナムの靴の跡が線として続いていた。
シグナムは力比べでは敵わないと、咄嗟にバックステップして空へと避難する。

「レヴァンテイン、カートリッジロード！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ.》

レヴァンテインがカートリッジを一発ロードする。
ガションという音と共につばの部分がスライドし薬きょうが排出される。
そして、レヴァンテインの刀身を魔力の炎熱変換により炎が包み込

む。

「紫電一閃！」

シグナムは空中からダッシュしエレノア目掛けて突進する。
エレノアはそんなシグナムの動作に身動き一つせず待ち構える。

「はあああぁぁぁぁっ！！」

シグナムはエレノアに向けてレヴァンテインを振り上げ、斬りつける。
ギーンという高音が木霊する。
だが、その斬撃は簡単にエレノアに止められた。
エレノアのもつ水晶剣によって。

「なに！？」

シグナムは驚いた。
受け止められるのはいい。
だが、エレノアはプロテクションなどの防御魔法を展開しているわけではない。
水晶剣に魔力を付与しているようにも見えない。
ただ、剣で受けた。にもかかわらず傷つくことなく、重心がぶれることもなく、事も無げに片手で受け止めた。
行き場の無い魔力は炎と火花となり、両者の間に飛び散る。
エレノアはそんな一撃にニコリと笑った。

「うん、いい一撃だね。さすが歴戦の勇士」

そのままエレノアは水晶剣を振り、力押しでレヴァンテインを押し

出す。
シグナムは弾き飛ばされた。
「さて、こちらも行こうか？」
エレノアがそう言った瞬間、パァンという音と共にその場から消えた。
（これが音速を超えたスピードか！）
シグナムは事前にエレノアの戦闘記録を見て予習していた。
だが実際目の当たりにすると、とても目で追えるスピードではなかった。
目で追えないなら、気配を探ればいい。
シグナムは周囲を探るため神経を研ぎ澄ました。
かすかに左から気配がする。
こちらか！と、構えようとした途端に、ゾクッと悪寒が走る。
だめだ！こっちじゃない！そう本能的に察知し、レヴァンテインを体の前で構えた。
シグナムが構えた途端、正面にエレノアが現れ水晶剣を振り下ろしていた。
エレノアは笑いながらこう言った。
「あら、勘のいい」
ギィンという音と共にシグナムは吹き飛ばされる。
「ぐうぅぅっ！？」

そのままシグナムは仮想シミュレータで映し出された廃墟ビルの壁にめり込んだ。
シグナムが激突したビルから煙が立ちこめ周囲に広がる。
エレノアはその場所を眺めながらも、戦闘態勢を解かずにいる。

一連の動きがすごすぎてＦＷ４人はあんぐりと口を開けていた。
無理もない。魔導士ランクがＳ－のシグナムが、エレノアにかかると赤子のように見えるのである。

なのは達も、まさかここまでとは思っていなかったようである。

「ねえ、シグナムさん本気だよね？」

なのはが呟く。別に誰かに聞いたわけではなかった一言だった。
目の前の事象から目が話せない。

「ああ、ありゃ本気の一撃だった」

ヴィータがなのはの呟きを聞き取り、答えた。
彼女も目の前の出来事を信じられないように眺めていた。

「でもエレノアさん、魔法使ってないよね？」

フェイトが放った一言がこの異常な戦いを物語っていた。

「厳密に言うと、エレノアは魔法を使ってます」

近藤の言葉に皆が近藤に振り向く。

「アレは存在自体が魔法そのものといっても過言ではない。ですか

ら、あの紫電一閃を受けたのも、音速ダッシュもただ目に見えないだけで使っているんですよ」

「お、音速ダッシュ？」

なのはがガクッと肩を落とす。

「ダセェ・・・けど、あなどれねぇ」

ヴィータもそのネーミングセンスに呆れつつも、脅威を感じていた。

「じゃあ、その音速ダッシュというのはフェイトさんの使うソニックムーブと同じものなんですか？」

エリオが近藤と隊長達の会話に割り込んできた。
接近戦を主体とするベルカ式を使うエリオには気になるようだ。

「そうだな。フェイト隊長の使うソニックムーブに通じるものがある。だが、音速ダッシュは人間には不可能だ」

「な、なんでですか？」

スバルが聞き返した。
近藤はスバルのほうを見ず、エレノアとシグナムの戦いを見守る。

「音速ダッシュとは、その名の通り音速の壁を超えて移動する。だが、人間は機械等の補助なしでは音速を超える事はできない、そういう風にできる体じゃない。たとえ、魔力で周囲を覆ってもだ。もし、生身の人間がアレを使ったら・・・」

「つ、使ったら？」

ティアナが唾を飲み込み、近藤の次の言葉を待つ。

「音速の壁にぶち当たり、ミンチになる」

聞いた途端、皆の顔色が青くなった。

そんな会話をしていると、ビルの屋上部分から爆発のようなものが起き、そこからシグナムが飛び出してきた。

体中、埃を被っているが、傷などはなかった。ビルの壁に激突する瞬間に魔法で衝撃を和らげたようだ。

シグナムはレヴァンテインを鞘に納めていた。

「飛竜一閃！！」

シグナムはレヴァンテインを鞘から抜くと、刀身は「シュランゲフォルム」により鞭のようにしなり、彼女の魔力の色である紫色を帯びていた。

そして、その鞭は大蛇のようにその巨大な魔力を帯びエレノアに牙を剥く。

相変わらずエレノアは笑顔である。

「ん～、いいねいいねぇ！じゃあコレは防御しようかな」

そう言いながら、エレノアは左手を胸の位置に持って行き、拳を握る。すると、左胸の部分と拳が金色に光りだす。

「はあぁぁぁぁっ！！究極技を見よ！！」

エレノアは左拳を高々と振り上げた。

すると、黄金の巨人がエレノアの背後に現れた。

『がああああぁぁぁぁっ！！』

「えええええぇぇぇーーーっっっっ！！？」

なのは達は驚いた。もう、ギャグ漫画のように目玉が飛び出さん程に見開き、顎も外れんばかりに口を開け驚いた。

なんで巨人！？

なんで筋骨隆々！？

なんで魔法が吠えるの！？

あの顔コワッ！！

つーかなんか近藤さんに似てるね？

等など、様々である。

「神を超える魔神！『マジン・ザ・ハンド』！！」

魔神は左手を突き出す。

飛竜一閃と魔神が衝突し、爆炎が巻き起こる。爆風がなのは達のところまで到達し、目を開けられなくなる。

「くぅ！」

しばらくすると煙が晴れ、なのは達がシグナムたちを見ると、魔神がシグナムの飛竜一閃を左手一本で受け止め、飛竜一閃は消滅していた。

「な・・・なんなの、あれ」

なのはは驚きの声をあげた。

だが驚きの方向が違う。はっきりいって、呆れている。

「あれは『マジン・ザ・ハンド』。キーパー技の最強技です」

近藤が淡々と解説する。

「キーパー技って・・・」

ティアナも呆れ口調である。

「またイナズマイレブンですか？」

フェイトも呆れ返っている。

「またとか言うな！あんなに熱く燃える名作、近年稀に見る作品だぞ！！」

フェイトへの敬語も忘れて近藤は怒る。

「ご、ごめんなさい！」

あまりの剣幕におもわず謝るフェイト。

「おい、じゃれてんじゃねー。動くぞ」

ヴィータがシグナムたちを見ながら諌める。

先に動いたのはシグナムだった。

《Ｓｃｈｗｅｒｔｆｏｒｍ.》

シグナムはレヴァンテインを「シュランゲフォルム」から「シュヴェールトフォルム」へ戻し、エレノアに向かっていく。

「はあぁぁっ！！」

取った行動とは単純明快、シグナムは剣戟にて勝負をかけた。

（飛竜一閃をああも簡単に受け止められるとは予想外だったが、嬉しい誤算というものだ！）

自分の必殺技が効かないというのは屈辱だが、それは相手が自分より強いという事、シグナムは自分より強い相手との戦いを望んでいた。願ってもないことだ。

故に、やることは、できることは唯一つ。

ただ

一撃のみを

相手に
ぶつける
のみ。

シグナムは笑っていた。笑いながら剣を振り上げていた。
そして、エレノアも笑っていた。

「その粋や良し！」

エレノアは真正面から受け、シグナムとの戦いを繰り返していた。
お互いの剣がぶつかり、火花を散らし、弾かれ、またぶつかる。
何度も繰り返される剣舞を、なのはたちはただ見惚れていた。

「綺麗・・・踊っているよう・・・」

ただ、シグナムのほうが旗色が悪いようで、斬り付け、弾かれる度に大きく仰け反り体の重心もずれてしまう。ただの一撃を受けるだけで体力が異常に奪われる。一撃を振るうだけで骨が軋む。大量の汗が噴き、飛び散る。

「くっ！」

シグナムの手にエレノアの重い一撃がのしかかる。

重い。

一撃一撃がとてつもなく重い。

だが、これはただ力があるというだけではない。

これはそう、

想い。

一撃受けるごとに彼女の想いが流れ込んでくる。
ああ、あなたはこんなにも重いものを背負い生きているのか。
こんなにもあなたは近藤を想い、力を揮えるのか。
なんと美しい、なんと尊い、なんと愛おしい人なのだ。

「尊敬に値する人だ！あなたは！」

シグナムは叫んだ。
繰り返す斬り合いにもう手の感覚が無い。
レヴァンテインを握る手が弱まる。
だが、と自身を叱咤し、手に力を込める。

「だから！私はあなたに全てをぶつける！！」

究極の一撃を！

今の自分の持てる全ての力を！

想いを！

あなたに！

わかって欲しい！！

そして、シグナムは渾身の一撃を振り下ろす。
綺麗な一閃となり、エレノアに斬りかかる。

エレノアは、その一撃を

受け止めた。

反動でレヴァンテインは砕けた。

エレノアは微笑んだ。

「・・・あなたの想い、確かに受け取りました。ああ、とても重い、烈火の将の名に恥じぬ一撃でした」

シグナムは満足そうに頷く。
もう腕を振り上げる力も無い。

「だからこそ言います」

エレノアは水晶剣を上段に構える。
両腕を下ろし、エレノアを見上げるシグナムの目には、エレノアが光り輝く神々しい、女神のように見えた。

「上を知りなさい」

女神の持つ水晶は、煌く一閃でシグナムへ無常の一撃を与えた。

シグナムはその場に倒れ付した。

「精進なさい。未来の『剣王』よ」

勝負はエレノアの勝ちで終わった。

## 第３９話（前書き）

貴重なご意見ありがとうございます。
まだまだ至らない点は多々あると思いますが、よろしくおねがいします。

# 第３９話

その日の夜、機動六課の前線メンバーとはやて、リイン、ヴィヴィオはそわそわしていた。
夕食も食べ終え、食後のデザートへさしかかろうとしていたのだ。
そして、そのデザートとは、

「お待たせしました。貰ってきましたよ」

近藤は手にベージュの紙袋を持っていた。
皆から「おおー」と歓声が起こる。

「箱！箱見せてくれ！」

ヴィータが早く袋から出せと急かす。
近藤は紙袋から三つ、焦げ茶色の細長い直方体の箱を取り出した。
種類はプレーンとチョコ、レアチーズである。
箱にはそれぞれ筆のようなもので白く「時しぐれ」と書かれていた。
またも「おおー！」と歓声が起こる。

「じゃあ切ってきます」

そのまま持って行こうとする近藤をティアナが止めた。

「副隊長！切る前にそのお姿を拝見させてください！」

なにやら文法がおかしいが、ティアナは切り分ける前のロールケーキを見たいらしい。

「よく言った！」

「さすがティア！」

「そうだよね！目に焼き付けないとね！」

拍手まで起こる、称賛の嵐である。

近藤は箱を開けた。

中から一本の円筒が現れた。開けた箱はプレーンである。

茶色い表面にはシュガーパウダーを塗しているのか、大地に降り積もる粉雪のように幻想的で、断面を見ると生地を円状の中に真っ白い生クリームがふんだんに積められている。箱を開けたときから甘い匂いとミルクの爽やかな匂いがたちこめる。

キャロとヴィータ、シグナムは声もなく、キラキラと目を輝かせ、ロールケーキを見つめる。

なのはとヴィヴィオ、はやてとリインは鼻をヒクヒク動かして香を堪能している。

スバルとエリオ、エレノアは涎を垂らしていた。

ティアナとフェイトは涙ぐんで、

「ありがとう・・・ありがとう」

とブツブツ呟いていたが聞かなかったことにした。

「さ、もういいですか？切ってきますよ？」

近藤がそう言いながらロールケーキを持ち上げ、キッチンへ行こうとした。

「はーい！」

と元気な返事が一斉に返ってきた。

見ると、全員手にはフォークを持って目をキラキラとさせていた。

幼稚園か、ここは？

とりあえず三本のロールケーキを人数分に切り分ける。

そして、三種類を皿に分けトレイに乗せる。

持っていくと、またもや「おおー！！」と歓声があがった。というか、歓声が起こる度に大きくなっていく。

切り分けたロールケーキを乗せた皿をそれぞれの前に並べる。

皿の上には、茶色のプレーン、黒いチョコ、白いレアチーズと三色が重ねて乗せられていた。

それを見たはやては感極まり、

「お菓子界の宝石箱やー！」

泣き叫んだ。

「その通りです！主はやて！」

「よく言った！」

「これは国宝級の宝石だね！」

はやてに賛同し、スタンディングオベーションまで始まった。

「もういいから、食べてください」

近藤はこのテンションについていけず、少しウンザリしていた。

「そ、それじゃあ・・・時しぐれのロールケーキ・・・いただきます！！」

はやてが音頭をとり、

「いただきます！」

手を合わせて皆が続いた。

・・・合掌の風習はミッドにあるのか？そんな事をおもいつつ、近藤も手を合わせた。

「んまーい！」

頬に手をあて、幸せそうに顔を緩めるはやてとエリオ、ティアナ。

「うーまーいーぞー！！」

スバルはまた口から光りを出して叫んでいた。

「うまうまなの～」

ニコニコと幸せそうに笑いながらいつものフレーズを言うエレノアに、

「うまうま～」

ヴィヴィオとキャロ、ヴィータ、リインがエレノアを真似てロールケーキを口に入れる。

「ん～、おいしい～」

なのはとフェイトも頬に手をあて緩みきった顔をしていた。

「うむ、噂に違わぬ味だ」

シグナムはコクコクと頷きながら一口一口じっくり粗食している。
顔はニコニコと笑っていた。

ただひとり、

「あ・・・ダメだこりゃ」

近藤がロールケーキを食べるのをやめた。
それぞれ一口ずつ口に入れただけでフォークを置いた。
近藤は甘いものが苦手である。なので、最初にチョコを口に入れた。

・・・甘い。

続けてプレーンとレアチーズを口に運ぶ。

・・・いかん、甘すぎる。

結果、近藤はそれぞれを一口づつ食べただけでデザートタイムは終了した。

「どうしたの、おおさま?」

ヴィヴィオが口の回りにクリームをつけたまま近藤に顔を向ける。

「え?ああ、俺には甘すぎる。食べれないんだよ。エレノア、食べるか?」

近藤はそうエレノアに皿を渡そうとした。

その時

「ちょっと待ったー!」

はやてがそんな近藤にストップをかけた。

その目は真剣そのものだった。

よく見ると、他の皆も近藤の食べ残したロールケーキを真剣に見ていた。

「じゃんけんや!」

「おおー!!」

大歓声が起こった。

近藤は少し焦った。

「え!?でも、俺の食べ残しですよ?皆嫌じゃないですか?」

「私は気にせえへんで？」

「リインもですぅ！」

「ヴィヴィオもー」

「僕も気にしません！」

「私も、お父さんの食べ残しなら、別に・・・」

「わ、私も別に・・・むしろ・・・ゴニョゴニョ」

なんとたくましい人達でしょう。

はやて、リイン、ヴィヴィオ、エリオ、キャロ、ティアナと肯定意見が飛ぶ。

「そんなもん気にしてこの機会を逃してたまるかー！」

「そーだそーだー！！」

「うん、それに私たち家族同然じゃないですか！同じライトニング分隊だし！」

「そうそう！家族なんだから、気にしない！」

「うむ、この際仕方がない」

ヴィータ、スバル、フェイト、なのは、シグナムと妥協発言まで飛び交う。

おそるべし、ロールケーキパワー。

「どうぞ、好きにしてください」

近藤は諦め、皆の判断に任せた。

死闘の結果、フェイト、ヴィヴィオ、エレノアが勝利を勝ち取った。

三人は羨望の眼差しをうけ、仲良くおいしくロールケーキをいただいたのだった。

そして、各自の自由時間になるときに近藤がシグナムに話しかけた。

「ではシグナム副隊長、これからメディカルルームへ行きましょうか」

近藤のこの言葉と共にシグナムは硬直した。

こ、これから行うのか？

私の体を弄ぶのか？

いきなりドバっと汗が噴き出した。

心拍数が尋常ではないほど跳ね上がっている。

「な、何故メディカルルームなのだ？」

シグナムは努めて冷静に話しかけた。

「何故って、色々道具なんかの準備があるからですよ」

（道具ってなにー！？）

その場にいる全員がシンクロした。

エリオとキャロ、ヴィヴィオは首を傾げていたが、他のメンバーは顔を真っ赤にしている。

「さぁ、行きましょう」

近藤はシグナムの背中を押しながら歩いていった。

「ま、待て！私にも心の準備の時間を・・・」

シグナムは顔を赤くし、あわてふためきながら拉致されていった。

近藤とシグナムが食堂を出ていき、場の雰囲気がシーンと静まりかえる。

「さて、私もお風呂入って寝よーっと。おやすみー」

エレノアがふわーっとあくびをし、手をヒラヒラと動かしながら出ていった。

しはらくして、なのはとフェイト、はやての三人は念話で打ち合わせをした。

「（なのはちゃん、ヴィヴィオ寝かしつけてきて）」

「（了解！）」

「（フェイトちゃんも、エリオとキャロを）」

「（うん、わかった）」

念話が終了すると、なのはがヴィヴィオの手を引き、

「さぁヴィヴィオ、お風呂入って、歯を磨いて寝ようか？」

「はーい。おやすみなさい」

ヴィヴィオがお辞儀し、なのはに連れられ食堂を出ていく。

「さ、エリオとキャロも明日早いから寝ようね」

「はい、フェイトさん」

フェイトがエリオとキャロにそう言うと、二人は素直に自分達の部屋に向かった。

「じゃあ、私達も・・・」

そうティアナが言いながら食堂を出ようとすると、はやてに引き止められた。

「二人とも、ヴィータそれにリインに話しがある」

はやては真剣な表情で四人の顔を見る。
いったい何があるんだろうか？
それぞれがはやての言葉を待った。

「みんな、近藤さんとシグナム、気にならんか？」

「え？」

ティアナとスバルははやてが何を言っているのかわからなかった。

「だから、近藤さんがどんなイタズラをシグナムにしてるんか！知りたないか？」

言われてヴィータとリインも含めた四人は想像した。

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・はわわ！

トマトのように顔を真っ赤にする四人を見て、はやてはにんまりと笑う。

「でや、これから盗聴をしようと思うとる」

はやての言葉にティアナは焦った。

「ええ！？でも、こんなことなのはさんにバレたら・・・」

「その心配はない。なのはちゃんとフェイトちゃんもこの計画に参加しとる」

四人は驚いた。

だが、自分達に興味があるものに、彼女達が興味を示さないわけがない。

はやての後ろで静かに佇んでいたフェイトは、四人の顔を眺めるとコクンと頷いた。

時空管理局機動六課のエリートとはいえ、彼女達も１９歳の女性、”こういう事”には興味津々なのだった。

そしてしばらくしてなのはがヴィヴィオを寝かしつけて戻ってきた。

「お待たせー」

心なしか、なのはの顔が少し赤い。

よく見るとフェイトもはやてもほんのり赤く頬を染めていた。

「・・・よし、じゃあ始めるで」

はなてを中心に、なのは、フェイト、ティアナ、スバル、ヴィータ、リインは顔を赤くして頷いた。

これから見える未知の領域に期待と恐れを抱きながら。

はやてがメディカルルームを覗こうと魔法を使用したが、どうもうまくいかない。
映像が映しだされず、ノイズが入った状態で音声も拾えない。

「んー？おかしいな・・・」

魔法自体は発動しているのだが、何かおかしい。
はやては首を傾げた。
そこへティアナが何か気が付いたようにしゃべりだす。

「もしかしたら、盗聴防止の処置をしているのかもしれません」

「まさか、結界？」

フェイトが驚いたように顔をあげた。

「そうか、近藤さんは誰かがこういう行動に出ることを見越して結界を張ったんだよ」

なのはがあごに指を当てそう予想する。
すると、はやては上着を脱ぎ、シャツの袖をまくりあげた。

「ふふん、おもろいやないか。私と魔法勝負いうわけやな？近藤さんの結界魔法と私の盗聴魔法のガチンコ勝負や！！」

ここに、人知れずはやてと近藤の魔法勝負が開始された。

「・・・くっ！近藤さん、私の負けや・・・」

はやては片膝をつき、額に汗の粒を浮かべていた。結果として、映像を映し出すことは叶わなかったが、音声は多少ノイズが入るながらも拾うことに成功した。

「さて、気を取り直して・・・勉き・・・監視しよか！」

はやて達は耳を澄ませてメディカルルームの音声に集中した。

『・・・脱がなければ・・・』

（え！？脱ぐ！？）

『・・・力・・・抜いて・・・』

（えぇ！？ま、まさか・・・）

『・・・イタ・・・だ、大丈夫』

（ひやあぁぁぁっ！？）

『・・・な、なんだソレ・・・』

（なになになにー！？）

『・・・ローション・・・』

（ローション？化粧するんか？）

（違うよ！別のローションだよ、きっと！）

（別の？）

（クロノが持ってたよ、ローション）

（フェイトちゃん・・・）

『・・・あぁ・・・くぅっ・・・ハァ、ハァ・・・』

（あ、ああ・・・）

（つ、ついに・・・ぶほっ）

『・・・そんなもの・・・私に・・・』

（・・・）

『・・・ふふ・・・今夜は・・・』

「・・・・・」

ここで二人の行為は終わったようだ。
時間にして約３０~４０分程度、彼女達にとってはかなり密度の濃い時間だった。
はやては耳まで真っ赤にして聴き入っていた。
ちらっと横を見るとなのはとフェイトも同じような状態だった。
まわりを見ると他の四人がいない。
キョロキョロと辺りを捜すと、ティアナとスバルは鼻血をだして失神していた。
ヴィータとリインは頭から煙りをだし気絶していた。
この四人には刺激が強すぎたようだ。

「・・・近藤さん・・・道具は反則だよ・・・」

なのはは両手を頬に当て、顔の火照りを冷まそうとしていた。

「・・・これが大人の世界・・・」

フェイトはボーッと天井を眺めていた。

「・・・シグナム、明日は赤飯やな！」

はやてはホロリと涙を流し、家族が大人の階段を登ったことを祝福した。

彼女達は少しだけ大人になった。

## 第４０話（前書き）

前回の内容で、なにか勘違いされた人がいますが、はっきり言います。

これは全年齢対象です。ドエロはありません。

あってもＴｏｌｏｖｅる程度です。

なので、今回はその近藤とシグナムにスポットを当てました。

ゆっくり見ていってください。

# 第４０話

さて、メディカルルームでは一体どんなことが行われていたのか、気になる人はいるだろう。
そこで、少し時間を遡りノーカットで聞いていただこう。

シグナムは顔を青ざめさせ、部屋の隅に避難していた。
そんなシグナムを余所に、近藤は淡々とベッドのシーツをピンと張り直し、なにやらゴソゴソと持ってきた箱の中を探っていた。

シグナムは心底後悔していた。
確かに約束は約束、守るべきである。
だが、近藤がここまでなにか本格的にしようとは思ってもいなかったのだ。

どうしよう。
近藤にヒドイことをされてしまう。
傷なんかが残ったら、主はやてに顔向けできない。
だが勝負をした上での約束、破るわけにはいかない。

だがしかし・・・いや、でも・・・シグナムが思考の海に潜っていると、近藤がシグナムに近付いてきた。
手には布のようなものを持っている。

「シグナム副隊長、これに着替えてください。」

よく見ると、それは病院着のようなものだった。
シグナムは素直に受け取り広げる。
途端、顔を赤くした。

「な!?こ、これは・・・背中が無いではないか!!」

そう、病院着のように簡素な服だが、背中の部分がパックリ空いている。
当然、シグナムは抗議した。

「こ、こんなもの着れるか!こんな服を着なくても今の制服の上からすればいいではないか!!」

恥ずかしい格好で近藤に辱めを受けるなら、このままでも変わりはない。
だが、シグナムと近藤の間にはなにか意思の疎通ができていないようだった。

「いや、これ着てもらわないと汚れますよ?」

「汚れるような事をするのか!?」

シグナムは大声をだした。

「え?ええ、俺のマッサージにはこれを使いますから」

そう言いながら近藤はなにか液体の入ったビンを持ち、シグナムに見せた。
しかし、シグナムはそのビンには目がいかなかった。

ちょっと待て。
いま近藤はなんと言った?

「・・・マッサージ?」

「そうですよ。最近お疲れのようなので、少しでも体調を良くしていただこうかと」

シグナムは鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしている。

「・・・わ、私の体を弄ぶのではないのか・・・?」

「いくらこんな顔で鬼畜そうに見えても、俺はノーマルです。本人の同意が無いのにそんなことしません」

近藤はため息をつきながらシグナムに説明した。
それを聞いたシグナムは安堵の息を吐いた。

「そ、そうか・・・よかった・・・」

「というわけで、コレに着替えてベッドにうつ伏せになってください」

近藤は再び背中の生地がない病院着のようなものをシグナムに着るよう指示する。

「う・・・む・・・」

シグナムはマッサージと聞いて安堵したが、それでもこんな恥ずか

しい服を着るのはやはり気が引ける。

「どうしても、脱がなければいけないか？これを着なければいけないか？」

シグナムは懇願するような顔で近藤を見た。

だが、近藤はシグナムにピシャリとノーと言った。

「そうです。とりあえず、最初に検診をします。それから悪い部分をマッサージでほぐしていきます。さ、早くベッドへ」

シグナムはしぶしぶ従い、着替えた。また、その際に下着も脱ぐように言われ、

おもわずレヴァンテインで斬りかかりそうになった。

しかし、シグナムは何故か素直に従い、現在はノー下着、ノー背中の生地という状態だった。

（なんかスースーする・・・）

シグナムはしきりにモジモジとして下着が無いのを気にしていた。

はやてに出会う以前の彼女ならば、下着ごとき、胸を触られるがごとき、瑣末なこと。と切り捨てていた。

だが、シグナム達ははやてに出会い、平和な生活、家族というものを知ってしまった。感情が芽生えた。もう戻れない。この幸せな暮らしを手放せない。

シグナムはうつ伏せでベッドに横になる。

「はい、手は顎の下へ置いてください」

近藤に言われたように両手を顎の下に置く。
うつ伏せの状態で、背中が丸見え、下着はつけていない。近藤の位置からはシグナムの豊満な胸がベッドと自重により餅のように変形し、背中越しに横にはみ出ているのが見える。
当然シグナムも自分の状況を理解している。

（うぅ・・・近藤の視線が・・・）

シグナムの態勢からは近藤は見えなかったが、とても気になった。
いやらしい顔で見ていたら本気で刺すか？などと物騒なことも考えていた。
だが、近藤はシグナムの背中の上でなにやら手を動かしている雰囲気があった。

（・・・？何をしている？）

しばらくすると、近藤はシグナムにタオルケットを掛けた。

「はい、検診が終わりました。しばらく楽にしていてください」

そういうと近藤はメディカルルームの隅に置いてある机に移動し、モニタを展開してコンソールを忙しくたたきだした。

シグナムにはわけがわからなかった。
体を触りもせず、検診終了だという。
だが、とりあえずイタズラをされなかった事に一応安心した。

「お待たせしました。結果を発表します」

近藤はシグナムが横になっているベッドに近寄り、モニタを横に展開しながら話し出した。

「シグナム副隊長、最近便通がよろしくありませんね？」

いきなりの宣告にシグナムは顔を真っ赤にした。

「き、貴様！な、なんという・・・！！」

そんな怒り心頭のシグナムを近藤は無視して続ける。

「あと冷え症と肩コリですか。んー、魔力循環が隅々まで行き渡っていませんね」

シグナムは黙った。なぜこんなにも近藤はシグナムの身体状態を知っているのか。そもそも、便秘なんかの恥ずかしいことを、うら若き女性のシグナムが誰かに相談などするわけがない。

それに、確かに最近肩コリがヒドイとは思っていたし、冷え症などは最近足が冷えるからもしかしたら、程度に思っていただけなのだ。

「じゃあ、その辺を重点的に矯正しましょうか」

そう言うやいなや、近藤はベッドにあがりシグナムを跨いだ。

シグナムは焦りだした。

「ちょ、ま、まて！」

「力抜いてください。痛いですよ」

焦るシグナムを無視してシグナムの背中に羽織っていたタオルケッ

トをはがし、近藤はシグナムの背中に手を置きマッサージを始めた。

「ま！あっ！い、いたい！」

近藤はシグナムの背骨に沿って指圧を始め、その痛みにシグナムが声をだした。

「んー、これは仕事のし過ぎじゃないですか？ガチガチですよ。大丈夫ですか？」

「くっ・・・ん、そ、そうか？・・・うっ！・・・イタッ！だ、大丈夫だ！」

近藤の指圧は確かに痛い。だが、段々と体の筋肉がほぐれてきたのか痛みが少なくなり、気持ち良くなってきた。
指圧され、ほぐれていく部分が暖かくなる。

「痛かった所は体の悪い部分を示しています。シグナム副隊長は肩から首、背骨にかけてですね」

「せ、背骨？」

なにやら大事になりだしたのでシグナムは焦った。

「さて、じゃあコレを使います。少し冷たいかもしれませんが我慢してください」

そういうと近藤は先程もっていた液体の入ったビンをシグナムに見せた。

「な、なんだソレは？」

「ローションです。アロマオイルを混ぜたものなんで、リラックス効果もありますよ」

ローションという響きにシグナムは少しひるんだ。
しかし、近藤はまたもシグナムを無視し、手にローションをたらし馴染ませる。
ある程度手に馴染ませると、おもむろにシグナムの背中に手を乗せる。

「ひっ！？」

突然の背中の冷たい感覚におもわず可愛らしい声をあげるシグナム。
それに気が付いたのか、少し顔が赤くなる。

「さ、じゃあマッサージしますね」

近藤はなれた手つきでシグナムの背中を触る。触るといっても、ちゃんと血行をよくするように筋肉に添って手のひらを動かす。これにはシグナムも気持ちがいいようで、目を瞑り、大人しくしている。

「あぁ・・・これは・・・いい、な・・・くぅっ・・・ハァ・・・」

アロマオイルの匂いだろうか、いい匂いが背中から立ちこめ、またそれが気持ちを落ち着かせる。
シグナムは気持ちの良さからか気が緩んでいつも言わない愚痴のような事を言い出す。

「しかし・・・姉上は強かった・・・私もまだまだだな・・・ん・・・

・」

ときどき漏れる吐息が色っぽい。
だが、いまの近藤はマッサージに専念しているためシグナムのこんな仕草にも無反応である。それでもシグナムとの会話はする。

「あれは負けて当然です。シグナム副隊長、忘れてませんか？」

「あぁ・・・な、何がだ？」

「ご自分にリミッターが掛かっていることですよ」

そこまで言われてまどろみかけた頭が一気に冴えた。

「あ！まさか、姉上は魔力限定処置をされていないのか？」

「はい。以前のなのは隊長との時は魔力限定処置を行いましたが、あれはすぐに解除しました。それに、今回はそんな事する前にさっさと二人で始めましたからね」

シグナムはしまったという顔をした。あのとき周囲からの言葉に頭に血が上り、そこまで考えがいかなかったのだ。
シグナムたち程の高ランクの魔導士同士の戦いになると、いかに自分が主導権を獲るかにかかる。
自分に有利なフィールド、条件、体勢、タイミング。
だが、シグナムは模擬戦が始まる前から自分に有利な条件を放棄したのだ。

「し、しかしだな、あの『音速ダッシュ』だったか、あれは限定解除していたとしてもとても処理しきれん」

「あー、あれですか。実はアレには欠点があるんです」

「欠点？・・・ん・・・」

こんな会話をしているが、近藤は手を休めていない。相変わらずマッサージを続け、シグナムの背中の血行も大分活発になってきた。

「どうですか？背中が熱くないですか？」

「え？あ、ああ、なんかポカポカしているな。い、いや、そんなことより欠点とはなんだ？」

「あれは燃費が悪いんですよ」

「・・・燃費？」

「まあ、簡単に言いますと、シグナム副隊長が『音速ダッシュ』一回使うにつき、紫電一閃一回くらいです」

「・・・移動でそんなに魔力を消費するのか・・・」

シグナムは呆れていた。だが、あの音速移動は攻撃よりも脅威だ。それだけ消費する価値がある。

「それに、あれは魔力量によって左右されるものなんです」

「・・・？どういうことだ？」

「例えをだしましょうか。『界王拳』というのを知っていますか？」

「・・・聞いたことが・・・どこで聞いたかな?」

シグナムは記憶を掘り起こそうと考えていたが、近藤があっさり答えを出した。

「地球の漫画に『ドラゴンボール』というのがありますよね?あれに出てくる技です」

「・・・おお!たしか昔、近所の道場の子供達がそんな会話をしていたな。で、それがどうしたのだ?」

界王拳とは、使用すると体に赤い炎のようなオーラに包まれ、界王拳の倍数と同じだけ戦闘力が何倍にも上昇する。
あまりにも倍率を上げて使用すると体への負担が大きくなり長続きしないというものである。

『音速ダッシュ』とは、それに近い。つまり、魔導士ランクで言うと、Sランク程で音速ダッシュを使用すると音速を超える事ができる。
ただ、勘違いしないで欲しいのはSランクの魔導士が使用しても音速は超えられないということだ。
前回の近藤の言うように、人間というのは音速を超えれるような身体になっていない。
よって、間違って使用し、音速の壁を越えようとしようものなら、音速の壁にぶつかり、そこには人間だった肉の塊が残るのみである。
だが、前回の「封門」によりＡＡにランクダウンした状態だと、音速ダッシュを使用してもフェイトのソニックムーブ程度まで落ちる。
使える魔力が多いほど威力を発揮、それに比例して魔力を消費する技なのだ。だから、魔力消費が恐ろしく悪い。使用時間と距離にも

よるが、そう多くは使えない。
つまり、エレノアと戦おうとするなら、持久戦に持ち込みガス欠を待つのが一番手っ取り早いのだ。
それまで持ちこたえればの話だが。

今回のシグナムの敗因はエレノアの事を『音速ダッシュ』のみしか知らなかった事である。
攻撃方法、パターン全てが謎な相手に真っ向勝負をする。はっきり言って無謀である。
戦いに一番重要なことは情報である。
その情報が無ければ、集まるまで様子見などすればいいのだがシグナムは頭に血が上り、さらに彼女の悪い癖でもある「真っ向勝負」に打って出たのである。
それ等も踏まえたうえで近藤が挑発し、エレノアはシグナムと勝負した。

「なんと・・・ということは、今回の戦いは最初から姉上の手のひらで踊らされていたという事か・・・ちょっ、ど、どこを触っている!?」

近藤はシグナムとの会話をしながら淡々とマッサージを続け、今はふくらはぎから足を触っている。

「冷え性みたいですしね、あと、足の裏には色々なツボがあるんです。重要です、よ!」

「いたっ!?痛いぞ、近藤!!」

シグナムは近藤に足の裏をマッサージされ、突然の激痛に驚き訴える。

「足の裏のツボを押してます。ここは・・・あ、やっぱり肩ですね」

「くぅ・・・そ、そうか・・・ああっ!!しかし!こ、この痛みは・・・戦いの痛みの比にならんぞ!!」

シグナムは激痛に耐える。しかし、ここで気が付くべきなのだが、なぜかシグナムは近藤にされるがままで、逆らおうとはしない。そんなに痛いのなら抗えばいいのだが、シグナムは耐えるのみである。

「さて、先程のエレノアの話に戻しますが、皆さんエレノアの事をなにか勘違いしていますね」

「勘違い?つぁっ・・・い、いいいたい!やめてくれ!っておい!なんだ、その手に持っている物は!?」

シグナムはあまりの痛さに足元にいる近藤を見た。すると、近藤は手に１０ｃｍほどの長さの木の棒を持っていた。

「これですか?足裏のツボを押す道具ですよ。キくでしょ?」

「貴様・・・そんなものを私に使っていたのか・・・くぁ!いいっ!?」

近藤は足の裏を重点的に攻めている。
それでも話を続ける。

「勘違いというのは、エレノアは『夜天の書』のリインフォースと同じということです」

「ハァ、ハァ・・・・・・ん？どういうことだ？」

「つまり、『夜天の書』は『源書』を元に作られたものです。いわゆるコピーですね。
ということはですよ、エレノアとリインフォースは同じということです。見た目なんかそっくりでしょ？そんなエレノアがリインフォースより強いと思いますか？」

「・・・書としての魔法記憶に差があれど、本質的にはあやつと変わらんということか・・・確かに、リインフォースとなら勝てんことは無いな。しかし、どう考えても姉上のほうが強いと思うのだが・・・」

ぶつぶつと呟きながら考え込むシグナム。気づいているのだろうか、足裏マッサージに痛みが無くなっていることに。

「エレノアの最大の強みは『人間ではない』ということです。
人間の稼動範囲を超えた動き、それについてこれる驚異的は神経、そしてなによりそれをこなせる精神です。
”人間であろう”という思いをかけらも持っていないんです。あなた達も以前ならそう思っていたでしょう。していたでしょう。以前のあなた達ならば、エレノアにも勝てたはずです」

シグナムは息をのむ。近藤はシグナムに痛烈な一言を言おうとしている。
言わなくてもわかる。ここまでの話の流れで、うすうす勘付いていた。

「あなた達、ヴォルケンリッターは以前より弱くなった」

顎の下に置いてある手に力を込め握る。
魔導士ランク云々の話ではない。根本的なことである。
シグナムは近藤の話を聞いていて思っていた。確かに自分は人間であろうとした。それを望んだ。
その結果、自分達の強みを無くしてしまったのだ。
それでも、

「私達は今の自分に不満は無い。それが私達が選んだ道だからだ」

シグナムは確固たる信念で近藤に答える。
その目は確信に満ち、光り輝いていた。
近藤はそんなシグナムの答えに満足したのか、クスリと笑った。

「それでこそ、シグナム副隊長です。あなたはこれからも誇り高い武人として居て頂きたい。なんたって、あなたとヴィータ副隊長は俺にとってヒーローなんですから」

「んん？ヒーロー？それはどういう意味だ？」

「ははっ、秘密です。さ！終わりです。お疲れ様でした」

近藤はマッサージが終了した事を告げ、ベッドから降りる。
シグナムはベッドに座り、肩を回したり、首をひねったりして確認をする。

「お？・・・おお！すごいな！体が軽い！しかもポカポカと暖かい」

シグナムは満足そうに体を動かし続ける。

「最後にこのハーブティをのんで下さい。すっきりして整腸作用も

ありますから」

近藤は手に持っているカップにハーブティーを入れ、シグナムに渡した。

「ああ、いただこう。・・・ほぅ、初めて飲むが、さわやかで体にしみこむような感じがするな」

「さ、ソレを飲んだらお休みください。少し寝不足の気もありましたから、今日はぐっすり眠れますよ」

シグナムはふわりと普段見せないような微笑を近藤に向けた。

「ふふ。そうか、今夜は良く眠れそうだ。礼を言うぞ」

シグナムは近藤のマッサージが終わると制服に着替え、自室に戻った。部屋に戻るとはやてとリイン、ヴィータが居なかった。不思議に思ったがとりあえずシャワーを浴び、さっぱりするとシグナムに眠気が襲い掛かる。

（む・・・本当に眠くなってきた。先に寝るか）

そして、ベッドに入るとすぐに寝てしまい、熟睡してしまった。

次の日シグナムは久しぶりにさわやかな起床をした。

普段も寝起きは良い方ではあるが、今日はいつもより寝覚めがいい。
ベッドの上で伸びをして軽くストレッチをする。
頭すっきり、体も軽い。
シャワーを浴びに部屋に備え付けのバスルームへ行く。肌がシャワーから出る水を弾く。肌の上には丸く無数の水玉ができ、肌のハリが良いことを表していた。
身だしなみを整えていても肌のハリと艶が昨日より良く、化粧のノリもいい。髪の艶まで昨日とは段違いだ。
まさしく清々しい、最良の一日の始まりである。

さぁ、今日も一日頑張るか！

シグナムは気合を入れ、仕事に臨むのだった。

その日、何故かシグナムの朝食は赤飯だった。
それに何故か皆のシグナムを見る視線がいつもと違う。エリオ、キャロ、ヴィヴィオを除く全員が顔を赤らめてシグナムを見つめる。
若干視線が熱っぽい。

「おはようございます。主はやて」

シグナムははやてに近付き挨拶をした。
すると、はやては顔を赤くしながら少し慌てた風にし、挨拶を返した。

「お、おはようございます。シグナム」

シグナムは違和感を覚えた。いつもなら、「おはようさん」と関西弁で返してくるはずなのに、今日は何故か敬語だった。

「？」

何かおかしい。そう思い、はやてに質問しようとしたときに、近藤がエレノアを連れて食堂にやってきた。

「さぁ！食うぞー！」

エレノアは朝から元気いっぱいで両手を振り上げ、ハイテンションである。近藤もいつもと変わらず、落ち着いた風にしていた。
近藤は朝食を採らない。なので、いつも食堂に来てはエレノアの座る席の横でコーヒーを飲むだけである。
近藤はシグナムに気がつき、挨拶をした。

「おはようございます。どうですか、調子は？」

シグナムは柔らかな笑みで近藤に向く。
はやて達はそんなシグナムの表情にドキッとした。

「ああ、おはよう。体調はすこぶる良い。まるで生まれ変わったようだ」

「それはよかった」

周囲で朝食を採っていたはやて達は、食べるのを中断し近藤とシグナムの会話に聞き耳をたてた。

「近藤、その、また（疲れが）溜まったら・・・頼めるか？」

ざわ・・・

シグナムは少し頬を赤くし言った言葉にどよめきが立つ。
近藤はそれに頷き、

「わかりました。また（マッサージを）しましょう」

ざわざわ!!

シグナムと近藤の大胆発言にざわめきが大きくなる。
そこかしこでヒソヒソと話し声がする。

「朝から大胆!」

「いや、朝からする会話じゃないわ!」

「やっぱり大人になると垢抜けるのね!」

「大人の余裕ですぅ!」

「シグナムがあそこまで骨抜きになるなんて、近藤は相当のテクニシャンだな!」

「主としては複雑な心境や・・・」

「いや、ここは素直に祝福しようよ」

幸か不幸か、シグナムと近藤には周囲のヒソヒソ話は耳に入らなかった。
シグナムは満足そうに頷くと、

「うむ、ではまたな」

と言い、テーブルについた。
近藤もいつの間にか朝食を採っていたエレノアの横へ移った。
相変わらず大量の食事を流し込む姿に、胸やけする思いの近藤だった。

「ご主人様、シグナムちゃんとなに話してたの？」

頬をハムスターのように膨らませガツガツと食べるエレノア。

「食べながら喋るな。シグナム副隊長とは、昨日の事で少しな」

「あ～、アレね。確かにご主人様のはすごく気持ちいいもんね～。シグナムちゃんも虜にしちゃったんだ？」

「ぶーっ！？」

エレノアのこの発言にコーヒーを吹いたのはフェイトである。となりのなのははヴィヴィオが見ていたので、なんとか耐えていた。

「（こ、近藤さん！？）」

「（まさか自分のデバイスにまで手を！？）」

「（鬼畜や！鬼畜王降臨やー！！）」

なのはとフェイト、はやては念話でこれまた誤解からくる失礼な事を言い出した。

数日後、その誤解の噂がシグナムの耳に入り、必死に弁解するのだが、

「ええんや、うそなんかつかんでも。わたし等は二人の関係を祝福するからな！」

と、生暖かい目で言われてしまう始末。

「違うんです！本当にマッサージだったんです！！近藤！貴様もなにか言え！」

「必ずシグナム副隊長を幸せにします」

「うわあぁぁぁぁぁっ！？何言ってるんだ！？」

近藤はおもしろそうなので、事実を話さずはやて達に合わせた。当然シグナムはパニックである。普段冷静沈着な彼女にあるまじき取り乱しようである。

「シグナム、子供できたら抱かせてな？」

はやては聖母のような微笑みでシグナムを祝福した。

「あ、主はやてえぇぇっ！？」

シグナムの叫びが機動六課に響き渡る。

それからしばらく、顔を茹蛸のようにしながら誤解を解きに方々走り回るシグナムの姿が見られるようになったとか。

ちなみに近藤はシグナムに半殺しにされた。

## 第４１話（前書き）

また携帯がこわれた・・・画面にヒビが！！

というわけで、また更新が遅れるかもしれません。

そんなわけでお送りします今回の話は、季節はずれのネタです。

そして読んでいただくと、私がバラエティ番組大好きなのがわかると思います。

# 第４１話

ある夜、機動六課の宿舎の一階ロビーでは、ＦＷメンバー四人とヴィヴィオ、そしてリインの六人がテーブルを囲み、なにやらスバルの話を聞いていた。
今日の仕事が終わり、オフシフト（自由時間）になり風呂も入り終えたのか、スバルやエリオは髪がシットリと濡れていた。そして皆ラフな格好をしリラックスしていた。
真剣な表情で額を擦りつけ合うようにし、静かにスバルの話を聞いている。
何故かテーブルの中央にはロウソクが燈されている。

「・・・でね、その子はこう言ったの。

ねぇ、あなたの足を頂戴・・・」

「きゃあああぁぁぁぁっ！！」

一斉に叫び声をあげた。
どうやら怪談話をしていたようだ。

一息つき、先程とは打って変わりワイワイと騒ぎ出す。

「しっかし、あんたよくそんな怖い話知ってるわね」

ティアナは感心しているのか、呆れているのか、ため息混じりに言う。

「ホントに、今日は寝れません・・・」

キャロは少し震えてスバルの話を思い出していた。

「ホントですぅ！今度はやてちゃんに教えてあげるです！」

リインは怖い話が好きなようで、今日聞いた事をはやてに話してやろうと嬉々としている。

「ヴィヴィオもー」

ヴィヴィオもなのはとフェイトに話す気満々である。

だが、なのは達なかよし三人娘はこの手の話が大の苦手である。

上司の威厳として内緒にしている、皆知らない驚愕の事実である。

そこへ、風呂上がりのエレノアがロビーの自販機にジュースを買いに来た。

「あれ、皆なにしてるの？」

皆がエレノアに気が付く。

「あ！お姉様です！」

「エレノアさんもこっちに来てお話しませんか？」

リインとキャロに呼ばれ、エレノアがテーブルに寄る。

「いま怪談話をしてたんですよ」

「スバルさんのお話が一番怖かったです」

ティアナとエリオが少し震えながら言った。

「ふーん」

エレノアは反応が薄く、気のない返事をした。

「じゃあ、その怖い話というのを聞かせて？」

「まかせて下さい！」

スバルは自信満々に答え、ティアナ達は若干顔色が悪くなった。

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・

「・・・そして、上を見ると天井にあの看護婦さんが・・・」

「きゃあぁぁぁぁっ！」

キャロとティアナが悲鳴をあげる。

リインとエリオ、ヴィヴィオも少し震えていた。

しかし、エレノアはキョトンとしいた。

「・・・え？あ、終わり？」

怖がってくれると思っていたスバルは予想外の反応に戸惑った。

「は、はい・・・あの～、怖くなかったですか？」

スバルは恐る恐る聞く。

だが、エレノアは至って普通に、

「全然」

バッサリと切り捨てた。

スバルはショックを受け、落ち込んでしまった。

エレノアは少し悪いことをしたな、と思い、そういえばとある事を思い出した。

「ご主人様がこのテの話好きだよ。呼ぼうか？」

そう言いながら、返事も聞かずにモニタを出し近藤を呼び出した。

「あ、ご主人様？いま、ロビーにいるの！少しここでお話しない？ティアナちゃんとかエリオくんとかもいるよ」

モニタ越しの近藤は少し眠そうだった。

しかし、近藤は基本的にエレノアに甘い。なので、エレノアの誘いを受けることにした。

「わかった。少ししたら行く」

「怪談話？」

近藤はスバル達が話していた内容を聞いた。そして、エレノアが自分をココに呼んだ理由に納得した。

「成る程な、俺に話をしろっていうことか」

「せいかい～」

近藤はため息を吐きつつ、エレノアはそんな近藤にニコニコしながらいきさつを話した。

「あの、副隊長の怪談話って、怖いんですか？」

スバルが恐る恐る聞く。

そんなスバルを見て、近藤はニヤリと笑った。

「さぁ？どうだろうな？」

（ダメだ！絶対怖い！）

ティアナとエリオ、キャロはそんな近藤の笑いに危機感を覚えた。

＝＝＝

あるカップルが、親友の引っ越し祝いにその親友の家に向かう所から話しは始まる。

夜、車を使って、その親友の家に向かうのだが、二人とも初めて行くところなので道がわからない。
そのため、カーナビに行き先を設定して親友の家に向かったのだった。

ポーン♪

『1ｋｍ以上道なりです』

カーナビが音声で案内してくれる。

しばらく進むと、山の方へ進路を取った。

「ねぇ、あの娘の家って海に近いところって言ってたよね？大丈夫なの？」

助手席に座る彼女が運転する彼氏に確認をとる。

「大丈夫だよ。ナビにちゃんと登録して案内してくれてるんだから、大丈夫」

彼氏は気にすることなくナビの指示に従い、車を走らせる。

車はドンドン山奥へ進む。

ポーン♪

『あと、５００ｍで目的地です』

ナビが到着を案内した。

彼女はいやな予感がした。

元々、霊感が強い方だった彼女は息苦しくなってくる感覚に焦りだした。

「ねぇ、ホントに道合ってんの？大丈夫なの！？」

しかし、彼氏はまったく気にしない。

「大丈夫だよ、ナビにもそう出てるんだし」

ポーン♪

『あと、３００ｍで目的地です』

辺りを見ても明らかに海は見えない。山の奥深くに進んでいる。
彼女は段々息苦しさが辛くなってきた。
額に大量の汗が吹き出る。

ポーン♪

『あと、２００ｍで目的地です』

彼女は座っているのも辛くなり、ゼェゼェと息を切らしはじめ、寒気がしてきた。

ポーン♪

『あと、１００ｍで目的地です』

彼女は堪えられなかった。
そして突然

「止めてー！！」

と叫び、彼氏はビックリして急停止した。

「どうしたの、いきなり！？」

彼氏は彼女の異変に気づき、心配そうに見る。

「ご、ごめん、気分が悪くて、少し外の空気吸うね？」

そう言い、彼女は車のドアを開け外に出た。

そして、彼女は目の前の光景に恐怖した。

「い・・・いやあああぁぁぁぁっっ！！」

「どうした！？」

彼氏は彼女の悲鳴に驚き、自分も車の外に出て彼女の方へ行った。

「おい、どうしたんだ？」

彼氏が彼女にそう聞くと、彼女は自分の目の前を指差した。

彼氏はその指を目で追った。

そして驚愕した。

そこは断崖絶壁

前には道など無く、自分達はその絶壁の手前で止まっていたのだ。

「な、なんだよコレ！？」

彼氏はそう言い車に乗り込み、ナビに触ろうとした。

次の瞬間、

ポーン♪

『・・・死ねばよかったのに・・・』

＝＝＝

「・・・で、その山で昔遭難して死んだ人がいたらしい」

近藤が話を言い終わると、シーンとしていた。
辺りを見ると、エレノアを除く全員が顔を真っ青にしてガタガタ震えていた。あまりの恐怖に声もでなかったようである。

「ぼ、僕・・・今日、ひとりでトイレにいけない・・・」

涙目で呟くエリオ。

「し・・・洒落になってませんよ。その話・・・」

ティアナも目に涙を浮かべていた。

リインとヴィヴィオ、キャロはお互い抱きしめ合い、プルプル震えていた。

「こ、恐すぎです～」

「おおさまの鬼ー！」

「ふえ～ん」

呼ばれて来たのにえらい言われようである。

「ま、まあまあ、かな！うん。副隊長もなかなかやりますね！」

顔を青くして虚勢を張るスバル。震えているので全然大丈夫に見えない。

「あ、じゃあ、あの屋敷の話をしてあげたら？」

ただ一人、ケロッとしていたエレノアがまた近藤に怪談話をさせる気でいた。

それにスバルは慌てた。

「え！？いや、無理しなくても、べ、別にもういいですよ！？」

ティアナ達も首をフルフルと横に振る。

たった一つの話で相当堪えたようだ。

「じゃあ話すか。この話はな・・・」

近藤はティアナ達の意見を完全無視してまた新たな怪談話をしだした。

＝＝＝

男の一人が探検する様をビデオで録画し、後で皆で見ようということになった。

「おじゃましま～す」

調子にのって、悪ふざけをしながら玄関から入る四人。

「うわ～きったね～」

屋内に入ると電気は無く、夜なので当然暗い。頼りの明かりは自分達で持参した懐中電灯のみである。
部屋は至るところがボロボロで、畳などは踏むと腐ってしまっており、ベコベコで床が抜けそうである。

そして、四人は固まって部屋の中を散策する。

「・・・ここで、誰か殺されたのよね・・・」

四人の内の一人の女の子が神妙な面持ちでつぶやいた。
辺りをキョロキョロ見渡しながら散策を続ける。

「すいませーん！誰かいませんかー？」

「いるわけねーじゃん」

男二人はふざけ合い、はしゃぎながらビデオをまわしていた。

しばらくすると、浴室に着いた。
カビと泥などで真っ黒になり、タイルもヒビが入ったりして朽ち果てている。
そんな浴槽の縁に、銀色の指輪がポツンと置いていた。

「あれ？なにこれ」

男は無造作にその指輪をとる。

「へー、なんか曰くがありそうじゃね？」

「よし、これ戦利品として持って帰りまーす」

「えー、やめなよー」

彼等は終始ふざけたまま何も起こらず、あらかた見て回ったので帰ることにした。

四人は男の家に集まり、先程撮っていたビデオの鑑賞会を開いた。

「さ、何か映ってるかな～？」

男はニヤニヤと笑いながらテープをデッキに差し込み、再生ボタンを押した。

序盤は互いがふざけあっているのを見ながらはしゃいでいた。
そして、廃屋に入るとき、それは起こった。

「おじゃましま～す」

『・・・いらっしゃい・・・』

聞いたことがない女の声がした。
和やかな空気が固まった。
一瞬にして男の部屋には沈黙が流れる。

今の返事は誰？

皆聞きたかったが、聞くのが怖くて誰も口を開かず互いの顔を見るのみだった。
沈黙の中、ビデオの再生は止まらずに進む。

「・・・ここで、誰か殺されたのよね・・・」

『・・・私よ・・・』

「すいませーん！誰かいませんかー？」

『・・・ここにいるわよ・・・』

謎の声がそう言うと、部屋の破れたふすまの隙間からぬっと青白い黒髪の女が顔を出した。

四人以外の知らない女の顔が。

表情まではわからなかったが、とても生きているような肌の色をしていなかった。

四人はもう何も言えない。
冗談で撮った映像に本物が映ってしまった。
全員が顔面蒼白になりカタカタと震えだした。

そして、一人の女があることを思い出した。
視線が一人の男の手に持つ物にいく。

丁度ビデオが風呂場を映す。

「あれ、なにこれ？」

それは指輪

今、男が手に持っているモノ

「へー、なんか曰くがありそうじゃね？」

『・・・返して・・・』

「よし、これ戦利品として持って帰りまーす」

『返して。それは私のものよ』

「えー、やめなよー」

『返して。返して。それは私のものよ』

一斉に男の手に持っている指輪に視線が集まり、男から離れる。

すると、テレビからずっと女の声で

『返して返して返して

えた大声で

『返せ返せ返せ

せ返せ返せ返

「・・・で、みんなが扉の方へ向いたときに・・・」
近藤がその先を言おうとしたそのとき
「皆集まって何してるの？」
「ぎゃあああああぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！？」
近藤の怪談話の佳境に突然声をかけられ、聞いていた全員が絶叫した。
「え！？ちょっ、なに！？」
声をかけたのはなのはである。
なのは自身、いきなり絶叫されたのでかなり驚いた。
怒ろうとしたが、全員が顔を真っ青にしてガタガタ震え、涙を浮かべていたので何事かと思い、近藤に聞いてみた。
「・・・コレ、どうしたんですか？」
「今怪談話をしていたところなんですよ」
怪談と聞いた途端に体を強張らせるなのは。
当然エレノアがそんな動作を見逃すはずがない。

「なのはちゃんも聞いていったら？お仕事終わったんでしょ？」

エレノアはニヤニヤと笑いながらなのはを見る。

「結構です。明日も早いですし。さ、ヴィヴィオお部屋に行こうか？」

なのはは至って普通に断りをいれ、ヴィヴィオを連れていこうとする。

だが、エレノアはなのはを挑発する。

「あ、もしかして怖い？あ～ゴメンなさいね、気がつかなくて。そうか～なのはちゃんは怖いのが苦手なんだ～、ヴィヴィオでもちゃんと聞いてたのに、聞くこともできないくらい臆病さんなんだ～」

エレノアはわざとらしく声を大きくして言った。

負けず嫌いのなのはがこんなに挑発され、大人しく引き下がるはずもなく、

「別に怖くないです。いいですよ、怪談話？聞こうじゃないですか」

なのははムキになって椅子に座った。

そんな姿にエレノアはニマニマ笑い、近藤は苦笑いしていた。

## 第４１話（後書き）

はい、はじめての後書きです。

読んでいただいてわかった方もいると思います。

やりすぎコージーのネタです。

そして、あと2話ほど続きます。

# 第４２話

機動六課の宿舎ロビーにはＦＷメンバーとリイン、ヴィヴィオ、エレノア、近藤となのはが一つのテーブルを囲んでいた。

そして、そこにさらになのはに呼び出され、フェイトとはやても加わった。

二人は不満そうになのはを見る。

「なぁ、なのはちゃん？」

「・・・ごめんなさい」

なのはは素直に謝る。

エレノアに挑発されたとはいえ、ムキになり過ぎた。これでは子供ではないか。なのはは自分を叱責する。

「そんなことはいいの。どうして私達も呼ばれるの？」

フェイトがジト目でなのはを睨む。

なのははうっと息を漏らし、

「そ、その・・・どうせなら皆で怖いのを共有したいなー・・・なんて」

ようするに一人では心細かったのだ。

はやてとフェイトはため息をついた。

「さて、揃ったようですし、始めましょうか」
近藤はそう言うと椅子を座り直し、姿勢を正しくする。
その動作だけで場の空気が張り詰めた。
「少しリアルさを出すために話に、出て来る人物に身近な人の名前を使いましょうか」

＝＝＝

「ちょっと待ってください」

話の途中でティアナが割り込む。

「なんで私とヴァイス陸曹がカップルなんですか？」

ティアナは心外だといわんばかりにプリプリと怒っている。

「別にいいじゃん、話のなかだけなんだし」

スバルがまぁまぁとティアナをなだめる。

「それだったら私と副隊長がカップルでいいじゃないですか！」

ティアナが爆弾発言をする。

皆言葉の意味が理解できてしまう聡明な人ばかり。ヴィヴィオは「？」と首を傾げていたが、エリオとキャロでさえ理解していた。

「あら大胆、ご主人様に愛の告白？」

エレノアがニヤニヤ笑いながらティアナを茶化す。

ティアナは自分が何を口走ったのか今更気付き、完熟トマトのように顔を赤くした。

「え！？いや、べ、べつにそういう意味では！でも、その、副隊長がイヤとかじゃなくてですね？ヴァイス陸曹が彼氏というのが心外というか！」

ヴァイスが聞いていたら泣きそうな言葉を繰り出すティアナ。

手をブンブン振り必死に言い訳するティアナは、止めないとまだま

だ喋っていそうだ。

「わかった。じゃあヴァイスをやめて俺にしよう。話を続けるぞ」

ティアナは顔を赤くしながらコクンと頷く。口元が綻んでいたので、スバルやなのは達はティアナをニヤニヤと笑いながら見ていた。

＝＝＝

そこで、ティアナは来るときは近藤のバイクの後ろに乗って来たが、競争で危ないということで、クロノの車に乗ることになった。
バイクに跨がり、ヘルメットを被る近藤にティアナが近寄る。

「気をつけてね？」

「ああ」

そんな会話をしていたら、クロノが車のウインドウを開け、

「じゃあ、ゴールは僕の家でいいか？」

と言ってきた。エイミイもすでに助手席に座っていた。

「わかった。じゃあ行くぞ！」

近藤はそのままバイクを発車させた。

「あっ、おい！」

クロノは近藤を呼んだが、そのまま走り去っていく。

「まったく・・・じゃあ僕達も行くか」

そう言い、クロノもティアナが乗り込んだのを確認すると車を発進させた。

その日、近藤はゴールであるクロノの家に来なかった。

結局、その日はお開きになり、ティアナは夜に自分の家に帰った。
現在は深夜に近い午後１０時過ぎ、ティアナは一人考えていた。

（大輔どうしたんだろう・・・電話にも出ないし・・・）

ティアナは近藤に何度か連絡を入れたがまったく繋がらなかった。
嫌な予感がする。

まさか・・・

そう思った時、携帯電話の着信音が鳴る。

ディスプレイには

＜近藤　大輔＞

と出ていた。
ティアナはすぐに電話に出た。

「大輔？どうしたの？いま何処にいるの！？」

ティアナはまくし立てるように話す。

『・・・』

だが、近藤からの返事はこなかった。

「・・・大輔？」

ティアナはさすがにおかしいと思い、落ち着いて名前を言う。

『・・・ティアナ・・・おまえ・・・はやくこいよ・・・』

「・・・え？」

『はやくこいよ・・・はやくこいよ・・・』

近藤は繰り返し言う。

会話が成立していない。

「・・・大輔？はやくこいって、何処に？」

ティアナが近藤に確認を取ろうとしたとき、

ピンポーン♪

家の呼び出しベルが鳴った。

途端に電話が切れた。

「あれ？大輔、大輔？」

ティアナは呼びかけるが、電話はすでに切れていて通話できなかった。
その間も呼び鈴は鳴りつづける。

「あ、はーい」

ティアナは玄関に近寄り、ドアのレンズで確認することなく、そのままドアを開けた。

そこには

クロノとエイミイが立っていた。

「・・・どうしたの？」

ティアナが不思議そうに聞く。
なぜなら、二人の顔が暗く青ざめていたからだ。
そして、クロノが重々しく口を開いた。

「ティアナ、落ち着いて聞いてくれ。実は・・・」

「ちょっ、と、とりあえず上がってよ。ね？」

玄関で立ち話もなんだし、しかも夜だから近所迷惑になる。
ティアナは二人を部屋にあげ、リビングに案内した。
三人はテーブルを囲んで座った。
そして、クロノが再び口を開いた。

「実は、いまさっき管理局から連絡があったんだ・・・大輔のやつ、バイクで無茶な運転したらしい・・・」

クロノはくやしそうに吐露する。

「夕方に事故起こして・・・即死だったって・・・」

エイミイも泣きそうな顔をしていた。
だが、ティアナはそんな言葉が信じられなかった。
だって・・・

「え、なに言ってるの？大輔なら、さっき電話してきたのよ？」

夕方に即死ならば、いまさっきの電話は誰だったのか。近藤の声そっくりな人だったのか？

ティアナは携帯電話の着信履歴を見せる。
確かに、履歴にはついさっき連絡があったことを示していた。

クロノは驚愕した顔をしていた。

「そんな馬鹿な・・・だって、あいつの身元確認に行って、遺体も

見てきたんだぞ！」

「え？・・・嘘でしょ？だって・・・」

ティアナは未だに信じられないという顔をしていたが、

「つらいけど・・・本当のことなのよ。私も大輔の遺体を確認したもの・・・」

エイミイが目に涙を浮かべながら言う。

ティアナはなにかが抜け落ちたように、崩れ落ちる。

「・・・なんで・・・なんで・・・」

部屋の中が暗く重たい空気に包まれ、ティアナの啜り泣く声だけがする。

その時

ピンポーン♪

呼び鈴が鳴った。

「誰だ、こんな夜遅くに」

クロノが面倒臭そうに玄関を見る。
すると、

『おーい、ティアナー、俺だよ。開けてくれよ』

なんと近藤の声がした。
クロノとエイミイは青ざめた。

「ちょっ、嘘だろ!?アイツは死んだはずだ!」

あわてふためく二人を余所に、ティアナは玄関に近寄る。

「大輔？本当に大輔なの？」

涙でグシャグシャになりながらも、愛おしい男性の声に喜びが湧き出る。

クロノとエイミイはそんなティアナの腕を掴み玄関に行かないようにする。

「ティアナ!行くな!あいつは死んだんだ!」

「そうだよ!きっと、ティアナのことを連れていこうとしてるんだよ!」

二人が説得するがティアナは必死に玄関に行こうとする。

「大輔!大輔!」

『開けろよ。開けろよ。ティアナ、こっちにこいよ』

ドア越しに聞こえる近藤の声は抑揚がなく、ただ開けろと、こっちにこいしか言わない。

終いには、ドンドンとドアを叩きだす。

『開けろよ。こっちにこいよ。開けろよ。こっちにこいよ』

ドンドンドン

ドンドンドンドン

「行くな！大輔は死んだんだよ！！」

「行っちゃダメだよ！」

二人はなおも説得を続け、腕を引っ張る。

「大輔！大輔ー！」

ティアナは泣き叫びながら、近藤の名前を言った。

そのとき

『・・・クロノとエイミイだよ。死んだのは・・・』

「――――――――――え？」

瞬間、部屋の空気が変わる。

冷たく、凍えそうな空気、視線。

ティアナを握る手が強くなる。

ギリギリと痛くなる。

その手が冷たくなる。

ティアナは掴まれた手を見る。

先程までの生気溢れる色から、白く、青く、黄色く、死んだ者のような色に。

その手は傷だらけで、肉が裂け、爪がはがれ、骨が見えている。

ティアナは手から視線を上に上げる。

白く、青く、黄色く、肉が裂け、血だらけで骨が剥き出しで、服がボロボロで

その目は生気が無く、濁り、陰り、ただ憎しみが宿る目。

「いいやあああぁぁぁぁっ！！」

ティアナは掴まれた手を振りほどこうともがくが、強く握られ離してくれない。

『開けろよ。ティアナ。開けろよ。こっちにこいよ』

ドンドンドン

ドンドンドンドン

「大輔！助けてー！！」

ティアナの視界が白くなってくる。
近藤の声も遠くなってきた。
扉が遠くなる。

近藤の声が遠くなる。

ティアナの意識が

遠くなり

そして

「ティアナ。ティアナ」

優しく呼びかける声。
手は温かい、大きく包まれている。

瞼を開ける。

そこは白い壁。いや、自分はどうやら寝ているようだから天井か。

「ティアナ！」

声のした方には、近藤の顔。そして温かいと感じた手は、近藤が手を握っていてくれていた。

「・・・大輔・・・」

近藤の話によると、事故を起こしたのはクロノの車らしい。
脇見運転でトラックとぶつかり、運転手のクロノと助手席のエイミイは即死だったらしい。

唯一、後部席に座っていたティアナは多少の傷と打撲のみだったという。

あれは、あの夢は、クロノとエイミイがティアナを連れていこうとしていたのだろうか、それはわからない。

だが、ティアナの腕には何かに強く握られたような跡が残っていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「・・・」

誰も喋らない。

途中、何人か叫び声を上げていたが、終わってみれば声をあげることなく、真っ青になりガタガタ震え、涙目になっている。

「・・・途中のどんでん返しが・・・あんなん卑怯や・・・」

はやては青い顔で批難する。

「・・・うぅ・・・なのは、恨むよ・・・」

フェイトが涙目でなのはを睨んでいた。

そんな元凶であるなのはは、顔を青くしながらも笑顔だった。
ただし、手はスカートの端を握りしめ、力が入りすぎているのか、
血管が浮き出て、指が白くなっていた。
もうこうなったら意地しかない。

「うん、怖かった。さ、もうお開きにしようか？」

なのはが普通のトーンで解散を促す。わずかに震えているのはご愛嬌。
だが、ここで思わぬ伏兵が現れる。

「えー、まだ聞きたいー！」

「ヴィヴィオ！？えっと、もういいんじゃないかな？」

なのはは焦る。
先程の話はかなり堪えた。これ以上ここにいたら泣き叫ぶかもしれない。
そんな醜態を、上官としてティアナ達に見せるわけにはいかない。
そんなことになったらしめしがつかないではないか。

「えー！？」

珍しくぐずるヴィヴィオ。どうも怖がってはいるが好奇心の方が勝るらしい。
なのはとしては勘弁してほしいのだが、そんなことを言えるわけもなく、ただあたふたするのみだった。

「じゃあ、次で最後にしようか？」

エレノアは欠伸をしながら言った。
どうやら、自分が眠いから終わってもいいらしい。まったく勝手なデバイスである。

「ねぇ、ティア。今日は一緒に寝ていい？いいよね？寝ようよ。寝てください！」

スバルがすがるようにティアナに近寄る。

「・・・仕方ないわね。今日だけよ？」

ティアナはやれやれといった風な態度をとった。
しかし、内心ホッとしていた。
スバルが言い出さなかったら、プライドをかなぐり捨て自分から言おうとしていたのだ。

エリオとキャロも今日に限り一緒に寝ることにした。
ちなみに、エリオはこの話の途中少し漏らした。
何を漏らしたかは各々の想像におまかせする。

はやても、

（今日はヴィータと寝よう。それかシグナムにお願いしよう）

そんなことを考えていた。

皆精神的にボロボロな状況のなか、その元凶である近藤はというと、何を話そうか考えていた。

「んー、じゃあ最後は怪談じゃなくて、都市伝説の話でもしましょうか」

それを聞いた途端、エレノアがビクッと震えた。

「・・・まさか、アレ？」

思い出したのか、エレノアは鳥肌が立ち、腕を手でこすりはじめた。

いままでケロッとしていたエレノアの豹変ぶりに、なのは達はゾクッと体を震えさせる。

聞いちゃいけない気がする。

聞いたら後悔する。

全員がそう思った。

# 第４３話

「これは、あるアイドルにふりかかった恐るべき出来事です」

＝＝＝

「あ、はい！お疲れ様でした！」

なのはも元気よく返事を返す。

すると、マネージャーの後ろからひょっこり顔を出す二人がいた。

「お疲れ様、なのは」

「お疲れさん、なのはちゃん！」

親友のアイドルのフェイトとはやてである。

「あ、フェイトちゃん、はやてちゃんお疲れ様！」

なのはは社交的で友達が多いが、特にフェイトとはやてはその中でも仲がいい。

「なのはちゃん、マネージャーさんからスケジュール聞いたで。今日はもう仕事ないんやろ？」

「え？うん」

今日は珍しく仕事が終わり、午後からオフだったのだ。

「じゃあ、予定通りできるね」

「え？」

はやてとフェイトはニヤニヤと笑って自分のスケジュールを言う。

なのはには笑う意味がわからなかった。

「あー、わかっとらんな？」

「今日は何の日？」

「・・・・・・あ！」

なのはもようやく二人のいわんとすることがわかった。

「誕生日！」

そう、今日はなのはの誕生日である。
仕事が忙しくてすっかり忘れていた。

「だから、今日はわたし等でお祝いしようと決めとったんや」

はやてはしてやったりといった顔をしていたが、なのは自身が忘れていた事を覚えていてくれたのが嬉しかった。

「ありがとう、はやてちゃん！フェイトちゃん！」

なのはは満面の笑みでお礼を言う。
はやては照れ隠しにポリポリと鼻の頭をかく。

「じゃあ、早速なのはの家にいこうか」

フェイトも微笑んで、なのはを急かすように手を引く。

「うん！」

三人は笑顔でテレビ局を後にし、なのはの家に向かった。

「誕生日」

「おめでとー！」

「ありがとー！」

三人で赤い液体の入ったワイングラスを当てる。チーンという音が部屋に響く。

今なのはは一人でマンションに暮らしている。

一人暮らしには少し広い２ＬＤＫに住んでおり、今三人はリビングでパーティーをしていたのだ。

はやてが得意の料理を披露し、皆で舌鼓をうつ。

フェイトがワインを持ってきて皆で喉を潤し、アルコールに酔う。

「さぁ、なのはちゃん、これは私からのプレゼント！」

はやての手には大きなイチゴケーキが乗っていた。

「わー！ありがとー、はやてちゃん！後で食べようね？」

「私からはコレ、探してたでしょ？」

フェイトからは音楽ＣＤが。

「あ！コレ何処にも売ってなかったんだよ！ありがとう、フェイトちゃん！」

なのはは親友二人のプレゼントに満面の笑みである。
そして、しばらく食事をしながら談笑をしていたときに、はやてはテーブルの横に置いている箱に目がいった。

「なぁ、なのはちゃん、その箱の中身ってファンの人達のプレゼントやんな？」

皆の視線が箱にいく。
なのは達が家に帰る前に、マネージャーから渡された箱で、中身はファンからの誕生日プレゼントだと聞いている。

「見てみない？」

フェイトも興味があったようだ。

「うん、見ようか」

なのはが箱を開け、中身をひろげた。
中には、
子供のファンからの似顔絵

セクシーランジェリー

バラの花束

色々なものがはいっている。

それ等を見て三人でキャッキャと騒ぐ。

そんな中に、ディスクが一枚入っていた。ケースにバースデーカードが一枚挟んであるだけである。

ディスクはレーベルは白く、何も書かれていない。よく見るとＤＶＤのようだ。

「ん？なんやコレ」

はやてはケースをひっくり返したりいろんな角度で見る。

「ＤＶＤ、だよね？何にも書いてないけど」

フェイトも覗き込むように見る。

「・・・見てみよか？」

はやてがいたずらっぽく笑いながら言う。

「え・・・やめようよ。なんか、へんなヤツだったら怖いし・・・」

何も書かれていないレーベルになのはは不安になった。

ファンではなく、イタズラで変な映像が流れるかもしれないのが怖かったのだ。

「大丈夫だよ。見よ、ね？」

フェイトもそう言うので、なのはは渋々頷く。

「じゃ、入れるで」

はやてはディスクをデッキに挿入した。

しばらくして、自動再生で映像がうつる。

画面には、中央に男が一人立っていた。

その男はいかにもオタクです、という姿だった。

ボサボサの長い髪、メガネに、太った体、青白い顔、何かアニメのプリントの入ったTシャツ、そして何か鼻息が荒く、ふーふーと聞こえる。

『あれ、これ映ってるかな・・・』

何かブツブツ言いながら、映しているカメラをガサガサといじる。

やがてしっかり固定できたのか、少しカメラから離れた。

いままで画面いっぱいに男しか映っていなかったので、部屋の内装が見えるようになる。

なのははその部屋の光景を見て固まり、青ざめた。

フェイトとはやてはそんななのはの態度に気づかずに画面を見ている。

『ハッピバースデートゥーユー、ハッピバースデートゥーユー・・・』

男はちまちま踊りながらブツブツ小さい声でバースデーソングを歌う。

「うわ・・・最悪や・・・」

はやては頬杖をつきながら顔をしかめ、悪態をつく。

「これは、ちょっと・・・」

フェイトも苦笑いしていた。
こんな内容だとは二人とも思っていなかったようで、軽くため息をついた。

「ごめんね、無理に見ようなんて言って・・・」

そう言い、フェイトがなのはの方に顔を向けると、

なのはは顔を真っ青にし、

ガタガタ震え、

ボロボロと涙を流していた。

掴んでいた腕は、強く握りすぎて爪がくいこんでいた。

フェイトとはやてはなのはの尋常ではない様子に慌てた。

「ちょっ、なのはちゃん!?」

「どうしたの!?」

二人はなのはに駆け寄り手を握る。

すると、なのははゆっくりと震える指で画面を指差し、小さくこう言った。

「・・・わ・・・わたし・・・の・・・へや・・・」

「・・・・・・え?」

フェイトとはやては画面を見る。

男が踊っている部屋

わたしのへや

まさか

すぐに立ち上がり、なのはの寝室を勢いよくあける。

なのはの部屋は

画面と同じ位置にある同じ机

『ハッピバースデー』

画面と同じ位置にある同じベッド

『ハッピバースデー』

画面と同じ位置にある同じ白いクマのぬいぐるみ

『ハッピバースデー』

画面と同じ位置にある同じクッション

『ハッピバースデー』

画面と同じ色の壁紙

『トゥーユー♪』

「いやあぁぁぁぁっ！！」

頭を抱えフェイトが叫び、はやては顔面蒼白でその場に腰が抜けたように座り込む。

画面では、男のバースデーソングが終わった。

なのははボロボロ涙を流し、放心状態で画面を見ていた。

『誕生日おめでとー』

パチパチ　パチパチ

小さい声で、小さく拍手する。
そして、男は後ろのベッドの方へ向いた。
ハーハーと男の息遣いが聞こえる画面では、

モソモソとベッドが動いていた。

なのはが寝ていたのだ。

＝＝＝

「・・・という都市伝説でした」

「・・・・」

誰も何も言わない。

近藤の隣では、エレノアが自分を抱き抱えるようにして、ゴシゴシ腕を動かしている。

「う～、相変わらず気持ち悪い話！」

ＦＷ四人も同じ気持ちだったようだ。

「・・・怖いけど、リアルすぎて気持ち悪い・・・」

ティアナが顔を青くしながら言う。

「・・・まさしく都市伝説・・・やっぱり一番怖いのは幽霊じゃくて人間だったんだ・・・」

スバルがなにかいい感じのセリフを言って、締めるような言葉を言った。

エリオとキャロはガタガタ震えてお互いの手を握り合っている。

「こわいですね～、はやてちゃん」

リインが顔を青くしながらはやてにそう言うが言葉が返ってこない。

「はやてちゃん？」

「・・・もうＤＶＤ見られへん・・・」

ブツブツ呟くはやて。目は焦点が合っておらず、廃人のようだった。

「私にもファンていう人達からこういうの貰うけど・・・もうダメ・・・見れない・・・」

フェイトもあさっての方を向いて涙目でブツブツ呟いていた。

はやてやフェイト、なのは達はメディアに出ることが多く、そこら辺のアイドルより綺麗なルックスで一般人のファンも多い。だから、何かとそういうプレゼントなんかももらうらしい。

そして、なのはは俯いたまま体を震わせていた。

「なのはママ？どこか痛いの？」

ヴィヴィオが心配そうになのはを見上げる。

「・・・ぐす・・・うぅ・・・ひどいよ・・・・・・・ひっく・・・ふぇぇん・・・」

なのはは泣いていた。

自分の名前で話が進み、恐すぎて、気持ち悪すぎて、おもわず涙がでてしまった。そうなるともうとまらない。滝のようにとめどなく涙がながれ、自分ではどうにもできなくなる。

ぽろぽろ涙をこぼし、顔を手で覆う。

そんなおもしろいシチュエーションをエレノアが見逃すはずがなく、

「あー！なーかしたーなーかしたー！いーけないんだーいけないんだー！」

「うぇっ！？」

エレノアが煽り、近藤が焦る。

「いーけないんだーいけないんだー！いーってやろーいってやろー！リンディさんにいってやろー！」

なおもエレノアは近藤を詰る。

「だ、だって、怖い話しろって・・・」

「ものには限度がありますー！」

近藤はあたふたする。

「おおさま！ママ泣かしたらメッなのー！」

ヴィヴィオがプンプン怒っていた。

なのはを守るように近藤の前に立ち、両手をブンブン振り回している。

「いや、そんな泣かすつもりじや・・・」

強面の近藤が子供のヴィヴィオにヘコヘコ頭を下げるという、奇妙

な光景に皆ア然としていた。

ただ二人だけ、フェイトとスバルはそんな泣いているなのはを見て、

（泣いてるなのはもかわいいにゃ～）

（あぁ・・・あの凛々しいなのはさんが・・・可愛い・・・）

などと、だらしない顔をして不埒なことを考えていた。

その後、なのはを泣かせたお詫びとして、何故か前線メンバー全員に夕食をおごることになった。

「ちょっと待て！おごるならなのは隊長だけでいいじゃないか！？」

「ご主人様に選択権なんて無いの！私が法律なの！！」

「最低だな、お前！」

「私にとって、その言葉は褒め言葉でしてよー！！おーほっほっほっほっほー！」

「くっ・・・絶対「なんでさ」とか「不幸だ」とか言わないぞ！・・・でも・・・理不尽だ・・・」

エレノアの言葉に強く言えず、結局その通りに従うのだった。

後日、前線メンバー全員を連れてレストランへ行き（食い放題は却下された）、スバルとエリオ、エレノアという胃袋が宇宙の人間に骨までしゃぶられ、尻の毛までぬかれた近藤だったとさ。

後日の後日、ＦＷメンバー、リインとエレノアの雑談。

スバルがエレノアに聞いてみた。

「エレノアさんは幽霊とか怖くないんですか？」

エレノアはキョトンとしていた。

「・・・怖い？」

首を傾けながら考え、しばらくしてポンと手を叩いた。

「ああ、あなたたち見えないのね？だから、怖いんだ！」

エレノアの言葉にティアナが顔を引き攣らせた。

「・・・見えない？・・・ま、まさか・・・」

「見えないから怖いんだよ。あんなもの見えてたらどうってことないよ？」

さも当然のように語るエレノア。

「・・・お姉さま・・・幽霊見えるんですか？」

「あれ？リインちゃん見えない？あ、チャンネル合わせてないのかな？」

なにやら重要なことを言い出したが、深く掘り返すと自身の身に降りかかりそうなのでリインはあえてスルーした。

「大体、幽霊なんて大概は自分では何もできない奴等ばっかりなんだから、一発ビビらせたら出て行くよ」

「ビビらせる？」

エリオが首を傾げる。

幽霊を威圧させる方法とはどういうものなのか、少なからず興味があった。

エレノアはスーッと息を吸い、

「うおおいぃっっ！！」

思いっきり声を出した。

おもわずビクッと体をこわばらせるＦＷメンバー達。

「な、なんですか！？」

「・・・と、いう風に声を出して怒ってやれば幽霊は出て行きます。

そもそも、何かを伝えたくて姿を現すのに人間を怖がらせるとか逆

効果じゃない？だから、そういう輩は怒って追い払うの！！」

へーっと感心する。なんとなく説得力があった。
言葉は言霊という、魂をのせることができる。
つまり、心からの言葉には魂が宿り、幽霊にも通じるという事だ。

「それでもどこかに行かない幽霊だったら？例えば、悪霊とか・・・」

スバルは少し体を震わせて聞いてみる。

そんなスバルに、エレノアはとても意外な解決法を言った。

「そんな奴は殴る！！」

「・・・・・・は？」

「言うこと聞かない幽霊には鉄拳制裁でわからせる！」

「・・・・・・えぇ～・・・」

みんな呆れてしまった。
先程までの雰囲気から一気にかけ離れた答えに唖然としてしまう。

「幽霊って殴れるですか？」

リインがエレノアに聞く。
幽霊とは肉体が無い。なので人間には触れる事も不可能なはずである。

「あなた達は、魔力と、霊能力・超能力・神通力などなど、それらは力という面では全て同じモノだって事を理解している？」

「・・・？」

エレノアの言うことに、そろって首を傾げるＦＷ４人とリイン。

「あー、いいや。理解しなくても。とりあえず、魔力で幽霊を吹っ飛ばせるって事なの。例えば、こんな風に！」

エレノアは拳を黄金に輝かせ、魔力をこめファイティングポーズをとる。そして、ティアナの右肩の上あたりの空間に右ストレートをくり出した。

その時、何も無い空間なのにクッションを叩いたような、ボフッという音がした。

「え！？」

ティアナはおもわず横に飛び、エレノアの拳を突き出した空間を見る。

「な、なにを・・・？」

「幽霊を殴ったの」

事も無げにポロッと衝撃の言葉を発するエレノア。

「え！？ゆ・・・わ、私の近くに！？ゆう・・・えぇ！？」

ティアナは混乱する。

スバルたちも混乱した。いきなり幽霊を殴ったとか、そんな電波なことを言われて、はいそうですか、と理解できない。
しかし、エレノアはその行動のことごとくが破天荒で、それ等全てが真実だった。
その経緯から、信じるしかなかった。

「ど、どんな幽霊を殴ったんですか？」

キャロが恐る恐る聞く。

「え？ティアナちゃんのお兄さん」

エレノアはケロッとした顔でそう言った。

ティーダ・ランスターは死亡後も妹が心配で、背後霊としてティアナを見守っていたのだ。

「・・・兄さあぁぁぁぁぁぁぁんんんっっっ！？」

## 第４３話（後書き）

ティアナ　「兄さんはずっと私を見守ってくれてたんだ・・・」

スバル　「よかったね、ティア！」

テ　「・・・うん」

エレノア　「でも、ずっと見てたって事は、寝てるとこも、お風呂入ってるとこも、トイレ入ってるとこもみーんな見てたのよね？」

テ　「・・・・・・・・・・兄さん？」

ス　「エレノアさん、ティアのお兄さん今どんな顔してますか？」

エ　「・・・・・・・ぅゎ・・・鼻の下伸ばしてる。
・・・え？『立派に育ってうれしい』？
・・・『友達のスバルもなかなか良い』？」

テ　「成仏しろ！エロ兄貴！！」

## 第４４話（前書き）

作者　「更新が遅れてすいませんでした・・・」

シグナム　「貴様・・・なんだその態度は！響か！！」

フェイト　「シグナム！そっとしてあげて」

シ　「む、なんだテスタロッサ。こいつの肩を持つとは・・・」

フ　「実は作者さん、車をぶつけられたんだよ・・・」

シ　「・・・なに？」

フ　「相手の過失なんだけど、事故の場所がスーパーの駐車場だったんだ」

シ　「・・・それは・・・なんというか・・・」

フ　「警察の介入もないし、道路交通法も適用されないから、
この場合両方に過失が発生するんだよ」

シ　「・・・・・・」

作　「くそ・・・なんで悪くないのに保険の等級が下がるんだ！
保険料が上がるんだ！こんなに手間がかかるんだ！！
俺は悪くないんだぞ！！」

シ　「だから、心的ショックでしばらく書いていなかったという事

か・・・」

フ　「そうなんだ。だから、ね？」

シ　「・・・うむ、まあ今回は勉強だと思って切り替えることだ。
　　元気を出せ、な？」

作　「・・・こんな事を書いているのが段々空しくなってきた・・・
　　」

シ　「おい！それは言っちゃダメだろ！？」

フ　「というわけで、今回ものんびりと見ていってください」

# 第４４話

リンディ・ハラオウン統括官はモニタとにらめっこしていた。
それはある人物の報告書だった。

＝＝＝

施設内に残されたデータをコピー
その後魔法行使により施設破壊
※画像添付参照

＝＝＝

・・・いや、一つだけある。しかし、それは魔法ではないし、人間が発動できるモノではない。まして、地上で使えるモノでもない。

一体、どんな方法でこうなるのか、思考の海に潜っていたら、声をかけられた。

「なに難しい顔してるの、リンディ？」

リンディは声の主の方を向く。

「あら、レティ」

彼女はレティ・ロウラン提督。リンディの同期であり、親友であり、有能な管理局員である。

リンディが次元航行艦を降り、非現業へと移ったとき彼女も同じく艦を降りた。

現在は人事部に所属し、自由気ままに、ときに忙しくデスクワークをこなす身である。

「あなたがモニタを見て唸ってるなんて珍しいわね」

レティは中指でメガネをクイッとあげニヤリと笑った。

リンディはそんな仕草に苦笑しつつ、モニタに目を戻した。

「少し・・・ね」

いつもサバサバしてハッキリモノを言うリンディには珍しく、なんとも歯切れの悪い返答にレティは訝しむ。

レティはリンディの背後に回り、モニタを見た。

どうやら報告書のようであるが、ザッと見たところ特に問題点などなさそうである。

「なに？別に問題があるようには・・・っ！？」

レティは報告書の提出者の名前を見て顔を強張らせた。

「・・・近藤・・・大輔・・・」

レティはみるみる顔を青くする。リンディはそんなレティの変貌を見ても特に気にすることなくモニタを見続ける。

そう、リンディが見ていた報告書は以前近藤に依頼した、スカリエッティの研究施設の調査と破壊、それだったのだ。

「あなた！この子とまだ関係してたの！？」

レティは声を荒げる。冷や汗をかき、僅かに震えてさえいる。

「ええ。だって大輔君は私の部下だもの」

リンディの慌てる風もなく答えるその姿と発言に、レティは目を見開いた。

「なっ！？そんな事聞いてないわよ！？」

「言ってないもの。それに言えば反対するのが目に見えてるし」

「当たり前よ！！」

リンディの冷静な態度にレティは声を荒げて反論する。

確かに、近藤がリンディの部下だという事実は書類やデータにはない。
だが、人事部のレティが知らないということは、自分よりも更に上の圧力がかかっていると考えるのが妥当である。
つまり、三提督は了承し、さらに内々での密通をしているということだ。

近藤の職席は「地上」である。
リンディのいる「次元（そら）」が地上の人間を部下にすることは地上側が嫌う。
本局と地上本部との交流がなされず、お互いが孤立していく。
それ程に双方の関係の軋轢は深刻なのだ。まして、近藤は特に有能ではない（と思われている）し、なによりあの「エースオブエース」に「キズ」をつけた人物である。
好きこのんで関わる事の方がおかしい。

レティの怒る姿を見て、リンディはハッキリと言う。

「レティ、私達は彼に償うべきなのよ」

リンディの言葉にレティは声を詰まらせた。

「私達は彼の過去を、未来を、人生を無茶苦茶にしてしまった。自分達の利益のために。してはいけない事をしたのよ」

「・・・それは・・・」

レティは苦しそうに顔をしかめ、リンディから視線をそらす。

「レティに強要はしないわ。これは忘れたい過去であり、管理局の

汚点ですもの。アレが表ざたになれば管理局の存在が危ぶまれるのは間違いない。でも私は一生彼に償う、例え罵られようとも、偽善と言われようとも、ね」

リンディは自分の気持ちを言うと、再びモニタを眺めた。もう話すことは無いということだろう。

レティはまだ何か言いたそうだったが、リンディの態度にため息をつき、呆れながらこう言った。

「まったく、頑固なところは息子ソックリね」

「私が息子に似たんじゃないわ。息子が私に似たのよ」

リンディはニコリと笑っていた。

そんなしんみりした雰囲気になったとき、いきなり総務部の自動ドアが力ずくでバコーンと音をたてながら開けはなたれた。

「ハロー！元気にしてるかなー？若作りのアラフォー諸君！！」

勢いよく部屋に入ってきたのはエレノアである。

手を上げ、大股でドシドシと音をたててリンディ達に近づく。

エレノアは青い本局の制服を着て、その上に白いマントを羽織っている。これが彼女の正装なのだ。

レティはそんなエレノアを見て顔を引きつらせた。

「ア、アルファード・大将・・・」

レティはエレノアが苦手である。
個人情報が全て不明のうえに、経歴不明の人間がいきなり大将に抜擢されるという怪しさ、にもかかわらず三提督という巨大なバックを持つ。
そのうえ仕事をしないわ、局員をからかったり、イタズラしてまわる子供のような態度をとるのに、辞めさせられることなく、逆に三提督が擁護する始末。
それなのに、たまに見せる知識・技能は有り得ない程豊富で優秀、それだけを見れば大将の役職も頷けるのだ。

なまじ役職が上なだけに下手に注意することもできず、したとしても聞かない。
手に余る人物なのだ。

「アルファード大将、お久しぶりです」

リンディはニコニコと普段通りの笑顔で挨拶をする。

「ハロー、リンディさん」

エレノアも片手をあげて挨拶する。
リンディはエレノアの存在を誕生の頃から知る数少ない人物である。
と言っても、あと知っているのは近藤と三提督だけだが。
だから、リンディにとってエレノアは娘や孫のような存在でもある。
なので、エレノアの多少のワガママも笑って済ませることができるのだ。

「今日はどういったご用件で？たしか今は機動六課にいるはずでは？」

リンディの発言にレティは驚いた。
最近本局で見ないと思ったら、よりにもよって機動六課とは。
そもそも大将がフラフラしていること事態が大問題なのだ。
それに機動六課には自分の息子であるグリフィス・ロウランがいる。
まさか息子に迷惑をかけているのではないか、そんな事を考えていた。

「えっと、ご・・・近藤三尉から言伝をね」

ここで、先程話していた”あの”近藤の名前が出てきてレティは更に驚いた。

しかし、レティは考えた。近藤とエレノアに接点などあるのか、と。
エレノアの存在を知っているのは現在将官以上の者と、一部の佐官、そして先程言った機動六課の局員のみである。とても尉官の近藤と接点が見いだせない。

「ア、アルファード大将、近藤三尉とはどういうお知り合いで？」

レティはダラダラと汗を流しながら質問する。

「どういう知り合いって・・・彼も機動六課にいるから、今日私が本局へ行くと言ったら言伝を頼まれただけだけど？」

「な！？どういうこと！？リンディ！！」

レティはリンディの耳元で叫ぶものだから、リンディは手で耳を押さえた。

「どうもこうも、言ったでしょ？大輔君は私の部下なの。だから、機動六課へ出向してもらったの」

「それはさっき聞いたのよ！あんな問題児を機動六課へ出向なんて、どういうつもりよ！！」

レティの問題児という発言にピクリと眉を動かすエレノアを見て、リンディは冷や汗をかいた。

何度もいうが、リンディはエレノアの存在を知る人物である。彼女がデバイスであり、アルハザードの魔法を行使できる存在であり、どれ程近藤を尊敬し、敬愛し、どれ程凶暴で、危険な存在かを知っている。

「問題児、ね。捏造により悪者に祭り上げられた一般局員に対して言うことではないわね？」

ニコリと微笑むエレノアに、レティはうっと息を飲んだ。笑顔であるにも関わらず、殺気がビシビシと肌を突く。レティもリンディも歴戦の勇士であり、修羅場を何度もくぐり抜けた人物だ。多少の覇気や殺気など、どうということはない。そんな彼女達でもおもわず怯んでしまう程、エレノアの殺気は恐ろしいものだった。

レティは改めて思う。

彼女は何者なのか、と。

「それでアルファード大将、私に言伝とは？」

リンディは冷や汗をかきながらも場の空気を変えようと話題をかえた。
すると、エレノアは先程の殺気など無かったかのように朗らかに笑いかけ、重苦しい空気も霧散してしまった。

「ああ、今度機動六課にテレビ取材が来るでしょ？それの打ち合わせについてですって」

エレノアの言葉にリンディは、ポンと手を叩いた。

「ああ、あれか。そういえばいつだったかしら？」

そう言いながらコンソールを叩き、ファイルを探します。しばらくして、見つかったファイルを見つめる。

「特に指示が無ければ、現場の判断で撮影許可箇所を決めるとか言ってたけど」

エレノアの言葉にモニタを見ながらフムフムと頷くリンディは、問題無しということで近藤に全てを任せることにした。
しかし、これにレティが異を唱えた。

「大丈夫なの？尉官にそんな権限与えて」

レティの心配ももっともである。そもそも、機動六課には近藤より上位官がいるのにも関わらず、近藤が担当するあたりから疑問である。

「んー、はやてさんやなのはさん、フェイトさん達は忙しくてね。でも、大輔君も優秀だから大丈夫よ」

「近藤が優秀」というところに納得出来なかったが、リンディが大丈夫というならそうなのだろう、レティはそう思うことにした。

「じゃあそういうことで、話しを進めるように伝えます」

エレノアはじゃねーと短く挨拶し、手をピラピラと振りながら部屋を出ていった。

シーンと静まり返る部屋に、レティは呆然としていた。

「・・・ホントに、台風みたいな人ね・・・」

レティの疲れたようなつぶやきに、リンディはただ苦笑するしかなかった。

# 第45話

今日も近藤はデスクワークをこなしていた。
いつも仕事の邪魔をするエレノアはいない。エレノアの役職は大将であり、本局勤務である。
それであまり長く本局に顔を出さないのも良くないということで、エレノアは本局に”からかい”に行った。
ついでに、リンディに機動六課のテレビ撮影の打ち合わせについての言伝も頼んだ。

そして現在近藤の見つめるモニタには、無数のファイルとプログラムが展開されており、それを目にも止まらぬ速さで処理していく。
彼はライトニング分隊である。にもかかわらず、今手をつけている仕事はスターズとロングアーチのものである。
フェイトとシグナムが二人掛かりで4～5時間を要する作業を、近藤は一人で1時間程で終わらせる。
当然、フェイトとシグナムはそんな近藤の能力をフル活用した。そして、余裕ができた二人は他の仕事に時間が割けるようになった。
しかし、これに不満をもらしたのははやてであった。

「自分達ばかり楽してずるい！」

目に涙を溜め、駄々をこねるはやての姿はとても下のものには見せられないほどだった。
そしてなんと、グリフィスもはやての意見に賛同した。
最近のグリフィスは寝不足なのか、目の下にクマができ、顔色も悪い。

「使える人材は共有すべきです！」

拳を握りしめるグリフィスの魂の叫びにフェイトは圧倒されつつ了承し、スターズとロングアーチのデスクワークも近藤が手伝うことになった。

ちなみに、この裁量に近藤の意思は盛り込まれていない。

この決定から、隊長達は定時に仕事を終わらせることができるようになり、グリフィスも快眠できているのか、元気を取り戻していった。

というわけで、それぞれの隊長、副隊長達が行うべき作業を近藤一人で行っていた。

さて、何故近藤がこんなにもデスクワークが早いのか、それは彼の身体状況が関係する。

彼の右目は事故により潰れてしまい無いのだ。代わりに、デバイスコアが埋め込まれている。そしてどういう奇跡か、彼の脳と右目のデバイスコアはリンクしてしまっている。

そして、デバイスの演算処理能力は人間のソレよりも遥かに高い。

近藤はデバイスコアとのリンクをうまく活用し、タイムラグもなくデバイスに処理させてコンソールを叩いていたのだ。

そして、彼の右腕の義手もデバイスではあるが、神経を繋げ腕としての機能をはたしている。

これにより、脳の伝達をスムーズに腕に送るとこができ、現在の驚異的なスピード処理が成り立っている。

近藤は基本的に内向的でデスクワークや機械イジリなど、インドア的な事を好む。

そんな事務員気質の人間が何故武装局員などしているのか？と聞かれると、リンカーコアを持っていたからだ。

魔法を使用できる局員は万年不足している。
だから使える局員は本人の希望を反映させず、全て武装局員にまわされるのだ。
今現在の筋骨隆々の肉体は約8年間のサバイバル生活と、エレノアの地獄の訓練によって仕方なくできた体で、本来は色白のヒョロッとしたもやしのような体型だった。
そして、「あんな事件」が無ければこんな能力を持つこともなく、エレノアを従えることもなく、機動六課へ来ることもなく、これから起こる未曾有の事件に深く関わることもなく、ただの一局員で人生を終わらせるような、その程度の人間なのだ。

確かに、現状把握能力やその分析、対策、情報収集能力、また客観的視点でモノを見る冷静な判断力などはそれなりかもしれない。
しかし、8年前までの”一局員”の近藤に、それら全てを、誰も近藤という人間に求めてはいない。
一局員である近藤に求めるもの、それは単純な力、魔力である。駒としての力、それのみ。

社交性にかけ、業務効率の悪い近藤に上に立って欲しいと思う人間など、誰ひとりいない。

それは、機動六課へ異動になる数ヶ月前の地上本部勤務になったときも変わらない。
地上本部では武装局員ではなく、総務部にいたが、近藤の「あの」経歴をあらかじめ調べていたのか、他の局員の近藤に対する扱いは冷たいものだった。
社交性に欠け、今の厳つい風貌も相まって近藤は孤立していき（近藤本人は自分の風貌の変化を自覚していない）、地上本部勤務時は一度として笑うことはなかった。
だが、そんな”嫌われ者”の近藤にも例外的に親しくしてくる人物

が3人いた。

レジアス・ゲイズ中将とオーリス・ゲイズ三佐、そしてあと一人は地上本部で一番の美人と噂される女性局員である。

レジアス・ゲイズ中将は、近藤にスパイ工作をさせるために近づいて来たのはわかる。

オーリス・ゲイズ三佐も似たような理由だろう。

だが、もうひとりの女性局員だけがどうしてもわからない。彼女が一番しつこく付きまとっていた。

これが余計に男性局員の妬みと反感を買うことになり、近藤は主に男性局員の中からますます孤立していった。

あれ程近藤にかまい、ちょっかいをだしてくる人間は、いままで近藤の身近にはリンディくらいしかいなかった。

おそらく、その女性局員は”自分はこんな人間にも好意的に接することができるんだ”と誇示したかったのではないだろうか？

そういえば、彼女の浮ついた話は聞いたことが無い。身持ちが堅いのだろうか、それとも隠すのがうまいのか。

そんなひねくれた想像しかできないくらい、近藤は地上本部では孤独で、その女性局員は人気者だった。

しかし、機動六課に来てからは違った。

最初こそ、怖がられ、信頼されていなかったが、徐々に近藤に好意を持ってくれる人間も現れた。

いや、いまや六課の主要メンバー全員が近藤を仲間と認め、信頼してくれている。

だからだろう、近藤は笑うことが多くなった。

近藤が全隊長の書類整理を終わらせ、次は地上本部への報告書を作成しようとした。
近藤が地上本部から機動六課へ異動してきた本来の理由は”スパイ活動”である。
機動六課のありようを快く思っていないレジアス中将が送り込み、定期的に機動六課の情報、主に不利な要素を報告するように指示されていた。
だが、とてもややこしいのだが近藤の直属の上司はレジアス中将ではなく、リンディである。書面やデータには記録されていないが。
そして、リンディは機動六課の後見人の一人でもある。そんな上司を持つ近藤がはやてやなのは、フェイト達に不利になる事をするだろうか。

答えは否だ。

元々近藤はレジアス中将の命令を遂行する気は無かったし、機動六課をどうこうしようなんて考えていない。
彼の「アカシック・レコード」により、機動六課が”これから先”どれ程重要なポジションに立つのかを”大体”理解している。
そんな重要な部隊の立場を危うくする情報を近藤が流すわけがない。
だから、定期報告はいつも当たり障りのない事を送っていた。

そのとき、管内に呼び出し放送が流れた。

『局員の呼び出しをします。近藤三等陸尉、隊舎ロビー受付までお越しください。繰り返します、近藤三等陸尉、隊舎ロビー受付までお越しください』

突然の呼び出しに、近藤は頭をひねった。
知り合いならばメールや念話などの手段がある、特別ロビーに呼ぶ理由がない。
外来からか？でも誰だ？
考えてもわからないので、とりあえず近藤はロビーへ向かった。

ロビーへ行くと、受付から少し離れた場所で近藤は固まってしまった。

何故彼女がここにいる？

遠くからでもわかる。

青いロングヘアーに白い肌、涼しげな眼に濡れた艶のある唇、地上本部の制服の上からでもわかる抜群のボディライン、スカートから伸びたスラリと細く長い脚、周囲の通り過ぎる男性局員が皆彼女を見て驚く。
それほどの美貌、それほどの存在感、それほどの驚きだった。

男性局員の羨望を一身に受けているその女性局員は、ロビーの受付の担当局員となにやら話し込んでいた。世間話なのか、笑い声が聞こえていたが、受付担当局員が少し離れた場所にいた近藤と目が合った。

それに気がついた女性局員が近藤に花のような笑顔を向け、走り寄

ってきた。

慌てて近藤は右手をあげて敬礼した。

「お疲れ様です、マセラティニ尉！」

マセラティと呼ばれた女性局員は近藤の近くで歩みを止め、苦笑しながら敬礼した。

「お疲れ様です、近藤三尉」

にこやかに微笑んでいるマセラティに対し、ガチガチに固まっている近藤だった。

「相変わらず固いですね？それに、私のことはドゥーエと呼んでくださいと言っているでしょ？」

柔らかい微笑みを近藤に向けるドゥーエ・マセラティニ尉は、ツンツンと人差し指で近藤の胸辺りをつつく。

「は！了解しました、マセラティニ尉！」

対して、近藤はいまだにガチガチだった。

若干汗もかいている。

そんな態度の近藤に、軽くため息をはいたドゥーエは気を取り直し、近藤の左手を取り腕を絡めた。

「マセラティニ尉！？」

近藤はいきなりのスキンシップに焦る。二の腕から肘のあたりにド

ゥーエの柔らかい胸の感触が伝わり、手は指を絡ませ逃げられないようにしている。

「さ、ゆっくりお話のできるところへ行きましょう」

艶っぽい笑みで近藤の腕に体を預け、肩に頭をのせながら、ドゥーエに流されるまま近藤はふらふらとロビーを後にした。

そんなやりとりを見ていた他の局員は、ポカーンと口を開けている男性局員か、キャーキャーと騒ぐ女性局員で溢れかえった。

そんななか、たまたま見ていた前線メンバーがいた。

「た・・・大変だ！なのはさん達に知らせなきゃ！」

青い髪の少女は慌てて走り去っていった。

機動六課隊舎の外にあるベンチに、近藤とドゥーエは座っていた。

４人は座れる程の長いベンチなのだが、ドゥーエが近藤にピッタリとくっついて離れない。

ちなみに、ドゥーエはずっと近藤の腕に体を預け、手と指を絡めている。

「あの、マセラティニ尉？」

近藤は腕に絡まっているドゥーエを見ずに話しかける。

離れて欲しいので腕を動かすのだが、そんな行動もドゥーエがよりきつく腕に絡まり阻止され、近藤の腕に彼女の大きな胸が余計にムニュムニュと気持ちいい感触が伝わる。
あうあうと口を動かす近藤にクスリと笑いながら、いたずらっぽく見つめる。

「ドゥーエ、です。」

「いや、しかしマセラティニ尉!?」

近藤はあわてふためく。
地上本部勤務の時から彼女はこうだった。
近藤があわてふためく様を楽しむように体を擦り寄せてくる。
女性に免疫がないわけではないが、ドゥーエは美人だ。それもとびきりの。
そんな女性が超至近距離で顔を近付けてくるのだ。小心者の近藤にとってこれ程の拷問はない。

「マセラティニ尉?」

「・・・」

近藤がドゥーエに呼びかけるが、当のドゥーエは知らんぷりである。
近藤はため息をついた。

「・・・ドゥーエニ尉」

「・・・ニ尉は余計ですが、まぁいいでしょう」

ドゥーエは少し不満げな顔をしたが、すぐに微笑み返した。
そして、より密着するように絡めている腕に力を入れ、スリスリと頭を近藤にこすりつけた。
その際にドゥーエの髪からとてもいい匂いが近藤の鼻をくすぐり、おもわず目がとろんとしてしまった。
だが、これではいかんと近藤は頭を振り気を引き締める。

「・・・ドゥーエニ尉、今日はどのようなご用件で？」

近藤は努めて冷静にはなしかけた。
そんな近藤の態度が気に入らないのか、ドゥーエは近藤のふとももに手をのせた。
そして、甘えるような声をだした。

「淋しかったんです・・・ずっと貴方に会えなくて・・・ああ、相変わらずすごい筋肉ですね・・・ウットリしちゃう・・・はぁ・・・」

「じ、冗談はやめてくだい」

近藤の否定の言葉にドゥーエは、冗談じゃないんだけどな・・・と思いつつ本題をきりだした。

「オーリス三佐からの伝言です。３日後に機動六課に臨時査察を行うそうです」

３日後の臨時査察という言葉を聞いて、近藤は焦った。

「３日後ですか！？」

「・・・？何か不都合が？」

ドゥーエは慌てる近藤を見て、不思議だというふうに首を傾げた。

「・・・いえ、その・・・3日後に、機動六課にテレビの撮影が予定されていまして・・・」

「あらあら」

妙なダブルブッキングである。ドゥーエも思わず苦笑してしまった。

「ん～・・・どちらも予定をずらすわけにはいかないですね」

ドゥーエは、困りましたね～といいながら近藤のふとももをさわさわと触り続けている。

我慢の限界が近くなってきた近藤は勇気をだしてドゥーエに言った。

「あ・・・あの、ドゥーエニ尉・・・その、そんなに自分に密着とか触るとか、やめていただきたいんですが・・・」

そんな近藤に、頬をピンク色に染め妖艶な笑みでドゥーエはとんでもないことを言った。

「・・・じゃあ、貴方も私に触れてください。この髪に、この唇に、この手に、この胸に、この足に。それとも、もっと刺激的なところがいいですか？」

「・・・冗談はやめてください・・・！」

近藤は顔を真っ赤にして必死に声を搾り出した。

「うふふ、かわいいですよ」

ドゥーエは真っ赤になった近藤の頬をツンツンとつついてからかった。

もう端からみればイチャイチャラブラブのバカップルにしか見えない。

そして幸か不幸か、その端から見ているデバガメ達が近藤とドゥーエの座っているベンチの近くの草むらに隠れていた。

そんなことにも気づかず、ドゥーエは近藤に猛烈アタックをかけ続ける。

「近藤さん、少し雰囲気変わりましたね？」

ドゥーエの言葉に近藤は首を傾げた。

「え？そうですか？」

どこか変わっただろうか。確かに仕事量は地上本部勤務のときより多くなったので、疲れた感じに見えるのかもしれない。

だがドゥーエはそんな近藤の考えがわかっているのか、柔らかく笑いかけた。

「優しい感じになりました」

ドゥーエのそんな言葉に、近藤はますますわからなくなってきた。

「以前の総務課勤務のときは、ギスギスした雰囲気というか、トゲ

があるというか、人を寄せつけない空気が出てました。でも今はほんわかというか、なんだか心がホクホクになります」

「ホクホク・・・ですか？」

「はい、ホクホクです」

いよいよわからん。近藤は首を捻った。

ドゥーエはそんな仕草をとる近藤を心の中で、ほんとにかわいい人・・・と思いながら目をつむり、頭を近藤の肩に預けた。

しばらく二人とも口を開くことなく、静かに時間だけが過ぎていった。

そして、ドゥーエがゆっくり口を開いた。

「私、心配だったんです・・・」

近藤は何が？という顔をしてもたれ掛かるドゥーエを見た。

その顔は先程までの笑顔ではなく、悲しそうな表情だった。

「スパイなんて・・・そんな危険な任務を近藤さんがするって聞いて、私不安で・・・」

近藤はギョッとした。機動六課へのスパイ活動は極秘である。何故彼女が知っているのか。

この任務を知っているのは、レジアス中将とオーリス三佐だけのはずである。

そんな近藤の焦りを見越して、ドゥーエはクスリと笑った。

「オーリス三佐から聞いたんですよ」

近藤は眉間にシワをよせ、親指と人差し指で揉んだ。
極秘任務をペラペラ喋るなんて大問題ではないか。
近藤は頭が痛くなってきた。

「安心してください。私もレジアス中将の秘書になったんです。だから、ある程度の情報をオーリス三佐から教えてもらっただけです」

ドゥーエの説明に近藤は納得した。
だが、彼女が近藤を心配する理由がわからない。
ドゥーエは少し呆れていた。

「鈍感」

小声でつぶやいたセリフは近藤に届かなかった。
気を取り直して、ドゥーエは近藤に話し続ける。

「これでも私、情報収集は得意なんですよ?近藤さんと機動六課にいる『不屈のエース』との因縁も知っているんです」

因縁・・・確かに因縁深い部隊だ。なのは隊長、ヴィータ副隊長、そして・・・

「私、『不屈のエース』って嫌いなんですよね」

突然の物言いに近藤は少し驚いた。
ドゥーエの顔から笑顔が消え、代わりに不快な、苦虫を噛み潰したような、およそ彼女の美しい顔には似合わない表情が張り付いていた。
近藤の知る限り、彼女は人の前でこんな顔をしないし悪口を言う人

ではない。
影ではどうかわからないが、物腰の柔らかさと、いつも絶えない笑顔が彼女の魅力だと思っている。

「体調管理も隊員の大事な役目です。それをあの場面で言い訳にするなんて・・・ちやほやされて調子に乗ってるんじゃないかしら？」

あまりの物言いに近藤は顔をヒクつかせた。
ドゥーエの言っていることは、管理局の公表した捏造情報である。
近藤自身、あのときのことはもうどうでもいいし、なんとも思っていない。
だが、彼女が言っていることは、近藤の行動は誉められるものではないが、なのはの巻き添えは自業自得だと言っているのだ。
そんなふうに言われたのは初めてだったので、少し戸惑った。

「大丈夫ですか？イジメとか受けてないですか？靴とか隠されてないですか？トイレで水をかけられたりしてないですか？ノートや机に誹謗中傷の言葉を書かれたりしてませんか？」

ものすごい心配そうな顔で近藤を覗き込むように見つめるドゥーエ。
でも近藤のふとももタッチはやめない。

「だ、大丈夫ですよ。みんな良くしてくれてます。そんな幼稚なイジメも受けてませんよ」

近藤は苦笑しながらも機動六課のフォローもいれておく。
しかし、ドゥーエはそれが面白くないようだった。

「・・・そんなに若い娘がいいですか」

少し拗ねたような態度をとるドゥーエに近藤は焦りだした。

「いえ、若いとかそんなそんなことは関係ないですよ」

「じゃあ、熟女がいいんだ！リンディ統括官とも仲いいらしいじゃないですか！？」

ドゥーエはプリプリと怒りながら、近藤のふとももをつねりあげた。

「痛いです、ドゥーエ二尉。それに熟女好きでもないです。あの人は自分の小さいころからお世話になっている人です」

「ふーん・・・」

ドゥーエはジト目で近藤を睨む。口がへの字になって猫のようで、思わずかわいいと思ってしまう近藤だった。

「・・・まぁいいでしょう。近藤さんのいい所は私が一番よく知っていますから」

怒っていたかと思ったら、すぐに笑顔になるドゥーエ。コロコロと表情が変わる姿に、ますますかわいい人だなぁと思うのだった。

すると、近藤のほうに顔を向けドゥーエは目を瞑った。

いつのまにか、近藤の両手はドゥーエに握られていた。

「あの・・・ドゥーエ二尉？」

近藤はダラダラ汗をかきだした。

「私もそろそろ帰らないといけませんから。お別れの、キ・ス」

「はあ!?いやいやいやいや!わけわかんないし!?」

おもわず大声をあげてしまったが、ドゥーエはそんなことお構いなしというふうに目を瞑り続けている。

桃色に染められた頬に、濡れた唇が妖艶で余計に際立ち、吸い込まれそうになる。ギュッと握られた手に力が加わる。

やっちゃうか?

キスくらいいいか?

どうせ、この人は何人ともこんな事をしているんだ、自分とも遊びみたいなもんだ。

近藤が頭の中で格闘する。すると、ドゥーエは言った。

「私、初めてですから。誰ともこんな事しませんから」

・・・重い・・・

何が初めて?

キス?

それともその先?

近藤は混乱してきた。

そして、そんなストロベリーな空気は突然終わる。

デバガメ達によって。

「私は！近藤さんなんて大嫌いだよ！！」

近藤達の座るベンチから少し離れた草むらからの大声と、立ち上がる一人の人物。

フェイト・T・ハラオウンだ。

「フェイトちゃん！しゃがんで！」

「ばれるばれる！」

「いや、もうばれてますよ！」

周囲にはなのはやはやて達がしゃがんでいた。立ち上がるフェイトを宥めようと必死にフェイトの服を引っ張っている。

よく見ると、スバルとティアナ、エリオ、キャロもいた。

ベンチに座っていた近藤とドゥーエはポカーンと口をあけて呆れていた。

ドゥーエは眉間に皺を寄せ、ため息をついた。

「・・・まったく、エリートさん達は覗きが趣味なんですか？」

ドゥーエの言葉の端々に怒りが感じられた。

覗き見していたので言い訳もできず、ただ謝るしかなかった。

「す、すいません・・・その、ちょっと気になって・・・」

なのはがペコペコと頭を下げながら釈明する。

続けて皆もぺこりと頭を下げた。

近藤はため息をついて隊長達を見ていたが、フェイトは近藤と目を合わせようとせず顔を赤くしながらソッポを向いていた。

（なんなんだ・・・）

近藤にはフェイトが怒っている理由がわからなかった。

フェイト自身もその理由はわかっていなかった。

その後、結局ドゥーエは怒って（ちゃっかり電話番号とメアドを渡して）帰り、なのは達に謝られ、尋問された。

そのときの尋問が思いもよらない事に展開していくとはこのとき誰も予想していなかった。

## 第４５話（後書き）

フェイトの取った行動の理由は次回わかります。

## 第４６話（前書き）

まずお詫びから言わせていただきます。

勝手ながら、前回の第４５話の内容を少しいじりました。
といっても最後のほうの２~３行程だけですが。

そして、今回の話ですが、前回の内容と被るところがあります。
これは、それぞれの視点から見たということで、
前回は近藤視点で話が進み、近藤が見聞きしたこと
今回はフェイト視点で進み、フェイトが見聞きした事
となっています。

こんな説明をしなければならないような駄文ですが、
そんなものでも読んでやるよ！という聖人君子のような方達、
ゆっくり見ていってね！

あ、あとなんとなくシリアスです。

# 第４６話

フェイト・Ｔ・ハラオウンは上機嫌だった。

以前は山積みだった書類仕事が、最近はめっきり少なくなったからだ。

それは何故か？

近藤に負担してもらっているからだ。

近藤が配属された最初の頃は、ほぼ均等にフェイト４、シグナム３、近藤３の割合で分配していたのだが、作業にとりかかり始めて１時間程で近藤は自分のノルマを達成してしまう。

それなのに手抜きや誤字、脱字、計算ミスなど一切無く、結果、フェイトとシグナムのお手伝いをする羽目になるのだ。

だがここでフェイトとシグナムは考えた。

ならば分配比率を変えよう、と。

最初は近藤に内緒で近藤４・フェイト３・シグナム３と割合を少しだけ負担増にしてみた。

「終わりました。フェイト隊長、そのファイルこちらにまわしてください」

「・・・ありがとうございます・・・」

近藤はフェイト達が仕事に取り掛かり１時間程で自分のノルマを達成した。

今度は近藤に了承のうえで、近藤６・フェイト２・シグナム２の割合で分配した。

「終わりました。シグナム副隊長、その計上間違ってますよ。俺がやりますからこちらへまわしてください」

「そ、そうか・・・スマンな・・・」

自分の仕事をしつつ、フェイトやシグナムのモニタも監視し、あまつさえ、近藤はまたしてもフェイト達より早く仕事を終わらせた。

そこで、フェイトは提案した。

「もうこの際、全部近藤さんにやってもらう？」

シグナムは即賛成した。
近藤にもそう言った。
フェイトとシグナムは、近藤は反対すると思っていた。
だが、

「わかりました」

アッサリと近藤は了承し、ライトニングの書類整理は近藤が一手で引き受けることになった。

これにより、フェイトとシグナムに時間ができた。
フェイトはスカリエッティの捜査に時間を割くことができ、なによりエリオとキャロとのコミュニケーションをよくとるようになった。
シグナムも聖王教会とナカジマ三佐の合同捜査への参加や、フォワードメンバー達の訓練に顔を出す回数が増えた。

しばらくはライトニング分隊は効率よく機能していたのだが、これ

にイチャモンを付けた人間がいた。
八神はやて部隊長だ。
はやてはフェイトにライトニングの役割分担を聞いた。
すると、
「自分達ばかり楽してずるい！」
と怒りはじめた。
どうも、最近はやてのロングアーチは皆深夜残業の繰り返しらしい。
はやての後ろに控えているグリフィスの顔色が悪いのも、目の下にクマがあるのもそのせいだろう。
「ずるいずるいずるいー！！」
はやては床に寝転び、両手足をバタつかせてダダをこねだした。
まるで子供である。
こんな姿、とてもではないがフォワードメンバーに見せられない。
親友であるフェイトでも引いた。
だが、こんなになるほどはやては仕事に追い込まれているということだ。
もしかしたら、潰れるかもしれない。
「使える人材は共有すべきです！」
グリフィスの拳を強く握る魂の訴えに、ついフェイトは、
「・・・じゃあ、近藤さんがＯＫを出したらロングアーチも手伝う

っていうのはどう？」

と妥協案をだした。

ハッキリいって、こんな妥協案に近藤がＯＫをだすわけがない。

だから、はやては命令した。

「ロングアーチの書類作業をライトニングにまわせ」

だが、これに待ったをかけた人物がいた。

ヴィータだ。

「はやて、それはズルイよ」

真剣な表情で言うヴィータに、はやては気圧された。

ヴィータは責任感が強く、真面目なのだ。

「で、でも、少しでも負担を軽くせんと過労で倒れてまうし・・・」

はやてはゴニョゴニョと喋るが、はやてラブのヴィータは仕事にはうるさかった。

「じゃあ、はやては近藤が倒れてもいいの？あたしとしては、フェイトやシグナムも怒りたいところだよ」

「そ・・・それは・・・」

ヴィータの正論に、みるみる小さくなるはやては涙目だった。

「あー、大丈夫だよ、ヴィータちゃん」

そんなとき、ヴィータとはやての会話（説教）に割り込んできた人物がいた。

エレノアだ。

「大丈夫？どういうことだ、エレノア姉ちゃん」

エレノアの言葉に首を傾けるヴィータだったが、その目は若干怒りが混じっていた。

そんな視線を受け流すエレノアは、こう言った。

「ご主人様は右目のデバイスコアと脳が直接リンクしてるから、処理速度が恐ろしく早いのよ。でも、それはご主人様の負担にはならないよ。だって、見たものをデバイスコアに処理させてるだけなんだから。しかも、右腕も義手でストレージデバイスだからめちゃくちゃ早く動くし」

ヴィータは驚いた。

「それってズルじゃねぇ？ようするに、近藤は見て、デバイスコアが出した答えをただ打ち込んでるだけだろ？」

「悪く言えばズルね。良く言えば、有効活用？」

「モノは言いようやね・・・」

さすがにはやても呆れていた。その有効利用をしようとしていた事も忘れて。

「だから、どれだけ書類仕事が増えてもご主人様には大した負担にはならないの。この際スターズもご主人様に仕事まわしたら？」

「・・・あんた本当に近藤のデバイスか？自分は仕事しないのに・・・」

ヴィータの呆れた表情に、エレノアは口を三日月のように開いた笑みを返した。

そしてヴィータはこの案件をなのはに話した。

「うーん・・・なんか近藤さんに悪い気がするけど、私達も猫の手も借りたい状況だし・・・少し甘えちゃおうか？」

スターズ隊長の決定に、ヴィータはため息をついた。

結果、近藤の預かり知らぬ所で仕事分配が決められたのだった。

因みに各隊の分配だが、ライトニング・９割、スターズ・２割、ロングアーチ・６割を近藤に任せた。

スターズが遠慮しているのがよくわかる数字である。

これを聞いた近藤は、最初こそ呆れていたが、それでもいざ取り掛かると６人以上で取り組んで一日仕事の書類整理を、総時間にして３時間もかからず終わらせた。

終いには、

「もうスターズの書類も全部まわしてください。その方が一元管理できていい」

などと言う始末。

これにより、各隊の局員達は定時に仕事を終える事ができるようになり、心に余裕ができ、皆健康的で規則正しい生活を送れるようになった。

その時のはやてやグリフィス達の喜びようは異常だった。

そして、いつの間にか機動六課は近藤無しでは機能しない隊になった。リアルに実務的な意味で。

そんな平和な毎日のなか、フェイトは午後のティータイムをなのはやヴィヴィオ、エリオ、キャロ達と愉しんでいた。

書類仕事を押し付けている近藤には悪いが、最近エリオとキャロとのコミュニケーションがあまりとれていなかったのでこの余裕はありがたい。

そして、フェイトには気になることがあった。

エリオの事だ。

ヴィヴィオが六課に来た頃から、エリオは近藤にベッタリくっつくようになったのだ。心から信頼しきった表情で近藤と接するエリオは、それはもう本当の親子のようだった。

代わりにエリオはフェイトから離れていっているような気がした。

まぁ、フェイトの勘違いなのだが。

たしかに、エリオとキャロとは仕事の多忙のため時間をつくれなくて、あまり構うことができなかった。

仕事ということで、二人ともフェイトに遠慮してワガママを言うことも無くなった。

それがまたフェイトに不安を書き立てる。
フェイトの悪い癖で、状況が好転しないとネガティブ思考になるのだ。
だが、エリオと近藤のあの状況は、エリオが小さい頃にフェイトに接していたくらいの親密さだったように見える。
いまのフェイトとエリオにはない親密さだ。
エリオに理由を聞きたかったが、怖かった。

否定されるのが怖かった。

もしかしたら、自分がダメな保護者だから?

近藤の方が頼りになるから?

私は彼等にとって邪魔になっている?

思考がドンドンマイナスへと向いていく。

そして、自分と近藤のどこに差があるのだろうか?

経験の差?

男と女?

それとも他の要因?

私はあの人には勝てないのか・・・

確かに、あの人は仕事ができるし、優しいし、大人だし、頼りにに

なるし、それに・・・

気がつけば、フェイトは近藤の事ばかり考え、モヤモヤした気持ちを抱えていた。

そんな時だ、スバルが走ってきたのは。

「なのはさーん！た、大変ですー！！」

物凄く慌てた風にスバルはなのはに走り寄り、大声でまくし立てたのでヴィヴィオはびっくりしていた。

「スバル、落ち着いて。大変なことってなにかな？」

なのはは落ち着いていた。アラートが鳴っていないので事件でないことがわかっているからだ。

だとすれば、そうそう大変な事など限られてくる。

「こ、近藤副隊長が、超美人な人と腕組んで出ていきました！！」

スバルの言葉にフェイトの胸にチクリと痛みが走った。

「近藤さんが？美人な人と？腕を組んで？ハハ、そんなこと・・・」

フェイトは渇いた笑いをしたが、内心のモヤモヤしたものがグルグルとうごめいた。

「間違いないっス！アレはドゥーエ・マセラティ二尉と近藤さんっス！！」

スバルの後ろには何故かヴァイス陸曹が居て、なにか怒り心頭といった面持ちで熱くなっていた。

「マセラティ二尉？誰それ？」

なのはは首を傾げた。

「マセラティ二尉は地上本部で『お嫁さんにしたい局員　第１位』！『彼女にしたい局員　第１位』の理想の女性なんス！！」

拳を握り力説するヴァイス陸曹。

暑苦しい。

「ふーん、そうなんやー。因みに私は何位なん？」

何故かいつの間にかいたはやて。

「はやて隊長は『お嫁さんにしたい局員　第５位』、『彼女にしたい局員　第６位』っス」

ヴァイス陸曹はハイテンションで一気に喋る。よく順位を覚えているものだ。

「・・・微妙な順位やな」

はやてはブツブツと呟いている。

「とにかく、近藤さんとそのマセラティさんとの関係が気になるね」
なのはは顎に手を当てながら考えこむ。

「よっしゃ！近藤さんは大事なウチ等の仲間や。行動を把握するのも大事なことや！のぞ・・・いや、観さ・・・いやいや、調査へゴーや！！」

「おー！！」

というはやて分隊長の一言で、近藤とドゥーエを覗きにいくゴシップ好きなエース達だった。

近藤とドゥーエは思いの外早く見つけることができた。
なぜなら、

「あそこの空間だけ桃色のラブラブゾーンやな・・・」

はやての呟きになのは達は頷いた。
実際はラブラブではなく、ドゥーエが猛烈アタックをかけて、近藤がアタフタしているのだが。

因みに、ヴィヴィオはお昼寝、ヴァイス陸曹はヘリの整備のためになくなく不参加、そして、途中ティアナが合流し近藤達の座るベンチから少し離れた草むらで監視している。

「くっ・・・あんなに密着して・・・でも、確かに美人・・・・」

ティアナが悔しそうに呟く。
ギリギリと歯ぎしりが聞こえそうだ。

「あぁっ！美人局員さんが太ももに手を置きましたよ！」

スバルが興奮気味に食いつく。

「・・・気のせいかな・・・近藤さん、困ってる？」

なのはは冷静に分析する。
その能力をユーノにも使ってもらいたいものだ。

「・・・なに？顔を赤くして・・・デレデレして・・・」

フェイトは近藤を見ながらブツブツ呟いた。
どうもフェイトには近藤が鼻の下を伸ばしているように見えているようだ。

どうしてだろう、近藤が他の女の人と、知らない人と親しくしていると胸がモヤモヤする。
なんでこんなにイライラするんだろう？
なんでこんなに淋しいんだろう？
なんでこんなに悲しいんだろう？

「フェイトちゃん、なんか怒ってる？」

フェイトの異変にいち早く気づいたのはなのはだった。

「別に怒ってないよ」

フェイトは近藤達の方を見ながら短く答えた。

「え・・・でも・・・」

「怒ってない」

なのはは戸惑う。

こんなにイライラしているフェイトを見るのは滅多にないからだ。

どうしてこんなにイライラしているのだろうか？

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・まさか

「フェイトちゃん、やきもち焼いてる？」

なのはの言葉と共に一斉に皆の視線がフェイトに向く。

フェイトは顔が真っ赤だった。

「・・・やきもちなんか焼いてない」

そう小さく言うフェイトだったが、はたして本当にやきもちではないのだろうか？

フェイトは自問自答する。

ちがう、これはやきもちじゃない

じゃあなに？

わからない

わからないのにやきもちじゃないってわかるんだ？

なんで？

ねぇ、なんで？

この気持ちはなに？

フェイトは原因のわからないモヤモヤやイライラに、段々心の余裕を無くしていく。

そんなフェイトを余所に、なのは達がキャーキャーと騒ぐ。

フェイトは煩わしさを感じた。

「フェイトちゃん・・・そうやったんか・・・」

うるさい。

いま気持ちの整理をしてるの、黙ってて。

「フェイトさん、お父さんのことが好きだったんですか！」

うるさい。

エリオ、キャロ、近藤さんのことをお父さんなんて言わないで。

そんな嬉しそうな顔しないで。

ちがう、あの人はお父さんなんかじゃないんだよ。

「フェイトさん・・・やっぱり・・・」

うるさい。

スバル、ティアナ、そんな目で見ないで。

ちがう、ちがうんだよ。やっぱりってなに？

なんなの？

うるさいよ。

みんなうるさい。

ちがう、ちがう、ちがう！

なにがちがうの？

わからない

なにがわからないの？

わからない

じゃあなにがうるさいの？

わからない

じゃあ近藤さんのこと好きなの？

わからない

わからない

わからない！

・・・でも、

私は

「あ！近藤さんがキスしようとしてる！」

はやてのこの言葉で、フェイトの中で何かが弾けた。

私は！

「私は！近藤さんなんて大嫌いだよ！！」

フェイトは急に立ち上がり叫んだ。
顔を真っ赤にして。

「フェイトちゃん！しゃがんで！」

「ばれるばれる！」

「いや、もうばれてますよ！」

なのは達が騒がしくフェイトを隠そうとするが、フェイトは聞かない。

ターゲットの近藤は呆れた顔をして、ドゥーエは怒っていた。

フェイトはそんな近藤にソッポを向いて目を合わせなかった。

私は・・・

ちがう・・・

絶対・・・近藤さんのことなんか・・・

初めて抱く気持ちに戸惑い、近藤に八つ当たりするフェイトだった。

# 第４７話（前書き）

今回の話は、とても重いです。
でも、この話が書きたいが為に、この物語を書いたと言っても過言ではありません。
思い描いていた話と少々違う形になりましたが、これはこれで一つの形として残せて満足しています。
しかし、自分のボキャブラリーの低さを痛感します。
皆さん本当に面白い物語を書きますよね。
そのボキャをオラにくれ！！

というわけで、ゆっくり見ていってください。

# 第47話

夜になり、近藤は椅子に座らされ、周囲を囲まれて尋問を受けていた。

尋問のメンツは昼間の覗き組にヴァイス陸曹を加えた、計8人である。

ただ、フェイトは近藤から少し離れた位置でソッポを向いていた。

まだ怒っているようだ。

「近藤さん！なんでマセラティ二尉とあんなに親しげなんスか！？」

ヴァイス陸曹が近藤に詰め寄る。

「いや、なんでって・・・あっちが一方的に絡んでくるんだよ」

ヴァイス陸曹の剣幕に近藤はたじたじである。

「嘘だ！！あの人は超身持ちが堅くて有名なんスよ！？何回もアタックしてやっと食事を誘う事にこぎつけて、一緒に食べにいっても一定の距離を保つんスよ！？手も握らせてくれないんスよ！？」

「・・・やけに詳しいな、ヴァイス陸曹」

ヴァイスは血涙を流していた。

どうやら経験談らしい。

「恋愛より仕事だと言って、告白する男を全員振るんスよ！でも、普段のあの柔らかな物腰！香り立つ色香！たまに見せる妖艶な眼差し！そしてあのバラのような笑顔！そこにしびれる！あこがれるぅ！！」

・・・なんかヴァイスがおかしくなった。

「へー、そうなんか・・・それでもランキング1位になれるとは・・・魔性の女やな」

はやても近藤の尋問に参加しており、ヴァイスの証言にフムフムと頷く。すこし論点がズレているが。

「じゃあなんで近藤さんにはあんなにベッタリらぶらぶスウィートなんや？」

「こっちが聞きたいっスよ！」

ヴァイスは怒りを撒き散らした。
嫉妬する男は見苦しい。
なのは達のヴァイスの評価は大暴落だ。

「地上本部勤務の時から、なんかいつの間にかあんな感じで俺をからかうんですよ」

「からかう？」

近藤の言葉になのはが反応した。

「そうですよ。だって冷静に考えてくださいよ、あんな美人が俺みたいなやつを好きになるなんてありえないでしょ？あれは、俺が慌てるのを見て楽しんでるんですよ」

「・・・近藤さん・・・」

なのはは呆れた。

アレをからかうで済ませることが出来ることに。

あまりの鈍感さに。

あまりの自分の過小評価に。

ああ、言ってやりたい。女は男を顔で選ばない、と。

もし、アレが近藤の言う通り演技だとしたら、彼女は女優になったほうがいい。

そう思えるほど、なのはには確信めいたものがあった。

その洞察力を自分とユーノとの関係の進展に活用してくれることを切に願う。

「だから安心しろ、ヴァイス陸曹。マセラティ二尉はストレス解消に俺をからかっているだけだ」

「・・・本当っスか？」

ヴァイスはまだ信用できないようだ。

見苦しい。

女々しい。

ヴァイス陸曹の評価はストップ安だ。

「俺なんかを好きになる女性なんかいないよ」

俺なんか？

この言葉になのは、はやて、そして離れた位置で聞いていたフェイトは反応した。

「なんでそんな風に思うのかな？」

なのはは優しく、子供に対するように近藤に話しかけた。

近藤はなのはの対応に、直感的にこう感じた。

超怖い。

フェイトもその答えが聞きたいようで、耳がピクピク動いていた。

「俺は”嫌われ者”です。社交性に欠け、小心者で、大した魔力も無く、なのは隊長にキズを付けた人間です。」

なのはは反論しようとした。

だが、近藤に止められた。

「それが、”一般的”な俺の評価です。上層部からのウケも悪い。昇進は絶望的。だから周囲の人間は俺を避け、関わらないようにします。ほら、そんな人間に進んで関わる人間がいると思いますか？」

近藤は肩をすくめ、おどけて見せた。

正しい。

正論だ。

近藤の意見は、確かに正しい。

今までの近藤の周りにいた人は、”組織の駒”としては”正しい選択”をしている。

近藤は管理局にとって、いわゆるお荷物だ。

近藤に関わっても、何の得もなく、逆にマイナスイメージがついてまわる。

人間は弱い生き物だ。周囲から心ない言葉をかけられ、グループから外され、孤立してしまうことを恐れる。

だから、近藤の周囲には誰も近寄らない。

それが”一般的”な評価なのだ。

だが、

「・・・なんでそんな簡単に割り切れるんですか」

声の主はフェイトだ。いつの間にか近藤の近くに来ていた。

その表情は未だ怒りだったが、若干悲しみを帯びていた。声色にも怒りが感じられる。

実際怒っている。だが、その怒りは先程までの怒りではない。

「それが管理局の、世間一般の”事実”だからです。それに、嫌われるのには慣れてますから」

近藤はアッサリと言う。

その言葉に皆衝撃を受けた。
自分のことなのに、あまりにも淡々と、冷静に、客観的に話す姿に絶句する。

なのはは表情を歪め、はやても眉間にシワを寄せ苦悶の表情を浮かべる。
エリオ達も似たような反応で静まり返ってしまった。

なんでこの人はこんなに悲しい事を簡単に言えるのか。

だが、そんな静寂のなか、一人だけとんでもない行動を取った人がいた。

パァン！

部屋に乾いた音が響く。

近藤の頬を叩いたのだ。
それは、

「ここにいる皆が！あなたを嫌っていると思っているんですか！！」

「・・・フェイト隊長・・・」

近藤の頬を叩いたのはフェイトだった。

いきなりのことに、近藤も驚いた。
歯を食いしばっていなかったので、口の中が切れたようだ。
鉄の味が広がる。
なのは達もあまりのことに固まっている。

フェイトは近藤を睨み、怒り、怒鳴り続ける。

「エリオが！キャロが！あなたを嫌っていると思っているんですか！！」

フェイトは怒っていた。
人生で一番怒っているかもしれない。

近藤はエリオとキャロを見た。
二人とも、悲しそうな、泣きそうな顔をしていた。

「なんで！・・・あなたは・・・！・・・あなたは・・・そんな・・・」

フェイトの頬を一筋の涙が伝う。

フェイトは怒った。

近藤に。
自分に。

エリオ達のことで嫉妬していた自分が馬鹿みたいで。

自分を大切にしない近藤が心配で。

他の女の人と仲良くする近藤を見て嫉妬する自分が嫌で。

自分の事なのに、他人事のように言う近藤に苛立って。

なのは達もフェイトと同じ気持ちなのか、苦しそうな表情のまま近藤とフェイトの成り行きを見守る。

静まり返る部屋に、フェイトの啜り泣く声だけが響き、近藤はため息をついた。

（・・・ここにいる人達は優しすぎる）

近藤は目を閉じ、天を仰いだ。

そして、大きく一つ、深呼吸した。

「・・・これから話すことは他言無用でお願いします」

「・・・？」

いきなり何を言い出すのかと最初は疑問に思ったが、近藤の目に何

か決意のようなものを感じたフェイトやなのは達は、静かに頷いた。

「俺の両親は、俺が6歳の時に殺されたということは以前お話しましたね？」

フェイトは赤くなった目で近藤を見つめ、無言で頷く。

そして、近藤は一呼吸置いて、ゆっくりと口を開いた。

「俺は、両親が死ぬ直前まで両親から虐待を受けていました」

瞬間、フェイトの表情が強張った。

エリオとキャロが目を見開く。

なのは達もざわつく。

「6畳一間のワンルームから、生まれてから一度も出ることなく、おもちゃなんかの娯楽は勿論なくて、食事も親の残した残飯しか分け与えてもらえず、いつも両親から殴る蹴るの暴行を受けていました」

近藤の言葉に、フェイトは絶句し、そして思い出していた。

自分の過去を、幼き日の出来事を。

母、プレシア・テスタロッサの事を。

フェイトの過去と、近藤の過去が重なる。

「でも俺は両親を恨んでいませんでした。ろくに仕事もせず、パチ

ンコなんかのギャンブルばかりしていた親でしたが、それでも俺の唯一の肉親です。ただ、『ごめんなさい』と、『自分がいい子じゃいから殴られるんだ』と。そんなことばかり思っていました」

フェイトも、ただ母の願いを叶えるために、ただ笑顔が見たいために、ジュエルシードを集めていた。
辛いこともあったが、自分には使い魔のアルフやリニスがいた。そして支えてくれた。

だが近藤は一人だった。
たった一人で、ただ『ごめんなさい』と謝っていた。なにも悪い事はしていないのに。
ただ、ギャンブルに負けた腹いせに、夫婦喧嘩のウサ晴らしに、殴られ、蹴られた。タバコを押し付けられたりもした。
体中にアザをつくり、骨折し、血反吐を吐いても、小さかった近藤は、ただただ『ごめんなさい』と、『いい子でいるから怒らないで』と、『嫌いにならないで』と繰り返すのみだった。
それがどれ程辛いことか想像ができない。
いや、その時の近藤は辛いとか、恨むとかいうことさえわかっていなかっただろう。
リンディは小さい近藤を保護したとき、犯人のつけた傷以外に体中のアザと数箇所の骨折があり、さらに何日食事をもらっていなかったのか、とても6歳とは思えない程虚弱で、ガリガリの姿だった。
それを見たリンディは、小さい近藤がどれほど壮絶な生活を送っていたのか想像できなかった。
そして、外界からの知識を一切取り込まず、6畳という小さい世界で6年間育った近藤の知能は3歳児程しかなかった。

フェイトは母であるプレシア・テスタロッサと別れた後、なのはという親友、リンディという新しい母親、クロノという兄ができた。

しかし近藤の結末にそんなハッピーエンドはない。

「両親が次元犯罪者に目の前で殺されたとき、俺はこう思ってしまいました」

――――― 助かった ―――――

――――― もう痛い思いをしなくていいんだ ―――――

「そして、犯人が俺を殺そうとしたときも俺は喜びました」

――――― 楽になれる ―――――

近藤は犯人に斬られる寸前、笑っていた。
この頃から、近藤の心は壊れていたのだ。
自分の死を恐怖として感じない人間になってしまった。

「両親の死に安堵し、自分の死を喜ぶ人間が、人を好きになったり、人に好かれていいわけがない」

そう言う近藤の瞳は、

悲しも、怒りも、喜びも無く、

ただ、事実を受け止めただけの、感情のない色だった。

それは、諦めの色ともいう。

なのは達はそんな近藤を見て何も言えなかった。

近藤は苦笑し、エリオとキャロに向いた。

二人とも、苦しそうに顔を歪めている。近藤の顔を見るのも辛いのか、視線を外し下を向いている。

「エリオ、キャロ。いままで偉そうに言ってたけど、幻滅したろ？だから、もう俺の事は・・・」

パァン！

近藤が言い終わる前に、フェイトがまた近藤の頬を叩いた。

「ばか！！」

フェイトはボロボロと大粒の涙を流していた。

今日は涙腺が緩い日のようだ。

「ばか！ばか！ばか！！」

壊れたようにばかと繰り返し、近藤の胸をポカポカと叩く。

「なんで！なんで！なんで！！」

フェイトの、近藤を叩く力が弱くなり、近藤の服を握りしめ、胸に頭をつけて泣き叫ぶ姿を見て、なのは達は動けなかった。

自分達が泣かないようにするための作業に必死だったのだ。

どうしてこの人がこんなに辛い思いをしなければならないのだろう。

どうしてこの人はこんなに客観的に、何の躊躇いも無く言えるのだろう。

生まれてから今までの間に、報われた日はあったのだろうか。

この人の幸せは、どこにあるんだろう。

それは何時来るのだろう。

神様は、なんて不公平なんだろう。

世界はこんなにも残酷なのか。

フェイトはやり場のない気持ちを、近藤のための涙を、近藤にぶつけた。

近藤さんはバカだ。

どうして私達に教えてくれなかったのだろう。

こんなにも辛い思いをして、それを諦めて。

何故自分達を頼ってくれないのだろう。

私もバカだ。

わかっている。こんなに辛い過去を簡単に話せるわけがない。
私も自分の過去は本当に心を許した人にしか話さないし、進んで話そうとも思わない。
この人は、孤独が当たり前で、誰も助けてくれなくて、だからこんなにも自分と他人に壁をつくって。

小さい頃の経験が今の人格形成の元になる。
近藤さんの過去は、親の愛情を受けることなく、虐待のせいで歪んだ人格を作り出してしまったんだ。
私にはアルフがいた。
リニスがいた。
リンディ母さんがいた。
そしてなにより、なのはがいた。
だから、私は心を壊すことなく、人としていられた。
辛いこともあったが、それも皆がいたから乗り越えられた。
でも、近藤さんには誰もいなかった。
救ってくれる人がいなかった。
だから、壊れた。
壊れて、治らなかった。
だから、人を頼らず、頼れず、愛さず、愛されない。そう思って生きてきた。
それが近藤さんの処世術だったんだ。

過去は修正できない。
近藤さんの過去もナシにはできない。
たとえ、悲惨でやり直したい過去でもそれが今の近藤さんを形作ったんだ。
過去を否定してはいけない。

それは、その人を存在を否定するのと同義なのだから。

それじゃあ、私は近藤さんに何が出来るだろう？
今の私に出来ること。
それはこれからのこと。
未来の事。
そう、未来を支えよう。
近藤さんが幸せでいられるように、私が、私達が近藤さんを支えよう。
そう思うと、心が温かくなった。
すごく、幸せなことなんだと、思えた。

ああ、そうか。

何故私はあんなにもイライラして、モヤモヤして、切なくなったのか。

やっとわかった。
いや、わかっていた。
でも否定していた。
認めたく無かったんだ。
初めて異性に抱く感情。
ならば、素直になろう。

そう、私は・・・

そんな時、近藤の両脇にそれぞれエリオとキャロが立った。

そして、近藤の手を片方づつ、優しく握った。

エリオもキャロも、目に涙を溜めて、必死に泣くのを堪えていた。

「・・・お父さん」

エリオが静かに話しかけた。

「・・・お父さんは、僕に言ってくれました・・・人造魔導士の僕でも・・・この世に僕は一人しかいないって・・・ライトニング分隊のエリオ・モンデュアルはこの世に一人しかいないって」

そして、エリオは二カッと歯を見せて笑う。

「僕は、僕でいいって！」

それは、涙に濡れ、鼻水も垂れた、だがその顔にはこの世で最も美しい、笑顔があった。

「・・・私も、エリオ君と同じです・・・だから・・・私はお父さんに言います。誰が何を言っても・・・お父さんはお父さんです・・・！」

キャロもかわいらしい顔が涙と鼻水で台なしだ。でも、そこには何の汚れもない天使のような笑顔があった。

「・・・近藤さん・・・お願いだから・・・」

フェイトはゆっくりと顔を上げ、近藤を見つめる。両手を近藤の頬に優しく添えた。
叩いた頬が赤くなっている。そこをゆっくりと撫でる。
フェイトも涙でメイクが流れ、顔がグシャグシャだ。
はっきり言って、こんな無様な姿は見られたくない。
それでも顔を上げ、言わなければならない。

フェイトは確信のようなものを感じていた。
この人はおそらく私と、エリオの秘密を知っている。造られた存在だということを知っている。
それでも、いや、だからこそ、エリオが言ったあの言葉を送ったのだろう。

『僕は、僕でいい』と。

近藤がエリオに送った言葉
『お前は、お前でいい』

それは、自分達を肯定してくれる言葉。
これ程勇気溢れる言葉は無い。
ならば、自分も言わなければならない。

自分の気持ちを。

あの言葉を。

「嫌われるのに慣れてるなんて、二度と言わないで！」

フェイトは、エリオは、キャロは、ボロボロと涙を流し、椅子に座っている近藤を強く、強く抱きしめた。

「私達は『あなた』が『大好き』です！！」

3人は泣き続けた。

近藤を抱きしめ、泣かない近藤の代わりに、3人は泣き続けた。

見守っていたなのはやはやて達も密かに涙を流し、ただ願った。

近藤さんの　未来が　良いものであるように

近藤はフェイト達に泣き付かれながら、天を仰ぎ、ため息をついた。

（・・・ほんと、やさしすぎるよ・・・）

それは、ちょっとしたトラブルから、家族の絆がより強く、深くなった日。

――と、ここで綺麗に終われればいいのだが、そうは問屋が卸さない。

ひとしきり泣いたフェイトは、泣き止むと恥ずかしそうに近藤に右手を差し出した。

「なんですか？お手？」

近藤は首を傾げた。

しかし、そこにはフェイトのとても素敵な笑顔があった。

鳥肌が立つ、先程なのはにも味わった感覚。

超怖い。

「近藤さん、マセラティさんから電話番号とメアドの書かれた紙を受け取ったでしょ？出してください」

「えっ！？まじっスか！？それ『地上本部の男性局員が欲しいもの第3位』じゃないっスか！！」

勢いよく食いつくヴァイス。

色々ランキングがあるんだなぁ、となんとなく思ったなのは達。

「・・・ちなみに2位と1位は何なん？」

聞かなくてもいいのについ聞いてしまうはやて。

この辺りが関西人の宿命か。

「2位は『オーリス三佐の笑顔』で、1位は『マセラティ二尉とのきゅんきゅん桃色なひと時』っス!!」

拳を握るヴァイスになのは達は少し距離をとった。

いわゆるドン引きというやつだ。

「・・・男の人って・・・」

「基本馬鹿でスケベなんだね・・・」

ティアナとスバルの突き刺さるような冷たい視線が痛い。

「不潔・・・」

「ぼ、僕は違うよ!?こんなこと望んでないよ!」

キャロの冷ややかな眼差しに慌てて弁解するエリオ。

「やっぱり上位に入ってへん・・・」

違うことで落ち込むはやて。

とりあえず、近藤はフェイトの笑顔が超怖いので素直に紙を渡した。

「フェイトちゃん、それをどうするの?」

なのはは紙を受け取ったフェイトに聞いた。

すると、ニコリと笑い、

ビリビリーッ！

フェイトは紙を破いた。復元不可能な程に小さく破り捨てた。

「あー！？貴重な宝がー！！」

ヴァイスは絶叫した。

オーバーリアクションで混乱するヴァイスの周囲には半径２メートル程の空間があった。

フェイトは何かやり遂げたような、なんとも清々しい、素敵な笑顔で近藤を見た。

近藤はその笑顔に危険信号を受信した。

マジ超怖い。

「私達がいるんですから、あんな人と連絡取る必要ないですよね？」

近藤にはフェイトの言うことがわからなかった。

すると、フェイトは顔を茹蛸のように真っ赤にして、核爆弾を投下する。

「・・・だから、その、あの・・・ぁ、あんな人に頼らなくても、わ、わわ私がいますから！け、けけけい経験無いですけど、頑張りますから！！」

胸の前で握りこぶしを作るフェイトの、イロイロな段階をすっ飛ばした発言にキャーキャー叫ぶなのは達。

「キャー！？フェイトちゃん飛躍しすぎだよー！ものには順序があ

るんだよ！？」

顔を真っ赤にしてフェイトに掴みかかるなのは。

「フェイトちゃん・・・男前やなぁ・・・」

しんみりと悟ったような口調のはやて。顔は真っ赤だが。

「ティアナさん、フェイトさんは何を言ってるんですか？」

よくわかっていない１０歳のエリオ。

「・・・子供は知らなくていいの。・・・近藤副隊長、私も・・・覚悟はありますから・・・！」

変な決意を胸に抱くティアナ。

「ティア、なんか気合入ってるね？」

ティアナを見てもよくわかっていないスバル。

「私たち子供にはわからない世界です・・・」

実はなんとなくわかっている１０歳のキャロ。

「くぅぅっ！近藤さん・・・！マジ男前っス！・・・できればその女運を俺にも回して欲しいっス！」

号泣しているヴァイス。

各々好き放題言い出し、部屋の空気がカオスになってきた。
もうやだ、この人達。

「いや・・・ホント、意味わかんないですから・・・」

近藤はげんなりとしていた。

彼の幸せは一体いつ来るのだろうか。

いや、今この瞬間が幸せの形なのかもしれない。

「こんな神経擦り減らす幸せいるか！」

そんな叫びが聞こえたとか聞こえなかったとか。

## 第４７話（後書き）

今回、説明不足のところがあると思います。
それは、近いうちに補完しようと思います。
できる自信がない・・・
でも頑張る！！

## 第４８話（前書き）

作者　「最初に謝っておきます」

フェイト　「え？」

作　「チョーシにのってやってしまいました！！
すいません！！」

なのは　「・・・なにが？」

作　「キャラの性格をとんでもなく改変してしまいました。
しかも、かわいい・・・」

フ　「・・・あんなのがいいんだ・・・・」

な　「まぁ、人の数だけ考えがあるんだよ」

作　「何その憐憫の目は？」

な　「とりあえず、作者の妄想ダダ漏れをみてあげてください」

作　「そんな恥ずかしい紹介やめて！！」

# 第４８話

ちょっとしたドタバタがあったが、それから3日は特に語るほどのことはなかった。

ただ、近藤とフェイトが、いやフェイトが一方的に意識してしまい、ギクシャクしているくらいである。

さて、今日の機動六課はすこし浮足立っていた。
局員の大半がソワソワしていた。
なぜなら、今日はテレビが撮影にくるからだ。

主に取材やインタビュー等は前線メンバー、隊長陣が担当するので他の局員は気にすることはないのだが、機動六課はなぜか女性の比率が高い。だから、少しでも映ることを考えてか、皆身嗜みやメイクに余念がない。
もちろん、それは隊長やフォワード達にも言えた。

今前線メンバーは部隊長室に集まり、ミーティングを行っていた。
スバルはたまに寝癖があったりしたが、今日はキッチリ整えている。
シグナムやヴィータまでもが気合いの入った化粧をしていた。

「あ、ほらエリオ、ここ寝癖」

フェイトがエリオの髪をチェックして目敏く見つけ、注意する。

「あ、スイマセン・・・」

フェイトはブラシを取り出し、エリオの髪の手入れをする。
その際もフェイトは近藤をチラチラ見ては顔を赤くする。
皆はそんなフェイトに苦笑した。

「ええか、今日はテレビの取材が来る。これは管理局のイメージアップにも繋がる大事な任務や。みっともないところは見せられへん」

いつになくはやてが皆に真剣に語りだす。
フォワード達も些か緊張した面持ちではやての言葉を聞いている。
すると、はやてはフッと顔を笑みに変えた。

「――と、固い事は終わりにして。ま、普段通りやったらええよ。飾り立てることのない、本当の私達の仕事を見てもらおう」

「はい！」

はやての言葉に皆が元気よく返事した。
そして、はやては近藤の方を申し訳なさそうに見た。

「なあ、近藤さん？ホンマにええんやろうか・・・私だけでも査察に付き合うた方が・・・」

「大丈夫です。はやて隊長はそちらに専念していてください。こちらの事情はオーリス三佐にも伝えて了承してもらってますから」

近藤は問題無いと言う。
そう、今日はテレビ撮影の他に、地上本部からの臨時査察のある日なのだ。
役割分担としては、近藤一人で査察官を相手し、残りのメンバーは撮影ということになった。

少し予定が狂ったが、元々近藤はテレビ撮影に参加するつもりはなかった。
裏方にまわる予定だったのだ。
なぜなら、近藤の顔は管理局のイメージダウンになりかねないからだ。
一度撮影の打ち合わせにテレビ局のディレクターと会ったが、その時に震えながら言われた。

「あなたは出ない方がいいです。もし出たら、ウチのテレビ局潰れるかも・・・」

言いたいことはわからなかったが、ようするに近藤の顔は怖いということだった。

近藤は撮影工程のデータをはやてに渡した。

「一応、午前の訓練から昼食、午後の訓練、デスクワーク、オフシフトまでの一日を予定しています。機密による撮影ＮＧなんかはその時々にプロデューサーに言ってください」

はやてはそのデータを眺め、近藤の言葉にフムフムと頷いた。

「ん、了解や。しかし結構タイトなスケジュールやな。私等はこれが普通やけど、撮影する人達はついてこれるんか？」

「それもまた管理局の一面ですよ」

近藤はシレッと酷いことを言った。

管理局はこれだけしんどい思いして平和を守ってるんですよ

管理局はこれだけ辛いんですよ

はやては苦笑いしかできなかった。

しばらくしてテレビ局の人達が来て、撮影に入った。
今は仮想シミュレータでの訓練を撮影しているところだろう。

そして、近藤はロビーで臨時査察の一団を待っていた。

（さて、誰が来るのか・・・）

近藤はぼんやりと考えていた。
ちなみに、エレノアはヴィヴィオと宿舎にいる。
エレノアの大将という地位はメディアの露出は勿論、地上本部の査察にも存在を知られてはいけないのだ。
だって、あんなグータラが大将なんていやじゃない？

そうこうしてると、自動ドアが開き、ロビーへ入ってくる一団がいた。
査察団だ。
そして、その先頭を歩く人物はなんと、オーリス・ゲイズ三佐だった。
メガネの奥の切れ長の瞳が近藤を見つけ、ひと睨みする。

またなんとも・・・
近藤は心の中で苦笑した。

「お待ちしておりました！ゲイズ三佐！」

近藤はビシッと敬礼した。
オーリスはそんな近藤を一瞥し、

「うむ、ご苦労」

短く言い、敬礼した。

「さて、早速だが各部署を案内してくれるか？」

「了解しました、ゲイズ三佐！」

挨拶もソコソコに、査察団は近藤に連れられ、隊舎内を歩くことになった。

査察は滞りなく進み、昼食時間になった。

「あ、もう昼ですか。ここの食事は隊長達の要望が反映されているので、地球の料理が多数メニューにあります。ゲイズ三佐もどうですか？」

「・・・ふむ、ではいただこうか」

近藤の提案にすんなり従うオーリスだったが、これには同じ査察に来た局員達が驚いた。

素直だ・・・

普段のオーリスは物事を効率的に進める理知的な女性である。
今回の査察も昼食を取らずに、早く終わらせるというのが当初の予定だった。
それをこうも簡単に覆すとは。
査察団の局員達が驚いている間に、近藤とオーリスは話しを進めていた。

「君のオススメはなにかな？」

「はっ、自分はカツ丼ですね。ですが、女性なら、このタラコスパゲティーなどどうですか？」

「そうか、ではそのタラコスパゲティーとやらをいただこうか」

と、とんとん拍子に昼食メニューが決まっていく。

「お前達も昼食にしろ。１時間の休憩だ」

オーリスがポカーンと見ていた他の査察メンバーに声をかけた。
はぁ、と生返事しか出来ない査察メンバーだった。

オーリスと近藤は同じテーブルで昼食を取った。
オーリスは物珍しそうに近藤のカツ丼を見、変わった食べ物だなと

呟き、自分のタラコスパゲティーを食べた。

「・・・ほう、これはなかなか」

どうやら、オーリスの口に合ったようだ。

「ゲイズ三佐のお口に合い、なによりです」

近藤のこの言葉に、オーリスは口を止め、フォークを置いた。

「近藤三尉」

オーリスは近藤を睨む。

「はっ！」

何かまずいことでもしただろうか？

近藤はダラダラと冷や汗を流し、オーリスの言葉を待った。

だが、オーリスは何かモゴモゴと口を動かし、一向に話そうとしない。

やがて、何か決意したような面持ちで近藤を睨んだ。

「その、なんだ、ゲイズというのはレジアス・ゲイズ中将と混同してまぎらわしいだろう？」

「・・・は？いえ、まぁ、そうですかね？」

要領を得ないので、近藤は曖昧な返事を返した。

「だから、だな、これからは私のことはオーリスと呼ぶように！」

そう言うとオーリスは置いていたフォークを持ち、スパゲティーを口に運んだ。

「・・・あ、はっ！了解しました、オーリス三佐」

「う、うむ」

オーリスは近藤と目を合わせず、一言返事をして黙々とスパゲティーを食べた。

この時、近藤は気づくべきだった。

少し離れたテーブルから、異常な殺気が放たれていたことに。

その後、コーヒーを飲みくつろいでいたのだが、先程のやりとりからオーリスとの会話が多くなった。

「申し訳ありません、本来なら隊長達も同行しなければならないのですが・・・」

「気にしなくていい。メディアの露出も大事な仕事だ。それよりもこちらこそスマンな、臨時査察など・・・」

「いえ、それこそお気になさらず。仕方ないです。ゲイズ中将はこの部隊を快く思っていませんし、自分も満足な情報を提出できていませんから」

近藤が申し訳なさそうに謝るが、これにオーリスは慌てた。

「いや！君は十分な働きをしているぞ！君が報告した、この部隊の後ろに三提督がいるという情報は、かなり重要だ。下手にトラブル

を抱える必要も無くなるしな！」

「そう言っていただけると有り難いです」

近藤は頭を下げた。

オーリスはそんな近藤を見てひとつ咳ばらいをし、「うむ」と言ってコーヒーを飲んだ。

コーヒーは少しぬるくなっていた。

昼食休憩を終え、その後も査察はスムーズに進み、特に問題も無く終了となった。

近藤はロビーでオーリス達査察団を送り出していた。

「では、引き続き頼むぞ、近藤君」

オーリスが近藤を労う。

「了解です。オーリス三佐もお体に気をつけて」

近藤はそう言い敬礼をした。

そしてオーリスは敬礼をし、柔らかい微笑みを近藤に送り、機動六課を後にした。

オーリスは仕事を終え、自宅へ帰った。
現在彼女はマンションに一人暮らしである。
暗い部屋に明かりを点し、一番手前のドアを開け部屋に入る。
そこは彼女の寝室である。ベッドがあり、クローゼットがある、普通の寝室。
そんな部屋には、彼女には似つかわしくないもので溢れかえっていた。

それは、イヌ、ネコ、ウサギ、クマ、はたまたよくわからない生物のぬいぐるみ達だった。数にして５０はくだらないだろう。

オーリスは上着を脱ぎ、シャツのボタンを二つほど外し、衿元と袖を開けてリラックスさせる。
そして、彼女はぬいぐるみの中でも一際大きい、自身程はある巨大なぬいぐるみを持ち上げた。
それは、クマのぬいぐるみなのだが、何故か右目には眼帯がされていた。
しばらく持ち上げたクマのぬいぐるみを真剣に見ていたが、急ににへら～とだらしない顔になり、クマのぬいぐるみを強く抱きしめ、ベッドにダイブし、ゴロゴロ転がりだした。

「きゃー！どうしよう！？今日は近藤さんといっぱいお話しちゃったー！！」

しゃべりながらも転がるのをやめないオーリスは、抱きしめていたクマのぬいぐるみを見ながら呟いた。

「ねぇダイちゃん、私嫌われてないかな？」

ダイちゃんとは、このクマのぬいぐるみの名前らしい。
そのダイちゃんに話しかけていると、オーリスの顔から笑顔が消えていく。

「私、目つき悪いし、一応上官だし、厳しくしないとダメなんだよ？・・・それでね？今日何回も近藤さんのこと睨んじゃった・・・」

シュンと落ち込むオーリス。
だが、すぐに何か思い出したのかまた笑顔になる。

「あ！でもでも、近藤さんと一緒にランチしちゃった！ホントは近藤さんと同じものが食べたかったけど、オススメ教えてくれたし！おいしかったんだ！」

キラキラと目を輝かせ、少女のように一喜一憂するオーリスだったが、まただらしなくニヘへ～と笑い出した。

「それにね、それにね？近藤さんに名前で呼んでもらえたのー！！キャー！イヤーン！それと、最後のお別れの時にね？私、近藤『君』って言っちゃったー！！」

キャーキャーと喚き散らすオーリス。管理局での威厳が微塵もない。

「あとあと、近藤さんも『お体に気をつけて』って私のこと心配してくれたしー！」

顔を赤くしながら今日の事を思い返すオーリスは、ため息をついてクマのぬいぐるみの眼帯に指を這わせる。

「・・・しばらく会えなかったけど、やっぱりカッコよかったな・・・早くウチに戻ってこないかな～」

オーリス・ゲイズの周りには、小さい頃から父親のレジアスや、その親友のゼストなど、強面の濃い顔が多かった。
そのためなのか、それとも母親ゆずりの遺伝による好みなのか、厳つい顔の男ばかり好きになった。
初恋の相手はゼストである。
だが、オーリスはこの少女趣味をひた隠している。
自分は管理局でのイメージが強く、もしこんな趣味があるとばれたらバカにされ、幻滅されるに決まっている。
だから、極力男を好きになろうとしなかった。
そうすれば、自分の趣味がバレずに済む。

だが、地上本部で近藤を一目見て彼女の体を電撃が走った。

一目惚れだ。

あれ程自分の理想を具現化した男はいままでもいなかった。あれでヒゲがあればもう言うこと無しだ。
だからといって、そう簡単に話しかけることは出来なかった。
近藤の周りには何故かいつもドゥーエが纏わり付いていたのだ。
いつしかオーリスは近藤ばかり目で追いかける日が続いた。
そんなとき、レジアスから近藤に機動六課への潜入スパイの話が持ち上がった。
これはチャンスだ。
レジアスの秘書として、自然に接触する絶好の機会である。
これを口実にお近づきになろう！

はたして、願いは叶い、オーリスは近藤と話すことができた。
だが、近藤はすぐに機動六課へ異動してしまったのだ。

それからは近藤に会えず、かといってこちらから連絡をとるほどの用事も無く、悶々とした日々が続き、近藤の送る定期報告書だけが唯一の楽しみとなっていた。

オーリスにとって今日は最良の日となった。
そして、その嬉しさを抱いたまま、彼女は夢の中へと誘われた。

将来の夢は『かわいいお嫁さん』であるオーリス・ゲイズはその日、白馬に乗った近藤とお花畑へ遠乗りした夢を見たのだった。

彼女は骨の髄まで乙女だった。

ところ変わって、地上本部のコンピュータルーム
ここに、一人の女性が侵入し、管理局のホストコンピュータへハッキングをしていた。
その人物とは、誰であろうドゥーエ・マセラティニ尉だった。

彼女は、ジェイル・スカリエッティに造りだされた戦闘機人ナンバーⅡ・ドゥーエ（ｄｕｅ）であり、管理局へは潜入捜査をしていたのだ。
潜入捜査とはいえ、キチンと入局試験を受け、正規の手続きを踏ん

でいるので怪しまれることはない。
今の階級もキチンと試験を受けて得たものだし、他の仕事もこなしている。
現在の仕事は、レジアス中将の秘書補佐と、最高評議会達のメンテナンスである。
その合間を縫って、管理局の情報をスカリエッティへ流している。
そして、最近スカリエッティから新たな任務を言い渡された。

『近藤大輔の監視及び情報収集』

である。
ドゥーエは最初なんの冗談だと思っていた。
なぜなら、近藤はドゥーエがずっと目を付けていた『いい男』だったからだ。

ウーノやクアットロは近藤の事を『ヤクザ』だの『変態』だの『最悪の人類』だの散々酷いことを言っていた。
だがドゥーエは反論した。

「あんな『いい男』の何処が最悪なんですか?それに彼はとてもカワイイんですよ」

そう言うと、クアットロのメガネがズレ落ち、ウーノは手を口に当ててワナワナと震えた。
スカリエッティからは、

「視神経を再調整するからアジトに戻って来なさい」

等と言われる始末。

ドゥーエは失礼な、と憤慨した。
近藤を見て何も（恐怖以外）思わないアンタ達の方がおかしいのだ。
あの精悍な顔つき、逞しい体、筋肉、ウットリするじゃないか！
それに見かけによらず、紳士でウブなところ等は”ギャップ萌え”というやつだろう、思わず胸がきゅんきゅんしてしまう。
だが、スカリエッティはドゥーエに、
「彼は我々の計画の一番の障害になる。脅威なのだよ」
と言った。
スカリエッティの話ではどうやら、近藤はスカリエッティと同じくアルハザードの知識を有する人物で、自身も謎の能力を持っているのだという。
ドゥーエはますます近藤に興味を持った。
スカリエッティの計画は大事だが、近藤程の男はそうそういない。
それ程の力があるのなら、なんとかして彼をコチラ側に引き込めないだろうか？
そこでドゥーエは考えた。
色仕掛けだ！
いままでも、といっても地上本部にいた期間だけだが、ドゥーエは近藤に積極的に接触してきた。
だが、近藤はどうも人の好意というのを感じ取る能力が低いらしい。
あれ程のアタックをしても、迷惑そうにするのみだった。
今日も久し振りに会い、胸を当てたり、体を預けたり、キスしよう

としてみたり、色々してみたが近藤はあたふたするだけで効果は薄かった。
まぁ、いいところで邪魔も入ったから、実際はわからないが。
ドゥーエは、自分が美女である事を自覚している。
だからこそ、その美貌を武器にして色々捜査に使用したこともあった。
いままでの男はドゥーエの美貌にイチコロだった。
しかし、近藤はなびきもしない。
そこがまたドゥーエの心をくすぐるのだ。

ドゥーエは決心した。
よし、もっとアグレッシブにいこう、と。
もうこの際、ドサクサに一線を超える勢いでいこう、と。

そんなことを考えながらも、ドゥーエはコンソールを軽快に叩き、ハッキングを続ける。

「・・・ん?」

ふと、ドゥーエは気になるファイルを見つけた。
特に問題の無い名称のファイルである。
だが気になる。

いままでの経験で、こういう気になるものはアタリが多かった。

ドゥーエはそのファイルを開いた。

そして、ドゥーエは見た。

管理局の腐った体質を。

どうしようもない毒を。

そして、それに巻き込まれた人物の名前を。

ドゥーエはそれを見て、怒りが込み上げてきた。

と、同時に悲しみも溢れてきた。

「・・・近藤さん・・・貴方は、私が救い出してあげますよ・・・フフフ」

ドゥーエはモニタを見ながら、笑った。

さて、また場所は変わって、機動六課へ。

近藤は床に正座させられていた。

目の前には、腕を組んで見下ろしているフェイトがいた。

他のメンツは離れたところで生暖かい目で成り行きを見守っていた。

改めて近藤は思った。

超怖い。

「あの、フェイト隊長？俺、なんかしました？」

恐る恐る聞いてみた。

「わかりませんか？」

フェイトはニコニコ微笑んでいた。

背中に汗が伝う。

マジ超怖い。

近藤は必死に原因を探った。

「・・・すいません。わかりません」

近藤は本当にわからなかった。

今日はフェイトとは別行動だったし、臨時査察も滞り無く無事に終わった。

何か自分の知らないところでミスをしたのだろうか？

そんな風に頭を捻っていると、フェイトはため息をついた。

「・・・オーリス三佐とお話してたでしょ？」

フェイトは顔を赤くして言った。

近藤はキョトンとした。

「え？はぁ、まぁ少しは・・・え？まさかそれで怒られてるんです

か？そんなことで？」

「そんなことってなんですか！？そんなことって！オーリス三佐と楽しそうにしてたじゃないですか！これはとても重要な事ですよ！！」

「ごめんなさい！」

フェイトのあまりの剣幕に近藤は怯みおもわず謝ってしまった。
しかし、

「で、でも、楽しそうでしたか？オーリス三佐はずっと機嫌が悪そうでしたけど？」

近藤の目にはオーリスが楽しそうにしていたようには到底見えなかった。
端から見ても、オーリスは終始怒っていたように見えただろう。
近藤を睨み、事実「オーリスと呼べ」と怒られたのだから。
だがフェイトは違った。
もし、あの場にドゥーエもいたならフェイトと同じことを言っていただろう。

「女の勘です」

なにその根拠のない曖昧な表現？
近藤は呆れた。

「そ、それに！最後別れるとき、オーリス三佐笑顔だったじゃないですか！！」

フェイトは首まで真っ赤にして言う。

「えっ!?マジっスか!『地上本部の男性局員が欲しいもの　第2位』じゃないっスか!!」

「・・・どこから沸いてでた、ヴァイス陸曹」

いつの間に居たヴァイスに、近藤は怒るに怒れなかった。なぜなら、泣いていたから。

「くうっ!近藤さん、アンタ『地上本部の男性局員が欲しいもの』ベスト3制覇じゃないッスか!!羨ましいッス!」

ワナワナと握る拳を震えさせ、心底悔しがるヴァイスだったが、急に近藤に近寄り、小声で聞いてきた。

「・・・で?オーリス三佐の笑顔、どうだったんスか?綺麗でした?」

ギィィと音がしそうな笑みを浮かべるヴァイス。
なんだそのイヤラシイ笑みは?
近藤の中でもヴァイスの株は下落傾向にあった。

「オーリス三佐か・・・確かに、綺麗な笑顔だったな。なんというか、無垢な少女というか、お姫様というか。そんな感じだったな」

近藤は素直な感想を言った。
近藤の感じたものは間違ってはいない。オーリスは乙女の心を持つ女性なのだから。
乙女の笑顔とは、それ程清楚で可憐なのだ。

そんな事を言っていると、フェイトがワナワナと肩を震わせていた。
それを見た近藤とヴァイスは思った。
ちょっと、マジ怖いんですけど。
「近藤さん」
フェイトはしゃがみ込み、正座している近藤と目線を合わせた。
なんだろう、その濁った、感情の篭らない瞳は。
怖いから勘弁して欲しいんですけど。
「近藤さんは私達六課の人だけ見てくれればいいんです。他の女なんてどうでもいいじゃないですか？特に私だけを見てくれれば、それでいいんです。マセラティさんとか、オーリスさんとかいらないでしょ？ね？わかりますか？」
フェイトはニコやかに話すが、目は笑っていなかった。
近藤は顔面蒼白になった。
隣にいたヴァイスは腰を抜かしていた。
「嫉妬に狂う女はコエェ・・・」
ヴァイスの呟きに、近藤は小さく頷いた。
そして、改めて思った。
超怖い。

因みに、後にこの時のフェイトの脅迫紛いの行動は、演技だということが判明した。
指導したのは勿論この人、

「ヤンデレをリアルで見たかったのー！」

エレノアだった。

ホント勘弁してください。

## 第４８話（後書き）

シグナム　「・・・おい」

作者　「何か？」

シ　「確かオーリス三佐と近藤の関係は無いとか、ボツにしたとか最初のほうで言ってなかったか？」

ヴィータ　「あぁ、大分前にな」

作　「なんか書いてたらあんな感じになってしまいました」

ヴ　「主要キャラを蔑ろにして脇役を目立たせるなんて・・・」

シ　「風呂敷広げすぎだろう。しかも今回の話は４０００文字くらいで終わる予定の話だったはずだろう？」

作　「うまくまとめられないんです。書いているうちに話が膨らんでいくんです。そのせいでオーリスがあんな乙女になったんです」

ヴ　「計画性がないな」

シ　「バカだな」

作　「・・・あんたらの出番減らそうか？」

ヴ　「ごめんなさい！」

シ　「私はいいから主に出番を！！」

# 第４９話（前書き）

ヴィータ　「・・・なぁ、ひとつ聞いていいか？」

作者　「なんですか？」

ヴ　「最近の話って、リリカルなのはの意味無くね？」

作　「・・・」

なのは　「オリジナルだからって、あまりにも世界観生かしきれてないものね」

シグナム　「ちょっとは魔法使いという所を前面に出さないとな」

フェイト　「・・・私もなんか変な人になってるし・・・ていうか、あれじゃあ変態だし・・・」

はやて　「フェイトちゃん、現実は残酷なんやで？」

フ　「・・・え？」

は　「世に出回ってる同人誌やアンソロジー見てみ？ほぼ７～８割フェイトちゃん変態やで」

フ　「・・・・・・！！」

ヴ　「なのはなんかは７～８割で、ドＳ炸裂させてるしな。フェイトを思いっきりイジメて」

な　「・・・・・・！！？」

エレノア　「そういう事では、はやてちゃんはあんまり扱い変わらないよね？元から弄りキャラだし、エロ親父だし」

は　「・・・改めて言われるとキツイわ・・・」

エ　「つまり、その同人誌とこの物語の脱線具合を比較したらどっちがマシ？」

ヴ　「・・・どっちも変わんねーよ。５０歩１００歩だよ」

シ　「ようするにだ、精進しろと言いたいのだ！」

は　「おお！シグナムがエエ事言うた！！」

シ　「・・・そしてわれ等の出番を増やしてくれ・・・」

な　「・・・・・・・うん」

フ　「・・・・・・・そうだね」

は　「・・・・・・・私も出番増えへんかな・・・」

ヴ　「・・・頼むから、その生暖かい目で見ないでくれ・・・！泣けてくる・・・」

作　「なんだこのグダグダな前書き？」

な　「まぁ、今回も魔法出ないしオリジナルですが、ゆっくり見ていってください」

# 第４９話

フェイトは悩んでいた。
近藤に「大好き」と言ってから、どうも近藤を直視できない。
すぐに顔が赤くなる。
だからあれからまともな会話をしていない。

先日のテレビ撮影の時も、近藤だけが臨時査察を担当し別行動をとっていた。
それはいい、仕方ない。
役割分担は大事だ。臨時査察も大事な仕事である。
だが、昼食時のアレはいただけない。
アレとは何か？
近藤がオーリスと同じテーブルで昼食を採り、更に仲よさげに話をしているではないか。
端からみれば、オーリスは近藤を睨み怒っているように見えただろう。
だがフェイトにはわかった。
アレは恋する乙女の目だ。
睨んでいるように見せかけて、アレは照れ隠しなのだ。
コレはアレだ、「ツンデレ」というやつだ。

近藤が他の女性と親しげにしていると、胸のあたりがモヤモヤと、チクチクとする。
すごく嫌だ。
嫌な気分だ。
苦しい。

後で近藤をしっかりと指導したら、フェイトは気分がスッキリした。

エレノアから教えてもらった「ヤンデレ」という方法は効果覿面だった。
近藤はしばらく顔を青ざめさせ、フェイトに素直に従っていたのだから。
アレはいい。また他の女と話していたらやろう。
そんな物騒な事を考えているフェイトだった。

だが、フェイトは現在の状況を意外だと思っていた。
今までは近藤を特に気になる異性として意識したことはないし、男性に恋愛感情を抱いたこともない自分が、まさかここまで異性に対して執着し、束縛するとは。
きっかけはエリオとの疎遠だったが、いつの間にか近藤の幼少時代の話になり、壮絶な告白を受けた。

フェイトは思った。

近藤さんは自分のもうひとつの姿だと。
支えてくれる人がいない、孤独な、壊れた自分の可能性だと。

私にはアルフがいた、リニスがいた、リンディ母さんがいた、そして、なのはがいた。

ならば、私は近藤さんの「なのは」になろう。
私が近藤さんを支え、共に歩んで行こう。
そう心に誓った。

だけど、私は自分の気持ちに不安になる。これは同情なのだろうか？近藤さんを憐れと感じ、手を差し延べたのだろうか？

もしそうだとしたら、私はなんて傲慢な女なのだろう。
なんという偽善者なのだろう。
私はエリオやキャロ達のような辛い境遇の子供達を助け、支援している。
これは、私の自己満足。
少しでも、彼等がより良い未来を手に入れられるようにと、自分のような子供を無くすようにと。
自分は、近藤さんを同じように見ているの？
だけど、近藤さんを見ているとドキドキする。彼が笑っていると私も笑える。近くにいるだけで胸の辺りが暖かくなる。
すごく、幸せなんだと感じる。
この想いだけは、本物だから。
だから、私は近藤さんと一緒に居よう。

そこで、ふと考えた。
近藤さんとの未来を。
好きと告白したのだから、恋人として付き合うことになるのだろう。
近藤さんの返事は聞いていないが、この際置いておく。
だが、どうもそれがイメージできない。
二人きりで手を繋いで歩き、食事を採る。
それが何かしっくりこないのだ。

とりあえず、その先を考えよう。
ある程度親密な恋人になると行う愛の営みというものもどういうものか知っている。
以前、実家のクロノの部屋で、女性の裸の写真ばかり載っている、いわゆる”エッチな本”というのを見つけ、見たことがある。
私には刺激が強すぎ、その場で倒れてしまったのはいい思い出だ。・・・いい思い出か？
まぁ、それは置いておくとして、私は近藤さんと”そういうこと”

をする想像をしてみた。

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・はっ！？

思わず没頭していた。顔が熱い。

・・・よし、これはクリアした。

だが、日常生活に違和感を感じるのはどういうことだろう？

私、近藤さん、それから・・・

そこまで考えて、ハッとした。

そうか、そうなんだ。

私達は「家族」なんだ。

二人じゃないんだ。

フェイトは気持ちの整理がついたようで、よしっと気合いを入れ、

今夜のプランを実行するために行動した。

夜、ファミリーレストラン『ｃａｓｔｅｒ』には、その場に似つかわしくない美女二人がテーブルを共にし、食事を採っていた。

「うん、やはり地球の料理はおもしろい。カツ丼か・・・時間が無いときには最適だな」

亜麻色のショートヘアにキリッとした表情、メガネの奥に鋭く光る瞳で目の前の料理を評価するオーリス・ゲイズと、

「あら、このカルパッチョおいしい」

青いロングヘアーに艶のある唇に、惹きこまれるような笑顔で満足げに料理を食べるドゥーエ・マセラティだった。
家族連れで来ているお父さんや、男友達で連れだって来ている者達は一様に二人を見ている。
それほど二人は異質だった。
何故この二人がファミリーレストランで一緒に食事をしているのか。

「さて、マセラティ二尉。そろそろ、私と君が一緒にここにいる理由を話してもらおうか？」

オーリスは箸を置き、マセラティを睨んだ。
だがドゥーエは飄々としていた。

「もう、今は仕事じゃないんだから階級はやめましょうよ、ゲイズさん」

ドゥーエはニコリと笑った。

「・・・わかったよ、マセラティさん。で？今までこんな交流したことないのに、何故急に？」

オーリスは軽くため息を吐き、ドゥーエに質問する。

「いや、ゲイズさんが地球の料理を気に入っていると聞いて、ね」

「確かに地球の料理は好きだが・・・」

オーリスは先日の臨時査察での昼食から地球の料理が気に入り、イロイロ地球の料理を探しては食べ歩いていた。

このファミリーレストラン『ｃａｓｔｅｒ』は、地球の料理専門のレストランである。

老若男女、幅広い層に人気があり、休日などは家族連れでいっぱいの店である。

「それだけの理由か？」

オーリスは疑わしげにドゥーエを見る。

すると、ドゥーエはニヤリと妖艶な笑みを浮かべた。

「近藤さんの事で少し」

オーリスの眉がピクッと動く。

「・・・近藤君が何か？」

急に喉がカラカラになる。オーリスは水を口に含んだ。

「ゲイズさん、あなた近藤さんのこと好きでしょ？」

ドゥーエの発言と共に、オーリスは口の中の水を吹いた。

「汚いですよ、ゲイズさん」

「ゲホッゲホッ！・・・な・・・何を！？」

慌てるオーリスも、ドゥーエはにこやかに笑う。

「わかりますよ。だって、私も近藤さんのこと好きですもの」

ドゥーエの告白に、オーリスは息を飲んだ。

「・・・き、君は・・・君も、なのか？」

『君も』

オーリスが自供した瞬間だった。

「はい。だって彼、カッコイイじゃないですか」

ドゥーエはニコニコ笑いながら近藤の事を話す。

「う・・・うむ、確かに彼はカッコイイ・・・な、うん。体も逞しいしな」

オーリスは顔を赤くしながらドゥーエに同意する。

ドゥーエは嬉しそうに身体を乗り出す。

「ですよね！あの精悍な顔に、細マッチョじゃないあのガッシリとした体格！いいですよね～！」

まるで初めて理解者が現れたかのようなドゥーエの喜びように、おもわずオーリスはビックリする。まぁ実際初めてなのだが。
普段の彼女はクールなイメージが強かったが、この無邪気さは少女のようだった。

「私嬉しいです！周囲の人達は近藤さんの良さを何もわかってないんです！！」

「そ、そうか。・・・うん、そうだな、彼の良さをわかっていない者が多すぎるな」

オーリスはウンウンと頷き、言葉を続けた。

「確かに、彼の”あの”経歴はあまり褒められたものではないかもしれないが、それでもあんなに彼を嫌う必要は無いと思う。
地上本部へ異動してからの彼の勤務態度は良好だったし、業務内容もミスなど無く模範となる局員だった」

「近藤さんのこと、よく見てるんですね」

ドゥーエの言葉に、オーリスは顔を赤くし手をパタパタと振る。

「いや、その、だな！私はレジアス中将の秘書であって、部下の勤務態度等は把握している必要があってだな！」

慌てるオーリスを、ドゥーエは「はいはい」と笑いながら流した。

オーリスは照れ隠しにひとつ咳ばらいをした。

「・・・しかし、君は仕事とは随分イメージが変わるな。それが男性局員に人気のある理由か？」

オーリスはからかわれたので、少しいたずらっぽく言ってみた。

「ん～、人気があるというのは否定しませんよ。でも、私目立たないようにしてるんですよ？」

事実、ドゥーエは仕事では目立つ行動は取っていない。
目立てばそれだけ本来の仕事である潜入捜査に支障をきたすからだ。
なのに、ドゥーエのこの美貌が男共を蜜に寄るハチのように引き寄せてしまうのだ。

「でも、それを言うならゲイズさん、あなたも職場とプライベートは随分違うじゃないですか？」

「・・・どういうこだ？」

オーリスは疑わしげにドゥーエを見た。
すると、ドゥーエは目を細めてニヤリと笑った。

「私見たんですよねー。ファンシーショップでぬいぐるみを持ってすごく嬉しそうに・・・」

「わーわーわー！！」

オーリスは顔を真っ赤にして席を立ち上がり、大声をあげながら両手を振り、ドゥーエの言葉を遮る。

「他の人に迷惑ですよ。静かにしましょう?」

ドゥーエは口に人差し指を当て、しーと言ったが顔は笑っていた。

オーリスは真っ赤な顔のまま、大人しく座った。

「くっ・・・フン。バカにするならすればいい。似合わない趣味なのは自覚している」

オーリスはぷいと顔を背けた。

拗ねた子供のようだ。

「バカにするなんてとんでもない!かわいいじゃないですか!・・・でも、何故そのことをひた隠しにするんですか?」

ドゥーエは慌ててフォローし、気になることを聞いた。

「・・・私だって男と付き合った事がないわけではない。・・・その、私に近寄る男は仕事でのイメージで交際を申し込んで来るんだ。あるときに、私が少しぬいぐるみの事なんかを話したことがあった。・・・その時の男の嫌そうな顔を見て・・・な」

オーリスの自重気味に話す姿を見て、ドゥーエは真剣な表情になった。

「ゲイズさん。それは相手の男が悪いです。上っ面しか見ていないそのバカが悪いんです。あなたは何も悪くない」

ドゥーエはオーリスの手を握り、励ます。

オーリスは驚いていた。

まさか、自分の趣味を肯定してくれる人がいるとは思ってもみなかったからだ。
そして、ふと思い返した。

「フフ・・・こんな事、誰にも話したことないんだがな。君は不思議な人だな」

オーリスは笑みをこぼした。

「笑えばかわいいのに・・・でも、そっか。だから、いつも遠くから近藤さんを見ているだけだったんですね？」

ドゥーエはなるほど、と顎に指を当て思い返していた。

「君は私が遠くから見ていた事に気づいていたのか？」

オーリスは驚いた。
今日は本当によく彼女に驚かされる。
ドゥーエは肩をすくめた。

「そりゃあ、あれだけの熱視線送っていれば、ね？まぁ、近藤さんは気づいてなかったようだけど」

オーリスはまた顔を赤くした。
そこまで熱く見ていたのか。
急に恥ずかしくなってきた。
しばらく考えていたオーリスは、佇まいを正し、ドゥーエを見つめた。

「マセラティ君、私達は同じ人を好きになった、いわば恋敵だ」

オーリスは真剣な表情でドゥーエに言う。
ドゥーエも真剣に聴き入る。

「だが、君とは良い友人になれそうだ」

オーリスはそう言うと微笑み、手を差し出した。

「そうですね。でも、近藤さんは譲りませんよ、『オーリス』？」

ドゥーエはニヤリと笑いオーリスの手を取り握手する。

「こちらこそ。恋愛と友情は別よ、『ドゥーエ』？」

にこやかに、二人は握手した。

それから二人はいかに近藤かカッコイイか、意外とかわいいところがある等の話をし、ノリにノッた二人は改めて店を変え飲み直すことになり、食事を済ませ店を出ようとした。
その時、ちょうど店に入ってくる４人を見て、オーリスは慌ててドゥーエを掴み、身を隠した。

「ちょっと！なんで隠れるのよ！？」

ドゥーエはオーリスに怒った。
だが、オーリスの様子がおかしい。顔が赤く、明らかに挙動不審に

なっている。
小刻みに震えて、何かの小動物のようだ。

「だ、だって・・・アレ見て」

ドゥーエはオーリスが指差す方向を見た。

そこには、エリオとキャロ、フェイトに、先程までの話題の人物、近藤がいた。
４人は制服ではなく、それぞれ私服だった。
エリオは赤と白のパーカーにジーンズとラフな格好、
キャロはフリルの付いた淡いピンクのワンピース、
フェイトは白いサマーセーターに膝上丈のグレーのスカートとパンプスにより、スラリとした脚を惜しげもなく見せ、大人の雰囲気を漂わせる。
近藤は黒い皮のジャンパーに白い生地のプリントTシャツ、そしてジーンズにブーツという出で立ちだった。

「あら、近藤さんじゃない！？私服もワイルドでいいわね・・・これはチャンスよ！今から彼の所に行きましょう！」

ドゥーエは立ち上がり、近藤の所へ行こうしたが、オーリスに袖を捕まれ動けなかった。

「ちょっと、何してるのよ？」

ドゥーエは少しイライラしながらオーリスを見た。
だが、オーリスは顔を真っ赤にしながら俯き、手を胸の前でモジモジしながら小声でこう言った。

「は・・・恥ずかしい・・・」

・・・なにこのかわいい生き物？

ドゥーエは思わず抱きしめそうになった。

「・・・オーリス、あなた・・・何が恥ずかしいの？」

ドゥーエが優しく聞くと、オーリスは顔を両手で覆った。

「・・・う～、だ、だって！こ、近藤さんを見たらドキドキして、頭真っ白になって、わけわかんなくなるんだもん！・・・この前の臨時査察のときだって平常心保つのに必死だったんだもん！」

オーリスはイヤイヤと体全体を振り、耳から首まで真っ赤にした。

ドゥーエはそんなオーリスを見て、危機感を覚えた。

（この人、コレを自覚して武器にしたら強敵になるわね・・・オーリス・・・恐ろしい子！）

オーリスは未だにモジモジしていた。

結局、オーリスが一向に動こうとしないので、隠れて情報を得るということになった。

ドゥーエは、まぁコレはコレでアリかもと思った。

自分達の知らない近藤の弱み・・・もとい、プライベートを知るチャンスだ。

というわけで、オーリスとドゥーエは近藤達が座るテーブルの近くに移動し、聞き耳をたてた。

「今日はエリオとキャロの４人で外食しましょう」

そうフェイトに言われ、近藤は言われるまま着いてきただけだったので、近藤は店に入ってからもキョロキョロしていた。

「近藤さん、キョロキョロしすぎですよ」

フェイトが苦笑しながら言った。

「あ、すいません。いや、ファミレスなんて初めてなんで・・・」

「へー、エレノアさんとも来ないんですか？」

エリオが意外そうな顔をする。

そんなエリオを近藤はため息をつきながら見て言った。

「あいつはガッツリ食うのが好きなんだよ。だから、あんまりこういう所行こうって言わないな。あいつは焼肉とかが好きだな。あとスイーツな」

３人は「あー・・・」とハモった。納得したようだった。

「でもよかったのかな？エレノアさん留守番で」

キャロが心配そうに言った。

「あー、大丈夫だ。最近新作ゲームが出てな、部屋から出ようとせん。もう引きこもりだ。だから気にすんな」

フェイトは苦笑した。

（ダメ人間だ・・・いや、ダメデバイスだ・・・）

「さ、エリオもキャロも好きなの頼んでいいよ」

フェイトはメニュー表を二人に渡す。

エリオは目をキラキラさせていた。

「うわー、これ全部地球の料理なんですよね？どれもおいしそう！どれにしようかなー？」

「うーん、ニンジンがない料理は・・・」

エリオとキャロは楽しそうにメニュー表を見ている。

こういうところはやはり子供だ。

「近藤さんも好きなの食べてください。今日は私のおごりです」

フェイトはフフンと鼻をならし、自分の胸をドンと叩く。

「え・・・そんな、悪いですよ。ここは、俺が出しますよ」

「いえ、いいんです。私が近藤さんを連れ出したんだし、私が払います」

フェイトは一度言い出したら頑として聞かない。
こういう頑固なところはなのはやはやても持っている。似た者同士なのか、類は友を呼ぶのか。
だが、近藤にも男の意地がある。

「でも、こういうときは男が出すものでしょ？ほら、デートとかなら男持ちじゃないですか？」

「デ、デート！？」

フェイトは顔を真っ赤にした。

ガタンッ

どこかから何かをぶつける音がしたが、近藤は気にしなかった。
フェイトはなにやらぶつぶつ呟いている。

「デ、デート・・・これはデート・・・」

「ん？どうかしましたか？」

近藤はフェイトの顔を覗き込んだ。
いきなり近藤の顔が近くに現れたので、フェイトは「ひゃあっ」と奇声をあげ飛び上がり慌てた。

「い、いいいいえ！にゃんでもありませんじょ！？」

少し噛んだ。

「じゃ、じゃあ・・・甘えちゃおうかな？デ、デデデートなんだし、ね？」

顔を真っ赤にしてモジモジするフェイト。

エリオとキャロはそんなフェイトをポカーンと口を開けて見ていた。

「んー・・・何にするかな・・・・・・あ」

メニューとにらめっこしていた近藤はある料理に目が止まった。

フェイトはそれが料理を決めた合図だと思った。

「決まりました？じゃあ店員さんを呼びますね」

フェイトは呼びだしボタンを押し、店員を呼んだ。

しばらくして、女性店員が注文を取りにきた。

制服は何故かスカート丈の短いメイド服だった。

「僕、この『特製ハンバーグ５６０グラム』のライスセットで！」

エリオは相変わらずの豪胆ぶりである。

しかしすごいメニューだ。需要あるのだろうか？

「私は『和食膳』をお願いします」

キャロも渋い注文をする。

「近藤さんは何ですか？」

フェイトが自分の注文の前に近藤に先に頼めるように促す。

「あ、じゃあ、この『お子様ランチ』を」

周囲の空気が一瞬固まった。
フェイトもエリオもキャロもビックリした顔をしている。
店員も固まっていた。
また後ろの方からガタンとテーブルに何かぶつかる音がした。

「あ、やっぱり子供じゃないとダメですかね？」

近藤が申し訳なさそうに店員に言う。

「え？あ、い、いえ、別に構いませんよ？」

店員は慌てて注文をとる。

その後、フェイトはチーズリゾットを注文した。

店員が離れた後も、３人は近藤を見ていた。
皆の視線が集まるので近藤は居心地が悪くなり、

「あの・・・やっぱりおかしいですか？」

と恥ずかしそうに言った。
フェイトは慌てて謝る。

「い、いえ！すいません。別におかしいとかじゃないんです！ただ・・なんでお子様ランチなんですか？」

フェイトの質問に近藤は恥ずかしそうに頭をガシガシかいた。

「い、いや、その・・・食べたことないんで、気になって・・・やっぱりおかしいですよね？」

何も知らない人間が見れば、厳つい男がお子様ランチを頼むというシュールなシチュエーションは違和感バリバリだろう。
はっきり言って、イロイロな意味で怖い。

だが、フェイト達は近藤の事を知っている。
彼がどういう人物なのかを知っている。
だから、フェイトはクスリと笑った。

「いえ、近藤さんらしいです」

「・・・それはバカにされてるんですか？」

「いいえ？褒めてるんです」

フェイトがクスクス笑うと、近藤もハハッと笑い、エリオとキャロもつられて笑い出した。

しばらくして、各々注文した料理がテーブルに並びだす。
エリオは特大のハンバーグを見て目をキラキラ輝かせ、キャロも和食膳の色とりどりな料理を見て目移りしている。
フェイトもチーズリゾットから漂う匂いを嗅いで満足そうな顔をした。
そして、近藤のお子様ランチが来た。
丸く固められたチキンライスに何処かの国旗が立てられ、ミニハンバーグや唐揚げ、たこさんウィンナー、ポテトサラダ等子供が好きそうなおかずが敷き詰められている。
近藤はイロイロ角度を変えてお子様ランチを観察する。
へーとかほーとか言いながら見続ける。
その目は子供のようにキラキラとしていた。
そんな近藤に、フェイトはクスリと笑い、

「さ、皆の料理が来たね？じゃあ食べようか」

そう言ってフェイトは手を合わせた。
エリオとキャロも同じく手を合わせる。
近藤も慌てて手を合わせた。

「いただきます」

食物への感謝、料理人への感謝、食物を育てた人への感謝、全てに感謝をする。

４人は楽しく、おいしく料理をいただいた。

食事をしながらフェイトは思った。

やっぱりだ。
私達は４人で居るのが一番しっくりくる。

近藤さん、あなたは一人じゃないですよ。
あなたの隣には、エリオもキャロも私もいる。
それに、機動六課の皆がいる。

私達があなたの家族です。

だから、私達を頼ってください。
私達に甘えてください。

私の、私達の近藤さん。

あなたが笑うと私はうれしくなります。
あなたの意外な一面を見れて、私はかわいいと思いました。
あなたの恥ずかしそうにする姿を見て私はドキドキしました。

改めて感じました。
だから、もう一度言います。

私は　あなたが　好きです。

近藤達が食事を終え、レストランを後にしてしばらく時間が経過した頃、近藤達が座っていたテーブルから少し離れたテーブルには、

何か放心状態のオーリスとドゥーエがいた。
オーリスは鼻栓をしており、ドゥーエはおでこに冷却シートを貼っていた。
近藤のあまりにも意外すぎる行動に、彼女達は自身の臨界点を突破してしまい、オーリスは鼻血を噴き出し、ドゥーエは意識が朦朧となり、テーブルに頭をぶつけた。

それでも近藤の情報は聞き逃さないところが、流石プロというところか。

オーリスとドゥーエは大満足だった。
今回の観察は思いのほか大収穫だった。
オーリスは真っ赤な顔で、ぼーっと天井を見つめ、

「近藤さん・・・お子様ランチは反則よ・・・」

と、ぶつぶつ、フガフガ言っている。
ドゥーエも、虚ろな目でガラス越しに外を見ながら、

「あんなお茶目な一面があるなんて・・・」

と、こちらもぶつぶつ言っている。

二人で共通する思い、それは

「近藤さん、かわいすぎ！」

だった。
あの厳つい顔と屈強な体躯に似合わぬ、なんという意外性、なんというギャップ、なんというサプライズ。

まさに、この想いはプライスレス！

だが男にとって、かわいいという言葉は屈辱なのを二人には理解していただきたい。
おそらく、近藤でも直接言われたら泣く。

そして同時に思った。

『フェイト・T・ハラオウンは邪魔な存在だ』と。

ドゥーエはオーリスを見つめ、確認をとった。その顔は真剣そのものだった。おでこに冷却シートを貼付けたままだが。

「・・・オーリス、私達の敵が判明したわね」

オーリスもドゥーエを見つめ、無言で頷く。もちろん、鼻栓はしたままだ。

二人はガシッと堅く握手した。

「打倒！フェイト・T・ハラオウン！！」

彼女達の結束がより強固なものとなった瞬間だった。

当然、この後別の店で飲み直した。
そして、二人とも飲みすぎ次の日二日酔いになった。

## ついカッとなってやった。反省？なにそれ、おいしいの？（前書き）

明けましておめでとうございます。
新年一発目です。
新年一発目にこのネタはどうかと思いましたが、まぁ、これも私らしいと思いあげました。

題名通り、ついカッとなってやってしまいました。

何も考えず、ボーっと見てみてください。
そのほうがいいです。

## ついカッとなってやった。反省？なにそれ、おいしいの？

今日も何事もなく、平穏な日々が続く。
フォワードメンバーは午前の訓練を終わらせ、シャワーを浴び、昼食を採っている。
テーブルにはティアナ、スバル、エリオ、キャロのフォワードメンバーに近藤とエレノアの６人である。
最近はこの６人で食事を採ることが多い。
そして、テーブルの上では相変わらずスバルとエリオの食べっぷりは凄まじい。エレノアもまけじと皿にこんもりと盛り上がったパスタを胃袋に流し込む。頬が膨らみハムスターのようだ。
そんななか、近藤は前々から疑問に思っていた事を口走った。

「ティアナとスバルははやて隊長に胸を揉まれたのか？」

ティアナは口に含んでいたオレンジジュースを吹き出し、スバルもパスタが鼻から出た。

「ゲホッゲホッ！な！？ななな、ななにを言ってるんですか！いきなり！？」

ティアナは顔を真っ赤にして自分の胸を手で隠し、叫ぶ。
スバルはむせながら涙目で鼻から出たパスタを取る作業に専念していた。

「え？いや、だって確かティアナは１６歳でスバルは１５歳だろ？その歳にすれば相当大きいんじゃないのか？」

近藤は当然とばかりに言う。
確かに、ティアナとスバルはその年齢からして相当スタイルがいい。
二人ともグラビアアイドルとして活躍できるルックスとスタイルである。

「俺は前々から疑問に思っていた。機動六課には巨乳、美乳はいても、貧乳がいない！てな。あ、勿論ヴィータ副隊長のような体型やキャロ、ヴィヴィオなんかの成長中の子供は除くがな」

ティアナとスバルの視線が冷たくなっていく。
隣に座っているエリオは顔を真っ赤にして俯き、キャロは自分の平たい胸をペタペタ触りため息をついている。

「副隊長・・・いままで私たちの胸ばかり見てたんですか？」

スバルの言葉には優しさが感じられない。絶対零度の冷たさが伝わる。
だが近藤はそんな侮蔑をものともせずに続ける。

「で？はやて隊長に揉まれたのか？」

「・・・も、揉まれてません！」

ティアナは耳まで赤くしながら否定した。

「いや、揉んだで」

突如後ろから声がしたので、ティアナとスバルは振り向いた。
そこにはトレイを持ったはやてが立っていた。

「や、八神部隊長!?」

「揉んだって、いつですか!?」

二人ははやての登場に驚いたが、それよりも聞き捨てならない発言に確認をとった。

「いつって・・・二人が寝てる時に部屋に忍び込んでやな・・・こうもみもみっと・・・」

「犯罪!それ犯罪ですから!!」

指を顎に当て考え込みながら空いた片手をワキワキと動かすはやてに、的確なツッコミを入れるティアナとスバル。

「ウソやウソ。ほれ、地球に出張任務に行って皆で銭湯入ったやろ?あんときや」

「・・・・・あぁ・・・なんかどさくさで揉まれたような・・・揉まれなかったような・・・」

あの時は少しはしゃぎ過ぎて、記憶が曖昧だった。
もしかしたら揉まれたかもしれない。

「でも近藤さんは何でそんな事聞くん?」

はやてが近藤を見て言う。
すると、近藤はエレノアとなにやらゴニョゴニョと小声で話し込んでいた。

「・・・やっぱり・・・」

「・・・接触した記録が・・・これは排除を・・・」

よく聞き取れないが物騒な単語が出てきた。

「あ、あの～近藤さん？」

「はやて隊長」

近藤は真剣な眼差しではやてを見据える。
はやては気圧され、おもわず背筋を伸ばした。
そして、近藤は衝撃の言葉を発した。

「あなた、おっぱい星人ですね？」

「・・・へ？」

はやては目を点にしていた。
ティアナとスバルはあんぐりと口を開けていた。

「うん、この現状と、これまでの行動で立証されたの！はやてちゃん、あなたはおっぱい星人よ！！ごまかそうとも私にはスッパリお見通しだよ！！」

エレノアはズビシッ！とはやてを指さす。

「あ～・・・え？」

はやてはまだ現状についていけないようで、目を点にしながら頭に大量の？を出していた。

「何を言い出すかと思えば・・・」

「まったく、ふざけすぎですよ！なにがおっぱい星人ですか！」

ティアナとスバルも呆れ果てている。

明らかにご立腹だ。

「・・・あの、おっぱい星人ってなんですか？」

エリオが顔を真っ赤にして、小さく挙手をして近藤に聞く。

「おっぱい星人というのは、遥か彼方のおっぱい星から来た宇宙人だ」

「まだ言いますか・・・」

「ちがう！ちがうぞ！スバル！！」

ため息混じりのスバルに近藤は猛反発した。

「おっぱい星人は実在するんだ！」

「・・・・・・はぁ、そうですか・・・」

拳を握り、熱く語る近藤は少し気持ち悪かった。
ティアナはドン引きだ。

「例えばだティアナ、俺がティアナの胸を揉んだとしよう。さぁ、想像してみろ。どんな気持ちだ？」

いきなり話を振られて混乱したが、ティアナは素直に近藤に胸を揉まれた想像をした。

「・・・すごく、いやです・・・」

ティアナは顔を赤くしながらも、嫌そうな顔をする。

「じゃあ、今度ははやて隊長に胸を揉まれる想像をしてみろ」

ティアナははやてに胸を揉まれる想像をした。

「・・・・・あれ？」

ティアナは首を傾げた。
なぜだろう、全然いやじゃない。
いや、むしろ・・・

「胸を揉んでも嫌がられない！おっぱいに愛される存在！それがおっぱい星人である証拠だ！」

「イヤイヤイヤイヤ！」

はやては残像が出そうなくらい手をブンブン振る。

「それは、私が女やから触られてもあまりいやな感じがせえへんだけやろ！？私でも近藤さんに揉まれるのはイヤやわ！」

「まだありますよ」

近藤の左目がキラリと光る。
怖い。
その顔で目が光ると怖い。

「この機動六課の現状がなによりの証拠です！」

近藤は両手を広げ叫ぶ。
もう変質者だ。

「気付きませんか？何故機動六課には幼児体型の人を除いて、貧乳が一人もいないのか？そして、ご自分の行動に心当たりは？」

「えぇ！？う～ん・・・私の行動？ん～・・・」

はやてはうんうん唸り、考えている。
そこへ、近藤は的確な指摘をした。

「機動六課の女性局員は、全てはやて隊長が胸を揉んでるんですよ！！」

背景にドーン！と出そうなくらいのポーズをとる近藤。
気持ち悪い。

「・・・あぁ、そうなんや?全員の胸を揉んだんや・・・で?それがどういう・・・」

はやては近藤が何が言いたいのかわからず、首を傾げた。

そんなはやてに対し、近藤は肩を竦め、ヤレヤレとため息をついた。

・・・ムカつく。

「まだしらばっくれるんですか?」

「いや、しらばっくれるも何も・・・」

はやては本当にわけがわからず、少し焦りだした。

「おっぱい星人の能力のひとつ、『バストアップ』を知らないとでも?」

「バストアップ?」

ここで、いままで黙っていたエレノアが口を開いた。

「ようするに、はやてちゃんが胸を揉んだら揉まれた人の胸がおっきくなるの!」

「な、なんだってー!!?」

エレノアの衝撃の事実に、ティアナとスバルは立ち上がり叫んだ。

キャロも驚いた風にはやてを見る。

「おっぱい星人の手からは、なんかよくわからないが任意にバストサイズを変えれるエネルギーが出ているんだ!それはもうDカップ

なんかは当たり前！その気になればH、I、Jも自由自在！！まさしくゴッドハンド！！」

近藤は手をワキワキと動かしながら天井を見た。
なにこの変態？

「・・・そうだったんだ・・・道理で機動六課に来てからブラのサイズを変えるわけだ・・・」

ティアナは自分の胸を触りながら呟く。

「・・・私も今の制服の胸のあたりが苦しいと思ったら・・・ギン姉のブラもきつくなってきたし・・・」

スバルも制服の胸のあたりを摘んでみる。
制服は胸の部分だけパツパツに張っていた。
というか、スバルは密かに姉であるギンガのブラを拝借し、着けていたのだから驚きだ。
どんだけお姉ちゃん子なんだ、スバル。

「ちょ、ちょっと待って！？私そんなん知らんし！？そ、そもそも、なんで近藤さんがそんなに詳しいんや！？」

はやては焦り、近藤に反論した。
だが、そこにエレノアが割って入ってきた。

「・・・過去、アルハザードでもおっぱい星人との接触が記録として残っているの！」

エレノアが言うには、アルハザードでは、おっぱい星人との交流に

より、女性は全員巨乳もしくはそれ以上の猛者ばかりだったという。

「・・・だから、貧乳好きが反乱を起こして・・・アルハザードは・・・」

うっと言いながら、エレノアは口に手を当て涙を流した。

「そんな・・・」

皆の顔が驚愕に染まる。

「おっぱい星人はこの世界を破壊に導く悪魔だ！」

「えぇー！？」

はやては近藤に悪魔呼ばわりされ驚いた。
親友には元祖悪魔がいるのに。
それよりもアルハザードが滅んだ理由が貧乳派のクーデターとは。
真実は時として残酷である。

「はやてちゃん・・・」

いつの間にかはやての隣にはシャマルがいた。

「シャ、シャマル！シャマルからも言うたって！私はおっぱい星人ちゃうて！！」

はやてはシャマルにつかみかかり、助けを求めた。
だが、シャマルは悲しそうな瞳ではやてを見つめ、優しくはやての手を掴んだ。

「ごめんなさい、はやてちゃん・・・私、知ってたの・・・はやてちゃんが、おっぱい星人だってこと」

「・・・・・・え?」

はやての瞳が揺れた。

知っていた?

どういうことだ?

「私、見たの・・・地球にあるはやてちゃんの家に地下があって、そこには宇宙船が・・・」

「うそや!宇宙船!?そんなん知らん!私は知らん!」

シャマルの言葉にはやては首を振る。

「古代ベルカの時代にも王とおっぱい星人の接触があったの。それでベルカも滅亡の危機に・・・なんとかおっぱい星人の排除と貧乳の確保で滅亡は免れたけど・・・」

シャマルは遠くを見つめながら語りだす。

とてもつらい戦いがあったのだろう、シャマルの瞳にキラリと涙が光る。

「地下にあった宇宙船は、おそらくはやてちゃんのご両親のものだと思う。はやてちゃんは、どうやらおっぱい星人と地球人のハーフみたいだったから少し安心してたけど、成長するにつれ段々とおっぱい星人の能力を開花させていって・・・もう私には止められなかった!はやてちゃんのおっぱい星人の本能は、おっぱい大好きって

いう気持ちは、私には止められなかったのよ！！」

シャマルは両手で顔を覆い、泣き崩れる。
それをエレノアが優しく肩を抱く。

「お互い、つらい記憶を持って生きていかなきゃならない・・・シャマルちゃん、泣きなさい。おもいっきり泣きなさい！そして、明日からは笑って生きていこう？」

「うぅ・・・お姉さま・・・うわーん！お姉さまー！！」

エレノアとシャマルはお互いを抱きしめあい、泣きつづけた。

「はやて」

はやては呼ばれた方を見た。
そこにはクロノがいた。

「君をおっぱい星人の容疑で逮捕する」

「なっ・・・！？」

いきなりの宣告にはやては愕然とする。

「おっぱい星人は世界の敵だ。親友だとて、看過できないんだ！」

クロノは辛そうに言った。

「ごめんなさい、はやて。私も聖王教会の騎士として、おっぱい星人は野放しにはできないわ！」

「カリム・・・！？」

「はやてちゃん・・・たとえおっぱい星人だとしても、私達はずっと友達だよ！」

「な、なのはちゃん！？」

「だから、しっかりお勤め済ませてきてね！」

「なのはちゃんー！？」

「はやて・・・」

「主はやて・・・」

「フェ、フェイトちゃん・・・シグナム・・・」

「はやてのせいで私の胸がこんなに大きく・・・」

「主はやてのせいで、男共にあんないやらしい視線を浴びるはめに・・・」

「ふ、二人とも！？とりあえずバルディッシュのザンバーフォームとレヴァンティンをしまって！？」

「逮捕などという生き恥を晒すなら、いっそこの手で・・・」

「あ、それいいね！」

「なのはちゃーん!?同意せんとシグナム止めてー!?」

「いや、殺すなら、私の胸を一揉みしてからで」

「いきなり現れたどこの誰だかわからない銀髪眼帯少女さーん!とにかくシグナム止めてー!?」

「主はやて!覚悟ー!!」

「いいぃぃやあああぁぁぁぁっっ!!?」

「――――――――ていう夢を見たんや」

はやては自分が昨晩見た夢をなのは達に話していた。

なのは、フェイト共に呆れ顔だ。

「・・・はやてちゃん、いくら夢でもそれは言っちゃいけないよ」

「私・・・はやてとの付き合い方考え直そうかな・・・」

・・・今日も機動六課は平和です。

## ついカッとなってやった。反省？なにそれ、おいしいの？（後書き）

これは元ネタの漫画があります。
暇なら探してみてください。

僕は好きです。

そして、今年もよろしくお願いします。

## ついカッとなって2（前書き）

はい、反省してません！
今回も全く関係ない話です。

早く本編書けよ！
と言われるかもしれませんが、もうしばらくしたら進めます。

ホントだよ？

なので、何も考えず見てください。

# ついカッとなって2

「今日の模擬戦は私が参加します！」

エレノアが元気よく挙手してそう宣った。

「私とティアナちゃんとスバルちゃんでグループ組むから、そっちはなのはちゃんとヴィータちゃんとシグナムちゃんでね！それじゃあ作戦会議するから！」

エレノアがひとりでさっさと取り決め、ひとりで進行させていく。

エレノアはティアナとスバルを連れてさっさとなのは達から離れて作戦会議を始めた。

なのは達は反論する暇もなく模擬戦が決定した。

なのは陣営にて、なのは、ヴィータ、シグナムは三人で円になり対策を練っていた。

「はぁ・・・まったく、あの人は自己中心的すぎるな」

シグナムがため息まじりに言った。

「ま、近藤が甘すぎるんだ。だからあんな風になっちまう」

ヴィータもふんっと鼻を鳴らした。

「ははは・・・」

ぶつぶつ不満を言う二人を、なのははただ苦笑いして見るしかなかった。

「だが、これは好機だ。前回は姉上のペースに飲まれたが、今回はそうはいかん」

シグナムは持っていたレヴァンティンをゆっくり上げ、ブンと振り下ろす。
風圧で草が舞う。
エレノアを見つめるその顔は、笑っていた。

「だな。それに、今回はあたしとなのはもいる。いくら姉ちゃんが強かろうが、新人二人に遅れはとらねえよ」

ヴィータがグラーフアイゼンを肩に担ぎ、ニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「でも油断禁物、エレノアさんの常識は私達の非常識だよ。気を引き締めていこう」

なのは笑うことなく、引き締めの言葉をかけた。
その時、エレノア達のところから大声があがった。

「えぇーっ!?」

「なんですかそれは!?」

「無理無理無理無理！絶対無理ですって！！ね？ティア？」

エレノア達3人は円になり、しゃがんで地面に何か書きながら作戦を立てているようだが、ティアナとスバルが立ち上がって驚いていた。

「だーいじょうぶだって！自分達の力信じなさいって！」

「・・・・・・まぁ、エレノアさんの作戦、面白そうではあるわね・・・」

「ティ、ティア！？」

絶叫と、なにかとんでもない作戦を立てたであろう驚き、感心の声が上がった。

・・・何を話しているんだろう・・・

エレノアの常識は皆の非常識・・・なのはのこの言葉が現実になる戦いが始まる。

「えー、ではルール確認をしまーす。今回は3対3のチーム戦で、時間は30分、お互いバリアジャケットが3分の1以上破損したら撃墜扱いで。時間を過ぎたら残った人数で勝敗を決めまーす。何か質問は？」

エレノアは説明を終え、皆の顔を見る。
返事がないので、了承ととった。

「はい！それでは『ティアナのデレをみ隊』対『男性局員からジロジロいやらしい目で見られる組』の模擬戦を開始しまーす！」

「ちょっ！？な、なんですかその名前は！デレってなんですか、デレって！！」

「あ～、ティアはツンデレだからねー。今はツン期か」

ティアナが顔を真っ赤にして抗議をするが、スバルは横で納得していた。

「エレノアさん！？なにそのリアルに悩んでるネーミングは！？」

なのはが顔を少し青くし、

「姉上！？ホントに勘弁してください！」

シグナムは頭を下げて懇願した。

「あたしもいやらしい目で見られてんのか？だとしたら、そいつは変態だな、変態」

ヴィータも、自分をいやらしい目で見られていたということに、少し嫌そうな顔をした。
エレノアの嫌がらせネーミングに敵味方関係なく大ダメージを負った。

すでにこのフィールドはエレノア時空に飲み込まれた。

気を取り直し、各々配置に着き戦闘準備をとる。

『ティアナのデレをみ隊（略してデレ隊）』は地上でティアナとスバルが前面に出て、エレノアは後方にいる。

「ティアナが前面だと？どんな作戦だ？」

シグナムが注意深くエレノアの動向を観察する。
ちなみに、『男性局員からジロジロいやらしい目で見られる組（略してジロジロ組）』は三人共に空にいる。配置はバラバラだが、気心の知れた者同士、そこがベストポジションなのだろう。

「まずは様子見といくか」

ヴィータがグラーフアイゼンを構え、エレノアを見下ろす。

「・・・だね」

なのはもヴィータの意見に賛成し、しばらくは様子見をすることにした。

そして、エレノア達はというと、

「ふふん、やっぱり私を警戒して様子見するみたいね。じゃあ、ビ

ックリする攻撃をかましてあげますか！」

「はい！」

何故か自信満々のエレノアにつられて気合いの入っているティアナとスバルだった。

「いくよ！二人とも！！」

エレノアは叫ぶと同時に親指と人差し指をくわえ、ピィッと笛を吹いた。
すると

ボコボコッボコッ

エレノアの周りの地面が盛り上がり、何かが出てきた。

それを見た途端、なのは達『ジロジロ組』は我が目を疑った。
何故なら、それは、

「ペ、ペンギン！？」

エレノアの周りの土から出てきたのは5羽のペンギンだった。
そして、いつの間にかエレノアの前にはサッカーボール程の大きさの黄金の魔力球があった。

「ティアナちゃん！スバルちゃん！」

「はい！」

エレノアの掛け声と共にティアナとスバルはエレノアの前にあった魔力球を同時に蹴った。

「皇帝ペンギン！」

「2号！！」

エレノアの周りにいたペンギンは飛び出し、ティアナとスバルが蹴った魔力球を追尾する。さながらミサイルのようにお尻から火を噴き、飛んでいる。

「な、なにこれー！？」

なのはは混乱した。
予想外にも程がある。
地面からペンギンなんて、そんなのアリか！？
しかも、飛んでるし！
いや、そもそも魔法を蹴るという行動。

「・・・かわいい」

ヴィータがボソリと呟いた。

「ええい！相手に飲まれるな！」

シグナムは即座に反応し、皇帝ペンギン2号に切り掛かった。

レヴァンティンと皇帝ペンギン2号がぶつかり、火花を散らせる。
ペンギン達の目がギラリと光り、お尻から出ている火の威力が増す。

「くうぅっ！？」

シグナムが苦悶の表情を浮かべる。

気を抜けば押し負ける！

そう思ったとき、シグナムの横からヴィータがクラーフアイゼンを振り回し、皇帝ペンギン2号を打ち返した。

そして、皇帝ペンギン2号は掻き消えた。

「ヴィータ、すまん」

「いや、あたしもあまりの可愛さにボーッとしてた。・・・そうか、姉ちゃんと戦うってことは、こういうことなのか・・・」

ヴィータがゴクリと唾を飲み込んだ。

「ありゃ、少し出力絞りすぎたかな？」

エレノアは皇帝ペンギン2号が打ち返されて少し驚いていた。

だが、すぐに気を取り直す。

「よし！じゃんじゃんいくよー！！」

エレノアが右腕を上げ気合いをいれる。

ティアナとスバルもそれを見て力強く頷いた。

「なのは、作戦変更だ」

ヴィータがなのはの横に付きエレノアから目を離さずに言う。

「うん、私達が甘かった。様子見なんかしてたら負けるよ。もうコレはアレしかないね」

なのはもレイジングハートをエクシードモードに変え、構え直しながらヴィータに同意した。

「うむ、ティアナとスバルには悪いが、早々に退場願おうか」

シグナムはそう言いながらレヴァンティンにカートリッジを一つロードした。

ジロジロ組の作戦はこうだ。

まずなのは達3人でティアナとスバルを狙い、撃墜する。

後は一人残ったエレノアを3人で仕留めるという、ハンター作戦だ。

だが、ここにも誤算が起こる。

それも、誰もが予想しえない誤算が。

ジロジロ組はスバルにシグナムを、ティアナにヴィータを当て、なのははエレノアの援護を阻止しつつも、遠距離からティアナとスバルを狙う。

「紫電一閃！」

シグナムが炎を帯びたレヴァンティンをスバルに振り下ろす。
スバルの防御魔法では受け止めきれない攻撃のはずだった。
だが、レヴァンティンは振り下ろす途中でガキンと音がして止まった。
止まった剣先には、スバルのリボルバーナックルがあった。
スバルの足元にベルカ式の魔法陣が展開する。

「熱血パンチ！！うおりゃあぁぁっ！」

スバルは魔力の帯びたリボルバーナックルを振り抜き、シグナムの紫電一閃を跳ね返した。

同時刻に、ヴィータがグラーフアイゼンをティアナにぶちかまそうと振りかぶり、驚異的なダッシュで近づいた。
だがグラーフアイゼンをティアナに当てたとき、ヴィータの攻撃はティアナを素通りしティアナの姿が消えた。

「フェイク・シルエット！？幻影か！」

日に日に精度を増すティアナの幻影魔法には手を焼く。
ヴィータがキョロキョロとティアナを探した。すると、ティアナはヴィータから少し離れたところで空中に魔力スフィアを８つ形成し攻撃体制をとっていた。

「ちっ！クロスファイアか！」

ヴィータはとっさに体制を整え攻撃しようと体を反転した。
だが、

「はあぁぁぁっ！！」

ティアナはジャンプした。しかも横回転しながら。その時ティアナのまわりに炎の帯が現れ、彼女のまわりにあったスフィアが一箇所に集まる。

「ファイアトルネード！！」

ティアナはスフィアをヴィータ目掛けて蹴った。

そのスフィアは炎を帯びながら、驚異的なスピードでヴィータに襲い掛かった。

「なっ！？くっそー！」

ヴィータは驚きながらも、ファイアトルネードを防御魔法を展開した。

そしてなのはは、そんな二人の戦いを唖然とした表情で空から見ていた。

だが、すぐに気を取り直しレイジングハートをスバルに向けた。

足元に桃色のミッド式魔法陣が展開する。

いまならエレノアもスバルから離れていて助ける事ができないだろう。

「ディバイーン・バスター！」

なのはの掛け声と共に、レイジングハートから桃色の砲撃が発射された。

「スバルちゃん！アレで防いで！！」

エレノアの声に、スバルは咄嗟に足を高く上げ、リボルバーナックルを振りかぶった。

足元にベルカ式の魔法陣が展開する。

「いっけー！！正義の鉄拳！！」

スバルはグッと拳を握り、ダンと地面を蹴り、ギューンとリボルバーナックルを突き出した。

すると、リボルバーナックルの先から巨大な拳が現れ、回転しながらディバイン・バスターを押し出した。

なのはのディバインバスターは完全に消え、正義の鉄拳による拳がなのは目掛けて飛んできた。

「うそっ！？レイジングハート！」

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

なのはは避けるのが不可能と判断し、防御魔法を張った。

だが、

「究極奥義に完成無し！！」

スバルの声と共に、正義の鉄拳はなのはの防御魔法をいともたやすく打ち破った。

なのはは避ける事ができない。

やられる！

そう思ったとき、

「紫電一閃！！」

シグナムが横から正義の鉄拳に切り掛かり、正義の鉄拳の軌道をずらした。
なのはとシグナムはすぐに安全空域に移動した。

「あ、ありがとう・・・シグナムさん・・・」

なのははシグナムに礼を言うが、その表情は固かった。
スバルの攻撃がディバインバスターに押し勝ち、更に防御魔法までも砕く破壊力。
いくら自分達が能力限定を受けているとはいえ、この事態は想定外である。

「・・・どういうことだ？アレはＡＡＡランク程の威力だぞ。なぜスバルが使える？」

シグナムも現在の状況に戦慄していた。
紫電一閃を防がれ、更にスバルの攻撃を打ち消すのではなく、軌道をずらすしかできなかった現状に。
ありえない、だが、そのありえない現状が存在する。
それが今だ。

ヴィータもなのはとシグナムのいる空域に待避してきた。
バリアジャケットの所々が焦げていた。
ティアナのファイアトルネードによるものである。

「ティアナのやつ・・・炎熱変換なんてなかったハズだぞ・・・し

かも、この威力・・・」

ヴィータが冷や汗をかいていた。

「いったい・・・何が起こってるんだ?本当にコレは現実か?」

ヴィータがそう呟いたとき、なのは達の足元にに一本の青い道が現れた。

スバルのウィングロードだ。

見れば、スバルはいつの間にかかなり距離を縮めていた。

「まずい!散開!」

「そうはさせません!!」

シグナムの焦った声と共に、スバルはフィギュアスケートのように手を胸の前で交差してジャンプし、回転した。

「アイスグランド!!」

スバルの足先から氷が現れ、ウィングロード上に氷が張り巡らされ、シグナムとヴィータの足が氷漬けになり、身動きがとれなくなった。

「なっ!?氷結魔法だと!?」

シグナムは驚き、身動きが取れない状況に焦った。

「くそ!どうなってんだ、これは!?」

ヴィータも氷漬けにされた足を見て驚愕し、同時に恐怖した。

「ティア！」

スバルが呼ぶと、すぐ後ろにはティアナがいた。

「でかした！いくわよ、スバル！！」

そう言うと、ティアナとスバルはウィングロードの上を走り出した。
そして、ティアナのまわりにはオレンジ色の魔力が、スバルには青い魔力が二人を守るかのように現れ、ティアナのまわりの無数のスフィアが二人の足元に集まり一つになる。

「これが！私とスバルの！」

「私とティアの！」

「二人の『クロスファイア』！！」

ティアナとスバルは同時にスフィアを蹴った。
それは炎と氷が一つになり、輝きを増し、太陽のような光がシグナムとヴィータに襲い掛かった。

「シグナムさん！ヴィータちゃん！」

なんとかアイスグランドから逃げていたなのはは急いでシグナムとヴィータを助けに行こうとした。
しかし、そこに一番会いたくない人物がいた。

「・・・エレノア・・・さん！」

エレノアは腕を組み、ニヤニヤ笑っていた。
なのははエレノアにショートバスターを撃った。
威力は低いがなのはの直射魔法の中では最も早い最速砲撃である。
だが、

「ワームホール！」

エレノアに向かっていったショートバスターはエレノアの前で何かに吸い込まれたように消え、そしてエレノアの横から方向を変えて真下へ落ち、ショートバスターは地面に当たり、土煙を起こした。

「なっ・・・！？」

突然の出来事になのはは絶句し、動きを止めてしまった。
そして、

「ぐあぁぁぁっ！！」

「うわあぁぁぁっ！？」

シグナムとヴィータはクロスファイアをまともに受け、バリアジャケットが砕けた。

「はいシグナムちゃん、ヴィータちゃん撃墜～」

エレノアが嬉しそうに言う。
そして、二人を撃墜したティアナとスバルは飛び上がって喜んでいた。

「・・・どういうことですか・・・！なんで、あの二人が・・・あ

んなに・・・！？」

なのはは目を見開き、エレノアに声を絞り出すように話す。

「二人には才能があった。そして、努力もしていた。私は少し背中を押しただけ」

エレノアはニコニコと笑いながら言う。

「さぁ！ティアナちゃん、スバルちゃん！後はなのはちゃんだけだよ！二人の本当の実力を見せてあげよう！！」

「はいっ！！」

ティアナとスバルは返事をすると、スバルは高く飛び上がり、エレノアの所まで到達した。

そして、ティアナはしゃがみ込み、足元に巨大なミッド式の魔法陣と、周囲には小さい魔法陣が５つ展開する。すると、周囲の小さい魔法陣がボコッボコッボコッと盛り上がった。

なのはは嫌な予感がした。

まさか・・・

その予感は的中する。

盛り上がったところから、ペンギンが５羽顔をだした。

ティアナは立ち上がり、両手を高く上げると、ペンギン達は高く飛び上がった。そして、ペンギン達は宇宙服を着ていた。

「これが、私達の最強の技！！」

ペンギン達はエレノアとスバルの所まで飛び、二人の間にはサッカーボール程の黄金の魔力球があった。

エレノアとスバルは足を振り上げた。

「スペース！」

そして、同時に蹴りあげた。

「ペンギン！！」

スペースペンギンは黄金の軌跡を残してなのはに迫る。

なのはは咄嗟に迎撃しか道はないと判断し、レイジングハートのカートリッジをロードした。

「エクセリオンバスター！！」

カートリッジロードのみの抜き撃ちエクセリオンバスターと、スペースペンギンが衝突する。

宇宙服を着たペンギン達は、目をギラリと光らせ、ドンドンと勢いを増し、エクセリオンバスターを圧していく。

「そんな！？」

いくら抜き撃ちとはいえ、いくらリミッターがあるからといえ、エクセリオンバスターが圧し負けるなんて。

なのはの顔色が青くなっていく。

「みんなで合わせた力は、１００倍にも１０００倍にもなるんだ！！」

エレノアは拳を突き出し、叫んだ。

「いっけえぇぇーっ！！」

ティアナとスバルも腕を振り上げ叫ぶ。

そして、エクセリオンバスターはスペースペンギンによって掻き消え、スペースペンギンはそのままの勢いでなのはを飲み込んだ。

「これが、超次元サッカーだ！！」

「――――――――ていう夢をみたの」

なのはは昨夜見た夢をはやてとフェイトに話していた。

「うーん・・・エレノアさんだけに、洒落ですまん夢やな・・・」

はやては腕を組んで唸った。

「そうなんだよ。それに、なんか妙にリアルな夢だったんだよ」

なのはに予知能力などはない。だからといって無下にできないほどその夢は生々しく、リアルだった。

「でも、なんでそんな出鱈目な魔法の夢を？」

フェイトがコーヒーを飲みながら聞いた。

すると、なのはは顔を赤くし、ポリポリと頬をかいた。

「その・・・ヴィヴィオがエレノアさんから『イナズマイレブン』のＤＶＤを借りて・・・ヴィヴィオったら、ずっと見てるんだもん、私も一緒に見てたら夢にまで出てきたの・・・」

恥ずかしそうに俯くなのはを見たフェイトはフフッと笑った。

確かに、フェイトが部屋に帰ると二人で仲良くテレビを見ていたなと思い返していた。

「まぁ、エレノアさんはともかく、ティアナとスバルはそんなトンデモ技を使わないでしょ？」

「・・・そうだよねぇ・・・ははは」

３人はクスクスと笑いあった。

そのとき、

「な～の～は～ちゃ～ん！模擬戦し～よ～お～！」

近所の子供が遊びに誘うかのような間の抜けたセリフ、そこにはエレノアとティアナ、スバルがいた。

「シグナムちゃんとヴィータちゃんはもう外で待ってるよ！」

そう言うエレノアは相変わらず頭に花が咲きそうなポワポワした笑顔だったのだが、エレノアの後ろにいるティアナとスバルは腕を組み、不敵な笑みを浮かべていた。

「フフフ・・・覚悟してください、なのはさん」

「私達の新たな力見てください！」

なのはの頬に一筋の汗が流れた。

はやてとフェイトの顔も引き攣っていた。

・・・夢・・・だよね・・・？

## ついカッとなって2（後書き）

今回出たイナズマイレブンの技

熱血パンチ・・・キーパー技
正義の鉄拳・・・キーパー技

アイスグランド・・・DF技

ファイアトルネード
クロスファイア・・・2人合体技
皇帝ペンギン2号・・・3人合体技
スペースペンギン・・・3人合体技

です。
アニメもゲームも面白いですよ！

しかし・・・ホントにバトル下手くそですね。
精進します！

# ３００万アクセス記念雑談

今回ＰＶ３００万突破と、ユニーク２３万突破しました。
こんなにも多くの人達に見ていただき、ただただ感謝です。
感想も多数いただき、お褒めの言葉から応援、叱責もいただきました。
私は打たれ弱く、叱責の言葉をいただいたときはへこんでしまい、辞めようかなと思ったりもしました。
しかし、ご意見をいただけるということは、それだけこの作品を読んでいただいたということですし、それだけ原作を愛しているということなのです。
最も悲しいのは批判ではなく、無視です。
だから、ご意見をいただけるということは、幸せなことだと思うようになりました。
これからも自己満足で原作を理解していないような話しが出てくるかもしれません。
しかし、一度始めたものですから、キチンと最後まで書き上げ、無事に一つの物語としてあげたいのです。
身勝手だとは思いますが、これからもよろしくお願いします。

――――と、硬い前フリはこれくらいにして、

３００万突破！ありがとうございます！！

どうも！最初ＦＦをファンフィクションではなく、ファイナルファンタジーと読んでいた作者です！

なのは　「わーわー」

フェイト　「やんややんや」

今回はいままでの反省をしたいと思います。

はやて　「それは結構なんやけど、なんで私はまた作業着を着てるんや？」

それは、またゲームをしてもらうためですよ。

は　「えー！？あれしんどいからイヤや！
　それに、前回の１００万アクセス記念も大した反響もないやん！やり損や！」

な　「いや、そもそもコレに対して反応なんてきたことないよ」

シグナム　「元ネタの『ゲームセンターＣＸ』を知らないのでは？」

ヴィータ　「よゐこの有野があんなに輝く番組他にはないのにな」

とりあえず、反省会を始めましょう。

は　「うわ、ガッツリ切りよった！」

・・・今回、多く寄せられた感想の中で、ちらほらと見られた感想です。

『バトルが少ない』

一同　「あ～・・・」

な　「確かにねー」

フ　「日常ばかりだよね」

は　「なんで日常ばっか書くんや？」

バトル描写が苦手なんです。

シ　「・・・逃げではないか」

ヴ　「まったく、精進しろよ」

フ　「大体、しばらく続いているオリジナルの話もほとんどがおもいつきで書いたから、はっきり言って必要ないんだよね？」

な　「ぶっちゃけ、近藤さんの過去を暴露した話だけだよね？物語に絡むのって」

・・・おっしゃる通りです。

シ　「無駄にグダグダと伸ばしおって・・・はやく本編を進めないか！」

はい！すいません！

な　「ちなみに、構想は練れてるんだよね？」

はい。地上本部襲撃の前後が一番書きたかった所ですから。

は　「あえて内容は聞かんけど、かなりオリジナル色強くなるんか？」

うーん・・・この物語は近藤が主人公なんで、近藤をメインに進んでいきます。

ですが、近藤は地上本部襲撃に関わりません。

フ　「え！？なにそれ！じゃあ、もしかしたら私達の出番削られるかもしれないの！？」

シ　「頑張れ作者！私達の活躍も書いてくれ！」

ヴ　「そんなことだからバトルが少ないなんて感想が来るんだ。どうせその近藤メインの話は戦わないんだろ？」

はい。一応考えている内容だと、戦闘描写は全然ありません。

は　「魔法の要素全然生かしきれてないなー」

な　「そうだ！オリジナル事件を発生させて戦闘描写増やそうよ！」

それも考えました。

ですが、どうも血生臭い話しか思いつかなくて・・・

シ　「そうだった。貴様はホラー映画とか歴史戦争映画とかが好き

だったな」

ヴ　「そのくせ『呪怨』みて一週間寝不足になったんだったな」

なんだよ！呪怨怖いだろ！『リング』は全然怖くなかったけど、呪怨はダメだ！

な　「私見てないから知らない。ていうか見たくない」

フ　「私も」

は　「私もや」

シ　「たしか店頭で流されていた呪怨の映像の、奥菜恵のシャワーシーンを見て買ったんだったか？」

ヴ　「エロエロだな。このエロエロ魔人」

うっせー！

あ、でも『呪怨2』は全然怖くなかったよ。

シ　「あれは時系列が前後してややこしいからな・・・」

ヴ　「時間軸を理解しようとしている間にホラーシーンがきて、え？なに？てなるからな」

今話題の酒井法子が主役だよ！

は　「禁句禁句！」

な　「それアウト！」

というわけで、しばらくしたら本編を進めます。
はっきりいって、激重です。
自分でも読み返したくないほど重くなります。
そのダークサイドを際立たせるために、この日常をおもしろおかしく書いたという狙いもあります。
話を伸ばしすぎたのは反省点ですが。

は　「戦闘描写は？」

な　「近藤さんって基本戦わないよね？」

フ　「自分で『弱いから』とか言って訓練もアドバイスするだけだしね」

シ　「だが、地球への出張任務のときに『源書』を使った魔法を繰り出していたな？
　あれは強いんじゃないのか？」

あれは、ぶっちゃけますと仲間にも影響が出るんです。
まぁそのあたりの説明はおいおいします。

さて、他にも寄せられた感想を見ていきましょう。

『オーリスが壊れた』

『ドゥーエが素で近藤に好意を抱いていることに驚き』

『ヒロインはフェイト？』

な　「なんていうか・・・」

フ　「私がヒロイン？・・・うふふ、ヒロイン・・・」

は　「わかる・・・コレは私でもわかる・・・！
　　ノリで書いたら収集つかんようになったんやろ！？」

・・・最初は本当に恋愛を近藤に絡める予定はなかったんです。
あってもフェイトとの”親子のような愛情”くらいで。

シ　「なんでもかんでも愛だ恋だに持って行くのは感心せんな？」

そう思ってたんで、硬派にいこうとしてたんです。
ですが・・・

ヴ　「これは二次制作だからおまえのやりたいようにやればいいんじゃないのか？」

は　「ま、これ以上フラグを立てんことやな」

そうですね。
なのはにはユーノがいるから論外ですし、シグナムとヴィータはこれからとても重要なポジションになるので恋愛には絡めません。

は　「私の名前言うてないけど？・・・あ、活躍なし？
　・・・私も近藤さんのフラグ立ったら出番増えるかな？」

な　「はやてちゃん、自分の体は大事にしようよ」

フ　「これ以上増えるのは御免被ります！」

は　「出番ほしいよー！」

あとこんな意見もありました。

『エレノアは今のまま引っ掻き回して欲しい』

な　「勘弁してください」

フ　「ホント勘弁してください！」

シ　「姉上が無茶を言う度に胃がキリキリと・・・」

ヴ　「まぁ自重してほしいところだけど・・・無理だろうな」

エレノアも地上本部襲撃以降はおちゃらけを一切排除します。

シ　「今してくれ！今！！」

は　「そして早くエレノアさんの胸を私に！」

さて、反省も済んだ事ですし・・・でははやて隊長にゲームをしてもらいましょうか？

シ　「・・・あんなグダグダな内容で反省終了か」

ヴ　「おまえのその思考が怖えよ・・・」

は　「え～・・・もうええやん。このままグダグダで終わろうや。鍋つついて酒飲もうや～」

今回やっていただくソフトはこちらです。

は　「その無視っぷり・・・傷つくわ・・・ん？『高町なのはの冒険島』？」

レトロ風ゲームとして大人気の今作品。

ただ、クリアした人がほとんどいないといわれる程の超激ムズソフト。

別名『悪魔のソフト』です。

は　「レトロ”風”て・・・しかも名前からしてあの有名な１６連射する名人が冒険するゲームのパクリやん」

な　「あ、悪魔・・・ここでも悪魔って言われた・・・」

フ　「大丈夫だよ、なのは！ここではやてを応援してこのソフトをクリアしよう！」

な　「フェイトちゃん・・・うん、そうだね！
　はやてちゃんがクリアしたらもう悪魔のソフトなんて言われないよね！
　そして『管理局の白い悪魔』なんてことも言われなくなるよね！？」

フ　「・・・・・そうなるといいね」

な　「フェイトちゃん、こっち見て言って、こっち」

シ　「ふむ、では私はまた音響担当か？」

ヴ　「じゃああたしはカメラだな」

な　「今回も私プロデューサー？・・・え？ＡＤ？」

フ　「私はＡＰ・・・前回と同じだ」

でははやて隊長、始めてください。

は　「う～・・・しゃーないか・・・よっしゃ！ほんなら始めるで！
　　ゲームセンターＧＡＳ！ぶたいちょおーん！」

ちなもにＧＡＳは陸上警備隊の意味です。

な　「・・・でも、いつの間にあんなゲームができてたんだろ？」

フ　「え？なのはあのゲームの事知らなかったの？」

ヴ　「結構ネットで有名だぞ、小さいなのはがちょこまか動いてかわいいってな」

な　「え、そうなの？・・・じゃあいいかな・・・」

シ　「かわいいの一言で折れるか・・・」

は　「外野！うるさい！こっちは必死やねん！あっ！？あーまたゲームオーバーやー」

な　「ご、ごめんなさい！」

ヴ　「しっかし・・・なんでゲームのなのはは石斧を投げてるんだ？」

シ　「スケボーにも乗ってるな」

な　「私に聞かれても・・・このゲーム知らないし・・・」

フ　「名人がなのはになっただけだよね」

ヴ　「なのはにする意味あんのか？」

な　「私に聞かないでよ・・・」

フ　「あ！見て！妖精のハニーがフェレットのユーノだよ」

シ　「そこをこだわるならもっと変える所はいくらでもあるだろうに」

は　「こら！シグナム！ヴィータ！撮影はどうした！こっちは必死にゲームしとんねん！
　　ちゃんと仕事せんかい！！」

ヴ　「ご、ごめんはやて！」

シ　「申し訳ありません！」

さて、はやて隊長、ここまでやってみた感想はどうですか？

は　「いや、難しいよ。難しいけど、それより私をほったらかしにして話し込んでるのがムカつく！」

な　「ごめんなさい」

フ　「でも、ちゃんと見てたよ？」

は　「見てたじゃなくて応援してくれへんかな・・・まぁええわ。
　ところで作者さん？主人公の近藤さんはどないしたん？」

な　「あぁ、そういえば」

フ　「どこにいるのかな？」

近藤なら、さっきドゥーエが来て連れていったよ。

フ　「何故それを早く言わない、作者ぁ！！」

な　「フ、フェイトちゃん・・・怖いよ」

近藤　「あまり変な嘘をつくな。後で痛い目を見るのは俺なんだぞ」

フ　「こ、近藤さん！？ドゥーエさんとホテルに行ったんじゃあ・・・」

近　「話変わってますよ。ホテルなんて単語一言も出てないし。
怖いな、ホントに。俺はさっきまで書類整理してたんですよ」

フ　「な、な～んだ・・・よかった・・・」

近藤の事をもっと信じた方がいいですよ？

フ　「おまえが言うな。・・・少し、頭冷やそうか？」

な　「フェイトちゃん、それ私のセリフ！」

は　「ええ加減にせえよ、あんたら！！手伝う気無いんやったらこの部屋からでてけ！！」

フ　「ご、ごめんなさい！」

な　「ゲームが難しくてカリカリしてるね」

近　「ん？はやて隊長またやらされてるんですか？・・・『高町なのはの冒険島』？
　　あ、これ俺クリアしたことありますよ」

は　「ほんまか！？近藤さーん！助けてー！ヘルプミー！！」

近　「えーと、じゃあ『一機やらせてもらってよかですか？』」

は　「よかですよ！なんならクリアしてくれてもええよ！」

な　「ねぇ？近藤さんてゲーム下手なんじゃなかったっけ？」

シンプルなレトロゲームは得意なんですよ。
最近のゲームはゴテゴテして、何かと差別を計ろうとして奇抜なシステムいれたりしてややこしいですからね。
ＷｉｉのＮｅｗスーパーマリオブラザーズなんかは名作ですよね。
新しいのに懐かしくて、やり込み要素もある。

フ　「じゃあ、今度ゲームセンターＧＡＳするときはスーパーマリオのマリオ達を私達に変えたゲームをする？」

・・・んなもんねーよ。
いや、おもしろいか？

近　「えーと、たしかここは・・・こう・・・こう、と・・・
　　それからここに１ＵＰがあったはず・・・」

は　「わ！わ！すごいすごい！近藤さんすごいな！うわー、なんか

仕事できる男って感じやわー。
・・・ええやん。そういうのええやん？」

近　「・・・あの、はやて隊長？くっつき過ぎでは？少し離れてください」

は　「え？でもテレビ画面小さいからくっつかんと見えへんし。
・・・うわ、すごい腕やな・・・太いし筋肉カッチカチやん」

近　「くすぐったいからやめてください」

は　「えー？ええやん。あ！腹筋触らせて腹筋！うわ！６つどころか８つに割れてるやん！！
すごいな近藤さん！私最近デスクワークばっかりでちょっとお腹まわりが気になるんよ。
ほら、触ってみて？ぷにぷにやろ？」

フ　「こらー！なにいちゃついてんの！ゲームでしょ、ゲーム！！
近藤さんも鼻のした伸ばさない！」

は　「さっきのお返しや。でも・・・うん、アリやな」

な　「何が？」

は　「近藤さんとの結婚や」

フ　「な！？け、けけ結婚！？」

は　「そうや。冷静に考えてみ？近藤さんて将来大将のポスト確約されてんねんで？玉の輿やん」

な　「あ、そうだね」

は　「それに、近藤さんて温厚な性格やん？
　エリオとかキャロの扱い見てても、子供の面倒見ええし、家庭的なパパが務まるやろ。
　まぁ、家事でけへんし、少しずぼらみたいやけど、そこは主婦がやったらええんやしな。
　そこがまたかわいい所やん」

フ　「・・・その通りです」

は　「なによりこの鈍感さやな。これだけニブチンやったら浮気も心配ないわ」

フ　「え！？そうかな・・・逆に心配だけど・・・」

は　「結婚という手綱を握ったらこっちのもんや。
　この手の人は一途やからな、奥さんに尽くすで。
　それに、他人の好意に鈍感やから外の女にフラフラせえへんわ」

な　「あ～・・・納得。近藤さんは浮気とか絶対しない、ていうかできない人だ」

フ　「・・・はやての考え方は、なんか打算的でやだ・・・近藤さんのホントに良いところを見てないよ！」

は　「こんだけ長く一緒におったらわかるよ。
　私達をちゃんと色眼鏡無しで見てくれて、私達という存在を

肯定してくれる。
それで十分好意に値するんやない？」

フ　「うっ！？・・・おっしゃる通りです・・・」

は　「なぁ近藤さん？フェイトちゃんみたいに嫉妬深い人より、私と付き合えへん？
身長はちっこいけど、そのわりにはけっこう胸あるで？」

フ　「こらー！！何誘惑してるの！！近藤さんも！まんざらでもない顔しないの！！」

な　「フェイトちゃん・・・近藤さんそんな顔してないよ。むしろ困った顔してるよ」

は　「ほら、嫉妬がそういう風に歪曲させるんや。ああいう子は疲れるで近藤さん」

フ　「うっ・・・ううぅ・・・」

近　「はやて隊長」

は　「ん？なになに？」

近　「ゲームクリアしました」

は　「え？うわ！ほんまや！」

近　「それからフェイト隊長」

フ「は、はい・・・」

近「この前福引きで水族館のチケット当たったんですよ。
今度エリオやキャロ達と一緒にいきませんか？」

フ「・・・！うん！行こう！あの子達も喜ぶよ！！」

は「一番嬉しそうなんフェイトちゃんやん・・・
あ～あ、近藤さんは脈無しか。結構本気やったんやけどなー」

近「はやて隊長にはこちらを差し上げます」

は「ん？なに？・・・うわ！これ三ツ星レストランの招待券やんか！」

近「これでシグナム副隊長やヴィータ副隊長達と家族で楽しんで来て下さい」

は「こ、近藤さん・・・あかん、ホンマにキュンてきた」

シ「近藤、お前は本当にいい奴だな！ありがとう！」

ヴ「ありがたいけど、それも福引きか？」

近「はい」

は「・・・福引き荒らしやな・・・いつか出禁くらうんちゃう？」

な「・・・あのー、近藤さん？私には何かないのかな～・・・なんて」

近　「なのは隊長にはこちらをあげます」

な　「・・・温泉宿泊券!?え、こんなのもらっていいの?」

近　「それでスクライア先生と旅行して、より仲良くなってください」

な　「な!?ななにをいってるの!?」

は　「なのはちゃん!チャンスや!ユーノ君を押し倒して既成事実作るんや!」

な　「なー!?」

フ　「いつまでもダラダラとしてる今の関係は良くないと思うよ?ユーノも奥手だから、なのはがリードしないと」

な　「いや、でも、その、あ・・・あの・・・」

ヴ　「いい加減今の関係も限界だろ?いい機会じゃねーか」

シ　「普段は超武闘派のくせに、こういう色恋はてんでヘタレだな」

な　「ううぅ・・・」

近　「ヴィヴィオも弟か妹ができたら喜ぶでしょうしね」

な　「――――――っ!?!?」ダダダダッ

は　「あ、逃げた」

フ　「なのは・・・」

シ　「ヘタレ」

ヴ　「あー、まぁ頑張れ」

は　「ところで話は変わって作者さん？」

はい、なんですか？

は　「私ゲームした意味あるか？」

無いですね。

時間の無駄でした。

は　「はー！？このボケ何言うとんねん！人にムチャ振りしてなんやねんそのグダグダな答えは！？」

でもゲームクリアしたの近藤でしょ？

は　「ぐ！？それはそうやけど！私の労力もあるやろ！」

ヴ　「はやて達が話してるときも近藤は黙々とゲームしてたな。しかもスーパープレイを連発して」

シ　「うむ、あれは凄かった。たいしたものだ」

近　「はやて隊長、作者(こいつ)はこんな奴なんですよ。真剣にやり合ったら疲れるだけです。
　　こいつは空気だと思って無視しましょう」

は　「私こんな汚い空気吸うのイヤや」

グッサー！？
すげーイジメ発生！

シ　「自業自得だ、バカモノ」

さて、いい感じにグダグダになってきましたので、そろそろお開きにしようと思います。

は　「自分でグダグダ言うな」

それでは、これからも不定期ですが、なんとか長期の間隔を空けずに投稿していきます。
皆さん見捨てないでね！

フ　「必死だね」

当たり前だ！感謝の気持ちを忘れたら人間おしまいだからな！
これからはオリジナルを挟みつつも、本編へ移行していきます。
できれば今月中にはギンガを出したいなぁ・・・

シ　「がんばれ。毎日更新すればいい」

仕事できんわ!!

ヴ　「最初はほぼ毎日更新してたじゃねーか」

見返すとですね、最初は1話大体２０００文字くらいの投稿だったんですよ。

は　「・・・いま大体８０００文字前後の投稿やな」

書く度に文字数が増えるんですよね。
とりあえず頑張ります!

フ　「まとめきれてないよ」

いいの!これからも「魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳはじまりの魔法」は走り続けます!
応援よろしくお願いします!
それでは、今回はこの辺で!

一同　「またねー!!」

は　「ところで、３００万突破はええねんけど、
２００万突破記念はなんでせえへんかったんや?」

近　「ただ単にタイミングを逃しただけです。

あのときは丁度話の途中でキリが悪かったので」

シ　「ネタが無かっただけではないのか？」

近　「・・・・・・まさか」

ヴ　「こっち見て否定しろ」

は　「まぁ、こういうのはなんやけど、
　この○○突破とかの雑談系はあまり支持されてないしな」

すれ言っちゃあダメ！！
楽しくやっていきたいの！！
だからこれからもするの！！

# 第５０話（前書き）

お待たせしました。
本編再開です。
といってもまた番外のような内容ですが。

ゆっくり見て行ってください。

# 第５０話

とあるスカリエッティのアジトには、彼の作品である娘達、『ナンバーズ』が日々訓練に明け暮れていた。

スカリエッティの補佐をしている長姉のウーノと、もっぱら頭脳役と言い張るクアットロ、潜入捜査中のドゥーエ以外のナンバーズが広い訓練スペースの真ん中に集まり、真剣な表情をしていた。

「じゃあ、オットー、行くっスよ！」

濃いピンク、マゼンタの髪を後ろでまとめ、アップにした活発そうな少女「ウェンディ（ｕｎｄｉｃｉ）」が声をかける。

「・・・うん」

頷いた少女は、髪をざんばらに短く切り、何故かナンバーズの中で唯一青いボディスーツ上にベストとカーゴパンツを履いた、大人しそうな雰囲気の「オットー（ｏｔｔｏ）」だ。見た目、男の子と言われてもわからない、そんな中性的な雰囲気の子である。
ちなみに、オットー以外に、コートを羽織っているのはクアットロとチンクの二人だ。
それ以外のナンバーズは、ウーノを除き、全員ボディスーツのみという痴女っぷりである。

そんなウェンディとオットーのやり取りを他のナンバーズ達は固唾を飲んで見守っている。

「・・・それっ！」

ウェンディが勢いよくオットーに向けて一枚の紙のようなものを差し出した。
瞬間、オットーが体を強張らせた。

「・・・１０秒経過」

ウェンディの横で、ディエチがストップウォッチを見て時間をカウントする。

「・・・２０秒経過」

だんだんオットーが体をプルプルと震わせる。

「がんばるっス、オットー！」

ウェンディは突き付けた紙を持ちながらオットーにエールを贈る。
周りからもがんばれと声援が来る。

「・・・３０秒経過」

オットーの顔色が紫色になってきた。

「オットー、息をして！」

オットーと同じ顔立ちをし、オットーとは正反対の女性らしいボディラインを持ち、亜麻色の髪をロングにしている「ディード（ｄｏｄｉｃｉ）」が叫ぶ。

「・・・ぷはっ・・・ハァ、ハァ」

オットーは緊張と恐怖のあまり息をしていなかったようだ。

「・・・４０秒経過」

ディエチは淡々とカウントする。

「やった！新記録っス！」

ウェンディが喜ぶが、トーレが諌める。

「まだだ。これからだ」

トーレの厳しい視線にオットーも無言で頷く。

「おお、なんという力強い頷き・・・姉はうれしいぞ」

オットー程の背丈で銀髪をロングにし、右目に眼帯をした「チンク（ｃｉｎｑｕｅ）」が嬉しそうに言う。

オットーは、ウェンディの持つ紙を睨み続ける。

「・・・１分経過」

オットーの目がウルウルとしてきた。

「・・・っ！」

我慢できず、オットーは紙から目を逸らした。

ディエチがストップウォッチのボタンを押し、時間を止める。

「・・・1分7秒、大幅に記録更新だ」

ディエチが嬉しそうに告げる。

「やったっス！オットー、よく頑張ったっス！感動っスー！」

ウェンディがオットーに抱きつく。

「・・・ぐす・・・怖かった・・・」

オットーは鼻を啜り、目をウルウルとさせていた。

「ノーヴェ、追い越されたぞ」

「うっせー！あたしがそんな記録すぐに塗り替えてやらぁ！」

ディエチに言われ、プンプンと怒る、赤髪をショートにしたボーイッシュで勝ち気な目をした少女「ノーヴェ（ｎｏｖｅ）」はウェンディの前に立つ。

「さぁ、ウェンディ、次はあたしだ。ドンとこい！」

「わかったっス！いくっスよー・・・それ！」

ウェンディはオットーに見せていた紙とは別の紙をノーヴェに突き付けた。

「ひぃっ！？」

短い悲鳴をあげたノーヴェは、なんとか４０秒もった。

訓練を終え、食堂にてティータイムを楽しむナンバーズの面々。
そこへ、スカリエッティの所にいたクアットロが合流した。
ウーノはまだスカリエッティとなにやら研究しているらしい。
静かに紅茶を飲む者もいれば、クッキーをガツガツ食べる者もいて、
各々くつろいでいる。

「しっかし、そんなに怖いっスかね？この近藤とかいう人」

ウェンディは頬杖をついて、親指と人差し指で摘んで持っている紙
をピラピラと揺らす。
紙は写真のようで、近藤の顔が写っていた。

最近の訓練プログラムには、「近藤に慣れる」という項目が追加さ
れていた。

遡ること数日前、ドゥーエがスカリエッティに近藤についての報告
を行ったときにドゥーエが進言したことが発端だった。

「なんとか近藤を仲間にできないか？」

と。
スカリエッティは考えた。
たしかにアルハザードの知識は多いに越したことはない。

なにより、近藤は「起源の系譜（ジェネシック・コード）」を使う。
これはかなり心強い。
カラクリを知っていれば簡単に対処はできるが、恐らく現在アレの対策を取れるのは自分しかいないだろう。
となれば、アレは敵にとって脅威となる。
それに、近藤自身にも興味がある。
いつ、どうやってアルハザードの知識を得たのか？
どれ程の知識を有するのか？
そして、ドゥーエの報告によって一番驚いたことは、「源書」との契約、管制人格融合騎の発現である。
スカリエッティの知る限り、源書は契約者を即死もしくは発狂させる悪魔の本だったはず。
それが、死なずに、しかも管制人格融合騎までも起動させるとは。
スカリエッティも源書の管制人格たる「エレノア」を見たのは初めてであった。
それは、前述したとおり、契約とともに契約者が死ぬか、発狂して使い物にならなくなるため、管制人格を起動する暇が無いのである。
実に興味深い。

あの「はじまりの王」の知識を復元、管理するというコンセプトの下、作成された源書を制御できる人物。

それに、近藤は時空管理局ではかなり扱いが冷遇されている。
それは、管理局が自分達で招いた種によるツケを近藤という一局員に被せているためである。
近藤は被害者である。
ドゥーエが持ってきた情報は、とても正義が行う所業ではなかった。
一言でいうなら、利益のため。
そのために近藤はいけにえになったのだ。

人間に対してなんの感情も湧かないスカリエッティでも、近藤には同情した。

だからこそ、スカリエッティが高待遇を提示すれば、近藤がなびくと思っていた。

そのための準備を進めなければならない。

まずはナンバーズ達の意識改革から始めた。

近藤の見た目はお世辞にも良いとは言えない。

こんなことを言えばドゥーエが怒るだろうが、アレはマフィアかテロリストの類にしか見えない。

しかも相当場数を踏んだヤバい奴だ。

アレに慣れるには時間がかかるとふんだスカリエッティは、ナンバーズの目を慣れさせるために近藤の写真を皆に見せ、反応を確認した。

そもそも、敵として対峙したときに怖がるなどということ事態がダメなのだが。

クアットロどディエチ、トーレは一度本人を見ているので耐性がついていた。

ただ、クアットロとディエチは苦い思い出があるのか、写真を見た後しばらく、犯されるだの、あの視線で妊娠するだのブツブツ言っていた。

そして、意外だったのは好意的な反応をした者が多数いたということだ。

それは、チンク、セイン、ウェンディ、セッテである。

恐怖の反応を取ったのは、ノーヴェ、オットーの二人だけだった。

ウーノ、ディードは最初少し怖がったがすぐに慣れた。

チンクは言う。

「あの眼帯はいい。私も欲しい」

ウェンディとセインは言う。

「たしかに厳ついスけど、別に泣くほどでもないっス」

「たしかにねー、なんか頼れる強いお父さんて感じだし」

ウーノとディードもウェンディ達の意見に頷いた。

だが、ノーヴェとオットーは違った。

「ダメだ！騙されんな、こいつは悪魔だ！『デビル近藤』なんだ！」

「・・・こんな怖い父親イヤだ・・・」

二人ともプルプル震え、ノーヴェは顔を真っ青にし、オットーは目に涙を溜めていた。

そんなこんなで、現在ノーヴェとオットーは猛特訓中なのだった。

「ドゥーエ姉が送ってきた動画映像じゃあそんな怖い人には見えなかったよ？」

セインはウェンディがピラピラと揺らしていた写真を取り上げ眺めた。
写真の近藤は、眉間に皺をよせ少し怒っている風な顔だった。
もちろん、写真も動画もドゥーエの隠し撮りである。

「あたしはおまえらと違ってデリケートなんだよ」

ぷいとソッポを向きながらブツブツ愚痴るノーヴェに、ウェンディがにや～っと笑いかける。

「そうっスよね～、デリケートだから、初めて写真見た日の夜は怖くて一人でトイレ行けなかったんスよね～」

「な!?何言ってんだこのバカァ!!ぶっ壊すぞ!!」

ノーヴェは顔を真っ赤にしてウェンディに怒る。

「それを言うならオットーも、怖いから一緒に寝てほしいって言ってきました」

ディードがオットーの秘密を暴露する。
隣のオットーは相変わらずの無表情だが、少し頬が赤くなっていた。

「だ、大体、なんでドクターはデビル近藤にあんなに固執するんだ？」

ノーヴェが無理矢理話題を変えた。
その質問に答えたのは、チンクとトーレだった。

「うむ、どうやら近藤はドクターと同じ、もしくはそれ以上の知識を持っているらしい」

「それに、近藤自身も特別な力を持っているそうだ」

チンクとトーレの言葉に、皆驚いた。

「知識って、もしかしてアルハザードの？」

セインの言葉に、無言で頷くトーレ。

「特別な力ってなんスか？」

「うむ、これを見てみろ」

ウェンディの質問に対し、チンクはテーブル上に大きなモニタを展開し、ある映像を映し出した。

「・・・これ、『ブラックマン』じゃねーか？」

映像には真っ黒な人間の形をしたモノが、ある研究施設を徘徊していた。

「そうだ。これまで、何度か他次元世界のドクターの研究施設を破壊してきた、攻撃が一切通じない人間、通称『ブラックマン』だ」

ノーヴェの呟きに答えるトーレだったが、これだけでは終わらなかった。

「実は、このブラックマンが近藤大輔らしい」

「えっ！？」

驚きのあまり、声をだしたナンバーズだったが、更にチンクが言葉を続ける。

「更に『起源の系譜』というものを扱うらしいぞ」

「じぇねしっくこーど？なんスか、それ？」

ウェンディが首を傾げる。

そこへ、いままで黙って紅茶を飲んでいたクアットロが口を開いた。

「簡単に言うと、魔法技術で造られたもの、デバイスや私達のような存在を自由自在に操る、まさに魔法の言葉よん」

「わ、私達はそれを受けて・・・危うく・・・ぎゃー！」

以前近藤と接触した時の記憶が蘇ったのか、クアットロとディエチは頭を抱えて唸りだした。

「まだ気にしてたのか・・・アレはどうみても演技だろうが」

トーレがため息混じりに言った。

「うん、あたしもクア姉達が捕まってる記録映像見たけど、近藤って人明らかに演技してたよね。しっかし、あんな心理戦があるんだね、驚いたよ」

セインはウンウンと頷き、感心していた。

「極めつけはこのブラックマンと共に常に行動している女、『ミスクリスタル』だ。コレは『源書』というストレージデバイスの管制人格融合騎なのだそうだ」

チンクはモニタの映像にエレノアを映し出した。

「強いのですか、この女性は？」

ディードがモニタの中を縦横無尽に動き回るエレノアを見ながら言う。

「ああ、強い。だが、底が知れない。ドクターも彼女の本当の強さはわからないそうだ。ただ・・・」

チンクが言い淀む。

皆がチンクを見つめる。

「・・・ただ、『源書』というデバイスは契約者もしくは本の中を見た者達を、すべからく死にいたらしめるか、使い物にならないガラクタにする危険なものらしい。

そのため、管制人格融合騎が起動しているのはドクターも初めて見たと言っていた」

「ん？じゃあなんでこいつは起動してんだよ？誰かが死なずに契約を続けてるってことだろ？

・・・いや、ちょっと待て、今はデビル近藤の話をしてたのに、なんでミスクリスタルの事を話てるんだよ。しかもデバイスだなんて。

それじゃあまるで・・・・・まさか」

ノーヴェは疑問を口にしながら気付いてしまった。

「そうだ。ドゥーエの報告でウラも取れている。ミスクリスタルこと、『源書』のマスターは近藤大輔だ」

トーレは抑揚なく発した言葉に皆、唖然としていた。

「・・・見たら死ぬ本を見ても死なない、どんな攻撃も受け付けない、そしてアルハザードの知識も持っている・・・コイツは本当に人間か？」

ノーヴェの呟きに答える者はいなかった。

そこへ、いままで一言も発しなかったロングヘアーでピンク色の髪をし、額を防護するヘッドギアをつけている「セッテ（ｓｅｔｔｅ）」がトコトコとセインに近付いた。

「セイン、また貰ってもいいですか？」

「え？あぁ、写真ね、はいはいどうぞ～」

セインは近藤の写真をセッテに渡した。

「それからウェンディ、動画記録ですが」

「わかってるっス、またセッテの専用端末にコピーしとくっスよ」

「ありがとうございます。では、私は空戦シムに行き、その後自室で休息をとります」

セッテは短く礼をすると、食堂を後にした。

「・・・アレは少々変わった子だな？」

チンクはため息をつきながら言った。

「そうだな。だが、我々の開発コンセプトを思えば、あれが一番完成度が高いと言える。」

トーレは紅茶を飲みながら言葉を続ける。

「余分なものはなにもない、純粋な戦闘だ」

トーレはセッテが出て行ったドアを眺めながらチンクに言った。

「だが、ただの機械では頭部に脳が詰まっている必要もない。少しは考える事も覚えさせるさ」

トーレのため息交じりの言葉はに、チンクは苦笑した。

そこへ、セインとウェンディが何か言い辛そうに、モジモジしながら二人に近付いてきた。

「あの～・・・実は、その事でトーレ姉とチンク姉に相談があるっス」

「そのこと？」

チンクは首を傾げた。

「セッテの事だよ、チンク姉」

「セッテがどうかしたか？」

トーレは真剣な表情になった。
もしかしたら、セッテは他の妹達と折り合いが悪く、馴染めていないのではないか、そう考えていた。

「いや、セッテはいい子っス。そうじゃなくて、セッテの行動の事なんス」

トーレも首を傾げた。

「何が言いたいのかわからん」

「さっき、セッテが近藤の写真持っていったでしょ？実は、アレ毎回なんだよね」

写真を持っていくくらいどうということはない。
トーレもチンクも、セインとウェンディの話の要領が得られなかった。
そこへ、ノーヴェが割って入ってきた。

「まてまて、毎回『デビル近藤』の写真を持っていくって？じゃあ、セッテの手元にはアイツの写真が１０枚以上はあるってことか？」

ノーヴェの言った言葉に、ノーヴェ自身が震え、オットーやクアッ

トロ、ディエチが身震いした。

「それで、あたしが聞いてみたんス。『そんなに写真集めてどうするつもりか』って」

皆、ウェンディの言葉を静かに聞いていた。

「そしたら、セッテは何も言わずにニヤッて笑ったんス」

トーレとチンクは驚いていた。
あのセッテが笑う？
想像できない。

「で、なんか気になったあたしがセインに頼んでセッテの部屋を見てきてもらったんス」

「頼んだって・・・ディープダイバーか？」

チンクは呆れていた。

「・・・ＩＳをくだらんことに使うな、バカ者」

トーレも呆れてしまい、怒る声に力がなかった。

「・・・それでね、セッテの部屋を見たんだけど・・・」

セインはそう言い、口をモゴモゴと動かし、言い淀んだ。

「・・・何見たんだよ」

ノーヴェがゴクリと喉をならし、セインの次の言葉を促した。

「・・・セッテの部屋の、壁一面とか、天井とか、全部近藤の写真で埋め尽くされていたんだ・・・」

その光景を想像したのか、ノーヴェとオットーは「ひいっ」と悲鳴をあげた。

「他にも、あたしと二人でドゥーエ姉から送られてきた近藤の動画記録を見てたとき・・・聞いたんスよ」

「・・・何を？」

ウェンディの言葉に、チンクが反応してしまった。
聞いてはいけない、聞けば後悔する。
わかっている、わかっているのに。

「・・・『近藤大輔様、あなたは最高です。あなたは私の神です。誰にも渡さない、私だけの・・・』てブツブツ呟いてたんス・・・」

ウェンディのその言葉を聞いた途端、顔を青ざめさせたトーレが勢いよく立ち上がった。

「セイン、ウェンディ、すぐにセッテをドクターの所に連れていけ！再調整だ！いや、最悪初期化して再構築だ！！」

「りょ、了解！」

「わかったっス！」

セインとウェンディは跳びはねるように食堂を出て行った。

ノーヴェは「ギャーッ！」と叫び、食堂の隅でうずくまっている。
オットーもプルプル小動物のように震え、ディードにしがみついている。
クアットロとディエチはお互い抱きしめ合い、震えていた。

「セッテ・・・姉は悲しいぞ・・・」

チンクはポツリ呟いた。

その後、事のあらましを聞いたスカリエッティは、急いでセッテをメンテナンスした。だが、セッテの状態が正常になったかはセッテ本人にしかわからなかった。

## 第５０話（後書き）

今回の話はなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ　ＴＨＥ　ＣＯＭＩＣＳ　のＥｐｉｓｏｄｅ１２を若干参考にしています。

## 第５１話（前書き）

たくさんの感想、コメントありがとうございます。
やはり活力になります。

今回も前回の続きになりますが、見てやってください。

# 第５１話

「おい、やべーよ、帰ろうぜ」

赤髪をボーイッシュに短くし、気の強そうな目をした少女が、いまは弱々しく唸る。

「だーいじょうぶっすス！ちょっと見るだけっスから！」

マゼンタの髪を後ろで束ね、アップにした活発そうな少女は脳天気にそう宣(のたま)った。

隣では、髪をざんばらに短く切った中性的な少女が無表情ながらも、顔を青くしながら活発そうな少女の服の袖を握っていた。

「おまえな！こんなことウーノ姉にバレてみろ、どんなお仕置きが待ってるか・・・」

赤髪の少女はお仕置きを想像したのか、身震いする。

「あぁ、それは心配ないっス。ドクターから許可もらってるっスから」

「はぁ！？聞いてねぇぞ、ウェンディ！」

「もー、ノーヴェは往生際が悪いっスねー？オットーみたいに諦めが肝心っスよ？」

「いや・・・それは諦めてるんじゃなくて、恐怖で固まってるだけだろ・・・」

現在、ウェンディ、ノーヴェ、オットーの3人は機動六課の隊舎前にいた。
理由は、ノーヴェとオットーの訓練のためだ。
ちなみに、3人の服装はボディスーツではなく、カジュアルな私服である。

ノーヴェはパーカーにジーンズとラフに、ウェンディは長袖シャツに、下は七分丈のチノパンを履きボーイッシュにまとめている。
オットーはシャツを着崩し、少しゆったりしたジーンズを履き、ますます少年にしか見えない。

3人が機動六課に来る理由、それは、遡ること1時間前のことである。

「二人の訓練をフェイズ2へ移行するっス！」

「は？フェイズ2？なんだそれ？」

ウェンディのハイテンションとは打って変わり、ノーヴェとオットーのテンションは低い。

「まぁまぁまぁまぁ、ほら、いくっスよ！レッツらゴーっス！」

おーっと拳を振り上げ、ズンズン歩いていくウェンディ。

「・・・ときどき、おまえのその強引さがスゲーって思うよ・・・」

ノーヴェの呟きに、オットーはコクンと頷いた。

「とにかく、これは二人のための訓練なんスよ？生の近藤を見て慣れるっス！」

「イヤです、無理です、ごめんなさい、ほら、帰ろうぜ！」

ノーヴェが素直に謝る。滅多に見れない光景だ。だが、それほど近藤を見るのがイヤなのだろう。

「ダメっス！ちゃんと訓練するっス！」

「いーやーだー！はーなーせーよー！」

ウェンディに腕を捕まれながらも逃げようとするノーヴェ。

ちなみに、オットーは足がすくんで動けなかった。

結局、ウェンディが強引に隊舎内へ入り、ロビーの受付に着いた。

「すいませーん」

受付の局員に対してもウェンディの態度は変わらない。

「はい、何かご用ですか？」

「近藤大輔三等陸尉を呼んでほしいっス」

「え・・・あの、近藤三尉にどのようなご用件で？」

受付の局員は疑わしげにウェンディを見る。

「とにかく、呼んでほしいっス。来たら理由はわかるっス！」

受付局員はウェンディに言われるまま、近藤を呼び出した。

「俺に来客ってことで来たけど・・・」

近藤はすぐにロビーに来た。

そして、ウェンディ達を見た。

「・・・誰？」

近藤にこんな美少女の知り合いはいない。

混乱していると、ウェンディが近藤の手を引いた。

「まぁまぁ、立ち話もなんスからとりあえず外に出るっス！」

「え、あ、ちょっ」

近藤はわけがわからないままウェンディに連れられ、出て行った。

隊舎の外に出て、近くにあったベンチに座るウェンディ達を確認すると、近藤は手を腰に当て、ため息をついた。

「・・・で？君達４人はどこの誰なんだ？」

近藤は少し怒った風に眉間に皺を寄せた。

すると、ノーヴェとオットーが小さく悲鳴をあげた。

「えーっと、うちら４人はですねー・・・ん？４人？」

ウェンディは首を傾げた。

ここにいるのはウェンディ、ノーヴェ、オットーの３人のはず。

ウェンディは後ろを振り向いた。

「うわっ！？セッテ！」

いつの間にかセッテがウェンディ達の後ろに立っていた。

セッテはヘッドギアを外し、服装はシンプルにシャツとローライズのジーンズという出で立ちだった。

しかし、なにやら怒っている。

「・・・ずるいです。私も近藤様と会いたかったのに、置いていくなんて・・・」

「あ、いや、これは訓練だから、セッテには必要ないと思って・・・」

ウェンディはしどろもどろになる。
普段大人しい子が怒ると怖いというのは本当らしい。
セッテ・・・超怖い。

「あー・・・すまないけど、君達はどこの誰さん？」

なにやら険悪な雰囲気になりそうだったので、近藤が割って入り、話しを進める。

「え、あ、はじめまして！私はウェンディ、ドゥーエ姉がいつもお世話になってるっス！」

ウェンディは元気よく右手をあげて敬礼のまねをして挨拶した。
だが、近藤はウェンディの言葉に驚いた。

「・・・姉？まさか、マセラティ二尉の妹さん？」

「そうっス！全員妹っス！ほら、挨拶して」

ウェンディがノーヴェとオットーの背中をポンと叩く。
ノーヴェはキョロキョロと視線をそらし、震えていた。
オットーも顔を青くし、小さくカタカタ震えていた。

「ノ・・・ノーヴェ・・・です・・・」

「・・・オットー・・・」

「・・・あ、うん、近藤です。よろしく・・・」

久々に怖がられたので、近藤は少しへこんだ。
だが、今までとは違う全く新しい挨拶がきた。

「はじめまして、近藤様。私はセッテです。お会い出来て光栄です。あ、握手してください。・・・あぁ、うれしい・・・もうこの手は洗いません、私の宝物です。家宝です」

セッテは近藤と握手した手を見てウットリしていた。
あまりの温度差のあるテンションに近藤は若干引いた。

「あー、うん、よろしく。あの、手は洗った方がいいよ?」

なんだかよくわからない挨拶が終わったとき、近藤にコールがかかった。
モニタを展開すると、そこにはドゥーエがいた。

「お疲れ様です、ドゥーエ二尉!」

近藤は律儀に敬礼する。
側ではウェンディがほーと感心の声をあげ、ノーヴェとオットーは近藤のいきなりの大声にビビってしまい、セッテはウットリしっぱなしだった。

「お疲れ様です、近藤さん。あの、申し訳ないんですけど、そちらに妹達が来てませんか?」

ドゥーエはなにやら焦ったような、挙動不審な態度をとっていた。

「はい、来てますよ。４人」

「４人!?」

近藤の返答に驚くドゥーエ。

「はい、えーと、ウェンディさん、ノーヴェさん、オットーさん、セッテさんです」

「セッテ!?セッテまで来てるんですか!?・・・すいません、近藤さん、妹達に変わってもらえませんか?」

近藤はドゥーエに従い、ウェンディ達を呼んでモニタの前に立たせた。

「なに勝手にこんなところまで来てるの!!」

ドゥーエが大声で妹達をしかりつける。

「で、でも、ドク・・・父親からは許可もらってるっス」

ウェンディは弁解する。

その際、スカリエッティのことをドクターではなく、父親と言い換えた。

近藤に怪しまれると思ったからである。

ドゥーエは頭を抱えた。

「まったく・・・あの人は無責任なんだから、許可はウーノに取り

なさい！私はウーノから聞いたのよ？」

「うぅ・・・ごめんなさいっス」

ドゥーエに怒られてショボンとするウェンディ。
しかし、ドゥーエの中ではスカリエッティよりウーノの方がランクが上のようだ。
落ち込むウェンディを見た近藤は、何か自分が悪いことをしたような気になった。

「あの、ドゥーエ二尉、そのあたりで終わりにしましょう。彼女達も理由があって来たのでしょうし」

近藤に優しくフォローされ、ウェンディはパアァッと明るくなった。

「近藤さん！ありがとうっス！やっぱり近藤さんはいい人っス！！」

何故か悪者になってしまったドゥーエは面白くない。
若干眉間に皺をよせ、不快感をあらわした。

「ところで、何故彼女達はドゥーエ二尉のところではなく、自分のところへ？」

近藤が疑問に思っていたことを口にした。
すると、ウェンディは押し黙ってしまった。

（まずい、正直に『近藤の怖い顔に慣れるため』なんて言ったら怒られる）

ツーッとウェンディの頬を汗が伝う。

だが、ここでセッテが助け舟をだした。

「ドゥーエから、近藤様はとても紳士で素晴らしい殿方だと聞いていました。ですので、その確認を」

（セッテ、グッジョブッス！！）

ウェンディはセッテの助け舟に親指を立てて感謝した。
そして、ドゥーエもセッテのフォローはまんざらでもなかったようで、特に口出ししなかった。いつの間にかドゥーエは笑顔だった。
そこで、ウェンディは閃いた。

「そうっス！近藤さんがいかに紳士で頼れる人なのかを確認するために、今日一日ウチらをエスコートしてほしいっス！」

近藤は驚き目を見開いたが、それよりもノーヴェとオットーがウェンディに抗議した。

「き、聞いてねえぞ！？なぁもう帰ろうぜ？本来の目的は達成したじゃねーか！」

「帰ろう。それがいい。うん、帰りたい」

ノーヴェとオットーは必死に抵抗する。しかし、セッテがそれを遮った。

「ウェンディ、すばらしい提案です。さぁ行きましょう、すぐ行きましょう！」

普段は訓練でしか見せないような積極性、いや、それ以上か。

セッテのボルテージはマックスだ。
だがノーヴェとオットーは粘る。
ドゥーエがそんなデート紛いの事を許すはずがない、そう思っていた。
だから、ドゥーエがＮＯと言うまで粘るつもりだった。
しかし、予想という名の希望は打ち砕かれた。

「そうねぇ・・・いずれ一緒に行動する日が来るかもしれないし、お試しということで付いてきてもらえばいいわ」

ドゥーエの死刑宣告にノーヴェとオットーは膝から崩れ落ちた。

「あ、あの・・・自分、仕事があるんですが・・・」

何か自分のことを除外して話が進んでいるので、一応気が弱いながらも発言してみる。

「近藤さんは仕事ができる人だから、一日くらいどうってことないでしょ？」

ドゥーエがモニタ越しにニコリと笑う。

「ウチらみたいな子供を放っておくんスか！？近藤さんはそんなに薄情な人なんスか？」

ウェンディがウルウルと目を潤ませて近藤に訴える。
こうなると近藤は弱い。

「・・・わかりました。クラナガンをご案内します」

押しに弱い近藤は簡単に折れた。
ウェンディとセッテはイエーイと言いながらハイタッチをし、ノーヴェとオットーの気分は最悪になった。

一応なのはに外出する旨の連絡を入れ、近藤はウェンディ達に質問した。

「さて、どこに行きたいのかな？」

そう言うと、ウェンディが元気よく手を挙げた。

「はいはーい！おいしいもの食べたいっス！」

セッテは近藤と共に行動できるならどこでもいいらしく、無言で近藤を見つめている。
ノーヴェとオットーは真っ青になりながらも、近藤と距離をとっていた。
そして、ちょうど昼時ということもあり、ランチを食べに行くことになった。

近藤が、じゃあ行こうかと促すと、ウェンディが待ったをかけた。

「ノーヴェ、オットー、近藤さんと手を繋ぐっス」

ウェンディのその言葉と共に、二人はダッシュで近藤と距離をとった。

「な、なんでお前はそんな血も涙も無いことを平気でできるんだ！？悪魔かお前は！」

ノーヴェの心からの叫びに、オットーは高速で頷いた。

「いいから、来るっス！！」

ウェンディはオットーの腕を掴み、強引に近藤の横まで連れて来た。

「さ、握るっス」

ウェンディの言葉に反して、オットーはガタガタ震えだした。

「・・・あの、ウェンディさん？人の嫌がる事はしちゃダメだよ」

近藤はそう言いながらも、あまりの嫌われようにへこんでいた。

「ダメっス。近藤さんはいい人っス。だから、オットーやノーヴェにも分かってほしいんス。さ、近藤さん、ギュッと握ってくださいっス！」

近藤の前にはオットーの小さい手がある。

プルプル震えている。

どうしよう、握ったらたぶん泣く。

近藤はちんたらと悩んでいたら、ウェンディが大声を出した。

「近藤さん！握るっス！！」

近藤は反射的にオットーの手を右手で握った。

あくまで痛くないように、軽く、包み込むように。

すると、オットーは目を見開いた。

「・・・っ!!?・・・・・・あれ?」

しばらく握られていると、オットーが首を傾げた。
すごく大きい手、ドクターより、ディードよりも。
それに、ゴツゴツして硬い。
なのに・・・

「・・・あったかい」

オットーは自然と手に力をいれ、近藤の手を握り返していた。

「・・・お、おい、オットー?」

ノーヴェはウェンディに掴まれながら、オットーの状態を確認した。
なんだ?顔が赤いぞ?感染病か?

「ノーヴェ、大丈夫。手、つないでみて」

オットーから衝撃の言葉が飛ぶ。
ノーヴェは躊躇った。しかし、あのオットーが大丈夫だと言うのだ。
大丈夫なのだろう。
大丈夫なのだと思いたい。そうしないと前に進まない。

すごく心拍数があがっているのがわかる。

耳に鼓動がうるさく聞こえる。

息が荒くなる。

（ええい！！女は度胸だ！！）

ノーヴェは半ばヤケ気味に近藤の左手を握った。

「・・・・・・・・ん？・・・あれ・・・？」

ノーヴェはビックリしていた。

アレだけ怖がっていた近藤の手なのに、なんでこんなに力強いんだろう。

包み込まれるほどに大きな手、マメなどがある無骨なゴツゴツした手。

なんでこんなに安心するんだろう。

気が付くと、ノーヴェの頬はかすかに赤く染まっていた。

ウェンディはそんな二人を見てニコニコ笑った。

「やったっス！成功っス！」

「・・・いいなぁ・・・」

喜び、飛び上がるウェンディと、うらやましそうに近藤の手を見ているセッテ。

「さぁ、じゃあおいしいもの食べに行くっスー！！」

ウェンディ先導の元、近藤と手をつないだオットーとノーヴェ、近藤の後ろにぴったり張り付いたセッテは町へとくり出そうとした。

そのとき、一人の隊員と遭遇した。

「あれ、お父さん？どこかに行くんですか？」

それは、エリオだった。

いつもはキャロやティアナ達と行動を共にする事が多いのに、今は一人である。

おそらく、訓練時に仮想シミュレータに忘れ物でもして取りに帰っていたのだろう。

「ん？ああ、エリオか。うん、この子たちの観光案内をしてくるよ。あ、外出はなのは隊長に許可取ってるから」

近藤はじゃあなーと言いながら、４人を連れて行った。

「あれ？近藤さんたら、どこに行ったのかな？」

フェイトは昼食を一緒に採るために近藤を探していた。

「ああ、近藤さん？なんか外出するって言ってたよ？帰ってくるのは多分遅くなるから、仕事は明日するから置いててくれって」

なのはがフェイトに、近藤に言われた事を伝えた。

「ふーん・・・」

フェイトは少しガッカリした。
しかし、なにか嫌な予感がする。
こう、胸の辺りがもやもやとするのだ。
そこへ、エリオがなのはとフェイトに近づいてきた。

「あ、なのはさん、フェイトさん。あの、お父さんのことなんですけど・・・」

「ああ、近藤さんは外出だって。帰りは遅いらしいよ?」

なのはがエリオにそう伝えた。すると、エリオが火種を投下してしまった。

「あ、さっき会いました。なんか男の子?1人と綺麗な女の人3人連れて。観光案内するって言って町に行きましたよ?」

バキンッ!

いきなり何かが割れる音がしたので、なのはとエリオはあたりを見回した。

よく見ると、フェイトが持っている携帯端末のカバーが割れていた。

フェイトが握りつぶしていた。

「・・・近藤さん・・・」

ものすごく重低音な声がフェイトから発せられた。
地を這うような、恨みの篭ったような・・・
体から溢れ出る不機嫌オーラ・・・いや殺気。
いまなら想いで人を殺せるかもしれない。
表情は前髪が垂れて伺えない。

「フェイトちゃん・・・怖い・・・」

「・・・こんなのフェイトさんじゃない」

なのはとエリオは、フェイトの豹変振りに恐れおののいた。

## 第５２話（前書き）

今回、若干戦闘シーンを盛り込みました。
つたない文章ですが、見てやってください。

# 第５２話

近藤とナンバーズの４人娘は首都クラナガンの繁華街に来ていた。

「ウェンディさん達は嫌いなものとかある？」

現在、昼食を採るために店選びをしている最中だった。

「んー、あたしは特に嫌いなものはないっスねー。ていうか、近藤さん？あたし等の方が年下なんスから、呼び捨てでいいっスよ～」

ウェンディは近藤の前でクルクル周りながらそんなことを言った。

よほど町に来たのがうれしいのだろう。

すると、近藤と手を繋いで歩いていたノーヴェがモジモジしだした。

「あ、あたしも・・・呼び捨てでいいよ。・・・近藤・・・さん」

「僕もオットーでいいよ」

ノーヴェとオットーは近藤の手を握る力を強めながら恥ずかしそうに言った。

「そ？じゃあそうするよ」

近藤は短く言うと、ノーヴェとオットーは下を向きながら小さく頷

いた。

「私の事は僕（しもべ）と呼んでください、近藤様」

近藤の後ろにピッタリ張り付いているセッテがまたとんでもないことを口走る。

「あー、うん、遠慮しとく。普通にセッテって呼ぶから。あと、様ってのやめてくれないかな」

変なベクトルのセッテの扱いに戸惑う近藤に、ウェンディがツツツっと近づいてきた。

「アレは放っておいていいっス。ちょっと変な宗教にハマっちゃったんス」

ウェンディが小声で耳打ちする。

スカリエッティから再調整してもらったはずのセッテだったが、どうやら治らなかったらしい。

世の中には色んな人がいるんだなぁと、しみじみ思い、ウェンディの耳打ちに頷く近藤だった。

イロイロ歩いて回っていたが、ちょうど昼食時というのもあり、ほとんどの店がいっぱいだった。

「あー、こりゃ並ぶしかないっスかね？」

ウェンディがため息混じりにそう言った。
そこへ、近藤がある提案を出した。

「えーと、少し汚い店だけど、おいしい店があるんだよね。そこなら並ばなくていいと思うんだけど、どうする？」

「行くっス！そこでいいっス！」

ウェンディが即答した。
ノーヴェとオットーも頷いた。
セッテは後ろで、近藤様のオススメ・・・あぁ・・・とか言いながらトリップしだした。

というわけで、５人はその店に向かい歩きだした。

鶏肉専門店『Ｈａｒｕｒｕ』
名前の通り、鶏肉専門の飲食店である。
新鮮な鳥を使うので、刺身などもおいしい。
鶏肉はヘルシーなので、女性客に人気がでるはずなのだが、いかんせん門構えが少し汚く、店内も個人経営で店員もいないため小さい。
そのため客足は少ない、いわゆる、隠れスポットである。

「いらっしゃい・・・おや、近藤さん！久し振りだねー、ん？今日はまた違う女の人かい？モテるねー！」

店主の割腹のいいおやじさんとは顔なじみになっている近藤は、気さくに話してくるおやじさんに苦笑する。

「知人の妹さんを観光案内してるんだよ。しかも『また』ってなんだよ。俺はそんな取っ替え引っ替え違う女性連れて来てないだろ」

おやじさんはガハハーと笑い返した。

「さ、汚いところだけど味はいいんだ！嬢ちゃん達は近藤さんの知り合いだから、おもいっきりうまいもん作るよ！」

そう言いながら、おやじさんは厨房に消えていった。
そんなおやじさんを見た４人はポカーンとしていた。

「なんていうか・・・パワフルなおじさんっスね・・・」

「スゲェな・・・」

ウェンディとノーヴェがポツリと呟き、オットーとセッテは無言で頷いた。

適当に席に座り（その際も、ノーヴェとオットーは訓練ということで、近藤の両隣に座らされた。しかし、二人とも嫌がるそぶりは見せなかった）、一息つくとオットーが近藤に質問した。

「そういえば、来る前にお父さんて言われてた。アレは子供？」

オットーが近藤を見上げるように見つめる。

「いや、本当の親子じゃないよ？ただ、呼んでいいよって言ったん

だよ」

「ふーん、お父さんっスかー。いいっスねー」

苦笑しながら答える近藤に対し、頬杖をついてニコニコ顔で言うウェンディ。

「俺って子持ちに見えるかな？」

近藤の問いにウェンディは苦笑した。

「んー、はっきり言って見えるっス」

近藤は落ち込んだ。
ガックリと肩を落とし、俯いてしまった。

すると、隣に座っているノーヴェとオットーが焦りだした。

「あ、あのさ！いいじゃん、お父さん！大人の男って感じでさ！頼れる人って意味だよ！」

「うん、お父さん、カッコイイよ」

ノーヴェとオットーがフォローをいれる。
またそれが近藤の心にナイフのように突き刺さる。

「・・・まあなあ・・・俺も２６だし、別に子供がいてもおかしくない年だけど・・・でもなぁ・・・」

近藤はブツブツ呟く。

そこへ、ウェンディが変なフォローをいれた。

「いいじゃないっスか、お父さん。あたしのお父さんにもなってほしいっスよ」

ウェンディはニコニコしながら続ける。

「そしたら、親子なんだし一緒にお風呂入るっス！それから一緒に寝るっス！」

「な！？ウ、ウウウェンディ、なに言ってんだよ！？」

ノーヴェが顔を真っ赤にしながら叫ぶ。
彼女はボーイッシュな見た目と違い、割と純情のようだ。
しかし、ウェンディはキョトンとしている。

「え？親兄弟ってそういうものじゃないっスか？あたしらも一緒に洗浄してるじゃないっスか。それに、父親って娘とお風呂入るの好きなんじゃないっスか？」

「父親ってのは男だぞ！そんな・・・はずかしいこと・・・」

ノーヴェはモジモジとしながら、だんだん声が小さくなっていく。

「・・・誰が言ってたの？それ」

オットーがウェンディに聞く。まあ大体予想はつくが。

「クア姉とド・・・父親っス」

ウェンディがあっけらかんというが、ノーヴェとオットーは呆れた顔をしていた。

「私は一向に構いません。むしろ望むところ。ドンとこいです」

セッテが真顔で言う。

「・・・まぁ、セッテは置いといて。とにかく、あたしはそれくらい近藤さんがお父さんならうれしいって言ってるんス！」

ウェンディは手をブンブン振り上げ力説する。

そこへ、店主のおやじさんが料理を持ってきた。

「モテモテじゃないか、近藤さん。いや～うらやましいねぇ！」

相変わらずガハハーと笑いながら料理を次々テーブルに並べる。

「勘弁してくれ・・・」

近藤は力無く答えた。

料理は大好評だった。

「こんなうまいもの初めて食った！」

「おぉ～さすが近藤さんのオススメ店。マジうめーっス！」

「おいしい。ディードにも食べさせてあげたい」

「これは美味です。しかも目の前には近藤様・・・それだけでご飯三杯はいけます」

・・・最後のセッテの言葉はよくわからなかったが。

腹を満たし、再び町を散策しているとき、ノーヴェは考え込んでいた。

ちなみに、今もノーヴェとオットーは近藤の手を握っている。

（この人、相当強い・・・あたしじゃ勝てないかも・・・）

近藤の手を握りながら、力量を量っていた。

手を握る力加減、無駄のない歩き方、普通にしているようでスキのない雰囲気、手から出る隠しようのない覇気、まるで大木のようなどっしりとした存在感。

ノーヴェは決心した。

「近藤さん。あんた格闘技してるだろ？」

近藤をまっすぐ見据えるノーヴェ。

「え？まぁ、ストライクアーツを少し。・・・それが何か？」

近藤はいきなりの質問に少し驚いたが、別に隠す事もないので正直

に言った。

「あたしと一手、手合わせしないか？」

この言葉に驚いたのはウェンディだ。

ノーヴェに猛抗議する。

「なに言ってんスか！？ダメっスよ！」

だがノーヴェの決心は固かった。

「頼む。あたしは強くなりたい。近藤さん、あんたとやり合えば強くなれる。そう思うんだ」

ノーヴェは頭を下げた。

あの、いつもイライラして短気のノーヴェが、頭を下げて頼み込んでいる。

ウェンディは驚きのあまり、口をパクパク動かすしかできなかった。

途中、プロテクターとオープンフィンガーグローブを買い、公園に行った。

ノーヴェは膝、肘にサポーターを付け、ヘッドギアを装着した。

「あたしこんなものいらねーよ」

ノーヴェはブツブツ言いながらもオープンフィンガーグローブに手

を入れる。

「君に怪我でもしたら、ドゥーエ二尉に何言われるかわかったものじゃないからな。それに、君は綺麗な肌をしているんだ。大事にしないと」

近藤もオープンフィンガーグローブを付け、握りを確認している。
すると、ノーヴェは顔を真っ赤にしながら焦りだした。

「き、綺麗!?な、なに冗談いってんだよ!そ、そんなお世辞、う、うれしくないぞ!?」

「さて、じゃあ確認するよ。制限時間は３０分、徒手空拳による攻撃のみで金的、目潰しの攻撃は禁止。何か質問は?」

「近藤さん・・・ザックリ切ったっスね・・・かわいそうなノーヴェ」

あわてふためくノーヴェに対し、近藤はマイペースに説明を行う。
そんな空気を読まない近藤に呆れるウェンディだった。

とにかく、ノーヴェと近藤の手合わせは始まった。
ノーヴェは前傾姿勢に左腕を腰の位置、右腕を顎の横に構える。
いわゆる攻撃主体の構えだ。
対して近藤は後ろ脚に重心を置き斜めに構え、右腕は腰の後ろへまわし、左腕を軽く前に出す。

「・・・変わった構えだな」

ノーヴェはポツリて呟きながら、トントンと軽く跳び、フットワークをとる。
そして、近藤の構えをよく見てニヤリと笑った。

（思った通りだ・・・こいつは強い。重心を後ろにして相手との距離を稼いで手を読むタイプか。それに斜めに構えてるから急所を狙いにくくさせている）

「さ、どこからでもどうぞ」

近藤は左手の甲をノーヴェに向け、指を揃えて上に向けてクイクイと曲げた。

「よっしゃあっ！いっくぜーっ！！」

ノーヴェは地面を強く蹴り、近藤に向かっていった。
驚異的なダッシュ力により近藤との距離はアッというまに縮まり、すぐさまノーヴェは左ジャブを近藤の顔に向けて放った。

しかし近藤はそのジャブを左手で払いのける。
ノーヴェは構わずにジャブを連発する。
角度を変え、顎、ボディへと何発も放つ。
近藤はそれをことごとく自分の体の外へと払う。

「おるあぁぁっ！」

ノーヴェは重心を低くし、体を少し斜めにして右肩を上げ、右腕を突き出した。
ちょうどノーヴェの頭の上からフック気味の拳がとんでくる形にな

る。
この攻撃は、自身より身長が同じか低い相手の場合、見えない角度からの攻撃のため防御は難しいだろう。
だが近藤はノーヴェよりも身長が高く、さらに後ろ足に重心を置いているので、ノーヴェの攻撃を全体で見ることができる。
当然ノーヴェの右は近藤の左手により軌道をずらされる。

ノーヴェの体が、近藤によって流された右につられて泳ぐ。
しかし、ノーヴェはその流された力を利用して体を回転させる。
そして、そのままの勢いで上段左後ろ回し蹴りを繰り出した。

近藤は体を少し後ろへのけ反らせ、ノーヴェの攻撃を回避するが、攻撃が止まらない。
ノーヴェはそのまま一回転して回転軸を右足から左足に変え回転の遠心力はそのままに右上段蹴りをだした。

「はあっ！」

連続攻撃に驚きながら、近藤は繰り出された右上段蹴りを手刀で叩き落とした。

「くうっ！？」

叩かれた痛みに耐えながら、バックステップして距離をとる。
近藤は態勢を整えるためだと思っていたが、ノーヴェは大胆な行動をとった。
距離をとったその場で飛び上がり、回転しながら蹴りを繰り出したのだ。
二回転回し蹴り（７２０°回転蹴り）である。

「でりゃあぁぁっっ！！」

流石に驚いた近藤だが、即座に気持ちを切り替え、飛んで来る蹴りを予測し、掴んだ。
蹴りが重い・・・とても少女が出せる力量ではない。

「足癖の悪い子だな」

ノーヴェは足を掴まれ、宙吊りのような態勢になる。

「くそっ！」

ノーヴェは近藤から逃れるためにもう片方の足で近藤の顔をめがけて蹴りをいれようとする。

「おっと」

近藤は掴んでいた足を力任せに放り投げた。
その反動でノーヴェは空中を回転する。

「うおっ！？」

なんとか平行感覚を取り戻し、無事着地をしたノーヴェだったが、その表情は驚愕に染まっていた。

たしかに、強いとは思っていた。
だが、一撃も当たらず、かわされ、掴まれ、投げ飛ばされる。
ここまで一方的な状況になるとは予想だにしていなかった。
しかも、近藤にはまだ余裕が見られる。いや、それどころか表情一つ変わっていない。

攻撃も繰り出していない。

「ちくしょおぉぉっ！」

ノーヴェは叫びながら近藤に突撃した。

ウェンディ達は、ノーヴェと近藤の手合わせをただ呆然と見ていた。
徒手空拳で、まさかノーヴェがここまで手玉に取られるとは。

「すごいっスね・・・」

ウェンディは近藤の強さを目の当たりにし、ただ一言呟いた。

「こりゃトーレ姉といい勝負するんじゃないっスかね？」

そこへ、セッテが答えた。

「いえ、トーレでも恐らく無理でしょう。あの構えは攻略が難しい」

セッテは冷静に近藤とノーヴェの手合わせを分析していた。
近藤は徒手空拳といいながらも、相手の全体を見て攻撃を予測、判断する。
そして攻撃を捌く。

ここで注目するのは近藤の構えにある。
斜めに構え、相手に『急所を狙いにくくする』構えだが、これは逆に言うと攻撃する箇所が限られる、すなわち『攻撃を限定できる』ということである。

ボクシングなどの基本である。
オーソドックスに構える場合、肩幅程に足を広げ、左足を前にし、右足は少し重心を乗せる。
左肩で顎を守り、左腕は脇を閉めて目線の高さで固定。
右腕は折りたたみ、拳でもう片方の顎を守る。
相手から見ると、各急所が隠され、さらに左足を前に出していることにより体が斜めになり、上半身の面積を小さく見せる。
だが、左腕が出しやすい格好で、まさしく攻防一体の構えだ。

近藤の場合、体は斜めにして急所を隠し、狙われる面積を小さくしつつ、重心を後ろに置くことで相手と距離を開け、攻撃を観察し、対処する。
更に左腕は顔より若干下の位置に固定する。
前に出された手によって、相手は距離感を失う。そして、攻撃は出された左腕が最も稼動範囲の多い位置にある。限定された攻撃をその左腕は上下左右、前後に自由に動くためあしらうことができる。
右腕はハンデの為に腰の後ろへまわしているだけだが。

「我々がＩＳを使って近藤様と戦った場合ならば、こちらに分があるでしょう。しかし、それは近藤様が徒手空拳で戦うという条件で、ですが」

セッテは近藤の動きを一時も見逃すまいと、ずっと近藤を観察している。

「あの人は『ブラックマン』だし、あの管制人格融合騎と『ユニゾン』なんかしたら、とてもじゃないけど僕たちじゃあ手に負えない」

オットーも、ノーヴェと近藤の戦いを真剣に見ていた。

「・・・なんでこんなスゴイ人を、管理局はぞんざいに扱うんスかね？」

「ドゥーエの報告には、近藤様は自身の力を公表していないとありました」

ウェンディの問いにセッテは即答する。

実際、近藤の力を知る者はほとんどいない。

しかも、近藤にはまだ隠している力がある。

それは、力を利用されない為ということもあるが、近藤自身が力を使うことに躊躇いがあるのである。

セッテは近藤の動きを見ていて、ある事に気付いた。

「ストライクアーツと言っていましたが、あれは中国拳法に近いですね」

「中国拳法？」

「第９７管理外世界に伝わる格闘技のひとつです。あの世界は魔法技術がない代わりに、それ以外の技術が進歩しています。格闘技もそのひとつです。何千というな武術、殺人術などが生み出され、連綿と受け継がれ進化していく。格闘技だけで見れば、あの世界はＮｏ．１です。

それに、この世界の格闘技は未熟すぎる。ストライクアーツ？広義が曖昧すぎる。魔法に頼りすぎたためにそれ以外が疎かになるんです」

「ほ～」

セッテのうんちくに感心するウェンディとオットー。
戦闘についての知識は凄まじいセッテ。
オタクか？

「ぼーっとしていないで、ほら、近藤様が仕掛けますよ」

セッテがウェンディとオットーに注意し、二人は近藤とノーヴェを見た。

「どうもイライラしているな」

近藤はノーヴェの攻撃を受け流しながら分析する。
ラッシュは凄まじいし、パワーもある。
それをこなせるだけの体力にも目を見張るものがある。
だが、狙いが甘い。
そして、攻撃が当たらないため段々粗くなり大振りになっていく。
直線的になり、今は顔しか狙ってこない。
イライラした感じが攻撃から伝わるし、ノーヴェの顔を見ても怒りをあらわにしている。

「効率的な攻撃をした方がいいよ」

「うるせえぇっっ！！」

近藤の忠告を無視するノーヴェ。
頭に血が上り我を忘れているようだ。
ノーヴェはおもいっきり右ストレートを繰り出した。

「死ねえぇぇっ！！」

「少し頭を冷やせ」

近藤はノーヴェの右ストレートを手の甲で内側から押しだし軌道をずらし、左足を一歩踏み込む。
ノーヴェは左腕も脇を締めていないのでボディや顔面ががら空きだ。
そして、軽く拳を握り左腕をノーヴェの顎に向けて伸ばした。

カコッ

軽く突き出した腕はノーヴェの顎の先端に軽い音を立てて当たり、
ノーヴェはそのまま頭をずらした。
そしてノーヴェは二、三歩後退し、尻餅をついた。

「あ・・・あれ？・・・え？」

ノーヴェは状況が把握できなかった。
倒れたのか？
当たったのか？
痛くなかったのに？
視点が合わず、目の前がぐにゃぐにゃと揺れている。
頭がフラフラする。
しかしノーヴェはすぐに正気を取り戻し、現状を把握し立ち上がろうとした。
だが、立ち上がることができない。
足に力が入らない。
ブルブルと脚が痙攣している。

「な・・・んだよ・・・これ・・・・！？」

ノーヴェの顔は驚愕に染まる。
足が動かない。
立ち上がれない。

前方からジャリっと音がした。
ノーヴェは音のした方を見る。
見上げる。
そこには近藤がノーヴェを見下ろしていた。

「あ・・・ぅ・・・」

ノーヴェは恐怖した。
たった一発で体を壊された。
しかも魔法などではなく、純粋な力のみによって。
なんだこいつは？

「落ち着いたかな？」

近藤はしゃがみ、ノーヴェと目線を合わせた。
ノーヴェの視線が揺れている。
顔色も若干青い。

「顎の先端を狙って脳を揺らして、平行感覚を無くさせた」

「脳を・・・揺らす？」

ノーヴェは近藤が何を言っているのかわからなかった。

「どれだけ体が頑丈でも、どれだけ鍛えていても、生き物には鍛えることが出来ない部分がある」

近藤は頭を指差し、それから肘を指した。

「頭蓋の中で浮いている脳と、関節だ」

ノーヴェはポカーンと口を開けている。

「脳の揺れ自体は訓練である程度は改善できる。だが、完全には無理だ。そして、関節は動くのに硬くなることはできない。そこを冷静に的確に狙う」

近藤は拳をつくり、ちょんちょんと軽くノーヴェの顎に当てながら言う。

「君はどうも短気だな。すぐにまわりが見えなくなる傾向がある」

近藤は少し困った顔をしながら頭をかく。

「頭に血が上ると目の前の事に集中しやすくなる。それは言い換えれば目の前の事にしか気を向けることしかできず、まわりの状況を把握できないということだよ。

集中することは良いことだ。まぁまわりが見えなくなるのはあまり良くないが。

君はそうなると直線的な攻撃に偏りがちだ。それに、技の組立もめちゃくちゃになってしまう」

ノーヴェは大人しく近藤の言葉に耳を傾けていた。

「いつも冷静に。体は熱くとも、頭は凍えるような冷たさを。常に全体を見る。相手の動きを点で見るんじゃなく、円で見ること」

「円で見る？」

ノーヴェは首を傾げる。

普段の行動では考えられない、とても素直である。

当然だ、自分の知らない知識、それを教授してくれるのだ。

好奇心がノーヴェを素直な少女に変身させたのだ。

足が自由に動くようになり、自然と正座をするノーヴェ。

「円とは、全体を見るということだ。円の中に相手を入れる。その円の中の出来事、瞬きから、息遣いまで全てを見る」

近藤が指で円を書き、説明する。

ノーヴェはほーと感心の息を漏らした。

すると、ノーヴェの後ろからパチパチと拍手しながらウェンディ達が来た。

「いやー、スゴイっス！あのノーヴェを一発で倒すなんて！」

ウェンディは感心しきりだ。

横ではオットーがコクコクと頷いている。

「さすが近藤様です。まさに鬼神のごとき強さ。憧れます、痺れます！抱きしめて！銀河の果てまで！！」

セッテはおかしくなった。

「今日はありがとうございましたっス！」

日も落ちかけ黄昏時、ウェンディ達は帰ることになった。

ウェンディはペコリと頭を下げる。

「いいの？こんなお土産なんてもらっても？」

オットーは手に持つ紙袋を持ち上げる。

中にはシュークリームが入っていた。

「ああ、家に帰って家族で食べるといいよ」

近藤はなんでもないという風にいうが、このシュークリームも当然超人気店のものであるが、近藤はよく知らない店らしい。

たまたま整理券配布のときに通り掛かっただけなのだが、本当にラッキーだ。

「俺も自分の分を買ったしね」

抜目ない近藤だった。

「私は近藤様をお持ち帰りしたいです」

「セッテ、君は少し自重しようか」

セッテが段々手に余る行動を取り出したために、注意をするのだが、セッテには逆効果だった。

「あぁ・・・近藤様が、私を叱ってくれている・・・はふぅ・・・」

超ウットリしている。

「ごめんなさいっス。後できつく言っとくっス」

「うん。間違った道に踏み外さないようにね」

ウェンディは疲れた表情をして謝ってきたので、近藤は同情し、肩をポンポンと叩いた。

そこへ、モジモジとしながらノーヴェが近付いてきた。

「あ、あの・・・さ・・・」

目線を反らし、俯いている。

そして、意を決してバッと顔をあげた。

「今日はありがとうございました！ものすごく勉強になりました！」

ノーヴェが深々と頭を下げる。

ウェンディ達は驚きのあまり、固まってしまった。

ノーヴェがチンク以外に、こんなにも素直に礼を言い、頭を下げるとは。

ウェンディは目を細めて近藤を見つめていた。

「俺はただ注意しただけなんだけど、まぁ、短気は治した方がいいよ」

ノーヴェは顔を赤くして小さく頷いた。

ウェンディ達は近藤と別れ、アジトへの帰路にたっていた。

「ノーヴェ、オットー、近藤を生で見てどうっスか？」

ウェンディは頭の後ろに腕をまわしながら聞いた。

「いい人だった。実物は全然怖くなかった」

オットーは紙袋の中身を見ながら言う。

その顔には笑みが浮かんでいた。

「そうだな。あの人は温厚そうだったし、なんていうか、大きな樹みたいだった。何より強い！仲間になってくれるなら、あたしは大歓迎だな」

ノーヴェも嬉しそうに話す。

手には、手合わせの時に使っていたノーヴェと近藤のパットとヘッドギア、オープンフィンガーグローブの入った袋が握られていた。

記念という事で、近藤から譲り受けたのだ。

ちなみに、近藤の使用したグローブなどはセッテがもらう事になっている。

「ノーヴェはオッサンが好きなんスか？」

「な、なに言ってんだ！？だ、誰がオッサン好きだ！！それに、近

藤さんはオッサンじゃない！」

ウェンディのからかいにムキになって怒るノーヴェ。
和やかな雰囲気が漂っているようだが、セッテが空気の裏を敏感に嗅ぎ取り、ウェンディに聞いた。

「ウェンディ、近藤様に何かあるのですか？」

ウェンディはセッテの方を見ることなく、ポツリポツリと喋りだした。

「・・・確かに近藤は有能っス。ドクターやドゥーエ姉が仲間に引き込もうとするのも頷けるっス。でも、あたしはそれが怖いっス」

「・・・何を・・・」

ノーヴェが反論しようとすると、ウェンディが手で遮った。

「まぁ聞くっス。今日改めて思ったんス。近藤は頭の回転が速いし、クールっス。何より素手であたし等を凌ぐ強さ。
有能すぎるっス。あいつがもし仲間になったとしても、うちらに危険が無くなるとは思えないっス」

「・・・裏切るかもしれないと？」

オットーはウェンディの顔を見る。

「ま、あくまで推測っスけどねー。でも、あたしは近藤が敵でもいいと思ってるんスよ」

ウェンディは笑っていた。
目はキラキラとしていた。。
おもちゃを与えられた子供のように。

「それは何故？」

セッテは聞きながらも、ウェンディの考えていることがなんとなくわかっていた。
それは、セッテも思っていたことだったからだ。

「どーやって叩きつぶせるか、どうしたら攻撃を喰らわずに済むか、あたしの本気は近藤にどこまで通じるのか。・・・ノーヴェのを見てて思ったんス」

ウェンディの笑みは深くなり、目を細め、口元が三日月のように広がる。
指を動かし、パキパキと関節を鳴らす。

「あたしも戦いたいんス。真剣勝負（ガチ）したいんスよ、近藤と」

ノーヴェは驚きで目を見開いたが、しばらくして自分も口を歪めて笑っていた。

「・・・そうだな。それもアリだな」

セッテも静かに微笑み、近い未来に衝突するであろう巨大な敵に心馳せる少女達だった。

夜、近藤が機動六課に帰ると、隊舎入口でフェイトが仁王立ちしていた。
イライラしていますといわんばかりに、組んでいる腕の上で指をトントンたたき、眉がピクピク動いている。

「おかえりなさい近藤さん」

ニコニコと笑うフェイトは殺気を漂わせていた。
フェイトの半径5メートル内に誰もいない。
なにこれ？
超怖い。

「ただいま帰りました。あ、お土産にシュークリーム買って来ました」

近藤が紙袋を持ち上げてアピールすると、フェイトがピクッと耳を動かし、鼻の穴を膨らませた。

「・・・どこのシュークリームですか？」

「えーと、『ａｑｕａ　ｇｉｒｌ』ですね。有名なんですか？たまたま整理券配布してたんですけど」

近藤が店名を言った途端、フェイトの顔がパアッと子供のような笑顔になった。殺気も霧散している。
しかしすぐに真面目な顔になる。
若干よだれが垂れていたのは内緒だ。

「・・・んっ・・・んんっ！おほんっ！ま、まぁそれは後でおいしくいただきます。それは置いておいて、近藤さんに聞きたいことがあります」

組んでいた腕を解き、腰にあてる。
なんで踏ん反り返っているのだろうか？

「今日、かわいい女の人複数と出かけたそうじゃないですか？」

「え？あ、エリオから聞いたんですか？そうですね、マセラティ二尉の妹さん達を観光案内してました」

フェイトは眉を吊り上げた。

「なんでマセラティ二尉の妹さん達が近藤さんのところにくるんですか！」

フェイトの剣幕に焦りつつも、近藤は素直に話した。

「えぇ・・・と、その・・・恥ずかしいんですが、どうも俺はマセラティ二尉が言うには、『紳士』らしくてですね、その確認に来たらしいです」

頭をガリガリとかきながら恥ずかしそうに言う近藤。
それを聞いたフェイトはポカンとしていたが、照れている近藤を見て、笑いが込み上げてきた。

「・・・ふふっ」

「それで、エスコートしろって言われて・・・聞いてます？」

近藤が弁解していると、フェイトは笑い出した。

クスクスした笑いから、段々大きな笑いになり、肩を震えさせている。

「くふふっ・・・し、紳士・・・ジェントルマン・・・ぷっ・・・くひひ」

「あ、あの、フェイト隊長？」

近藤はフェイトの様子が気になり近付いた。

「くひひひ・・・シルクハット・・・カイゼル髭・・・くくくっ・・・」

どうもフェイトのツボにハマったらしい。

今では腹を抱えている。大笑いしたいのをかみ殺しているためか、くひひと変な笑いになっている。

フェイトの頭の中ではシルクハットにカイゼル髭、モーニングを着て杖を持つ近藤が浮かんでいるようだ。

やばい、似合いすぎる。

逆三角形のマッチョな体格にモーニングとか、どこの大富豪だ？

ついには、近藤が某世紀末救世主が怒りで服を筋肉で内側から破るように、モーニングを筋肉で破る姿を想像してしまった。

とうとうフェイトはひざを突いて笑い出した。

フェイトの変わりように近藤は焦った。

しかし、フェイトは笑い続けるままでどうすることもできず、オロ

オロしていた。

それを柱の影から覗いていた人物がいた。

なのはとエリオだ。

「フェイトちゃん・・・明日になったらいつものフェイトちゃんに戻ってるよね？」

「・・・お父さん・・・フェイトさんを・・・あのやさしいフェイトさんに戻してください・・・！」

なのはとエリオの願いは叶うのだろうか？

・・・たぶん無理です。

そして同じ頃、とあるショットバーでは、絶世の美女が二人並んでそれぞれ綺麗な色のカクテルを飲んでいた。

メガネの奥から見える涼しげな眼に、ほんのり桃色に染まる頬、ショートヘアーが微かに揺れ見え隠れするうなじがより妖艶さを演出し、物憂げな表情はアンニュイな雰囲気が漂う。

隣の女性は青いロングヘアーが少し俯く顔にかかり、艶を出す。

煩わしそうに髪をかきあげる仕草がまた妖艶さを演出する。

怪しく光る瞳には、色鮮やかなカクテルを写し出し、彼女もほんのり頬が桃色に染まっていた。
濡れる唇がグラスに近づき、喉へ流し込まれる。
口を離すと、ぺろりと舌で唇を舐め、フッと息を吐く。

「・・・ふーん・・・妹さんがねー。大変ねドゥーエも」

「私の苦労をわかってくれるのはオーリスだけよ！・・・まったく・・・あの子達ったら・・・」

美女二人はオーリスとドゥーエだった。
どうやら、ウェンディ達の勝手な行動を愚痴っていたようだ。
いまだにブツブツとつぶやいている。
オーリスも聞き上手のようで、隣でうんうん頷いている。

「あ、でもね、妹がこんなこと言ってたの。『近藤さんは紳士で頼れる存在』って」

「・・・紳士？」

ドゥーエはニヤリと笑った。

「想像してみて？紳士とは、ジェントルマン。シルクハットにカイゼル髭、モーニングに杖を持つ近藤さんの姿を・・・」

ドゥーエの言葉に、オーリスは目を見開きドゥーエを見つめる。
驚きの顔は、徐々に笑みへと変わり、親指を立てる。

「・・・ぜんぜんアリね！！」

想像力豊かなドゥーエとオーリスは、近藤の勝手な正装を想像した。
そして、鼻息荒く興奮するオーリス。

「髭最高！」

「紳士最高！！」

各々のグラスを持ち上げ、見つめるオーリスとドゥーエ。

「乾杯！！」

そして、二人はハイテンションでグラスをチンと鳴らした。

## 第５２話（後書き）

次回、ギンガが登場します。
お楽しみに！

## 第53話（前書き）

シグナム　「さて、言い訳があるなら聞こうか？」

作者　「ないです。謝りませんし」

シグナム　「1ヶ月放置しておいて開き直るとはいい度胸だ。レヴァンテインの錆にしてやろう」

ヴィータ　「待て、シグナム！」

シグナム　「む、ヴィータか、何故止める？というか、なんだその憐憫の目は」

ヴィータ　「以前も2週間くらい空いた時あったろ？」

シグナム　「ああ、確か車をぶつけられたショックだったか？」

作者　「・・・クスン」

シグナム　「・・・まさか・・・」

ヴィータ　「今回は車上荒しにあったんだよ」

シグナム　「・・・そうか・・・」

ヴィータ　「しかも、前回保険を適用したから、今回から免責が発生するわけだ」

シグナム　「・・・いくらだ？」

作者　「・・・１０万・・・」

シグナム　「・・・スマン、お前の気持ちもわからずに頭ごなしに言ってしまった」

ヴィータ　「しかも、カーナビが盗難にあって、代わりのカーナビを付けた差額が２万６千円、カーセキュリティを取り付けた値段が１６万３千円」

シグナム　「このご時勢に・・・それは・・・」

作者　「ちくしょー！！車上荒しとかする奴！死ね！！」

シグナム　「確かに犯罪はいかんな、うん。だから落ち込むな、な？」

ヴィータ　「ま、車種は聞かないけど、お前の車、トヨタだろ？車両盗難ベストテン中８車種ランクインで、車上荒しベストテン中８車種ランクインの」

シグナム　「おい、今のトヨタにその情報はまずいのではないか？」

作者　「何言ってんの？これは昔からだ。ようするに、トヨタの車が一番売れてて、一番パクリやすいってことだろ？」

シグナム　「・・・ノーコメントだ」

作者　「次の車は絶対トヨタ買わない」

ヴィータ　「ま、まぁ、そんな感じで始まるからな！1ヶ月放置して申し訳ない！でも、温かい目で見ていってくれ！！」

# 第５３話

朝早く、隊長と副隊長は部隊長室へ呼ばれた。

「今日は新しい仲間を紹介します」

はやてがそう言うと、二人の人物が部屋に入ってきた。

「本日付けで機動六課へ配属になりました、ギンガ・ナカジマ陸曹です！」

「同じくマリエル・アテンザ技術官です」

紫色の髪をロングにし、地上本部の制服に身を包むギンガ・ナカジマと、草色のショートヘアが外にピンピンと飛び、メガネをかけ、白衣を纏っているマリエル・アテンザだった。

「まぁ、ギンガもマリエルも皆知っとるわな。・・・あ、近藤さんは知らんか」

はやてが近藤を見ると、近藤は顔を手で隠していた。

「何をしている」

シグナムが近藤を睨む。

だが、近藤は申し訳なさそうにこう言った。

「いえ、また泣かれたり怖がられたりしたら傷つくんで・・・」

シグナムはため息をついた。
この男は本当に小心者だな・・・そんな事を考えている顔をした。
ようするに呆れていた。

「・・・まぁ、否定はせんよ。でもいつまでもそんなことしとるワケにはいかんやろ?腹括ってさらけ出しーな」

はやてはそういうが、近藤は渋っている。
この男、見かけによらずガラスハートでチキンハートである。
そんなとき、マリエルが近藤に近づいた。

「あ、あの、近藤大輔三等陸尉」

メガネの奥の瞳は輝いていた。

「サイン下さい!」

どこからか、マリエルは色紙とペンを取り出して近藤に突き付けた。

「・・・はい?」

近藤は顔を隠すのを忘れ、マリエルの顔を見た。
・・・なにそのキラキラした目は?

「あなたの論文見ました!感動です!あんな斬新な理論初めてです!ファンです!」

マリエルは近藤をまくし立てるように近藤に詰め寄る。

「・・・論文ってなにかな?近藤さん」

フェイトの冷たい視線がイタい。
どうも最近のフェイトは、近藤が自分の知らない所でイロイロ他の女性に手を出していると思っている。
オーリス、ドゥーエしかりである。
だが、小心者で人見知りする近藤がそんなことできるわけが無いことはわかっているはずなのに、フェイトは近藤の行動に疑問を持つのだ。
まったく、恋は盲目とはよく言ったものだ。

「いえ、数年前に暇だったもので、軽くデバイスの持論を論文にして提出したんですよ。でもアレは世間では評価されなかったハズなんですけど・・・」

「それは違います!アレはあまりにも斬新すぎて上の堅物達が受付なかったんです!だいたいあの人達は・・・」

マリエルはいつの間にか管理局の上層部の不満を愚痴りだした。

「・・・まぁ、アレは放っておいて、ギンガは知ってるかな?以前の事件でモニタ越しに見たことあるんやない?」

はやての言う以前の事件とは、ヴィヴィオを保護したときの事件である。

「はい。存じ上げてます」

近藤はギンガを見た。すると、ギンガは少し睨むような感じで近藤

を見てきた。

「・・・？」

なのは達は訝しんだ。

何故だろうか。ギンガは近藤とこうして会うのは初めてのハズである。

だが、当の近藤にはその原因がわかっているようで、その視線を受けても飄々としていた。

こうして、隊長達の顔見せが終わり、はやてを除くメンバー全員でフォワード４人の待つ仮想シミュレータへと向かった。

「さて、今日の朝錬の前にひとつ連絡事項です」

横一列に並び、なのは達を見ているフォワード４人。

「陸士１０８部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が、今日からしばらく六課へ出向となります」

なのははギンガの方へ手をやり、ギンガへと注目を移す。

「１０８部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします！」

ギンガは元気良く声を出し、敬礼をした。

「よろしくお願いします！」

フォワード４人も元気良く返事をする。
そして、フェイトがもう一人を紹介した。
そこには、シャーリーのとなりに白衣を着たメガネの女性、マリエルがいた。
マリエルは軽く手を上げ挨拶する。

「１０年前から、うちの隊長陣のデバイスを見てきてくださっている、本局技術部の精密技術官」

「マリエル・アテンザです」

マリエルは軽く敬礼する。
シグナムが、マリエルもしばらく六課に滞在する旨を説明し、紹介は終わった。

そして、朝錬がはじまり、エリオとキャロはフェイトの所へ集まり、ティアナはヴィータとマンツーマン、スバルとギンガはなのはのもとで、準備運動をしていた。
そこへ、なのはがギンガに、スバルとの模擬戦を提案した。
スバルがどれほど成長したかを肌で感じて欲しいとのことだった。

ギンガは二つ返事で了承した。

仮想シミュレータの設定は森。
そこで二つの拳がぶつかり合う。

「はあぁぁぁっ！！」

ギンガのブリッツキャリバーが回転を高める。
ギンガの突撃力が上がり、スバルは後退する。

ギンガはその突進力をそのままにまわし蹴りを繰り出す。

「くうっ！」

スバルは上体をそらし、ギンガの蹴りをかわす。

《Ｓｔｏｒｍ　Ｔｏｏｔｈ．》

ブリッツキャリバーの声とともにギンガの左腕にあるリボルバーネックルを構える。
ナックルスピナーの回転が早まり、周囲の空気を巻き込む。

スバルは危険を察知し、咄嗟に右手を前に出す。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．》

「はあぁぁぁぁぁっ！！」

ギンガはリボルバーナックルを繰り出した。
スバルのプロテクションとギンガのリボルバーナックルが衝突する。
魔法と魔法のぶつかり合いで、周囲の空気が揺れる。
次第に、スバルのプロテクションから、ピキピキと音が鳴り出す。

そして、ギンガがリボルバーナックルを振りぬくと、ガラスが割れ

るようにスバルのプロテクションが破られた。
間髪いれずにギンガが左腕を素早く戻し、下から振り上げるようにスバルのボディ目掛けて繰り出した。

ギンガのリボルバーナックルはスバルに当たり、スバルの足が浮く。
勢いそのままに、スバルとギンガは森林を伐採しながら煙を撒き散らす。
ドドドと音を出しながら何十メートルと道を作っていく。

それを見ていたティアナ、エリオ、キャロはポカーンと口を開けてみていた。
隣では、シグナムが腕を組んで成り行きを見ていた。

「・・・なるほど、悪くない」

「・・・はい」

なのははシグナムの言葉にニヤリと笑った。
その横では近藤が渋い顔をしていた。

（・・・まだ荒いな・・・）

「しかし、なんであんなに叫ぶんですかね？あれじゃあ敵に攻撃しますよって言ってるようなものじゃないですか？もう少し静かに出来ないものですかね？」

近藤が疑問を口にした。

皆近藤から視線をずらした。

スバルとギンガの戦っている場所が煙で見えなかったが、徐々に視界が開かれていく。
重なり合う二つの影。

ギンガの繰り出したリボルバーナックルは、スバルのボディへ突き刺さる事は無く、スバルの左手で出されたプロテクションによって防がれていた。
ギンガの顔が驚愕に染まる。

「リボルバー・・・」

スバルが右腕に装着されているリボルバーナックルを振りかぶる。
ナックルスピナーが回転を始めた。

《Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ.》

ギンガは咄嗟に右手でプロテクションを展開した。

「キャノン!!」

スバルが思いっきりリボルバーナックルを振りぬいた。
スバルの周囲の空気がナックルスピナーによって巻き込まれる。
スバルの拳はギンガのプロテクションをいとも簡単に破壊する。
ガラスの破片のようにプロテクションが舞うが、スバルは拳を止めず、勢いを緩めずにギンガを襲う。

ギンガは両手でスバルのリボルバーナックルを防御する。

「うっ・・・くっ！？」

ギンガの顔が苦痛にゆがむ。
スバルはよりリボルバーナックルに力を入れ、ギンガを押し出した。
反動でギンガが後ろへ吹き飛び、森林に轍を作り煙が巻き起こる。

スバルはなおも攻撃の手を止めることなく追撃する。

「相棒！」

《Ｇｅａｒ　Ｓｅｃｏｎｄ．》

マッハキャリバーのローラーが回転を上げる。
スバルの突進力が上がり、吹き飛ばされていたギンガに一瞬で追いつく。

「だあぁぁっ！！」

スバルはその勢いを利用してとび蹴りを繰り出した。
ギンガは体を横にずらし、スバルの攻撃を回避する。
そして、スバルの攻撃は近くの木に当たり、木が砕けた。

《Ｗｉｎｇ　Ｒｏａｄ．》

ギンガは体勢を立て直すためにウィングロードと発生させ、上空へと退避した。
空には青い道が出来上がり、ギンガはその上をブリッツキャリバーを駆使して走る。
青い道のすぐ横で水色の道が出来上がり、同じくスバルがマッハキャリバーを駆使してギンガを追いかける。

ギンガはウィングロードの上で方向転換し、追いかけてくるスバルを迎撃する。
スバルとギンガの、お互いのリボルバーナックルがぶつかり合い、火花を散らす。

遠くから見るそれは、ウィングロードというリングの上で光り輝く宝石のようだった。

ぶつかり合う二人の顔は、いつしか笑みが浮かんでいた。

模擬戦はギンガの勝利で終わった。
だが、隊長陣はスバルの出来になかなかの評価を与えた。

「スバルはなかなか使えるようになったな」

シグナムが珍しく褒める。

「ま、あれだけ毎日毎日あたしやなのはが叩いてんだ。これくらいは出来なきゃな」

ヴィータはいつでも厳しい。

スバルはヴィータとシグナムの総評をうけ、エリオ達もそれを聞いていた。
ギンガはなのはとフェイトの3人で話をしていた。

「ギンガ、どう？スバルの成長は？」

「びっくりしました！攻防の切り替えがすごく早くて、威力も段違いで！特に格闘技術の向上は目を見張りました！！」

なのはの質問に少々興奮気味に喋るギンガ。

「合格？」

「はい！ものすごく！」

ギンガはスバルの出来に満足した返事をした。それを聞いたなのはもうれしそうな顔をした。

「だそうですよ。どうですか、近藤先生？」

なのはがにこやかに少し離れた所であくびをしていた近藤に話しかける。

・・・先生？

ギンガの眉がピクリと動く。

「そうですね、やはりまだ無駄な動きが多い。ナカジマ陸曹のようにコンパクトな攻撃が望ましい。それにもっと力を抜いた方がいい。まぁ以前よりは考えて攻撃を繰り出しているので、そこは褒めてもいいんじゃないですかね」

近藤は顎を撫でながらスバルを評価した。

なのははそんな近藤の言葉にクスリと笑う。

「近藤先生は厳しいですね」

「なのは隊長に言われたくないですよ」

近藤は軽口を叩きながらもなのはを見てニヤリと笑う。

「あ、あの、先生ってどういう事ですか？」

ギンガが恐る恐るなのはに聞く。

「ああ、スバルの格闘技面の指導は近藤さんが教えてるんだよ。私達じゃあ専門的な格闘技教えること出来ないからね」

なのははサラッと言ったが、それは、近藤が格闘技に関しては機動六課で一番と暗に言っているも同然である。

「すごいよ近藤さんは。ストライクアーツ使うらしいんだけど、もう達人の域なんじゃないかな？」

なのはの言葉にギンガは更に驚く。

近藤はなのはと離れ、スバルの所に行ってあれこれと指導していた。

シグナムやヴィータも近藤の話には興味津々のようで、真剣に聞いていた。

近藤のまわりにはいつの間にかフォワード４人が集まり、それぞれに攻撃の避け方等を指導していた。

エリオの場合、基本近接戦闘なので、有効な打撃、急所を把握しておくと戦闘が有利になる。

ティアナもクロスミラージュのモードツーはダガーモードであるため、近接戦闘が予想される。

なるべく避けたいが、それでも攻撃の防御、回避方法などは知って

おいて損はない。
キャロも同様である。後方支援とはいえ、敵が懐に入ってきた場合、その対処が必要である。

「キャロの場合は、逃げる事を前提で対峙しなきゃならない。だから、さっき言っていた関節や、神経への長期的ダメージを取るのはハイリスクになる。それより、顎や耳の裏なんかの三半気管への即効性のある攻撃の方がリスクは少ない」

近藤は地面に絵を描きながら説明する。
皆真剣に聴き入っている。
シグナムとヴィータはうんうんと頷いていた。
そこにティアナがはい、と挙手する。

「でも、近接戦闘ならば顎も関節もあまりリスクは変わらないのでは？」

近藤はティアナの頭を撫でる。
いきなりのことで驚くティアナだったが、大人しく撫でられ続ける。

「そうだな、ティアナやスバル、エリオもその攻撃のリスクは同じだと思う。けど、キャロの場合君達と比べかなり非力だ。そうなると関節などの急所への攻撃はかなり力を使い、最悪効かないということもある」

近藤に非力と言われ、キャロはしゅんと落ち込む。
近藤はそんなキャロの頭を優しく撫でる。

「勘違いしないで欲しいのは、俺はその攻撃で相手を倒せと言っているわけじゃないということだ。ティアナ、キャロは少しでも相手

との距離をとって、自分の土俵を確保するための一手段であるということを念頭に置いてくれ。・・・そうだな、今度相手の力を利用する方法をキャロに教えようかな」

キャロの顔がパァッと明るくなる。

「はい！お願いします！！」

「副隊長、私もお願いします！」

ティアナがハイハイとおもいっきり手を挙げてアピールする。

続いてエリオとスバルも、僕も私もとせがむ。

「なるほど、人体構造を把握して、急所を攻めて即効性のダメージを与える、か。うむ、理にかなっているな」

「しっかし恐ろしいな、お前は。その気になりゃ、素手で人間壊せるんじゃないか？」

シグナムとヴィータも感心しきりである。

ギンガはそんな光景を見て唖然としていた。

そして、こう思っていた。

・・・噂とは大分異なる・・・と。

「せっかくだから、ギンガも入れたチーム戦やってみよっか？フォワードチーム５人対前線隊長４人チーム！」

なのはが腰に手を当て言う。後ろに控えているフェイト、シグナム、ヴィータもやる気満々だ。

「・・・・・え？」

ギンガは耳を疑った。
何を言ったのだろうか、この人は？

「いや、あのねギン姉、これときどきやるの」

「隊長達、かなり本気でつぶしにきますので」

「まずは、地形や幻術を駆使して、何とか逃げ回って・・・」

「どんな手を使っても、決まった攻撃を入れることが出来れば撃墜になります」

フォワード４人の表情は諦めの色に染まっていた。
そして、ギンガは思った。

そりゃこんな無茶してたら強くなるな・・・と。

フォワード４人とギンガ対隊長４人の模擬戦が終わり、朝の訓練は終了となった。
それを端から見ていたシャーリーとマリエルはニコニコしていた。

「うん、みんな、いい感じの子達ね」

「エリオ達のほうですか？それともデバイスのほう？」

シャーリーが意地悪くマリエルに質問する。返ってくる答えはわかっているのに。
だが、マリエルはより一層の笑みを浮かべた。

「両方！」

シャーリーはわかっていた答えでもうれしくておもわず笑ってしまった。

「でも感激だわ！まさかあこがれの近藤さんに出会えるなんて！サインもしてもらったし！！」

マリエルの瞳はキラキラしていた。
白衣の背中部分には近藤のサインが小さく書かれていた。

「あ、あこがれ？」

シャーリーは少し引き気味だ。

「そうよ！彼のあの伝説の論文！私たちの本局技術部では彼はカリスマなのよ！」

「で、伝説ですか？」

シャーリーは首を傾げる。

「あら、あなたは知らないの？『デバイスと魔導士の融合とその有形、無形効果』」

「な、なんですか、それ？」

シャーリーはわけがわからなった。

マリエルのメガネの奥の瞳がキラリと光る。

「簡単に言うと、デバイスを『持つ』ということは、逆を言えばデバイスが手から離れれば魔導士はただの人間だということ。ならば、デバイスを最初から魔導士の体内に組み込んでしまえば敵に奪われることなく対処できるということなの」

マリエルは興奮気味にシャーリーに力説する。

そんなマリエルにシャーリーは引いたが、話の内容は興味があった。

なるほど、その発想はなかった。

確かに、デバイスは魔導士が持つ、装備するという外部武装である。

何かの拍子に手元から離れてしまえば、攻撃手段が無くなる。

だが、元から体内にデバイスを組み込んでいれば、その部分を切断でもされない限り攻撃手段が無くなるということはない。

それに、デバイスとの意思疎通も、視神経伝達により現在より攻撃や防御へ移行するタイムラグが少なくなる。

しかし、問題が発生する。

人間には異物が体内に混入すると拒否反応を起こし、その移植部分は壊死し、最悪死んでしまう。

その部分はどうするのだろうか？

近藤はこの論文では、デバイスにマスターの遺伝子を組み込めば解決すると書いている。
コストやリスクなどの面に問題があるが、この考えは戦闘機人の理論に似ている。
戦闘機人という存在を知っているマリエルはその対応策と、理論に感銘を受けたのだ。
今はわからないシャーリーも、いずれその考えにたどり着くだろう。

マリエルとシャーリーはデバイスやエリオ達、近藤の事で話の華を咲かせていた。

そこへ、ヴィヴィオがチョコチョコとなのは達の所へ走り寄ってきた。

「ママー！」

「ヴィヴィオー」

ヴィヴィオの声におもわず笑みを浮かべるなのは。

「危ないよー、転ばないでねー！」

「うん・・・あ」

フェイトがヴィヴィオに注意した。
途端、ベチョっとヴィヴィオはこけた。

「あ・・・」

フェイトはヴィヴィオに駆け寄ろうとしたが、なのはに手で止められる。

ヴィヴィオはゆっくり顔をあげた。

目に大粒の涙を溜めている。

「・・・ママ・・・」

「怪我してないよね？頑張って自分で立ってみようか？」」

「・・・ママ・・・」

なのははしゃがみ、手を広げた。

「うん、なのはママはここにいるから、おいで」

ヴィヴィオに自力で立ち上がるよう促しているのだが、ヴィヴィオはますます顔をくしゃくしゃにする。

そこへ、近藤が何を考えたのか、意外な行動をとった。

「ヴィーヴィーオ！ヴィーヴィーオ！！」

近藤は叫びながら手をパンパンと叩く。

「ヴィーヴィーオ！はい！ヴィーヴィーオ！！はい！！ほら、おまえたちも一緒にしろ！」

近藤の後ろで唖然としていたスバル達に、近藤は自分に続けと言う。

「ヴィーヴィーオ！ヴィーヴィーオ！！」

パン！パン！

「ヴィ・・・ヴィ～ヴィ～オ・・・」

ぺち、ぺち・・・

「ヴィ～ヴィ～オ～・・・」

ぺち、ぺち

スバル達は恥ずかしそうに近藤に続く。

叩く手も勢いがない。

「ハリーハリー！ヴィーヴィーオ！ヴィーヴィーオ！！ヘイ、ハリー！！」

近藤は大声でヴィヴィオにエールを送り続ける。

（たまに近藤はわけのわからん行動を取るな・・・）

（感心したら、これだ・・・ほんと、よくわからん奴だ）

シグナムとヴィータはため息をついて頭を押さえていた。

すると、ヴィヴィオの顔がみるみる赤くなっていく。
あげていた顔を俯かせ、プルプル震えだした。
フェイトは我慢できずヴィヴィオの元に駆け寄り、抱き上げる。

「もー、フェイトママちょっと甘いよー」

「なのはママは厳し過ぎです」

フェイトが少し怒ったような顔をなのはに向けた。

「フェイトママ、おろして」

ヴィヴィオがそう呟いたのでフェイトはヴィヴィオを降ろした。
すると、ヴィヴィオは近藤に向かって一直線に走っていき、近藤の足をポカポカと叩きだした。

「う～！う～～！！」

ヴィヴィオは顔を真っ赤にして唸りながら近藤の太股辺りをポカポカ叩き続ける。

「な、なんだ？どうしたんだ？」

近藤はヴィヴィオにポカポカ叩かれながら首を捻る。
どうもヴィヴィオは怒っているようだ。

「そりゃあ・・・ねえ・・・」

「私でも怒るよ、アレは」

ティアナとスバルが呆れていた。

「怒る？なんで？応援されたら元気出るだろ？」

近藤は本当にわからないようだ。

「・・・お父さん、アレは応援っていうより、からかってる感じでした」

「私も、あんなことされたら泣くかも・・・」

エリオとキャロも呆れ顔である。

「おおさまのバカー！！」

ヴィヴィオはずっとポカポカ叩いていた。

なのはとフェイトは生暖かい目でその光景を見ていた。

## 第５３話（後書き）

１ヶ月放置して申し訳ありませんでした。
これからはもう少しペースをあげていきます。
何卒よろしくお願いします。

# 第５４話

皆がそれぞれトレイを持ち、各々の食事を運んでいる。
ヴィヴィオも自分の食事は自分で運んでいた。
トレイの上にはオムライスがのっている。

「ヴィヴィオ、髪の毛可愛いね」

キャロがヴィヴィオの髪型を褒める。
ヴィヴィオの髪型は、小さいサイドポニーがされていた。
小さい時のなのはのようだった。

「なのはママのリボン！」

リボンは青色で、なのはがヴィヴィオにあげたものだった。

「アイナさんがしてくれたんだよね」

なのはは朝早くから仕事をしているため、ヴィヴィオにかまっている時間がない。
だから、普段は寮母のアイナ・トライトンに世話をお願いしている。
ヴィヴィオもアイナにはなついているのだ。
実は、アイナが機動六課で一番の年長者である。その次に近藤がいる。
まあ、例に漏れず全然３３歳に見えない若々しさであるが。

「いい感じだよ、ヴィヴィオ！」

「えへへ～」

スバルのも褒められ、ヴィヴィオは嬉しそうだ。

「なるほど、保護児童なのね」

マリエルはシャーリーに事の事情を聞いて納得していた。

「僕の時と同じような感じです」

エリオの手には巨大なサラダボールがあった。
これに驚かないマリエルは、スバルやギンガで耐性がついているのだろう。

「なのはさんが保護責任者、後見人がフェイトさんです」
シャーリーが補足をいれた。
最初、ヴィヴィオがなのはとフェイトの子供と聞いて、マリエルは少し変な想像をした。
まあ、二人の仲の良さを知っているだけに、しゃれにならない想像だった。
だが、事実を知ってしまえばどうということはなかった。

それぞれが別のテーブルで食事を採った。
はやて、シグナム、ヴィータ、リインⅠⅠでひとつ。ザフィーラはテーブルの近くで寝ている。
ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、ギンガでひとつ。
マリエル、シャーリー、近藤、エレノアでひとつ。
なのはとフェイト、ヴィヴィオでひとつという感じだ。

最初、フェイトは近藤と同じテーブルで食事を採ろうとしていたが、マリエルがデバイスやら魔法やらの話をじっくりしたいと言い出し、シャーリーがそれにノッた。
食事中にそんな小難しい話をされてもわからないため、フェイトは渋々近藤とは別のテーブル、つまり、なのはとヴィヴィオと共に食事をとることにした。
そして、近藤とマリエル、シャーリーは宣言通りなにやら難しい単語を羅列し、二人は目をキラキラとさせていた。

ヴィヴィオは嬉しそうにオムライスを口に運ぶ。

「よく噛んでね」

フェイトがヴィヴィオにそう言うと、ヴィヴィオもうんと頷き、もぐもぐ?み続ける。

そんな光景をティアナがやれやれといった感じでみていた。

「しっかし、子供って泣いたり笑ったりの切り替えが早いわよねー」

「スバルのちっちゃい頃もあんな感じだったよね」

ギンガも小さい頃のスバルを思い出したのか、ニコニコ笑いながらスバルを見た。

「え?そ、そうかな・・・」

小さい頃の記憶など大概の人間は覚えていない。

当然、スバルもあまり覚えていない。
覚えていない事を言われても、なんと反応すればいいかわからない。
ただ、ギンガにべったりだった事は覚えているようで、頬に手を当て、恥ずかしそうにしていた。

「リインちゃんも」

シャマルが、テーブルの上にいる小さな妹に目を向ける。
そこには、通常の人間サイズの皿の上に、通常の量の食事を、通常サイズのフォークを抱えている小人サイズのリインフォースＩＩがいた。

「え～！？リインははじめっから割と大人でしたー！！」

リインは侵害だといわんばかりにプリプリ怒った。

「嘘をつけ」

シグナムは呆れた表情言った。

「体はともかく、中身は赤ん坊だったじゃねーか」

逆に、ヴィータはニヤニヤしながら言った。

「う～、はやてちゃん！違いますよね！？」

リインＩＩははやてに助けを求めた。

「ふふ、どうやったかな？」

だが、はやてはニコニコ笑いながら曖昧な答えを返すだけだった。
リインＩＩはぷくーっと頬を膨らませ、ある事を思い出した。

「そういえば、エレノアお姉さまはどうだったですか？」

リインＩＩは別のテーブルのエレノアに向けた。
エレノアは食事に専念してるため、周りの声が聞こえない。
ガツガツかきこみ、頬がハムスターのようにパンパンに膨れ上がっていた。
一緒のテーブルで食べているマリエルとシャーリーも口をあんぐりと開けていた。

「ああ、映像記録あるけど、見るかい？」

エレノアの代わりに近藤がリインＩＩに応えた。
そう言うと、はやて達のテーブルにモニタが展開された。
そこには、エレノアの上半身が映し出されていた。

「・・・これは？」

シグナムは近藤に聞いてみた。

「これは、エレノアが目覚めた日の映像です」

シグナムやヴィータは驚いた。
何に驚いたかというと、映像と現在のエレノアのギャップにたいしてだ。
映像のエレノアは、目に光がなく、表情も乏しく、生気の無い人形のようだったのだ。
いまの天真爛漫なエレノアとは間逆である。

『Ｑｕｉｓ　ｅｇｏｍｅｔ　ｓｕｍ？　Ｕｎｄｅ　ｖｅｎｉｏ？　Ｑｕｏｑｕｅ　ｖａｄｏ？』

「・・・？い、今何て言うた？」

はやてが首を傾げた。

隣を見ると、シグナムやヴィータ、シャマルも言葉が聞き取れなかったようで、首を横に振っていた。

いままで魔法に携わっているとわかるのだが、ミッドの魔法や言語は英語に近く、ベルカの魔法はドイツの言語に似ている。

だから、ある程度の言語はわかるのだが、先程のエレノアの言葉はわからなかった。

「ああ、あれはアルハザードの言葉です。意味は『私自身は何者なのか？　どこから来るのか？　そしてどこへ行くのか？』ですね。このあとミッドの言語を教えました」

皆素直に驚いた。はじめてアルハザードの言語を聞いたことに感激していたのだ。

マリエルとシャーリーは目をキラキラさせていた。

「まあ、最初のエレノアはこんな感じです。で、次は１ヵ月後の記録です」

モニタの映像が変わる。

すると、先程の映像のエレノアより幾分かは表情がついたエレノアがいた。

それでも、まだ人形のように見えた。

『主よ、私はこの神戸ビーフというものが食べたい』

無表情で無理難題を言うエレノア。

「・・・なんでエレノアさんは神戸ビーフいう単語を知っとるんや？」

はやてが呆れながら近藤を見た。

「いえ、見聞を広めさせようとネットを使っていたらこんなことに・・・」

近藤は頭をガリガリかきながら釈明した。
この頃から食い意地が張っていたのか・・・恐るべし、ネット社会。

「あ、それで、この後、無限書庫に放り込んだんです、３ヶ月程。・・・で、その３ヵ月後が・・・」

近藤がコンソールを操作し、モニタの映像が切り替わった。
そこには、今のエレノアのような天真爛漫で、血色によい顔があった。

『ご主人様ー！エレノアのラブリーハートはご主人様の事を想うと萌え萌えキュンキュンなの～！』

「3ヶ月の間に何があった!?」

おもわずシグナムが立ち上がった。

「・・・さあ?」

近藤もわからないようだった。

そこへ、小休止していたエレノアがポツリと呟いた。

「ああ、それはね、『スクライア秘蔵本』というのと『クロノマイベスト』っていう棚を閲覧したからかな~?あの本はよかったよ~、男心がよくわかったもの!」

エレノアは腕を組んでウンウン頷いていた。

だが、ユーノ・スクライアとクロノ・ハラオウンという人物を知っている人にとって、その情報は二人の評価を下げる情報でしかなかった。

「・・・ユーノ君・・・」

なのはが顔を赤くして少し怒っておいた。

これでまた、二人の距離が縮まる日が遠のいた。

「クロノ・・・エイミイに報告しなきゃ」

フェイトも身内の恥を暴露され、顔を赤くしていた。

この怒りはキッチリ本人にわからせなければ。

フェイトの決心は固かった。

とりあえず、変な空気を振り払うかのように、各々食事を再開した。

ヴィヴィオはもうオムライスを食べ終わるようだったが、皿の上にあるものだけを除けていた。
少し表情も曖昧だ。
それに目ざとく気付いたのはなのはだった。

「あ、ヴィヴィオ、ダメだよ、ピーマン残しちゃ」

なのはが注意すると、ヴィヴィオは嫌そうな顔をした。

「う～苦いのきら～い」

ヴィヴィオは心底嫌そうだった。

「え？おいしいよ？」

「しっかりたべないと、大っきくなれないよ？」

フェイトもなのはも笑顔だが、ヴィヴィオがピーマンを残す事を許さない。

「う～～・・・」

「そやなー、好き嫌い多いと、ママ達みたいに美人になれへんよ～」

となりのテーブルからはやてが追い撃ちをかける。

「・・・だってさ。どうする？」

苦笑しているエリオの横でニンジンをエリオのスープの入ったカップに移そうとするキャロ。

「・・・いただきます」

キャロは渋々フォークに刺したニンジンを口に放り込んだ。

「あ、そういえば、お父さんは嫌いなものとかあるんですか？」

エリオは、別のテーブルで野菜ジュースを飲んでいた近藤に質問した。

「・・・甘いものはダメだな」

「あー、男の人ってそういうの多いですよね？でも、なんで甘いものがダメなんだろう？」

キャロは首を傾げ、考え込む。

「・・・実は小さい頃、リンディさんの作った緑茶に砂糖を入れた『アレ』を飲んでな・・・」

「あ～・・・」

なのはとエリオは納得した。
確かにアレはトラウマに成り兼ねない代物だ。
いっそのことロストロギアにしてくれてもいい。

「え？アレおいしいよ？」

フェイトのこの発言に、信じられないものを見るような目で見るなのはと近藤だった。

「ま、まあそれ以外ならなんでもイケるな。ていうか、いままで好き嫌いできる環境じゃなかったしな」

「環境？」

近藤の発言に疑問を抱くフェイト。
だが、すぐに理解した。

「観測指定世界やら無人世界やらで生活してると管理局から送られてくる食料が生命線なわけだけど、コイツが一人で全部食べるんだよ」

近藤はエレノアを指差す。
しかしエレノアは再び食べるのに必死のようで近藤達の会話に入らず、一心不乱にガツガツ掻き込んでいた。
また頬がハムスターのようにパンパンに膨らんでいる。

「だから現地調達してたなー。あ、知ってるか？竜の肉って鶏肉みたいでうまいんだぞ」

近藤がそういうと、テーブルの下で餌を食べていたフリードが震え

出す。

「きゅくる～」

「だ、大丈夫！私はフリードを食べたりしないから！！」

キャロが慌ててフリードを抱きしめた。

「・・・そうだな、フリードは最終手段の非常食だな」

「きゅい～！？」

近藤の言葉にフリードはガタガタ震えだす。冗談に聞こえなかったようだ。

「もう！お父さん！！」

キャロが近藤にぷんぷん怒り出す姿を見て、ティアナとスバルは苦笑していた。

そして、そんな近藤をギンガは睨んで見ていた。

「じゃあごめんね、ちょっとスバルとギンガ、お借りしていくわね」

「はい、よろしくお願いします」

マリエルがスバルとギンガを連れて外出する旨をなのはに言う。

スバルとギンガは定期健康診断の為にクラナガンの医療センターへ

マリエル同伴でいくのだ。

オフィスでは、スバルとティアナがデスクワークの引継ぎを行っていた。

「んー、たぶんこれで全部のはず」

「ま、見つからなかったら勝手に探すわよ。さっさと行ってきなさい」

「うん、ごめんね、ありがと」

スバルは健康診断の準備をするためにオフィスルームを去ろうとした。

そこへ、少し思いつめたような表情のティアナがスバルにあることを言った。

「あのさ、スバル」

「んー？」

「その、ギンガさんのことなんだけど・・・」

「なに？ギン姉がどうかした？」

スバルは歯切れの悪いティアナを見て首を傾げた。

いつもズバズバいうティアナらしくない。

「あの・・・近藤副隊長のことなんだけど・・・」

ティアナがそこまで言ってスバルはわかってしまった。

「・・・うん」

スバルの声のトーンも下がる。

「その、今日のギンガさん見てても、どうも近藤副隊長の『あの噂』を信じてるみたいで・・・」

ティアナは今日のギンガの態度をよく観察していた。
ギンガは、近藤を見ていたとき、睨んでいた。
おそらく、『あの噂』を鵜呑みにしている可能性が高いだろう。

「・・・わかった。わたし、ギン姉に誤解を解いておく！」

スバルは拳を握り、鼻息荒く了承した。
そんなスバルにフッと微笑むティアナ。

「頼んだわよ。あ、それとあんたが検診の時よく買って来てくれた・・・アレ」

「ああ、チョコポット？」

「あそうそう！あたしも出すから、隊長達やちびっ子達の分買ってきてあげてよ」

「りょーかい！」

スバルがオフィスルームを出て行った後、ティアナはモニタを見ながら考えに耽っていた。
それは、以前はやてと二人でＸＶ級大型次元航行船クラウディアへ行ったときのことだった。

その時、クロノともう一人、ヴェロッサ・アコース査察官がいた。
ヴェロッサは緑色の髪をロングにし、いかにも軽薄そうなイメージの人間だった。
話自体は今後の機動六課の在りよう等、確認のような内容だった。
だが、その後、廊下でティアナはヴェロッサと二人きりになった時、こんな事を聞かれた。

「近藤三尉はどうしているかな？」

査察官ほどの人物が近藤を名指しする事に驚いたが、その時のティアナはヴェロッサの言葉の裏まで探る事はできず、ただ事実のみを報告し、その内容にヴェロッサは苦笑していたのだ。
今思えば、ヴェロッサは近藤の事を探っていたのだ。

『あの噂』の真意を確かめるために。

もし、ティアナがヴェロッサに事の真相を全て話したとして、近藤の立場は変わっただろうか？
陸士１０８部隊との合同訓練のときに言われたようなことは無くなっていただろうか？

ティアナはモニタを眺めるでもなく、思考の海に潜っていた。

スバルとギンガは無事首都クラナガンの先端技術医療センターでの定期健診を終了し、二人はお土産のチョコポットを買いに来ていた。マリエルが車を取りにいっている待ち時間でもあった。

「ギン姉、お待たせー」

店の外で待っていたギンガは、スバルの声と共に入り口から出てきたスバルを見たが、持っている量に驚いた。

「また随分たくさん買ったわね」

ギンガは苦笑した。

「へへ、みんなの分！ギン姉、あーん」

スバルが口を開けるように言うので、ギンガは素直に口を開けた。すると、口の中に何かを放り込まれ、それを口に中で転がし、味を確かめた。

「おいしい！」

「えへへ」

ギンガの微笑みに、スバルも自然と笑みを浮かべた。

「でも、機動六課でスバルもティアナも皆生き生きしてて・・・なんだかうれしいな」

ギンガは素直にスバルの成長を喜んだ。

「まぁ、ときどき何かあったり、大変だったりもするけど・・・六課に呼んでもらえてよかった」

スバルも、今までの事を思い返し、改めて機動六課に来た事を喜んだ。

「親友と一緒なうえに、憧れの人のいる部隊だもんね」

「あ、ギン姉も私の目標なんだよ！もっと強くなって、いつか追いつくんだ！」

スバルの言葉にギンガは驚いた表情をしたが、少し意地悪な表情に変わった。

「ふふ、そう簡単には追いつかせないわよ！私も強くなるんだから」

「う～、私も頑張るもん！」

スバルはプンプンと頬を膨らませた。
そして、ある決意をしていた。
ギンガに近藤の誤解を解こうと。

「・・・あ、あのさ、ギン姉？」

「・・・スバル」

「・・・何？」

思い切ってギンガに話しかけたスバルは、ギンガに話の腰を折られて逆に聞く側に回ってしまった。
どうもスバルはギンガに弱い。

「この先多分・・・戦闘機人戦があると思うんだけど・・・」

ギンガは真剣な、しかし、張り詰めた表情をしていた。
自然とスバルの表情も硬くなる。

お互い言葉を発せず、無言の時間だけが経過していく。

ギンガは、張り詰めた表情から力を抜き、フッといつものやわらかい表情に戻った。

「・・・しっかりやろうね」

スバルもギンガにつられて硬い表情が柔らかくなり、自然と笑みを浮かべていた。

「大丈夫、私達には母さんが残してくれたリボルバーナックルがあるし、今はキャリバーズも一緒だし」

スバルはポケットからマッハキャリバーを取り出した。

《Ｃａｌｉｂｕｒｓ？》

「マッハとブリッツで『キャリバーズ』。マッハキャリバー、ブリッツのお姉さんだね」

ギンガもポケットからブリッツキャリバーを取り出し、お互いのデバイスを近づける。
そして、お互い、ふふっと笑いあう。
そこへ、パパーッとクラクションが鳴らされた。
それはマリエルの車だった。
マリエルが車をギンガたちの前に着け、スバルとギンガは車に乗り込み、機動六課へと戻った。
結局、スバルはギンガに近藤の誤解を解く事ができなかった。

スバルとギンガが機動六課に着き、ロビーを歩いていた時、丁度近藤が書類などを持って歩いていた。
スバルは恐る恐るギンガの顔を見た。
ギンガは近藤を睨んでいた。
スバルは顔を青ざめさせた。
姉妹であるスバルでも、ギンガのこんな顔を見ることは滅多にない。
その顔が目の前にあるのだ。
スバルは冷や汗をダラダラ流した。

近藤は定期健康診断から帰ってきた二人を見つけ、近寄った。

「お帰り。どうだった?」

近藤は睨んでくるギンガをなんとも思っていないようで、飄々としていた。
隣にいるスバルは気が気ではない。

「あ、は、はい。その、健康そのものです・・・」

「そうか、それはよかった」

近藤はニヤリと笑った。

ギンガはそんな近藤の笑みに一層不快感を募ったようで、眉間の皺が深くなる。

そして、ギンガは近藤に歩み寄り、一言、こう言った。

「近藤三等陸尉、いえ近藤副隊長、私と模擬戦をしてください」

# 第５５話

「近藤副隊長、私と模擬戦をしてください」

ギンガは定期検診から帰ってくるといきなりそう言った。

隣のスバルも驚いている。

「何故かな？」

近藤は特に驚くこともなく、普通に聞き返した。

「あなたはスバルに格闘技を指導していると聞きました。ならば、私にも一手御教授いただきたいのです」

ギンガは口ではこう言っているが、本音は異なる。

「俺が信用できない？」

近藤の口から出た言葉に、ギンガは少し驚きつつも、頷いた。

「・・・あなたの噂は聞いています。しかし、私は全ての噂を信じているわけではありません。だから、確かめたいんです、私自身が納得できるように」

「ギ、ギン姉！それは・・・」

スバルがギンガの言うことを否定しようとした。
しかし、それは近藤の手に制された。
近藤は首を横に振る。
スバルは声を出そうとしたが、ためらい、反論するのをやめた。

「では、明日の早朝訓練で」

ギンガは一礼し、素早くその場を去っていった。
スバルはギンガを追い掛けようか、近藤を問い詰めようか悩んだ。
近藤は何故止めたのだろう。
スバルも、いや、スバル達フォワード４人はギンガの言う噂というのはどういうものか知っている。
それは苦しい程に、悲しいほどに。

以前、陸士１０８部隊との合同訓練を行ったとき、その部隊の男性局員からしんじられない事を言われたのだ。

なのはとの事故の事は当然言われた。
しかし、更にとんでもないことを聞いてしまったのだ。

「近藤は自分の利益しか考えない最低の奴」

「過去にイロイロ横領なんかをして左遷させられた」

「ドゥーエ・マセラティ二尉を脅迫して無理矢理付き合わせている」

「機動六課への異動は裏工作」

「何人もの女性を泣かせ、ボロボロにして管理局をやめさせている」

などなど。

もっと直接的なヒドイ言葉を口にする人もいた。

それを聞いた４人は怒りに任せてその局員を殴り飛ばしそうになった。

だが、踏み止まった。

なぜなら、合同訓練を行う前に近藤に言われていたからである。

「他の局員が俺を何と言おうが、怒るな、反論するな、流せ」

最初、近藤が何を言っているのかわからなかった。

だが、もうわかった。

近藤は管理局内ではこんな評価なのか、と。

あることないことを全て近藤のせいにして、全て近藤が悪いように言っている。

我慢した。

近藤に怒るなと言われたから。

近藤に反論するなと言われたから。

近藤に流せと言われたから。

侮辱だ。

屈辱だ。

自分達の為に親身になってくれる人に、自分達の存在を肯定してく

れる人に、優しく、時に厳しく接してくれる人に、何故そんなことを言うのだ?

エリオとキャロは泣きそうな顔で俯いて我慢した。
スバルはきつく拳を握りすぎて、皮膚が破れ血が流れ落ちた。
ティアナは怒りをあらわに、唇を噛みしめ、震えていた。

その日のことは4人の心の中だけに留めた。
近藤本人に聞かせるわけにもいかないし、なのは達に報告して、負担をかけたくなかったからだ。

「近藤副隊長!どうして本当のことを言わないんですか!?」

スバルは我慢できずに近藤につかみ掛かった。
今にも泣きそうなその顔は、近藤の胸を締め付ける。
近藤はスバルの頭をポンポンと軽く叩く。

「前にも言っただろう、あれが俺の評価だ」

近藤は自嘲気味に笑う。

「でも嘘です!全部!!」

ああ、この子は何故そんなにまっすぐな瞳で近藤を見るのだろう。
近藤はため息をついた。

「世界ってのはな、敵がいないとダメなんだよ。何かを、誰かを敵にしていないと不安なんだ。敵という明確な悪を作り、そこへ思考を集中させ、他の不正を隠し、麻痺させる。自分達を上位に置き、正当化するんだ。それが一番楽でわかりやすいからな」

「・・・よくわかりません。でも、一つわかりました。・・・近藤副隊長は何も悪くないって！」

スバルは近藤の服をきつく握りしめ、涙をながす。

「目に見える悪」という明確な敵を作ることで、人は安心する。それは、他の「見えない悪」という不確かな敵を隠し、気付かないため、目を逸らすために、心の弱い人間はあえてその甘い餌に食いつき、納得する。
知らぬふりをする。
ごまかす。
敵を置き換える。

それが、近藤だった。
それだけの話。

それがスバルには我慢できない。
何故敵が必要なのだろう。
何故わざと悪を作るのだろう。
何故それが近藤副隊長なのだろう。
何故近藤副隊長はそれを甘受するのだろう。

何故

近藤副隊長は
そんな

近藤はしがみつくスバルの頭をただ撫で、天井を見上げた。
その瞳は何も映らず、何も見ていなかった。

翌朝、近藤とギンガは仮想シミュレータの中央で対峙していた。
なのは達も離れた位置から見守っている。
今日ははやてやリインフォースⅡも見に来ていた。
いつもは朝食時間まで寝ているエレノアまでいた。

ギンガはバリアジャケットを展開し、準備万端。
対して近藤は訓練時に着る黒いTシャツにカーゴパンツの姿だった。

「バリアジャケットは装着しないんですか？」

ギンガが少し睨むように近藤を見遣り、質問した。

「え？表面に魔法壁は展開してるよ。それに、わざわざ服装変わるのって恥ずかしいだろ。なんか意味あるか、それ？」

近藤がそう言うと、ギンガは目を逸らした。

同時に、なのは達も目を逸らした。

前日、スバルはひとしきり泣いたあと、近藤の言うことも聞かずにギンガに話した。
だが、ギンガは聞く耳を持たなかった。
ギンガもスバルと同様、良い意味でも悪い意味でも頑固でまっすぐな性格をしている。
まわりが何と言おうが、自分が納得するやり方で確認するのだ。

スバルはティアナ、エリオ、キャロにも相談した。
なのはやフェイトにも相談した。
きっとなのはなら、ギンガを止めてくれる、そう思ったからだ。
だが、なのはの言葉は意外なものだった。

「近藤さんにまかせよう」

ギンガは自分達が何を言っても納得しない。ならば、気の済むように、近藤との模擬戦をやらせるという。
近藤も承諾したのだから、何か考えがあるのだろう、ということだった。
なのはがそんな事を言った事に驚いたが、フェイトまでもがなのはの意見に賛同したという事に驚きを隠せなかった。
スバル達は渋々納得し、今朝を迎えたのだ。

近藤とギンガはおよそ１０メートル程離れている。

近藤は少し声を大きくだした。

「ナカジマ陸曹、君は自分が納得したいから模擬戦をするんだな？」

近藤の質問にギンガは頷いた。

「そうか。だが、言っておこう。俺は君が納得しようがしまいが関係ない。俺を嫌うのも好きにしろ。しかし、この模擬戦で君は納得できる戦いはできない」

近藤の挑発にギンガの眉がピクリと動く。

「・・・どういう意味でしょうか」

ギンガの視線がだんだん厳しいものになっていく。

「そのままの意味だ。君は一瞬で倒れる」

ギンガは怒りに震え、ファイティングポーズをとった。

「なら！その実力、見せていただきましょうか！！」

ギンガの掛け声が戦闘開始の合図となった。

「そうしよう」

近藤の声がギンガの耳元で聞こえた。

近藤はいつの間にかギンガの目の前にいた。

１０メートルという距離を、予備動作も無しに、唐突に近藤は一瞬にしてゼロにした。

近藤の『魔法ではない能力』の一つ『空間短縮移動』である。

「えっ？」

ギンガが小さく驚きの声を出した瞬間、近藤とギンガを中心に光り輝いた。

「うわっ！？」

いきなりの光りになのは達は驚く。
カメラのフラッシュを焚かれたように、目が眩む。
しばらくして視覚が戻り、近藤とギンガを見た。

そこには、ギンガが血を吐いて倒れ、それを近藤が見下ろしていた。

あまりに突然な出来事に皆状況が把握できずに固まる。
やがて、いち早くスバルが現状を理解した。

「ギン姉ー！！」

スバルは急いでギンガのところに駆け寄った。

「がふっ・・・ごほっ、けほっ」

ギンガは咳込み、口から血が飛び散る。
どうやら意識はあるようで、自力で体を起こそうとしていた。
スバルはそんなギンガを補助し、ギンガの状態を確認する。
外傷は見当たらない。
しかし、血を吐き苦しそうにしている。

「どうだ、言った通りだろう?」

近藤は冷たく言い放ち、ギンガを見下ろした。
スバルは思わず近藤を睨んだ。

「・・・スバル、いいの」

ギンガはスバルの補助を受けながら弱々しく立ち上がる。
息遣いが荒く、流れ出る血を拭う。

近藤はギンガを無言で見つめ、ギンガも近藤を見遣る。

「ありがとうございました」

ギンガは礼をし、スバルの補助を受けながらその場を後にした。

近藤は一人ポツンと佇む。
そこへ、離れて見ていたなのは達が駆け寄ってきた。

「一体何をした?」

シグナムが近藤を鋭い視線を向ける。

「・・・ご主人様、初めて使うにしては少しやり過ぎじゃない？アレは内臓にすごい負担がかかる術でしょ？」

エレノアは少し困ったような顔で近藤を見ながら咎める。
その言葉が聞き捨てならないものだった。

「内臓に負担って・・・ギンガが血を吐いてたのは、もしかして内臓を傷つけたからか？どんな方法なんだそれ」

ヴィータは驚きながらも近藤に聞かずにはいられなかった。
しかし、それはとても単純で、とても恐ろしく、考えられないことだった。

近藤は拳を握り、右腕をゆっくり前に出す。

「拳を繰り出し、相手と接触して拳の前に魔法を放ち炸裂させる。それだけです」

近藤の右拳の前にスフィアが形成された。

はやてはそれを見て驚愕する。

「まさか・・・ギンガの体内で魔法作ったんか！？」

はやてが叫ぶ。
なのはやフェイトも取り乱すが、シグナムは冷静だった。

「待て、それは不可能だ。近藤、お前も知っているだろう。他人の体内では魔法を形成することはできん。でなければ、バリアジャケットやプロテクションの意味がない」

そう、魔法構築の根本である。

たとえ、相手と超至近距離にいたとして、そこから魔法を形成、砲撃をしようとしても、相手の体内ではなく、体外で発生する。

そもそも、魔法は例外を除き体外からの魔法を体内に受け付けないようになっている。

そういう風に構築できないようになっている。

ユニゾンにしても、魔力の底上げや補助という魔力の混合ということで、別にユニゾンデバイスを物理的に体内に取り込むということではない。

だから、近藤の言うことには矛盾があるのだ。

しかし、そんな「基本」など近藤には無意味だ。

「魔術構築の基礎理論がそうなっているならば、基礎を見直し、修正すればいい」

ようするに、魔法の構築する基礎理論で他人の体内に魔法を展開できないようになっているならば、その基礎理論を見直し、修正、改正し出来るようにすればいいというのだ。

だが、この考えをいままでの魔導士、科学者が考えなかったはずがない。

当然、何百年とかけ、結果たどり着けなかったのだ。

それを近藤はいとも簡単にたどりついてしまった。

そこにはアルハザードの知識があるわけだが。

とんでもないことだ、これは。

近藤が至近距離で魔法を展開すれば、バリアジャケットが意味をなさないのだ。
ということは、と、なのは達は顔を青ざめさせる。

「非殺傷設定が通用しないということか」

シグナムは近藤を睨む。
それは、怒りではない。
恐怖である。
近藤の前では、どんな防御も意味は無く、いつでも相手の命を握り潰すことができるのだ。
戦う前から近藤の勝利が決定された戦い。
それがどれ程恐ろしく、つまらないことか。

だが、今はそれはどうでもいい。
シグナムは近藤の胸倉につかみ掛かる。

「何故そんな危険な力をギンガに使った!!」

そう、仲間であるギンガに対し、近藤は危険な技を使ったのだ。
ギンガの命を危険に晒すような技を何故使う必要があったのか。
だが、シグナムの怒りにも、近藤は冷静だった。

「それが俺だからです」

「何?」

「ちょっ!?シグナム落ち着こう!とりあえず手ぇ離そ、な?」

はやてが近藤とシグナムの間に割り込む。

シグナムは素直に掴んでいた近藤の服を離した。
はやてはシグナムを近藤から離し、近藤を問い詰めた。

「私らが納得できる理由、あるんやろ？」

近藤はため息をついた。

ギンガとスバルはメディカルルームに行き、シャマルとマリエルから治療を受けた。
ギンガの怪我は、出血のわりには内臓の損傷はさほどなく、一日安静にし、しばらく食事に気をつければすぐに治るという。
ギンガは大事をとり、ベッドに横になっていた。

「大丈夫、ギン姉？」

スバルはギンガの寝るベッドを心配そうに覗く。
ギンガはクスリと笑った。

「大丈夫よ。シャマル先生とマリーさんも言ってたでしょ、安静にしていればすぐ治るって」

「でも・・・」

スバルはギンガの言うことが信用できない。
無理もない、あれだけ吐血したのだ。
心配するなというほうが難しい。

「近藤さんも手加減してくれたし、ね」

スバルはギンガの言葉に耳を疑った。

「手加減？」

「そ、手加減。それに、私が倒れる前に小声で『すまない』って謝られたし、倒れる時に怪我しないように抱き抱えられたし」

実際近藤は手加減をした。

本来あの攻撃は連撃で行うもので、しかも近藤の使用した魔法は極微量で振動を起こす程度のものだった。

だから、ギンガが吐血したのは近藤にとっても誤算だったのだ。

もし、近藤が本気を出したら、ギンガの内臓はズタズタになり、即死していただろう。

まさに悪魔の魔法である。

スバルはその言葉で思い出した。

「あの、ギン姉？近藤副隊長のことなんだけど・・・」

そう、近藤の誤解を説かなければ。

だが、どう言おう？

フォローその１

本当は優しいんだよ！

・・・ダメだ、怪我させておいて、説得力がない。

その２
おいしいスイーツをいっぱい持ってきてくれるよ！
・・・食い意地張ってるみたいじゃないか！

その３
眼帯カッコイイでしょ？
・・・あまりフォローになっていない気がする。

うぅ・・・思い付かない・・・
スバルが頭を抱えて悩んでいると、ギンガはクスクス笑い出した。
「わかってる。近藤さんは噂されてるような人じゃないって事は」
「あ・・・」

ギンガの言葉にスバルはホッとした。
だけど、どうしてこんなに近藤副隊長のイメージが切り替わったんだろう？

「昨日から見てたもの。あなた達があんなにイキイキとして、信頼して、慕って。なのはさん達もすごく信頼してたみたいだし」
「じゃあ・・・」

なんで模擬戦なんかしたの？
スバルがギンガに聞こうとした。

「やっぱり、自分で確かめたかったのかな・・・」

ギンガは言う。

「そして、近藤さんの実力を知りたかったの。なのはさんに言われてびっくりしたのよ？近藤さんがスバルの格闘技指導をしてるって聞いて」

ギンガは部屋の天井を見つめ、思い返した。
近藤と対峙したときのことを。
構えをとっていないのに、あのプレッシャー。あの圧倒的存在感。
自分では勝てないと思ってしまった。
それでも、一矢報いたいと思っていたが、結果はこれだ。

自分もまだまだ修業が足りないと痛感した。

だが、とギンガは思い返す。
あの危険な攻撃は、わざとしたのではないか？
自分を悪く見せるために、世間のイメージ通りの人間だとアピールするかのように。
でなければ、倒れる前に『すまない』などと詫びをいれないだろうし、倒れる時に危なくないように抱きかかえたりもしないだろう。

「ギン姉？」

いつの間にか思考の海に潜り込んでいたギンガは、スバルに呼ばれ

てはっとした。

「あ・・・ごめんなさい、考え事してたわ」

「近藤副隊長のこと？」

スバルがギンガの心を見透かすような発言にクスリと笑い、ええ、と返事した。

すると、スバルは笑顔になり、近藤の事を話し出した。

「近藤副隊長って、普段は無口だけど、怒ると凄く怖いんだよ！前に私となのはさんとティアが怒られてゲンコツもらったんだよ！！痛かったな～あれ！」

ギンガは、すごく嬉しそうに近藤の事を話すスバルを見て、思わず笑ってしまう。

「それに、副隊長って怖い話いっぱい知ってるんだ！あまりにも怖くて、なのはさんなんか泣いちゃったし！あとあと・・・」

「ふふっ、あらあら、そう」

自分の事のように話すスバルはとてもイキイキとしていて、微笑みを絶やすことなく、メディカルルームはずっとスバルの声と、ギンガの笑い声が聞こえていた。

「・・・つまり、わざと嫌われるような事をしたということか？」

近藤は事情をなのは達にはなした。

すると、皆が近藤をジト目で見ていた。

「なんでそんな面倒臭いことするんや。ええやんか、好かれても」

はやてはため息混じりに言う。

だが、それは違うと近藤は反論する。

「いいですか。ナカジマ陸曹の初めの態度を覚えてるでしょう？アレが本来俺に対する大多数の反応なんです。ココの人達の俺に対する対応の方がおかしいんですよ？」

「はぁ？なんだそりゃ？」

ヴィータは、初めの態度と言われ、思い出す。

確か、最初の顔見せのとき、ギンガは近藤を睨んでいた。

「ティアナ達も、先日の１０８部隊との合同訓練のとき、他の局員から俺の事を聞いているはずだ」

近藤にそう言われ、ティアナ達はその時の事を思い出し、苦い顔になった。

「・・・何、それ？」

なのはは知らない。合同訓練の時、ヴィータと共に同伴し、１０８部隊の人と話をしたが、その時近藤の名前など一言も出てきていなかった。

「何言われた？」

「・・・・・・」

ヴィータがティアナに聞いた。
だが、ティアナは答えない。
悔しそうに顔を歪め、俯き、口を開かない。

エリオとキャロも、俯き喋ろうとしなかった。

しばらくして、ティアナが空を見上げ、大きく深呼吸した。
そして、他の局員に言われたことを、ポツポツと話した。

「・・・なんやねん、それ」

「ひどいです・・・」

はやてはワナワナと肩を震えさせ、リインＩＩも悲しそうな顔をしていた。
なんだその評価は！？
あることないこと全て近藤の責任にし、全て近藤が悪いと、決め付け、なすりつけ、正当化する。
それが管理局員のすることか？

「・・・最低だっ！」

ヴィータも怒りのあまり、顔を赤くしていた。

「管理局の不満をわかりやすい別の『悪』を作りだすことにより、矛先をそちらへ向ける。そうすればその『悪』には勝手に尾鰭がつき、いつの間にか関係ない全ての『悪』が本当の『悪』になっている、か。・・・腐っているな」

シグナムも眉間に皺をよせ、不快感をあらわにしている。

元々、近藤はその手の話題に事欠かない。
なのはとの事を発端に、左遷され、体のいい晒しものになったからだ。
恰好の的である。

なのはにはそれが耐えられなかった。
自分のせいで、近藤は酷い扱いを受けている。
自分の知らないところで、近藤は辛い思いをしている。

「・・・わたし、は・・・」

なのはは顔を苦痛に歪めた。
自分の心が悲鳴をあげる。
泣いてしまいたい。
だが、今自分が泣くということは、近藤に同情していることになる。
これは近藤にとって侮辱である。
だからなのはは泣かない。
代わりに、手を強く握り締めすぎたので、爪が手の皮を破り、血が出ていた。

近藤はなのはを許すと言った。

それで、全て終わったと思っていた。
確かに自分達は終わった。
だが、自分達以外は終わっていなかった。
いつまで近藤はこんなに辛い思いをしなければならないのだろう。
何も知らなかった自分が許せなくて、我慢できなくて、情けなくて、
くやしくて、なのははただ、苦しむことしかできなかった。

フェイトやティアナ、エリオ、キャロも同じ思いのようで、今にも
泣きそうな顔をしている。
そんな皆を見て、エレノアは苦笑した。

「随分好かれましたね、ご主人様？」

近藤はため息をついた。

「それで、もしナカジマ陸曹が隊長達のように『真実』を知ったとしましょう。社交性もある彼女が外で俺の悪評を聞いたらどうします？彼女は正義感が強いようだし、逆に精神に負担をかけてしまいます。最悪、心が『壊れる』」

近藤はそう言いつつ、苦しそうに顔を歪めているティアナの頭を撫でてやる。
ティアナ達フォワードは機動六課に配属される前、良くも悪くも近藤の悪評を聞いていなかった。
だから、近藤の『素』しか知らない。
なのに、一歩外へでれば、近藤の評価は真逆、いや最悪だった。
これは精神的にかなり堪える。
あらかじめ言い含めていたが、それでも辛い思いをしたのには違いない。

「すまなかったな」

近藤は申し訳なさそうな顔をして謝る。
そして、エリオとキャロの頭も撫でた。

「近藤の言い分もわかる。ギンガの為に、敢えて悪評通りに振る舞ったということだろう？・・・しかしな・・・」

シグナムも理解はしている。だが、納得できない。
そもそも、近藤に否はないのだ。
シグナムの眉間は、より深い皺を作りだし、苦痛を耐えるかのようだった。

「・・・言っておきますが、俺はそんな評価をうけようが、悪に仕立て上げられようが、気にしていません。
これは『必要悪』ですから。
それに、前にも言いましたよね、嫌われるのには馴れているって」

必要悪

言うのは簡単な言葉だ。

だが、あくまで近藤は客観的に言う。
自分の事を他人事のように言う。
近藤が自分のことを話すとき、その表情はいつも無表情だった。
怒りも、悲しみも、なんの感情も伺えない。

その目には、何も映っていないようで、瞳には輝きがなかった。

なのはは、はやては、そんな近藤が見ていられなかった。

シグナムとヴィータは近藤に危うさを覚えた。

ティアナ、エリオ、キャロは近藤の言うことが理解できなかった。

そして、フェイトには、そんな近藤が我慢できなかった。

フェイトはツカツカと近藤に近寄り、近藤の前に立った。

そして、おもむろにフェイトは顔を近づけ

近藤と唇を重ねた。

近藤のほうがフェイトより身長が高いため、フェイトが少し背伸びする形になる。

いきなりのことで、周囲の時間が止まった。

3秒ほど唇を重ね、フェイトは重ねた唇を離し、真っ赤な顔で近藤に言った。

手は唇に当て、感触を確認するように、口づけが事実であった事を確認するようにゆっくり触る。

「・・・前に言ったはずです。嫌われるのに馴れているなんて二度と言わないでって」

なのは達はいまだ固まっている。
口があんぐりと開いていた。美人が台無しである。

「こ、今度、またそんなこと言ったら、また私が口を塞ぎますからね！！」

ヤケクソ気味に叫び、その声が止まっていたなのは達の時間を再び動かした。
先程までの重苦しい雰囲気が霧散してしまった。
代わりにあるのは、桃色スイーツな甘酸っぱい世界である。

「キャーッ！フェイトちゃんたら朝っぱらからだいたーん！！」

はやてが頬に手を当て黄色い声をあげた。

「アグレッシブですぅ！」

リインＩＩもキャーキャー叫ぶ。

「・・・大人だ」

ヴィータは感心していた。

「うむ、その意気やよし！だが、時と場所を考えろ」

シグナムは顔を赤くしてフェイトに注意する。
意外と初心（うぶ）である。

「フェイトちゃん、行動が唐突過ぎてビックリするよ・・・」

泣きそうになっていたなのはも、流れかけていた涙が全速力で引っ込み、顔を真っ赤にし、火照った頬を手で冷やす。

エリオとキャロも顔を真っ赤にしてフェイトと近藤を交互に見遣る。
ティアナは若干黒いオーラを漂わせていた。

いきなりのことに驚いていた近藤だったが、顔を真っ赤にしているフェイトを見て、フッと笑った。

「・・・なるほど。では、キスをしてもらうために毎日言った方がいいのかな？」

「・・・っ！？・・・ばか・・・」

近藤のいたずらっぽい笑みと言葉に、フェイトは耳や首まで赤くして、ぷいっとソッポを向き小さく呟いた。

そして、エレノアはそんなフェイトを黙って見過ごすはずもなく、ニヤリと三日月のような笑みを浮かべた。
あっ、悪魔のしっぽだ！

「にゅふふ～！エリオくん、キャロちゃん、もしかしたら近いうちに弟か妹が増えるかもよ？」

「え！？本当ですか！？」

「私、妹がいいです！だからガンバってください！！」

何も知らない無垢な天使達は無邪気に喜ぶ。キャロはなんとなく知ってるっぽいが。

知っている大人は、顔を真っ赤にしていた。

「・・・飛躍しすぎやで、エレノアさん」

「・・・姉上、えっちなのはいけないと思います」

「しかも、まだ早朝だぜ？姉ちゃんのそのテンションに引くわ・・・」

「はやてちゃん、ちゅーしたら子供ができるですか？」

八神家の皆さんは純真無垢なリインＩＩにどう説明するか、緊急会議を開いた。

「相変わらずエレノアさんは引っ掻き回すなー・・・」

なのはは呆れていた。

だが、彼女も年頃の女性、なにやらイロイロ想像したようで、赤い顔が、より朱くなっていた。

そして、ティアナはというと・・・

「・・・そうか、妊娠して既成事実作ればいいんだ・・・」

なにやら黒いことをブツブツ呟いていた。

そんな空気にフェイトが耐えられるはずもなく、プルプル震え、走ってその場から逃げた。

「近藤さんのバカー！！エロエロ魔神ー！！」

「え!?俺のせいですか!?」

結局、最後はエレノアの余計な一言で無茶苦茶になってしまった。

翌日、ギンガは近藤にニコニコ顔で挨拶してきた。

「これからも、ご指導よろしくお願いします!」

横ではスバルも向日葵のような笑顔だった。

近藤の『嫌われる作戦』は無駄に終わった。

後日、近藤がギンガとの模擬戦で使用した『すり抜け魔法（命名：近藤）』は禁止となった。

もともと実験程度に考えていたので、言われずとも二度と使うことはないだろう。

「おまえな、もっとそれらしいカッコイイ名前つけろよ・・・あいかわらずダセーネーミングセンスだな」

ヴィータが呆れかえっている。

「しかし、なんとも恐ろしい魔法だな。敵が使用してきたらと思うとゾッとしないな」

シグナムも腕を組んで難しい顔をしていた。

「ああ、実はあの魔法はそれ程脅威ではないんですよ」

近藤はしれっとそんな事を言った。

「アレは、あくまで対象との接触が前提ですから。それに、魔法構築の基礎理論は現在の凝り固まった考えでは変更不可能です。構築改造をするにはそれ相応のリスクが伴いますし、魔法の演算にとんでもない時間がかかりますし、とてもじゃないですけど実用化できません」

「でも、近藤さんは使こうてたやんか？」

はやても近藤に質問する。

「あれは、俺の目に入っているデバイスコアに演算をしてもらってるんです。それに、魔法構築改造理論を公表しようとは思っていませんし、ナカジマ陸曹と戦う前からもうスタンバイしてましたし」

「うわ、ずるだ！」

「ずるじゃない！用意周到です！！」

「モノはいいようだね・・・」

「くうっ！？」

フェイトの非難と、なのはの呆れ声に近藤のガラスハートにヒビが

入る。

「ちなみに、構築時間ってどれくらいかかるん？」

はやては興味深々のようだ。

「えーと、すり抜け魔法一回使用につき普通に構築したら・・・３０分くらいかな？」

「あ、あかんわそりゃ。時間かかりすぎや。全然実用的やない」

はやては手をパタパタ振った。

近藤はすごい魔法や理論を色々使うが、所々に穴があり、どう評価していいものか考えあぐねていた。

「あ、いい名前思いついた！！」

エレノアがピコーンとなにやら閃いたようだ。

「何ですか、お姉さま？」

リインＩＩは興味津々だ。

そして、エレノアは自信満々にこう言った。

「瞬獄殺！！」

「・・・洒落にならんわ、それは・・・」

はやて達はドン引きした。

## 第５５話（後書き）

えー、補足説明です。
『瞬獄殺』のことです。

皆さん瞬獄殺知ってますよね？
ストリートファイターシリーズで、「ゴウキ」が使う必殺技です。
「殺意の波動に目覚めたリュウ」も使います。

中平正彦先生の描かれた『ストリートファイター？　ＲＹＵ　ＦＩＮＡＬ　－闘いの先に－』にて、瞬獄殺の説明がなされています。

それによると、瞬獄殺とは、無数に繰り出される拳撃がインパクトの瞬間、体内で波動拳を放ち炸裂させるというものです。

何故いままで超至近距離で『飛ぶ攻撃』を繰り出した時に、相手の体内で発生せず、ギリギリ体外で発生していたのか？と疑問に思っていたものの答えの一つだと思っています。

面白いから見てみてください。

ではまたー！

## 第５６話（前書き）

今回から少しだけまた日常編に戻ります。

中身のない話ですが、楽しんでいただけると幸いです。

# 第５６話

午前５時

日はまだ昇っておらず、薄暗い。
皆まだ夢の中にいる時間である。
しかし、この機動六課には、こんな早朝にも関わらず目をギラギラに輝かせている人物が二人いた。

我慢できないのか、二人は夢遊病者のようにフラフラとある部屋のドアの前まで行き、ドンドンドン！とドアをたたき出した。

当然、当の部屋の住人はそんなけたたましい音に驚き起きる。

（またか・・・）

住人はため息をつき、頭をガリガリかいた。
そして、欠伸をしながらドアをあけた。
そこには、目をギラギラと輝かせ、落ち着き無くソワソワしている二人が目の前にいた。

「なぁ近藤、早くいこうぜ！」

それは、顔を上気させ、エサを貰う前の犬のようにキラキラソワソワしている我等が機動六課のスターズ分隊副隊長であるヴィータと

「副隊長！私、もう我慢できません！！」

同じく目をキラキラ輝かせ、オアズケをくらった犬のように舌を出し、ハァハァ言っているスターズ分隊フロントアタッカーのスバル・ナカジマが近藤の部屋の前にいた。

近藤はため息をついた。

これで何回目だろうか？

１０回以降は数えていないが、近藤はうんざりしていた。

「あのね、今はまだ朝の５時ですよ？試食会は１１時からです。今から行っても仕方がないでしょう。何度も言ってるでしょうが」

「店長起こせ！」

近藤の注意に対し、理不尽な提案、いや命令するヴィータ。

「無茶言わんでくださいよ」

「恋する私はせつなくて、アイスのことをかんがえたら・・・あああっ！！」

スバルがよくわからない事を口走り、床に座り込んだ。

まだハァハァ言っている。

「・・・とにかく、試食会は１１時からです。それまで大人しくしていてください」

「ええ～！？」

ヴィータとスバルは不満タラタラである。

何故この二人がこんなにしまりなく、しかも興奮しているのか？

それは3日前のメールから始まった。

そう、3日前に一通のメールが近藤に届いたのだ。

その贈り主は、今をときめくアイスクリーム店『Ｖｏｌｅｎｔｉｅｒｉ（よろこんで）』の店長からだった。

『　拝啓近藤様

お久しぶりです。

しばらくお会いしておらず、淋しく思っております。

お加減はいかがでしょうか。

さて、わたくしの経営する店も多くのお客様に慕っていただき安定しております。

そこで、近いうちに新作を発表したいと考えております。

つきましては、今度の定休日に新作の試食会を設けます。

近藤様にも参加していただきたいと思っております。

もちろん、お友達や同僚を呼んでいただいて構いません。

様々な意見を聞きたいので大歓迎です。

良いお返事お待ちしております。

イズミ・シロッコ　』

三日後は特に用事も無かったので、近藤はとりあえずフェイトに話した。

「へぇ、すごいじゃないですか。ソコって有名なアイスクリーム屋さんでしょ？いいんじゃないですか、行ってきても？」

フェイトは素直に感心し、試食会参加を許可した。

「それでですね、よりイロイロな意見を聞きたいということで、何人か連れていきたいんですけど・・・」

と近藤が言ったことで、なんと前線メンバー全員にはやて、リインフォースツヴァイ、ヴィヴィオ、ギンガ、エレノアと、機動六課の

主要人物全員が行くことになった。
アルトやルキノも行きたがっていたが、どうしても手が離せない用事があるようで不参加となった。
主要人物全員が機動六課からいなくなって大丈夫なのだろうか？
最初、なのはは試食会参加を断っていたのだが、ヴィヴィオがどうしても「なのはママと行きたい！」とダダをこね、渋々参加となった。
何故なのはが試食会参加を断っていたのかというと・・・
「なんだよスバル！おめーは留守番してろよ！この前アイス食ったんだろ！！」
「前回のと今回のは別です！ノーカンです！リセットです！！」
・・・とまぁ、ヴィータとスバルの口論でわかるように、以前近藤の好意により、なのは、スバル、ヴィヴィオとエレノアはこの有名アイスを自分達だけで食べていたのだ。
そのことに若干引け目を感じていたなのはは最初断っていたのだ。
そして、フェイトも最初はそんなに試食会参加に対して乗り気ではなかったのだが、近藤がアルトとルキノの代わりに、よりにもよってオーリスとドゥーエに声をかけたのだ。
当然二人が近藤の誘いを断るわけもなく、参加となった。
冗談じゃない！
近藤に付く悪い虫は駆除しなければならない！
フェイトは皆とは別の理由による参加だったのだ。

「あんまり喧嘩するなら二人は留守番にしますよ？」

近藤は呆れながらヴィータとスバルに注意した。

スバルはすぐに自分の口を押さえ、首を横にブンブン振り反省したが、ヴィータは近藤に食ってかかった。

「なんだよ！あたしらだけじゃなくてオーリス三佐やマセラティ二尉、ギンガまで呼びやがって！なんだ？乳か！やっぱてめーは乳がいいのか！！」

ヴィータがよくわからない事を言い出した。

確かにドゥーエは制服の上からでもわかる豊満な胸の持ち主であるし、オーリスも実は着痩せするタイプで、なかなかのモノをもっている。

ギンガは言わずもがなである。

「・・・言っている意味がわかりません」

近藤は嫉妬するフェイトに手の甲をつねられ、痛そうなそぶりを見せなかったが、とにかく否定しておかないと後々の関係に支障をきたすと思い、とぼけるフリをした。

「こらヴィータ、あんまり近藤さん困らせたらアカンで」

はやてがヴィータにめっと注意する。

さすがにヴィータもシュンとなる。

「で、でもさー、はやて～」

ヴィータは未だに前回自分がのけ者にされたことを根に持っているようだ。

ヴィータははやてに怒られ落ち着いたように思えた。

だが、ここから3日間が近藤にとって地獄だった。

「なぁ、近藤。もういこうぜ！」

ヴィータが近藤の制服の袖を掴み、催促する。

「あの・・・試食会は3日後ですよ？今行ってどうするんですか？」

「徹夜で並ぶんだよ！」

ヴィータが目をキラキラさせてそんなことを言う。

自分がどれだけ無茶苦茶な事を言っているのか理解できていないらしい。

「副隊長！早く食べたいですね～！」

スバルが近藤と組み手をしながら口走る。
ニヤニヤと締まらない顔に、涎を垂らしている。
近藤は呆れていた。
もう頭の中にはアイスの事しかないようだ。
繰り出す攻撃に全然気迫が感じられない。

「こらスバル！ちゃんと気合い入れてやりなさいよ！近藤副隊長に失礼でしょ！！」

見兼ねたティアナがスバルを注意するが、スバルには効かなかった。

「だって～新作だよ？ティアも食べたいでしょ？」

「う・・・ま、まぁ・・・食べたいけど・・・」

ティアナはスバルのアイス愛に負けた。
近藤はため息を吐いた。
そんな横で、ギンガはニコニコとスバルを見ていた。

「あらあら、まあまあ」

なにやらわが子を見る母親のようである。

「なぁ近藤、早くいこうぜ！！」

「副隊長～早く食べたいです～」

「なあ近藤！！」

「ねえ副隊長！！」

「近藤！！」

「副隊長！！」

・・・こんなやり取りをヴィータとスバルは3日間近藤に繰り返した。

終いには、宿舎にまで乗り込んで来て催促する始末。

いい加減、近藤も二人のしつこさにウンザリしていた。

そして、いつも一緒にいるはずのエレノアも、二人のしつこい催促により睡眠不足に陥り、ついには宿舎の空き部屋で近藤とは別に寝るようになった。

「アイス～アイス～ア・イ・ス～！」

「新作～新作～うふふふふ～！」

即興の歌を歌いながらスキップするヴィータとスバル。

そんな二人を余所に、近藤は疲れた顔をしていた。

二人の睡眠妨害により、目の下にクマができていた。

「ご、ごめんな～近藤さん。ヴィータには注意しとるんやけど・・・」

「いつの間にかいなくなり、近藤の所に行っているのだ・・・本当にスマン」

はやてとシグナムが申し訳なさそうに近藤に謝る。

「副隊長、私もスバルを止められなくて・・・すいませんでした」

ティアナが頭を下げる。

「その・・・近藤さん、妹が迷惑をかけて、申し訳ありません」

ギンガもひたすらペコペコと頭を下げる。

それに対し、近藤は手をヒラヒラと上げてなんでもないと意思表示する。

「・・・まぁ、今日までの我慢ですから」

ハハハ・・・近藤は力無く笑った。

午前１０時になり、早朝訓練と朝食を採り終え、ロビーに集合する面々。
オーリスとドゥーエは現地集合となる。

「はやく！はやく！」

「あ～！新作アイスが私を待っている～！」

ヴィータとスバルはロビーでピョンピョン跳びはねている。
遠足ではしゃぐ子供よりテンションが高い。
普段仕事に厳しいヴィータとは間逆のはしゃぎよう。
はやてに甘える姿といい、今の姿といい、やはりヴィータの本質は子供なのだろう。

「ヴィータがあんなにはしゃいどる・・・癒されるなぁ～」

はやてがほんわかと癒されていく。
日頃の激務の疲れとストレスが一気に吹っ飛ぶようだ。

「あらあら、うふふ。スバルったら」

ギンガも何やらお母さんみたいな視線でスバルを見ていた。
シグナムとティアナはため息をつき、眉間に指を当てていた。

『Ｖｏｌｅｎｔｉｅｒｉ』本店は郊外から少し離れた、意外と辺鄙（へんぴ）な所にある。
女性の店長、イズミ・シロッコは、ひとりで『店を持ちたい』という夢のため、学生の頃からバイトでコツコツお金を稼ぎ、パティシエ修業に励み、ひたすら走り続けた。
それでも人ひとりでかき集められる金額はしれている。
実績のない女性ひとり、融資してくれるなんて奇特な人間もいない。
銀行の融資は受けることができたがそれでも多くは無い。
出せる金額ギリギリで持った店は立地条件がお世辞にも良いとはいえなかった。
だが、イズミにとってその店は何処の店よりも素晴らしく、宝物だった。

元々甘いものが好きだった。
だから、自分でより美味しいスイーツを作りたいという理由で、有名菓子店で修業した。
パティシエとしては非凡な能力を発揮したイズミは、自分が一番好きな『アイス』というジャンルに単身飛び込んだ。
しかし、周囲は反対した。
パティシエとしての素晴らしい技術をアイスのためだけに使う事が理解できなかったのだ。
別にアイスを下に見ているわけではない。
だが、イズミはスイーツ店ではなく、アイス『専門店』を作ると言い出したのだ。
未来ある芽を摘んでしまうのではないか。
周囲が反対した理由はそういうことなのだ。
だが、イズミの決心は固く、有名菓子店を破門同然に辞め、無理し

て店を構えたのだ。

しかし、現実はやはり甘くはなかった。
立地条件の悪さ、アイスだけという限定メニュー、そして女ひとりという非力さ。
当然、店は繁盛せず、一日にひとりも客が来ない日などもザラだった。

味には自信がある。
だが、客足が伸びない。

経営は圧迫していき、借金だけが増えていく。
やはり自分一人ではだめだったのか？
甘い幻想を抱いていただけだったのだろうか？

いつしか夢は曇っていき、イズミの心は折れそうになっていた。

そんなとき町をフラフラと歩いていると、柄の悪い男とぶつかりイチャモンをつけられた。
小心者で、男性への免疫も皆無のイズミにとって、柄の悪い男は恐怖以外のなにものでもなかった。
イズミはビクビク震え、ひたすら謝った。
だが男は許さない。いや、許す気などさらさらなかった。
イズミはファッションなどに疎く、化粧なども最低限のことしかしない。しかし、イズミは世間一般でいう美人にあたる。
野暮ったさなどを帳消しにしていまう美貌がそこにはあったのだ。
だから、男はそのままイズミを連れていき、慰謝料だなんだと言い、体を弄ぼうとしていたのだ。

もうやだ・・・！

だれか・・・だれか助けて・・・！

イズミは心の中で叫んだ。
そして、神は彼女を見捨てなかった。

男の後ろから近づき、腕を捻りあげる人物が現れたのだ。
男は当然いきなりのことに怒り狂う。が、その顔を見たとき、真っ青になり、腰を抜かした。

それは近藤だった。
男は逃げ出し、その場には近藤と尻餅をついて座っているイズミの二人だけになる。

「大丈夫ですか？」

近藤が座り込んでいるイズミに手を差し延べる。

「あ・・・は、はい」

イズミは顔が熱くなっていくのがわかった。
理由は近藤の容姿にある。

イズミは老け顔が好みである。
正確には年上のダンディーな男が好きなのだ。

そんなイズミには、近藤はどストライクだった。
まさに剛速球による直球ど真ん中である。

そこからイズミの記憶は曖昧になる。ボーッと近藤を見つめ続け、自分の世界に飛んでいたのだから当然だろう。
いつの間にか近藤とイズミは店内にいた。
イズミはお礼にアイスを振る舞おうとしたが、近藤は甘いものが好きではない。
丁重に断ったが、イズミが納得するわけがない。

「あ、じゃあコレはどうですか？甘くないですよ」

出されたアイスは若干黄色味かかっていた。
近藤はアイスを口に運び、粗食する。

「これは・・・」

近藤は驚いた。
爽やかな口当たり、柑橘系の風味がほどよく口の中に広がるが、しつこくなくスーッと溶けていく。

「地球の『ユズ』という果物を使ってみたんです」

イズミはニコリと笑った。

イズミは近藤にアイスを振る舞った後、店の現状と、もう店を畳もうとしていることを言った。
何故初めて会った人にこんなことを告白したのかはわからない。
だが、近藤はイズミの言葉に静かに耳を傾けた。

「・・・そうか、じゃあお手伝いしようかな？」

そういうと近藤はイズミの写真を一枚撮り、メニューをメモすると店を後にした。

数日後、店には客があふれていた。
いきなりのことでイズミもわけがわからずてんてこ舞いである。
気がつけば、用意していたすべてのアイスが完売となった。

久々の労働による心地好い疲労感を味わっていると、店に近藤がやってきた。

イズミは飛び上がった。
近藤に会えてうれしくなり、おもわずにやけてしまう。
顔もみるみる赤くなっていくが、それよりも聞きたいことがあった。

「・・・一体、何をしたんですか？」

今まで全然客が来なかったのに、いまでは完売になるほど人気がでた。
一体、どんな魔法を使ったのだろうか。

「ホームページを作って、口コミしただけだよ」

そう言い、近藤は店のホームページを見せた。
華やかでポップなデザインにアイスのメニューを記述、地図なども大きくわかりやすくしている。
なにより目をひいたのは、イズミの写真である。
多少加工されているが本来の美しさを隠すことなく、笑顔の自分がモニタの中にいた。
イズミは恥ずかしくなり、俯いてしまうが、近藤はこう言った。

君はもっと自分に自信をもつべきだ。

それからイズミは近藤の忠告を守り、以前より身なりに気をつけるようになった。
それでも簡素ではあるが。

美味しいアイスと美人の店長という噂は瞬く間に広まり、連日長蛇の列をなし、テレビ等にも紹介されるようになった。
最初こそイズミの顔見たさや冷やかしが多かったが、アイスの味が本物である事がリピーターに伝わり、またそれが口コミで広がっていった。
いまでは、店員を雇うほど余裕ができ、近々2号店を出店する予定である。

そして、いまでも近藤の作ったホームページはそのままにしている。
それは、自分と近藤の唯一の繋がりを残すためであった。

近藤は店が繁盛してからも、ちょくちょく店に顔を出しに来る。
アイスを買いに来るのではなく、ただ覗きに来る。
その度にイズミはそれとなくアプローチをかけるのだが、人の好意に対して無頓着な近藤が気付くわけもなく、ダラダラと日が過ぎていった。

そこで、今回の作戦である。
試食会と銘打ち近藤を誘う。
そこで、近藤の呼んだ同僚や友人の前で告白する。
奥手のイズミにしては大胆な作戦だが、なりふり構っていられない。
女の勘が警笛を鳴らすのだ。
早くしないと近藤を盗られるぞ――――と。

そうよ！
私が今こんなに充実した毎日を送れるのは近藤さんのおかげ！
だから、私は近藤さんに恩返ししなきゃいけないの！
この気持ちを近藤さんに知って欲しいの！
近藤さんに言われてから、エステにも行くようになったし、服装にも気をつけるようになった！

だから、私は！

心も、体も、近藤さんに捧げるの！！

なんともアグレッシブな人である。
恋する乙女は時として暴走機関車になる。

だが、悲しいかなその勘と行動は些か遅すぎた。

## 第５６話（後書き）

以前から考えていたネタです。

また書いてるうちに話が変な方向にいってしまい、どう始末をつけたものか悩んでいます。

# 第57話

ヴィータは超ご機嫌だった。
なにせ、あの噂のアイスが食べれるのだから。
以前、のけ者にされ、アイスが口に入らなかった時は枕を濡らすほど悔やみ、誘ってくれなかった近藤や幸せそうな顔をしたスバルを恨んだ。
だが念願叶い、とうとう食べることができるのだ。
しかも、今回は店頭に並ぶ前の新作試食である。
まさに近藤様々だ。

仕方ない、前回の事は水に流してやろうじゃないか。
あたしの心は海より広く寛大なのだ。
ああ、この喜びをどう表現しようか？

そうだ、飛び上がろう！

ヴィータはずっとピョンピョンと飛びつづけた。

ヴィータと手を繋いで歩いていたはやては最初こそヴィータのマイナスイオンに癒されていたが、段々ヴィータのテンションに付いていくのが辛くなってきた。

（なんか・・・若干引くなぁ・・・）

有名アイスを食べれる事に喜ぶのはいいが、少し過剰ではないだろうか？
はやてはヴィータが心配になってきた。
主に頭の中が。

そしてもうひとりのハイテンションウーマンであるスバルは、ティアナとギンガに挟まれる形で手を繋いでスキップしていた。

「あいつのアイスはハハハハ～ン♪、こいつのアイスもへへへへ～イ♪」

スバルはなんかよくわからない歌を歌っていた。

「待て！それはアイスじゃない！ブラックバスさぁ～アハハハ～ン♪」

「・・・なにその壊滅的にアホそうな歌は・・・」

ティアナは心底嫌そうな顔をして歌の主であるスバルに聞いた。
本当は聞きたくなかったが、何故ブラックバスが出てくるのか疑問だったからだ。

「今の私の心の叫びだよ！！」

スバルはすごくキラキラした瞳でティアナに力説する。

「それならブラックバスよりチャンコ鍋の方がよくない？」

「あ！それもそうだね！！」

ニコニコ顔でギンガがボケたのかノッたのかよくわからない事を言い、逆にスバルが食いつく。

なんだチャンコ鍋って？

ティアナはナカジマ姉妹のことがわからなくなってきた。

「なのはママー、楽しみだねー」

なのは、フェイトと手を繋いで歩くヴィヴィオも終始笑顔だ。

鼻歌まで歌っている。

そんなヴィヴィオを見て、フッと微笑むなのはに対し、フェイトはジーッと近藤を見ていた。

近藤はエリオとキャロが両隣を占領し手を繋いでいた。

・・・いいなあ・・・

私も近藤さんと手繋ぎたいなあ・・・

物欲しそうな顔をするフェイトに、エレノアが声をかけた。

「勇気出して割り込めば？」

だがフェイトは首を横に振る。

それはできない。
あんなに幸せそうな顔をしたエリオとキャロの間に割り込んでまでわがままを通そうとは思わないからだ。
エリオとキャロのあの幸せそうな笑顔を見ているだけで、フェイトの心は幸福に包まれていく。
自然とフェイトは笑みを浮かべていた。

しかし、エレノアはフェイトの心を揺らす言葉を告げた。

「そんな遠慮してたら、店長にご主人様とられるよ？」

フェイトの眉がピクッと動く。

「・・・どういう事ですか？」

「どういうって・・・店長さん女の人だし、今回の試食会も多分名目だけで、ニブチンなご主人様に告白するつもりなんじゃない？」

エレノアは手を頭の後ろで組み、空を見上げる。

「あの店長さん美人だしねー、もしかしたらニブチンのご主人様でも食いつくかもねー」

エレノアがチラッとフェイトを見ると、青ざめた顔がそこにはあった。

「あぁ、そういえば店長さんて近藤さんに助けられて、それから好きになったんだっけ？」

なのははエレノアが以前そんなこと言ってたなーという風に話すが、

フェイトは気が気ではなかった。

フェイトは焦りつつ、その辺詳しく！とエレノアにつかみ掛かった。

かい摘まんで言うと、閑古鳥の鳴いていた店の立て直しに貢献したということらしい。

それよりも驚いたのは、その店長さんのセンスだった。

「強面好き・・・そんなひと本当にいるんだ・・・」

以前なのはが同じ事を言った事もあり、なのはは苦笑していた。

「くしゅん！」

「っくち」

「・・・んー、誰か噂してるのかしら？それにしてもかわいらしいくしゃみするのね、オーリス」

「え？そう？」

店に向かう途中、ドゥーエとオーリスがくしゃみをした。

「っくしょん！あー、早く近藤さん来ないかしら～？」

イズミは店でくしゃみしつつ、近藤達が来るのを心待ちしていた。

「いっきし！これはくしゃみ？・・・は！まさか近藤様が私の事を考えて下さっているのでは！？」

「おーいセッテー。帰ってくるっスよ～。つーか、くしゃみがカトちゃんみたいっス」

また、別の場所ではくしゃみをしたセッテがトリップし、ウェンディがそれの対応をしていたのだった。
なぜウェンディが加藤茶を知っているのかは謎だ。

フェイトは急いでエリオと近藤の間に割り込み近藤と手を繋いで歩いた。
エリオとキャロは驚いたが、それでもフェイトが加わることが嬉しいようで笑っていた。

そんな光景をなのはとヴィヴィオ、エレノアは微笑みながら見ていた。

「フェイトちゃんたら、子供みたい」

「フェイトママたのしそうだね～」

なのはとヴィヴィオは顔を見合わせクスクス笑った。

そして、エレノアは近藤を見ながら願っていた。

（どうか、この優しい時間がいつまでも続きますように・・・）

店に到着すると、店の前でオーリスとドゥーエがもう到着していた。
二人は近藤を見つけるとパァッと笑顔になり、駆け寄ってきた。
しかし、突然ピタリと止まり、近藤の隣の人物を睨んだ。

「ハラオウン執務官、それはなんですか？」

ドゥーエの目が鋭くなる。
対してフェイトは勝ち誇ったようにフフンと鼻をならす。

「何って？手を繋いでいるだけですけど？」

ドゥーエは、手を離せと言いたかったが、近藤の前でそんな声を荒げるようなはしたないことはできない。
オーリスも何か言ってやりたかったが、キャラを作っている手前、近藤に対し興味なしの態度を取らざるをえなかった。
フェイトは勝ち誇ったように笑う。

「さ、近藤さん、店長さんを待たせるのも悪いですし、入りましょ？」

フェイトは近藤の手を引き、店の中へと入っていった。

キーッ！！

オーリスとドゥーエの悔しがる姿は、小姑のようだったと、後になのは達は語った。

イズミ・シロッコは驚いていた。
まさか近藤が女性ばかり連れて来るとは思ってもいなかったからだ。
エリオは子供なので頭数にいれていない。
しかも、全員が美女・美少女である。
よく見れば、テレビなんかで見た顔もいる。
あれは・・・まさか・・・

「あの・・・もしかして高町なのはさんとフェイト・T・ハラオウンさん、八神はやてさんですか？」

イズミは恐る恐る聞く。

「ええ、そうです」

3人は頷く。
びっくりだ。まさか今をときめくエースが3人いるとは！
近藤の人脈は一体どうなっているんだ！？
イズミはテレビで見た人物を目の前にし、テンパってしまった。

「ああ、店長には言ってなかったかな？俺は今機動六課という試験部隊にいるんだよ。で、彼女達はそこの隊長達と隊員なんだ」

近藤は忘れてましたと軽く言うように紹介していく。

「近藤さんて・・・実はスゴイ人？」

イズミは目を丸くして近藤を見た。

「はっはっはっ、まさか。俺は昼行灯でお荷物局員だよ」

「それは謙遜しすぎや。近藤さんにはホンマに助けられとる。ま、私にとって、近藤さんは尊敬できる人やな」

近藤の謙遜をはやてはバッサリ切り捨て、褒めちぎる。

なのは達はそれに同意するように頷いた。

挨拶もそこそこに、試食会が始まった。

ヴィータとスバルが、もう我慢できませんとばかりに獣のように目を血走らせ、フーフー荒い息を漏らしていたからだ。

始める前に、イズミはアイスの説明をした。

「いままではシンプルな味ばかりを作っていました。ですが、そろそろ複雑なアイスも受け入れられる時期だと思うんです」

イズミが言うには、自分の求める複雑な味とは、ずいぶん前から構想を練っていたらしい。

しかし、それはあくまで作り手の思考である。

客のニーズとそぐわない可能性があったのだ。

実際、アンケート等を採ったとき、客のニーズはシンプルなモノを

求める声が多かったそうだ。
しかし、それではダメだと思った。
立ち止まって、現状に満足などしてはいけない。
常に前へ。
それが信念ではないか！
イズミは英断した。

「コンセプトは『大人のアイス』と『遊び』です」

イズミは試作アイスを皆に振る舞った。

試作アイスは大好評で、無事試食会は終了した。
振る舞ったアイスは近々店頭に並ぶそうだ。
近藤達はイズミに礼を言い、店を後にした。

皆が帰った後、イズミは店でボーッとしていた。
自分しかいない店内。
静寂の中、改めて今日の事を思い返していた。
当初の予定では近藤に告白するハズだった。
だがしなかった。
できなかった。
近藤のまわりには笑顔があった。
それは、ひとりでは作り出せない、とても強い絆で出来ている笑顔

だった。

『家族』

そう、一言でいうならその表現がぴったりだ。
フェイトがかいがいしく近藤に寄り添い、エリオとキャロが笑う。
なのは達はそれを暖かく見守る。
オーリスとドゥーエも割り込んで近藤にアタックをかけるのも微笑ましく見えた。

それらが全て、一つの物語のようだった。

ああ、私には入り込める余地はないじゃないか。

「あーあ、あれは勝てないなー・・・」

イズミはポツリ呟き、目から光り輝く滴が流れ落ちた。

帰り道では、オーリスとドゥーエ、フェイトが睨み合っていた。

「これで勝ったと思わないことね」

ドゥーエは鋭い口調でフェイトに言う。

「わ、私も、まだ負けないもん！」

オーリスは胸の前で拳をつくり、対抗する。
もうおもいっきり素が出ている。
だが、フェイトは余裕だった。

「それでもこちらのアドバンテージは変わりませんよ」

フフンと勝ち誇ったように鼻をならすフェイトに、ドゥーエとオーリスは歯噛みする。
そう、同じ職場でいつも顔を合わせるという最大の強みをフェイトは持っている。
しかもフェイトは公言しないが、自分には近藤とキスをしたという最大のアドバンテージがある。
実は、あの日の近藤とギンガの出来事で勢いでキスをしてから、二人はちょくちょく隠れてキスをしている。
あくまで軽く触れるだけのキスではあるが。
例えば、寝る前だとか、二人っきりになったときとか、フェイトからキスを要求してくる。
近藤はあくまで受身である。だが、恥ずかしそうにキスを要求してくるフェイトを拒むような愚かな事は、いくら近藤でもしない。
ようするに、近藤も満更ではないのだ。

そして、それは会う機会の少ない二人にはかなり致命的である。
フェイトは二人がいない間に着々と距離を縮めているのだ。
だが、ドゥーエはすぐに余裕を取り戻し、髪をかきあげた。

「フッ、まぁ、あなたのようなお子様じゃあ近藤さんは満足させることはできないでしょうけど？」

「わ、私はお子様じゃありません！」

フェイトは顔を赤くして反論する。

だが、ドゥーエは流し目でフェイトを見て、フンと鼻をならした。

「じゃああなたは近藤さんの特殊な性癖を受け止めることができるのかしら？」

「・・・なにそれ？私もそんなの聞いてないけど」

横でオーリスが驚きの声をあげた。

近藤の特殊な性癖？

・・・少し興味がある・・・

ドゥーエはチョイチョイとオーリスとフェイトを手招きし、ポショポショと小声で呟いた。

すると、フェイトとオーリスは体を仰け反らせた。

「えー！？」

「な、なにそれ！？」

オーリスとフェイトの顔は真っ赤である。

ドゥーエはニヤリと笑う。

「そ、そんなの嘘です！」

フェイトが猛反論する。

だが、ドゥーエは飄々としていた。

「何をもって嘘だといえるのかしら?これは私が密かに近藤さんのプライベートを調べ、導き出された答えなのよ」

「・・・ストーカーじゃない・・・」

オーリスが呆れた表情をしていた。

「それだけじゃないのよ?ちょっといらっしゃい。・・・で・・・なって・・・・・が・・・・・・・を・・・・・・・」

ドゥーエがゴニョゴニョと呟き、オーリスとフェイトは顔を赤くしたり、青くしたりしていた。

「そんな・・・ランドセルと縦笛を・・・」

「ラップと歯ブラシで・・・そんなことを・・・」

オーリスとフェイトはわなわなと震えていた。
ドゥーエは口を歪めて笑った。
勿論、これはドゥーエの嘘である。

(フフン、チョロイわね)

ドゥーエはほくそ笑んだ。

「なのはママ?フェイトママはなに話してるのー?」

「ヴィヴィオ、あなたにはまだ早い。大人の大事なお話なの」
なのはは真剣な表情でヴィヴィオに言い聞かせた。
ヴィヴィオはよくわかっていないようで、ふーんと生返事した。

そして、そんなデマを流されている近藤はというと、ヴィータとスバルに腕を引っ張られていた。

アイスを食べ終わり、満足した二人は顔がツヤツヤのテカテカに光っていた。
だが今は、二人で近藤を巡り、言い合いをしていた。

「スバル、てめーその手をはなせよ！近藤の嫁はあたしだっつってんだろ！！」

「違いますー！副隊長の奥さんは私に決定してるんですー！！」

両腕をぐいぐい引っ張られ、近藤はげんなりしていた。
これは大岡裁きになるのだろうか？だったら誰か裁いてくれ。

スバルやヴィータのような美少女に言い寄られるのに悪い気はしない。
だが、その動機が不純なのだ。

「バカヤロー！あたしが嫁になって毎日アイス食うんだ！！」

「私が新妻になってアイスを食べるんですー！！」

・・・もう何と言ったらいいのやら。

はやてとシグナム、ティアナは呆れ果ててしまい、頭を抱えていた。
エリオとキャロも呆れて口をポカーンと開けて見ていた。
ギンガはニコニコ笑いながらスバルを見守っていた。

「あらあらまあまあ」

・・・どこのお母さんでしょうか？

「ヴィータ副隊長はチンチクリンじゃないですか！でも私はこの、日に日に成長している胸があります！このバディがあります！近藤副隊長もイチコロです！！」

「バカヤロー！近藤は本当はロリコンなんだよ！日頃は隠してるけど深層心理ではそうなんだよ！あたしみたいなかわいいぷにぷにな子供体型が大好きなんだよ！あたしのプリティな容姿に近藤もイチコロだ！！」

知らない人が聞いたら逮捕されそうなことを口走るヴィータと、何気に危ういスバル。

もう勘弁してくれ・・・

近藤の呟きは、ヴィータとスバルの言い合いによって虚しく消えていったのだった。

## ５００万アクセス記念雑談

祝！！ＰＶ５００万アクセス突破ぁぁぁっ！！

はやて　「いえーい！！」

なのは　「おめでとー！」

フェイト　「すごいね！」

素直にビックリです。
２月は１話しか投稿していませんでしたけど、実は４００万を突破していました。
本当に申し訳ないです。

シグナム　「うむ、投稿していなかった事を反省するのはいいことだ。だが、お前の場合、理由が理由だけにな・・・」

ヴィータ　「・・・車上荒しか・・・」

もう思い出させないで！！

シ　「・・・スマン」

でもいいんです。先日伊勢神宮にお参り行きましたし！

は　「・・・いきなり神頼みかい・・・」

フ　「その伊勢神宮ってすごいところなの？」

な　「伊勢神宮には、太陽を神格化した天照大御神を祀る皇大神宮と、
　衣食住の守り神である豊受大御神を祀る豊受大神宮の二つの御正宮が存在し、
　一般に皇大神宮を内宮と呼び、豊受大神宮を外宮って呼ぶの。
　また、内宮と外宮は離れた場所にある為、観光客の場合は時間の都合上、内宮のみ参拝して帰路に就くことも少なくないけど、
　本来は先ず外宮を参拝してから、内宮に参拝するのが正しい方法とされているの。
　近世江戸時代を除いて、古代から政治的権威と結び付くことが多かったんだよ。
　広くは、別宮、摂社、末社、所管社を含めた、一連の社宮を神宮と総称するんだ。
　この場合、所在地は伊勢市にとどまらず跨るの。」

フ　「すごいね、なのは・・・」

な　「・・・ってｗｉｋｉに書いてるの」

は　「・・・台無しや・・・」

最近スピリチュアルスポットやらパワースポットって言うじゃないですか。

シ　「うむ、江原啓之氏がよくスピリチュアルパワーとやらの事を言っているな」

ヴ　「でも、なんで伊勢神宮なんだ?天照大御神なら高千穂の方だろう?」

な　「ヴィータちゃん物知り！」

単純に伊勢神宮が家から近かったからです。
日帰りで行けましたし。

フ　「なんか、ご利益なくなりそうな発言だね、それ」

でも行ってよかったです。
特に超パワースポットといわれた「三ツ石」とか見れましたし。
なんていうか、やっぱり神社っていうのは鳥居をくぐると空気がガラッとかわり、別世界のようでした。

シ　「神聖な場所だからな」

いままで神社なり、お寺なりお参りに行っても別にどうも思いませんでしたが、やはりこういうところは軽い気持ちで来ていいところではないとつくづく思いました。
あと、参拝者がすごく多かったけど、若い人が比率的に多かったです。

は　「いまは不況やからなぁ。神にでもすがりたいんやろうな」

初めてですよ。
「二拝二拍手一拝」なんてしたの。

フ　「二拝二拍手一拝？」

な　「二拝は神様の前に立ちここに参らせていただけたことへの感謝を込めて行うの。

神前に向かって、最敬礼を二回行うんだよ。
背中を平らにして、腰を９０度折ってね。

次、二拍手で神様に出てきていただくの。
ここで自分の住所と名前を心の中で告げるの。
自分がどこの誰だか神様に知っていただくためだね。神様っていっても、どこの誰だか分からない人物には対処のしようがないからね。　神様は、とても人間的なんだよ。
両手を胸の高さで合わせて、肩幅程度に両手を開いて、拍手を二回打つの。
両手をあわせ、揃えて祈念をこめてから手を下ろしてね。

一拝は最後に深くおじぎをするの。
『では、失礼します。●●神社の神々の皆様もお幸せであられますように』って心の中で願おうね。
本殿をあとにする時に、もう一度深く頭を下げて、鳥居のところでも、本殿を振り返り、頭を下げるんだよ。」

フ　「なのは凄い・・・」

な　「まあ、これは基本かな？パンフレットにも『二拝二拍手一拝』しましょうって書いてるしね」

シ　「うむ、神を敬うのは当然のことだ。やはりちゃんとした形式をとらねばな」

ヴ　「あたし知らなかったな」

結構女性はこういうこと知ってますよね？
やっぱり友達と旅行行ったりするからかな？

は　「男はインドア思考が多いからなあ・・・あと旅行行ってもあんまりこういうことに興味無さそうやし」

あと、いろいろ写真も撮りました。
それで、撮影禁止の場所がありまして・・・

ヴ　「おい、まさか撮ったんじゃないだろうな!?」

撮ってません。というか、とても撮れる雰囲気じゃなかったです。
あれはダメだ。

な　「伊勢神宮外宮の御正宮でしょ？あそこは本当に洒落にならない雰囲気あるからね」

たぶん写真撮ったら逆に罰当たるんじゃなかろうか？

しかし、これで運気向上は望んで何の努力もしなければ意味はありません。
これからはより一層人生を頑張ろう!!

シ　「大雑把過ぎるぞ、それ」

フ　「いい事あると良いね」

ありがとうございます。

さて、今回の雑談は、原点回帰として反省会を開きたいと思います。

シ　「うむ、反省し、それを糧とする。いいことだな」

それで、皆さんからの感想やご指摘等をピックアップしていきたいと思います。

は　「ふむ、じゃあまずはこれからか？

『もう更新されないんじゃなかと思ってました』」

本当にスイマセンでした。
これからはなるべく早く更新していきます。

な　「まあ、ね。今回の更新の遅さはもう言わないほうが良いかな？」

フ　「うん、次行こう次！」

シ　「ん、私か？どれ・・・

『近藤の言ってはならないツッコミが・・・』・・・ふん！」

びりびりー！！

は　「あー！？シグナム何破っとんねん！？」

シ　「これは私達の口からいってはならない問題です。さ、次行きましょう」

フ　「・・・シグナム怖いよ・・・えっと、

『フェイトさんのアグレッシブさが凄まじいです』

って！なに私に読ませてるんですか！？」

ヴ　「すげーな。なんの罰ゲームだ、それ？」

とりあえず、フェイトさんの最近の行動についてです。
フェイトさんには幸せになってもらいたかったんです。
無印の時もそうですが、トータルで見ても、フェイトさんは自分を大事にしていないと思うんです。

シ　「それは高町と主はやてにも言えることだな。皆他人のことばかりで、自分を蔑ろにしすぎだ」

なのはさんの場合、ユーノがいますし、ヴィヴィオもいますから緩衝材になってると思うんです。
はやてさんは八神家の皆さんがいますし。・・・婚期逃しそうですけど。

は　「一言多いわ！！」

ヴ　「はやてはずっとあたし等と一緒にいるんだ！男なんかにやるか！！」

は　「ヴィータ・・・嬉しいけど、それは私の気持ち的に複雑やわ・・・」

そう考えると、フェイトさんはなんか幸薄そうなんですよね。

フ　「う！？」

確かに、リンディさんという義母からの愛情はあるでしょう。
エリオやキャロとの絆もあるでしょう。
クロノからの屈折した愛情もあるかもしれません。

は　「クロノ君のところはなんか棘があるな・・・」

ＳｔｒｉｋｅｒＳではフェイトさんは愛情を受ける側ではなく、与える側に回ってますよね？
じゃあ、フェイトさんへの愛情は誰が注ぐのでしょうか？
なのはさん、はやてさん？勿論それはあるでしょう。
それでもフェイトさんは二人に比べて愛情が少ないと思います。
だから、フェイトさんと近藤をくっつけようと思いました。

シ　「ふむ・・・なるほどな・・・」

ヴ　「フェイトは幸薄いキャラだからな」

は　「小公女セーラみたいやな」

フ　「私そこまで幸薄くないよ！？」

まあ近藤とでは傷の舐めあいになりそうですけど、それでも幸せになってほしいんです。

フ　「そ、それでも、あ、あああんなに行動を起こすことないんじゃないかな？」

キスですか？

フ　「いわないでぇ！？」

は　「フェイトちゃん顔真っ赤っかやん」

な　「・・・ん？私が読むの？

『フレンチキスって、ディープキスのことですよね』

・・・なにこれ？」

実はですね、コレの前の第５７話で、誤記だったんですけど、近藤とフェイトさんはフレンチキスを度々行っていると書いていたんです。

は　「ディープキスを度々とな？」

ヴ　「・・・エロエロだな・・・」

シ　「うむ、エロエロだな」

それでですね、コレは私の認識不足だったんですけど、フレンチキスって、軽いキスのことだと思ってたんですよ。

で、それのご指摘メールを多数いただき、急遽修正しました。

な　「なんでフレンチキスを軽いキスだと思ったの？」

なんか軽そうじゃないですか？

は　「え！？それだけ！？」

フレンチキス＝ディープキスには間違いないようですが、

フランス人はフレンチキスを「心からのキス」と考え、
イギリス人はフレンチキスを、フランスを皮肉って「下品で卑しい」
キスだと考えていたようです。

日本人は、フランス人の言う「心からのキス」と言う言葉から、
「フレンチキス＝唇を軽く重ねるだけのキス」だと勝手に連想して
しまい、
（「舌を絡ませるキス」を「心からのキス」だと考えられなかった
ようです）
その考え方が広まってしまったようです。

という誤認識ですかね？

シ　「ふむ、文化と認識の違いか・・・難しいものだな」

ですが、ディープなのは間違いないようなので、早急に修正しまし
た。

は　「近藤さんとフェイトちゃんがちょくちょく舌を絡めてる姿か・
・・あかん、年齢制限にひっかかるな、コレは」

フ　「そんなに卑猥！？」

な　「フェイトちゃん、お付き合いは健全に、だよ？」

フ　「・・・なのははそんなだからユーノとの距離が縮まらないん
だよ」

な　「わ、私のことは今関係ないでしょ！？」

さて、なんだか友情にヒビが入りそうなんで次のご意見をお願いします。

ヴ　「ん、そうだな。

『ティアナが黒い・・・』だってよ」

は　「あ～・・・」

シ　「何故ティアナはあんな風になってしまったんだ?近藤とはあまり絡んでないだろう?」

やはり、あのなのはさんとの一件ですかね。

ティアナは冷めた感じですが、なんだかんだで男の免疫はないと思うんです。

な　「確かに、スバルと二人で、毎日毎日訓練訓練、機動六課来る前も仕事仕事だったらしいしね」

あんな気持ちがどん底のときに大人の異性から優しくされたら、そりゃあなびくと思うんですよね。

シ　「・・・つり橋効果に似てないか?」

それでですね、ティアナも自分の気持ちを持て余しているんです。

惹かれる異性がいる。でも、その人は大人で、その周囲には自分より美人な人がいっぱいいる。

どうすれば自分を見てくれるんだろう?

という感じです。

は　「それで、どうにか近藤の目を惹こうと考えた結果、妊娠して既成事実作るか？黒いいうより、暗いなあ、思想が」

フ　「なんていうか、昼ドラのドロドロしたような考えだね・・・」

は　「この泥棒猫！！みたいな？」

な　「自分の身近でそんなのが繰り広げられるのはいやだなあ・・・」

さて、次の感想メールなんですが、なんともとんでもないのが来ました。

『近藤のあり方はある意味ｆａｔｅのアヴェンジャーに近いのですね。
全てを奪われたとか、達観しているとか。
まあ、彼を「この世全ての悪」というには性格はともかく性質が違いますが。
そう考えると、なのはをかばって墜落したときに、死期を知ってもさほど動揺がないことから、近藤という「人間」はすでに死んでしまったのでしょう。
その上、本人が不幸だと感じていない以上、彼に救いというのは果たしてあるのかどうか……。
そもそも前提から違って、この話は全てを失った主人公の救いの物語ではなく、そういう主人公がどう周りを変えていくのかを綴ったものなんでしょうか。
いずれにせよ、今後も主人公の行動には興味が尽きないと思いました。』

は　「アロンさんからの感想やね。ありがとうございます！」

な　「これは・・・すごく良いように解釈されてるね」

すごく恥ずかしくなってきました。
こんなに高唱な思想はなかったんです。

確かに、これは近藤を救うという物語ではありません。
肥え太った豚のような組織の末路というのはどういうものか、みたいな事と、全てを手に入れ全てを無くした男が何を成すのかということを書きたかっただけなんです。

シ　「いいことではないか。見る人間によって、感じるものが違う。それは当たり前のことだ。
　それはこの原作のリリカルなのはもそうだ。だからこそ、このような二次制作が書かれ、自分達なりの解釈の元、再構成しているのだろう？」

プレッシャー！！

フ　「いいじゃないの。アロンさんが書いてきた感想は概ね合ってるんでしょ？」

はい。漠然とは考えていました。

ああ、そうか・・・
そういえばそうだなぁ・・・
みたいな？

ですが、ここまではっきりと書かれるとビビッてしまいます。

ヴ　「ヘタレだな、お前は」

な　「がんばって！がんばれば、結果は後からついてくるよ！！」

相変わらずの体育会系な考えですね。
ですが、それしかないですね。
がんばる！！
俺がんばるよ！ママ！！

シ　「誰がママだ！・・・貴様、どこを見て言った？」

胸です。ママ。

シ　「貴様ぁぁぁぁっ！！」

さて、ママは放っておいて、次行きましょう。

は　「後で宥める私等のこと考えて行動せえよ、作者」

では最後の感想はコレです。

フ　「え、また私？

　『いっそのこと近藤ＬＯＶＥな人はみんなヤンデレか幼女で行きませんか？（笑）』」

さようならー！！

な　「投げっぱなしはダメだよー！？」

は　「こら！逃げんな！この空気を何とかせんかい！！」

ヴ　「あ！？消えやがった！！」

は　「・・・どうすんねん、この二人・・・」

シ　「私だってなー！好きでこんな胸になったんじゃないんだぞー！！」

フ　「ヤンデレ・・・幼女・・・近藤さんのエロエロ大魔神ー！！」

あ、最後に一つ。

は　「・・・なに、サラッと帰ってきとんねん」

実は、しばらく先になると思うんですが、もしかしたら書かないかもしれませんが。

な　「奥歯にモノが挟まったような言い草だね・・・」

この『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　はじまりの魔法』が連載終了したあと、『恋姫無双』の二次小説を書こうと思ってるんです。

ヴ　「それは無印か？真か？」

真・恋姫無双ですね。もしかしたら、無印と混合するかもしれません。
ほんとうはオリジナルを書こうと思っていたんですけどね。

そこで、アンケートをとりたいと思います。

真・恋姫無双とは、三国志の武将が全て女性の世界です。
それ以外は普通の三国志と変わりはありません。
それで、魏、呉、蜀の三国があるわけです。

は　「魏が曹操、呉が孫権、蜀が劉備やな」

それで、主人公の北郷一刀と、もう一人のオリジナル主人公を出そうと思っています。
で、そのオリジナル主人公の身を寄せる陣営はどこがいいか、アンケートをとりたいと思いまして。
できれば、呉か蜀がいいんですけどねえ・・・

な　「なんで?曹孟徳って現代の思想に近い考えを持っていたすごい人でしょ?」

ヴ　「・・・おまえの欲望がだだ漏れだな・・・わかりやすすぎだ」

は　「・・・劉備も、孫権も・・・胸でかいなあ・・・」

ヴ　「仲間も大きい人多いしな」

な　「・・・魏はいないの?」

は　「一番大きいのは李典かな?あとは、普通がそれなりと、貧乳がいっぱいと・・・」

ヴ　「呉も蜀もおっぱい率はすげー高いんだ」

な　「・・・そうなんだ・・・」

とりあえず、皆さんは何処の陣営が良いかというのを聞きたいんです。
それを参考にして物語を作っていこうかな、と。

よろしくお願いします。

フ　「・・・作者さん。ひとついいですか?」

なんですか?

というか、なんですか、その手に持っている本物の鎌は？

フ　「そのオリジナル主人公って、近藤さんじゃあないですよね？」

・・・・・・・・・・・・・まさかぁ。

フ　「おまえに明日を生きる資格はない！！」

ビュンッ！！

これからもよろしくー！！

## ５００万アクセス記念雑談（後書き）

アンケートなんて偉そうなことお願いしてすいません。

でも一回してみたかったんです。

よろしくお願いします。

## 第５８話（前書き）

少々時間が空いてしまいました。

今回の話はグダグダです。
ですが、ちょっと重要な話です。

あと、今回ほどキャラが壊れているのは無いんじゃないだろうか？
やりすぎたかな？

アンケートのご協力ありがとうございます。
現在の集計では、魏・・・３
呉・・・１１
蜀・・・２
他・・・２

となりました。
まだアンケートを引き続き受け付けております。

みんなおっぱい好きなんですね！！

# 第５８話

フェイト・Ｔ・ハラオウンは悩んでいた。

それは、他人が聞けば石を投げられるような悩みかもしれない。
はやてあたりは、はいはいごちそうさまと冷やかすかもしれない。

だが、フェイトにとってそれは死活問題なのだ。

「・・・近藤さんから好きって聞いたことない」

・・・はいはいごちそうさま。
だが、確かに近藤はフェイトに対して愛情表現をした試しがない。
フェイトはなにかと近藤にアピールするが、当の近藤の反応は薄い。

好きと告白しても無表情。

（いろんな意味で）相手をすると言っても無表情。
いま思い出すと、とんでもないことを口走っているが、そこは置いておこう。

キスをした時は驚いていたが、それでも反応が薄い。
（男には）ファーストキスだったのに。
まあ、最近は皆に隠れてちょくちょくキスをしているのだが。

よくよく考えたら手なんかもあまり握っていない。

そもそも何故自分は近藤の事を大輔と呼ばないのだろうか？

私はもっと近藤さんとラブラブしたいのに！

フェイトは近藤の焦っていた事象を思い出していた。

ヴィヴィオに王様と言われたとき？

なのはが怪談で泣いたとき？

・・・あ。

ドゥーエ・マセラティ二尉にアタックかけられてたとき！

そうだ、あの時の近藤さんはデレデレして、鼻の下伸ばして、顔を真っ赤にしていた！

私もイロイロアプローチかけてるのに！

え？どんなアプローチかって？

そりゃ、買い物誘ったり、食事誘ったり。エリオとキャロがついて来るけど。

はぁ・・・私って魅力ないのかな・・・？

たしかに、ドゥーエ二尉は美人だし、スタイルもいいし、大人の魅力が溢れている。

近藤さんにしな垂れかかっている姿はとても色っぽく、甘え上手だなと素直に思った。

良い女は甘え上手だと聞いたことがある。

まさしくドゥーエ二尉な良い女だろう。

私にあんなことができるだろうか？

近藤さんに甘える？

だめだ、そんな大胆な事できない。考えただけで倒れそうになる。

色っぽくする？

なんとなくだが、私にはドゥーエ二尉のような色気は無理っぽい。

それに、色気を出す自分が想像できない。

容姿に関しては、それなりだと思う。

これでも中学生時代は何回か男の子に告白されたことがある。

少なくとも不細工ではないだろう。

体型も、日頃の訓練で無駄な肉はついていない、と思う。

最近なのはがなにやらお腹まわりを気にしている。

うん、大丈夫。私は大丈夫・・・だよね？

み、みだしなみにも気をつけているし！

じゃあ、どうすれば近藤さんに振り向いてもらえるんだろう？

フェイトは自分のイロイロな勘違いに気付かず、またとため息をついた。

フェイトは悩んだ結果、母であるリンディに相談することにした。

フェイトのまわりには、良くも悪くも健全な人ばかりである。
なのははユーノとの微妙な距離を縮めようとせず、ユーノも現状に甘んじている。
はやての場合、男の噂を聞いたことがない。
たまに、はやてが女性局員を毒牙にかけているという、限りなく本当っぽい噂を聞く。
ティアナやスバルも浮いた話は聞かないし、シグナムやヴィータ、シャマルも同様だ。

ようするに、自分のまわりには男っ気が全くないのだ。

義理の姉であるエイミィに相談しようかと考えたが、実は近藤に告白したことはクロノには内緒にしている。
何故だかわからないが、クロノは近藤を嫌っている。
だから、もしフェイトが近藤と付き合っているなどと言おうものなら、あのシスコンは全力で近藤を抹殺にくるだろう。
というわけで、その妻であるエイミィにもいいにくいのだ。

ならば、身近で経験豊富な人間といえば・・・

「なるほどねえ。で、私に聞きたいと？」

フェイトの目の前のモニタに映るのは、とても孫がいるとは思えない美貌を持つフェイトの義理の母、リンディ・ハラオウンである。相変わらず柔和な笑顔を浮かべている。

「でも、フェイトがまさか大輔君をねぇ・・・世の中わからないものねぇ」

リンディは頬に手を当てしみじみ言う。

「しかも、大輔君の好みの女性になりたいだなんて・・・なんて健気なのかしら！」

モニタ越しにキャーキャー黄色い声を出すリンディ。おばあちゃんなんだから、もう少し大人しくしてください。

「いや、そんなこと言ってない・・・」

「大輔君に振り向いてもらいたいんでしょ？ドキドキしてほしいんでしょ？ラブラブになりたいんでしょ！」

否定しようとするフェイトをすごい剣幕で畳みかけるリンディ。すごく楽しそうである。

「う、うん、そう・・・なのかな？・・・まぁ、それで、人生の先輩であるリンディ母さんなら何か良い案をくれるかなーって・・・」

フェイトは頬を桃色に染め、ゴニョゴニョ言い出した。

「まぁまぁまぁ、甘酸っぱいわねぇ。でも、大輔君の女性の好みね

ぇ・・・うーん・・・」

リンディは悩みだした。

よくよく思い返してみれば、リンディは近藤の事は大概のことはしっているが、女性関係は知らないし、本人の口から聞いたことがない。

一時は女性に興味が無いのかと心配したほどだ。

しかし、ひとつだけ心当たりがある。

「包容力のある女性が好みだと思うけど・・・」

「包容力？」

リンディが思い出しながら言うことに即座に反応するフェイト。

「小さい頃の大輔君て、ああ見えて甘えん坊だったのよ？だから、多少の失敗や浮気なんかを許せるような心が広くて、優しく包み込んでくれる人がいいんじゃないかしら？」

リンディがそう言うと、フェイトはダラダラ汗を流した。

まずい。

バリバリ嫉妬してる。

わがまま言ってる。

ヤキモチ焼いて近藤さんを困らせてる。

包容力以前の問題だ。

いきなりアウトではないか！

「ほ、他には？」

フェイトは気を取り直し、その他の選択肢を聞こうとした。

だが、リンディは申し訳なさそうな顔をした。

「ごめんなさいね、私もそれくらいしか知らないわ。大輔君の女性の好みなんて聞いたことないし・・・あ、そうだわ！」

リンディがポンと手を叩いた。

「お酒を飲ませなさい！」

「えー、少し時間が空きましたが、今日は大人だけのギンガの歓迎会です！おもいっきり飲んで騒いで明日から一緒に頑張りましょう！」

はやてがビールのはいったグラスを持ち、スピーチをする。

「かんぱーい！」

「かんぱーい！！」

はやての音頭に続き、なのは達がグラスを一カ所に集め、カチカチンと鳴らす。

皆がグラスを口につけ、グイッと飲む。

はやては一気にグラスの中のビールを飲み干し、ぷはぁっと満足そうに顔をあげた。

現在、とある居酒屋の個室を貸し切りギンガの歓迎会を催していた。メンバーは隊長、副隊長、シャマル、ギンガの８人である。

誤解のないようにしていただきたいが、ミッドチルダでの成人年齢は１８歳である。

だから、なのは達がアルコールを摂取してもなんら問題はない。

ただ、ギンガは１７歳であるため、今はジュースを飲んでいる。

そう、今のところは。

はやてやなのは達はギンガをほっぽってぐびぐび酒を摂取している。

普段の彼女達にかかるプレッシャーは尋常ではない。

本当に適度にガス抜きをしないと体を壊してしまうし、ストレスでうつになりかねない。

そのはけ口として、なのは達は酒を飲むという事を覚えた。もちろん、他の発散方法も各々持っている。

酒というのは飲みすぎると体に悪影響を及ぼす。皆それを自覚しているから、こういうイベントくらいでないと飲まない様にしている。まぁ、ようするに、ギンガをだしにして酒が飲みたかったというのが本音だろう。

そして、ギンガともうひとり、ジュースをチビチビと飲んで、場の雰囲気を下げる人間がいた。

「・・・近藤さん、なにジュースなんか飲んでるんですか？」

近藤の隣に座るフェイトがほんのり頬を染めながら近藤に詰め寄る。手にはジョッキを片手にビールがなみなみと入っていた。

「いえ、ナカジマ陸曹だけジュースなのもかわいそうじゃないですか？」

「ギンガは後でコレを飲ませます」

フェイトのもう片方の手には一升瓶があった。
銘柄は『久保田』と書かれていた。

「わ、私も飲むんですか!?でも、私未成年で・・・」

ギンガは慌てるが、ポンと肩を叩かれたので振り向いた。
そこには、すでに頬を染め、できあがっているはやてがいた。

「安心しい！この店は私らいきつけの店や！多少のわがままはなんとかなる！！」

「いや、犯罪でしょ、それ・・・」

近藤は呆れていた。

「んなことどーでもええねん！それより近藤さん！あんたなにジュースなんか飲んどんねん！？男やろ！大人やろ！酒飲まんかい！！」

はやてはズイッとビールの入ったグラスを近藤に突き付ける。

「いや、俺は・・・」

近藤は断ろうとした。

だが、相手は酔っ払い。理性などとうに飛んでいた。

「なんや？部隊長の酒が飲まれへんのか？ああーん？」

理不尽攻撃が近藤を攻める。

はやての横ではフェイトもジト目で見ていた。

近藤は困り果てた。

そこへ、シグナムが近寄ってきた。

近藤はホッとした。

シグナムは悪酔いしているはやてを止めにきてくれたのだと思ったのだ。

だが、現実は残酷である。

「近藤。飲め。これ、命令」

シグナムはインディアンみたいなカタコトの言葉を発した。

よく見ると、目が据わっている。

先程までシグナムのいたところを見ると、数え切れない程のビンが

転がっていた。
乾杯といってまだそれほど時間は経っていない。
どんなペースなんだろうか？
近藤はため息をついた。
「・・・どうなっても知りませんよ」
近藤ははやての持っているグラスを受け取り、口をつけた。
瞬間、近藤はバターンと前のめりに倒れた。
「え！？うわ、こ、近藤さん！？」
いきなりの事態に酔いが一気に醒めたはやては、倒れた近藤に駆け寄った。
「・・・寝てる？」
はやてが近藤の顔を覗き込むと、近藤は顔を真っ赤にして寝息をたてていた。
「・・・お酒弱いとは聞いてたけど、これほどとは・・・」
そう、近藤はアルコールにめっぽう弱いのだ。
世間一般でいう下戸（げこ）である。
リンディから近藤が下戸だと聞いていたフェイトでもビックリしていた。
まさかビール一口でダウンとは。

「人は見かけによりませんね」

ギンガもビックリしていた。

「情けない。こいつ、へたれ」

まだカタコト言葉のシグナム。

近藤のまわりが騒がしいので、離れた所で飲んでいたなのは達も輪にはいる。

「・・・意外だ」

ヴィータが驚いていた。

確かに、この厳ついナリで下戸は意外性抜群である。

「なんていうか・・・近藤さんてこういうところがかわいいよね」

なのはがワイングラスを持ち、シャマルが赤ワインを注ぐ。

フェイトはなのはの言葉にピクリと眉を動かす。

「そうねぇ。普段仕事なんかはバリバリやるしっかり者なのに、変な所がダメな人ってなんか守ってあげたくなるわねぇ」

シャマルは赤ワインをなのはのグラスに注ぐと、今度は自分の持つグラスに注ぎ、一気飲みした。

「あ、わかるわかる！そうやな～、近藤さんてわりと天然やしな～。この前なんかバケツに足つっこんで取れへんいうて、バケツ履いたまま歩いてんの見たで！」

「あ、それあたしも見た！確かあの後ペンキ塗り立てのベンチ座って制服がペンキだらけになってた！」

「ほんまか！？近藤さんは歩くドリフやな～！」

はやてとヴィータが近藤の赤裸々な過去を暴露する。
近藤が聞いたら卒倒するだろう。
それを聞いて大笑いするなのはとシャマル、そしてギンガ。
シグナムは手酌で黙々と飲み続けていた。

「私は訓練中に近藤さんに鳥の糞が落ちたのを見たな・・・ダイレクトに頭に」

「エンガチョ～！！」

「そういえばこの前メディカルルームに来られたときに、おなかが痛いって言って、頭押さえてたわね」

「ぎゃはは！！近藤のおなかは頭にあるのか！？」

「私は隊舎の柱にぶつかって柱に謝ってたのを見ました！」

「めちゃめちゃドジッ子さんやんか！！」

次々と近藤の知られざる、知られたくない恥部が暴露されいく。
そういえばフェイトも、以前近藤がボーっとしてボソッと「口からゴキブリとかないわ・・・」と呟いていたのを聞いたことがあった。
少々グロイので思い出したくないし、口にも出さなかったが。

なんだか、近藤の評価がうなぎ登りである。
フェイトは危機感を覚えた。

そうか、この人は自分から女性にアピールしてるんじゃなくて、気付かずやってるんだ。
これにピッタリな言葉を聞いたことがある。

そう、『天然フラグメーカー』だ。

・・・余計タチが悪い。

もう読んでいる方はわかっていると思うが、今回のこの『ギンガ歓迎会』の発案者はフェイトである。
リンディから聞いた情報によると、近藤は酒に弱く、しかも酔うと普段とは正反対に明るくなり、ベラベラとイロイロ喋りまくるそうだ。
その時に、近藤の女性の好みや、知らないプライベートな事を聞けばいい、というのが作戦プランだった。
だが、当の近藤は潰れてしまった。
これは予想外である。

さてどうしよう？
フェイトがそう悩んでいると、俯せで寝ていた近藤がおもむろに起き上がった。

「・・・・・・」

顔が真っ赤な近藤は周囲を見回す。
そして、突然大声を出した。

「おめーら俺の気持ちにもなれよなー！！」

いきなりのことに驚く一同。

「ちょっと、一列に並べ、正座で！」

近藤は自分の前を指差し、座るように指示する。
なのは達はよくわからないが、近藤の言う通り一列に並び、正座した。

「俺がどんだけ苦労してるかわかるか？あ？おい、はやて隊長、俺の悩みわかるか？」

近藤は据わった目ではやてを睨む。
はやてはタジタジだ。

「え？えーと、仕事が多いこと？」

「ちげーよ！バカタヌキ！ほれ、次、なのは隊長！」

「バカタヌキ・・・ああ、なんやろう・・・ゾクゾクする・・・」

はやてをバカタヌキと言い放つ近藤は、なにやら身悶えているはやてからなのはに照準を変えた。

「えぇ！？・・・んー・・・エレノアさんのわがまま？」

「・・・あながち間違ってないけど、違う！今の俺の気持ちはソレじゃない！・・・じゃあ、ほれ、悪魔の隣の幼女」

「あ・・・悪魔・・・ひどい・・・」

なのはは悪魔と言われてへこんだ。

そして、幼女と言われたヴィータは怒った。

「てめー！近藤！！誰が幼女だ！！」

「おめーだよ。なんか文句あんのか、あぁーん？」

近藤はヴィータに超至近距離で凄んだ。

「・・・ないです。スイマセン」

ヴィータが折れた。

ヴィータはよく知っている。酔っ払いに正論、常識は通用しないということを。はやての酒乱で痛いほど身にしみていた。

決して近藤の顔にビビったわけではない。断じてない。

「あー、もういいや。俺が答え言っちゃう！おめーらもう少し男の目を気にしろ！！」

「え？どういうことですか？」

シャマルが首を傾げた。

「なんだ、一から全部言わないとわからんのか！？このエロ保健医！」

「エ、エロ!?わたし、いやらしくないもん!!」

近藤の暴言に激しく抗議するシャマル。

だが、隣ではやて達は納得といった顔をしていた。

「確かに・・・エロいな」

「メディカルルームで保健体育を個人授業してくれそうだな」

「はやてちゃん!?ヴィータちゃん!?」

はやてとヴィータの物言いにショックを受けたシャマル。心の傷は深い。

皆アルコールが入りいつものテンションを振り切る陽気さである。

「あーもーうっせーぞエロ保健医!ようするにだ、自分を大切にしろと!俺は言いたい!!」

シャマル達を叱りつけ、近藤は拳を振り上げ叫んだ。

「毎日毎日毎日!あんたらみたいな女優顔負けでスタイル抜群の超美人がそばにいる俺の身にもなれ!挙げ句に無防備に俺に近寄ったり、過剰なスキンシップとったり!勘違いするだろうが!襲われたいのか!?持て余す!イロイロ持て余す!!もう俺の精神力はレッドゾーンだ!!」

なのは達は近藤の言い分に呆気にとられた。

だが心当たりはある。近藤は本当に人畜無害で、見た目を除けば全然男として見ていなかったと思う。

周囲には近藤以外の異性がほとんどいないので間隔が麻痺しているのだ。
ああ、そういえば何気なくボディタッチをしていたような・・・

「・・・ようするに、近藤さんは私達が美人だから、もう少し慎ましやかにしろといいたいのかな？」

「そーです！嫁入り前の女性なんだから、もっと節度を持たなきゃダメ！自分達がとんでもない美人っていうことを自覚しなさいよね！」

だんだん近藤の口調がお姉言葉になってきた。
理不尽に怒られているなのは達だが、実は満更でもなかった。
若干顔がにやけている。

「そ、そうかぁ、あたしらは美人なのか」

ヴィータは近藤の言葉をブツブツ呟いていた。

「ヴィータちゃん、違うよ。『女優顔負けでスタイル抜群の超美人』だよ！」

「もしくは、『とんでもない美人』やな」

なのはとはやてが緩みきった顔で言う。
何度でも言う。いい感じに酔っ払っているので皆テンションが高く、少し思考がおかしい。

「近藤さんて今酔っ払っとるんやろ？ほんならお世辞とかやのうて、本音言うとるわけか？・・・近藤さん、あんたええ人やなぁ・・・」

酒の酔いによるほてりとは違う熱さを顔に感じる女性陣。
良くも悪くも男が近寄らなかったなのは達は、ストレートに美人と言われた事がなかった。
まぁ、あるにはあるのだが、お世辞だと思い聞き流し、記憶を消去していた。
だが、こうもハッキリ面と向かって言われると、うれしいやら、恥ずかしいやらで、全員が照れていた。

「特に注意するのがあんた達二人よ！そう、あんた達！爆乳ピンクと巨乳ゴールド！」

近藤はシグナムとフェイトを指差す。

「人を戦隊ヒーローみたいに言うな！しかも爆乳とはなんだ！？や、やめろ、皆見るな！私の胸を見るなー！！」

いつの間にか口調が元に戻っているシグナムは、胸を手で隠す。だが、大きすぎるので隠れない。
それをいやらしい目でジーっと見るはやてに、何故か睨むヴィータ。

「きょ、巨乳ゴールド・・・」

フェイトは顔を真っ赤にして自分の胸を見た。
人より大きいのは自覚があったが、実際巨乳という単語を言われると、急に恥ずかしくなってきた。

「そのけしからん二つの山が凶悪な武器になっていると何故自覚しない！？」

「近藤さん、ええこと言うた！そうや、あんたら二人は凶悪な兵器を抱えて生きとるいうことを自覚せなあかん！」

はやてが近藤に賛同してきた。

「ところで、近藤さんは大きい胸は好きなんか？」

「大好物です！！」

はやてと近藤が固く握手した。

「でも小さいのも大好きです！」

「このー！節操無しめー！」

はやてが肘で近藤のわき腹あたりをグリグリする。
近藤とはやてがイチャイチャしだした。
もう一度言う、皆酔っ払っている。
だからキャラが崩壊するのも致し方ないのだ。
それを見たフェイトは、慌てて話しの話題を変えた。

「こ、近藤さんのタイプってどんな人ですか？」

## 第５９話（前書き）

なんというか・・・すいません。

グダグダな上に、話が急展開です。

まあ、これも二人らしいっちゃあらしいということで。

# 第５９話

「こ、近藤さんのタイプってどんな人ですか？」

いきなりフェイトがそんな事を言い出した。

「いきなり全然違う話題やなあ・・・強引なフェイトちゃん萌え！」

はやてはおかしい。

これは酔いだけではない気がする。

「俺のタイプの女性ですか？うーん・・・」

近藤はフラフラしながら腕を組んで悩みだした。

「・・・料理できる人ですかねぇ？オレが料理できないんで」

フェイトは料理と聞いて、小さくガッツポーズをとった。

「ちなみに、料理できないってどれくらいできないの？」

なのはがなんとなく聞いてみた。

「どれくらい・・・あ～・・・竜の丸焼きくらいなら・・・」

「あ、わかりました。もういいです。ごめんなさい」

近藤が顎に手を添えて考え込んでいたが、出てきた答えがやけにサバイバル全開だったため、これ以上聞いたらダメだと直感的に察知し話を切り上げた。

「あとは？」

「あと？んー・・・あとはサソリとか・・・ヘビとか・・・」

「いえ、そっちじゃなくて、近藤さんのタイプ！ほら、見た目とか、性格とかあるじゃないですか」

フェイトはなんとか情報を聞き出そうと必死だ。

横ではなのは達がニヤニヤしている。

「見た目・・・あんまり気にしないんですけどねぇ。性格は、大人しい人がいいですね。物静かで、気の利く人ですかね？俺がズボラなんで、しっかりした人が望ましいです」

はやてとなのはは近藤の言うタイプの人を思い浮かべた。

「・・・おもいっきりフェイトちゃんやんか」

「そうだねぇ、料理できて、物静かで気が利くもんねぇ」

二人はフェイトと近藤を見てニヤニヤしだした。

フェイトは顔が真っ赤である。

しかし、あることを思いだし近藤に詰め寄った。

「で、でも！近藤さんは嘘を言ってます！本当はセクシーな人がいいんじゃないんですか！？た、例えばマセラティさんとか・・・」

「なんだ？嫉妬か？」

ヴィータがウィスキーを飲みながらニヤニヤ笑いながらフェイトを冷やかす。

だがフェイトにとってそれは冗談では済まない死活問題なのだ。

「せやなぁ、たしか近藤さんマセラティ二尉にアプローチかけられてデレデレしとったなー」

はやても近藤を冷やかす。

「私だって、イロイロやってるのに！近藤さんの反応薄いし！なんでなんですか！？」

フェイトはプリプリ怒った。

なんということでしょう、フェイトが超攻撃型になっている。

口すっぱく言うが、皆酔っ払っている。

だから、普段おしとやかなフェイトもアグレッシブに攻撃するのだ。

「それは・・・俺も男ですし、あんな美人があんな風にからんできたら・・・ねえ？」

近藤は助けを求めるためにはやてを見たが、はやてはぷいっとそっぽを向いた。

「私を見んといて。男心なんかわからんわ！・・・言うてて悲しい

なってきた・・・」

落ち込むはやての肩をポンポンと叩き慰めるなのはだったが、そのなのはも男心など全然わかっていない。

「いや～、ドゥーエ二尉って美人でエロいじゃないですか」

「そりゃ・・・私はドゥーエさんみたいに美人じゃないかもしれないですけど・・・」

フェイトがゴニョゴニョと呟く。

「フェイト隊長は十分美人です。美女です。まあここにいる方全員それは言えることですが」

近藤は真顔でそんな事を言う。まあ、酔っ払っているのだが。

そして、また照れる女性陣。

「先程も言いましたが、これでも我慢してるんです。ドゥーエ二尉のアレは、油断してたんです。俺達は一緒に仕事をする仲間です。たとえ好意を持っていたとしても、公私は区別しなければならない」

フェイトは近藤の言葉にうっと言葉を詰まらせる。

徐々に自分が悪い事をしているような気がしてきて、シュンとしてしまう。

そこへ、シグナムが助け舟を出す。

「ちょっと待て。ということは、お前はテスタロッサのアプローチにドキドキしつつも我慢しているという事か？」

フェイトは思いっきり顔を上げた。
目が爛々としている。

「当たり前じゃないですか！フェイト隊長に想われてなんとも思わない男は不能かホモです！！」

「・・・なんだろう、その言い回しは素直に喜べないよ・・・ていうか、それセクハラじゃあ・・・」

フェイトは喜んでいいのかわからず、曖昧な表情をした。
そこへ、シャマルがフェイトの肩をガシッと掴んできた。
すごい力だ。酔うと力の制御が難しいらしい。

「フェイトちゃん！近藤さんは鈍いのよ！もっとストレートに言わなきゃ動揺してくれないわ！！」

少し趣旨がずれているような気もするが、確かに近藤が悉くを受け流して平然としているのは面白くない。

「ほら、言っちゃいなさいよ！ユー言っちゃいなＹＯ！（男性への）ファーストキスを捧げたって！！」

シャマルのテンションは振り切れているようで言動がおかしい。
しかし、とんでもないことを口走ってくれた。
フェイトは反論もできず、アウアウを口を開けるのみである。

「え！？ファーストキス！？てっきり挨拶感覚で何人もやってるものだと・・・」

近藤は焦りだした。

フェイト程の美人なら、何人かの異性と付き合い、キスくらい何度も済ませてるものだと思っていた。

「だって・・・昔は恋ってよくわからなかったし・・・仕事が忙しくてそんなことに余裕なかったし・・・」

フェイトは胸の前で指をくるくるまわす。

はっきりいって、ファーストキス（男には）ということは知られたくなかった。

なんというか、１９にもなってキス一つもしていないなどというのは、重い女とか、固い女とか思われそうだからである。

しかし、知られてしまったからには仕方が無い。

しばらくして、ある決意を持ってフェイトはバッと顔を上げ近藤を直視した。

その眼差しは真剣そのものである。

「私は、近藤さんが好きです！でも、近藤さんから返事を聞いていません。今、返事をください！！」

酒の力も借りて、今日のフェイトは大胆である。

まわりから、おおーっと歓声があがる。

近藤はギョッとしたが、腕を組みしばらく考え込んだ。

「・・・俺には恋愛の好き嫌いというのがよくわからないんですよねえ」

この言葉になのは達は驚いた。

近藤は、フェイトの告白や愛情表現になんの感情も湧かないといったのだ。

フェイトの顔が曇る。

体よくフラれた形になったのだ。ショックは大きいだろう。
いままでの行為は一体なんだったのだろうか。
自然となのは達の近藤を見る目が厳しくなっていく。
でも、と近藤は言葉を続ける。

「でも、フェイト隊長やエリオ、キャロとはずっと一緒にいたいと思っています。」

フェイトは我が耳を疑った。
近藤は今なんと言っただろうか？

フェイトがもう一度聞こうとしていると、横で険しい顔をしていたはやてが一変して満面の笑みで、近藤に先程の言葉の確認をとった。

「近藤さん、ずっと一緒にいたいいうのは、ようするに『一生フェイトちゃんと共に生きたい』いうことやろか？」

フェイトはゴクリと喉を鳴らした。
よく見ると、はやてやなのは、全員が緊張した面持ちだった。

「・・・そうですねぇ。確かにフェイト隊長と一生共にするのもいいですねぇ」

近藤は赤い顔でフラフラしながら言った。

途端、一斉にワッと歓声があがった。

「プロポーズやー！！」

「おめでとー！！」

はやて達が拍手と祝いの言葉を送る。
シャマル等は涙ぐんでいた。
そして、今回の歓迎会ね主役のギンガはというと、驚きのあまり、硬直していた。

「ま、まさか他人のプロポーズを生で見るなんて・・・」

ギンガの顔は酒を飲んでいないのに真っ赤に染まっていた。

フェイトはいきなりのプロポーズにより、嬉しさと驚きで混乱していた。
自分達は、まだ付き合っているかも怪しい。
それなのにプロポーズをうけた。
普通ならばこれは冷やかし、冗談、もしくは異常なことだろう。

だが、嬉しいと思う自分がいる。

喜んでいる自分がいる。

自分も近藤と共に生きたいと　思っている。

フェイトの目から、一筋の涙が頬を伝った。

そんな感動のなか、酔っ払っている近藤はこの状況が理解できていない。

フラフラしたあしどりでフェイトに近づき、ポンとフェイトの肩に手を置いた。

「フェイト隊長」

「こ・・・近藤さん・・・」

近藤とフェイトが見つめ合う。
はやて達のボルテージはマックスになり、「キース！キース！キース！キース！」と連呼している。
皆が食い入るように見つめる。顔は真っ赤だ。
フェイトは目を閉じ、少し顎をあげた。
キスか！？するか？するんでっか！？
周囲は期待に満ちた目で成り行きを見守る。
しかし、忘れてはいけない。
近藤が酔っ払ってフラフラだということを。

「パンツください」

「・・・へ？」

「いま履いている生パンツください」

「えー・・・と・・・ん？」

あまりの斜めにいく言葉にフェイトは反応できなかった。
フェイトのドキドキと高鳴る鼓動が急激に静まり、ほてった顔も冷め、体の熱が下がっていく。
はやて達の冷やかしはピタリと止まり、顔が青ざめていく。
フェイトの思考がクリーンになり、近藤の言葉の意味を考え、聞いた。

「近藤さんは、私の下着を手に入れてどうするんですか？」

近藤が素面（しらふ）ならば、この状況を回避できただろう。だが、今の近藤はただの酔っ払いである。
用意されている選択肢から、最悪の回答をだした。

「食べるんです」

ブツン

なにかが切れる音がした。

いつの間にかフェイトの手にはバルディッシュ・ザンバーが握られていた。

フェイトはゆっくりとバルディッシュ・ザンバーを振りかぶった。

それと同時に近藤は酔いのあまり立つこともできず、その場に崩れ、そのまま寝てしまった。

「・・・・・・」

フェイトはバルディッシュ・ザンバーを振りかぶったまま固まった。
近藤は寝息をたてて寝ている。
微妙な空気が部屋に漂う。

「・・・飲もう」

ヴィータが重苦しい空気の中、言葉を発した。

「・・・せやな！もう飲むしかない！飲もう！！」

はやてが無理矢理場を盛り上げ、なのはやギンガ、シャマルもそれにのった。

フェイトはバルディッシュを待機モードに戻し、俯いていた。表情は伺えない。
そこへ、シグナムがポンと肩に手を置いた。

「テスタロッサ、近藤を好きになるということは、こういう理解できない部分も知らなければならなくなるのだ。こいつはあまり自分の事を話さないし、見せないからな。これからもっとこういうのが

暴露されるぞ」

シグナムは憐憫の眼差しをフェイトに向けた。

「・・・まぁ、なんだ、がんばれ」

励ましの言葉と共に、シグナムはビールの入ったグラスを渡した。

フェイトはバッと顔をあげ、ヤケクソ気味に叫んだ。

「近藤さんのバカーッ！！」

その日のギンガの歓迎会は凄まじい量のアルコール摂取により、その居酒屋の売上最高記録をマークしたという。

当然、翌日皆二日酔いになり、まともな仕事ができず、機動六課は開店休業状態だった。

そして、その日以降、ギンガの歓迎会に出席していたメンバーの近藤を見る目が厳しいものになったのは言うまでもない。

そんな厳しい視線を向けられる近藤を見て、エレノアは苦笑していた。

歓迎会から数日後、近藤とフェイトはオフィスルームでデスクワークに勤しんでいた。
フェイトはあの日以来、近藤とあまり話しをしていない。
そのため、オフィスルームでも、重苦しい沈黙が流れた。

「あの、フェイト隊長？」

近藤がフェイトに声をかけると、フェイトはビクッと肩を震わせた。

「・・・なんですか」

あれから近藤と少し距離をとっているフェイトは、どこかよそよそしい。近藤とも目を合わせない。

「その、ナカジマ陸曹の歓迎会のことなんですが、実は俺ビール飲んでからの記憶ないんですよ」

「え、そうなんですか？」

じゃあ、一生共に生きたいと言ったことも、パンツくださいって言ったことも覚えていない？
フェイトはほっとしたやら、ガッカリしたやらで複雑な心境だった。

「あー、それでですね、俺何かおかしいこと言いませんでしたか？・・・例えば、下着もらって天日干しするとか、食べるとか・・・」

「・・・っ！」

フェイトは言葉を詰まらせ、ビクンと体を強張らせた。

近藤はその態度でわかってしまい、急いで立ち上がり、頭を下げた。

「すいませんでした！不快な思いをさせてしまいました！」

いきなり頭を下げた近藤に、フェイトは困惑した。

だが、フェイトは確かめなければならない。

近藤の言葉の真偽を、そして、理解しなければならない。

フェイトは意を決して近藤に聞くことにした。

「こ、ここ近藤さんは、そ、その・・・女性の下着を・・・その、た、たたた食べるのが好きなんですか！？」

その言葉に近藤は焦った。

「ち、違います！俺はそんな変態行為はしません！第一、下着なんか食べたら体に悪いと思うんですけど・・・」

近藤の言い訳は最後によくわからない事を言った。

そのニュアンスだと、体に悪くなければ食べるというふうに聞こえる。

「じゃ、じゃあ、なんであんなこと言ったんですか？」

フェイトはまだ近藤の言うことを信じる事ができず、引き気味だ。

そんなフェイトを見て、近藤はガシガシ頭をかいた。

「実はですね、俺アルコールに弱いんです」

「知ってます。でもビール一口でもダメとは思ってもいませんでし

たけど」

「あー・・・それで、ですね、俺は酔うとどうも下着を食べるとかなんとかそういう系統を言うのが口癖らしいです・・・」

「・・・はあ？」

近藤はヘコヘコ頭を下げながら言い訳する。
フェイトは呆れた。

・・・なにその究極に迷惑は口癖？
しかも系統って・・・食べるの他にどんなバリエーションがあるのだろうか？
・・・いや、考えるのはよそう。聞くのもよそう。
あとで絶対後悔する。

「エレノアとか、リンディさんから言われたんです。酒に酔うと変な誤解受けるから飲むなって」

「リンディ母さんからも言われたんですか！？」

聞いてない・・・

忘れていたのか？
いや、あの人の事だからわざと言わなかった可能性がある。
しかもエレノアさんも知っているという。
そういえば歓迎会には参加していなかった。
こうなる事がわかっていたから参加しなかったのだろう。
言ってくれればよかったのに・・・

「じゃあ、近藤さんは、別にそういう性癖があるわけじゃあ・・・」

「断じてありません！嘘つきません！」

近藤は必死に謝り、弁解する。
その必死さから見るに、どうやら本当に違うようだと思った。
しかし、本当に迷惑な話しである。
酔った勢いとはいえ、フェイトは近藤に改めて告白し、近藤も応えてくれた。
その幸せな雰囲気をぶち壊す最低な口癖・・・

フェイトはため息をつき、ピンとあることを思いついた。
口角が少し上がり、いたずらっぽい笑みを浮かべている。
あれだけ自分やなのは達に迷惑をかけたのだから、少しはお灸を据えてやる必要がある。

「近藤さんは記憶が無いって言ってましたけど、皆の前で私にプロポーズしたのも覚えてないんでしょうね？」

「・・・！？」

近藤は驚愕の表情でフェイトを見た。
声が出ずに、金魚のように口をパクパクとしている。

「・・・酔った勢いで嘘を言ったんですか？」

フェイトは近藤をまっすぐ見る。
平然とした表情をしているが、内心はドキドキものである。

もし、本当に嘘だったら？
近藤の答えが聞きたくない。
フェイトは怖くなった。
近藤に否定されるかもしれない。
酒の席の冗談だと、そんな気は無いと言われるのが怖かった。
それがなによりも、どうしようもなく恐ろしかった。

でも・・・

もし・・・

近藤は天井を仰ぎ、眉間に皺を刻んだ。
そして、大きく深呼吸した。

「・・・フェイト隊長」

近藤はフェイトを見つめた。

「・・・はい」

フェイトは緊張した面持ちで、近藤の次の言葉を待った。
期待と恐れを抱きながら。

「俺は・・・恋愛で人を好きになるというのがわかりません」

「・・・はい」

それは、先日と同じ答え。
フェイトは息が詰まり、胸の前で手を祈るように組む。

「ですが、フェイト隊長とはずっと一緒にいたい。そう思います」

フェイトは目をつむる。
顔が熱くなってくる。
高鳴る胸の鼓動を抑えるように、深呼吸する。

「・・・近藤さん、それは、私と『一生、共に生きたい』ということですか？」

フェイトは自分の胸を押さえる。
声が少し震えていた。
早鐘のように鳴り続ける鼓動がうるさくて、近藤の言葉が聞き取れないかもしれない。なんだか体がフワフワして何も考えられない。

近藤はまっすぐフェイトを見据え、小さく頷く。

「『あなたの傍らで共に歩み、生きたい。』それが、俺の偽りのない気持ちです」

フェイトは目を開け、近藤を見つめた。

そして、近藤の言葉で胸がいっぱいになっていく。

暖かくなっていく。

幸福感に包まれる。

ああ

私は

本当に

この人のことが

好きなんだ

フェイトの目に涙が溢れる。

うれしくて、うれしくて、うれしくて。

ただ

うれしくて。

「・・・私も・・・です・・・」

フェイトは近藤の肩に頭をのせ、静かに泣き続けた。
近藤は、そんなフェイトの頭を優しく撫でてやった。

二人だけの時間が流れていく。
だが、二人は忘れている。
ココが機動六課で、まだ就業時間中であるということを。

「真・プロポーズやー！！」

いきなりの叫び声に近藤とフェイトはビックリする。
周囲を見渡すと、はやてやなのは、機動六課の隊員が大勢いて、囲まれていた。

一斉に拍手が巻き起こる。

「おめでとー！」

「お幸せにー！！」

祝福の言葉が飛び交う。

近藤は頭をガシガシかき、恥ずかしそうに俯き、顔を赤くした。

フェイトはそんな近藤を見て、クスリと笑った。

「これからもよろしく、だ、大輔、さん・・・」

フェイトは茹蛸のように顔を赤くして近藤の名を呼んだ。

「あ、うん、よろしく・・・フェイト、さん」

近藤も恥ずかしそうに頬をポリポリとかきながら、名を呼んだ。

## 第６０話（前書き）

なんというか、また無理やりな内容になってしまいました。

もっと心象をはっきりわかりやすく書けたらなあ・・・

# 第６０話

いつものように朝を迎え、いつものように仕事をする。
人間が生きていくための行為である。
仕事の内容は人それぞれである。
子供ならば、学校で勉強や、食事をたくさん採り体を成長させていくこと、寝る事だろう。
大人ならば、自ら生きていくために働く。養うために働く。
人によって違うのは、心象かもしれない。

「大輔さん？体調でも悪いんですか？」

朝練の途中、フェイトは隣でボーッとしている近藤を見てそう言った。
いつも口数は少ないながらも、フォワード達の行動を細かく観察しているはずなのだが、どうも心ここにあらずといった感じだったからだ。
顔色も若干悪いように見える。

「フェイト隊長、お気遣いありがとうございます。俺は大丈夫ですから」

近藤はペコリと頭を下げる。

近藤とフェイトは、お互いを名前で呼ぶようになった。

大輔さん、フェイトさんと。

近藤がフェイトを呼び捨てしない、いや、出来ない所が近藤のヘタレ具合を表している。

フェイトも、本来親しい人物には呼び捨てなのだが、近藤は自分より7歳も年上だし、近藤自身がフェイトを呼び捨てしない事からさん付けで呼んでいる。

だが、近藤は公私混同はいけないと、業務中はいままで通り敬語で話している。

意外と細かいところで頑固である。

「でも、なんだか顔色もすぐれないようですし、体調が悪いんだったら休んでくださいね？」

「・・・少し寝不足なだけです。ご心配なく」

フェイトは心配そうに言うが、近藤はなんでもないとバッサリだ。

実際、近藤が仕事を休むととんでもない量の書類がまわってくるから軽はずみに言ってはいけないのだが、フェイトはどうも近藤が気になってしかたがなかった。

その理由の一つとして、近藤はあまり自分から話をしようとしないことが上げられる。

フェイトも別に近藤と一緒にいられるならそんなことは瑣末な事と思っていたが、実際近藤には謎が多い。

過去の経歴も謎が多いし、それを語ろうともしない。

特に、最近はちょくちょくいなくなることがあった。

それでも2～3時間すればいつの間にか戻っていたりするのだが、

近藤はそのいなくなっていた理由を話さない。
自ら話さないため、聞くのも野暮というものだが、やはり気になる。
まぁ過去のことはいい。近藤は良い意味でも、悪い意味でも特殊である。そして、その過去はとても大事なことで、おいそれと聞いていいものではないからだ。
だが、今の近藤は顔色も悪く、集中力に欠け、明らかに体調不良である。
それでも近藤はなんでもないという。

もっと頼ってほしいな・・・

フェイトは近藤を見て心の中でつぶやいた。

朝食を採っていると、いつもとは違和感のある光景があった。

近藤の隣に座っているエレノアの食事量が、いつもより遥かに少ないのだ。
エレノアの前にあるのは、食パン3斤とバケツのように巨大な器に入っているスープ、山積みされているベーコンエッグだった。

いつもの半分もない。
そして、時折聞こえるため息。
いつも明るい表情のエレノアが今日は憂鬱そうだった。
だが、近藤はそんなエレノアを気にすることもなく、野菜ジュースをチビチビ飲んでいた。

近藤とエレノアの異変に気付かないものはいない。
皆心配そうに声をかけるのだが、二人とも大丈夫だから、平気だからと返すのみである。

エレノアは近藤が元気がない理由を知っている。
本人の口から聞いたわけではないが、わかってしまう。
反対に、近藤はエレノアの悩んでいる事はわからない。自分のことでいっぱいいっぱいのため、気が回らないのが本当のところだが。

「ご主人様、お話があります」

朝食を採った後、エレノアは近藤を呼び止めた。いつものおちゃらけた雰囲気ではなく、ピリピリと空気が張り詰めていた。
ただならぬ雰囲気をかもし出すエレノアに、近藤は素直に従い、エレノアの後に付いていった。

近藤とエレノアは宿舎の近藤の部屋で向かい合っていた。

テーブルを挟んで相対し、椅子に腰掛けている。
お互いのコップにはコーヒーが湯気をたてていた。

しばらく無言だったが、エレノアが始めに口を開いた。

「私はご主人様が何に悩んでいるのかわかっていますよ」

近藤の肩がピクッと震えた。

「私から言えるのは一つだけです」

真剣な表情から一変し、慈愛満ちる聖母のような笑顔で近藤を見つめる。

あなたは幸せになっていいんです

エレノアの言葉に近藤はうろたえた。

キョロキョロと視線をさ迷わせ、顔色もみるみる青くなっていく。

「たとえ、ご主人様が自分を許せなくても、フェイトちゃんは許してくれます。包み込んでくれますよ」

自分が許せない。

エレノアの言葉の意味が近藤にはわからなかった。

そもそも、何がゆるせないのかがわからない。

だが、近藤の口からは全く違う言葉が出た。

「俺は怖い・・・」

近藤は自分が発した言葉に驚いた。

怖い？

何が？

自問自答する。

「ご主人様がフェイトちゃんより先に死ぬこと？」

エレノアの言葉に近藤は首を横に振る。

「死ぬことに恐怖なんかない。・・・俺が死んで悲しむフェイト隊長が怖い・・・」

近藤は独白するようにしゃべり続けた。

「俺はダメな人間だ。最低で傲慢で怠惰な人間だ。そんな俺に好意を持つ人間なんていないと思ってた。なのに、フェイト隊長は、エリオは、キャロは俺を好きだと言った。ずっと一緒に居たいといってくれた。・・・俺は怖い！俺は皆を裏切ってしまう！俺が死んで悲しむ人がいる、それが怖い！」

近藤は頭を抱えて叫んだ。

自分の死で悲しむ人がいる。

それは、いままででは考えられなかったこと。

けなされても、忌み嫌われても、どんなにひどい嫌がらせを受けても平気だった。

でも、悲しまれるのは我慢できなかった。

近藤は自分の死期を知っている。

それは、最初に知った未来。

死ぬことは摂理だ。
生まれたものは、死ぬために生きる。
当然の摂理であり、真理であり、この世でもっとも尊く、美しいことだ。
近藤はそれが普通の人より少し早いだけ。
それだけなのだ。
そう、思っていたのに。

フェイトの悲しみに染まる顔を思い描いただけで、胸が締め付けられる。吐き気がする。
いやだ、フェイト隊長のそんな顔は見たくない！

「・・・ご主人様、あなたは卑怯です」

悩み苦しむ近藤にエレノアは無情の言葉を放った。

「ご主人様はフェイトちゃんのせいにしています」

違う！
近藤は反論しようと、顔を上げた。
だが、喉元まできていた言葉がでてこない。

「ご主人様は一度でも自分から行動を起こしましたか？フェイトちゃんの好意に甘えて、あなたは一度でもフェイトちゃんに好きと言いましたか？」

エレノアの言葉に近藤は言葉がでない。

「フェイトちゃんのこと、好きなんでしょう？」

わからない。
好きになるということがわからない。

「わからないんじゃありません。目を逸らしてるんです。怖いから。嫌われるかもしれないから。嫌われるくらいなら繋がりを持たないほうがいい、そう思ってるんです」

エレノアは立ち上がり、近藤のそばまで近付いた。

「甘えるなよ！近藤大輔！！」

エレノアは叫ぶ。
その顔は怒りに満ちていた。

「何を逃げている！繋がりを持ちたいのに、嫌われるのがイヤだから拒絶する？それはフェイトちゃんへの侮辱だ！！」

エレノアは近藤の胸倉を掴み、近藤を持ち上げた。
華奢な女性の体格では想像もつかない力をだし、エレノアは片腕で近藤を座っていたイスから力ずくで立ち上がらせた。

「もっと信じてあげなさい！もっと頼ってあげなさい！もっと困らせてあげなさい！」

エレノアは近藤を叱りつづける。
そして、近藤の瞳は揺れ動く。

「逃げるな！フェイトちゃんと向き合え！自分と向き合え！自分の気持ちを麻痺させるな！」

まくし立てるエレノアに、近藤は揺さぶられる。
心が、想いが揺れる。
そして、エレノアは怒り顔から一転、パッと笑顔に変わり、掴んでいた胸倉も離す。

「ま、気づいてるからこそ最近一人であそこに出掛けてるんでしょ？」

ギクリとした。
頬に先程までの気持ちとは違う汗が伝う。

「なんで知ってるかって？そりゃ私はご主人様のデバイスだし？一心同体、みたいな？」

ニヤニヤといやらしい顔をするエレノアに対し、近藤は顔を赤くする。

近藤は悩んでいたのだ。

自分の心の中でフェイトの存在が大きくなっていることに。
彼女と居たいと、思っている。
もっと触れ合いたいと思っているのだ。

でも怖かった。
フェイトに裏切られることに。
フェイトが悲しむことに。

でも、それは近藤が勝手に思っていたこと。
近藤はフェイトを信じていなかったのだ。
フェイトとの繋がりを失うことが怖くて、ならば、最初から繋がりを持たなければいいと。
言い寄って来るのは相手の勝手だと。
そうすれば、傷は負わなくてすむ。

だから、甘えたのだ。

「もう少しフェイトちゃんを信じてあげなさい。ご主人様がアレを渡して断るはずないんだから」

「う・・・ん・・・」

呆れ返るエレノアの声に、モジモジとする近藤。

「・・・もっと自信をもちなさいな。あなたは幸せになっていいんです。たとえ、ご主人様の時間が残り僅かであっても、フェイトちゃんは受け入れてくれます」

エレノアはフォローを入れるが、いまだに近藤は踏ん切りがつかないようでモジモジしている。
そんな近藤に、エレノアはため息をついた。

「まったく、人間関係のことになるとてんでダメなんだから。普段の半分くらいの決断力をこっちにも使って欲しいものね」

エレノアの悪態に、近藤は縮こまるしかなかった。

「・・・ご主人様に話すべきか悩みましたが、私も決心しました」

エレノアは真剣な表情で近藤を見つめ、一呼吸おいた。

「ご主人様の知らない、私の知るアルハザードの知識、全てお話します」

「俺の知らない知識？」

近藤の問いにエレノアは頷いた。

その紅く深い色の瞳には、迷いなどなく、後悔もなく、近藤への信頼に満ちていた。

「歴史の真実、私の開発理由、アルハザードの王のこと、そして・・・」

魔王のこと

昼過ぎ、昼食を採ったエレノアは近藤と別れ、ヴィヴィオと共にいた。

ロビーでヴィヴィオに絵本を読み聞かせていたのだ。床では護衛の

ザフィーラが控えている。

「・・・それが大きくなって国になり、
一番住みやすい文明を創り上げ栄えさせることに成功しました
そして男はそんな人間達からこう言われるようになりました
王様　と
男は人間達の父親であり、母親であり、王様でした
いつしか男の名前が国の名前に使われるようになりました
そしてその国は「はじまりの国」とも呼ばれるようになりました」

「ほえ～」

そこへ、エリオとキャロが通りかかった。
ヴィヴィオが目をキラキラさせてエレノアの朗読を聞いていたので、
なんの絵本を読んでいるのか気になったのだ。

「エレノアさん、なんの絵本を読んでるんですか？」

エリオがエレノアに近付き絵本をのぞき見した。
表紙のタイトルには『はじまりの国』と書かれていた。

「あ、私フェイトさんに読んでもらったことある、それ」

キャロがそういうと、エリオも「僕も」と言った。

「ふむ、『はじまりの国』か。古代ベルカの戦乱の時代にもあったな」

ザフィーラがぽつりと呟く。

「え?そんな昔からある本なんですか?」

エリオが驚く。

「まあ、時代によって少々脚色が違うようだが、大筋は同じだな」

ひとりの男が家族をつくり、人が増え、いつしか国になり、男は王となった。

その過程が時代によって表現が異なっている。

時代によって倫理も変わるし、ニーズも変わるものだ。

「誰が書いたんですかね?」

「たしか、作者不明のはずだが・・・」

エリオの質問にザフィーラがそう言うと、エレノアはパタンと絵本を閉じた。

「この物語はね、淋しがり屋の男が思うまま我が道を進んで、いつしか国の王になった話。それを国民である作家が書いたの。その国は、国内では『はじまりの国』と呼ばれていたけど、周囲の国は別の呼び方をしていたの」

ザフィーラはエレノアの言わんとしていることが予測できたようで、驚いた顔をしていた。

そして、エレノアは国の名を言った。

「国の名は『アルハザード』。一人の男の願いが詰まった世界」

エレノアは愛おしむように絵本をなでる。
そして、何か思い付いたようで、慈愛に満ちた表情からひまわりのような笑顔に変わった。

「そうだ、いい機会だから、アルハザードの王が最初に作った魔法を教えてあげる！」

エレノアの言葉に一同は驚く。
ヴィヴィオだけは首を傾げていたが。
これは科学者が聞けば卒倒するようなことだ。

「そんな大したものじゃないわよ？だって彼が最初に作ったのは『歌』なんだから」

「歌？」

歌が魔法？
どういうことだろうか。エリオとキャロは首を傾げる。
聡明なザフィーラはなんとなくわかった。

「・・・確かに、歌は人間が作った最も簡素で、最も奥深い『娯楽』や『芸術』のひとつではある。詩（歌詞）を歌（唱）うというのを広く言えば、呪文も歌の一つだしな。・・・ふむ、実に興味深い」

ザフィーラの探究心に火がついたようだ。

「そのなかでも、王が一番好きだった歌よ」

エレノアは立ち上がり、手を胸の前で組む。
瞼を閉じゆっくりと息を吸い込む。

『Ｆｅｌｉｃｉｔａｓ　ｃｕｍ　ａｍｉｃｉｓ』
（あなたの喜びは　誰かの幸せと）

それは、とても神聖で

『ｃｏｍｍｕｎｉｃａｔａ　ｅｓｔ』
（分かち合えたしるし）

とても安らかで

『Ｔｒｉｓｉｔｉｔｉａ』

（あなたの悲しみは）

心が温かくなる

『ｅｓｔ　ｃｕｍｍｕｎｉｓ　ｄｏｌｏｒ』
（誰かの痛みを）

『ｃｕｍ　ｏｍｎｉｂｕｓ　ａｍｉｃｉｓ』
（分かち合えたしるし）

女神の奏でる歌

デスクワークをしていたなのははある変化に気が付いた。
レイジングハートが点滅を繰り返していたのだ。

「どうしたの、レイジングハート？」

なのはがレイジングハートを見る。

《ｓｏｎｇ・・・》

「歌？・・・ああ、なんか聞こえるね。・・・すごくやさしい歌・・・」

なのはがどこからともなく聞こえてくる歌に酔いしれるように聞き入る。

《Ｉ　ｄｏｎ'ｔ　ｋｎｏｗ　ｔｈｉｓ　ｓｏｎｇ.　Ｈｏｗｅｖｅｒ・・・，（私は、この歌を知りません。しかし・・・）》

「・・・何？」

《Ａｈ　ｔｈｉｓ・・・　ｉｓ　ｍｉｓｓｅｄ.　・・・Ｉｔ　ｍｉｓｓｅｓ　ｉｔ　ｓｏ・・・.　（ああ、これは・・・懐かしい。・・・そう、懐かしいです・・・）》

レイジングハートの声は、どこか楽しそうで、悲しそうだった。

『Ｐｅｒ　ａｓｐｅｒａ　ｖｉｔａ』

（道は険しくとも）

『ｂｅａｔａ　ｅｓｔ』
（何もないよりは素敵な人生）
『Ｃａｕｓａ　ｖｉｖｅｎｄｉ　ｏｍｎｉｂｕｓ』
（生きている証は　誰もが必ず持っているもの）

「・・・歌？」

スバルはティアナと共に自主練をしていたとき、ふとかすかに聞こえる歌に耳を傾けた。

「どうしたの、スバル？」

急に立ち止まったスバルに怪訝な表情を向けるティアナ。

「・・・うん・・・歌が・・・」

スバルは歌が聞こえてくる方向、機動六課の宿舎のほうを見つめる。

「歌？・・・あー、なんか聞こえるわね。綺麗な歌ね・・・ってスバル！？」

ティアナはスバルを見て驚く。
スバルは涙を流していたのだ。

「・・・え？・・・あれ・・・」

スバルも自分が泣いている事に驚いていた。
でも嫌じゃない。
悲しいけど、それだけじゃない。

「なんでだろう・・・聞いたことないのに、すごく懐かしい感じ・・・」

『Ｉｎｖｅｎｉｒｅ　ｃｒｅｄｅｒｅ』
（大切なのは　それを見つけることと）

『ｍａｇｎｉ　ｍｏｍｅｎｔｉ』
（そして　信じること）

隊舎内を共に歩いていたシグナムとヴィータは、何処からともなく聞こえてくる歌に聞き入っていた。

「これは・・・エレノア姉ちゃんか・・・」

「そのようだな・・・」

シグナムは瞼を閉じ、歌を聴く。
ヴィータは俯き、ごしごしと腕で目をこする。

「くそ！くそ！！なんだよ！なんで涙が出てくるんだ！？」

「・・・何故だろうな・・・」

シグナムの頬にも一筋の光が流れ落ちていた。
そして二人は気づかなかったが、二人のデバイス、クラーフアイゼンとレヴァンテインも点滅を繰り返していた。

『Ｆｏｒｅｓ　ａｐｅｒｉｅｎｄｉ』
（愛も　勇気も　希望も　すべて人の心にある　みんな　その扉が開くのを待っている）

『ｔｅｍｐｕｓ　ｅｓｔ』
（それを手にすることが　できたのなら）

エレノアの歌を直に聞いていたエリオ達は美しい歌声に酔いしれて

いた。

「綺麗な歌・・・」

キャロがうっとりしていると、隣ではエリオが涙を流していた。

「エ、エリオ君!?」

キャロは慌てるが、エリオの顔は悲しみではなく、どこか、安らぎのような表情だった。

「・・・なんでだろう・・・初めて聞く歌なのに、なんだか懐かしい歌だ・・・」

エリオは涙を流しながら、フッと微笑んだ。

ザフィーラも静かに涙を流した。

「・・・これが『歌』か・・・なんと心震える・・・なんと心地よいものか・・・」

ザフィーラは目を瞑り、エレノアの歌に聞き入った。

ヴィヴィオも、エレノアの歌が何を言っているのがわからなかったが、何故か懐かしい、心温まる、染み渡る歌を聞き、ぽろぽろと涙を流した。

「・・・おおさま・・・」

ヴィヴィオのかすれた声の呟きは、エレノアの美しい歌声に掻き消えた。

『ｃｅｒｔｅ』
（きっと世界はあなたのために　微笑んでくれるでしょう）

フェイトは何処からか聞こえてくる歌に何故か心振るえ、涙を流していたが、隊舎から少し離れたベンチで近藤を待っていた。
昼過ぎに、近藤からベンチで待っているように言われたのだ。

「なんであの歌がこんなに心を満たしてくれるんだろう・・・」

フェイトは聞いたことも無い歌に懐かしさを感じ、そしてその余韻に浸りながらハンカチで目を拭っていると、近づいてくる足音に気が付き、顔を上げた。
そこには、近藤が近づいてくる姿が見えた。

「すいません。お待たせしました」

近藤は謝りながらフェイトに近寄る。

「いえ、それよりこんな所で待ち合わせなんて、どうしたんですか？」

フェイトは若干赤くなった目を隠すようにハンカチで目を押さえていた。

「・・・？どうしたんですか？」

近藤はフェイトの目が赤いことに驚きつつも、フェイトに聞いてみた。

「・・・その、どこからか聞こえてきた歌に感動して・・・」

近藤は納得した。

「なるほど、エレノアの歌ですね？」

「・・・そういえばエレノアさんの声だったような・・・なんでわかったんですか？」

フェイトは驚きの顔で近藤を見ると、当の近藤は苦笑していた。

「・・・まあ、あいつの歌には『そういう魔法』がかかっているんです」

なんだかはぐらかされたような感じになったが、フェイトはとりあえずそれで納得した。

「それで？こんな隊舎から離れた場所で待ち合わせして、なにかあるんですか？」

フェイトが少し首を横に傾けた。
その仕草が可愛らしく、近藤はクスリと微笑むが、すぐに真剣な表情になる。

「・・・あの・・・」

「はい？」

すると、なにやら近藤がモジモジしだした。
目線をフェイトから逸らし、顔を赤くしたり青くしたりしている。
フェイトは近藤のその行動でなにか重要な事を言おうとしているのだろうと察し、近藤の次の言葉を待った。

無言の時間だけが経過したいく。
1分か、5分か、もっと時間が経っているような感覚もする。

だんだん近藤の顔から汗が噴き出し、苦しそうな表情にもなる。
どんな重要な話なのだろう？
フェイトも今度の雰囲気に呑まれ、緊張が感染してきた。
ゴクリと唾を飲み込む。
そして、近藤は意を決して顔を上げ、フェイトを見つめた。

「フェ、フェイトさん！」

「は、はい！」

いきなりの大声にビックリしたフェイトは、同じく大声で返事してしまった。

近藤は、制服のポケットから小さな箱を取り出し、バッとフェイトに突きつけた。

「・・・これは？」

フェイトは今度の手に乗っている小さな箱に手を伸ばし、箱を開けた。

「・・・っ！！」

箱の中には光り輝く指輪が入っていた。

「あ・・・あの・・・」

近藤はまたモジモジしだした。

だが、フェイトはそんな近藤を見る余裕もなく、ただ、手の中にある小さな箱の中の指輪に目を奪われていた。

（え！？これって・・・え！？うそ！？）

フェイトは血がみるみる顔に集まっていくのがわかった。

顔が赤くなってくる。

心拍数が上がる。

ドキドキと耳に鼓動がうるさく鳴り響く。

胸が苦しい。

ハア・・・ハア・・・ハア・・・

肺に空気が行き渡らず、酸欠になるような感覚。

体がふわふわと漂うような感覚。
魔法で飛行しているのとは違う、漂うような、体に力が入らずにゆらゆらと水に浮いているような感覚。

ゆっくりと目線を指輪から離し、近藤を見る。
近藤の顔は真っ赤になっていた。

いままでちょくちょく近藤がいなくなっていたのは、宝石店を覗きに行き、指輪を買うかどうかずっと悩んでいたのだ。
本当に近藤は人間関係ではうじうじ悩み、決断力が鈍る。
それが、エレノアの言葉でふんぎりがつき、思い切って買ったのだった。

近藤も相当テンパッているようで、いつも以上に体を硬直させ、顔からダラダラ汗を流していた。

「・・・フェイトさん!!」

緊張のあまり、声が裏返ってしまう近藤。
そんな近藤を見て、フェイトはだんだんと冷静になってくる。
見えなかった周囲にも気が行くようになり、自分以上に緊張している近藤を見て、クスリと笑った。

「・・・はい」

フェイトは落ち着きを取り戻し、ゆっくりと返事をした。

「お・・・俺は!毎日フェイトさんの味噌汁が飲みたいです!!」

「・・・はあ?」

よくわからない事をいう近藤にフェイトは怪訝な表情をした。

「あ、あれ!?これじゃないのか!?あ～っと・・・えー・・・っと」

近藤はますます焦りだし、ポケットからなにやら本を取り出した。
表紙には『これで一発!プロポーズ大選』と書かれていた。
ぺらぺらとページをめくり、焦る表情の近藤を見て、クスクスと笑い始めるフェイト。
そして、フェイトは近藤が必死に見ている本を取り上げた。

「あ!?」

いきなり取り上げられたので情けない声を出す近藤。表情も若干情けない。

「近藤さんの言葉で言ってください」

フェイトはにこやかに笑いかける。
そんな言葉を告げられた近藤は、一層焦りだした。
口を金魚のようにパクパクとし、告白しようというフェイトに助けを求める目を向ける。

「そんな顔してもダメです」

フェイトは無常の言葉を近藤に突きつけた。
近藤は俯き、必死に考える。
あまり良い言葉が浮かばないようで、頭をガシガシかきむしる。

「・・・大丈夫ですよ」

フェイトがそう言った。

近藤は、ゆっくりと顔を上げると、そこにはやさしく微笑むフェイトの顔があった。

そして、近藤は決心した。

近藤大輔、一世一代の大勝負である！！

「フェ、フェイトさん！！」

本日3回目のやりとり。

名前を呼ぶ所から全然進捗しない。

「はい」

フェイトは落ち着いた返事を返す。

フェイトは冷静さを取り戻し、近藤の態度に驚いていた。

『あなたと共に生き、歩みたい』

先日、フェイトに向かって凛々しくそう言い放った近藤とは全くの間逆である。

はっきり言えば、先日の言葉で終わらせていれば近藤にとっても、フェイトにとってもカッコイイプロポーズで終わっていただろう。
だが、近藤にも男の意地がある。
あれはプロポーズではない。
自分がフェイトに甘えて言った『本当の想い』を伝えていない言葉なのだ。
自分の本当の気持ちを伝えていない偽りのプロポーズで納得できるほど近藤はいい加減な男ではない。
自分の本当の気持ちを、想いを知ってもらいたい。
たとえ、近藤の真実を伝えて幻滅されてしまおうが、嫌われてしまおうが自分という人間を知ってもらいたかったのだ。
そのために指輪を購入した。
給料3ヶ月分ではないが、貴金属には疎い近藤が必死に悩み、選んだのだ。
シンプルなシルバーリングに小さなダイヤがちりばめられている、意外と簡素な指輪ではあるが、それでもフェイトに似合うと近藤は思い購入した。

フェイトは宝石店で頭をガシガシかきながら指輪を選んでいる近藤が容易に想像できたのか、心の中で小さく笑った。
そして、改めて近藤を観察する。

ここまで緊張し、焦り、慌てふためく近藤を見たことがない、と。
その慌てる姿が滑稽で、笑いがこみ上げてくるのだ。
だが、近藤はいたって真面目なのだ。
笑うわけにはいかない。

「フェイトさん！！」

「はい」

また名前を呼ぶ。
よくよく考えると、近藤はフェイト隊長ではなく、フェイトさんと呼んでいた。
普段でも滅多に呼んでくれない名前を、今連呼している。
それも相まって、フェイトは嬉しいやら、恥ずかしいやらで顔がにやけかけた。

「お、お、おおお俺は！！」

・・・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・

これ以上はプライバシーにも関わるのでこの場面は終わりとしよう。

しかし、その日以降、フェイトの左手の薬指には輝く指輪がはめられ、その指輪をにやけながら撫でる姿が目撃されていた。

# 第６０話（後書き）

アンケートのご協力ありがとうございます。
現在の途中集計では

魏・・・５
呉・・・１６
蜀・・・２
他・・・３

となっております。

圧倒的だな！わが呉は！！

そんな冥淋の言葉が聞こえてきそうです。

とにかく、参考にさせていただきます！

# 第６１話（前書き）

シグナム　「・・・何故こんなに遅くなった？」

ヴィータ　「番外編はちょいちょい更新してるよな？」

はやて　「ふむ、じゃあまた事故って傷心いうわけやないんやな？」

作者　「・・・実は・・・」

はやて　「実は？」

作者　「番外編のほうが書いていて面白・・・」

シグナム　「それ以上言うな。斬るぞ」

作者　「だって！こっちはこれから全然コメディ色がなくなるんだもの！心が滅入るよ！！」

はやて　「なるほど、いよいよ佳境か・・・長かったな～」

作者　「番外編は何にも考えなくていいもの！でもこっちは色々考えなきゃいけないもの！いいじゃない！逃げても！！」

はやて　「・・・いや、ここは逃げたらあかんやろ・・・」

ヴィータ　「ま、まあ、とりあえず遅くなったな。これからクライマックスに向けて突っ走るからよろしく頼む」

シグナム　「作者が間に変な話を割り込まなければな・・・」

ヴィータ　「限りなくありえそうな予想を口に出すなよ・・・」

# 第６１話

「因果」

善いことを行えば、善いことが降り懸かり
悪いことをすれば、悪いことが降り懸かる

善因善果・悪因悪果

ようするに、日頃の行いによって、幸せが来るし、不幸も来る
それらは等しく人に降り懸かるもの
ただし、善悪はひとそれぞれ
その大きさ、内容、期間等色々な事象が異なる
そして一番の違いはソレがその者にとって幸か不幸か

「幸と不幸」

それは誰が決め、そう認識するのか

取り巻く環境、過去の行い、仲間の人生、それら「原因」が螺旋のように絡み合い、人の生に「結果」という影響を及ぼす

「原因」があれば、必ず「結果」がくる

人にとって、「因果」の答えとは何か

その答えは己の内にある

公開陳述会一週間前、とある場所、そこはスカリエッティのアジト。スカリエッティの前には、彼の作り出した娘達『ナンバーズ』がスカリエッティの言葉を待っていた。

スカリエッティはゆっくりと口を開いた。

「先行組は明日から潜入準備の開始だ」

目の前にいるナンバーズをゆっくりと見渡す。

「ドゥーエは別行動だが、姉妹１１人、協力して事態に当たってほしい」

自慢の娘達を誇らしく思い、優しく語りかける。

「例の特殊部隊襲撃と「聖王の器」の確保、地上本部の制圧、タイプゼロ2機やFの遺産・・・特にファーストのほうは余力があれば、確保したいところだね」

スカリエッティの目が狂気に染まる。

「君達ならきっとできる」

ウーノとクアットロはそんなスカリエッティの演説を微笑みながら聞いていた。

「培養液で生まれた時から、変わらず揺らめいていた私の願い」

スカリエッティは自分の手の平を見つめながら呟く。

「刷り込まれたものかもしれんが、それでもこの手で叶えたい夢には違いない」

そして、きつく拳を握り締めた。
輝く瞳は更に狂気を孕んでいた。

「我々が望む、我々の世界。自由な世界。襲いかかって奪い取ろうじゃないか。素晴らしき我々の夢を!!」

スカリエッティは両手を広げ、宣言した。

さあ、祭の始まりだ！

その後の任務の最終確認のときのこと、皆が頭を突き合わせて、各々のすべきことを相互確認していると、ふとあることに気が付いた。

「あのさ、ドクター？近藤さんはどうするんだ？」

赤髪をショートにした、勝ち気そうな目の少女『ノーヴェ』が挙手した。

「たしかにな。アレは厄介な奴だ」

紫のショートヘアーに切れ長で鋭い目つきをした『トーレ』が顎に指を当てながら思案する。

「あの男と『ミスクリスタル』は脅威だ。近藤はともかく、今のところミスクリスタルの純粋な戦闘能力に対抗できる戦力は我々には無い。恐らく、我等全員でかかっても手に負えないだろうな」

銀髪をロングにし、右目に眼帯をしている少女『チンク』は腕を組み、苦々しげに呟いた。

「しかも、まだまだ手の内を見せていない感じがします。驚異的な戦闘力、無尽蔵であるかのような膨大な魔力、そして敵とみなした相手に対し、一片の隙も、情けも見せない非情さ。ある意味、彼女こそが私達の目指すべき『存在』ではないかと」

ピンクのロングヘアーに、ヘッドギアを装着した『セッテ』が淡々と分析する。

するとスカリエッティはニヤリと笑った。

「ああ、彼等か。たしかに彼等、特にミスクリスタルの力は現在のところ我々にとって最大の障害ではある。まあ、『ブラックマン』たる近藤大輔の能力、知識も侮れない。しかし、『ゆりかご』を起動してしまえば、いくらミスクリスタルとて手の打ちようはない」

そこで、スカリエッティはくるりとナンバーズに背を向けた。

「だから、彼等には一度舞台を降りてもらう」

そしてコンソールを操作すると、近藤のデータがモニタに展開された。

それを見たスカリエッティは口を三日月のように歪め、くっくっと笑い出した。

「くくく・・・ああ、ドゥーエ、君は本当に素晴らしい働きをしてくれている。まさに仕込みは上々、そして管理局の膿を全て吐き出すのさ！・・・あぁ楽しみだ、ブラックマン、いや近藤大輔！君が『真実』を全て知り、悲観し、絶望し、私の元へ来る日が！！」

スカリエッティの狂ったような笑い声はアジトに響き渡った。

同じ頃、機動六課では、今日もいつもと変わらぬ日々を送っていた。
若干1名を除いて。

フェイトはデスクワークを行っていた。
軽快リズムにのって、白魚のような指がコンソールを叩く。
そして、ふと左手の薬指にはめられた指輪が目に入る。

「・・・ふふふ」

フェイトはニヘラ～と表情を緩ませる。
2～3分すると、再び軽快にコンソールを叩きだす。
そしてまた左手の薬指の指輪が視界に入り、頬の筋肉をだらしなく緩ませる。

「・・・えへへ」

フェイトは満面の笑みで指輪を満足するまで眺め、またコンソールを叩きだす。
そしてまた左手の薬指に目が・・・

というやりとりを延々と繰り返していた。
当然、仕事は遅々として進まない。

近藤から指輪をもらい数日が経つのに、未だその指輪を見ては表情を緩め、ずっと眺めている。
フェイトが幸せなのは良いことだが、いい加減仕事に身を入れてほしい。

ついにシグナムが痺れを切らした。

「テスタロッサ、近藤から指輪を貰ってうれしいのはわかる。だがな、いい加減仕事にも身を入れろ。このままでは、私や近藤の負担が増える一方ではないか」

シグナムが腰に手を当て、フェイトを叱る。だが、あまりにも幸せそうなので、強く言えないらしく、眉がハの字になっている

「・・・え？あっ！？ご、ごめんなさい！」

フェイトは我に返り、慌ててコンソールを叩きだした。
そんな姿にシグナムは、やれやれとため息をついた。

そして、そんな原因を作った近藤は、エレノア、ザフィーラの3人で訓練をしていた。

ザフィーラが最近は滅多に見せない人型になり、エレノアと対峙していた。
ザフィーラが是非エレノアと組み手をしたいと言いだし、エレノアが了解した。
近藤はやめておけとザフィーラを止めたが、ザフィーラは頑なに聞き入れなかった。

ザフィーラから尋常ではない汗が吹き出す。
それはエレノアのプレッシャーにあてられたものだ。
筋骨隆々の男が、華奢な女に恐怖しているのだ。
これほど奇異な光景はないだろう。
対してエレノアは真正面に静かに立ち、軽く腰辺りに手を構えていた。
「どうしたの、ザフィーラちゃん？ジッとしていても何もならないわよ？」
エレノアが薄く笑いザフィーラを挑発する。
だがザフィーラは攻撃を仕掛けない。
いや、出来ない。
動けないのだ。
肌が泡立つ。
ピリピリと電気が走ったように指が麻痺する。
僅かだが足も震えている。
圧倒的戦力差
それを間のあたりにした。
ベルカの守護獣として、後退はありえない。

だが、今は前にも行けない。

これは単なる組み手である。
死ぬことはまずない。
それでもエレノアの気にあてられ、ザフィーラはおもわず死を覚悟した。

（まさに死闘・・・我が命を賭けねばならんか・・・！）

ザフィーラは玉砕覚悟の攻撃を繰り出した。
その時のエレノアはというと、全く別の事を考えていた。

（・・・ああ、またロールケーキ食べたいな～）

この温度差はどうしたものか。

そんなときにザフィーラの玉砕覚悟の特攻が来た。
驚異的なダッシュ力で、攻撃射程内へと入り、ザフィーラは渾身の回し蹴りを繰り出した。

「はあぁぁぁっ！！」

だが、その回し蹴りはエレノアの左手が軽く添えられただけで方向を横回転から縦回転へと変えられた。

ザフィーラの体がその縦回転につられてバランスを崩し、宙に浮いた。
そこへ、一瞬でザフィーラの左側に回り込んだエレノアは、宙に浮き抵抗出来ないザフィーラの腹に向かって張り手を振り下ろした。

バチーン！という良い音と共にザフィーラは地面にたたき落とされた。
その衝撃でザフィーラを中心に地面が円形にベッコリとへこんだ。

「っつ・・・くぁっ！？」

ザフィーラの顔が苦痛に歪む。
ボディにおもいっきり入った打撃によって、下半身が麻痺し立ち上がれない。
だが、エレノアはそんなことお構い無しである。

「寝てると危ないよ？」

そう言い、エレノアは倒れているザフィーラの顔目掛けて足をゆっくりとあげ、下ろした。

「うおおっ！？」

ザフィーラは咄嗟に体を横に回転した。

ズンッ

重い音と共に地面が揺れた。

ザフィーラの頭があった場所には、エレノアの足が地面に深く突き刺さっていた。

「あら惜しい」

軽い口調のエレノアに対し、ザフィーラは顔を青ざめさせていた。

「だから言ったでしょうが。エレノアとの組み手はやめた方がいいって」

「うむ、すまない。もう二度と言わん」

近藤がザフィーラに注意し、ザフィーラは耳を折りたたんで反省していた。

ザフィーラは色々精神的にまいってしまった。
見ていて可哀相なくらい落ち込んでいた。

まず、自分の攻撃が通じない。そして、エレノアは傍目で見てわかるくらいおもいっきり手抜き攻撃をしている。
更には言葉の暴力が待っていた。
それは、ここではとても書けないような言葉でザフィーラをなじった。

結果、ザフィーラは戦意を喪失してしまい、組み手は終了となった。

「しかし、高町なのはが近藤の事を『達人』と言っていたから、師である姉上はどれ程かと思ったのだが・・・当て嵌まる言葉が見つからん強さだな」

ザフィーラはエレノアをそう評価した。
だが、近藤がそれに否と言った。

「俺は達人なんてだいそれた力はありませんよ。『達人』、『マスター』という言葉はエレノアにこそ相応しい」

「うむ、『天下無双』『地上最強』『ザ・ワン』などでは足らん強さだ」

そう評価する二人の横で、エレノアはというと・・・

「わー♪ちょうちょ、ちょうちょー♪」

蝶を追いかけて遊んでいた。

ザフィーラと別れた近藤とエレノアは、フェイトの元へ向かっていた。

ズンズン歩く近藤の横で、エレノアは若干心配そうな顔をしている。

「ご主人様、本当に全部話すの？」

「ああ」

近藤は短く答えた。

「そりゃ、焚きつけたのは私だけど、何も『アカシック・レコード』とか『歴史の真実』まで言うことないんじゃないかな？」

エレノアはごにょごにょと呟く。
すると、近藤はピタリと歩みを止めエレノアに顔を向けた。
「これは俺のケジメだ。せめて彼女には俺の全てを知っておいてもらいたいんだよ。安心しろ、他言無用って釘を刺すから」
近藤はそう言うが、エレノアはまだ納得できないようだった。

近藤とエレノアがオフィスルームへたどり着くと、フェイトは未だデスクワークをしていた。
焦っている表情からするに、仕事が全然進んでいないのだろう。
そこへ、シグナムが近藤に近寄ってきた。

「近藤、まったく・・・お前のせいでテスタロッサがダメになってしまったではないか」

シグナムは腕を組み、眉をハの字にしてそんな事を言った。
フェイトが、近藤の贈った指輪を眺めてばかりで全然仕事に身が入っていない、そういうことらしい。
近藤とエレノアは苦笑し、フェイトに近づいた。

「フェイト隊長」

「え？ひゃあっ！大輔しゃん！？」

フェイトは近藤の顔を見るなり飛び上がらんばかりに驚いた。顔が真っ赤に茹蛸のようになる。それに少し噛んだ。

「少し大事なお話があります。この仕事が終わったらブリーフィングルームへ来て下さい」

そう言うと近藤はフェイトに背を向け、オフィスルームを出て行った。

フェイトはぼーっとして、先程の近藤の言葉を反芻していた。

（大事な話ってなんだろう？・・・はっ、まさかリンディ母さんに挨拶しに行くとか！？いえ、式の日取り！？いやいや、まさか新婚旅行の相談！？それとも新居の相談！？）

・・・フェイトの脳はかなりやられていた。

だが、フェイトの目に炎が宿り、目にも止まらぬ速さでコンソールを叩きだした。

（そんな大事な話なら、大輔さんを待たせるわけにはいかない！速やかに終わらせる！！）

今までの腑抜けが嘘のようにフェイトはみるみる仕事を掃けていった。

そんな光景をシグナムは唖然と見ていた。

ブリーフィングルームには近藤とエレノアの二人しかいない。
二人とも言葉を発することなく、近藤は窓から見える景色を眺め、エレノアは机に座り頬杖をついていた。

２０分もすると、フェイトがブリーフィングルームへ入ってきた。
はあはあと肩で息をしているところをみると、走ってきたようだ。
顔を上気させ、そわそわとしている。
なにやら飼い主の指示を待つ犬のようだ。
尻尾があったらきっとブンブン左右に振っているだろう。

「すいません！お待たせしました！」

フェイトは近藤をニコニコと微笑み見る。

「そ、それで・・・お話って？」

フェイトは期待に胸を膨らませる。
そんなフェイトを見て、近藤は苦笑しつつも、真面目な表情になる。

「フェイト隊長・・・いえ、フェイトさんに知っていてもらいたいことがあるんです」

「知っていてもらいたいこと？」

フェイトは首を傾げる。

少し離れた場所で、エレノアは不安げな表情で二人を見ていた。

そして、近藤はゆっくりと語りだす。

「・・・俺の力の・・・」

近藤が話し出したとき、おもむろにブリーフィングルームのドアが開いた。

そこには、機動六課の隊員ではない、見知らぬ隊員が多数いた。

一人の男性隊員がつかつかと近藤に歩み寄る。

そして、こう言った。

「近藤大輔三等陸尉、あなたを逮捕します」

# 第６２話（前書き）

今回からしばらく警察関係の話が出てきます。
私も色々調べましたが、もしかしたら本当の取り扱いとは異なる事象があるかと思います。
ですが、ここは別世界の機関の話と流してください。
あくまでこれはフィクションですから。

それではゆっくりみていってください。

# 第６２話

「近藤大輔三等陸尉、あなたを逮捕します」

静寂のブリーフィングルームで、男性隊員の声だけが響き渡った。

近藤は男性隊員の通告に目を見開いた。

そして、フェイトは男性隊員が何を言っているのかわからなかった。

「な・・・にを・・・言って・・・」

フェイトは思考が定まらず、言葉もしどろもどろになる。

だが、男性隊員は常にクールに返す。

「近藤大輔三等陸尉にはスパイ容疑がかけられています」

「・・・スパイって・・・誰の？」

フェイトは、機動六課の面々は知っている。

近藤の機動六課に来た目的はレジアス中将が送り込んだ監視、スパイだということを。

自らカミングアウトしたのだから知っていて当然である。

だが、近藤はもとよりスパイ活動などする気はサラサラないのも知

っている。
男性隊員はそのことを言っているのだろうか？だが、内部監査が逮捕に繋がるなど聞いたことがない。
だが、男性隊員はとんでもないことを言い出した。
「近藤大輔三等陸尉は広域指名手配犯ジェイル・スカリエッティへ管理局の情報を流していたスパイ容疑の、です」
「なっ・・・！？」
フェイトは絶句する。
近藤がスカリエッティと！？
あるわけがない。
ありえない！
「そんなこと・・・」
フェイトは近藤を見た。
すると、近藤は首を横に振る。
だが、その瞳は黒く、暗く、光が射していない虚で濁った色だった。
そして近藤は、ある仮説を立て、カマをかけてみた。
「・・・この容疑を承認したのは最高評議会か」
近藤が抑揚なく言葉を発する。

「我々が答える義務はありません」

だが、男性隊員はにべもなく返す。

・・・ビンゴだ。

近藤は以前レジアス中将についての調査をしていた時、管理局最高評議会がアインヘリアル建造と運用でレジアス中将に絡んでいる事を嗅ぎ付けた。

調査途中で機動六課へ異動となり調査を引き継いだので現在の所どこまで調査が進んでいるのかわからないが。

更に、管理局最高評議会はどうもスカリエッティと何らかの取引、又は繋がりがあるのではという疑いの、わずかな痕跡も見受けられた。

あくまで仮定だが、スカリエッティと管理局最高評議会は、レジアス中将同様に何か同一の目的があり、利用し利用される利害関係にあるのではないかと近藤は考えた。

しかしスカリエッティも相当近藤を警戒しているようだ。

もうなりふりかまっていられない状況なのだろう。

ここで、最悪なカードを切ってきた。

『管理局最高評議会』

旧暦の時代に次元世界を平定し、時空管理局設立後一線を退いた3人の人物が、その後も次元世界を見守るために作った組織である。
前記の3人のみで構成され、それぞれ議長、書記、評議員の役職についているとされている。
出席者が実際に一堂に会するのではなく、全員通信でやりとりがされている。評議会メンバーに到っては変声機をかけ、ホログラムも顔が映らない仕様となっているほどの徹底ぶりである。
管理局の最高意思決定機関となってはいるが、平時は運営方針に口出しすることはない。

近藤は、スカリエッティがなんらかの妨害を企てるだろうとは思っていたが、まさか管理局の絶対的権力を行使するとまでは考えていなかった。

しかし、これで管理局最高評議会とスカリエッティの繋がりが決定的になった。
立証する物的証拠は無いが、最高評議会はスカリエッティとなんらかの関係を持っているのだ。

とりあえず、この状況をどうするか、だ。
近藤は状況が悪化する中、あらゆる選択肢を想定していた。

そして、ここまで黙っていたエレノアが口を開いた。

「そんな横暴通る訳無いでしょう。三提督に掛け合います」

エレノアが特別回線を開こうとした。だが、別の隊員に遮られた。

「エレノア・K・アルファード大将、貴女にもスパイほう助の嫌疑がかけられていますので、更迭させていただきます。ですので、三提督との通信は許可できません」

エレノアも驚いたような顔をする。

「証拠は？近藤三等陸尉がスパイ行為をしたという証拠と提示しなさい」

エレノアが冷たく言い放つ。

殺気混じりの視線は凄まじく、睨まれた隊員は顔を青ざめさせ、小さく「ひっ」と悲鳴をあげていた。

「・・・か、管理局のメインコンピュータとシステムサーバーに近藤大輔三等陸尉のＩＤで無断侵入、ハッキングをした形跡が残されていました。そして、不正コピーを行っています」

殺気にあてられながらも、男性隊員がメインコンピュータの不正侵入リストを出し、近藤のＩＤのところだけを赤く表示させた。

「更に、ジェイル・スカリエッティと近藤大輔三等陸尉が密会している映像もあります」

そう言い、モニタを展開させた。

遠距離から撮った映像なのだろう、画像が荒い。

だが、その映像にはどこか廃工場のような場所でスカリエッティと近藤が向かい合って映っており、何かを手渡しているようだった。

「これだけの状況証拠があれば、言い逃れはできませんよ？」

男性隊員は先程の怯えなどどこ吹く風で、どうだといわんばかりに言う。

エレノアはため息をつき、チラリと近藤を見た。近藤はエレノアの視線に気づくと、軽く目配せした。

「わかりました。更迭でもなんでもどうぞ」

エレノアはため息をつき特に抵抗することもなく、他の男性隊員に素直に連れていかれた。

状況証拠があり、言い逃れできない。
だが、フェイトは逆にその証拠に疑問を持った。
先程まではパニックになっていたが、段々頭が冷えてきた。
そして考える。

違和感がある。

証拠が残り過ぎている。

一言で言うなら「ずさん」。

近藤が「やった」にしてはあまりにもあからさまで、ずさんなのだ。

もし近藤が本当にハッキングでもしたのなら、おそらく証拠、足跡など残すはずがない。

もしスカリエッティと密会するにしても、変身魔法を使うなり、代役を立てるなりすればいいのだ。

フェイトが考えただけでもこれだけの穴があるのだ。

本当に近藤がしたなら、もっと奇抜で考えもしない奇策を駆使し本当にわからないようにしているだろう。

しかも、近藤はさっき『最高評議会』という単語を出してきた。

こんなことをする心当たりがあるような口ぶりだった。

男性隊員もそれに対しては何も答えなかった。

いや、あれは答えたようなものだ。

もし本当に最高評議会が口出ししてきたのならとんでもないことだが、フェイトはそれにも疑問を持った。

つまり、本当に最高評議会が通告したのか、もしくは名前を騙っているだけなのかはわからないが、なんらかの圧力が近藤とエレノアを陥れようとしているのは確かなようだ。

だが、何故今頃？

こんな時期に・・・

フェイトが考え込んでいると、ブリーフィングルームになのは達ドカドカと入り込んできた。

「近藤さん！？」

なのはは焦りを隠さず近藤に駆け寄る。

「逮捕ってどういうことや！？」

はやてが男性隊員達を睨みながら叫ぶ。

シグナムやヴィータは言葉を発することはなかったが、それでも男性隊員達を殺気を込めて睨んでいる。

「近藤さんを連れてなんて行かせへん！なんやねんこれ！？なにが逮捕や！！無茶苦茶やないか！！」

はやては大声で叫ぶ。

なのはやフェイトははやての怒りように驚く。

しかし、すぐに納得できた。

はやては家族や友人に対しては絶大な信頼を寄せる。

絶対信じる。

絶対守る。

そう、はやてにとって近藤はもう親友であり、家族なのだ。

だが、いくらはやてが庇おうが、絶大な権力の前には無力だ。

「いいかげんにしろ、はやて」

聞き知った声がした。
男性隊員達が二手に分かれ、真ん中を歩いてきた人物。
黒い提督の服を着た、自分達が信頼を寄せる人物。

「クロノ・・・」

フェイトが突然現れた兄の姿に驚く。

「クロノ君、これは一体どういうことや!?なんでこんな無茶苦茶なことするんや!?なんで!?なんで近藤さんなんや!?」

はやてはクロノにつかみ掛かる。
なのは達も同じ気持ちなのだろう、誰もはやての行為を止めない。

はやての言葉には色んな意味が含まれている。
今まで散々近藤を冷遇しておいて、更に近藤に難癖付けて試練を与えようとする。
何故近藤だけがそんな目に遭わなければならないのか。
何故・・・

クロノの視線は冷たく、つかみ掛かるはやてを見下ろした。

「近藤がスカリエッティのスパイだからだ。証拠もある」

そう言いクロノは、先程男性隊員がフェイトに見せたハッキング記録とスカリエッティとの密会映像を見せた。
だが、はやてはそんなもの信じない。

「そんなもん捏造に決まっとるやろ！クロノ君も、近藤さんとなのはちゃんが昔その捏造で酷い目に遭ったんは知っとるやろ！！」

はやては激昂するが、クロノは至って冷静だ。

「・・・管理局最高評議会の決定だ」

「そこや！なんでここで管理局最高評議会がでしゃばってくるんや！？今まで管理局の方針や運営なんかに滅多に口出しせんかった最高評議会が、なんで『いち隊員』の近藤さんの逮捕なんて言うんや！？」

至極もっともだ。

管理局の運営に関しては滅多に口をださなかった管理局最高評議会が、何故ただの管理局員である近藤の逮捕などということを言い出すのか。

ようするに穴だらけなのだ。

クロノがそんな穴だらけの容疑に簡単に従うはずがない。

クロノは正義感が強く、局内であろうが不正と認めたならそれを正そうとする。

そんなクロノだからこそ、なのはやはやては絶大な信頼をおくのだ。

「僕達は上の決定に従うだけだ。さぁ、話は終わりだ、近藤を連行するぞ」

今日のクロノはおかしい。近藤という人間の本当の姿を知る者なら、こんな無茶な逮捕と容疑に納得するはずがないのだ。

クロノははやてが掴みかかる手を振り払い、近藤に歩み寄った。

「行くぞ、手を出せ」

クロノは冷たく言い放つ。彼を知る者ならば、クロノがこんなに冷酷な声を出すなど考えもしないだろう。

近藤は素直に両手を出し、クロノは近藤の手に手錠をかけた。
本来、逮捕するときはバインドなどの捕縛魔法を使用するが、相手が魔導士などの場合、たまに物理拘束のために手錠を使う。
そして、これは相手に屈辱感を与える効果もある。

だからだろう。
そのとき、クロノはなのは達から見えない角度でニヤリとほくそ笑み、近藤にこう呟いた。

ざまあみろ

近藤に対する憎しみが滲み出る言葉。
それでも、近藤の瞳には、心には響くことはない。
虚ろな瞳はクロノの方を見るが、クロノを見ていなかった。

クロノは近藤を連行しようとするが、フェイトがそれを止める。

「クロノ・・・止めて・・・大輔さんを・・・連れていかないで・・・」

フェイトは今にも泣きそうな顔をしてクロノを引き止める。
さすがにクロノもフェイトにそんな顔をされれば揺らいでしまう。

だが、クロノは見てしまった。
フェイトの左手の薬指に光り輝く指輪を。
「フェイト・・・なんだ、それは」
クロノは厳しい視線をフェイトの指にはめられている指輪に向けた。
「こ、これは・・・」
フェイトは咄嗟に指輪を隠し、躊躇った。
本当の事を言ったら、クロノがどんな行動をとるのか予想ができなかったのだ。
フェイトはちらちらと近藤を見てどうするか考えた。
だが、クロノはそれでわかってしまった。
そして、頭の中でバラバラだったパズルの色々なピースがパチパチとはまっていく。
先程フェイトは近藤のことをなんと言った?
『大輔さん』だ。
なのはやはやては『近藤さん』と呼んでいるのに、だ。
そして、フェイトの左手薬指にはまっている指輪。
パズルが完成する。
導かれる答えはひとつ。
クロノにとって最悪の答え。

望んでいない未来の答え。
そして、

クロノはキレた。

「貴様あぁぁぁぁっ！！」

クロノはおもいっきり近藤を殴った。
突然の事に近藤も予想できていなかったので、クロノの拳をモロにくらい、そのまま後ろに倒れた。
ブリーフィングルームに綺麗に並べられている机に当たり、大きな音をたて、机が乱れ、倒れ、倒れる近藤にのしかかった。
両手を手錠で拘束されていたので受け身が取れず、まともに机にぶつかる。腰に、肩に、頭に机が当たる。

「つっ・・・」

近藤は苦痛に顔を歪めた。
起き上がろうとしたが、クロノが倒れる近藤に馬乗りになり、更に近藤を殴りつけた。
左右出鱈目に近藤の顔を殴る。

「貴様あぁぁっ！母さんだけじゃなくフェイトまでえぇぇっ！！」

クロノは絶叫しながら近藤の顔を殴り続ける。

「僕の家族を！奪って！そんなに！楽しいか！！うれしいか！！」

クロノの拳から血が吹き出る。

殴られる近藤も顔から血が出る。

口から、目尻から、鼻から、頬から。

赤く腫れる顔を尚もクロノは殴り続ける。

殴り過ぎて、クロノの拳の皮膚は破け、骨が剥き出しになっていた。

近藤とクロノのまわりに二人の血が飛び散る。

「なにやってんだお前はっ！！」

「クロノ！！もうやめろ！！」

唖然と見ていたなか、シグナムとヴィータがクロノを取り押さえた。

「近藤おぉぉっ！！」

羽交い締めされるクロノは尚も獣のように叫ぶ。

憎しみに染まる目で近藤を睨む。

なのはやはやて、フェイトは目の前の光景が理解できず、立ち尽くしていた。

対して血だらけの近藤は、やはり虚ろな瞳だった。

しばらくして落ち着きを取り戻したクロノは、事態を聞きつけたシャマルによって拳の治療を施され、なのはやはやてを見ることなく無言で部屋を出ていった。
出ていく際、チラリとフェイトを見た。

フェイトは近藤の傷を手当てしていた。
泣きそうな顔で、ごめんなさいと謝りながら。
クロノは拳に巻かれた包帯を見て、苦虫を噛み潰したような表情をし、足早に部屋を出た。

近藤の手当てが終わると、男性隊員が近藤を連れていこうとした。
当然、なのは達がそれを許すわけがない。
だが、これ以上は何をやっても膠着状態が続き、最悪、なのはやはやてに公務執行妨害が付く恐れがある。

「・・・はやて隊長、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長、シャマル先生、大丈夫です。この逮捕は間違いなんですから、行ってもすぐに帰ってきますよ」

だから、これ以上自分の立場を不利にしないでください。
はやては苦しそうな表情をし、唇をギュッと噛み締めた。
シグナムとヴィータ。シャマルも苦しそうな表情で近藤を見つめた。

「・・・なのは隊長」

近藤は、今にも泣きそうな顔をしているなのはに声をかけた。

「ヴィヴィオを守ってください。スバルと、ティアナも」

未来は覆らない。変えてはいけない。それでも近藤は言わずにはいられなかった。

ヴィヴィオを守る。

何故ヴィヴィオなのか、近藤の言う意味がわからないなのはだったが、コクンと頷いた。

「フェイトさん」

近藤はフェイトを見た。

祈るように手を組み、目尻に涙を溜めたフェイトは、傷だらけの顔の近藤を見た。

近藤は微かに笑っていた。

「すぐに帰ってきます。だから、待っていてください。エリオとキャロと、皆で」

だから、泣かないで

笑ってください

「いってきます」

その言葉を最後に近藤は男性隊員に連行され、機動六課を後にした。

# 第６３話（前書き）

なんとか投稿できました。

しかし、クロノの人気はスゴイですねぇ。

思わず嫉妬しちゃう！

くそ、このまま最低ヤローで終わらせてやろうか！？

いやいや、嘘ですよ。
クロノはね、いい奴なんですよ。

それをうまく表現できればいいんですけどねぇ。

とりあえず、６３話です。

前回も書きましたが警察関係の事がチラホラ出てきます。
しかし、すこしおかしい内容があるかもしれません。
そこは、管理局であって、警察ではないと思って下さい。
なんたってフィクションですから。

そうしないと話進まないし・・・

# 第６３話

少し昔の話をしよう。

それは近藤が子供の頃、アースラに保護された頃のことだ。

近藤とクロノは年が近かった。

だが、近藤は家庭環境の事情から、６歳ながら知能が３歳の幼児ほどしかなかった。

クロノは近藤の事情を子供ながら理解していたので、近藤と友達になろうとした。

リンディからも「大輔君と仲良くしてあげてね」といわれた事もあるが、両親を亡くしたという境遇が自分と重なり他人事とは思えなかったのだ。

近藤も、最初こそ待遇に戸惑ったが、リンディや養父、クロノの親切さに徐々に心を開き活発な年相応の子供らしさを取り戻していった。

近藤とクロノも、小さい頃はそれなりに仲良く遊んでいた。

事件は数年後の、クロノが士官学校へ行ったときのことである。

管理局へ入局し、クロノは士官学校に入った。寮生活のため、リンディとは全然会っていなかった。
そして、士官学校を卒業し久々にリンディの元へ帰った時だった。

近藤がリンディと一緒にいた。
それはいい。
だが、そこで信じられないものを見たのだ。

近藤が魔法を使ったのだ。
たしか、クロノが知る近藤は魔法など扱った事が無いはずである。
近藤にリンカーコアがあるのは知っていた。
だが、当の本人が魔法に関してんで興味を示さなかったのだ。
それに、魔法を指導する人間はいない筈である。

そして、それを横で見ていたリンディは、近藤の頭を撫でた。

クロノは衝撃を受けた。

近藤に魔法を教えていたのはリンディだったのだ。

僕は母さんに魔法を教えてもらったことないのに・・・

なんでアイツには教えるの？

なんで僕には教えてくれなかったの？

クロノはグルグルと考えていると、二人の声が聞こえた。

「良く出来たわね、大輔君」

「ありがとー！リンディ母さん！」

クロノの中でパリンと何かが割れた。

クロノは、近藤を自分の部屋に呼んだ。

「なに、クロノ？」

近藤は首を傾げた。

クロノはそんな近藤を、有無を言わさず殴りつけた。

近藤は殴られた拍子に尻餅をついた。

クロノは息を荒くして座り込んだ近藤を見下ろした。

その顔は憎しみに染まっていた。

対して近藤は殴られたことがわからず、目を白黒させていた。

クロノは、座り込んだ近藤に対して、蹴りを入れた。

何度も、何度も、何度も。

「なんなんだ！お前は！母さんは！僕には魔法を！教えてくれなかったのに！！それに！リンディ母さんは！僕の母さんなんだ！！」

近藤はあまりの激痛に、胃の中のモノをぶちまけた。

床が近藤の吐しゃ物で汚れるが、それでもクロノは蹴りをやめない。

たった一人の肉親を奪われた！

僕が居ない間に！

横取りされた！！

母さんはお前の母さんじゃない！！

だから！！

「お前がっ！母さんをっ！母さんって呼ぶなっ！！」

クロノの怒りをぶつけられた近藤は、そのまま気絶してしまった。

それから、クロノは事あるごとに近藤を呼び出し、肉体的苦痛を与えるようになった。

だが、そんなことが続くはずもなく、ある日、その現場をリンディ

に目撃された。

リンディは二人に問い詰めたが、口を割らなかった。
近藤はクロノに口止めされていたのだ。

結局、近藤の養父と相談し、元々近藤を管理局へ入れようとしていた養父は、近藤を陸士訓練校へと入れることでクロノと引き離す事にしたのだ。

それから二人は会うことはなかった。

現在、近藤は連れてこられた場所に少し驚いた。

「陸士１１３部隊・・・」

そこは、彼がかつて所属していた部隊。
その隊舎の前にいたのだ。
以前より綺麗な外観は、新たに塗装でもしたのだろう。白い壁が眩しい。
近藤はそんな感傷に浸りながらも男性隊員に連れられ、隊舎の中へと入った。

「ここが留置場（代用施設）だったなんて知らなかったな。軌道拘置所じゃないのか？」

近藤は皮肉を込めた言葉を男性局員に言った。
そもそも、勾留（拘置）と拘留は違うし、近藤の場合、そんな重犯罪者というわけではない。
それに、凶悪犯罪者を収監する軌道拘置所にはそうそういけるものではない。

「・・・・・・」

男性局員は近藤の皮肉に反応することなく、無言で歩き続けた。

廊下では多くの隊員とすれ違う。
見知った顔もいれば、知らない顔も。
そんな隊員達に共通することは、近藤を見るなり顔をしかめるか、手錠を見ていい気味だと嘲笑するかである。
だが、近藤はそんな視線を気にすることもなく胸を張り、堂々と男性隊員の後ろを歩いていった。

しばらくすると、近藤はある狭い部屋に押し込められた。
窓がなく、壁にかけられた鏡と机、椅子2脚。

近藤は椅子に座ると、男性隊員は部屋を出ていった。
狭い部屋に近藤が一人、何もするでなく虚ろな目で前を見ていた。

１０分程すると、ガチャリとドアが開いた。
近藤はドアの方を見た。
そこには、見知った顔が二人いた。

「久しぶりだな、近藤三尉・・・ふん、少しは面構えがマシになっ

たな」

いつもしかめっつらで、オールバックにした髪は、ポマードでベタベタのテカテカ、肌の色も浅黒く、胸板は薄いがそれでも腕を後ろに組んで胸を張る姿。
忘れるはずがない。
彼はかつての上司なのだから。

「ヤン・パオ三佐・・・」

「・・・今は一佐だ。近藤三尉」

ヤンは眉間の皺を深く刻み、不快感をあらわにした。
そしてもうひとり、ヤンの後ろに控えている人物、かつての同僚で、比較的近藤とは仲の良かった者。
そして、『あの事件』に参加していた人物のうちの一人。
以前と変わらず柔和な表情、きらめく金髪に青い瞳、細く見えるが、制服の下は無駄な脂肪のない、引き締まった肉体があるのを知っている。

「久しぶりだな、近藤・・・つーか、あまりにも変わりすぎて誰かわからなかったぞ・・・お前、本当に近藤か？」

「ビアンテ三尉・・・あいかわらずのようですね」

「おいおい、俺も今は一尉だぜ」

ビアンテ・クルーズは人懐っこい笑いをつくり、場の雰囲気を和ませる。

「馴れ合いなど必要ない。クルーズ一尉、無駄な私語は慎め」

ヤンはギロッとビアンテを睨んだ。

ビアンテはヤンの言う通り、笑いを潜め口を閉じた。

ヤンは、近藤の前に座りまずため息をついた。

「・・・まったく、貴様にはほとほと愛想が尽きたぞ。広域指名手配犯と繋がりを持つとはな・・・ナリが変われば友好関係も変わるか？」

ヤンは近藤を見下す。

「そんなに管理局が憎いか？自分を切り捨てた管理局が」

ヤンの言葉に、近藤は反応しない。

近藤は目を細め、気になる事を言った。

「・・・ヤン一佐は８年前の事件の真相を知っていますよね？」

「８年前の事件の真相？ふん、それは管理局が公表した真実か？それとも貴様の言う幻想か？」

ヤンの近藤を見る目は冷たく、突き放すような態度までとる。

近藤は目をつむり、ゆっくり話した。

「俺・・・自分は、他世界へ異動して、色々なことがありました。

そんな中で、自分は三提督と知り合う機会がありました」

「・・・ほう」

近藤の言う事に目を細めるヤン。その後ろでは、ビアンテが驚きのあまり口をパクパクとしていた。

「あの事件のあと、自分となのは隊長・・・いえ、高町一尉とヴィータ二尉を除く関係者の階級がひとつ上がったとか」

ヤンは無言で聞いていた。後ろに控えたビアンテは顔を青くしていた。

「事件の隠蔽の交換条件として昇格を提示したのは・・・ヤン一佐だと、聞きました」

管理局としては、次代を担うエリートであるなのはに体調不良による墜落などという経歴の汚点を作りたくなかった。
そこで、近藤の上司であるヤンがなのはを贔屓にする佐官以上の人間にこう言った。

「我等当事者を優遇してくれるのならば、この件は全てこちらで処理しましょう」

その結果、事実は歪曲された。
なのはとヴィータを除く当事者達は、交換条件によって昇格したという負い目によって箝口令を遵守した。

あとはなのはとヴィータであるが、ヴィータの場合、はやてという弱点がある。
声高に事実を唱えたとなると、はやてに被害が被る恐れがある。

ただでさえ、はやては「闇の書事件」の当事者として有名であるし、潔癖な局員にはあまり良く思われていない。
ヴィータにできるのはなのはを支える事だけだった。

なのははそれでも訴えた。
事実は違うと、悪いのは私だと。
だが、その訴えは掻き消えてしまう。それは、真実を知る上の人間が訴えを揉み消したのだ。
そして、周囲の人間に嘘の情報を刷り込む。
近藤大輔という男がどれだけひどい人間であるかということを。
近藤の仕事のミスやプライベートを論った文を貼付けたり、差出不明のスパムメールのような形式で局員の端末に送ったりもした。
有ること無いことを噂や落書き等で広めたりもした。
人間はヘタにはっきりと人を非難したりすると抵抗するが、噂や落書きなどの不確かなゴシップはすんなりと受け入れる。
特に人の悪口や失敗などは。
真意の程はともかく、あくまで「噂」なのだ。
別に誰かに強制された情報でもなく、いやいや頭に入れた情報でもない。
こういう「噂」や「落書き」が人間は一番記憶してしまう。

結果、近藤を知らない局員はいなくなった。
そして、近藤という人間が最低で卑劣で悪なのだという間違った知識を植え付けられた。

なのはがいくら事実を訴えようと、相手の近藤が最低の人間と認識してしまっている者達は、とてもなのはの訴えを信じる気にはなれなかったのだ。

ここまでの『アフターケア』をヤンを筆頭に、なのは信望者等を取

り込み、おこなっていたのである。

これらの行いを容認し、黙認する管理局はそれほど腐敗し、修復不可能な状態に陥っている。

権力のある人間達が、自分達が都合の良い駒を置き、状況を無理やり作り出す。それがまかり通るのが今の管理局なのだ。

そして、それらの事実を近藤は三提督とリンディから聞いたのである。

ここで誤解しないでいただきたいのだが、リンディと三提督はこの裁定に是と言わなかった。

というより、三提督の場合、事実を知ったのは近藤が左遷されてから数年後、リンディからの報告によってであり、もうどうにも出来ない状態だったのだ。

これでわかるとおり、なのはの訴えは上まで届いておらず、どこか報告途中でもみ消されているのだ。

リンディの場合は近藤の処分を決定する会議に参加していたが、リンディ自身、こう言う事態は包み隠さず、正当に行うべきと唱えていた。

だが、多数決、ようするに数に負けたのだ。いくら「個」が吠えようが「多」によって掻き消えてしまう。

「自分の部下を切り捨ててまで得た昇格はどうですか？」

近藤は皮肉を込めて冷めた視線をヤンに向けた。

だが、反対にヤンはくっくっと笑い出した。

「切り捨てるなんて人聞きが悪いな、近藤三尉」
ヤンはにこやかに口元を緩めながらも、目は笑っていなかった。
「有効活用といいたまえ」
ヤンが椅子の背もたれにもたれ掛かりながら近藤を見るが、その姿勢はますます近藤を見下すように見える。
「仕事が遅い、魔導士としての素質もない、協調性がない・・・ふん、社会のゴミだな。そんな社会のゴミを処分すると見返りがあるのだ。使わない手はあるまい？」
ヤンは近藤を社会のゴミと言い放った。
近藤は、ヤンを睨みつけた。
すると、ヤンは顎を撫で、こう言った。
「ふん、近藤三尉よ。しばらく会わない内にえらく反抗的になったものだな」
そう言い、ヤンはビアンテに命令した。
「おい、容疑者がデバイスを所持している。没収しろ」
ビアンテはヤンが何を言っているのかわからなかった。
「あいつの右腕だ。義手だが、デバイスの役割も果たしている。没

収しろ」

ビアンテは頷くと、近藤をメディカルルームへ連れていこうとした。

近藤の使っているような義手、義足などは、かなり精巧に作られている。

人間の視神経伝達は電気信号で行われているため、義手に神経を通す為に電気信号を使用している。

そのため、日常でも違和感なく生活できる。

更に特筆するのは「形状記憶人工筋肉」である。

これは、装着者の体格、身長、体重、筋肉組織などを読み取り、その体格に相応しい筋肉と脂肪、皮膚の色を形成するのだ。

つまり、義手、義足といいながらも、つなぎ目を除けば本当の体の一部と遜色ない出来上がりとなる。

そのためこの義手は一般にも多く利用されており、かなり日常に普及されている。

まあ、近藤のように義手をデバイスと併用する人間は滅多にいないが。

ただこれには問題があり、あまりにも精巧に作ってしまった為、定期メンテナンスなどで取り外すときは個人で行う事は不可能で、医師の元でしなければならないということだ。

なぜなら、義手、義足が体と神経が繋がってしまっているため、取り外す際に激痛を伴うためである。ようするに、普通の腕を引きちぎるようなものである。

医師の元で機材があればそのような心配はなく、痛みも感覚もなくスムーズに義手、義足メンテナンスできるのである。

それを知っていたビアンテは、近藤をメディカルルームへ連れて行こうとしたのだ。

しかし、ヤンは非情の一言を発した。

「今ここで外せ」

ビアンテは顔を青ざめさせる。
近藤は驚きの表情だった。

「無茶言わないでください！機材がないのに義手を外したりしたら激痛が伴うんですよ！？へたしたら激痛のあまりショック死してしまう！」

ビアンテは必死にヤンを説得させた。
だが、ヤンはもういいと言った。

「貴様がやらんのなら、俺がやる」

ヤンはそう言い、椅子から立ち上がり近藤の右腕を掴んだ。

「上司は神、上官の命令は絶対、反論、異見など許されない。わかるだろう近藤三尉？」

ヤンはねちっこい声を出して腕と義手の付け根を確認した。
義手は簡単に外れないようにいくつもの物理的ロックがかかっているのだが、ヤンはそれらの位置を確認すると、手際よくロックを解除していった。
近藤が腕を掴むヤンを睨む。
ヤンは、そんな近藤を嘲るかのように口を三日月のように歪め叫んだ。

「躾のなっていない犬は再調教しなければなぁ！！」

ヤンはそう言い、近藤の義手を無理矢理引きはがした。

外した瞬間、腕と義手の間から激しく火花が散った。

「――――――――――――――――！！？」

近藤は獣の咆哮のような、声にならない声をあげた。

そして、その激痛に耐え兼ね意識を手放した。

「ふん、気を失ったか。そのまま死んでしまえばいいものを」

ヤンは持っていた近藤の義手を見た。

その義手は近藤が付けていた筋骨隆々の腕とは程遠い、骨だけのような腕になっていた。

## 第６４話（前書き）

近藤が逮捕された時、みんなは？
というのを書いてみました。

# 第６４話

近藤が気を失ったのはその日一日だけだった。
次の日からまたヤンによる取り調べならぬ尋問が始まった。

同じ頃の地上本部では、近藤逮捕が話題になっていた。

やれ、やっぱりか

いつかこうなる日が来ると思っていた。

ざまあみろ

これでオーリス三佐とマセラティ二尉は俺の嫁

など言いたい放題である。

当然、オーリスはこの事態に納得がいかない。
まがりなりにもオーリスは近藤を差別なく見ていた数少ない人間の一人である。
近藤がスカリエッティと関係している？

ばかな、ありえない。
それに地上本部のホストコンピュータやシステムサーバーに不法侵入、ハッキングをして、履歴、足跡を残す？
バカバカしい。
そもそも、そのような事を起こすなら証拠隠滅は基本である。
それを怠るなどありえない。
つまり、矛盾だらけ、穴だらけなのだ。

オーリスはレジアスに申告した。

「中将、近藤三尉の逮捕なのですが・・・」

オーリスは厳しい視線をレジアスに送った。
対してレジアスは珍しく少々困惑気味だった。

「・・・うむ、儂も驚いている」

レジアスは最高評議会から経緯を聞いていたようで、オーリスはレジアスから近藤逮捕の詳細を聞き、一般局員の知らない情報を聞いて驚いた。

「最高評議会が！？」

オーリスは思わず大声を出した。
レジアスが最高評議会と繋がりを持っていて、アインヘリアル運用の後ろ盾になっているのは知っている。
絶大な権力を持ちながら、普段はほとんど局の運営や方針に口出ししないということも。

「そんな最高評議会が何故・・・」

何故近藤逮捕などと、単なるいち局員を・・・

「わからん。近藤ごときを取り締まる等を、何故わざわざ最高評議会が行ったのか・・・」

レジアスは机に肘をつき、顔の前で手を組んで考えた。

考えられることは一つ、近藤という人間が危険視する程の力を持っているということだ。

だが、レジアスが知る限りそんな片鱗すら見たことがない。

とりあえず、近藤のことは保留ということでレジアスは頭を切り替えた。

「それから、先程最高評議会から連絡が来た」

レジアスの言う連絡を聞いて、オーリスは更に驚く事になる。

ドゥーエは別室で書類整理を行っていた。

ドゥーエ以外は誰もいない、静寂に包まれている。

コンソールをピアノを弾くかのように軽やかに叩く、白く細い指は、どこか幻想的で官能的だった。

目はモニタを見ていたが、頭では別の事を考えていた。

（まさかここまで思惑通りに進むとは思わなかったわ）

瞳にモニタの文字が映し出される。
顔は無表情だった。

（ああ、可哀相な近藤さん。あんな無茶苦茶なでっちあげで逮捕されるなんて）

コンソールを叩くリズムが少し早くなる。

（みんなわかっていないのよ。近藤さんがどれだけ有能で素晴らしいのかを。あんなデマを鵜呑みにして、彼の本質を見ようとしない）

モニタに映る数々のウィンドウが消えたり表示されたりを繰り返す。
とても、普通の人間では処理仕切れない速度である。

（ごめんなさいね近藤さん、つらいでしょう？でもね、近藤さん、これは罰、おしおきなのよ？・・・あんな人形と婚約なんてするから・・・）

ドゥーエは指をピタッと止めた。

（いくらドクターのお気に入りのファーストでも・・・許さない・・・あの人は私の物・・・私はあの人の物・・・）

無表情から一転、ドゥーエは残忍な笑みをモニタに向けた。

（これから起こる惨劇に絶望し、私が貴方を救うの。ファーストは・・・ドクターには悪いけど・・・邪魔ね・・・）

何か陶酔したように目をつむり、顔を天井に向けた。

（ごめんなさい近藤さん、つらいでしょう?苦しいでしょう?でももう少し我慢していて。そうすれば、貴方も知らない貴方の真実が、管理局の腐った体質が白日のもとに曝されるわ!）

ドゥーエは笑いが込み上げてきた。

我慢できず、くっくっと喉を震わせる。

（貴方は傷つくでしょう、心も、体も。でも安心して、傷ついた貴方を私が癒してあげる!望むことをなんでもしてあげる!・・・ああ、だから・・・）

私の為に傷ついて、絶望してね

ドゥーエは誰に聞かれるでもなく、呟いた。

機動六課は通夜のように重苦しい空気に包まれていた。

フォワード達は近藤が逮捕されたと聞くと、皆驚き、怒り、泣いた。

とても訓練できる精神状態ではなかったが、公開陳述会も近い事もあって、軽いメニューだけでもと、無言で行っていた。

だがフォワード達は皆強かった。

確かに近藤が逮捕されたのはショックだが、皆近藤を信じていたから、必ず近藤が帰ってくると信じているから、軽いメニューと言いながらも、いつも以上に気合いを入れて訓練を行っていた。

それを見たなのはは、素直に驚き、自分の未熟さを痛感した。

（だめだなぁ私は。この子達みたいに、近藤さんを信じてあげなくちゃいけないのに、悲観してばかりで）

なのはの曇っていた瞳は、光りを取り戻し改めて近藤を信じて待つことにした。

そして願った。

（だから、フェイトちゃんも早く元気になってね）

「う～ん・・・やっぱりダメですぅ」

リインフォースＩＩは難しい顔でコンソールから手を話し、腕を組んだ。

「閲覧禁止になってるです」

「・・・そうかぁ・・・」

リインははやての指示で、近藤のスパイ容疑の証拠を詳しく調べよ

うとしていたが、何故か閲覧禁止になっていた。

リインからそう報告を受け、はやては内心やっぱりなと思っていた。
はやては顎に指をかけて考える。

近藤の逮捕は明らかに誤認である。
いや、誤認ではない。確信犯だ。

はやては考えた。

何故この時期に逮捕なのか？
公開陳述会前にわざわざ内輪で騒ぎを起こす必要があるのか？

そこで、発想を逆転してみた。
もしかしたら公開陳述会に、近藤を関わらせないようにする必要があったのではないか、と。
そこに最高評議会にとって何かしら不都合があるのではないか、と。

そして、はやては大胆な仮説を立てた。

もし、最高評議会が何処かのテロリストと手を組んでいたとしたら？
カリムの予言通り、公開陳述会が狙われていたとして、地上本部、管理システムの崩壊を企てたとき、近藤が邪魔な存在だったとしたら？

つまり、公開陳述会に近藤が居ては支障をきたすということだ。
いままでの事件や、ガジェット、戦闘機人・・・近藤が提示した情報を総合し、ある答えを出した。
そして、そのテロリストとは・・・

「ジェイル・スカリエッティ・・・」
はやてはポツリと呟いた。
そんなとき、リインがはやてに声をかけた。
「はやてちゃん、メールですよ」
はやてはリインに言われ、モニタを展開しコンソールを叩いた。
そして、メールの内容を見て驚いた。
「・・・なんやこれは？」

フェイトは部屋でふさぎ込んでいた。
こんな状態では仕事など出来るはずもなく、近藤が逮捕されてから部屋を出ずベッドでうずくまるのみだった。
なのはも励ましたり、一人にさせるために気を利かせてヴィヴィオと別の部屋で寝たりして気持ちの整理を促したが、やはり相当ショックのようでなのはやはやての呼びかけにも返事を返さない。
俯き、何をするでもなくただ左手の薬指にはめられた指輪を撫で、涙を流し、嗚咽を漏らしていた。

そんなとき、フェイトにプライベート通信がはいった。
フェイトはボーッと虚ろな目でコールランプを見つめ、ゆっくりとした手つきで回線を開いた。

相手はリンディだった。

フェイトはリンディの顔を見ると驚いたが、すぐに顔をくしゃくしゃにし、涙をボロボロ流した。

「かあ・・・さん・・・大輔・・・さん・・・が・・・クロ・・・ノ・・・が・・・」

フェイトは嗚咽交じりにゆっくりと、しかし確かにリンディに訴えた。

リンディも事情を知っているので、苦しそうな表情で、フェイトを励ました。

「フェイト、辛かったわね。大丈夫よ、必ず大輔君の無実を証明して見せるから」

実は、リンディと三提督は再三最高評議会とコンタクトを取ろうとしていたのだが、最高評議会と一向に連絡がつかない状態になっていた。

だが、今ここでそれをフェイトに言うのは酷である。とりあえずリンディはこのことは伏せておくことにした。

そしてリンディの力強い言葉に、フェイトは大声を出して決壊したように涙を流し泣いた。

しばらく泣いたフェイトは、落ち着きを取り戻し、それを見計らってリンディは近藤とクロノの確執について語った。

真実はクロノも近藤も話さなかったが、実はエイミィが知っていた。
クロノの、子供ながらに、他人に家族を奪われるという気持ちが暴走し、近藤への暴力へと発展したのだと。
エイミィはクロノが近藤に対して話していた内容を、たまたま聞いてしまったのだという。

エイミィはクロノと近藤が離れ離れになり安心していた。
いずれ時間が解決してくれるだろうと。

だが現実は違った。

クロノと近藤の溝はエイミィが考えるより、かなり深いようだった。

フェイトにはクロノの憎しみがわからなかった。
自分が養子になったとき、クロノは喜んでくれた。
お兄ちゃんとよべば照れていたが、それでもフェイトには兄ができて嬉しかった。

何故近藤にはそんな風に喜んでくれたりしなかったのだろうか。
もしかしたら、フェイトの事も心の中では不快に思っていたのかもしれない。

そう思うとフェイトは怖くなった。

自分は望まれていないのかもしれない。

自然と体が震える。

そんなフェイトの心境を敏感に察知したリンディはフェイトに優しく語りかける。

「大丈夫、フェイトはクロノにも愛されてるわ。大輔君とのことは、ちょっとした勘違いと、思い込みのせいよ。きっとクロノも大輔君と仲直りするわ」

リンディの言葉に、フェイトは頷くしかなかった。

フェイトは兄を信じるしかなかった。

そこで、リンディが急に話題を変えた。

「そういえばフェイト、聞いたかしら？」

「え、何が？」

フェイトは首を傾げるが、リンディが次に発した言葉に驚いた。

ところ変わり、ＸＶ級艦船「クラウディア」の艦長席では、クロノがおもいっきりへこんでいた。

クロノの周囲だけ照明が当たっていないと思うほど、黒く淀んでいた。

あまりにも暗いので部下のクルー達も声をかけられない。

ああ、何故あんなに感情的になってしまったのだろう。

いや、そもそも何故あんなに近藤に対し激怒したのだろう。
フェイトにとってはめでたいことではないか。
クロノは包帯の巻かれた手を見つめ、自己嫌悪に陥っていた。
人間の顔は頑丈に出来ている。
素手で殴ろうものなら、逆に拳がいかれてしまう。
案の定、クロノの手の骨はヒビが入っていた。

冷静に考えて、クロノは近藤に対してあんなに怒る理由がない。
そりゃあ、子供の頃はいろいろと近藤に酷いことをした。
子供心ながらに、リンディを近藤に、唯一の肉親を他人に奪われる。
そう思ったのだ。
今考えても無茶苦茶だったと思う。

だが、フェイトが養子になると聞いたときは冷静に嬉しかった。
もう親に甘える歳でもなかったし、客観的に物事を見ることができた。
なにより、家族が増える。
妹ができる。
フェイトやリンディに対しては素知らぬ態度をとっていたが、内心すごく喜んでいたのだ。

この時期、クロノは近藤の存在をすっかり記憶から削除していた。
だが、近藤が機動六課へ配属された時に昔の感情が蘇った。
ドス黒いドロドロした感情が心を支配していく。

近藤の逮捕状が出たとき、クロノは飛び上がらんばかりに喜んだ。
邪魔な奴が消えてくれる。
その一言に尽きた。
最高評議会から出された逮捕状だろうが、矛盾のある内容だろうが、どうでもよかった。
何故クロノの元に逮捕状が来たのか、何故こんな時期なのかだとか、疑問にすら思わなかった。
ただ単に嬉しかった。
近藤が破滅していくのが。

しかし、近藤を殴るまではずっと近藤の事を嫌っていたのに、殴った後に残ったのはこの罪悪感と後悔、フェイトの涙をみたときの胸の締め付け。
クロノは眉間に深く皺をつくり、顔を苦痛に歪める。
苦しい。
それに、痛い。
殴った手も、心も。

拳に痛みが走るたびに自分の愚かさを痛感するようで、心がナイフで刺されるようにズキズキとする。
心臓をえぐられるような感覚に吐きそうになる。
フェイトの泣き顔が頭を過ぎる度に奥歯をかみ締め、食いしばりすぎたのか歯茎から血が流れる。
口の中が鉄の味に支配される。

そこで思い出すのは近藤の顔。
血を流し、うつろな瞳・・・とても哀しい瞳・・・虚な瞳の近藤。
あんな感情の篭らない瞳をさせたのは誰だ？
それは僕だ。
クロノは自分の頭を掻き毟る。
己の愚かさが憎らしい。
穴があったら入りたい。
今だからわかる。
二児の父親になった今だからこそ。
人の親になった今だからこそ。
昔のリンディの行動も、近藤の言動も。
ああ、自分はなんて馬鹿なんだと。
近藤逮捕の直後、リンディがクロノに通信してきた。
リンディはクロノが近藤を殴ったことも知っていた。
だが、リンディはクロノに何も言わなかった。
それが一層クロノの心を締め付ける。
いっそのこと、怒ってくれたら、殴ってくれたらどれだけ楽か。
そして、悲しそうな瞳でクロノを見つめ、一言いった。
「あなたは過ちを冒してはだめよ」
この言葉の意味するところがわからなかったクロノは曖昧に頷くだ

けだった。

しかし、一つだけ、これだけはと心に誓った。

近藤に謝ろう。

フェイトに謝ろう。

許してくれないだろう。

それだけの仕打ちをしてきたのだ。

だが、自分にはそれしかできない。

殴られるのも仕方ない。

甘んじて受けよう。

それでも、謝ろう。

近藤は

大輔は

新しい家族になるのだから

クロノが心に誓い、顔を上げたとき、ポーンという小気味よい電子音がした。

どうやらクロノ宛てにメールが着たようだ。

クロノはメールの内容を確認した。

「・・・なに？」

メールの内容に我が目を疑った。

「・・・こんな無茶苦茶なこと・・・！」

クロノは思わず声を出してしまった。

オーリス、はやて、フェイト、クロノが同じく驚き、発した言葉は意外な内容だった。

「公開意見陳述会が３日早くなる？」

## 第６４話（後書き）

クロノの事は皆さん色々意見があると思いますが、クロノと近藤の試練?はまだ続きます。

次回は、また意外な人物が登場します。
さて、それは誰でしょう?

ではまたー！

## 第６５話（前書き）

お久しぶりです。
なんとか早く投稿できればいいんですが、リアルが忙しくて・・・
社会人って大変！！

ここから物語りは原作から徐々に離れていきます。
かなり無理が出てきますが、まあフィクションだしね！！って感じで見てください。

無理やりにしないと話進まないもの・・・

地球のみんな！オラにもっとボキャブラリーをくれ！！

# 第６５話

近藤は逮捕され勾留されている間、満足に寝ていなかった。
それは、無理矢理義手を引きはがされ、未だに腕に激痛が起こっているためでもあるし、取り調べ時間が長く、ヤンの暴言や多少の暴力を受けて精神的にまいっているせいでもある。
今の近藤の顔は、目の下にクマができ、やつれ、無精髭が生えていた。

ヤンは、近藤に身嗜みを整える事を許さなかった。
服も逮捕されたときからの制服をずっと着ているし、風呂にも入れさせなかった。
はっきりいって、こんな事が世間にばれれば大問題だ。
だが、狡猾なヤンのことだ、なにかしらの策を立てた上で近藤を追い込み、苦しませているのだろう。

近藤が逮捕されて3日目、意外な人物が現れた。

「こんにちは、近藤三尉。僕は査察官のヴェロッサ・アコース、気軽にロッサとでも呼んで下さい」

にこやかに微笑むヴェロッサ。
肩まで伸ばしたエメラルドグリーンの髪に、切れ長の目、整った顔

立ち、白で統一したスーツに靴。
ヴェロッサはいわゆる美形だった。
近藤から見たヴェロッサの第一印象は「軽薄そうな奴」いわゆるチャラい奴だった。
そんな事を考えていると、顔に出ていたのだろう、ヴェロッサは苦笑いした。

「はっはっは、いやはや、僕はどうもいつも第一印象があまり良くとられないんだよねぇ」

肩を竦めるヴェロッサ。
近藤は、はぁと生返事しかできなかった。

机を挟んで椅子に座った二人は、しばらくは無言だった。
しかし、その沈黙を破ったのは近藤だった。

「アコース査察官が何故ここに？自分に新たな容疑が付きましたか？」

近藤は疲れたように、しかし皮肉を込めてヴェロッサに質問した。
だが、ヴェロッサは意外な事を言い出した。

「近藤三尉、あなたを嵌めた人物に心当たりはあるかな？」

ヴェロッサは真剣な表情だった。

「・・・」

だが、近藤は言うことに躊躇した。
それもわかっていたのだろう、ヴェロッサは軽くこう言った。

「安心してくれていいよ。今この部屋は撮影の録画録音も、盗聴もされていない。あなたが何を話そうが、それは僕の胸の中にしか残らない」

そう言われてすぐに話し出すほど近藤も愚かではない。
というか、今近藤は若干人間不信に陥っていた。

「ん～・・・なかなか信じてくれないねぇ。そうだな・・・あなたが以前調べていた『レジアス中将の件』あれ、僕が引き継いだんだよねぇ」

近藤が驚きの顔でヴェロッサを見た。

「いやはや、君はすごいね。僕でもあそこまで深く調べるのには苦労するよ。大分予想や観測などが混じっていたがそれでも全てが的を得ていたしね。僕個人の感想だけど、僕はあなたを尊敬しているんだよ?」

「は、はぁ・・・恐縮です・・・」

ヴェロッサのマイペースぶりに、近藤はただただ戸惑うばかりだった。

「僕の見解を言おうか？この茶番を仕組んだのは恐らく最高評議会の名を騙ったジェイル・スカリエッティだろう。いや、もしかしたら最高評議会とスカリエッティはなにか繋がりがあるかもしれないね。はっきり言って何の喜劇かと自分の考えを疑ったが、これが一番しっくり来るんだよねぇ」

ヴェロッサが淡々と語りだす。
それを聞いた近藤はピクリと肩をわずかに動かした。

「・・・どうやら同じ見解のようだね。いやぁうれしいなぁ、あなたのようなやり手と同じ答えを出せたなんて！」

ヴェロッサはカラカラと笑い出した。
近藤は、もうどうしていいかわからずただ曖昧な表情を返すしかできなかった。
だがそんな笑いをすぐに引っ込め、ヴェロッサは真面目な表情になる。

「失礼ながら、あなたの事をいろいろ調べさせてもらったよ。・・・まあ、なんとも壮絶な人生だったようだね」

ヴェロッサは軽口を叩いたが、その表情は硬く、どこか苦しそうでもあった。

「・・・どこまで調べたんですか」

近藤は覇気のない声で、しかし睨むようにヴェロッサに質問した。

「ん～、まぁどこまでと言われると・・・そうだな、大体あなたの

フィアンセ、フェイト・T・ハラオウン嬢が知っている情報と同じくらいかな？」

ヴェロッサはからかうように言った。

近藤はフェイトをフィアンセと言われ、顔を赤くした。

「いやはや、羨ましいねぇ。あんな美人を伴侶にできるなんて。僕のまわりは暴力シスターや、兄を敬わない子ダヌキの妹分、小言の多い結婚適齢期が過ぎようとしている義理の姉くらいだよ」

ヴェロッサはヤレヤレと肩を竦めた。

近藤にはよくわからないが、ヴェロッサもあまり環境に恵まれていないようだ。

「まぁ、その・・・頑張ってください」

近藤にはそれしか言えなかった。

ヴェロッサも自分で言っておいてへこんでしまい、近藤の励ましにも渇いた笑いで返した。

ヴェロッサは気を取り直し、近藤に質問した。

「しかし、あなたはなんというか、『やさしい』ね」

ヴェロッサの言うことに近藤は首を傾げた。

「クロノの事だよ。あんなに理不尽に殴られたのに怒りもしないなんて・・・」

ヴェロッサは苦笑して言い、それに、と言葉を続けた。

「あなたの今までの管理局での境遇、待遇・・・はっきりいって酷いの一言だ。よく8年も我慢していたね。僕には無理だ、まず生きていけない」

ヴェロッサは軽口を叩く風に言うが、表情は真剣そのものだった。
ヴェロッサという人間はこういう人間なのだろう。
どれだけ真剣に話そうが、何故か言葉や口調は軽くなってしまう。

ヴェロッサは机に肘をつき、近藤の言葉を待った。

やがて、近藤はポツリポツリと話し出した。

「・・・どうでもいいんです」

「どうでもいい、とは？」

近藤の答えにヴェロッサはさらに問いかけた。

「進むべき道は一本、分岐はない。道を外れれば、そこに道などはなく奈落。ならば道を外れないように、逆らうことなくただ受け入れればいい。それだけです」

近藤は抽象的に語った。
ヴェロッサも、これにはお手上げだった。

「すまない、よくわからないんだけど・・・」

近藤さ俯き、ボソボソと話し出した。

「『シュレーディンガーの猫』をご存知で？」

シュレーディンガーの猫

簡潔に言うと、箱の中に猫一匹とタイマー付きの毒ガス発生装置を入れる。
毒ガスは5割の確率で出ないようになっている。
さて一時間後、猫は生きているだろうか？
という実験。

箱の中は見えない。
だから、一時間後猫の生死は1：1。
しかし、箱の中は『毒ガスが噴出されずに生きている猫の未来』と『毒ガスが噴出され死んでいる猫の未来』という二つ『重なりあった状態』が同時に存在する。

「・・・僕は量子力学は専門外なんだけどねぇ」

ヴェロッサは苦笑する。

「まぁ詳しい話しはこの際置いておきます、例えとして出しているだけですから。自分が言いたいのは、『本来箱の中は見えない』けど、もしその『箱は透明で中が見えている』としたら、ということです」

ヴェロッサははっとなって、驚愕の表情を近藤に向けた。
ヴェロッサが思い浮かべるのは、義姉のレアスキル「預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）」。

「まさか、あなたは・・・」

未来が、と続きを口にしようとして、ヴェロッサは思わず手を自分の口に当てた。

「・・・それは初耳だな。あなたはそれを今まで誰にも告白していないだろう？何故僕にそんな稀少能力の事を打ち明けたんだい？」

ヴェロッサは真剣そのものだった。
逆に、今度は近藤が肩を竦め椅子にもたれ掛かった。

「レアスキルとは違います。これは、イレギュラーによる『根源（アカシック・レコード）』とのリンクです。欠陥だらけで自分の知る未来なんて二つくらいですよ。ま、これはどうでもいいですかね」

ヴェロッサは近藤の言った事を考える。
先程の抽象的な表現の『道は一本、分岐はない』『道を外れればそこは奈落』そして『透明な箱のシュレーディンガーの猫』
導き出される答えを恐る恐る口にした。

「・・・あなたにはこの結末が見えていると？」

ヴェロッサの解答に、近藤は力無く笑って返した。
ヴェロッサは信じられなかった。
カリムのレアスキル「預言者の著書（プロフェーティン・シュリフテン）」でさえ、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけだし、しかも古代ベルカ文字で解読が難解

なため解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度なのに、近藤の能力は、近藤の言う事が本当ならばこの事件の結末がバッチリ見えているのだという。

信じられない。

普通ならば。

しかし、何故だろう、近藤の言葉は真実だと直感してしまった。

「このことはいずれ機動六課の隊長達に言うつもりでした。自分が未来を見てしまった為に、自分の未来は分岐が消え一本道になってしまったと。無理に脇道に逸れようとすれば、『世界の修正』が働く。そうすれば、待っているのは世界の消滅です。ならば、自分はその道を素直に歩くだけです。何が起ころうが、何をされようが。」

ヴェロッサは思わず近藤を睨んでしまった。

「あなたは・・・生きることを諦めているのかい？だからクロノに殴られても、管理局で冷遇されても、それを抵抗することなく甘んじて受けると？」

ヴェロッサの言葉に、近藤は無言だった。

「・・・あなたのそんな考えをフィアンセのフェイト嬢が聞いたら、さぞ悲しむだろうね」

「・・・でしょうね」

近藤は力無く笑った。

ヴェロッサは近藤の能力について自分なりに結論を出そうとした。

未来がわかるというなら、その未来をより良い未来に変えたい。だれでもそう思うだろう。

ヴェロッサならばそうする。

近藤がこれから起こる事件の一部の未来を知っているとして、それを頼りに未来を改変することも可能だ。

いや、本来そうするべきだ。

だが、近藤はしない。

動かない。動けない。

何故なら、改変した先の未来は『無』だから。

世界が消滅してしまう未来。

カリムのレアスキルとは根本から異なる。

カリムの能力は、あくまで予測。それは、可能性の一つを導き出す行為である。

だが、近藤の場合、決定しているのだ。

決定している未来は変えることは出来ない。

ここで、過程と結果が逆転してしまっている。

たとえば『ヴェロッサが大量にある仕事をサボり、女性局員をナンパし成功した』としよう。

ヴェロッサがナンパを成功させるためには仕事をサボらなければならない。

この場合、ヴェロッサが仕事をサボる事が過程で、女性局員をナン

パして成功したことが結果である。
カリムのレアスキルでは、ヴェロッサが「何かをするかもしれない」程度の予測しか出来ない。
だから、カリムは「ヴェロッサが何かしでかすかもしれないから、阻止してください」としか言えない。
だが近藤の場合、ヴェロッサが女性局員をナンパし成功する事までわかってしまう。
ここで、ヴェロッサの仕事をサボるという過程より、ナンパを成功するという結果が先にわかってしまっているのだ。
つまり、どんな過程があろうが、結果は変わらない。

近藤が未来を垣間見るだけで、その世界は未来が決定されてしまうのだ。
それを阻止したとして、世界がどう動くか、それは近藤もわからない。
近藤が未来を変えるということは一本道の先を潰す事になる。
まあ、道を潰すほどの事象などそうそうない。
だから近藤が未来を知り、それを変えようとすること自体は可能である。
だが大なり小なりの未来がわかったとしても、近藤は変えないし、逆らわない。

近藤は口にしない結末と、現在の状況、これまでの事件の関連性、スカリエッティの行動、そしてカリムの預言。

導き出された答えは最悪なものだった。

つまり、『地上本部、管理局システム崩壊の危機は避けられない』
そうヴェロッサは結論付けた。

多大な被害が出るとわかっていながら、何も出来ないという歯痒さ
ともどかしさ。
救える命を切り捨てる罪悪感。
ヴェロッサも事実を知りはしても、身動きが取れない。
事件を未然に防ぎ、改編した未来の先にそれ以上の事態、最悪の事
態『世界の消滅』が待っているのだ。

二者択一

目の前の命を救うか、未来の世界を守るか。

近藤は未来の世界を選んだ。
ヴェロッサも選ぶならば近藤と同じ道を選ぶ。

むごいと思うだろうか。

薄情だと思うだろうか。

だが、所詮は一人の人間、出来る事には限界がある。

そんな近藤の心中はいかほどのものか、ヴェロッサには推し量るこ
とはできなかった。
だが近藤も辛かったのだろう、追い込まれていたのだろう、初対面
のヴェロッサに対して秘密を暴露してしまうくらいに。

普段の近藤ならばそんなこと思っても実行に移さなかっただろう。しかし連日の取り調べに、精神的にやられてしまっているところも起因するのだろうが、近藤も少しでも楽になりたいと思ってしまったのだ。

暴露して、少しでも肩の荷を軽くしたかった。

だからこそ、ヴェロッサは近藤を非難などできず、口に出さず、自分の心に留めることにした。

そうすることで、少しでも近藤の心が、罪の意識が軽くなるように願って。

ヴェロッサと近藤はしばらく取り留めのない話しをして、その日の取り調べは終了となった。

「それでは近藤三尉、もう少しの辛抱です。今リンディ統括官と三提督が最高評議会に掛け合っています。釈放されるのも時間の問題でしょう」

ヴェロッサは締めとして近藤に周囲の動きを話した。

「あと、ヤン・パオ一佐にも注意しておきますから、これからはあまり酷い取り調べな無いと思います」

近藤はそれを聞いて、胸を撫で下ろした。いくらどんな仕打ちにも抵抗せず甘んじて受けるとはいっても、辛いものは辛いのだ。

「それに、機動六課にあなたの状態を報告しておきます。ああ、安心してください。元気にしていたと言うだけですから」

ヴェロッサの気遣いに、近藤は頭を下げ礼を言った。
そしてヴェロッサは踵を返し、部屋を出ようとした。
するとドア付近でピタッと足を止め、思い出したように話し出した。

「ああ、そうそう。あなたにお知らせがあるんだよ」

近藤はヴェロッサの方を向き、続きを待った。

「公開意見陳述会、日程を早めて明日することになったんだよね」

近藤は俯いてしまった。

「日程変更の理由は、あなたがスカリエッティに管理局の情報を流したためとされているが・・・」

ヴェロッサは苦笑していた。

「十中八九、明日の公開意見陳述会が狙われるだろうね。そして、避けられない・・・」

ヴェロッサは近藤に向けて力無く笑った。

「知っていても動けないのは苦しいね、どうも。ま、できるだけ被害を最小限に出来るよう行動はするけどね」

そう言い、ヴェロッサは部屋を後にした。

ヴェロッサが出て行った後、近藤は一人取調室で俯き、握りしめた左拳を苦しそうに見つめていた。

だが、その瞳には何も映ってはいなかった。

# 第６６話（前書き）

えー、本当は最終回まで書いてからいっぺんに投稿しようと思っていましたが、なにやら思ったより長くなりそうで、とりあえず区切りの良いところまで投稿することにしました。

今回から送る話は、色々物議をかもすかもしれません。
ですが、とりあえず見てください。

# 第６６話

近藤が逮捕されて四日目

公開意見陳述会当日

取り調べ室には、近藤とビアンテの二人しかいなかった。

「ヤン一佐は公開意見陳述会の警備に行ったよ」

ビアンテが肩を竦めた。

「何故公開意見陳述会の開催が三日も前倒しになっのに、会場は変更しないのでしょうか？」

近藤はビアンテに質問した。

だが、ビアンテはまた肩を竦めた。

「さあ？なんでも管理局最高評議会からの御達示らしいぜ。『会場は現行のまま変更無し』ってな」

ここでも最高評議会の名前があがった。

「でもおかしいよな。最高評議会って基本管理局の運営とかには口出ししないのに、急にそんなこと言うんだもんな。ま、俺達みたいな下っ端は最高評議会の存在すら眉唾なんだけどさ」

ビアンテの言うことはもっともである。
最高評議会は人前には現れない。
必ずホログラムに変声器等を使う。
個人の特定が困難なのだ。
実際、最高評議会といわれる三人の人物をこの目で見たという人間は聞いたことがない。
そんなだから、噂がたつ。
最高評議会とは、実は存在せず誰かがスケープゴートの役割をして裏で管理局を操っている。
最高評議会は次元世界を統合した偉人で、今も脳みそになって生き延びている。
最高評議会は宇宙人。
などである。
もはや都市伝説である。

近藤は考えた。
最高評議会が存在するしないはこの際どうでもいい。
しかし、最高評議会からの通達だからというだけで公開意見陳述会の日程を簡単に繰り上げる組織にも問題があるのではないか？
たしかに社会の仕組みとしては、上層の指示に従うというのは至極当然の話しであり、システムとしてそれが当たり前なのだ。
しかし、上に振り回される部下は堪ったものではない。

近藤が思考に耽っていると、ビアンテに呼ばれた。

ビアンテはなにやらニヤニヤと笑っていた。

「お前さ、機動六課に居たんだよな？」

「はあ、まあ・・・」

近藤はビアンテが何を言い出すのか気になった。

「高町一尉やハラオウン執務官、八神二佐も居たんだよな？」

「え、ええ・・・」

ビアンテは目をキラキラさせていた。
この人は何が言いたいのだろうか？

「いいなあ、お前！今をときめく管理局の美女三人と同じ部隊なんて！」

ビアンテは本当に羨ましそうにしていた。
すると、一転して急に怒りだした。

「あ！そういえばお前、マセラティ二尉との噂がチラホラとんでるじゃないか！どうなんだ！？ホントのとこどうなのよ！？もし付き合ってるとか言ったらただじゃおかねー！！」

どうやらビアンテはドゥーエを狙う一人のようだ。

「あの・・・そんな話してていいんですか？自分、一応容疑者なんで取り調べしないとダメなんじゃ・・・」

「ばっきゃろう！これが取り調べだっつーの！言っとくが虚偽の言動は許さんぞ！いまこの部屋は１１３部隊隊舎に生放送してるからな！」

「・・・それいいんですか？」

ドゥーエの人気は相変わらず凄まじい。
とりあえず近藤は皆が持つ誤解を解くことから始めた。

「アルファード大将、出てください」

そんな声が部屋に響いた。

エレノアは更迭を言い渡された際、スパイ幇助の疑いで拘束されていた。
いまエレノアは小さい、ベッドとトイレしかない部屋に閉じ込められていた。

エレノアはそんな小さな部屋にあるベッドにうなだれ座っていたが、声を聞くとゆっくりと顔を上げた。

部屋を出て、エレノアは自分に宛てがわれていた大将室に帰った。
するとそこには意外な人物達がいた。

三提督と呼ばれるミゼット・クローベル、ラルゴ・キール、レオーネ・フィルスである。

エレノアはそんな三人の顔を見ると、眉間に皺を寄せすぐ目を離し自分の椅子に座った。

「何か用？」

トゲのある言葉を三提督に向けるエレノア。
そんな態度に三提督は苦笑した。

「そう怒らんでくれ。これでも君の拘束解除に急いだんだ。更迭の方は未だ協議中だ」

キールが弁解するが、エレノアは机に片手で頬杖をつき、もう片手で机をトントンと不機嫌を隠そうとせず叩いていた。

「最高評議会と連絡がとれなかったのだ」

レオーネも続けて弁解するが、そんな事情エレノアには関係ない。

「実際、今も連絡がとれず強引に君の拘束だけはなんとか解かせたのだ」

その言葉にエレノアは怒りの表情を向けた。

「ご主人様はまだ釈放されていないの？」

エレノアの殺気にあてられ、思わず後ずさりしてしまうレオーネ達。
数々の修羅場をくぐり抜けた三提督でも、エレノアの濃密な殺気は

キツイようだ。

「この老体にその気迫はキツイ。引っ込めてくれないか」

冷や汗をかきながらエレノアに頼むラルゴだったが、エレノアは殺気を引っ込める気はさらさらない。

「私より先にご主人様を解放しなさいよ」

静かに怒るエレノアの抗議は主人を想う者として当然の反応ではある。

「無茶言わないでくれ。近藤君の容疑は無茶苦茶ながらも正式な手続きによって正式に受理されているのだ。我々でも強引にどうこうできないのだ。君の事にしても、かなり無理をしたのだぞ」

「勘違いしないでくれる？私はできるできないなんて聞いてないの。やれって言ってるの」

エレノアは体育会系全開の強引な要求をする。

「・・・現在手続きをしています。それで納得してください」

ミゼットがなんとか落とし所を探りながら言う。

エレノアはミゼットをひと睨みして、フンと鼻を鳴らしソッポを向いた。

「・・・エレノア君、いや『アルファード大将』、実はお願いがあ

るのだがね」

レオーネはなるべくやんわりと言った。
これ以上機嫌を損ねられてはまずいからだ。

「公開意見陳述会が最高評議会からの通達で、三日前倒しして今日行うことになり、現在開催中なのだ」

レオーネの説明も、エレノアはソッポを向いていた。

「そこで君に頼みたいことが・・・」

レオーネがそこまで言うと、エレノアは手で待ったをかけた。

「自分達の要望だけ通そうとするなんて、随分傲慢ね、三提督さん？」

エレノアは笑顔だった。

「私に何かして欲しかったらご主人様をいますぐ釈放しなさい。それから最高評議会をこの場に呼びなさい」

「最高評議会は我々も実物を見たことはない。それに、最高評議会とは今連絡がつかんから無理だ。近藤君の釈放も正規の手続きを行っているところなのだ。それで納得してくれ」

ラルゴの言い分にエレノアは冷笑した。

「さんざんやりたい放題の局員を放置して、違法取引なんかの取締を蔑ろにして、ご主人様には正規の手続きで釈放が遅くなる？三提

督様は都合のいい神経をしてらっしゃるのね」

「・・・」

そう言われると三提督もつらい。別に違法取引や不正の取締を蔑ろしていたわけではない。
ただ、相手が狡猾で法の隙間をかい潜るような周到な行動をとったり、組織ぐるみで大規模すぎて取締しきれないのだ。

しかし、そのような不正を働いたりしているのは一部の局員であって、大半の局員は真面目に働いている。
ただ、その『一部』が上層に多いのだ。

大木の枝が、綺麗な花を咲かせようと頑張ろうが、根幹、大木の幹や根っこが腐っていれば花は咲かせることが難しい。
かえって枝も腐食してしまう。

「頼む、カリム・グラシアの予言を予測するに、公開意見陳述会が一番狙われやすいのだ。君の力を貸してくれ」

ラルゴがエレノアに頭を下げた。

「君の力は凄まじい。どれだけ強大か我々は身を持って知っている。今は君のその力が必要なのだ」

レオーネも頭を下げた。

「管理局を、この世界を守る為に力を貸してください」

ミゼットも頭を下げた。

三提督が全員頭を下げるなど前代未聞である。
エレノアはニコリと微笑んだ。

「イヤ。」

そしてキッパリと拒否した。

「管理局がどうなろうが、ミッドチルダがどうなろうが、私は知ったこっちゃないの」

エレノアは依然笑顔を絶やさず語る。

「それにね、そんな占い程度の予言に振り回されたり、最高評議会の権力に振り回されたり、たかがテロかなんかで潰れるような組織、無くなってしまえばいいと私は思っているのよ」

「管理局が崩壊すれば、次元世界の秩序が・・・！」

ラルゴが思わず声を荒げた。

「勝手にあなたたちが他次元に手を広げただけでしょうが。管理局が無くなったら無くなったで、他の世界も逞しく生きるわよ。はっ、秩序？あなたたちに都合の良い秩序でしょ？押し付けた秩序なんて糞喰らえよ」

エレノアは取り付くしまもないくらいラルゴの意見を突き放す。
三提督とエレノアの意見は平行線をたどっていた。

そんな時、緊急通信が入った。

モニタを映しだすと、そこにはにこやかに笑うスカリエッティが映っていた。

取調室では、ビアンテの尋問は続いていた。

「次！マセラティ二尉のメアドをもらったのは本当か！？」

「・・・はい」

「なんだと貴様ー！！」

「い、いや、でもフェイト隊長・・・ああ、いやハラオウン執務官

に書かれた紙を破られましたからアドレスは覚えてません！」

ビアンテのあまりの剣幕に近藤は必死に弁明する。
いつの間にか狭い部屋には多くの男性局員で埋めつくされていた。

「次は俺だ！おい近藤、ゲイズ三佐の事をオーリスって呼ぶ事を許されたってのは本当か？」

「え？ああ、はいそうですね」

「なんだと貴様ー！！俺達ファンクラブのメンバーでも許されていない事だぞー！？」

「ファンクラブって・・・いい年した大人が何してるんですか・・・」

近藤への尋問はドゥーエの事ではおさまらず、近藤の身の回りにいる女性陣との噂の真意にまで及んでいた。

幸いなのは、近藤とフェイトの婚約がまだばれていない事である。
もし白日の元に曝されれば、近藤はここで殺されるかもしれない。
それ程男性局員達の目は真剣そのもので、鬼気迫る勢いだった。

「あ、次俺ね。フェイトちゃんと外食したってのは本当か？」

「えーと、はい。でもエリオやキャロ・・・えっと、ハラオウン執務官が保護している子供と一緒でしたけど」

「うーむ・・・ならばよし」

何がいいのだろうか？

というか、近藤は局内では嫌われ者のはずなのだが、男性局員達から飛んでくる言葉は色恋沙汰による妬みやそねみばかりである。
そんなんで世界守っていけるんだろうか？

「確かにお前は嫌いだ。イロイロな噂を聞くからな、しかも悪い噂ばかりだ。でもな、今はお前自身のそんな噂関係ねー！今はな、女性関係をキッチリさせるのだ最優先事項だ！！」

一人の局員がそう叫ぶと周りからオオーと歓声があがった。
もう管理局はダメかもしれない、そう思う近藤だった。

そんな時だ、一人の局員が顔を真っ青にして飛び込んで来たのは。

「お、おい！モニタを点けろ！！」

慌てた風のその局員は、パニックに陥っており、とにかくモニタを点けろしか言わない。
ビアンテは言われた通り取り調べ室備え付けのモニタを点けた。

そして、皆息を飲んだ。

映し出されたのは、管理局の地上本部が火の海に包まれていた映像だったのだ。

「な・・・んだ、これ・・・」

誰がが呟く。

あまりにも現実と掛け離れた映像に、脳が追いつかないのだ。

平和の象徴である地上本部が紅く燃えているのだ。

火事などの災害ではない。

それは、平和とは真逆の位置にあるもの。

戦争だ。

「地上本部からの連絡は!?」

声を荒げながらモニタを凝視するビアンテだったが、体は震えていた。

「そ、それが、あちらからの連絡は無く、こちらの連絡も通じません!!」

クアットロのＩＳ「シルバーカーテン」によって、地上本部は孤立し、通信システムは混乱していた。

あわてふためく局員達を余所に、モニタを眺める近藤は冷静だった。

だが、左手を握り締める力が強すぎたのか、爪が皮を破り血が溢れていた。

すると、地上本部の惨状の映像から、急に一人の男の映像に変わった。
紫の髪を肩まで伸ばし、金色の瞳に色白な肌、白衣を着た姿の人物に、近藤は眉をひそめた。

「・・・スカリエッティ・・・」

近藤の呟きにビアンテは驚いた。

「なっ!?こいつがジェイル・スカリエッティ!?」

局員達はモニタを凝視していると、スカリエッティは、まるで何かの芝居のような動きで語りだした。

「ミッドチルダ地上管理局員の諸君、気に入ってくれたかい?」

世間話をするように、自然に語りだすスカリエッティ。
だが、内容がその雰囲気とは間逆だった。

「ささやかながら、これは私からのプレゼントだ。治安維持だのロストロギア規制だのと言った名目の元に圧迫された正しい技術を促進したにもかかわらず、罪に問われた稀代の技術者達・・・今日のプレゼントはその恨みに一撃だと思ってくれたまえ」

陳腐な芝居を見ているような錯覚さえ覚えてしまう、スカリエッティの演説が、より現実感を遠のかせる。

「しかし、また私も人間を、命を愛するものだ。無駄な血は流さぬよう努力はしたよ。可能な限り無血に、人道的に。忌むべき敵を一

方的に制圧する事のできる技術、それは十分に証明できたと思う」

悲しむようなそぶりを見せつつも、その顔にはいやらしい笑みが張り付いていた。

「しかし、最高評議会の名は偉大だね。私が最高評議会の名を騙って公開意見陳述会の日程を前倒ししても、なんの反論も疑いも無く従う。ああ、君達は良い駒だよ！『遊び』で命令したのに、従順に従う君達を見ておおいに楽しませてもらったよ！！」

クックックと肩で笑うスカリエッティは髪をかきあげ、モニタの前の人間を見下ろすようにしていた。

「ああ、ちなみに最高評議会はもうこの世にはいないよ。『アレ』は私の娘が排除したからね」

私を利用しようとした『罰』さ。

『アレ』と呼ばれた最高評議会もそうだが、すでに最高評議会がスカリエッティによって殺されていた事に衝撃を受けた局員達。

スカリエッティ一人に弄ばれていたという事実に、局員達は怒りをあらわにした。

だが、これからスカリエッティから飛び出す話によって、局員達、いや、管理局はとんでもない事態に陥るのだ。

「ああ、そうだ！大事な事を忘れていたよ。見ているかな『近藤大輔君』！」

わざとらしく何か思い出したかのようなリアクションを取るスカリエッティから名指しされた近藤に、一気に視線が集まる。

「最高評議会の命令でスパイ容疑で逮捕された『近藤大輔君』！ああ、もちろんその命令を出したのは私だ！君と君のデバイスは私の今回の作戦の最大の障害だったからね、一時舞台から下りてもらったよ。しかし、あんな出鱈目で矛盾だらけな容疑で簡単に逮捕状を出すなんてねぇ、まったく嘆かわしいよ！君もそう思うだろう、『近藤大輔君』？」

局員達は声も出せずに近藤を見た。
今まで管理局は、最高評議会の名を借りたスカリエッティによって躍らされていたのだ。

「管理局は君の偉大さに気付いていない。というより活かしきれていない。そう、今回君が公開意見陳述に参加していたら、私達の計画の成功率はかなり低くなっていただろうね。それ程君と君のデバイスの『個』の力は強大なのだから」

近藤の力が強大？
昔の近藤を知るビアンテは疑問に思った。
近藤は手先は器用だが、魔力や戦闘力はさほどではなかったはず。
だが、スカリエッティはそんな近藤を恐れていた。
どういうことだろうか？

すると、スカリエッティはついに言ってしまった。

あの言葉を。

「なにせ、近藤大輔君、君は私と同じ、いやもしかしたらそれ以上に『アルハザード』の知識を有しており、また君のデバイスであるエレノア・K・アルファード大将はアルハザードの遺産である『源書』の管制人格融合騎なのだから！」

取り調べ室がざわめく。

アルハザード

デバイス

大将

源書の管制人格融合騎

一度に津波のような情報が押し寄せ、ビアンテ達はパニックに陥る。

「・・・おい、近藤、今のは本当か？」

一人の局員が近藤に問いただす。

「・・・」

近藤は無言だった。

誰かが更に近藤を問いただそうとした。

だがそれは、モニタのスカリエッティによって遮られた。

「まったく嘆かわしい。悲しいことだよ。管理局とは、これほど無能で低俗な輩の集まりだとはね」

スカリエッティは大きく首を振り、やれやれと肩を竦めた。

「自分達の利益の為に、局員の関わった事件を改竄、捏造し都合よく処理するのだからねぇ」

スカリエッティの金色の瞳が妖しく光り、いやらしい笑みを浮かべた。

「特に近藤大輔君の関わった二件の事件の改竄！これはヒドイの一言だよ！」

スカリエッティの言葉に近藤は目を見開いた。

今スカリエッティはなんと言った？

二件の事件の改竄？

二件？

「さあ、まず一件目は8年前の事件だ。記憶しているものもいるのではないかな？『エースオブエースの高町なのはが墜ちた事件』だよ」

取り調べ室がざわつく。

それは、近藤が一気に管理局に『名をしらしめた』忌まわしき事件だ。

「あの日高町なのはは体調が優れなかった。それなのに体に鞭を打

って任務を遂行した。すばらしい、局員の鑑だね。だが、それがいけなかった」

スカリエッティはそう言うと、指をパチンと鳴らした。すると、新たなモニタが展開され映像が映し出された。

局員達はその映像を見て顔を青ざめさせた。

そこには、なのはが無謀にアンノウンに突撃し、撃墜され、近藤がそれを身を呈して助けていた姿が映し出されていたのだから。

近藤の腹から金属のようなものが飛び出て、腹から、口から血が吹き出る姿に、一同は口を押さえた。

近藤はモニタを睨んでいたが、ビアンテは周囲の局員以上に顔を蒼白にさせていた。

「これが偽物だと思う者もいるだろう。なにせ、捏造映像が管理局には正式書類としてあるのだからね。だが考えてもみたまえ。彼はこの事件後から、『イロイロな噂』が立つようになった。そう、ちょうどこの事件の後からだ。ではその前は？そもそも、あんなヒドイ噂を事実見た者はいるのかね？」

スカリエッティがそう指摘すると、皆思い返した。

確かに、近藤の名前が有名になったのはこの事件からだ。

その有名になった内容は、近藤の悪い噂や失敗などばかりだった。

しかし、イロイロ酷い噂を立てられているにもかかわらず、実際見たものはいるだろうか？

そもそも、それ以前の近藤はそんなに酷い人間だっただろうか？

この部隊は近藤の事件の真相を知る者は勿論いる。

しかし、それ以上にその事件以前の近藤を知っている者が多くいる

のだ。

たいして魔力が強いわけでもなく、仕事ができるわけでもない。
人と接するのが苦手で、いつも一人で食事を採っていた。
ただ、手先は器用だった。
だから、デバイスマイスターの資格を取得して皆のデバイスの管理、調整等を行っていた。
ノーとは言えない、押しの弱い人間。
目立たない人間。
いつも一人の人間。
どこにでもいる、頼りない気弱な人間。
それが近藤大輔だ。

そんな男の噂を聞くことがあるだろうか？

答えは否だ。

冷静に考えて、近藤の悪い噂が立ちはじめたのは事件後からである。

そう、急に今まで目立たなかった男の噂が立ちはじめたのだ。

そして、皆噂は知っていたが、実際近藤の噂通りの事を目の当たりにしたものは誰一人としていない。
地上本部で事務担当をしていた時も、黙々と仕事をこなし人の接触など皆無だった。
それでも近藤の噂は一人歩きし、ますます近藤を孤立させる。
地上本部勤務の時にまともに会話をしたのはレジアス中将、オーリス、ドゥーエくらいなものだ。

「ああ、なんということだ。彼は高町なのはをそれこそ文字通り身を挺して助けたのにも関わらず、彼女のミスを全てなすりつけられ、左遷され、いわれのない誹謗中傷を受けつづけた！これが正義の管理局がすることかね！？嗚呼嘆かわしい！」

スカリエッティは顔を手で覆い、オーバーアクションで悲しみを体言する。

それは、管理局を嘲笑っているかのようで、ピエロのようだった。

そして、スカリエッティはピンと人差し指を立て、三日月のように口角を上げた。

「あとひとつ。おそらくこれは近藤大輔君も知らない事実だ。これは先程のものより更にタチが悪い」

これ以上管理局が近藤に対して何をしたのだろうか。

皆無言でモニタに注目した。

「遡ること２０年前だ。彼は第９７管理外世界『地球』で幼少期を過ごしていた。だが、そこで事件が発生した。『彼の両親がある犯罪者に殺された』のだ」

近藤の過去にそんなことがあったことに驚く局員達だったが、スカリエッティは話を進める。

神妙な表情で語るスカリエッティは、しかしどこか滑稽だった。

「彼自身もその犯罪者に『切り付けられ』重傷を負わされた。そこへ、魔力反応を察知した時空管理局が馳せ参じ助けたのだ。そして現場の残留魔力を調べたが、魔力は極微弱で犯人の特定が困難であり、結果その事件は魔法との関連性無しとされ、現地住民による殺

人事件として処理された。まぁ、そもそも父親の死因が『切り付けられた』ことによる出血多量死と、母親が『鈍器で殴られた』撲殺だったからね。その判断は正しいといえる。まあ、そもそもが管理外世界の事件だ。あまり首を突っ込む理由もないからねぇ」

そこまで話すと、スカリエッティは神妙な面持ちから、急にいやらしい笑みへと変えた。

「だが真実は違う」

その表情は、おもちゃを与えられた子供のように無邪気で、残酷だった。

「実は、管理局は犯人を特定できていた。犯人が『複数』であることもわかっていた。証拠も押さえていた。だが、逮捕しなかった。そう、しなかったんだよ！なぜだかわかるかい？」

スカリエッティはモニタに顔を近付け、皆に質問した。
そして、一人ウンウンと頷いた。

「そうだねぇ、わからないよねぇ。しょうがない、答えを教えよう。それはね『犯人達が魔導士として有能だったから』だよ！」

スカリエッティは両手を広げ、笑うように叫んだ。

「その魔導士達は有能だった！そんな人材を黙って犯罪者として処理するにはもったいない！いくら管理外世界での殺人事件とはいえ、殺人には変わりない。罪は重い。ならばどうする？答えは簡単だよ」

事件を無いものにすればいい！

「結果、証拠も十分あった事件は『証拠不十分』として改竄、処理され、事件そのものが無いものとされた！そして、その魔導士は後日思惑通り管理局へと入局した！さぁ、ここでまた問題だ！その有能な魔導士とは誰でしょう？」

スカリエッティはニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながら、楽しそうにぐるぐると歩いていた。

「君達にヒントをあげよう。ヒント１『ソレ等は人間ではない』」

スカリエッティは人差し指をピンと立て、直ぐに中指も立てた。

「ヒント２『ソレ等は今も管理局でのうのうと働いている』」

局員達はスカリエッティの問題の答えがわからなかった。

そんな姿が想像できたのか、スカリエッティは肩を竦め、やれやれと首を振った。

「まだわからないかね？まったく管理局は無能だねぇ。仕方ない、最後のヒントだ」

スカリエッティは薬指をピンと立てた。

「『ソレ等はその事件の１０年後、第９７管理外世界である事件を起こす』」

１０年後、つまり、今から１０年前である。
近藤が１６歳の時の事件である。
つまり、なのは達が９歳の時だ。

その時の大きな事件が一つだけある。

「・・・あ」

一人の局員が声をあげた。
思い当たる事件があったのだ。
それが伝わったのか、スカリエッティはニヤリと笑った。

「そう、そうだよ。有名な事件だねぇ。さぁ、みんなで声を揃えて言ってみようか！はい、せーの！」

『闇の書事件』

スカリエッティは肩を揺らし、大声で笑った。

「くくく・・・ハッハッハッ、ハーッハッハッハッハッ！！なんという皮肉か！近藤大輔君！君の『親の敵』は君の『近く』で、『何も知

らない主』と幸せに暮らしていたのだよ!!さぁ、ここまで言えばもうわかるだろう?答え合わせをしようか。・・・正解は・・・」

シグナムとヴィータ

「そして、その事件を改竄、処理した人物は・・・嗚呼、まったく君はなんてかわいそうな人なんだ。まさか助けてくれた人物が犯人とはねぇ・・・聞いているかい?『リンディ・ハラオウン』『レティ・ロウラン』!!」

これはとんでもないスキャンダルだ。
管理局が、有能な魔導士獲得のために事件を歪曲させ、管理局は関知しないとの判断を取った。つまり、事件自体なかったものにしているのだ。
もし、これが本当ならば管理局の正義自体が揺るぎかねない。
自分の都合のいいように事件そのものを操作しているのだ。

「嗚呼、残酷だ!なんて残酷なんだ!!『近藤大輔君』管理局に絶望しただろう?ならば私の元に来るといい!君のような有能な人材は大歓迎だよ!高待遇でお迎えしようではないか!!」

スカリエッティは近藤をスカウトしだした。
だが、スカリエッティの言った事が全て真実ならば、近藤が管理局

に絶望しスカリエッティの元へ行っても不思議ではない。
利益の為に人の運命を操作する。
とても正義の所業ではない。
それ程のことを管理局は近藤にしてきたのだ。

「ここにその証拠のデータがある。先程の高町なのはの事件の証拠と共に公開しようじゃあないか！ああ、ついでに『あるクライアント』の情報も提供しようじゃあないか！！」

そういうや、急にデータが転送されてきた。
近藤の二つの事件の改竄、真実、履歴、映像・・・そして、『あるクライアント』と呼ばれた人物の不正取引や黒い繋がり、そしてこれまで自分と関わった事件が膨大な情報として流れ込んできた。

その『あるクライアント』とは、レジアス中将だった。

「今日はここまでにしておくとしよう。この素晴らしき力と技術が必要ならば、いつでも私宛に依頼をくれたまえ！格別の条件でお譲りする・・・ふふふふ・・・ははは・・・」

スカリエッティの高らかな笑いが響き渡る。

誰も、何も、言えない。

声が、出ない。

モニタ、を、見るこ、とが、できな、い。

事実を、認める事ができ、ない。

喉が、か、わ、く。

体が、ふ、るえる。

怒りが、込み上げる。

「・・・スカリエッティ・・・」

ダンッ！！

近藤は呟きと共に机をおもいっきり殴る。

いきなりのことにビアンテや局員達がビクッとする。

スカリエッティの『非現実的』な、いや、『非現実的』であると思いたかった『事実』の前に脳が弛緩していたのが、机を叩いた音によって現実に引き戻されたのだ。

局員達は恐る恐る現実に引き戻した近藤を見た。

そこには、怒りに震え、鬼神のごとき形相の近藤がいた。

ギリギリと歯ぎしりをし、歯を食いしばりすぎて、歯茎から血が流れた。

あまりの覇気に、局員達は震えた。

「・・・スカリエッティィィィッ！！」

近藤の叫び声が隊舎に響いた。

## 第６７話（前書き）

早くも投稿します。

もうお分かりの方もいらっしゃると思いますが、佳境に入り原作とはかなりかけ離れていきます。
さらにこれからどんどん離れていきます。

あと、闇の書に関しては独自解釈が多く含まれています。
これに関しては昔の話としてざっくり書いているだけなのであまり突っ込まないようにお願いします。

そして、この物語に出てくるレジアスの半分はやさしさで出来ています。

・・・なんでこんなオッサンになったかなあ・・・

# 第67話

闇の書の21年前の事件、すなわちクロノの父親であるクライド・ハラオウンが指揮していた艦の制御を闇の書によって奪われ、やむなく沈められた艦と運命を共にした忌まわしい事件である。
そして、闇の書はすぐにはやての元に転生されたとされているが、実はこの事件からはやての元に闇の書が転生するまでの間が2年以上ある。
はやてが生まれる前から、はやての両親の元にあったとは考えにくい。
では何処にあったのだろうか？
その空白の2年の間に、闇の書は別の主の元へ転生していた。

そして、その主はいままでの主の中でも一番最低だった。

まず、主のリンカーコアの質が低く、魔力が微弱で、いままでの主の中でも最低ランクだったこと。
あまりの弱さに、守護騎士維持が限界だった。
何故そんな人間の元に転生をしたのか謎である。

次に、守護騎士達を道具として扱った。
それは以前も受けたことなのでどうということはなかった。

そして、性格がかなりいびつだった。

今日は晴れているな、アレを殺せ。

ああ、野球中継が延長して見たい番組が無い、アレを殺せ。

おはよう、アレを殺せ。

等であった。

それでも殺せと命じた物が野良犬や野良猫、たまに飼い犬等だったから多少ご近所で話題にはなったものの、まだ大事にはならなかった。

しかし、ある日その主はこう言った。

あの親父ムカつくから親子殺してこい。

守護騎士にとって、主の命令は絶対である。

最初シグナム一人で行くと言っていたが、主はヴィータも行けと命令した。

ヴィータは普段から主と距離を置き、いつもイライラと不機嫌を隠さなかったので、主から目をつけられていたのだろう。

シグナムとヴィータは二人でその親子を殺しに行った。

シグナムは主の言っていた家族の住むアパートのドアの前に立った。
中には男と女、子供の三人がいるのを気配で確認する。
おそらく夫と妻、子供だろう。
シグナムはレヴァンテインの柄をきつく握り、ドアを蹴破ってドカドカと無遠慮に部屋へ入り込んだ。

いきなりの不法侵入に当然家主は驚く。

ダボダボのジャージに金色のネックレスをジャラジャラと重ね、ヒョロヒョロの体格ながら目つきの悪いその男、はシグナムに汚い言葉を浴びせながら突っ掛かるが、シグナムはそれをヒラリと避け、レヴァンテインを振り上げる。
そして、肩から斜めに切り下ろした。
男は声も出せず、斬り付けられた所を見た。

ズル・・・ズル・・・

男の体が斜めにズレ、二つに分かれた。
ゴトンと音と共に上半身が畳に落ちる。
立ち尽くしている下半身の切り口から鮮血が噴水のように飛び、部屋の天井を壁を赤く染める。
床に転がる上半身からは切り口から血と内臓が飛び出し、内容物が畳に広がる。

妻である女はその光景を見て唖然としていたが、すぐに正気を取り戻し叫ぼうとした。
だが、叫び声は轟かなかった。

代わりに聞こえたのは、鈍器による打撃音。

パカン！

コンクリートのような硬いものを叩き割るような音がした。
その後を追うようにグチャッと嫌な音が続く。

鈍い音が、感触がヴィータの腕に響き伝わる。
女の頭はクラーフアイゼンによって砕け散り、脳や眼球、肉片が飛び散り、壁に当たる。
脳天を叩き割られた女性はその威力に耐えられずその威力のまま畳に倒れる。首から上がなくなった体から血が流れ出て畳を汚す。
ヴィータは後味の悪い主の命令に眉間に深く皺を刻み、イライラを募らせた。

シグナムは返り血で紅く染まった自身の体を感情の篭らない目で確認すると、部屋を見渡した。

さて、後は子供を殺せば主の命令は完遂する。
そう思い、シグナムは子供を探した。

すると、子供はいた。
だが、シグナムはその子供に違和感を覚えた。

子供が、殺した両親とは異なりボロボロの服を着ていたから？

子供には体にアザや傷などが無数にあったから？

あまりにもガリガリにやせ細っているから？

いや、違う。

両親が殺された光景を目の当たりにして、泣きも喚きもせずただジッとシグナムとヴィータを見ていたからだ。

部屋に充満する鉄と汚物の生臭い匂い、そして肉片と鮮血の広がる地獄のような紅の世界で、少年のその表情はあまりにも異質だった。

だがどうでもいい。

この子供も殺すのだから。

主の命令は絶対。

たとえどんな理不尽な事でも、どんな倫理に反することでも、だ。

主の望みは全て遂行する。

それが、闇の書の守護騎士なのだから。

シグナムは子供の前に向かうために歩いた。

畳の上には血が溢れ、畳に吸い込まれずに血だまりとなっていた。

シグナムが歩く度にビチャッビチャッと音がする。

シグナムは子供の前に立ち、レヴァンテインを高く振り上げた。

恨んでくれて構わん。

呪ってくれて構わん。

私はその業を背負おう。
だが、せめて苦しまずに・・・

「安らかに眠れ、少年」

シグナムは短くそう言い、レヴァンテインを振り下ろした。

その瞬間見てしまった。

少年が微笑んだのだ。

シグナムの太刀筋が鈍り、僅かに浅く斬り付けてしまった。
子供は仰向けに倒れ、切り口から血が溢れ出る。
浅く斬り付けたといっても、それでも子供にとっては致命傷であり、放っておいても出血多量で死ぬだろうと判断したシグナムは、ヴィータを連れ部屋を後にした。

その数日後、主は闇の書の侵食に心体共に絶えられず発狂し、アッサリ死んだ。

そして、闇の書はまた主を求め、旅をする。

その後、闇の書は次の主として八神はやてを選んだ。

時空管理局地上本部の襲撃

管理局最高評議会殺害

レジアス・ゲイズ中将の不正暴露

そして、近藤大輔三等陸尉の誤認逮捕と冤罪事件、それに揉み消しできた。

更には、機動六課襲撃にヴィヴィオの誘拐という情報まで流れ込んできた。

一度にあまりの多くの出来事がありすぎた。

しかも地上本部が襲撃されたことにより指揮系統が麻痺し、一時混

乱状態になった。

直ぐに指揮系統は正常に戻ったが、それでも人手が足りない。なにせ、地上本部襲撃の際に局員の多数が被害を被り、回せる人員が圧倒的に足りないのだ。

死者がでなかったのはまさに不幸中の幸いだろう。

いや、もしかしたらヴェロッサがなにかしら手を打っていたのかもしれない。

被害状況の把握

救助

地上本部の建て直し

スカリエッティの対策

やることを挙げればきりがない。

そんななかで、上層部がまず一番始めに取り掛からなければならないことがある。

「近藤三尉、いますぐメディカルルームへ行き義手をはめてこい」

地上本部襲撃の次の日、ヤンは短く言い放ち近藤をメディカルルームへ行くよう促した。

近藤は直ぐさま義手を取り付けられた。

無理矢理外されたことで義手に不具合が生じると危惧していたが、正常に動作したので近藤はホッとした。

そして新しい、清潔な制服を渡され、風呂にも入った。

汗などで体中がべとべとになっていたので久々の風呂を堪能した。

サッパリした近藤は無言のヤンに連れていかれた。

車に乗せられたが、車内は無言だった。

ヤンは近藤と目を合わせず、真っすぐ前しか見ていなかった。

地上本部から離れた位置にあるビルの前に車が止まると、ヤンは短く「出ろ」と言ってきた。

こんなビルになんの用があるのだろうか?

近藤は疑問に思いながらもヤンの後ろをついていった。

長い廊下を無言で歩く二人の前に二人の人物の姿が見えた。

「・・・おいヤン、俺達をこんな所へ呼んで何をする気だ?」

野太い声を発したのは、スキンヘッドで肌の黒い壮年の男性だった。
体はガッシリとしており、管理局の制服が筋肉でパツパツだった。
体からはっする覇気でただものではないことがわかる。

「これはこれは、わざわざご足労ありがとうございます、ハマー中将」

ヤンはニコニコと笑いながら頭を下げる。

スティングレイ・ハマー中将

魔力は少なく、魔導士ランクもAの彼だが、圧倒的な格闘術により、以前模擬戦でシグナムにも勝っている程のセンスを持つ猛者である。
ついた二つ名が『バーサーカー』。
現場叩き上げの超武闘派である。

「挨拶はいい。貴様のそのへらへらした顔を見ると虫ずが走る」

ハマーはフンと鼻を鳴らし、ヤンから目を離した。
ヤンはピクピクと眉を動かしていたが、笑顔は絶やさなかった。

「・・・貴様のような奴が一佐か・・・世も末だな」

ハマーの横で腕を組んでヤンを睨みながら辛辣な言葉を発っする妙齢の女性。
彼女も管理局の制服を着ている。

「・・・相変わらず手厳しいですな、バイパー少将」

ヤンは引き攣った笑みをバイパーと呼ばれた女性に向けた。

シャルロット・バイパー少将

他次元世界を多く管理を任されているやり手である。
女性ながらもその仕事に対する姿勢は厳しく、部下にも、自分にも厳しい事で有名だ。
敵には一切の情も与えないその徹底的なその姿に、『氷の女王』の異名を持つ。
金のロングヘアーに色白な肌、メガネの奥から見える吊り上がった目。そして、普段からしかめっつらなので、より彼女に恐怖を抱かせる。
美人なのだがその過激な思想と行動故か、浮ついた話しは一切なく、未だに独身である。

「せっかく休暇が取れたから帰ってきてみれば、地上本部が襲われるだの最高評議会が殺害されるだの、急遽こんなところに呼び出されるわ・・・まったく、妹に会えないではないか」

バイパーはぶつぶつと愚痴をこぼす。

「ヤンよ、後ろの男はなんだ?」

愚痴るバイパーを余所に、ハマーが近藤を指差した。

「彼は近藤大輔三尉です」

ヤンがそう説明すると、近藤はすぐさま敬礼をした。
ハマーとバイパーは、そんな近藤をまじまじと見た。

「ほう、貴様がスカリエッティが言っていた近藤大輔か」

品定めするような視線に近藤は居心地が悪くなる。

「おい、ヤン。この男は貴様の部下か？」

ハマーが顎を撫でながら近藤を見つめ、ヤンの方を見ずに質問する。

「いえ、以前はそうでしたが、今は・・・ハラオウン統括官かと」

ヤンがそう言うと、ハマーは驚いた顔をした。

「またあの女か！まったく、アイツはいつも有能な人材を手元に置くな！！」

ハマーは鼻息を荒くして憤慨した。

どうやらハマーはリンディが嫌いなようである。

「それだけハラオウン統括官の目が確かなのでしょう」

バイパーも近藤に近付き、ベタベタと体を触る。

「ふむ、良い体つきだ。面構えも申し分ない」

しかめっつらを一転、近藤にニコリと微笑みかけた。

「近藤君、君の事は妹から聞いているよ。デスクワークが恐ろしく速くて正確だそうだな？」

近藤は戸惑った。

シャルロット・バイパーといえば、泣く子も黙ると言われる女性である。
そんな氷の女王が親しげに話しかけてくるのだから、戸惑わないわけがない。
そんな戸惑いがわかったのか、バイパーはカラカラと笑った。

「ああ、私の『かわいい妹』が機動六課で勤務しているのだよ。だから君の事も知っているというわけだ」

かわいい妹と強調するバイパー。

「シャルロットよ、速いとはどれくらいだ？」

ハマーがバイパーに聞いた。

「なんでも機動六課にまわってくる書類の９割を一人で処理し、キッチリ就業時間内で終わらせ、さらに自主訓練や部下の訓練なども見る余裕があるそうです」

「・・・それはすごいな・・・」

バイパーは説明しながら、ハマーは聞きながら目を剥き呆れていた。

「なあ、近藤君？君がよければ機動六課の試験運用が終わった後、私の元に来ないか？もちろん高待遇を約束しよう」

「おいシャルロット、抜け駆けはいかんな！近藤三尉、俺の元に来い。今より、いや、シャルロットの提示したソレより待遇を良くしようじゃないか！」

バイパーとハマーは近藤の引き抜きを始めた。
二人は自分に厳しく、他人にも厳しい。
人を褒めることなどまずない。
そんな二人が近藤を取り合っているのだ。
ヤンはそんな光景に驚きつつも、近藤が褒められている姿はおもしろくない。
だんだん眉間に皺が寄る。

「ハマー中将、バイパー少将、時間もありませんし、また後ほど」

ヤンはそう言い話を打ち切らせた。

「ふん、まあいい。我等は会議室に行くとするか。行くぞ、シャルロット」

ハマーとバイパーは会議室へと向かった。
二人が離れると、ヤンは近藤を睨んだ。

「いい気になるなよ」

そう吐き捨て、歩を進めた。

「指示があるまでここで待て」

ヤンはあるドアの前に立ち、近藤に入れと言った。

近藤は言われた通り部屋へと入る。
ドアが閉まるとすぐにロックが掛かった。
近藤はため息をつき、部屋の中を見渡した。
すると、そこにはまた驚く人物が二人いた。
二人も驚いた表情で近藤を見た。

「ゲイズ中将・・・オーリス三佐・・・」

テーブルひとつと椅子が四つ、そして飲み物としてインスタントコーヒーが置いてあるだけの、簡素な部屋だった。
それ部屋の真ん中にあるテーブルを囲み、近藤とレジアス中将は対面するように椅子に座り、オーリスはレジアスの隣で立っていた。
近藤はオーリスが座っていなかったので、自分も座るつもりはなかったが、レジアスから座れと命令され、渋々座った。

近藤はレジアスを観察した。
あの自信に満ち溢れた姿が、今は見る影もない。
一気に老け込んだように見える。
背中を丸め、肩を落とし、オールバックにした髪も前に何本か垂れ下がっている。
眠れなかったのか、目の下にクマができ、顔色も優れない。
そんなレジアスを、オーリスは心配そうに見つめていた。

オーリスが紙コップにインスタントのコーヒーを入れ、レジアスと近藤の前に置いた。

「ありがとうございます」

近藤はオーリスに礼を言うと、オーリスは曖昧な笑みを浮かべるだけだった。

レジアスとオーリスも、ここに呼び出さた理由は知らないらしい。
いきなり『三提督の命令』だと無理矢理連れてこられたそうだ。
実際は三提督はそんな命令は出していない。
普段のレジアスならばそんな命令聞けるかと突っぱねるだろうが、今やそんな覇気は微塵も感じられない。

レジアスも、近藤も話などせず、オーリスも話さない。
静寂な時間だけがただ過ぎていった。
だが、そんな時間をレジアスが破った。

「儂は・・・地上の為に自分の手を汚してきた」

ポツリポツリと話し出すレジアスに、近藤はジッと目を背けず見つめた。

「儂には魔力適性がない。だから、魔力に頼ることなく地上を守れる力が欲しかった」

アインヘリアルの事を言っているのだろう。
アレの建造にはイロイロ不自然な事が多かった。
最高評議会の後ろ盾は良いとしても、金の流れが不透明だったのだ。
あれ程の巨大兵器を多数建造するならば、相当の費用が必要ではある。
だが、アインヘリアルはその費用が管理局以外、裏金や、政治家との談合、犯罪組織からの不正流入による援助がある可能性があった

のだ。
更にレジアスはスカリエッティの戦闘機人計画に加担していた。
稀少能力や個人差のある魔導士より、より安定した提供を約束されている戦闘機人の方が一定水準の安全を保障できる。
人造魔導士計画よりコストも低く、生産の安全性も高い。
ただ、これには倫理の問題が立ちふさがり、実用化などにはまだまだクリアしなければならない事がある。
それでも、レジアスは力の確保の為にその禁忌に手を出し、スカリエッティのスポンサーとなっていたのだ。
このレジアスとスカリエッティのつながりのきっかけには最高評議会が絡んでいる。
というか、最高評議会がそうなるように仕組んだ。
その証拠が昨日スカリエッティによって白日の元に曝された。

綺麗事だけでは世界を守ることはできない。
世界はそれほど優しくはない。
レジアスは地上を守りたかった。
だが、力がなかった。
魔力適性のないレジアスには、己の腕で地上を守ることは叶わなかった。
そして、素質ある魔導士はいつも本局が持っていく。
なぜ地上はそんなに軽視されなければならないのか。
ミッドチルダの平和はどうでもいいのか。
レジアスは訴えるが、上層は聞く耳を持たない。

上の考えが変わらないのならば、自分の権力（ちから）で魔導士に変わる力を作ればいい。
どんな事をしても。
地上は私が守るのだ。

「魔法至上主義が管理局を二極化させたのだ。儂はそれを是としなかった。魔力のない局員にも力があれば、地上を守れる。個人によるばらつきがある魔法等に頼らずとも、安定した力があれば、永劫平和を維持できる！そのためのアインヘリアルであり、戦闘機人なのだ！！」

レジアスはそう叫んだが、また力無くうなだれた。

「だが、もう終わりだ・・・手段を選ばずに、地上を守る事のみを考え、平和を望んだ結果がこれだ・・・」

くやしいのだろう。

結果として、レジアスはスカリエッティにいいように扱われ、捨てられたのだ。
しかも、最大のバックボーンである最高評議会も失った。
レジアスは地上の守護者と呼ばれ、英雄と崇められていたが、もう終わりだ。

何もかも。

オーリスも肩を落とすレジアスを見るのが辛いのだろう。
痛みに耐えるように顔を歪め、俯いてしまった。

「・・・近藤三尉、貴様も何かと大変だったようだな」

レジアスはやつれた顔を近藤に向け、自虐的な笑みを浮かべた。

「いえ、自分はどうということは」

近藤はアッサリ返した。
レジアスとオーリスはそんな近藤の態度が無理をしているように見えた。
自分の親が殺され、事件は揉み消され、しかも犯人は逮捕されずに管理局で働き、更に自分の近くで普通に生活を送っていたのだ。
普通ならば、怒り狂うだろう。
事件を揉み消した管理局、リンディとレティに。
両親を殺したシグナムとヴィータに。

そう、普通ならば。

レジアスはスカリエッティが話していた近藤の事を全て事実だと確信していた。
高町なのはとの事件のような改竄など、多くは無いにしろ管理局ではよくある事であるし、シグナムやヴィータ等の有能な魔導士を獲得するために、事件自体を無いことにすることもやりかねない。
レジアス自身、近藤のような事実を突き付けられたらまず正気でいられないだろう。
だからこそ、レジアスはそれ以上何も言わなかった。

そして、オーリスはアッサリと言う近藤をいますぐ抱きしめてあげたかった。
近藤の傷ついた心を癒してあげたかった。
だが、その行為は本当に近藤の為なのだろうか？
本当は自分が慰めてほしいだけではないのだろうか？
レジアスが傷つき、近藤が傷つき、オーリス自身も傷ついた。
だから、人肌が恋しくて、温もりが欲しくて、ただ自分の為にごまかしいるのではないか？

そう思うと、自分はなんて卑怯な人間なのだろう。
自分の都合の良いように問題をすり替え満足する、なんて狡猾で浅ましい女なのだろう。
そんなネガティブな思考に陥り、自己嫌悪してしまうオーリスだった。

そして、また静寂が部屋を支配する。

そんなとき、コンコンとドアをノックする音が響いた。

「ゲイズ中将、近藤三尉ご案内します」

ドア越しにそんな声が聞こえ、レジアスと近藤は席を立った。

「さて、何があるのか・・・鬼が出るか、蛇が出るか・・・行こうか、近藤三尉」

レジアスはまた自虐的な笑みを浮かべ、重い足どりで案内の局員の後を付いて行った。

「・・・父さん・・・」

オーリスは小さく呟き、意を決して近藤の服を掴み願った。

「お願い・・・中将を、父をお願いします」

目に涙を溜め、近藤に懇願した。
いままで散々スパイだのなんだのと利用し虫のいい話しであるが、

それでもオーリスは近藤に頼んだ。
そんなオーリスに、近藤はフッと微笑んだ。

「了解しました」

そう短い言い、近藤はレジアスの後に続いた。

近藤とレジアスは案内された部屋に入ると、まず驚いた。
薄暗い部屋には、管理局の将官や提督と呼ばれる人物がずらりと顔を並べていたのだ。
別次元にいる将官や提督はモニタにての参加ではあるが、それでも３０人はいた。
その中には三提督とクロノもモニタにて参加していた。
近藤とレジアスを囲むように配置された席は、威圧感を与える。
顔を見渡していくと、先程出会ったハマー中将とバイパー少将もいた。
しかし、その表情は憤慨やらぬ顔で、不機嫌を隠そうとはしていなかった。
近藤はクロノと目が合ったが、クロノが直ぐに目を逸らした。
そんな中、肥え太り、ポマードでびっちり髪をセットし、顔も頭髪同様脂ぎってテカりのある人物、ジョンスー・アリスト少将が口を開いた。

「レジアス・ゲイズ中将、近藤大輔三尉、君達はこれから今回の事件の記者会見に出席してもらう」

いつの間にか近藤とレジアスの後ろに控えていたヤンが、ニヤリといやらしい笑みを浮かべた。

「その打ち合わせをこれから行う」

「打ち合わせだと？」

レジアスは嫌な予感がした。

周囲からはネットリとした視線を受け、更にニヤニヤといやらしい笑みを浮かべている者さえいる。

不快だ。

不愉快だ。

すると、レジアスと近藤の前にモニタが展開された。

モニタには文字が書かれていた。

それを見たレジアスは怒りに顔を赤くした。

近藤も驚き、おもわず三提督を見た。

三提督は皆悲痛な表情だった。

「君達はその台本通り受け答えしてくれたまえ。なに、心配はいらん。質問する記者もこちらで用意したサクラだ」

アリストの顎の脂肪がぷるぷる震える。

頬にも肉がつき、目が圧迫されているので開いているのか閉じてい

るのかわからない。
だが、そんな目でも近藤とレジアスにはわかる。
あいつの目は欲に眩んで腐っていると。

ヤンは控えていた場所から歩きだし、近藤とレジアスの前に立ち、三日月のように口を広げ、嘲笑うようにこう言った。

「お二人には、スカリエッティの言っていた管理局の『デマ』を『正しい情報』に『訂正』し、それをマスコミに正式見解として発表していただきます」

管理局上層部がまず始めに取り掛かったこと、それはレジアス中将の不正を否定し、近藤の関わっていた改竄や揉み消しの事件を否定すること。

つまり、自分達に都合の悪い情報を改竄することだった。

# 第６８話（前書き）

近藤　「えへへ～」

ヴィータ　「お前、その顔でにやけるなよ。気持ちわりぃ」

シグナム　「うむ、生理的に受け付けん顔だな」

近藤　「ひどい！パワハラだ！」

はやて　「で？なんでそんなにやけとったんや？」

近藤　「実はですねぇ、他作品へ出張してきました！」

ヴィータ　「その作品の作者バカじゃねえの？」

近藤　「こらー！酷いこと言うなー！」

ヴィータ　「だってよ、こんな外見以外個性の無い奴呼んで話盛り上がるわけねーじゃん。社交性ゼロだし、基本無口だし、あたし等主要メンバー以外の局員と会話してるの見たことねーし」

近藤　「ヴィータ副隊長酷い・・・でも大丈夫！エレ・・・チートも一緒にいたし！」

シグナム　「また扱いに困る人選を・・・この作者でさえ姉・・・いや、チートの扱いにはほとほと困っているというのに・・・」

はやて　「で？なんちゅう作品に出たんや？」

近藤　「『魔法少女リリカルなのはＳＴＳ，ＥＸ』のアリサ道場です！」

シグナム・ヴィータ　「なまいってすんませんでしたー！！」

はやて　「おおう！ジャンピング土下座！二人ともちゃんと成長しとったんやな・・・はやて感激！」

近藤　「いや～緊張して迷惑かけっぱなしでしたけど、皆さんいい人ばかりでしたよー」

ヴィータ　「・・・こいつ、こんな顔して人見知りかよ・・・」

近藤　「顔関係ねーよ！」

はやて　「あ、じゃあコッチの作品でも企画でどっかの作品のキャラ呼ぶか？」

作者　「あ、それ無理、勘弁してください」

シグナム　「いきなりでてきて即答するな。で、なんでダメなんだ？」

作者　「俺に他作品いじる勇気無いし、文才無いから」

シグナム　「・・・ならば仕方ないか」

作者　「即答より悩んで納得される方が傷付くなあ・・・」

はやて　「ま、雑談はここまでにしとこか。第６８話はじまります」

シグナム　「まだ重い話が続くが、辛抱してくれ」

作者　「ではよろしくお願いします」

# 第６８話

時間は少し遡る。

「不正を無かったことにするだと！？」

ハマー中将の怒号が会議室に響いた。

「貴様、本気で言っているのか！？」

ダンッと机をおもいっきり叩き、机の上の飲み物と灰皿が浮く。
そんなハマーの怒りを受けても、アリスト少将は飄々としていた。
アリストの肥え太った顔には必要以上の贅肉が付き、シャツの襟首から脂肪がはみ出ていた。
ポマードでベトベトに張り付いた髪と、脂でテカテカと光る顔。

醜いの一言である。

そんな太った顔からは、笑顔が絶えない。
ずっとニコニコしているのだ。

バイパー少将が金色に煌くロングヘアーをかきあげフンと鼻を鳴らし、ヤンを見下ろした。

「貴様の入れ知恵か」

バイパーは汚物を見るようにメガネの奥から鋭い目でヤンを見下ろしたが、ヤンはそれをねっとりとした笑みで返した。

「不正を揉み消すなど、法を預かる管理局の行うことではありません！」

モニタで参加していたクロノが異をとなえる。

それをヤンは鼻で笑った。

「フン、そもそもあなたの母君であるハラオウン統括官殿の過ちではないか。我等はソレを内々に処理してやろうといっているのだ。感謝されこそすれ、非難されるいわれは無いはずだがね？」

クロノは言葉を詰まらせた。

スカリエッティのあの犯行声明の後、クロノは直ぐにリンディに連絡を取り、真実を問い質した。

リンディはその通りだと、肯定し、それ以上何も言わなかった。

クロノには信じられなかった。

自分の母がシグナムとヴィータを獲得するために、不正に手を染めていたという事実に。

現在リンディとレティは拘束されている。

沙汰があるまで面会もできない。

「それに君も近藤三尉が逮捕されたとき、彼を殴ったそうじゃない

か。本来ならば、暴行罪だ。だが、彼の逮捕自体無かったことになれば、君の行いも無かったことになる。一石二鳥ではないかね？」

アリスト少将はぷるぷると顎の贅肉を震わせながら話す。
クロノはそんなアリスト少将に決意を持った目で睨んだ。

「僕は自分の罪を偽りません。どんな罰でも受けます」

「ふむ、殊勝なことだ。だがクロノ君、正義とは、綺麗事で行えるものではないのだよ？」

世の中、綺麗な物だけ見ていて平和になるわけがない。
汚い物を見ないようにして、無いものとしてそれで正義を掲げることができれば、どれだけ楽で幸せなことか。
クロノとてわかっているのだ。
それが真理であることくらい。
だが、努力はするべきではないか？
正義と法を担う管理局こそ、率先して悪を裁くべきではないか？

「不正をさらに不正で上塗りするとは、どういうことかわかっているのか？」

静観していたラルゴ・キールが怒気を孕みながらアリストに向けて言った。
だが、アリスト少将もヤン同様、ねっとりとした笑みを返し、こう言った。

「我々はこれからスカリエッティ逮捕という『大事』を行うのです。こんないち局員のくだらない『小事』で揺らいでいてはいかんのですよ。『大事の前の小事』は速やかに処理しなければ、ね」

我々が傷付かない、最善の方法でね

アリスト少将かヤンか、はたまたそれに同意した将官や提督か。
会議室にクスクスと笑い声が聞こえた。

「それでは決を取ります」

採決の声が上がった。

多数決の結果、近藤とレジアスの件は記者会見で正式見解を発表することになった。

そう、管理局にとって都合の良い『捩曲げられた正式な見解』を。

レジアスは怒りに震えた。

「儂を飼い殺しにする気か・・・」

声も震えていた。

「ゲイズ中将、あなたは地上の守護者だ。局員からも絶大な信頼を寄せられている。そう簡単に舞台を降りてもらっては困るのだよ」

誰かが囁く。

「これは破格の条件だと思ってくれたまえ。君の不正を処理し、更に君への処分も無しにしたのだ」

嬉しそうに話す声が響く。

「ただし、君はしばらく『地上の象徴』としていてくれたまえよ。ああ、君の築いた幅広い人脈やパイプは我々が有効活用するから安心してくれたまえ」

「では『戦闘機人計画』は私が引き継ごう。たしか中将の管理している生産ラインはまだ生きているはずだ」

「なんだと!?あれは私が先に目をつけていたのだ!」

「俺は政界とのパイプをいただこう。強いバックボーンはありすぎて困るものではないからな」

「ふん、コバンザメめ」

早速将官たちはレジアスの人脈や計画を我が物にしようと取り合いしだした。

まさにハイエナ。

実に浅ましく、醜い。

「儂は貴様等の私腹を肥やす為に心血注いでいたわけではない!!」

レジアスは大声で叫んだ。

「地上の平和の為に己の手を汚したのだ！貴様等のように、己が欲望で手を汚したのではない！！」

やり方は過激で間違いもあるが、レジアスはまさに地上を守る英雄と呼ばれる人物である。

彼はいつでも地上の平和を願っていたのだ。

そのために築いた人脈、そのためのパイプだった。

それが、ハイエナに食いつぶされようとしていた。

レジアスは悔しさのあまり涙を流し、怒りをぶつけた。

そこへ、近藤がレジアスね肩に手を置き落ち着くよう促した。

感情的になっていたレジアスは徐々に冷静さを取り戻した。

「さて、次は近藤三尉の件だね」

アリスト少将はまたにこやかに笑った。

「いやはや、君には同情するよ。大変だったね？」

近藤は特に返しもせず、無言で直立していた。

「我々も心苦しいのだよ。だがわかってくれたまえ、管理局の信用をこんな瑣末なことで失墜させるわけにはいかんのだよ」

他の将官が言葉を続け、近藤を説得する。

「なに、何も君にデメリットばかり押し付けようというわけではないよ？条件をだそうじゃないか」

アリスト少将がそう言うと、ヤンが近藤に近づいてきた。

「今までの貴様に対する誹謗中傷などの噂を処理しよう。これで貴様も管理局で過ごしやすくなるだろう？」

「更に階級も上げよう。・・・そうだな、ニ階級だ。君は一尉になれるんだ！」

アリスト少将が更に好条件を提示する。
甘い餌をちらつかせ、獲物がかかるのを待つが如くである。
恐らく近藤がこれから先、普通に過ごしたとして一尉になることはないだろう。
昇格試験には必ず落とされ、功績も認められることはない。

近藤にとって破格の条件を提示してきた。
普通の人ならばすぐに飛びつくだろう。
だが、その浅ましい考えが近藤を更にイライラさせる。

「それに、君はあのアルハザードの知識を有しているそうだね？その知識、我等の為に有効に利用さててていただくよ」

キキキと猿のような笑いが響き、近藤の神経を逆なでする。

ああ、もうだめだ。

我慢できない。

後々の事などどうでもいい。

近藤はアリストの提示した条件に、更に自ら条件を出した。

「自分からも条件を一つ提示します」

これにヤンが怒る。

「貴様・・・身の程を弁えろよ・・・」

「まあまあ、良いではないか。近藤三尉、条件とは何かね?」

アリストは笑顔を絶やさず、ヤンを宥めて近藤に条件提示を促した。

「『自分のこれまでの功績を正当評価していただきたい』」

近藤がそう言うと、三提督は驚きの表情をした。

そして、すぐに平静を取り戻しコホンと咳ばらいをした。

「近藤君、それで『本当にいいのだね』?」

レオーネが鋭い視線で近藤に言う。

そして、近藤は短くはいと答えた。

他の将官や提督は、近藤の履歴を確認した。

特にこれといって評価するものが見つからない。

協議した結果、近藤の提示した条件は承認された。

近藤の怪しい条件提示と三提督の不自然な確認に、妙な違和感を覚えたハマー中将とバイパー少将、クロノは三提督の方を見た。そして、おもわず息を飲んだ。
三提督が三人とも黒い笑みを浮かべていたのだ。
そして、近藤も俯きながら悪魔のように顔を歪め、笑みを浮かべていた。

近藤とレジアスは記者会見が始まるまで待機するため、オーリスのいる部屋へ戻った。

「中将！」

父さんと呼びたいのを我慢し、父を中将と呼ぶオーリスはレジアスに駆け寄る。

レジアスは悔しそうな表情を隠そうともせず、力無く椅子に座った。
反対に近藤は行くときと変わらず普通だった。

「何があったの？」

レジアスに聞ける雰囲気ではないので、オーリスは近藤に聞いた。
そして、近藤は会議室での出来事を事細かく説明した。

それを聞いたオーリスは憤慨した。

「なんという・・・！罪を罪で隠し、我が物にするなんて・・・！！」

オーリスは肩を震わせ、悔しそうに唇を噛んだ。

「ハイエナどもが・・・！」

かすれる声で、振り絞るように言った言葉。
そう、あの会議室に集まっていた連中の大半はレジアスの築き上げたものに横から割り込み掠め取るハイエナそのものだった。
近藤のことにしてもそうだ。
甘い餌をちらつかせ、近藤に利用価値有りと見るや、手の平を返し更にそれすら我が物にしようという。
それはイナゴのように、草木を食いつぶし、通り過ぎた後は草木の一本も無くなる。

今あいつらは高笑いしているだろう。
自分達が苦労することなく力が手に入ったのだ。
笑いが止まらないだろう。
そう思うと、一層悔しさが増す。

「ゲイズ中将」

近藤がおもむろにレジアスに話し掛けた。
近藤は椅子に座らず、テーブルを挟みレジアスの正面に立つ。

「差し出がましいようですが、言わせていただきます。あなたは地上の為に自らの手を汚したと言った。そうしないと地上が守れないからと。すばらしい、好意に値しますよ、その理念は」

レジアスとオーリスは近藤の言葉を静かに聞いていた。

「ですが、それはやはり罪だ」

近藤はキッパリと言った。

「汚い金を使い、黒い関係を使ってまで平和を得るという執念はすばらしいが、それでもそれは許される事ではない」

何を偉そうに・・・

オーリスは思わず反論しようとしたが、レジアスがそれを止めた。

近藤は言葉を続ける。

「法と秩序を担う管理局だからこそ、潔癖でなければならない。確かに、他次元世界では犯罪組織と協定を結び犯罪事件が極端に減ったという例もあります。一概に悪を否定するわけにはいきません。要は力の使いようだということです。しかしレジアス中将、あなたは少々強引すぎた」

「・・・だがそうしなければならない程地上は軽視されていた。有能な魔導士は本局が持っていく。だが犯罪は凶悪になっていく。儂等は地上犯罪に対処する力が必要だったのだ。なりふりなど構ってはいられぬよ」

レジアスは静かに近藤に訴える。

管理局の上層が頼りにならないのならば、自らの手でどうにかするしかない。
そして、その手段は秘密裏に行わなければならない。
ばれれば、ハイエナ共が掠め取っていく。
そうなると選択肢は限られる。
必然、レジアスは闇に手をつけてしまったのだ。

レジアスは神妙な顔で近藤を見た。
そして、オーリスはそんなレジアスの態度に驚いていた。
レジアスは激情家である。
自分の信念を貫き、突き進む人だ。
他人の意見など聞かず、逆にその意見を捩じ伏せる人だ。
そんな人が自分の行いを否定されるのを静かに聞き、静かに訴えているのだ。

驚くオーリスを余所に、近藤はおどけるように肩を竦めた。

「結果、ハイエナに『戦闘機人計画』や『黒い人脈』、その他のもろもろも、全て掠め取られてしまいましたね。今の貴方は綺麗な体だが、『篭の鳥』だ」

レジアスはフッと笑った。

「貴様も同じだろう？いや、貴様はこれから死ぬまで奴らに搾り取られるから、儂より大変だ」

「違いないですね」

近藤はハハッと笑う。
そして、近藤とレジアスはお互い笑った。

いきなり笑い出すので、オーリスは混乱した。
どういうことだ？

すると、レジアスは笑うのをやめ、真面目な顔で近藤を見た。

「儂は見ていたぞ。貴様、自分の出した条件があいつ等に認められたとき笑っていただろう？」

「おや、見られてしまいましたか。気をつけなければ」

近藤は反省の言葉を言うが、まったく反省しているようには見えなかった。

「あんな笑みを見たのは初めてだった。背筋が凍ったぞ」

レジアスは身震いする。

「あの顔を見た時思ったよ。貴様を利用しようとするなど不可能だと。そして敵に回せばとんでもないことになると」

レジアスがそう言うと、オーリスはまた驚く。
レジアスが近藤を評価している。
敵に回したくないと。
人をこんなに認めるレジアスを見たのはいつ以来か。

「何か策があるのだろう？あのハイエナ共に一泡吹かせる策が」

レジアスの言葉に、近藤はニヤリと笑った。

「しばらくすれば、三提督から通達が来ます。その時に面白いものが見れますよ」

一呼吸おいて声色を低くし、ゆっくりと口を開く。

「・・・自分の手を汚さず、人の物を横から掠め取った愚か者共の末路がね・・・」

笑みをより深く刻む。

その顔は歪み、恐怖を駆り立てる。

オーリスはその表情を見て顔を青ざめさせた。一度見たレジアスでもゾクッとしたほどだ。

近藤はそれ以上は言わなかった。

だから、レジアスもそれ以上は聞かなかった。

「そうか、では楽しみにしていよう。貴様は・・・いや近藤だったな。お前は面白い奴だな。気に入ったぞ」

レジアスはあごひげを撫でながら何か考え込む。

「ふむ、確かお前は独身だったな。どうだ、オーリスと夫婦(めおと)になる気はないか？」

「なーーっ！？お、お父さん！？」

いきなりレジアスが変な話しをしるものだから、オーリスはおもわず叫んでしまった。レジアスの事も中将と言わず、お父さんと呼ぶ混乱ぶりである。

「我が娘ながら、中々の器量良しだぞ。仕事も真面目だし、家事全般もお手の物だ。まあ年甲斐もなく少女趣味だが、そこもかわいい所だぞ？」

いつの間にか話しの内容がお見合いみたいになっていた。
オーリスはあうあうと口を開け、顔を真っ赤にしながらオロオロしている。

だが、近藤は申し訳ないような顔をした。

「ご厚意はありがたいのですが、実はフェイト執務管と婚約してまして・・・」

「えーーーっ!?」

オーリスは絶叫してしまった。

聞いてない！
いつの間にそんなに距離を縮めてたの!?
もう私に勝ち目ないじゃない！
オーリスは泣きそうになった。

あまりの大音量に耳を塞ぐレジアスだったが、そんなオーリスの態度が意外で、何かピンときたのかニヤリと笑った。

「なんだオーリス、お前近藤の事が気に入っていたのか？」

「あ！？あう、いや、その・・・」

オーリスは顔を真っ赤にしながらアタフタするが、レジアスはニヤニヤと笑うのをやめない。
そして、パンと膝を叩いた。

「よしオーリス、略奪しろ！儂が許す！なに心配いらん、後始末は儂にまかせろ」

「ちょっ、お父さん！？何を無茶苦茶いってるのよ！？」

「何が無茶苦茶か！儂と母さんも駆け落ち同然で結婚したのだ！うむ、やはり儂の娘だな！はっはっはっ！！愛はバーニングだー！！」

いつの間にかレジアスは本来の覇気を取り戻し、熱くオーリスをけしかける。
それからレジアスは、自分と奥さんの馴れ初めを延々と話し出した。
この男、仕事には厳しいが一皮剥けば普通に面白いオッサンだった。

「もう！お父さん！！」

オーリスはプンプンと怒りながらレジアスをポカポカ叩きだした。

「はっはっはっ！照れるな照れるな！うむ、孫の顔が楽しみだな！！」

レジアスは近藤とオーリスをくっつける気満々である。
オーリスも恥ずかしさからレジアスに怒って見せているが、内心ち

ょっと喜んでいた。

そしてそんな仲の良い親子を見て、近藤もおもわず笑ってしまった。

部屋の空気はいつの間にか重苦しいものはなくなり、暖かい、騒がしい空間となっていた。

すると、コンコンとドアをノックする音がした。

近藤とレジアスはお互いの顔を見て、ニヤリと笑う。

「それでは行きましょうか。見事なピエロを演じてやりましょう」

「ふむ、今はあいつ等の茶番に付き合ってやるか。さて、儂がピエロを演じるのだ。ギャラは高いぞ」

近藤とレジアスに悲壮感は無く、不敵な笑みを浮かべ、しっかりとした足取りで会場へと向かった。

会場には、ミッドチルダの各メディアや、他世界のメディアも参加しており、カメラや記者で溢れかえっていた。
時空管理局の地上本部襲撃という一大事件が各世界の関心を寄せているのだ。
マスコミが群がるのも必定であろう。

会場に入る前に広報担当の局員二人と合流した。
その内の一人の局員はレジアスと近藤の事を何も聞かされていないようで、なにやら居心地が悪そうにそわそわしていた。
もうひとりの局員は落ち着き払った様子で近藤とレジアスを一瞥し、敬礼するとすぐに歩き出した。
その会場に近藤とレジアスが入ると、一気にフラッシュが焚かれ、カメラが集中する。
あまりのフラッシュにレジアスは顔をしかめた。

壇上にセッティングされたテーブルに向かう広報担当の局員と近藤、レジアス。
周囲には数人の局員が監視として立っており、物々しい雰囲気が漂う。

椅子に座ると、広報担当が緊張した面持ちで口を開いた。

「ただいまから、時空管理局地上本部襲撃についての報告、会見を始めます」

会見は滞り無く進んだ。

まず、地上本部の被害状況を報告、次に首謀者をスカリエッティと発表し、彼の犯罪歴を公表する。

ここで一旦質疑応答を行い、記者からの無茶な質問も無く次の報告を行った。

レジアスの不正と近藤の件である。

記者達の聞く姿勢が変わった。

どうやら、皆こちらの件が本命のようだ。

「『指名手配犯であるジェイル・スカリエッティの言っていた事は全て事実無根である。あの物がばらまいた証拠とされるデータもでっちあげであり、あのように書かれていることは一切行っていない。私はやましいことなど一つもしていない』」

レジアスが台本通りの台詞を言う。

「『自分の関わる事件をジェイル・スカリエッティが言っていましたが、全て彼の妄言であり、彼の言うような事は一切無く根拠も証拠もない嘘であります』」

近藤も台本通りの台詞を口にする。

その後、紙を渡された広報担当の局員が細かい内容を書かれている通り発表し、また質疑応答へ移った。

多くの記者が挙手する。

そこで、もうひとりの局員が一人の記者を当てる。
どうやらこの広報担当局員は近藤とレジアスの事情を知っているか、もしくはアリスト小将辺りに何か命令を受けているようだ。
ということは、当てられた記者はサクラということになる。

「『レジアス・ゲイズ中将には前々から黒い噂が立っていました。そこで今回の犯人の声明、管理局が不正を隠しているのでは？』」

「『先程も言った通り、犯人の言った事は事実無根だ。大体、法を与る管理局が不正という犯罪を隠すなどありえん』」

次に別の記者が挙手し、質問する。

「『戦闘機人計画という非人道的な計画を秘密裏に進めていたという事は？』」

「『馬鹿馬鹿しいな。儂はこの地上と民を護るというこの仕事を天職だと思っておる。そんな儂が人の命をもてあそぶような事は断じてしない』」

サクラの記者とレジアスは淀み無く応答する。
その後も二、三同じような質疑応答が行われた。
質問内容は台本そのままであるが、当てられなかった記者も似たような事を質問するつもりだったようで、特に混乱はなかった。

この時点までは。

広報担当局員が新たな記者を当てる。
当てられた記者はゆっくりと立ち上がり、近藤を見た。

「『まず、８年前の高町なのは一等空尉が撃墜された事件の、管理局の発表とスカリエッティ容疑者の意見の相違について説明していただきたい』」

周囲の記者も身を乗り出す。
エースオブエースと称される高町なのは絡みのネタはマスコミにとって喉から手が出る程ほしい。
なのはは一般人にも認知される程人気がある。
それは仕事でテレビ等に露出しているせいもあるが、容姿端麗、高ランク魔導士であり１９歳という若さで一等空尉というキャリア。
もう、ちょっとしたヒーローである。
そんななのはにはスキャンダルが無い。
仕事ばかりでプライベートなど無いに等しいこともあるが、なのはは基本的に質素を好む。
パパラッチでもなのはの私生活で記事になるようなものは撮れないくらい普通の生活なのだ。
そこに、このネタが転がり込んできた。
飛びつかないわけがない。

「『高町一等空尉の件は管理局の発表している内容が正しいです。スカリエッティの出していた映像や内容は全て捏造、偽物です』」

スラスラと台本通りの言葉を吐く近藤に、サクラの記者は追撃する。

「『では、あなたは私欲で無茶な特攻し、高町なのは一等空尉に怪我を負わせたという管理局の発表が正しいとおっしゃるので？』」

僅かにサクラが笑う。
ここで近藤が肯定すれば、この事件の真実は完全に抹殺される。
当事者自ら嘘を真実と全世界に公表するのだ。
この会見をセッティングしたあのハイエナ共がこの会見を見れば、
近藤はさぞ滑稽に映っているだろう。

「『はい、そうです』」

近藤はなんの感情も込めず、淡々と台本通りのセリフを吐く。

これで、なのはの事件は本当に真実が抹殺されてしまった。

記者達はざわつく。

なんだ、高町なのはのスキャンダルはまた無しか

あなたは私欲でエースオブエースを傷物にしたのか！

落胆や、近藤への叱責が飛び交う。

進行役の広報担当局員が場を静め、新たに別の記者の挙手を当てる。

「『２０年前の事件が揉み消されたとのことですが、あなたは知っていたのですか？』」

「『自分は２０年前といえば６歳ですから、そもそも事件自体覚えていません。それに管理局の判断ですから、揉み消しではないと思います。事実、その事件の犯人は現地機関が逮捕していると報告を受けています』」

再び台本通りの応答を行い、近藤はモニタを展開させ地元機関が逮捕したという『嘘の情報』を公表する。
これで、リンディとレティが事件を揉み消したという事実も抹消された。
それを聞いたサクラの記者は、わずかに笑い質問を終えた。
また別の記者に変わる。

「『スパイ容疑という嘘の情報で逮捕されたと聞きましたが？』」

「『逮捕されたという事実はありません』」

また変わる。

「『あなたは管理局内でも素行に問題があると噂がたっているそうですが？』」

「『自分は至って真面目に業務に携わっています。噂はあくまで噂ですから、自分は与えられた業務を遂行するのみです』」

近藤の横でやり取りを聞いているレジアスは、眉間に皺を寄せ不快感をあらわにした。

近藤への質問がしつこい。
ゴシップネタが尽きないとはいえ、管理局に流れている『噂』にまで言及するとは。
いや、これは台本通りにすすめているはずだから、シナリオに忠実に沿っているのだろう。
だとすれば、この脚本家は近藤の事が相当嫌いなようだ。

そして、最後の質問になった。

「『アルハザードの知識を有しているとスカリエッティ容疑者は言っていましたが、本当ですか?』」

会場がざわつく。

そうだ、この男はスカリエッティがアルハザードの知識を持っていると言っていた。

伝説の楽園アルハザード。

高度な魔法技術を有しているとされている桃源郷である。

もしこれが本当ならば、魔法技術はより発展しミッドチルダは繁栄する。

記者達が近藤の答えを待つ。

「いいえ、持ってませんよ」

質問したサクラの記者が驚く。

「で、では、スカリエッティ容疑者の妄言だと?」

狼狽するサクラを余所に、近藤は飄々としていた。

「そうです。もし本当にアルハザードの知識があったなら、今頃階級も三尉ではなくもっと上に行っているはずですからね」

そう、近藤がアルハザードの知識を持っているなら今頃は佐官になっていてもおかしくないくらい重要視されているはずである。
ただし、それを管理局が知っていたらの話だが。
周囲の記者達は落胆するが、サクラの記者は口をパクパクと開けて呆けていた。

なぜなら、近藤が台本と異なるセリフを言ったからだ。
本当ならば近藤は『はい』と答え、『この知識を管理局と世界の発展のために活用していきます』と言って締めくくるはずだったのだ。
近藤の横ではレジアスもポカーンと口を開けていた。

「・・・そ、それではこれで会見を終了します」

「どういうつもりだ、近藤三尉」

会見を終わらせ廊下を歩いていると、ヤンからの通信が入った。
モニタ越しにヤンが近藤を睨む。
近藤が台本通りにしなかったことに御立腹のようだ。

「もし自分があそこではいと答えていたら、他の世界や敵対組織から狙われる可能性があります。それほど魅力的なんですよ、アルハザードとはね。そうなれば利用するしないなど言ってはいられませんよ」

近藤は肩を竦める。
完璧で論破しようがない近藤の言い分に、ヤンは歯ぎしりする。

「・・・まあいい、そのことは不問とする。貴様は機動六課へ戻り、謹慎していろ。あまり現場でうろちょろされると目障りだからな」

ヤンは捨て台詞を吐いてモニタを閉じた。
近藤は腰に手を当てため息をつき、レジアスとオーリスを見た。
レジアスは普通だったが、オーリスが泣きそうな顔をしていた。
それほどあの会見がショックだったのだろう。
近藤自身あの会見の発言に関してはなんとも思っていないので、こういうリアクションを取られると困ってしまう。

「オーリス三佐、自分の事は気にしないでください」

そう声をかけると、オーリスはボロボロと涙を流した。

「で、でも・・・あんなの・・・ひど過ぎるよ・・・」

とうとう大泣きしてしまったオーリスに、アタフタしてしまう近藤だったが、ふと後ろに気配を感じ振り向いた。
そこには、バイパー少将がしかめっつらで腕を組んで立っていた。

「近藤君、女を泣かせるのは関心せんな」

サラサラの金色に輝くロングヘアーをなびかせ近藤に近付くバイパー。
そして、レジアスに向けて敬礼をした。

「お久しぶりですゲイズ中将。今回は大変でしたな。ま、自業自得

ですかな？」

「・・・まあな。そういう君は相変わらずのようだな」

レジアスは敬礼を返しつつも、バイパーのキビキビとした動きを見て苦笑した。

「そういえば、スティングレイも来ていただろう？あいつは今どこにいる？」

スティングレイとはハマー中将の事である。

レジアスとハマーは親交があるようだ。

すると、バイパーは苦笑いしだした。

「あの方は今回の事にかなり御立腹のようで、ドスドス音を鳴らして帰られました。明日はやけ酒で二日酔いでしょうな」

「ふん、あいつらしい」

レジアスもハマーの憤慨する姿が想像できたのか、苦笑した。

しばし談笑していたバイパーとレジアスだったが、近藤に向かってこう言った。

「近藤君、ハラオウンの小僧が言っていたのだが、機動六課は本部を変更したらしいぞ」

普通に考えればそうであろう。

なにせ機動六課の隊舎は壊滅しているのだ。代わりの場所は必要である。

「なんでも機動六課本部が『巡航船アースラ』へ移動することが決まったそうだ。現在、動ける隊員は陸士１０８部隊に間借りしているそうだが、準備が整い次第アースラへ移動、速やかに稼動するとさ」

「アースラ・・・」

「たしか経年劣化などにより長期任務には耐えられないとして、近々退役にして廃艦処分にする事が決定していたはずだ。そんな老艦を引っ張り出してくるとはな。ふむ、あの子ダヌキも思い切ったことをする」

バイパーは顎に手をやり、面白そうに言う。

近藤も小さい頃、養父やリンディに連れられよく行ったものだ。懐かしさが湧き、自然と口が綻ぶ。

「どれ、私が送ろう。久々に『超絶かわいい妹』に会いたいしな！」

バイパーはシスコンのようだ。それもかなり重症の。

そういうや、バイパーはくるりと方向転換して移動の準備にとりかかった。

何をするにも即決で行動が早いバイパーを見て、レジアスは「まったく、あの忙(せわ)しないところは変わらんな」と言い、また苦笑した。

近藤もバイパーについていこうとし、レジアスに敬礼する。

「それではゲイズ中将、失礼します」

レジアスも敬礼を返した。
近藤はまだ泣いているオーリスを見遣り、なるべく優しく話し掛けた。

「オーリス三佐も、お元気で」

オーリスは僅かに頷き、近藤はそれを確認すると踵を返し、バイパーの後を追った。

廊下には、レジアスとオーリスの二人だけになった。
しんとして急に温度が下がったように感じる。

「さて、儂らも帰るか。オーリス、行くぞ」

レジアスがオーリスに声をかけ、ズンズン歩く。
オーリスも急いでレジアスの後を付いていく。
レジアスは歩きながら、近藤の言う『ハイエナ共の末路』がどんなものか思いを馳せていた。

（さて、こんな気持ちになったのは何年振りかな）

遠足前日の子供のように、レジアスは年甲斐もなく高揚していた。

# 第６９話（前書き）

ウチのレジアスは健康そのものです。

# 第６９話

機動六課はスカリエッティ一味による襲撃で隊舎は崩壊していた。

はやてはクロノに相談し、廃艦予定のアースラを本部として使用することにした。

ヴェロッサに話を進めてもらい、今は突貫で調整中である。

その後の事も含めてクロノに相談ようとしたが、現在会議中とのことで会えなかった。

部隊長であるはやてにはやることが山ほどある。

それこそ分単位で仕事が詰まっているのだ。

悲観している暇など無い。

被害は甚大なものだった。

一人も死者がでなかったのが不思議なくらいに。

だが、公開意見陳述会開催中に隊舎にいた者の多くは入院、前線メンバーのスバルは重傷、エリオやシャマル、ザフィーラ、ヴィータと共に戦っていたリインＩＩも傷を負った。

更に、スカリエッティ一味はギンガとヴィヴィオを拉致した。

なのははヴィヴィオの事が気になって仕方がないだろう。

しかし、そんなそぶりも見せず、現場で率先して隊員達に指示を出していた。

フェイトも、スカリエッティ一味のナンバーズと呼ばれる者と接触し、何か言われたらしいが今は忙しく働いている。

なのはにしろフェイトにしろ、体を動かしていないと何かをしていないと心が崩れ落ちてしまうと思っているのだろう。
仕事をしていれば、体を動かしていれば余計な事を考えなくて済むから。
それ程、今回の事件は大きく、スカリエッティの犯行声明はショッキングだった。

特に近藤の事だ。
今回の誤認逮捕がスカリエッティの仕組んだことだということに驚き、なのはの事件で近藤に悪い印象を与える為に管理局自らデマを吹聴し、更に事件の真相を捩曲げた。
一番信じられなかったのは近藤の両親を殺したのがシグナムとヴィータで、更に二人、いやはやてを含めた5人を管理局へスムーズに入局させるために事件そのものを揉み消したということだ。

闇の書の守護騎士として活動していたときには、主の命令とはいえ確かに殺人は犯していた。
だが、その大半は古代ベルカ戦乱の時代などで数百年前である。
これは殺人の実証がとれない。
それ以前に戦乱の時代なのだから、現在の法に照らし合わせる事の方がおかしい。

そう、はやてや守護騎士達の刑が軽く、スムーズに管理局へ入局できた最大の焦点は『死者が一人もいない』ことだった。
もし人死にがあれば、いまでもはやてや守護騎士達は拘留施設なり更正施設なりに入れられているだろう。

はやてはスカリエッティの犯行声明の後、シグナムとヴィータを問いただした。

シグナムとヴィータは、今にも泣きそうな、痛みに耐えるような表情だったが、はっきりと頷いた。

「はい、間違いありません」

と。

イロイロ事情はある。
以前の闇の書の主が最低の人間だったこと。
守護騎士にとって主の命令は絶対であること。
この時のシグナム達は、命についての見解が現在とかなり異なり、特に人を殺すことに抵抗がなかったこと。

以前の主が全て悪い。

その一言で終わればどれだけ楽か。

シグナムとヴィータはその時のことをハッキリと覚えているらしい。
特にシグナムは忘れる事はなかったという。
だが、当時の子供と近藤の外見があまりにもかけ離れていたため、近藤と事件を結びつける事は無かったという。
たしかに、8年前のなのはの事件が起こる前の近藤ならばなにかしら思い出したかもしれない。
だが、その8年の間に近藤は全く別人のようになってしまったのだから無理もない。
はっきり言って、近藤は子供の頃の面影を全く残していないので、

シグナムやヴィータが気づかなかったことを責めることはできない。
たとえば、エリオが大きくなって”ラオウ”になっていたとしたら、面影など皆無でありだれも昔は美少年だとは思わないだろう。

ずっとどこかで罪の意識はあった。
シグナムとヴィータは、リンディやレティからも何も言われなかったのであの殺人も含めての処置を受けたと思っていたらしい。

だがリンディとレティも、何も利益の為だけにこんな事をしたわけではない。
闇の書事件の時のはやては、子供ながら責任感が強かった。
精神年齢がかなり成熟していたのだ。
言い換えれば歳経ていた。
これはなのはやフェイトにも言えることだが、大難患うものは精神が成熟している。
その大難とは、環境であり、心であり、体である。
精神と体のバランスが伴わないと、必ずどこかで不具合が生じる。
守護騎士のした蒐集のことも、知らなかったで済まさず、自らも罰を受けた。
そんな少女に殺人事件を知らせるわけにはいかない。
もし知ったら、小さなはやては責任に押し潰されてしまうと危惧したからだ。

幸い、近藤の両親の事件の目撃者は当時６歳だった近藤一人であり、事件から１０年経ち、誰も闇の書事件との繋がりを考える者はいなかった。

卑怯な言い方だが、リンディとレティははやての為に近藤の両親の事件を無いものとしたのだ。

近藤自身、両親からは虐待を受けていたせいもあってか、両親の事件が管理局の管轄外になっても特に反応は示さなかった。

はやては車での移動中も、近藤の事を考えていた。

誤認逮捕

８年前の事件の改竄

２０年前の事件の揉み消し

嘘の噂の吹聴

スカリエッティは全て大々的に公表したが、ということはスカリエッティはその全てを知っていたということだ。

管理局の中枢にスパイを送り込んでいたのか、ハッキングしたのか。

事件の隠蔽や改竄、揉み消しが事実ならば管理局の存在を左右するスキャンダルだ。

近藤にしても、これはかなりショックだっただろう。

それまで散々虐げられていたのに、さらに追い撃ちをかけるように誤認逮捕、そして事件の揉み消し。

あの両親殺害事件を揉み消したのは相当堪えたはずだ。

落胆しただろう。

絶望しただろう。

怒り心頭だろう。

「・・・スカリエッティが言うたように、管理局に見切りつけるかもしれんなぁ・・・」

はやては窓から見える景色を見てボソリと呟いた。

はやての陰鬱な心情とは裏腹に、窓から見える景色は晴天だった。

陸士１０８部隊のオフィスルームには多くの机があるにも関わらず、二人しかいなかった。

その二人とは、シグナムとヴィータだった。

シグナムとヴィータは黙々とデスクワークをこなしていた。

今回の襲撃事件で、報告書は山のようにある。

書類仕事も大切な仕事だ。

シンとした部屋では、二人のコンソールを叩く電子音だけが響く。

はやてはシグナムとヴィータに現場に出ることを禁じた。

とにかく情報が散乱していて整理しきれていない。

クロノからもシグナムとヴィータにはしばらく大人しくしているように言われた。

シグナムとヴィータが事実だと言っていても、スカリエッティの言葉が全て真実であるかどうかはわからない。
だが、現場に無用な混乱を持ち込むのは避けたいのだ。
二人ははやての言葉に従った。

二人の指は忙しく動きコンソールを叩いていたが、その目はどこか虚だった。

「・・・生きてたんだな、あの子供」

ヴィータがボソッと喋る。

「・・・ああ、斬る瞬間手元が狂い、少し浅く入っていたからな。・・・それでもあの傷は致命傷だったはずだ」

シグナムもヴィータの方を見ずに答えた。

会話が途切れまたコンソールを叩く電子音だけが部屋に響く。

すると、シグナムがコンソールを叩くのを止め、俯く。

「我等の罪は・・・とてつもなく深く、重いな・・・」

親の敵が同僚で、のうのうと暮らしていたのだ。
自分の隣で、ヘラヘラと笑っていたのだ。
幸せそうに、血に塗れたその手で。
近藤の心の傷はどれ程深く、鋭く、えぐっていたのか。

「あたしらは幸せを願っちゃいけないのかな・・・」

ヴィータも力無くうなだれた。

シグナムも答えることなく、己の拳を握りしめた。

そんなとき、通信が入った。

相手はゲンヤ・ナカジマ三佐、スバルとギンガの父親である。

「二人とも、いますぐこっちに来い」

ゲンヤの顔は焦りの色に染まっていた。

シグナムとヴィータがゲンヤのいる部隊長室に入ると、既になのはがいた。

だがなのはは部屋に入ってくる二人を見ることなく、テレビモニタに食い入っていた。

「今管理局が昨日の件の記者会見を開いている」

ゲンヤは親指でモニタを指した。

シグナムとヴィータがモニタを見て思わず映し出された人物の名を叫んだ。

「こ、近藤！？」

なぜなら、モニタには近藤が映し出されていたのだから。

聖王医療院のシャーリーのいる病室に見舞いに来ていたフェイトは、テレビモニタに映し出された近藤に思わず息を飲んだ。
およそ五日ぶりに見る近藤は、顔色が若干悪く目の回りも黒くなっていた。
少しやつれているようにも見える。
シャーリーも先程までヴィヴィオを守れなかったことに悔やんで泣いていたのに、モニタに映る人物を見て涙が引っ込み、泣くのを忘れてしまった。

「こ、近藤副隊長・・・それにレジアス中将！？」

ありえない組み合わせである。
この二人は今はマスコミの前に出てはいけないのだ。
それは先日スカリエッティの犯行声明で、二人の不正が大々的に暴露されたからだ。
今出ていけば格好の的になる。

それなのに何故・・・？

フェイトの疑問に答える者はいなかったが、数分後その答えがわかる。

はやてはオーリスに事情聴取をしようとレジアスの元に向かっていた。
だが、着いてみれば二人は外出中だという。
こんな大変な時に何処へ行ったのか？
はやてはロビーでオーリスが帰ってくるのを待つことにした。
自販機で買った缶コーヒーを持ち、近くのソファに座る。
そこで何の気無しにテレビを眺めた。
テレビは緊急特番として地上本部襲撃についてアナウンサーや何処かの偉い学者やらが討論していた。
何か好き勝手に討論しているが、そんな声は雑音にしかならずはやての耳には届かなかった。
しばらくぼーっと見ていると、急遽緊急放送が始まり、管理局地上本部襲撃についての記者会見が始まった。
そして、その面々を見て思わずソファから立ち上がった。

「近藤さん！？レジアス中将！？」

記者会見は特に混乱もなく進んで行った。
被害状況、犯人のスカリエッティの公表、その後の対策。

質疑応答も無難なものだった。
だが、次にレジアスと近藤が今回スカリエッティが言っていた事を否定しだした。

「・・・やってくれる・・・」

ゲンヤがモニタに睨む。
戦闘機人とは浅からぬ因縁があるゲンヤは、カメラに向かって堂々と関係を否定するレジアスに怒りを覚えた。

その他の三人、なのは、シグナム、ヴィータは声も出せず拳を握りしめた。

「・・・何言ってるの、近藤さん・・・」

なのはが顔を真っ青にし、揺れる瞳でモニタに映るいつもより少し元気がなさそうなの表情の近藤を見て呟いた。

「・・・そういうことかよ・・・！」

ヴィータがギリッと歯ぎしりし、吐き捨てるように言う。

「なんだ？何がそういうことなんだ？」

ゲンヤは近藤の事はほとんど知らなかったので問い掛けた。
すると、シグナムがテーブルをおもいっきり殴った。
シグナムの顔は怒りに染まっていた。
そして、震える声を搾り出した。

「上層部は近藤と中将の件を揉み消すつもりだ！！」

「・・・これ、どういうことなんですか？」

シャーリーが包帯の巻かれた手でモニタを指差した。

「・・・上層部がそう判断したんだよ。不都合なものはなかったことにしようって」

フェイトはスカートをきつく握りしめた。

きつく握りしめすぎて指が白くなっていた。

モニタに映るレジアスは記者の質問に淀みなく答える。

まるでシナリオがあるように。

「・・・なんやねん、これ」

はやては呟いた。

レジアスが不正を全否定した。

公の場で。

あそこまで自信満々に否定するということは、既に真実がすり替わっている可能性がある。

オーリスに事情聴取をしようとしていたのに、むだ足になってしまった。

いや、そんなことより、そうなることによりスカリエッティの印象を悪くし管理局のイメージ回復を計っているということがありありとわかることに苛立ちが増す。

「そこまでして今の地位にしがみつきたいんか・・・！？」

はやてはレジアスに怒り震えた。

そしてレジアスへの質疑応答が終わり、近藤への質疑応答に移った。

広報担当局員が記者を当て、当てられた記者はゆっくりと立ち上がり、近藤質問する。

「まず、８年前の高町なのは一等空尉が撃墜された事件の、管理局の発表とスカリエッティ容疑者の意見の相違について説明していただきたい」

記者の質問から、一呼吸おいて近藤はマイクに近付いた。

「高町一等空尉の件は管理局の発表している内容が正しいです。スカリエッティの出していた映像や内容は全て捏造、偽物です」

なのはは崩れ落ちるようにその場にペタンと座り込んだ。

「では、あなたは私欲で無茶な特攻し、高町なのは一等空尉に怪我を負わせたという管理局の発表が正しいとおっしゃるので？」

「はい、そうです」

モニタに映る近藤はなんの感情も込めず、淡々と喋っていた。
そして、それを聞いたなのはは大粒の涙を流し叫んだ。

「そんなこと言っちゃダメだよー！！」

なのはは、泣き崩れてしまった。

記者達はざわつく。

なんだ、高町なのはのスキャンダルはまた無しか

あなたは私欲でエースオブエースを傷物にしたのか！

テレビから落胆や、近藤への叱責が飛び交い、聞こえる。

なのは耳を塞いだ。

うるさい！

何も知らないのに近藤さんに酷いこと言わないで！

近藤への罵倒、嘲笑、怒りがなのはのこころを突き刺す。

なのはへの同情の声がこころをえぐる。

違うのに！

違うのに！！

「２０年前の事件が揉み消されたとのことですが、あなたは知っていたのですか？」

はやてはテレビからの記者の質問に嫌な予感がした。

「・・・あかん」

はやては呟く。

「・・・言うたらあかんで」

はやての顔は蒼白となり、テレビに夢遊病者のようにふらふら歩き近付く。

認めたらあかん。

絶対あかん。

私等の罪や。

近藤さんが被るもんやない。

だから、

言うたら

「自分は２０年前といえば６歳ですから、そもそも事件自体覚えていません。それに管理局の判断ですから、揉み消しではないと思います、事実、その事件の犯人は現地機関が逮捕していると報告を受けています」

近藤の言葉と共にはやては力が抜けたように床に座り込んだ。

テレビの画面には、再び台本通りの応答を行い、モニタを展開させ地元機関が逮捕したという『嘘の情報』を公表していた。

声が遠くなる。

目の前が歪む。

床に水滴がポタリポタリと落ちる。

「・・・あかんやんか・・・近藤さん・・・！」

はやてはかすれる声で、呟いた。

その顔には涙があふれ、ボロボロと流れ落ち、制服を床を汚していった。

「スパイ容疑という嘘の情報で逮捕されたと聞きましたが？」

「逮捕されたという事実はありません」

「あなたは管理局内でも素行に問題があると噂がたっているそうですが？」

「自分は至って真面目に業務に携わっています。噂はあくまで噂で

すから、自分は与えられた業務を遂行するのみです」

テレビの画面では、近藤が記者の質問に淡々と答えていた。
表情を変えず、淡々と。

真実と真逆の事を。

「・・・なんだ、これは・・・」

テレビの音しか聞こえてこなかった１０８部隊の部隊長室で、誰かが声を発した。

「なんなんだ！これはっ！！」

それはシグナムだった。
シグナムは叫び、またテーブルを殴る。

ゲンヤは近藤の事をあまりしらなかったらしく、ヴィータが説明した。
今までの近藤の関わった事件と、今の記者会見での発言の真実を。

「・・・えげつねぇ・・・」

ゲンヤは顔をしかめた。
近藤はいわば被害者だ。
事件に巻き込まれ、真実を捩曲げられ、そのしわ寄せを押し付けられた。
そして今、その積もりに積もったツケを、被害者である近藤が尻拭

いしているのだ。

「一人の男にどんだけの荷物背負わせりゃ気が済むんだ」

ゲンヤはテレビに映る近藤を見て同情してしまった。
自分が同じ立場ならまず生きていけない。
それ程の重荷を近藤は一人で背負っている。

シグナムは俯いてしまった。

私のせいだ・・・

私が近藤の両親を殺したからこんなことになってしまった。

もし殺していなかったら近藤は普通に生活を送り、幸せに地球でくらしていただろう。

もし、シグナムがレヴァンテインを躊躇無く振り下ろしていれば、近藤は即死で今のような苦しみを味わわなくて済んだだろう。

すべて、私のせいだ。

ヴィータもテレビ画面を見ていられなくなり、目を逸らしてしまった。

自分達の罪を全て近藤が背負う。
いつもと変わらぬ表情で。

耐えられない。

私には・・・なにもできないっ・・・・！

近藤を助けることができない！

助ける資格がない！

私は

あたしは

心の底から己の業を悔いた。

「皆、ちゃんと見なさい」

そんなとき、何処からか声がした。

なのは達は声のした方を見た。

「エレノア・・・さん・・・」

思わず息を飲む。

いきなり現れたという事もあるが、何より今は顔を合わせることができなかった。

だが、エレノアはいつものおどけた雰囲気などかけらもなく、ピン

と張り詰めた空気を纏っていた。

「あん？誰だアンタ」

ゲンヤがいきなり入ってきたエレノアを見たそう言った。
エレノアの大将という存在は佐官以下にはあまり知れ渡っていないから当然の反応であろう。
ヴィータが慌ててゲンヤにエレノアの事を説明した。

「ほー、アンタ大将なのか！おっと失礼！・・・ん？つーことは近藤っつーこの兄ちゃんのデバイスってアンタか！」

ゲンヤはエレノアの事を知ってすぐ敬礼した。
だが、彼女の事をすぐ理解したゲンヤが驚きの表情をした。
エレノアはそれに対しわずかに微笑んだが、すぐに顔を引き締めなのはやシグナムを見る。

「あなたたちには最後まで見届ける義務がある」

エレノアの口調はどこか突き放すような冷たさを持っていた。

「世界は優しくない。どうしようもなく残酷で、でもほんの少しの慈悲を与えてくれる」

エレノアはなのはに近づき、なのはの脇に腕を通して床に座るなのはを立たせた。

「人ひとりができることなんて限度がある。ご主人様は、自分ができる事をしたのよ」

「管理局の不正を隠すことが近藤のやることですか！？」

シグナムがエレノアに噛み付く。

だが、エレノアはシグナムの怒りを受け流し、首を横に振る。

「あなたたちの未来を護ったのよ」

シグナムが息を飲む。

「あなたたちはこれからの管理局を背負い、未来を担う人材よ。こんなところで躓き、足踏みしているわけにはいかない」

エレノアはあくまで淡々と、感情の篭らない平坦な声音で諭す。

だが、それが逆になのはの怒りを触発する。

「それが近藤さんを傷つけてでもすることですか？真実を捩曲げてまですることですか！？そんなこと、私は望んでない！！」

なのははエレノアにつかみ掛かる。

なのはの目には涙があふれ、ボロボロと流れ落ちる。

「あんなのダメですよ・・・近藤さん悪くないんですよ？何にも悪くないのに・・・」

あんなにいっぱい傷ついて、悪口言われて・・・

近藤さんの救いは何処にあるんですか・・・

なのはの心の叫びがわかっているのか、エレノアはなのはの頭をポ

ンポンと軽く叩く。

「この会見が終わればご主人様はここに来るから。その時、みんなでゆっくり話し合いなさい」

エレノアはそれ以上何も言わず、ただテレビを睨んでいた。

聖王病院の一室では、シャーリーとフェイトがテレビを見ていた。

「・・・ひどい」

シャーリーが呟く。

あんまりではないか。

いわば被害者である近藤に対し公の場で他人のミスを尻拭いさせられているのだ。

こんなもの拷問と同じである。

ひとり憤慨していると、一緒にいるフェイトの反応が気になった。

フェイトは今近藤と一番親しい存在である。

そんな彼女にも、今回の会見は大変ショックだったはずだ。

シャーリーは恐る恐るフェイトを見た。

フェイトは歯を食いしばり、泣きそうな顔で、だが涙を流すことな

く、わずかに体を震えさせ、痛みに耐えていた。
手は制服のスカートを握りしめ、指が白くなっていた。

そんなフェイトに、シャーリーは何も言えなかった。

はやては放心状態から戻り、気持ちを落ち着かせるために缶コーヒーを飲んだ。
もう温くなっていたのであまりおいしくない。

ソファに座りしばらくすると、隊舎の入口の自動ドアが開いた。

はやては入口を見た。
そこにはレジアスとオーリスがいた。

はやては怒りが込み上げてきたが、なんとか抑え、二人に近付いた。

レジアスは近付いて来る人物に気が付き、見遣る。

「八神か、何の用だ？」

レジアスは淡々と喋る。

そんなレジアスね態度に、おもわずはやては睨んでしまった。
レジアスは眉をひそめたが、すぐに答えに行き着き納得した。

「記者会見での近藤の発言か？アレは儂の指示ではないぞ。他の将官や提督達の総意だ」

「・・・ゲイズ中将、あなたはそんなに今の地位にしがみついていたいのですか」

はやてがレジアスを非難する。

レジアスが何か言おうとしたとき、オーリスが横から割って入ってきた。

「何も知らない者が、中将を侮辱するな！」

オーリスは怒っていた。

いつも冷静沈着のオーリスが怒っていることにはやては驚くが、レジアスも横で驚いていた。

「まてまて、オーリス。・・・なんだ、いつもと役割が逆だな」

オーリスが今にもはやてにつかみ掛かりそうだったので、レジアスが仲裁に入った。

いつもは怒るレジアスをオーリスが止めるのだが、今は逆である。

オーリスも意外と怒りっぽいようだ。

さすが親子。

「八神、貴様の言いたい事もわかる。だが、あの発言も他の将官や提督の総意に基づくものなのだ。儂の意見など汲まれていないぞ」

レジアスはやんわりと話した。

「それに、今の儂には何も無い。全てあいつ等に掠め取られたからな。今頃分配に躍起になっている所だろうよ」

はやては驚いた。

なんとレジアスも被害者だったのだ。

やっていた事は法に反することとはいえ、それを他の将官や提督が全て奪い取ってしまったのだ。

「中将はこの４０年間、地上の為に心血を注いで来ました。あなたが己の命欲しさのために他の命を奪っていた時も、中将は地上の為に働いていたのですよ」

『闇の書事件』の事を言っているのだろう。オーリスは冷たく言い放った。

「夜天の書の罪、私は自分の罪としてこれからも償っていきます」

はやては気丈にもオーリスを真っすぐ見つめ罪を認め、償うと言い放つ。

「儂もそのつもりだったよ。戦闘機人計画に関しては法改正が成され、更に技術面や倫理面についてもクリアするはずだった。今でこそ、スカリエッティが『ヒトをあらかじめ機械を受け入れる素体として生み出す』という手段を生み出したが、いずれその戦闘機人のノウハウを使い更に技術が進歩したら、素体を生み出すことなく『拒絶反応』や『長期使用における機械部分のメンテナンス』がクリアできる。そうすれば、先天的疾患や重病を患っている人にも有効利用でき、救える命が多くなる。せめて戦闘の道具としてだけでなく、多くの難病に悩む人々を救えるようにと、儂は戦闘機人計画を推し進めていたのだ」

法改正・倫理・技術の進歩

レジアスは遥か先を見通し、今は禁忌とされる技術を未来の為に進めていたのだ。
確かにあの技術を医療に利用すれば、身体補強が容易である。
いうなれば、人口臓器や人工骨格、義手義足をより身体に密接にしたものなのだ。
人口臓器や人工骨格、義手義足を使って以前のような生活が出来るかというと、それは否である。
いくら補うといっても、かならずどこかひずみが生じる。
その点戦闘機人の技術を使えば、以前と変わらぬ生活をおくる事が可能であるし、先天的疾患を患う人に対しては『補強』として健康な体を提供できるのだ。

はやては驚きが隠せない。
レジアスはそこまで考えていたのか。
未来のために、地上に住む人々のために、己に汚名が被ろうが、罪を問われようが、その覚悟を持って進めていたのだ。

「自分の手を汚してでも平和を守る。・・・レジアス・ゲイズ中将、あなたは・・・」

はやてが言葉を続けようとしたが、レジアスに止められた。

「話しは終わりだ。今の儂は『篭の鳥』とて、やることは山積みでな。八神ももう戻れ。近藤も１０８部隊の隊舎へ向かっているはずだ」

そう言いレジアスははやてから離れて行こうとした。しかし、急に

ピタリと止まり、はやての方へ振り向いた。

「そういえば近藤が言っていたが、アイツはハラオウンの娘と婚約しとるそうだな？」

「え？あ、はい」

いきなり何を言い出すのかと、はやては首を捻った。

すると、レジアスははやてを指差し高らかに宣言した。

「帰ったらハラオウンの娘に言っておけ。貴様等の婚約は儂が認めん。近藤はオーリスと夫婦（めおと）になるのだ！」

そう言ってレジアスは、ガハハと笑いながら歩いて行ってしまった。

残されたのは呆然としているはやてと、顔を真っ赤にして「もう、お父さん！」と怒っているオーリスだけだった。

はやてはツツツとオーリスに近付いた。

「・・・オーリス三佐、失礼ですけど、もしかしてゲイズ中将ってめちゃくちゃオモロイ人ちゃいますか？」

「・・・恥ずかしながら、家では常にあのテンションよ」

オーリスは恥ずかしさから、顔を手で覆った。

「・・・そらそうか、いつもあんなカリカリしてしかめっ面やったら、ハゲるか高血圧とかの持病持ちになっとるわな・・・」

はやてのレジアスに対する印象がかなり変わった瞬間だった。

そんな皆の心が揺れ動くような思いをしている時に近藤は何をしていたかというと・・・

「コレはどうだ、近藤君？」

「すごくヒラヒラですね・・・少将ご自身が着るんですか？」

ヒラヒラした服を持ち近藤に見せるバイパー少将。
バイパーが「『愛しのかわいい妹』に手ぶらはいかんな。何か土産を買っていくか」と言い出したので、急遽ショッピングが開始した。

「バカモン、私がこんなゴテゴテの服着るわけがないだろう。『プリティな妹』の服だ」

何故か土産がバイパーの妹の服になった。

というわけで、今は女性服の店で絶賛選別中なのだ。
バイパーの選ぶ服は、とにかくファンシーだった。
ヒラヒラでふわふわな服ばかりを選んでくる。

「・・・いつもこういう服を買うんですか？」

とりあえず近藤はバイパーに聞く。

服の趣味は人それぞれである。
だから、バイパーの妹がこういう服が趣味なのかもしれない。
だが、なにかバイパーにはおせっかいなお母さんの匂いがした。

「うむ、私は妹が似合うと思って買っているぞ。いつも喜んで貰ってくれるのだが、私の買った服を着ている所は見たことがないのだ・・・」

何故だ？

バイパーは首を傾げる。
本当にわかっていないようだ。

近藤はため息をついた。

「少将、たまには趣向を変えてはどうですか？」

そう言い、近藤はシャツようなボタンタイプのベージュのチェニックとデニムレギンスを持ってきた。
大人しめの少し長くゆったりとしたチェニックに、デニム柄のレギンスで下半身を引き締める。
コーディネートとしては無難だと思う。

「妹さんも、もう大人でしょう？大人の女性を演出しつつ、可愛らしさを残すこういう服をプレゼントしたほうが喜ぶと思いますけど・・・」

バイパーは顎に手を当て、近藤の選んだ服を見ながら顎に手をやる。
表情は真剣そのものだ。

「・・・なるほど、確かにこれはいいかもしれんな・・・」

ぶつぶつ呟き、妹の姿を想像する。

涎がでてきた。

「うむ、やはり私の目に狂いはなかったな！近藤君、君の仕事ぶりは素晴らしいな！！」

ワハハと笑い、近藤の背中をバンバン叩くバイパーに、近藤はむせながらも苦笑しかできなかった。

# 第６９話（後書き）

近藤　「はやて隊長、突然ですがなんか送られてきました」

はやて　「ほんまに突然やな。で、なに？」

近藤　「ユニコーンさんから『真シャイン・スパーク』
黒鷹さんから『ＳＬＢＭと８０センチ砲』
虚空さんから『ＤＥＡＴＨ　ＮＯＴＥ』
です」

はやて　「あんたらこの物語消す気かー！！」

なのは　「　ＤＥＡＴＨ　ＮＯＴＥか～藤原竜也君かっこよかったね」

フェイト　「いやいや、松山ケンイチくんでしょ？」

はやて　「あの、二人とも？問題はそこちゃうで？」

近藤　「真シャイン・スパーク喰らって生きていられる奴、
この世界にいませんよ」

はやて　「ＳＬＢＭなんか核弾頭やで！！」

近藤　「皆さん、平和に会話で解決しましょうよ・・・」

なのは　「いや・・・近藤さんは事なかれ主義すぎるでしょ・・・
でもやっぱりお話は必要だよね」

近藤　「なのは隊長のは相手を物理的に潰してからのお話なんで同意しかねます」

なのは　「近藤さん・・・言葉のナイフがざくざく刺さるよ・・・」

フェイト　「イジメかっこ悪い！ＮＯ　ＷＡＲ！ラブアンドピース！！」

はやて　「フェイトちゃん、最初のは意味わからん」

近藤　「とにかく、もう少ししたら反撃を開始しますから」

はやて　「・・・すっごい陰湿な反撃やろうなあ・・・」

なのは　「・・・梅雨のようにジメジメしたねちっこい復讐だろうね・・・」

フェイト　「・・・皆ひどいよ・・・でも全否定できない・・・」

近藤　「・・・パワハラだ・・・スタッフサービスさーん！！

俺この仕事やめるー！！」

## 第７０話（前書き）

バイパー少将の容姿ですが、「鋼の錬金術師」のアームストロング少将にメガネをかけていると思ってください。

・・・こえぇぇ・・・

# 第７０話

近藤が陸士１０８部隊に着いたのは夜だった。
こんなに遅くなったのはバイパー少将が妹のプレゼントだからと言って、たくさんの買い物をしていたせいである。

「ふむ、すっかり暗くなってしまったな」

バイパーは悪びれるそぶりもなく言い放つ。
その両手にはたくさんの紙袋が握られていた。

とりあえず、近藤とバイパーは隊舎に入った。
すると、入口にははやて、フェイト、なのは、シグナム、ヴィータ、ティアナ、エレノアがいた。
キャロも途中まで待っていたが、夜も遅く先に寝てしまった。
近藤が帰ってくるのをずっと待っていたようだ。

近藤とバイパーは驚くが、はやてが近藤を見つけると、全員が近藤に走り寄ってきた。

「近藤さん！・・・と・・・げっ、バイパー少将！？」

はやてがバイパーの名前を口に出すと、一同の足がピタリと止まった。
皆顔を引き攣らせる。
エレノアまでもが汗をかいていた。

バイパーははやてにゆっくりとした足どりで近付き、はやての頬を捻りあげた。

「いははははっ!?いはい!いはいれふ!はいはーひょうひょう!!（イタタタッ!?痛い!痛いです!バイパー少将!!）」

はやてはバイパーに痛みを訴えるが、バイパーはやめない。

「この子狸が・・・今私を見つけて『げっ』と叫んだだろう?うん?なんだ、私は化け物か?あん?」

ムッツリ顔のバイパーは、はやての頬を上下左右に動かす。

「ふひまへ～ん!（すいませ～ん!）」

はやての変な声がロビーに響き渡った。

やっと解放されたはやては、赤くなった頬をさすりながら涙目になっていた。

「ううう・・・ひどい・・・顔は女の命やのに・・・」

はやては恨みがましくバイパーに言うが、ギロリとバイパーに睨まれると、途端に姿勢を正した。

なのはやフェイト、シグナムやヴィータまでも緊張した面持ちで起立していた。

「ふん、まあいい。今日は貴様等に直接用があったわけじゃない。『プリティチャーミーな妹』に会うために来たのだ。そのついでに近藤君を送ってやったわけだ」

バイパーはそういうと、サッサと歩きだし、はやてを指差した。

「貴様等、あんまり近藤君を困らせるなよ。あ、あと機動六課解散後は近藤君は私の元に寄越せよ！絶対ハマー中将のところにやるなよ！！」

なにか捨てぜりふのように言いながら、バイパーは妹に会いに行ってしまった。

「・・・」

「・・・」

妙な空気が漂う。

「・・・あー、ただいまです」

「・・・あ、うん、おかえりなさい・・・」

なんか再開がグダグダになってしまった。

なのはもはやても、近藤が帰ってきたらまずは謝ろうとしていた。
シグナムとヴィータにしてもそうだ。
だが、バイパーが引っ掻き回していったのでなんとなく謝る雰囲気では無くなってしまった。

それに、近藤の態度もますます重い空気を霧散させてしまう。
てっきり怒っているか悲しんでいるかと思っていたが、帰ってきた姿はいつも通りの表情で、至って普通だったのだ。

なんだかイロイロなタイミングを逃してしまったなのは達はとりあえず宛がわれている会議室に移動することにした。

とりあえず、はやては現状を説明した。
機動六課本部をアースラに移設し、準備が整い次第移動すること。
ギンガとヴィヴィオがスカリエッティ一味に拉致されたこと。
隊員達の状態など。

近藤は予め大まかな事は聞いていたので驚くこともなく、静かに耳を傾けていた。

続いて近藤は自分に起こっていた事を説明した。

取り調べ時の事はぼやかしたが、その後の将官や提督達との取引、記者会見での発言についてなど。

近藤が話し終わると、なのは達は皆苦しそうな、悲しそうな顔をしていた。

すると、シグナムとヴィータが一歩前に出て来た。
その顔は真剣そのものだった。

「近藤、我等のお前にした事は決して謝って許されることではない。そして近藤は我等を裁く権利がある。気の済むようにしてくれ」

シグナムは目をつむり、近藤の裁定を待った。
ヴィータも何も言わず、目をつむった。

そこへはやてが割って入ってくる。

「待って！シグナムとヴィータの罪は主である私の罪も同然や！私も全て罰を受けるから！だから、二人にひどい事だけは・・・！！」

「違います！主はやては何も悪くはない！責を負うのは我等です！！」

「そうだよ！あたしとシグナムが悪いのに、はやてが罰を受ける必要なんかないよ！！」

なにやら三人で言い合いが始まった。

そんな三人を見て近藤はため息をつき、ふとある事を思い付いた。

「・・・本当になんでもいいんですか？」

近藤はそう言いながら、手をワキワキと動かした。

それを見たはやてはちょっと引いた。

「で、できれば、えっちぃのは・・・勘弁してほしいかな～・・・なんて」

「痛くないし、むしろ気持ちいいですよ？」

近藤はさらに指を怪しく動かす。

「ええぇ～・・・と、その～・・・あ！そ、そうや、気持ちよかったら私等の罰にならへんやんか！？」

はやては必死に言い訳する。

シグナムとヴィータもはやての後ろで必死にウンウン頷いていた。

罰は甘んじて受けるつもりだったが、なんか近藤にえっちぃことされるととんでもない事になりそうなので、なんとかそれ以外の方法でお願いします、と切に願う三人だった。

「じゃあ、熱々のおでんを一気に食うとか、寝てる所に口にやかんで大量の水をかけるとか・・・」

「なんか芸人の罰ゲームみたいやな！？」

はやては即座に突っ込む。

「近藤！我等は真剣な話しをしているのだぞ！」

シグナムは怒りだした。
当然だろう。
シグナム達は真面目に罰を受けると言っているのに、当の近藤はふざけた事しか言わないのだ。
だが、近藤は肩を竦め、こう言った。

「だから、俺にとってはその程度のことなんですよ」

「だが！我等はお前のご両親を・・・」

シグナムが反論しようとすると、近藤が手でそれを止めた。

「お二人は、俺の子供時代のことを聞きましたか？」

「・・・？いや、知らねー」

近藤はシグナムとヴィータに自分の子供時代を告白した。
それは、両親に虐待を受けていたということだった。
シグナムとヴィータはその壮絶な過去に驚きを隠せないようだった。

「もしお二人があの場に来なかったら、俺は両親に殺されていたでしょうね。知ってますか？虐待を受けている幼児以下の子は、そのうち5割は死んでいるんですよ？」

実際問題、乳幼児が虐待を受けると、その貧弱さと大人の力によって死亡率は高い。
小児くらい体と人格形成がしっかりしてくると、虐待から逃げる方法や、周囲の大人へのＳＯＳサインを出せる知識を持っているため死亡率はぐんと下がる。それでも2割以上はあるが。
虐待とはＤＶ（ドメスティックバイオレンス）だけではない。ネグレクトも虐待である。

ストレスのはけ口を子供に向ける。
育児放棄。
大人の無責任な行動が子供へのしわ寄せとなる。

近藤の両親はそういう部類の人間だったのだ。

そんなバカな親は、後で気づく。
わが子の命を弄んだということを。
人を殺したという事を。

クズは後悔する。

子供を殺したという事にではなく、社会的に犯罪者というレッテルを貼られたということを。
子供を殺した事への罪悪感など無い。
あるならば、殺しはしない。
つい、うっかりなど理由にはならない。
ストレスだからという理由で子供に暴力を加えていい理由にはならないのだから。

子供を育てるということは、命を育むということだ。
人間が生きるということはとてつもなく重く、大変だ。
甘い考えで子供を作ること事態が間違いなのだ。
覚悟の無い大人など子供と変わらない。
いや、力と要らぬ知識があるだけ子供よりたちが悪い。

シグナムとヴィータは何も言えなかった。

「俺はね、感謝しているんですよ」

「感謝だと？」

「俺を六畳間の世界から出してくれたあなたたちを。あなたたちは俺の『ヒーロー』なんですよ」

シグナムはヒーローという言葉で思い出した。
以前近藤はシグナムにマッサージをしている時、他愛のない話しの中でシグナムの事をヒーローと言っていたことを。

そして、シグナムはさらに驚愕の事実に気付いてしまった。

「近藤・・・お前、まさか・・・私たちを覚えていたのか！？」

「なっ・・・！？」

ヴィータはシグナムの言葉に驚く。
対して、近藤はくすりと笑った。

「生まれて初めて見た『両親以外の人間』でしたからね。それに、こんな綺麗な二人を忘れるはずがない」

近藤はおどけてみせた。

「リンディさんとレティ提督の事も知ってました」

はやて達は更に驚く。
近藤は全てを知っていたのだ。

知っていて、近藤はシグナムやヴィータと共に仕事をこなし、リンディとも普通に接していたのだ。

「さあ！もうこの話は終わりにしましょう！謝るのも無しです！」

近藤は手をパンパンと叩いた。

「でも・・・！」

シグナムとヴィータが何か言おうとしたが、近藤がそれを聞こうともしなかった。
手を前で交差しバッテンを作る。

「ノウ！！」

「の、のう？い、いやそれでも・・・」

「絶対にノウ！！」

「・・・・・」

近藤の断固とした態度にシグナムとヴィータはどうしたもんかと悩んだ。
そこへ、エレノアが二人のポンと肩を叩いた。
その表情は生暖かかった。

「今のご主人様は何があってもノーとしか言わないよ。もうあきらめなさい」

「・・・えぇ～・・・」

謝るのを諦める？
罪を償うのを諦める？
なんだそれ？

シグナムとヴィータはもう何がなんだかわからなくなった。

「じゃあ、私は罪の償いとして、近藤さんの仕事の量を減らせるように努力する！」

はやてが冗談で近藤の仕事軽減を提案した。

「イエス！！」

「ノーとしか言わないんじゃなかったの！？」

おもわずなのはが突っ込んだ。

「はい終了！オフサイド！ホイッスル！！もうゴールしてもいいんです！！」

「・・・もうええわ・・・それにオフサイドってなんやねん。それいうんやったらノーサイドやろ・・・」

近藤のあまりの強引な切り上げに、なのはやはやては呆れ果ててしまった。
なんかもうどうでもよくなった。
謝るのもばかばかしい。

疲れた表情のなのは達を確認した近藤は、フッと軽く笑った。

そして、近藤はエレノアの方を向き別の話をしだした。

「・・・エレノア、現状どうなってるか聞いてるな？」

「うん、全て滞りなく速やかに進めてるって。早ければ二日後には出せるって」

なにやら暗号のような会話をする二人に、はやてが気になり割り込んだ。

「一体何の話を・・・」

しとるんや？と言葉を続けようとした時、会議室のドアが開いた。

するとそこにはバイパーが立っていた。

なにやら機嫌が悪そうである。

「・・・ドアの前でウロウロしていたぞ。小僧、しゃんとしろ！」

そう言い、バイパーは何かを引っ張り出した。

それは、また意外な人物だった。

「あだだだっ！？少将、耳を引っ張らないでください！」

「クロノ君！？」

なのはが思わず声を上げた。

なんと、クロノがバイパーに耳を引っ張られて出てきたのだ。

クロノは相当痛いのか、ちょっと泣きそうになっている。

「なんや？なんでクロノ君がココにおるんや？」

はやても不思議そうにクロノを見る。

「あ・・・いや、その・・・」

なんともハッキリとしない態度に、バイパーはイライラする。

「小僧！男ならシャキッとせんか！シャキッと！！」

バイパーはクロノの背中をおもいっきり蹴った。

クロノは反動でまえのめりにコケる。

「近藤君に言いたい事があるのだろう！ハッキリとせんか！！」

バイパーは腕を組み、クロノを見下ろす。

クロノはゆっくりと立ち上がり、近藤の前まで歩んでいく。

それをハラハラしながら見つめるなのは達。

クロノは近藤を殴るという前科を持っているため、気が気ではない。

すると、クロノはおもいっきり頭を下げた。

「すまなかった！！」

いきなりの事で混乱するなのは達だったが、フェイトだけは安堵の表情をしていた。

「今までの事もそうだが、今回の事も僕に力が無いばかりにお前に多大な負担をかけてしまった！許してくれとは言わない、殴るなり

蹴るなり好きにしてくれ！！」

またこのパターンか・・・

近藤はため息をついた。

実際問題、近藤は子供の頃のことは特に気にしていなかった。

そりゃあ当時は意味もわからず殴られたりしていたのだから腹も立った。

だが大人になるにつれ、いや、８年前の事故によって価値観が変貌してしまった。

近藤は人を憎むとか、恨むという事を忘れたかのように、欠落したかのようになってしまったのだ。

近藤は考える。

ああ、面倒臭い。

なんで皆罰やらなんやらを求めるのだろうか？

この繋がりの人達は脳が体育会系に染まってるか、ドMだな。

はやて隊長やシグナム副隊長、ヴィータ副隊長にはエロで攻めれば話があなあになるとわかっていたのでわざとエロネタをふったが、クロノの場合そういうわけにもいかない。

無理やり話を切り上げる方法もあまり面白くない。

というか、あれはなのは達の反応が面白かったからやっただけであって、クロノにそんな反応求めていない。

とりあえず近藤はクロノにエロ攻めをした場合の事を想像した。

・・・想像の中のクロノは、意外にもオッケーを出した。

・・・マジでか・・・

クロノと俺のくんずほぐれつ・・・

・・・・・・・・・・・・気持ち悪くなってきた。

・・・あ、そうだ。

近藤は何かを閃いた。

「俺はクロノになにもしない」

近藤はキッパリと言う。

それに驚き、うろたえるのはクロノだ。

「な!?今まで散々酷いことをしたんだぞ!それをアッサリと許すなんて・・・それじゃあ僕の気が済まない!!」

予想通りだな。

近藤はニヤリと笑った。

「勘違いするな。俺は許すとは言っていない。ただ、なにもしない」

「はあ?」

クロノは近藤の言っている事がわからないようで、首をかしげる。

「クロノの気が済むとか済まないとか俺の知ったことか。一生そのモヤモヤとした気持ちと罪悪感を抱いて生きてろ」

近藤が冷たく言い放つ言葉に、クロノは口をパクパクとさせる。

「ふん、それでストレス溜めてハゲろ。血尿だしとけ。胃潰瘍になってしまえ」

妙にリアルな未来を口にだし見下す近藤に対し、クロノは段々と表情を険しくする。

「それで名前も変えとけ、クロノ・ハゲオウンてな」

「・・・ぷっ」

誰かが笑いを堪えていた。
小さい声で、うまい！と聞こえた。
口を押さえ、笑いを堪えているのは誰か？

顔を横にそらして口を押さえていたのは、なのは、はやて、ヴィータ、ティアナ、エレノア。

肩を震わせ、笑いに耐えているのはフェイト、シグナム、バイパー。

ようするに、近藤とクロノを除く全員だった。

クロノの顔色が段々と赤くなっていく。

「・・・近藤」

クロノが低い声を出す。

「なんですかね、ハゲオウン提督？」

「ぷひーっ！」

我慢できず変な笑い声が聞こえた。

・・・・・はやてだった。

そして、クロノはまたキレた。

「やっぱり僕はお前が大っ嫌いだあああっっ！！」

今度は近藤に殴り掛かることはなかったが、足をダンダンと床にたたき付けて怒りを表す。

「ちくしょー！僕はフェイトとお前の婚約も認めないからなー！！」

癇癪を起こした子供のようである。

そこはかとなく小物臭がする。

我慢する必要もなくなったのか、皆声を出して笑っていた。

クロノひとりが泣いていた。

実は最近髪のことを気にしていたので、精神的にかなりダメージを食らっていたのだ。

ひとしきり笑った一同は、落ち着くと近藤とエレノアを見た。

「そういえば、さっきはやてちゃんが近藤さんに何か聞こうとしてたよね？」

なのはがそう言うと、はやては手をポンと叩いた。

「ああ、そやそや。近藤さんとエレノアさんの会話の意味を聞いてたんやった」

はやては近藤の顔をジッと見る。

「なに、別に大した話ではありませんよ。ただ、二日後に三提督から通達が来るというだけです」

「通達？・・・ああ、あの昇進の辞令通達か」

バイパーはあの時の事を思い出し、腕を組んでしかめっつらの顔をさらに険しくした。

「ふん、胸糞悪い。あんな寄生虫共が管理局の中枢だと思うだけで不愉快だ」

バイパーの言葉は辛辣だ。

だが、誰もそのことに反論しない。

クロノにしても苦虫をかみつぶしたような顔をするのみである。

すると、近藤とエレノアはニヤリと笑い出した。
エレノアの笑みは、いつもの何か悪巧みを考えているような小悪魔のような笑みだった。
皆がエレノアに悪魔のしっぽが見えたのは錯覚だろう。
だが近藤は違う。
いびつに顔を歪め、どす黒い感情を隠そうともしない邪悪な笑みだったのだ。
近藤のそんな顔を見たことがなかったなのは達は、ゾクッと寒気を感じた。

「まあ見ていて下さい。二日後、面白い事になりますよ」

クックックと笑う近藤にドン引きのなのは達。
バイパーでさえ、若干引いていた。

なにやら空気がおかしいので、堪えられないなのはが別の話をはやてに振った。

「そ、そういえばはやてちゃんオーリス三佐の所に行ってたんだっけ？」

「え？あ、うん！そう、そうやねん！オーリス三佐に今回の事で事情聴取しようかと思てな。でも、まぁ・・・私等はレジアス中将の事を勘違いしとったんかもしれんな」

「どういうこと？」

ここで初めてフェイトが会話に参加してきた。

「レジアス中将、あの人はホンマに地上の平和の為に働いとるってことや。自分の手を汚して平和が得られるなら、あの人は躊躇無く手を汚す。一人でも多くの命を救える違法があるなら、躊躇無く違法に手を出す」

皆はやての言う事を静かに聞く。

「確かに、違法とか不正はアカン。でも、それに手を付けなアカン程地上は危ういんや」

「そうだな。中将が地上の最高権力を手にしてから、地上の待遇は格段に良くなった。それまで本局は地上より宇宙、そして他次元に勢力を伸ばす事ばかりを考えていた。管理局は釣った魚に餌を与えないタイプだからな。地上本部のあるミッドチルダにしても待遇は同じだったんだ」

バイパーがはやての言葉に続く。

「あの人はな、優しすぎるんだ。己の利益は常に地上の治安維持に注ぎ込む。自分の事など常に二番目以降だ。だからこそ地上の住民や隊員はあの人を崇拝する。まぁ、あんな面をしているから勘違いされやすいし、やり方は強引だし、暴走しがちだがね」

肩を竦め、おどけるような仕草をするバイパー。

「・・・そうですね。それに、ゲイズ中将が実は面白い人だということもわかりました。・・・あ、そうや！」

はやては何か思い出したようで近藤を見た。
だが、その表情は悪巧みを考えている顔だった。

「近藤さ～ん？あんたエライ中将に気に入られたんやな～」

ニヤニヤしながら近藤にねちっこく迫るはやて。
近藤は何か嫌な予感がした。

「中将は言うとったで～、近藤さんとフェイトちゃんの婚約は認めへんて」

「本当かそれは！？」

身を乗り出し食いつくクロノ。
同志がいてうれしいのだろう。

「近藤さんはオーリス三佐と夫婦にする言うとったしな！」

ビシッと近藤を指差すはやて。
近藤は顔面蒼白だった。

そして、近藤の後ろにはどす黒いオーラを出すフェイトがいた。

「どういうことかな、『近藤さん』？」

フェイトがニコニコと笑いながら詰め寄る。
普段近藤の事を『大輔さん』と呼ぶのに、今は『近藤さん』である。
なにこれ？

超怖い。

「・・・どうも、中将に気に入られまして。ゲイズ中将曰く、略奪してでもモノにしろとオーリス三佐に言ってました」

「・・・・!?略奪愛!なにその昼ドラ!?」

なのはが驚愕の表情をする。

シグナムやヴィータも驚いている。

バイパーは「ああ、あの人が言いそうな事だ」と達観していた。

「レジー坊やったら、恐ろしい子・・・」

何故かレジアスの子供の頃のあだ名を知っているエレノア。

「たしか、中将も駆け落ちだったとかで、親子だな、とかも言っていました。とにかく、こちらからアプローチは一切していませんので」

近藤は汗をダラダラ流しながら、とにかく自分には非が無いことを説明する。

ヤンの取り調べより緊張している近藤は、やはり小心者であった。

「・・・あのおっさん・・・やるな・・・」

珍しくヴィータが人を褒めた。

あまりうれしくない賛辞ではあるが。

「まぁ、それは置いといてだ。レジアス中将も人の子、いつもあん

なカリカリしているわけではないということだ。一度あの人と飲みにでもいってみろ。ビックリするぞ」

「・・・もう十分ビックリしてます」

バイパーに対しなのはが言う。

後ろではフェイトとはやて以外の人間がポカーンと口を開けていた。

「さて、『アルティメットな妹』にも会えたし、そろそろ帰るか」

バイパーがそう言うと、はやては安堵のため息をついた。

それをバイパーが見逃すはずもなく、はやてはまた頬をひねりあげられた。

「この子狸め、いま安心しただろう？貴様、上官をなんだと思ってるんだ？ああ？」

「ひゅ、ひゅひまへ～ん！（す、すいませ～ん！）」

バイパーの仕打ちに対し、はやては泣きながら謝るしか術を持っていなかった。

「私の管轄世界に捜査に来て挨拶しに来た時もそうだ。貴様には上官を敬うという精神が欠如している！だが安心しろ、今度私の管轄世界に来たときはこの私直々に指導してやろうじゃないか！いや、

今してやろう。光栄に思うがいい！！」

バイパーが高らかにそう言うと、はやては泣きそうになった。
それを見て合掌するなのはとフェイト。

「何を人事みたいな態度を取っている？貴様等も子狸と同じく、私直々に再調教してやるからな！こっちにこい！！」

「ふえぇぇっ！？」

「ひいぃぃっ！？」

なのはとフェイトも泣きそうな顔をしだした。

そんな恐怖のどん底にいるなのは達を見て、ティアナが近藤に近寄り質問した。

「近藤副隊長、バイパー少将の噂は聞いていますが、隊長達は何故あんなに怖がっているのですか？」

バイパーの噂とは、部下に厳しく、自分にも厳しい、そして、犯罪者や敵には一片の情もかけないという『氷の女王』のことである。

「さあなぁ・・・何かあったのかな？」

近藤も首を傾げていると、そこへシグナムとヴィータがコソコソと近寄ってきた。

「実はな、我等は以前高町やテスタロッサ、主はやて等と共にバイパー少将の管轄世界で任務をしたことがあるのだ」

「・・・すごいメンバーですね、そんなに大掛かりな事件だったんですか？」

「いや、事件自体はそう大したものじゃなかった。・・・これはあくまで噂だがな、一種の『通過儀礼』らしい」

「通過儀礼？」

シグナムが神妙な顔をしながらバイパーの顔をチラチラと見る。

「ある程度の功績や地位を手に入れると、驕りや勘違いをおこすバカな輩がいるだろう？そんな伸びた鼻っ柱を折るためと、そうならないための事前策として、何かしら理由を付けてバイパー少将の管轄世界に行かせて、ケチョンケチョンにされるんだ。あんな風に」

ティアナはヴィータの言葉に冷や汗をかきつつなのは達を見た。いつの間にか正座させられ、いつの間にか鞭を持っているバイパーに説教されていた。
そして、いつの間にかクロノも同じく正座をし説教を受けていた。

「バイパー少将は生粋の女王様だ。・・・はっきり言おう、絶対逆らえん！！本能が逆らう事を拒否する！」

「覚悟しとけよティアナ、お前もいずれバイパー少将にボコボコにされるからな。確か執務官になった奴は全員強制で行かされるはずだ」

シグナムとヴィータが冗談めいた事を言うが、その表情は真剣だった。

ティアナは顔を青くする。

「くるあぁぁっ！そこのピンクと三つ編み！貴様等何を突っ立っている！ここで正座せんかあああぁぁっ！！」

「は、はい！！」

シグナムとヴィータが声を揃えて急いでバイパーの元へ行き、正座する。

まるでパブロフの犬である。

なんとも奇妙な光景である。

「・・・執務官目指すのやめようかな・・・」

ティアナの呟きは、バイパーの怒声となのは達の涙に掻き消えた。

説教は一時間程続き、バイパーは帰って行った。精根尽き果てたなのは達はふらついた足どりで「今日はもうなんもやる気がせん。明日またがんばろう」というはやての一言に従い、解散、就寝となった。

クロノも本局へと戻った。

近藤はエレノアと二人会議室を出て行き、隊舎の屋上へ向かった。

近藤は屋上の鉄格子にもたれかかり、途中買った缶コーヒーのプルタブを開け、ちびちび飲む。

エレノアはそんな近藤を、手に持っている缶コーヒーを開けずに無言で見つめていた。

近藤が空を見上げ大きく息を吐く。

「お疲れ様でした、ご主人様」

エレノアが一言労う。

「お前もな。拘束されてたんだろ？」

「私は何も。ただ部屋に閉じ込められていただけですから。それよりもご主人様の方が・・・」

エレノアはそう言い近藤の右腕を触る。

「聞きましたよ。義手を無理矢理引きちぎられたと」

エレノアが泣きそうな顔をし、近藤の服を握る。

わずかに震える手は、近藤にも伝わった。

「・・・何故ご主人様は私に命令してくれないのですか？『全てを消せ』と。私にはその力がある。そして、それを行使する権利がご主人様にはある」

エレノアが近藤の肩に頭を乗せる。

肩が小刻みに震え、近藤の服を握りしめる手に力が入る。

「私には耐えられない！ご主人様にこんな酷い仕打ちをするような腐った組織無くなってしまえばいいのに！私はご主人様の傷つく姿を見たくない！！」

エレノアは叫ぶ。
近藤の服を濡らし、泣き叫ぶ。
近藤はため息をつき、エレノアの頭を軽く撫でた。

「・・・どういうこと？」

急に声がしたのでエレノアはハッとして振り向いた。
そこには、フェイトがいた。

フェイトは近藤が帰ってくると、いの一番に抱きしめたかった。
それは慰めるためである。
あれほどの仕打ちを受け、心も体もボロボロだろう。
だから、優しく抱きしめたかった。
それで近藤の傷が癒えるとは思えない。
フェイト自身の自己満足であるかもしれない。
それでも抱きしめたかった。

だがいざ近藤を見ると二の足を踏んでしまった。
何故なら、近藤がいつも通りなのだ。
たしかに少し痩せこけ、顔色も悪い。しかしそれだけだ。

悲壮感も怒りも無く、あくまでいつも通りの表情。
どうしたものかと悩んでいるとはやてがバイパーを見つけてしまい、さらに場の空気が引っ掻き回されとても抱きしめる雰囲気ではなくなった。

その後も近藤が無理やり話を切り上げたりしてフェイトが前に出て近藤を抱きしめるような雰囲気などならず、逆にフェイト達はバイパーに説教を受けズタボロにされてしまった。

説教が終わると、もうどうでもよくなった。
疲れた、寝よう、そう思っていた。

だが、近藤とエレノアが宛がわれた自分達の部屋へ行かず、屋上へ行くのを見てしまった。

そして、聞いてしまったのだ。

あの天真爛漫なエレノアが泣き叫ぶ声を。

「義手を無理矢理引きちぎられた?酷い仕打ち?・・・聞いてないよ・・・何それ」

フェイトの瞳が揺れる。

近藤はため息をついた。

「・・・取り調べの際、デバイス所持として没収されたんですよ。
でも安心してください、不具合はありません」

近藤は呑気に言う。
だが、そんな態度がフェイトの神経を逆なでする。

「そんなこと聞いてないよ！高性能な義手は医療処置無しで外したら激痛を伴って、最悪死ぬんだよ！？」

「よくご存知ですね」

フェイトはすごい剣幕で近藤に詰め寄る。
だが、近藤はおどけるように肩を竦めるのみである。

「アコース査察官からは無事だって！心配無いって言われてたのに！！隠してたの！？」

フェイトは涙を溜めて近藤の服を掴む。
横ではエレノアが余計な事を言ったと気まずい顔をしていた。
近藤はどうしたもんかと考えた。
へたに嘘をつくのも良くない、ならば素直に話そうか。

「・・・皆さんに要らぬ心配をかけたくなかったんですよ」

近藤は本心の半分を言った。
まあ残りはどうでもいいという投げやりな考えだが。
だが、やはりフェイトは怒った。

「あなたはいつもそう！自分で全て抱え込んで、完結してしまう！
私達に話さない！私達を頼らない！！」

フェイトが近藤の制服をきつく握る。

「私達はそんなに頼りない？私は・・・私はそんなにあなたを支えられない程弱い！？」

フェイトの頬に涙が伝う。
右側には泣いているエレノア。
左側には泣いているフェイト。

ああ、両手に華だなあ。

そんな暢気な事を考える近藤。
しかし、このままこの状況でいるのはあまりよろしくない。
近藤はため息をつき、自分の少ないボキャブラリーを総動員した。

「・・・男はね、格好をつけたがるんですよ。特に好きな相手にはね」

自分で言っていて恥ずかしくなってきた・・・

顔が赤くなるのを感じた近藤は、そっぽをむく。
フェイトとエレノアはそんな近藤を見て泣くのも忘れしばらく目を丸くしポカーンと見ていたが、やがてどちらともなくクスリと笑った。

「ご主人様は子供ですね」

「ほんと、手のかかる悪い子だよ」

クスクスと笑うエレノアとフェイトに対し、なんだか恥ずかしくなってきた近藤は二人を振り払おうとした。
すると、エレノアが近藤をギュッと抱きしめだした。
エレノアがフェイトに目配せし、フェイトも近藤を抱きしめた。

「ご主人様、今は私達二人しかいませんから。見栄なんか張らなくていいんですよ」

エレノアの慈母のような声が近藤の傷ついた体にしみこんでいく。

「私にはこんなことしか出来ないけど、それでもあなたの心休める場所にはなれるよ」

フェイトの愛し慈しむ声が近藤の弱りきった心を包み込んでいく。

近藤はおもわず泣きそうになった。

こんなことで涙が流れそうになるとは、相当まいっているな・・・。

近藤は目を瞑りわずかに笑う。

「・・・ありがとう」

近藤は精一杯の感謝を込めて礼を言い、空を見上げた。

夜空には雲一つ無く、数多の星々が煌めく。

空に浮かぶ月は光を落とし、３人を明るく照らす。

降り注ぐ月と星の光は、３人を優しく見守るようだった。

# 第７０話（後書き）

近藤　「はやて隊長、また何か着ましたよ」

はやて　「・・・その手に持ってる紙か？」

近藤　「いえ、あまりにも大きいものがあるので、リストアップしてきました」

はやて　「・・・嫌な予感しかせんなぁ・・・まあええ、とりあえず読んでいって」

近藤　「トッキーさんから『デス・スター』『スーパー・スター・デストロイヤーの大艦隊』『グリーヴァス将軍』『超巨大戦艦ヴォルケンクラッツァー』『超巨大戦艦ルフトシュピーゲルング』をいただきました」

はやて　「ひとつ言うてええかな？」

近藤　「はい、なんでしょう？」

はやて　「全部質量兵器やないかあぁぁぁっ！！こんなもん持っとったら私等の手が後ろに回るわ！！」

近藤　「ですよね～」

はやて　「送り返せ！！もちろん着払いや！！」

近藤　「わかりました。あと、虚空さんから個別にいろいろきてま

すよ」

はやて　「・・・そっちは大丈夫なんやろな・・・」

近藤　「俺宛には『医療機具一式』『　オロナミンC　1ダース』『　黒スーツ』『　無限プチプチ君』ですねありがたく使わせていただきます」

なのは　「・・・無限プチプチ君？」

近藤　「あれですよ、梱包するときのぷちぷちするやつ、あれの無限版ですね」

なのは　「あ、それ私持ってるよ、『ツンデレバージョン』」

はやて　「ツンデレバージョン！？なんやそれ！？」

なのは　「あ、見せたほうが早いね。見ててね」

プチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチ

変態！プチプチプチ・・・

はやて　「・・・え？」

プチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチプチ

どこさわってんのよ！プチプチプチ・・・

はやて　「・・・なのはちゃん？それおもろいか？」

なのは　「え？まあ、くぎゅのツンデレがお手軽に聞けるからね」

はやて　「・・・くぎゅって・・・」

近藤　「くぎゅとは『釘宮理恵』さんのことです」

はやて　「しっとるわ！」

近藤　「次はフェイト隊長宛ですね」

フェイト　「え？私？」

近藤　「ウェディングドレス　と指南書『新婚生活を楽しくする方法』　『楽しい子供の作り方』です」

フェイト　「もう！気が早いなあ！！いや～ん！」（バシバシ！！）

近藤　「フェイト隊長、背中叩かないでください。めっさ痛いです」

はやて　「『楽しい子供の作り方』・・・エロ本か？」

フェイト　「あ、この本は必要ないかな？」

なのは　「え！？まさか、すでに！？」

近藤　「いやいやいやいや！」

フェイト　「エイミィから色々聞いてるからね！」

はやて　「な、な～んや・・・ほっ」

フェイト　「たしか麻縄１０メートルと猿轡（さるぐつわ）を・・・」

はやて　「待て待て待て待て！？」

なのは　「ストーップ！ピピー！！イエローカード！！」

ヴィータ　「お前、自分の立場考えて発言しろよ！？」

フェイト　「えぇ！？でもエイミィはクロノといつもそれ使って・・・」

シグナム　「言うな！それ以上いうなー！！」

近藤　「あ、ティアナにも来てるぞ」

ティアナ　「え！？私にですか！？」

近藤　「えーとな・・・指南書『目指せ！　側室！』　『諦めたらそこで試合終了だ！』　だな」

ティアナ　「早速熟読します！！・・・これで・・・」（チラチラ）

近藤　「ん？なんだティアナ、俺の顔になんか付いてるか？」

フェイト　「側室・・・ティアナ、ちょっとアースラの倉庫裏に行こうか？」

ティアナ　「え？え！？えええぇぇぇぇぇっ！？」

近藤　「・・・まあ、あれは放っておきましょう。あとは皆宛に『時しぐれのロールケーキ』だな『本格派こだわり醤油煎餅と玉露』もあるが・・・」

スバル　「ゴチになります！」

エリオ・キャロ　「いただきます！！」

シグナム　「その煎餅、私がいただこうか」

ヴィータ　「おお！シグナムの目が光っている！！」

近藤　「あと、クロノ宛のものもあるんですけど・・・」

はやて　「ああ、そうなん？じゃあ送ったったら？」

近藤　「いや、実はこれなんですよ・・・」

はやて　「偽螺旋剣　ゲイ・ボルグ　ゲイ・ホリアルク　ストナーサンシャイン　メテオ　超級武神羅斬　スーパーノヴァ　タンホイザー　エクスカリパー　エクスカリバー　死ね死ねミサイル　ツインバスターライフル　ツインサテライトキャノン（武器は全て攻撃

対象クロノ）　指南書　『空気を読め！』　『妻子に愛想をつかれない方法』　『マザコンは病気』　『シスコンも病気』・・・なんとまぁ・・・」

近藤　「どうします？」

はやて　「・・・シャーリー！この段ボール箱クロノ君宛で送ってくれるか？あ、中身は見たらあかんで。一応機密関係やからな、われもの注意だけ気いつけてくれるか？たのむでー！」

近藤　「・・・おれ知りませんよ」

はやて　「・・・まぁ、このあとがきは基本ギャグやから死にはせんやろう・・・」

近藤　「・・・あ、ええっと、後ですね、コジロウさんから『管理外の無人世界』をいただきました」

はやて　「なんとも太っ腹！！」

ヴィータ　「おおー、太い腹、太い腹！」

はやて　「ヴィータ、それは褒めとらん。あと、口の周りのクリームとりや」

シグナム　「９０％が水で被われた惑星で小さなコテージ付きか。・・・ハネムーンにもってこいだな」

はやて　「・・・シグナム、どうやったらほっぺに煎餅のカスがつくんや？」

近藤　「さて、今回でひと段落しました。次回は俺が反撃を開始します！」

はやて　「今ちょうど書いとるとこやな。実はちらっと内容見たんやけど・・・」

近藤　「・・・なにかありましたか？」

はやて　「近藤さん・・・あんた悪魔やなあ」

近藤　「いやいや、悪魔はなのは隊長でしょう？」

なのは　「近藤さん！私は悪魔じゃないもん！！」

近藤　「というわけで、次回をお楽しみにー」

なのは　「私は悪魔じゃなーい！！」

## 第７１話（前書き）

すいません。
実は、ゆりかご戦まできちんと書いてから一気に投稿しようと思ってたんですが、なにやら難産になりそうな予感なので、とりあえず「近藤の逆襲」をお送りしたいと思います。

これでスッキリするかどうかはわかりませんが、近藤のねちっこい性格がわかると思います。

あと、知っている人は知っているネタを参考にしています。

では、ご覧ください。

# 第71話

地上本部襲撃から三日後、はやては一通のメールに腰を抜かした。

おもわず座っていた椅子から転げ落ちるほどに。

見間違いかと思い、もう一度メールを見る。

・・・

・・・・・・・

「・・・・・・・はぁぁぁぁっ！？」

口をあんぐりと開けすぎて、ギャグ漫画のように顎が外れるかと思った。

一体何の冗談だ？

いくらなんでも無茶苦茶だ。

これは本人に問いただされないといけない！

はやては速やかにメールをプリントアウトし、猛ダッシュで向かった。

スバルとエリオも無事退院し、１０８部隊の隊舎へ来た。
二人は近藤を見るなり泣き叫び、抱きついてきた。
キャロもエリオ達と共に近藤に抱きついた。
皆記者会見を見ていたようで、近藤は宥めるのに一苦労した。

そんな和やかな空気のなか、ドドドドという地響きがする。
はて、なんだ？
近藤は地鳴りのする方向を見た。

はやてが猛スピードで近藤に向かって走ってきていた。
こめかみに青筋を浮かべ歯を食いしばる顔は、まさに鬼気迫る表情である。

「どおおぉぉいぃうぅことやあぁぁぁっ！！」

ドップラー効果ではやての声が近付く。

だが、はやてはどうも止まることを考えていないようで、減速することなく突っ込んでくる。
このままでは近藤に抱きついているスバルやエリオ、キャロが怪我をしてしまうので、近藤は三人を自分の後ろにやり、猛突進してくるはやてをガッチリ捕まえた。

凄まじい突進力だ。
相撲取りのぶちかましにもヒケをとらないだろう。

ごっつぁんです。

「そんなに慌てて、どうしたんですか？」

近藤ははーはーと肩で息をするはやてに質問した。

すると、はやては目をカッと見開き紙を一枚近藤の鼻先に突き付けた。

「なんやこれは！？説明してもらおか！近藤さん！！」

近藤は少し身体を後ろに反らし、紙に書かれている文字を見た。

「ああ、来たんですね」

「ああ、来たんですね、やあるかあああぁぁっ！！」

近藤の飄々とした態度とは裏腹に、はやては焦りまくっている。

はやては思わず自分の履いているパンプスで近藤の頭を叩いた。

バコンと鈍い音がした。

硬い靴の裏で殴られたため、近藤は頭を押さえ、うずくまった。

「・・・ちょっ・・・マジで・・・痛いんすけど・・・」

苦しそうな声を出す近藤の後ろではスバルやエリオ、キャロが「うわぁ」と声を漏らしていた。

そんなはやての叫び声を聞き付けた機動六課メンバーのなのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、ティアナは、ゾロゾロと集まる。

前線メンバー集合である。

「なんだ?何かあったのか、はやて?」

ヴィータが代表してはやてに聞く。
すると、肩をプルプルと震わせていたはやては、ヴィータに持っていた紙を渡した。

「ん?辞令?・・・・・・・・っっ!?・・・・っっ!?」

ヴィータは紙に書かれている字を見た途端、口をパクパクを開けながら紙とはやてを交互に見て、声が出ないくらい驚いていた。

「なに?何が書いてるの?」

なのはとフェイト、シグナムがヴィータの後ろから盗み見した。
そして紙の内容を知ると、三人とも目を見開き、近藤を見た。

「・・・!?・・・!?」

三人とも声が出ていない。

はやてがピクピクと顔を引き攣らせ近藤に詰め寄り、こう言った。

「さあ、説明してもらおか?近藤大輔『元帥』!!」

「・・・・・・ええええぇぇぇぇっっ!?」

フォワード達の叫び声が、１０８部隊に響き渡った。

１０８部隊の大会議室に、前回の記者会見前に集まっていた将官、提督等と、更に近藤の辞令を見て抗議しに来た将官達が集まり、モニタがズラリと近藤を囲むように展開する。
近藤の隣にはエレノアが立ち、二人とも済ました表情をしていた。
モニタの人物達は前回参加していた将官と提督である。
その中にレジアス中将の顔もあった。
皆一様に驚き、怒りの顔をしている。
バイパー少将やハマー中将、クロノでさえ目を点にしていた。
ただ、三提督だけがすました顔をしていた。

近藤と一緒に出席していた機動六課の隊長、はやて、なのは、フェイトそして副隊長のシグナム、ヴィータは部屋の隅で待機しありえない顔ぶれに緊張しまくっていた。
なにせ、名だたる将官や提督が顔を揃えているのだ。
その数４０人。
管理局全体の約半分の将官、提督がそろい踏みなど、そうあるものではない。

「・・・これはどういうことですかな？」

ジョンスー・アリスト少将が三提督を睨む。
睨むと言っても、肥え太った頬が目を圧迫し、細目のようになっていて怒っているようには見えない。

「入力ミスとは・・・ははっ、かの三提督にしては珍しいですな」

別の提督が冗談めかして笑い声をあげた。
それにつられ、他の出席した将官や提督から笑いが起こる。
だが、ミゼット・クローベル幕議長は真顔で反論した。

「いいえ、入力ミスではありません。彼は正式に『元帥』となったのです」

「ふざけるな！！」

猿のような顔をした人物が顔を真っ赤にして声を荒げた。

「この男は三等陸尉だ！前回の交渉で二階級昇進させると言ったから、一等陸尉のはずだ！！」

「まさか、この男の隣にいるデバイスの階級と勘違いしているのでは？確か、エレノア・K・アルファード『大将』でしたかな？」

「ふん、デバイスごときに大将とはバカバカしい」

言いたいことを言い、ざわつく会議室の中、近藤とエレノアは表情一つ変えず前を向いていた。

「大体、どういういきさつかは知らんが、何の実績もない者が大将など出鱈目にもほどがある！」

カエルのような顔をした将官が机をダンッと叩く。
すると、ラルゴ・キール栄誉元帥が冷たい視線を送り、自分の持つカードを切った。

「実績？実績ならあるさ」

そういうと、何かデータを送信し皆に見れるようにした。

「本来、彼は大将になれる程の実績、功績があった。だが、こちらの都合で一時大将職に就くのを待ってもらっていたのだ。だが、大将が抜けるのはよろしくないということで、彼のデバイス、エレノア君に代理を頼んでいたのだよ」

キールが言っていることは嘘である。
本当は、ただ単に近藤が大将に就くことを拒否したため、なんとか近藤を逃がさないための急場措置としてエレノアを大将としたのだ。
だがそんな事情を知るものはいない。

そして、キールが提示した『近藤の実績』のデータを見て一層ざわつきが大きくなった。
なのは達もその『近藤の実績』を見て目を丸くしていた。

「『バーネットファミリー』を壊滅だと！？あの大組織をか！？」

「待て待て、『ゴッド・スピード』殲滅！？巨大テロ組織だぞ！？」

「死の商人『ブレンハイム商会』の殲滅、ネットワーク摘発・・・」

驚くべきは全て別次元の管理局の敵対組織の壊滅、殲滅の報告だった。
しかも、確かにそれらは全て本当に壊滅、殲滅しているのだ。

「こ、こんな大組織を尽く潰せるわけが・・・」

「ならば、それ等の組織を壊滅、殲滅した部隊や主要人物を知っているか？」

キールがそう言うと、皆口をつぐむ。
確かに組織の壊滅という報告は聞いていたが、誰が、どこの部隊か等はいちいち覚えていなかった。
彼等は自分の昇進や保身ばかりに躍起になるあまり、近藤などという特に目立たない人間の情報など覚える気はサラサラなかったのである。
もしこれがなのはやはやて、フェイトが行った事ならば、彼等も記憶に留めていただろう。
しかし、近藤など目立つ実績が無い。
だが、ここでキールが提出した近藤の実績は、正式書類には近藤の名前が書かれていない。
ここがミソである。

「そこに書かれている危険と判断された組織を壊滅したのは、ここにいる近藤君とエレノア君だ。この二人だけで全て任務を遂行してもらった」

「なっ・・・！？」

驚きのあまり、反論することも忘れて近藤とエレノアを見る将官や

提督達。

「まだあるぞ、古代の質量兵器の発見、封印が２０件。Ｓ級ロストロギアの発見、封印が１３件だ。あとこまかいのを上げればキリがない」

ズラーッと羅列される近藤の功績。

将官達からは声がでない、いや出せない。

何故なら、それ等質量兵器の発見やロストロギアの発見に関しても『聞いていた』からだ。

キールはあえてこの報告書類に近藤やエレノアの名前を書かず提出していたのだ。

これは近藤の要望によるものである。

普通、任務担当者の書かれていない報告書など受理されない。

だが、この任務は『最重要機密』扱いとされ、担当者氏名を非公開にするという名目で書かれず提出、受理されたのだ。

それをこいつらは、『誰が』発見したかは知らず、『何を』発見したかということしか情報が無いことに疑問すら持たず、情報開示すら求めなかったのだ。

まあ、求めたとしても受理される事はない。

アリスト少将が焦りを隠そうともせず、なんとか言い訳を探そうとオロオロする。

脂でテカテカの顔が大量の汗でよりテカテカと光る。

「こ、こんなもの・・・な、何故今まで報告していなかった!?こんな功績があるとわかっていれば・・・」

あんな条件認めなかったのに。

アリストはボタボタと汗を机に落しながら口ごもった。

条件を認めようが認めまいが、近藤が『大将』であるという事実は変わらないが、今のアリストにはそこまで頭が働かない。
そこへ、レオーネ・フィルス法務顧問相談役があごを撫でながらとんでもないことを言った。

「いや、スマンスマン。近藤君が任務を遂行したと報告するのを忘れとったんだよ。それに、近藤君に昇進の事を言うことも忘れとった！」

「歳はとりたくないですね～、最近物忘れが酷くて」

ミゼット・クローベル本局統幕議長はわざとヨボヨボの老人のような演技をした。
先ほどまでビシッとしていたのに、妙にリアルな演技である。

「いやあ、結構な任務に就いていたハズなのに、何も無いのでおかしいと思ってたんですよー」

「私もてっきりご主人様が大将に就く事を知っていると思って代理をしてたよー」

すごい棒読みの近藤とエレノア。

「いやいや、申し訳ない。近藤君には通達すらしていなかったか。寄る年波には勝てんなー」

「まあ、本来の大将から、君達の出した条件である昇進・・・二階級だったかな？それを足して極官の『元帥』というわけだ。本当は二階級だから元帥よりもう一つ上の階級だろうが、時空管理局には元帥以上の階級は無いからな。近藤君には元帥で我慢してもらおう」

ほっほっほっと笑う三提督と、ハッハッハッと笑う近藤とエレノアを見て、アリストは顔を真っ赤にして立ち上がった。

「茶番だ！こんなもの、無効だ！！」

鼻息荒くまくし立てるアリストに、近藤は段々イライラしてきた。

「自分はあなたたちのルールに従った。それを今更無効とは・・・あまりにも無責任で横暴ではありませんか？」

「ええい、やかましい！こんな茶番に付き合ってられるか！！」

アリストはもう聞く耳持たぬと無理矢理話しを切り上げようとした。

近藤はため息をつき、手元にコンソールを展開させ、何か操作をした。

すると、それぞれの将官や提督達の前に、新たなモニタが展開された。

「・・・なんだ、これ・・・・は・・・・！？」

顔を真っ赤にしていたアリストは、そのモニタを見た途端真っ青になった。

他の将官や提督も同様の反応である。

ただ、三提督とバイパー少将、ハマー中将、レジアス中将、他数人の将官や提督の前にはモニタが展開されなかったので、皆のその反応に疑問を持った。

「な、なぜ・・・これが・・・！？」

「こんな・・・」

口々にうろたえる将官や提督を見て、近藤はニヤリと笑う。

「先ほどキール元帥がおっしゃられていたでしょう。『都合により一時職を離れていた』と」

ギクリとするアリスト達。

「自分は機動六課へ異動する前は地上本部勤務でした。その時に調べたんですよ、『管理局の膿』をね。着服、横領、横流し、裏金、談合よくもまあここまでできるものだ」

近藤はヤレヤレと肩を竦め、より笑みを深める。
その暗い笑みに、アリスト達は顔をより青ざめさせた。
アリスト達の前に現れたモニタには、各々の不正が事細かく書かれていた。

「・・・こ、こここんなデマで脅迫か！？ふ、ふん！こんなもの、いくらでも・・・」

猿のような顔をした将官がうろたえながらも虚勢を張るが、近藤の言葉に打ちのめされる。

「データの改竄は不可能ですよ。自分が一律管理してますから。あ、無理にハッキングしたら自動的に情報が各マスコミに流れるようプログラミングしてますので。セキュリティ解除方法は、出現するコ

ンソールのランダムに配置されたキーを1分以内に１０２４文字入力すればいいんですけどね。ただ、失敗すれば流出しますよ」

「そんな解除方法無理に決まっているだろう！！」

猿顔の将官が口角に泡をつくり、唾を飛ばす。

「いいえ、自分はできますから」

「くっ・・・くぅ・・・」

近藤の簡潔明瞭な返答に猿顔が百面相をする。

ぐぅの音も出ないようだ。

すると、カエルのような将官が何かに気づいた。

「・・・ん？ちょっと待て！この最後の部分はレジアス中将のものではないか！？」

そう言うと、皆一斉にモニタを凝視する。

「なんだこれは！これはレジアス中将がしたことであって、俺がしたことじゃないだろう！！」

「ふざけるなよ！他人の罪をなすりつけるな！！」

怒号が飛び交う中、近藤は呆れた顔をし、あからさまにため息をついた。

「何を言っているか意味がわかりませんな。それ等は全てあなた方のしたことでしょう？」

近藤がそう言うと、一層反論の怒声が飛ぶが、一部の将官や提督は近藤の言っている意味がわかり、顔を蒼白にした。

「わかっておられない方々に説明しましょうか？あなた方がおっしゃるレジアス中将の罪とやらが、どうしてあなた方のところにあるのか？」

近藤の笑みが深く、濃くなる。

「二日前あなた方が取り合いしていたじゃあないですか。その『罪』とやらを」

あっと声を上げる将官、提督達。

「『今の』レジアス中将は清廉潔白、清く正しい方です。不正を働いた痕跡など何処にも見当たらない、でしょう？『あなた方がそうしたのだから』」

近藤の言っている意味がわかり、怒声が止む。
代わりに、モニタ越しに顔を真っ青にした将官や提督達がズラッと並んだ。

「この二日間で”何の障害もなく”、”スムーズに引き継ぎ”ができたでしょう？」

近藤がここまで言って、ようやく皆理解した。
おかしいと思ったのだ。
レジアス中将は絶大な権力を握っているから、その人脈やパイプなども相手は相当の権力者である。

そういう繋がりはバランスや対等関係を好ましい。
利用し、利用されるのだからそれは当然だろう。
だが、ここにいる将官や提督達はお世辞にもレジアスより権力があるとはいえない。
それなのに滞ることなく、スムーズに事が運び、二日という驚異的なスピードで無事引き継ぎが終わり、レジアスの代わりにすんなり納まった。
おかしいと思いながらも、手に入れた力に酔いしれ考えるのをやめた。

つまり、近藤が全ての引き継ぎを円滑に進めるために裏で手引きしていたのだ。

将官達は近藤やレジアスを利用しようとして、逆に利用されたのだ。

はめられた。

アリストが福々しい笑顔を鬼のような形相に変えた。
顎と頬の肉がぶるぶる震え、汗が飛び散る。

「貴様あぁぁぁっ！！」

アリストの怒声などなんともないので、近藤は飄々としている。
横ではエレノアが欠伸をしていた。

「儂等にこんなことをして、ただで済むと思っているのかあぁぁっ！！」

唾を飛ばし、口の端に泡をつくり怒り狂うアリストに対し、近藤はこう言った。

「そりゃこっちの台詞だデブ」

「な・・・デ・・・！？」

急に近藤の口調が変わり、アリストは驚き、怪訝な表情をした。
だが、後ろで聞いていたなのは達にはわかっていた。

ああ、近藤さんがキレた、と。

「お前等自分の立場わかってるか？弱み握ってんのは俺なんだぞ？俺の手の平の上で遊ばれてんだよ。なに踏ん反り返ってんだよ。俺がボタン一つ操作すればお前等の人生終わりなんだぜ？」

「そ、そんなもの、儂等の力があれば・・・」

アリストが虚勢を張り、なんとか近藤より優位に立とうとする。

「言っとくが、管理局はあんた等を一切擁護しない。元帥の俺がさせない。・・・そうだな、法的措置なんか生温いか・・・そうだ、隔離世界にぶち込むって手もあるか」

近藤は、法的措置も取らせず、人間として世間から抹消させるつもりだった。
それを聞いた他の将官達は慌てた。

「ま、待ってくれ！な、何が望みだ！？」

それを聞いた近藤は指を二本立てた。

「選択肢1、生存をこの世から抹消、選択肢2、不正を公表して逮捕」

「・・・き、君と共に管理局復興にこの身を捧げよう！」

「いらねーよ、お前等みたいなクズ」

将官達の提案に対し、心底嫌そうな顔をする近藤。

「じゃあ、最大の譲歩だ。お前等全員管理局やめろ。いやなら捕まるか、死ね」

近藤がダイレクトに『死ね』と言い出した。
三提督やなのは達は、あまりの直球に冷や汗を流していた。
横にいるエレノアもさすがにドン引きである。
近藤がここまで言っても、将官や提督達はどうにかして生き残ろうと（いろんな意味で）必死に頭を働かせる。

こうも往生際が悪いと、逆に感心する。
なんとしても今の地位にしがみつきたいようだ。

必死にあれこれ言い訳や妥協案を考えているハイエナ共を見て、レジアスは笑いを堪えていた。
バイパーやハマーはあまりの見苦しさに、頭痛によって眉間を揉んでいた。

そして、近藤から離れた位置で一部始終を見ているなのは達は唖然としていた。
そして、ポツリとはやてが呟いた。

「あー・・・フェイトちゃん、私が思っとること言うてええかな？」

「ダメ。何が言いたいかわかってるけど口に出しちゃダメ」

フェイトは即答ではやてを封じた。

仕方ないので、近藤は更なるカードを切った。
頭をガシガシかきながら、面倒臭そうに言う。

「あー、仕方ないな・・・おい、アンタ、そうアンタだ、マイケル・チャージャー准将」

マイケル・チャージャー准将と呼ばれたのは、猿顔の男だ。
いきなり名指しされたので、チャージャーはうろたえた。

だが、チャージャーはこれからもっとうろたえることになる。

いや、とてつもない恐怖が待ち受けている。

「アンタには一人娘がいたな。名前はジェシー・チャージャー、今年7歳になるか」

近藤はいきなりプライベートなことを語りだした。
チャージャーは近藤が何が言いたいのかわからず、首を捻る。

「高齢での初子だ。かわいくて仕方ないだろうなあ」

近藤はそう言いながら、ポケットから携帯端末を取り出し片手に持ち、上に放り投げて遊ぶ。

「たしか今日は社会見学で菓子メーカーの工場を見学してるんだったかな？」

「・・・な!?」

何故そこまで知っている!?
チャージャーは顔を青ざめさせ、ゴクリと唾を飲み込む。

「あー、もしその工場が爆発なんかしたら大変だよなぁ？」

「・・・はあぁぁっ!?」

チャージャーは思わず奇声を発した。
近藤はそんなチャージャーに構わず、相変わらず携帯端末を放り投げて弄ぶ。

「ああ、心配だなあ。もしこの端末にその爆破スイッチがあったり

したら大変だよなあ？」

近藤は携帯端末をポンポン放り上げる。
チャージャーは顔を蒼白にし、近藤を睨んだ。

「貴様・・・！！」

ギリッと歯ぎしりする音が響く。
いつの間にか会議室はシンと静まりかえっていた。
近藤はチラッとチャージャーを見る。

「で？どうすんの？辞めるの？逮捕されるの？死ぬの？」

チャージャーは俯き、震える。
そして、声を絞り出した。

「・・・・・わかった。管理局を・・・辞める」

言い終わるや、机をダンッと叩くチャージャー。
そして、それを見て顔をいびつに歪め笑う近藤。

他の面々は近藤とチャージャーのやりとりを見て、唖然としていた。

「・・・近藤君、えぐいな・・・」

バイパーも思わずそう呟いた。

「さて、次は・・・ああ、アンタにしよう。カエルみたいな顔したアンタだ、トミー・フリーダ提督」

カエルのように目が離れ、口が大きく、ひらべったい顔をしたトミー・フリーダ提督は名指しされ、ビクッと体を震わせた。

「アンタは愛妻家で、おしどり夫婦でも有名だな?」

近藤がそう言うと、フリーダはコクりと頷く。

「美人な奥さんだよなあ?アプリコットさんだっけ?」

近藤はまた携帯端末を放り上げ弄ぶ。

「今日の習い事は料理教室だったかな?」

フリーダは顔を真っ青にした。

「今日習う料理はシーフードドリアとシフォンケーキでしたか?ああ美味しそうだ。あなたのために、おいしい料理をつくるために。いやはや、まさにおしどり夫婦だ」

近藤の手の平で携帯端末がくるくる回る。

「そんな料理教室の帰り道に『凶悪犯罪者と出くわしたら』大変でしょうなぁ」

フリーダは顔を真っ赤にして近藤に向けて怒鳴る。

「この卑怯者っ！！」

だが、そんな怒声も近藤にはなんの効果もない。

「卑怯？いえいえ、俺はただ『可能性』を話しているだけですよ？ああ、もしかしたら俺がその凶悪犯罪者と繋がりがあって、この携帯端末のボタン一つで奥さんに危険が及ぶかもしれないと心配をしていますか？ハッハッハッ、そうですねぇ、その『可能性』はあるかもしれませんねぇ」

近藤は口を歪め笑う。
フリーダを嘲るように。
フリーダは大量の汗をかき、俯く。
彼の机の上には汗の溜まりができていた。
強く拳を握り、体全体が悔しさで震える。
そして、絞り出した答えは・・・

「・・・管理局を・・・辞める・・・！」

こめかみに血管が浮き出る程憤慨し、フリーダは陥落した。

近藤は目をつむり、フンと鼻を鳴らし肩を竦めた。
そして、また顔を青ざめさせている将官や提督達を見る。

皆一様に考えていた。
この男は自分の大切な肉親を盾にして脅迫している。
自分への仕打ちならばなんとか乗り切れる手があるかもしれない。

だが、家族は何も知らない。
自分の肉親が汚いことをしている、手を出しているということを。

家族は何も知らない。
そのせいで自分が狙われているということに。

彼等にとって、近藤の魔の手から逃れる術はない。
ならば、家族を守る為に自分を犠牲にするしかないのだ。
いや、もしかしたらもっといい方法があるかもしれない。

しかし、近藤はそんな時間を与えない。
近藤の持つ携帯端末のボタン一つで命が左右される。
それが本当かどうかわからない。
だが近藤を見ていると、それが本当なんだと、思わされる。

何故か、この男ならやりかねないと思ってしまう。

管理局を辞めるか

逮捕されるか

死ぬか

自分達にとってハイリスクであり、ノーリターンな選択。
近藤の歪んだ笑みが、悪魔のように見える。

残酷で、容赦なく、退路など用意させない、あるのは用意された三択だが、それらが行き着く先は全て絶望と破滅への一本道。

そんな絶望にうちひしがれている中、アリストだけはまだ余裕があった。

アリストには家族はいない。

守るべきものはないのだ。

だから、近藤の脅迫など不正暴露だけである。

アリストにはこの難関を乗り切る自信があった。

たとえ逮捕されようと、アリストにはまだ近藤に知られていないコネクションがある。

アリストは近藤が提示した自分の不正一覧の中で『それ』が無いことに気付き、内心ほくそ笑んだ。

今のうちにいい気になっているがいい。

だが、お前が逃した私のコネはお前にとって致命的だぞ。

たとえ逮捕されようが、直ぐに出てくる。

そして、お前を引きずり落とし、今度こそ私が権力を手に入れるのだ！

「そうだな・・・次はアリスト少将、アンタにしよう」

近藤はおもむろにアリストを指差した。

「・・・えっ？」

アリストは驚く。

自分には近藤に屈服する弱点などない。
それなのに、近藤は自分を指名してきた。
頭の中が混乱してきた。
だが、アリストは思い知る。
近藤の慈悲のかけらもない一手に。

「あんた、今安心してただろう?自分には脅迫される肉親がいない、てな」

そう言うと近藤はパチンと指を鳴らした。
すると、アリストの前に新たにモニタが展開された。
それは、何かの画像のようだ。

アリストはそのモニタを見た瞬間一瞬で顔を蒼白にした。
滝のように汗をダラダラと流し、盛り上がった頬と顎の贅肉がプルプルと震える。

「あんた、安心してただろう?自分にとっての一番の繋がりがばれていないって。そりゃそうだろうなぁ、『それ』がばれたら、『これ』もばれる可能性があるものなぁ?」

近藤はアリストの見る画像を指差し、また携帯端末を片手で弄ぶ。

「あんた・・安心してただろう。俺がこんな下衆なものまで調べてるとは思わなかっただろう?」

光の灯らない瞳がアリストを捉える。

「・・・・・あっ・・・こ、こんな・・・」

言葉もでないアリストは、ありえないくらい体をガタガタ震わせていた。

「さぁ、もしその画像が全世界に流されたらどうなるのかなぁ？」

アリストの、ポマードでべたべたに固めてオールバックにしていた髪が前に垂れ下がり、ワカメのようにベッタリと額に張り付いている。

アリストは驚愕のあまり、口の力が抜け涎を垂らしていた。
そして、視点の定まらない目で近藤の方を見る。見てしまった。
そう、見てしまったのだ。

近藤の

蔑んだ

侮蔑の篭った

汚物を見るような

家畜か飛び回る羽虫を見るかのような

冷たい視線を。

アリストあまりのショックには口から泡を吹き、白目を剥き、そのまま失神してしまった。

アリストが失神してしまったのを確認すると、近藤はまたフンと鼻を鳴らした。

近藤はモニタを周巡する。
皆一様に顔を青ざめさせているか、怒りに顔を歪めている。

「さて、不正を働いた他の皆さんはどうですか？これが最期通告です。管理局を辞めるか、捕まるか、死ぬか」

さあ、どうしますか？

近藤は両手を広げ、答えを待った。

# 第７１話（後書き）

近藤　「はやて隊長・・・また・・・」

はやて　「・・・またか・・・」

近藤　「しかも、あまりにも大量のため、前後編に分けます」

はやて　「・・・次もあるんか・・・」

近藤　「デストロイ編とその他編、どっちからしますか？」

はやて　「デストロイってまた物騒なタイトル！そしてもう一つはザックリしすぎ！！・・・じゃあ、デストロイから」

近藤　「わかりました。では、リストを読み上げます

南無南無さんから、『皮鞭、イバラ鞭、鎖鞭、拷問の車輪、スパイダー、魔女の針、祈りの椅子、看守の槍、ワニのペンチ、鉄鋏、鉄仮面、拷問の車輪、石抱き、エクセター公の娘、鉄帽子・金輪、膝砕き器、火責め椅子、舟形木馬、拷問水車、ユダのゆりかご、魔女の楔、アイアンメイデン』

秋風さんから『核ミサイル』

ＧＤＧＤさんから、ヴィータ副隊長宛に『あら葉巻き？』

俺宛に『ヱルトリウム』

管理局上級幹部等の部屋に『プチ・リフレクトプラッタちゃん』×３００ほど

よ～ぜふさんから『バスターマシン３号』

虚空さんから『魔改造を施した義手（ＦＦ　ＡＣ　のバレットのみたいにガトリングガンに変形可能　弾は実弾と魔法弾どちらでも可）　黒いスーツ（防弾　防刃　加工済み）　紅いネクタイ』

クロノ宛に『マダンテ　ギガスラッシュ　ギガブレイク　ギガクロスブレイク　大地斬　海破斬　空破斬　アバンストラッシュ　ジゴスパーク　メラゾーマ　マヒャド　ベギラゴン　イオナズン　バギクロス　アルテマ　ファイガ　ブリザガ　サンダガ　メテオ』

コジロウさんから俺宛に『ガンバスターの鎧とジェネシックガオガイガーの鎧』

ヴィータ副隊長宛に『ゴルディオンハンマー』

黒鷹さんから『Ｎ２兵器・反応弾・縮退弾頭搭載型の光子魚雷・ビーム兵器・広域展開型魔法無力化フィールド装置・Ｔ－シリーズ・ＥＶＡシリーズ・スーパー宝貝（全７種）・ミストルティンの槍・ヴァジュラ・アスカロン・ソロモンの指環・クトネシリカ・グレートスピリッツ・五大精霊・シャマシュ・村正・パンジャンドラム・８０？列車砲・コンデンサトル自走砲・オカ自走迫撃砲・燃料気化爆弾・アルカンシェル・レクイエム・アークエンジェル級・宇宙戦艦ヤマト・ピナーカ・巨神兵・使徒（第１～１８）メカゴジラ・大怪獣詰め合わせ（ゴジラ・キングギドラ・モスラ・バトラ・デストロイア・ビオランテ・ガメラ・イリス・レギオン）東西ＮＢＣ兵器の詰め合わせセット（ツァーリボンバ・デイビークロケット・サンバーン対艦ミサイル・トマホーク巡航ミサイル・ピースキーパー大陸弾道ミサイル・トーポリ大陸弾道ミサイル・トライデント潜水艦発射弾道ミサイル・エボラウイルス・炭疽菌・天然痘・ペスト・ＶＸガス・サリン・マスタ―ドガス　ｅｔｃ，ｅｔｃ）』

・・・以上です」

ヴィータ　「おお！ドリル！ハンマー！！ありがてー！！」

クロノ　「・・・・」

はやて　「・・・・」

近藤　「・・・ヱルトリウム・・・ヤマト・・・アークエンジェル・・・なんで戦艦が多いですかね？」

はやて　「いや・・・それよりコレや。バスターマシン3号。これ確か中心部分て木星入っとるやろ？」

近藤　「長径８６９ｋｍ、短径４１５ｋｍ・・・月の４分の１・・・」

はやて　「ほんま・・・言うてええかな？アホやろ？なあ、アホちゃうか？」

クロノ　「いいぞ、はやてもっと言ってやれ！」

はやて　「こんなでかいもん作ってまで生き残りたいか！？」

クロノ　「え！？そっち！？しかもそれトップをねらえの批判だぞ！？」

近藤　「あとはですね・・・この・・・虚空さんと南無南無さんの・・・いくら質量平気はだめと言っても、これは・・・」

クロノ　「これ、僕死ぬよな！？なあ、死ぬよね！？」

はやて　「まあ、クロノ君の生死は置いといてや」

クロノ　「置くなよ！？」

近藤　「もう手に余りますね・・・」

はやて　「せやな・・・もうな、ＥＶＡとか使途とか怪獣シリーズとかな、世界崩壊するで？スカリエッティなんかこれに比べたら鼻毛やんか」

ヴィータ　「はやて、鼻毛言っちゃダメ。イメージ崩れる」

はやて　「こんなもん言わなやってられるか！鼻毛があかんのやったら〇〇毛や！」

近藤　「うおーい！？だめだめ！アウトアウト！！」

はやて　「・・・こんなんが次回もあるんか・・・胃に穴あくわ・・・」

クロノ　「ああ、ここの空間は心臓に悪い・・・そして頭皮にも・・・」

近藤　「クロノ、ほれ」スッ

クロノ　「・・・スカルプＤ？とリアップ？」

近藤　「まあ、な、頑張れ。な？」ポンポン

クロノ　「そんな憐憫の目で僕を見るなー！！」

## 第７２話（前書き）

はやて　「・・・なあ、言い訳する？」

作者　「・・・しますか？」

なのは　「まあ・・・ねえ・・・」

フェイト　「しても同じだと思うんだけど・・・」

はやて　「しゃあないな、はっきり言おうか。ぶっちゃけ結構前に７２話は出来てました。でも投稿する時間がありませんでした」

なのは　「でもその理由がねえ・・・」

作者　「社会人になるといろいろあるんです。飲みとか飲みとか飲みとか」

フェイト　「飲みすぎだよ。肝機能ダメにするよ？」

作者　「もうダメになってます」

はやて　「長生きせえへんな・・・」

# 第７２話

大半の将官や提督たちが退席したあと、会議室には近藤とエレノア、なのは達がまだ残っていた。

そして、まだ退席していない将官たちのモニタが７つ展開されていた。

そのモニタに映る人物は、三提督とバイパー少将、ハマー中将、クロノ、レジアスである。

三提督であるラルゴ・キール栄誉元帥は苦笑していた。

「近藤君、いくらなんでもやり過ぎではないかな？」

レオーネ・フィリス法務顧問相談役がキールの言葉に頷く。

「うむ、まさかあ奴等全員を辞職に追い込むとはな・・・」

ミゼット・クローベル統幕議長も呆れ顔だ。

「これから先、将官や提督が不足して大変になりますよ？」

そんな言葉に近藤は首を傾げる。

「何言ってるんですか？辞職させるわけないじゃないですか」

えっと声を出す一同に対し、近藤はこう言った。

「辞職したら退職金が発生するじゃないですか、もったいない。キッチリあいつ等の不正を公表して逮捕します。そして、二度と外界に出れないように法的に処罰します。ようするに社会的に抹殺します」

「・・・お前はあいつらに辞職を促した。そのことで取引が成立してるのではないのか？」

ハマーは冷や汗を流していた。
彼が冷や汗など何年振りだろうか。

「自分はあいつ等とそんな取引をした覚えはありませんね。ただ辞めるか、逮捕されるか、死ぬかを迫っただけです。あったとしても、そんな約束守る義理は微塵もない」

近藤はキッパリと言った。

「お、鬼だ・・・鬼がいる・・・」

クロノは顔を真っ青にして呟いた。

そして、近藤から離れた位置で一部始終を見ていたなのは達も冷や汗を流していた。

「フェイトちゃん・・・」

「・・・わかってる。だから言っちゃダメ」

なのはの問いに、フェイトはバッサリ切る。

「・・・なんつーか・・・」

「言っちゃダメ」

ヴィータの呟きにもフェイトはビシッと待ったをかける。

「どっちが悪いのかわからんな・・・」

「言っちゃダメだよ！」

シグナムの呟きにキレるフェイト。

自分もそう思っていただけに、フォローなどできない。

というか、あのやり取りを見ていたら、近藤の方が悪のような気がしてくる。

とてもではないが近藤を応援する気になれない。

自業自得とはいえ、あの将官や提督たちに同情さえしてしまった。

家族を盾にされたら、普通の神経の人間なら折れるしかないじゃないか。

そして、改めて思った。

本当に容赦無い精神的な責めに、近藤を敵に回す事のリスクがとてつもなく大きい事を実感したのだった。

そんな皆が顔を真っ青にしたり、目を点にして驚いていると、何処からかクスクスと笑い声が聞こえてきた。

それは、俯いて肩を揺らしているバイパー少将と、レジアスからだった。

「くくくくく・・・・アーッハッハッハッ!!」

我慢出来ず、大笑いしだしたバイパーとレジアス。

皆唖然と二人を見つめる。

「いい!いいぞ!私も『氷の女王』なんて呼ばれているが、君は私以上だ!!まさに悪魔だな!!」

「ハイエナ共のあの顔!儂はこんな痛快な気持ちになったのははじめてだ!!」

二人は近藤を絶賛する。

そんな近藤は、恭しくお辞儀した。

バイパーは目に涙を溜めながら腹を抱えて笑い、レジアスも机をバンバン叩きながら大笑いしていた。

「はー・・・、君が私の下に就かないのは残念だが、そんな君だからこそ頂点は相応しい!!」

バイパーはひとしきり笑うと、真面目な顔になり近藤に向かって敬

礼をした。

「これから宜しくお願いします、近藤元帥殿!!」

「こちらこそ、宜しくお願いします」

近藤は、バイパーの迫力ある敬礼に対し、堂々と答礼する。

「ふむ、新しい波か。よかろう、新時代を受け入れよう。だが覚えておけ、お前があいつ等のように道を外れたら、儂は容赦無くお前を潰すからな!」

レジアスは笑うのを止めると、覇気を纏い近藤に忠告した。

近藤はそれを笑顔で受け入れた。

「ええ、肝に命じておきますよ」

そしてレジアスはニヤリと笑い、敬礼した。

「近藤元帥に敬礼!!」

レジアスの覇気のある敬礼に、近藤は力強い答礼を返した。

そして、バイパーとレジアスは退席した。

「・・・あの二人が認めるか。面白い、お前の力、見届けてやろう。」

ハマー中将も敬礼し、最後に人懐っこい笑顔で退席した。

猛スピードで進んでいく事態についていけない六課の面々は、いち早く事を理解したはやての質問で現実に引き戻された。

「・・・あ、あの、質問なんですが、近藤さ・・・元帥が就任したら、キール元帥はどうなるんですか？」

なのは達はハッとした。

元帥とは、管理局のトップである。

それがキールと近藤の二人になるのはまずいのではないか。

すると、キールがあごひげを撫でながらカカと笑った。

「勿論辞職するよ。まあ、当分は近藤君をサポートするがね」

キールが引退を宣言したことで、なのは達がざわつく。

管理局黎明紀から支えていた人が退くというのだ。

やはり、ショックは大きい。

だが、キールはそんななのは達を見てまたカカと笑った。

「いつかは管理局を退くことになっていたのだ。それが儂の場合今だというだけなのだよ。儂は次代を任せることのできる者ができて安心しているよ。いやはや、やっと肩の荷が下りたよ。これからはハニーとゆっくりできる！」

「ハニー？」

なのは達はキールから出た変な単語に首を傾げた。
すると、エレノアがツツツと近付いてきて、一枚の写真を見せた。
そこには、キールと若い女性が仲良く写っていた。
キールがサングラスをかけ、年甲斐もなくアロハシャツを着て、女性とベッタリくっついている写真である。

「あのじいさん最近再婚したの。これが相手の人。たしか２０歳だったはず」

「えええー！？」

なのは達は驚きのあまり大声を出してしまった。
しかも、よく見るとどこかで見たことがある顔であった。

「・・・あ！たしかこの人教導隊にいたフォッサ・ランクス一尉だよ！・・・そういえば最近結婚して名前が・・・フォッサ・・・・キール・・・うわーっ！！」

なのはがまた奇声を発する。

「あかんあかん！これは犯罪やで！？」

はやてが取り乱す。

「しかも、妊娠３ヶ月」

エレノアがボソボソと新情報を提供する。
そしてさらに沸き立つなのは達。

「うわー!?完全にアウトでしょソレ!?」

フェイトがのけ反る。

「未だ現役とは・・・恐るべし」

「じいちゃんスゲーな・・・」

シグナムとヴィータは感心していた。

「犯罪ですってよ?キール?」

ミゼットがクスクスと笑う。

「フン、俺はうらやましくなんかないぞ!」

レオーネが鼻を鳴らしソッポを向く。

キールはこめかみに血管を浮き立たせ、顔をひく付かせていた。

近藤はガヤガヤと騒ぐなのは達をチラリと見遣ると、すぐに三提督に目を向けた。

「・・・さて、これからが大変ですね」

ミゼットが近藤に向けて話し出す。

「あなたの元帥就任の経緯説明は骨が折れますよ?」

そんなミゼットの言葉に、近藤は肩を竦めてみせた。

「なに、先程キール元帥がおっしゃっていた事をそのまま言えばいい。そのついでにあいつ等の不正を一斉検挙すれば事は済みます」

ミゼットとレオーネは苦笑いするが、特に否定することはなかった。
因みにキールは犯罪者と言われ、なのは達と言い合いをしていた。

「愛に年齢は関係無いだろう！儂とハニーの愛は本物だぞ！」

「ものには限度があります！」

「ヒクわ！もう三提督とか関係あらへん！ドン引きや！！」

「生まれて来る子供が、お父さんがおじいちゃんだったらショック受けますよ！！」

「いや、もしかしたらもの心つくころには、この世には・・・」

「ええい、やかましい！儂とハニーの愛に口出しするな！それと不吉なこと言うな！！」

「じいちゃん・・・もうビックリするの通り越して尊敬するわ・・・」

そんなやり取りを見ていたミゼットとレオーネはため息をついた。

「はぁ・・・私も引退してゆっくりしたいわ・・・。はやく後進が育たないかしら？」

「そうだな。ま、俺は近藤君になら元帥を任せてもいいとおもっているが、それでもやはり心配だな」

ミゼットは急に老け込んだような事を言い、レオーネは真面目に管理局の行く末を心配している。

「なんにしても、全てはスカリエッティを逮捕してからです」

スカリエッティという単語が出てきて、騒いでいたなのは達もピタッと止まる。

「スカリエッティは狡猾だ。恐らくまだ切っていないカードがあるはずだ。・・・君はスカリエッティに勝てるか？」

レオーネが目を細め、近藤を睨む。
なのは達は近藤の後ろでゴクリと喉を鳴らした。
そんな緊張感漂う中でも、やはり近藤はいつも通りで、ニヤリと笑う。

「ま、やるだけやります」

なんとも軽い返答である。
だが、そんないつも通りな姿だからこそだろう。
自然と皆から笑みが出る。

なのはやはやて、フェイトは改めて思った。
ああ、なんて安心するのだろう。

近藤は自分を大した人間ではないと卑下するが、そうじゃない。
近藤というドッシリと構えた大木があるからこそ、なのはやはやて、フェイトは後方を気にすることなく前に進む事ができるのだと。
悲観するのは誰でもできる。
だが、道を探し突き進む勇気はそうそう出せない。
闇を駆け抜ける勇気、
困難に立ち向かう勇気、
近藤の普段通りの態度はそんな勇気を押してくれる。
そう、この人についていけば安心だ、と。
何とかなるんじゃないかと、思えてくるのだ。

「まあ、正式な辞令通達とプレス発表をするのはこの事件が解決してからだな」

「そうですね。それに、今回参加していなかった将官や提督達、そして他の局員にも報告しなければ・・・ああ、休まる日もない」

ミゼットがよよよと泣きまねをする。
それを苦笑いで見るレオーネ。

そう、実は近藤はまだ正式には元帥ではない。
今のように混乱している状況の中、近藤を元帥に据え置くという大人事を行えば、さらに混乱を招く恐れがある。
そして、これが一番大きい理由なのだが、元帥となると現場に出ることはまず無い。
総大将というのはそういうものだからだ。

だが、近藤とエレノアの戦力はバカにできない。
三提督はエレノアの実力を身を持って知っている。
伝説とまでいわれた彼等でさえ、エレノアの力は理解の範疇を超えているのだ。
さらに、近藤とのコンビネーションや、そのほかの戦術には脱帽である。
そんな彼等の力を使わない手はない。
それに、これは近藤の希望でもある。

前線に立ち、この事件を処理したい。

お互いの利害と状況が一致しているのだから、反論も異見もない。

そして、レオーネとミゼットは直ぐに姿勢を正し、近藤まっすぐ見つめる。
キールも同じく近藤を真剣な表情で見る。
ピリピリとした空気が会議室を支配する。
そして、ゆっくりと言葉を発した。

「我等はあなたに管理局の未来託しましょう」

「我等は君を祝福する」

「我等は君を認める」

「近藤大輔元帥に敬礼！」

三提督が揃って近藤に向けザッと揃って敬礼をする。
そして、近藤もゆっくりと左手をこめかみまで持って行き、答礼をした。

「まぁ、全てはこの事件解決後の事ですがね」

近藤は苦笑し、三提督もフフと笑った。

これは喜ばしい事だと、フェイトは歓迎していた。
ただ、近藤の後ろでなのはやはやては曖昧な表情をしていた。

「・・・なに変な顔してるの？」

エレノアがはやてのなんともいえない表情に突っ込みを入れた。

「いや・・・なんちゅーか・・・いきなり極官とか無茶苦茶やし、さっきの追い込みも取り立てのヤクザみたいで全然味方する気になれんかったし・・・そんな人にトップまかせてええんやろうかと・・・」

「うん・・・今まで私達の隣にいた人がいきなり雲の上の人になったとか、荒唐無稽もいいところだよ。なんていうか、現実じゃない感じがして・・・」

至極まっとうな感想である。
やはり無理やり感は否めない。

「まあ、ご主人様も本当は大将になんか、まして元帥なんかなりたくはなかったもの。でもそういう流れになってしまった。仕方ないのよ」

まあまだ三尉だけどね、といい、エレノアはため息をつきながらも、笑顔で近藤を見つめていた。
そして、徐にニヤリと意地の悪そうな笑みをなのはやはやてに向けた。

「にゅふふ～、覚悟しなさいよ？やると決めたらご主人様はとことんやるからね。かなりスパルタだし」

「うっ！？あの・・・仲間のよしみで優遇とか・・・」

はやてが嫌な汗を流す。
それに対し、エレノアの返答は・・・

「無いわね。皆に分け隔てなく平等に、鞭を振るうわよ」

「・・・飴は？」

「あるわよ？世界と同じく、９９の試練に１の祝福をってね？」

エレノアの死刑宣告に、はやては肩を落とした。
そして、はやてはふと思い出した。

「あ、そういえば」

はやてが人差し指を立てた。

「近藤さ・・・元帥に質問があります」

「今まで通りでいいですよ、はやて隊長。というか、俺はまだ三尉ですしね」

言いにくそうに肩に力を入れて近藤に向いていたはやてに、近藤は苦笑いしながら今まで通りでいいと提案した。
はやては近藤の提案が有難かったようで、ホッと肩の力を抜いた。

「じゃあ今まで通りで。で、質問なんやけど、さっきアリスト少将に見せてた画像、アレ何？」

「ああ、私も気になった。アリスト少将アレ見て気絶したものね」

はやての質問に同意するなのは。
だが、それを聞いたフェイト、シグナム、ヴィータはあまりいい顔をしなかった。

「あの・・・やめたほうがいいと思うんだ、私」

「ああ、私も嫌な予感しかしない」

「あたしも同意見だ。はやて、考え直したほうがいいよ」

今まで、そうやって近藤のすることに突っ込みを入れて、いい結果があっただろうか？
・・・あまり無いような気がする。
おそらく、今回も多大なダメージを受ける可能性が高いのだ。
今日は色々精神的に負担が大きい日だった。
これ以上負担をかけたくない。

「・・・見たいですか？」

近藤は断りをいれた。

なのははそれで一瞬躊躇う。

だが、関西人の血が流れているはやてにとって、それはフリとなる。

芸人が池の端のほうを歩いていて「押すなよ！？押すなよ！？」と言っているのと同じである。

「・・・卑怯やな、近藤さん。そんなん言われたら見るしかないやないか！」

はやては拳を振り上げた。

「・・・わかりました」

近藤はコンソールを叩き、画像をはやて達の前に展開した。

そして、それを見た瞬間、全員が固まった。

エレノアも固まっていた。

どうやらエレノアも画像の内容を知らなかったようだ。

「・・・くうっ！？」

シグナムが即座に拒否反応を起こし、膝をついた。

「ほら見ろー！ロクなものじゃなかっただろー！！」

ヴィータが叫びながら画像から神速で離れた。

「うっ！」

「これは・・・ダメだよ」

フェイトとなのはが手で口を押さえる。

顔色も悪い。

「・・・気持ち悪い」

エレノアは汚物を見るような目で画像を睨んだ。

そして、発端たるはやてはというと・・・

「コレが美少年同士やったらアリやねんけどな・・・コレはないわ」

意外と冷静に分析していた。

顎に指を這わせながら、フムフムと頷くはやてを見たなのは達は、

はやてという存在にドン引きした。

画像には、アリストともうひとりのガチガチムキムキの男が裸で抱き合っていた。

ベッドの上で。

しかも、二人ともすごいいい笑顔なのだ。

なんか油なのか、汗なのか、二人ともテカテカしてるし。

よく見たら白いふんどしはいてるし。

なんか赤黒いバラが咲き乱れているし。

これはいわゆるホモ画像、もっといえばガチホモというやつである。

ちなみに、はやてのいう美少年同士はＢＬ（ボーイズラブ）という。

こういうのに耐性のないなのは達（大半の人間はそうである）は耐えられず、気持ちが悪くなったのだ。

「ま、そういうわけです。趣味は人それぞれだし、別にそれを否定はしません。が、こんな画像流出したら、アリスト少将は世間的に終わりですからね」

近藤はそう言いながら画像を消した。

「しかし、よくこんな画像発見できたな・・・。だが、これがコラージュだと言われて突っぱねられたらどうするつもりだったんだ？」

シグナムは感心しているのか、呆れているのかわからない表情をした。

「実は他にも持ってるんですよ、動画とか。試しに見ますか？」

「い、いや、いい！」

「お前あたしらを殺す気か！？」

シグナムとヴィータが即効で拒否した。

なのは、フェイト、エレノアも高速で首を縦に振っていた。

「・・・私は見てみたいな」

「はやてちゃん、ホント勘弁して！？」

「トラウマになっちゃうよ！？」

指をくわえるはやてに、すがりついて懇願するなのはとフェイト。

「そ、そうだ！不正リストといえば、クロノ君も出てたんじゃない？」

エレノアがアリストの話題を無理矢理変えようと矛先をクロノに向けた。

その瞬間、クロノは冷や汗をドバドバ流した。

「あ、こ、これは・・・だな・・・お、おい、近藤！・・・いや、近藤元帥殿！わかっていますよね？」

近藤に対し、クロノは下手に出て目で訴える。

言うな、絶対にバラすな、と。

近藤ははやてを見た。

そしてアイコンタクトする。

（あれはフリですよね？）

（うん、クロノ君お笑いがわかるな～。）

（じゃあ見せていいんですよね？）

近藤とはやては同時にコクリと頷いた。

皆の前にモニタが展開し、何枚かの画像が表示された。

「うわー！近藤ー！なにやってんだー！見せるなって言っただろう！！」

クロノが叫ぶ。
だが、近藤は首を傾げた。

「え？あれはフリだろ？」

「フリってなんだ、フリって！僕は芸人じゃない！！」

「クロノ？」

近藤とクロノが言い合っていると、冷たい声がクロノの名を呼んだ。
クロノは冷や汗を流しつつ、声のした方を見た。
そこには、冷たい目で、侮蔑を込めた目で、軽蔑するような目でクロノを見る妹、友人、友人の家族がいた。

「・・・アカンで、これは」

「最低、クロノ君」

「お前は思春期の子供か」

「こりゃ完全アウトだな」

「・・・うぅ・・・ち、違うんだ！ココに書かれているのは自然なスキンシップであって、他意はないし故意じゃ・・・」

クロノは弁解する。

だが、それをする度になのは達の視線はより厳しく、冷たくなっていく。

「今エイミィにこの画像送信したから」

フェイトが笑顔でクロノに言った途端、クロノは蒼白になった。

そして、同時にクロノに通信が入った。

エイミィからだった。

クロノはこの世の終りのような顔をした。

「・・・くっ、覚えてろよ、近藤ー！！」

そんな捨て台詞を言い、クロノは退席した。

「クロノ君・・・浮気はアカンで・・・」

近藤が提示したクロノの不正とは、局内での彼と女性局員との仲良く映っているものだった。

クロノは女性局員から人気がある。

あの童顔で、誠実な性格、提督という地位、こんないい物件を逃す手は無い。管理局の女性はいい意味で肉食系が多く、クロノを狙う女性は多い。

たとえクロノが妻子持ちであるとしても、だ。

だから、女性局員は多少過激なスキンシップでクロノに迫る。

少しでも振り向いてくれるように。

夫婦の絆にヒビを入れるために。

クロノは、そんな欲望まみれのスキンシップに、暢気に鼻の下をのばしていたのだ。

ようするに、クロノは女性局員の好意に甘えていたのだ。

いけないと自覚しながらも、まあ、向こうが来るんだし、仕事で仕方なくだしな・・・いいか！

エイミィにばれなければ！！

・・・まあ、男ならば、美人ぞろいの管理局員から言い寄られて断れるほどの聖人君子はそうそういないだろう。

クロノにとっての不運は、それが近藤にバレていたということだ。

エレノアは近藤に近付き、耳打ちした。

「ご主人様、鬼ですね」

それに対し、近藤はニヤリと笑うのみだった。

# 第７２話（後書き）

近藤　「やってきました後半戦！」

はやて　「来んでもええよ」

近藤　「とりあえずリストを読み上げましょう」

はやて　「あーあー、聞きとうなーい」

近藤　「エディルさんから　指南書『正しい拷問の仕方』『サルでもわかる毒薬の作り方』
　　フェイトさんにこちらを『浮気防止の方法１０８選』
ヘスティアさんからフェイトさんへ、天国のアリシアからの応援のメッセージカードです。
『近藤さんを幸せにして、フェイトも幸せになってね！』
遠峰シンさんからＣＤ『トライアングラー』
　フェイトさんにはアトリエシリーズに良く出てくる『生きてるナワ』を、
　鱸の丸焼きさんから、「ふたりエッチ全巻セット」を、
　テスタメントさんから『事象概念侵食存在』こと『道場因子』を、
　流浪人さんからオーリス三佐に『略奪愛系の本・・・参考書』を、
　剣　流星さんから、シャマル先生が設立した、デストロイ料理人ばかりが所属する料理研究会のメンバーが作った料理で、一口飲むだけでお手軽に臨死体験ができる『積尸気冥界波（せきしきめいかいは）スープ』を、

たれねこさんから、フェイトさんへ、『アダルトメイド服』を、

トッキーさんから、俺宛に『リポビタンD一箱』一足早い御祝儀で『三千万円』

皆さんに『生八つ橋』『抹茶バームクーヘン』を、ついでに、指南書『略奪愛は文化だ！～如何にしてあの人を奪い取るか？』『これであの人も骨抜き&メロメロ！！媚薬作成術』、

よ～ぜふさんから、ＹＡＨＯＯ！ショッピングのスイーツジャンル売れ筋商品ランキング1位の『まっ黒チーズケーキ』大量と、体重計を、

虚空さんから、俺宛に『リポビタンＤ　1ダース』『赤まむしドリンク　1ダース』『魔改造を施した義手（ＦＦ　ＡＣのバレットのみたいにガトリングガンに変形可能　弾は実弾と魔法弾どちらでも可）』『黒いスーツ（防弾　防刃　加工済み）』『紅いネクタイ』『式場案内』『グレーマレーヴ大聖堂での式の案内状』

フェイトさんには『黒のドレス』指南書『充実した夜の性活の手ほどき』案内状『結婚式は大聖堂で』『新婚旅行案内』『強力な媚薬』『キングサイズのベット』

ティアナには指南書『正室と側室が仲良くする方法』『夜の過ごし方』『安〇先生恋がしたいです』『チャイナドレス』

ＫＹと淫獣を除く全員には『悠久の古都　マク・アヌへの招待状』『季節のフルーツをつかったフルーツタルト』『匠のこだわり醤油煎餅＋緑茶』を、

コジロウさんから、なのは隊長宛に手紙とビデオです。

手紙『悪魔や魔王と呼ばれる訳、否定する前にこのシーンを見て胸に手を当てて考えなさい』

ビデオ『ティアナに砲撃かました後止めさすシー

ンが流れる』

黒鷹さんから、俺とフェイトさん宛に『上高地帝国ホテルでの結婚式と豪華客船クイーン・メリー2での世界一周新婚旅行』

オーリス三佐とドゥーエ二尉には『近藤さんとペアで行くディズニーランド・リゾートのフ―リパスチケット付き3泊4日旅行』と指南書『寝とり１００テック』『こうすれば奪える男の心　上中下』『結婚への道ライバルに勝つ方法　１０００のテック』『愛人と正妻のうまくいく付き合い方～コレがあれば家庭円満～』

女性陣営の皆さんに『杉野英実のアンブロワジー』『ピエール・エルメの黒トリュフ入りのビュッシュとマカロン』『神戸フランツの壷プリンとチーズケーキのセット』

第一部は以上です」

はやて　「第一部てなんや!?」

近藤　「72話を投稿するまでに新たに送られてきたんです」

はやて　「・・・迷惑な・・・」

近藤　「とりあえず吟味していきますか」

はやて　「やっぱりフェイトちゃん宛のが多いな。しかし、なんやねんアダルトメイド服て」

近藤　「脱がしやすいんです。あと、生地が少なくて、いろんな所に穴が開いてるので、色々差し込みやすいです」

はやて　「・・・近藤さん・・・それセクハラやで」

近藤　「文句は送り主の方々に言ってください」

はやて　「あとは・・・なんや本が多いな。しかも側室やら、寝取りやら・・・君等はこの物語を何処へ持っていきたいんや？」

ドゥーエ　「ふん、私に指南書ですって？舐められたものね」

はやて　「うわぁ！？いつの間に！？」

ドゥーエ　「近藤さんのいる所、何処でもいるわよ。ついでにオーリスもいるわよ」

オーリス　「・・・こ、この本はためになる・・・！！わ、私と近藤さんが・・・あう、鼻血が・・・」

はやて　「・・・ストーカーやな・・・ところでフェイトちゃんは？」

近藤　「あそこでアリシアからのメッセージカードを見てます」

フェイト　「ぐす・・・アリシア姉さん・・・ありがとう。私、幸せになる！！」

はやて　「よかったなぁ、フェイトちゃん・・・で、なのはちゃんは？」

近藤　「あっちの部屋の隅でいじけてます」

なのは　「ぐすん・・・私は悪魔じゃないもん・・・こんなビデオ捏造だもん・・・」

はやて　「・・・見んかったことにしよか」

近藤　「そうですね」

近藤　「さあ、では第二部にいきますか」

はやて　「いや、行かんでええよ。もう終わろうや」

ドゥーエ　「そうね、これは後書きだから、あんまり長々書くものではないわ」

近藤　「でも、せっかく送っていただいたんですし、なんとか紹介したいじゃないですか」

オーリス　「近藤さんて優しいんですね。私感激しちゃった」

はやて　「オーリス三佐・・・乙女やなあ」

近藤　「とりあえずまた読み上げますよ。

　虚空さんから、俺宛に『　管理外世界（人はほとんどいない森と水の惑星）＋レーベンスシュルト城』『人型自動人形×１００体（城の清掃から食事やマッサージまでＯＫ）』　『グレンラガン本体とＤＶＤ全巻　超銀河大グレン』

　フェイトには　大人の色気が漂う黒のドレス　指南書『新妻の心得』　『側室もいいじゃない』　『普段大人しいあん

ちきしょうを獣に変える方法』　媚薬　絶倫君
　　ティアナには　色気漂うオレンジのチャイナドレス
　指南書『正室と仲良くしよう』　『あきらめるな！』『正室は無理でも側室なら』　媚薬　スーパー絶倫君
　　ＫＹと淫獣を除いた全員には　シェフのこだわり特選パスタとデザートに高級餡蜜、
　　ＫＹには　アルカンシェル　メガ粒子砲　スーパーメガ粒子砲　コロニーレーザー　カタストロフィ　ミサイル前段発射　オールレンジビーム　ギガデストロイヤー　インディグネイション　エクスプロード　アブソリュート　ダイタルウェイブ　ビッグバン　レムリアインパクト　シャイニングトラペゾヘドロン　スピア・ザ・グングニル　レーヴァテイン　マスタースパーク　ダブルマスタースパーク　ファイナスパーク　ファイナルマスタースパーク
　　ランスオブトゥルースさんから、ＸＧ－７０ｄ（完全武装＆００ユニットなしでも操縦・機体制御可）管理局のゴミ達にはＧ弾を
　　カガヤさんから、６４、ゲームキューブ、Ｗｉｉの本体と全ゲームを
　　ユニコーンさんから、ナンバーズ宛にユニコーンさんがリアルで作ったイチジクタルトと苺タルト
　　ルファイトさんから、『マザーバンガード』『北海道知床七泊八日宿泊券』
　　最後にシャア総帥から『アクシズ落とし』を、
　健御雷神さんから、フェイトさんにフェラーリのエンツォとテスタロッサ、マクラーレンのＦ１を結婚式特別バージョン（オープンカーモデル）を、
　　コジロウさんから、『虹ロール』を、
　ケイン青川さんから、パワードスーツボン太くん魔導炉装備仕様＊２０

インジュウ君に某石油製品分解なバクテリア
クロノにポニーマスク
なのは隊長に『〇オ姉さまの海兵隊式ののしり手帳～新兵訓練編～』を、
刃の下に心在りさんから、エクスカリバー、ゲイ・ボルグ、ゲイ・ボウ、乖離剣エア、を、
剣　流星さんから、シャマル先生の料理研究会の料理の一つ、”天舞宝輪丼（てんぶほうりんどん）”。この料理は一口食べるたびに、乙女座の黄金聖闘士・アスミタの天舞宝輪を食らった様に五感が一つずつ五感が破壊されていく料理・・・・・・
ドラゴノーツさんから、草薙の炎、地球意思、八神の紫炎（ＫＯＦ）
コジマキャノン、レーザーブレード、ブレード光波、コジマミサイル、ドーザー、ナインボール部隊
シグナム副隊長に鷹の眼の黒刀
ヴィータ副隊長に鬼武者３のマグマを出す斧
クロノには鬼武者３の氷砕球（棘付き）を
プワゾンクロウさんから、フェイトさんに近接戦闘にピッタリな切り付けるだけで毒を与える『毒の爪』
はやてには接近戦等が苦手でも大丈夫な大型の虫型有人機『バグポッドＤ』
ティアナには砲台付きの真紅のバイク『レッドクラン』、
エレノアに腹ごなしに丁度良い『ゆでたまご』を
俺宛に相手のトラウマを実体化するサイコオーバーマン『リオンネッター』を
黒鷹さんから、中華一番リュウ・マオシン特製「万漢全席」とＹａｈｏｏ！売れ筋商品ランキングよりフランス菓子工房ラ・ファミーユの「まっ黒チーズケーキ」を
緋皇　龍也さんから、ヴィータ副隊長に完全変形ＤＸ超銀

河グレンラガン
　俺宛に超天元突破グレンラガンの鎧
　クロノに胃薬、ＤＸグラパール（ギミー、ダリー機）
（子供達へのお土産用）を、
　死の恐怖さんから、ジェイアーク
　ディビジョンＶＩＩ　超翼射出司令艦
ツクヨミ
　ディビジョンＶＩＩＩ　最撃多元燃導
艦　タケハヤ
　ディビジョンＩＸ　極輝覚醒複胴艦
ヒルメ
　ディビジョンＶ　物質瞬間創世艦　フ
ツヌシ
　ディビジョンＶＩ　無限連結輸槽艦
ミズハ
　よ～ぜふさんから、シグナム副隊長に裂光の剣ゴルンノヴ
ァ、
　ヴィータ副隊長には破神槌ボーディガー、
　エリオに瞬撃槍ラグドメゼギス、
　某２名以外の方には魔血玉（デモン・ブラッド）と魔律装甲（ゼナファアーマー）を、
　あと女性陣には、宇宙怪獣ステファンのぬいぐる
み、サントスシェフの幻のチーズケーキ・マンゴープリンを、
　クロノと淫獣さんにははりがねむし、床にこぼれ
た牛乳を拭いてそのまま１週間ほど廊下に放置されてた雑巾を、
　ｙｏ４ａｋｉさんから、アハトアハト［８８］ｍｍ砲・ハ
ルコンネン？・セレクの「聖釘」・アンデルセンの回復力（ＨＥＬ
ＳＩＮＧ）に、いろんな実験及び開発ができる研究所（惑星付き）
に、寿命延ばし薬。
　エレノアに、ミシュランに掲載されている料理、
スイーツと、ホームランバット（笑）。

ティアナに、ジャッカル（ＨＥＬＬＳＩＮＧ）・ケルベロス魔改造済（ＦＦ？Ｄｏｃ）・ハーディス（黒猫）。
シグナムに、乖離剣エア・天狼・正宗・エターナルソードを
九郎さんから、最終決戦用にクロノへ銀河中心殴り込み艦隊ミッド治安維持用にレジアスのおっちゃんへＳＯＬ（サテライト・イン・オービタル・レーザーウェポンシステム）
俺とフェイトさんへ蜂蜜・・・
以上です」

ドゥーエ　「・・・ねえ、近藤さん？一言いいかしら？」

近藤　「なんでしょうか？」

ドゥーエ　「リュウ・マオシンて、あの梁山泊と戦った特級厨師のリュウ・マオシンよね？」

オーリス　「なんでそんなに詳しいのよ・・・」

近藤　「中華一番ですから、そうでしょうね」

ドゥーエ　「私、彼が作った麻婆豆腐が食べたいわ」

近藤　「ああ、あれは美味しそうでしたねえ」

ドゥーエ　「そして、あなたも食べたいわ」

フェイト　「何ドサクサでとんでもないこと言ってんのー！！」

オーリス　「神様、私に近藤さんを押し倒す勇気を！一歩踏み出せ

る勇気をください！！」

はやて　「おい乙女、こんな下ネタで勇気使うたらアカン」

フェイト　「あなた達には近藤さんは渡さない！」

はやて　「おお！フェイトちゃんの独占欲はただごとではないな！」

ドゥーエ　「ふん、今のうちにせいぜいいい気になっているがいいわ」

なのは　「ドゥーエさん・・・悪役の言葉ですよソレ・・・あ、事実悪役だったっけ」

ドゥーエ　「実は、密かに作者から最終回のプロットを見せてもらったのよ」

オーリス　「え！？ずるい！」

ドゥーエ　「詳しい内容は言わないけど・・・最終回・・・勝つのは私よ！！」

はやて　「・・・何に勝つん？」

ドゥーエ　「全てによ！！」

フェイト　「・・・ちょっと作者シメてくる・・・」

はやて　「フェイトちゃーん！？その濁った瞳はあかんでー！？」

近藤　「まあ、そんな事よりはやて隊長」

はやて　「あんたホンマに他人事やな!?自分が中心やってわかっとるか!?・・・て、ガスマスクして、手に持っとるソレはなんや？」

近藤　「シャマル先生の料理研究会の成果物の天舞宝輪丼と積尸気冥界波です。これで落ち着いてもらいましょう」

はやて　「・・・よし!なのはちゃんはフェイトちゃんを取り押さえて!オーリス三佐はドゥーエ二尉を!!」

なのは・オーリス　「了解!!」

フェイト　「なのは、離してくれるかな?作者殺せない・・・」

なのは　「ごめんフェイトちゃん、でも、離したら私に矛先が向くから」

ドゥーエ　「オーリス、離してくれない?」

オーリス　「ドゥーエ、さようなら、あなたとは死んでもずっと親友よ」

はやて　「この空間はなんでもアリやけど、あんた等はやりすぎた。・・・これからあんた等には矯正してもらう」

フェイト　「!?そ、その近藤さんが持ってる物体は・・・まさか・・・」

ドゥーエ　「ま、まさか・・・それは『裏ロストロギア』の・・・！？ごめんなさい！！調子に乗りすぎたわ！！もうしないから！！」

はやて　「・・・もう遅いわ」

ドゥーエ　「待って！？こぼれた食材で床が溶けてるわよ！？」

フェイト　「近藤さん！？なんでガスマスクして持ってるの！？」

近藤　「まあまあまあまあまあまあ」

フェイト　「６回！？けいおんネタ！？」

はやて　「痛いのは最初だけや。いや、痛いのか？まあ死にはせんやろ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・多分」

近藤　「はい・・・あーーん」

フェイト・ドゥーエ　「いいいやあぁぁぁぁぁっっっ！！？」

作者　「ドゥーエの言っていたことはあくまで予定です。ですから、変わるかもしれませんので」

# 第７３話（前書き）

今回、歴史に手を出しました。
時系列がメチャクチャな気もしますが、さらっと流してください。
歴史とは勝者が紡ぐものであり、都合よく改編されたりして真実は隠されていたりします。

そんなダークなことをちらっと書いてみたり。

・・・独自解釈が増えてきたなあ・・・
風呂敷広げすぎたかな？

あと、今回近藤がスカリエッティに向かって啖呵を切りますが、あれはあるアニメの言葉を参考にさせていただきました。

知ってる人いるかな？

# 第７３話

近藤が将官達をけちょんけちょんにした次の日、アインヘリアル３機が全て破壊された。

実行犯はナンバーズ、スカリエッティの作り出した戦闘機人達である。

そして、スカリエッティに拉致されていたスバルの姉ギンガとヴィヴィオはスカリエッティの手によって利用されていた。

ギンガはナンバーズ達と同じボディスーツに身を包み、ブリッツキャリバーで疾駆していた。

ヴィヴィオは生体ユニットとして利用され、巨大な船の起動キーとなっていた。

その船とは、古代ベルカの英知、悪魔の兵器『ゆりかご』である。

それら全てが映像として流れていた。

全てスカリエッティの仕業である。

ヴィヴィオの苦しむ姿になのはは顔を苦痛に歪め、涙をためていた。

スバルも、ギンガがスカリエッティによって利用されていることにショックを受けていた。

だが、スカリエッティの行動はこれで終わりではなかった。

「さて、こちらの状況はこんなものでいいだろう。・・・おや、近藤大輔君が見当たらないようだが？」

急にスカリエッティは近藤を探し出した。

「ああ、ここからは私と君達だけでの内容だからね、私とそちらの回線を繋いでいるのだよ」

「スカリエッティ！」

フェイトが徐に前に出る。
怒りの表情で、スカリエッティを睨んだ。

「おやおや、これはこれは」

スカリエッティはおもちゃを見つけたかのように目をキラキラさせた。

「どうしたかね？生みの親である私にお礼かな？」

「くっ、貴様あぁぁっ！」

フェイトは今にも飛び掛からんばかりに怒りをあらわにした。
だが、そんなフェイトをスカリエッティはただケタケタと笑って見ていた。
そんなフェイトの肩にポンと置かれた大きな手に、フェイトは驚く。

「大輔さん！」

それは、近藤の手だった。
近藤の横にはエレノアもいる。
いつの間にかいた近藤に驚く皆だったが、そんなこと意も返さず近藤はモニタに映るスカリエッティを見ていた。

「やあ、近藤大輔君！こうして会うのは初めてだね！」

スカリエッティは大仰に身振り手振りをして喜びを体言する。
それに対して近藤はいつも通り、無言でスカリエッティを見るのみである。

「いやはや、先日の記者会見は私も拝見させてもらったよ。まったく、酷いの一言だ。管理局はまさに伏魔殿だね」

ニヤニヤと笑うスカリエッティに、近藤は腕を組んでフンと鼻を鳴らした。

「どうだい近藤大輔君、こちら側に来る気はないかな？」

「な！？」

フェイトは驚く。
スカリエッティが近藤を勧誘しだしたのだ。

「大輔さんがお前に付くわけがないだろう！！」

「今は君に聞いているのではないよ。私は近藤大輔君に聞いているのだ」

フェイトは憤慨するが、スカリエッティはそれを軽くあしらった。

「管理局の闇を否定するつもりはないよ。光があれば、必ず闇ができる。真理だね。だが、私は我慢ならないんだよ。君のような有能な人間を蔑ろにし、扱う事もできないということにね。私ならば、君と上手く付き合う事もできるし、待遇も格別なものを用意する。なにより、娘達が君を気に入っているしね。ビデオレターを預かっているんだよ」

スカリエッティはそう言うと、新たにモニタを展開した。
そして、近藤はそこに映る人物を見て驚いた。

「・・・ノーヴェ」

近藤が一度観光ガイドをしたドゥーエの妹、ノーヴェが映っていたのだ。
緊張した面持ちで、肩に力が入りまくり、ガチガチになっているのが微笑ましい。

「・・・近藤さん！あの、あたしは近藤さんがあたしらの味方になってくれたら嬉しい！そんな酷い所辞めて、あたしらと一緒に暮らそう！」

ノーヴェは顔を真っ赤にしながら、それでも必死に近藤に仲間になるように勧めた。
そして、画面はノーヴェから別の人間に変わる。

「やっほー、近藤さーん！覚えてるっすかー？ウェンディっすー！あたしも近藤さんの事好きだから、味方になってくれるとありがた

いっす！！」

「・・・近藤さん、僕の事覚えてる？オットーだよ。ねぇ近藤さん、僕達の所に来てよ。そして、また一緒にご飯食べようよ」

「ウェンディ・・・オットー・・・」

近藤は、二人の名前を呟く。
短い時間とはいえ、出会い、共に行動していたのだ。
そんな子達からの願いに、近藤の胸は締め付けられる。

「近藤様、私です。あなたの下僕です。私は手段を選びません。あなたがこちらに来てくれるまで、私達だけを見てくれるまで。・・・金髪女狐の魔の手から救うまで・・・」

言わなくてもわかるだろうが、最後のはセッテである。
しかも、発言が過激すぎて、スカリエッティが途中でモニタを消してしまった。

「・・・んんっ！・・・ま、まぁ、最後のは置いといて、だ。どうかね、こちらに付けば娘達も喜ぶ。なんなら君専用にしてくれてもいい」

咳ばらいを一つし、スカリエッティは近藤の勧誘を続ける。

「一つ聞きたい」

近藤がスカリエッティに質問する。
スカリエッティはどうぞと手で促した。

「もしかして、ドゥーエ二尉もナンバーズなのか？」

「そうだよ。彼女が管理局で得た情報は大変有益だった。優秀な娘さ。そういえばドゥーエも君にえらくご執心だったな」

スカリエッティは誇らしげにドゥーエを褒める。

近藤は納得した。

なるほど、今まで管理局の情報がつつぬけだったのはそういうわけか。

しかも、管理局の中枢のさらに底まで侵入できるハッキング能力。

ドゥーエは相当やり手のようだ。

「どうかね？私と共に新時代を築かないかね？君の力と私の力があれば、世界など簡単に手に入るよ」

スカリエッティはニヤリと笑う。

近藤は目をつむり、深呼吸した。

そして、ゆっくりと目を開けた。

「スカリエッティ」

「なんだね？」

「お前がいなければ、フェイト隊長とも、エリオとも出会えなかった。ドゥーエ二尉やノーヴェ達とも出会えなかった。だから言おう」

近藤は頭を下げた。

「ありがとう」

これにはフェイトや六課の面々、スカリエッティも驚いた。

「だからこそ言おう。スカリエッティ、自首しろ」

近藤はスカリエッティに自首を勧めた。

これにはフェイトをはじめ、はやてやなのはも驚いた。

しかし、これにはスカリエッティもカチンときたようだ。

「・・・私が自首？何故かね？」

スカリエッティは目を細め、近藤を見る。

先程までの和やかな雰囲気などなく、ピンと張り詰めた空気が漂う。

「お前では俺に勝てないからだ」

近藤はハッキリと言った。

すると、スカリエッティは肩を震わせ笑い出した。

「くくく・・・面白い冗談だ」

そして、スカリエッティは近藤を見た。

その目は先程までの友好的な視線ではなく、見下すような、興味を無くしたような目だった。

「どうやら君が得たアルハザードの知識は大したものではないようだね」

スカリエッティは髪をかきあげ、近藤を見下ろした。

「古代ベルカにて、最強といわれた王『聖王』、そしてその聖王が駆るは空中戦艦ゆりかご。その力は最強であり最悪だ。なにせアルハザードをも滅ぼしたのだからね」

スカリエッティの言葉にざわめきが起こる。

「・・・なんやそれは・・・アルハザードを滅ぼした?そんな歴史知らん!」

はやてが声を荒げる。
隣ではシグナムとヴィータも怒っていた。

「出鱈目なことを・・・!」

「あたし等は戦乱の時代を生きていた!でもゆりかごがアルハザードを滅ぼしたなんて聞いたことないぞ!」

そんな怒りをぶつけられても、スカリエッティはやれやれと肩を竦めた。

「君達、私はいつ戦乱期だと言ったかね?」

「なんだと?」

いちいち勘に触る態度をとるスカリエッティに対し、喧嘩腰のヴィータを手で制しつつ、近藤は小さくため息をついた。

「・・・アルハザードがゆりかごによって滅ぼされたのは、戦乱期

より遥か前の先史時代です」

近藤がスカリエッティに代わり説明した。

「先史時代、ベルカの技術はアルハザードからの提供によってめざましい進歩を遂げました。そんななかベルカはアルハザードを凌駕する力を得るというコンセブトのもとで、ゆりかご、いわゆる『戦船』は建造されたんですよ」

近藤はスカリエッティの映るモニタを睨みながら説明した。

スカリエッティは、そんな近藤をほほうと呟き見ていた。

「そんな時、ゆりかごが暴走し世界は滅亡の危機に貧したんです。かろうじてベルカは滅亡を逃れた。だけど、アルハザードはゆりかごによって崩壊したんです。旧暦の大規模次元震による世界崩壊とはまた別のものです」

「そうだ。しかも当時のアルハザードには『魔王』がいたにも関わらず、ベルカの超大型質量兵器『ゆりかご』の暴走によってあっけなくアルハザードが存在した世界は崩壊した」

スカリエッティは近藤の言葉に続き、また新たなキーワードを言った。

「魔王？」

はやてはスカリエッティの口から飛び出した単語に反応した。

魔王・・・どこかで・・・

「魔王とは、アルハザードの王の事ですよ、はやて隊長」

近藤がはやてにそう言うと、スカリエッティはまた目をキラキラさせだした。

「そして君のことでもある！」

スカリエッティは再びニヤニヤ笑い、近藤を指差した。

「アルハザードの王、すなわち魔王になるには条件がある。だから、例え自分の子供だろうが、血縁者だろうがその条件を満たさなければ魔王にはなれなかった。クローン技術も用いられたが、何故かその条件を満たさなかった。そして近藤大輔君、君はその条件をクリアした。現代にアルハザードがあるならば君は間違いなく魔王だよ！」

スカリエッティは興奮し、饒舌になっていた。

「その条件とは、『起源の系譜（ジェネシック・コード）』の行使だよ」

「ジェネシック・コード？なんだそれは」

フェイトがスカリエッティを睨みながら聞く。

「起源の系譜とは、魔法技術で創られたモノをすべからく意のままに扱える『絶対コード』のことさ」

すると、なのはがハッとした。

心当たりがある。

以前近藤が何か呟き、レイジングハートを操っていた。

たしか・・・

「裏技・・・」

「裏技？なんだね、その捻りのないネーミングは。まあいい、とにかく近藤大輔君は起源の系譜を行使できる。クローン技術で魔王を複製しても引き継げなかった能力を、一体どうやって手に入れたのかとても興味があるね！」

スカリエッティは鼻息荒く近藤に顔を近付けるようにモニタに寄った。

「・・・ベラベラとしゃべりすぎだ、スカリエッティ」

近藤がスカリエッティを睨む。
そんな視線を向けられ、スカリエッティは「おお、怖い怖い」と怖がるフリをした。
顔は未だにやけている。

「いや、しかし私も迂闊だったよ。そもそも、君の隣にいるデバイスの名前で気づくべきだったんだよ」

スカリエッティは優雅に前髪をかきあげる。

「そう、『アルファード』。これははじまりの王たる『アルハザード・ディウィ・フィリウス・アウグストゥス・アルファード』から取った名前だということをね」

「お前が気安く王の名を口にするな」

エレノアは殺気を込めてスカリエッティを睨んだ。

モニタ越しでもその殺気が伝わったのか、スカリエッティは顔を青くした。
だが、すぐに余裕ある態度を取り戻し、また髪をかきあげた。
そして、エレノアの横で呆れた表情をしている近藤を見た。

「・・・ふむ、なんだ近藤君、君のアルハザードの記憶は私と同等はあるではないかね。それなのに、君は私が君に勝てないと言ったのかね？」

スカリエッティは興味深げに顎を撫でた。
スカリエッティのコロコロ変わる行動は、子供そのものである。
感情の起伏が激しく、興味が湧くと食いつき、無くなると全く反応しない。
天才とはどこか一般人とは一線を画すものだが、スカリエッティもそんな部類に入るのだろう。
たしかに、スカリエッティは天才なのかもしれない。
少なくとも現状では。

それは、失われた技術を知り、行使できる力があるからである。
はっきり言うと兵器面のみならば、現在の発達した技術でさえ失われた技術（ロストテクノロジー）の足元にも及ばない。
現に管理局は（古代遺物）ロストロギアに振り回されているのだから、差は顕著である。
過去の失われた技術、アルハザード、古代ベルカとは、それほど強大なのだ。

スカリエッティは、だからこそ現在の技術に見切りをつけた。
つまり、スカリエッティは停滞し、過去の技術のみに固執しているのだ。
戦闘機人然り、人造魔導士然り、ゆりかご然りである。

だからこそ、近藤はスカリエッティを否定する。

「人も技術も日々進歩している。過去の技術にばかり固執して停滞しているお前ではわからない領域だがな」

近藤はスカリエッティを指差し、高らかに言った。

「ひとは常に未来に悩み、喜び、苦しみ、楽しむ。だからこそ人の命は短く、美しく、儚い」

近藤はスカリエッティを睨み、言葉を続ける。

「だからこそ、人は賢明に生きようとする。だからこそ、人は試行錯誤する。そうして人は進化していく。それは、次の時代へと繋げるためだ、子供のためだ、未来のためだ！」

そして、拳を硬く握り、力強く一歩前に出る。

「お前のように過去にしがみつき、歩みを止め、未来に目を向けな

い者に、峠の先に待っている未来への輝かしい明星が見えるはずが無い！！」

近藤の叫びに、部屋はシンとなる。
スカリエッティも、近藤の気迫に圧され、たじろいでいた。

「・・・交渉決裂かな？」

スカリエッティは能面のような表情で近藤に尋ねる。

近藤は頷いた。

「残念だよ。君とならば、楽しい日々を送れると思っていたんだがね」

スカリエッティはやれやれと肩を竦めた。
だが、その顔に笑みはない。

「たしかに、君の力は脅威だ。おそらく私の娘達全員でかかっても歯がたたないだろう。だがゆりかごは別だ。君は言ったね？技術は日々進歩すると。では言おう、今の技術でもゆりかごには何も出来ないよ」

スカリエッティは近藤を見下ろす。
近藤は、それを真っ向から受けた。

「未来など、弱者の戯言だよ」

スカリエッティは醒めた視線を近藤達に向けた。
その温もりの篭らない、人がそんなに冷たい目が出来るのかと思うほどの視線に、はやては息を飲んだ。

「ふむ、ではもうここには用はないな。それでは諸君、ゆりかごと戦場でまた会おう」

スカリエッティは回線を切ろうとした。
だが、近藤がそれを止めた。

「スカリエッティ、最後に二つ、お前に言うことがある」

「何かな?」

「まず一つ、俺は管理局で元帥に就任することになった」

「・・・なんと、すごいね!三尉から極官かい?まったく、君のその手腕には驚かされるよ」

スカリエッティは驚くそぶりを見せるが、表情は暗い。
特に興味もないようだった。
だが近藤のもうひとつの言葉に、スカリエッティは驚愕する。

「あとひとつ。お前はゆりかごを手中におさめていい気になっているが、気を抜くなよ」

近藤はゆっくりと人差し指を頭上高く上げ、語られぬ歴史の一端を口にした。

「現存する戦船はひとつじゃないぞ」

近藤のその言葉に目を見開くスカリエッティは、ズイッとモニタに顔を近付けた。

「な!?どういう・・・」

そこまで言うと、近藤がスカリエッティとの回線を強制遮断した。

近藤は回線を切ると、首を回しため息をついた。

「はぁ、疲れた」

肩に手をやり、グルグルと肩を回す姿は親父そのものである。

そして、くるりと方向転換してなのは達の方を見ると、皆ポカーンと口を開け近藤を見ていた。

その中でも、なのは、フェイト、はやて、ティアナは場違いな事を考えていた。

（・・・近藤さん・・・カッコイイ・・・）

（ああ・・・凛々しい大輔さん・・・素敵！）

（あんなカッコエエ啖呵聞いたことないで・・・あかんで近藤さん・・・惚れてまうやろー！！）

（ああ・・・副隊長・・・いいえ、元帥殿！私、あなたに一生ついて行きます！！）

一様に顔を赤くして、何故かもじもじしながら近藤を見ていた。

スバルやエリオ、キャロも似たような事を考えていたが、カッコイイ！痺れる！憧れる！と羨望の眼差しを送っていた。

そんなぬるい空気の中、シグナムとヴィータがズイッと前に出てきた。

「近藤、二、三聞きたい事がある」

シグナムは真剣な表情で近藤を見た。

「どうぞ」

近藤は短く答え、シグナムの質問を待った。

「まず一つ、アルハザードがゆりかごによって滅ぼされたというのは・・・本当か？」

シグナムはゴクリと喉を鳴らした。

「ええ、本当です。ついでにいえば、アルハザードだけでなく、いくつかの他次元文明も滅亡しています」

あっさり肯定する近藤に、息をのむシグナムとヴィータ。

「古代ベルカ戦乱期より遥か昔、つまり先史時代にベルカは技術提供を受けているアルハザードの技術を追い抜こうとしたんです。結果、戦船は暴走し大規模次元震こそ起きませんでしたが、アルハザードの世界や他の文明は滅亡、崩壊、ベルカ自体も崩壊の危機に瀕したわけです」

「ベルカの歴史にそんなもの書いてないが？」

シグナムは努めて冷静に話す。

「歴史とは、正義が勝者となり紡ぐものではありません。勝者が正義になるように都合よく伝えるものです」

古代ベルカは勝者だった。
理由はどうあれ、アルハザードを滅ぼし、一大文明を築くことが出来たのだ。
その勝者にとって、暴走による他文明崩壊など笑えない冗談は必要ない。
ベルカはアルハザードに勝った、その事実だけを伝えればいいのだ。
だが悲しいかな、ベルカはこの後程なくして長い戦乱期に突入する。
そして、かつての聖王の元、世界を席巻し破壊していった。
旧暦４６２年の大規模次元震の引き金となったのである。
歴史を伝える余裕も無いほど国は疲弊していった。

いや、実の所事実を記した文献や古文書は残されている。
だが、それらはことごとく聖王教会が所持し、厳重に封印している。

「じゃあ、ゆりかごがひとつじゃないっつーのはどういう意味だ？」

シグナムに代わり、ヴィータが質問した。

「そのままの意味ですよ。ゆりかご、戦船をワンオーダーで建造するより、様々な可能性の戦船を多数造った方がデータ収集も効率的だし、なにより戦力保有として量産は当然の選択だ」

「・・・つまり、ゆりかごは無数に存在すると？」

シグナムが恐る恐る聞く。

あんな脅威が無数にあれば、この世界は一瞬で滅ぼされてしまう。

「俺の知る限り、3隻建造されました。建造途中で凍結になったものを除けば、ですが」

「さ、3隻・・・か・・・」

古代ベルカの歴史において、すでにロストロギア扱いされている最悪の兵器ゆりかごが3隻存在する。

聖王の遺した文献には、たしかにゆりかごは1隻とは書かれていなかった。

だが、複数とも書かれていなかった。

あんな悪魔の兵器が複数あるとは、普通考えないだろう。

「まさかとは思うが、その残りのゆりかご・・・戦船を蘇らせるつもりなのか？」

シグナムが恐る恐る聞く。

「いえ、そんな事はしません。あれはスカリエッティへのハッタリ

です。事実、現存する戦船はあの『ゆりかご』のみです」

シグナムとヴィータはホッとするが、言葉の端々にいろいろ疑問の残る近藤の言葉に、つい反応してしまう。

「現存・・・とは？」

「そのままの意味です。試作艦のゼロ号機は大規模次元震のときに巻き込まれ行方不明、量産艦２号機は破壊してこの世にはありません。残るは量産艦１号機の『ゆりかご』のみです」

制作過程において、試作艦は１号機として建造される。
そして、数々のテストとデータ収拾を終え、ソレをもとに量産艦を建造する。そして量産の正式タイプを建造すると、試作１号機はゼロ号機と名称を変更される。
正式１号機は量産艦へと移るのだ。
そして、ゼロ号機はその後の第２世代艦、第３世代艦へのデータ取りとして様々な試験運用にまわされる。

戦船が一隻しか現存しないという事にホッとするが、近藤への質問はこれだけで終わらない。

「あと一つ、近藤、おまえが『魔王』というのは本当か？」

シグナムは近藤へ睨みつけるように見た。
近藤は鼻から息をはき、短くはいと答えた。

「スカリエッティも言っていましたが、アルハザードの王を俗に『魔王』と呼んでいました。そして過去の王は３人しかいませんでした」

「・・・？アルハザードとは現在でも理想郷とされるほど魔法技術が発達していた国だろう？普通に考えて王が３代しかいない程の短い歴史だったとは思えないのだが？」

シグナムが鋭く突っ込む。

国とは、何代も積み重ねていくことで安定し、発達していく。

だが、３代となると、長く見積もっても１２０年程である。

それも現在でも語り継がれている理想郷と呼ばれる国ならばなおさらだ。

シグナムが首をかしげていると、エレノアが前に進み出た。

「アルハザードの王の選定、起源の系譜は少し特殊でね、そう簡単に発現するような能力ではないのよ。で、その時代に王に相応しい者が現れなかった場合、王の代わりとして『代表』が選定されるの」

クローン技術などが発達してたアルハザードは、当然王の存続を望み、クローン技術を用いた。

だが、ジネシック・コード（起源の系譜）は何故かクローン技術で生み出された魔王でも発現しないのだ。

どういう経緯でジェネシック・コードが発現するのか、永遠の謎のまま国そのものが滅亡してしまった。

「なんか難しいなあ・・・」

ヴィータが首を捻った。

「それ程アルハザードにおいて王とは特別なのよ。因みに、初代の『アルハザード・ディウィ・フィリウス・アウグストゥス・アルファード』から名前をとって国の名が『アルハザード』になったのよ。

歴代の王は、初代『アルハザード』、第2代『レオ』、第3代『カール』。そして、第4代であるご主人様が『ダイスケ』となるわけ」

「へえ・・・」

なのはが感心していた。

「・・・私の記憶が確かならば、カリム・グラシア理事の預言において、『魔王』という単語が出てきている」

シグナムが説明していると、はやてやなのは、フェイトがあっと声を上げた。

「思い出した！カリムの預言や！・・・そうかー、私はてっきり魔王はなのはちゃんのことかと・・・」

「私魔王じゃないもん！」

なのははやての物言いに必死に抗議する。

ただでさえ悪魔だなんだと言われて困っているのに、魔王などという二つ名死んでもゴメンだ。

「そんなことはどうでもいい。カリム・グラシア理事官の預言には、全てを破壊する者は魔王と書かれていたはずだ。アルハザードの王が魔王と呼ばれ、預言で魔王という単語も出て来た。これは偶然ではあるまい。だが解せぬのは、貴様が預言を知りながら魔王であることを我等に教えなかったということだ。いかなる理由があるのだ？」

シグナムは鋭い視線で近藤を見る。

預言の解釈にもよるが、魔王という存在が全てを破壊するということは、事件を解決に導くともとれる。
預言を信じるならば、勝利の鍵が目の前にいるのだ。
シグナムは近藤の性格を知っている。
こういう時の近藤は、大抵ごまかす。
だが、シグナムはごまかすことを許さないという気迫で見つめる。

「・・・俺もつい最近まで知らなかったんですよ。歴史の真実と魔王という存在のことは、全てエレノアから聞いたんです」

近藤は腰に手を当て、ため息をついた。

どうやら、隠し通せる空気ではない。
近藤は、素直に説明した。

「そうか」

シグナムは近藤の言葉に嘘偽りが無いと判断した。
だが疑問は残る。
近藤は『最近』聞いたと言っていた。
何故エレノアは前々から近藤に言っておかなかったのだろうか。

いや、よそう。

詮索が過ぎると、それは尋問だ。
シグナムは別に近藤を困らせたいわけではないのだ。
近藤が魔王という事実、これだけわかれば十分だ。

「カリムに報告しとかなあかんな・・・」

ぽつりとはやてが呟く。
近藤はそれを聞き、嫌そうな顔をした。
エレノアは目敏く察知し苦笑していたが、なのは達は気づかなかった。

# 第７３話（後書き）

近藤　「はい、恒例のカオスタイムです！」

はやて　「元帥殿！選手交代を要請します！！」

エレノア　「却下します」

はやて　「即答キツイ！！」

近藤　「まあ、はやて隊長ほどお笑いをわかっている方はいませんからね」

はやて　「うう・・・関西人の血が恨めしい・・・」

近藤　「さて、ではリストを読み上げますよ」

はやて　「・・・いつの間に巻物になったんや？」

近藤　「したくてしたんじゃありません。贈り物が多くて、一枚の紙に収まらなかったんです」

はやて　「・・・近藤さんが巻物もっとったら、なんや悪代官みたいやわ・・・」

エレノア　「・・・今度ちょんまげのヅラ持って来よう」

近藤　「では読み上げます。

シンさんから、クロノに『聖なる炎』と『エアロブラスト』のコンボ技『聖空覇』

エリオに『破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）』と『必滅の黄薔薇（ボウ）』と『斬り抉る戦神の剣（フラガラック）』

シグナム副隊長にに『アロンダイト』を、

虚空さんから、俺に『エリクサー（神話の方の）』『アークエンジェル』『別荘（ネギまのアレ　中身は高級リゾート）』『ディケイドライバー（カード付き）』『正妻と側室をもとう』婚約指輪×３（ダイヤの指輪）少し速いお祝い金『３００万円』

フェイトさんに『セイバーリリィの衣装』『犬耳』『紅い首輪』『犬の尻尾』『夜の誘い方』『婚姻届け』『勝利すべき黄金の剣（カリバーン）』

ティアナには『側室を狙え！』マシンディケイダー　魅了の秘薬　媚薬　絶倫クンＭＸ

ユーノとクロノを除く全員には　匠のこだわり蕎麦　高級葛餅

クロノに『全宝具の真名解放』『インプレイスエンド』『エクスプロード』『サイクロン』『ゴッドブレス』『ビッグバン』『終わる世界』『千の雷』『燃える天空』『怒りの大地』『斬鉄剣』『かめはめ波』『十倍かめはめ波』『ビッグバンアタック』『ビッグバンかめはめ波』『げんき玉』『漢女召喚（恋姫のアレ）』『離婚届け』

プワゾンクロウさんから、俺に『轟魔』、

なのは隊長に『戦術砲機ブロンテクラフト』、

フェイトさんには『フェイスレイヤー』、

はやて隊長には『邪鬼銃王』、

シグナム副隊長には『コードＤＴＤ』、

ヴィータ副隊長には『ＤＸＭＡＸアックス』、

エレノアには『リアクティブアーマー』を、

黒鷹さんから、機動六課の皆さんにケーキ屋「元町ケーキ食べ放題」

ドゥーエ二尉とオーリス三佐には「近藤さんとペアで行く地中海一カ月クルージングツアー」

ナンバーズの皆さんには「横浜中華街食べ歩きツアー」

キール元帥には「グアム新婚旅行と不老薬・長寿薬・若返り薬三点セット」

フェイトさんには「モン・サン・ミッシェルでの結婚式とロマンティック街道旅行」

クロノには「ドキドキ☆アメリカ海兵隊地獄の訓練半年間」と「富士総合火力演習の的体験ツアー」（特別参加＝機動六課の皆さんとエイミィとリンディ・ハラオウン）『離婚届け』『離婚裁判』（行列のできる法律相談所史上最強の弁護士軍団付き）『ゲイバーで三か月勤務』『ドキドキ☆ハラハラナイフ１本で地雷１万個解体作業』『逝ってみよう！上空２万メートルからパラシュート無しで降下１０セット』（地上３０？で止まります）『地獄巡り！ＳＡＳ・ＳＥＡＬｓ・グリーンベレー・デルタフォースの地獄の訓練１年間』を、

ウルフガイさんから、クロノには『モテナイ男同盟皆さんからの呪いの手紙』

ヴァイツ氏個人からエレノアに『果たし状』

オーリス三佐には『ドクター謹製・素直になれる薬』

俺宛に『センチネル』

ナンバーズに、ドクターをオトス手管・初級編』

『神父も代行者も大絶賛のマーボーカレー』
フェイトさんに『3つだけ願いが叶うノート』を、
たれねこさんから、俺宛に『髭付き紳士服セッ』・・・・・・・
ドゥーエ二尉、・オーリス三佐に『輸血セット』
フェイトさんに『近藤さん写真集』
なのは隊長にに『ふりふりのドレス』を
白眉さんから、俺宛にアルトアイゼンリーゼ、ソウルゲイン、ディス・アストラナガン、ダンディな紳士スーツ、・・・・・・・
フェイトさんにアストラナガン、三式斬艦刀、護式斬冠刀、フェイスレイヤー、鬼哭斬破刀、ナルガクルガの子供、近藤さんとお揃いのミサンガ
エレノアに正義の鉄拳、怒りの鉄槌、ジ・アース、エターナル・ブリザード、爆熱ストーム、アトミックフレア、ノーザンインパクト、流星ブレード、ネオ・ギャラクシーの各秘伝書
なのは隊長にロザリンドの衣装、ノーブルローズ、かなみのリボン
はやて隊長に黒のゴスロリドレス、折り畳み式ハリセン、ワールドエンド
ヴィヴィオにプリンセスクラウン、プーギーのぬいぐるみ
シグナム副隊長にディスインテグレイト、フランベルジュ
ヴィータ副隊長にウソップパウンド
クロノとユーノを除く全員にもっちりしっとりプチロールケーキ
クロノとユーノ二人をターゲットに獣破轟

翔斬、白夜殲滅剣、斬空刃無尽衝、クリティカルブレード、インフィニティアソウル、ゼロディゾルヴァー、アステリズムライン、イノセントガーデン、百花繚乱、Ｇ・ソードクロス、Ｓ・エクシード、Ｂ・アサルト、カラミティロンド、ブレイズワルツ、エターナルセレナーデ、アンスタンヴァルス、ヴァンフレーシュ、エクスパシオン、地獄の火炎、ダイアモンドダスト、裁きの雷、メガフレア、ギガフレア、テレフレア、エクサフレア、エターナルブレス、アルティメットエンド、アイン・ソフ・アウル、インフィニティ・シリンダー、縮退砲、爆熱ストーム、エターナルブリザード、ウルフレジェンド、ジ・アース、ガニメデプロトン、ドリルスマッシャー、フファイアブリザード、クロスファイア、ノーザンインパクト、アトミックフレア、スーパーノヴァ、ネオ・ギャラクシー、流星ブレード（イナズマイレブンの技は全て顔目掛けて）を、

トッキーさんから、茨城銘菓「いんろう焼き」『ネギま』から「赤い飴玉・青い飴玉年齢詐称薬」『スターウォーズ』から参謀役に「Ｔシリーズ戦術ドロイド」

浮気提督のクロノとユーノにはスターウォーズ』の「デス・スター」のスーパーレーザー砲の標的義務権（自動照準で１００％外しません）

映画『リング』から「呪いのビデオ」

シャマルさんの手料理のカレー（裏ロストロギア指定）

以上です」

はやて　「いじる方向がバラバラやから、どこから突っ込んだらええんかわからんわ！！」

近藤　「・・・はやて隊長・・・何故俺関係の物は、こう・・・エ

ロ関係が多いんですかね？」

はやて　「宿命や」

近藤　「あと、この物騒な武器の数々。そして、クロノへの嫌がらせ」

はやて　「クロノ君は自業自得や、この送られてきたプログラムは全て実行するで。それより気になることがあるんや」

エレノア　「あ、それ私も気になってたの」

はやて　「この『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　はじまりの魔法』では、ユーノ君一回も出てへんねん。せやのに、この嫌われよう・・・淫獣って・・・」

近藤　「彼が報われる日がいつか来ると信じてましょう」

はやて　「でた、お得意の投げっぱなし」

エレノア　「私的にはこれが気になるの。ヴァイツ氏個人からエレノアに『果たし状』」

はやて　「ほほう？そらまた珍しいものを」

エレノア　「ドサンピンが・・・」

近藤　「うおおぉぉいいいっ!?失礼な事いうなよ!?」

エレノア　「あーやだやだ、自分の力を過信して勘違いする輩っていうよねー?」

近藤　「おまっ!あやまれ!地面に額を擦り付けろ!!すいません!申し訳ありません!!今後このような生意気な口は聞かないように調教します!!」

エレノア　「いたたたた!摩擦摩擦!!額痛い!!血!血が出る!!ごめんなさい!生意気言ってごめんなさい!!」

フェイト　「首輪・・・犬耳・・・尻尾・・・これをどうしろと?」

ドゥーエ　「お子様(ボソ)」

フェイト　「聞こえたぞ年増!!」

ドゥーエ　「年増いうな!!」

オーリス　「犬耳と首輪は、まあいいとして・・・この尻尾・・・なんか棒がついてる・・・どうやって着けるの?」

ドゥーエ　「これはね・・・ここを・・・ここに・・・こうして・・・こう、ぶすっと!!」

フェイト　「ひゃあああぁぁぁ!!?」

オーリス　「無理無理無理無理無理！！絶対無理！！」

ドゥーエ　「・・・まあ、準備は必要ね」

フェイト　「準備って・・・いい。言わなくていい」

ドゥーエ　「そんなことより、フェイト嬢、あなたの背中に隠してる本、出しなさい」

フェイト　「え！？そ、そそそんなもの。ももも持ってないじょ！？」

オーリス　「隊長！変わり身の術で私の手元にあります！！」

フェイト　「オーリスさん！？一体あなたは何処に向かっているの！？」

ドゥーエ　「でかした！！・・・なになに・・・『近藤さん写真集』・・・なん・・・だと・・・！？」

オーリス　「こ、これは・・・じゅるり」

フェイト　「ちょっと！？よだれで汚さないでよ！？」

ドゥーエ　「・・・すごい・・・」

オーリス　「こ、こんな・・・お、お風呂上りの近藤さん！？・・・

ぶはっ」

フェイト　「わー！？鼻血ー！？輸血パック輸血パック！！」

ドゥーエ　「訓練終わりの汗をかいた近藤さん・・・ああ、おなかがキュンってしちゃう・・・」

フェイト　「・・・わからなくもない・・・かな・・・」

はやて　「・・・なんや、あそこの変態の集まりは？」

近藤　「無視しましょう、無視」

なのは　「・・・こ、こんなフリフリなドレス・・・人前で着れないよう・・・」

ヴィヴィオ　「わー！なのはママかわいいー！！」

なのは　「ヴィ、ヴィヴィオ！？どうしてここに！？ゆりかごに居たんじゃあ・・・」

ヴィヴィオ　「えっとねー、トイレって言って出てきた！ヴィヴィオ、このぬいぐるみ欲しかったのー！！」

なのは　「セキュリティがお粗末だなあ・・・」

ヴィヴィオ　「でも、戻らないとお話進まないから、もう少ししたら

ら戻るよ？」

なのは　「・・・ごめんね、小さいヴィヴィオに気を使わせて・・・」

ヴィヴィオ　「ううん、本編では、ヴィヴィオとおおさまがガチ勝負するって変な人が言ってたし、ヴィヴィオも活躍するからいいもん！！」

なのは　「・・・ヴィヴィオ、それネタバレじゃないの？」

ヴィヴィオ　「・・・？そうなの？ヴィヴィオわかんなーい」

なのは　「と、ところで、ヴィヴィオ？この・・・ふりふりのドレス・・・なのはママに似合うかな？」

ヴィヴィオ　「ふりふりのドレスは可愛いけど、なのはママには正直キツイよ。年齢考えたほうがいいよ？」

なのは　「ｏｒｚ（屈託のない笑顔・・・悪気の無い言葉のナイフが一番堪えるよ・・・）」

エレノア　「赤い飴と青い飴・・・使えるわね・・・」

はやて　「何にや？」

エレノア　「番外編のほうに」

はやて　「ああ、あっちか。あのロリコンマンセーの」

エレノア　「人聞きの悪い・・・幼女を愛でるといいなさい」

はやて　「そっちの方が人聞き悪いとおもうんやけど・・・」

エレノア　「これをご主人様に飲ませて、色々しよう！ぐふふ・・・いろいろ・・・」

はやて　「エレノアさん、よだれ、よだれ」

エレノア　「ほらほら、お姉さんに全て任せなさい・・・そうそう・・・ほら、痛くないでしょ？・・・げへへ・・・」

はやて　「・・・完全アウトや、それ」

近藤　「なんだこのグダグダな空気？」

## 第７４話（前書き）

さて、今回も回収のような内容になってしまいました。

いつになったら戦闘が始まるんだ！？

わからん！！　ドーン！！

# 第７４話

スカリエッティとの会見の次の日、カリム・グラシアが近藤に会見を申し出てきた。

聖王教会が嫌いな近藤は、当然最初から不機嫌ＭＡＸで、一緒にいたなのは、フェイト、はやては冷や汗をダラダラ流していた。
近藤の隣にはエレノアがいたが、カリムを見てニヤニヤしているだけだった。

カリムは、近藤が元帥に就任したことを歓迎するとか、預言の魔王は貴方だやら言ってきたが、近藤は聞き流していた。
エレノアも欠伸をしていた。

そして、近藤が聖王教会騎士を総て動員してゆりかごを阻止に協力しろと言うと、カリムはノーと言い出した。

聖王教会には、聖王教会にしか出来ないことがあるとかなんとか言い訳して、今出せる戦力だと言って約４分の１の騎士を向かわせるという。
それを聞いた近藤が鼻で笑った。

「俺は出来る出来ないなんて聞いていない。やれって言ってんだよ」

近藤の体育会系バリバリの無理難題にカリムは顔を引き攣らせた。

これと全く同じセリフをエレノアに吐かれた三提督がこの場にいたら、「ああ、やっぱりソックリだなあ」と遠い目をしていただろう。
事実、エレノアは近藤の隣で拍手していた。

その後、近藤が8年前の色ボケ神父があるシスターの誘惑に負けて聖王の聖骸布を持ち出した事をあげた。
そして、ヴィヴィオはその持ち出された時に採取された遺伝子情報によって生み出されたクローンであることも言った。

これにはなのは達も驚いていたが、近藤は無視してカリムに詰め寄る。

カリムはなのは達以上に驚いていた。
8年前の事は本当に当時関わっていた数人と、一部の上層にいる騎士や理事しか知らない事柄だからだ。
これには理由がある。
神父が持ち出した聖骸布は、翌日には無事返却されたからだ。
これにより、神父の処罰のみで報告することも無いと判断し、内々で処理したのだ。
まさか遺伝子情報が目的で持ち出され、更にはクローニングされているなど想像できるはずもない。
嫌な汗がダラダラ流れ、近藤に恐怖する。

この男は一体何者だ、と。

「お前等のミスを俺達が尻拭いしてるんだから、騎士全員を参加させろ。出来ないならこの事実を公表する」

近藤はカリムを脅迫しだした。
本当ならば、公表してもそう問題になるようなことではないのだが、いかんせん時期が悪い。
いくらなんでも聖王のゆりかごが復活した時に、実は聖骸布が盗まれていました等と言ってしまえば、だれでも関連性に気付くだろう。

そうなると聖王教会への批判が起こる可能性がある。
あまりの事にカリムはあうあうと口を開くが、結局カリムは涙ながらに近藤の条件を飲んだ。

こんな大事件の発端に、たとえ一人の神父の一時の過ちとはいえ、聖王教会が関わっていたと知られたら、信仰者達はもちろん、全世界からどんな批判が来るかわかったものではない。

その後、エレノアが理不尽な言葉責めをカリムに行った。
エレノア曰く、カリムからは『いじめてオーラ』で出ているそうで、真正サド（ドS）を自負する者としては放っておけない。
いや、むしろ弄らないのはカリムに失礼とのこと。
ちなみに、言葉責めの内容は次のような感じだ。

結婚適齢期が過ぎて必死すぎ、笑える

若作りし過ぎ

化粧ケバい

空気読め

等など。

カリムの心はズタボロにされた。

近藤とエレノアはニヤリと笑い、カリムはホロホロと涙を流していた。

そんな光景を見ていた3人は、一様にこう思った。

・・・悪魔だ・・・悪魔が二人いる・・・

近藤がカリムをけちょんけちょんにして、泣きながら通信を切ったカリムを見てスッキリしていた頃、ちょうどアースラの整備が終了したとの通信が入った。

１０８部隊にご厄介になっていた機動六課の面々は、ゲンヤに礼を言って速やかにアースラへ移動した。

機動六課のメンバーは、本局の廊下から見える、新たなクルーが乗り込むのを待って艇泊している老艦アースラを見て緊張した面持ちでいた。
そして、なのはやフェイト、はやてにとって、この老艦は特別な意味を持っている。

小さい頃、魔法と出会った頃、初めて友達が出来た頃、家族と共に呪縛を解き放とうとした頃、この老艦が全てを見ていた。

近藤にとってもアースラは特別である。
小さい頃、本局に艇泊しているアースラにこっそり忍び込み、探検してリンディと養父に見つかりこっぴどく怒られたこともあった。
他にも思い出は沢山ある。

なのはやはやて、フェイトはアースラへの移動作業のために忙しく動きはじめ、近藤は一人本局の廊下から見えるアースラを眺めしみじみと感傷にひたっていると、一人の人物が近藤に近付いてきた。白いスーツを着こなし、エメラルドグリーンの長髪をなびかせ颯爽とした姿。
涼しげな瞳は綻んだ口元と相まって優しく見える。

「お久しぶりです、近藤元帥殿」

ビシッと敬礼をするその姿を、彼を知る者が見たら驚くだろう。
この男は、捜査などの実績は高いがいかんせんサボり癖がある。
遅刻など日常茶飯事、フランクな態度は基本誰に対しても変わらない。
たとえそれが三提督であってもだ。

「5日振りですかね、アコース査察官。あと、俺はまだ元帥ではないですよ」

近藤も白いスーツの男、ヴェロッサ・アコース査察官に対して敬礼をした。

おや、これは失礼と軽く謝罪するヴェロッサは口元が笑っていた。
それにつられてクスリと笑う近藤はガラス越しに見えるアースラを見た。

「アースラ運用について、イロイロと手回ししてくれたそうで。ありがとうございます」

近藤は頭を下げた。

「よしてください。アースラは廃艦が決定している老艦です。根回しというほどの事はしていません。それに、小さい体で頑張る妹分の願いでもありましたし」

ヴェロッサは恐縮したが、それでも次元航行艦一隻の運用、メンテナンスなどの手続きは膨大である。
ただでさえ少ない人員を割いてアースラを稼動出来るようにするのには相当な苦労があっただろう。

「それに、僕は自分が出来る事をしようと思っただけです。少しでも、貴方の負担を減らしたいと思って、ね」

自重気味に笑い、肩を竦める姿は、いつもの彼のスタイルだろう。
だが、近藤には照れ隠しに見えた。

「僕は貴方が見たこの事件の決着がどういうものなのか知らない。でも、貴方は自ら動いた。僕は、それを信じたい」

ヴェロッサは近藤から直接聞いた。
未来が変わらないのならば、動かず、成り行きに身を任せても同じだと。
そう言っていた近藤が行動に出た。

それがどういう意味を成すのか、わからない。
ヴェロッサは近藤に結末は聞かない。
おそらく、聞けば近藤は教えてくれるだろう。
だからこそ、聞かない。

未来とは、自ら切り開くものだ。
それがどんな結果であろうと、悔いを残してはいけない。

結末を聞けば、慢心が生まれるかもしれない。諦めてしまうかもしれない。どちらにしても、心に隙が生まれる。
それは、致命的なことだ。

未来は自らの手で切り開く。

だが、未来を知る近藤が行動に移したということを受け止める。

必ず、良い未来がまっている、と。

だからこそ、隙を作らず、油断せず、近藤をサポートする。

ヴェロッサもまた、近藤という人間に惚れた一人だったようだ。

しかし、ヴェロッサは言わなければならない。
近藤に、酷なことを。
今日は世間話をするためにきたのではないのだ。
ヴェロッサは真剣な表情で近藤に正対した。

「近藤三尉、いえ、あえて元帥と呼ばせていただきます。近藤元帥、今日は貴方に会わせたい人がいます」

真剣な表情のヴェロッサを見て、近藤は首を傾げた。
会わせたい人？
誰だ？

そう思っていると、柱の影から二人の人物が現れた。
近藤は、その二人を見て思わず息を飲んだ。

それは、近藤をよく知る、幼い頃からの、母のような存在の人。

リンディとレティだった。

フェイトは、アースラへの機材や荷物の搬入作業が終了して休憩に入ろうと本局の廊下を歩いていた。

すると、廊下の先に近藤とヴェロッサを発見した。

声をかけようとしたが、新たに現れた人物、リンディとレティを見て、フェイトは咄嗟に近くの柱に身を隠した。

なんで隠れちゃったんだろう？

隠れてしまったら出ていくタイミング難しくなるよ！

フェイトは自分の咄嗟の行動を悔いた。

だが隠れてしまったのは仕方ない。

フェイトは成り行きを見守ることにした。

リンディとレティは顔色が優れなかった。
表情も暗く、やつれたようにも見える。

二人は地上本部襲撃の際、スカリエッティが暴露したスキャンダルによって直後から拘束されていた。
だが、管理局の上層部と近藤の取引によって、そのスキャンダルは闇へと葬られた。
結果、リンディとレティの罪は無くなり、拘束も解かれた。

たしかに罪は消えただろう。
表向きは。
だが、心の中の罪は消える事はない。
リンディもレティも、ずっと罪の意識はあった。
だが、それを告白するわけにもいかず、リンディはただただ近藤にかいがいしく世話を焼き、贖罪としていた。
レティは、罪から逃げるために近藤から距離を取っていた。
レティはリンディと同じく歴戦の勇として有名ではあるが、メンタル面は決してリンディのように強くない。
自分の罪に自覚はあるし、贖罪をする覚悟もある。
だが、近藤と会うのが怖かった。
レティとリンディは親友であり、家族ぐるみの付き合いもあった。
だから、リンディが近藤を可愛がっていたことも知っていた。
小さい頃の近藤とは何度か会ったこともある。
小さかった近藤は、子供の割には大人しく、だが無邪気な笑顔は子供らしく、そしてどこか儚げな印象だった。
両親を殺されたという、近藤の境遇に同情もした。

だからこそ、近藤に対して更に酷い仕打ちをしている自分が、醜い化け物のように思えて、近藤にそう見られるのが恐ろしくて、会うのが怖かった。

そして、今目の前にはその近藤がいる。

目を背けたい。

逃げてしまいたい。

消えてしまいたい。

でも、もう逃げるのはやめだ。

何があろうと、どうなろうと、受け止める。

自分には、それしかできないのだから。

レティは目の前にいる近藤を見た。

リンディや息子のグリフィスから、現在の近藤の人とナリはなんとなくは聞いていた。

無口で、表情の起伏が乏しく、常に落ち着いた雰囲気のある人物だという。

そんな近藤が、今は驚き、片手で眉間を押さえている。

やはりリンディとレティの存在は近藤にとって『もう会いたくない』存在なのだろうか。

そう思うと、ますます気持ちが沈んでいく。
だが、レティの予想は近藤の呟きによって覆された。

「・・・忘れてた」

・・・

・・・・・・・

「・・・え？」

リンディとレティは声を揃えて疑問符を浮かべた。

何？

何と言った？

二人が鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしていると、目の前の近藤は大きくため息をついた。

「あー、めんどくせー」

「・・・・・・えぇ？」

リンディとレティは我が耳を疑った。
その予想の斜めを行く近藤の呟きに。

「あー、俺はもう何とも思ってないんでー。だから贖罪とかいいんでー。はいしゅーりょー」

近藤はチャラい口調で手をパンパンと叩いた。
リンディとレティは口をポカーンと開け、ヴェロッサはその横でクスクスと笑っていた。

しかし、そんな事で納得できるほど人間が腐っていないリンディは、目を吊り上げた。

「大輔君、私達は真面目に話をしているの。あなたも真面目に聞いて頂戴」

謝罪に来ているリンディが近藤に怒る。
何故か立場が逆転してしまっている。

「でもですね、本人が気にしていない、贖罪もいらないと言っているのに、それについて更に謝られても・・・」

近藤は腰に手を当てため息をついた。

「で、でも・・・！」

レティは声をあげるが、ヴェロッサに止められた。

「だから言ったでしょう?彼は絶対そうするとね」

ああそういえば、とヴェロッサはコンソールを叩きだした。

「お二人は”あの”やり取りを見ていないのでしたね？コレを見たらご自身も納得しますよ」

そう言うとリンディとレティの前にモニタが展開され、映像が映しだされた。

ヴェロッサのこの言葉に、近藤がピクリと反応した。

「・・・まさか」

「そのまさかですよ、近藤元帥殿。”あの”やり取りは録画されていたんです。ああ、首謀者はエレノア女史ですから、あしからず」

ヴェロッサは苦笑していた。

そして、近藤は頭を抱えていた。

近藤とヴェロッサの会話中にも、リンディとレティは映像に釘付けだ。

そして、思わず漏らした声がこれだ。

「・・・・・・うわぁ・・・」

「・・・これは・・・キツイわね・・・」

リンディとレティは映像を見てドン引きしていた。

その映像とは、もちろん先日のやり取り、つまり、近藤が元帥への昇進が決定し、将官や提督を理不尽に追い込みボロクソにしたあの映像である。

じっくり最初から最後まで映像を見たリンディとレティは、なんとも言えない顔で近藤を見た。

「・・・コレを見た後に大輔君に謝ったら人間としてダメな気がする・・・・」

「・・・なんだか、悪に屈服する感じよね・・・」

モニタに映しだされた近藤の無慈悲で極悪な責めを見たことで、考えを改めたようだ。

結果オーライか？

だが、考えを改めてくれたのはいいが、なんか酷いいわれように少し傷付く近藤だった。

「いやあ、僕もコレを見たときは引いたなあ！しかし驚いたのは、あの悪魔のような攻撃が随分馴染んでいたということですよ。もしかして、アレが地ですか？」

ヴェロッサは茶化すように近藤に話し掛ける。

しかし、これまたあまりの言われように、近藤のガラスハートにヒビがピシリと入る。

「・・・あの程度で悪魔とか、地とか言わないでくださいよ・・・」

あの程度

ソレを聞いた途端、リンディ、レティ、ヴェロッサは顔を引き攣らせた。
若干顔色も悪くなる。

そして、三人が揃ってこう思った。

絶対に敵に回さないようにしよう

と。

しばらく三人が顔を青ざめさせ恐怖していると、近藤は近くの柱を見て眉間に皺を寄せ、ため息をついた。

「そんなところに隠れてないで、出てきたらどうですか？」

リンディ、レティ、ヴェロッサの三人は驚いた顔で柱を見た。

すると、柱からなのはとはやてがバツの悪い顔でおずおずと、また、別の柱からフェイトがコソコソと出て来た。

「のぞき見とは、あまり良い趣味ではありませんね」

近藤は腕を組み、眉間に皺を寄せ横一列に並ぶなのは達を見た。

亀のように首を引っ込め恐縮するなのは達。

「ご、ごめんなさい！その・・・のぞくつもりはなかったんよ？近藤さんがこの忙しい時に仕事せんと何処か行っとるから、探しとったんや。そしたら、なんや修羅場が始まっとって、隠れたら出るに出られんようになって・・・」

はやての言い訳に、ヴェロッサは呆れた。

「修羅場ってね・・・はやて、君は近藤元帥を何だと思ってるんだい？」

「えっと・・・極悪非道の悪魔２号？」

「うーん・・・間違ってはいないかな？」

「私的には悪魔２号っていうのが聞き捨てならないんだけど！？ねぇ、１号って私のことかな！？ねぇ！？」

はやての見解に冷静に肯定するヴェロッサ、そして悪魔という単語に敏感に反応し異を唱えるなのは。

ギャーギャー騒ぎだしたはやてとなのはを尻目に、近藤はフェイトを見てため息をついた。

「フェイトさん・・・貴女まで、何をしてるんですか」

「うぅ・・・ごめんなさい」

フェイトは恐縮してペコペコ頭を下げていた。

近藤はまたため息をついた。

今日何度目のため息だろうか？

近藤達は場所を移し、アースラの中へと入り、新たにシグナムとヴィータを呼びブリーフィングルームへと集めた。

シグナムとヴィータはリンディとレティが居ることに驚き、何かを言おうとしたが、近藤によって止められた。

「いい機会なんで言わせてもらいます」

近藤の声色が変わった。

先程までの和やかな雰囲気の声色ではなく、真剣さを帯びた低音の声色に。

未だに悪魔発言について言い合いをしていたなのはとはやても空気が変わった事に気付き、近藤の方を見る。

「真実はどんな結果であれ公表しなければならない、などという世間知らずで無知な綺麗事は言いません。時には真実を隠す事も必要だと思っています」

「・・・大輔君、それは私達の犯した罪を公表するつもりは無い、ということかしら？」

リンディが鋭い視線で近藤を睨む。
そして、近藤は短くはいと答えた。

「それじゃああの不正を捩曲げようとした将官や提督達と同じじゃないですか！」

なのはが声を荒げる。
近藤の言っている事が理解出来なかった。
それはそうだろう、今まで散々利益の為に虐げられていた本人の口から虐げていた者と同じ言葉が飛んできたのだから。
だが、近藤は首を横に振る。

「違います。同じじゃありません」

「どこが違うっていうんですか！？なんで隠すんですか！？」

なのはは今にもつかみ掛かりそうな程興奮していた。
対して、至って冷静に答えた。

「俺が悲しいからです」

近藤は手を胸に当て俯く。

「この真実を公表して、幸せになる人間は一人もいない。あの糞虫達のように利益の為に言っているのではありません。コレは心の問題です」

「・・・それでも、公表するべきやと、私は思う」

はやてが近藤を見つめる。

「たとえ、誰一人幸せにならへん残酷な真実やろうと、それを知る権利がある、教える義務がある。管理局で働く私等は尚更それを遵守せなあかんのちゃうやろか」

「あなた達は誰に許してもらいたいんですか?世間ですか?俺ですか?」

「・・・・・・」

近藤は少しキツイ口調で問い詰めると、皆が声を詰まらせた。

誰に許して欲しいか?

当然近藤である。

だが、近藤は気にしない、許すと言っている。

そう、結局、納得出来ていないのは自分達なのだ。

「なのは隊長」

近藤はなのはを見る。

なのはは思わずビクッと体を強張らせる。

「以前にも言いましたよね?俺は貴女を許すと」

「あ・・・」

「そんなに世論に罰して欲しいのなら、管理局を辞めればいい。そして、人と接触を絶ち、耳を塞ぎ、目を閉じ、口を噤めばいい。そんな選択肢を思い付かなかったわけではないでしょう？でも、あなた達はソレをしなかった」

「それは・・・」

シグナムが言葉を詰まらせる。
たしかに、罪を償うという選択肢に管理局を辞めるというものもあった。
だが、それでは根本的な解決になっていないのではないか？
それは、逃げではないか？

だが、この血塗られた手で救える命、償える罪とは如何程のものか。
ヴォルケンリッターであるシグナムをはじめ、ヴィータ、シャマル、ザフィーラは苦悩した。

生きて罪を償う

死んで詫びる

矛盾が生まれた

しかし、主であるはやては生きて罪を償う道を選び、シグナム達もそれに従った。

死ぬのは簡単だ。
だけど、簡単な方に行くのは逃げているのと一緒だ。
罪を償うならば、いばらの道を。

「あなた達はあえて、生きていばらの道を歩むことを選び、贖罪としたのではないですか？」

「リンディさんもレティさんも、はやて隊長、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長、皆さんこれまでどれだけ罪の意識に苛まれていたか、俺には計り知れません。ですが、あなた達は十分罪を悔い、償ったのではないですか？」

そこまで言って、近藤はフッと笑った。

「これ以上負担をかけたら、あなた達の心も体も壊れてしまう。俺がソレを望んでいると思いますか？」

なのは達は俯いてしまった。
そして、思い知らされた。

結局、なんだかんだと理由をつけて楽になりたかったのだ。

自分は悪いことをしたのだから、皆責めてくれ。
そうしてくれた方が楽だ。
自分の胸の内に留めておくのは辛いんだ。

だから、

誰か
私を
私達を
罰してくれ！

「俺は貴女達が大好きです」

リンディとレティが弾かれたように顔を上げた。

「大好きな人の辛い顔なんて見たくないんです」

なのはとはやてが僅かに震える。

「もし、俺に罪を償いたいというなら」

シグナムとヴィータの瞳が揺れ、そんな二人をヴェロッサとフェイトは柔らかな笑顔で見渡す。

「これからも笑顔でいてください」

リンディは視界がぼやけてくるのがわかった。
目が熱く感じる。
涙があふれてくる。

胸に染み渡る言葉

本当にいいのだろうか？
私達は許されていいのだろうか？
罪は消えない。
消してはならない。
忘れてはいけない。
だが、彼が望むならば、
それで少しでも償えるのならば

「・・・ありがとう・・・！」

リンディは頭を下げた。

でも、ごめんなさい。

今、笑顔を見せるのは無理です。

床にポタポタと水滴が落ちる。
気付けば、レティも同じように頭を下げ涙で顔をぐしゃぐしゃにしていた。

「・・・この痛みを・・・この温もりを・・・忘れてはいけない」

「・・・ああ」

シグナムとヴィータは拳をきつく握りしめ、歯を食いしばり俯く。
今の顔を見られてはいけない。

近藤は笑顔を望んでいる。

こんな、泣きそうな顔は見せてはならない。

次に近藤の顔を見るときは、笑顔で。

フェイトは目尻に溜まった涙を拭った。

よかった。

本当によかった。

そう思ってなのはとはやての方を見た。

すると、なのははフェイトと同じく目尻に涙を溜め笑っていたが、はやては頬を染めてポーッとしていた。

「・・・近藤さん・・・かっこよすぎるやん・・・」

・・・なんだろう、嫌な予感がする。
フェイトは直感でそう思った。

「昨日のスカリエッティに言った言葉といい、今日といい・・・めちゃくちゃ男前やんか」

はやてはウットリしながら呟く。
それに反応したのはヴェロッサだ。

「なんだい、それは？」

はやては近藤とスカリエッティとの会話をヴェロッサやクロノに報告していなかった。
会話の内容が内容だけに、報告するか悩んでいたのだが、カリムに止められ結局報告しなかったのである。

はやては我に返り、しまったという顔をした。

しかし、そこへまた話しをややこしくする人物が現れた。

「にゅふふ～、ソレはね～コレよ！」

「うわっ、エレノアさん！？いつの間に！？」

突如隣にいるエレノアに驚くはやてだが、エレノアは構わずコンソールを操作し、モニタを展開した。

『ひとは常に未来に悩み、喜び、苦しみ、楽しむ。
だからこそ人の命は短く、美しく、儚い。
だからこそ、人は賢明に生きようとする。
だからこそ、人は試行錯誤する。
そうして人は進化していく。
それは、次の時代へと繋げるためだ、子供のためだ、未来のためだ！
お前のように過去にしがみつき、歩みを止め、未来に目を向けない者に
峠の先に待っている未来という暁の明星が見えるはずが無い！！』

わざわざ大音量での映像再生ありがとうございました。
近藤の啖呵を聞き、皆目を丸くして近藤を見つめた。

「はぁぁ～・・・あかん、何回聞いても胸がドキドキする・・・かっこよすぎやで近藤さ～ん！」

はやてはまたポーッとしだした。

「・・・素晴らしい。感動した！胸が高鳴る！私は感動したぞ、近藤！！」

シグナムがボロボロ涙を流しながら近藤の肩を掴み、ガクガク揺らす。

「かっちょえええぇ～」

ヴィータはただただ感動していた。
目をキラキラさせ近藤を羨望の眼差しで見ている。

「あんた等昨日もいただろう！反応が全然違うじゃないか！」

近藤はシグナムに揺すられながらツッコミをいれた。

「昨日はお前の啖呵に感動している余裕などなかったのだ！！」

大まじめな顔でそんなことを言うシグナム。
そして、横でヴィータがコクコクと頷く。

「なんという男臭さ・・・だが、それでこそ僕が惚れ込んだ人だ」

ヴェロッサが不吉なことを口走る。

「なんや、ロッサってもしかしてソッチの人なんか？」

「いいや、僕はソッチ”も”イケるのさ！」

「アコース査察官、そういいながら俺の尻を撫でないでくれるかな」

めちゃくちゃいい笑顔で親指を立てるヴェロッサは、いつの間にか近藤の横に移動し、近藤のお尻を撫で回していた。

「私がもう少し若かったらアタックしてたわね～」

「そうね・・・いや、今からでも遅くはないかも・・・」

頬に手を当てながらまたとんでもないことを言うリンディに、火に

油を注ぐような発言をするレティ。

「ダメー！大輔さんは私のなの！皆近付かないで！！」

フェイトが我慢出来ずに近藤の腕を掴み、自分の元へ引き寄せる。
その際にヴェロッサの脇腹にキッチリ蹴りをお見舞いしていた。

そんなやり取りを見たリンディとレティはクスリと笑った。

結果報告

ヴェロッサ

フェイトの蹴りによって肋骨骨折

エレノア

事件終結までオヤツ抜き

「うひーー！？なんでなのー！？」

「当たり前だ。あんな映像残しやがって。ヘタしたら俺の立場が危うくなるだろうが！」

エレノアは近藤にこっぴどく怒られていた。
正座で。

「またまたー。照れ隠ししちゃって～！」

「・・・お前、もう何も買ってやらん」

「ぎゃーー！？ごめんなさーい！！」

端でそのやり取りを見ていたレティは目を丸くしていた。

「・・・アルファード大将が・・・あんなの初めてみたわ」

傍若無人のエレノアしか見たことが無いレティには、今おやつ抜きで泣いているエレノアの姿が信じられないのだ。

「いつもあんな感じですよ？」

なのはがレティに言う。

「エレノアさんの原動力はスイーツと近藤さんラブやからなあ」

はやてもしみじみと言う。

「・・・はぁ・・・」

レティは気の抜けた返事しか返せなかった。

# 第７４話（後書き）

ココはとある飛行場。
はやてはロングコートを着、エリを立て、顔を隠すようにベンチに座っていた。

はやて　「もうあかん。ついていけん。これは国外逃亡しかない・・・」

はやてはブツブツつぶやく。
そこへ、ポンとはやての肩に手が置かれる。

エレノア　「みーつけた♪」

エレノアは笑顔だった。

はやては心のそこから恐怖した。

エレノア　「ご主人様～！はやてちゃん連れ戻してきた～！！」

近藤　「うむ。それはよくやった、が・・・なんで亀甲縛りなんだ？」

エレノア　「覚えたから試してみたくって♪」

はやて　「ううう・・・麻縄がくいこむ・・・きつい・・・でも・・・いい・・・」

近藤　「はやて隊長が新しい世界に目覚めそうだ！！はやく縄を解け！！」

エレノア　「りょ、りょうかい！！」

はやて　「ふう・・・新しい自分に出会えそうやったんやけど・・・」

近藤　「（無視）さて、では恒例のプレゼントタイムです」

はやて　「いやん、それ放置プレイ？それもゾクゾクするなあ・・・」

エレノア　「・・・ごめんなさい。謝るから、元のはやてちゃんに戻って」

近藤　「では、読み上げます。

剣　流星さんから『酒乱・メダパニ』『不思議酒・パルプンテ』を、

ユニコーンさんから『真・ドラゴンと偽ゲッター集団』を、

虚空さんから、俺宛に『結婚式場案内』指南書『もういっそハーレムもいいのでは？』『地球の古武術全集』『初代ファミコン&ソフト１０本』『海の近くの豪邸』

フェイトさんには『結婚式場案内』『新婚旅行案内』『少し過激な黒の水着』『ハーレム？　どんと来い！』『子供用品一式　革製の首輪＋リード　媚薬　絶倫君マキシマ』

ティアナには『諦めるなまだチャンスはある』『

ハーレム入りそれも一つの手段』『猫耳　肉球　アーム&ブーツ　鍵尻尾』『ライダーの衣装』

なのは隊長には『お義父さん？　いいえ夫です』『ついにハーレム入り』『安心できる存在感をもつ背中』『いくならとことんいこう！』『猫耳　肉球アーム&ブーツ　尻尾』

全員に家の別荘で取れた宝石の肉と虹の実のゼリー　おまけにキューティクルベリーを、

クロノには『ドキッ！　漢だらけのマッスルドッキング大会　ポロリもあるよ』『一ヶ月耐久地獄のビ〇ーズブートキャンプ』『ゲイバーでショータイム！』『オカマバーで夜のランデブー』『漁船で逝く楽しいマグロ漁の旅』『スッパでミッドチルダ一周』『ド〇ルドはＫＹを見るとつい殺っちゃうんだ』『全裸で張り付けにしてその後ＳＭクラブに投げいれる』『しっと団に売り渡す』『しっとマスクへの生贄に捧げる』『漢女と逝く世界漢巡り』『たのしいＳＬＢ千発の刑』『ゲイの巣窟に放り込む』を、

健御雷神さんから、シグナム副隊長に『天下五名剣』『玉露』

エリオに『天下三名槍』とキャロと行く『ディズニーランド二泊三日の旅』

エレノアに今まで出た『イナズマイレブンのゲームソフト全種　（ハード付き）』

クロノに『フェイトの凍てつく視線』を、

シグマさんから『次元連結システム』と『デスザウラー』と『ＩＣＢＭ』『ＦＡＢＥ』を、

白眉さんから、『良く冷えた水羊羹セット』を、

たれねこさんから、スバルに『なのはさんの写真（子供時代）』

ティアナに『セーラー服と近藤さん宛ラブレター』を、

黒鷹さんから、『対ガジェット・ドローン用兵器』『ＡＩ

Ｆ－９Ｖゴースト』『ＦＲＸ－９９レイフ』『ターミネーターＴ－１００』『Ｔ－８５０』『Ｔ－１０００』『Ｔ－Ｘ』『デストロイヤー・ドロイド』と『対ゆりかご用戦艦群』『Ｎ－ノーチラス号』『ナデシコＢ』『ミネルバ』『ドミニオン』『バトル・ギャラクシー』『大ＹＡＭＡＴＯ零号』

真田信幸さんから、『超弩級宇宙艦グランヘイム級戦艦』を、

荷物もちさんから、『Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩ』機、『アイアンメイデイ（棺型）』『言語変換機キズナ粉☆砕くん』『ピカチュウ（常に視界に入るクロノに向け１０万ボルトとボルテッカーを放つ）』

フェイトさんには『近藤さん目覚まし』（「朝ですよフェイトさん、おきてください」と耳元で囁く声付き）・・・えぇ～・・・

ヴィヴィオには喋る歩く笑うぬいぐるみ『カー○ィ』を

女性陣（近藤さんに惚れている人全員へ）には『近藤さんとの甘い時間○○編』（○○にはそれぞれの名前が入っている）ちょいと過激な模写が入る同人誌を、

荒神丸さんから、不憫なユーノとクロノに『幸運の訪れるお守り』とあらゆる攻撃から身を守る『ＡＴフィールド』と破壊魔定光で登場した『緊急回避』を、

以上です」

はやて「おいコラシグマ！私は見逃さんぞ！！なんや『ん？　質量兵器？　知らんがな！』て！？確信犯か？確信犯やな！！ちょい

あんた、今からアースラ体育館の裏に来い！なのはちゃん直伝のＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩを体の髄まで叩きこんだる！！」

近藤　「アースラ体育館・・・なんだその無茶苦茶な場所指定・・・」

シグナム　「天下五名剣・・・鬼丸国綱（おにまるくにつな）大典太光世（どうじぎりやすつな）（おぃてんたみつよ）童子切安綱（みかづきむねちか）三日月宗近（じゅずまるつねつぐ）数珠丸恒次・・・すばらしい・・・」

近藤　「ちょっと待ってください。それら全て国賓で博物館とかに大切に保管されているはずでしょう？しかも、鬼丸国綱・・・これ『御剣』で、宮内庁に所蔵されてるはずじゃあ・・・」

はやて　「国家を揺るがす犯罪や・・・」

シグナム　「近藤、貴様の腕で無かったことにしろ」

近藤　「無茶振りキタ！！」

シグナム　「もうコレ等は私のものだ。絶対返さんからな！！」

はやて　「シグナム、目、目！目が逝ってるで！？帰ってこーい！！」

エリオ　「僕には天下三名槍・・・日本号（にほんごう）蜻蛉切（とんぼきり）御手杵（おてぎね）・・・すごい・・・」

近藤　「御手杵なんて、太平洋戦争で焼失したって聞いてたけど・・

・よく見つかったなぁ・・・しかも蜻蛉切も長いままだし」

エリオ　「え?この蜻蛉切って何かされたんですか?」

近藤　「持ち主の本多忠勝がな、晩年には体力の衰えもあって、蜻蛉切を短く詰めたんだ。でも、この蜻蛉切二丈（６００?）あるしな・・・」

エリオ　「へ～・・・」

はやて　「物知りやな～近藤さん」

近藤　「今流行の歴女だったらもっと知ってると思いますよ?」

シグナム　「うむ、当然だ!」

はやて　「シグナム、歴女やったんか!?」

シグナム　「ええ!私は真田幸村と伊達政宗のカプが一番好きです!!」

はやて　「言うてることが一っつもわからん・・・しかも歴史関係なさそうや・・・」

エリオ　「お父さん、カプってなんですか?」

近藤　「・・・もう少し大きくなったら教える・・・」

フェイト　「また来た・・・猫耳、首輪、尻尾、肉球アーム、ブーツ・・・ん?なのは宛なの?」

なのは　「なんでか私に来たよ・・・」

ヴィヴィオ　「あにゃまる探偵キルミンずぅみたい!!」

フェイト　「ヴィ、ヴィヴィオ!?どうしてここに!?ゆりかごにいるはずじゃあ・・・」

ヴィヴィオ　「散歩がてらちょっと」

フェイト　「・・・ヴィヴィオがなんかおかしいよ?」

なのは　「フェイトちゃん・・・ここは突っ込んだら負けなんだよ。だから、そのままスルーするの」

ドゥーエ　「あら、ヴィヴィオったら、また抜け出したの?ウーノが探してたわよ?」

なのは　「さらっと現れたドゥーエさん・・・意外と冷静ですね」

ドゥーエ　「まあ、子供はドロドロに汚れるまで遊んで、大人に迷惑かけたりするのが仕事だからねぇ」

フェイト　「子育て経験がありそうな発言ですね」

ドゥーエ　「言っとくけど産んではいないわよ。ただ、いままでの仕事でベビーシッターとか、そういうことをする機会があったの」

なのは　「・・・苦労してるんですね・・・」

ヴィヴィオ　「あ！カー◯ィのぬいぐるみ！！かわいいー！！」

ドゥーエ　「よかったわね、ヴィヴィオ。さ、そろそろ帰りましょうか？」

ヴィヴィオ　「うん！・・・これでピーマン食べなくて済む・・・（にやり）」

なのは　「こらヴィヴィオ。向こうでもピーマンはきちんと食べなさい」

ヴィヴィオ　「ふえ～ん・・・ドゥーエおねえさーん・・・」

ドゥーエ　「ダメよ、私に助けを求めても。食物は命、命はすべからく口にいれなさい」

ヴィヴィオ　「むずかしいことはわかんな～い」

ドゥーエ　「ようするに、好き嫌いしたら、セインみたいにつるぺたになるってことよ」

ヴィヴィオ　「しっかり食べます！！」

なのは　「子供の扱いうまいなあ・・・」

フェイト　「男の扱いに通じるものがあるのかな？」

ヴィヴィオ　「それじゃあなのはママ、フェイトママ！また戦場で

ー！！」

なのは・フェイト　「物騒だなぁ・・・」

スバル　「ちっちゃいなのはさん萌え～♪・・・ティア？なのその服」

ティアナ　「・・・さあ？セーラー服？何かしらね？それと猫耳、首輪、尻尾、肉球アーム、ブーツ、尻尾・・・なにこの変態グッズ」

スバル　「えー？かわいいじゃん！」

ティアナ　「それと、この無責任な本の数々・・・私の命がいくつあっても足りないわよ・・・」

スバル　「ティアナは自分の武器を前面に押し出すべきだよ！」

ティアナ　「私の武器？スタイルはフェイトさんに負けてるし、ルックスも隊長達に太刀打ちできないのよ？」

スバル　「若さだよ！！」

ティアナ　「意味わかんないし。大体、私となのはさんやフェイトさんとは3歳しか変わらないし」

スバル　「でも、そのセーラー服とかってやつ、なのはさん達が着たら結構キツイと思うんだよね」

近藤　「うむ、それは同意する」

ティアナ　「うわ！？副隊長！？」

近藤　「そのセーラー服ってのは、隊長達の世界の学生に制服だそうだ。ちなみに、あの3人はブレザーだったらしい」

ティアナ　「・・・はぁ・・・そうですか」

近藤　「なのは隊長達はな、年齢より大人っぽく見えるんだ。だから、今セーラー服なんか着たら、風俗嬢みたいに見えるんだ」

ティアナ　「・・・私は何も言いませんし、聞いてません」

近藤　「ティアナ・・・今度番外編でもいいから、着てくれないかな？」

ティアナ　「ええ！？そ、そんな・・・で、でも、どうしてもっていうなら・・・（テレテレ）」

近藤　「どうしても！」

ティアナ　「・・・わかりました。着ます！！」

近藤　「よし！本人の了解は得たぞ！！作者、すぐに話し考えろ！！」

作者　「無茶言うな・・・・」

## 第７５話（前書き）

最近気まぐれで買った漫画の「進撃の巨人」がすごかった。
ああいう絶望と戦う姿が書ければなあ、と思った。

なにはともあれ７５話です。
今回、前半はともかく、後半からかなりシリアスになります。
そして、次回、かなりショッキングな内容になります。

そういうのを踏まえてみていただけると幸いです。

# 第７５話

日が傾き始め、世界は黄昏色に包まれた。
紅と黒のコントラストは幻想的で、暗闇の始まりを告げる月は輝きを増す。

そんな時間に、ヤンは部隊長室で頭を抱えていた。

原因は近藤である。

自分の預かり知らぬ間に元帥に昇進、しかもあの記者会見前に会議を開いた時に出席していた将官や提督のほとんどか辞職の意思を示しているという。

ヤンの最大のバックボーンであるアリストなどは、あまりのショックに髪が真っ白になり、胃潰瘍で入院している。

一体、どんなショックな事があったのか、ヤンはアリストに問い質したが、アリストは震えるのみで答えようとはしなかった。

とにかく、状況は最悪である。

近藤には捨て駒としてイロイロ酷い扱いをしてきた。

自分の利益のために切り捨てもした。

だが近藤ははい上がってきた。

そして遥かな高みへと登りつめた。
登りつめた先には、元帥。
極官である。
近藤は管理局の最高権力を手に入れた。

ヤンの額に玉のように汗が吹き出る。
近藤は必ず復讐してくる。
自分は復讐されるほどのことをしてきたのだ。
だが、なんとか切り抜けなければならない。
ヤンは生き残る為の策を練り出した。

そんなとき、プライベート回線からメールが届いた。
送り主は妻からだった。

『今日はいつも通り帰って来ますか？
ニールが算数のテストで１００点を採ったので、夕食は少し豪華にしようかと思います。
早い帰りを待っています。
Ｐ．Ｓ．あなた宛てに荷物が届いていましたので書斎に置いておき

ました。』

ヤンの口元が綻ぶ。

そう、自分には守るべき、愛するべき家族がいる。
近藤などにこの幸せを潰されてなるものか。

ヤンの瞳に決意が宿った。

時間は少し遡り、空の色がまだ明るい水色に支配されている時間帯、アースラの艦内では、前線メンバーの仕事が終わったのを見計らって、近藤がまたとんでもないことを言った。

「いまから皆さんの体を調整しますから、裸になってください」

手をワキワキと動かしながら、しかし真面目な顔はアンバランスである。

エリオとキャロを除く前線メンバーが顔を真っ赤にしたり、何故か体をくねくねしだしたり、軽蔑の眼差しを近藤に向けたりした。
そんなカオスな空気の中、シグナムは近藤のその手の動きに心当たりがあった。

「近藤、もしかして調整とはマッサージのことか？」

「そうです」

それを聞いた前線メンバーはガクッと肩を落とした。

「紛らわしい言い方と、いやらしい手つきをするな！」

ヴィータがプリプリ怒る。

他の者も、ブーブー言ったり、拍子抜けして肩を落としたりと、様々な態度をとる。

「皆さん、俺は大まじめです。特になのは隊長、他の方が拒否してもあなたは強制です」

「ふえええぇぇっ！？」

なのはが顔を真っ赤にして泣きそうになる。

「大輔さん、今そんな事を言うのは何か理由があるんですよね？」

もし・・・無かったら・・・

フェイトは光を反射しない濁った瞳でバルディッシュのハーケンフォームを振りかぶった。

首ちょんぱの危機である。

「も、もちろんあります！論より証拠、シグナム副隊長に聞きましょう。シグナム副隊長、以前マッサージを受けた次の日の体調はどうでしたか？」

近藤はやましいことはないのに焦りだした。
そりゃあ鎌を振りかぶられたら怖いだろう。

「マッサージを受けた翌日か・・・確かに、ストレスや体の疲れが無くなって体調は万全だった。今まであれほど体調が万全だったのは数えるほどだ。それに、肌の艶やハリがすごかった」

シグナムは顎に指をのせて思い出していた。

「成る程、ようするに決戦前に体調を万全にする、いうことか」

はやてがフムフムと頷く。

だが、近藤はそれだけではないと言った。

「今回の事件は、余裕を残して戦える相手ではありません。皆が限界ギリギリ、もしくは限界突破まで力を振り絞る戦いになります」

近藤のその言葉に、フォワード４人はゴクリと息を呑んだ。

「もし限界突破まで力を使えば、体への負担は相当なものになる。最悪、後遺症などが残って以前のように生活できない体になる恐れもある」

「・・・ブースト・・・」

エリオがぽつりと呟き、それを敏感に聞き取ったなのはがビクッと体を強張らせた。

「俺がこれから行う調整というのは、その限界突破に耐えられるようにする処置です」

「そんなことできるんですか？」

スバルが疑わしい目で近藤を見る。

なんだかんだと理由をつけて、本当は自分達の体を触りたいだけではないのか？

そんな考えがアリアリとわかる視線でスバルは近藤を見るのである。

「信じる信じないは好きにしてくれ。でも、俺は皆誰一人として傷ついてほしくないし、後遺症なんて残してほしくないんだ」

近藤は真剣な表情で皆の顔を見渡した。

「私、受けます」

ティアナが手を上げた。

「私も受けよう」

シグナムも挙手する。

「ティ、ティア正気！？」

スバルがティアナの肩を掴みガクガクと揺らす。

その表情は焦りに染まっている。

冗談じゃない！
近藤副隊長が、かわいいティアに何もしないわけがない！
私のティアの危機だ！
「誰が私のティアよ」
「ひ、人の心を読まないで！？」
ティアナの冷たい視線がスバルに突き刺さる。
「確かに、近藤副隊長は真実の全てを話さない人ではあるわよ。でも、嘘はつかない。だから、副隊長が言ったことは全て本当のこと。だから、私は信じる」
「そうだな、実際私はマッサージを受けた効果を知っている。だから近藤の言うことに嘘はあるまい」
ティアナとシグナムは真剣な表情で、しかし信頼しているという表情で近藤を見た。
結局、全員が処置を受ける事になり、まずはティアナが受けた。
メディカルルームで二人きり。

シグナムが言うには、ティアナは背中がパックリ開いた服を着て近藤に体をまさぐられていらしいのだ。

もし間違いなどが起これば・・・

フェイトとスバルから殺気があふれる。

３０分後、ティアナはメディカルルームから出て来た。

それもお肌ツヤツヤに満面の笑顔で。

「・・・凄かった・・・」

ティアナの呟きに狼狽するフェイトとスバル。

「・・・な、何が？」

「とにかく凄かった」

質問してもティアナは凄いとしか言わず、そのままあてがわれた部屋へと消えていった。

「次の方、どうぞ」

病院の診察のような言葉が響く。

ティアナのあの言動をどう取っていいものか、なのはやはやては悩んだ。

「じゃあ、僕行きます」

エリオが挙手してメディカルルームへ入っていった。

30分後、エリオはティアナと同じく肌をツヤツヤにして出て来た。

「・・・凄かったです・・・」

エリオは満面の笑顔と軽い足取りで自室へ帰った。

その後キャロ、シグナム、スバルと続いた。

最初半信半疑だったスバルも、いざ出てきてみれば満面の笑顔で「凄かった・・・」と呟いていた。

そして次にフェイトが行くことになった。

フェイトはメディカルルームに入ると、緊張した面持ちで近藤を見た。

近藤は机に向かい何かを書き込んでおり、フェイトと目を合わせない。

だが、フェイトが居るのはわかっているようだった。

「ではフェイト隊長、そちらのカゴに入っている服に着替えて下さい。ああ、下着を脱ぐのも忘れずに」

フェイトは近藤に言われるまま着替えた。

背中がパックリあいている病院着のような服は、生地が薄いのかスースーする。

この服、上半身だけで下、ズボンなどはない。
なのに丈が短く、マイクロミニのような短さなのだ。
しかも下着を履いていない。
少しでも屈もうものなら、見えてしまうだろう。

フェイトは顔を真っ赤にして服の裾を引っ張りながら精一杯肌が見える面積を少なくしようと必死になりつつ、足をモジモジしだした。

（こ、これは、かなり恥ずかしい・・・いろいろと見えちゃいそう・・・）

フェイトは、もしかしたら近藤はこのまま我慢できずに熱いパトスを我が身に向けるのではないかと思いはじめた。

そう、近藤も男、こんなに肌を晒した女がいたら狼になっても不思議ではない。

・・・というか、ちょっとは狼になってくれないかな・・・

などと不埒な事を考えていた。

「では処置を始めます。フェイト隊長、ベッドにうつ伏せになってください」

近藤の言葉によって現実に引き戻されたフェイトは、指示通りベッドにうつ伏せになった。
フェイトのスタイルは抜群である。

出るところは出て、引っ込む所は引っ込んでいる。
しかも、胸が大きい。
なのはよりも、はやてよりも。
シグナムには負けるが、それでもグラビアアイドル顔負けのプロポーションの持ち主なのは間違いない。
そんな彼女がうつ伏せになるのだ。
自重に負けた胸は行き場を失い、体の横へと逃げる。
背中がパックリ開いた服からは、いわゆる”横乳”が見えていた。
フェイトはそんな自分の状況に心臓をバクバクと鳴らせる。

しかし、当の近藤は全く反応せず、検診を続けていたのだった。
近藤はベッドの横に立ち、フェイトの体を触るでなく、ただ空中で手を動かしていた。

（・・・？何をやってるのかな？）

うつ伏せになっているフェイトには近藤が何をしているのかがわからなかった。
が、程なくして近藤はベッドから離れた。

「はい、しばらく楽にしてください」

「は、はぁ」

フェイトは近藤の言う通りうつ伏せの姿勢を解き、ベッドに座った。
一体どういうことだろうか。
近藤は空中で何をしていたのだろうか？
フェイトは疑問に思ったが、近藤は机に向かい、カタカタとコンソールをたたき出した。

「フェイト隊長、コレを見てください」

近藤はそう言うと、フェイトの前にモニタを展開した。
モニタには、何かの模様のようなものが映し出された。

中心に大きな丸があり、そこから木の枝のような、血管のような、
そんな数多の線が四方八方に複雑に絡み合って伸びていた。

「・・・これは？」

フェイトは近藤に質問した。

「これはフェイト隊長の魔力の流れです」

「・・・え？」

フェイトは首を傾げた。

「この中心の丸がフェイト隊長のリンカーコアです。そして、そこから伸びる線が体を循環している魔力です」

近藤は事もなげにそんなことを言った。
だが、フェイトは目を丸くした。

「魔力の循環って、そ、そんなもの見えるんですか！？」

「まあレントゲンなどの応用です」

近藤はサラッと言うが、フェイトはこれ以上突っ込んでも仕方が無

いと判断し、とりあえず「はあ」と生返事を返した。

「技術云々は置いといてください。とりあえず、画面の魔力の線を見てください」

フェイトは近藤に言われるまま、モニタを見た。

近藤が言うには、魔力の循環に濁りがあるそうだ。
これは、最近の激務によるストレスから来ているものらしい。
そして、今のまま無理をすれば、リンカーコアを傷つけかねないという。

「じゃ、じゃあどうすればいいんですか？」

フェイトは若干顔を青くして近藤に質問した。

「その為に今から処置をします」

近藤はそう言うと、フェイトを再びベッドに俯せにし、マッサージを始めた。

「あの・・・ん・・・このマッサージが、一体何の意味が・・・あん・・・」

フェイトの口から時折艶のある声が漏れる。
これは気持ちいい。
自分より前に受けた者が、凄かったと言うのも頷ける。
だが、近藤は全く反応せず黙々とマッサージを続ける。

「このマッサージによって澱みのある流れを正常にします。魔力の流れは身体と密接に関係しています。まあ血流の流れをスムーズにして新陳代謝を促進するのと同じだと思ってください。更に、フルドライブや自己ブーストを行ってもリンカーコア及び身体に負担をかけないように循環ルートを強化させます」

近藤の言っていることはもう無茶苦茶だが、フェイトは近藤の言葉にハッとした。

「・・・だからなのはは強制だって言ったんですね？」

「そうです。あの人は絶対無理をする。言っても聞かないでしょうしね。だから、その無理を少しでも無理じゃないようにします」

フェイトは感心した。

そうか、その発想はなかった。

無茶を止めるより、その無茶を無茶にならないようにサポートする。

「この戦いは確かに重要です。でも、なのは隊長達にとってもっと重要なのはその先、何十年と続く未来です。あくまでこの戦いは長い人生の通過点でしかないのです」

近藤は話ながらも手を止めることなくマッサージを続ける。

「輝かしい未来ある若者に、道を示し導くのは年長者の役割ですから」

フェイトは近藤の言葉を黙って聞きながらマッサージを受け、あま

りの気持ち良さに眠たくなりはじめた。
だから、近藤の言葉の意味に気づかなかった。
その未来に近藤自身が含まれていないということに。

３０分後、フェイトは鏡で自分の顔を見て驚いていた。
「はわぁ～・・・お肌がツルツルのプリプリ・・・」
フェイトの肌はむきたてのゆで卵のようにツルツルで、しかも赤ん坊のようなプリプリの柔らかさ、体調は今まで味わったことが無いほど万全。
体中に血流、魔力が行き渡っているのがわかる。
指先からつま先、髪の毛の先にまで魔力が充実しているのがわかる程のみなぎる力。
今でこれなら、休養を取った明日にはどれほどになっているのか。

「・・・凄い・・・」

フェイトは思わず呟く。
そう、もう凄いとしか言えなかった。

「処置終了です。今日はもう何もせずにゆっくり休んでください。魔力の循環を定着させるには時間がかかりますから」
近藤は淡々と事務的に説明し、フェイトの処置は終了した。

その後、渋っていたヴィータが意を決してメディカルルームへ突入し、やはり出て来たら「凄かった・・・」と満面の笑みで呟き、はやて、なのはも近藤の処置を受けた。

そして、二人とも呟いた。

凄かった・・・

皆が宛てがわれた部屋で寝静まった頃、一人ブリーフィングルームで作業をしている人物がいた。
それは近藤だった。
コンソールを叩く電子音だけが鳴る静寂な部屋で、近藤は”これからの事”を反芻していた。

そんなとき、近藤が見ているモニタに侵入者の警告ランプが点灯した。
場所はクルー搭乗口、近藤は監視カメラの映像を確認した。

そして、その侵入者を見て顔をしかめ、呟く。

「ふん・・・予定通り・・・ね・・・」

その侵入者はフラフラとあちこちさ迷いながら、ブリーフィングルームに入り、目当ての人物を見つけ安堵した。
その侵入者は隠れはしなかったが、腰を屈めた態勢で、その探していた人物の前まで歩く。
顔には卑屈に媚びた笑顔を張り付け、低姿勢であることを現すように腰を低く構え、揉み手をする。

「これはこれは、探しましたよ、近藤元帥殿」

アースラへの不法侵入をした人物とは、ヤンであった。

今までの高圧的な態度とは一変して、媚びへつらう姿は卑屈であり、醜悪であった。
亀のように首を隠し、肩を竦め、ヘコヘコと頭を上下しながら、愛想笑いを貼付けた顔に、近藤は眉をひそめた。

「このような時間に不法侵入とは、どのような用件でしょうか、ヤン一佐?」

近藤はすぐにヤンから目を離し、再びコンソールを叩きはじめた。

「・・・艦内がやけに静かですな?他の者はどうされたのですか?」

へらへら愛想笑いをするヤンはキョロキョロと周囲を見渡す。

「皆決戦に向けて就寝しています。今艦内で作業をしているのは、当直の者と数人の作業員、それと自分だけです」

相変わらず手を止めることなく、ヤンを見ることなくコンソールの電子音が鳴り続ける。

「用が無いのなら退出願えますか？自分はあなたに構っている暇などありませんので」

近藤は冷たく言い放ち、それを聞いたヤンはこめかみをピクッとさせたが、すぐにへらへら笑い出した。

そして、ヤンはいきなり土下座をしだした。

「近藤元帥殿、今までの事を許して頂きたい」

床に額をこすりつけ、懇願する。

「私には家族がいる。養わなければならない。いや、あなたのお怒りはごもっともです。あなたにした仕打ちは許されるものではないでしょう」

ヤンはゆっくり顔をあげた。
その瞳は涙に濡れていた。

「私も追い込まれていたのです。少しでも家族に裕福な生活を送らせてあげたいと。ならば、私の地位をあげればよいのだ、と。家族を思ってこそのことなのです」

近藤はヤンを見ず、コンソールを叩き続ける。
そんな態度に、ヤンは少し焦りはじめた。

「これからは心を入れ替え、あなたの手足となります。犬となりま

す。ですから、これまでの事は水に流していただけないでしょうか？」

ヤンはまた床に頭をつけた。
勢いよくゴツンと音をたてて。

生き残るためなら、どんなことでもしてやる。
以前の部下にも土下座してやる。
靴を舐めてやる。

今の幸せの為ならば、なんでもしてやる！

ヤンは土下座しながらそんなことを考えていた。

そして、コツ、コツと足音がヤンに近づいてきた。
顔は上げなかったが、靴が見えた。
それは近藤の靴だった。

ヤンは、ニヤリと口元を歪めた。

所詮人間は情や家族等を訴えると揺らぐものなのだ。

ちょろいもんだ

すると、目の前にポロッと何かが落ちてきた。
それはボールペンだった。

「ヤン一佐」

近藤の抑揚の無い声がする。

「は、はい」

ヤンは、土下座のまま返事をした。
顔には歪んだ笑みを貼付け、勝利を確信していた。

これから起こる地獄を知らずに。

「そのボールペンで右目を突き刺せ」

ヤンは近藤が何を言ったのか理解できなかった。

予想していた言葉とは掛け離れた言葉が飛んできたのだ。

「・・・は？」

ヤンにはそれしか言えなかった。
マヌケな顔で近藤を見た。

そして、ヤンは戦慄した。

近藤の目は、人間を見る目ではなかった。
汚物を見るような
家畜を見るような
モノを見るような
そんな冷たい目だった。

近藤はしゃがみ込み、土下座の姿勢のヤンと目線を合わせる。
「まずはそのボールペンで自分の右目を突き刺せって言ったんだ」
感情の篭らない声に、ヤンは心の底から恐怖した。
「そ、そんなことしたら、私は死にます！」
ヤンは焦りまくる。
嫌な汗が吹きだし、必死に弁解する。
だが、近藤は冷たく言い放つ。
「だからどうした」
ヤンは耳を疑う。
自分の知る近藤はこんなことを言う人間ではなかった。

こんな目をする人間ではなかった。

コイツは本当に近藤か？

近藤は落ちていたボールペンを取り、ヤンに手渡す。

「ほら、早くしろ」

ヤンは顔を青ざめさせ、声を荒げた。

「で、できるわけがない！私には家族がいる！こんなところで死ぬわけにはいかない！！」

ヤンがそう言うと、近藤は立ち上がり、コンソールをカタカタと操作しだした。

すると、二つのモニタが展開した。

ヤンはそれを見た途端、勢いよき立ち上がり叫んだ。

「ニール！？」

モニタのひとつには、少年が暗い部屋で一人椅子に縛り付けられ、目隠しをされていた。

それは、ヤンの息子のニールであった。

『・・・！？パパ？パパなの！？』

少年、ニールはヤンの声を聞くと縛られた体を動かし、叫んだ。

『パパ、助けて！！』

「ニール！！」

ヤンが叫ぶと、モニタが消えた。
そして、近藤を睨んだ。

「近藤・・・貴様・・・！！」

憎しみの篭った声を出すヤンだったが、近藤は相変わらず無表情だった。

「自分の右目を突き刺せ」

抑揚なく、感情の篭らない声で再三命令する。

「・・・外道が！！」

ヤンの額に血管が浮き出る。
怒りで顔が真っ赤になる。

だがどうする？
本当に目を突き刺していいのか？

それでニールが無事に帰ってくる保証もない。

ヤンは頭をフル回転させ、この状況を打破しようと考えた。

そのとき、消えていないモニタを見てしまった。
映っているのは家。
どこかで見たことがある家。

「・・・私の・・・家・・・か？」

家の外観はヤンの家だった。

部屋の明かりが点いているということは、家に妻がいるということだ。

「さて、先日、あなた宛てに荷物が届きませんでしたか？」

ヤンは近藤の方を見た。

近藤は、いつのまにか携帯端末を手に持っていた。

先日？

荷物？

そこで、妻からのメールを思い出した。

『今日はいつも通り帰って来ますか？

ニールが算数のテストで１００点を採ったので、夕食は少し豪華にしようかと思います。

早い帰りを待っています。

Ｐ．Ｓ．あなた宛てに荷物が届いていましたので書斎に置いておきました。』

『P．S．あなた宛てに荷物が届いていましたので書斎に置いておきました。』

「あの荷物が爆発物だったら困りますよねぇ？」

「なぁっ！？」

近藤の言葉に耳を疑った。
この男は家族をたてに脅迫してきたのだ。

そして、ヤンは納得した。
そうか、だからあの時の将官や提督は軒並み辞職に追い込まれたのか、と。

やることがえげつない。

正気の沙汰ではない。

本来ならば、ここで近藤に屈服して終わりだろう。
だが、ヤンはなまじ昔の近藤を知っているために、つい強気で出てしまった。

そう、最悪な選択をしたのである。

「・・・ふん、そんな見え透いた嘘で脅迫とはな・・・」

ヤンは近藤を睨む。
そう、この男がこんな大胆な、しかも犯罪行為に及ぶはずがない。
そう裏付けての反論だった。

だが、近藤は携帯端末を操作しながら言う。

「１０秒以内に右目を突き刺せ。しないならば、家と奥さんもろとも爆破する」

ヤンと近藤の駆け引きが始まった。
と、ヤンは思っていた。
ヤンだけが、駆け引きだと思っていた。
嘘だと思っていた。
近藤に人の命をどうこうできる度胸など無いと。

そして、１０秒経過した。

近藤は無言で、ヤンを見ずに携帯端末のボタンを押した。

瞬間、モニタに映る家が爆発した。

# 第７５話（後書き）

近藤　「はい、恒例のあとがきタイムです！！」

はやて　「うん、そやね」

エレノア　「醒めてるね・・・」

はやて　「あきらめとんねん」

近藤　「さて、今回は始める前にご報告があります」

なのは　「なになに？」

近藤　「実はＰＶアクセスが１０００万を超えてました」

はやて　「なんやてー！？」

エレノア　「ユニークも８０万を超えてるね」

ヴィータ　「マジでか！？」

近藤　「はっきり言っていいですか？」

フェイト　「なにかな？」

近藤　「こんな駄作に１０００万も・・・」

シグナム　「それ以上言うな！切り殺すぞ！！」

はやて　「あんた主人公にあるまじき発言ポンポン飛ばすから怖いわ！！」

なのは　「見てくれてる人に失礼だよ！！」

ヴィータ　「お前もう死ね！！」

近藤　「ご安心を。皆さんより早く死にますから」

シグナム　「くぅっ・・・リアルに真面目な返しをされたら反論できんではないか！！」

フェイト　「そんなことより、気になった事があるんだけど」

近藤　「なんでしょうか？」

フェイト　「いままでこのアクセスの事は話の間に挟んでたのに、なんで今回はあとがきなの？」

近藤　「答えは簡単。間に割り込ませて話の雰囲気を崩したくなかったんです」

なのは　「このあとがき書いてる時点で意味無いと思うけど・・・」

近藤　「まあ、ここは読まない人もいますしいいんじゃないですか？」

エレノア　「それじゃあ恒例のプレゼントターイム！！いきまっしょい！！」

ヴィータ　「あのテンションうぜぇ・・・」

近藤　「それでは、

　カガヤさんから、

　俺とエレノアに『初代プリキュア変身セット』を…

二人で楽しんで下さい（笑）・・・いや、無理だろう・・・

　なのは隊長には、『エスカリボルク』

　フェイトさんには、『エクスカリパー』

　はやて隊長には、『アイアンメイデン』

　ティアナには、『アーマライトＭ１６（弾は魔力弾）

』

　ナカジマ姉妹には、『Ｗドライバーとメモリ全部』

を、

　バルディッシュさんから、

　シグナム副隊長に、『火車切広光』、『鉋切長光』、

『子烏丸天国』、『立花道雪雷切』、『蜘蛛切』、『鬼切』

　エリオには、『ゲイボルク』、『ロンギヌス』、『

ブリューナク』を、

　剣　流星さんから、

　ジグナム副隊長に『天秤座黄金聖衣に付いている、

星をも砕く天秤座のソード』

　エリオには同じく『天秤座のスピア』を。

　フェイトさんには俺が浮気でもした時に縛る為の鎖

として『神聖衣化したアンドロメダのネビュラチェーン』を・・・、

　健御雷神さんから、

　シグナム副隊長ご希望の『伊達正宗と真田幸村のカ

プの装備セット』と『神代三剣』と『源氏の八領』を、

　俺には『樹雷第二世代戦艦のコアユニット（木の名

前はフェイトさんに命名を頼みます）ちなみに艦内は地球二十五個分の広さです地球産の全種のウサギが生息済みです後近藤勇の装備セット』を、

フェイトさんに指南書『提督婦人の嗜み』と『イブニングドレス』を、

最後にクロノとユーノに『銀河貨物船で逝く便所掃除の旅』を、

流狼人さんから、

はやて隊長に荒縄＆（行き着いた私の本性＜Ｍの性＞）

セインに牛乳一カ月分

ティアナに（激撮！パワハラの避け方＆一見！不倫の仕方＜黒野？監督監修＞）を

九郎さんから、

シグナムには、六爪とハーレーＶＲＳＣＤＸを、

神崎はやてさんから、

俺に燕尾服、

フェイトさんに、純白ドレス

はやて隊長に、攻略本『狸の横取り必勝法』を、

たれねこさんから、

俺に『フェイトさんのアルバム』

エレノアに『３人娘の恥ずかしい黒歴史本』

フォワード陣（隊長含む）に『ゴスロリ衣装』を、

ドラゴンノーツさんから、

俺に『遥けし彼の地より出づる者の呼び出し券（ＫＯＦ）、ヴァオー＋メルツェェェル！！！、ファンタズマ、排除君（ＡＣ）、狂戦士の甲冑（ベルセルク）』を

フェイトさんには『マイクロ水着（黒）、近藤を惚れやすくする薬（キサラギ、アクアビット、トーラス印）』

シグナム副隊長には『天ノ叢雲、闇魔刀』

クロノには『ゲイヴン認定証』
六課の人たちには一平ちゃん一年分を
武闘鬼人さんから、
エリオにキャロのパンツ二年分を、
マジンハウスさんから、
俺に『亜空間転送装置』『惚れ薬』『若返りの草』
クロノに『ギャグキャラ薬』『ビックバンかめはめ破』
黒鷹さんから、
ユーノ先生に『世界の銘酒１００本』
ヴェロッサには『バーバリーのオーダーメイドスーツ一式』
シグナム副隊長に『ライトセイバー（スター・ウォーズ）』
ザフィーラさんに『間流結界術（結界師）』
ヴィータ副隊長に『鉄槌（Ｄ．Ｇｒａｙ－ｍａｎ）』
シャマル先生に『アリス・イン・ワンダーランド（武装錬金）』を、
白眉さんから、
俺に『アルテマウェポン』『ブリューナク』『キーブレード「キングダムチェーン（闇）」「過ぎ去りし過去」「約束のお守り」』『χブレード』
フェイトさんに『ミネルバヴィスチェ』『広域殲滅用天使兵器通称（ゼルハイロウ）』『キーブレード「フェンリル」』
なのは隊長に『プリティリボン』『キーブレード「デスティニープレイス」』
はやて隊長に『備前長船（中の人つながり）』『キーブレード「ブライトクレスト」』
シグナム副隊長に、レヴァンティン用『コード：ファントム・フェニックス』『奥義・光刃閃』のプログラム、キーブ

レード「ボンドオブフレイム」
ヴィータ副隊長に『環の鉄下駄』『指南書「素手で岩を砕くコツ」』『キーブレード「ガイアベイン」』
ヴィヴィオに『リラックマの抱きまくら』『星の欠片（キングダムハーツより）』『キーブレード「ロストメモリー」』
女性陣全員に、アイス「ジュエルバニラ」「ハニーバニー」「ハットトリック」「ボルケーノカレー」「スノウベアー」「スパークレモン」「クイーンベリー」「ロッククランチ」「ブラック・ピート」「グーフィー・パフェ」「ミルキーウェイ」「ダブルクランチ」「ドナルド・ソルト」を一人二本づつを人数分
クロノには・デストロイアーツ、セレスティアル、テレポブラスト、ラストアルカナム、タイムスプライサー、カオスレイヴ、ザンテツケン、マジックアワー、ホーリーライズ、ガイアブレイク、グレイシャルアーツ、アイスバラージュ、ファイガバースト、レイジングストーム、アルテマキャノン、マルチボーテックス、シャイニーブルームを、
弥太郎さんから、
はやて隊長に『上司としての会話術～狸と呼ばれるその日まで～』を、
雪待兎さんから、
エイミィに「全自動お仕置きマシン『拷問クン3号』」を、
霊華@アカガミさんから、
俺に『高町家の土地権利書』『狸の駆除マニュアル』
シグナム副隊長に『危ない水着』『近藤のマッサージ券（裸でやれば永遠に使用可能）』『近藤との既成事実証拠写真』『狸への不満と悩みを聞いてくれるカウンセラー』
スバルに『気合いのハチマキ』『なのはのコスプレ衣装』

ティアナに『巨乳になれる薬』『素直になれる薬』
『危ない下着』『近藤の実印と婚姻届』
スカリエッティに『近藤』・・・・・・
ドゥーエ二尉に『近藤の精子バンク』『近藤１／１抱き枕人形』『隠すところを隠してない下着』
エイミィに『クロノの実印と離婚届け』『裁判で絶対に勝てる証拠』
クロノに『胃薬』『安眠枕』『覚醒剤』
ヴィータに『大人の身体』『はやての手作り兎人形』
ヴァイスに『ドゥーエ似の大人のお姉さん』『自分の妄想を作者さんに書いてもらえる券』
グリフィスに『狸専用教育プログラム』『胃薬』『狸に悩まされる会の慰安旅行』
ザフィーラとシャマルに『主人公並の出番』
リンディに『義娘の彼氏・旦那を誘惑する方法（上下）』『気になる男性を年上好きにする方法』『気になる男性を甘党にする方法』
あんぎゃーすさんから、
俺に『別荘（ネギま）』
エレノアに『特製ケーキ』
フェイトさんに『ダブルベッド』
なのは隊長に『スキル「反動軽減」（モンハン）』
はやて隊長に『狸の置物』
シグナム副隊長に『近藤のマッサージ券』
ヴィータ副隊長に『特製シュークリーム』
シャマル先生に『オートガード機能付きペンダント』
ザフィーラさんに『鉄甲』
クロノには『慰めと同情の言葉』を、
以上です」

はやて　「くぅ・・・相変わらず無茶苦茶なモンばっかりや・・・どこから手をつけたらええんかわからん・・・！」

シグナム　「おい近藤」

近藤　「なんでしょうか？」

シグナム　「『火車切広光』『鉋切長光』『子烏丸天国』『立花道雪雷切』『蜘蛛切』『鬼切』・・・なんの脈絡もないラインナップだな」

近藤　「おそらく『１１ｅｙｅｓ』というゲームのつながりでしょう。内容知らないんで詳しくはわかりませんが」

シグナム　「ふむ・・・なんというか、いわくが胡散臭いものばかりだな・・・」

近藤　「そんなもんですよ、伝承なんて」

フェイト　「なにが胡散臭いの？」

近藤　「たとえば火車切広光、死体を奪って行くという妖怪の火車を切ったという伝説があります」

フェイト　「・・・うわぁ・・・」

ヴィータ　「うさんくせぇ・・・」

近藤　「鉋切長光は、堅田又五郎という武士が出入りの大工と共に、

江州伊吹山へ出掛けたとき、山中で、大工が突然恐ろしい形相に変わり、堅田又五郎に襲いかかってきたため、この小太刀で斬りかかったところ、大工は鉋もろとも真っ二つになって、姿を消してしまったという伝説があります。

子烏丸天国は、桓武天皇が南殿に出御されていた時、一羽の烏が飛んできて、「伊勢神宮から剣の使いとしてやって来ました」といって一振りの太刀を落としたという伝説が。

立花道雪雷切は、木の陰で雨宿りしていた立花道雪を雷が襲った時、道雪は所持していた刀『千鳥』でその雷（雷神）を切ったとされ、名を雷切に改めたという伝説。

蜘蛛切は、元は膝丸という名でしたが、源頼光が己を熱病に苦しめた土蜘蛛を切ったとされ、その際名を蜘蛛切と改めたという伝説。

鬼切は、元は髭切という名でしたが、渡辺綱が一条戻橋で鬼の腕を斬ったとされ、その際名を鬼切と改めた伝説がそれぞれあります」

フェイト　「う・・・胡散臭い・・・」

近藤　「まあ、科学などが発達していない時代ですから。仏や八百万の神などを信じて、妖怪なども実在すると信じるのも無理はないかと」

なのは　「それはいいんだけど、このプレゼントのラインナップって、大きく三つに分けられるよね」

はやて　「三つ？」

なのは　「うん、『えっち』『殺人』『スイーツ』かな」

はやて　「ああ～～・・・」

シグナム　「危ない水着だと・・・!?こんなもの着れるか!!」

ティアナ　「私にも来てます。これは無理です!!」

フェイト　「・・・こんなにいかがわしいものばかり・・・」

近藤　「この物語を１８禁にしていいのなら使いますが?」

はやて　「あかんやろう」

近藤　「何をおっしゃいますやら!もともと原作は１８禁・・・」

なのは　「・・・近藤さん?何か言ったかな?」

近藤　「・・・イイエ、ナニモ・・・」

はやて　「ところで、ひとつ気になる事が」

シグナム　「なんですか?」

はやて　「実は、前々から感想でちょいちょい書かれとったんやけど・・・」

ヴィータ　「・・・?なんだよ、はやて?早く言ってよ」

はやて　「クロノ君・・・生きとるんやろうか・・・」

全員　「・・・あ・・・」

はやて　「そもそも、この贈り物シリーズが始まったんはクロノ君が近藤さんにブチ切れた辺りからやねん」

フェイト　「そういえば・・・」

はやて　「それからというもの、クロノ君とユーノ君には何故か武器やら拷問やらばっかり送られてくる」

なのは　「・・・ユーノ君・・・」

ヴィータ　「そもそもユーノはこの物語に一度も出てないのにな。なんなんだあの嫌われようは？」

シグナム　「『なのはは俺の嫁』と思っている輩が、これ幸いと便乗しているのではないのか？」

近藤　「心の闇だ・・・」

はやて　「まあそんなわけでや！特別に生死不明のクロノ君に登場してもらおか！！はい拍手ー！！」

クロノ　「・・・・・・」

パチパチパチパチパチパチ

はやて　「・・・生きとる・・・んか？一応」

クロノ　「・・・・・・・」

パチ・・・パチ・・・

ヴィータ　「・・・ぅぁ・・・」

なのは　「・・・洒落になってないよ・・・」

シグナム　「主はやて？ひとつお聞きしたいのですが？」

はやて　「なんや？」

シグナム　「・・・あの、包帯だらけで、しかもその包帯がみるみる血が滲んでいて、輸血パックを次々取り替えて、車椅子で虫の息の者が・・・クロノ提督ですか？」

はやて　「そや」

フェイト　「ちょっ！？やりすぎだよ！！」

はやて　「何言うてんねん。これでも送られてきたものの半分も使こうてないんやで？」

ヴィータ　「え！？まだ半分！？」

クロノ　「・・・！？（ガタガタ）」

はやて　「お、クロノ君震えとる。そらそうやろうな、ここまでで
まだ地獄の折り返し地点やもんな」

クロノ　「（ブルブル）・・・！？」

近藤　「しかもこれからまだまだ来るぞ」

クロノ　「・・・・！！（ガタッガタガタッ）」

近藤　「くくく・・・怯えろ怯えろ。そしてこれから待つ永遠の地
獄に絶望しろ」

はやて　「・・・黒い・・・」

なのは　「・・・怖いよ近藤さん・・・」

ヴィータ　「・・・あたしは近藤の味方だからな！だ、だから、そ
んなどす黒いオーラをあたしに向けないでくれよ！？」

シグナム　「オイ、テスタロッサ。近藤の手綱、きちんと握って、
締め上げておけよ。でないと未来の管理局は地獄行き確定だ」

フェイト　「・・・が、がんばる・・・」

ヴィヴィオ　「なのはママー！！お久しぶりー！！」

なのは　「ああ、ヴィヴィオ。今日はどういう理由でゆりかごから

抜け出してきたの？」

ヴィヴィオ　「コレが（小指を立てる）コレなもんで（おなかの前で手で半円を描く）って言って」

フェイト　「スカリエッティー！！何教えてるんだー！！」

ドゥーエ　「ドクターではないわよ。教育係は・・・クアットロね」

近藤　「ああ、あの眼鏡痴女か。そうか・・・あいつ、碌なこと教えないな・・・教育が必要だな・・・」

なのは　「近藤さん黒い黒い！怖いから！！」

ドゥーエ　「ああ、その冷たい眼差しを私にも向けて欲しい・・・！」（ゾクゾク）

フェイト　「うわ、変態だ！」

ヴィヴィオ　「あ！またぬいぐるみある！わー、リラックマだー！！」

ドゥーエ　「よかったわね、ヴィヴィオ。ああ、そういえば、今日はもう一人連れてきたのよね。ほら、入ってらっしゃい」

セイン　「どもー！ナンバーズ６のセインでーす！！」

ティアナ　（じー・・・勝った！）

スバル　（じー・・・勝った！）

はやて　（じー・・・うーん、残念な子やな・・・）

セイン　「こらそこー！あたしの胸見てとんでもなく失礼な事考えてるだろう！！」

近藤　「で、そのセインが今日はまたなんでこんなカオス空間に？」

セイン　「ここに来れば胸がおっきくなるってドゥーエ姉から言われたの！」

近藤　「・・・まあ、ちょうど君宛に牛乳の贈り物があるが・・・」

セイン　「これであたしもバインバインに！？」

近藤　「いや、これで大きくはならないぞ」

セイン　「え！？」

ティアナ　「そうなんですか！？」

スバル　「牛乳で胸大きくならないんですか！？」

近藤　「いや、まあ発育の補助にはなるだろうけど・・・そもそも、適度な運動とバランス良い食生活が健康な体を作るからな。キチンとした生活に改善すれば望みがあるんじゃないか？」

セイン　「・・・まさか、あなたが神か？」

近藤　「何を言っとるんだお前は」

セイン　「神よ！あたしに豊満な胸を！！胸部に贅肉を！！」

近藤　「・・・わかった。これからレクチャーしよう。ただし、他言無用だぞ」

セイン　「！？か、神よー！！」

フェイト　「大輔さん？豊胸の方法なんて知ってるんですか？」

近藤　「まあ、個体差はありますが、ある程度効果のでる方法は知っています。これでも魔法医療の免許持ってますから」

はやて　「そんな設定あったなぁ・・・」

ティアナ　「神よ！私にも救いの手を！！」

スバル　「私にも！！」

ヴィヴィオ　「わたしもー！！」

なのは　「ヴィヴィオにはまだ早い！」

はやて　「師匠！！私にも奥義の伝授を！！」

フェイト　「はやて！？なに奥義って！？」

ドゥーエ　「近藤さん？豊胸手段って、まさか揉むことなんじゃあ・・・」

近藤　「それも一つの手段ではありますが、地道に努力することをお勧めします。バランスよい食生活の改善と、毎日の豊胸運動、姿勢、歩き方、などですね」

フェイト　「モデル育成みたい・・・」

このあと、近藤のレクチャーを受けたセイン、ティアナ、スバル、はやては近藤の事を『神』と言うようになった。

近藤　「さて、今回はここまでにしましょう」

はやて　「これあとがきやしな、あんまり長いのもなぁ」

近藤　「そもそもこのあとがきのせいで更新が遅れているという・・・」

はやて　「あかんあかん！言うたらアカン！！」

近藤　「次回、決着が着きます。が、内容が内容なので過激な表現が苦手な人は見ないことをお勧めします」

はやて　「今回の最後でもかなりやろ」

近藤　「あれ以上です」

はやて　「・・・まあ、なあ・・・自業自得いうたらそれまでやけど・・・」

近藤　「というわけで、また次回をお楽しみに」

はやて　「・・・不安や・・・」

## 第７６話（前書き）

おまたせいたしました。
やっと投稿できる時間ができました。

ほんとに最近は仕事で満足な時間がとれないな・・・

さて、今回はかなり過激な表現があります。

残酷な表現がお嫌いな方や、気分を害する方は見ないことをお勧めします。

# 第７６話

モニタに映る景色は夜、だが、モニタの中は一瞬にして昼よりも明るくなった。
カメラのフラッシュのように白く、まぶしく。
映された家が認識できないくらいに。
爆発の影響で、モニタにノイズがはしる。
設置されていたモニタに爆風が及ぶ。
画面が白黒になり、そして真っ白になって何も映らなくなる。

近藤がコンソールを操作すると、モニタが切り替わり別の場所から映されたカメラに変わった。

先ほどのカメラより遠い位置から撮影されていたために爆風に巻き込まれなかったようだ。

だが、ヤンはその光景を見て握っていたボールペンを床に落とした。

家のあった場所は残骸だけがのこり、その周辺住宅も広範囲でボロボロになっていた。
そこら中から煙や火の手があがり、地域住民の阿鼻叫喚が響き渡る。

消し炭のようになった”人のようなもの”に必死に心臓マッサージや人口呼吸をする者、
爆発の影響で四肢がちぎれてなくなり泣き叫ぶ者、
現状が理解できずに立ち尽くす者、
そんな光景で埋め尽くされていた。

近藤はヤンの妻一人を殺すために近隣住民までも巻き添えにしたのだ。

言うなれば、地獄絵図であった。

「・・・ア・・・」

ヤンの声が喉から漏れる。

かすれて、震えて。

「・・・リア・・・」

ヤンの瞳が揺れる。

モニタに映し出された映像が本物だと信じたくなくて、でもそれは紛れも無くリアルであると脳が訴える。

ヤンは見ていた。

家の明かりに映されていたシルエットを。

そのシルエットは、ヤンの最愛の妻のソレだった。

つまり、あの家には間違いなく妻がいたのだ。

そして、ヤンは泣き叫ぶ。

「・・・マリアァァァァッッ！！」

最愛の妻の名を。

叫ぶや、ヤンの行動は速かった。
すぐさま自分のデバイスを杖に瞬時にセットし、近藤に砲撃を放つ。
さほど広くないブリーフィングルームでの砲撃は自身にも不利になるが、ヤンは頭に血が上りそんなことまで考慮しない。

殺す！

コイツを殺す！！

殺意の宿る瞳でヤンはデバイスで攻撃魔法を放ったのだ。
だが、その砲撃は近藤に当たる寸前に消えた。

いや、消えたのではない。
近藤に吸い込まれていった。

「・・・っ！？」

ヤンは驚く。
しかし、そんな驚くスキさえ近藤の前では致命的である。

近藤はいつの間にかヤンの背後にいて、後ろからヤンの腕を固め、押し倒す。
膝をヤンの背中に乗せ、後ろ手の腕を捻りあげ、頭を床に押さえ付ける。

ヤンの口からうめき声が漏れる。
押し倒された衝撃によって、肺の空気が口から吐き出される。
鈍い痛みが体を走る。
背中にかかる近藤の体重によって背骨がミシミシと悲鳴をあげ、捻れた後ろ手からギリギリと締め上げられ、間接に痛みが走る。
勢い良く床にたたき付けられた頭は、額が切れてしまい血が溢れ出る。
床の冷たい感触が頬に伝わり、しかし頭から流れ落ちる血が生暖かく、そして視界は涙でぐにゃぐにゃに歪んでいた。

「八つ当たりとは、困った人だ」

ヤンの頭上から聞こえる声に殺意を抱きながらも、思考はクリアになってくる。

「あなたが自分の右目を突き刺せば、奥様は死ななかったのに」

それを聞いたヤンは近藤を睨む。
だが、その顔を見て驚愕する。

誰だコイツは？

俺の知る近藤は、あんな冷たい目をしなかった。

感情の篭らない声を口にする人間ではなかった。

ダレダコイツハ？

ヤンが混乱しているのを無視して、近藤は話しを進めた。

「あなたにもう一度チャンスをやろう」

そう言うと近藤はヤンから離れた。
そして、スタスタと先ほどいた席に戻り、またコンソールを操作しだした。

すると、大きなモニタが展開され、またその映し出された映像に、ヤンは顔を青ざめさせた。

先ほど映し出されていたヤンの息子、ニールが椅子に縛られている姿である。

「さて、ゲームの続きをしましょうか」

近藤は光の宿らぬ瞳で床に転がるヤンを見下ろす。

「ゲーム、だと？」

ヤンは未だ近藤にやられた捕縛術によって満足に体が動かせずにいた。

声を絞り出すのが精一杯だった。

ヤンはニールを見た。
特に怪我等はしているようには見えない。
目隠しされ、椅子に縛り付けられているだけである。
服は着ているが、裸足だった。

そして、ニールのいる部屋を見る。
しかし、黒い布等で覆っているのか手懸かりが一切見つからない。

すると次の瞬間、ヤンは再び顔を青ざめさせる。

画面にもうひとりの人物が現れたのだ。

その人物は黒のスーツに琥珀のシャツ、黒のネクタイを着用しており、服の上からでもわかるガッシリとした体つきでソレは男だとわかる。
だが、顔は何故かプロレスラーの覆面を被り、見えないようにしていた。

「これから彼があなたの息子、ニール君の爪を一枚ずつペンチで剥いでいきます」

「・・・・・なぁっ！？」

ヤンは恐怖する。
子供に拷問をしようとする近藤に。
何の躊躇も、焦りも、恐れもなく言う近藤に。

「爪一枚につき１０秒です。両手両足、全部で２００秒ですね。そ

の間にあなたは自分の右目を潰して下さい」

ヤンの顔色は青から紫へと変わっていた。
血の気が一気に引く。
ダクダクと流れていた額の流血も止まってしまった。
サウナに行ったのかと思うほど、額に汗が噴き出す。
顎が外れたのかと思うほど、口に力が入らず、ガタガタと震える。

「ではスタート」

近藤はパンと手を叩いた。

「１０・９・８・７・６・・・」

近藤が腕時計を見てカウントダウンを始めた。

あまりの簡潔なスタートに、ヤンは理解できないでいた。

近藤の行動によって現実に戻され、気付いたのは

「ぎゃあああぁぁぁぁぁっっ！！」

息子の叫びだった。

バクバクと心臓が打ち付ける音で眩暈がする。

ヤンは焦点の合わない目でモニタを見た。

黒服覆面の男の手には、ペンチが握られており、その先には血の着いた爪が挟まれていた。

そして、二―ルはすすり泣く。

「・・・6・5・4・3・・・」

近藤は構わずカウントダウンをする。

ヤンはようやく理解した。

そう、これはゲームだ。

息子の爪が全て無くなるのが先か、自分の右目が潰れるのが先か。

残酷なゲーム。

慈悲もかけらもなく、ヤンにとってリスクしかないゲーム。

ヤンは何とかして時間を引き延ばして策を練らなければならないと判断した。

「待て！待ってくれ！！潰す！目を潰すから！ニールに酷いことはしないでくれ！！」

ヤンは必死に訴えた。

「0」

ブチンッ

「■■■■■■■■■■ーーーー！！」

ニールの口から人間とは思えない獣の咆哮のような叫び声がした。
モニタに取り付けられたマイクが音割れするほどの絶叫である。
覆面の男の持つペンチには、新たな爪が肉と皮を付着させ、血を滴らせていた。

ヤンの顔が絶望に染まる。

「やるって言っただろう！！何で止めない！！」

ヤンは近藤に掴みかかろうとした。
だが身動きが取れない。

いつの間にかヤンはバインドによって捕縛されていた。

「パパー！痛いよー！助けてよー！！」

ニールが泣き叫ぶ。
だが、ヤンには見ているしかできない。

「10・9・8・7・6・・・」

近藤は無慈悲にカウントダウンを続ける。
ヤンは焦る。

「待ってくれ！バインドをされては身動きが取れん！外してくれ！！」

ヤンは芋虫のように近藤ににじり寄る。

だが、近藤はヤンを一瞥しただけでカウントダウンを止めない。

「・・・3・2・1・0」

ブチンッ

新たな爪を引きちぎる音がする。

「・・・・・・っっっ！！」

ニールはもう叫ぶこともできないようだ。

あまりの激痛にニールは泡を吹いて気絶してしまった。

だが、近藤はカウントダウンを止めない。

モニタに映る覆面男は、何処からか持ってきたバケツに水をはり、それをニールの頭からおもいっきりかけ、強制的に覚醒させる。

「・・・プアッ・・・ゲホッゲホッ！・・・パパ・・・いたいよ・・・たすけてよ・・・」

ヤンの思考は停止してしまっている。

息子の拷問。

１０秒というタイムリミット。

考える余裕を作れない。

焦る。

策を考えようとする。

息子が泣き叫び、思考が乱され停止する。

もうヤンには状況判断すらできない精神状態に陥っていた。

瞳孔が開き、現実を現実と受け止められない状況。

「パパ・・・たすけて・・・いやだ・・・もう、いたいのヤダよ・・・」

「こ、子供は関係ないだろう！わかった！わかったから！お前の言う通りする！だからバインドを解除してくれ！！」

ヤンは必死に懇願する。

だが、近藤はそんな声が聞こえていないように無視し、カウントダウンを再開した。

「１０・９・８・７・・・・」

「やめろおぉぉぉっっ！！」

結局、ヤンは泣き叫ぶのみで、ニールの爪２０枚全て剥がされても自分の目を潰さなかった。

モニタに映るニールは、目隠しをされながらも涙とよだれ、汗で顔をドロドロにし、失禁していた。
両手両足は爪が全て剥がされ流血している。
体を痙攣させ、うわごとのようにかすれた声で「パパ・・・たすけて・・・」と呟いていた。

ヤンはそんな息子の姿を涙を流しながら見ていた。
バインドは解除されず、芋虫のような体勢で近藤を睨みつける。
歯を食いしばり、歯茎から血が流れる。
あまりにも食いしばりすぎたため、何本かの歯は欠けてしまった。

「この・・・外道！卑怯者！悪魔！！」

ヤンは近藤に暴言を吐くが、近藤はそんなヤンに対し失望の眼差しを向けた。

「残念です。あなたはご息子さんの爪より自分の目の方が大事なんですね。ああ、爪はまた生えてくるからか」

「こんな体勢では何も出来ないだろう！！」

「言い訳ですね」

近藤は冷たく言い放つ。
事実、ヤンは立ち上がろうと思えば出来たのだ。
なのにしなかった。
それは、息子の爪は剥がされても時間が経てばまた生えてくるとどこかで思っていたのだろう。

「では、次のゲームは耳を削げ落とすことにしましょうか」

近藤のその言葉に、ヤンは顔を蒼白にさせた。
近藤が指をパチンと鳴らすと、モニタに映る覆面の男は懐からぬらりと大きなアーミーナイフを取り出した。

「ニール君、聞こえるかな？」

近藤がモニタに映るニールに話し掛ける。
ニールは体をビクッと硬直させた。

「これから１０数えて、君のお父さんが自分の目を潰したらゲーム終了、でもしなかったら、君の耳を削げ落とす」

ニールはヒイッと悲鳴をあげた。
ガタガタと縛り付けられた椅子から逃げようと動くが、ガッチリ縛

られているので脱出は不可能だ。

「パパー！たすけて！たすけてー！！」

腹の底からの声、心からの懇願、悲痛な叫び、全てが小さな子供から発せられている。

「はい、スタート」

近藤はパンと手を叩いた。

ヤンはもう現実との区別がつかず、目の前がぐにゃぐにゃと歪んでいる感覚に襲われる。

耳が遠くなる。

心臓がこれでもかというほど早く打ちつける。

息遣いが耳に残る。

夢か

現か

ソレさえも曖昧になる。

なんとかしなければ。

バインドで上半身は縛られて身動きがとれない。

どうやって目を潰す？

ここはどこだ？

机が多く配置されている。

・・・そうだ、アレだ！！

ヤンは立ち上がり、近くの机に向かった。

そして、机の角目掛けて思いっきり目をぶつけた。

ガンガンと机の角に右目の部分を打ち付ける。

何度も、何度も何度も、何度も何度も何度もぶつけた。

痛みを感じないのは幸いだ。

耳には、ガンガンという音から、グチャッ、グチャッと肉が潰れる音に変わり聞こえる。

自分の息遣いと、目を潰す打撃音、そして、ビチャビチャと水っぽい音。

見えるもう片方の目で机を見る。

机の角は血みどろだった。

右目は完全に見えない。

顔の右半分が熱い。

息が上がる。

だが、やった。

これでニールが助かる！

ヤンの心は達成感に満たされた。

そんな期待を込めた気持ちでモニタを見た。

しかし

モニタの中のニールの両耳が無くなり血を吹き出していた。

ヤンは絶望の光景に絶叫した。

「あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あああああっっっ！！」

なんでっ！？

言われた通り目を潰したのにっ！！

なんでっっ！！

「時間かけすぎだ。右目ひとつに二分もかけやがって。ああ、残念ながらタイムオーバーで、ニール君の耳は両方削げ落としました」

モニタからはニールの恐怖による泣き啜る声がＢＧＭのように聞こえる。

笑うでもなく、怒るでもなく、淡々と、作業をこなすように喋る近藤に、怒りの表情を向ける。

「さあ、次のゲームに移りましょうか」

近藤は地獄を続ける。

ゲームはさらにエスカレートする。

肉体的苦痛は、命のやり取りへと移行する。

「次のゲームは、制限時間内にヤン一佐が自分の右腕を切り落とすゲームです」

右腕を切り落とす。

前回は右目だった。

ヤンは近藤を見てアッと思った。

右目、右腕。

そう、この二つは近藤が８年前の事件で失った部位である。

近藤は、自分が失った部位をヤンに対し同じように切除しようとしているのだ。

そんな近藤の思惑が判明し、ヤンは真っ青な顔を更に蒼白にした。

ヤンはもう思考がついていかない。

近藤が何を言っているのか理解できない。

ヤンの脳が理解する事を拒否する。

ただひとつだけはわかる。

近藤はヤンを生かすつもりなどサラサラないと。

どんな手を使おうが、誰が死のうが、どれだけ犠牲になろうが、近藤はヤンが死ぬまでこの『ゲーム』を止めるつもりはないと。

人間は案外丈夫で、なかなか死なないといわれている。

だが、あっけなく死ぬともいわれている。

その二極の差はなんだろうか？

ソレは心的ショックと、出血多量である。

人間は、事故などで体がボロボロになっても生き残るほどの生命力がある。
反面、蜂に刺されただけでショック死してしまうこともある。

ようは気の持ちようなのだが、近藤はヤンに対してそんな事お構いなしに、確実に死ぬように仕向けるつもりなのだ、とヤンは結論付けた。

「制限時間内にできなければ、ニール君には爆発してもらいましょう」

近藤がパチンと指を鳴らすと、覆面の男はニールの首に何かを巻いた。
それは黒いベルトで、何か四角い箱が付いていた。

「アレはプラスチック爆弾です。ヤン一佐がゲームをクリアできなければ、プラスチック爆弾は爆発します」

それを聞いたニールはさらに泣き叫ぶ。
絶叫する。
獣のように咆哮する。

「制限時間は一分です。ではスタート」

近藤はパンと手を叩く。

と同時に、乱入者が現れた。

「そこまでや、近藤さん」

突如声と共にブリーフィングルームに光りが射す。

ドアが開け放たれたため、廊下の光りが差し込んだのだ。

まぶしさにヤンは目を細める。

そして、開け放たれたドアの前には、はやて、フェイト、なのはがいた。

「近藤さん、いくらなんでもやりすぎだよ」

なのはは冷静に、しかし怒りの篭った声を放つ。

「誘拐に傷害、立派な犯罪や。いくら仲間でも弁護でけへん」

はやては自分のデバイス、シュベルクロイツを展開し、近藤に向ける。

ヤンは助かったと思った。

今までのやりとりで精神が崩壊しそうになっていた、そんな寸前にはやて達が現れた。

ヤンにとっては、こんな小娘に助けられたことは屈辱ではあるが、それでも自分の命と息子の命が助かった。

さらに近藤は仲間である彼女達によって押さえられた。

そう、経緯や被害はともかく、結果はヤンが望む最高のものとなっ

たのだ。

ヤンは安心して気が抜けてしまい、その場にへたりこんだ。

そして、床を見つめ安堵の息をゆっくりと吐いた。

だが、状況はヤンの望むようにはいかなかった。

いきなりドゴンッと大きな打撃音がしたと思ったら、ドカンッという衝撃音がした。

そう、本当にテレビのバラエティー番組のようなそんな馬鹿げた音がしたのだ。

ヤンは顔を上げ、衝撃音のした方を見た。

そこには、壁に打ち付けられ倒れているはやてがいた。

ヤンの心臓がドクンと跳ね上がる。

そして、ゆっくりと近藤の方を見た。

近藤は右腕を前に突き出した体勢で止まっていた。

つまり、はやては近藤に攻撃されたのだ。

信じられるか？

あのＳＳランクの八神はやてがＡランクの近藤に一発でのされたのだ。

「なにやってんの近藤さん！！」

「公務執行妨害だよ！！」

なのはとフェイトが叫び、各々デバイスを構える。

だが、近藤はゆっくりと右腕を下ろし二人を何の感情も篭らない目で見つめるだけだった。

「答えて！！自分が何したかわかってるの！？」

なのはの叫びに、ヤンはハッと気を取り戻す。

そうだ、近藤は何をやった？

「こたえなさ・・・」

なのはが叫ぶが、その言葉は最後まで言えなかった。

離れた位置にいた近藤が、いつの間にかなのはの懐に入り、肘を水月に叩きこんだのだ。

なのはは防御する隙もなく、体をくの字に跳ね上げ、意識を手放し、その場に崩れ落ちた。

そして、近藤は横で驚いているフェイトの隙をついてすぐさま手刀をフェイトに叩きつけ、フェイトも何も出来ずに倒れた。

管理局でも数が少ないとされるSランク以上の人間三人を、たかがAランクの近藤が相手に何もさせず倒してしまったのだ。

信じていた希望ははかなくも消え失せた。

これが現実であるはずがない。

そう、これは夢だ。

俺はつい居眠りしてしまったんだ。

そう、夢だ。

もうすぐすれば目が覚めて愛する家族の待つ家に帰るんだ。

妻の料理を食べるんだ。

息子と休日はキャッチボールをするんだ。

「残念、一分経過しました。ゲームオーバーです。さて、ニール君の首輪を爆破させましょう」

家族でドライブをするんだ。

買い物に行くんだ。

いつも通りの幸せな生活が待ってるんだ。

だから、

はやく、

ゆめから、

さめてくれ・・・

「さようなら、ニール君」

近藤は携帯端末機のボタンを押した。

そして、ニールの首は爆発した。

バァンという乾いた音が響く。

血と肉の破裂に、モニタにもビチャビチャと肉片が飛び散る。
煙りがもうもうとあがり、首からは勢いよく血が吹き出る。
ゴトンと音がして、ニールの足元にスイカのような物がゴロゴロと転がる。
それは、ニールの吹き飛んだ頭だった。
絶叫の顔のまま固まり、血がニールの顔を染めていく。
爆発の影響か、ニールの体がビクンビクンと痙攣する。

しばらくすると、ニールの体はぐったりとして動かなくなった。

近藤はチラリとヤンを見た。

ヤンの目は焦点が合っておらず、口のはしから涎を垂らし、失禁し、へたりこんでいた。

「・・・・・ひゃはっ」

ヤンが痙攣したように体をビクンと跳ねる。

「ひゃは、ひゃは」

しゃっくりのように肩を上下に揺らす。

「ふひ、ひゃはは、へひゃはははははは！」

ヤンは笑う。

「ひゃはははははははははは！！」

狂ったように。

「へへひゃはははははははははははははははははは！！」

守るべき家族が全員殺され、生きる意味を失ったヤンの精神は・・・

崩壊した。

ヤンの発狂した笑い声がブリーフィングルームに響く。

そんなヤンを見た近藤は、フンと鼻を鳴らし、睨みつける。

はじめて近藤は感情を表に出した。

その瞳には憎しみの色が篭っていた。
そして、呟く。

「因果応報よ。ご主人様を傷付けた罪はとてつもなく重いのよ」

近藤は気だるそうにだらりと垂らした腕をゆっくりと上げ、ヤンに手を向けた。

「死（デス）」

近藤がそう言うと、ヤンの足元の影から黒い粒が現れ、それはやがて足元に纏わり付き、上半身へとヤンを黒く浸蝕し闇に染めていく。

それは虫。
黒い虫。
真っ黒い、無数の虫の大群。
だが、その虫一匹一匹が膨大な魔力を内包していた。

六本の足をカサカサと音を立て際限なくヤンの影から現れ、這い上がる。
無数の虫は、カサカサとヤンの体を這いずり回り、ヤンを闇へと落としていく。
虫はヤンの半開きの口の中へ、耳の中へ、鼻の穴へ、眼球の瞼の裏へと侵入していく。
やがて、黒い触手がヤンを全て包み込んだとき、その闇は影へと溶け込む。

ゆっくりと、ゆっくりと立体だった闇は平面の影になる。

バキバキ、メキメキと音を立てながら、グチャ、グチャと粘っこい

音を立てながら、黒い物体は立体を維持できなくなる。
最後はドプンと音をたて闇はヤンを飲み込んだ。

ブリーフィングルームには近藤一人になる。
展開されていたモニタが閉じ、部屋が薄暗くなる。

近藤はため息をつくと、体が淡く光りだす。
そして体が光りに包まれ、やがて光りがおさまったとき、そこには近藤ではなく、エレノアが立っていた。

そう、これまでの事は全てエレノアが仕組んだことだったのだ。

アースラのセキュリティを管理し、誰にも気づかれる事なくヤンをブリーフィングルームへ誘導する。

そして、エレノアは変身魔法で近藤になりすまし、ヤンを追い詰めた。
モニタで映し出された家の爆破や、ニールへの拷問は全て幻影、つまり嘘である。

途中乱入してきたはやて、なのは、フェイトもエレノアの演出による幻影であった。

ヤンに希望を持たせ、それをへし折る。
精神的にこれはかなり堪える。

そして、エレノアの目論みはことごとく成功し、ヤンに罰を下した。
だが、エレノアの表情はうかない。

エレノアは知っていた。
近藤はヤンに対しても以前の将官や提督たちのように不正を暴露して辞職、逮捕に追い込むだけだったと。

そんなことエレノアが許せるはずが無い。
そんな生ぬるい対応でヤンのした過ちが清算できるはずが無い。
そんな復讐でエレノアが許せるはずが無い。

だが、

「・・・ご主人様に知られたら、嫌われるわね・・・」

エレノアは自虐的に笑った。

「何やってるんですか？はやて隊長？」

近藤は、ブリーフィングルームの前で立っているはやてを見て声をかけた。

「ああ、いや、なんかこの部屋から男の人の叫び声やら笑い声やらが聞こえてな？」

はやてはドアを指差す。

はやては近藤のマッサージを受けた後、自室で就寝しようとしたが、小腹が空いて食堂へ夜食を作りに行こうとしていた。

そんなとき、通りかかった部屋から、なにやら変な声が聞こえたのだ。

気になるが、ドアは内側からロックされて入れないのだという。

「不審者か変質者やろうか・・・」

はやては顎に指を当て考え込む。

しかし、艦内のセキュリティは正常に働いているし、不法侵入者がいるとは考えにくい。

そう考えていると、ドアが開いた。

中からはエレノアが出てきた。

「あれ？ご主人様とはやてちゃん、どうしたのこんな所で？」

エレノアはキョトンとした顔で近藤とはやてを見た。

「・・・いや、この部屋から変な声がして、気になって・・・」

はやてがそう言うと、エレノアはニパッと笑った。

「ああ、ゲームしてたの。ご主人様や皆に迷惑かけたくなかったから、この部屋でコッソリと、ね。多分ゲームの声が洩れたのかな？」

そういうとエレノアはゲームのパッケージをはやてに見せた。
ゲームソフトはゾンビゲームだった。
なるほど、そんなゲームなら絶叫が聞こえてもおかしくは無い。
「コッソリて・・・大音量やったで・・・」
はやては呆れた。
だが、エレノアらしいといえば、らしい。
はやてはクスリと笑った。
「あ、今から夜食作ろう思てたんですけど、お二人もどうですか？」
「わーい！食べる食べるー！！」
はやての提案にエレノアは両手をあげて喜んだ。
そして、エレノアははやての背中を押し、急かすように食堂へと足を向けた。
だが、近藤は一人ブリーフィングルームに立ち尽くし、眺めていた。
ゆっくりと部屋の中を見渡す。
薄暗い部屋に、整列された机、シンと静まりかえった室内。

それだけを見れば、何の変哲もない。

だが、近藤は鼻をひくつかせる。

鼻にわずかに纏わり付いてくるのは、血とアンモニアの匂い。

唇が湿った空気を感知する。

生臭く湿った空気に、鉄とアンモニア臭が交わる。

近藤は目を細める。

どういう経緯か、誰なのかはわからない。
だが、ここで誰かが血を流した。
そして、死んだか、それ相応の傷を負った。

エレノアはそれを隠しているつもりだろうが、近藤にはわかってしまう。

エレノアは普段は隠し事などしない。
それは、近藤に絶対の忠誠と信頼をおいているからである。
そのエレノアが近藤に隠すこと。

近藤は目をつむる。

そして、現状把握を行い、情報を整理し、結論を出す。

エレノアが近藤にひた隠す相手、

エレノアが殺したいと思うほど憎む人物。

おそらく、それはヤン一佐であろう。

エレノアはヤンに対し、かなりの怒りを向けていた。
それは憎悪であり、怨念、呪いのようだった。

エレノアにとって近藤を傷つけるということはそれ程のことなのだ。
だが、エレノアは基本、近藤の命令には背かない。
近藤がどれ程ひどい仕打ちを受けようが、手出しするなと命令されれば、エレノアはその通り従う。

だから、今回のような独断の行動などありえないのだ。
しかし、そのありえない行動を取るほど、近藤の命令を促さず、聞かず独断で行動するほど、エレノアはヤンのことを憎み、近藤のことを愛しているのだろう。
エレノアにとって全ては近藤のため、近藤以外の命など意味は無く、近藤こそが己の存在意義なのだ。
近藤以外の命など塵に等しく、近藤の命こそ全てにおいて優先されるのだ。

エレノアという存在は、とても崇高で、純粋で残酷で。

いうなれば、聖者である。

近藤はヤンが死んだということには何の関心も示さなかった。
自分の死という概念が麻痺しているため人の死に対しても感情が稀薄になっているのか、それとも心のどこかでヤンのことを疎ましく思っていたのか。
まあそんなことはどうでもいい。
近藤にとっても、エレノアにとってもどうでもいいことだ。
そう思うと、気づいてしまった。
ああ、俺は壊れてるんだなあ、と。
近藤は苦笑した。
「エレノア」
近藤は、はやての背中を押して歩くエレノアを背中越しに呼び止める。
エレノアはビクンと肩を震わせる。
エレノアは近藤の方を見ない。
ただ、僅かに震える。
何事かと振り向いたはやてが、エレノアを見て驚いていた。
おそらく、エレノアの顔を見て驚いているのだろう。
近藤はエレノアに近づく。
そして、

ポンと

手を頭に乗せた。

「あまり無茶をするなよ」

近藤はそういうとエレノアの横を通り過ぎ、一人食堂へと向かっていった。

端から見ていたはやては何が何だかわからず、頭に疑問符を飛ばしまくり、首を傾げていた。

そして、エレノアは手の置かれていた頭を撫でながら、頬を赤く染め、僅かに笑った。

ちなみに夜食だが、エレノアの宇宙の胃袋が本領発揮してしまい、はやての作った料理は近藤とはやての口に入る事はなかった。

「・・・まあ、見ててお腹一杯になったから・・・ええか？」

「・・・俺は胸やけしましたよ・・・」

「・・・はやてシェフ！もっと持ってこい！！」

その日の夜、食堂には顔を青くしている二名と、満面の笑みを振り撒く一名が当直に目撃されたという。

# 第７６話（後書き）

近藤　「さて、今回は特別ゲストでナンバーズの方々に来ていただいてます」

ウェンディ　「よろしっくすー！！」

ウーノ　「何故私まで・・・」

セッテ　「ああ・・・近藤様と同じ空間・・・同じ空気を吸う・・・最高・・・」

チンク　「おい、セッテは何処かに隔離したほうがいいんじゃないか？」

トーレ　「・・・後でセッテが暴れてもいいなら、そうするが？」

なのは　「なに、それ？」

チンク　「・・・以前ドクターが近藤の悪口を言った時のセッテのキレッぷりはすごかったな・・・危うく決戦前にアジトが崩壊すると思ったぞ」

フェイト　「そんなことが・・・いっそ壊れてしまえばよかったのに・・・」

はやて　「そやなー。そうしたら私らの手間省けるしな」

セイン　「あたしらも活躍したいんだ！！出番を削るなんて御免だね！！」

トーレ　「ところでフェイト嬢、あなたはここで我等と話しこんでいていいのか？」

フェイト　「え？」

トーレ　「ほら、近藤がドゥーエとノーヴェ、オットーに囲まれてるぞ」

フェイト　「なにやってんでてめえらあぁぁぁぁぁっっ！！！」

チンク　「・・・怖い・・・」

トーレ　「・・・ドクターが興味を示した人物に碌な人間がいないな・・・」

セイン　「アレじゃない？えーと・・・『類は友を呼ぶ』」

ウーノ　「・・・」

近藤　「どうした、ノーヴェ、オットー？俺の手を握って、なんかあるか？」

ノーヴェ　「え！？い、いや、なんでもねーよ！（久しぶりの近藤さんの手・・・ああ、でっかくて固くて、強そうだな・・・）」

オットー　「うん、なんでもないよ（やっぱりあったかいなぁ・・・何からでも守ってくれる、そんな安心する手だ・・・いいなぁ、六課の人間は・・・）」

近藤　「そしてドゥーエさん、俺の服のボタンを外して何しようと・・・」

ドゥーエ　「ん？これから大人の裸のお付き合いよ」

フェイト　「くるあぁぁぁっ！！年増ぁぁぁっ！！！」

ドゥーエ　「・・・ちっ。・・・ちょっと誰が年増よ！！」

セイン　「近藤さーん！あたしの胸見てー！あれから毎日言われたとおりトレーニングしてるから少し大きくなったよー！！」

ウェンディ　「近藤さーん！あたしにも詳しく教えて欲しいっすー！」

セイン　「ウェンディは必要ないじゃん！！」

ウェンディ　「現状に満足してたら進化はないっす！目指すはいつでも遥か高みっす！！」

セイン　「！！？ウェンディ・・・あたしが間違ってたよ！そうだね、皆で遥かな高みを目指そう！！」

ウェンディ　「セインー！！」

セイン　「ウェンディー！！」

近藤　「なんか最初から収拾つかないので放置します」

はやて　「相変わらずの放置っぷりやな・・・」

近藤　「ではいきます。

バルディッシュさんから、俺にソフトウェア『Ａｎｇｅｌ　ｐｌａｙｅｒ』

シグナム副隊長に絶刀『鉋』、斬刀『鈍』、薄刀『針』

クロノに『歴代バハムートのメガフレア』を、

山田花太郎さんから、『爆発寸前のセル』

白眉さんから、女性陣には『アステルお手製のザッハトルテとモンブラン』

ちなみにグラシアさんやアステルさんの直攻撃はそのままクロノのところに飛んでいきました。

ライトさんから、俺とフェイトさんに『バトルロワイアルで使われた首輪』

クロノに『医療かばん』と『首輪爆破のスイッチ』

を、

カガヤさんから、クロノとユーノさんにそれぞれ『世界樹

の葉×１００』を、
霊華@アカガミさんから、俺へ『ドリルアームの義手』
ティアナへ『なのは人形（ナイフ付き）』『賢いスバル』『近藤ボイス目覚まし時計（大好きなティアナ、時間だぞ！起きなくていいのか？）』
スバルへ『根性のハチマキ』『プロテイン（バニラ味）』
シグナム副隊長へ『可愛い髪止め』『巨乳の悩みを無くす方法』
ドゥーエへ『近藤の服だけを透視できる眼鏡』『近藤の実印と婚姻届』
暗黒の覇者さんから、『野菜生活１００　オリジナル』『野菜生活１００　紫の野菜』『野菜生活１００　黄の野菜』『野菜生活１００　のむゼリー』各段ボール（未開封）一箱ずつ１５本入りを、
おまけとして、遊戯王ＯＣＧゲーム『スターダスト・ドラゴン』スーパーレアを、
テスタメントさんから、俺とフェイトさんに『海鳴市にオープンした動物園のカップル限定チケット』を、
プワゾンクロウさんから、俺に『相手を確実に呪えるワラ人形』
フェイトさんに『首輪と鎖（近藤用）』
スバルに『友情カプセル』を、
よ～ぜふさんから、クロノに『オレンジグミ（テイルズシリーズ、ＨＰ３０％）』
女性陣（ナンバーズ含む）に『スティッチ、ベア・ダッフィー、グレース・ベア、シャチ（鴨川シーワールド製）、各９０ｃｍ級』のぬいぐるみを
食いしん坊レディの方々に『超ド級業務用テラアイス』

他の（たぶん）普通の女性陣にはミルクとチーズ、夏限定カルピス風味入！『ほわり』を、

あんぎゃーすさんから、俺に『指南書　たのしいごうもんのやりかた』

エレノアに『マカロン』

なのは隊長に『高性能カートリッジ１ダース』

フェイトさんに『プレシアからのメッセージ「幸せにおなりなさい」』

はやて隊長に『指南書　狸と呼ばれないためにも』

ヴィヴィオに『洗脳防止効果付き熊のぬいぐるみ』

スカリエッティに『指南書　変態科学者の末路』

クロノに『エリクサー十ダース（ＦＦ）』

ロングアーチの方々に『栄養剤人数分×一ダース』

マリエル技官に『高級デバイスパーツ』

ヴァイスに『健康にいいタバコ』

ナンバーズ達に『笑顔の近藤さんの写真』

ユーノさんに『幼少時のなのはの写真』

レジアス中将に『指南書　法の抜け道』

バイパー中将に『かわいらしい服』

アリスト少将に『阿部さん』を、

黒鷹さんから、俺に『ベルカ空軍（エースコンバット）』『ＵＮＳＣ（ＨＡＬＯ）』『同盟軍・帝国軍（銀河英雄伝説）』『帝国軍　（スター・ウォーズ）』

六課とナンバーズと筆者に、『うなぎ日本橋二色重（肝吸い付き）』『ドナテロウズ　ココラアベニュー店のイタリアンジェラート詰め合わせ』『小樽洋菓子舗ルタオのドゥーブルフロマージュとショコラドゥーブル』

たれねこさんから、クロノに『エリクサー』

なのは隊長に『黒マント』を、

すけかくさんから、航空ガジェット対策に『ペトリオットミ

サイル』×２０００発、魔法がなくてもなのはさんたちとともに空戦できる『Ｆ－１５ＳＥサイレントイーグル』×１００機、『Ｆ－２支援戦闘機』×１００機、これで海上防衛は万全『あたご型イージス艦』×１０隻、『むらさめ型護衛艦』×２０隻、『たかなみ型護衛艦』×１０隻、陸上ガジェット&

フェイトさんには『リンカーコア強化薬（キサラギ、アクアビット、トーラス印）』
シグナム副隊長には『和道一文字、三大鬼徹、名刀・秋水』
クロノには『神槍『グングニル』１００回刺され券』『魔剣『レーヴァーティン』１００回斬られ券』、『傷が全回復する薬（キサラギ、アクアビット、トーラス印』を、
六課の人にはカップヌードル3年分（賞味期限なし）を、
偽善者と書き道化さんから、この世界のクロノに『クロノ・ハーヴェイからの罵倒の手紙とクロノ・ハーヴェイと高町　なのはの幸せそうな新婚生活の映像が映っているＤＶＤ』を、
天光さんから、『喜多方ラーメン』を、
以上です」

はやて　「ふむ、近藤さんとフェイトちゃんの首輪はともかく、クロノ君に首輪の爆破スイッチ渡すんはヤバイんちゃうか？」

近藤　「ご安心を。細工して、ボタンを押したらそのスイッチが爆破するようにしました」

はやて　「・・・鬼や・・・」

近藤　「そして『エレノアが知る貴方のひ・み・つ』のロストロギアは俺が厳重に封印しましたので」

はやて　「うん、ほんま頼むで。あの人に個人の秘密がばれたらど

んな事になるやら・・・」

ウェンディ　「近藤さ～ん！助けて欲しいっす～！」

近藤　「どうした、ウェンディ？」

ウェンディ　「チンク姉が一人でぬいぐるみ独占してあたし等に回ってこないんす～！」

チンク　「この子たちは全て私の宝物だ！スティッチ！ベア・ダッフィー！グレース・ベア！シャチ！だれにもやらん！！」

ノーヴェ　「ああ・・・ぬいぐるみに囲まれてるチンク姉もいい・・・」

ウーノ　「・・・私もスティッチ欲しかったのに・・・」

はやて　「サラッと少女を告白したウーノさんでした」

近藤　「海鳴市にオープンした動物園のカップル限定チケット・・・か。でもあっちに行く時間もなあ・・・」

はやて　「ええやん、行ってきたら？」

なのは　「私はなんか行っちゃいけない気がする・・・なんでだろう？」

フェイト　「有給貯まってるでしょ？」

近藤　「俺が有給取ったら仕事滞りますよ？」

はやて　「・・・よし、海鳴に行ったら地球の私の家使ってええで！ほんで、仕事は私の実家に転送しとくわ！！」

近藤　「・・・どうやっても仕事させるつもりですか。まあいいですけど」

なのは　「ごめんなさい、でも近藤さんがいないととてもじゃないけど仕事が回らないの」

フェイト　「え!?お泊り!?私たち二人で!?そ、そんなぁ・・・まだはやいよぉ・・・（テレテレ）」

はやて　「嬉しそうやなぁ、フェイトちゃん」

ドゥーエ　「そうはさせないわ！！」

オーリス　「わ、私も近藤さんと動物園行きたい！！」

はやて　「・・・いつから居たオーリスさん？」

オーリス　「私、動物園のふれあいコーナー行ってうさぎさん抱きたい！！」

なのは　「乙女っていうより、かわいいなあ、オーリスさん」

ヴィヴィオ　「私もうさぎさんだっこしたーい！」

ドゥーエ　「あらヴィヴィオ、ドクターの話し相手してたんじゃないの？」

ヴィヴィオ　「あの人愚痴しか言わないからつまんないの。だから、アルコール飲ませて眠らせたの」

はやて　「・・・恐ろしい子に育ったなぁ・・・」

なのは　「なに、スカリエッティって子供に愚痴るの？」

ドゥーエ　「・・・話し相手がいないからね・・・」

フェイト　「ん？ウーノさんはスカリエッティラブじゃなかったっけ？」

ウーノ　「・・・嫌いではないわ。でもラブと愚痴は別よ。あの人スランプに陥ったらネガティブになってぶちぶち愚痴りだすのよ。付き合ってられないわ」

なのは　「そんな面倒臭い男の相手を子供にさせるなんて・・・」

ドゥーエ　「あれ？ちょっと待って、アルコールなんてアジトにあったかしら？」

ウーノ　「そういえばそうね・・・」

ヴィヴィオ　「ゆりかごの中に腐るほど転がってるよ」

はやて　「チョイ待ち。ゆりかごの中の酒っつったら、３００年以

上前のやつやろ?保存状態は大丈夫なんか?」

トーレ　「ああ、あれか。たしかワインだったな。私も試しに飲んだが、コクと深みがあって芳醇な味わいだったな・・・あれはいい酒だ」

ウェンディ　「あ、あれワインなんすか?ジュースみたいだったすねー」

ウーノ　「私聞いてないけど・・・」

トーレ　「ん?ドクターには報告したぞ?」

ウーノ　「・・・あの人は・・・」

セイン　「しっかし、なんでゆりかごにワインなんかあったんだろう?」

ウーノ　「歴代の聖王はゆりかごで生活してたらしいからね。生活用品や娯楽品があったとしても不思議ではないわね」

はやて　「ちょっ!?超ビンテージやないか!それ売ったらとんでもない額になるで!!」

ヴィヴィオ　「じゃあ、それで一儲けする?」

なのは　「・・・こんな現実的な子供になって・・・スカリエッティのアジトでどんな生活送ってるの?」

ヴィヴィオ　「え?普通だよ?アジトのそこら中におおさまの写真

貼ってて、ソレ見てセッテお姉さんがはあはあ言ってたり、ノーヴェお姉さんとかオットーとかがその写真見てなんかモジモジしだしたり、クアットロお姉さんが眼鏡頭につけたまま「メガネメガネ・・・」って探してたり」

はやて　「・・・最後のは何や?それにアジトの中が近藤さんの写真だらけて・・・引くわ・・・」

フェイト　「クアットロって一番性格と根性捻じ曲がってる人でしょ?」

ウーノ　「・・・否定はしないわ」

クアットロ　「ひどいです～ウーノ姉さま!」

ドゥーエ　「あら、居たの?」

クアットロ　「隠れてたんです～!」

近藤　「貴様か・・・ヴィヴィオに余計な知識を与えている腐った根性の元凶は・・・」

クアットロ　「ひいっ!?こ、近藤!?」

セッテ　「クアットロ、近藤”さま”と言いなさい」

クアットロ　「そんなことどうでもいいから助けなさいよ!!」

なのは　「ヴィヴィオ、クアットロにどんなこと教えてもらったの?」

ヴィヴィオ　「えっとねー、結婚詐欺の方法とー、男に貢がせる女のなり方とー・・・あ、子供の作り方！！」

なのは　「・・・クアットロ・・・少し、お話しようか・・・」

近藤　「矯正しような・・・」

クアットロ　「ちょっ！？ウ、ウーノ姉さま！ドゥーエ姉さま！助けてください！！」

ウーノ　「いやよ。死にたくないもの」

ドゥーエ　「自業自得ね」

クアットロ　「そ、そんな！？セ、セッテ！こ、近藤”さま”を止めて！！」

セッテ　「・・・いいなぁ・・・私も近藤様におしおきされたい・・・」

クアットロ　「セッテー！？」

近藤　「なに、心配するな。少し顔の形が変わって二度と戻らないだけだ」

なのは　「非殺傷設定だから大丈夫だよ・・・」

クアットロ　「全然大丈夫じゃない！？しかも近藤のほうはリアルに暴力でしょ！？なに拳握り締めてるの！？」

近藤　「当然、俺の拳で貴様をボコボコにするんだ」

クアットロ　「いやー！助けてー！！？みんなも見てないで助けてよ！！」

ナンバーズ　「・・・いや、怖いし・・・とばっちり受けたくないし」

クアットロ　「薄情者ー！！」

近藤　「さあ、覚悟しろ」

なのは　「少し、頭冷やそうか」

クアットロ　「いやあぁぁぁぁぁぁっっ！！？」

オーリス　「うふふ・・・わたし、動物園に行ったら、お弁当作っていくんだ～。そして、近藤さんに『あ～ん』なんかしちゃって～『おいしいよ。次は君が食べたいな』とかなんとか言われたりしちゃったりして～！！いやんいやん！！」

はやて　「・・・乙女の妄想は凄まじいな・・・あのカオスな状況がまったく耳に入ってないとは・・・」

エレノア「・・・あら、このロストロギアは・・・むっふっふ・・・こんな厳重な封印をするのはご主人様ね・・・でも甘いわ。私に封印は無意味よ！・・・よーし・・・これでみんなの弱みを握り放題よ！！」

## お茶濁しの設定画公開（前書き）

申し訳ありません。

活動報告にも書いたんですが、全然筆が進みません。
クライマックスになってこれはイカンだろうと思うので、なんとか奮い立たせようとしたり、しなかったり。

・・・いや、してないんですけど。

それで、気分転換にオリジナルキャラの設定画を書いてみました。

もし挿絵オフ設定している方は、見れませんのでご注意ください。

本当にダメダメな作者ですが、かならず完結はさせます。
楽しみにしている方には申し訳ないですが、もうしばらくお待ちください。

## お茶濁しの設定画公開

作者　「えー、全然小説を書く気が起きない作者です」

ヴィータ　「死ね、お前」

作者　「それでですね、あまりにも感覚が空くのも申し訳ないので、オリジナルキャラクターの設定画を描きました」

はやて　「へー、そんなん描く暇あるんやったら本編書きーな」

作者　「気分転換です」

ヴィータ　「で？誰を描いたんだ？」

作者　「近藤と、エレノア、バイパー少将、ハマー中将です」

はやて　「他の人は？ヤン一佐とか」

作者　「あんなやつ描いたら余計胸糞悪くなるじゃないですか」

ヴィータ　「・・・まあ、なあ・・・」

作者　「では、まずは近藤です」

＞ｉ１０７５３―７９１＜

はやて　「・・・あれ？そんなに怖くない顔やな。濃いけど」

ヴィータ　「フェイトが泣いた顔とは思えねーな。濃いけどな」

作者　「最初はストリートファイターシリーズのゴウキに近い顔の予定でした」

はやて　「・・・それ、もはや人間ちゃうやん」

ヴィータ　「ゴウキって・・・とても２６歳の顔じゃねーよ」

作者　「なので、多少やわらかくしました。髪の毛がツンツンなのはゴウキの名残ですね」

はやて　「でも、まあ・・・こんなでかい眼帯してる人を始めて見たら、間違いなく目線逸らすわ・・・」

ヴィータ　「・・・あたしも」

作者　「次はエレノアですね」

＞ｉ１０７４９―７９１＜

はやて　「おー、リインフォースやな！」

ヴィータ　「そうか、源書は夜天の書のオリジナルだから、官制人格も同じっつー設定だったな」

作者　「そうですね。だから、バリアジャケットが違うだけですね。あ、目にハイライトも入ってますよ」

ヴィータ　「しっかし・・・簡素なバリアジャケットだな」

作者　「機能重視です。あまり装飾を増やしてゴテゴテしても仕様が無いでしょ？」

ヴィータ　「まあ、それはそうだけどよ・・・」

はやて　「・・・おっぱいおっきいなあ～・・・揉みたいな～」

ヴィータ　「はやて、よだれよだれ」

作者　「次はハマー中将です」

＞ｉ１０７５２―７９１＜

はやて　「・・・怖い顔しとるな・・・」

ヴィータ　「この人スキンヘッドで眉毛もねーじゃねーか！」

作者　「設定が超武闘派ですからね。それに、なのはの世界では黒人系のキャラが出ていないので、あえてこんな感じにしてみました」

ヴィータ　「服の上からでもガタイがいいのがわかるな」

作者　「なにせシグナムに勝つくらいですからね」

はやて　「世の中広いな～」

作者　「最後にバイパー少将です」

＞ｉ１０７５１―７９１＜

はやて　「この人も普通にしとったら美人やのに・・・」

ヴィータ　「口を開かなかったらモテモテなのにな・・・」

作者　「彼女は本編の前書きかなんかで書いたように『鋼の錬金術師』の『アームストロング少将』を元にしています」

はやて　「服装はリンディさんと同じやな」

ヴィータ　「あたしは、あの年齢でこんなパツパツのレギンスみたいなパンツ履く神経を疑うよ」

はやて　「自分の体型に自身があるんやろうなあ・・・私もそんな風に、綺麗に年老いていきたいわ・・・」

作者　「さて、お茶を濁すようにこのような設定画を差し込みましたが、これでよりなのはたちと近藤が絡む姿を想像しやすくなると

思います」

はやて　「これからは挿絵も入れていくんか？」

作者　「・・・番外編のほうは描こうかなと思ってます」

ヴィータ　「本編は？」

作者　「・・・未定です」

はやて　「あ、ちなみにこの作者はかなりのアナログ人間なんで、絵を描くのも手書きです」

ヴィータ　「フォトショップも満足に扱えないダメ人間です」

作者　「ペンキで塗りつぶすのが精一杯です！だからこれ以上のクオリティを求めないでください！！」

はやて　「で？気分転換はできたんか？」

作者　「一応」

ヴィータ　「じゃあキリキリ動け。さっさと書け」

作者　「・・・善処します」

はやて　「すこし病んでますが、キッチリ書かせますんで、皆さん見捨てないで気長に待っていてください。お願いします」

ヴィータ　「今月は無理かもしれないけど、なんとか投稿できるよ

うにするんで、もうしばらく待っていてくれ」

作者　「よろしくお願いします」

作者　「番外編は投稿するかもね」

はやて　「あんた・・・」

ヴィータ　「おまえ、もう死ね」

# 第７７話（前書き）

投稿が遅くなり、まことに申し訳ありませんでした。

本当ならば最終回まで書き上げて一気に投稿しようかと思っていたのですが、あまりにも時間が空きすぎていることに驚き、とりあえずできているところまで投稿します。

不都合がなければ８日連続投稿になる予定です。

内容があまり無いかもしれませんが、ゆっくり見ていってください。

# 第77話

「将官や提督達に不穏な動き？」

スカリエッティ一味逮捕及びゆりかご突入作戦当日、近藤はモニタに映るミゼット幕議長に問い掛けた。

ミゼットも、真剣な顔をしながらも、呆れたような声を出し報告していた。

「ええ、あなたの言う通り最高評議会と繋がりがあると思われる将官、提督を監視していたの。スカリエッティが最高評議会を殺したと声明発表したときからしばらくは大人しかったんだけど・・・」

「近頃になって活発になったと？」

近藤は腕を組んで考える。

何故今頃？

というか、舌の根も渇かぬうちに何をしてるんだ？

近藤は以前から極秘にあらゆる将官、提督を調べ、なんらかの疑いありと思われる者には監視を付けるようミゼットやキール、レオーネに進言していた。

階級三尉の男が元帥、幕議長、相談役をあごで使うなど前代未聞だが、まあそれはいい。

それに、実は最高評議会と関係していたとされる将官や提督は、前回の近藤の『平和的説得』によって辞職に追い込まれた者の中に

多数おり、何も出来ないはずである。
今更そこから巻き返すカードなど無いと思うが・・・
そこで、近藤は自分が知るアルハザードの知識を掘り返してみた。

すると、ある一つの可能性に行き着いた。

「・・・まさか」

「何か心当たりが？」

ミゼットが近藤の呟きを耳聡く聞き取る。
ミゼットにしても、最高評議会という存在はベールに包まれすぎて簡単に手出し出来ない。
いくらスカリエッティが『殺した』と言っても、それは犯罪者の言葉であり、そもそもスカリエッティを作り出したのは最高評議会であるという事実も、まあスカリエッティの言ではあるが、ある。
もしかしたら最高評議会は未だ生存しており、スカリエッティとなんらかの取引、繋がりがあるのかもしれない。
そうすることによって発生するメリットは不明だが。

最近不穏な動きを始めた将官や提督達は、現在スカリエッティ逮捕とゆりかご攻略に慌ただしい管理局ならば、多少大胆に行動したとしても簡単にリークされないと践んだのだろう。
そこは浅はかであるとしか言えないが、だからといって彼等がコソコソ動いているからといって管理局は捕まえる等はできないし、権利もない。

そもそも、現状、彼等はただコソコソ動いているだけである。
何か管理局に仇なすことや、反することをしているわけではない。

ならば、どうするか。

繋がりの元を徹底的に洗いだし、潰せばいいのだ。

判断材料の少ない現状では予測の域を出ないが、恐らく新たに最高評議会を名乗る者、もしくは生き残りが現れ、その者を中心に何かをしようとしているのだろう。
その集まりが世界に良い方向に向かうならば、近藤は手出しはしない。
だが、わざわざ最高評議会に関係していた将官や提督を集めているとなると、まあ普通良からぬ事をするのでは?と思ってしまうのは仕方の無いことだろう。
辞職に追い込まれた将官や提督達が改心したとは到底思えないし、どうせ近藤に仕返し、そして地位回復などが目的だろう。

まあとにかく、まずは見極めが必要である。

そこで、近藤は大胆な仮説を立てた。

最高評議会は、アルハザードの知識をある程度有していたのではないか、と。
スカリエッティをアルハザードのクローニング技術によって生成したこと、アルハザードの人間であったスカリエッティの遺伝子情報を所持していたこと、を加味すれば、あながち嘘ではないだろう。
それに、アルハザードの知識を中途半端に有しているということも考えられる。

近藤は、全てではないにしろ、デバイスコアとの神経リンクによってブラックボックスの情報、つまりアルハザードの知識を豊富に有している。

その知識の中にはスカリエッティの個人情報もあった。

そして、スカリエッティの個人情報を知っていたら、スカリエッティをクローニングしようとは思わないだろう。

近藤ならば、もっと優秀な他の人間をクローニングする。

まあそこは最高評議会の事情もあるのだろう。

もしかしたら、スカリエッティの遺伝子情報しか手に入れられなかったのかもしれないし、スカリエッティ程度の知識でもいいと見切りをつけていたのかもしれない。

ただ、これだけは言える。

少なくとも、スカリエッティの知識は近藤以上はない、と。

「まだ予想の範囲を越えませんので言えませんが、まあ、そちらは自分がなんとかします」

近藤は軽くミゼットにそう言いこの話を切り上げ、今作戦の打ち合わせを始めた。

「俺じゃあ聖王に勝てないな・・・」

廊下を歩きながら、近藤がポツリと呟いた。

「・・・確かに、ご主人様の魔力じゃあ無理ですね。格闘なら歩がありますが・・・あ、真の覚醒をした聖王では格闘も無理か」

エレノアが近藤の呟きを肯定する。

近藤は改めてスカリエッティ一味対策を練っていた。

ナンバーズに関してはあまり脅威と感じていなかった。
確かに、全員で一斉にかかってこられたら相手するのは大変だが、恐らくチーム分けしてバラバラに配置しているだろう。
個々の力も強いだろうが、今の機動六課のメンバーならば、相性はあるがまず負けることはないだろう。
それらは皆スカリエッティのアジトや、地上制圧にほとんどまわされていると予想できる。
ゆりかごにはガジェット、ＡＭＦがある。
ナンバーズも必要最低限の配置に留めるだろう。
戦力分散ではあるが、それを帳消しにしてしまう程『ゆりかご』は出鱈目なのだ。

そして、考えうる脅威の一つが『聖王』である。
ゆりかご内を手薄にしたとして、聖王のクローンであるヴィヴィオをただの生体ユニットとしか扱わないというのは考えにくい。
おそらくスカリエッティは何らかの手段を用いて聖王を強制覚醒さ

せるだろう。
もしヴィヴィオが聖王の力をフルに使えるならば、なのはは勿論、はやてとヴォルケンリッターチーム、下手すれば全員でかかっても敵わないだろう。
古代ベルカの王として長年君臨していた聖王は、それほど掛け離れた力を持っているのである。

今の魔導士ランクで換算しても、ＥＸ（規格外）ランクであろう事は想像に難くない。

そう考えると、近藤の手元にある駒で聖王に真っ向から勝負を挑むのは難しい。
魔力は人並み、しかもゆりかご内は高濃度のＡＭＦが充満しており、魔法による戦闘でナンバーズや聖王に勝てるとは到底思えない。

肉弾戦ならば多少分はあるだろうが、それでも相手が高レベルに位置する使い手の場合、魔法、もしくはＩＳと併用されれば難しい。
特殊能力の「黒化」ならば、相手の攻撃は一切無効にするが、コレはこちらからも攻撃ができないという欠点があるため、逃走などにしか使えない。
改めて自分の能力を分析すると、戦闘に関しては本当に役立たずな男である。

「私が相手しますけど？」

「お前は殺すからダメだ」

エレノアは目をキラキラさせながら元気よく挙手するが、近藤はエレノアの提案を即却下した。

そもそも、何故近藤がこんなに悩んでいるかというと、スカリエッティの裏をかく配置という事も要因の一つなのだ。
おそらくスカリエッティは、近藤とフェイトが同じく行動を取ると思っているだろう。
逆を言えば、エレノアしか聖王にまともに太刀打ち出来ないと思っているからである。
事実そうなのだが、とすれば、行き先はスカリエッティのアジトである。
スカリエッティのアジトとおぼしき場所は、先日ヴェロッサが発見してくれた。
もしかしたらわざと見つけられるようにしたのかもしれないが、この際そんなことはどうでもいい。

今回、近藤とエレノアは別行動を取ることにした。
そうすれば戦力補填と、スカリエッティの裏をかくことにもなるからだ。
だがコレが近藤を悩ませる種なのだ。

今回のオーダーはあくまでヴィヴィオの『奪還』である。
もしヴィヴィオが聖王として覚醒していたとして、それを抑える力は近藤自身には無い。
かといって、エレノアをぶつければそれでいいというわけではない。
エレノアは聖王に勝てる力を持っている。
それは確かだ。
しかし、それは相手を『倒す』力ではなく、『殺す』力である。
聖王の真の実力は、エレノアとて手加減して勝てる相手ではないのである。
ベルカの歴史上、どの代の聖王も常に最強の王に位置する力を持っている。
常に頂点、常に最強、それが聖王なのだ。

ヴィヴィオがなんらかの力で聖王覚醒をしていたとして、いきなりその最強の力を十二分に扱えるかどうかはわからない。
だが、ヴィヴィオが聖王の力をうまく使えたとしたら、エレノアも本気になるしかない。
そうなれば、必然的に殺し合いになる。
そうなれば、勝敗はエレノアに挙がる。
一撃必殺、エレノアはヴィヴィオを『一撃で』『必ず』『殺せる』魔法を有している。
それでは元も子もないのである。

「この際ユニゾンを・・・」

「却下です！」

今度は近藤の提案をエレノアが即却下した。
両手を体の前で交差させ、バッテンをつくる。

「ユニゾンすれば、確かに身体能力向上によって有利になるでしょう。でもそれは決定打になりません。とすれば、『アレ』しかないじゃないですか！！『アレ』は私の『死（デス）』よりタチが悪いです！！
そもそも、『アレ』は対人ではなく対城・対軍攻撃です！！」

「いや、お前の使う『死（デス）』も大概だけど・・・」

「その気になったら星を消す力に言われたくないです！とにかく、ユニゾンは却下です！！」

エレノアはユニゾンを頑なに拒否する。
近藤も理由がわかっているだけに、あまり強くは言えなかった。

近藤の力不足、エレノアは却下、ユニゾンも却下・・・
かといってなのは達が相手するには荷が重い。

さて、どうしよう？

呑気に聞こえるかもしれないが、八方塞がりの現状にウンウン唸りながら頭を抱える近藤だった。

そこへ、エレノアが思い出したように「あっ」と声をあげた。
ある程度運が関係しますけど、と前置きして、エレノアはこんな事を言った。

「別の王の力を借りるのはどうですか？」

その頃、なのは達フォワード陣は会議室とは別の部屋で最終確認を行っていた。

まず、ゆりかご内は高濃度のＡＭＦが予想されるため、なのは、ヴィータ、近藤の３人で突入。

スカリエッティのアジトへはフェイトとエレノア、そして現地にてヴェロッサとシスター・シャッハが協力してくれる予定である。

その他の空、地上の前線の総指揮ははやてが取り、後方はバイパーが受け持つ予定である。

シグナムはリインと共に空を援護し、ティアナ、スバル、エリオ、キャロは地上を担当となる。

さらに、ティアナ達はガジェットとの戦闘経験が豊富なため、最前線に赴かなければならない。
その際、必ずナンバーズと遭遇するであろうからそれらとも戦わなければならないという、ある意味ティアナ達が最も過酷な役割となっていた。

はやて達ロングアーチとの作戦会議でも、フォワード達は各々緊張しているのか顔が強張っていた。

ミゼット幕議長との打ち合わせを終え、近藤は前線メンバーの集まる部屋に向かった。

さて、とりあえずティアナ達の緊張をどうするかと考えながら部屋に入ると、部屋の空気は思いの外和やかだった。

特にフォワード達の顔つきが自信に満ち溢れていたのだ。

近藤はどういう事だろうかと、近くで生暖かい眼差しを送っていたヴィータに声をかけ、事情を聞いた。

どうやら近藤が来るまでになのはがフォワード達を激励したということのようだ。

なるほど、今まで行ってきた厳しい練習は、彼女達の血となり肉となっているだろう。

練習に裏付けされた強さというのはとても頑丈で、折れにくいものだ。

ようするにティアナ達には重厚なバックボーンがあり、それは絶対裏切らない。

近藤がフムフムと納得しながら頷いていると、なのはが近藤に近付いてきた。

「じゃあ、近藤さんからも一言もらおうか」

なのはがニコリと近藤に笑いを向け、そう言った。

だが、近藤は顎に手をやりながら少し困った顔をした。

「俺ですか？うーん・・・恐らくなのは隊長が言ってくれてると思うんで、特にないんですけど・・・」

「そう言わず、ビシッとカッコイイ言葉を贈ってください」

ニコニコ笑いながらハードルをあげるなのはに、近藤はため息をついた。

近藤は目をつむり、一呼吸おいた。

そして、ゆっくり口を開く。

「君達は自分に力がない事を、弱い事を知っている」

近藤の言葉に、ビクッと肩を震わせるスバルとキャロ。

「挫折も知っている。敗北も知っている」

苦痛を耐えるように顔を歪めるティアナとエリオ。

「だけど、君達はそれらに屈することなく、はい上がり、前を見て歩んできた」

近藤は、ポンとティアナの肩に手を置いた。

ティアナはまっすぐ近藤を見つめる。

「それは『不屈の心』だ」

ティアナ達は目を見開く。

そして、なのはも驚いたような表情をした。

「なにものにも心は屈せず、それが人の一番の力、最大の武器だ」

不屈の心・・・技術より、知識より、それこそが本当になのはが新人フォワード達に教えたかった事だったのだ。

実はこの事については、なのはは直接的にフェイトやはやてにも言っていない。

まあ、二人は言わずとも薄々勘付いていたのだが。

心というものはとても不安定で、不確かで、そんな人間の根本たる

心を簡単にどうこうできるとは思っていなかったからだ。
諦めない心、それは教えて覚える事ができるものではない。
簡単に実践できるものではない。

人の心は弱い。
ふとした事で簡単にポキンと折れてしまうことがある。
だから、この機動六課での教導で、少しでも自分やフェイト、はやて、シグナム、ヴィータ達の在り方を理解してもらいたかった。

「はっきり言おう。君達は強い」

しかし近藤はハッキリと言った。
その言葉に、なのはは実感した。
自分のやってきた事は、間違っていなかったと。
そして、それをわかってくれた人がいたと、認めてくれる人がいたと。

「日頃の訓練によって裏付けられた自信、各々が持つ気高き心、鍛え上げた身体、それ等全てが今この世界の誰よりも強い」

近藤はティアナの肩から手を離し、硬く拳を握る。
そして、力強い隻眼でフォワード達を見渡す。

「さぁ、大切な人を助けよう、心を救おう、新しいはじまりの為に、全てを終わらせよう」

「はいっ！！」

近藤の激に、フォワード達は力強い返事と、決意を込めた眼差しで返した。

# 第７７話（後書き）

作者　「さて、久しぶりのあとがきです」

はやて　「作者よ・・・こんだけ期間空けといて、何か言うことないんか？」

作者　「ええと・・・申し訳ないんですが、前回まで行っていた贈り物コーナーは終了させていただきます」

はやて　「まあ・・・当然やな。こんだけほったらかしにしとったら、贈り物が多すぎて対処できんようになっとるからな」

作者　「いままで色々なものを送ってきてくれた皆様、ありがとうございました。そして対処しきれなくてすいませんでした」

はやて　「そういえば、『混沌の魔法使い』さんとコラボしたんやったな？」

作者　「はい、『混沌の魔法使い』さんの書かれている『夜天の守護者』にて、特別コラボをしてもらっています。ありがとうございました」

はやて　「こっちでもコラボする予定は？」

作者　「・・・神のみぞ知る・・・です」

はやて　「・・・限りなく実現性が低いんか・・・」

作者　「・・・リアルに仕事が急がしいんだよ・・・」

はやて　「・・・あんた、それ理由にしたらなんでもいけると思ってへんか？」

作者　「とんでもない！本当に１０月に入ってから急に忙しくなったんです！！」

はやて　「それに・・・なあ・・・？」

作者　「・・・冬コミ当選した」

はやて　「原稿は？」

作者　「一切描いてません！！でもがんばる！！」

はやて　「うん、まあ、がんばれ」

作者　「がんばる！！・・・がんばれたら・・・いいなあ・・・」

はやて　「明日も投稿しまーす！楽しみに待っててな！！」

# 第７８話

「・・・やっぱり指揮は近藤さんの方がええんちゃうか？」

はやてはそんなことを言った。

現在、アースラの管制室ではやては首を捻りながら、ジト目で横にいる近藤を見る。

周りにいたなのはやフェイトも苦笑していた。

はやての言うことも尤もではある。

階級でいえば、はやては二佐、近藤は元帥（内定）である。

しかし、近藤は首を横に振る。

「先日も言いましたが、現在俺の階級は三尉です。元帥就任はこの事件が落ち着いたら、ですからね」

「いや、でもなあ・・・」

はやては渋る。

そもそも、レジアス中将が指揮を近藤に委ねるとか言い出した所から話はおかしくなったのだ。

ジェイル・スカリエッティとその一味、ゆりかご対策本部が設置さ

れ、地上の上層部が顔を並べ、会議が先程まで行われていた。
そこで、なんと地上のトップであるレジアス中将が近藤三尉に指揮権を譲渡したのだ。当然会議は混乱した。
とはいえ、上層部のほとんどが近藤の元帥内定を知っていたため、大した問題ではなかったのだが、問題は佐官連中である。
階級の弊害というか、近藤の元帥内定については将官クラスには通達したが、その下、いわゆる佐官クラスには通達しない、極秘事項だったのである。
事情を知らない佐官は当然レジアスに猛反発した。
当然といえば当然の話である。

そこで、レジアスは落としどころとして、近藤の所属する部隊の長、すなわちはやてを総指揮に指名した。
はやては次代を担うルーキーであるし、実力、階級は申し分ない。しかもサポートに現在ミッドチルダに帰省中のバイパー少将を据え置くという。
これには佐官連中も反論できなかった。

ただ、バイパー少将という単語を聞いた途端、佐官連中ははやてに合掌し、当のはやては胃がキリキリと痛みだしたのは余談である。

「それに、俺にもやるべきことがありますからね」

近藤はそう言いはやてを見るが、はやてはそんな近藤の瞳に言い知れぬ不安を抱いた。

その瞳はとても清んでいた。
なんの感情を孕むことのない、からっぽの瞳。

はやては近藤の『やるべきこと』という言葉に、嫌な予感がした。

作戦開始時間となり、アースラは飛び立つ。

アースラは無事飛行を開始し、決戦場であるゆりかごへ向かっていた。

前線メンバーは出撃待機で別室へ移動している。

艦長席にははやてが座り、指示を飛ばす。

「このまま全速前進を」

「アイ、マム全速前進」

はやて隣に立ち、指示を復唱し、操舵手に指示を飛ばす副官。

それは時空管理局において氷の女王と呼ばれるバイパー少将だ。

輝く金の髪をなびかせ、空気が引き締まる凛とした声、涼しげな碧い瞳。

気品を醸しだし、その佇まいはまさに女王と呼ぶに相応しかった。

はやての指示が若干ビクついているのは仕方の無いことだろう。

他の局員にも緊張が走る。

いつもの機動六課の管制室も緊張感はあるが、現在の比ではない。

そんなはやての心情を察知してか、バイパーは軽くため息をついた。

「しっかりせんか。今貴様は震えや怯えることが許されぬ立場なのだぞ。安心しろ、可能な限り私がサポートする」

バイパーには珍しくはやてを励ますような言葉なのだが、どうやら本人はわかっていないようだ。

（いや・・・バイパー少将がおるからやねんけど・・・）

口が裂けても言ってはいけない言葉である。
また胃がキリキリと痛みだした。

「ゆりかごまでの距離は？」

バイパーが通信師を見る。
通信師はビクッと震えレーダーを見た。

「や、約２０キロです・・・」

「だそうだ、早く身支度したらどうだ？」

バイパーがはやてを見る。
その目は、いつもの威圧的な眼差しではなく、背中を支えてくれるような、頼もしい眼差しだった。

「はい！」

はやては元気に返事をし、駆け出して行った。
実は半分ほど「やったー！解放されたー！」と思っていたのは内緒だ。

「ふん、まだまだ若いな」

フッと笑うと、すぐに表情をキリッと凛々しいものに戻し、バイパーは後方の各部隊との連携の通達を飛ばす。

前線の指揮ははやてに託された。

フォワード達とシグナムはヘリで先に降下しており、現在アースラにはシグナムを除く隊長、副隊長達とエレノアの６人である。

「さあ、行こうか！」

なのはの掛け声と共に、飛び降り、同時にカリムから隊長達の限定解除申請がなされた。

各々バリアジャケットに身を包み、蒼天を翔ける。

「・・・相変わらず近藤さんはソレなんですね」

なのはが苦笑しつつ近藤を見る。

はやてやフェイトも苦笑していた。

隊長達、エレノアまでもがそれぞれのバリアジャケットに身を包んでいるのに、近藤は制服のままだった。

まあ、魔力防壁で身を包んでいるので、バリアジャケットを纏っているのと変わらないから問題はないのだが。

「なんつーか、気が抜けるな」

ヴィータも呆れ顔である。

「だから言ったのに。私がデザインするって！」

エレノアは口を尖らせプンスカ怒る。

「あのな、あんなデザインのバリアジャケット着るなら武装局員のデザインにするわ！」

近藤は必死になのは達についていきながらエレノアに文句を言う。

近藤は空が飛べるとはいえ、魔導師ランクＡの一般人である。

それぞれがオーバーＳの隊長達とは地力が違う。

だから飛行速度も必然違う。

近藤はなんとかなのは達に負担をかけないように必死に全開で飛んでいるのだが、なのは達は余裕である。

まあ、近藤も男のプライドがあるので「速度緩めてください」などとは死んでも言えない。

近藤がそんな苦労をおくびにも出さないものだから、なのは達は全く気づかなかったのは仕方のないことだろう。

普段（デスクワークのみ）から驚異的な仕事ぶりを発揮しているため、皆近藤への認識が麻痺してしまっているのだ。

「で？デザインてどんなん？」

はやてがエレノアに尋ねると、エレノアはニマーっと笑いモニタを

展開した。
そこに映る画像を見て、はやてが一言
「・・・ええやん」
キランと目を光らせるはやて。
はやての”なにか”に火を点けたようである。
「どこが!?こんなデザイン２６歳が着るものじゃないでしょう!」
近藤は真っ向から反論。
だが、周囲はそうでもなかった。
「いいんじゃねーか?」
「うん・・・似合うんじゃないかな?」
「かわいいと思いますよ?」
なにこの温度差?
近藤の廻りは敵だらけだった。
因みにエレノアの意匠であるが、それは皆さんの想像におまかせする。
ただ、近藤には似合わないデザインだったとだけいっておこう。

しばらく飛んでいると、なにやらなのはとフェイトが言い合いをしだした。

「私がいつもどんな気持ちで・・・」

「それを言うなら・・・」

どうやらお互いいつも無茶をするからハラハラするということだが、まあ近藤から言わせると五十歩百歩、どんぐりの背くらべ、めくそ鼻糞を笑うである。

仲がいいなあと思いつつ、内容が自己ブーストの話になってきたので、近藤は「自己ブーストについて、いいですか？」と割り込んだ。

「昨日のマッサージであなたがたの魔力ラインはある程度強化されました。おそらく自己ブーストにも耐えられるでしょう」

近藤の言葉を真剣に聞くなのはとフェイト。

特にフェイトは、自己ブーストに耐えられると聞いて、少しホッとしていた。

「ただし、なのは隊長」

いきなり名指しされ、ピクッと震えるなのはは不安な眼差しで近藤を見た。。

「本来自己ブーストとはリミッター解除と同義であるため、こんな質問はおかしいのですが、あなたは何段階ブラスターシステムのリミットがあるんですか？」

「・・・！・・・3段階・・・です」

なのはは驚きながらも、渋々答えた。

なぜなら、リミッターの段階解除のことは近藤には一言も言っていないし、知っているのは親友のフェイトやはやて、ヴォルケンリッター達のみだからだ。

彼女達が近藤に言ったとは思えない。

「簡単ですよ。あなたは無理をしてダメなら、さらに無理で上書きして押し通す人ですから」

なのはの心情を悟ってか、さらっとひどい事を言う近藤に、うぐっと詰まるなのはとあ～と納得顔のフェイトやはやて達。

そんな図星のなのはに近藤は人差し指と中指を立て、こう言った。

「いいですか？二回です。それ以上は身体に多大な負担をかける、最悪再起不能です」

近藤の重い宣告に、なのははゴクリと唾を飲み込み、コクンと頷いた。

まあなのはからすれば、ブラスター一回でも負担が大きかったので、それでも有り難い話である。

「実は４回くらいまでなら余裕なんですけどね」

近藤がボソボソとはやてに耳打ちする。

それを聞いたはやては驚きつつも、ニヤリと口元を歪め笑った。

この男は、なのはが2回という制限を守らないことを見越して、あえて少なめのボーダーラインを設けたのだ。

「近藤さん・・・あんた、悪やな」

「いえいえ、悪魔はなのは隊長ですよ」

はやての笑みにつられるように近藤もニヤリと口元を歪め、軽口を叩いた。

まるで悪代官のやりとりである。

「なんか言った？」

悪魔という言葉に敏感に反応したなのはは、ものすごい形相で近藤とはやてを睨んだので、高速で目を逸らした。

なんとも和やかな、締まらない空気である。

エレノアは思わずクスリと笑う。

しかし、それでいい。

これがなのは達であり、機動六課なのだ。

エレノアは愛おしいものを見るような眼差しで見渡し、静かに口を

開く。

「今から向かうは戦場、命を賭ける場所です」

急にエレノアが滅多に見せない真面目な声で話すものだから、皆ビックリした。

近藤もビックリした。

「必ず、必ず生き残るように。自分の命と引き替えなんてエゴは許しません。必ず、全てを助け、生き残るのです」

エレノアの言葉に、なのは達は力強く頷く。

ただ、近藤は頷くことはなく、真っ直ぐ目指す先を見ていた。

# 第７９話

近藤はなのは、ヴィータ、はやてと共にゆりかごへ、フェイトとエレノアはスカリエッティのアジトへそれぞれ向かった。

はやて達はゆりかごから続々と射出されるガジェット群と先行して戦っている武装局員達と合流、指揮権をはやてに移行し、それぞれの指示を飛ばす。

先行していた武装局員達は、機動力の高いガジェットに苦戦していた。
なによりＡＭＦがあるため魔法の威力が弱まってしまう。

しかし、はやて達ガジェット戦闘経験者の的確な指示により戦局は若干取り戻した。

はやてはなのは達にゆりかご突入まで、それぞれ現在待機中の武装局員の指揮をするよう指示し、ガジェットに向かって行った。

はやては砲台となり、無数に飛び交うガジェットを落とし、武装局員には各個撃破を命令、なのはやヴィータもゆりかご進入までは臨時に指揮をとりガジェットを落としていく。
そして、近藤ははやてのサポートとして細かく武装局員に指示する。

「二時の方向、３編隊接近、前衛は攻撃後退避、後衛は右回りで攻

撃」

「なな め上５５度、２編隊接近、回り込んで攻撃」

的確に、すばやく指示する姿に、はやてはほほ～と感嘆の声を上げた。

だが、近藤の指示を守らず各自勝手な行動を取り出した。

結果、武装局員達は自らピンチに陥り、それをはやてや他の武装局員が助けるというお粗末な戦いを行っている。

まあ武装局員の心中をさっするに、近藤の今までの散々な噂に加え、先日の記者会見が影響しているのは間違いない。

事情を知らない者があの会見を見ていれば、以前からの噂も相まって余計近藤に対するイメージが悪くなるのも仕方ない。

だからといって、世界の平和を左右する事態のときに私情を挟んで指示を無視するなど以っての外である。

管理局の現場は低年齢層が大半を占めている。

いくら任務とはいえ、やはり割り切れないという気持ちがあるのだろう。

そのあたりがまだまだ若い。

「あんたら！なにしとんねん！！近藤さんが指示した通りちゃんと陣形組んで対処せんかい！！」

見兼ねたはやてが近藤の指示を無視して好き勝手動いている武装局

員を叱る。

叱られた武装局員からすれば、何故自分より実力が無い者に従わなければならないのか、プライドが許さないし、噂を信じて近藤という人間を嫌っていることもある。

なにより、はやてのその近藤を擁護する行動がさらに武装局員達をイライラさせる。

そもそも近藤は自身の身の丈に見合わぬ功名心によってなのはに重傷を負わせた男であり、そのなのははやての親友である。

そんな親友を傷付けた愚か者を気遣うはやての行動が信じられず、余計近藤に反発してしまうのだ。

ようするに、はやてと武装局員との近藤に対する温度差が招いたトラブルなのだ。

はやてはそのことに気付かず、武装局員たちをしかりつけ、さらに悪循環となる。

「・・・！皆、何してるの!?今の状況理解してるの!?」

「あんたら!ええかげんに・・・」

見兼ねたなのはとはやてが現在の重要な事態を考えずゲスな噂を鵜呑みにして隊を乱している武装局員達に激怒しようとすると、近藤はそれを手で制した。

「なのは隊長もはやて隊長も、ご自分のやるべきを。アレ等の躾は俺が責任持ってしますから」

なのはとはやては渋々近藤の言うことに従った。

「（エレノア、源書を暫くこちらで使用するぞ）」

「（りょーかーい！）」

近藤はため息をひとつつくと、エレノアと念話を行い手を前に翳す。
そして、近藤の前に一冊の本が現れる。

「おまえ達、今からガジェットを一掃する。待避しろ」

近藤は好き勝手動いている武装局員に警告する。
当然、武装局員達は近藤の戯れ言だと思い、聞きはしない。

「はん！やれるものならやってみろ！」

「お前みたいなクズにできるならな！！」

誰かがそんな罵声を飛ばし、それを受けて他の武装局員も賛同するように野次を飛ばしだした。

できるわけが無い！

一様にそう思っていた。

近藤はもう一度ため息をついた。

「忠告はしたぞ？」

そう言うと、近藤の前に現れた本、源書が開き、パラパラとページがめくれる。
途端、源書に収まりきらない強大で狂暴な魔力が溢れ出る。
武装局員達はガジェットとの戦闘に必死なため気付いていなかったが、近藤が源書を開いた際に溢れ出た魔力を感じたはやてやなのは、ヴィータは、直ぐに近藤の方を見た。
そして、発生源を確認すると、ドバっと汗が吹き出てくるのがわかった。

「なんや・・・この狂暴な魔力は・・・」

「なんて出鱈目な・・・こんな魔力間近で受けたら正気じゃいられないよ・・・」

「・・・なんつー非常識・・・」

なんと狂暴な魔力、出鱈目な魔力、理不尽な魔力。
3人の呟きの通り、恐らく間近であの魔力を浴びれば、正気でいられないであろうと容易に想像できる程だった。

「S1起動」

〈ｓａｉｔａｔｏｒ　ｇｌａｄｉｕｓ　１０００（剣の舞１０００）〉

近藤の命令を了承した源書は輝き、魔法を発動させる。

そして現れるのは白い剣のように尖った形をしたスフィア

そのスフィアは近藤の背後をカーテンのように、ズラリと並び剣群となる

近藤の背後に広がる空は、白く塗りつぶされる

その数１０００

それを見ていた武装局員は口をあんぐりと開け、目を点にしていた。

近藤はゆっくりと手を挙げる。

「ｔａｒｇｅｔ　ｌｏｃｋ（目標固定）・・・ｏｎ　ｙｏｕｒ　ｍａｒｋ（位置について）・・・ｇｅｔ　ｓｅｔ（よういー）・・・」

剣軍はズラッと一斉にガジェットに剣先を向け、待機させる。

「Ｉｔ'ｓ　ｐｏｓｓｉｂｌｅ　ｔｏ　ｄａｎｃｅ，　ａｎｄ　ｔｈｅ　ｃｒｏｗｄ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｓｗｏｒｄ　ａｓ　ｉｔｓ　ｎａｍｅ　ｓｕｇｇｅｓｔｓ．（さあ、その名の通り舞えよ剣群）」

近藤は手を振り下ろした。

「射線上の局員！！緊急回避せえー！！」

はやては急いで近藤の狙う射線上でガジェットと戦闘を行っている武装局員に命令した。

と同時に、１０００の剣群は意思を持つかのように、それぞれが一直線に、流れ星のように白い軌跡を残し飛び交うガジェットに向かっていった。

目に見えぬ弾丸のような速さでガジェットにザクンと突き刺さり、間髪いれずガジェットは爆発する。

ガジェットに隣接していた武装局員にはわけがわからないだろう。

いきなりガジェットに白い剣が刺さり、爆発するのだから。

しかも、その白い剣が大群で迫って来るのだ。

目に見えぬ速さの攻撃、そしてガジェットの爆発。

それは恐怖でしかない。

混乱した武装局員達は剣群の出所を見た。

そして、そこにいた近藤を見てさらに恐怖し、一様に直感で思った。

殺される、と。

その直感は当たっていた。

何故なら、近藤は武装局員を助けようと思っていなかったからだ。

待避しろと命令した。

しかし言うことを聞かない武装局員達。

命令に背き、好き勝手した結果なのだから、殺されても文句はいえまい。

最悪、『不慮の事故』があったとしても、それは近藤が責められることではない。

武装局員達はすぐに射程圏外へ待避し、近藤の繰り出した剣群がガジェットを串刺しにしていく様を見て、夢を見ているかのような錯覚を覚えていた。

絶え間なく続く流星群は、空を黒く塗りつぶしていたガジェット群をことごとく破壊していく。

皆それぞれこう思っているだろう。

自分達より弱いはずじゃないのか？

なんだあの出鱈目なスフィアの数は？

あんな魔法知らない。

話が違う、と。

別部隊を指揮していたはやてやなのは、ヴィータも近藤の白い軌跡を描く剣群を見て口をあんぐりと開けていた。

「な・・・なんや、あれは・・・」

「スフィアを一度にあんなに無数に・・・しかも全てがガジェットに確実に着弾してる」

「エレノア姉ちゃんも出鱈目だとは思ってたが、まさか近藤までここまで規格外とは・・・」

はやて達の呟きは、絶え間無く爆発するガジェットの音によって掻き消え、聞こえることはなかった。

まるで空中で絨毯爆撃があったかのような爆発は、ガジェット一掃によって収まった。

そして近藤は待避していた武装局員達の方を向き、抑揚なく言った。

「作戦に私情を挟むな。感情を盛り込むな。指揮官の命令に逆らうな。わかったか」

その、まるで羽虫を見るかのような冷たい眼差しに、武装局員達は顔を真っ青にし、頷いた。

ガジェット群の脅威が無くなったかのように思えたが、未だガジェットはゆりかごから際限なく射出され、空を黒く塗り潰そうとしている。

近藤がまた源書による魔法を行使しようとしたとき、別動部隊から、ゆりかごへの侵入口確保の連絡が入った。

「はやて隊長、後はよろしくお願いします」

近藤はそう言うと、なのは、ヴィータと合流し侵入口へ向かった。

ゆりかごの中へと進入すると、高濃度のＡＭＦが張り巡らされており、近藤は飛行を維持できず強引にゆりかご内に着地、なのはやヴィータも阻害を受けているようで集中してゆっくりと着地した。

「さあ、ここから打ち合わせ通り3手にわかれましょうか」

なのはがそう言うと、ヴィータと近藤は頷いた。

なのははヴィヴィオ救出
ヴィータはゆりかごの動力炉破壊
近藤は野暮用

「・・・やっぱり近藤さんだけおかしい・・・」
なのはがジト目で近藤を見る。
「真剣に相手するな、なのは。こいつがこんななのは今に始まった事じゃないだろう？」
ヴィータがなのはの肩をポンポンと叩き宥める。
酷い言われようである。
「まあ、保険ですよ。万が一のための仕込みです」
近藤は苦笑しながら言うがそんな曖昧な言葉で納得できるなのはではない。
だが、これ以上追及しても近藤は口を割らないこともわかっている。
なのはは渋々引き下がり、再び真剣な表情になる。
「皆で無事に」

「笑顔でまた会うために」

「全てを取り戻す！」

近藤、なのは、ヴィータが各々誓いの言葉をたて、拳を前に出し、3つの拳はゴツンとぶつかり合った。

そして、自らのやるべきことをするため、走り出す。

それぞれの戦場へ向かうために。

同時刻、スカリエッティのアジトへ向かっていたフェイトとエレノアも、アジトへの侵入通路確保の連絡を受け、現地にて聖王教会からの協力者であるシスターシャッハと合流、3人と別行動をするヴェロッサと共にアジトへと入っていったのだった。

# 第８０話

近藤はなのは、ヴィータと分かれゆりかごの深部へと歩を進めていた。

近藤の目指す場所にはたいしたものはないのか、ガジェットやナンバーズの妨害は一切なかった。

近藤はそんな事を気にすることなくズンズンと足早に進む。

そして、ある豪奢な拵(こしら)えのされた扉の前で止まる。

自動ドアセンサーは稼動していないようなので、無理矢理力ずくでこじ開ける。

電源供給自体カットされているようで、部屋の中は明かりが点かない。

この部屋はスカリエッティも手出ししていないようで、床には埃が溜まりかび臭い。

やがて暗闇に目が慣れ、部屋の中がだんだん見え始める。

そこは寝室だった。

大きなベッドに天蓋、きらびやかな家具、まるでどこかの王様の寝室のようだ。

ああ、聖王は王様か、と気付き近藤は苦笑した。

近藤は部屋を見渡し、鏡台などの家具の引き出しをひとつひとつ確認した。

そして、ある引き出しを開けたとき違和感を感じ引き出しの底をコンコンと軽く叩いた。

（二重底か・・・）

近藤は即座に察知し、二重底の隠し蓋を外した。

すると、そこには小さな金色の鍵が引き出しの底に埋め込まれていた。

その鍵を取り出し鍵を観察する。

特に豪華な拵えがされたものでもなく、単なる鍵の形をしている。

近藤は再び部屋を見渡すが、鍵穴らしきものは見当たらない。

そこで近藤は鍵に彫られた文字を見た。

それはアルハザードの文字で書かれていた。

「・・・『ｐａｔｅｏ（開放）』？」

そう呟くと、近藤の持っていた鍵はみるみる複雑に形を変え、１０センチ四方の立方体の箱へと姿を変えた。

各面にはそれぞれ丸が数個書き込まれている。

ようするに、サイコロだ。

なんの変哲もないサイコロで、玩具だと言えば納得してしまいそうなその箱を、近藤は顎をなでながらまじまじとあらゆる角度から見つめる。

そして、エレノアの言う通り実行に移した。

「コレを作った聖王はなんというか、お茶目だな」

近藤はサイコロの1の面を上に向け床に置く。
次に2の面を上に向け、次は3の面、そうして4、5、6と続けた。
そしてサイコロを持ち上げ、1の面を触ると、ゆっくりと面がスライドし、蓋が開いたのだ。

このサイコロはカラクリ箱で、ある順序を踏まないと蓋が開かないという代物だ。
それをわざわざ利用するところが、コレを作った聖王の悪戯ぶりがわかるだろう。

近藤は蓋を開け、中身を確認した。
そして探していた『あるもの』と一枚の紙を発見した。

折り畳まれていた紙を開き、何やら文字が書かれていたので、それに目を通す。

『親愛なる王へ

コレを読んでいるということは、あなたは何代目かの王なのでしょう。

アレは我等では手に余るものです。
完全なる破壊も叶わず、恥ずかしながらこうして封印するのが精一

杯です。

願わくば、貴方がレオの願いを受け継ぐ方で、コレを永劫消滅してくれますように。

聖王　　エーリカ・ゼーゲブレヒト　』

古代ベルカ文字で書かれたそれを読み終えると、近藤は丁寧に紙を折りたたみ箱に戻す。

その際に、目的の物を取り出し、乱暴にポケットに押し込めた。

「・・・事が終われば、必ず滅却します。それまで、お借りします」

近藤は箱を鏡台に置き、手を胸に構え黙祷した。

そしてゆっくりと目を開き、踵を返し、部屋を後にした。

保険は確保した。

ならば、向かうは聖王の玉座。

なのはとヴィヴィオの元である。

近藤が目的の物を探しているとき、ヴィータは大量のガジェットに囲まれ苦戦していた。

「ちっ、次から次へと！アイゼン！！」

〈Ｇｉｇａｎｔｆｏｒｍ．〉

いらつきながらヴィータはグラーフアイゼンにカートリッジをロードしガジェット目掛けて振り下ろす。

「ギガントハンマー！！うるあああぁぁぁっ！！」

ヴィータがグラーフアイゼンを遠心力を利用して振り回し、群がるガジェットを軒並み破壊していく。

ある程度一掃して、ヴィータは息を切らしながら悪態をつく。

「キリがねーな。・・・先に進めねーよ」

高濃度のＡＭＦが充満するゆりかごの中では、ひとつの動作でも大変である。
そんな場所で大量のガジェットを処理していくのは並の魔力、体力、集中力では成しえない。

だから、ヴィータの注意力が散漫になる事は仕方のないことなのだ。

ふいに

ドンと

背中から何かが当たったような感覚を覚えた。

なんだ？

そう思ったとき、急に吐き気を催した。
胃から込み上げる不快感。

ヴィータは自分のお腹を見た。

そこには、鋭利な刃物が腹から生えていた。

ヴィータは一瞬何かわからなかったが、即座に自分の置かれた状況を把握し、持っていたグラーフアイゼンを無理矢理背後に振り回した。

ドガンッと打撃の感触を確認すると、そこには新たなガジェットが大量にいた。

そして、そのガジェットを見てヴィータは顔を青ざめさせる。

いたのは忌まわしい『８年前の事件』に遭遇した『アンノウン』、ガジェットⅣ型であった。

破壊されたガジェットは吹き飛び、ヴィータの腹に刺さっていた刃も無くなる。

そして強烈な吐き気が込み上げ、ヴィータはひざまづき、逆流してくるものを吐き出した。

赤黒い液体が床を汚す。

口から出てくるのは大量の血。

切られた腹からも夥しい血が流れる。

床は赤の面積をますます拡げていく。

滴り落ちる血液は止まることなく、ヴィータの体温を奪っていく。

ヴィータは意識が遠のいていくのを感じた。

ああ、ヤベー・・・

そして力が抜け、倒れそうになったとき、ふと近藤の事を思い出した。

ああ、あいつも8年前にこんなふうに腹突き刺されてたな・・・

そういえば、あいつあたしとなのはを現場から離す為に砲撃で吹き飛ばしやがったな・・・

結構痛かったんだぞ、あれ！

でも、今ならわかるよ・・・こりゃアレコレ何かをする余裕なんて

ねーわ。

・・・でもあいつはあの後キッチリガジェットを破壊した。

・・・じゃあ、あたしは？

あたしは今何をしている？

倒れようとしている。

眠ろうとしている。

まだ敵を倒していないのに？

敵がいるのに？

はやてやなのは、フェイトが戦ってるのに？

ひよっこ共も頑張ってるのに？

・・・近藤も戦っているのに？

・・・・・・冗談じゃない！！

あたしはまだ何も成し遂げていない！

役割を果たしていない！

８年前のあんなひょろっちい近藤でも出来たことが、今のあたしに出来ないわけがねー！！

「くそあぁぁぁっ！！」

ヴィータは歯を食いしばり、倒れそうな体を無理矢理止め、踏ん張る。

口の中に溜まっている血をペッと吐き出し、手の甲で口を拭う。
腹から流れる血は無理矢理魔力で止血する。

血を流しすぎて頭がフラフラするが、そんなことどうでもいい。

敵はガジェットⅣ型が無数にこちらに向かって来るが、関係ない。

ヴィータはニヤリと口角を吊り上げ笑う。
そして、高らかに叫ぶ。

「鉄槌の騎士ヴィータと黒鉄の伯爵グラーフアイゼンはこんなものでは墜ちない！！」

ヴィータはグラーフアイゼンにカートリッジをロードし、振りかぶる。

「てめえらなんぞアイゼンの錆にしてやらー！！」

〈ｊａ！〉

ヴィータはガジェット群に突撃した。

近藤は走っていた。
ゆりかごの中は広く、玉座の間までは距離があったのだ。

居住目的もあるとはいえ、自動通路くらい作っとけよ！
と悪態をつきながらも、近藤はなんとか玉の間へ到着した。

近藤は警戒しながら部屋へと入った。

そして近藤は驚く。

なのはが一方的に見知らぬ女性にやられているのだ。
なのはのバリアジャケットがボロボロになり、体中に擦り傷ができている。
いや、どちらかというとなのはが相手に攻撃するのを躊躇っているように見える。

その女性は、金のロングヘアーをサイドポニーでまとめ、黒を基調とした服、おそらくバリアジャケットだろう、を着ている。
黒いジャケットを羽織り、体にフィットしたボディスーツ、鋭い爪を模した手甲を装備し、七色に輝く魔法を放っていた。

近藤はそれを見て思わず呟く。

「まさか・・・ヴィヴィオ・・・か？」

そんな呟きが聞こえたのか、なのはは魔法を避けながら近藤の方を振り向いた。

「近藤さん！」

ヴィヴィオも近藤に気づいたのか、なのはを攻めていた手を止める。

「・・・おおさま・・・」

なのはは近藤のところまで移動しヴィヴィオに警戒しつつも近藤に成り行きを話した。

なのははかなり体力、魔力を消耗しているのか、肩で息をして膝をついていた。

どうやらクアットロがなにか良からぬことをヴィヴィオに吹き込み、さらにはロストロギアであるレリックによってヴィヴィオが姿を変えたらしい。

レリックは、聖王覚醒の為の道具であり、聖王の力である『聖王の鎧』をフルに発揮させるレリックウェポンだったのだ。

聖王家の証である七色の魔力を放ち、クアットロの口車に乗せられ、なのはに躊躇なく攻撃を繰り出すヴィヴィオ。

いや、おそらくスカリエッティによってなんらかの処置を受け、洗脳されている可能性が高い。

しかも、なのはのブラスト攻撃も効かないらしい。

「これはもう覚えた」

といって強固なバインドでさえ簡単に引きちぎるらしい。

「・・・まったく恐ろしいな・・・」

近藤は呆れつつヴィヴィオを見た。

ヴィヴィオは警戒し攻撃態勢を取っているが、攻撃は仕掛けてこない。

近藤の乱入によって警戒度を上げたのだろう。

近藤はなのはにバリアジャケットの修復を指示しつつ、作戦を告げた。

「なのは隊長、ヴィヴィオの相手は俺がします。なのは隊長はクアットロ捜査に専念してください」

サーチャー置いてきたんでしょ？

そう言いながらヴィヴィオを見据える。

だが、なのはは猛反対した。

「無茶言わないでください！言っちゃなんですけど、私でも・・・」

手を焼くのに、と続けようとしたが、近藤が割り込む。

「なのは隊長攻撃してないでしょ？捕縛ばかりで」

なのはの反論を遮り、事実だったのでうぐっと声を詰まらせるなのは。

「まあ、確かにしんどいですね。でも『今の聖王』ならなんとかなるでしょう」

「・・・え？」

「今のヴィヴィオは聖王の力を十分に発揮しきれていない。逆に力に振り回されている。ならば、付け入る隙はいくらでもある」

あの強さで十分じゃない？

その事でも驚いたが、近藤の言葉がなのはは信じられなかった。

「まあ、見ててください。あ、サーチャーに専念しつつ、ですよ？」

近藤は子供を諭すようになのはに指示し、さっさとヴィヴィオに近付いていった。

正直不安である。

近藤の魔力が普通レベルなのは、ここまでの移動中で思い知った。

ゆりかご潜入前の白い剣群はあくまで源書、エレノアの力を急遽借りたものであり、現在はその力をエレノアに返却しているため使えない。

そんな人間が、自分でも手を焼くような圧倒的魔力を誇る聖王に太刀打ちできるのだろうか？

だが、なのはは近藤を信じることにした。

近藤はいつも有言実行してきた。

つまり、出来ないことは言わない。

ならば、ヴィヴィオのことも本当になんとか出来ると確信しているのだ。

近藤は仲間だ。

だから、仲間を信じよう。

あの、頼れる副隊長を。

近藤は悠然と歩き、ヴィヴィオの前に立った。

対してヴィヴィオは警戒心バリバリで攻撃態勢を緩めない。

そんなヴィヴィオをじろじろ見る近藤は、大きくため息をついた。

ヴィヴィオも、いきなりため息をつかれたことに訝しんだ。

「ヴィヴィオ・・・俺は悲しい」

「・・・何が？」

「ヴィヴィオはいくつだ？」

近藤の質問に、ヴィヴィオは指折り数えた。

「・・・5歳」

「5歳児がなんでそんなエロい格好してんの？すげーパツンパツンじゃないか」

「・・・？」

ヴィヴィオは近藤の言っていることがわからなかったので、首を傾げた。

「・・・それ今言うことですか・・・？」

そして、端で聞いていたなのはは、呆れていた。

「そんなこと、どうでもいい！おおさま、ヴィヴィオの本当のママ隠してる？隠してるなら返して！」

ヴィヴィオは悲痛な顔で近藤に訴える。

対して近藤は、話しを軽くスルーされて若干ショックを受けながらも顎を撫でた。

そして、目を細め冷たく言い放った。

「本当のママ？ヴィヴィオの本当のママってどんなママだ？」

近藤の言葉にヴィヴィオはたじろぐ。

「身長は？髪の色は？顔立ちは？性格は？好きなものは？名前は？」

「あ・・・う・・・」

ヴィヴィオは苦しそうに顔を歪める。

そして、ちらりとなのはを見た。

「ヴィヴィオ、お前今なのは隊長を見ただろう？」

近藤の鋭い指摘にヴィヴィオはビクッと震える。
なのはも驚く。

「お前はなのは隊長に『本当のママじゃない』って言ったそうだな？じゃあその姿はなんだ？」

「す・・・がた・・・？」

近藤がヴィヴィオを指差し、ヴィヴィオも自分の姿を見る。

「そのバリアジャケットはなんだ？なのは隊長と同じデザインだが？」

ヴィヴィオは近藤の指摘に驚愕する。
恐らく無意識だったのだろう、自分の羽織っているジャケットがなのはのバリアジャケットと同じであることに。

「その髪型はなんだ？なのは隊長の普段の髪型と同じサイドポニーだな？」

ヴィヴィオは髪を触る。
確かにサイドポニーだ。

なのはと同じ髪型。

同じバリアジャケット。

・・・だから何なんだ？

ヴィヴィオは次第にイライラしだした。

「本当のママを捜しているのに、本当のママじゃないって言ったなのは隊長と同じ姿をする。おかしなもんだな？」

「・・・おおさまは、何が言いたい」

イライラを募らせるヴィヴィオを見て、近藤はゆっくりと構えた。
重心は後ろ脚に、真っ直ぐ体を構え、右腕は上段に、左腕は下段に構える。

「ヴィヴィオも薄々気づいてるんじゃないのか？姿も思い出せない本当のママ以上になのは隊長を愛しているってな」

近藤の告げた言葉を聞いた途端、ヴィヴィオの中でブチンと何かがキレた。

「う・・・うるさあぁぁい！！」

ヴィヴィオは憤怒の表情で近藤に飛び掛かった。
拳を大きく振り上げ、魔力を拳に込める。
拳が七色に輝き、ヴィヴィオは拳を近藤に振り下ろした。

「近藤さん！！」

なのはが思わず叫ぶ。
ヴィヴィオの魔法攻撃には非殺傷設定が成されていない。
即ち、ヴィヴィオの魔法は命を奪う凶器なのだ。
ほぼ生身の近藤に当たれば、待っているのは確実な『死』である。

だが、助けようにも距離がありすぎた。

ヴィヴィオの繰り出した拳がそのまま近藤に当たった――――――ように見えた。

なのはも当たったと思った。

しかし、どうも様子が変だ。

近藤は涼しげな顔で構え、ヴィヴィオは驚愕の表情でいるのだ。

ヴィヴィオの拳は、近藤に届く寸前で止まっていた。

「・・・くぅっ！！」

ヴィヴィオはムキになったように拳を連続で繰り出す。

だが、それらは尽く近藤に当たる事はなく、寸前で止まってしまっていた。

異常な事態にヴィヴィオの顔色は青くなっていく。

寸止めしているわけではない。

振り抜くつもりで放っているのだ。

なのに、拳は近藤に当たる寸前で止まる。

しかも、何か吸い取られるように拳から力が抜けていく。
ヴィヴィオはこの異常事態が理解できなかった。
「くっ！う、うううぅっ！！」
だから、ずっと当たるまでなりふり構わず顔を歪めパンチを繰り出していた。
そして、そんな光景を見ていたなのはは、ポツリと呟く。
「これが・・・達人・・・」
なのはの家には道場があり、父、兄、姉が武術を身につけていた。
なのははその手の運動神経が皆無だったため習ってはいなかったが、それでも父達の稽古は何度となく見ていた。
父の武道の腕前は間違いなく達人の域に近かっただろう。
だからこそ、今近藤がしている事がわかってしまう。
近藤は一切魔法を使用していない。
ただ構えているだけだ。
そう見える。
だが、今近藤はとても恐ろしいことをしている。
化勁（かけい）

相手の力の流れを変える技である。

太極拳において、極めれば最強の防御となるこの技は、逸らす、変える等のことを化すという。

それを勁、ようするに気によってさらに堅実なものにする。

近藤はこの化勁を使い、ヴィヴィオの攻撃を化しているのだ。

それもとんでもない練度で。

とてもではないが自分では出来ない技である。

これは、ある意味武道のひとつの到達点ではないだろうか？

相手の攻撃を受けることなく、勝つ。

これが理解できれば、相手は心が折れ、戦意喪失するだろう。

つまり、戦わずにして勝つ。

まさに究極の防御である。

なのははまず見ることが出来ない達人技に、みとれ、改めて近藤という男に畏怖した。

そうこうしている時も、ヴィヴィオは攻撃の手を緩めない。

とはいえ、焦りと困惑でパンチの連打しか出しておらず攻撃が単調になっている。

「くっ！くそっ！なんで！？」

ヴィヴィオは頭に血が上り対処できないでいる。

そこへ、近藤が言った。

「ヴィヴィオ、人に拳を振るうということは、自分も攻撃される覚悟があるんだろうな？」

「・・・！？」

攻撃途中の、しかも頭に血が上っている状態では理解できなかっただろう。

近藤は、ヴィヴィオの繰り出す左ストレートを上段で構えていた右腕で外へ流した。

「えっ！？」

いきなりの事に驚くヴィヴィオは、そのまま体が流れてしまった。

すかさず近藤は下段に構えていた左腕をヴィヴィオの水月目掛けてそのまま下段から放った。

ズドンッと音が響き、ヴィヴィオの体が宙に浮く。

体はくの字にまがり、吹き飛んだ。

着地すると、トトトッと後ろによろめき、なんとか踏み止まると、

立っていた位置から5メートル離れていた。
ヴィヴィオはお腹を押さえ、驚愕の表情をしていた。
対して近藤は、繰り出した攻撃の手応えと、ヴィヴィオの反応を見て顎を撫で思考する。
「・・・ふん、流石は『聖王の鎧』といったところか。手応えの割にダメージは無いようだ」
状況が飲み込めないヴィヴィオは、未だポカーンとしている。
恐らく殴られたことが信じられないのだろう。
近藤はそこへさらに追い撃ちをかけるように、指をくいくいと動かし挑発する。
「ほら、どうした?こんなものか?かかって来いよ『聖王様』」
ヴィヴィオの頭に一瞬にして血が上る。
「う・・・うわあああぁぁぁっっ!!」
ヴィヴィオは完全に我を失い、がむしゃらに突っ込んできたのだった。
近藤は顎を撫でると、ヴィヴィオの方を向き、『あの言葉』を呟いた。

『王が命じる。ヴィヴィオ、スリープモード』

だが、ヴィヴィオはその言葉が聞こえていないのか、当たらない攻撃を繰り返す。

「この！このっ！なんで！なんでっ！！」

叫びながらパンチをがむしゃらに繰り出すが、それは近藤に当たらず、必ず寸前で止まってしまう。

「・・・？『裏技』が効力を発揮しない・・・？」

化剄によってヴィヴィオの攻撃は化しているが、近藤は内心驚いていた。
だがすぐある答えにたどり着いた。

（・・・違う名前を刷り込んだな・・・）

その時、ヴィヴィオはピンと閃いたのか、攻撃を止めバックステップして距離をとった。

「これなら・・・どうだーっ！！」

ヴィヴィオはスフィアを5つ発生させ、近藤に向けて放った。

スフィアは一直線に向かって来る。

パンチは当たらなくても、飛び道具ならそうはいかないだろう！

ヴィヴィオはそう考えたのだ。

だが、近藤はまたしても予想を越える事をした。

近藤の体が、瞬時にして真っ黒に塗り潰された。

髪の毛から、爪先まで、真っ黒に、影のように、闇のように。

「なっ！？」

声をあげたのはなのはだ。

いきなり姿が変わった近藤を見て、どれだけ引き出しがあるのかという驚きの声である。

一体全身を真っ黒にして何をするのか、なのははサーチャー探知を続けながら興味深く見ていた。

すると、ヴィヴィオの放ったスフィアは近藤の体にズボンと音をたてて穴を開け、そのまま床に当たって爆発した。

そして、体の穴の開いた部分は、何事もなかったように穴を塞いだ。

黒く染まった近藤は首を動かし、なんでも無いような仕種をとる。

そして、ゆっくり歩を進めヴィヴィオに近付いていった。

ヴィヴィオは、魔法が当たりながらも体に穴が開いたのに生きてい

て、しかもこちらに近付いてくる近藤に恐怖を覚えた。
よくわからないもの、理解できないもの、手に負えないもの、それらは一定のラインを越えると恐怖になる。

「くるな・・・」

ヴィヴィオは後ずさりする。

「・・・」

近藤は無言でヴィヴィオに歩み寄る。

「くるな・・・！」

ヴィヴィオはさらに後退する。
その時、ドンッと背中に何か大きなものが当たった。
ヴィヴィオは咄嗟に振り向いた。

それは壁

もう、逃げ場はない。

だが近藤はさらに距離を縮めてくる。

黒い人間

真っ黒い人間

アレは・・・本当に人間か？

「くるなあぁぁぁっ！！」

ヴィヴィオは叫び、七色の魔力を放出し、スフィアを連続で生成し、休みなく黒いモノ目掛けて放つ。

しかしそのスフィアは尽く近藤の体に穴を開け床に着弾し爆発、そして穴は閉じる。

「う・・・うわあぁぁぁぁぁっ！！」

ヴィヴィオはいくつもいくつもスフィアを生成し、近藤目掛けて放ち続ける。

よくもまあ魔力が続くものだと、近藤は内心呆れつつ歩みを止めない。

そんな一部始終をゆりかごの管制室で見ていたクアットロは、若干余裕を無くしていた。

「ま、まさか、近藤が聖王を手玉に取るなんて・・・」

コンソールを叩く指が鈍る。

クアットロは最初、近藤が『起源の系譜（ジェネシック・コード）』を発動したときにスカリエッティの思惑通り発揮しなかったことに喜んだ。

起源の系譜を回避する方法とは『違う名前を与える』という、なんとも簡単な対処法だった。

起源の系譜が力を発揮する相手は、はあくまで『魔法に関するもの』であり、『名前がわかっている』ということが前提のものである。

そこで、スカリエッティはナンバーズ達やヴィヴィオ、ルーテシア達に別の名前を授けた。

普段は使わないが、本当の名前『真名』を与えることで、起源の系譜を回避するということだったのだ。

そんな簡単なことで回避できるのかと眉唾ものだったが、スカリエッティの言うとおり発揮しなかったことで近藤がヴィヴィオに勝つことは無くなったと確信した。

しかし、その確信は覆された。

アレは・・・近藤はヤバい。

まともに相手をしてはいけない。

ヤツは必ず自分達の考えていること、行っていることの上をいく。

魔法が一般局員ランクにも関わらず、聖王に対し武力で凌駕するなど、誰が想像できるだろうか？

そんなクアットロは、冷静さをわずかに失っていたのだろう。

足元に転がるサーチャーに気付かなかった。

# 第81話

「・・・見つけた」

なのはの目が鋭く光る。

なのははレイジングハートを床に向ける。

咏唱をはじめる。

ターゲットをロックする。

狙うはヴィヴィオにあんな酷いことを言った人物

――――クアットロ――――

クアットロは自分がロックされた事に驚き、足元に転がるサーチャーを忌ま忌ましげに睨む。

一瞬焦るが、直ぐに余裕を取り戻す。

「ふ、ふん！いくらエースといえ、ゆりかごの装甲に、ここまでの距離を・・・」

そう言ってハッと頭をよぎるのは、彼女の圧倒的魔力による、天をも貫く桃色の砲撃。

「貫ける・・・わけ・・・」

クアットロは震える。

そして思い知る。

自分が安全圏だと思っていた場所は、彼女の射程圏内であったと。

いつも浮かべる笑みはなりを潜め、代わりに表れるのは恐怖。

なのはは砲撃準備に足場を固める。

ダンッと足を床に押し付け、射軸がブレないように腰を落とし安定させる。

そして、本日3回目のリミットブレイク。

1回目は出会い頭にナンバーズであるディエチと。

2回目はヴィヴィオに対して。

近藤が知ったら呆れるだろう。

フェイトが聞いたら怒るだろう。

でも止めない。

自分の最高の魔法で、目標を貫く為に。

「スターライト――――」

クアットロの表情は恐怖から絶望へと代わり、後退りする。

逃げ場など無いのに。

「――――ブレイカーーーッ!!」

なのはから放たれた巨大な砲撃は桃色のうねりとなり、床をいとも簡単に貫く。

レイジングハートは絶えずカートリッジをロードする。

そしてマガジンにカートリッジが無くなると、なのはは新しいマガジンに換装し、再びレイジングハートはカートリッジをロードし続ける。

リミットブレイクとカートリッジ、二つの併用は体にかなり負担をかける。

今もなのはの腕、足、背中はミシミシと悲鳴を上げている。

それでも、なのはは止めない。
標的をまだ捕らえていないから。

クアットロはなのはがスターライトブレイカーを放った瞬間、逃げた。
とにかく、射線上から逃れるために。
「いやあぁぁぁぁぁぁっっ！！」
クアットロは必死に逃げた。
なりふり構わず、体裁など気にせず、恥も外聞も関係なく。

しかし、クアットロが逃げ切る前に、スターライトブレイカーはクアットロの居た管制室の天井を貫き、クアットロを襲い、桃色の砲撃は容赦なく飲み込んだ。

なのははクアットロ撃墜を確認すると、床に向けていたレイジングハートを持ち上げた。

足元には大量の薬莢が転がっている。

〈Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｖｅｒｙ　ｍｕｃｈ，　ａｎｄ　ａ　ｃｏｍｐｌｅｔｅ　ｍｉｓｓｉｏｎ　ａｎｄ　ｍａｓｔｅｒｉｎｇ.（ミッションコンプリート、お疲れ様でした、マスター）〉

レイジングハートがなのはに労いの言葉をかける。

なのはは額に玉の汗を大量にかき、荒い息遣いで床にポッカリ開いた大きな穴を見ていた。

「うっ！？」

その時突然、近藤に容赦ないスフィアの段幕をぶつけていたヴィヴィオが、頭を押さえ苦しみだした。

「ヴィヴィオ！？」

なのははハッとし、急いでヴィヴィオに駆け寄る。

近藤も「黒化」を解除し、ヴィヴィオに近寄った。

「ヴィヴィオ！ヴィヴィオ！？」

なのはは悲鳴ともとれそうな声で娘の名前を叫ぶ。

対してヴィヴィオは、頭を押さえ、膝をつき苦しそうにしていたが、ゆっくりと顔をあげ、なのはの顔を見てこう言った。

「・・・なのは・・・ママ？」

なのははそれだけで泣きそうになった。

やはりヴィヴィオは多少の洗脳を受けていたようだ。

近藤も安堵の表情で、なのはとヴィヴィオの親子を見ていた。

ゆりかごに潜入しているもうひとりの仲間、ヴィータはゆりかごの中心部、動力炉の前まで到達した。

動力炉は巨大なクリスタルで、相当の魔力を内包しているのが見てわかる程、部屋の中は濃密な魔力で支配されていた。

後は、この動力炉を破壊すればゆりかごの大気圏到達を阻止できる。

だが、ヴィータはなかなか実行に移さない。

とうとうヴィータは膝をついてしまった。

そして、足元には、ポタポタと血の滴が絶え間無く落ちる。

ヴィータはガジェットの大群を殲滅し、なんとかここまで来た。

しかしその代償は大きかった。
それはヴィータの血と、体力そして、魔力。
ヴィータはもうボロボロだった。

だがここで倒れるわけにはいかない。

ヴィータはグラーフアイゼンを杖代わりにし、無理矢理立ち上がる。

「あたしは・・・」

ヴィータはゆっくりとグラーフアイゼンを肩に担ぐ。

「あたしは・・・っ！」

両手で握りしめ、腰を落とす。

「あたしはあああぁぁぁっ！！」

ヴィータはダンッと勢いよく地面を蹴り上げ、飛び上がる。

そして、グラーフアイゼンはカートリッジをロードし、姿を変える。

それは、グラーフアイゼンのリミットブレイク・ツェアシュテールングスフォルム。

小さな鎚は、ヴィータ自身より大きな大槌となり、攻撃する側の先端には全てを貫かんばかりの螺旋、ドリルが空気を巻き込んで回転しうねりをあげ、後には噴射口が並べられていた。

「あたしははやての所に帰る！！」

ヴィータの叫びに呼応するかのように噴射口から炎が吹き出し、クラーフアイゼンは推進力を得て動力炉に向かう。

「あたしは仲間を護る！！」

動力炉とクラーフアイゼンが接触し、火花が散る。

「おりゃあぁぁぁぁっ！！」

しかしヴィータの蓄積されたダメージが大きく、有効打とはならず、反対にヴィータが動力炉の内包する魔力に圧されはじめた。
クラーフアイゼンにヒビが走り、これ以上無茶をすれば、クラーフアイゼンが壊れてしまう。

ピシリ、ピシリとひび割れる音がヴィータの耳に入り、ダメかと呟く。

一瞬ヴィータの瞳が諦めの色に染まりかけた。

「ぐぅっ・・・もう・・・もう・・・！」

だが、ヴィータはよりクラーフアイゼンを握る手に力を込める。
諦めの色は消え、あるのは覚悟。

自分の全てを犠牲にしても仲間を護るという覚悟。

歯を食いしばり腰に力を入れる。
腕の骨がミシミシ悲鳴をあげる。
腹の傷口から血が吹き出る。

血が溜まっている胃から逆流し、ヴィータは口から血を吐き出す。
それでも力を込める。
「仲間を・・・」
クラーフアイゼンの噴射口からの炎が勢いを増す。
ドリルの回転が速くなり、巻き込む空気は渦となり、火花はより激しくなる。
「まもるんだあああぁぁぁぁっっ！！」
ヴィータは持てる力の全てをこの一振りに込めた。
残りの魔力を、気力を、精神力を、命の炎を。
「うるあああぁぁぁぁぁっっ！！」
ヴィータの命の一撃は――――
クラーフアイゼンが砕けた
動力炉が爆発した
――――見事目標撃破したのだった。
しかし、ヴィータにはもう力が残っていなかった。

飛ぶ力も、歩く力も。

ヴィータは糸が切れたように落下した。

受け身などとれる体力もない。

このままだとヴィータは床に衝突し、死んでしまう。

それでもヴィータは満足だった。

少なくともゆりかごの戦力を削り、仲間への負担を減らしたのは事実なのだから。

ごめん、はやて

あたしは

もう

ヴィータは瞼が重くなり、目をつぶろうとしたとき、ふと羽の舞うのが見えた。

黒い羽。

ヴィータは知っている。

その羽の持ち主を。

愛する人物を。

落下していく体が、重力から解放されたように軽くなる。

そしてポタリと頬に何か雫が落ちてきた。

ヴィータはかすれ、重い瞼を開け、しっかりと見た。

「無茶しすぎや、ヴィータ」

独特の喋り方をする人物に、ヴィータは僅かに口を動かし答えた。

「・・・ごめん・・・はやて・・・」

ヴィータを落下から助け、抱きかかえていたのははやて。

ヴィータの家族であり、最愛の人である。

はやては目に涙を溜めながらも、ヴィータに労いの言葉をかける。

「お疲れ様、ヴィータ」

それを聞いたヴィータは、ニヤリと笑い、満足したように目を閉じ、

深い眠りについた。

はやては一瞬ビックリしたが、ヴィータの胸が規則正しく上下に動いているのを確認すると、ホッとため息をついた。

「お疲れ様・・・ごめんな・・・」

はやては聞こえないような小声で呟き、目尻に溜まった涙が頬を伝い、再びヴィータの顔に雫として落ちた。

ゆりかごが揺れる。

近藤は、ヴィータが動力炉を破壊したのだと察した。

それと同時に、ＡＭＦの効力が薄くなっているのも感じた。

とすれば、もうゆりかごにもう用はない。

「さて、早くヴィヴィオを縛っているレリックを破壊しましょう・・・」

近藤がそう言いながらヴィヴィオを見ると、ヴィヴィオが困惑した表情で拳を振り上げていた。

「なのは隊長！」

「きゃっ！？」

近藤は咄嗟になのはの肩を掴み、強引に引き寄せた。
その時、なのはのいた場所にヴィヴィオの鋭い拳が空を切った。
「・・・え？」
なのはは困惑していた。
何故いきなり近藤に引き寄せられ、ヴィヴィオの攻撃が飛んでくるのか。
しかも、ヴィヴィオ自身も困惑の表情を浮かべている。
「なのは・・・ママ・・・にげて・・・！」
ヴィヴィオが声を絞りだすと同時に、体中から七色の魔力が溢れ出した。
そして、驚異的なダッシュによる突進力を使い、近藤となのはを攻撃してきた。
近藤はなのはを背中に隠し、防御態勢をとった。
しかし、ヴィヴィオの攻撃、繰り出した拳は近藤のガードなどいとも簡単に砕き、近藤に突き刺さった。
「ぐふっ！？」
ガードを割られ、ボディにまともに突き刺さったヴィヴィオの拳は、そのまま魔力を帯び、近藤を吹き飛ばし、壁にたたき付けられた。
「――――がぁっ！？」

呻き声をあげる近藤。
防御魔法によって緩和しているとはいえ、相当なダメージが近藤の背中を襲う。
肺から空気が根こそぎ排出され、胸が苦しくなる。
意識が遠退きかけるが、無理矢理引き戻し、前を見据える。
そこに、急に胃から逆流する不快感に襲われ、近藤はその場で嘔吐した。
ビシャビシャ音をたて床を汚した、近藤の口から出たものは、血だった。
赤い液体が床に拡がる。
（くそっ、肋骨が折れて内臓を傷付けたか？）
段々痛みだした脇腹を触り確認する。
『ｒｅｐａｒａｒｅ（レパラーレ）』
近藤が呟くと、眼帯に隠れたデバイスコアが光りだし、近藤の損傷部分をｒｅｐａｒａｒｅ（レパラーレ）、つまり修繕していく。
近藤はデバイスコアと脳がリンクしているせいで、体自体がデバイスとして認識されている。
つまり、デバイスは自己修復を行う作業を、近藤の体に行っているのである。

これが、８年前の事故で驚異的な回復をした真実である。

損傷部分は確かに修復できるが、血はそうはいかない。

流れてしまった血はいくら修復しても補充できないのだ。

損傷部分の痛みは緩和されたが、胃に溜まる血の不快感で顔を歪める近藤は、ゆっくりと構える。

ヴィヴィオは泣きそうな顔になりながら、勝手に動く体に抵抗する。

「ヴィヴィオ!?やめなさい！一体どうしたの!?」

なのはが叫びながらヴィヴィオに近付こうとした。

そこへ、近藤が声を張り上げ、なのはを止めた。

「なのは隊長！いまヴィヴィオはゆりかごの防衛モードによって体を操作されています！むやみに近付かないでください！」

なのははビクッと肩を震わせ立ち止まる。

ゆりかごは動力炉を破壊され、起動キーである聖王、つまりヴィヴィオを防衛モードによって強制的に侵入者を排除しようとしているのだ。

近藤は内心自分の不手際に舌打ちした。

こうなることは予想できていたのに。

「なのはママ・・・おおさま・・・たすけて・・・」

ヴィヴィオは泣きそうな顔で助けを求める。
しかし、体をゆりかごによって操作されているため、自由に動かせない。
そして、またしても近藤に向けて一飛びで近付き魔力を帯びた拳を近藤に向ける。

鋭く、無駄がなく、そして一撃で人間を撲殺できる破壊力を秘めた拳は、容赦なく近藤を襲う。

先程まではヴィヴィオの心が未熟だったため化勁を行使できたが、今の実力はゆりかごが記憶している歴代聖王のデータによって操作されているのだろう。
動きが洗練され、無駄が全くなく、且つ躊躇なく急所を狙ってくる。

近藤はギリギリで避けるが、ヴィヴィオは連撃してくる。
しかも拳だけでなく、脚、肩、頭、体の武器となりえる部位を使い攻撃してくるのだ。

（・・・くそっ！さっきまでの動きと違う！これが聖王の『本当の実力』か！？）

なんとかギリギリで避け続ける近藤だったが、ヴィヴィオは攻撃の回転をあげる。

（まだギアを上げれるのか！？）

内心驚きつつ、近藤は必死に避け続ける。

もはや攻撃を避けるので精一杯で攻撃に移れない。
しかも、だんだん体にかすり始めた。

（くそ！攻撃が早すぎて黒化できない！！）

近藤は絶対回避が出来ない事に内心舌打ちしつつ必死にヴィヴィオの攻撃を避ける。

スピードアップしたと思ったら、そこから更に徐々に加速しているようだ。
聖王の真の実力とは、どれ程のものか、まだ底が見えない。
いよいよマズイと思った時、おもむろにヴィヴィオは右手で近藤の左腕を掴んだ。

しまったと思うと同時に、左手で頭をわしづかみされる。

ギリギリと近藤の頭にヴィヴィオの指が食い込む。
そして近藤の腕を掴んでいた手にも力を込める。

ミシミシと骨が悲鳴をあげるが、ヴィヴィオは止めない。

「・・・あっ・・・がっ！！」

近藤は痛みにうめき声をあげ、抵抗しようとするが、ヴィヴィオは近藤の頭を掴んだまま持ち上げた。
宙に浮いた状態に、頭と腕の痛みと、またしても攻撃できない。

「あぁ・・・やめて・・・やめて・・・！」

ヴィヴィオは近藤の苦痛に歪む表情を見て、なんとか止めるよう体

を動かすが、どうにもならない。

そして

ボギンッ！！

鈍い音をたて、握られていた近藤の腕は粉々に砕かれた。

砕かれた腕の先に付く手がプラプラ揺れる。

「――――――ッッックッッアァッ！！」

声にならない悲鳴をあげる近藤は、あまりの痛みにまたしても意識が遠退く。

しかし、頭蓋に食い込むヴィヴィオの指ががメキメキと更に締め上げることで意識が戻された。

食い込みすぎて皮を突き破り、血が滲み出てきた。

「い・・・いやあああぁぁぁっっ！！」

逆にヴィヴィオが近藤の折れた腕を見て泣き叫ぶ。

無理もない。

ヴィヴィオは体のいうことが効かないとはいえ、感覚は残っている。
つまり、ヴィヴィオの手には近藤の腕の骨を砕いた感触がハッキリと伝わっているのだ。

ヴィヴィオの悲鳴など関係ないとばかりに、ヴィヴィオの体を乗っ取ったゆりかごの防衛モードは、近藤の頭を掴みながら空中に振り回し、そのまま壁めがけておもいっきり投げつけた。
まともに当たれば体は砕け、即死である。

そこへ、なのはが飛んでいき投げ飛ばされた近藤をキャッチした。
それでも威力が殺しきれなかったため、なのはごと壁にブチ当たった。

なのはがなんとか壁に当たる前にショック吸収の防御魔法を行ったことにより、それほどのダメージにはならなかった。

それでも事態は深刻である。

「近藤さん!?」

なのはは焦るように倒れる近藤の状態を見た。
同時になのははヴィヴィオに強固なバインドをかけ、なんとか身動き出来ないようにした。
しかし、それもたいした時間稼ぎならないようで、拘束したその場からヴィヴィオはブチブチとバインドを引きちぎっている。

あまりの変貌、急な展開と驚異的な強さのヴィヴィオを見てなのはは戸惑う。
そして、近藤の状態の深刻さも見てわかる。
腕の骨は折れたのではなく、砕かれている。

これでは完全に治らないかもしれない。
しかも、頭から血を流している状態を見ても、もしかしたら頭蓋骨にもなんらかの傷を負っているかもしれない。
とにかく応急処置だけでも、と倒れている近藤を抱えようとした。

『・・・ｒｅｐａｒａｒｅ（レパラーレ）』

その時、近藤が小さく呟くと、プラプラと揺れ、折れていた腕が逆再生されるようにみるみる本来の位置へと戻っていった。

ヴィヴィオの食い込んでいた指によって付けられた頭の傷も、流れていた血も、いつの間にか治っていた。

「・・・！？・・・！？」

驚きのあまり、なのはは目を点にしてポカーンと口を開けていた。

対して近藤は、なのはのそんな態度を気にする余裕もなく、ゼーゼーと荒い息遣いをしていた。

そして考える。
予測していたとはいえ、あの強さは異常だ。
流石はベルカを代表する王なだけはある。
恐らく魔力数値を計測すれば、測定不能、いわゆるＥＸ（規格外）だろう。

どうすればヴィヴィオをゆりかごから切り離せるか、どうすればヴィヴィオを止められるか、どうすればヴィヴィオの力を凌駕できるか。

・・・

・・・いや、ごまかすのはよそう。

・・・もう答えはあるじゃないか。

・・・全てを解決する『鍵』が、ポケットの中に、あるじゃないか。

そのための鍵じゃないか。

近藤はポケットに手を入れ、中に入っている『モノ』を手探りで確認し、歯を食いしばる。

（・・・できれば・・・コレは使いたくなかった・・・）

しかし仕方がない。

現状、コレしか打破できるカードが手持ちにはないのだから。

体の痛みとは違う、心の痛みによって近藤は苦痛に顔を歪めた。

そして、近藤の後ろで呆けているなのはに言う。

「・・・なのは隊長・・・お願いがあります」

額に汗を滲ませなのはを見る近藤の顔は、今まで見たことがないほど切羽詰まった表情をしていた。

「これから俺がヴィヴィオを止めます。その間・・・3分間、何があっても一歩も動かず、我慢してください」

なのはは近藤が一体何をしようとしているのかわからなかった。
しかし、近藤の真剣な表情を見て、本当にヴィヴィオを何とかしようとしていると確信した。
だから、なのはは無言で頷いた。

近藤は大きく深呼吸した。
覚悟はあるか？
お前には、覚悟があるか？
――聖王を
ヴィヴィオを
食い殺す覚悟が――

「他の王の力を借りる？」
出撃前エレノアはそんなことを言った。
「他の王？いるのか、他の王が」

「いるよ。その名も『獣王』！」

エレノアはピンと人差し指を立てた。

「獣王？」

「そ。獣王」

近藤はエレノアの言うことがいまいち理解できなかった。

「獣王って、確か架空の王じゃあ・・・」

「いいえ、実在しました。そして、時の聖王と多数の王が一致団結して、決死の思いで封印したの。で、それは『獣王の牙』という名前で歴代聖王が厳重に封印管理し、隠し場所も歴代聖王の口伝のみでしかわかりません」

「じゃあダメじゃないか」

そもそも、その『獣王の牙』すら眉唾なのに、隠し場所が歴代聖王の口伝のみでわからないなど、ただでさえ時間が無いこの時期に本末転倒ではないか。

「大丈夫、私隠し場所知ってるし、解除方法も知ってる」

「・・・」

なんで聖王しか知らない情報をお前が知っている？

と思わず突っ込みそうになったが、なんとなくエレノアならば知っていても不思議ではないと思えてくるのが不思議だ。

「ただひとつ、問題があります」

「問題？」

とりあえず近藤はエレノアの言うことを聞くことにした。

「獣王はまあ一言で言えば『欠陥品』なんです。その欠陥部分を修正しないと大変なことになります」

「なんだそれ？」

「プログラム上のバグみたいなものなんだけど、それを修正できるのは獣王本人だけなの」

そこまで言って、近藤はエレノアが言わんとしていることがわかった。

「・・・つまり、俺がその『獣王の牙』で獣王になって、プログラムを修正しろって言いたいのか？」

「正解」

ニコニコ笑うエレノアに、近藤は呆れた。

「あのな、俺の基本魔法はミッド式だ。獣王ってベルカの王だろ？ベルカ式じゃ無理だろう」

「大丈夫、獣王はそんなの関係ないから」

なんだそれ？
近藤はもう何を言っていいやらわからなくなった。

それからエレノアは近藤に、獣王について細かく説明した。

ようするに、獣王というのは魔法の術式など関係なく、さらに言えばリンカーコアの有無に関係なく『寄生』し、強制的に獣王に『成る』デバイスそのものなのだという。
ただし、プログラムの欠陥故か、自我崩壊を起こし殺戮を繰り返す殺人鬼になるという、なんとも恐ろしいデバイスだった。
それを自我を保ちつつ、内側からプログラム修正を行えば自我崩壊、暴走を抑えることができるという。

「・・・分の悪い賭けじゃないか」

近藤は考え込む。
リスクが高いのだ。
もし実行したら、最悪ヴィヴィオを殺してしまう可能性がある。

つまり、近藤の気力とスピード勝負なのだ。

「でも私がヴィヴィオちゃんと戦うよりはヴィヴィオちゃんの救出率は高いよ」

確かに、ゼロではない。
だが決して高い数値でもない。

「だから、ご主人様には覚悟してもらいます」

エレノアの声音が低くなる。

その眼差しは真剣そのものだった。

――――聖王を食い殺すという覚悟、

ヴィヴィオをその手にかける覚悟を　――――

覚悟など――――

未来を垣間見た瞬間から既にしている。

近藤は勢いよく立ち上がり、ヴィヴィオを見た。

ヴィヴィオは泣きながらなのはのバインドをブチブチと引きちぎっている。

「ヴィヴィオ」

近藤がヴィヴィオに声をかける。

その声音は、いつもの優しげなものではなく、力強い、何かを成し遂げようという意志を孕んだものだった。

「これからお前を助ける。少しの間、我慢してくれ」

近藤の有無も言わせない言い方に、ヴィヴィオはビックリして泣き止み、コクンと頷いた。

そして、近藤はポケットから小さな白い石のような物を取り出した。

「・・・石？・・・いや・・・骨？・・・っ！？」

なのはは近藤が取り出したモノを見た感想を呟いた。

そう、それは骨だった。

牙のような尖った先端を持つ、白い骨。

だが、何故だろう、近藤がその骨を取り出した瞬間、部屋の空気が一変した。

そしてその時、一瞬ヴィヴィオの体がビクッと震えた。

「・・・え？」

ヴィヴィオはわけがわからず、声をあげた。

今、自分の体はゆりかごが支配し操っているはずである。

その体がいきなり震え出したのだ。

なに？

なんなの？

ヴィヴィオとなのはは何の変哲もない骨に何があるのかわからなかった。

だが次の瞬間、近藤は驚くべき行動を取る。

口を開け、骨を飲み込んだのだ。

ゴクンと喉を鳴らし骨を飲み込んだ近藤は、上を向き目をつぶる。

「・・・来い、俺とお前の勝負だ」

近藤がそう呟いた、次の瞬間

ドクン

ドクン

近藤の胸が跳ね上がる。

ドクン

部屋の空気が揺れる。

そして

ドクンッ

近藤の足元に白い魔法陣が現れる。

術式は――――ベルカ

〈Ｋｏｒｐｅｒ　Ｂｅｓｔａｔｉｇｕｎｇ（肉体確認）〉

近藤は苦痛に顔を歪め、俯く。

「・・・ぐっ・・・うっ・・・！」

足元の魔法陣がバチバチと火花を散らせる。

更に、ますます白い輝きが増し魔法陣の回転も早まる。

〈Ｂｌｕｔ　Ｂｅｓｔａｔｉｇｕｎｇ（血液確認）〉

そして、魔法陣から白い光りの柱のようなものが現れた。

それは牙だった。

白く長い牙が無数に、ズラリと並ぶ。

それはあたかも獣が剥き出しに見せる牙のようだった。

牙は、魔法陣から現れると、バクンと近藤を飲み込んだ。

〈ｇｏ　ｂｅｒｓｅｒｋ！　（我を忘れて怒り狂う！）〉

そして、牙がガラスのように割れ、中から現れたのは

全身に鎧を纏った、獣のような『モノ』がいた。

# 第８２話

時間は少し遡る。

フェイト、エレノア、シャッハの一行はスカリエッティアジトの中を突き進む。

突入前にヴェロッサと、スターシャッハと合流。
そこで作戦を練ろうとしたがヴェロッサは別行動を取ると言った。
そして、ヴェロッサはエレノアに向けて一言

「頑張ってください」

と言って別れた。

フェイト、シスターシャッハ、エレノアはお互いの顔を見て、小さく、決意ある頷きを返した。
ただエレノアは、ヴェロッサの去り際の憐憫の眼差しが気になったが。

「はあああぁぁぁっ！！」

フェイトが気合いと共にバルディッシュザンパーを振り下ろす。

狭い穴蔵のようなアジト内で、巨大武器であるバルディッシュザンバーを振り下ろすということは行動制限がなされるのだが、フェイトはそんなものお構い無しとばかりに、天井に当たるバルディッシュザンパーを振り抜く。

ガリガリと音をたて天井が削れる。

同時に、振り下ろされたバルディッシュザンパーは目の前のガジェット群を粉砕していく。

それを見たシャッハは「お見事です！」と言って感動していたが、エレノアはその攻撃によってアジトが崩落しないか冷や汗をかいていた。

どうもフェイトはスカリエッティに関わると精神が不安定になり、判断力が鈍るようである。

今も、ＡＭＦが充満するこのアジト内で後先考えずバンバン魔力使ってるし、そのせいで肩で息をしている。

そして厄介なのはシスターシャッハである。

近代ベルカを使う、バリバリの近接戦闘に特化したスタイル。

デバイスのヴィンデルシャフトがトンファータイプなのでまるわかりだが、先程のフェイトに要らぬおだてを入れたことでもわかる通り、脳筋の戦闘馬鹿のようである。

初めてあった時からシグナムと雰囲気が似ていたので、まさか・・・とは思っていたが。

エレノアは頭を抱えた。

ヴェロッサが別行動をすると言ったときに「頑張ってください」と言った意味がわかった。

ようするに、この脳筋の制御を頑張れと言っていたのだ。

（ヴェロッサ君・・・後でお仕置きよ）

エレノアは心の中でそう決意した。

そうこうしていると、フェイトに感化されたシャッハがなにやらうずうずしながら攻撃を繰り出した。

「烈風一迅！！」

シャッハはそう叫ぶと神速の歩方を駆使しヴィンデルシャフトを繰り出す。

高い切断、破砕能力を持つヴィンデルシャフトは、シャッハの歩方と相まって恐ろしい戦闘力を披露するように、次々と群がるガジェットを粉砕していく。

確かに戦闘力は高い。

さすがＡＡＡランクは伊達ではない。

この技もシグナムの紫電一閃にひけをとらない威力だろう。

だが、なんというか猪のようなそんなスタイルまでシグナムに似なくてもいいと思う。

エレノアはため息をつき、シャッハを矯正することを決意した。

「烈風一迅?うわっダサッ！」

エレノアのこの一言に、シャッハは眉を吊り上げる。

「・・・何か言いましたか、エレノアさん?」

シャッハのこめかみには青スジが浮いていた。

・・・これはまた単純バカだな・・・

エレノアに悪魔の尻尾が生えた。

「ダサいって言ったの。烈風一迅?なにそれ?アンタの頭は思春期で停まってんの?」

ニヤニヤ笑いながらそう言うエレノアに、ますます怒るシャッハ。顔は真っ赤になっている。

それを端で見ていたフェイトは、オロオロしながらも、仲裁に入れば自分もエレノアの餌食になるかもしれないという恐怖によって、成り行きを見守るしか出来なかった。

「なんかカッコよさげな漢字使って、なんか強そうな必殺技の名前考えて、叫んで。なに?その技って音声入力なの?」

「・・・!?き、気分の問題です!!」

シャッハはエレノアの指摘にうっと息を詰まらせながらも、気丈に反論する。
だがいきなり精神論で反論してしまったおバカなシャッハに、エレノアはますます笑みを深める。

「へ～、気分ね～。あなた、年老いてもそんな恥ずかしい掛け声で気分盛り上げるんだ～」

「そ、それは・・・ていうか、は、恥ずかしいってなんですか！！人の技の名前にイチャモンつけないでください！！」

シャッハは両手をブンブン振って怒る。
ヴィンデルシャフトがすっぽ抜けて飛んで来ないか心配だ。

「それに！それを言うなら、騎士シグナムも紫電一閃とか、飛龍一閃とか技使ってるじゃないですか！！」

なんとシャッハはシグナムも巻き添えにしようとした。
どうやら、エレノアの言葉責めに思考が付いてこれず、なんとか逃げ道を探した結果のようである。

だが、エレノアはそんな反論もバッサリ切り捨てる。

「シグナムちゃんはおっぱい大きいからいいの」

「な、なんですか！？その低俗な理由は！！エ、エエエエッチなのはいけません！！」

途端、シャッハは先程までの怒りによって顔を真っ赤にしていたの

とは違う、羞恥による赤みに変わっていた。
シャッハは初心(うぶ)のようである。

「じ、じゃあ騎士ヴィータは!?」

「ヴィータちゃんはエターナルロリータだからいいの」

「・・・エターナルロリータ?・・・永遠の・・・幼女・・・」

シャッハは初めて聞く単語に頭を抱える。
もう何がどうなっているのか処理できないのだろう。
脳筋のキャパは少ないのだ。

頭から煙が出てきた。

そしてエレノアはこれみよがしにため息をつき、シャッハを畳み掛ける。

「それに引き替えあなたは・・・胸は中途半端、露出も中途半端、ボーイッシュな髪型で男みたいな性格かと思ったら、普通の女の子・・・ああ、残念、ホントに残念な子」

「ざ・・・残念な子・・・」

シャッハはガーンと音が出そうな程ショックを受けた。

「そんなノースリーブみたいな中途半端な露出するなら、いっそビキニにしたら?そうすれば個性出るわよ?」

「ビ、ビキニ!?エ、エエエッチなのはいけません!」

落ち込んでいたかと思うと、エロには過敏なシャッハ。

「じゃあ技名変えようか？バカにされない、それでいて個性溢れる名前に。今のままじゃあシグナムちゃんやヴィータちゃんと被っていて目立たないよ？」

「う・・・ま、まぁ・・・それくらいならば・・・」

シャッハはなお頭から煙を出しながらエレノア案を飲む。
エレノアは、こうも簡単に思惑通り事が進むものかと内心苦笑しつつ、エレノアがシャッハの技を考える事にした。

「じゃあ、七転八倒で」

「縁起悪いです！！」

エレノアの案に即却下するシャッハ。

「じゃあ・・・四面楚歌」

「私の周りは敵だらけ！？」

「ん～、絶対無敵」

「そ、それは心惹かれますが・・・い、いや、何かそれは使っちゃダメという電波をキャッチしました！！」

「電波って・・・」

いきなりこのシスターは何を言い出すのかと、フェイトとエレノアは若干引いた。

「もっとカッコイイのがいいです！！」

シャッハは自分の要望を取り入れるよう懇願した。
エレノアはため息をつき（内心ほくそ笑みながら）３枚の真っ白いカードを取り出した。

「今から名前書くから、それをシャッフルして取った一枚で決定ね。異論、反論は無しで。オーケー？」

「わ、わかりました！どんとこいです！！」

シャッハは胸をドンと叩く。
そしてエレノアは技名を書いていく。

一枚目には『瞬神・悪・滅殺』

二枚目には『蒼穹ノ月ヲ絶ツ星ノ瞬キ』

シャッハは思わず、おお、と声を上げた。

しかし、三枚目には何も書かれていなかった。

「あの、三枚目は・・・」

「ああ、これはハズレ」

ハズレと聞いた途端、シャッハは顔を青ざめさせた。

先程までのやりとりで、いくらかエレノアの性格が掴めた。
ハズレ、ということは、とんでもない名前がつくのである。

エレノアが三枚目のカードに、誰にも見えないように字を書くと、
三枚のカードを裏向けてシャッフルしてシャッハの前に差し出す。

「さあ、選んで」

確率は三分の一、３３％である。

シャッハはゴクリと喉を鳴らす。
差し出されたカードに伸ばす手が震える。

しかしシャッハは脳筋、考えて悩んでも良い案など浮かばない。

シャッハは目をつぶり、心眼でカードを選ぶことにした。
まったくもって、脳筋らしい発想である。

「・・・見えた！これだ！！はあぁぁっ！！」

なにやらキュピーンと脳に稲妻が走り、クワッと目を開き、シャッハは左端のカードを引いた。

たかがカードを引くくらいでこのオーバーアクション。
エレノアは呆れ果てていた。

フェイトも、もうドン引きである。

そして、シャッハは引いたカードを裏返し、書かれている文字を見

て・・・

固まった。

「・・・・・・焼肉定食・・・・・・・・・・・・？」

シャッハの呟きに、エレノアは三日月のように口角を歪めて笑い、フェイトは吹いた。

シャッハは涙目である。

「・・・あ、あの、これは・・・あまりにも・・・」

オロオロと、そしてポロポロ涙を流すシャッハは、カゴの中で忙しく動き回るハムスターのようである。

「あら、聖王教会の騎士様ともあろう方が、前言を撤回すると？」

いやらしい笑みを浮かべ、シャッハの逃げ道を潰していくエレノア。

「で、ですが、焼肉定食なんて必殺技・・・」

あうあうと口を動かし訴えるシャッハだったが、エレノアは聞く耳

など持たない。
エレノアは、ツーンとそっぽを向いてしまった。

「あ・・・あう～・・・」

シャッハは涙目でフェイトに助けを求めたが、フェイトも口を手で押さえ笑いを我慢しながら目を反らした。

「おめでとう！『焼肉定食の教会騎士シャッハ』爆誕！！おめでとう！！」

エレノアはパチパチと拍手する。

「え！？あ、いや、あう・・・」

有無も言わせないエレノアの拍手に、シャッハは焦る。

「おめでとう・・・ぷっ」

フェイトまで拍手しだした。
吹き出しながら。

パチパチパチパチ！

パチパチパチパチ！

拍手が多い。

どう聞いてもエレノア、フェイト以外の拍手が紛れている。

シャッハは周囲を見渡した。
すると、なんと破壊されていなかったガジェットまでもが拍手しているのだ。
心なしか、ガジェットまで生暖かい眼差しを向けている気がする。
オメデトウロボ！
オニアイメカ！
そんな声も聞こえた気がした。
「うわーん！もう焼肉定食でも何でもやってやんよコンチクショー！！」
シャッハはキレた。
いまここに、焼肉定食騎士シャッハ・ヌエラが誕生したのだった。
そんなシャッハを見たエレノアは、悪魔のような黒い笑みを浮かべた。

・・・フン、チョロイヤツ。

# 第８３話

焼肉定食騎士シャッハが誕生し、ヤケになったシャッハは周囲にいた残存するガジェットを片っ端から破壊、粉砕した。

「焼肉定食！うりゃあああっっ！！」

自棄になりつつもしっかり焼肉定食と叫ぶシャッハは、脳筋ながらも素直ないい子なのだろう。

焼肉定食の掛け声と共に、ガジェットはみるみる数を減らしていく。

ワラワラと現れるガジェットはシャッハが片っ端から掃除してくれるので、３人は順調にアジトの奥へと進んでいく。

「焼肉定食！焼肉定食！！焼肉定食！！」

焼肉定食を連呼するシャッハを、ニヤニヤしながら見るエレノアと、合掌するフェイト。

だが、エレノアにとってこれは誤算だった。

焼肉定食となったことで少しは恥じらいを持ち、むやみに乱発しないだろうと思っていたのだ。

しかし、結果は変わらず、いや焼肉定食を連呼することによる余計巻き起こるこの笑い。

しかも心なしか、シャッハが焼肉定食と叫ぶとガジェットの動きがわずかに鈍るのだ。

怪我の功名というか、不幸中の幸いというか・・・エレノアは笑う

しかなかった。

だが、ふとエレノアは真面目な顔になりアジトの奥を見つめる。

（入口から、だんだんとＡＭＦの濃度が高くなってきている。さて、はやくスカリエッティを見つけて懲らしめないと・・・）

エレノアは手を握ったり開いたりを繰り返し、自分の体調を確認する。

フェイトもＡＭＦの濃度に顔をしかめ、周囲の警戒を始めた。

しばらく歩くと、一際ＡＭＦ濃度が濃いポイントに到達した。

「・・・っ！」

フェイトとシャッハは顔を歪める。

急に魔力結合が難しくなったのだ。

「落ち着いて、無理に魔力を引き上げないで、ゆっくり最低ラインで省エネでね」

エレノアは真面目な顔でフェイトとシャッハに注意する。

ＡＭＦが濃くなったからといって、急に放出魔力をあげると燃費が

悪くなる。
最悪、すぐにガス欠になってしまう。
だからエレノアはゆっくり魔力を上昇させて魔力結合を探すよう指示したのだ。

だが、そんな悠長なことをしているのを見計らったように、急激な速度でフェイト達に近付き、攻撃してくる二つの影があった。

咄嗟の事に、フェイトは近付いて来る影に対し防御で手一杯になりバルディッシュで防ぐしか出来なかった。

ギインと甲高い金属音が響き、火花が出る。

そして、もうひとつの影が防御で手一杯のフェイトを狙おうとしていたが、エレノアがすかさずカットに入り攻撃を防ぐ。
エレノアの右腕には、いつの間にか水晶のような煌めく剣が装備されていた。
そして、その剣と影の武器がぶつかり合いガキンと金属音を鳴らし火花を散らせる。

エレノアが防いでいた影の武器はいうなればブーメラン。
それも身の丈はありそうな巨大なブーメランだった。

「お姉様、どいてください。その阿婆擦れを殺せません」

殺意を振り撒くブーメランの持ち主は、桃色のロングヘアにヘッドギアを装着していた。
全身にピッタリフィットしたボディスーツは、しなやかな筋肉を浮き立たせている。
首のプレートには『ＶＩＩ』と書かれていた。

エレノアと対峙しているのはセッテだった。

「・・・あなたにお姉様なんて言われる謂れはないわよ、セッテちゃん？」

ギリギリとお互いの武器が鍔ぜり合いをする最中、エレノアは涼しい顔でセッテに言う。

対してセッテは殺気を撒き散らしながらも焦燥に顔を歪める。

セッテは本気の一撃を繰り出している。

それをエレノアは平然と受け止めているのだ。

今も続いている鍔ぜり合いも、セッテは押し切るつもりでいるのに、びくともしない。

まるで生身で分厚いコンクリートの壁を押しているような感覚。

「・・・あなたは近藤様のデバイス、融合騎です。私にとっては尊敬するべき方です」

「うれしいけど、今は遠慮するわ」

エレノアはそう言うと、力任せに剣を振る。

セッテはその力に押され、吹き飛ばされた。

「くっ・・・流石です、お姉様。いえ、ミス・クリスタル！」

言葉とは裏腹に、セッテの顔に浮かぶのは歓喜。

自然と口角が吊り上がり、肌が泡立ち、血液が沸騰する。

セッテは得物であるブーメランブレードを構え、低く腰を落とした。

変わってフェイトは、余裕なく防御していた。
相手の武器は腕から生えたナイフ程の刃。
「――――つっ！」
不利と悟ったフェイトは、バックステップして距離を置く。
相手はそんなフェイトを追うことなく、その場で静かに構える。
「・・・次は容赦しないと言ったはずです、フェイトお嬢様」
歴戦の勇を思わせる覇気を放ち、両手足から伸びる刃が特徴的な彼女は、鋭い眼差しでフェイトを睨む。
「・・・トーレ・・・」
フェイトの頬に汗が流れる。
地上本部襲撃の際、フェイトはトーレ、セッテの二人と出会っていた。
その時、トーレはフェイトにこう言った。

「お嬢様、次に敵としてまみえた時は・・・容赦しません」

状況はフェイトにとって不利である。

ただでさえ力が拮抗していると思われる相手に対し、ＡＭＦというハンデが重くのしかかる。

「フェイトさん！」

シャッハがフェイトに走り寄り、助太刀する。

ヴィンデルシャフトを構え、トーレに放つ。

しかし、シャッハの攻撃はトーレに当たる事はなく、トーレは一瞬でその場から消え、ヴィンデルシャフトは空を切る。

逆にトーレがシャッハの背後に現れ腕から伸びるインパルスブレードを死神の鎌のように振る。

首筋に悪寒を感じたシャッハは、勘で首を亀のように引っ込めトーレの攻撃をかわす。

そしてトーレがシャッハに目をやっている隙に、フェイトはソニックムーブを駆使しバルディッシュザンバーを繰り出す。

だが、トーレはそれが分かっていたようにフェイトの攻撃をかわし、フェイトのソニックムーブに負けないスピードで追随する。

あまりのスピードに、見るものにはフェイトは黄色い閃光に、トーレは青い閃光に見えた。

そして黄色い閃光と青い閃光が空中で交差し、火花を散らす。

幾度も、

幾度も、幾度も、

拮抗した力は、宝石のようにアジトの暗い空間を彩(いろど)る。

しかし、やがて終わりは近付く。

一方の閃光は徐々に速度を落とし、もう一方の閃光によってホールドされる。

「・・・くっ・・・！！」

うめき声を上げ、捕らえられたのは黄色い閃光であるフェイトであった。

ただでさえここまでたどり着く為に多量の魔力を消費し、あまつさえＡＭＦというハンデ。

フェイトに対する起死回生のカードは少ない。

フェイトは地面に打ち付けられ、上からトーレによって押さえ付けられていた。

絶妙なポジションでフェイトの背中に膝を置き、フェイトの行動を制限しているトーレの捕縛術は、もはや見事と言うほか無い。

フェイトは地面に頬をこすりつけられ、身動き出来ない体勢をとらされていることに屈辱を覚えた。

フェイトには現状を打破できる切り札がある。
だが、すくなくとも、現状で切り札を出すべきではない。
そう分析しフェイトは唇を噛み締め、トーレに為されるがままになっていたのだった。

「もし・・・なんて言い訳はしないでくださいね」

フェイトの悔しさを見透かすようにそんな事を言うトーレは、決してフェイトを侮辱するような顔をしているでなく、ただ作業を淡々とこなすようなロボットのようであった。

「フェイトさん!?」

シャッハはすぐさま駆け出そうとしたが、トーレがインパルスブレードの刃をフェイトの首筋へ向けたので踏み止まった。

普通、味方が窮地に立てば味方は助ける。
しかし、それはあくまでそういう感情を持っていれば、ということでの話だ。

エレノアはセッテに背中を向け、トーレに拘束されているフェイトの方へ歩み寄った。

ゆっくりと、優雅に。

トーレは再びフェイトの首筋に刃を当てるが、エレノアは歩みの速度を変えない。

「仲間がどうなってもいいのか？」

トーレは切れ長の目を細め威圧する。

そんなトーレに対し、エレノアはフンと鼻で笑った。

エレノアがセッテに背中を向け、それを追随しないセッテではない。

セッテは直ぐさまエレノアにブーメランブレードで切り掛かった。

しかし、エレノアは背後から攻めてくるセッテを見向きもせず、水晶剣を横薙ぎに振るった。

「――――つぅっ！！」

エレノアの一撃によってセッテが苦痛の声を漏らす。

攻撃はセッテのブーメランブレードによって阻まれたが、セッテ自身はエレノアの攻撃を緩衝しきれず吹き飛んだ。

吹き飛んだセッテを確認することなく、エレノアは歩みを止めず、淡々と口を開く。

「殺すなら殺しなさいな。ただし、それはイコール、あなたの死でもあると分かっての人質でしょうね？」

トーレは息をのんだ。

冷静で、そして冷酷。

最も最適である選択肢を選び、躊躇なく実行する。

そしてそれに裏打ちされた実力。

セッテが吹き飛ばされた一撃でさえ、エレノアの本気には程遠いであろう事は容易に想像できた。

トーレはうち震える。
歓喜によって高揚する。
崇拝すべき神を見つけたかのように感動する。
トーレの、いや戦闘機人としての理想像が目の前にいるのだ。
今のエレノアにとっての最善策は、フェイトを見捨ててもアジトを破壊、戦闘機人の無力化だとトーレは悟った。
（・・・流石はミス・クリスタル。こちらが優位に立っているハズが、無意味だったとはな。まったく、歩の悪い賭けだ）
トーレはそう内心悪態をつきながらも、口元がほころび、笑っていた。
その時、突如エレノアの足元から手が生え、エレノアの足首を掴んだ。
「！」
エレノアは驚き、足元を見た。
そして間髪入れずエレノアの周囲に赤い檻が現れ、身動きが取れないようになった。
檻は円錐状に形成され、赤い格子は魔力で編まれたものだった。

細かく編みこまれた格子によって、エレノアは体をよじる事さえできない。

エレノアはチラリとフェイト、シャッハを見た。
すると、二人ともエレノアと同じく円錐の檻に閉じ込まれていた。

フェイトもシャッハも悔しそうな顔でトーレや、歩み寄って来るセッテを睨む。
そしてもうひとり、ポチャンと音を立て地面から現れた新たなナンバーズ、ディープダイバーを使うセインを見て驚いていた。

（なるほど、あの子の仕業ね。なかなかやるじゃない）

エレノアは醒めた目でナンバーズ三人を見つつ、フッと笑った。

「やあやあ、遠路はるばるようこそ我が城へ」

コツコツと靴が鳴る音と共に聞こえる男の声。

その声を聞いた途端フェイトは怒りに顔を赤くし、エレノアも眉間に皺を寄せた。

奥から現れたのは、肩まで伸びた紫の髪に、白衣を纏い、長身ながらスラリと細いシルエット。
切れ長の目に、金色の瞳。
横に大きく拡がる口元は、笑みを絶やさない。

「――スカリエッティ！」

フェイトは怒りを込めて、現れた人物の名前を叫んだ。

「おかえり、我が娘」

スカリエッティは両手を大きく広げ、感動を表す。

我が娘、それはフェイトに向けられた言葉だった。

「貴様は私の父親じゃない！！」

フェイトは激高する。

そんなフェイトに対し、スカリエッティは肩を竦め、首を横に振る。

「残念だ、私の構築したプロジェクトFの基礎理論と、君の母親でもあるプレシア・テスタロッサのたゆまぬ努力の結晶、それが君なのに」

そう言い、スカリエッティはニヤリと口を歪める。

「まあ、彼女は君がお気に召さなかったようだが、ね」

「――っ！？貴様っ！！」

フェイトはスカリエッティに飛び掛からんばかりに激怒した。

「落ち着きなさい！フェイト・テスタロッサ・ハラオウン！！」

その時、凛とした声がアジトに響き、フェイトも動きを止めた。

声の主はエレノアだった。

それは、ある種の覇気が篭められていたため、フェイト以外の人間、トーレやセッテ、セイン、スカリエッティ、シャッハもエレノアの覇気に飲み込まれていた。

フェイトが落ち着きを取り戻すのを見計らって、エレノアはスカリエッティに向けて声をかけた。

「やっと現れたわね。直に会うのは初めてね、ジェイル・スカリエッティ」

エレノアが声をかけると、スカリエッティはハッとし、すぐにまたニヤニヤと笑みをこぼしだした。

「ああ、そうだね、アルハザードの英知が納められた『源書』の管制人格融合騎、エレノア君」

スカリエッティは顎に手をやり、ジロジロとエレノアを眺める。

「ふむ、てっきりアジト（こちら）には近藤大輔君が来ると予想していたのだがね」

「そう思っているだろうと、ご主人様は裏をかいたのよ」

「なるほど、確かに裏をかかれた！だが残念、それは愚策だよ」

楽しそうに喋るスカリエッティは、大きくため息をついた。

「・・・愚策だと？」

スカリエッティの言葉に反応したのはフェイトだ。
落ち着きを取り戻しながらも、聞き捨てならない言葉には反応せざるを経なかったのである。

「そう、愚策さ。なぜなら、彼の力ではゆりかごを攻略できない。エレノア君ならば、可能だったかもしれないがね」

「どういう意味ですか、ドクター？」

トーレがスカリエッティに質問する。
トーレは一度近藤とまみえている。
直接戦闘は行っていないが、それでも近藤から発っせられる雰囲気はただ者ではないと予想できた。
まともにぶつかれば、トーレでさえ近藤に勝てるかわからないと思っていたのだ。
その思い込みの半分が、顔の恐さなのはトーレしかわからない。

ともあれ、そこまで評価している人間に対し、スカリエッティは愚策と切り捨てたのだ。

そして、トーレには言っていなかった事があったのか、スカリエッティは、ああ、と納得したようだ。

「ゆりかごにはね、聖王がいるんだよ」

「ああ、ヴィヴィオ？」

セインが話しに乗る。
だが、あまり興味がないのか腕を頭の後ろで組み欠伸をしていた。
フェイトとシャッハは、ヴィヴィオという名前が出てきてビクッと肩を震わせた。

「クアットロに言ってある。聖王を強制覚醒させるように、とね」
スカリエッティが三日月のように口元を歪め、金色の瞳を光らせる。

「洗脳は浅いながらも施している。聖王の前に立ちはだかるものは、すべからく敵となるだろう。特に高町なのは、彼女には憎しみすら持つようになっているだろうさ。そしていくら近藤大輔君が出鱈目な強さを持っているとしても、それはあくまで人間の範疇だ。そもそも人間と王は別の生き物、聖王の強さとは次元が違う」
それを聞いたフェイトは顔を青ざめさせた。
なのははヴィヴィオを救う為に、最悪ヴィヴィオと戦わなければならないのか、と。

「ドクターって趣味悪いね」
セインが首をポキポキとならしながら言う。
それに対しスカリエッティは笑みを深めるだけだった。
フェイトは悔しさと悲しさ、憎しみによって唇を噛み締める。

スカリエッティ――この男は、どれだけ人の命を、運命を、意思を弄ぶのだろうか。

今この場で殴り飛ばしてやりたい。

そんな気持ちを抱え、しかし拘束される自分のふがいなさにうなだれる。

「異議あり」

そこへ、スカリエッティの言に異を唱えるものがいた。

セッテである。

「確かに、近藤様の少ない魔力ではＡＭＦの充満するゆりかご内では行動が制限されますし、体術にしても達人クラス程でなければ聖王には太刀打ちできないでしょう。しかし、近藤様には『源書』がありますし、近藤様も『王』であるはずですが」

セッテがそういうと、スカリエッティはふむ、と頷いた。

「確かに、アルハザードの英知が詰まったデバイス『源書』があれば、なんとかなるかもしれない。しかし、私はある仮説を立てた」

スカリエッティは人差し指をピンと立てた。

「彼は『源書』の力を使いこなせていないのではないか、とね」

それを聞いたエレノアは、僅かに眉を動かした。

そんな僅かな動きもスカリエッティは見逃さず、一層笑みを深めた。

「やはり、か。過去、私の研究施設を破壊してきた近藤君の幾つか残っていた映像記録を見て、そうではないかと思ってはいた。何故なら、彼は今まで一度も自分で源書を扱うことなく、破壊活動はエレノア君に任せきりだったからね。ま、当然だな、源書の暴力的な魔力を御せるほどの器を彼には感じない」

スカリエッティはため息をつきながら近藤を評価する。

「彼の知識は私より上かもしれない。起源の系譜を行使できるかもしれない。しかし、それだけだ。『魔王』を冠する資格を得たとはいえ、やはり見劣りするね」

チラッとスカリエッティはエレノアを見た。

エレノアは眉間に深く皺を刻んでいた。

事実、近藤は源書に記憶されている魔法をまともに使う事ができない。

使える魔法など、数が知れている。

源書に修められている魔法の中で、射出・砲撃系の一部しか使えないのである。

近藤のキャパシティでは、暴力的な魔力を許容は出来ても、使役は難しいのである。

近藤自身、源書の狂暴な力を知っているからこそ使う事はほとんどなかったし、そういう仕事はエレノアに任せていた。

エレノアはそんな近藤に文句はなかったし、使えるようになってもらうつもりもなかった。

そう思っていたからこそ、今回近藤に助言をしたのだ。

「所詮は突然変異、己の矮小な器に見合わぬ膨大な力を御しきれない、中途半端な『魔王』なんだよ。そもそも『王』とは別の種別だ。『人間』から『王』にはなれないのさ」

それに、と言葉を続けるスカリエッティは驚くべきことを口にした。

「起源の系譜対策（ジェネシック・コード）も万全だ」

「対策・・・まさか！」

エレノアは焦ったようにスカリエッティを見ると、そこには粘つく笑みを浮かべた顔があった。

「娘達や聖王、皆に『真名』を与えた。これで起源の系譜は発動しない」

そう言うとスカリエッティは、どうかね？といわんばかりにエレノアを見つめた。

「・・・」

それに対し、エレノアは無言で睨むしか出来なかった。

それを図星、肯定と解釈したスカリエッティは、大きくため息をつ

いた。

「ああ、残念だ。どれだけ私を楽しませてくれるのかと期待していたのだがね。この程度の『人間』だとはね」

ヤレヤレと肩を竦めるスカリエッティは、人を小馬鹿にしているように見える。

だが、スカリエッティが放つ一言に、近藤の運命は一変する。

「躍起になって『獣王の牙』を探した意味がない」

スカリエッティの口から発する言葉に驚いたのはエレノアだった。

「何故お前が『獣王の牙』の事を知っている！」

エレノアが焦ったような声を出したのが意外だったのか、スカリエッティはほお、と唸りながら顎を撫でた。

「意外かな？そうでもないだろう？『獣王』は子供でも知っている『王』だ」

「・・・確かに、絵本には度々登場するけど・・・」

シャッハはスカリエッティの言うことに言い淀む。

獣王と呼ばれる王は、空想上の王というのが専らの説であり、実在したとされる記録はほとんどない。

あったとしても、それは裏付けできないような曖昧な表現しかされ

ておらず、証拠とはならなかったのだ。

そこで、シャッハとフェイトは違和感を感じた。

空想上の王とされる『獣王』の事を躍起になって探していたというスカリエッティと、スカリエッティが『獣王の牙』とやらを知っていたという事実に驚くエレノア。

そこで、たどり着く答えはひとつ。

獣王とは、過去実在し、更にはとてつもない力を持っていた、ということだ。

「まあ、結局は見つからなかったわけだが」

スカリエッティはそう言うと、鼻から息を吐き落ち込んだように肩を落とした。

「歴代の聖王にのみ口伝されているという『獣王の牙』の隠し場所を、お前程度の輩が見つけられるわけがないでしょう」

エレノアは内心ホッとしながらも、スカリエッティに皮肉を言うのを忘れない。

そこで、スカリエッティは饒舌になっているエレノアに違和感を覚

え、疑問を抱き、そして導き出した答えを問いただした。

「・・・その口ぶり・・・エレノア君、まさか君は『獣王の牙』の隠し場所を知っているのかい？」

すると、エレノアは無表情でこう言った。

「ええ」

そして言葉を続ける。

「今頃はご主人様が手に入れているでしょうね」

スカリエッティは目を見開き、すぐさま自身の後ろに大きなモニタを複数展開させた。

モニタには、はやてがゆりかごの外でガジェットと戦っている姿や、ティアナ、スバルがナンバーズと対峙している姿、エリオとキャロがルーテシア、ガリューと向かい合う姿が映し出された。

そしてその中でゆりかご内部の戦いも映されていた。

ヴィータは一人ガジェットと戦っていた。

そしてなのはと近藤は、見知らぬ女性と戦っていた。

フェイトとシャッハが誰だ？と思っていると、エレノアがポツリと呟いた。

「・・・ヴィヴィオちゃん」

「なっ！？」

その言葉に驚愕するフェイトとシャッハ。

「そうだ、ヴィヴィオには聖王に強制覚醒してもらった」

ニタニタ笑いながらそんな事をほざくスカリエッティに、殺気を向けるフェイト。

だが、エレノアはモニタを見てホッと息を吐いた。

「よかった。この程度の力ならご主人様の自力でなんとかなる」

「え？」

マヌケな声を出す一同。

事実、モニタに映し出された近藤とヴィヴィオの戦いは、ある意味一方的だった。

ヴィヴィオの打撃が一切通らないのだ。

体の寸前で止まり、全く効いているように見えない。

ヴィヴィオが手加減しているようには見えないし、近藤が我慢しているようにも見えない。

「・・・な、なんだアレは・・・」

異様な光景に、思わず呟くトーレ。

「あれは化勁（かけい）。気で相手の攻撃を殺しているのよ」

「なにその出鱈目で反則な防御は・・・」

エレノアが説明するが、だからといってはいそうですかと簡単に納得できるものではない。

セインも思わず呟いてしまった。

身動きひとつせずに相手の攻撃を無効にするなど、実際みていても信じられない。

ヴィヴィオがパニックになってがむしゃらに攻撃するのも納得である。

そうこうしていると、ヴィヴィオは近藤と距離をとり、魔力弾で攻撃しだした。

フェイトやシャッハも、もし相手に打撃が通じないならばそう選択していただろうと、ヴィヴィオの攻撃を納得しながら見ていた。

対してトーレとセッテはため息ついていた。

それは何故か？

答えはすぐに出た。

「――――！？急に全身真っ黒に！？」

「スフィアが素通りしてる！？」

驚愕の映像に声をあげるフェイトとシャッハ。

「あいつにはコレがあるからな」

「そうですね、近藤様にアレにならせる暇を与えてはいけません」

トーレとセッテは淡々と分析する。

心なしか目が輝いているように見えるのは気のせいではないだろう。

「あれは『黒化』といって、ご主人様が自らと周囲の時間を切り離す技よ」

エレノアはジッとモニタを見ながら近藤の行動についていけないフェイトとシャッハに説明する。

そこで、スカリエッティはエレノアの言葉を聞いて納得した。

「なるほど時空分離か！攻撃対象が現在の時間軸に存在しなければ当たるわけがない！」

スカリエッティは一人ウンウンと頷いていたが、トーレやセッテにはちんぷんかんぷんだった。

ようするに、存在とは、同じ場所、時間、空間にいて初めて見なされる。

近藤はそれを故意にずらしたのだ。

同じ時間にいない人間とは何か？

それは過去であれ、未来であれ、その場には存在しないということだ。

同じ空間にいない人間とは何か？

それは認識できない存在である。
存在しない人間、認識できない存在に攻撃など不可能である。

「ああなる前に仕留めなければな」

「まあ、ドクターの言うことが本当ならば『近藤様も攻撃できない』ということですから、ああなっても膠着状態が続くだけみたいですけど」

そう、己が存在しない世界だからこそ、攻撃は受けない。
逆を言えば、存在しない世界に攻撃もできない。
その場しのぎの能力でしかないのだ。

そして、モニタではなのはが床に向けて砲撃しクアットロを沈黙させ、ヴィータが命懸けでゆりかごの動力炉を破壊していた。
本来ならば、コレで決着が着いただろう。
だが、そうはならなかった。

ゆりかごは浮上速度を弱めただけで未だ起動しているし、なによりヴィヴィオの行動である。
突如として近藤やなのはを襲い始めたのだ。
近藤はヴィヴィオの攻撃を喰らい、血ヘドを撒き散らしていた。

「な、何してるの！？」

「まだ洗脳が解けてない！？」

フェイトとシャッハは焦るが、エレノアは苦虫をかみつぶしたような顔をしてモニタを睨んでいた。

「ゆりかごの防衛モードが起動し、聖王を操作しているのだよ」

ニヤニヤ笑みを浮かべるスカリエッティ。

そして、状況は一変した。

今までとは逆の構図、つまり近藤とヴィヴィオの攻防が逆転してしまっていた。

しかも、ヴィヴィオの動きが先程までのそれとは明らかに違っていた。

的確な急所攻撃、一撃で相手を殺すという明確な殺意、研ぎ澄まされた動き、まさに全身武器であった。

対して近藤は、ヴィヴィオの間髪入れない攻撃を捌くのに手一杯で『黒化』になる余裕すらないようだ。

ついには近藤はヴィヴィオに捕まり、腕を砕かれ、投げ飛ばされてしまった。

「いやあぁぁぁっっ！！」

フェイトは凄惨な光景に絶叫する。

ただでさえなのはのボロボロな姿を目の当たりにし、ヴィータの血みどろの姿を見て、操られたヴィヴィオを見ているのだ。
親しい者の悲惨な光景を見続け、精神的にもギリギリだった。

シャッハも、公開処刑のような様相に顔を反らしてしまった。

そんな二人を見て、満足げに笑うスカリエッティと、無表情のトーレとセッテ。セイン。

そして、耐えるように唇を噛み締めるエレノア。

助けに行きたいのに助けに行けないという現状、予想していたとはいえ『聖王』の名に恥じぬ強さを発揮するヴィヴィオの悲痛な表情。

エレノア達が悲観していると、モニタに映る近藤が立ちおもむろに上がり、ポケットから何かを取り出した。

それを見たエレノアは悲痛な表情から、泣きそうな顔に変わった。

近藤が取り出した物

それは、スカリエッティが求めた物

近藤には使ってもらいたくなかった物

最強・最悪の物

近藤はそれを飲み込み、そして飲み込まれ――――

獣の王が現代に復活した

# 第８４話

獣王

それは古代ベルカの王の中で最も謎に包まれた王である。

そもそもその存在自体、実在していたのかさえ疑わしい。

獣王について記されているのが唯一『聖王記』のみであるということも一因だろう。

さらに言うなら、その『聖王記』でも記されていたのは二行のみである。

『獣王現れ　数多の王を屠る』
『残された王等団結し　獣王封印す』

この二行の文では詳しい事などわかるはずもない。

数多の王を屠ると記されているので相当の実力者であることは確かだが、能力、特徴等も全てわからない。

この獣王という謎の王、子供の読む童話の中の古代ベルカ王を主人公とする物語では、必ず敵役として登場する。

だが描写は当然様々である。

全身毛むくじゃらの狒々（ひひ）のような姿から、獅子のような姿、はたまた猛獣使いのような姿で鞭を振るっていたり。

獣王

それは、その名前以外が全て謎の王

それが今、モニタに映し出されている。

色で表すなら黄色、黄金であろう。

近藤の全身を覆った獣王の鎧はまさにそんな色だった。

顔は猛禽類を思わせる仮面で覆われ、獅子の鬣（たてがみ）のように炎を纏う。
腕は猛獣の前足を彷彿とさせるようなゴツい鉄甲、その鉄甲も無骨なものではなく、流線型の滑らかな、まさに野生動物の足のような美しいフォルムで、手の甲には青い宝石が埋め込まれている。
体全体を覆うボディースーツは肉食動物を思わせるしなやかさを持ち、足は爪が施された鎧を纏う。
その爪も、あまりの重量ゆえか床にヒビを入れめりこんでいる。

「・・・・・・フー・・・・」

俯きながら、大きく息を吐く。

「・・・・・・・」

しばらくうなだれるような体勢をとっていた近藤は、ゆらりと体を起こす。

そして、叫ぶ。

＞ｉ１５１５９―７９１＜

「■■■■■■■■■■■■■■■―――――！！」

獣の咆哮を。

――――大気が揺れる――――

「■■■■■■■■■■■■■■■

野生の本能を。

――ゆりかごが揺れる――

「■■■■■■■■■■■■■■■――――！！」

王を滅ぼすと。

――体が震える――

スカリエッティはモニタにくぎ付けになり、歓喜と恐怖に震えた。

なのはは獣の咆哮を放つ近藤を見て驚愕し、絶望した。

なぜなら近藤の目はもう人の理性などなく、自我などなく、一匹の野獣となっていたのだから。

近藤はゆっくりと前傾姿勢、いや、床に手をつけ四つん這いになる。
まさに、獣が餌を補食するかのように。

餌は――――聖王

「グルルルル・・・」

唸りながらふっふっと息を吐く近藤は、グッと一層体を沈めバネの反動を利用するように跳ねた。

「ガアアアァァァッッ！！」

雄叫びと同時にズドンッと大きな音を立て床が揺れ、近藤はヴィヴィオに飛びつく。

近藤が蹴った地面は、ボロボロに崩れ、爆発したような有様だった。

なのはの目には近藤の動きが見えなかった。
雄叫びとドンッという音と、ガンッという音が同時に聞こえたのだが、なのはは左右から聞こえる音を追いかけるようにキョロキョロすると、近藤がヴィヴィオの頭を掴み、壁にめり込んでいた。

近藤の驚異的なダッシュは、一飛びでヴィヴィオに到達する。
防衛プログラムで体の自由が効かないヴィヴィオは、怯えながらも

ガードしようとするのだが、近藤の驚異的なスピードについてこれず、近藤は難無くヴィヴィオの頭を掴む。
そしてその突進力を減速することなく、ヴィヴィオをそのまま壁に押し付けた。
あまりの衝撃にヴィヴィオの体がボゴンという音をたてて壁にめり込む。

聖王の鎧によって痛みは緩衝されているとはいえ、衝撃はくる。
しかも目の前の近藤に恐怖し、ガタガタと歯を鳴らす。
頭を掴まれ、指の間から見える近藤の顔が、あの穏やかな近藤の面影などなく、目を血走らせ、憤怒の顔で牙を剥く顔はヴィヴィオにとって恐怖でしかない。

壁にめり込んでいたヴィヴィオは、そのまま近藤によって片手で掴まれたまま持ち上げられ、強引に床に叩き衝けられる。

「グルルアァァッツ！！」

「きゃあああっ！？」

その際も床が衝撃でドゴンッという音と共に3メートル程のクレーターを作り出す。

ヴィヴィオは恐怖のあまり目を瞑った。
そして、しばらくすると、倒れているヴィヴィオの頭を掴んでいた手が離れ、お腹にズッシリとのしかかるような重みを感じ、恐る恐る目を開けた。

するとそこには、ヴィヴィオにマウントポジションを取り、ふっふ

っと息を荒く吐いている近藤がいた。
次に、近藤はマウントポジションのまま両手を使い、ヴィヴィオの腕を掴む。
ギリギリと握り締め、動けないように。
一体何が始まるのか、ヴィヴィオの瞳は揺れる。
「う・・・あ・・・お・・・さま・・・・」
ヴィヴィオがガチガチを歯を鳴らし声を絞り出した次の瞬間、近藤は口を大きく開け、
ヴィヴィオに噛み付いた。
＞ｅｓｓｅｅｅｅｅｅｅｎ！！（食す！！）＜
機械的な声と共に、近藤はヴィヴィオのバリアジャケットでもある聖王の鎧に噛み付く。
「いやあああぁぁぁぁっっ！！」
ヴィヴィオは絶叫するが、万力のように握り締められた腕は動かない。
近藤は、噛み付いていた頭をおもいっきり持ち上げ体を仰け反らせ

る。

そして、近藤の牙はブチブチと音をたて、バリアジャケットをひきちぎった。

近藤は首を振り、引きちぎったヴィヴィオのバリアジャケットを放り投げ、再び牙を剥きヴィヴィオのバリアジャケットに噛み付く。

「フゥッ！フォウッ！」

それは野生の獣が、餌に食らいつくかのような光景だった。

弱き者は強き者の糧となる。

弱肉強食

自然の摂理である。

「やっ！いや！いやぁあああぁぁっ！やめてえええぇぇっ！」

ヴィヴィオは泣き叫ぶ。

だが近藤は聞く耳を持たないのか、聞こえないのか、バリアジャケットを食いちぎるのをやめない。

やめるハズがない。

餌を前に躊躇う獣など、いるハズがないのだから。

そんな光景を見て、なのはは駆け出したかった。
ヴィヴィオを助けたかった。

しかし、動けなかった。

握り締めた拳は爪が皮膚を突き破り血が流れていた。
噛み締める唇も、歯が食い込み口の端から血が流れる。
口内に鉄の味が広がるが、そんなもの関係ない。

苦しくて、止めにかかりたかったが、今は耐えるしかない。

近藤の言った言葉を守るために、信じるために。

「3分です。何があっても我慢して一歩も動かないでください」

今まで近藤には助けられた事が沢山あった。
そして、彼は言ったことは必ず実行する男だ。
だから、信じる。
近藤を信じる。
見守る。

なのははヴィヴィオの泣き叫ぶ声に耐え、ジッと成り行きを見守っていた。

スカリエッティはモニタを食い入るように見ていたが、ハッと我にかえりすぐにウーノに指示を飛ばした。

「ウーノ、いますぐ獣王の測定を」

『了解しました・・・・・なっ!?』

モニタの向こうで忙しくコンソールを叩いていたウーノは出た数値に驚いた。

『ドクター、獣王の魔力数値・・・０です』

驚きながら答えるウーノに、スカリエッティはしまったという顔をした。

「ああ、すまない、獣王は特殊なんだ。数値測定を反転してくれ」

『反転ですか?は、はい・・・わかりました・・・』

スカリエッティの言に戸惑いつつも素直に頷き、再びコンソールを軽やかに叩く。

そして、ウーノは再び驚愕する。

『魔力数値・・・マイナス値・・・測定不能です・・・』

ウーノの報告に、口角を吊り上げニタリと笑う。

「そうか！－ＥＸｔｒａか(マイナスエクストラ)!!」

スカリエッティは目を爛々と輝かせる。
反対に報告をしたウーノは未だ計測データが信じられず呆然としていた。

そして、モニタに映る近藤の戦い、戦いといっていいのかわからない現場を目の当たりにし、くぎ付けになるトーレとセイン
何故か恍惚とした表情でモニタを見ているセッテ
驚愕に震えるフェイトとシャッハ

心配そうに見つめるエレノアだった。

ヴィヴィオのバリアジャケットは近藤によって食い破られボロボロになる。
なんとか逃げたいが、両腕は握られびくともせず、体を起こそうにも近藤のマウントポジションが巧みなのか力がまったく入らない。

ヴィヴィオの耳には、バリアジャケットをビリビリと食い破る音と、近藤の激しい息遣いしか聞こえない。

ヴィヴィオの恐怖はますます増幅する。

助けて、ママ！！

叫びたい声が出ない。
あまりの恐怖に声が、叫びが、悲鳴が出せない。

そして頭をよぎるのは――

――死――

瞬間、ヴィヴィオの体がビクンと跳ね上がる。
そして、体中から溢れる膨大な七色の魔力。

「グッ!?」

魔力は嵐のように吹き荒れ、近藤も思わず怯む。
それを見逃さないヴィヴィオは、体を起こし、そのまま近藤の顔目掛けて頭突きを打ち噛ました。

「グアッ!?」

思わずうめき声をあげ、痛みに目を瞑り体制を崩す。
ヴィヴィオはこのチャンスを逃さない。

直ぐに近藤のマウントポジションから逃げ、スタンディングに戻りつつボロボロに食い破られたバリアジャケットを瞬時に補修し、近藤と距離をとる。
そして間髪入れずに魔力の球、スフィアを5つ形成する。

「セイクリッドォォッッ！クラスタアアァァァッッ！！」

ヴィヴィオは叫び、スフィアを近藤に向けて放つ。
なのははヴィヴィオのその言葉にピクッと肩を震わせた。

ヴィヴィオの放ったセイクリッドクラスターは近藤に一直線に向かう。

対して近藤は、立ち上がり腕を前にダランと垂らし前傾姿勢のまま、セイクリッドクラスターを見ている。
避ける気配も、防御する気配もない。

そしてセイクリッドクラスターは近藤に当たる寸前でショットガンのように爆散した。

当たる！
そう思った。
ヴィヴィオも、なのはも。

しかし、近藤はとんでもない事をした。

「ガアァッ！！」

吠えた。

ただ、吠えた。

その一声で、セイクリッドクラスターは近藤の前からバチンと音をたて、ショットガンの如く広範囲攻撃を行った圧縮魔力弾は一瞬で掻き消えた。

「消えただと!?」

モニタを見ていたトーレが思わず叫ぶ。

当然だろう。

近藤は避けず、守らず、ただ吠えただけなのだ。

「何をしたんですか!?」

シャッハも拘束されながらも、理解出来ない行動に叫ぶ。

スカリエッティはニヤリと笑い、顎を撫でる。

「あれは・・・覇気だね。気合いともいうがね」

「そんな馬鹿な・・・」

「気合いで魔法を掻き消すとは・・・」

それは感心か、畏怖か、トーレとシャッハは信じられないといった顔でなおモニタにくぎ付けになっていた。

「さすがです近藤様・・・ああ、私もあなたの唾液にまみれたい・・・」

これはセッテだが、この際無視だ。

ヴィヴィオは驚くが、体を操るゆりかごの防衛プログラムは予期していたのか、すぐに行動に移す。

片手でセイクリッドクラスターを乱発し獣王に対して弾幕とし、こちらの攻撃を見せないようにする。

「やあぁぁぁぁぁぁぁっっ！！」

そんな攻撃に対し、近藤はあくまで緩慢な動作で対処する。

「・・・フンッ！！」

＞Ｖｅｒｔｅｉｄｉｇｕｎｇ！！（防御！！）＜

電子音と共に近藤は腰を落とし、左腕を前にかざした。

すると、近藤の前にオーロラのような膜が現れ、それが前面に大きく広がり、セイクリッドクラスターはその膜に当たるとシャボン玉のようにパチンパチンと乾いた音を立てて消えていく。

その隙に、ヴィヴィオは一撃必殺を狙うべく魔法を練る。
繰り出す魔法はヴィヴィオの記憶から、強力かつ即出せるもの。
ヴィヴィオは体を捻り、拳を腰に構える。
そして体の前には巨大な魔力が集まる。
ヴィヴィオは即座に理解し名を叫ぶ。
「インパクト――――」
拳をきつく握り締め、集まる魔力に拳を突き出す。
「――――キャノンーーッ！！」
収束された魔力は砲撃となり、巨大な砲撃は目の前の近藤に向かう。
あまりの凶悪な砲撃に、さすがに顔色を変える近藤。
だが、それでも焦りや恐れなどは微塵も感じなかった。
＞ｎａｇｅｅｅ

右手の甲に埋め込まれている宝石から電子音が聞こえ、その右腕を、振り上げた。

ただ、振り上げた。

それだけで4本の爪痕がまっすぐ空間に残る。

それは空間を切り裂いたということ。

ヴィヴィオの放ったインパクトキャノンは、切り裂かれた空間に飲み込まれ、近藤にたどり着くことはなかった。

これにはヴィヴィオを操るゆりかごの防衛プログラムも予想外だったのか、ヴィヴィオの驚きに同調するように動きが止まってしまった。

いや、違う。

ゆりかごの防衛モードがリンクを遮断したのだ。

ゆりかご自体が獣王に勝てないと悟り聖王を切り捨てたのか、獣王の度重なる攻撃によって防衛モードによる聖王操作が困難になったのか、それとも両方か。

ただ、ヴィヴィオは完全にゆりかごから開放された、それだけは確かだ。

つまり、近藤はヴィヴィオを救ったのである。

だが・・・

近藤は歩みを止めない。

「あ・・・う・・・」

ヴィヴィオが震える。

体が震える。

すでに心身ともに戦意を喪失したヴィヴィオには目の前にいる近藤が悪魔にしか見えなかった。

餌の確保を確信したのか、のそりのそりとゆっくり近づく近藤の顔は歯を剥き出しにしながらもニヤリと笑い、理性の残らない瞳は血走り、狂喜に満ちていた。

「ほう！空間を切り裂き魔法を無効化するとは！」

スカリエッティは感心しきりである。

「・・・アレは魔法・・・なのか？」

「むちゃくちゃだよ・・・」

トーレとセインは呟く。
当然だろう。

噛み付きバリアジャケットを引き裂く
吠えて魔法を掻き消す
爪で空間を引き裂く

野生そのものではないか。

トーレとセインが近藤に抱く想い、それは恐怖だった。

「獣王はね、別名があるのさ」

スカリエッティが勿体振るようにニヤニヤと笑い顎を撫でる。

「・・・『魔法食い』・・・」

エレノアが不機嫌そうに呟く。
その答えに、スカリエッティは嬉しそうにエレノアに向いた。

「そう！魔法食い（マジックイーター）！！獣王が最悪といわれる

所以だ！」

「どういう事ですか、ドクター？」

トーレがモニタから目を離し、スカリエッティを見る。
スカリエッティは相変わらずニヤニヤと笑みを浮かべていた。
そして、ふむと言い再び顎を撫でる。

「まずは獣王の魔力数値がマイナスであるというところから説明しようか」

そういいスカリエッティはツカツカと歩きはじめた。

「獣王がどのように、何故誕生したのかはこの際省略するが、アレは寄生する物だというのは見てわかる通りだ。ようするに、リンカーコアの有無、魔力の大小問わずアレは存在できるのだよ。つまり獣王とは、近藤君が飲み込んだあの『獣王の牙』が本体だったということになる」

「あんな骨が・・・」

トーレは驚くが、スカリエッティは無視して続ける。

「そんな訳で獣王は誰でもなれるお手軽な王であるわけだが、まあ今の近藤君を見て分かる通り、理性を失い、相手つまり魔力を持つ者を食う事にのみ執着するのだよ。でだ、獣王が何故魔力を求めるのか？それは、獣王の主食が魔力であるからだ」

「魔力を食べる・・・ですって？」

シャッハの声が震える。
スカリエッティはニヤリと笑い再び言葉を続けた。

「獣王は魔力がマイナスなのはウーノが計測したことでわかるだろう。獣王は魔力が枯渇、空腹なのだ。だから魔力を求める、腹を満たすのさ」

まさに本能だね、といいスカリエッティは肩を竦めた。

「映像を見る限り発揮されていないようだが、アレは『魔力吸収』と言って、四方八方無差別に魔力を吸い取る能力も持ち合わせているのだよ。さて、ここで問題だ。魔力を吸い取ると聞いて何か思い浮かべないかい？」

スカリエッティがそう言うと、今まで静かに成り行きを見守っていたフェイトがハッとした。

「ＡＭＦか・・・」

スカリエッティはフェイトの答えに満足し、一層笑みを深める。

「そう！そうだよ！ゆりかごの中に充満したＡＭＦは対獣王の為なのさ！」

ゆりかご内のＡＭＦは古代ベルカ時代の騎士達の訓練にも使われて

いたと言われている。
元々は魔力が潤沢な地にいて、魔力供給に不自由しない魔導士に対する阻害目的とされている。
しかしこの一般説はいわゆる副産物なのだ。

獣王は魔力に反応し動く。
そして、無差別に魔力を吸い取る能力を持つ。
それ等に対応、順応するため、ＡＭＦは開発されたという。

現にＡＭＦのような魔力を遮断、結合阻害などするフィールド、世界、鉱物など自然界には存在しない。
あくまで人工的に作り出すＡＭＦ、またそれに準ずるもののみである。

ＡＭＦは今でこそ魔導士を苦しめる天敵のようなものだが、根本は対獣王の訓練のためにあったのだ。

「だから鉄壁の聖王の鎧も無効なのか・・・」

「聖王家の七色の魔力、そして固有技能の聖王の鎧！獣王からすれば、極上の餌さ！」

何者の攻撃も通さないとされる聖王の鎧をいとも簡単に食い破るのも納得である。
ようするに獣王にとってスフィアだろうが、砲撃だろうが、聖王の鎧だろうが魔力には変わりないのだ。

「そう、自然界の摂理。食物連鎖！弱肉強食！強い者が生き残る！獣王はそれを体言しているのだよ！！」

狂気の瞳は、モニタに映る近藤に釘付けだった。

そこへ、またセッテがハイッと挙手する。

「先ほどドクターは『王』と『人間』は別物であり、『人間』は『王』になれないと言っていました。とすれば、誰でもお手軽に王になれる『獣王』とは厳密に言うと『王』ではないのでは？」

なんとも冷静なセッテだが、言わんとしていることはわかる。
獣王という存在はスカリエッティの言う定義から外れるのではないか、というのである。

「・・・まあ、獣王は何かと規格外だからねぇ・・・謎が多い分、私のわからない所で王の定義を満たしているのかもしれないねえ」

スカリエッティはモニタを見ながらなんとも歯切れの悪い返答をしたが、セッテもそれ以上は突っ込むことなくモニタを見ていたのだった。

目の前の最高の餌に、近藤は歯を剥き出しに笑う。

恐怖で動けないヴィヴィオは顔を青ざめさせ、ガタガタと震える。
これから待ち受けるであろう絶望と、色濃くなる死がヴィヴィオを

より追い込む。

そして、近藤はゆっくりとヴィヴィオに手を近付け、掴もうとした時、近藤とヴィヴィオの間に割り込む人物がいた。

なのはだ。

なのはは必死の形相でヴィヴィオを庇うように近藤の前に立ちはだかる。

「3分経ちました！もうやめてください！！」

なのはは叫ぶ。

「なのは・・・ママ・・・」

ヴィヴィオはなのはが助けに来てくれたことに喜んだ。

「もう十分でしょう！？ヴィヴィオを縛っていたプログラムももう動く気配もありません！だから、元の近藤さんに戻ってください！！」

なのはは必死に近藤を説得したが、近藤の今の状態では意味が無いことであると悟っていた。

何故なら、近藤のなのはを見る目は、仲間や同類を見るそれではなく、餌や羽虫を見るような猛禽の色に支配されていたのだから。

途端に近藤から濃密な覇気が放出され、なのはは思わず後ずさる。

「ヴィヴィオ・・・逃げなさい」

「な、なのはママ！？」

なのははヴィヴィオを逃がすことを第一に行動しようとした。
この娘だけは、なんとしても逃がす。
そう決意していた。
握っているレイジングハートにさらに力を込める。

嫌な汗が吹き出て、額に玉の汗を作る。

近藤の前に立っているだけで鳥肌が立つ。

ハッキリ言おう。

勝ち目が無い。

たとえ万全であろうと、この『獣王』という本能剥き出しの相手に勝てる見込みがない。
力がだとか、そういうことではなく、本能が勝てないと警鐘を鳴らすのだ。
そもそも、獣王とまともにぶつかり合える人物はこの世にはまずいない。
・・・いや、エレノアならばなんとかするかもしれないが。

とにかくなのはには荷が重い相手である。
これなら聖王を相手している方が幾分か光りがあるというものだ。

たとえ自分がどうなろうと、娘であるヴィヴィオだけは無事に助ける。

私はそのために、ここにいるのだから。

「逃げなさい！ヴィヴィ・・・」

なのはが叫ぶと同時に近藤は右腕でなのはを邪魔とばかりに振り払った。

「――――――がはっ！？」

なのはは近藤の攻撃に吹き飛ばされ、壁に体をおもいっきり打ち付ける。

ベッコリ壁にめり込んだなのはのダメージは相当だろう。

咄嗟にレイジングハートで防いでいたので、直接攻撃を受けたわけではないが、それでも衝撃は半端ではない。

壁に当たる前に衝撃を緩衝するために魔法を背中に張り巡らしたが、それでも完全には勢いを殺しきれなかった。

なのはは壁に激しく打ち付けられ、肺の空気が全て吐き出されたかのように胸が苦しくなり、酸欠のように上手く空気が取り込めない。

目の前がチカチカする。

頭がズキズキと痛み、ぐわんぐわん揺れ、平行感覚が曖昧になる。

耳がキンキン鳴りうるさい。

手足が痺れ、うまく動かない。

たった一撃、しかも邪魔物を退けるような緩慢な動作でこの威力だ。

本気の攻撃はどんなものになるのか。

恐ろしい。

なのはは初めて本当の『死』を実感した。
今までも命懸け、死と隣り合わせのような任務はあった。
そう思っていた。
だが、それはまやかしだった。
今この状況ほどリアルに死を実感したことはない。

濃厚な死を思わせる覇気

首に鎌を突きつけられているような恐怖

圧倒的強者の前に、自分はなんと非力か。

震える。

体が震える。

恐怖によって、カチカチ歯が鳴る。

でも動かなければならない。

自分の命と引き替えでも、ヴィヴィオだけは、娘だけは――――！

なのははなんとか体を動かし、近藤の足にしがみつく。

「ヴィヴィオ！逃げなさい！！」

なのはは叫ぶ。

心から、腹の底から。

「なのはママ！！」

ヴィヴィオは泣きじゃくり、逃げるそぶりを見せない。

腰が抜けてしまい、動くことができないのかもしれないが、とにかく動こうとしない。

その間も、近藤は足にしがみつくなのはを見据え、目を細める。

そして、うっとおしそうになのはの襟首を掴み、ヴィヴィオのへたりこんでいる所へ投げる。

「きゃあっ！？」

突然の浮遊感と衝撃に悲鳴をあげるが、ヴィヴィオが近くにいるのを確認すると、すぐさまヴィヴィオを庇うような体勢で近藤を睨む。

ヴィヴィオをきつく抱きしめ、なんとしてでも護ろうとする。

ヴィヴィオもなのはの体をおもいっきり抱きしめ胸の中で震える。

「ママ・・・ママ・・・」

「大丈夫、大丈夫だよ。ヴィヴィオはなのはママが絶対護るから」

なのはがヴィヴィオの頭を優しく撫で、気を落ち着かせる。

だが、無情にも近藤は顔をいびつに歪め、上体を反らし腕を振り上

げた。

なのはは死を覚悟し、目をつぶった。

振り下ろされるであろう圧倒的力を待つ。

・・・

・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

しかしいつまで経っても何も起こらない。

「・・・・・・・？」

なのははゆっくりと目を開けた。

するとそこには、先程の獣じみた息遣いではなく、落ち着いた呼吸をし、振り下ろす手を寸前で止めている近藤がいた。

「・・・すいません。２３秒ロスしました」

仮面から覗く瞳はいつもの穏やかな近藤に戻っていた。

鬣（たてがみ）のような炎も、先程までは轟々と燃え盛っていたのに、今は落ち着いたように緩やかな炎となっている。

「立てますか？」

近藤が手を差し延べる。

なのはは急な事に戸惑い、半信半疑だったが、恐る恐る差し出された手を取った。

近藤はぐいっと手を引き、なのはを無理矢理立たせる。

まだ少し足元が覚束ないなのはは、フラフラしながらも握った近藤の手を見る。

手触りというか、なんと肉球がある！
プニプニだ！

しかし爪は凶悪で、少しでも刺さったら痛そうだ。

近藤は手を離し、なのはに頭を下げた。

「申し訳ありません。少し手間取ってしまい、負担をかけてしまいました」

先程まで強烈な死を振り撒いていた者と同一人物とはとても思えないこの低頭さ。

「あ、あの・・・もう大丈夫なんですか？」

なのはは恐る恐る聞く。
もしまた暴れられたら今度こそ終わりである。

「はい、なんとかプログラムの修正と上書きに成功しましたから」

さらっと言うが、まさかとなのははさらに質問する。

「・・・もしかして、さっきまで暴れてたのはプログラムで、それを3分で修正した・・・と？」

「はい。正確には3分23秒ですが」

それを聞いた途端、なのははへなへなと力無く座り込んだ。

「3分って・・・そういう事だったんですか・・・なんて無茶苦茶・・・」

「まあ、本当なら獣王の力は使いたくなかったんですが、どうにもヴィヴィオの聖王の力が強くてとてもではないですが勝ち目がなかったので、奥の手として使用しました」

「・・・・・言いたい事は一杯ありますけど・・・もういいです」

なのはは近藤の非常識にまともに付き合うことのバカバカしさを改めて理解し、はあ、と肩を落とした。

近藤はなのはから離れ、未だ震えているヴィヴィオに近寄った。

「ひいっ!?」

ヴィヴィオは近藤が近づくと目に涙を溜め、ガタガタ震える。

まだ腰が抜けているようで、動こうとはしない。

近藤は苦笑し、ヴィヴィオと目線を合わせるためにしゃがんだ。

そして、ポンとヴィヴィオの頭に手を置き髪をすくように優しく撫でた。

「ごめんな。怖かったよな?本当にごめんな」

近藤は謝罪を繰り返した。

すると震えていたヴィヴィオは、だんだんと状況が理解できてきたようで、青ざめていた顔色から赤みがさしてきた。

「お・・・お・・・さま?」

「ああ、そうだよ」

ゆっくり、ゆっくりと頭を撫でる。

「・・・もう、痛いこと・・・しない？」

「うん、ごめんな」

「・・・もう、怖く・・・ない？」

「ああ、ごめんなさい」

何度も謝罪を繰り返し、ヴィヴィオの質問にも優しく、しかし謝りながら答える。

そして、ヴィヴィオはせきをきったように大粒の涙を流し、泣き出した。

「うえぇぇぇん！こわかったよ～～！！」

ヴィヴィオは近藤にしがみつき大声で泣いた。

近藤も、ヴィヴィオの頭を撫でつつ、背中をポンポンとあやすように叩く。

「ごめん、ごめんなヴィヴィオ」

「ふえぇぇぇぇん！！」

ゆりかごの玉座の間では、ヴィヴィオの泣き声が響き渡ったのだった。

余談であるが、それからヴィヴィオはあまりの恐怖にトラウマになったようで、しばらく近藤に近寄らなくなった。
さらに、獣王になろうものなら、大声で泣き叫ぶ始末。

まあ近藤の自業自得である。

ひとしきり泣いたヴィヴィオを落ち着かせ、なのはの状態を確認すると、近藤はこう言った。

「俺はまだやることがあるんで、ちょっと行ってきます」

あまり詳しく内容を言わないので、また隠し事かと少しムッとしたなのはだが、理由を言えない事なのだろうと割り切った。

もし手伝えるようなら付いていきたかったが、自分のコンディションを把握すると、すぐ諦めた。

「わかりました。気をつけてください」

なのはは結局見送るしかできない自分に嫌悪するが、そんな心情を知ってか知らずか、近藤はなのはに言った。

「なのは隊長はヴィヴィオを助けなければなりませんよ」

なのはは小さくあっと声を上げた。

よくよく思い出せば、ヴィヴィオはまだレリックウェポンを装備しているし、なにより容姿が元に戻っていない。

なのはの横で黙っているヴィヴィオは、なのはと近藤の話の内容が全くわからず、ぽわんとした顔で首を傾げていた。

成人女性の体とそのリアクションはかなりアンバランスである。

・・・まあ、かわいいからいいのだが。

「聖王の鎧は、獣王の攻撃でかなりダメージを受けているので、レリックコアを破壊するのもそう難しくないと思います。ゆりかごの防衛プログラムもシャットダウンしてますしね」

そう言うと、近藤はポンとなのはの肩に手を置いた。

「娘のヴィヴィオを救うのは、母であるなのは隊長の仕事ですよ」

仮面の下から見える口がニカッと歯を剥き出し、笑う。

「・・・そうですね」

なのはもその笑みにつられ、ニコリと笑う。

「では、行ってきます」

近藤は気安く片手をあげる。

「はい、気をつけて」

なのはが手を振る。

「いってらっしゃーい」

よくわかっていないヴィヴィオも、とりあえず手を振り見送る。

そして、近藤はフッとその場から消え、新たな戦場へと赴くのだった。

後日、近藤はなのはがヴィヴィオに取り付くレリックコアを破壊するためにスターライトブレイカーを使用したと聞いて、呆れた。

何故なら、そんな大出力魔法など使わずとも、すでに近藤が相当なダメージを与えていたため、クロスファイア程度でなんとかなっていたからだ。

「・・・む、娘にも容赦なく大出力砲撃を放つとは・・・さすが悪魔」

「私悪魔じゃないもん！！」

なのはのその叫びは、誰ひとりとして賛同する者がいなかったという。

## 第８４話（後書き）

とりあえず連続投稿はここまでです。

次回、なるべく早く投稿できるようがんばります。

・・・コミケの原稿も描かないとな・・・

# 第85話（前書き）

超展開2

# 第85話

モニタでゆりかご内の一部始終を見ていたスカリエッティとナンバーズはポカーンと口を開け呆けていた。

シャッハもポカーンと口を開けていたが、フェイトとエレノアはホッと息をつき、事がなんとか丸く治まった事に安堵する。

「これでゆりかごによる地上攻撃は阻止された」

フェイトが余裕を取り戻したのか、スカリエッティに皮肉めいた言葉を吐く。

しかし、スカリエッティは別にどうとも思っていないのか、フンと鼻を鳴らした。

「まだまだ甘いね」

「・・・なんですって？」

シャッハが眉を潜め睨む。

スカリエッティは大仰に肩を竦めヤレヤレと首を横に振り、再びあのいやらしいネットリとした笑みを浮かべた。

「動力炉破壊、起動キー喪失、その程度でゆりかごが止まると思っているのかね？」

その言葉にギクリとしたフェイトとシャッハは、様々な場面の映るモニタの中でゆりかごを外から映しているモニタを探した。そして見つけだし、驚愕する。

「ゆりかごが上昇を止めない！？」

「そんな馬鹿な！？」

焦るフェイトとシャッハに反し、エレノアは冷静だった。

「確かに動力炉を破壊すれば多少上昇速度は緩めることはできるだろう。けど、根本は違う。そもそも君達はゆりかごという存在を理解していない」

スカリエッティはケタケタと笑いフェイト達を嘲る。

「ゆりかごとは、『あれ自体がデバイス』であり、意思をもつ『個』でもある。ゆりかごという巨大なデバイスを起動させるには膨大な魔力が必要になる。そしてそれを可能にしたのは天空に浮く二つの月によるものだ。つまり、ゆりかごは起動と同時に常に月から無尽蔵の魔力を供給される無限動力を手に入れている。動力炉はその補助にすぎない」

「・・・ゆりかごを沈黙させるには、ゆりかごそのものを破壊しな

いとダメなのよ」

スカリエッティの言葉に続くように語るエレノアは、醒めたような表情で淡々と事実を口にする。

それに対し、フェイトとシャッハは顔を青ざめさせた。

「じゃ、じゃあ・・・今までしてきた事は無駄ってこと・・・？」

フェイトの呟きに、エレノアは首を横に振った。

「大丈夫。ゆりかご到達地点前にクロノ君に今出せるだけの次元航行艦船と僚艦を配置させてアルカンシェルの発射準備させているから。ヴィータちゃんのおかげで上昇速度は減速した。それはこちらに対処の時間を与える、とても重要な事なのよ」

つまり、作戦通り、ということだ。

エレノアのその言葉を聞いたフェイトとシャッハは、ホッと息をついた。

そんなフェイト達の安堵する姿を見ていたスカリエッティは、顎を撫でながら目を細め、小さく口を歪めた。

「確かに、あの獣王覚醒は予想外だった。だが、まだ計画の誤差範囲内。有利なのはこちらだよ。まあ、今のうちに優越感に浸っているといい」

意味深なことを言いながらニヤニヤと笑うのを止めないスカリエッティを見て、フェイトは眉間に皺を寄せる。

フェイトはスカリエッティの負け惜しみにしては余裕な態度に違和感を覚えた。

もし、スカリエッティの思惑通りゆりかごがミッドチルダ地上を攻撃したとしたら、今ここにいるスカリエッティも死ぬのではないか、と。

それなのに、この動じない態度。

フェイトの考えている事がわかったのか、スカリエッティは一層深い笑みを浮かべフェイトを見下ろし、言った。

「この計画が成功すれば、私は消滅するかもしれないだろうね。だが、娘達は誰かが生き残るだろう。それぞれが優秀な作品だからね」

フェイトはスカリエッティの言うことがわからなかった。

だが、エレノアはその言葉を聞いてより不快感に眉を潜める。

「・・・自分の遺伝子情報を彼女達に移植したな・・・」

声も出ずフェイトはエレノアを見た。

「そうさ。これはアルハザードでは当たり前の事、そうだろう、エレノア君?」

嘲るような目で見下ろすスカリエッティは、狂気だった。

狂ってる。

スカリエッティは周囲の者の命はおろか、自分の命でさえ弄ぶ。

そして、スカリエッティは笑う。

「フェイト、君もそうだろう？君も報われない子供を保護し、自己満足しているのだろう？」

ケタケタ笑うスカリエッティの金色の瞳が光る。

その心を見透かすような視線に、フェイトは吐きそうになった。

「自分の欲望のままに、身寄りのない子供を自分の都合のいいように育て、心を満たす。君のしている事と私の所業、何処が違う？」

心をえぐり、異物を擦り込まれるような感覚に、フェイトは思わず口を押さえた。

私の自己満足

ただ、自分の心を満たすためだけに

エリオとキャロを

フェイトの視界はぐにゃぐにゃになり、前を向いていられなくなり、俯く。
溢れそうになる涙を耐え、込み上げてくる嘔吐感に耐え、侵食され犯される心に耐える。

「フェイトちゃんはお前と違う」

俯き、砕けそうになるフェイトの横でエレノアはきっぱりと言った。

「たしかに自己満足かもしれないし、自分の報われなかった幼少期を払拭しようとしているのかもしれない。でもお前とは決定的に違う所がある」

エレノアはフェイトを見てフッと優しく笑い、すぐに凛々しい顔に変えてスカリエッティを睨む。

「フェイトちゃんは子供達の『未来』を護ろうとしている。過去にしがみつき未来から目を背けるお前とは、決定的に違う」

未来

その言葉を聞き、スカリエッティは笑みを潜めた。
代わりに表れるのは不快感。

「未来は無限よ。たしかに先の見えない不安はあるし、間違いも起こす。挫折し、絶望するかもしれない。でも、それに勝る希望と光

り輝く明日がある。それは、とても尊く、眩しく、煌めくもの、愛おしいものよ」

エレノアの言葉がフェイトの心に染み渡る。

エレノアは言う

フェイトはスカリエッティとは違うと

エレノアは言う

胸を張れと

エレノアは言う

貴女は間違っていない、と

「スカリエッティ、お前のように未来を否定する者に、輝かしい明日など来ない」

エレノアはそう言うと、ゆっくりと立ち上がった。

そしてエレノアを囲うように張り巡らされていた赤い糸の檻は、いとも簡単にブチブチと音を立てて消えていく。

それを見たスカリエッティとナンバーズ達は驚いた。

赤い糸の檻は、スカリエッティオリジナルのグローブタイプのデバイスから出される特殊な檻だった。

とても強固で、計算上ではSランクの攻撃でも対処できる程の力を秘めていたのだ。

それが今、まさにその見た目のように、細く赤い糸は無惨にちぎられていく。

つまり、エレノアはただ立ち上がったという動作だけでもSランク以上はあるということだ。

エレノアは首を回し、呆けているスカリエッティ達を見てこう言った。

「何を驚いているの？まさかこの程度で私を止められると思っていたの？」

「・・・この中は高濃度のＡＭＦが・・・」

セッテが目を丸くしながら呟く。

「ＡＭＦごときで私を制限できると思っている時点で三下ね」

エレノアは見下すようにスカリエッティを見てこれみよがしにため息をつく。

「スカリエッティ、あなたは私が『一撃で』『必ず』『殺せる』方法を持っている事を知っているのではなくて？」

そう言った途端、スカリエッティはサッと顔を青ざめさせた。

「ま、まさか・・・源書には・・・『死（デス）』も記録されているのか・・・？」

「当たり前でしょう？アルハザードの全ての魔法知識を修めているのが源書なんだから。・・・まさか知らなかったの？」

スカリエッティは当然知っていた。

しかし、それは源書に記録されているということではなく、『死』そのものの存在は知っていたということでだ。

『死（デス）』

アルハザードの第2代王である『レオ』が作り出した魔法である。

この魔法は、魔法という概念の根本から異なる。

もともと『死』はムングという神の持つ一振りの剣だった

レオはそれを魔術として昇華したのだ

死とは平等

すべからく与えられるもの

この世に生きとし生けるもの全てに与えられた終着点

それは『死』を受けた者

『死』を唱えた者

全てに平等に

つまり、とてもではないが人間が扱える魔法ではない。

使った途端、死ぬのだから。

この魔法を唱えた者は尽く、例外無く死ぬ。

ただ一人、開発者のレオを除いて。

ただ一人、レオのみが死せず扱えた。

それはレオのみが持つ特殊な瞳『万物を見渡す目』によって、世の理を、真理を理解していたレオだからこそなのだろう。

その後レオは『死』を禁呪とした。

そんな危険な魔法を源書に修めているとは普通思うまい。

だが、そうか、とスカリエッティは納得してしまった。

『死』の溢れる濃密な魔力のせいで源書に近付く者は尽くが発狂、もしくは死に至るのだと。

しかし待て。

そうすればエレノアも死ぬのではないだろうか？

答えはノーである。

何故ならエレノアのモデルは第2代アルハザード王レオなのだから。つまり、エレノアも『万物を見通す目』を持ち、真理を理解しているエレノアに『死』は通じないということになる。

そこまで考えてスカリエッティはとても魅力的な、しかし現在の自分にとって最も不利となる答えにたどり着き、ゴクリと喉をならした。

そして、間違いであってほしいと願いつつもスカリエッティはエレノアに問わずにはいられなかった。

「・・・君は・・・レオの全てを受け継いでいるのか・・・？」

震える唇から出た声は掠れていた。

すると、エレノアはスカリエッティの答えを肯定するかのように、己が内に秘めたる荒れ狂う魔力を解放した。

ドンッ！！

同時にアジトが揺れる。
エレノアの溢れる魔力に呼応するかのように地面が、壁が、天井が揺れる。

エレノアの周囲に暴風が発生し、荒れ狂う風はスカリエッティ達を切り殺さんとするように襲い掛かる。

あまりの暴風に、目を開けるのも辛くなるが、しかしスカリエッティはしっかりとエレノアを見た。

そして、畏怖した。

溢れる魔力の色は黄金。

黄金とは、太陽と同義であり、太陽を象徴とするものは『王』
王とは黄金を纏い、太陽のような存在の事である。

エレノアから発する濃密な黄金の魔力は、エレノアを蜃気楼のように希薄に揺らめき、幻想的にさせ、視認を歪める程だった。

「・・・エレノア君・・・いや『魔王レオ』・・・！」

スカリエッティは悟った。
自分の知る知識には、魔王のクローン成功例はなかった。
クローンを作り出したとしても、それは魔王と呼べぬもの『ただの人間』だった。

だが目の前にいる者はどうだ？

圧倒的存在感

圧倒的魔力

ひざまづき頭を垂れてしまいたくなる程の覇気

神々しいまでのカリスマ

その存在はまさに王
自分の知る完璧な存在、魔王

そしてたどり着く最悪の答えは、最も敵に回したくない相手

エレノアは左手を翳す。

そして口にする。

『魔法の言葉』を

【王が命じる】

エレノアの瞳が光る

その目は、かつてレオが『万物を見渡す目』と言われたものと同じ色をしていた

【跪け（ひざまず）】

途端スカリエッティとナンバーズにズドンと有無も言わせぬ強制力が働き、体に有り得ない程の重力がのしかかる。

堪らずスカリエッティは地面に押し付けられるように突っ伏す。

トーレ達ナンバーズものしかかる重力にひざまずく。

トーレ達はあまりの予想外な事に声も出なかった。

まずエレノアが起源の系譜を行使したことに驚いた。

だが次だ。

トーレ達はスカリエッティによって新たな名前『真名』を与えられており、起源の系譜は効果を発揮しないはずである。

それは、先程モニタでの近藤の行動によって実証済みである。

にもかかわらず、エレノアは『真名』を知らないはずなのに、強制力が働いたのだ。

トーレ達は困惑するばかりであるが、スカリエッティには理由がわかっていた。

『万物を見渡す目』である

万物、つまり、ありとあらゆるものを見ることができる瞳だ。

この瞳にかかれば『真名』など無いに等しい。

何故なら、全てを知る瞳なのだから。

クローンは不可能だと言われていた魔王
その完成体が目の前で威風堂々と立つ。

スカリエッティは喜び、歓喜し、そして絶望した。

「貴女は王の資格を持つ者だ。その力は近藤君のような不完全なものではなく、王として完成された力、すなわち・・・」

スカリエッティは一呼吸置き言葉を続ける。

「貴女こそ王に相応しい。いや、王であるべきだ『魔王レオ』！」

叫ぶような声色には、喜色も混じっていた。
だが、そんなスカリエッティにエレノアはフンと鼻を鳴らし切り捨てた。

「私は『魔王レオ』ではない。『源書の管制人格融合騎エレノア』だ」

エレノアは目を閉じ、愛おしむように手を胸の前で組み、語り続ける。

「私には主がいる。私は主を愛している。私の愛する主こそ『王』に相応しい」

エレノアは言う。

私はレオではなく、エレノアであると。
王の力を持とうが、主より資格があろうが、関係ない。
私の主こそが王あると。

主こそ王に相応しいと。

エレノアが心から近藤を信じ、崇拝し、愛している事がわかると、スカリエッティはフッと己の愚かさを笑った。

完全なる魔王に勝てる者など存在しない。
ゆりかごは別だが、とにかく現状スカリエッティの手札にエレノアを打倒するカードはなかった。

『死』には勝てない。

スカリエッティは完全なるクローンを見たことに満足し、死を待った。

だが、ここからスカリエッティの地獄が始まる。

それこそ、自分から殺してくれと懇願するほどの生き地獄が。

「『死』は使わない。ご主人様にお前を殺すなと言われているから」

エレノアはそういうと、ジャケットの内ポケットから小さなリモコンを取り出した。

「でもお前は許さない。ご主人様の心を傷付けたから。だからお前も同じ痛みを味わってもらう」

エレノアはニヤリと三日月のように口を歪め笑い、リモコンのスイッチを押した。

その頃蚊帳の外のシャッハはというと、あまりの規格外な魔力に当てられ、金縛りを受けたように硬直していた。

そしてフェイトは・・・

「ふぐぅ～・・・エ、エレノアさん・・・私もダメージ受けてます・・・」

エレノアがスカリエッティとナンバーズに向けた『無差別起源の系譜』の発動の煽りを受け、その強制力によって地面にへばり付いているのだった。

「・・・た、助けて・・・」

苦しそうな声を出すフェイトを助ける人間は、この場にいなかった。

## 第８５話（後書き）

さて、なにやら疑問の残る問答でと思うでしょうが、それは受け流してください。

次回、スカリエッティの地獄がはじまります。

お楽しみに。

# 第８６話（前書き）

スカリエッティ地獄編

# 第８６話

＝＝＝

おや、スカリエッティ君ある机の前で止まりました

んん？

そこは確か学年一の美少女といわれる女の子の机ですね

スカリエッティ君、何やら机をいろいろな角度から眺め、机の中を見ました

おっと、スカリエッティ君の目が光りましたよ！

どうやら目当ての者が見つかったようです

スカリエッティ君はそれを取り出しました

長細い袋に入れられている目当ての物を取り出しましたよ

お、どうやらそれは縦笛のようです

小学校では必需品ですね

さて、スカリエッティ君その縦笛をどうするつもりなんでしょうか？

おや？スカリエッティ君口を開けました

息が荒いです

舌をチロチロ動かしはじめましたよ！

まさか？

まさか！？

『ああ・・・ベアトリスちゃん・・・ハアハア・・・！』

ペロンッ

ベロベロ

パクッ

ああーーー！

咥えたー！

ねぶったー！

他人の縦笛を自分の唾液でベチャベチャにしているー！

スカリエッティ君恍惚とした顔で鼻息荒く、尚も縦笛をぬぶりまくるー！

スカリエッティ君はド変態だー！！」

＝＝＝

何をするのかと思っていたら、なんと映像は小さい頃のスカリエッティの変態的行為の一部始終が流れ出したのだ。

スカリエッティは顔を蒼白にした。

何故かって？

だって全て事実だから。

ちなみに、このスカリエッティの過去映像、近藤とエレノアが各無人世界を転々として質量兵器やロストロギアと発掘しているときに発見したものだ。

コレを発見したときの近藤とエレノアの表情は、とても表現できない嫌そうな顔だったという。

［中学生になったスカリエッティ君、今度はまた学年一の美少女のブルマを・・・おや、スカリエッティ君おもむろに自分のパンツを下ろしましたよ！？］

「やめろおおぉぉぉっ！！やめてくれぇぇぇっ！！」

スカリエッティは泣き叫ぶ。

顔色はもう酸欠のように紫色になっていた。

人には触れて欲しくない闇を必ず持っている。

それはどんな犯罪よりも重く、羞恥の塊であり、若気のいたり、青春の甘酸っぱい一ページ、セピア色になった決して知られたくない過去。

つまりは黒歴史。

そんなものを衆目に暴露されるなど、これ以上の地獄があるだろうか？

こんな生き地獄を味わうなら、死んだ方がましである。

だが、エレノアはスカリエッティの叫びを無視して、フェイトとシャッハを助ける。

「いやぁ、ゴメンゴメン、フェイトちゃんも起源の系譜の効果があるの忘れてた」

エレノアはてへっと言いながら舌をペロッと出し反省する。

対してフェイトはゼーゼー荒い呼吸をしながらエレノアを恨めしそうに見ていた。

フェイトはエレノアの発した不特定多数の起源の系譜をモロにくらい、スカリエッティやナンバーズ同様、理不尽な重力と強制力によって地面に押し付けられ、はいつくばっていたのだ。

エレノアがフェイトにだけ解除を施したときには、フェイトは息も絶え絶えで、反論する声すらあげられなかった。

エレノアはフェイトとシャッハを拘束していた赤い糸の檻を切断し救出した。
ここから反撃の開始であるはずなのだが、しかしシャッハもフェイトも、その表情は微妙だった。

何故なら、現在絶賛放映中のスカリエッティ赤裸々映像のあまりの酷さのためである。

＝＝＝

まさか！？

パクンッ

食べたー！

スカリエッティ君リップクリームを食べましたよー！？

危ない！

それは食品じゃないぞー！！

デンジャラスだ！

スカリエッティ君！！」

＝＝＝

しかし、泣き叫びながらエレノアに懇願する現在のスカリエッティを見ていると、なんともいたたまれなくなってくるのだ。

しかも、エレノアはそれを華麗にスルーしている。

フェイトはこれにに似た現場をつい最近見たような気がした。

・・・

・・・・・・

だが思い出すのをやめた。

これ以上思い出すと、こちらも戦意を喪失しそうだったから。

尚も流れ続ける映像に、段々ナンバーズはスカリエッティから心が離れていった。

物理的に離れたいのだが、起源の系譜によって身動きが取れないため諦めている。

本当に気持ち悪いのだ。

科学者としては天才ではあるが、行き過ぎて自他共に認めるマッドサイエンティストだ。

しかしそれでもナンバーズからすれば生みの親であるから、尊敬もするし、命令も聞く。

だがこの映像はダメだ。

マッドとかそういうことでは片付けられない、真正のド変態が映し出されているのだから。

「ああ、言い忘れたけど、これ『全世界』で絶賛放映中だから」

「うわあああぁぁぁぁっっ！！」

エレノアの追い撃ちをかける事実に、スカリエッティはとうとう血の涙を流し出した。

だが、直ぐにハッと我に返り頼れるウーノに指示を飛ばした。

「ウーノ！今すぐ回線を切断するんだ！！」

「・・・・・・・・・・・・・はい」

ああ、ウーノの声が若干嫌そうな返事なのは気のせいだろうか？

あんたみたいな汚物が私に話しかけないでよ

そんな心の声が聞こえてきそうだ。

しかしそれでもテキパキと作業するウーノは流石である。

だが、すぐにウーノの顔が焦りに転じた。

「ド、ドクター、発信源が他次元全てに張り巡らせてあり、多過ぎて処理しきれません。しかも回線を遮断してもすぐに新たな回線を開くようプログラムされており、実質不可能です！」

「うわあああぁぁぁぁぁぁっ！？うそだあああぁぁぁぁっ！？」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

［おやおや、大人になったスカリエッティ君、とうとうストーカー容疑で逮捕されちゃいましたよ！

ん？なにやらスカリエッティ君が叫んでいますね
聞いてみましょう

『何故だい！？僕達はお互い愛し合った仲じゃないか！あんなに激しく求め合ったのに！』

どうやら無実を訴えているようですね
しかし、どうしてか相手の女性はガタガタ震えて泣きそうな顔をしていますよ？

『・・・私、あなたなんか知らない・・・あなたと一度も話もしたことない・・・』

・・・うわぁ・・・これはもしや・・・

『そんな!?私は君の昨晩の食事も知っているし、今日履いている下着も知っている!君がどんなスイーツが好みなのか、いつも靴下は左から履くのも、風呂では腕から洗うのも、お気に入りのぬいぐるみも、猫のマグカップも、全て知っているのに!?君が私に教えてくれたんじゃないか!!』

・・・それ、その娘の部屋盗撮して得た情報じゃあ・・・

あ~あ、とうとう女性は恐怖のあまり泣き崩れてしまいましたよ?

どうやらスカリエッティ君は脳内で彼女と結ばれたという妄想と、現実の区別がつかなくなったようです

『私達は前世から堅い絆で結ばれているんだあぁぁぁぁっ!!』

出ました!!

超・電波発言!!

2006

スカリエッティ君、君は正真正銘の屑だっ！！」

＝＝＝

スカリエッティはピクピクと痙攣していた。

エレノアはパチンと指を鳴らすと、ナンバーズにのしかかっていた強制力が解けた。

直ぐさま立ち上がるナンバーズだったが、それでもその表情は微妙だった。

「どうする?この空気の中、まだスカリエッティの言う通り、私達とやる?」

エレノアの物言いに、トーレはおもわず「お前のせいだろうが!!」と叫びたくなったが、なんとかグッと耐えた。

「・・・ドクターはもうどうでもいい」

トーレが言う。

しかし、ドクターという言葉の裏に、汚物という言葉が込められているような気がするのはどうしてだろうか?

「私達は、私達のしたいようにします」

セッテはそう言うと、ブーメランブレードを構えた。

「・・・あたしはもうどうでもいいんだけどな・・・」

セインはため息をつきながら構える。

エレノアはフンと鼻で息を吐いた。流石は戦闘機人、己が納得するまで戦うというのだ。

近藤の周囲には、どうしてこう腕力や実力行使に訴える女子ばかりなのだろうか？
肉食系女子にも程がある。

「じゃあちょうど3人ずつだから、タイマン勝負にする？」

エレノアがそう言うや、コクリと無言で頷くナンバーズとフェイト、横で目をキラキラさせながら鼻息を荒くするシャッハ。

結果、対戦は
エレノアとトーレ
フェイトとセッテ
シャッハとセインとなった。

ここでエレノアがポツリと呟く。

「なんか週間少年漫画で人気が低迷してるから、とりあえずなんちゃら大会開くみたい・・・もがっ」

言い終わる前にフェイトがエレノアの口を手で塞いだ。

「エレノアさん・・・これ以上私達のやる気を削がないで下さい・・・！！」

フェイトは低音でエレノアに耳打ちした。

横ではシャッハが少しうなだれていた。
すでに精神的ダメージを受けたようだ。

トーレとセッテもため息をつき、がっくりと肩を落とした。

そしてセインが頭の後ろに腕を回して言う。

「ああ、天〇一武〇会ね。そういえばそんな感じだね」

「おいいいぃっ！？何言ってるセイン！！」

トーレがセインの頭をわしづかみし恫喝する。

「あっちでフェイトお嬢様が言っていたのが聞こえなかったのか！？これ以上空気を弛緩させるな！！」

目を血走らせるトーレに、セインは醒めていた。

「だってー、あたしー、もーどーでもいいしー」

本当にやる気のかけらもない喋り方のセイン。
変態野郎スカリエッティ暴露で完全に気が削がれたらしい。

「ならば邪魔です。この場から、いえ、私達の視界からさっさと消えなさい。そして何処へなり逃げて野垂れ死になさい」

セッテが辛辣な言葉を投げる。

これにはセインもカチンときたようだ。

眉間に皺が寄っている。

「・・・そこまで言うことないだろ」

ぶつぶつ文句を垂れるセインに、セッテはヤレヤレと肩を竦めた。

「事実ではないですか。セイン、あなたは戦って負けるのが怖いから逃げるのでしょう？野良犬のように尻尾を巻いて」

「あたしがあんな残念な女に負けるわけないだろう！」

セッテの言葉責めに、とうとうセインはキレた。

「ざ、残念・・・」

ガックリひざまづきショックを受けるシャッハは、泣きそうだった。

ガンバルロボ！

キミハザンネンデハナイメカ！

2011

また何処からかガジェットの声が聞こえた。
・・・よく見ると少し離れた場所で、柱の影から覗くように成り行きを見守るガジェットが2体いた。
シャッハとガジェットの視線が交差する。
グッと拳を握るように巧みにコードを操るガジェット。

ボクタチガイルロボ！

シャッハはガジェットに慰められ、さらに鬱になった。

「くそ！そこまで言うならやってやるよ！あたしが圧倒的強さでこの残念シスターを倒してやる！！」

セインはやる気満々になった。

ブチッ

「誰が残念だくるあああぁぁぁっっ！！やってやんよこんちくしょー！！！」

シャッハはブチ切れてしまった。

## 第８６話（後書き）

こんな　地獄絶対やだな！
と思って書きました。

ホントやだな・・・

2014

# 第87話（前書き）

アジト編完結です。

さて、前話は、賛否両論でした。
クライマックスなんだからシリアス付き通せと何通かご意見をいただきました。
私自身、ちょっとやり過ぎたかも?とまではいきませんが、あの話を投稿するのに躊躇しました。
ただ、あの話をこの物語を書こうと思って最初に思いついたアイデアだったのです。
だから、投稿せずにはいられなかったのです。

まあ今回以降、全編ギャグはないです。
ところどころに小ネタはいれますけど。

だってずっとシリアスだったら疲れるじゃないですか?
主に私が!

というのは置いといて、コレは私の癖、ポリシーだと思って諦めてください。

ではどうぞー。

# 第87話

フェイト達とナンバーズの戦いは団体戦形式で行われた。
なんともお祭り感覚が否めないが、エレノアがいる時点で仕方のないことだろう。

ちなみにスカリエッティはバインドで簀巻きにされ放置している。

まず先鋒シャッハ対セイン

次にフェイト対セッテ

最後大将がエレノア対トーレである。

「気を抜くなよセイン。ヤツは騎士だ」

トーレが腕を組みセインに激を飛ばす。

「あいよー」

セインは手をヒラヒラ振って答えた。

対するシャッハはすでに戦闘体勢に入っており、猛牛よろしく、目を血走らせフーフー鼻息を荒くしていた。

「肩の力抜けよ、残念シスター」

セインがフッと馬鹿にするような笑みを浮かべる。

そんなことを言われて冷静になれるシャッハではない。

眉間にはドクドクと血管が浮き出、いまにも切れて出血しそうだった。

セインとシャッハが対峙していると、間にエレノアが入り、説明をする。

「はい、これは死闘です。ルールなんてありません。だから殺傷設定でも構いませんし、反則もありません。ただ、相手が戦意喪失、もしくは戦闘不能となったら決着とします。異論、質問は？」

エレノアがセインとシャッハの顔を交互に見る。

二人は無言で睨み合っているので、肯定と取ったエレノアは銀色のコインを取り出した。

「じゃあこのコインが地面に落ちたら開始ね」

コクンと頷くセインとシャッハ。

そして固唾を飲んで見守るフェイト、トーレ、セッテ。

コイントスを行い、ゆっくりと空中に孤を描き、チリーンと地面にコインが落ちる音がする。

普通はそういう緊迫した演出を思い描くだろう。

セインやシャッハは勿論、トーレ、セッテもそう思っている。

だが、フェイトだけは嫌な予感しかしなかった。

（・・・絶対まともなことしないよ、この人・・・）

その心の呟きは現実となる。

エレノアは足を高く上げ、おもいっきり振りかぶる。

え？と声をあげるトーレとセッテ。

「ふんっ！」

そしてエレノアは、コインをおもいっきり地面にたたき付けた。

あまりにも強くたたき付け過ぎて、コインが地面にめり込み、聞こえたのはチリーンという金属音ではなく、バチーンという鈍い音。

「ファイッ！！」

エレノアは手を交差し、セインとシャッハに戦えと指示する。

「・・・・・・あ・・・え？」

「・・・・・・今のが・・・開始合図？」

セインとシャッハはポカーンとしていた。
そして、攻撃していいのか判断に困り、二人ともぎこちなく動いていた。

後ろではトーレとセッテも顎でも外れたかと思うほど口をだらしなく開け、目を点にしている。

ただひとり、フェイトは頭を抱えていた。

「どんだけ空気をぶち壊せば気が済むんですか・・・」

フェイトの声は少し涙ぐんだような、湿った声だった。

「・・・」

「・・・・・・」

気まずい空気がセインとシャッハの間に流れる。

なんだその無茶苦茶な開始合図は。

もうグダグダではないか。

「・・・あたし、帰りたい・・・」

セインがポツリと呟く。

「・・・私もです・・・」

シャッハも疲れたような表情で同意した。

だが、二人の瞳に意志が宿り、力強い表情となる。

「でも帰るのはお前に勝ってからだ！」

「そこには同意しますが、勝つのは私です！」

セインとシャッハは強い意志でぶつかった。

勝負はアッサリと着いた。

セインは自分の能力である『ディープダイバー』を駆使し、壁や地面、天井に潜り死角からシャッハを攻撃した。

これにはシャッハも手を焼いた。

ただ、セインの戦闘能力は低く、シャッハに決定打を与えるまではいかず、徐々に体力を削るだけだった。

そして、シャッハは段々とセインの戦闘パターンを読み取れ、迎撃するようになる。

セインの旗色が悪くなりだしたとき、神妙な顔をしたトーレとセッテが、ウーノが捕縛されたとの会話をしているのが聞こえた。

セインは戦闘を中止し、すぐさまウーノを救出しようと駆け出した。

そして、セインがディープダイバーで壁を潜っているとき見てしまった。

隣にシャッハが同じように壁を潜り、自分を追いかけているのを。

壁を抜け出し、すぐに別の壁に潜ろうとすると、シャッハがヴィンデルシャフトで壁を粉砕し、セインを潜れないよう牽制した。

セインは必死に逃走経路確保に周囲を見渡すが、シャッハの一言で思考が止まってしまった。

「焼肉定食！」

「え？」

セインは焼肉定食という言葉を理解すると同時にシャッハの攻撃によって意識を手放した。

セインはバインドを施され邪魔にならない所の床で転がっていた。
すでに意識は戻っていたが、その表情は浮かない。

「・・・焼肉定食ってなんだよ・・・あんなの反則だろ・・・」

なにやらぶつぶつ呟いているが、トーレとセッテは意味がわからず首を傾げ、フェイトは聞こえないように耳を塞ぎ、エレノアはニヤリと笑みを浮かべた。

そしてシャッハはというと、焼肉定食の効力に驚き

「・・・これは使える」

と、なんとも前向きな評価を下したのだった。

なんだかんだで戦いはまともだったのでトーレとフェイトは安堵した。

フェイトは目を閉じ、大きく深呼吸し気持ちを落ち着かせる。

現在もアジトはＡＭＦが継続して発動されているため魔力結合に苦労するが、そんなことを言い訳にするつもりはない。

現在自分が出せるベストを

全力全開を

フェイトはリミットブレイクすることを決意した。

その時、濃密な殺気が放たれた。

思わずフェイトも精神統一を中断したほどの殺気。

それは、明らかにフェイトに向けられていた。

フェイトは閉じていた目を開け、目の前の殺気を放つ者を見た。

それはセッテだった。

セッテの周囲だけが暗く見える。

セッテに纏わり付く重苦しい空気が、拡大し、侵食していく。

鋭く光る瞳は、それだけで人を殺せそうだった。

あまりの明確な敵意に、フェイトは怯む。

「貴様のような阿婆擦れが近藤様の側にいること自体が間違いだ・・・」

地を這うような重低音。
呪詛でも篭められているかのようなまがまがしい声音。

「ドクターは貴様を殺すなと言った・・・でももうドクターの命令など聞かなくていい・・・」

くくくと僅かに肩を震わせ笑うセッテ。

「フェイト・テスタロッサ・・・貴様は殺す」

スカリエッティを越える狂気に満ちた瞳を宿したセッテが、そこにはいた。

フェイトとセッテが対峙する。
その間に、トーレがコインを持ってやってきた。

理由は簡単、フェイトがエレノアのコイントスを拒否したためである。

これにはトーレとセッテも同意した。

「なんでよー！」

口をタコのように尖らせプンプン怒るエレノア。

とても、先程規格外の魔力を見せつけ、更にはスカリエッティに地獄を見せた同一人物とは思えないそぶりである。

とにかく、拗ねるエレノアは無視して戦いを始めることにした。

「フェイトお嬢様、申し訳ありません」

トーレが頭を下げ、謝罪した。

「どうもセッテは近藤を神格化していまして、近藤の側にいる貴女が気にいらないようなのです」

なるほど、とフェイトは納得した。

・・・いい迷惑だ。

トーレは双方を見て、コインを空中に投げた。

チリーン

床に響く金属音

「死ねえぇぇぇぇっ！女狐ぇぇぇぇっっ！！」

それと同時に聞こえる、普段感情を表に出さない人物とは思えない叫び声に、トーレとセインはドン引きした。

セッテは両手にブーメランブレードを携え、突撃してくる。

フェイトはバルディッシュをザンバーフォームにして迎撃する。

セッテは左手に持つブーメランブレードをフェイトに投げつけた。

孤を描き高速回転するブーメランブレードだったが、フェイトは難無く避け、セッテが振り下ろすブーメランブレードを防御した。

ギリギリと鍔ぜり合いをするフェイトとセッテ。

その時、僅かにセッテが笑った。

それを見たフェイトはゾクッと悪寒が走る。

首筋にチリチリと焼けるような感覚。

危ない！

だが後ろには跳ぶな！

本能がそう告げる。

フェイトは左に跳び、セッテと距離を取った。

その時、セッテの手元から離れていたブーメランブレードが、先程までフェイトがいた位置を通り、セッテの手元に戻った。

フェイトは驚愕する。

あのままあの場にいたら、死んでいた。

更に、バックステップしていたら確実に首が飛んでいた。

フェイトは首筋を触り、冷や汗をかきブルリと震えた。

セッテはチッと舌打ちし、さらにブーメランブレードを二本追加した。

合計４本のブーメランブレードである。

「プザマに踊って切り刻まれろ！！」

セッテは４本全てのブーメランブレードをフェイトに向けて投げた。

それぞれが一撃必殺のブーメランブレードだが、当たらなければどうということはない。

フェイトは先程のセッテの攻撃で、ブーメランブレードがその名の通りブーメランのように手元に戻って来る武器であると把握していた。

だから、前からの攻撃を避けても後ろからも攻撃が来るとわかっていた。

フェイトはブーメランブレードがただの遠心力を利用した武器であると判断してしまっていたのだ。

そういう心の思い込みを『居着く』という。

セッテは、そんなフェイトの僅かな居着く心が手に取るようにわかってしまったので、また口を歪め笑った。

そして、内心ほくそ笑み空の両手をかざした。

その時フェイトの表情は一変する。

ブーメランブレードが有り得ない軌道を描き、フェイトに襲い掛かってきたのだ。

空中で急転換し、まるでそれ等ひとつひとつが意思を持つかのように、上下左右前後と様々な角度からフェイトを狙う。

これがセッテの能力『スローターアームズ』である。

巧みにブーメランブレードを操り敵を翻弄する能力は、まさにセッテにうってつけであった。

フェイトはブーメランブレードを避ける。
跳ね返す。

そして軌道がずれるブーメランブレードは、セッテにキャッチされ、再びフェイト向けて投擲される。

さらにセッテは掌から砲撃も繰り出し、フェイトに攻撃の隙を与えない。

空中に、地上にと動くセッテは、フェイトを中心に半球上のフィールドを作り出していた。

ブーメランが飛び交うドーム

一歩間違えば、死に直結する

フェイトは必死に避ける。

その様はまさにぶざまなダンスを踊っているようだった。

フェイトは焦る。
攻撃を仕掛ける隙すら与えない、容赦ないセッテの猛攻に、フェイトは感嘆しつつも不利な状況に、いよいよ危機に曝されていく。
このままではジリ貧だ。

なんとかこの空間から逃げて体勢を整えないと、と隙を伺っていた。

「・・・貴様は・・・私達と同じ存在であるハズなのに・・・いや、

私達よりも罪深い女のくせに・・・」

セッテが何かを呟きながら攻撃を繰り出す。

最初フェイトはセッテの呟きなど気にも留めなかったのだが、セッテの顔を見たとき、驚き、そして悲しくなった。

セッテが今にも泣きそうな悲痛な顔でフェイトを睨んでいたのだ。

「何故お前が近藤様の隣にいるんだ」

徐々にセッテの動きが鈍くなり、それに呼応するようにセッテはますます顔を歪める。

今なら隙を見つけて体勢を整えるチャンスなのだが、フェイトはそうしなかった。

「私が初めてあの方を見たのはドゥーエの送ってくる動画だった」

セッテははかなげな表情で懐かしむように語りだした。

「最初にあの方の境遇を聞いた時は特になんの感情も沸かなかった。だが、動画に映るあの方の『あの顔』を、生き様を見たとき、私に衝撃が走った！」

セッテは打って変わって目をキラキラさせ力説する。

「凡才な魔力を補うべく身につけた武は達人。さらにあの方は歩みを止めることなく、日々精進し、強さを渇望し、貪欲に求めた。そ

の探求者たる姿は、まさに私の理想！私はあの方のようになりたかった！」

いつになく饒舌なセッテはブーメランブレードのひとつを握り、フェイトに切り掛かった。

フェイトは応戦し、ガリガリと火花を散らせる。

「だが、私は知った。管理局の闇を、あの方の闇を」

セッテが力押しでフェイトに迫り、フェイトは堪らず膝をついた。

「そして改めてあの方の映像を見た。何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も！！」

セッテが体の全体重を乗せフェイトにのしかかる。

徐々に顔が近づき、セッテが見下ろし、フェイトが見上げるような体勢になった。

「答えろ、フェイト・テスタロッサ。何故あの方はあんな『空っぽの顔』をする？」

フェイトはセッテの攻撃に耐えるので必死にだった。

「貴様は、あの方があんな『空っぽな顔』をしている事を疑問に思った事がないだろう？」

切れ長の瞳が狂気によって怪しく光る。

「答えろ！」

セッテはフェイトを蹴り倒した。
セッテの蹴りはフェイトの水月に入り、苦痛に顔を歪める。
セッテはフェイトを追撃せず、その場で立ち尽くしていた。
「答えろ、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン!!あの方にあんな顔をさせたのは誰だ!!」
持っていたブーメランブレードを苛立たし気に地面に突き刺す。
「あの方を良いように利用したのは誰だ!リンディ・ハラオウン!貴様の母親だろう!!あの方に罪をなすりつけたのは誰だ!高町なのは!貴様の親友だろう!!そんな罪深き貴様が、何故あの方の隣にいる!!」
フェイトは胸が張り裂けそうだった。
確かに近藤を利用したと取られるかもしれない。
リンディの行いはある側面から見れば確かにまずいだろう。
だがなのはの事に関しては自分達の預かり知らぬ場所で行われていた事だ。
そのことで責め苦を受けるいわれはないはずである。
しかし、それは言い訳である。
「貴様等の組織が優先順位を付け、それを実行したのは事実だ。それを否定しようが、貴様等が属する組織が下した判断は貴様等の判断と同義なのだ。それを言い訳に知らないと言えば納まるとでも思っているのか?」

セッテは俯く。
ヘッドギアと前髪で顔が隠れてしまい、表情は伺えない。
しかし、僅かに肩が震えていた。

「私にはわからない・・・何故あの方は自分を陥れた人物に対し、あんな笑顔でいられる？」

思い出すのは、近藤が訓練でフォワード達に話し掛けている姿。

「何故あの方は全てを諦めたような空虚な表情をする？」

近藤は自分に関することになると、途端に表情が変わる。
まるで人形のように、無機質な表情に。

「何故・・・あの方の隣には私ではなく貴様がいる！」

セッテが叫ぶ。

その悲痛な叫びと、頬を伝う一筋の光を見て、フェイトは動く事ができなかった。

「何故貴様に向ける笑顔はあんなに眩しいのだ！？」

頬を伝っていた涙は滴となり、地面に斑点を作る。

「あの方をお救いしたい！あの方の側で支えてあげたい！私のあの方を想う気持ちは誰にも負けない！！」

なのに、何故あの方の隣には貴様がいる！？

フェイトはわかってしまった。

セッテが近藤を神格化していると、トーレは言っていたが、そうではない。

セッテは普段表には出さないが、とても感受性の強い子なのだろう。

だから映像で見た近藤に興味を持ち、調べ、いつしか近藤を追い掛けるようになり、そして近藤を助けたいとまで思うに至ったのだ。

セッテは近藤が壊れている事を理解してしまった。

それは心であり、体であり、つまり近藤という人間を救いたいとまで思うようになったのだ。

セッテは、クアットロの思惑と真逆の、実はナンバーズの中で最も人間のような心を持って生まれたのである。

セッテは言う

管理局にいれば、近藤はいつしか体を壊され殺される。

なのはやフェイトの側に居続ければ、いずれ心が死んでしまう。

だから、自分が助ける。

救済する。

側に居る！

「・・・ドゥーエやノーヴェもあの方を救済したいと言っていた。その気持ちが本物だと知っている。しかし、私の想いはそれ以上だ！」

セッテは涙を拭うこともせず、キッとフェイトを睨みつけブーメランブレードを突き付ける。

「この気持ちは貴様にも勝る！！」

声高らかにセッテは宣言した。

フェイトにはセッテの想いが痛いほどわかった。

そして、フェイトは思った。

今の気持ちでは彼女を攻撃できない、と。

セッテは、フェイトが戦意喪失と見て、ゆっくりと歩きだした。

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン、貴様ではあの方は救えない」

セッテの瞳は再び暗く濁り、フェイトを見据える。

「汚れた己の魂を悔いて死ね」

セッテはがら空きのフェイトに向けて

ブーメランブレードを

振り下ろした

しかし、セッテのブーメランブレードはフェイトの肉体に届かなかった。

なぜならフェイトがバルディッシュで防いだから。

「・・・人は過ちを冒す」

ガリガリと音をたてるブーメランブレードとバルディッシュを余所に、フェイトは淡々と語りだした。

「冒した過ちは過去だ。過去は変えることができない」

セッテの表情に焦りが出る。

フェイトを押し切ろうとしているのに、全く動かないのだ。
明らかにフェイトの力が上がっている
「過ちを悔やみ引きずる事は愚の骨頂。人は過ちを糧とし、学び教訓として前に進んで欲しい」
フェイトの体から、暴走するかのように魔力が溢れ、風を巻き起こす。
膨大な魔力量に、セッテは怯んだ。
「罪を償いたいのならば、贖罪としたいのならば、笑顔でいてくれ」
セッテはフェイトの放つ魔力に吹き飛ばされた。
「くうっ！」
直ぐに臨戦態勢を取るセッテだったが、フェイトを見て思わず息を飲んだ。
フェイトのバリアジャケットが様相を変えていたのだ。
白いマントにコートという出で立ちから、体にピッチリと張り付き、はっきりとボディラインがわかる。
極限まで装備を軽くし、その全てを攻撃に回すフォーム
その名も『真・ソニックフォーム』

持っていたバルディッシュザンバーも変形し、二振りの剣になる。

「それが、あの人の言葉だ」

先程までの躊躇していた表情は無くなり、あるのは覚悟を持った強い意志。

「確かに私達は過ちを冒した。それは否定しない。でもあの人は許すと言ってくれた」

バルディッシュの切っ先をセッテに向け、声を上げるフェイト。

「貴女の想いはわかった。でも、私は貴女に殺されてやるわけにはいかない」

お互い獲物を構え、腰を落とす。
まるで狩りをする獣のように。

「あの人は『私の側で共に生きたい』と言ったから！」

「――――っ！？フェイトテスタロッサアアァァァッッ！！」

決意の火を燈した瞳のフェイトと、憤怒の表情のセッテ。

ドンッと地面を蹴る音が同時に鳴る。

目に見えぬ速度で交差するフェイトとセッテ。
金属がぶつかる音と、火花、そして二人が巻き起こす荒れ狂う空気。

その攻防は長く続かない。

バキンッ

武器が破壊される音がアジトに響き、折れた刃先が地面に突き刺さる。

同時にドゴンッという音と共に壁にぶつかる人。
土煙を巻き起こし、その人物は壁にめり込む。

ゆっくりと着地し、壁を見据えたのは――――

フェイトだった。

ガラガラと破片が床に落ちるのも気にせず、セッテは壁にめり込んだ体を起こす。

あまりの衝撃に、目にノイズが走り、関節にバチバチアークが発生し体の駆動に支障をきたす。

「くっ・・・そ・・・」

そのまま起き上がる事ができず、セッテは気を失った。

しばらくして気が付いたセッテは大人しく縛についた。
気持ちはどうあれ、負けは負けである為潔く従ったのだ。

戦いの一部始終を見て、セッテの想いを知ったトーレとセインは、彼女の評価を改めた。
いままでのセッテの発言が、あまりにもアレであった為、彼女の思考もアレだったと思っていた。
だが、まさかセッテがあんなに切実に近藤を想い、純粋な気持ちを抱いていたとは思ってもいなかったのだ。
ナンバーズの中で、ウェンディとセインが一番感情豊かだと言われていたが、セッテの内に秘めていた想いは二人以上だった。
なんと一途で、純粋か。

「セッテって、かわいいのな」

バインドされているセインがニヤニヤしながら言う。

「・・・・・・」

セッテは無言でプイッとソッポを向いた。

ただ、耳は真っ赤だった。

フェイトが勝利してエレノアとシャッハの待つ場所に戻ると、なんとも生暖かい眼差しで迎えられ、居心地が悪かったのはいうまでもない。

最後の戦いはエレノアとトーレである。

はっきり言って、トーレが勝つ見込みは万に一つもない。

トーレとて、そんなことはわかっている。

でも、トーレは戦わずにはいられなかった。

何故なら、目の前に立つエレノアの、その圧倒的存在感は、まさに自分達ナンバーズの目指すべき理想像だから。

トーレの気持ちは、なんともスッキリしたものだった。

負けるとわかっている戦い。

これが最後で、死ぬかもしれない。

でも悔いはない。
トーレは爽やかな顔でエレノアを見て呟く。
「最期の相手が貴女でよかった」
そんな呟きが届いたのか、エレノアはトーレに微笑み返したのだった。

ゆっくりと歩み寄るエレノアとトーレ。
二人とも、これから死闘を繰り広げるとは思えないような、穏やかな表情でお互いを見つめる。
「開始の合図は？」
エレノアがゆっくりと両手を広げ、前傾姿勢を取る。
すると、両腕から水晶のように煌めく剣が現れた。
「無粋な事は言うな」
トーレはインパルスブレードの硬度を高め、腰を落とし構えた。
「私の全身全霊の一撃、貴女にぶつける」
小細工など通じない。
ならば最初の一撃で決する。
全てを懸けた、最高の一撃で！

トーレのその目は、もうエレノアしか映っていない。
凄まじい集中力でエレノアの一挙一動を、呼吸を、僅かな誤差を見逃さないと目を細め見据える。

「あなたのような潔い性格、嫌いじゃないわよ」

エレノアはクスリと笑い、水晶剣を前後に構えた。

お互いの呼吸がシンクロし

申し合わせたように同時に動いた

そして、お互いの得物を振るい

二人はすれ違う

そして・・・

「・・・本望だ・・・」

トーレはその場で崩れるように倒れた。

エレノアはそんなトーレを背中越しで見つめ、微笑む。

「命の一撃、確かに届いたわよ」

エレノアのバリアジャケットの肩部分には、インパルスブレードによって切れ目が入っていた。

## 第87話（後書き）

さて、なんとか投稿完了。

本当はこんなことしている暇ないんだ！

まだコミケの本ができてないんだ！

年末は仕事忙しいんだ！

休みがないんだ！

一日72時間くらいになれば完成するのに…

# 第８８話（前書き）

書く予定のなかった話その１です。
が、書いておいたほうがいいと思い投稿しました。
スバルとティアナが活躍する（？）話です。

# 第８８話

「ギン姉！」

スバルは叫ぶ。

周囲には自分とギンガ以外は誰もいない。

朽ち果てた道路の上で、スバルは最愛の姉、ギンガを顔を苦痛に歪め見る。

空中はお互いのウィングロードが張り巡らされ、青い迷路のような景色だった。

スバルはリボルバーナックルを構え、姉であるギンガを見据える。

ギンガは、ボロボロだった。

打撃のあざ、擦り傷、埃、流血と様々な汚れと怪我が、ギンガの美貌を汚す。

体力も限界に近いのか、ゼーゼーと雑音のような荒い息を吐き肩を上下に揺らしている。

対してスバルはほぼ無傷だった。

時間は少し遡る。

フォワード四人は固まって行動していた。

だが、突然の砲撃によってティアナとスバルは分断される。

エリオとキャロも、ルーテシアを見つけると追いかけて行った。

戦力を分散され焦るティアナとスバルだったが、突如スバルに直接攻撃を仕掛けてくる影があった。

咄嗟に防御したので外的ダメージは負わなかったが、その相手にスバルはショックを受けた。

それはギンガだった。

いつもの朗らかな笑みは無く、人形のように無表情に、しかし間違えば致命傷を負うほどの攻撃を躊躇無く仕掛けてくる。

スバルは苦痛と苦悩に顔を歪め、防御する。

攻撃に躊躇するスバルを余所に、ギンガは容赦無く攻撃をする。

その一撃、一撃が、人を簡単に撲殺できる程の威力を持つ拳を、蹴りを、家族であるスバルに向ける。

スバルは思い知った。

これは戦闘なのだと。

いつも姉と行っている組み手ではないのだと。

スバルはギンガの放つリボルバーナックルの攻撃をバックステップで避け、ギンガとの距離を取る。

そして、深く深呼吸をした。

私は覚悟していたハズだ。

ギン姉とこうなることを。

今、この場には私とギン姉だけ

ならば

私が

ギン姉の目を醒まさせる！

スバルの瞳に確固たる決意が宿り、足を肩幅に広げ腰を落とし、拳を腰に構えた。

ギンガが突撃し、リボルバーナックルを振り抜く。

スバルもリボルバーナックルを突き出し、応戦する。

リボルバーナックル同士がぶつかり、二人の間にリボルバーナックルの打撃音と、火花が散る。

まさに力と力の勝負である。

「うおりゃあああぁぁぁっ！」

競り勝ったのはスバルだった。

スバルはリボルバーナックルを振り抜き、逆にギンガは吹き飛ばされる。

「・・・え？」

困惑の声をあげたのもスバルだった。

スバルは違和感を覚えた。

己の拳を見ながら思考の海に潜ろうとしたとき、またギンガが攻撃を仕掛けてきた。

幾分気持ちが落ち着いていたスバルは、ギンガの動きにまた違和感を感じた。

（・・・遅い？）

スバルにはギンガの動きが遅く見えた。

そして、事実ギンガの攻撃を難無く回避できた。

ギンガは足を止め、スバルに連撃した。

無数の拳と蹴りがスバルに襲い掛かるのだが、しかしスバルはそんな連撃もいともたやすく避けた。

スウェー、ダッキング、パーリング、スバルはギンガの攻撃を尽く避けるか、たたき落とし、受け流した。

「・・・ギン姉、本気でやってる？」

スバルが困惑の表情でギンガの攻撃を捌きながら呟く。

これには洗脳されているギンガもカチンときたようだった。

「・・・っ！！」

ギンガが腰を溜め、リボルバーナックルを振りかぶる。

ナックルスピナーが回転をあげ、高音を鳴らす。

その攻撃は、まともに頭部に喰らえば、ほおずきのように一瞬で弾け飛ぶような凶悪な攻撃だった。

しかし、そんな攻撃をスバルは難無く掌で受け止めた。

「・・・！？」

ギンガの表情が驚愕に染まる。

「はあっ！」

ギンガが気を反らしているスキに、スバルはミドルキックをギンガに浴びせた。

「――――くうっ！！」

腕でガードしたが、その腕がメキメキと悲鳴をあげた。
苦悶の声をあげたギンガは、威力を吸収出来ないと判断し、そのまま攻撃に流されるように吹き飛び威力を殺した。

改めてスバルは自分の体を確認する。

今まで経験したことがない程の充実した魔力と万全な体調

冴え渡る読み

クリアな思考

体は高揚しているが、落ち着き払った気持ち

そして

スバルは、ああ、と納得した。

（これが副隊長の言っていた『効果』か・・・！）

スバルはいつもの前傾姿勢のファイティングポーズをやめ、足を肩幅に広げ左足を前に出し、右足を後ろに引いて重心を乗せる。体を斜めに構えつつ、姿勢は真っ直ぐに、そして右腕を腰に構え、左腕を軽く前に出した。

それは、まるで近藤のとる構えのようだった。

大きく深呼吸し、息を吐ききったスバルはギンガに言った。

「来い！！ギン姉！！」

そこからはスバルの独壇場だった。

もともとのスペックは大差無かった二人だったが、それゆえコンデ

ィションはとても重要なのだ。

生まれて以来感じたことが無いほどベストコンディションのスバルに、スカリエッティによって洗脳されコンディションが万全か計りかねるギンガ。

そして、なによりメンタル面である。

自信が確信に変わったスバルに対し、焦り、心を乱すギンガ。

この差が顕著に表れたのだ。

スバルはギンガの攻撃を尽くを捌き、一撃を放つ。

スバルはできれば一撃でギンガを救いたかったのだが、そこは流石ギンガといったところなのか、スバルの急所攻撃を僅かにずらし致命傷を逃れていた。

結果戦いは長引き、ギンガは体中に傷を負い、纏っているボディスーツもボロボロになってしまった。

致命傷はないが、蓄積されたダメージは相当である。

途中、ギンガの手が突如回転し始め、ドリルのような攻撃を仕掛けてきたときは驚いたが、しかしそれだけだった。

ギンガの攻撃はもはやスバルのプロテクションすら砕けない程低下してしまった。

「・・・ハァー・・・ハァー・・・」

大量の汗と、荒い息遣いをしながらもギンガは戦意喪失することな

く、体力の限界によって重くなった腕を尚もあげ、ファイティングポーズを崩さなかった。

そしてギンガの瞳に決意が宿る。

スバルはギンガの瞳を見て理解した。

――――次の攻撃が最後だ――――

スバルは小さく息を吐き、リボルバーナックルを腰に構え、ギンガを待つ。

「――――――ふっ！！」

ギンガはスバルに向かって走る。

ブリッツキャリバーのローラーが己の限界速度を無視するかのようにホイールから火花が出る。

脅威のスタートダッシュは、ズドンという音と共に地面を破壊するが、もうその場にギンガはいない。

ブリッツキャリバーの底力と、ギンガの覚悟は、スバルの元へ一瞬で近付けた。

捨て身覚悟の特攻

普段のギンガならばそんな無謀な事はしないだろう。
いや、これしか活路が無ければするかもしれない。
しかしそこに小さな奇跡が起こった。

ギンガの左腕に装着されたリボルバーナックルが、周囲の空気を巻き込む。

ナックルスピナーが高速回転し、もっともっとと空気を回転させる。

そして、いつしかギンガを中心に螺旋の渦が巻き起こる。

ハリケーンのような暴風を纏ったギンガは、渾身の一撃を放った。

それは、魔法と、力と、風が一体となった一撃。

名付けるならば　『風の拳』

奇しくも、その一撃はギンガの知る最高の一撃、ギンガとスバルが追い求めていた『一撃必殺』

――母クイントの得意とする技だった

そんな一撃を、スバルは目をキラキラさせて見ていた。

（やっぱりギン姉はすごい！！）

改めてギンガに尊敬の念を抱くスバルだったが、それでもスバルの自信は揺るがなかった。

「でも！私は倒れない！」

目にも止まらぬ閃光のごときギンガの一撃は

スバルに頭に当たる前に

スバルの右腕に装着されたリボルバーナックルのフックによって

”横から”攻撃され、ギンガのリボルバーナックルは軌道をずらされた

直線の攻撃は、横からの攻撃に弱い。

言うのは簡単だ。

だが、実行するとなると、話は別である。

針の穴に糸を通すかのような精密さとタイミング、そしてなにより恐怖しない心、折れない心。

スバルは見事ソレを成し遂げ、ギンガの一撃必殺をかわした。

そして左拳をきつく握り

体の泳いだギンガ向けて突き出した。

「ディバイン！」

インパクトの瞬間、ギンガの体とスバルの拳の隙間に魔法が発生する。

「バスター！！」

スバルの一撃は、見事ギンガにヒットし、そしてギンガは意識を手放した。

スバルがギンガと対峙している同時刻、別の場所ではティアナは内心舌打ちしていた。

スバルと分断されたかと思ったら、突如空から砲撃を見舞われた。なんとか回避し逃げようと廃ビルに逃げ込めば、待ち構えていたように両腕に剣を持った別のナンバーズに攻撃され、更にはスバルにそっくりな赤毛のナンバーズまで入り込んできた。

終いには、廃ビルの周囲を結界で包囲され、逃げ場を失った。

つまり、まんまと誘い込まれたのだ。

ティアナは対戦闘機人のノウハウは他の者よりあったため、幻術魔

法のフェイクシルエットで撹乱したが、それも時間稼ぎにしかならない。

だが、その時間稼ぎが重要なのだ。

時間があるということは、考え、対策を練ることができる。

ティアナは状況把握から始めた。

廃ビルにいるナンバーズは、ウェンディ、ノーヴェ、ディードで、廃ビルに結界を張ったのはオットーである。

ノーヴェは落ち着いてはいるが、若干いらつきながらウロウロ徘徊してティアナを探す。

ウェンディとディードもキョロキョロと周囲を警戒しながらティアナを捜索していた。

ノーヴェは自分の苛立ちを制御しようとしているのだが、ダメだった。

ティアナの顔を見た途端、頭に血が上り抑え切れなくなるのだ。

そこで、ノーヴェは思い出す。

尊敬するべき人の事を。

体は熱く、心は氷のように、常に冷静に

ノーヴェは大きく深呼吸し、気持ちを落ち着かせる。

「やっぱ厄介っスねー、あのオレンジ頭」

ウェンディが軽口を叩きながら周囲を見渡す。

「彼女の幻影魔法は、私達戦闘機人の仕組みを理解した構築がなされていますね。ですが・・・ふむ、確かに『彼』の言う通り厄介ですね」

ディードも、フムフムと自分が口にした言葉にひとり納得し周囲を警戒する。

「廃ビルに誘い込んだのは失敗だったかもしれないっスね」

ウェンディは眉間に皺をよせ、呟く。

たしかに、廃ビルという閉鎖空間であれば、行動が制限される。しかし、廃ビルという特性をティアナがフル活用しているのが痛い。柱や各階などの立体的死角、つまり隠れる場所はいくらでもある。

「いっそ廃ビルごと壊すっスかねー？」

ウェンディが物騒な事を言う。

「それは最終手段で良いのでは？とりあえずは探索を続けましょう」

ディードがそう言い、単独でティアナを探そうとすると、ノーヴェ

がそれを手を挙げて止めた。
ディードとウェンディは訝しんだが、ノーヴェはそれを無視しぐるりと周囲を見渡した。

そして、ノーヴェは大きく息を吸い込み、叫ぶ。

「聞いているか！ティアナ・ランスター！！」

いきなり大声で叫ぶものだから、近くにいたウェンディとディードは耳を塞ぎ損ない、キーンと響く耳鳴りに顔をしかめた。

「あたしは近藤さんを尊敬している！！」

突然のノーヴェの告白に、二人は目を丸くした。

「そんな近藤さんが言っていた！ティアナ・ランスター！アンタが最も強く、相手にしたくないと！！」

「・・・おおっ、たしかにそんなこと言ってたっスねー」

ノーヴェの言葉に、ウェンディはポンと手を叩く。

「私もオットーから聞きましたよ。ティアナ・ランスター、『彼』が一番強いと称した人物」

ディードがウンウンと頷く。

遡ること数週間前

ノーヴェとオットーが、ウェンディの策略によって、近藤の元に赴き近藤に慣れるという特訓の時である。
ついでにセッテまで来たのは、今になればいい思い出である。

ノーヴェとオットーも近藤という男にすっかり慣れ、ノーヴェ等は近藤と組み手までしてしまった。

結果、ノーヴェは一撃も入れることなく近藤にのされてしまった。

その後、４人は近藤のエスコートで首都クラナガンを観光していたのだが、ふとノーヴェが近藤にこんな質問をした。

「近藤さんの所属する機動六課で一番誰が強いんだ？」

ノーヴェは、別に戦力分析をしようと思って口にした言葉ではなかったのだが、ウェンディはナイス！と心の中で褒めた。

近藤は顎に手を当て、首を捻った。

「・・・そうだな・・・今のところ、個人なら高町なのは隊長、フェイト・テスタロッサ・ハラオウン隊長、八神はやて隊長、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長・・・・・・チーム戦ならはやて隊長とヴォルケンリッターかな？」

予想通りの答えが出てきたので、ウェンディはやっぱりかとため息

をついた。

しかし、近藤の言葉を聞き逃さなかったオットーが近藤に聞く。

「今のところ？」

ウェンディはえっ？と顔を上げた。

「そう、今のところは、だね。うちの新人の４人はめざましい進歩をしているからね。スポンジが水を吸い込むようにどんどん吸収していく」

まったく恐ろしいよ、と近藤は肩を竦めおどけてみせた。

「そういえば、うちの新人にスバルってのがいてね、ノーヴェと格闘スタイルが似ているよ」

近藤がスバルと言った途端、ノーヴェは体を硬直させた。

ノーヴェは、内から湧き出る不快感と苛立ち、平静を装って近藤に質問した。

「・・・その、スバルってのとあたし・・・どっちが強い？」

近藤にそういいながら少し睨んでしまった事に、ノーヴェはしまったと内心焦ったが、近藤はなんとも思っていないようで、うーんと考え込んだ。

「格闘だけならノーヴェが上手だね」

「ホントか！」

ノーヴェはおもわずガッツポーズをした。

「でもスバルは近代ベルカを使うからね、それを取り入れたシューティングアーツも厄介だ。だから総合で見ればスバルじゃないかな？そういえば君達魔法使えるのかい？」

「使えるっスよー！でも内緒っス！」

近藤が疑問を口にすると、ウェンディが人差し指を口元に当てながらウインクし言った。

まったく、かわいいなあ、もう！

・・・とは思わなかった近藤だった。

そして、ノーヴェは近藤の言葉を反芻していた。

（スバルにはリボルバーナックルとマッハキャリバーがある。でもあたしも、あたしに相応しい武装をドクターが作ってくれている。多分ドクターのことだから、能力はほぼ同じと思っていいはずだ。その点でイーブンだとしても、基本性能はあたしのが上だ！なんたって近藤さんのお墨付きだからな！！）

ひとりブツブツ呟いていたかと思ったら、急にニヤニヤしだしたノーヴェに、近藤とウェンディは引いた。

「じゃあ、その中で一番強いもしくは強くなるのは誰？」

オットーがノーヴェを無視して近藤に質問した。

近藤は腕を組んで空を見上げた。

「・・・そうだあ・・・ティアナ・・・かな？」

「ティアナ？」

セッテが驚いたように目を見開いた。

たしかドゥーエが調べた戦力分析では、あのエリート集団である機動六課の中で最も平凡だと書かれていたはずである。

基本スペックも特筆するようなものではなかったと記憶しているセッテは、首を捻った。

「ティアナ・ランスター、まあ新人達のリーダーみたいな子だよ」

「そのティアナって子が一番強いの？」

オットーがさらに近藤に質問すると、近藤はフッと笑った。

「オットーが聞いている『強い』っていうのは、腕力や魔力のことかな？」

オットーはコクンと頷く。

「ティアナは体力や魔力的な事は普通だよ。まあ普通というのは新人達の中で、という意味だけどね」

じゃあ・・・と近藤に食いつこうとすると、近藤は指を頭に向けた。

「ティアナは頭の回転が半端じゃない」

瞬時に戦況を見極める眼力
最適な戦略を即座に練ることができる判断力
状況把握、戦力分析、先を読む眼力、全てが高レベルであると近藤は言った。

「冷静に、正確に状況、手段を見極める。己の力を過信することなく、とても冷静に、冷静に・・・」

近藤が重く語りだしたため、オットーとウェンディは息をのんだ。

「今なら俺もティアナに勝てるだろうけど、これから先まだまだ伸びる彼女を相手にするのは御免被りたいね」

「ティアナ・ランスター！あたしはアンタに勝つ！そして近藤さんを管理局なんていう牢獄から救い出してやる！！」

ノーヴェは高らかに宣言する。

ポカーンと成り行きを見ていたウェンディは、ハッと我に返り、ノーヴェの言葉を振り返りニヤニヤしだした。

「ノーヴェ～、そのセリフ、捕われのお姫様を助ける王子様のよう

っスね～！ぷぷぷー！」

「・・・彼がお姫様ですか？・・・嫌ですね、マッチョなお姫様・・・」

ディードもイメージを膨らませ、とんでもない事を言い出した。

「オメー等茶化すな！あたしは大まじめだ！！」

ノーヴェは二人に怒るが、ウェンディは未だニヤついた笑みをやめないし、ディードも若干頬がヒクついていた。

「あたし等は3人でアンタを相手にする。卑怯なんていうなよ。あたし等は油断しないし、手加減もしない！ここはルールがある競技場じゃないんだからな！」

ノーヴェの声は廃ビルに響き渡った。

それを柱の影に隠れて聞いていたティアナは、顔が真っ赤になっていた。

まさか近藤がそこまで自分を高評価してくれているとは思っていなかったのだ。

たしかに、初めて自分の武器は頭だと教えてくれたのは近藤であるし、日々常に考えて行動することを心掛けてはいる。

ティアナは自分の努力を人にひけらかすような事はしないから、日々の努力が実を結んだということだ。

（副隊長は・・・ちゃんと私を見てくれていたんだ・・・！そして、これからも強くなると言ってくれたんだ！）

自然と綻ぶ口元に、目が熱くなり涙が出そうになった。

手に持つ相棒、クロスミラージュをコツンと頭に付け、ティアナは瞑想する。

集中する

そして

ゆっくりと目を開ける

（あの人達の戦力、攻撃パターン、個々の性格は大体把握した。地形、気候、湿度、時間、遮蔽物も確認した）

クロスミラージュのグリップをきつく握る。

（プランも確立した）

――――必ず勝つ――――

ティアナの瞳に強い意志の炎が灯った。

「――見つけた」

ディードが小声で呟く。

ウェンディとノーヴェは、ディードを見ることなく、ティアナを探すフリをする。

「――4階、斜め55度、距離52メートルの柱から僅かに光が反射しています」

「――罠っスね」

「――ああ、不自然にいきなり見つかったからな。誘ってんな」

どうやらウェンディとノーヴェも気付いていたようで、それぞれ目線を合わせずボソボソと話し出した。
そして、冷静に分析する。

「彼女の事ですから、また幻影の可能性が高いですね。となると、本体は・・・」

「普通考えたら、下の階、もしくは狙撃ねらいで反対側・・・ってとこっスかね？」

ディードが全く違う所を見ながら予想し、そこにウェンディがさらに可能性を示唆する。

「流石同じ狙撃手の見解ってとこか。・・・で、どうする？」

ノーヴェが苛ついているような演技をし、近くの柱を蹴る。

「ノーヴェはどうしたいんスか？」

ウェンディが逆にノーヴェに聞く。

なんであたしに聞く？という顔をウェンディに向けると、ウェンディは柔らかな笑みで答えた。

「あたしらは姉妹っす。ノーヴェの気持ちは、あたしらがしたいことっスよ」

「つまり、罠にわざと乗り真正面からぶち当たる、ですね」

ディードが己が武器であるツインブレイズを振り下ろす。

ブオンと風を切る音と、砂塵が舞う。

「・・・おめーら・・・」

ノーヴェは驚きの声を上げる。

「ま、ただでさえ3対1っスし、そこにさらに不意打ちとか、カッコ悪いっスからねー」

「寝覚めが悪いですしね」

ウェンディは首をコキコキと鳴らし準備運動を、ディードはツインブレイズを中段に構える。

ノーヴェはフッと笑い拳を胸の前でバシンと叩く。

「・・・よし、じゃあ行くぜ！」

ノーヴェの小声での合図と同時に、ウェンディとディードはヒュッとその場から消えた。

まずは位置確認である。

ウェンディはティアナが居たと思われる位置の死角へ移動し、遮蔽物を無視してライディングボードを構える。

そして間髪いれず砲撃する。

途中廃ビルの柱が何本かあったが、そんなもの砂糖菓子のように無くなった。

そしてウェンディの砲撃はティアナの位置を貫いたが、しかしそれはやはり幻影だった。

すると、ウェンディの周囲にティアナの大群が現れた。

「・・・やっぱり」

ウェンディは目を細めて分析する。

「・・・だいたいわかったっス」

ウェンディはライディングボードを真上に構えた。

「あんたの幻影はもう解析済みっス！」

ウェンディは上を見ず砲撃した。
その砲撃は天井を貫いた。

ウェンディの頭上で粉塵が巻き起こるが、そんな中ウェンディはジッと空けた穴を見た。

「――――！ディード！ここから『おやつ』っス！」

ウェンディがそう叫ぶと、その側を風のように走り抜けるディード。

そしてディードはウェンディの位置から『3階』上のフロアに瞬時にたどり着いた。

「流石ウェンディ。性格はともかく、狙撃は一流ですね」

ディードが無表情でそういう目の前には、右足を怪我した膝をついているティアナがいた。

ウェンディがライディングボードに乗り下の階から上昇し、ノーヴェもエアライナーを使い走ってきた。

ティアナはすぐさま二丁のクロスミラージュをウェンディとディードに向ける。

しかし、その顔色は悪く、苦痛に歪んでいた。

「幻影を解析されてたのは予想外だったんスかね？」

ウェンディがティアナから目線を外すことなくライディングボードを構える。

「いえ、あの天井攻撃が予想外だったのでしょう」

ディードがツインブレイズを構え、腰を落とす。

「幻影解析はスゲーけど、あの天井攻撃はまぐれだろ」

ノーヴェがファイティングポーズを取り、ティアナを見据える。

これに対しウェンディは口を尖らせ怒った。

「失敬な！ちゃんとこいつの思考パターンを読んで、戦闘パターンを統計して、廃ビル内の地形を把握して狙ったっスよ！」

「・・・まじか」

「・・・ウェンディ、あなたそこまで頭がキレる人だったんですか

？」

ノーヴェとディードは信じられないといった表情をしていたが、ウェンディは鼻高々に大きな胸を張った。

「ふふん、能ある鷹は爪を隠すもんスよ！」

「・・・自分で言うな」

ノーヴェは呆れた。
しかしすぐに真面目な顔になり、ティアナを見た。

「さて、ティアナ・ランスター。チェックメイトだ」

ノーヴェはティアナにそう告げるが、その声には余裕など含まれてはいなかった。
あくまで油断なく、ティアナの一挙手一投足を見逃さないと見据える。

位置としてはティアナを中心にディード、ウェンディ、ノーヴェが三角形で囲む形になっている。
そしてティアナはウェンディディードに銃口を向け、三人もそれぞれが構えている膠着状態だ。

「・・・少なくても二人は仕留められるわ」

ティアナはノーヴェを睨み、気丈に言い放つ。

それに対しノーヴェはため息をついた。

「ティアナ・ランスター、それが近藤さんの教えてくれた戦い方か？」

ティアナはゆっくりと首を横に振る。

「玉砕覚悟なんてダメだって。必ず生きて帰ってこいって言われたわ」

じゃあ・・・とウェンディが質問しようとした。

「でも！」

そこへティアナが声を張り上げ遮った。

「あなた達の強い想いはわかった。だから私も覚悟を持って応えなきゃならない！」

ティアナはクロスミラージュのグリップをきつく握る。

廃ビルの割れた壁の隙間から木漏れ日が入り、ビル内の埃が反射し、ティアナを幻想的に見せる。

「私はあなた達の想いに勝つ」

その時、木漏れ日がティアナの持つクロスミラージュに反射し、光がウェンディの目に入り込んだ。

「・・・っ」

一瞬、そう一瞬ウェンディは光によってティアナを見失った。

（きた！！）

ティアナは即座に二丁のクロスミラージュのトリガーを弾き魔力弾をウェンディとディードに放ち、すぐに屈んでその場を移動した。

「！？ちっ！」

ウェンディは発射音で即座に反応し、体をライディングボードで隠した。

同時にディードも魔力弾を避け、そのままティアナに向かって走り込む。

だが、ディードはティアナにたどり着く事はなかった。

バチンッ！と大きな音がした、と同時にディードがまえのめりに倒れた。

ウェンディはそれを見て驚くが、その時自分への違和感を感じた。

ディードは魔力弾を避けた。

ちょっと待て

あたしはティアナの魔力弾を防いだか？

ライディングボードに手応えはあったか？

そう思ったとき、ウェンディはしまったと思った。
ウェンディは最初からティアナの射撃能力は警戒していた。
なのによりにもよってライディングボードでティアナが見えない状態になってしまった。

おのれの失策に気付くと同時に、左耳から風切り音が聞こえ、ウェンディのこめかみに魔力弾が直撃した。
ウェンディは脳震盪を起こし、そのまま倒れたのだった。

ノーヴェは自分の目が信じられなかった。
一瞬、本当に一瞬だ。
一瞬でウェンディとディードが倒れてしまった。
そしてその方法に驚愕した。
ノーヴェは全てを見てしまったのだ。

まずディードだ。
ディードはティアナの放った魔力弾を避けた。
そして移動したティアナを追い掛けるように突撃した。
すると、ティアナの放った魔力弾が廃ビルの柱に当たると、跳ね返り、ディードの後頭部に当たったのだ。

つまり、ティアナは壁の跳弾を利用し、更にはディードを誘導したのだ。

次にウェンディである。
ウェンディはライディングボードで魔力弾を防ごうとした。

つまり、ウェンディはティアナから見えなくなったのだ。
それは魔力弾も見えなくなったということ。
魔力弾は誘導弾で、ライディングボードに当たる寸前で方向を変え、孤を描くようにウェンディに直撃し、倒れたのだ。

ティアナはすぐさま二丁のクロスミラージュを残るノーヴェに向ける。

先程の攻撃は相当神経を使ったのだろう、ティアナはハアハアと息遣いを荒くしていた。

対してノーヴェは歓喜した。
うち震える体を抑えることなく、泡立つ肌に顔をしかめることなく、込み上げる笑みを止めることなく、叫ぶ。

「いい！いいぞティアナ・ランスター！あんたはまさしく最強だ！！」

まさかこんな方法で二人も一撃で倒すとは。

日の昇る時間、遮蔽物の位置、角度、相手の武器の特性、クセ、そ

れら全てを使ったのだ。

認めよう。

ティアナ・ランスターこそ最強だと。

「けど、あたしは止まらない。あんたをこの手で倒すまでな！！」

ノーヴェが足を広げ腰を落として構える。

「私も、負けるわけはいかない」

ティアナはクロスミラージュをダガーモードにして構える。

ノーヴェの足に装備されているジェットエッジのブレイクギアが回転する。

キィィィンと高音のうねりをあげ、ローラーブレード部分もギリギリと音をたてる。

溜めに溜めた力は、一気に爆発する。

「うりゃあああぁぁっっ！！」

ドキュンと弾丸が飛び出したかのような爆発音をあげ、ノーヴェはティアナに迫る。

そのスピードに乗りながらノーヴェはティアナに蹴りを繰り出す。

だが、ティアナはスウェーで避けた。

（これをスウェーバックで避けるか！）

ノーヴェは驚きつつも、笑みがこぼれる。

対して避けたティアナは、涼しい顔をしていたが、内心ヒヤヒヤものだった。

（あぶなっ！いきなり蹴りってなによ！？それにあのダッシュなんて反則じゃない！！）

ノーヴェはそんなティアナの心情など知る由もなく、ショットガンのように攻撃を繰り出す。

一撃一撃が必殺の破壊力であるから、さしずめガトリング砲か。

そんなガトリング砲を間近で繰り出されながらも、ティアナは避け、捌く。

（ひいいぃぃっ！？なんなのコイツ！掠っただけでも致命傷じゃない！！死ぬ！絶対死ぬ！そして寿命が現在進行形で削られていく！！）

無茶苦茶な攻撃を一撃も食らうことなく集中して捌くティアナの心は、とんでもなくテンパっていた。

そして繰り出す攻撃を尽く捌かれているノーヴェは、最初こそ笑みを浮かべる程余裕を持っていたのだが、段々と苛立ちをあらわにしだした。

（くそっ！なんで当たらない！？なんでだ！？）

ノーヴェの攻撃は苛立ちと共に単調になっていく。

普段のティアナならば、ノーヴェの攻撃は避けきることができなかっただろう。

しかしティアナの集中力と、前日近藤に施されたマッサージによって体調、魔力が充実しており、それら全てがティアナをより高みに押し上げているのだ。

そして、天はティアナに味方した。

ティアナがノーヴェの単調になった攻撃に気付いてしまったのだ。

パターンの読めた攻撃を避けるなど、ティアナにとって造作もない。

最初より余裕をもってノーヴェの攻撃をよけることができ、ティアナはノーヴェをジッと観察する。

（・・・なるほど、攻撃が当たらなくて頭に血が上り、単調になってるのね）

ならば、チャンスは・・・

「死ねえええぇぇっっ！！」

ついにノーヴェが大技を繰り出した。

右ハイキックに、さらにジェットエッジのブースト点火というまさしく一撃必殺技。

これこそティアナが待っていたものである。

（ココだ！）

ティアナは瞬時にクロスミラージュをリリースモードにし、ノーヴェの蹴りをダッキングで避けた。
そしてその態勢のままノーヴェに組み掛かる。

ちょうどノーヴェは、右ハイキックを繰り出した威力によって、ティアナに背中を向けていた。
そこへ、滑り込むようにティアナが侵入してくる。
ティアナはすぐに態勢を整え、ノーヴェの後ろから首に右腕を通し、左手でノーヴェの後頭部を押さえ、さらに左腕に右手を入れた。

つまりスリーパーホールドである。

首の頸動脈を圧迫し、脳への血流を止め、脳貧血に追い込み意識を刈る締め技だ。

皆さんは普段テレビなどでこの技を見たとき、技をかけられた方は苦しみながらタップをしたり暴れたりしている所を見る事が多いだろう。

だが、完璧にキマッたスリーパーホールドはそんな時間を与えない。

まさに一瞬で人は落ちる。

スリーパーホールドをかけられたノーヴェは訳がわからないだろう。
そもそもミッドチルダで一番競技人口の多いストライクアーツにさえ、関節技、締め技などないし、格闘技に対して未熟なこの世界で

はまずお目にかかれない。

つまり、ノーヴェにとってスリーパーホールドとは、未知の技なのだ。

ならば、何故ティアナがスリーパーホールドなど知っているのか？

答えは簡単

近藤が教えたのだ。

そしてノーヴェは頸動脈を圧迫され脳貧血に陥り、そのまま意識を手放した。

## 第８９話（前書き）

書く予定のなかった話その２です。
今回獣王の強さの一部が垣間見えると思います。
本当はエリオとキャロの話なんですけどね。

ではどうぞー。

# 第89話

「・・・何処だここ？」

近藤は呟く。

現在近藤はゆりかごから離れ、空中に浮いていた。

しかし近藤は困惑する。

今いる場所が、目指していた場所ではないのだ。

（座標計算を間違えたか？）

近藤は首を捻ったその時、遠くから巨大な咆哮が聞こえた。

それも二つ

近藤はキョロキョロとしていると、はたしてそれは見つかった。

近藤の位置から距離にして約5キロの場所で、巨大な黒い竜と巨大な白い生物が取っ組み合いをしていたのだ。

（・・・あの黒い方は、もしかしてヴォルテールか？）

以前キャロから聞いていた巨大な竜と特徴が一致したため、そう結

論付けたが、どうもヴォルテールの方が防戦一方で旗色が悪いようである。

（少し寄り道になるが、まあいいだろう）

近藤は直ぐさま飛び立った。

「ヴォルテール！！」

ビルの上で、キャロは泣き叫ぶ。

ルーテシアの召喚した白い生物『白天王』と自らが召喚したヴォルテールが戦いを始めた。

最初こそ優勢だったが、突如ルーテシアが狂ったように叫び、膨大な魔力を台風のように放出し始めた。

その影響を白天王も受けてしまい、暴走したように白天王はヴォルテールに攻撃を仕掛けた。

ルーテシアの錯乱に気付いたエリオが、ルーテシアを止めようとしたのだが、そこにルーテシアの使い魔であるガリューが止めに入ったのだ。

エリオはガリューとの戦闘で手一杯になり、ルーテシアに近付けない。

キャロも、ヴォルテールが白天王にボコボコにやられる様を見て冷静ではいられなかった。
負のスパイラルによって、キャロはヴォルテールを制御出来ないでいるのだ。

混乱するキャロを尻目に、ルーテシアは尚も己の膨大な魔力を台風のように撒き散らし、白天王とガリューをも暴走状態に追い込む。

そしてついにヴォルテールは白天王の攻撃に膝をついてしまった。

「ヴォルテール！？」

叫ぶキャロの声にも反応しないヴォルテールに、白天王は容赦なく拳を振り下ろした。

巨大な拳が、キャロの目の前を通過する。
嵐のように風を孕んだ拳は、ゴオッと音をたてヴォルテールに向かう。

「――――――つ！！」

助けて！

フェイトさん！！

助けて！

お父さん！！

そう心の中で叫び、キャロはおもわず目を閉じてしまった。

「落ち着け、キャロ」

「――――！？」

キャロは耳を疑った。

助けてと願った。

あの広い背中に、大きな手、少し顔は怖いけど、とても優しい私達の副隊長、そして――――

父と慕う人――――

「お父さん！？」

キャロは顔をあげ、まわりを見渡した。

しかし、近藤の姿は見えない。

そこで、キャロはヴォルテールの安否に気付いた。
おもわず目を閉じて逃げてしまったが、ヴォルテールはどうなったのか？
キャロはすぐにビルの屋上から体を乗り出し、ヴォルテールを見た。

ヴォルテールは無事だった。

しかしおかしい。

白天王が拳を振り抜いたまま、動こうとしないのだ。

キャロは段々と冷静になり、ヴォルテールの声が聞こえるようになった。
そして、その声を聞いて驚いた。

ヴォルテールが恐怖していたのだ。

守護竜として最高位に位置するヴォルテールが、怯えている。
一体、何に怯えているのか？
キャロはヴォルテールの目線の先を見た。
そこには、拳を振り下ろしたままの態勢で止まっている白天王がいるのだが、白天王も震え何か怯えているように見えた。

二体の巨大生物が怯える目線の先――――白天王の拳の前――――に、人らしきモノがいた。

キャロはそれを見て息をのんだ。

なんとその人らしきモノは、片手で難なく白天王の拳を受け止めていたのだ。

ヴォルテールをも吹き飛ばす一撃を秘めた拳を、人が止めるなど誰が想像できるだろうか。

キャロは目を凝らし、その人らしきモノを見た。

全身を黄色やオレンジ色の鎧で包み、頭には獅子の鬣（たてがみ）のように炎が揺らめいていた。

つまり、白天王の拳を受け止めたのは獣王の姿をした近藤だったのだ。

「・・・なに、あれ・・・」

キャロは呟く。

アレはなんだ、と。

キャロがいくら目を凝らしても、距離が遠いし顔を仮面で隠しているので近藤の顔までわからないので、誰だかわからない。

キャロが必死に人物の特定をしようとしていたその時、近藤が受け止めていた片手で白天王の拳を弾いた。

バチンと大きな音をたて、白天王の巨体がふらつく。

そこへ、間髪いれず近藤が白天王に近付き、白天王の顎を下から拳

でアッパーカットのように跳ね上げた。
ドゴンッと鈍い音が腹に響く。
それを見たキャロは目を丸くする。
なんと、近藤のその一撃で、跳ね上げられた白天王の巨体が地面から離れ浮いたのだ。
そして近藤は白天王の顔に回し蹴りを当て、ズドンッという地響きのよな音と共に、白天王はそびえ立つ廃ビルを薙ぎ倒しながら、後方数十メートル先に吹き飛んでしまった。
「・・・・・うそ・・・」
キャロは目を点にしてあんぐりと口を開けて見ていた。
夢でも見ているかのような出来事に、脳がついていかないのだ。
キャロがほうけていると、先程の出鱈目な攻撃をした黄色い人らしきモノが目の前に着地した。
「ひぃっ!?」
キャロはおもわず短い悲鳴をあげた。
しかし、その人らしきモノの声を聞き、更に驚愕する。
「大丈夫か、キャロ?」
「・・・っ!?・・・お、お父・・・さん?」

キャロはビクッと震えながらも、驚きのあまり口をパクパクと開けていた。
対して近藤は、首を捻りながら軽い口調で話す。

「ああ、そうだよ。・・・あっ、この姿でわからないのか？」

近藤は手を広げる。

ハッキリいって、鎧を纏った獣にしか見えないのだが、キャロは目の前に近藤がいるとわかると、緊張の糸が切れたのか、関を切ったように大粒の涙を流し出した。
キャロにとって精神的に相当きつかったのだろう。

「お父さん・・・お父さん・・・お父さん・・・！」

キャロは近藤にしがみつき泣きじゃくる。

近藤も本来なら泣き止むまでそのままの態勢でいるのだが、今はそんな悠長な事はしていられない。

近藤はキャロの肩を掴み、目線を合わせるためにしゃがんだ。

「キャロ、今は泣いてる時じゃない」

少しきつめに言った言葉に、キャロはビクッとする。

「キャロがしっかりしないとヴォルテールが十分な力を発揮できないんだろう？なら、今は泣くんじゃなくて、ヴォルテールを信じて

あげないとダメだ」

そう言われてキャロはハッとした。

そう、自分がしっかりしないからヴォルテールが十分な力を発揮出来ないんだ。

ヴォルテールはもっと強いんだ。

召喚した私がしっかりしないとダメじゃないか！

キャロは袖で涙をゴシゴシと拭い、顔を上げた。

目は赤く、まだ潤んでいるが、キャロの瞳は力強い意志が宿っていた。

それを見た近藤はニコリと笑い、キャロの頭を撫でた。

余談だが、この時キャロは近藤の手の平に肉球が付いている事を知り、とんでもない感触に気持ち良すぎて気絶しそうだったらしい。

近藤はゆっくりと周囲を見渡し、少し離れた場所でエリオとガリューがぶつかり合っている姿を発見した。

近藤はガリューに対し、少し強めに殺気を向けた。

すると、ガリューはピタリと動きを止め、エリオとの戦闘を止め、直ぐさま近藤の方へ跳んできた。

ガリューにはもうわけがわからなかった。

主人であるルーテシアが錯乱状態になり、自分への強制力も働きだした。

倒すべきは目の前の子供

全ての人間

殺せ

コロセ

ミンナコロシテシマエ

ガリューは自身に流れ込んでくるルーテシアの心の闇に嘆き、しかし強制力の働く主の命に従いエリオを殺すべく攻撃をしかけた。

しかし、エリオは若いながらも己の武器を巧みに扱い、ガリューの攻撃をかすりながらも避け、攻撃してくる。

ガリューに小さい子供をいたぶり殺す趣味はない。
そもそも無益な殺生をすることを嫌う温厚な性格なのだ。
だから手早くエリオを倒したかったのだが、ガリューとエリオの力が拮抗しているため、なかなか倒せないでいた。
それでもガリューの優位は変わらない。
いくら力が拮抗しているとはいえ、ガリューとエリオの間には決定的な差、『豊富な戦闘経験』がある。

エリオはガリューの攻撃によって切り傷が無数にでき、大量の血を流している。
体力も限界なのか、構える槍の切っ先が下を向く。

もう大人しく倒れてくれ

ガリューは心の中で願った。

その時、ガリューは感じ取った。

自分に向けられた明確な殺意

ガリューはバッと殺意を放つ者を見た。

濃密な死を漂わせる存在

圧倒的強者という存在

マズイ

アレは存在してはいけない

速やかに抹消しなければならない

ガリューは思うと同時に行動に移した。

アレは殺す

滅殺する

ガリューは近藤目掛けて攻撃を仕掛けた。

近藤は突撃してくるガリューを見据える。
エリオと対決していたときとは比べ物にならないスピードと明確な殺意で近藤に襲い掛かるガリュー。

そしてガリューは両腕から生えた刃を近藤の喉元向けて放つ。

近藤はそれを左の外側へと避けた。
そしてそのまま体を突っ込むようにまえのめりにし、ガリューの死角、即ち下から右手を出し、ガリューの頭を掴んだ。

「少し落ち着け」

近藤はそう言うと、前傾姿勢でガリューの頭を掴んだまま孤を描くように右腕を振り下ろした。

ドゴンッ！

ガリューは頭を捕まれたまま地面に受け身を取ることなくたたき付けられた。

ガリューの頭が床にめり込み、破片が飛び散る。

「エリオ！来い！」

いきなり現れた謎の人物に名前を呼ばれ、尚且つ手招きされて驚くエリオだったが、聞き覚えのある声に更に驚いた。

「えっ!?ま、まさか、お父さん・・・ですか!?」

エリオは信じられないといった顔でケガでふらふらになりながらも近藤に近付いた。

「いろいろ聞きたいだろうが、今は我慢してくれ。とりあえずあの紫の髪の女の子が何故ああなったか、教えてくれないか?」

近藤はエリオに止血作業と応急処置を施しながら、まず現状把握に努めた。

エリオが言うには、今日遭遇したときから少しおかしかったそうだ。なにやら目は虚ろで、わけのわからないことをブツブツ呟き、しまいには癇癪をおこしたように喚きちらしていたらしい。

すると、急に糸の切れた人形のように動かなくなったかと思うと、今のような魔力を撒き散らす状態になったらしい。
そしてその暴走の影響を受けて白天王とガリューもおかしくなったという。

近藤は左手で顎を撫でる。
右手はガリューを押さえ付けているため使えない。

しばらく考えて、近藤はハッと気がついた。

「洗脳が解けたのか」

おそらく時間的になのはがクアットロを砲撃した時と重なる。
つまり、それによってヴィヴィオの洗脳が解けたようにルーテシアの洗脳も解けたのだろう。
しかし、ルーテシアの洗脳はかなり前から施されており、更にヴィヴィオの時よりもより入念に、深く刷り込んでいたのだ。
そして洗脳が解けたことによって、脳に反動が来てしまい、錯乱、暴走状態になってしまったということだ。

そうとわかれば話は簡単である。

「おい、紫の子の黒い使い魔」

近藤は押さえ付けているガリューに話しかける。

「・・・お父さん、ルーテシアとガリューです」

エリオが少し呆れながら近藤に二人の名前を教える。
先程説明したときに名前を言ったハズだが、近藤は二人の名前を覚える気がないらしい。

近藤は、そうか、と短く言うと、再びガリューを見た。

「ガリュー、お前、あの子・・・ルーテシアを助けたいか？」

近藤に押さえ付けられていたガリューは僅かに震え、頷いた。

「よし、ならここでエリオと見ていろ」

近藤はそういうや、立ち上がりドカドカと無警戒にルーテシアの元

へ歩みよっていった。

近藤はルーテシアを近くで初めて見たが、第一印象は『小さい』だった。

ルーテシアは魔力を暴走させ、何人も近寄れないようにしていた。
頭を苦しそうに抱え、涙を流し悲鳴をあげ、小さく助けを求める。

「たすけて・・・おかあさん・・・たす・・・けて・・・」

近藤はルーテシアの声に顔を苦悶に歪め、尚も歩み寄る。

暴走した魔力は嵐のように吹き荒れ、近付く事ができない程危険な状況なのだが、近藤はそんなもの関係ないとばかりにヅカヅカと歩く。
むしろ、近藤が歩く場所へ暴走した魔力が集まり、さらに掃除機のように吸い込まれているように見えた。
そしてそうこうしていると、近藤はルーテシアの傍らにたどり着いた。

これだけ膨大な魔力を放出しているのにも関わらず、今なお魔力は枯渇する気配を見せないルーテシアに、近藤は感嘆のため息をつきつつ、しゃがみ、ルーテシアを優しく抱きしめた。

ルーテシアは抱きしめられ、ピクッと震え泣き叫ぶのを止めた。
その間も、ルーテシアの暴走した魔力は尽くが近藤の体にものすごい勢いで吸い込まれていく。

近藤は優しくルーテシアの頭を撫でてやり、声をかける。

「もう大丈夫だ。ゆっくりお休み」

すると、ルーテシアはふっと全身の力を抜き気絶してしまった。

近藤がルーテシアを抱きかかえエリオとガリューの元へ行く。

一部始終を見ていたエリオとガリューは目が点になっていた。

ルーテシアに近付く事さえできなかった事態だったのに、近藤はたやすく近付き、更にルーテシアを眠らせ暴走を止めたのだ。

これを驚かずしてどうするのか？

「ほれ、ガリュー」

近藤はそう言いルーテシアをガリューに引き渡した。

ガリューは表情こそ変わらなかったが、安らかに寝息をたてて寝ているルーテシアを見て、安堵したようだ。

「・・・一体何をしたんですか・・・？」

エリオが近藤に尋ねる。

どうしても近藤の取った行動が理解出来ないのだ。

そして、近藤は事もなげにこう言った。

「ルーテシアの魔力を食べた」

「え？」

「で、魔力が無くなってガス欠になったルーテシアは、疲労によって寝たってわけだ」

「え？え？」

エリオは頭に疑問符を浮かべるばかりで、全く理解できなかった。

「・・・あ！ここで時間潰してる余裕なかったんだった！エリオ、キャロ！俺もう行くから！後がんばれよ！」

焦りキョロキョロとし始めた近藤は、シュタッと手をあげた。
そして最後に、皆無理すんなよー！と言い残してその場から消えた。

「・・・・・・えぇ～・・・」

エリオが困惑の声をあげ、ガリューを見た。

「・・・」

ガリューは、俺を見るなと言いたそうな雰囲気を出していた。

結局、ガリューはルーテシアさえ助かればそれで良く、エリオと戦う意思はなかったので、そのままルーテシア共々確保となった。

そして、キャロは気を持ち直し、ヴォルテールの力をいかんなく発揮させ、最終的に白天王に打ち勝ったのだった。

# 第８９話（後書き）

なんか最後がグダグダになっていますが、あれ以上書く事はありません。
エリオは元々芯が強くて男前なんで、今回あまりかっこいいパワーアップみたいのはありませんでしたが、キャロは全編通して見ていてもなにやら本心では戦う事を恐怖して自分を卑下している節が見えました。
ですので、キャロには少し心を強くするキッカケを作りました。

ルーテシアとガリュー、白天王は申し訳ないですが、噛ませ犬になってもらいました。
この本編がひと段落したら活躍の場があるかもしれませんね。

ではまた次回でお会いしましょう。

# 第９０話（前書き）

今回の話は真面目な話です。

当事者達は本当に真面目に戦っているんです。

決してギャグではありません。

・・・でもギャグだと思われてもしかたない・・・かな？

# 第９０話

レジアスは地上本部で待っていた。

誰を？

それはかつての親友。

レジアスの不手際によって不幸が訪れた、無二の親友。

レジアスは机に肘をつき、無言で目線の先の扉を見つめ親友を待っている。

その隣では心配そうな顔をするレジアスの副官であり、娘のオーリスと、もうひとり、何かにビクビク怯えながら部屋の隅で佇んでいる女性局員がいた。

レジアスは特に焦っているでもなく、しかし怒っているでもなく、目の前の扉をただじっと無言で見つめていた。

そして、不意に扉はドガンという音と共に乱暴に開け放たれた。

突然の事にビクッとするオーリスと女性局員。

扉を蹴破り、立っていたのは一人の男。

壮年の男。

逞しい肉体に、信念の瞳を持つ男。

それは、かつて時空管理局に所属していた、ストライカー級と称されたレジアスの無二の親友。

ゼスト・グランガイツだった。

オーリスはかつての父の親友の乱入に驚く。

無理もない。

なぜなら、その男は8年前に死んでいるのだから。

「ゼスト・・・さん・・・」

絞りだしたのは、かすれる声。

ゼストはオーリスを一瞥すると、ツカツカと一直線にレジアスの元へ近寄った。

もうひとりいる女性局員は、ひいっと小さな悲鳴をあげて腰を抜かし、震えている。

レジアスとゼストは向き合い、お互い無言で見つめ合っていた。

部屋の中が重苦しい空気と静寂に支配される。
だが、その静寂をゼストが破った。
「・・・オーリスが副官か」
「ああ、昔から融通の効かん娘だが、有能だからな」
淡々と世間話ような会話をする二人。
しかし、ゼストはそんな世間話をしに来たわけではない。
懐から、二枚の写真を取り出し、机に放り投げた。
レジアスはその写真を見て顔を強張らせる。
写真には、以前ゼストが率いていた部隊の隊員が写っていた。
その中には、スバルとギンガの母、クイントと、ルーテシアの母メガーヌの若かりし日の写真もある。
だがゼストは気にすることなく追及する。
「俺が知りたいのはただ一つ、8年前の事件の真相だ」
8年前の事件――それはゼストが死ぬきっかけとなった事件。
彼の部隊が全滅した事件である。
ゼストはレジアスを睨み、無言のプレッシャーを与える。
それは、レジアスの隣にいるオーリスでさえ圧迫され息苦しくなるほどの濃密なプレッシャーだった。

レジアスは小さくため息をつき、机の引き出しからあるものを取り出し、それをゼストに投げつけた。

ゼストの胸板に当たったそれは、重力によって地面に落ちようとしていたが、それをゼストは手で受け止め確かめる。
そして、それを見たゼストは少し驚き、レジアスを見た。
ゼストが受け止めたもの、それはオープンフィンガーグローブだった。

「ゼストよ、儂達はいつもぶつかっていたな」

レジアスは昔を懐かしむように言いながら、自らもグローブを着ける。

ゼストはそんなレジアスを見て、小さく笑い、自分もグローブを着けはじめた。

「ふっ、お前がわがままなのがダメなんだ」

軽口を叩くゼスト。
対してレジアスは、装着したグローブの握りを確かめるように手を開けたり握ったりし、口を歪め笑った。

「何を言う。儂の正論に反発するお前が悪いのだ」

「お前のは正論ではない。暴論だ」

ゼストもグローブの握りを確かめながら、舌戦を応酬する。

「聞き分けが無いのは変わらんな！」

声を荒げ、レジアスは椅子から立ち上がる。

「貴様の思考も変わっていないようだ！」

ゼストは拳をきつく握る。

レジアスは鼻から大きく息を吐きそれに応える。

「儂から答えを欲するならば、わかっているだろう！！」

お互い拳を胸の前でガチンとぶつけ

「ならば！」

お互いファイティングポーズをとり

「拳で決するのみ！！」

お互いの拳が相手に届く、射程圏内まで移動し

レジアス、ゼストが同時に右拳を抜き放つ。

拳は相互間でクロスを描き、お互いを襲った。

シグナムはゼストを追うため地上本部の廊下を疾駆していた。目指すはレジアス中将の部屋。

もうすぐでレジアスの部屋にたどり着く。
そう思ったとき、小さな少女が防壁を張り、行く手を塞いでいた。
彼女は古代ベルカのオリジナル融合騎、アギトである。
アギトはその小さな体を目一杯広げ、何人も通すまいと必死だった。
「ここから先はいかせねー！」
悲痛なる叫びがシグナムの足を止める。
「旦那は・・・旦那は・・・ただ昔の友達と話をしたいだけなんだ！！」
あふれる涙を拭うことなく、叫び続ける。
「旦那の邪魔をすんじゃねー！！」
アギトの叫びは、しかしシグナムの一閃によって防壁ごと砕かれた。
アギトに絶望の色が張り付く。
だが、シグナムは防壁を砕くと己のデバイス、レヴァンテインを鞘に戻した。
「元よりそのつもりだ」
シグナムの澄んだ声にアギトはビクッと震える。
「我々は彼に話を聞きに来たのだからな」
フッと微笑むシグナムに、アギトは見惚れていた。

シグナムはアギトの妨害によるロスを取り戻そうとレジアスの元へ急いだ。
そして、レジアスの部屋に差し掛かろうとしたとき、ドタンと大きな音がレジアスの部屋から聞こえた。

ゾワッと嫌な予感がしたアギトは、脇目もふらず扉が壊れたレジアスの部屋へ入った。

「旦那ー!?大丈・・・夫・・・う?」

アギトはゼストの安否を確認しようとし、部屋の中を見渡すと、段々声が小さくなり、戸惑いの声に変わっていった。

遅れて部屋に入ったシグナムとリインフォースツヴァイもレジアスの安否、ゼストの状態、部屋内の状況を確認し、戸惑いの声を上げた。

「・・・何をやってるんだ?」

シグナムが戸惑いを隠さずに発した言葉、それは、倒れながらも立ち上がろうとするレジアス、そのレジアスに「立て!立ってお父さん!!」と応援するオーリス、そして顔をボコボコに腫らしている立っているゼストに向けてだった。

「・・・ふっ、やはり年だな」

ゼストは勝ち誇ったように言うが、顔は腫れ上がり、片目は塞がり、肩で息をしている状況である。

変わってレジアスも、膝がプルプル震えながらもファイティングポーズをとった。
顔をあげたレジアスは、ゼスト同様顔をボコボコに腫らしゼーゼー肩で息をしていた。

「・・・ふん！貴様の拳など蚊ほどにも効かんわ！！」

レジアスはおぼつかないあしどりでゼストに向かい、右拳を振り上げた。

「足がフラフラだろうが！！」

ゼストは飛んでくるレジアスの右拳を左に避け、その体勢をさらに沈め、レジアスのがら空きの腹に向け左拳をザクンと突き刺す。
いわゆるレバーブローである。

レジアスはレバーブローによる痛みに顔を歪め膝を落とすが、勝ち誇ったような顔をしたゼストを見て闘志を燃やし、震え崩れる膝を強引に止め、飛び上がるように左拳を下から突き上げ、ゼストの顎を体重ごとふりぬいた。
ドゴンと大きな音と共に、ゼストの顎と体が跳ね上がった。

これがカエル跳びアッパーである。

不意の下からの重い一撃に、口の中が切れ、血が飛び散る。
レジアスの強烈なブローによって意識が跳び、たたらをふんだゼス

トは、そのまま仰向けに倒れるところだった。
だが、悲痛な叫び声によって飛んでいた意識は一瞬にして引き戻される。

「旦那ー！」

それはアギトの叫びだった。
ゼストは倒れそうな体を強引に止めた。
のけ反る体を、無理矢理鍛え上げた腹筋で耐え、元に戻る。
顎の攻撃により脳が揺さぶられ、平行感覚を失ったゼストは、目の前がぐにゃぐにゃに歪む光景と、激しい頭痛に顔を歪めた。

「旦那！がんばれ！！あんなオッサンに負けるな！！」

アギトの声援がゼストに沸き上がる力を与える。
ゼストは右手を上げ、アギトの声援に応えた。
それを見たアギトも悲痛な表情から歓喜の表情に変わる。

「旦那ー！旦那にはあたしがついてる！ルールーもついてる！だから、がんばれ！！」

アギトの声援、支えが、ゼストを押す。

ゼストは大きく息を吸い込み、足を大きく広げ、叫んだ。

「おおおおおおおおおおっっ！！」

ゼストの咆哮が、部屋の空気を震わせる。
気迫が押し寄せ、レジアス以外の人間は体を強張らせる。
シグナムでさえ、ゼストの覇気に圧倒された。
ゼストの咆哮が止むと、ゼストはレジアスを見た。
そして、お互い見つめ合いどちらともなくニヤリと笑う。
そして宣言する。
「ゼスト！貴様には負けん！！」
「レジアス！俺はお前に勝つ！！」
同時に二人の拳は吸い込まれるようにお互いの顔面を襲う。
二人の男の拳には、熱き魂が宿っていた。
状況がよくわかっていないリインフォースⅡは、近くで口をポカーンと開け目を点にして佇んでいた女性局員を見つけ、声をかけた。
「あのー、そこの方？」

「ひ、ひゃい！？」

突然の呼び掛けに驚いた女性局員は、変な声で返事した。

「これは一体どういう事ですか？」

リインはコレと言い、レジアスとゼストが殴り合っている方を指差した。

それで理解した女性局員は、ため息をつきながら、疲れたように話し出した。

「・・・あのゼストという方がいきなり乱入してきたかと思ったら、レジアス・ゲイズ中将があの指の空いたグローブを投げつけまして・・・それからずっと・・・」

「あんな感じですか・・・」

「はい・・・」

疲れた女性局員の心情を理解したリインは呆れた表情を向けた。

「・・・暑苦しいですぅ・・・」

「・・・ですね」

リインと女性局員は同時にため息をついた。

「旦那！ガードしろガード！そんで腹狙え腹！！」

「お父さん！もっと首振って！顎守って！」

セコンドとなったアギトとオーリスは、それぞれ指示を出しながらヒートアップ。

「年だなレジアス！もうスタミナ切れか！！」

「貴様こそ鍛練をサボっていただろう！腰が入ってないぞ！！」

レジアスとゼストも、お互い肩で息をしながらも、罵倒しながら殴り合い続けている。

そしてもうひとり、手に汗握り二人の戦いを観戦している人物が。

「うおおおおっ！！熱き漢の拳で語る姿は美しい！！」

それはシグナムだった。

彼女は興奮していた。鼻息を荒くし、目を輝かせながら拳を振り上げ、レジアスとゼストの死闘を観戦していた。

「もう当初の目的忘れてるです・・・」

仲裁する気配のないシグナムを見たリインは、ぽつりとそう呟き、この空間をどう治めたものか一人悩んでいた。

レジアスとゼストの泥臭い戦いは、ついに決着を迎えた。

一人が大の字に倒れ、一人が勝利を確信し拳を天に突き上げる。

「俺の・・・勝ちだ!!」

勝ち名乗りをあげたのはゼストだった。

ゼストの後ろではアギトが喜びの花火を打ち上げ飛び回る。

対してレジアスは、意識は手放していないにしても身動きはとれないようで、ぜーぜーと息をするのみであった。

オーリスはレジアスの容態を気にしつつも、安堵した。

顔はボコボコに腫れているが、最近はめっきり見ることがなかった、スッキリとした顔だったからだ。

「ふん・・・貴様も儂と同じように年老いていれば、立っていたのは儂だった」

「負け惜しみか?」

「馬鹿をいえ!結果は結果、納得しとるよ」

ゼストが手を差し出し、レジアスがガッシリと掴み立ち上がる。

二人は顔がボコボコで原形を留めないほど腫れ上がっていたが、それでも笑顔だった。

オーリスは一応の終わりを見てホッとため息をついた。
殴り合いが始まって、最初はどうなることかと思ったが、終わってみればスポーツマンのような後腐れない爽やかさ。
興奮して思わずセコンドのようなこともしてしまったが、これはこれでひとつの解決方法なのだと思った。

だが、レジアスはまだ答えていない。

ゼストの知りたがっている真相を。

シグナムは久々に見る熱い戦いに感涙していた。
というか、レジアスがここまでやる男だと思ってみなかった。

シグナムなレジアスに対するイメージを改め、尊敬の眼差しで見つめていた。

リインも、暑苦しい戦いが終わりホッとしていた。

――そう、今この場の全員が周囲への警戒を解いていたのだ。

――だから、忍び寄る影に気付かなかったのだ。

（・・・さて、もうこの男も用済みね。要らないことを口走らない内に始末しないと）

影はレジアスの背後に回り込む。

レジアスの隣に立つオーリスは気付かない。

正面にたっているゼストも気付かない。

シグナム、リインからは死角になっていて確認できない。

絶好のポイント

絶好のチャンス

忍び寄る影は、指から不自然に伸びる長く鋭い爪を構えた。

（さようなら、レジアス中将）

心の中で別れを告げ、影はレジアスの背中を切り裂いた。

「・・・ん？ぐっ！？」

いままで笑顔だったレジアスの顔が一瞬驚きの表情になったかと思うと、それもすぐに一変し、苦悶の表情になる。

顔色も一気に青くなり、口をパクパクと開けていた。

異変に気付いたのはゼストだ。

レジアスの様子がおかしい。

なんだ？

レジアスの背後に見知らぬ女性局員がいる。
その女性局員も驚きの表情をしている。

すると、レジアスは力無く崩れ、倒れた。
背中には切り裂かれた傷があった。

「父さん！？」

オーリスが倒れるレジアスに駆け寄る。
突然の事態に、シグナムとリインもレジアスに駆け寄った。
そして、どうしてレジアスの背中に切り傷があるのか、わかってしまった。

レジアスの背後に立っていた女性局員の手は、爪のような武器が装備されており、爪の先から血が滴り落ちていた。

ゼストは即座に理解する。

この女がレジアスを背後から切り付けたのだ。

ゼストは直ぐさま放り投げていた自分のデバイスを拾いあげその女性局員に攻撃しようとした。

だが、どうも女性局員の様子がおかしい。

手を前に差し出したまま動こうとしない。

しかも、さらにおかしいのはその表情である。
自分で切り裂いておきながら、何故そんなに驚いた表情をしているのか。
そして、女性局員はどこを見ている？
自分の腕を見て驚いているのだ。
ゼストは女性局員の腕を見た。
そして、ゼストも驚く。
女性局員の腕が、獣のような腕に掴まれているのだ。
その獣のような腕の力が相当強いのだろう、女性局員はピクリとも動けない。
「・・・うっ・・・つぅ・・・」
ゼストはうめき声のような声を聞いて、その聞き慣れた声の主を見た。
レジアスがのそりと体を起こしたのだ。
「父さん！？大丈夫なの！？」

オーリスが泣きそうな顔で起き上がるレジアスの肩を掴み補助する。

「つっ・・・ああ、そう深くは斬られていない。・・・フン、まさか命まで助けられるとはな」

レジアスは背中を気にしつつ、背後で固まっている女性局員に向けて声をかけた。

すると、女性局員の腕を掴んでいた獣のような腕は、徐々に腕から先の姿を現した。

現れた姿は、一言で言うとライオン。

だが決定的に違うのは、それが人間であるということ。

猛禽類のような仮面に鬣（たてがみ）のような燃え盛る炎、猛獣の太い前足を彷彿とさせる鎧は黄色とオレンジ色で統一され、それがさらに獅子の毛並みを思わせる。

そして野生動物を思わせるしなやかさを持ったボディスーツ。

まさに獣である。

「すいません、遅くなりました」

オーリスは、その得体の知れぬ者から聞き覚えのある声がし、目を丸くした。

「・・・ま、まさか・・・近藤・・・さん？」

「はい」

「・・・・・・えええぇぇぇっ！？」

あっさり答える近藤。
そして驚くオーリス、シグナム、リイン、女性局員。

ゼストは近藤を知らず、眉をひそめている。
しかしアギトは違った。

近藤のその姿を見た途端、ガタガタと震え出したのだ。

「あ・・・ま・・・まさか・・・なん・・・で・・・」

そう呟くや、アギトはゼストの服を掴み、飛んで逃げようとした。

「逃げるんだ旦那！！あいつ、『獣王』だ！！」

「獣王？」

ゼストはどこかで聞いた名前だなと悠長に思っていたが、アギトは必死にゼストの服を掴んで逃げようとしている。

「獣の王だよ！こいつ一人でベルカの王は軒並み殺されたんだ！！最強最悪の王だよ！！くそー、なんで今の時代にいるんだよー！！」

泣きそうな顔でアギトは近藤を睨む。
ガタガタと震えながら、なんとしてもゼストを逃がそうと必死であ

る。

近藤はそんなアギトの姿に思わず口元を緩めてしまい、笑った。
それで、アギトは馬鹿にされたと思い近藤に向き直り今度は怒りだした。

「なんだテメー！じゅ、獣王だからって、ば、ばばバカにしゅんにゃよ！！」

アギトは虚勢を張るようにファイティングポーズをとり、バンチを出すフリをする。
ガタガタ震え、涙目で、噛み噛みだが。

「心配しなくていいよ、炎の融合騎。獣王のプログラムは修正した。もう無差別に襲わないさ」

「そ、そんなこと信じられるわけ・・・ん？獣王って喋れたっけ？」

アギトは近藤の言うことが信じられず睨んでいたが、自分の知る獣王と照らし合わせイロイロ違うことを感じた。

アギトは古代ベルカの時代、正式に稼動してはいない。
ずっと眠りについていたのだ。
しかし、知識はある。
生み出されたとき、ベルカに関する知識を詰め込まれていたのだ。
そしてそんな記憶の中、アギトの知る獣王とは、魔力を主食としリンカーコアを持つ者を無差別に食い殺し、貪り尽くす姿はまさに野獣のような存在だった。

ちなみに、シグナムは獣王という存在を知らなかった。

彼女達ヴォルケンリッターが稼動していた時代と、獣王がいた時代が合わなかったということもあるし、記憶として闇の書（夜天の書）にも記録していなかったためである。

名だたる王が獣王を止めようとしたが、ほとんどが獣王の餌食になってしまった。
そして時の聖王が残る王をかき集め、総力戦を行い、なんとか封印したのである。

その封印した『獣王の牙』は、聖王が厳重に管理し隠し、その隠し場所を知るものは歴代の聖王のみとなったのである。

アギトは記憶の中の獣王の人物像を掘り返した。

まず本能のまま行動する。
腹が減れば騎士を食う。
眠くなればどこでも寝る。

喋る姿を見たという記録はない。

アギトは近藤を見た。
何故こいつは獣王に侵食されながらも自我を保っている？
何故言葉を話す？

まさか偽物か？

いや、押さえ込まれてはいるがこの独特の雰囲気はまさしく記憶の中にある獣王そのものである。

本当にプログラムを修正したのか？
そんなに簡単に修正できるハズがない。

それならば、何故古代ベルカ時代にそれができなかったのか。

「プログラムの修正は、侵食された媒体がしなければならない。外部からのアクセスは一切受け付けないからな。プログラム修正自体は簡単だが、獣王に精神汚染されても媒体が自我を保てれば可能だ」

なるほど、とアギトは頷いた。
ようするに、この近藤という男は、獣王に侵食されながらも精神汚染に耐え、プログラム修正を行ったということである。

・・・そんな解決策聞いたことない。

「アンタ・・・無茶苦茶だな・・・」

アギトは呆れ顔で近藤を見る。

「最近よく言われるよ」

近藤もおどけるように肩を竦めた。

そんな会話をしているときも、近藤はずっと女性局員の腕を掴んでいた。

そして近藤は女性局員を見てこう言った。

「さて、そろそろ正体を明かしたらどうですか、ドゥーエ二尉？」

「えっ！？」

近藤の発言に驚く一同。

女性局員はフッと自虐的に笑うと、顔の形、髪の色が変わった。

おっとりとしていた顔つきは、妖艶な鋭さをもつ美貌へ、ピンクの髪もブロンドへと変わる。

これがドゥーエのＩＳ「ライアーズマスク」である。

「流石ね、いつから私が変装していたと？」

未だ近藤に腕を掴まれ、崖っぷちでいながらも余裕の表情のドゥーエ。

「まあ、誰かがレジアス中将を狙うのは予測できましたし、隠密行動ができるような冷静さ、したたかさを持つ人物となれば必然候補は絞られます。それで、カマをかけてみました」

近藤が冗談ぽく話すと、ドゥーエは驚いた顔をした。

「カマをかけられて、まんまと引っ掛かったと？・・・ふふ、私もヤキがまわったわね」

ドゥーエは肩を竦め笑った。

「・・・で？近藤さんは私をどうするの？凶悪犯罪者の配下である私を捕まえる？それとも、ここで殺すかしら？」

物騒な事を言うドゥーエに、オーリスはギョッとしたが、近藤は掴んでいたドゥーエの腕を離した。

「・・・どういうことかしら？」

ドゥーエは怪訝な表情を近藤に向けた。
ここで自分を自由にするなど愚の骨頂ではないか。
だが、近藤はすぐドゥーエの腰に手を回し、グイッと自分に近付ける、もう片方の手で顎を持ち上げた。

近藤とドゥーエの顔が近付き、お互いの息がかかりそうなほど接近した。
ドゥーエは思わず息をのむ。
みるみる顔が熱くなるのを感じ、ドキドキと鼓動を早める。

そして、近藤はこう言った。

「ドゥーエ、俺のモノになれ」

いきなりこんな事を言うものだから、レジアスやゼスト、アギトにシグナム、リインはポカーンとしていた。

オーリスはショックを受けたような、とても人に見せられないような顔をし、声も出せず口をパクパク開けていた。

だが当の本人であるドゥーエはそんな呆けている場合ではない。

近藤の、この一言で稲妻が駆け抜けたように身体が痺れた。

もう思考能力など麻痺してしまっている。

ああ・・・私、近藤さんに命令されてる・・・私を欲しいと言っている・・・俺のモノになれと言っている！

もうドゥーエの答えはひとつしかない。

「は・・・はい・・・」

ドゥーエはポワポワと身体が浮遊するかのような感覚で顔をポーッと赤くし、二つ返事だった。

腰砕け状態になり、ドゥーエは近藤にしなだれかかるように寄り添った。

なんとドゥーエはあっさりスカリエッティを切り捨て、近藤に付き従うことを選んだ。

まあ、ドゥーエ自身、以前からスカリエッティに対して盲目的に従おうという気がサラサラなかったということも大きいだろう。

もともとドゥーエは、スカリエッティと近藤を天秤にかけるような

状況になったら近藤を取る腹積もりだった。
それほどドゥーエの中で近藤を占める割合が大きくなっていたのだ。
だから、ここでの近藤のこの「俺のものになれ」発言はまさに天啓、
ドゥーエの求めていた言葉といっても過言ではない。

「じゃあとりあえず、最高評議会のいた部屋へ案内しろ」

近藤はドゥーエが了承するや、早速命令を下した。
そしてドゥーエは嬉々としその命令に従う。
もうドゥーエの頭の中はピンク色に染まりきっている。

「はい！」

ビシッと敬礼し、直ぐさま部屋へ案内する準備を始めた。

「さて、では皆さん行きましょうか」

近藤がそう促し、部屋にいた全員をついて来るよう促した。
レジアスやゼスト、アギトは近藤の意図がわからないも、とりあえず従う事にした。
オーリスは近藤がドゥーエに言った事が相当ショックだったようで、
落ち込みトボトボ歩き、それを見兼ねたレジアスとゼストが励ましていた。

「落ち込むな、オーリス。チャンスはまだある」

「・・・まあ、気を落とすな・・・」

アギトも、落ち込んでいる理由はわからないが、とにかく気の毒だと思ったのか小さな花火を上げてオーリスを励ました。

「ネーちゃん元気出せよ！きっといいことあるって！！」

そんな無邪気な励ましがオーリスにとって苦しい・・・

オーリスはますます落ち込んだ。

そして、さっさとドゥーエについて行こうとした近藤を、シグナムとリインが呼び止める。

「テスタロッサというものがいながら、何を言ってるんだ、お前は」

シグナムが近藤を諫める。

横でリインも、そうですぅ！とか言いながらウンウン頷いている。

「どうやらまだ獣王の影響を受けているようで、若干気分が高揚しているようですね」

どうやら獣王になっていることで、近藤自身の気分が高揚し、言葉も乱暴になっているようである。

近藤の手によって獣王の暴走プログラムは修正されたが、まだ気分が高揚する程度の弊害は残っていたようだ。

近藤はそう言いながらも、諫められる理由がわかっていない。

だから、首を傾げながらこう言った。

「しかし、有能な人材は多すぎてダメということはないでしょう？

彼女にはこれから仕事の補佐をしてもらおうと思って言ったんですけど・・・やっぱ段階踏まないとダメですかね？」

それを聞いたシグナムとリインは呆れた。
ようするに、近藤はドゥーエを仕事の補佐として登用するから、自分に降れと言ったのだ。

「・・・おまえ、あの言い方ならドゥーエも勘違いするぞ」

シグナムは当然の忠告をした。
だが近藤はわかっていない、というか事の重要性を理解していなかった。

「はっはっは、ドゥーエは聡明な女性です。ちゃんと言葉の意味を理解してますよ」

「・・・だといいがな・・・」

「・・・ですぅ」

笑って楽観視する近藤だったが、シグナムとリインはドゥーエを見て心配になった。

ああ、私、近藤さんのモノになったのね！
これはもう直ちに体を捧げるしかないわ！
そして彼の所有物であるという証を貰わなければ！！

そんな事をぶつぶつ呟くドゥーエは、新しいおもちゃを買ってもら

った子供のように、本当に嬉しそうだった。

## 第９１話（前書き）

さて、超展開が再開します。
超展開設定ですね。

ではどうぞー。

# 第９１話

近藤とシグナム、リインレジアス、オーリス、ゼスト、アギトは前を歩くドゥーエに付いていく。

ドゥーエの目的地は最高評議会の部屋である。

「地上本部に最高評議会の部屋など無いはずだ。とすればここから移動するのか？」

シグナムが横で歩く近藤に問う。

「いや、そもそもあの女が何故最高評議会の部屋を知っている？」

レジアスは首を傾げる。

その際に背中の傷が突っ張ったのか少し顔をしかめた。

レジアスの背中の傷は比較的浅く、血もそれほど流れなかったのだが、それでも一般人からすれば重傷なのは間違いない傷なのだが、平然とした顔で歩くレジアスの胆力は流石というところだろう。

近藤は、後ろに付いて歩くレジアスを見てその疑問に答えた。

「ああ、スカリエッティ一味の誰かが管理局に潜入しているのは予想できていましたし、最高評議会がスカリエッティと繋がりがあったというのも裏が取れてます」

レジアスは近藤の言うことに頷く。

そもそもレジアスとスカリエッティの関係のきっかけは最高評議会だったのだ。
そこで、ああ、と声をあげ納得した。
スカリエッティと最高評議会の間の連絡役か、それに近い者が最高評議会の周囲に居て、その人物はスカリエッティが用意した戦闘機人、又は人造魔導士だったのだろう。
そして、その人物というのが・・・
「あの女、というわけか。・・・儂も気付かんかったぞ・・・」
レジアスは感心の声をあげ、ため息をつく。
何も知らずに、皮肉にもドゥーエを秘書にしていた自分に呆れたのだろう。
落ち込むレジアスを慰めようとするオーリスに、その彼女の肩に座るアギト。
どうやらアギトはオーリスの人とナリが気に入ったようである。
「しかし、驚いたぞ。いきなり部屋の入口に妙な恰好をした貴様が現れたんだからな」
レジアスは話題を変えるように近藤をジロジロ見ながら言う。
レジアスがドゥーエに刺される前、入口付近を見て変な声をあげたのは、獣王の姿の近藤が突然現れたためだったのだ。
「いや、空間移動でゆりかごからコッチに来たんですが、どうも座標を間違えたようで。本当ならば部屋の中に来るはずだったんです

けどねぇ」

顎を撫でながら言う近藤は、その位置誤差に察しがついていた。

獣王の力である。

未だ体に馴染みきっていないこの力のせいで、移動の精度が下がっているのだ。

それにこの気分の高揚だ。

抑えてはいるが、はっきりいってハイテンションである。

こんな場でなかったら跳びはねたり、大声で歌っているほど高ぶっているのだ。

だから、ついドゥーエにもあんな乱暴な言葉を吐いてしまった。

あとで謝っておこう。

そして皆に獣王についての説明と、その力を覚醒させた経緯を説明するとシグナムとリイン、ドゥーエ、オーリスに怒られた。

もっと自分を大切にしろ！！

と。

レジアスとゼストは呆れていたが。

そうこうしていると、ドゥーエはエレベータに乗り込み、下の階へのボタンを押す。

地下2階まで進み止まると、ドゥーエは各階のボタンの下に取り付けられた鍵穴に鍵を差し込み、壁からカードリーダが現れた。
そして、そこに黒く塗り潰されたカードを通した。

すると、エレベータはさらに地下へと降下していく。

「こんなものが地上本部にあったとは・・・」

レジアスも感嘆の声をあげる。
元管理局員であるゼストも驚き、オーリスでさえ、目を丸くして知らない地下へ進むエレベータの中をキョロキョロ見渡していた。

シグナムとリインも驚いていたが、近藤を見て違和感を覚えた。

レジアスやオーリスでさえ驚く事実を目の前にして、近藤は驚くそぶりを見せないのだ。

「近藤、貴様この事実を知っていたな?」

シグナムは目を鋭く光らせ近藤を睨む。

「地上本部の地下になんらかの施設があるのは知っていました。ですが、なんの用途で使われているのかはわかりませんでしたよ」

対して近藤は肩を竦め、おどけるように言った。

「当然よ。あそこは一切のネットワークを管理局のソレ等と隔離して『別の国』として存在していたから。まあ侵入出来たとしても、ダミーに引っ掛かるけどね」

「なるほど、それは盲点だった。管理局の中で独立したシステムを有するか。なかなかどうして、考えてるな。道理でいくら侵入を試みても、ただの娯楽施設としか答えが出ないわけだ」

ドゥーエの答えにフムフムと納得する近藤。

実は近藤も様々な手段を講じていたのだが、よほど最高評議会を守るセキュリティが精巧だったのだろう、結果『娯楽施設』以上の成果は得られなかったのだった。

普通そんな地下に隠された娯楽施設などありえないのだが。

だが、もはや驚くまいと醒めた目で見ていたシグナムとリインを余所に、それを聞いたレジアスとオーリスはまた驚く。

仮にもあまたの次元世界を統括する時空管理局の、それも象徴とも呼べる地上本部の管理システムはそうそう簡単にハッキング出来るようなヤワなプロテクトは用意していない。

それをなんと軽い口調で簡単にハッキングしたかのような口ぶり。

「・・・あまりの破天荒さに、儂には手に余る男だな」

呆れ口調のレジアスにオーリスは苦笑し、シグナムとリインはウンウンと頷き同意していた。

エレベータはずっと下へ進み続け、未だ到着する気配をみせない。
エレベータ室内に重苦しい沈黙が充満する。

「近藤・・・とか言ったな？」

そんなとき、おもむろにゼストが近藤に声をかける。

「俺も連れて来たということは、その最高評議会の部屋に『真実』があるということなんだな？」

ゼストは近藤を睨み、エレベータの壁にもたれ掛かる。

重苦しい空気が、ゼストの発する気迫によってさらに重くなる。

あまりこういう戦士の出す戦いの覇気に免疫のないオーリスは、顔を青くしていた。

「真実・・・真実というより、原因がいますね」

近藤がそういうと、ゼストは僅かに眉を動かしレジアスを見た。
すると、レジアスは沈痛な顔で頷いた。

「・・・最高評議会が・・・俺の部隊を壊滅させた、と？」

「・・・儂の管轄だった研究施設は、最高評議会が大きく関与していてな・・・どうやら最高評議会の独断で部隊を動かしたらしい」

吐き捨てるように吐露するレジアス。
そこへ、オーリスが言葉を続ける。

「我々も、最高評議会からの事後報告で知ったのです。言い訳になるかもしれませんが、決して我々が命令したわけではないのです。父さん・・・中将は・・・」

「言うな、オーリス。何を言っても言い訳になる。・・・儂は過ちを犯したのだ」

オーリスはまだ何かを言おうとしたが、レジアスが止め言葉を遮る。

「しかし、儂は儂の信念の元突き進んだ。それが過ちではあっても、後悔はしていないし、然るべき処罰も甘んじて受ける」

レジアスは力強い目でゼストを見る。
ゼストも、レジアスの真摯な瞳を見つめ沈黙が流れた。

そうこうしていると、ついにエレベータがチンという陳腐な音と共に降下を止めた。
階の表示は『Ａｔｌａｎｔｉｓ（地上の楽園）』と書かれていた。

そして、ドゥーエが近藤達を見ずに言う。

「少しショッキングな場面だから、驚かないでね」

そういうと、エレベータのドアが開いた。

ドアが開いた途端、皆顔をしかめ口と鼻を押さえた。

「な、なんだこの臭いは！！」

「く、臭い！！」

部屋に充満する不快な臭いに、レジアスとオーリスが顔をしかめ声を荒げる。

「臭いですぅ～！！」

リインも鼻を押さえながら足をばたつかせる。

「・・・腐敗の臭いか」

シグナムは昔嗅ぎ慣れた臭いに鼻を押さえ顔をしかめながらも、冷静に部屋の中を見渡す。

部屋はかなり広い造りになっているようだが、全貌がわからない。
部屋が薄暗いためである。
足元の不規則に並んだタイルから発せられる淡い光のみが、この部屋を照らすのみである。

ドゥーエと近藤は迷わず部屋の中央にあるオブジェに歩み寄った。

それは、ガラスが割れ機能しなくなった生体ポッドのようである。
破片が足元に散らばるのを構わず踏み進み、さらに足元にある物体を見る。

「これが最高評議会よ」

ドゥーエが指差したその床に転がる物体。
それは、腐敗が進み茶色く変色し、強烈な臭いを発していた。
それが３つ。

近藤はなんの感情も出さず、能面のような顔で床を汚す汚物を見る。

「・・・これは、脳・・・か？」

近藤とドゥーエに追いついたゼストが、床で変色し腐っている物体を見て呟く。

「そう。最高評議会とは、混乱する次元世界を平定した過去の偉人達。そして、こいつらは肉体が朽ちても、脳みそだけになって脳ポッドにしがみつき次元世界を牛耳ろうとしていたのよ」

「なん・・・だと・・・！？」

ドゥーエの語る真実に、驚愕するレジアス。
そして強く拳を握りしめ、体を震わせる。

「儂は・・・こんな脳みそに良いように扱われていたのか・・・！」

「こんな脳が俺の部隊を・・・」

腐臭を撒き散らし、床を汚す脳みそを見て顔を歪めるレジアスに、
同じくやるせない気持ちのゼスト。

皆が床に散らばる最高評議会であったものを見ている中、近藤は割れた脳ポッドを眺めていた。

脳ポッドは、入口から縦に3つ並び、部屋の中央から若干ズレて設置されている。

そして、床に散らばるガラスの破片を眺め、あるものを見つけ、手に取る。

それは、ガラスにはめられたプレートであり、それぞれ『Ｉｒａ（憤怒）』『Ａｃｅｄｉａ（怠惰）』『Ｌｕｘｕｒｉａ（色欲）』と書かれていた。

「ふん、予想通りだな」

近藤はそのプレートを見て鼻で笑った。

隣で近藤の行動を見ていたドゥーエは、そんな不可解な言葉を発する近藤に聞いてみた。

「何が予想通りなの？」

すると、近藤は落ち込む皆を見てこう言った。

「最高評議会の生き残りがいる」

レジアスやゼスト達は、近藤が何を言っているのかわからなかった。
だが、ドゥーエは驚愕の表情をし近藤に詰め寄った。

「何を言っているの？最高評議会はこの脳３つよ。私が常にメンテナンスをしていたのよ」

そう、ドゥーエは最高評議会の定期メンテナンスを担当していた。
だからこそ、最高評議会の事は誰よりも知っているのである。

しかし、近藤は壊れた生体ポッドを指差し、実態を暴いていく。

「部屋の入口から、何故か脳ポッドが縦に並んでいる。何故かな？」

「・・・意味なんてあるの？」

ドゥーエが眉をひそめる。

「しかも部屋の中央に設置されているのではなく、若干ズレている。何故かな？」

「・・・・・・！？」

そこまで言われて、ドゥーエはハッとした。

「反対側のスペースにも脳ポッドがある？」

ドゥーエが驚愕の表情で近藤を見ると、近藤はニコリと笑った。

「さて、隠れてないで出て来てもらおうか」

そう言うと、近藤は両手をかざした。

『Septem ultima verba christi in cruce（十字架の七言）

Pater, dimitte illis, non enim sciunt quid faciunt
（父よ、彼らをお許しください、
自分が何をしているのか、彼らは知らないからです）

Amen dico tibi: Hodie mecum eris in paradiso
（私はあなたにはっきり言う、
あなたは今日、私と共に楽園にいる）

Mulier, ecce filius tuus...
Ecce mater tua
（婦人よ、ごらんなさい、あなたの息子です、
見なさい、あなたの母です）

Heloi, Heloi, lema sabacthani?
（Deus meus, Deus meus, ut quid dereliquisti me?）
（わが神、わが神、どうして私を見捨てたのですか?）

Ｓｉｔｉｏ
（のどが渇いた）

Ｃｏｎｓｕｍｍａｔｕｍ　ｅｓｔ！
（成就した）

Ｐａｔｅｒ，ｉｎ　ｍａｎｕｓ　ｔｕａｓ　ｃｏｍｍｅｎｄｏ　ｓｐｉｒｉｔｕｍ　ｍｅｕｍ
（父よ、私の霊を、あなたの手にゆだねます）』

すると、その不自然に空いた床が突如開き、下からガラスの柱が生えてくる。

それを見て、ドゥーエをはじめ、近藤以外の者が声が出ない程驚いた。

そのガラスの柱は脳ポッドであり、中には脳と脊髄がプカプカと浮いている。

その数４本。

そして、それぞれの柱には『Ｓｕｐｅｒｂｉａ（傲慢）』『Ａｖａｒｉｔｉａ（強欲）』『Ｉｎｖｉｄｉａ（嫉妬）』『Ｇｕｌａ（暴食）』と書かれていた。

近藤は再び鼻で笑い、目を細める。

辞職に追い込んだ将官や提督達の不穏な動き・・・
それは、この新たに現れた脳たちによるものだったのだ。

「配列は『黙示録の仔羊』神の力、富、知恵、威力、誉れ、栄光、賛美に対して、各々の名前は『七ツの大罪』か。それは皮肉か？」

近藤が棘のある言葉を投げかけると、コポポッと脳ポッド中の液体に気泡が発生し、僅かに脳が揺れ動く。

「・・・何故我々の存在を知る？いや、そもそも何故あの言葉を知る？」

どこか機械的な音声が生体ポッドに取り付けられたスピーカーから流れる。

「あの言葉は遥か昔、偉大なる王が残した言葉」

「しかしそれは記録に残っていない」

「この時代、この世界に偉大なる王の言葉を知る手段などないはず」

それぞれの脳が言いたいことを言い、液体に揺られる。

「しかもその姿・・・古に封印された暴食の王、魔法殺し『獣王』と酷似する」

「ありえない。何者だ、貴様は」

「不可能だ。何者だ、貴様は」

「解析不能だ。何者だ、貴様は」

抑揚のない機械的な声が部屋をこだまする。
レジアスやゼスト、シグナムは段々イライラしてきた。
普段最高評議会のメンテナンスで聞き慣れていたドゥーエも、不快感に眉をひそめた。
そして、ついに近藤もキレた。

「グダグダうるせーよ、プリン共」

「・・・プリン、だと？」

「理解不能だ」

「理解不能」

相変わらず同じような言葉を連呼しようとしたとき、近藤が左手を乱暴に振り抜いた。
そして、バリンッと何かが割れる甲高い音が響く。

近藤から少し離れた位置にあった、４台あった脳ポッドが３台に減っていた。

割れた生体ポッドの中から、満たされていた液体と共に脳と脊髄が

流れ出る。
その姿は陸にあげられたくらげのようだった。

近藤はドカドカと歩き進み、床に垂れ落ちた脳を踏み潰す。
グチュッと気味の悪い音がし、床に脳の破片が飛び散る。

「何が王の遺した言葉だ。それはアルハザードの民が王を讃えるために遺した言葉だ」

踏み潰された脳から白い液体が流れる。
踏み潰された脳を見てオーリスは顔を青ざめさせ口を押さえた。
レジアスやゼスト、シグナムも顔をしかめる。

「その言葉は唯一現存する文章の一文だ。確かに勘違いするだろう。アルハザードの文字を訳した、それだけで偉大なことだろうよ」

近藤は俯き、表情がわからなくなった。
しかし、鬣のような炎が火柱のように燃え盛り、足元で踏み潰された脳が炎をあげ、一瞬にしてチリも残さず消滅する。

「だがな」

そして、俯いていた顔をあげた近藤は憤怒の表情で睨む。

「中途半端な知識をひけらかして悦に浸り、己の欲の為に人の命を弄ぶ貴様等を、俺は許さない」

近藤が声を荒げてそう言うと、コポポッと気泡の音がしてゆらゆら

規則正しく揺れていた脳が不規則に揺れる。

「・・・お前は何だ」

脳は言う。

何だ、と。

何者ではない。

脳には到底思えなかったのだ。

近藤が人間であると。

それを理解した近藤も、ゆっくりと口を開く。

「俺は『魔王』、アルハザード第４代の王」

そう言うと、生体ポッドの中の気泡が一層多く現れる。

「そして、俺は『魔法』。すでに肉体は人間の定義を外れ、心も人間を捨て王となった」

「おお・・・魔王・・・」

「偉大なる王・・・」

「我等の太陽・・・」

口々に感激の声を漏らす脳達。

「我等にあなたの偉大なる力を！」

一層声を高らかにあげる脳に対し、近藤はくるりと背中を向けた。

そしてゼストの方へ歩み寄り、ポンと肩を叩き呟いた。

「敵討ちしていいぞ」

ゼストは顔色ひとつ変えず、近藤を見ずその言葉に頷いた。

それを見た近藤はニヤリと笑い、皮肉を言った。

「なに、心配するな。アレは既に人間のカテゴリーから外れている。壊したとしても、器物損壊で済む」

「・・・そうか」

ゼストは短くそう言うと、己の槍型のデバイスを強く握る。

ギリギリと、手の皮が擦り切れる程強く。

ゼストはゆっくりと歩き、脳ポッドの前で立ち止まる。

そしてゆっくりと腰を落とし、槍を腰の下に構え絞る。

「や、やめろ！我等の知識がどれ程世界に役立つかわかっているのか！？」

今まで余裕の声だった脳は焦りだした。

自分達は無防備であり、攻撃も出来ないし避ける事も出来ない。

彼等には矛を構えるゼストが死神に見えていることだろう。

「貴様等程度の知識はいらん。俺がそれ以上の知識を持っているからな」

近藤が冷たく言い放つ。

「我等の宿願は次元世界の平定！何故それを阻む！？」

「確かに最終的にはそうだろうよ。だが貴様等の身近な欲望は『新たな受肉』だろう？そのためのより洗練された戦闘機人、人造魔導士の素体作りだ。違うか？」

近藤の言い放つ事実に、レジアスやシグナム達は目を見開く。

そして、ゼストはより強く矛を握り締める。

「我等が受肉すれば、管理局をさらに繁栄することができる！そのための犠牲だ！目先ばかり見るな！常にはるか先を見据えるのだ！！」

「・・・平和な未来の為ではないのか？」

レジアスが震える。

それは怒りからの震えである。

「我等が受肉して表立ち、管理局を支配することが平和な未来に繋がる！我等が最も偉大なのだ！！」

脳がそう言ったとき、ガシャンッと何かが割れる音がした。

それは脳ポッドであり、ゼストが槍を振り抜いたのだった。

脳ポッドは2台に減り、脳達の揺らめきが増す。

「・・・己が私欲の為に人の命を弄ぶ。それは人の道を外れることだ・・・」

ゼスト怒りに震える声をなんとか抑え、冷静に努めようとする。

だがダメだ。

奥から溢れる怒りに蓋はできない。

「ソレを人は『外道』と言うのだ！！」

ゼストは咆哮し、槍のデバイスにカートリッジをロードする。

「貴様等は永遠に生きながらえ、世界を牛耳り、神として君臨するつもりだったのだろうが、思い上がりもほどほどにしなければな」

近藤は腕を組み、汚物を見るような目で脳ポッドの中で浮く脳を見、

感情の篭らない声色で言葉を続ける。

「人間は神にはなれない。身の丈に合わない願いは、太陽に憧れたイカロスのように、ロウで作られた翼は溶け、地に堕ちるだけさ」

「そ、それならば、お、王の象徴とは太陽！イカロスのようにロウの翼ではなく、本物以上の翼が我等にはある！我等が太陽を目指して何が悪いのだ！？」

焦るあまり、ノイズが走る脳の声を煩わし気に顔をしかめる近藤はフンと鼻を鳴らした。

「人間が王になれるはずないだろう。王とは、人間の全てを超越した存在、別種族なんだから」

近藤がそう言うと、ゼストが矛を振りかぶる。
そして、怒りの一撃を繰り出した。

「受肉なんて肉体に固執する考えじゃあ王にはなれない」

部屋中にガラスが砕ける音と、肉が潰れる音がこだました。

部屋の床にあるのは、ガラスの破片、液体、脳の残骸、そしてカートリッジの薬莢。

「遥か先を見据えるのは大事なことだが・・・それはお前達がすることじゃない」

近藤は床に散らばる残骸を見下ろしながら呟く。

「未来は次代の者が担うべきなんだよ」

最高評議会は完全に排除されたのだった。

「さて、最後の一仕事をしてくるか・・・」

近藤がそういうと、突如ゼストが咳き込みだし、吐血した。

「旦那！旦那ー！！」

「ゼスト！！」

アギトとレジアスはひざまずき倒れるゼストに駆け寄る。

「・・・ふっ、時間が来たようだ・・・」

ゼストは口を血で濡らしながら笑っていた。

「アギト・・・お前はあの女騎士と共に行動しろ」

「な、何言ってんだよ！あたしは旦那とずっといるんだ！！」

アギトの瞳から大粒の涙が流れる。
そしてそれはゼストの頬を濡らす。

「・・・悔いの無い人生だったか？」

ゼストを抱きかかえるレジアスが話しかける。

「悔い・・・か・・・ありすぎて言い切れんな・・・」

ゼストはフッと笑う。

そしてレジアスも、そうかと言って笑う。

周囲にシグナム、オーリス、リインが集まり、悲痛に顔を歪める。

そこへ近藤が近寄り、ゼストと目線を合わせるようにしゃがみ見た。

「ゼスト、あなたは『真名』を知っているか？」

「・・・？なんだ、それは・・・？」

近藤の問いがわからないゼストは眉間に皺を寄せた。
それを聞いた近藤はすぐ行動に移した。

『王が命じる。ゼスト・グランガイツ。仮死モードへ移行。全機能指示あるまで休止』

近藤がそういうと、突如ゼストはびくんと体を跳ねさせた。

「・・・イエス・マイ・ロード」

ゼストはそう言うとそのまま死んだように眠りについた。

アギトは突然のことに驚き、近藤を睨みつかみかかろうとしたが、近藤はすぐに理由を言った。

「今ゼストを仮死状態にした。これ以上進行しないようにな」

「!?じゃ、じゃあ、死んだわけじゃないんだな・・・」

仮死状態ということにホッとするアギトだったが、聡いレジアスは近藤の行動の真意に気付いた。

「近藤、貴様ゼストを助けるのか?」

「なっ!?助かるのか!!旦那は助かるのか!?」

アギトは必死の顔で近藤につかみかかる。

「ああ」

近藤は短く言い放つ。

だが、ドゥーエは難しそうな顔をした。

「こう言ってはなんだけど、ドクターでもここまで破損した肉体は

治せないわ。そもそも、ゼストは生命維持に問題があるから・・・」

そういうドゥーエに、近藤はフンと鼻で笑った。

「俺をあんなドサンピンと一緒にするなよ」

「ど、ドサンピン・・・世紀の科学者と言われる男を・・・」

あまりの物言いに呆れるオーリス。

そして、何故か体をくねくねしだすドゥーエ。

「助かるならなんでもいい！アンタ、近藤だったな！！旦那を助けてくれ！！そのためならあたしは何でもする！！」

近藤に懇願するアギト。

何でもする！！

それを聞いた近藤はニヤリと笑った。

「言ったな。・・・その言葉に二言はないな？」

ぎくりとするアギトだったが、言葉の通りゼストが助かるならなんでもするつもりだった。

だから、アギトはもう一度力強く頷いた。

「ならば条件を出す。烈火の剣精アギト、シグナム副隊長と契約を交わし、ロードとせよ」

アギトは息をのんだ。

そして俯き、頷いた。

「わかった。烈火の剣精アギトは、騎士シグナムと契約を交わし、騎士シグナムをロードとする」

アギトは恭しく俯き、シグナムに向かい契約を交わそうとした。

「・・・いいのか？」

シグナムはアギトに尋ねる。

いいのか、と。

たしかに炎熱の変換資質を持つシグナムと、炎熱の変換資質を持つ融合騎たるアギトの相性はばっちりである。

しかし、シグナムは無理やりにでもアギトを欲しているわけではない。

アギトがゼストを慕っているのを知っているし、半ば脅迫めいた契約だからだ。

だが、アギトは力強く頷いた。

「ああ、あたしはアンタとなら契約してもいいと思ってる。これは旦那の言葉じゃなくて、あたしの選んだこと、あたしの意志だ」

アギトの目に灯る力強い炎を垣間見たシグナムは、ひとつ息を吐いた。

「・・・そうか」

そう短く言うと、シグナムは右手を差し出した。
アギトは首を傾げた。
そんなアギトに、シグナムは優しげな笑みを浮かべこう言った。

「ならばアギト、お前は私の家族だ。そんな契約などしなくても、手を取るだけでいい」

シグナムの言葉は、アギトが求めていた言葉で

アギトは

涙を流し

シグナムの手を取った。

近藤はそれを見届けると、ゆっくりエレベータへ向かった。

最後の仕事をするために。

## 第９２話（前書き）

なんとか最終回までの目処が立ちました。
最終回までこの話を入れてあと４話。
そしてエピローグ１話。

長かった・・・

なんか子供が独り立ちするような、そんな感じ。

少し走り気味な内容ですが、見てください。

# 第９２話

はやてがゆりかご内に単独で突入し、一番割りを食ったのはバイパー少将だった。

彼女はアースラの管制室で各部隊に忙しく指示を出していたのだが、突如はやてから通信が入った。

ゆりかご内が心配で、嫌な予感がするから、単独で突入する

と。

バイパー少将は一瞬何を言われたのかわからなかったが、はやてはバイパーの承諾を取ることなくゆりかごに乗り込んでいった。

「・・・あのチビ狸め・・・指揮権放棄とは面白いことをしてくれる・・・」

はやての代わりに前線指揮をとりにきたバイパー少将は、フフフと笑っていた。

ただ、こめかみにピクピクと青筋を浮きだたせ、口元だけが笑っているだけで、目は全然笑ってはいなかったが。

「くくく・・・では狸料理の前にガラクタを一掃するか。ヴェノム、セットアップ！」

〈Ａｌｌ－ｒｉｇｈｔ〉

バイパーは胸元からネックレスにしていた自身のデバイス『ヴェノム』を取り出し、セットアップする。

すると、バリアジャケットがバイパーを包み込み、デバイスも本来の姿へと変身した。

バイパーのバリアジャケットは、黒を基調としたドレスのようなデザインをしていた。
細かい装飾を施されたそのバリアジャケットは、まさに女王と呼ぶに相応しい気品さをかもしだしていた。
デバイスもミッド式の杖タイプだが、やはり細かい細工がされており、バイパーをよりきらびやかに演出する。

バイパーのそんな姿を見た武装局員は、おもわず戦うことも忘れて見惚れていた。

だが、そんな蛮行をバイパーが許すはずもなく

「貴様等何をほうけている！それでもキ○タマついとるのかー！！」

とても下品な言葉で罵倒した。

そして、近くを飛んできたガジェットをなんとデバイスで殴り飛ばした。
ガジェットはベッコリへこみ、そのまま吹き飛ばされ別のガジェッ

トに当たり爆発した。

もう一度言っておくが、バイパーのデバイスはミッド式の杖である。決してベルカ式のアームドデバイスではない。

「・・・・・・!?・・・・!?」

予想の斜め上をいくデバイスの使い方に驚く武装局員達だったが、バイパーの一言で目が醒めた。

「貴様等の背中には、護るべき家族がいる!友人がいる!愛するべき人がいる!!いいか!後退するな!背中を見せるな!貴様等の行動ひとつひとつがこの世界の人々の運命を左右すると思え!!」

バイパーは杖を高々と掲げ、よく通るハスキーな声で武装局員達に命令する。

「前を見ろ!顎をひけ!腰を落とせ!杖を構えろ!我等に逃走、敗北の言葉は存在しない!!あるのは吶喊とっかん)!!そして勝利だ!!」

「・・・おおおおーーーっっ!!」

武装局員達が沸き上がる。

それぞれがバイパーの言葉に感動し、心震え、高揚していく。

そしてバイパーは掲げた杖を振り下ろす。

「総員、突撃！！」

「突撃！！」

バイパーの合図と共に、武装局員達は全員でガジェットに突撃していった。

所変わって、スカリエッティのアジト内。

現在、エレノアが呆れた顔で簀巻きにされているスカリエッティを見下ろしていた。

原因はスカリエッティにある。

「・・・隔壁を下ろして私達を道連れにしようってこと？」

そう、エレノアやフェイト達がナンバーズと戦っている間に目を覚ましたスカリエッティは、何をとち狂ったのかアジト内通路の隔壁を下ろし、脱出不能にしたのだ。

さらに時限爆破まで用意するという念の入りよう。

フェイトは急いでアジト内に装備されているピアノの鍵盤のようなコンソールを忙しく叩きだし、なんとか脱出経路を確保しようと躍

起になっている。

ナンバーズ達も全員別のコンソールを操作し、フェイトを手伝っていた。

「こういうのはウーノ姉が得意なんだけどな・・・」

セインがぼやく。

「恐らく、ウーノはヴェロッサという管理局員に捕まった後速やかにアジトを出たと思われます」

セッテがモニタから目を離さずセインに言う。

「無い物ねだりをしていても始まらん。とにかく、今はフェイトお嬢様のサポート優先だ」

トーレも慣れた手つきでコンソールを叩く。

何故ナンバーズがフェイトの手伝いをしているのかと言うと、エレノアの一言のためである。

「戦って負けて死ぬなんて最期はあなたたちには似合わない。あなたたちにも輝かしい未来があるのだから」

ナンバーズは初めて未来という希望を聞いた。

スカリエッティからは聞いたことが無い言葉。

自分達にも、明日はある。
ならば、明日生きる為に、今日を精一杯生き抜け。

脳天から爪先にかけて稲妻が走ったような衝撃を受けたナンバーズ達は、自らフェイトに助力すると進言し、手分けして捜索しているのだ。

だが、調べるうちにフェイトの顔は焦り、落胆していく。
ナンバーズ達も焦燥の表情を隠さない。

「・・・・・ダメだ・・・経路確保できない・・・」

「・・・隔壁が完全に回線を切り離していてこちらからの命令を受け付けない・・・」

「隔壁を破壊していく・・・ダメだ、アジトが崩落する」

「・・・くっ、どうすれば・・・」

焦り、落胆の声を漏らすフェイトとナンバーズを見て、スカリエッティはケタケタと笑い出した。

「無駄な努力だね。どうせ此処を抜け出せたとしても、君達を待ち受けるのは逮捕、そして一生日の目を見ない生活だ」

スカリエッティはナンバーズ達に対して言う。
セインとトーレがキッと睨むが、スカリエッティはニヤニヤ笑うのを止めない。

「それに、どうせゆりかごがミッドチルダを崩壊させるというシナリオは覆らないんだ。此処で死んでも同じさ」

それを聞いたフェイトは、スカリエッティの負け惜しみだと捉えた。

宇宙ではクロノが艦隊を待機させ、ゆりかごをアルカンシェルで攻撃する準備をしている。

いくらゆりかごとて、アルカンシェルには勝てないだろう。

フェイトはスカリエッティを無視し、抜け穴が無いかさらに捜索した。

この時、誰も気付かなかった。

エレノアの瞳が哀しみに満ちていたことに。

「自棄になって道連れ、ね。あなたの最期はつまらないわね」

先程の哀しみの瞳は消え、エレノア蔑みの眼差しでスカリエッティを見た。

「私がここで死のうが、娘達が全員死のうがゆりかごでミッドチルダを崩壊させたという事実が私の生きた証となるのだよ」

死して名を遺す

とでも言いたいのだろう。

不快感によって眉間に皺を寄せるエレノアは、英雄気取りの目の前の男に吐き気を覚えた。

そして、今まで黙っていたシャッハが、ヴィンデルシャフトをスカ

リエッティの喉元に突き付けた。

「もう黙りなさい・・・！」

シャッハは、今にもスカリエッティの首を切り落とさんと言わんばかりに怒り心頭だった。

「なんと自分勝手！なんと幼稚！なんと矮小か！！」

シャッハはスカリエッティに怒りをぶつけるが、当のスカリエッティはどこ吹く風である。

「・・・無限の欲望（アンリミテッド・デザイア）」

エレノアがポツリと呟くと、スカリエッティがピクリと反応した。

「強欲を深層に植え付け、成し遂げんとさせる計画。不安要素は、その欲望の矛先が移ろいやすいということ」

エレノアは淡々と語りながら、ツカツカとスカリエッティの周囲をゆっくり歩きはじめた。

「あなたは、最初こそ最高評議会の思う通り人造魔導士や戦闘機人の開発に真面目に取り組んでいた。でもある日気付いた。『まだ足りない』と」

「・・・」

エレノアが語る言葉を無言で聞くスカリエッティ。

そしていつの間にかフェイトやナンバーズ達も手を止めてエレノア

の話しを聞いていた。

「もっと、もっと大きなことを成し遂げたい。あなたは悩んだ。悩んで、悩んで、悩んで・・・行き着いた先の答えが・・・」

「『全ての破壊』さ！」

エレノアの言葉に続くように口にしたスカリエッティの声色は喜びに満ち、金色の瞳はさらに妖しく輝いていた。

「・・・なっ・・・！？」

トーレは驚きのあまり、声が出なかった。

セッテやセインも同様である。

スカリエッティの目的自体曖昧なものだったが、まさか全ての破壊が真の目的だったとは、流石のナンバーズも聞かされていなかったようだ。

「・・・馬鹿げてる・・・！」

フェイトはスカリエッティの思考が理解できなかった。

理解したいとも思わないが、欲望の先が破壊に結び付けるスカリエッティは、やはり一般人とは何かが違っていたのだ。

「ミッドチルダの全てを破壊する！それは砦たる地上本部破壊！管理局の瓦解に繋がる！そうすることで、他次元世界の反管理局勢力も行動に移す！全ての世界が崩壊するのさ！！」

ようするに、スカリエッティは他次元世界の反管理局勢力をたきつけ、世界を混乱に陥れたいのだ。

「全てが破壊され、新たな命が芽吹く！そして、その世界では私は神だ！！」

狂気に満ちた顔のスカリエッティは、もはや理性を取り除いた獣のようだった。
キキキと耳障りな笑い声がアジト内に響く。

「・・・」

ナンバーズ達は何も言わなかったが、それでもスカリエッティの真の目的を知って賛同できるハズもなく、俯き、歯を食いしばり我慢していた。

「もう喋るな」

エレノアはそういうとノーモーションでスカリエッティの顔に前蹴り（ケンカキック）をかました。

ドカンッと大きな音とともにスカリエッティの頭は壁に減り込み、エレノアの足と壁に挟まれ気絶した。

そしてエレノアはすぐにクロノに回線を繋ぐ。
パッと映し出されたモニタにはクロノが映り、なにやら忙しく作業しているようだった。

「あ、アルファード大将、こちらの準備はもう少しで終わります。今最終確認を行っているところです」

クロノはエレノアに進捗状況を報告しつつ、あれこれクルーに指示

をとばしていた。

「クロノ君、スカリエッティが何か仕掛けている可能性があります。最終確認は念入りに、そして周囲の警戒レベルを上げておいてね」

エレノアが真面目な顔でクロノに指示をだし、クロノは了解しました、と敬礼した。

「・・・スカリエッティの言葉を信じてるんですか？」

シャッハがエレノアに聞く。

先程までのスカリエッティの言葉を妄言としか捉えていなかったシャッハは、えらく慎重なエレノアに驚いていた。

エレノアは、なんというかノープランのいきあたりばったり人生を謳歌してそうなイメージだったからだ。

「物事は最悪を想定して動くものよ。対策をやり過ぎてダメなことは無いもの。たとえスカリエッティの言葉が妄言で嘘だとしても、僅かにその可能性があるなら対策をとるべきよ」

エレノアの言葉に、ほほぅと感心するフェイトとナンバーズ達。

「ま、ご主人様の受け売りだけどねー」

エレノアはそう言いながらトコトコと現在いるアジト内の中央まで歩きだした。

「さてフェイトちゃん、脱出経路は確保できなかったのね？」

エレノアはフェイトに確認をとると、フェイトは悔しそうに頷いた。

「爆破時刻までは・・・まだ結構あるわね。よしよし」

エレノアはタイムリミットを確認すると、手を大きく広げ天井を見た。

それを見たフェイトを含む一同は、ギクリと嫌な予感がした。

「・・・エ、エレノアさん?あなたは何をしようとしているのかな?」

僅かに声が震えるフェイトに対し、エレノアは平然と言った。

「天井をぶち抜く」

これにはトーレやセッテさえも驚く。

「まってくれ!砲撃で天井ぶち抜いたら、アジトが崩落するぞ!?」

「最悪、時限爆弾も誘発しますよ」

そんなもっともな反論に対し、エレノアはどこまでもマイペースだった。

「ようするに、このフロアの天井全てを吹き飛ばして崩落被害を出さず、尚且つ不要な振動を与えなければいいんでしょ?簡単よ」

もう言っている事が無茶苦茶である。

だが、しれっとしているエレノアを見て、皆が一様に思った。

（・・・ああ、つまり方法があるんだな・・・）

と。

「じゃあ今から天井ぶち抜くから、皆少し離れててねー」

エレノアは軽い口調で皆を避難させ、両手を胸の前でボールを掴むように指を曲げる。

すると、足元に魔法陣が形成された。

その魔法陣は、ミッド式でもなく、ベルカ式でもない、渦のような魔法陣だった。

そして、エレノアがゆっくりと手を広げると、両手の間にピンポン球程の小さな黒い魔力球があった。

球の黒は限りなく闇に近く、光を一切通さないような、全てを吸い込んでいきそうな、そんな黒だった。

その魔力球は手を引き寄せるようにバチバチ稲妻を発生させている。

それを見た途端、フェイト達はドバっと冷や汗を流した。

「な・・・なんだ、あのありえない程の濃密な魔力は・・・」

トーレがかすれる声で呟いた。

「・・・殺傷設定ならば、町の一つは消し飛ぶ量・・・ですね」

セッテも信じられないといった顔で呟く。

「ちょっ!?待ってよ!普通そんな広範囲魔法ってさ、詠唱時間長

くなるよな!?なのにあの人、手を合わせただけで作り出したのか!?」

セインは焦るように言う。

込める魔力が大きい程制御が難しく、詠唱時間が比例するように長くなる。

基本中の基本である。

エレノアはそんな法則を完全無視した。

だが、逆に考えればこの不可能な事態は説明がつく。

「・・・エレノアさんにとって、『あの程度の魔法は無詠唱で出来て当然』なんだよ、きっと」

フェイトは自分で言っていながら、なんと規格外なのかと驚いていた。

エレノアは、フェイト達と立っているステージが違うのだと、痛感したフェイト達だった。

「よーし、じゃあいっちゃうかな?」

エレノアがそう言うと、ピンポン球程だった黒い魔力球は途端に膨張しだし、フロアの天井程大きくなった。

「・・・」

もうフェイト達は顎が外れるかと思うほどあんぐりと口を開けてい

た。

そんなフェイト達を余所に、エレノアは両手でボールを投げるように魔力球を天井向けて放った。

「行け！超・天下無敵玉（命名：近藤）！」

放たれた魔法は、天井の岩を消していく。

まるで、熱湯に氷を入れるように、一瞬で、振動もなく天井が無くなる。

そして、あっという間に魔法は地上に到達し、魔法は青天へと消えていく。

薄暗く、人工的な光が支配していたフロアは、爽快な自然の光へと変わり、差し込む太陽の光はエレノアやフェイト達を照らす。

「さぁ、行きましょうか！」

エレノアはそういうや、サッサと一人飛んで行った。

「・・・・・」

そんなエレノアをただ見ているしか出来なかったフェイト達は、固まっていた。

「・・・」

「・・・・・」

「・・・・・・・・行こうか・・・」

フェイトの疲れたような声に、皆ただ小さく頷いた。

同時刻、シグナムとアギトは地上に出ていた。

管制官から再びガジェットが大量投入されたと連絡が入ったからだ。

ガジェットの数はおよそ５０機。

空を黒い物体が我が物顔で疾駆する姿に、シグナムは眉を寄せる。

「アギト、いくぞ」

シグナムが隣で浮く小さなパートナー、烈火の剣精アギトを見る。

「ああ！」

アギトは力強く頷いた。

そして、二人は絆の元、シンクロする。

『ユニゾン・イン！』

シグナムとアギトは重なり、融合する。

シグナムの上半身のジャケットが消え、瞳の色が変わる。

そして、背中から四枚の炎の翼が現れた。

シグナムは自身から溢れる魔力に驚く。

なんというシンクロ率

なんという高揚感

そして、暖かい心

「いくぞ！」

〈おう！〉

お互い呼応し、己が相棒レヴァンテインを構える。

「火龍！」

〈一閃！！〉

シグナムはレヴァンテインを横一閃に薙ぎ払う。

放たれる炎は、ガジェットを飲み込み、尽くが爆発した。

アースラ管制室では、感嘆の声があがり、シグナムを称賛する。

シグナムは自分の繰り出した魔法に驚きつつも、目を閉じ深く深呼

吸する。

「アギト、お前とのユニゾンは胸が暖かいな」

〈・・・ふん、うるせーよ〉

シグナムの言葉に、アギトは照れ隠しで悪態をついた。
そんなアギトを微笑ましく感じていたシグナムだったが、すぐに真剣な表情に戻り周囲を見渡した。

「しかし、近藤の奴何処に行ったんだ?」

シグナムは先に行った近藤の姿がないか辺りを捜しているのだが、どうもいないようである。

〈なんだ、獣王をさがしてるのか?なら向こうだ〉

アギトがシグナムに方角を示した。
どうやらアギトの探知能力は優秀のようで、シグナムはほうと感心しつつ、指し示された方角を見た。

「・・・この方角・・・近藤はゆりかごに向かっているのか?」

シグナムの目に映るのは巨大な船ゆりかご。
此処からかなり距離が離れ、上空にいるのだが、まだゆりかごを肉眼で現認できる。

シグナムは何故だかわからないが胸騒ぎがした。

嫌な予感とかいうものではなく、これからとてつもない事が起こるという予感。
それが、頭の中で近藤と結び付くのだ。

「・・・」

シグナムはいつの間にか手をきつく握っていた。
ハッとして手を開くと、ジットリと汗をかいていた。

「・・・アギト、近藤を追い掛けるぞ」

シグナムは近藤の後を追い、ゆりかごへと向かった。

所変わって再びスカリエッティのアジト、いや、アジト跡の上空ではエレノアやフェイト達がいた。
シャッハとセインは飛行出来ないため、シャッハはフェイトに担がれ、セインはセッテが担いでいた。
スカリエッティはトーレに足を掴まれ、逆さ吊りにされていた。

「・・・・・・」

エレノアは無言でジッとある方角を見続けていた。
その表情は真剣そのもので、張り詰めた空気が漂う。
フェイトやナンバーズ達はエレノアがこちらを見向きもせずずっと一点を見ていることに疑問を抱きつつも、エレノアから漂うピリピ

リした雰囲気に声をかけられずにいた。
すると、エレノアはフェイト達の方を見ずこう言った。
「ゆりかごに行きましょう」
有無も言わせないという口調にフェイト達は何も言えず、ただ頷くだけだった。
そしてエレノア、フェイト、シャッハ、ナンバーズそしてスカリエッティはゆりかごへと向かった。

近藤が一人早くゆりかごにたどり着いた時には、殆どのガジェットは破壊、沈黙されていた。
皆地上に降りて警戒していたので、近藤も歩いて近付いた。
これもバイパー少将率いる武装局員達による努力の結果である。
まあ、武装局員達は心身共にボロボロでへたりこんでいたが。
ただ一人、バイパーだけがピンピンしていた。
結果だけでいうと、バイパーは一番多くガジェットを撃墜した。
それも、はやてより多くである。
途中参加ではやてより撃墜数が多く、且つ疲れたそぶりを見せない

バイパーに、武装局員達は尊敬と畏怖を抱いた。
そんなバイパーに近藤が話し掛けた。
「お疲れ様でした、バイパー少将」
バイパーは近藤の獣王の出で立ちに驚きくも、敬礼し普通に返事をした。
「ああ・・・近藤元帥・・・ですかな？なんですか、その獣のようなお姿は？」
バイパーは、近藤がまだ自分は元帥ではなく三尉だから敬語などはいいと言っても聞かず、ずっと敬語で接してくる。
まったく、自分に厳しいバイパーらしい行動である。
近藤は自分の姿がまだ獣王であることを失念していたようで、急いで獣王の力を解除しいつもの制服姿に戻った。
そして近藤はこれまでの経緯を簡単に説明した。
「なるほど、聖王と獣王、あのお姿は獣王ですか・・・それに最高評議会の生き残りが・・・ふむ、なかなか根が深いですな」
バイパーはフムフムと頷いて聞いていた。
「ところで、なのは隊長とヴィータ副隊長、ヴィヴィオは脱出しましたか？・・・ん？そういえばはやて隊長は何処に？」

近藤がそう言うと、バイパーはこめかみに青筋を浮き立たせ親指でクイクイとビルの影を指した。

そこには武装局員同様、へたりこんでいるなのはとはやて、スバルとティアナがいた。

近くでディエチとクアットロは武装局員に捕縛されている。
どうやら意識はあるようで、二人ともしかめっつらをしていた。

ヴィータは重傷ということで直ぐ病院に搬送され、ヴィヴィオも同じく搬送されたという。
ヴィータはとりあえず命に別状はないそうなのでホッとした。

近藤はなのは達の所へ向かい、労いの言葉を言おうとした。

「なのは隊長お疲れ様でした。はやて隊長も・・・どうしたんですか、その頬っぺた？」

近藤ははやてに労いの言葉をかけようとして止まってしまった。
なぜなら、はやての頬っぺたが真っ赤に腫れ上がりシクシク泣いているから。

「うう・・・バイパー少将、酷いわ・・・」

「何が酷いだ！現場指揮を放棄して単独行動の方が酷いわーー！！」

バイパーは怒りながらゲンコツをはやての頭に落とした。

「ぎゃあああーーっ！！」

はやてはゴロゴロのたうちまわる。
そんなはやてを笑うスバルやティアナに、何故二人が此処にいるのか聞いた。

スバルとティアナは個々でナンバーズを逮捕した後、急いで合流しゆりかごへ向かったのだという。
なんでもスバルが胸騒ぎがするとティアナを急かし、ヴァイスから借りたバイクに乗り来たのだそうだ。
そしてスバルの直感によりウィングロードをゆりかごまで展開し、その上を走ってゆりかご内に乗り込んだ。
すると、中ではＡＭＦと体力切れによって身動きが取れないなのは達を発見。
スバルは比較的大丈夫なのはとヴィヴィオ、はやてを担いで走り、ティアナは、重傷、または気絶しているヴィータとディエチ、クアットロを担ぐという乗車人員を大幅にオーバーした、一台のバイクに４人乗りという乗り方でなんとか脱出したのだという。

「・・・無茶するなあ」

近藤は呆れながらも笑い、スバルとティアナも笑った。

そうこうしていると次々と機動六課の人間が集まりだした。

まずはシグナムが合流し、次にエリオとキャロ、エレノアとフェイト達が集まる。
エレノア達と一緒に来たトーレ達を見てなのは達は驚いたが、トー

レ達3人に戦う意思は無いとフェイトに諭された。
そして、ナンバーズの残り、オットーはシャマルとザフィーラによって逮捕され、チンクは前回の襲撃によって重傷を負っており治療しているところを保護されたと報告を受けた。

スカリエッティは簀巻きにされたまま武装局員に引き渡され、ディエチ、クアットロと共に纏められた。

そしてそれぞれがそれぞれの仕事を完遂し騒がしくなる。

スカリエッティの用意した試練を、なのはたちは全て乗り越えた。
つまり、管理局はスカリエッティ一味に勝利したのだ。

自然、皆の顔から笑みが浮かぶのは仕方のないことだった。

近藤はそんな光景をチラリと見ると、そんな輪に入ることなく空に浮かぶゆりかごを見た。

ゆりかごはドンドン上昇し肉眼でも小さくなる。

「・・・」

無言でゆりかごを見る近藤に、エレノアが近付きこれからの事を言う。

「ゆりかごが成層圏を越えたらアルカンシェルを一斉掃射します。
計算では、あと2分」

エレノアの報告に、そうか、と短く答えた近藤は、やはりじっとゆりかごを見続けた。

いつの間にかなのは達も会話を止め、それぞれが上空で浮遊するゆりかごを見つめた。

「・・・・・・」

計算ではあと1分

皆、固唾を飲んで見守る

それぞれの胸に様々な思いが駆け巡る。

管理局の闇

人造魔導士

戦闘機人

狂わされた運命

仕組まれた運命

絡み合う欲望

それらが

ひとつの結末を迎えるのだ。

「・・・時間よ」

エレノアが宣告する。

しかし

ゆりかごは破壊されなかった。

# 第９２話（後書き）

裏話その１

近藤　「ところでティアナ、なんで俺のバイクじゃなくてヴァイスのバイクなんだ？」

ティアナ　「だって、ゆりかごに突撃したら副隊長のバイクが傷つくじゃないですか！！」

近藤　「いや、別に良かったんだけど・・・それに、それはヴァイスのバイクも同じだろう？」

ティアナ　「ヴァイス陸曹のバイクはいいんです！！」

近藤　「・・・・・・そうですか・・・」

## 第９３話（前書き）

今話をいれてあと3話。

今回が最大の山場です。

いろいろむちゃくちゃなところはありますが、見てやってください。

# 第９３話

クロノの目の前にキューブ型の物体が現れる。
そして多数のモニタが展開されており、それに映っている人物達は、
各艦の艦長達であり、皆一様に緊張していた。
真剣な面持ちで見つめるクロノの手には、鍵が握られていた。

・・・ゴクリ

だれかが唾を飲み込む音がした。

それが聞こえるほど静寂が支配している中、クロノは鍵をきつく握り締める。

「艦長、目標上昇を目視で確認。射程範囲に入ります」

オペレーターが若干上擦った声で報告する。
クロノはそれに頷くと、他の艦長達も頷く。

「ベルカの呪われた歴史が、今ひとつ終わりを告げる」

クロノは静かに喋る。

「この一撃の先に、輝かしい未来があらんことを」

艦長全員が手に持つ鍵をキューブに差し込み

「アルカンシェル、発射！」

鍵を捻った。

そして

ビーッビーッビーッ！

アルカンシェルが発射される代わりに現れたのは、けたたましいアラート音。

全面を埋めるアラートの赤い文字。

いきなりの事でパニックになる管制室、そして

バシャン・・・

いきなり暗くなる管制室。

すぐに生命維持を最優先に移行、艦内も非常灯に切り替わり僅かに明るくはなるが、それでも現状のパニックは変わらない。

「落ち着け！まずは現状報告しろ！！」

あわてふためくオペレーターを落ち着かせ、現状報告をさせたクロノは驚愕した。

クラウディアと、同じく僚艦は動力がシステムダウンし、航行不能

アルカンシェルも発射不可能

オペレーターの報告に、クロノは呆然としてしまった。

「・・・何故破壊されない？」

声を発したのはバイパーだ。

計算ではゆりかごは既に成層圏に到達し、アルカンシェルの一斉掃射によって消滅しているはずである。

計算違いでまだ到達していないのかもしれないと思ったが、いつまで経ってもアルカンシェルが発射される気配がない。

さすがに異変に気付き、ざわつきだすなのは達だったが、突如展開

されたモニタによって事態は緊迫する。
モニタに映っていたのはクロノだった。
だが、その表情は焦りに染まっていた。

「アルカンシェルが発射できない！！」

この一言で、一気に空気が変わった。

先程までの和やかなものから、ピンと張り詰めたそれになり、一同絶句していた。

そんな中、くくくと笑う声が聞こえる。

耳障りな、不快な気分になる笑い声が静寂の中鮮明に聞こえた。

「くはははははは」

皆笑い声のする方を見た。

それは、スカリエッティだった。

「はーっはっはっはっはっはっ！！」

とうとう大声で笑いだしたスカリエッティは言った。

「だから言っただろう！計画通りだと！！」

スカリエッティの言葉に場がざわつく。
バイパーがスカリエッティに詰め寄り胸倉を掴んだ。

「貴様、何をした！？」

バイパーが怒りの形相でスカリエッティを睨むが、当のスカリエッティはニヤニヤと笑うのを止めない。
そして楽しそうに絶望の言葉を紡いでいく。

「私がアルカンシェルの事を考えていなかったと思うかい？」

「だから何をしたのかと聞いとるんだ！！」

バイパーがスカリエッティをガクガクと揺らす。
スカリエッティはいやらしい笑みでバイパーを見ていたが、またどこからかクスクスと笑い声が聞こえてきた。

それはクアットロだった。

「あなた達～、私達が地上本部を襲撃したとき、まさか戦力誇示やパフォーマンスをしに来ただけと思ってたの～？」

クアットロもどす黒い笑みを浮かべている。

だが、なのは達は目の前の現実に混乱しどういう意味か理解できなかった。

「私のＩＳは『シルバーカーテン』、幻影を作りだし、電子システムに侵入して自由に扱うことが出来る。これがどういう意味かお分かりかしら？」

バイパーはクアットロの言っている意味がわかり、憤怒の表情でスカリエッティの襟首を乱暴に振り払いクアットロの髪を乱暴に掴み自分に引き寄せた。

「貴様・・・地上本部のシステムをハッキングしたな！？」

掴み上げられた髪の痛みに顔を歪めながら、クアットロは焦るバイパーを見てより深い笑みを刻む。

「侵入する鍵があれば中身は所詮は０と１の記号、どうってことなかったわ～。そして、私はドクターの指示で動き・・・」

「電子ウィルスを仕込んだということか！！」

苛立たしげに掴んでいたクアットロの髪を離し、手段の無い現状を嘆くバイパー。

「・・・ど、どういうことですか、なのはさん？」

スバルがなのはを見る。

なのはは蒼白だった。

震える唇で、絶望の未来を紡ぐ。

「・・・ゆりかごは止められない・・・」

スバルがなのはの口から最も聞きたくない言葉だった。

なのはの心が折れ、負けを認めてしまった言葉。

「エレノアさんのあの超・天下無敵玉とかいうのでなんとかなりませんか！？」

フェイトが、無言で小さくなるゆりかごを見つめるエレノアに聞いた。

確かに全身反則みたいな存在のエレノアならば、なんとかなるかもしれない。

フェイトの期待を皆感じ、一斉にエレノアを見た。

しかし、エレノアから返ってきた言葉は残酷なものだった。

「いいえ、ゆりかごは内包する魔力に質量、その他もろもろと厄介なの。流石に私の使える魔法でもゆりかごを完全破壊できるものはないわ」

エレノアの言葉に、愕然とするフェイト。

そして一縷の望みが消えてしまった事への絶望感が場を支配する。

そんななのは達を嘲笑うようにスカリエッティは甲高い笑い声を発した。

「キハハハハッ！君達は私がアルカンシェルの存在を忘れていると

思っていたのか!?ゆりかごの絶対的戦力を過信して対策を怠ったと思っていたのかい!?」

体をガクガク揺らし笑うスカリエッティは、もう可笑しくてたまらないというように笑い続ける。

「この私が全てを把握して作戦を立てなかったと本当に思っていなかったのか!?だとしたら私も随分軽く見られたものだ!!」

スカリエッティはゆりかごを主軸としながらも、ゆりかごの戦力を過信することなく慎重に計画を練っていた。

地上本部襲撃後、必ず管理局からの捜査や制圧があることは当然わかっていた。

スカリエッティは管理局の面目に泥を塗ったのだから、報復があると考えるのは当然だろう。

管理局にはアルカンシェルを除き、ゆりかごをどうこう出来る局員や手段があるとは思えなかったが、最悪を想定して動く事は決して悪いことではない。

つまり、スカリエッティが管理局が宇宙で次元航行艦を待機させ、アルカンシェルで攻撃するという作戦を考えなかったわけがないのだ。

そんな子供でも予想出来る作戦を、希代の天才と言われるスカリエッティが予想出来なかったと管理局が本気で思っていたのかと言われれば、考えていなかったわけではない。

ただ、タイミングが悪かった。

管理局は、スカリエッティが作戦当日なんらかの妨害をしてくると践んでいた。

だが蓋をあけてみれば、全く違った。

スカリエッティは、地上本部襲撃時に、同時にその後行われるであろう管理局の作戦を読み、作戦に現場投入されていたクアットロにだけ自分の真の目的を告げ、管理局のシステムにウィルスを仕込んでいたのだ。

そのウィルスはアルカンシェル起動が実行キーであり、発動すれば、次元航行艦のシステムをダウンさせる程の強力で凶悪なウイルス。

だから、スカリエッティは言ったのだ。

「私には勝てない！」

だから近藤達に言ったのだ。

「未来など弱者の戯言だと！」

だからナンバーズに言う事はなかったのだ。

「明日など来ない！！」

カカカと奇声のような笑い声が響く地上で、スカリエッティとクアットロ以外の顔は絶望に染まり、崩れていた。

諦める事を嫌うバイパーでさえ、切るカードのない現状に歯を食いしばる。

クアットロも三日月のような笑いを崩れるなのは達に向ける。

スカリエッティは、真の目的をウーノとクアットロにだけは告げていた。

そして、二人ともそんな思想に賛同した。

この二人は一番スカリエッティに近い思考を持ち、スカリエッティに心酔していたのだ。

だから、クアットロは嬉々として地上本部のシステムにウィルスを仕込んだ。

「君達の勝利を確信した顔が絶望に染まる！私はこれが見たかった！！」

狂ったような笑いを止めないスカリエッティに、セッテが歩み寄る。

「あなたは私達を殺すために作り出したのか？」

死ぬために生まれた。

セッテの表情はいつも通りに見えた。

だからスカリエッティは言った。

「そうさ。君達作品は、私の道具なんだからね」

それを聞いた途端、セッテは怒りの表情となりスカリエッティにつかみ掛かった。

「もう私達はお前の道具ではない！！」

憤怒の表情をするセッテに、スカリエッティは醒めた顔で見た。

「・・・そんなに魅力的だったかい？彼女達の言う『明日』という言葉が」

「セッテちゃ～ん？あなた、そんなつまらない言葉に感化されちゃったの～？」

クアットロがけだるそうに首を上げ、セッテを見上げる。

だが、その眼差しは突き刺すような鋭さだった。

「あなた・・・つまらない子になっちやったわね～」

・・・この失敗作

プツン　と　セッテの中で何かがキレた。

そして、セッテは人差し指と中指を伸ばし、スカリエッティの眼球目掛けて突き出した。

突然の行動に、皆が動けなかった。

ただ、見ているしかできなかった。

だが、セッテの指はスカリエッティの眼球を潰すことなく、近藤によって止められた。

「止めるんだ、セッテ」

近藤は落ち着いた表情でセッテを見た。

セッテの表情は、今にもボロボロと崩れてしまいそうな程脆かった。

「・・・近藤・・・さま・・・」

近藤はセッテの目尻にハンカチを持って行き、苦笑いした。

「泣くな、綺麗な顔が台なしだ」

セッテは泣いていた。

くやしくて、何も知らなくて、何もできなくて。

セッテの頭を軽くポンポンと叩くと、とうとう泣き崩れた。

それをセインとトーレが急いで駆け寄り介抱する。

なのはやフェイト達はセッテの豹変に驚いたが、それよりも違う違和感を近藤に感じた。

そしてそれをいち早く察知し、近藤に対し聞いたのがはやてだった。

「・・・近藤さん、あんたなんでそんなに落ち着いとるんや？」

はやては真剣だった。

よくよく思い出すと、近藤は今の今までこの場所で会話に参加して

いただろうか？
いや、もっと言うならいつもうるさいエレノアも先程までのスカリエッティとの会話に参加していなかった。

「スカリエッティが何か切り札を残し、こうなることはわかっていましたからね」

「――――なっ！？」

近藤の淡々と話す言葉に、はやては絶句した。

「わかっていた？ならば結末もわかるだろう？」

スカリエッティが勝ち誇ったような顔で近藤を見上げる。
スカリエッティは近藤の口から敗北宣言が聞けると思った。

そしてその言葉を待った。

しかし近藤の口からは別の言葉が飛び出した。

「ああ、俺達の勝ちだ」

「・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・・・・はっ、気でも狂ったかい？」

呆けていたスカリエッティが笑い飛ばす。

「ゆりかごを破壊する手立てがない現状で、君達の勝ちだと？何を言っているのかね？」

「あらあら～可哀相に、近藤は頭がおかしくなったのね～」

クスクスと笑うクアットロに対し、近藤は言う。

「手立てが無いと俺が一度でも言ったか？」

ピシリ　と何かが割れる音がした。

「・・・君は私を馬鹿にしているのかね？」

スカリエッティは先程までのヘラヘラした表情から、不機嫌なものへと変わっていく。

「現在の技術では、アルカンシェルを超える破壊兵器は存在しない。それに、過去に遡ってもゆりかご程の質量を持った兵器を完全に破壊できる技術も、魔法も存在しない！それはアルハザードでも同じだ！」

スカリエッティが不快感から声を荒げる姿を見たことがなかったの

だろう、クアットロや、ディエチ、トーレ、セイン、セッテは驚いていた。

「スカリエッティ、もう一度お前に言ってやろう」

近藤はスカリエッティに背中を向け、空を見る。

「過去にしがみつく者に、輝かしい明日は来ない」

近藤の隣には、エレノアが立つ。

「さて、ここからが始まりだな」

「そうですね。ご主人様の知る未来の、ひとつの区切りですね」

軽口をたたくような会話だが、その表情は真剣そのものだった。

「ゆりかご程の高質量だ、簡単にはいかないだろう。エレノア、いくら必要だ？」

近藤がそう言うと、エレノアは俯き噛み締めるように口を開いた。

「・・・およそ、４３８７２時間です・・・」

「そうか、約5年か」

淡々としている近藤に対し、今にも泣いてしまいそうなエレノア。

そして、いつの間にか近藤とエレノアの周囲にはなのはやフェイト、はやて達がいた。

「・・・ゆりかごをなんとかする手があるんやな？」

はやての質問に、近藤は頷く。

「エレノアさんは無いって言ってたよ？」

「私は（・）持っていないと言ったのよ。ご主人様まで持ってないとは言ってないわ」

エレノアの屁理屈に聞いたフェイトは呆れた。

「それで？一体どんな方法なの？」

なのはが質問すると、近藤とエレノアは顔を見合わせ、声を揃えて言った。

『ユニゾンです』

それを聞いたはやては、ああそういえば、と思い出した。

エレノアは『源書』の『管制人格融合騎』なのだ。
普段まったくユニゾンデバイスとしての振る舞いをしていないのですっかり忘れていた。
だがフェイトはそれを聞き、急に何か言い知れぬ不安が襲い掛かった。

何故だろう、とても嫌な予感がする。

何故今更皆が忘れているようなユニゾンなんて事を言い出すのだろう？

何か、取り返しのつかない事が起きそうな、そんな漠然とした不安。

そして、近藤が何処か遠くへ行ってしまうような、そんな不安。

「・・・大丈夫・・・ですよね？」

フェイトはイロイロな意味を込めて近藤に聞いた。

ゆりかご破壊は大丈夫か

近藤の負担は大丈夫か

何処か遠くへ行かないか

私の側を離れないか

そんな言葉に、近藤は

「大丈夫、ちょっとしんどいですけどね」
散歩にでも行くかのような軽い感じで答えた。

「さて、行くぞエレノア」
近藤は首を回しコキコキと鳴らす。

「・・・はい」
エレノアは苦痛に耐えるような表情で頷き、そして二人はあの言葉を言った。

『ユニゾン・イン』

近藤とエレノアが光り輝き、重なり合う。
光のシルエットがやがて固定されると、そこには神々しいまで存在がいた。
流れるような長髪は黒曜石ように煌めき、白い肌は透き通る陶磁器を彷彿とさせ、
バリアジャケットは白と黒を基調としていた

背中から生える電子の羽は、水晶のように透明で、
その全てがお伽話に出て来るような、そんな姿だった。
あまりの美しさに、なのは達は事の事態を忘れじっとユニゾンした近藤を見ていた。

ユニゾンをした近藤とエレノアは、肉体ベースをエレノアとし、近藤がサポートするという普通のユニゾンとは逆の方法だった。
これは、別に不可能な話ではない。
しかし、このユニゾンはマスターに多大な負担をかける。
しかも下手すれば融合事故を起こし、大怪我を負う可能性もある。

「さて、では行くか」

肉体ベースをエレノアにしたといっても、基本主導は近藤が取る。
声はエレノアだったが、口調は近藤だった。

「では、行ってきます」

近藤はそう言うと、まっすぐ上に飛び立った。

近藤は飛ぶ

速く

速く

速く

蒼穹を翔けぬけ、白い雲を突き抜ける。

速度はいつしか音速を超え

空気が破裂する。

気温が下がり、酸素濃度、水分も下がる。

それでも近藤は飛ぶのをやめない。

そして成層圏の上層を超えたときに、スピードを緩めた。

眼下には、青い星の大地が広がり、周囲は広大に広がる宇宙。

星々の瞬きが数千万とあり、暗黒を幻想的にする。

そして目の前には、

巨大な戦船――――ゆりかご――――

月の光を浴び無尽蔵の魔力供給を行えるゆりかごは、ゆっくりと上昇を続ける。

「ふん、まさかここまで『見た未来』と同じなんてな」

近藤はクスリと笑った。

「さあ、おわらせよう」

近藤はゆっくりと深呼吸した。

そして――――

儚くも美しい

うた（呪文詠唱）をはじめた――――

システムダウンしたクラウディア内ではクロノが机を叩き己の無力を嘆いていた。

艦を宇宙空間で維持出来るように予備電源は確保されている。

局員の生命維持に問題はない。

だが、アルカンシェルを発射できるほどの余裕など無い。
今出来るのはモニタ越しにゆりかごを見ているだけ。
目の前に目標がいるのに攻撃できないもどかしさ、スカリエッティを軽んじていた浅はかさ。

（僕は・・・何も出来ないのか・・・！）

クロノが呟くと、オペレーターがおもむろにクロノに報告し始めた。
その声は戸惑い、怯えるようだった。

「か、艦長・・・敵ゆりかごに接近した人物が・・・」

「・・・なんだって？」

クロノは聞き間違えかと思い、もう一度オペレーターに聞いた。

「・・・いま、人物と言ったか？」

この宇宙空間で？
マイナス温度の空間で？
空気の無い空間で？

「・・・は、はい・・・コレを・・・」

オペレーターは確認していたモニタをクロノにまわした。
はたしてゆりかごの近くには確かに人物がいた。
そしてクロノはその人物を見て驚く。

「・・・アルファード大将・・・いや、まさか・・・」

――――近藤か？

地上では、一気に見えなくなった近藤を必死に見つけようと、皆が蒼天を見ていた。

「一体何をするつもりや・・・」

ぽつりと呟くはやては、近藤のあの姿の危うさを知っている。

本来マスター主体のユニゾンでさえ間違いがあれば融合事故を起こす可能性があるのに、近藤はデバイス主体のユニゾンを行った。

あれは確かに近藤のように魔力の少ないマスターが巨大な力を手に入れる事ができる方法ではあるが、危険度がグンと跳ね上がる両刃の剣である。

現在シグナムとユニゾンをしているアギトも、その危険性を熟知していたため、あの近藤の行動に驚きを隠せないでいた。

へ・・・あの近藤ってやつ、あんな危ない橋渡らなきゃいけないような魔法を使うつもりか？・・・いや、それでもゆりかごを完全破

壊できる魔法が放てるとは思えないし・・・〉

シグナムの中で呟くアギトだったが、それを聞いたシグナムは空を見上げながら不機嫌に眉間に皺を寄せた。

「あのバカモノは、人には自分を大切にしろとか言っておきながら、自分は真逆の事をしているではないか・・・！」

ギリッと歯を食いしばるシグナムは、それでも現状近藤に頼るしかない己のふがいなさにいらつく。

ティアナやスバル、エリオにキャロはずっと無言で空を見ていた。

４人は信じている。

必ず近藤がなんとかすると。

必ず近藤が帰ってくると。

必ず平和が帰ってくると。

だから信じる。

疑うことなど皆無

失敗などしない

それが機動六課の頼れる副隊長なのだから。

ナンバーズも、空を見上げていた。
トーレはエレノアという自身の理想像を信じ、
セインはそんなトーレの信じる未来を信じた。
ディエチも成功を祈る。
セッテは目を閉じ、祈るようにしていた。

どうか、ぶじで、帰ってきてください。

セッテは初めて神に願った。

なのははもう何も疑わなかった。

近藤という男は有言実行

口にしたことは必ず完遂させる。

それがどんな無茶な事であろうと、だ。
言い換えれば、近藤は出来ない事は口にしない。

つまり、近藤は必ずゆりかごを破壊し帰ってくるのだ。

ちらりと、なのはは隣で祈るように目を閉じている親友、フェイトの見て、彼女の手を優しく握った。

「大丈夫、近藤さんなら絶対ゆりかごを破壊して無事に帰ってくる

よ」

なのははフェイトを励ます。

フェイトは不安ながら、なのはの言葉に頷いた。

確かに近藤は有言実行する男だ。

出来ない事は言わない。

ただし、それは仕事においてでの話である。

近藤には前科がある

誤認逮捕の際の取り調べである。

近藤は取り調べでかなり不当な扱いを受けた。

それこそ間違いがあれば死んでしまうような扱いだ。

それを近藤は何と言った？

近藤はヴェロッサに口止めした。

そのあとフェイトが盗み聞きするまで一言も言わなかった。

ばれた時も体の事より仕事の支障について言い出した。

近藤は唯一嘘をつく

それは、自身の身体の事だ。

近藤は絶対自分の体調を口にしない。

今までのような平和な生活ならばそれでもいいだろう。

だが、今日近藤は自身の命を蔑ろにしている行動を何度も取っている。

生身で聖王と対峙し重傷を負た。

獣王となりあわやプログラムに侵食され近藤という存在が死んでしまうかもしれなかった。

そんな時でも近藤は弱音など一言も吐かなかった。

だがユニゾンをしたとき言った

”ちょっとしんどいですけど”

しんどい

初めて近藤が弱音を吐いたのだ。

確かに近藤はゆりかごをなんとかするかもしれない。

皆の未来を守るかもしれない。

しかしそこに近藤の未来はあるのだろうか？

フェイトは祈る

近藤が無茶をしないように

笑顔で帰ってくるように

皆が信じ願っている時。突如皆の前に巨大なモニタが展開された。

クロノが地上にも映像を送ったのだ。

映し出されたのは、暗い宇宙空間

そんな無限なる空間に浮かびながらも、圧倒する存在のゆりかご

そして、絶対的存在のゆりかごに負けない神々しい存在

ユニゾンをした近藤がいた。

そんな近藤とゆりかごを映すモニタを見て、皆おもわず息をのむ。

近藤が歌っていた

宇宙空間で声が聞こえないのに
何故か歌っているとわかった

その時、なのは達の周囲で異変が生じた。
突然明滅しだすデバイス、涙を流し出すスバルにナンバーズ、エリオと、フェイト。

そして、ひとつひとつは小さく、しかしとても大きな奇跡が起こる。

Ａｍａｚｉｎｇ ｇｒａｃｅ ｈｏｗ ｓｗｅｅｔ ｔｈｅ ｓｏｕｎｄ
（驚くべき恵みよ　なんと甘い響き）

Ｔｈａｔ ｓａｖｅｄ ａ ｗｒｅｔｃｈ ｌｉｋｅ ｍｅ
（神は私のような罪深き者も救われた）

Ｉ ｏｎｃｅ ｗａｓ ｌｏｓｔ，ｂｕｔ ｎｏｗ ａｍ ｆｏｕｎｄ，
（私は見失われたが今見いだされたのだ）

Was blind, but now I see.
（私は何も見えていなかったが今は見える）

聞いたこともない歌なのに
知っている
どこか哀しく
懐かしく
温かくなる歌

'Twas grace that taught my heart to fear
（私の心に畏れることを教えたのも恵み）

And grace my fears relieved;
（そして私の心を畏れから解放したのも恵み）

How precious did that grace appear,
（なんと恵みは貴くも現れたのか）

The hour I first believed
(私が初めてそれを信じた時に)

レイジングハートが歌う
バルディッシュが歌う
皆のデバイスが歌う

Through many dangers, toils and snares,
(多くの危険と苦悩と罠を越えて)

I have already come;
(私はやってきた)

'Tis grace has brought me safe thus far,
(その間私が無事だったのも恵みのお陰)

And grace will lead me home.
(そして恵みが私を天国へ導いてくれる)

シグナムが歌う
アギトが歌う
スバルが歌う
トーレが歌う
セインが歌う
セッテが歌う
ディエチが歌う

The Lord has promised good to me,
（主は私に良きことを約束された）
His word my hope secures;
（主の言葉は私の望みを保証する）
He will my shield and portion

be,
（主は私の盾となり私の一部となる）
As long as life endures.
（命のながらえる限り）

エリオが歌う
フェイトが歌う

気付けば、そこにある全てのデバイスが、魔法技術で作られた存在が歌っていた。

Yes, when this flesh and heart shall fail,
（そうこの肉体と心が朽ちて）
And mortal life shall cease;
（限りある命が終わるとき）

I shall possess, within the veil,
（私は帳の中に隠されている）

A life of joy and peace.
（喜びと平和の命を得るだろう）

デバイス達の奏でる電子のオーケストラに、なのは達は驚く。

なんと幻想的で、なんと儚いのか

The earth shall soon dissolve
like snow,
（いつかは地球も雪のように消えるだろう）

The sun forbear to shine;
（太陽も輝きを失うだろう）

But God, who called me here be
low,
（しかし私に呼びかけてくれた神は）

Will be forever mine.
（常に私とともにあるだろう）

なのはやはやて、ティアナ、キャロ、バイパーはこの奇跡に心が震え、涙を流す。

When we've been there ten thousand years,
（何万年経とうとも）

Bright shining as the sun,
（太陽のように光り輝き）

We've no less days to sing God's praise
（最初に歌い始めたとき以上に）

Than when we'd first begun.
（神の恵みを歌い讃え続けることだろう）

デバイス達の歌が終わり、再び静寂に包まれた。

皆、モニタに映る近藤に釘付けになった。

そして近藤は、胸の前でパンと手を合わせ、天へと腕を突き上げた。

現れたのは小さな核だった。

その中心核に集まり始める力

輻射層を作り

表面対流層を作り

光球を作り

彩層を作り

遷移層を作り

コロナを作る

近藤の掲げた手の上には、光り輝く星があった。
真っ白に眩しく、暖かい光
それは命の育みを象徴するもの
栄華を象徴するもの
王を象徴するもの
――――太陽――――
すべてのいのちのはじまり
その名こそ
――――はじまりの魔法――――

「・・・彼は・・・王ではなく・・・彼こそ・・・神だったのか・・・」

スカリエッティの呟きに答える者はいなかった。

近藤の生み出した太陽は、近藤の手を離れゆりかごへと向かった。

そして太陽はゆりかごを飲み込み

みるみる圧縮し

星が小さくなり

光が反転し黒い渦が生まれ

巨大なうねりとなり

宇宙空間へと消えた

「すべての命のはじまりである太陽と、すべての終焉であるブラックホール（虚無）・・・相反する存在が混在する矛盾・・・しかし、結末は同じ・・・すべての破壊の先にはじまりがある。つまり・・・

誕生と破壊は同じ・・・」

そう言いスカリエッティは涙を流していた。

膝をつき、天を見上げ、とめどなく流れる涙を拭うことなく、その表情は先程までの狂った笑みは何処にもなく、憑き物が取れたような晴々とした表情であった。

近藤がゆりかごを破壊し、ゆっくりと地上に下りる。

地上では大歓声が起こっていた。

巻き起こる拍手、鳴り止まない歓声、人々の感謝の声。

地上の奇跡

宇宙の奇跡

それらすべては一人の男とユニゾンデバイスが起こした必然。

近藤を嫌っていた武装局員達も喜び祝福している。

エリオやキャロ、スバル、ティアナも飛び上がって近藤を祝福した。

ナンバーズ達も拍手して近藤を待っていた。

なのはやはやて、シグナムも盛大な拍手をしていた。

そしてフェイトは、涙を流し無事に帰ってきた近藤に喜んだ。

近藤はゆっくりと地上に降り立ち、機動六課のメンバーが、ナンバーズ達が近藤に駆け寄る。

そのゆったりとした動作、ある意味優雅な動きをする近藤は、近寄るなのは達を見ず俯いていた。

そして近藤とエレノアはユニゾンアウトし、二人に戻り、エレノアは言った。

「はやく医療班を呼んで！！」

ユニゾンアウトしたエレノアが大声で叫ぶ。
その声は悲鳴に近く、表情も切迫していた。

なのは達は一瞬エレノアの言葉の意味がわからなかった。
いや、もしかしたらいつものジョークと捉えたのかもしれない。
だから気付かなかった。
近藤が俯き、顔面蒼白になっているなど。

そしてエレノアの隣で、顔面を蒼白にした近藤が

大量の血を吐きだし

スローモーションのように、その場に倒れた。

# 第９３話（後書き）

裏話２

はやて　「近藤さんエレノアさん主体のユニゾンしとったなあ・・・」

なのは　「うん、綺麗な黒髪だったね」

はやて　「あれは・・・アレか？今はやりの『男の娘』いうやつか？」

なのは　「・・・どうしてはやてちゃんはそういう方向に持っていくかなぁ・・・」

シグナム　「・・・本当にスマン」

## 第９４話（前書き）

前回の歌ですが、気付いている方もいるでしょうが

「アメイジンググレイス」です。

あれはいい歌です。

それでは第９４話です。

# 第９４話

ゆりかご事件改めＪＳ事件から3日経った。
管理局の各部隊は事後処理で忙しく動く。
休日返上、連日残業の続く毎日だ。

当然、機動六課も忙しい。
特に機動六課は今作戦の主軸であったため、重要報告満載だった。
しかし、機動六課はしばらくは機能しなかった。
なぜなら主軸となって働いていた隊長陣や隊員達に負傷者が多く、入院しているためである。
まあ、そのしわ寄せが事件中ほぼ無傷だったはやてやシグナム、フェイトにのしかかりヒイヒイ言っているのだが。
それに、皆が命に別状ないためそれ程悲観するものではなかった。
ただ一人を除いて。

「・・・まだ目を覚まさないんですか」

病室内でフェイトが呟く。

目の前には眠っている近藤と、付き添うエレノアがいた。

「・・・ええ、まあ衰弱と過労だからもうしばらく休めば目を覚ますでしょう」

そう言いエレノアは静かに眠る近藤の頭を撫でた。

ゆりかご事件について管理局からのマスコミ向けの報告は、事実とは異なっていた。

『管理局の誇る次元航行艦のアルカンシェル一斉掃射によってゆりかごは破壊した』と報告されたのだ。

これは別に管理局の威信のためではなく、エレノアが言い出したことである。

「一個人がゆりかごを破壊できる力を有しているなんて事実を正直に報告してしまえば、その後のご主人様に命の危険が及ぶ可能性があるから」

ということらしい。

近藤自身力を誇示したいとも思っていないし、管理局の体裁も保てる。

アルカンシェルでゆりかごを破壊したというのは一番現実的であるため、特に異論や反論もなく決定となった。

つまり、あの日あの時の奇跡は、公然の秘密となったのだった。

事件終了後、程なくしてヴィータが意識を取り戻し、近藤を除く機動六課メンバー全員が顔を合わせ、皆で事件終結を喜んだ。

スカリエッティとナンバーズ達は全員が逮捕され、ルーテシアやガリュー、アギトも同様である。

ただ、スカリエッティは事件終結後ものすごくスッキリとした顔で大人しく逮捕され、現在の取り調べにも協力的なのだそうだ。

近藤が宇宙で起こした奇跡がスカリエッティになんらかの影響を及ぼしたと予想されるが、それはあくまで予想である。

本当のところはスカリエッティも語らないため謎ではあるが、捜査に協力的でスムーズに進むからあえて誰も深くは突っ込まなかった。

そして事件終結の2日後、ヴィータが意識を取り戻し落ち着いた頃、エレノアが機動六課の前線メンバー全員を集めた。
といっても動けないヴィータの病室に皆を集めただけであるが。
近藤は未だ目覚めず別室にいる。

集められたなのは達は、エレノアの話すことに大体予想がついていた。

おそらく、近藤のことである。

神妙な面持ちで皆の顔を見渡したエレノアは、ゆっくりと語る。

「皆、大体察しはついてると思うけど、ご主人様の事についてよ」

エレノアはこの場にいない、未だ目を覚まさない主の事を語りだした。

「まず、ご主人様の現状だけど、命に別状はありません。極度の疲労と衰弱による過労だから」

「え？じゃああの大量の血は・・・」

スバルが挙手しながら質問する。

「ああ、あれはヴィヴィオちゃんとの戦いで内臓を傷付けて、その時の胃に溜まっていた血を吐き出しただけだから」

それを聞いてホーッと大きく息を吐く一同。

しかし、エレノアの話は終わらなかった。

「次にアカシックレコードについて話すわね」

「アカ・・・なんだって？」

ヴィータが首を傾げた。

「アカシックレコード、根源、つまり宇宙創世から遥か無限の未来を内包しているモノよ」

「・・・それが何か？」

スバルが腕を組み首を傾げる。

「ご主人様はアカシックレコードとリンクしている、つまりご主人様は未来を見ることが出来るのよ」

「・・・え？」

エレノアの言葉に、はやてが声を漏らした。

「それは、カリムみたいなレアスキルなんか？」

「いいえ、レアスキルではないわ。宇宙の意思とコンタクトを取れる人というのは、いつの時代にもいるわ。人はそんな人物を『救世主』と呼ぶわね。それに彼女のような『未来を予言』ではなく『確定した未来』を見ることができる」

「・・・近藤副隊長が・・・救世主だと？」

ティアナが僅かに震える。

しかし、エレノアは首を横に振りソレを否定した。

「いいえ、ご主人様はあくまでイレギュラー、アカシックレコードを完全には使いこなせないの」

エレノアは語る。

8年前、近藤がなのはを庇い重傷を負った際、死の淵で宇宙の意思、全ての根源たるアカシックレコードとリンクしたのだと。

そしてそのリンクは不完全で、あまり多様すれば命に関わるものだと。

そこではやてが話に割り込んだ。

「ちょい待ち、そのアカシックレコードいうのを今更言うのはなんでや？・・・まさか近藤さん、この事件の顛末知っとったんか・・・？」

はやては言いながらドクドクと心拍数が上がるのを感じた。

「ええ、知っていたわ」

エレノアは軽く言う。

これにはやては怒りをあらわにした。

「こうなる未来を知ってて変えよう思わんかったんか？」

努めて冷静に話すはやてだったが、声は震えていた。
未来を知っているなら、変えようと努力するじゃないか。
より良い未来を目指すじゃないか。

近藤はそれを放棄したのか！？

皆が傷付く未来を知っていて、変えようと思わなかったのか！

「未来は垣間見た瞬間、確定し過去になる」

「・・・え？」

エレノアは悲しむでもなく、機械的な作業を行うように話す。
過去は変えることができない

つまり、未来を知った瞬間その未来は過去になる。
近藤の未来は確定してしまった。
確定したものを変えようとするのはまず不可能だ。

そして無理に未来を変えようとすれば世界から修正を受け、最悪世

界そのものが消滅していまうと。

「・・・じゃあ、近藤さんがゆりかごを破壊して倒れるっていう未来は決められていたっていう事ですか？」

「倒れた未来は見ていなかったけど、その通りよ」

震えるようなのはの声に、エレノアは淡々と答える。

そんな態度が気に入らなかったのか、シグナムがエレノアに突っ掛かる。

「何故近藤はそんな大事な事を私達に教えてくれなかったのですか！？」

仲間だと思っていたのに！

家族だと思っていたのに！

何故私達に相談してくれなかったんだ！

なのはやはやて達も口には出さなかったが、皆同じ思いだった。

しかし、エレノアは冷たく言い放つ。

「未来は些細な事でも変化する恐れがある。もしご主人様以外の第三者がその知るべくもない未来を知ってしまうと、世界の修正が働く可能性がある」

そう言われシグナムは言葉を詰める。

確かに本来知る由もない未来を見たという事実だけでも大きな改編

になる可能性がある。
しかしこれはあくまで可能性であって、絶対ではない。
実際近藤はヴェロッサに未来のことを告白しているから、そう危険なものでもないのかもしれない。

だが、理由はそれだけではないと皆感じていた。

「では次にご主人様の希少能力（レアスキル）についてね」

エレノアの声のトーンが一段下がる。
それは、苦しいのを我慢しているように見えた。

「待ってくれ、近藤のレアスキル？あいつまだ反則くせぇの持ってんのか？」

ヴィータの言い方は辛辣だが、尤もな言い分であったため皆苦笑した。

「いいえ、ご主人様の全ての能力はひとつのレアスキルによるものよ」

そんな皆の見解を否定するエレノア。
その顔に笑みはない。

「まず、『黒化』と『空間短縮移動』について説明するわね」

エレノアは二つの能力について説明した。

黒化とは、近藤のいる時間軸や空間をずらし相手の攻撃を一切受け

ない、ただし近藤自身も攻撃できない能力であること

空間短縮移動とは、近藤と行き先の空間を縮め跨ぐ移動方法、つまり瞬間移動とは理論が異なる能力であること

その二つの説明を聞いて皆呆れていた。

しかしこの二つがひとつのレアスキルによるものであるというのがわからない。

しばらく考え込んでいると、はやてがハッと思い付いた。

それは、とても危険な能力だった。

「・・・・・時間・・・空間・・・か・・・」

はやての答えにニコリと笑うエレノアはさらに語る。

「そう、ご主人様のレアスキルは『自身の時間や空間を操作できる』という能力よ」

「・・・・・・なっ・・・・!?」

絶句する一同。

たしかにその能力ならば黒化も空間短縮移動も説明がつく。

しかし、その能力がそれだけではないというのはエレノアの雰囲気を見てわかった。

この能力にはもっと重要なことがあると。

「そしてご主人様と私がユニゾンしてゆりかごに使った魔法ね」

エレノアはさらに説明する。

近藤はあの魔法に名前をつけていない。

エレノアが勝手に『はじまりの魔法』と名づけているだけである。

そもそも近藤がエレノアとユニゾンしないと使えない魔法であるため、名前を付ける必要性を感じなかったらしい。

そしてエレノアはさらに驚愕の事実を話す。

「あれは太陽を作り出したのよ」

「・・・・・・は？」

はやては間の抜けた声を出す。

スバルやエリオ、キャロはすでにちんぷんかんぷんだ。

「だから、あの魔法は小さな太陽を生み出し爆発させてブラックホールを生み出すものなの」

「・・・・・・・・・・はぁ？」

今度はなのはとフェイトが声を揃えて漏らした。

人が星を作り出す？

何を言っているんだ？

いくら魔法とて、そんなこと出来るはずがない。

「・・・で、その魔法と近藤のレアスキルにどのような繋がりが？」

シグナムがエレノアに問う。

シグナムは、まあ近藤なら何をしても不思議ではないと思い、エレノアの説明を軽く肯定したのだった。

だいたい、そんなことで悩むことが時間の無駄である。

「・・・皆思ってるとおもうけど、普通人間の魔力でも現在の科学力でも人間が星を創るなんて無理なの」

「・・・？さっきと言ってる事が違うじゃねーか？その太陽を創る魔法は実際近藤が出したんだろ？」

ヴィータが首を傾げる。

「人の命のエネルギーというのはとてつもなく大きいの。それこそ惑星をひとつ破壊できる程の、ね」

エレノアが悲しみを帯びた表情で語るそれを聞いて、フェイトはギクリとした。

エレノアは言ってはいけない事を言おうとしている。

聞いてはいけない事を言おうとしている。

フェイトはおもわず耳を塞ごうとした。
しかし、隣にいるなのはに手を握られ止められた。
「フェイトちゃん、逃げちゃダメだよ。私達は聞かなきゃいけないの」
なのはの瞳はまっすぐフェイトを見た。
「・・・・・うん」
フェイトは目を閉じ、覚悟を決めた。
それを見計らって、エレノアは告白する。
「ご主人様はある仮説を立てた。『惑星を破壊できるほどのエネルギーを内包している生命力ならば、逆もまた可能なのではないか？』ってね。そしてご主人様は自身のレアスキルの特性を理解した。ご主人様は自身の生命力を魔力に変換できるという特性をね」
「生命力・・・だと・・・！？」
シグナムが僅かに声を漏らすが、なのはやフェイト達は声も出なかった。
「もっと詳しく言えば、『寿命』を魔力に変換するの」

「・・・まって」

フェイトは呟く。

しかし、エレノアは続ける。

「ゆりかご程の質量を持つ兵器を飲み込む魔法を創るのは並大抵の魔力では足りない。だから、ご主人様は寿命を使ったの」

「・・・待って」

「使用した寿命は5年。ご主人様のこの先5年の生命力を前借りした。自身の未来5年を使って世界の未来を護ったの」

「待って！」

フェイトは声を荒げる。

静寂の空間でのいきなりの大音量に驚き、皆ビクッとした。

「・・・あの魔法はご主人様にしか使えないし、ご主人様の魔力しか使わない。ユニゾンした私の役目は魔法構築の演算を手伝うだけ」

「もういい！」

フェイトはエレノアの肩を掴む。

「・・・私には何も出来なかった。定められた運命を変えることも出来ず、ご主人様の命が擦り減って行くのを見ているしかなかった・・・！」

「もういいから！」

フェイトはエレノアを抱きしめる。

いつの間にかエレノアは涙を流していた。

ポロポロと涙を流し尚も自分を責めるように独白する。

「私はデバイスなのに！ご主人様を助ける為にいるのに！ご主人様を傷付ける事しか出来ない！！」

「もういいから！自分を責めないで！！」

フェイトは崩れるエレノアの頭を抱きかかえ、同様に崩れるように膝をつく。

「――――私は！・・・私はあぁぁーーーっ！！」

エレノアは泣き叫ぶ。

主を助ける事が出来ない自分を責めて、泣き叫ぶ。

「あああぁぁぁーーーっっ！！」

愛する者が傷付くのを傍らで見ているしかない苦痛

助ける事が出来ない激痛

傷付ける事を手伝う罪悪感

皆エレノアの苦しみが痛いほどわかってしまった。

「わあああぁぁぁぁぁーーーーっっ！！」

だから、エレノアの慟哭に誰も動く事ができず、ただ佇むしかできなかった。

フェイトも、エレノアを抱きしめるしか出来なかった。

エレノアの泣き叫ぶ姿を見たなのは達は、結局それ以降声をかける事ができずお開きとなった。

エレノアを介抱するために残ったフェイトは別室へ移動した。

未だ俯き泣きすするエレノアの隣で、喋らずずっとエレノアを見守るフェイトは、こんなにも弱々しいエレノアを見て驚いていた。

いつも傍若無人、わがまま、快楽主義を地で行くエレノアがこんなにも自分の無力感に苛まれ、責めている姿など誰が想像できるだろうか。

「・・・情けない所を見せちゃったわね」

泣き顔をごまかすように笑うエレノアだったが、目や鼻は赤くなり

その笑顔は痛々しい。

「・・・でもちょうどよかった。」

「・・・え？」

エレノアがフェイトの方を向き言った事に、フェイトは首を傾げた。

「さっきも言った通り、ご主人様は５年寿命を削ったわ」

「・・・うん」

エレノアの言葉に重く頷くフェイト。

だが、エレノアはさらに残酷な言葉を発する。

「ご主人様は、今までも実験なんかも込みで何度かあの魔法を使っているの」

「・・・・・・！？」

フェイトは驚愕する。

たしかに魔法を構築し完成させるには練習、実験、研鑽が必要だ。

まして、星を作り出す魔法など生半可な実験では済まないはずである。

一体近藤はあの魔法を完成させるまでにどれだけの寿命を削っていったのだろうか？

そんなフェイトの考えがわかったのか、エレノアはクスリと笑った。

「大丈夫・・・とは言えないけど、今までの『あの魔法』で使用した寿命はトータルで3年程だから」

「そ・・・そうなんだ・・・」

フェイトはホッとした。

それでも3年の寿命を削っているのだから、素直に安心はできない。

つまり、近藤はあの魔法で8年寿命を削ってしまっているのだ。

今回初めて寿命5年という大きな代償を払ったのだが、それによる体にかかる負担は近藤の予想を上回っていたようで、結果倒れてしまったのだ。

そしてエレノアはフェイトに残酷な現実を突き付ける。

「・・・おそらくご主人様は４０歳まで生きられない」

ドクン　と　フェイトの心拍が上がる。

「・・・あ・・・う・・・・・・」

肺が空気を欲し、呼吸が荒くなる。

あまりにも激しい呼吸をして過呼吸に陥りそうになる。

視界が狭くなり、耳から聞こえる音が小さくなっていく。

耳障りな程自分の鼓動がドクドクと聞こえる。

４０歳、つまり近藤はあと１０年程しか生きられないのだ。

「平均寿命より低いのは、ご主人様が自身の持っていたデバイスのコアと融合し、さらにアカシックレコードとリンクした代償よ」

近藤は世界を救った。
世界中の人々の未来を護ったのだ。

だが、彼の未来に救いはない。

人々の未来と引き換えに、自分の未来を削ったのである。

自己犠牲による自己満足と言われるかもしれない。
しかし、彼の決定された未来がそうなっているのだから従うしかないじゃないか。

近藤はいわばヒーローだ。

だがこんなにも救いのないヒーローがいるだろうか。

以前なのはがエレノアに対してこう言った。

近藤の幸せは何処にあるのか、と。

まさにその通りだ。

フェイトの視界が歪む。

涙で歪む。

自分には何もできないという思いで潰れてしまいそうになる。

そんなフェイトに、エレノアはポンと肩に手を乗せ言った。

「だからフェイトちゃん、ご主人様のこれからの１０年あまりの人生を幸福なものにしてあげて」

エレノアは笑う。

そしてフェイトは思い出した。

過去は変えることができない。

ならば、彼の未来を幸せなものにしていこう。

最初に近藤に誓った言葉じゃないか。

「お願いします。ご主人様が幸福だったと思える人生の為に、あなたの人生をください」

エレノアは頭を下げフェイトに懇願した。

フェイトは驚くよりも、羨ましいと思った。

エレノアさん、

ああ、なんて一途なんだろう

なんて気高いのだろう

あなたの心はなんて純粋で澄んでいるのだろう、と

当然、フェイトの答えは決まっていた。

頭を下げているエレノアの手を取り、涙ぐんだ瞳で笑い宣言する。

「私、フェイト・テスタロッサ・ハラオウンは、これからの人生を大輔さんに尽くすために使う事を約束します」

エレノアはフェイトのそんな言葉を聞いて顔を上げた。

エレノアとフェイトが見つめ合う。

お互い泣き顔でぐちゃぐちゃだが、それでも晴れ渡るような笑顔はまさに女神のようだった。

その翌日、つまりゆりかご事件終結から3日後、フェイトは近藤の病室に赴き、エレノアと他愛のない話をしていた。

フェイトはずっと近藤のそばにいたかったが、彼女の仕事がそれを許してくれない。

それに驚くべきことに、仕事嫌いのエレノアも近藤のするべき仕事をこなしていた。

エレノアは近藤程ではないにしろデスクワークが優秀で、このうれしい誤算にはやては手を挙げて喜んだ。

ティアナやスバル、エリオ、キャロも見舞いに来たがっていたが、彼女達にも仕事が山積みであるため見舞いにくる時間も作れないでいた。

フェイトは眠っている近藤を見る。

静かに胸を上下していることで息をしているのがわかるが、まったく起きる気配がない。
左腕には点滴のチューブが付けられ、どこか痛々しい。

近藤の安らかな寝顔を見ていると、もしかしたらこのまま起きないのではないかと思ってしまう。

フェイトは近藤の左手をそっと握る。

「もう、早く起きてください。エレノアさんが処理してくれてるけど、大輔さんの仕事はまだまだいっぱいあるんですからね」

「・・・うへっ」

エレノアはものすごく嫌そうな顔をした。

「それに、言いたいことが沢山あります。沢山・・・沢山・・・」

フェイトはそう呟きながら思い描く。

さて、何を言おうか？

まずは無茶をしたことを怒ろう

そして大事なことを内緒にしていた事を怒ろう

次にシグナムから聞いたドゥーエに言ったという言葉の意味の真意を問いただそう

セッテに優しく接していた事を尋問しよう

・・・ああ、なんだろう

ものすごくドロドロしたものが渦巻いている感じだ。

「・・・ふふ・・・ふふふ・・・・・・」

俯くフェイトはいつの間にかどす黒い笑みを浮かべ、軽く握っていた近藤の手をギリギリと締め上げていた。

「・・・ひえええぇぇ」

そんなフェイトを見てエレノアは戦慄し、恐怖した。
そして思った。

（私、人選間違えたかな？）

「あの・・・手、痛いんですけど・・・」

突如聞こえた野太い声に、フェイトとエレノアはハッとする。

今、一番聞きたい声

愛する人の声

フェイトとエレノアは見た。

そこには、目を開け、苦笑している男が二人を見ていたのだ。

短く刈られた黒髪に
浅黒い肌
顔の３分の１は隠れている大きな眼帯に
優しそうな左目

デスクワークは優秀で
でも自分にズボラで
とてもシャイで
鈍感で
でも、ものすごく頼れる
機動六課の副隊長
近藤大輔

フェイトとエレノアは大粒の涙を流し、近藤に抱き着いた。

「もう！三日も起きないから、心配したんだから！！」

「ご主人様のバカー！！」

そう言いながらワンワン泣くフェイトとエレノアは、近藤の胸にしがみつき泣き叫ぶ。
フェイトなど先程までのどす黒い感情がどこかへ飛んで行ってしまった。

未だ脳が完全に覚醒していない近藤は、事態が飲み込めずあたふたするしかなかったが、とりあえず言う言葉があった。

「ただいま」

近藤は二人の頭を優しく撫でる。
そして二人も満面の笑みで応える。

「お帰りなさい！！」

# 第９４話（後書き）

裏話３

フェイト　「ところで大輔さん、シグナムから聞いたんですが、ドゥーエになんか『俺のモノになれ』っていったそうですね」

近藤　「あ、あれはですね、獣王のせいで・・・」

フェイト　「それにセッテにえらく優しく接してましたよね？涙を拭いてあげたりして・・・」

近藤　「い、いや、あれは・・・」

フェイト　「ティアナからも聞きましたよ、ノーヴェが大輔さんを尊敬しているから救い出すって言ったって」

近藤　「・・・そ、そうですか・・・」

フェイト　「いろんなところでいろんな女の人に甘い言葉かけてたり、手を出したり・・・」

近藤　「い、いや・・・べつに他意は・・・」

フェイト　「ゆっくり・・・じっくり・・・お話しましょうね・・・」

近藤　「・・・・・・・・・・・助けて、エレノア」

エレノア「無理。」

# 第９５話　最終話（前書き）

長らくこの物語をみていただきありがとうございました。
一応今回が最終回です。
まあ、まだエピローグがありますが。

なんとも回収くさく、まとめきれてない内容ですがよろしくお願いします。

ではどうぞー

# 第９５話　最終話

今日も近藤は忙しくコンソールを叩く。

それは人のスピードを明らかに超えた速さで。

同時に近藤の前に展開されたモニタには、凄まじいスピードでウィンドウが出たり消えたりを繰り返しみるみる書類を掃けていく。

「あの・・・はやて隊長？」

近藤は困惑しながらはやてをチラリと見る。

「んー？なんやー？」

はやて近藤を見ずに難しい顔でモニタとにらめっこしていた。

そして近藤は控えめに言う。

「あの、俺もう正式に元帥になったんで、機動六課の仕事する必要ないですよね？」

ゆりかご事件（ＪＳ事件）から3ヶ月が経過した現在、事後処理も落ち着き、機動六課は通常任務をこなす毎日を送っていた。

この間、一番の動きは近藤が正式に元帥に就任したことだろう。

以前の記者会見も記憶に新しいので、当然マスコミは反発し猛烈な批判をした。

しかし、近藤が列挙した提督、将官達の不正及び逮捕の多さに黙ってしまった。

さらに近藤が調べ上げたこの内部告発の為に、今まで甘い汁を吸っていた関連企業や政治家、一部のマスコミまで槍玉に上げられた。

「別に彼等の功績全てを否定はしないが、私利私欲に走る膿は徹底的に吐き出す」

この一言でマスコミは何も言えなくなった。

というか、近藤が元帥になるということよりも大スキャンダルが多すぎてどうでもよくなったのだ。

そして晴れて元帥となった近藤は、機動六課から離れるはずだった。

だが、何故か現在も近藤は機動六課に居続け、仕事を行っている。

制服も以前と同じだし。

おかしい

明らかにおかしい

しかしはやては言う。

「だって近藤さんおらんかったら機動六課回らへんもん」

「・・・・・・・」

そんなことを堂々と胸を張って言うはやてに、近藤は呆れてしまった。

デスクワークが終わり、近藤はこれまた何故か仮想シミュレータにいて、スターズとライトニングの訓練を手伝っていた。

「ほい、これがアンダー・ジ・イヤーだ」

そう言い近藤は攻撃を仕掛けて来るスバルを巧みに避け、スバルの耳の後ろに軽く掌ていを打ち込む。

「がっ!?」

バチンッと大きな音が響きスバルの膝がカクンと折れる。

「そしてこれがジョーだ」

崩れるスバルの顎先を的確に狙い、スバルの脳を揺さぶる。

「う・・・あ・・・」

スバルは脳を激しく揺らされ平行感覚を無くしそのまま尻餅をついた。

「――――とまあ、人間の頭は的確に狙うと簡単に崩れるわけだ」

近藤がそう言うとオオーーという歓声と共に拍手をおくるティアナ、エリオ、キャロ、そしてなのは。

その横でホーと感心するシグナムとヴィータ。

「・・・なんで俺が訓練参加してるんだ？」

気付くのが遅い近藤はなのはを見た。

「まあ、格闘技能は私なんかより達人が教えた方があの子達にもためになりますし」

なのははペロッと舌をだす。

どうやら確信犯らしい。

「うむ、私もレヴァンテインを手放した時の肉弾戦として大変参考

になる」

シグナムがウンウン頷きながらなのはに賛同する。

「・・・まあ、なんだ、諦めろ」

ヴィータが憐憫の眼差しで近藤を慰めた。

「・・・おかしいな・・・俺がここにいるって誰も疑問に思わないのか？」

近藤がそう呟くと、ティアナが言った。

「え？近藤副隊長は、元帥になっても副隊長として機動六課が解散するまでここにいるんじゃないんですか？」

「え？」

「あ、僕もそう聞きましたよ」

エリオもティアナに続いた。

「マジか。誰に？」

「八神部隊長です」

キャロがそう言うと同時に、近藤は膝をついた。

そしてその日、はやてがミゼット提督に手を廻し正式に許可をもらい、近藤は機動六課残留が決定されたのだった。

ちなみにエレノアはずっと近藤の部屋に引きこもりゲームをしてい

た。

「大輔さん、はい、あーん」

「・・・」

「あーん」

「・・・・・・」

「あーん！」

「・・・・・・・・あー」

「ふふふ、どうですか？」

「・・・おいしいです・・・」

「ありがとうございます♪」

「・・・・・・」

こんなストロベリーな空気を撒き散らしているのは、当然フェイトと近藤である。

夕食時、フェイトは自分が作った料理を近藤に振る舞うのが慣例と

なった。

まあそれ事態はいい。

だがフェイトはとんでもない行動を取る。

「はい、あーん」

である。

最初近藤は断固拒否した。

だって食堂だし

皆見てるし

エリオとキャロが目の前でジーッと見てるし！

しかしあまりにも頑なに拒むと、フェイトが泣き出すのだ。

「ぐすん・・・私の料理・・・そんなに嫌ですか・・・？」

「い、いや、料理ではなくてですね、その・・・自分で食べれますし・・・」

「大輔さんに食べさせてあげるのは、私の使命です！」

「・・・・・・」

結果、へたれな近藤が折れてしまい、ストロベリーな空間を生み出

す結果となったのだ。
あまりにも甘ったるいので、エリオとキャロは近藤とフェイトのテーブルから離れて食事しだした。

そして、普通衆目でそんなストロベリーを見せ付けたら周囲から殺気なり苦情なりがでるものなのだが、ものすごく幸せそうな顔のフェイトに、疲れ果てた顔の近藤があまりにも不憫で痛々しく何も言えないのだ。

「・・・フェイトちゃん、幸せそうだね。・・・でもアレ見てると胸やけするね」

「くっ、アレは私等への当てつけか？・・・私もいつか近藤さんよりエエ男捕まえたるからな・・・！」

なのはやはやてですら表立って口出しできないでいた。

翌日、近藤は隔離施設へ赴いた。

制服は元帥のソレとなり、青いダブルのジャケットに白いパンツ、白の手袋そして白のマントを羽織る。

意外と似合う凛々しい元帥の姿に、付き添いのギンガはホウとため息をついた。

スカリエッティに体をイロイロと弄られたギンガだったが、マリエル技官の手腕によって以前のような健康優良女子として復活していた。

施設の中を歩いている途中、ギンガと他愛のない話をした。
そんななかで、こんな話題が出た。

「そういえば、今日元帥がお越しになると彼女達に言ったら、皆喜んで今日を楽しみにしていましたよ」

「え、そうなの？・・・まずいな、今日はお菓子とか持ってきてないぞ」

どうやら近藤は自分がおいしい菓子を常に持っている男と思われていると、勘違いしているらしい。
そんな的外れな事を言う近藤に、ギンガは呆れた。

隔離施設といっても、独房のような苦しさはない。

普通に清潔で快適なスペースはあるし、更正プログラムさえこなせば個人の時間もある。
食事も普通のものだ。

そんな施設のひとつに、芝生をはったリラクゼーションルームがある。

まあ一言でいうと屋内公園である。

そこに、先日の事件で逮捕、保護された人物が集まっていた。
メンバーはセイン、ウェンディ、チンク、ノーヴェ、ディエチ、オットー、ディード、ルーテシア、アギトの計9名である。
皆、今日近藤が来るということでソワソワしていた。

「お、おいウェンディ、あたしの髪寝癖とかついてないよな!?」
「大丈夫っスよーノーヴェ、綺麗なサラサラヘアーっス!」
「そ、そうか?よ、よし!!」

「オットー、あなたはいつまで鏡を見ているの?」
「・・・僕の髪はツンツン・・・ディードみたいなツヤツヤサラサラな髪がうらやましい・・・」

「ディエチ、まだあの男が苦手なのか?いい加減慣れろよな」
「そうは言うけどねセイン、あのファーストコンタクトはトラウマものだよ・・・」

「・・・こんどう・・・私を抱きしめてくれた男の人・・・」

「・・・？あれ、ルールー顔赤いよ？風邪か？」

「・・・風邪じゃない・・・アギト、なんか今日はうれしそう・・・」

「ん？そう？まあ、アイツはあたし等の恩人みたいなもんだしな。礼の一つでも言ってやらないと！」

「・・・皆楽しそうだな・・・姉は一人のけ者で淋しいぞ・・・」

なんとも賑やかだった。

そうこうしていると、リラクゼーションルームに近藤とギンガが現れた。

近藤が軽く手を挙げ挨拶する。

「やあ、皆元気にしてたかな？」

だがナンバーズ達は、近藤に駆け寄ることなく、元帥としての姿を見て固まってしまった。

「・・・か、カッコイイ・・・」

「凛々しい・・・」

「なんかできる男って感じだ・・・」

「うむ、いい眼帯だな」

主にナンバーズが近藤を見てほうけてしまった。
そんなナンバーズ達を見たギンガは、クスクスと笑っていた。
そして固まるナンバーズを尻目にルーテシアとアギトがトテトテと近藤に近付いた。

「・・・あなたが私を助けてくれた人？」

ルーテシアは近藤を見上げながら首を傾げる。
近藤はしゃがみ、ルーテシアと目線を合わせニコリと笑った。

「俺だけじゃないさ。エリオやキャロ、あと君の使い魔の・・・ああ、ガリューも君を助けるために頑張ってた」

「でも魔力の暴走を止めてくれたのはあなた？」

ルーテシアはかわいらしく首を反対側に倒す。

「んー、まあそれは・・・そうかな・・・」

あまり自分の手柄だと主張したくない近藤は、控え目に答えた。

するとルーテシアはニコーッと満面の笑みを浮かべ、近藤の首に腕を回し抱き着いた。
そして伝えたい言葉を言った。

「・・・ありがとう」

近藤は少し驚いたが、すぐに平静に戻り抱き着くルーテシアの頭を軽く撫でてやった。

「どういたしまして」

近藤は少女の感謝の言葉を心から受け入れた。

「あたしも言わせてくれ！近藤・・・元帥だっけか？あんたのおかげでルールーが元気になった！ルールーのお母さんも元気になった！旦那も元気になった！全部あんたのおかげだ！だから、ありがとう！！」

アギトは近藤の回りを飛び回り小さい花火を打ち上げ、感謝の意を表した。

「あー！お嬢とアギト抜け駆けっスー！！」

「ズリーぞお嬢！あたしもお礼が言いたいんだ！」

「なんか面白そうだな。あたしも混ぜろー！」

「・・・んん！ま、まあファーストコンタクトは水に流してやろうかな？」

「僕も撫でてほしいな」

「ダンディな貴方は私のストライクゾーンど真ん中です。ああ、やはり私はオットーと好みが同じなのね」

「私はその眼帯の入手ルートが知りたい」

騒がしく近藤に駆け寄るナンバーズ達と、そんなナンバーズを見てクスリと笑うルーテシアとアギト。

いつの間にか近藤の回りは笑顔に満ちていた。

隔離施設でナンバーズ達やルーテシア、アギトとコミュニケーションを取ったあと、近藤は病院へと向かった。

彼女達は近藤と別れるのを拒んだが、近藤にも仕事があるため後ろ髪引かれながらその場を後にした。

近藤の向かったその病院は管理局の息のかかった病院で、近藤にとって何かと融通が利く便利なところだ。

そんな病院の中の、角の個室部屋の前に近藤は佇む。

部屋の入口には病人の名前『バロウ・スイフト』と書かれていた。

近藤は、そんな部屋のドアをノックする。

「近藤です。失礼します」

そう言って部屋のドアを開けると、部屋にはベッドに座り、本を読んでいる壮年の男性、ゼスト・グランガイツがいた。

ゼストは近藤を見るとすぐに敬礼をしようとするが、近藤はそれをやんわりとやめさせた。

「体調はどうですか？」

「ああ、良好だ」

「それはよかった」

近藤はそう言い、パイプ椅子をゼストのベッドの横に持って行き座った。

お互い目を合わせず、しばらく沈黙が続いたが、近藤は現在のルーテシアの事、アギトの事、メガーヌの事を話した。

「メガーヌさんも目を覚まし、現在リハビリ中です。この病院にいますから、今度会ってやって下さい」

「・・・そうか」

ゼストはそう言うと黙ってしまった。

もともと近藤もそれほど口数が多い男ではないので、妙な沈黙が部屋に流れる。

そんな沈黙を破ったのはゼストだった。

「近藤元帥、あなたには感謝している」

急にゼストは近藤を見て礼を言い出した。

「ルーテシア、アギト、そしてメガーヌ、彼女達を救ったあなたには感謝しきれない」

――――そして、あの日の真実を知ることが出来た事

最後は口にしなかったが、ゼストは近藤に頭を下げた。

そんなゼストに近藤は戸惑うが、礼は素直に受け取ることにした。

「――――だが教えてくれ。何故あなたは俺を生かした？」

ゼストは鋭い視線で近藤を見た。

「俺は人造魔導士としては欠陥品だった。それにまともなメンテナンスも受けていなかったポンコツだった。あのスカリエッティすら投げ出すような俺の体を治して、一体何をさせるつもりだ？」

ゼストの鋭い視線に対し、近藤はフンと鼻を鳴らした。

「あなたが死ねば、悲しむ人がいる。だから救った。それが理由ではダメですか？」

そんな、なんでもないように言う近藤に、ゼストは驚いた。

「・・・だが、俺は一度は死んだ身。今更・・・」

「これは運命ですよ、騎士ゼスト」

「運命・・・だと？」

訝しむ顔のゼストに対し、近藤は軽く言った。

「あなたは死ぬべきではなかった。だから生きながらえた。ただ、それだけですよ」

まだ死ぬべきではない

ゼストは目を閉じ近藤の言葉を反芻する。

思い返すのは、死ぬなと泣き叫ぶアギトの姿、心配そうに自分を見上げるルーテシア。

「そうか・・・俺は・・・生きていいのか・・・」

「あなたは死んでいった部隊の人達の分も生きなければならない。そして今あなたには生きて欲しいと願っている者達のためにも生きなければならないんですよ」

「・・・そうか・・・」

ゼストは天を仰ぎ、溢れる涙をこらえるのに必死だった。

そして時間は過ぎ、機動六課試験運用期間が終了した。

その解散の日、なのはは新人フォワード達他前線メンバーを仮想シミュレータに呼び出した。

「あのー、こんな場所に呼び出して何をするんですか？」

ティアナがおずおずと挙手する。

なのははティアナに背を向けていたので表情は伺えなかったが、肩が僅かに震えているのは見てとれた。

そしてくるりと振り返るなのはは、笑顔でとんでもないことを言った。

「これから隊長チーム対フォワードチームで模擬戦を行います！もちろん全力全開のガチで！！」

「えええぇぇーーっ！？」

フォワード達は驚きの声を上げる。
そしてフェイトも驚いていた。

「何それ!?私聞いてないよ!?」

フェイトは近くでニヤニヤしていたはやてに詰め寄る。

「だってフェイトちゃんには言うてないもん」

しれっとそんなことを言うはやてに、フェイトは怒りが込み上げてくる。

「フェイトちゃんに言うたら絶対止めるやん?」

「当たり前だよ!!」

フェイトは涙目だった。
最近のフェイトはなのはの模擬戦を嫌う。
彼女は負けず嫌いで、いつも無茶をするからだ。
なのはが無茶をすると、それは体に取り返しのつかない傷を残す可能性がある。

フェイトはなのはが傷付く姿を見たくないのだ。

「安心しろ、ガチといっても我等の自己ブーストは禁止だ」

シグナムがレヴァンテインを肩に担ぎながらフェイトに言う。

「・・・・・もう、こんなこと、今回だけですからね!」

フェイトはぷくーっと頬を膨らませなのはを睨んだ。
「にゃはは、ごめんねフェイトちゃん」
なのはは謝るが、まあ軽い。
そんなワイワイした雰囲気を蚊帳の外で見ているのは近藤とエレノアだった。
「・・なんで最後までこう体育会系の肉食系かな・・・」
近藤は呆れていた。
それを横で苦笑するエレノア。
そんな部外者ぶっていた近藤達に、はやてが駆け寄ってきた。
「何しとるんや、近藤さんも参加するんやで？」
とんでもないことを言うはやて。
しかし近藤はキッパリ断った。
近藤は元帥となり、キッチリ”ノー”と言える人間になっていた。
だが、鈍感な男は余計な一言を付け加えた。
「俺が参加したら誰も相手にならないじゃないですか」
途端、ピシリと空気が固まった。

「・・・ほほ～、言いますな～近藤元帥殿」

はやてが黒い笑みで近藤を見た。

「獣王という強大な力を得て、気持ちも大きく膨らんだようだな・・・くくく、おもしろい・・・」

ピクピク青筋を浮かせ笑いかけるシグナム。

「ちょうどいい。あたしは獣王とかいうのをこの目で見てないんだ。披露してもらおうじゃねーか？」

グラーフアイゼンをきつく握りしめ地面にドガンと思い切りたたき付けるヴィータ。

「・・・近藤さん、少し調子に乗りすぎかな？」

ニコニコしながらレイジングハートを近藤に突き付けるなのは。

「ここで旦那の手綱を握っておかないと、後々苦労するかな・・・」

何か皆と思考のベクトルが違うフェイト。

フォワード達はそんななのは達を見てガタガタ震えていた。

「予定変更や！機動六課前線メンバー全員で近藤元帥殿をボコボコにしたる！！」

はやてがシュベルクロイツを高々と掲げ言い、それに対し「おおー

ー！！」と賛同する隊長達。
フォワード達はなのは達のテンションにドン引きだ。

「・・・なんでやねん」

思わず近藤は関西弁で呟いてしまった。
すると、ポンと肩に乗せられる手があり、近藤は振り向いた。
そこにはニコニコ笑いながらも、悪魔の羽としっぽが生えているエレノアがいた。

「自業自得、口は災いのもとよねー」

エレノアの皮肉めいた口調に少しムッとする近藤。

「・・・で？エレノアも向こうに付くのか？」

近藤は親指でクイクイとなのは達を指差す。
なのは達はもう臨戦体勢に入っており、特にシグナムとヴィータなどフーフー鼻息を荒くしていた。

エレノアは面白ければそれでいい快楽主義者であるため、近藤一人対機動六課前線メンバー、プラスエレノアという構図が容易に想像できたのだ。

しかし、エレノアは首を横に振った。

「私とご主人様、魔王と獣王の力、この絶対的強者との力の差をあのかわいいヒヨコ達に教えてあげましょう」

まあエレノアはご丁寧になのは達に聞こえるようにそんなことを言

うものだから、シグナムとヴィータは一層頭に血を昇らせた。

「ヒヨコ・・・ヒヨコか。ふふふ、言うではないか、姉上？」

「あたしはヒヨコじゃねー！ニワトリだー！！」

ヴィータは頭に血が昇りすぎて、すでにおかしくなっていた。

そこにエレノアがさらに追い撃ちをかける。

「はっ！矮小なる存在が王に敵うと思っているの？おめでたい頭ね！いいわよ、全員かかってらっしゃい！！塵芥と化してあげるわ！！」

「いやいやいやいや！？塵芥はまずいって！？」

テンションが上がったエレノアがとんでもないことを言うから、近藤は焦りまくる。

「かかってこいやー！ゴミムシ共ー！！」

「うりゃあああぁぁぁぁーーー頭冷やせやーーーーっっ！！」

「だから待ってってーー！！」

晴れ渡る空の下
一つの区切りの日
そんな記念日に
大の男の泣き叫ぶ
情けない声が響き渡った。

# 第９５話　最終話（後書き）

裏話４

はやて　「最後の締めくくりがおっさんの悲鳴て・・・」

シグナム　「気持ち悪い終わり方しおって」

なのは　「でもエピローグあるんだよね？」

はやて　「後日談らしいで」

ヴィータ　「ふーん、ようするに、近藤とフェイトの夫婦生活か？」

フェイト　「え！？そ、そうなの！？」

はやて　「夫婦生活・・・うーん・・・そうなんかなぁ・・・？」

なのは　「あれ？なんか変な反応だね？」

はやて　「まあ見たらわかると思うわ」

フェイト　「夫婦生活・・・ど、どんな家に住んでるんだろう・・・？あ、白い壁の一戸建てに大きい犬なんか飼って、エリオやキャロ

と一緒に住んで・・・あ、あああああと・・・私と大輔さんの・・・新しい子供が・・・いやーん！！」

はやて　「・・・希望や妄想は自由やけど、少なくとも・・・いや、やめとこう」

# エピローグ（前書き）

今までこの物語を読んでいただきありがとうございました。

今回でこの物語は終わります。

前回の最終回に納得いかなかった方がいると思いますが、今回の方がエンディングらしい終わり方だと思います。

では、最後の・・・どうぞー！

# エピローグ

機動六課は解散した。

隊員はそれぞれ古巣に戻り、また新天地へと飛び立った。

特に新人フォワード達４人の異動が大きいだろう。

ティアナ・ランスターはフェイトの推薦で執務官補佐に就いた。

もちろん執務官を目指すうえでの現場実習を兼ねての配属である。

スバル・ナカジマは特別救助隊へ配属となりフォワードトップとして自身の力を遺憾無く発揮している。

エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエは揃って自然保護隊への配属を希望し、密猟者や違法魔導士達から自然動物を守っている。

転属の際に、フェイトは二人と一緒に住み、学校へ行かないかと提案した。

そうすれば近藤とも住めるし、家族そろって生活できると思ったからだし、近藤も賛成していた。

しかし、エリオとキャロは首を縦には振らなかった。

「フェイトさんと、お父さんと暮らすのはいつでもできます。僕達は、僕達が今出来ることをしたいんです」

そういう二人は笑顔だったため、フェイトも近藤も何も言えなかったのだ。

いつの間にか二人は親の手から離れ、大人へと歩を進めていたようであり、それは喜ぶべきことだったのだが寂しくもあった。

高町なのはは戦技教導隊へと戻ったのだが、その際ヴィータを勧誘し、ヴィータも満更ではなかったようで今では小さな教官が日々ヒヨッコに雷を落としているのが名物となっていた。

フェイト・テスタロッサ・ハラオウンにシグナムも以前の仕事に戻った。

八神はやては、今回の機動六課運用で思うところがあったのか、しばらくは捜査官として職務に就いていた。

小さな聖王、ヴィヴィオだが、なのはが正式に養子として迎え、『高町ヴィヴィオ』となり、平和に暮らしている。
ちなみに、なのはとユーノの関係は未だ進展せず、プラトニックな関係のままである。

そして近藤大輔であるが、機動六課が解散となった後、地上本部に部屋を設けミゼット幕議長にレオーネ相談役と連携し時空管理局のトップとして働いていた。
因みにキール前元帥は近藤の補佐としてちょくちょく手伝う程度で

ある。
なんでも最近子供が生まれたそうで、もう仕事どころではないのだそうだ。

そして近藤は今日も相変わらず目まぐるしく画面が変わるモニタを見ながら、ありえないスピードでコンソールを叩く。

「元帥、どうぞ」

そう言いながら近藤の机にコーヒーを置く女性局員。

「ああ、ありがとうドゥーエ」

近藤はコーヒーを置いた人物、ドゥーエを見て礼を言い、ドゥーエもニコリと笑った。

そして近藤の前に別のモニタが展開し、別の女性局員が報告する。

「近藤元帥、ナンバーズが戻りました」

「ああ、ありがとうオーリス、こちらに通してくれ」

「了解しました」

近藤はモニタに映る女性局員、オーリス・ゲイズに指示した。

しばらくすると部屋のドアが開き、入ってくる3人の人物
そして3人は近藤にビシッと敬礼した。
「近藤元帥、任務完了し帰還しました」
「お疲れ様、ゼスト、トーレ、セッテ」
部屋に入ってきたのは管理局の制服を着たゼスト、トーレ、セッテだった。
近藤は無事任務から帰ってきた3人を労いつつ、ソファに座るよう促した。
「ドゥーエ、3人にも飲み物を」
「かしこまりました。何がいいかしら?」
「俺は水でいい」
「私も」
「私は近藤様と同じものを」
いつも通りの答えにドゥーエは苦笑しつつ、飲み物を用意するために部屋を出た。
「・・・さて、申し訳ないね。本当は俺が行くべき仕事だったんだけど」

近藤が3人に謝罪するが、当の3人は逆に恐縮する。

「なに、気にするな。久しぶりに倒し甲斐のある相手だった」

ゼストが満足げに言う。

「うむ、あんな大きな野生の竜そうお目にかかれないからな」

トーレは思い出しているのか、ふふふと笑った。

「自然との共存はたしかに大事ですが、ああも人里で被害を出してしまっては、駆除するしかありませんからね」

セッテは近藤を見ながらモジモジしている。

「まあ何にしても、しばらくはゆっくり休養してくれ。今のところあなたたちに出動してもらう仕事は無いから」

近藤がそう言ったときちょうどドゥーエが3人の飲み物を持ってきたので、しばらく雑談し、3人は部屋を退出した。

「さてドゥーエ、今日のこの後の予定は？」

近藤は手を挙げて伸びをしながらドゥーエに聞く。

「今日は午後から本局で会議、その後は会食となっています」

「会食？本局の人と？」

「いいえ、私との夜のか・い・しょ・く」

ドゥーエはそう言いながら近藤にしな垂れかかる。
ムンとドゥーエの色香が近藤の鼻孔を刺激する。

「ああ、そういう冗談いいから」

しかし、近藤は素っ気なくドゥーエを引き離した。
そんな態度にドゥーエはぷくーっと頬を膨らませる。

「もう、私は本気なのに。いつでも近藤さんを受け入れる準備が出来てるのに」

「それは私も同じだもん！」

「・・・いつの間に隣にいたの、オーリス・・・」

ドゥーエの横でフンスと鼻息を吐き、胸の前で拳をつくり気合いを入れているオーリスに、ドゥーエは呆れていた。

「おっと、もう昼食か。さあ、じゃあ食堂へ行こうか」

近藤は二人のやりとりをスルーして部屋を出て行く。

「・・・魔王攻略は一筋縄ではいかないわね」

「・・・うん」

ドゥーエとオーリスは深いため息をついた。

近藤は元帥として仕事をする上で、優秀な補佐と元帥直属部隊を欲した。

その白羽の矢が立ったのがドゥーエとトーレ、セッテ、そしてゼストである。

ゼストの場合は生きながらえたといえ、彼は無職である。
近藤がスカウトすると快諾してくれた。
やはりゼストは現場が天職なのだろう。

まずドゥーエだが、ＪＳ事件の際に近藤に協力することを約束していたので、司法取引で近藤付きの秘書となった。

オーリスは、レジアスが近藤に押し付けた。

「元帥に秘書一人では足りないからな。儂が良い人材を派遣しよう」

とか言って配属されてきたのがオーリスである。
まあ本当のところは、レジアスの親心とドゥーエの牽制が主であるのは知らなくてもいい情報だろう。

さて、トーレとセッテについてだが、当初二人は管理局に従う事を拒否していた。

これはスカリエッティはじめ、ウーノとクアットロも同様である。

まあ理由はそれぞれ異なるが、トーレとセッテの理由は

「敗者には敗者の矜持がある」

とのことらしい。

管理局としても、優秀な人材は喉から手が出るほど欲しい。

そこで近藤が交渉したのだ。

「管理局に従うのではなく、俺に付いてきてくれないか？」

近藤はそう言うと、破格の条件を提示した。

期間は１０年、それ以降は管理局に残るなり去るなり自由にしてよいと。

ちゃんと給料も出すし、休みもある。

住居も戸籍も用意する。

管理局での地位と階級もそれ相応のものを準備する、と。

そして最後にこう言った。

「敗者なら、勝者の言うことに従うのもアリじゃないか？」

それを聞いたトーレはポカーンと口を開け、やがて腹をかかえて大笑いしだした。

「ふっ、いいだろう。敗者は勝者に従うべきだな！この私の力、存分に使うがいい！」

こうしてトーレは近藤に付き従う事を選んだ。

ちなみにセッテは、簡単・・・いや、ある意味一番ややこしかった。

「近藤様は私が必要だと言いたいのですか？」

「うーん、まあ仕事を手伝ってくれるなら有り難いね」

「近藤様は私が欲しいのですね？」

「・・・んー、まあ簡単に言えば・・・」

「私を近藤様の所有物に、自分のモノにしたいのですね！？」

「・・・セッテ、それドゥーエから聞いたのか？あれはちょっとしたお互いの齟齬があってだな・・・」

「わかりました！私のこの体、どうぞご自由にお使い下さい！どんなプレイにも応えてみせます！！」

「・・・・・それはいいよ」

こうして近藤はトーレとセッテという戦力、ドゥーエ、オーリスという補佐を手に入れたのだが、何か自分で懐に爆弾を抱え込んだと思うのは気のせいだろうか？

スカリエッティは事件の供述などは素直に話すが、管理局に降り技術者、科学者として協力する気はサラサラなく、現在裁判による判決待ちである。
ウーノとクアットロも、「人間に譲歩しなければならない理由がわからない」という事でスカリエッティ同様裁判による判決待ちだ。

その後、近藤は研修としてバイパー少将にドゥーエとトーレ、セッテを預け、みっちり管理局の基本を教えてあげてほしいとお願いした。

「よろしい！近藤元帥直轄部隊の名に恥じぬ戦士にしてみせましょう！！」

バイパーはすごいいい笑顔で言った。

その3ヶ月後、ドゥーエ達3人は見違えるような精悍な顔で、まさに猛者と呼ぶに相応しい人材となって帰ってきた。

ただ、「バイパー」　という単語を聞いた途端、尋常ではないほどガタガタ震え出すので、彼女達の前では「バイパー発言禁止令」が出された。

夜、近藤は自分の家の前でため息をついた。
何故ため息をついたのかというと、その家の大きさの為である。

今まで近藤は管理局の所有している寮で生活していた。
ちなみにワンルームである。
しかし元帥になったことで周囲から猛反対を受けたのだ。
理由は簡単、元帥がそんな小さいワンルームで生活など考えられない！

もっとセキュリティがしっかりした家に住むべきだ！

体裁が悪い！

などと言われたのだ。

家買うなんて、そんな金ねーよ！
と抗議したが、キール前元帥が管理局を退職したついでに今住んでいる家を引き払い、別の管理世界で妻と子供3人で静かに暮らすつもりだから、ちょうどいいから今の家をやる、と言ってきたのだ。

結果、近藤はキールから家をタダで貰った。

そのキールから貰った家は、豪邸というより小さな城のような大きさで、部屋数は多過ぎて数えていない。

風呂もプールのように広く、トイレなど6畳もスペースをとっていた。
庭も車でドライブできる程広い。

しかもメイド付き。

キールの趣味なのか、全員若く美人で有能なメイドが総勢２０人、貰った家にもれなく付属されていた。

まったく、何処の成金の家だ？
文句や愚痴のひとつも言いたくなる。
送り迎えの車が超高級車で、その送り迎えという未知の領域には未だに緊張するし、しかもその車には必ずメイドが最低一人乗り、車内で近藤にかいがいしく世話をする。
本当に勘弁してほしい。

「ただいまー」

近藤はメイドに大きな扉を開けてもらい、豪邸へと入る。

すると玄関には他のメイド達がズラリと並び、近藤の帰りを待っていた。

「お帰りなさいませ、ご主人様！」

一斉に頭を下げ近藤を迎えるメイド達に、近藤は苦笑する。

「・・・あの、いつも言ってるけど、いちいち帰ってくる度に全員

で迎えなくていいよ？」

「いいえ、主の帰りを迎えるのはメイドの仕事ですから！」

「その通りですよ！ご主人様！」

近藤の抗議に対し、目をキラキラさせ全力で却下するメイド達に、近藤はまたため息をつく。

「早くお着替えになられては？奥様が食堂でお待ちですよ」

「ああ、はいわかりました」

慣れないセレブ生活に戸惑う近藤は、主なのにメイドに頭が上がらなかった。

余談だが、近藤はメイド達に人気がある。

「管理局元帥なのに、威張り散らさないあの謙虚さがステキ！」

「あの逞しいお体がステキ！」

「いつも私達メイドを気遣う言葉をかけて下さるのが痺れる！！」

「仕事はバッチリ出来る方なのに、家事は全く出来ないところがかわいい！！」

等など。

近藤本人はそんな評価を知る由もなかった。

近藤は部屋着に着替え、食堂へ向かった。
そこでは、近藤の家族が長いテーブルを囲み談笑していた。
そして家族は近藤に気付くとヒマワリのような温かい笑顔で迎えてくれる。

「お帰りなさい、あなた」

いつもニコニコ笑顔を絶やさないフェイトと

「お帰りなさい、お父さん」

「お帰りなさい、お父様」

「お帰り！父さん！」

近藤の帰りを待ちわび近藤に駆け寄るオットー、ディード、ノーヴェ

「おふぁへひははい、ほひゅひんはは（お帰りなさい、ご主人様）」

近藤を帰りを待てず、一人勝手に料理を口一杯に頬張り、ハムスターのようにパンパンになっているエレノアがいた。

「ただいま、みんな」

近藤は駆け寄るオットーとノーヴェの頭を撫で、微笑んだ。

近藤とフェイトは晴れて夫婦となった。

とはいえ、入籍しただけで、式はまだあげていない。

しかも籍もつい最近入れたばかりである。

近藤もフェイトも、お互い忙しい身であるため、なかなか時間が取れないのだ。

だが二人の仲はラブラブである。

それこそ周囲の人間が甘ったるい空気に耐えられず逃げ出す程に。

そしてノーヴェやオットー、ディードであるが、この3人は近藤が保護責任者となり引き取ったのだ。

時間は少し遡り、隔離施設にいたナンバーズ達やルーテシア、アギトの更正プログラムがある程度終了し外へ出ることが可能になったとき、全員の引き取り手、つまり保護責任者が必要となった。

ルーテシアは母と共に暮らすので関係なく、アギトも既に八神家の一員なので関係なかった。

そしてこの保護責任者に立候補したのがゲンヤ・ナカジマ、スバルとギンガの父と、カリム・グラシアだった。

なんとゲンヤは全員の保護責任者になるつもりだったのだが、それでは彼の負担が大きくなりすぎるということで、急遽カリムが手を挙げたのだ。

一応その場には近藤も立ち会っていたが、近藤は手を挙げなかった。

だが、ここから驚くべき方向へと向かった。

「・・・近藤さん、あたしは近藤さんと一緒にいたい」

「・・・僕も・・・いたい」

なんとノーヴェとオットーが自ら近藤に保護責任者になってくれと頼んできたのだ。

「あ・・・あたし達の・・・と、父さんに・・・なってください！」

「お願いします」

頭を下げ懇願するノーヴェとオットー。

これには近藤も驚いたし、チンクやウェンディ達もビックリしていた。

「・・・」

近藤はどうしたものかと悩んだ。

そしてしばらく悩み、導き出した答えが・・・

「うん、いいよ」

とまあ、軽い返事だった。

たまにこういう後先考えない行動を取るからフェイトやエレノアに怒られるのだが、ノーヴェとオットーが自ら志願してきたのだから、無下に扱うわけにはいくまい。

「やったー！やったな、オットー！」

「うん、よかったね、ノーヴェ！」

それに、近藤がＯＫを出したことを泣いて喜んでいるノーヴェとオットーを見てしまうと、まあいいか、と思えてくるのだ。

「オットーが行くなら、私も付いて行きます。宜しくお願いします」

ディードが近藤に対し丁寧に頭を下げる。

「・・・ああ、うんよろしく・・・」

近藤は一気にエリオとキャロのほかに、３人の娘の父になった。

そして、チンク、ウェンディ、ディエチ、セインはゲンヤが引き取る事になった。

結局カリムは保護責任者にならずに済んだが、喜んでいいのかわからなかったという。

近藤達は賑やかに食事をする。

「父さん、食べ終わったらまた稽古つけてくれよ！」

ノーヴェがテンコ盛りの皿を前にニコニコしながら言う。

「ああ、いいよ」

「やった！」

近藤も軽く答え、喜ぶノーヴェ。

すると、横に座るフェイトが近藤の口に料理を運びだした。

「はい、あなた、あーん」

「あーん」

近藤は素直に口に入れる。

「おいしい？」

「うん、おいしいよ」

「よかった♪」

周囲にハートが飛び散るかの如く甘い雰囲気を出す近藤とフェイト。

「じゃあお返しに、あーん」

「あーん」

「アハハ」

「ウフフ♪」

もう見ていて痛々しい程のラブラブっぷりである。

近藤は何か吹っ切れたのか、それとも頭のネジが飛んでしまったのか、もしくは両方か、もうこういうラブラブシチュエーションに抵抗することは無くなった。

「・・・胸やけしてきた・・・」

エレノアが顔を青くしながら呟く。

「仲がいいのは良いことじゃないか」

ノーヴェがパスタを頬張りながら言う。

「新婚ですからね、初々しいではないですか」

ディードがなんでもないようにスープを口に運ぶ。

「うん、お父さんとフェイト母さんの仲が良いと、僕も嬉しいよ」

オットーもニコニコしながらラブラブな二人を見ていていた。

「あなたたち・・・大人ね・・・」

エレノアは尊敬の眼差しでノーヴェとオットー、ディードを見た。

「そういえば、式のスケジュールは大丈夫なの？」

エレノアがイチャイチャする近藤とフェイトを見る。

「ああ、当日はよっぽどの事がないかぎり大丈夫だ」

「私も大丈夫だよ。それになのはやはやて達もね」

近藤とフェイトは結婚式を二週間後に控えていた。

近藤は式を挙げなくても良いのでは？と思っていたが、リンディから「娘の晴れ姿が見たい」と言われ挙げることにした。

その後は場所や形式、招待客、日取り、スケジュール確保などイロイロ大変だった。

「まあ新婚旅行はまだ未定だけど・・・」

「私はあなたと一緒に居られるならいつでも、何処でもいいの」

「フェイト・・・」

「あなた・・・」

見つめ合う近藤とフェイトは、ノーヴェ達が居るのも憚らずラブラブな空気を撒き散らす。

「子供の前でイチャイチャするなー！」

我慢出来ずにキレるエレノア。

しかし近藤とフェイトは何故怒られているのかわからず揃って首を傾げ、ノーヴェ達もそこまで怒る理由がわからずエレノアを「なんだコイツ」みたいな顔をして見ていた。

「私の言っている事は正しいはずなのに・・・何この空気・・・」

四面楚歌なエレノアはガクリと膝をついた。

こんな平和な時間の裏で、着々ととある計画が進行していたなど、この時誰も予想していなかった。

そして時間はあっという間に過ぎ去り、結婚式当日

式場はルーテシアとメガーヌの住む、第３４無人世界の「マークラン」で行う。
これは、管理局の保護観察の下、この無人世界から出る許可が今はまだでないルーテシアがどうしても近藤の結婚式に出席したいと言ったためである。
一応近藤が便宜をはかりルーテシアの刑を軽くしようとしたのだが、ルーテシアはそれを頑なに拒み、きちんと与えられた罰は受けるという姿勢を崩さなかった。
それに母メガーヌのリハビリもあり、母をそんなに負担を強いることを嫌ったのだ。
フェイトは「祝福してくれる人は一人でも多い方がいい」と言って快諾してくれた。

そんな世界に、真っ白なチャペルが広大な緑の草原に佇む。
なんとこの建物、ルーテシアが近藤とフェイトの為に立てたのだ。
なんという才能だろうか、まったく恐ろしい子供だ。

そんな一大イベントの主役の新郎である近藤は新婦のフェイトとは別室で待機していた。

白いモーニングに、チンクのリクエストで白い革の眼帯を付けた近藤は、部屋の中をウロウロソワソワしていた。

「もう、落ち着いてくださいよお父さん」

礼服を纏ったエリオが呆れながら近藤を注意する。
しかし近藤は情けない顔で、よりソワソワする。

「な、なあエリオ！俺本当にフェイトと結婚していいのかな！？」

この小心者は、マリッジブルーにかかったようだ。

「入籍して言うことじゃないでしょう・・・」

ここ一番でへたれな近藤に、エリオはため息をついた。

そして別の部屋では、フェイトが純白のウェディングドレスに身を包み、式を待っていた。
フェイトの着ているウェディングドレスは、肩があらわになっており、胸元も少し強調するデザインになっている。
しかし、アクセントとして使われている小さなリボンやフリルによ

っていやらしさを感じさず、さらにふわり大きく広がったロングスカートが清楚を演出し純白をより無垢に見せ、より高潔な出来上がりになっていた。
フェイトの白い肌に流れるように煌めく金髪が、より純白のウェディングドレスを煌めかせ、まるで地上に舞い降りた女神のようだった。

「フェイトちゃん、綺麗・・・」

なのはがうっとりして言う。

「ホンマに、絶世の美女や・・・」

はやてもポーッと頬を赤らめながら呟いた。

「ホントに綺麗だぞ、フェイト！」

元気に褒める、フェイトの使い魔アルフ

「ありがとう、なのは、はやて、アルフ」

フェイトは微笑む。
その笑顔は、この世の幸福の全てを祝福しているような、そう思わせるような純粋な笑顔で、なのはやはやては思わず「はうっ！」とときめいてしまったほどであった。

そんな親友達と談笑している愛娘を遠巻きに見つめるリンディは、万感の想いだった。

（本当に綺麗になった・・・）

彼女の頭に走馬灯のように駆け巡るのは、娘の数奇な運命、怒涛のように押し寄せる宿命、それを乗り越え、飛び越え成長した愛娘。

リンディは目頭が熱くなりはじめ、ブンブンと頭を軽く振り湿っぽい感傷を払拭した。

すると、なのは達と談笑していたフェイトがリンディに近付いてきた。

どうしたのだろうかとリンディは疑問に思っていたら、フェイトはゆっくりとリンディに頭を下げる。

「リンディ母さん、今まで私を育ててくれて、ありがとうございました」

フェイトはリンディに感謝を述べた。
今まで本当の娘のように育ててくれてありがとう。
私のわがままを見守ってくれてありがとう。
私を愛してくれてありがとう。

「フェイト・・・」

リンディはもう目に溜まる涙を我慢できず、ボロボロと涙を流す。

「本当に・・・本当に・・・綺麗よ・・・私の愛しいフェイト・・・」

「リンディ母さん・・・」

フェイトも感極まり涙を流し、二人は抱き合う。

楽しい事ばかりじゃなかった

でも苦しい事ばかりでもなかった

それは、少なくともフェイトがリンディを支えていたから

それは、リンディがフェイトを支えていたから

もちろんクロノも、エイミィも、アルフも

、なのはも、はやても、みんな、みんな

だから感謝する

「みんな、私を愛してくれて、ありがとう」

フェイトは今この時全てから祝福されていた。

厳粛な雰囲気のなか、新郎の近藤は祭壇で新婦であるフェイトを緊張した面持ちで待つ。

日の光りが差し込み、明るいチャペルでは、参列者が様々な想いで近藤を見ていた。

あるものは祝福を

またあるものは思い出との決別を

参列者は身内しか呼ばなかった。

ナンバーズ達にアルビーノ（ルーテシアとメガーヌ）親子、八神家、高町家（なんとなのはの父士郎と桃子！そしてヴィヴィオ）、ハラオウン家（リンディ、クロノ、エイミィ）、ナカジマ家、ティアナ、そして何故かゲイズ親子。

近藤はバイパーも呼ぼうとしたのだが、全員に勘弁してくれと懇願され呼んでいない。

まあ仕事でスケジュールが空けられず無理だったのだが。

そんな参列者達は、近藤に注目するあまり、その参列席に3人居ないことに気付いていなかった。

近藤は祭壇に立ち、新婦を待つ。

近藤の前には神父がいた。

本来ならば、フェイトの要望によってカリムが行っていたハズなのだが、急遽別件が入り参加出来ないといわれ、別の人間、名も知らぬ神父が派遣された。

その神父は近藤をじっと見つめる。

わずかに熱っぽい視線を感じた近藤は、引いた。

しばらくすると、新婦であるフェイトが義母のリンディに連れられて姿を現す。

木漏れ日のように射す光りを浴び、ウェディングドレスを纏い、手にブーケを持ち、長い純白のケープで顔が見えないフェイトは、より幻想的に、神秘的さを増す。

参列者も思わずホウ・・・とため息をつくほど、フェイトは美しかった。

ゆっくりとバージンロードを進み、近藤の横に立つ。

近藤は横で俯くフェイトを見てドキドキしていた。
顔はケープで隠れてよくわからないが、それでも綺麗なのは変わりない。
しかも、いつもより色っぽい感じがする。

フェイトはそんな近藤の視線に気がつき、近藤を見るとケープ越しにニコリと微笑んだ。

そして神父が祝詞を宣言しようとしたその時、入口のドアをバァンとおもいっきり開け放たれた。

近藤や参列者は一斉にドアを見る。

するとそこには驚くべき人物が立っていた。

黒いコートを基調としたバリアジャケットに白いマントを羽織り、手には死神の鎌を思わせるデバイス。

それはフェイトだった。

「あれ!?フェイトちゃん!?」

「なんでソコにおるんや!?」

なのはやはやても困惑の声をあげ、会場がざわめきだす。

今目の前にフェイトがいる。

じゃああのウェディングドレスを着たフェイトは何だ?

すると、フェイトは鬼の形相で言った。

「ドゥーエ!今すぐ大輔からはなれて!!」

え!?と驚く参列者達は一斉に近藤とウェディングドレスを着た人物を見た。

そして参列者達はさらに驚く。

近藤をバインドで身動きをとれないようにし、さらにウェディングドレスを着た人物が近藤をお姫様抱っこのように抱きかかえていたのだ。

「ちっ!もう少し睡眠薬を多く盛るべきだったわね」

ケープを外した人物は、フェイトの顔をしていたが、口調が少し乱暴だった。
だが、その顔と髪は変化し、そこには流れるブロンドの髪に妖艶な笑みを浮かべたドゥーエがいた。

「・・・ドゥーエみたいな華奢な体で、筋肉ダルマの近藤さんをお姫様抱っこ・・・腕大丈夫か？」

はやては異様な光景を見て呟いた。

「戦闘機人の底力なめんじゃないわよー！！」

近藤をお姫様抱っこしながら叫ぶドゥーエ、そしてあ～と納得してしまうなのはやはやて達。

「何してるドゥーエ」

近藤は縛られ、ドゥーエに抱きかかえられながらも冷静だった。

「ごめんなさいダーリン。あなたを私達のモノにするためなのよ！」

「・・・私達？」

近藤はドゥーエがダーリンと言ったことをスルーし、気になる単語に食いついた。

その時、急に建物の空気が重くなる。

なのは達機動六課には馴染みあるこの圧迫感、そして魔導士の天敵。

「な、なんでこの建物内でＡＭＦが張られとるんや！？」

はやては魔力結合出来ない現状に焦りつつ、このチャペルを建てたルーテシアを見た。

「・・・私は知らない」

しかしルーテシアは首を横に振る。

ルーテシアも困惑の表情をしているので、本当に知らないのだろう。

周囲を観察していた近藤は、前にいた神父がポケットから何かのスイッチを取り出し押しているのに気付いた。

「お前か、ＡＭＦを作動させたのは」

近藤はドゥーエにお姫様抱っこされながら神父を睨む。

「ごめんなさい近藤さん、でもこれは私達の幸せのためなの」

すると神父の口から飛び出すのはお姉言葉。

しかも、声も女性っぽい。

・・・いや、この声、聞き慣れた声と同じだ。

近藤は目を見開き神父を見た。

「まさか・・・オーリスか？」

近藤がそういうと神父は一斉に服を脱ぎ、顔の皮を剥いだ。

そこに現れたのは、何故かウェディングドレス姿でメイクばっちりのオーリスだった。
神父の服の下にウェディングドレスを着れるのか？
近藤はそんな間抜けな事を考えていた。

「私達はダーリンを愛してる！だからダーリンと私達が夫婦になる！！」

「別世界に一夫多妻オーケーな国があるからそこで入籍する！！」

力強く拳を握りとんでもないことをいうドゥーエとオーリス。

「・・・・・・」

そして呆れ果て、何も言えなくなる参列者達と近藤、フェイト。

しばらく呆けていたフェイトはハッとし、ドゥーエとオーリスに猛抗議する。

「入籍って、私達はちゃんと婚姻届を提出してるから無理だよ！」

そう言うと、ドゥーエがふふんと得意げに笑い、オーリスがポケットから一枚の紙を取り出した。

「婚姻届ってコレかしら？」

オーリスが手に持つ紙は、近藤とフェイトの婚姻届だった。
これにはフェイトも近藤も驚く。

「なんでソレがここにある!?」

フェイトが声を荒げると、ドゥーエが得意げに言った。

「私のＩＳはどんな能力だったかしらね？」

そう言われてハッとした。

ドゥーエのＩＳは『ライアーズマスク』顔や髪を自在に変えることができるのだ。

先程フェイトに変装していたように。

そしてカラクリが読めた。

役場で婚姻届を提出したときの職員に変装して、回収したのだ。

つまり、近藤とフェイトの婚姻は受理されていない。

「・・・そこまでするか、普通？」

ドゥーエの執念に近藤は冷や汗をかく。

「これも私とオーリス、そしてダーリンとの明るい家族計画のためなのよ」

ドゥーエは勝利を確信したように笑うが、そこに待ったをかける集団がいた。

「調子に乗りすぎだぞ、ドゥーエ」

「まったく、そこまで己の欲望に素直だと逆に清々しいな」

それはナンバーズ達だった。

トーレやチンク、セインにディエチは呆れ、ウェンディ、ノーヴェ、オットー、ディードは怒っていた。

「ドゥーエ姉、やり過ぎっスよ」

ウェンデイが呆れながらも、怒っていた。

「父さんとフェイト母さんの結婚式をめちゃくちゃにするな！」

ノーヴェは怒り心頭だ。

オットーやディードも無言だが、明らかに怒っている。

そしてセッテは

「一夫多妻オーケーなら私も入れてください」

とんでもないことを言った。

「いいわよ、来なさい！」

それをいともたやすくオーケーするドゥーエとオーリス。

そしてもう一人挙手してドゥーエを見る者がいた。

「ドゥーエ、私はその人をお父さんって呼びたい。だからお母さんも連れていって」

なんとルーテシアである。
ルーテシアが目茶苦茶な事を言い、横では母のメガーヌも目を白黒させていた。

「ル、ルーテシア!?な、ななな何を言ってるの!?」

メガーヌは焦り顔を真っ赤にするが、心なしかまんざらでもなさそうに見える。

「私、お父さんはあの人がいい」

頬を僅かに桃色に染め、メガーヌをまっすぐ見るルーテシアに、メガーヌは心を揺さぶられた。

「・・・そう、お父さんが欲しいのね・・・まあ、あの人なら・・・私も・・・別に・・・」

ゴニョゴニョ言い訳を言うメガーヌは、やはりまんざらでもないようだ。

「そういうわけで、よろしく」

メガーヌが未だにブツブツ言って妄想にふけっているのを無視して、ルーテシアはドゥーエと話を進めていた。

そしてドゥーエも快く頷いた。

ちなみに、この時ティアナも名乗りをあげようとしたが、フェイトの鬼の形相にビビってしまい結局名乗れなかったのは内緒だ。

「ドゥーエ、貴様忘れているわけではないだろう？私達戦闘機人にＡＭＦは通じないと」

トーレは手首から鋭利なエネルギーの刃『インパルスブレード』を発現させ構える。

チンクやノーヴェ達戦闘タイプのナンバーズ達は戦闘体勢に入った。

普通ならば、戦闘力の低いドゥーエとオーリスは太刀打ち出来ないはずだ。

しかし、それでもドゥーエとオーリスは余裕の表情を崩さなかった。

その時、

最も今この場面で聞きたくない声と言葉が鼓膜を刺激した。

【王が命じる。ドゥーエとセッテ以外は跪け】

途端ナンバーズ達にのしかかる圧倒的強制力。

次々に重圧に耐え切れず床に縛り付けられるナンバーズ達。

そしてそれはスバルやギンガ、エリオ、フェイトにまで影響する。

それはエレノアだった。

近藤は、これは洒落にならんとエレノアを叱り付けようとした。

「エレノア！いい加減にし・・・ごふぅ！？」

近藤に飛んできたのはエレノアの謝罪ではなく、拳だった。
その拳が近藤の腹に深々と刺さり、近藤は一瞬で意識を失った。

エレノアは気を失う近藤を憐憫の目で見ながら呟いた。

「ご主人様とフェイトちゃん・・・最近調子に乗りすぎだと思うの・・・あんな甘ったるい空気四六時中だされたら、食べれる料理も喉を通らないわ」

そういうや、一転してニコニコ笑顔になり、悪魔の羽根とシッポが見え隠れする。

「だから二人は少し距離を置いて悶々とすればいいわー！特にご主人様はドゥーエちゃんやオーリスちゃんの誘惑に勝てるかしらねー！！」

スゲー楽しそうに話すエレノア。
フェイトはＡＭＦと起源の系譜によってまったく身動きが取れず、悔しそうな顔をするしかできない。

なのはやティアナは魔法は使えなくても格闘で対抗しようとしたが、向こうはエレノアがいる。
格闘では近藤すら歯がたたないといわれているエレノアが。

反抗する者がいないのを見ると、エレノアとドゥーエはニンマリと笑い高らかに宣言した。

「最後は私達の勝利よー！！」

青い空の下、欲望に忠実で、諦めの悪い女性達の声が響いた。

そのすぐあとサプライズゲストとして近藤が呼んでいたバイパー発見され、ドゥーエ達をシバき倒したのはいい想い出だろう。

そして結婚式は当然仕切り直しした。

首謀者であるドゥーエとオーリス、協力者のエレノアとセッテは鉄拳制裁、母をけしかけたルーテシアはデコピンをそれぞれバイパーから喰らった。

流石のエレノアもバイパーの女王様オーラには太刀打ちできなかったらしい。

バイパーが新たに参列に加わり、妙な緊張感の漂う式場。

バイパーの名の通り、マムシに睨まれたような威圧感がなのは達を蛙のように萎縮させる。

近藤の隣にいるフェイトも、若干顔が青かった。

近藤はそんなフェイトの手をそっと握り、フェイトは少しビックリしたがすぐに頬を桃色に染め、はにかんだ。

指輪の交換も滞りなく終え、誓いのキスへと移る。

近藤はフェイトの顔を隠すケープをゆっくりと持ち上げ、フェイトの顔をまっすぐ見つめた。

「・・・綺麗だ」

近藤は素直な気持ちを呟いた。
それを聞いたフェイトはより頬を赤く染め、そして目を閉じた。
近藤はゆっくりフェイトの顔に近付き、
そして愛の証、誓いのキスをする。
唇を重ね愛を確かめる。
愛している
お互いの気持ちが流れ込んでくる。
ありがとう
俺を
私を
愛してくれて
ありがとう

式を終わらせそれぞれがわいわいと騒ぎ出す。

近藤に近付き、腕に抱き着いたりしてじゃれつくエリオに、ノーヴェやオットー、ディード、そして白い革の眼帯にご満悦なチンクに、ニコニコ笑うディエチ。

そして少し離れた場所にいるフェイトの周りには、目をギラギラさせる女性達。

そう、皆フェイトの手に持っているブーケを狙っているのだ。

新婦が投げるブーケを取ったものには、次に結婚できる、というジンクス、まあいわゆる恒例行事なのだ。

近藤はそれを見て、自分の所にいるノーヴェ達にブーケトスに行かないのかと聞いた。

「あたしはずっと父さんと一緒がいいから、アレはいらない」

「僕もいい」

「私もオットーがいいのなら行きません」

「今十分幸せだし、別にいい」

「興味がない」

上からノーヴェ、オットー、ディード、ディエチ、チンクである。

「あの集まりに何故かセインやウェンディもいるが、恐らく興味はないが面白そうだから参加しよう、とかそんな感じだろうな」

いつの間にかトーレがため息をつきながら近藤の近くにいた。

まあ本人がいいと言うならいいのだろうが、なんとも淡泊な思考の娘達に苦笑する近藤に、エリオが何か感じたのかポツリと呟く。

「女の人って大変ですねー」

その言葉におおいに同意し、ウンウンと頷く男性陣だった。

フェイトは今か今かと待ち構えている女性達から離れ、顔を眺めた。

なのはにはやて、スバル、ギンガ、ティアナ、キャロ、ヴィヴィオ、リイン、アギト、シグナム、ヴィータ

リインとアギト、ヴィヴィオは、訳がわからないがとりあえず参加しようという感じで、何やら空中を水泳のクロールのようにかきながら、ブーケを掴まえる練習をしている。

なのは、はやて、スバル、ギンガ、ティアナ、キャロはブーケを取る気まんまんで臨戦体勢をとっている。

そして・・・

「・・・なんだ、私がいたらダメなのか？」

シグナムが頬を赤くしながら言う。

「あ、あたしも、別に興味がないわけじゃないからな！」

ヴィータが言い訳がましく言いつつ、キャッチの体勢を取る。

そしてセイン、ウェンディ、ドゥーエ、セッテ、オーリス、ルーテシア、メガーヌ、そしてリンディとバイパー

・・・何故義母リンディがブーケトスの場にいるのかはこの際気にしないでいこう・・・

そう思ったフェイトだった。

「私も、もう一花咲かせる可能性あると思うのよ」

・・・リンディが何を言ったとしても、聞かなかったことにしよう。
それはクロノとエイミィ、士郎、桃子も同じ気持ちだった。

「私とて結婚願望が無いわけではないからな！」

胸の前で拳を叩き気合いを入れるバイパー。

「まあこういうイベントは参加しないとな！」

セインがにししと笑う。

「そうっスねー。必死にブーケを奪い合う女達をぬって、あたし等が奪う・・・くひひ、皆どんな顔するっスかね～？」

何気に黒いウェンディ。

「癪だけど、このイベントを乗り越えてあの女狐出し抜いてダーリンをモノにするわ！」

「負けないもん！」

「私も負けません」

気合いが入っているドゥーエにオーリス、セッテ。
というかソレ、ブーケトス関係ない。

そしてやる気のオーリスを見て涙ぐむレジアス。
どこに感動するところがあるのか聞いてみたいものだ。

「私は諦めない。あの人がお父さんになってくれるまで」

「ま、まあ？ルーテシアがどーしても！って言ってるし？しょ、しょーがないから参加しようかな？そ、そう！どーーーしてもって言うルーテシアの為によ！か、勘違いしないでよね！？」

なんか怖いルーテシアに、娘に責任転嫁しながらも体をイヤンイヤンとクネクネさせながらまんざらでもないメガーヌ。

彼女は何気にツンデレだった。

これもブーケトスが全く関係ない。

そしてフェイトは空高くブーケを放り投げる。

軌跡を描き、ブーケは太陽の光りを浴び、花達も煌めく。

蒼穹に煌めく太陽、そして敷き詰められた草原。

世界は平和だった。

# エピローグ（後書き）

この物語はこれで終わりますが、まだ番外編も書きますし、新しい物語も考えています。

これからもよろしくお願いします。

よいお年を！！

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7626h/

魔法少女リリカルなのはStrikerS　はじまりの魔法

2011年9月13日14時26分発行